

ドロホフ君とゆかいな仲間たち

ピューリタン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

オスカー・ドロホフは魔法使いの監獄に収監された危険な魔法使いの息子である。そんな彼にもホグワーツ魔法魔術学校の入学許可証が届いた。キングス・クロス駅の九と四分の三番線から魔法学校の行ききの汽車が出る。魔法学校でオスカーを待ち受けていたのは、不思議な縁で結ばれた自分とは正反対の境遇の生徒たち、そして魔法界における未だ癒えぬ戦いの記憶だった。オスカーは魔法を通じて多くの人々と出会い、成長し、自分を含めた魔法界の過去と未来に向きあっていく。

目次

一年目 ゆかいな仲間たち

ホグワーツ特急 1

死喰い人と騎士団と闇祓い 9

ハットストール 16

ルーンスプール 24

必要の部屋 33

みぞの鏡 41

三人兄弟 50

水の妖精 58

無言呪文 67

七変化 75

武装解除 83

二年目 失われた髪飾り

屋敷しもべ 92

隠れ穴 100

失われたダイヤデム 109

悪霊の火 118

絶命日パーティ 126

創設者の娘 135

ドロホフ邸のクリスマス 143

忍びの地図 154

叫びの屋敷 164

決闘クラブ 172

後継者 181

開心術

190

計り知れぬ英知こそ

202

われらが最大の宝なり!

209

姉弟杖

218

九と四分の三番線

228

三年目 豊かな幸運の泉

プルウエツト邸

236

豊かな幸運の泉

248

オーラー

258

逆転時計

270

動物もどき

278

守護霊の呪文

288

ファイア・ウイスキー

298

一人目の魔女

310

ホツグズ・ヘッド

323

まね妖怪

336

クイディッチ

347

二人目の魔女

360

賢者の贈り物

372

煙突飛行

382

コガネムシ

393

三人目の魔女

406

闇の魔術に対する防衛術

420

三本の箒

436

姿をくりますキャビネット棚

445

最後の魔女

459

苦しみの証・努力の証・過去の宝

476

四年目 蘇りの石

ふくろう便

490

漏れ鍋

502

四つの寮

516

死の秘宝

531

組み分け帽子

549

魔法基本法則

568

決闘トーナメント

583

憂いの篩

601

ドラゴンフライ

617

オーク樽熟成蜂蜜酒

636

悪戯仕掛け人

654

スニベルス

672

ぬくぬくとしたクリスマス

689

バタービール

711

ゴーンの指輪

729

合同授業

748

閉心術

765

勇気と誠実と

785

百味ビーンズ

804

アザレア

824

ワンドレス・マジック

836

忘却術

853

アモルテンシア

闇祓い

既知と英知と

ニワトコの杖

決意と決断と

透明マント

蘇りの石

分霊箱

死の飛翔

再び森へ

五年目 ダンブルドア軍団

聖マンゴ魔法疾患傷害病院

ゴドリツクの谷

マツキノン邸跡

ロンドン

ノクターン横丁

オツタリー・セント・キャッチポール

監督生

車内販売

二人の先生

秘密基地

市民薄明

カモミール・フレッシュ

マニユーバ

伸び耳

14791436140013631333130412611235121111811151112510991077

1059104210231003 985 965 928 907 892 872

一年目 ゆかいな仲間たち ホグワーツ特急

九と四分の三番線。9月1日のキングスクロス駅のプラットホームはホグワーツへ向かう生徒達とその見送りの家族でごった返していた。

夏休みの間会えなかった友人との再会を喜ぶ声、家族との一年間の別れを惜しむ声、たくさんの方がマントやローブと一緒に行き交っている。

そんな中、一人の少年はホグワーツ特急へ乗り込んだものの、コンパートメントに入ることもなく、人のいないコンパートメントを探して列車の奥へ、奥へと進んでいた。

やっと最後尾に人が座っていない場所を見つけて、トランクと腰を下ろした。

傍にあつた窓からプラットホームを見れば、少年が人がいない場所を探している間に発車の時間が迫ったのか人がまばらになり始めていた。

汽笛が鳴り、ホグワーツ特急の発車の時間が迫るが窓からはまだ別れを惜しむ家族の声が聞える。

赤毛の女性と黒髪の女の子の声だ。恐らく、女の子は少年と同じホグワーツの新生生のだろう。赤毛の女性がホグワーツで何を注意するべきか口やかましく述べている。

「エスト……、お行儀よくするんですよ、授業中に寝たり、目上の人や先生を呼び捨てでよんだりしてはダメよ」

「ん〜眠かったら寝ちやうかも」

「バカなことを言わないで、もし、何か困ったことがあつたら隠れ穴にふくろう便を送るか、ビルに相談すればいいわ」

「おばさん、大丈夫だっと思って思うな。教科書の呪文とかもビルよりうまく使えるようになったし」

「いい？ いくら呪文がうまくできても、規則を破つたり先生に逆

らったりしてはダメなのよ?」

もう一度、ホグワーツ特急の汽笛がプラットホームに響く。

「ほら急いで! クリスマスには隠れ穴にいらっしやいな」

「ん、分かった。じゃあね、モリーおばさん!」

ホグワーツの特急が発車する。

モリーと呼ばれた赤毛の女性はホグワーツ特急に向かって手を振っている。

その様子を汽車がカーブを曲がって見えなくなるまで、少年は窓から見ていた。

コンパートメントには少年以外誰もいない。

ホグワーツ特急が発車したことから、これ以上コンパートメントに誰かが入ってくることもないと思い、少年は少し息をついた。

これでホグワーツに着くまでは一人でいられると思ったのだ。

家々の屋根が窓の外を飛ぶように過ぎていった。少年が窓の外に目を移している間にコンパートメントの戸が開いた。

「ね? ここあいてるよね?」

女の子がトランクを引きずりながら入ってきて少年の向こう側の座席を指した。

「他のコンパートメントはもういっぱいなの」

その少女がさつき最後まで家族と言葉を交わしていた少女だと少年は気づいた。

黒い髪と赤い目が特徴的な女の子だった。

女の子は少年が頷くのを見るとトランクをなんとか引きずり込み、椅子の上に寝転がった。

「新入生だよ? エストも新入生なんだよ?」

「ああ、確かに俺は新入生だけ」

エストと自分呼んだ女の子は少年の方を見て顎を傾ける。

少年の顔を見て何かを思い出すような仕草だ、そして何か期待しているようにも少年には思えた。

「ね? 君の名前を当ててもいい?」

少年の方を見てニコツと笑った女の子に少年は思わず身構えた。少年は自分の名前が持つ意味を知っているからだ。

「ドロホフの家の人でしょ？」

やっぱり当てられた。しかし少年はドロホフの家の人間だと予想したのに、少女の態度が柔らかいことが違和感だった。

ドロホフなんて名前は今の魔法界では殺人鬼とか虐殺者とか闇の魔法使いとかそういういたものとすぐに結びつけることができる名前だからだ。

「確かに俺の苗字はドロホフだけどなんでわかるんだ？」

少年の声は意識していないのに少しだけ低くなっていた。

確かに少年の父親の顔写真は例のあの人が倒れる前も、倒れた後もよく日刊預言者新聞に載っていた。

しかし、だからと言って少年の顔だけ見てもドロホフの家の者だと簡単に看破できるものだろうか？

「だって君のお父さん？ おじさん？ の写真は新聞とかでよく見るとし、エストは顔を見たこともあるもん」

少年は息を呑んだ。

確かに少年の父、アントニン・ドロホフの名前と写真はこの数年間、日刊預言者新聞をにぎわしていた。

例のあの人が倒れるまでは悲惨で残虐な事件の首謀者や実行犯として、倒れた後は裁判の内容や、やった事柄の詳細について顔写真付きで載っていたのだ。

ベラトリックス・レストレンジや魔法省の重鎮の息子、バーティ・クラウチ・ジュニアなんかと一緒にの掲載率だっただろう。

しかし、アントニン・ドロホフと顔を合わせたことがあるというのは、死喰い人の子供かそれとも、敵対組織の子供でもないとおかしいと思っただのだ。

「それで？ なんなんだ？ 俺の苗字がドロホフだったらお前に不都合でもあるのか？」

そう、少年が誰もいないコンパートメントを選んだのはこういった話をしたくなかったからだ。

そもそも少年には悪名高い死喰い人の子供とホグワーツへの道程を一緒にいたいなんてやつがいるとは思えなかった。

「別に？ 似てたから聞いたただけだよ？ 新入生だよ？ 名前も教えてくれる？」

変な女の子だと少年は思った。ドロホフという苗字を聞いた後も名前を聞いてくるなんて。

傍にいただけで他の奴らから嫌われそうな名前なのにだ。

「そうだ、俺はアントニン・ドロホフの息子、オスカー・ドロホフだ」
オスカーはじつと目の前の女の子を見つめた。女の子はオスカーの顔をじつとみるだけで特に名乗りに対して反応していなかった。

オスカーがアントニン・ドロホフの縁戚どころか実の息子だと聞いてもだ。

「じゃあ、新入生同士これからよろしくね？」

「俺は名乗ったのにお前は名乗らないのか？」

アントニン・ドロホフの息子だと聞いても女の子がリアクションをおこさないのにはびっくりしていた。

しかし、それ以上にオスカーとしては割と勇気を出して名前を名乗ったのに、女の子の方が名乗らないのが気に入らなかった。

「ん、エストが名乗ってもオスカーは態度を変えたりしない？」

オスカーにはドロホフの息子より名乗りにくい名前があるとは考えられなかった。

例のあの人の娘とか、グリンデルバルドの娘とかなら話は変わってくるとは思った。

「俺の名前より悪名高い苗字なんてそうそうないだろ？ ましてやお前の苗字がそうとは思えないんだが」

女の子はちよつと目を瞑って決意を固めているような神妙な表情をした。

「じゃあ、名乗るね？ エストは、エストレヤ・プルウエット。ギデオ
ン・プルウエットの娘で、フェービアン・プルウエットの姪だよ？」

あと、お前じゃなくてちゃんとエストって呼んでね？」・

正直、オスカーは目の前が真っ暗になった。

多分、オスカーが一番会いにくい人物こそ、目の前のエストレヤ・プルウエットだった。

父のアントニン・ドロホフが行った凶行の内、最も悪名高い事件の一つ。

純血の旧家で聖28族かなんかにも選ばれているプルウエット家。いわゆる血を裏切るものであるウイーズリー家と婚姻し、例のあの人に表立って逆らっていた家の一つ。

そのプルウエット兄弟、エストレヤ・プルウエットの父であるギデオン。叔父であるフェービアンを大量の死喰い人を連れて襲撃し、殺害した人物。

それこそがオスカーの父、アントニン・ドロホフである。

文字通り、エストにとつてオスカーは身内の仇の息子である。

しかし、少しの空白の後、エストは話を切り出した。

「ね？ オスカーはどの寮に選ばれると思う？」

オスカーはまた驚いた。

エストは目の前の少年が親の仇である人物の息子だと分かっても、話を続けようというのだ。

しかも名前で呼んでくるのだ。

「そんなもん、決まってるだろ。ドラゴンの子はドラゴン。吸魂鬼の子も吸魂鬼。俺はスリザリンだろ」

寮なんてものはほとんど血統で決まる。オスカーは自分がスリザリンに選ばれるであろうことを一ミリも疑っていなかった。

「そうなの？ エストの家系はスリザリンもグリフィンドールも色々だったって聞いたんだけどな」

エストは机に首をのせながら、首を傾げる。

オスカーは自分達の出自を聞いた後に、自分の血統について語らせる目の前の少女の神経がわからなかった。

「あつ!! でも、モリーおばさんが結婚したウイーズリー家はグリフィンドールばかりって聞いたかも」

得心したと言わんばかりの顔になるエスト。

「そりゃあウイーズリー家って言ったら、うちの家とは真逆の感じだ

からな」

ウィーズリー家と言えばダンブルドア傘下の地下組織に表立って加わっていた家でもあり、グリフィンドールばかりなのは当たり前だとオズカーは思う。

「え、でもオズカーはチャーリーとかビルと仲良くなれそうだと思うんだけど」

そもそも、チャーリーやらビルとかいうのはだれなのか。

話の流れからしてウィーズリー家なのは確かなのだから、どうせ赤毛なんだろうなとオズカーは思い浮かべた。

ウィーズリー家は赤毛と相場が決まっている。

「他のコンパートメントに行った方がいいんじゃないのか？」

「えっ？　なんで？」

オズカーが聞くと、エストは本当に何を言っているのか分からないという顔をした。

「だって、俺の親父はお前の家族を殺しているんだぞ？　普通に考えて一緒に喋るのはおかしくないのか」

エストは少し悲しそうな顔をした。

「オズカーはオズカーのお父さんじゃないでしょ？　エストもお父さんじゃないし、叔父さんでもないよ？」

オズカーには目の前のエストが本当にそう考えているように見えた。

「お前はそうかもしれないけど、周りはそう見ないだろう？　だいたいの仇の息子じゃなくても、殺人鬼の息子と喋りたいやつなんていないだろう？」

そうオズカーが言うとエストは笑う。

「オズカーは優しいんだね、だってエストのこと心配してくれてるんじゃないよ？　あと『お前』じゃなくて、エストだから」

オズカーにはやっぱりエストのことが理解できなかった。

「それになんか運命みたいじゃない？」

「運命？」

運命？　これから殺し合う運命くらいしかオズカーには想像でき

なかった。

「だって、二人共同い年だし、偶然同じコンパートメントになったし、親にも因縁があるんだよ？　こんな偶然が重なるのかな？」

確かに、まるで仕組まれたような出会いだとは思う。凶ったように同い年で、凶ったように同じコンパートメントに乗ることになった。確かに、目の前のエストとは何か変な繋がりがあるのかもしれないとオスカーは思った。

「車内販売よ？　見つめ合っている仲の良いお二人には申し訳ないけれど、何か要りませんか？」

二人は慌てて目をそらした。

「エストもおおなかペコペコなの、大鍋ケーキとカエルチョコと百味ビーンズください!!」

「はい、ありがとうございます。そちの男の子はなにか要りますか？」

「いや、サンドイッチがあるので」

「そう、じゃあこれで失礼します」

車内販売のおばさんは二人に大きなウインクをして去っていった。

「オスカーのサンドイッチは誰かに作ってもらったの？」

「ああ、うちには誰もいないけど屋敷しもべはいるからな」

「へー、おいしそうだねサンドイッチ、ちよつともらっていい？」

「ああ勝手に食べてもいいぞ」

オスカーはそう言えば、屋敷しもべ妖精や見張りの闇祓い以外の人物とごはんを食べるのは久しぶりだと思った。

「モリーおばさんのサンドイッチよりおいしいかも、屋敷しもべ妖精って料理上手いんだね」

サンドイッチを食べたエストは、なぜか他のものを放って百味ビーンズを取り出した。

「百味ビーンズっておもしろいよね？　いくら食べても全然飽きないもん」

そう言って、なにやらやばそうな色のビーンズを取り出し始めた。

紫、シヨッキングピンク、茶色、黒……　オスカーは嫌な予感しかしなかった。

「この肌色っぽいやつから行くのかな？ オスカーも食べる？」

オスカーは無言で首を振った。

「うえええ、これ、多分シユールストレミング味なの…… 口の中の匂いがとれない……」

オスカーはエストの口にスコージファイを唱えた。

死喰い人と騎士団と闇祓い

二人で百味ビーンズをつつきながら、授業はどれが面白いのだろうかとか、アルバス・ダンブルドアはなぜ結婚しなかったのかだとか、闇の魔術に対する防衛術の授業は毎年教師が変わるだとかを話していた。

するとコンパートメントがノックされ、ピカピカのローブを着た女の子が入ってきた。

身の丈はありそうな巨大な杖を持ち歩いているせいか、元々小さい背丈がさらに小さく見える。

ダークグレーの髪に黒い目をしているが、なぜかその黒い目はオスカーを凝視している。

「今年アントニン・ドロホフの息子がホグワーツに入学するって聞いたんですけど、貴方がそうなんですか？」

「そうだったらどうなんだ？」

オスカーが喧嘩腰にそう答えると女の子はニヤリと笑った。

まるで獲物を見つけた肉食動物のようだとオスカーは思った。

「へえ、名前を聞いてもいいですか？」

「オスカーだ。オスカー・ドロホフ」

エストは何も言わずに二人を見守っている。オスカーにはその顔が何か、面白がっているように見えた。

「ふん、ではオスカー・ドロホフ。私の眼が黒いうちはホグワーツでやりたい放題できないと思うことですね」

「私の名前はクラリーナ・ムーデイ!!! ムーデイ家の一員として闇の魔術師は許しません!!!」

クラリーナはマントを翻し、自身満々に杖を高く上げた。

「オスカーってもう闇の魔術師だったの？ 腕に闇の印とかあるの？」

「グリーンデルバルドの三角のやつ？」

エストは机の上に顔を乗り出してオスカーの腕をみようとしてきた。

このクラリーナとかいう女の子もヤバイやつだが、エストの方がもっとヤバイやつなんじゃないかとオスカーは思った。

「ホグワーツに入ってもいないガキがどうやって闇の魔法を覚えるんだよ」

そしてクラリーナは今初めてエストの存在に気付いたような反応をした。

「おやおや、アントニン・ドロホフの息子と一緒にコンパートメントにいるなんて、貴方も死喰い人の娘とかなんですか？」

またもクラリーナはニヤリと笑った。どうもこの女の子は自分の獲物が増えるのが嬉しいみたいだとオスカーは思った。

「うーん、エストの親は死喰い人じゃないよ？　というか、ムーディって、あのマッドアイのムーディ？」

そうエストが聞くとクラリーナは誇らしげに返す。

「そうです、ムーディ家は闇祓いの名門ですけど、叔父のマッドアイこと、アラスター・ムーディは一番有名です」

なるほどとオスカーは思う。マッドアイと言ったらアズカバンの半分を埋めたなんて言われてる凄腕の闇祓いだ。

ただ目の前の女の子は頭もマッドなんじゃないかとオスカーは思った。

「あ、やっぱりそうなんだ。あとエストの名前はエストレヤ・プルウェットだよ、よろしくねクラリーナ」

クラリーナはその名前を聞いたとたん、はあ？　という顔をして杖をとり落としかけた。

「ど、どういうことですか？　ドロホフとプルウェットなんて、今すぐにも死の呪いをかけ合ってもおかしくない関係じゃないですか!!」

クラリーナはオスカーとエストの顔を交互に見て叫ぶ。

やっぱり、エストの方がヤバイやつで、自分の感性は間違っていないかったとオスカーは思った。

「あなたたちが仲良くするなんて、スリザリンとグリフィンドールとか吸魂鬼とレシフォールドが仲良くするようなものでしょう?」

吸魂鬼とレシフオールドなんて、実質同じものなんじゃないのかとオスカーは思ったが、どうもクラリーナは結構混乱しているらしい。

「ん〜 レシフオールドと吸魂鬼って住んでる場所の違いだと思っただけど、まあオスカーとエストも同じ人間だし、そのくらいの違いなのかも……」

やっぱりエストの考え方はどこかおかしいとオスカーとクラリーナは顔を見合わせる。

「あっそうだ。クラリーナはどここの寮に選ばれると思う？」

エストはそんなに寮の組み分けが気になるのだろうか？

エストは他人からの評価や見解を気にするような性格には思えなかったから、少しオスカーは疑問を抱いた。

「ふん、当然グリフィンドールでしょう。勇猛果敢で、せこくて汚いスリザリンとは違うんです」

クラリーナは当然です。みたいな顔をした後、オスカーを睨みできた。

「まあ、ドロホフはスリザリンでしょう？ どっちかいうとアズカバンの方がお似合いだとは思いますが」

「アズカバンは寮じゃないだろ」

「アズカバンが寮だったら、やっぱり動物は吸魂鬼なのかな？」

「吸魂鬼が象徴の寮とか少なくとも人間は入らないだろ」

クラリーナは茶化されたと思ったようだ。

「まあ、仇の息子を見張るとはいい神経をしてると思いますよ、エストレヤ・プルウエット」

また、感心しましたみたいな顔をするクラリーナ。

この女の子は凄く顔に感情が出やすいとオスカーは思う。

「見張りなんかしてないよ？ オスカーとはもう友達だもん。クラリーナもよろしくね？」

それを聞いたクラリーナがあっけにとられる。やはり、エストの考え方にはなかなかついていけないようだ。

「まあ、プルウエットがそういうスタンスならいいですけど、周りが見えるかは考えた方がいいと思いますよ」

「クラリーナも優しいんだね？ オスカーと一緒にのこと言ってるもん」
そう言つてエストはクラリーナを見てからオスカーを見て笑顔になる。

オスカーとクラリーナは顔を見合わせた後、二人共微妙な顔になった。

「二人共、ローブにつてすでにドロホフは着替えてますね、プルウエツトは着替えた方がいいと思いますよ、そろそろつくらしいですから」
「プルウエツト、廊下に出とくからその間に着替えろ」

「うん。ありがとうね」

オスカーはコンパートメントの外に出る。するとクラリーナもオスカーについて外に出てきた。

「ドロホフの息子つて聞いていたので、もつとヤバイやつだと思つてましたよ」

「お前やプルウエツトの方がよっぽどヤバイやつだと思うね」

そう言い返すとクラリーナはまた獲物を見るような目でオスカーを見てきた。

「まあ何にせよ、私のような印象を持つて見てくる人が沢山いることを忘れないことですよ、オスカー・ドロホフ。それに皆がプルウエツトのような人間だとは思わない方がいいですよ、じゃあまたホグワーツで会いましょう」

クラリーナはまたマントを翻して違う車両へと消えていった。

彼女の巨大な杖がカンカンと床を打ち付ける音だけがしばらく聞こえていた。

「オスカー、着替え終わったよ？ あれ？ クラリーナは戻っちゃったの？」

「ああ、杖を打ち鳴らして帰つて行つたよ、ホグワーツでよろしくどうぞだ」

「そうなんだ。クラリーナつてなんかオスカーに似てたね、考え方とか優しいとことか」

「止めてくれ」

オスカーはあんな風にマントを翻して自己紹介するなんていくつ

になってもできそうにない気がした。

そもそも、死喰い人の子供と闇祓いの一家の子の考え方が似ているなんてオスカーには思えなかった。

「あと五分程度でホグワーツに到着いたします。荷物につきましては別途学校に届きますので、車内へ置いていってください」

そう車内放送が流れると間もなく駅に着いた。オスカーはエストと一緒に人で溢れかえる車内を出て、プラットホームで待つことにした。どうも上級生と一年生の道は違うようだ。

少し待っていると向こうの方からランプが近づいてくる。

「イッチ年生！ イッチ年生はこっち！ クラーナ、元気か？」

凄まじい凶体をしたひげ面が、一年生ばかりが残るプラットホームの上から笑いかけた。

「さあ、ついてこいよ、イッチ年生はもういないか？ 足元をしつかり見ろ！ いいか！ イッチ年生はついてこい！」

暗い藪道を滑りそうになりながら、一年生の一団は巨漢について行った。

「ね、あの人ハーフかな？」

「ハーフ？」

エストが話しかけてきた。

確かにあの巨漢は人外じみた巨体ではあるとオスカーも思う。

「そう、巨人の血が入ってないとあんなに大きくならないと思うな」

「巨人なんて闇の生き物だろ？ そんなの血が入ったのをダンブルドアが許すのか？」

巨人の多くは闇の魔法使いと結託して度々反乱を起こしているのだから、とてもあのダンブルドアが許すとはオスカーには思えなかった。

「む、確かに？ でも半分なら大丈夫なんじゃないかな？」

「まあ半分じゃなくても爺さんがそうだったとかかもな」

「クオーターとかでもおつきくなりそうだもんね、あとクラーナの名前呼んでたね」

「まあ知り合いなんだろう」

そうこう言っている間に一年生は大きな黒い湖の前についた。
向こう側に壮大な城が見えている。

「四人ずつボートに乗ってー!」

巨漢が叫んで、ほとりにいくつかある小舟を指さす。

オスカーとエストが乗ると、なにやら巨漢と話していたクラリーナと赤毛の男の子が乗り込んできた。

「おやまた会いましたね、ドロホフとプルウエット」

クラリーナが話しかけてくる。

エストはなにやら船にかけられた魔法に夢中だ。

「ああ、俺はあんまり会いたくなかったけどな」

赤毛の方が話しかけてくる。

「あんたたち、エストと知り合いなのか?」

「まあ知り合いって言ってもさつきコンパートメントで一緒になった
だけだけどな」

エストが船から顔を離してこちらを見てくる。

「チャーリーなの? さつきぶりだね」

四人で自己紹介をし合う。案の定、ドロホフの名前にチャーリーは驚いたが、エストが平然としているのでそれ以上突っ込んでこない。

またクラリーナはマントを翻して自己紹介した。

「ねえ? クラリーナはあのおっきい人と知り合いなの?」

「ええ、彼はハグリッドと言って、hogwartsの禁じられた森の番人ですよ」

「えっ、じゃあ禁じられた森の動物とかも詳しいのかな?」

チャーリー・ウィーズリーが尋ねる。

「彼は動物に関してはアラスターおじさんより詳しいらしいです。下手をすればダンブルドア校長より詳しいでしょう」

「ほんとなのかそれ? じゃあハグリッドに僕を紹介してくれないか?」

「別に構わないですけど」

どうもチャーリーは動物に興味があるのだろうか?

「チャーリーだけはずるいと思うな、エストとオスカーにも紹介してくれない?」

「まあハグリッドなら誰でも歓迎してくれるんじゃないですかね」

オスカーは勝手に数に入れておられることに閉口した。

その間にも船は進み、ホグワーツの城から続いている崖の下まで来た。鳶のカーテンをくぐれば地下の船着き場に到着した。

ハグリッドのランプによる先導に従ってごつごつした岩の道を上る。

「こういう道だとその杖が便利そうだな」

「ふん、そんな老年のマグルが使う棒きれとこの杖を一緒にしないで貰いたいですね、ドロホフの息子」

「やっぱり、二人共仲いいでしょ?」

オスカーとクラーナはエストの前では喋らない方がいい気がしてきたのだった。

岩の道を登れば、立派な石段と巨大な櫺の扉が見える。

「みんないるか? 今からホグワーツに入るぞ!」

そう言っただけハグリッドは扉をその大きなこぶしで三回叩いた。

ハツトストール

扉が開き、中から背の高い魔女が出てくる。顔からして厳しいんだらうなとオスカーは感じる。

「マクゴナガル先生、イツチ年生を連れてきました」

巨漢が言う。

「ご苦労様です。ハグリッド。ここからは私が案内しましょう」

マクゴナガル先生の先導に従って巨大な玄関ホールを通り過ぎ、暖かなたいまつ火に照らされた大理石の階段を上る。

恐らく、全校生徒が集まっているホールにいたが、一年生はその隅にある小さな部屋に案内された。

「ホグワーツ入学おめでとうございます」

マクゴナガル先生がこちらを見て挨拶する。

「新入生の宴が始まる前にあなた方の寮を決めないといけません。寮の組み分けはホグワーツでは大事な儀式なのです。ホグワーツにいる間は寮生こそが家族のようなものになります。教室で学ぶのも、宿舍で寝るのも、談話室で遊ぶのも全て寮が基準となるのですから」

「ホグワーツには四つの寮があります。グリフィンドル、ハツフルパフ、レイブンクロー、スリザリン。それぞれ偉大な歴史と偉大な卒業生がいます。ホグワーツでの皆さんの行動は寮への評価として与えられます。どの寮でもその寮に入っているという自覚をもって行動してください。そうすれば学年末に名誉ある寮杯が所属する寮に与えられるでしょう」

「これから全校列席の前で組み分けの儀式が行われます。待っている間、身なりと精神を整えておいてください」

そういった後、マクゴナガル先生はオスカーの隣で目をつぶって、ふねをこぎ始めているエストをちらりと見た。

「学校側の準備が終わり次第、戻ってきます」

そういつてマクゴナガル先生はどこかへ行ってしまった。

オスカーは取りあえず、隣のエストを起こすことにした。

「あれ？ もう組み分けは始まるの？」

「マクゴナガル先生が戻ってきたら始まるだろうな」

オスカーは全校の前での組み分けが苦痛だったが、隣で気の抜けた顔をしているエストを見ると馬鹿らしくなってきた。

「プルウエット、お前緊張しないのか？」

「緊張？　なんで？　組み分けって絶対面白い魔法だよ？　あとプルウエットじゃなくてエストだから」

チツチ、みたいな感じで指を振ってエストはオスカーをバカにした。

「生徒の性質を見分けて寮を分けるなんて、きつとすごい儀式だと思うな」

確かに、どうやって性質を見分けるのだろうか？　魔法で身体の性質とか精神の性質を見分ける方法でもあるのかとオスカーも思った。

「さあ行きますよ、ミス・プルウエット、私語はそれくらいにしてください」

厳しい声がエストを注意した。

「組み分け儀式が始まります。一列になってついてきて下さい」

一年生は玄関ホールをでて、大広間に入った。何百という瞳が彼らを見つめている。

オスカーは視線が嫌だった。視線はオスカーという個人ではなく、ドロホフという苗字や、アントニン・ドロホフの息子という自分を見ているような気がしたからだ。

キラキラと輝く皿やゴブレットが飛び交う光景や、外の星空がそのまま見え美しい天井を見てもオスカーの心は重いままだった。

唯一心が晴れるとすれば気の抜けた声で、凄いと騒いでいる隣のエストくらいだろうか。

そうこうしている間に、マクゴナガル先生は一年生の前に椅子と、ボロボロのとんがり帽子を置いた。

一瞬の静寂の後、帽子が動き、歌い出した。

『私の姿はみすぼらしい』

けれども人は見かけによらぬもの

果たして私は誰なのか？

私は思う、私は誰？
それは皆が知らぬこと
ならば私は伝えよう
君の頭にあるものを
組み分け帽子はお見通し
かぶれば君は知るだろう
君の頭にあるものを
四天王のそれぞれは
四つの寮を作り出し
自らの持つ徳目を
それぞれ寮で教え込む
グリフィンドルが持ちよるは
何にもくじけぬ勇猛さ
ハツフルパフが持ちよるは
何にも負けぬ勤勉さ
レイブンクローが持ちよるは
何をも知る賢明さ
スリザリンが持ちよるは
何をも阻まぬ狡猾さ
四天王の亡き後に
誰が選ばんその素質？
グリフィンドルその人が
ボロボロにしたその帽子
四天王のそれぞれが
自分の徳を吹き込んだ
帽子が素質を見分けるよう
被つてごらん。恐れずに
君の知らない君の頭
私が見よう。知らぬ頭
そして知るのさ、寮の名を！』
帽子が歌い終わると、広間の全員が拍手喝采をする。

帽子はそれぞれのテーブルにお辞儀をして静かになった。

隣のエストはさつきとは打って変わって静かになり、じつと帽子を見つめている。

マクゴナガル先生が前に出て、長い羊皮紙の巻物を持っている。

「ABC順に名前を呼ばれたら、帽子をかぶって椅子に座り、組み分けを受けてください」

A、B、Cの苗字を持つ生徒が呼ばれ、それぞれ組み分けを受けた後、それぞれのテーブルへ座っていった。

組み分けはかなりのスピードで行われていた。

ほとんどの生徒は帽子をかぶって一分もたたない間に寮の名が告げられる。

そしてオスカーの番がやってきた。

隣のエストがなにやらこつちにガッツポーズをしている。

「ドロホフ・オスカー！」

オスカーが前に進み出ると、広間に少し静寂が起こる。

「ドロホフ？ アントニン・ドロホフの息子か？」

「あの殺人鬼に息子がいたのか？」

オスカーが帽子をかぶるまで、オスカーの視点には明らかに友好的でない視線が向けられていた。

それも帽子をかぶると中の闇しか見えなくなった。

オスカーは少し待った。

「ほう、これは面白い」

なにやら低い声が耳の中で聞こえた。

『君の血と魔法は間違いなくスリザリンに向いている。その力を求める思考も抜け目のない頭も、目的の為に規則を無視するであろう傾向もだ』

オスカーは黙って聞いていた。

『だけれども君は勇気も持ち合わせている。君が頭を巡らすのも、力を求めるのもそれぞれを求めているわけではない。君には勇気と怒りが満ち溢れている。これはグリフィンドールに向いている』

勇気？ そんなものはない。オスカーはそう思った。

現にドロホフの息子だと思われるのが嫌でコンパートメントは人がいない場所を選んだし、今も視線にあてられるのが辛いのだ。

『それは違う、君に勇気がないのなら君はそれらを気にしないだろう。君は自分や自分の周りあるものに危害を加えるものと正面から戦う勇気があるのだ。ふむ……。難しい。グリフィンドールならば君はその勇気を、スリザリンならば君は守るべきものを得るだろう』

自分もつ勇氣？ 自分が守るべきもの？ それぞれ自分には値しないものだと思つた。

『ふむ、やはり、君は守るべきものを持つべきだろう。よろしい、君がスリザリンで真に守るべきものを見つけられるならば、グリフィンドールよりも偉大になれることだろう。スリザリン!!!』

最後の一言は頭の中でなく、帽子が外へと叫んだものだと思つた。には分かつた。

オスカーはスリザリンのテーブルへと向かつた。

「やっぱり、スリザリンか」

「カエルの子はカエルだな、絶対闇の魔法使いになるに違いない」

「なんであんな奴の入学を認めたんだけ？」

スリザリンのテーブルに向かう最中もほとんど拍手は起きなかつた。

聞こえてくるのはやはり闇の魔法使いがどうか父親の話ばかりだ。

だが、オスカーの内心では先ほどの組み分け帽子の話が反芻されていた。

オスカーはスリザリンのテーブルに座つたが、隣にはだれも話しかけなかつたし、スリザリンの上級生でさえ、オスカーを腫物として見ているようだった。

その間にも組み分けは続いた。

Mの苗字が呼ばれる順番まで来た。

「ムーディ・クラリーナー」

さつきホグワーツ特急であつたクラリーナーが呼ばれていた。

クラリーナーは自信満々にでかい杖を引きずりながら組み分け帽子を

かぶると、触れるやいなや帽子が「グリフィンドール!!」と叫んだ。クラリーナは拍手喝采でグリフィンドールに迎えられた。どんだん、順番が過ぎていき、そろそろエストの順番が回ってくることになった。

「プルウエット・エストレヤー!」

エストは自信満々に組み分け帽子を被った。しかし、なにやら様子がおかしい。

これまでの組み分けは少なくとも1分以下かそれくらいで寮の名が叫ばれたのに、組み分け帽子が10分ほどたっても微動だにしないのである。

それに隣のゴーストの様子がおかしい。

隣のゴーストは人がいないのを良いことにオスカーの隣にいた血みどろのゴーストなのだが、エストの姿を見てから全く動かない。

それからさらに十分くらいだろうか、時間が流れ、大広間のざわめきが大きくなってきたところに組み分け帽子が叫んだ。

「スリザリン!!!」

エストはスリザリンのテーブルに向かってくる。

エストは拍手喝采で迎えられた。

オスカーは対応の違いに笑わざるを得なかった。

上級生たちに話しかけられているにも関わらず、エストはオスカーの隣に座った。

「オスカー、同じ寮だね、これからよろしくね?」

「いや、周りをみたほうがいいぞ、俺がスリザリンでさえ避けられてるのがわかるだろ」

「ん〜 そうなの?」

エストは周りを見回す。エストとオスカー周りには誰もいなかった。少なくとも人間は。

すると隣のゴーストが喋りかけてきた。

「少年、この姫は君を気遣って話しかけてきてくれたのだ。そのような態度は失礼だろう?」

血みどろの髭が言うとか変な迫力があつた。

「おじさん？ 別にエストは氣遣ってオスカーの隣に座ったんじやないよ？ オスカーとはコンパートメントで喋ったからもう友達だもん、あとおじさんだれ？」

エストがそう言うと、血みどろのゴーストは感極まったみたいな顔をした。

「おおそうでしたか、姫がそういうならそうなのでしょう。あと私のことは血みどろ男爵とでもお呼び下さい」

男爵はエストとオスカーに会釈して消えていった。

「うーん？ なんで血みどろ男爵はエストのこと姫って呼んだんだらう？」

「さあ？ 昔あつた姫様に似てたとかじゃないのか？」

またエストは何やら悩んでいる。

組み分けはそのあと順調に進み、見るたびに髪の毛の色が変わっており、ちよつと氣になっていた女の子はハツフルパフに組み分けられた。

さつき、船で一緒になったウィーズリー家の男の子は当然のようにグリフィンドールに選ばれた。

「あのテーブルに座ってるのが先生かな？」

エストが指すテーブルには幾人も先生らしき人が座っている。さつき名前を読み上げていたマクゴナガル先生。小さすぎて頭しか見えない先生。鉤鼻の脂っこい髪の毛をした先生。優しそうな恰幅のいい先生。麦わら色の髪の毛をした人……。

「あれ？ スタージスが座ってる」

「スタージス？」

「ほらあの麦わら色の髪の毛の人、知り合いなの」

そういつてエストが麦わら色の髪の毛をした人に手を振ると向こうも満面の笑みで振り返ってきた。

その横に座っていた。白い髭を蓄えた魔法使い。ダンブルドア校長もこちらを見る。一瞬、オスカーにはダンブルドアがエストとオスカーの方を見て虚を突かれたような顔をした気がした。

ダンブルドアが立ち上がったって挨拶をする。

「おめでどう！ ホグワーツの新入生、おめでどう！ 歓迎会を始める前に、二言、三言、言わせていただきたい。眠れるドラゴンを起こさぬように学業に励むこと、以上！」

ダンブルドアの短い挨拶が終わると拍手が鳴り響き、何もなかったテーブルの上にごちそうが現れた。

「ダンブルドアってへんな人だね？ 二言三言って言ってたのに」

「偉大な魔法使いはだいたい変な人なんだろう」

「確かにカエルチョコの人もみんな変な顔してるかも」

変な人という意味だとエストも変な人のようにオスカーには思えたので、いつか偉大な魔法使いになるんだろうかと思いついて、カエルチョコのカードに乗っているエストを思い浮かべ吹き出しそうになった。

「オスカーなんか変なこと考えたでしょ？」

「いや、全然」

オスカーはこんなに明るく楽しい夕飯を食べたのはいつ以来だろうかと思った。

ルーンスプール

「見たか？」

「あれだよあれ」

「黒髪の女の子の隣」

「いかれた顔してるぜ」

「日刊預言者新聞にでてた親父の顔にそっくりだ」

「なんでホグワーツに入学できたのかしら」

翌日オズカーが寮をでてから毎日のようにささやき声がついて回った。

ほとんどは遠くから見る視線やひそひそという噂声だけだったが、中にはほとんど殺意のような視線を向けてくるものもいる。

オズカーが幸運だったのはオズカーが一人でいると言っても無理やりついてくるエストが、ホグワーツの複雑な階段や仕掛け扉を数日で理解したことだろう。

ゴーストや肖像画達もなぜかエストには好意的だったし、特に血みどろ男爵がエストにピーブズが近づいた途端にフルボッコにしていたので、二人はピーブズに出くわすことはなかった。

天文学、薬草学、魔法薬学、妖精の魔法、魔法史、変身術、闇の魔術に対する防衛術等色々な授業があったが、そのどの授業でもエストの優秀さをオズカーは思い知らされた。

変身術ではあつという間にマッチ棒を針に変えてしまったし、闇の魔術に対する防衛術の先生である、スタージス・ポドモアという先生はエストがお気に入りだった。

先生の出身はグリフィンドルらしいのだが、エストが何か質問やら回答するたびに彼はスリザリンに得点を与えた。

レイブンクローの学生たちは何故エストがレイブンクローでないのか疑問でしかたないようだった。

エストが嫌でも目立つために、オズカーは授業の間は生徒たちの話題に上らずにはすんだ。

しかし、段々とオズカー……ではなく、親のアントニン・ドロホ

フに怨みを持つ生徒たちの行動は直接的になってきた。

オスカーが何もせず大人しくしていたのもあつたかもしれない。

大抵、エストがいないときを見計らって、ゾンコの悪戯専門店ですべて売っているような道具での悪戯や、最悪の場合、直接呪いをかけてきたのだ。

まだ呪いをかけてくる生徒は低学年であつたから大した呪いではなかつたが、オスカーは何度かマダム・ポンフリーの世話になった。

オスカーは呪いをかけてくる生徒に会わないように早めに朝食を取りに行くのだが、エストもそれに合わせて早起きするようになっていた。

ほとんど学生がいない大広間で朝食を食べていると、グリフィンドールの生徒がスリザリンのテーブルにやってきた。

先生方がいる大広間で何かするとは思えないが、オスカーは思わず身構えた。

やってきたのは赤毛の男の子、たしかチャーリー・ウィーズリーだつたはずだ。

「おはようエスト、今日の午後ハグリッドに会いに行かないか？」

「チャーリー、おはよう。ハグリッドってあのでっかい人？」

チャーリーはエストを誘いに来たらしい。二人はいとこ同士らしいので不思議なことではないとオスカーは思った。

「そうだよ、あの人は凄く魔法生物の扱いがうまいんだ。なんかすごく面白い生物を見つけたらしいから、エストも一緒に見に行かないかなと思つて」

なるほど、確かにあの図体ならドラゴンやキメラなんかでも互角に戦えるかもしれないとオスカーは思う。

「うーんエストはいいけど、オスカーも一緒でもいい？」

「ああ、別に問題ないよ、こつちもクラリーナが付いてくる予定だしね」
どうもエストの中ではオスカーと一緒にすることは前提であるらしい。

クラリーナ・ムーディがいると聞いて少しオスカーの気分が下がつた。彼女は直接的に呪いをかけてきたりしないが、コンパートメント

での態度からオスカーに好意的でないのは明確だからだ。

「じゃあまた午後だね」

「じゃあねー」

チャールリーはそのままグリフィンンドールのテーブルに戻っていく。「ね？ ハグリッドの珍しい生物ってなんだろう？ ドラゴン？ バジリスク？ ヌンドウ？ それともアクロマンチュラとかかな？」

「そんなもんホグワーツにおいておけるわけないだろう。闇祓いから木っ端役人まで引き連れないと討伐できないだろ」

やっぱり、エストの発想はどこかぶっ飛んでいる。ホグワーツにヌンドウが現れた日には日刊預言者新聞の一面は間違いない。

今日の授業は午前までだったので、昼食が終わり次第エストとオスカーはハグリッドの小屋に向かった。

ハグリッドの小屋は禁じられた森のはずれにあるので校庭を横切ってたどり着く。

小屋の戸をエストはノックした。

「こんにちは」

小屋の中でガタガタと音がする。

「大丈夫だよハグリッド、多分エストとオスカーだから」

「プルウエットはともかく、ドロホフの息子が信頼できるかは怪しいですけどね」

扉が開いて小屋の中に案内される。

「プルウエットの娘っちゅうのはあんたか？」

ハグリッドはエストに聞く。彼の黄金色の瞳はなにやら懐かしいものを見る感情が溢れている。

「そうだよ？ エストはエストレヤ・プルウエットだよ？ ハグリッドさん？」

「おお、あの兄弟によく似てる。よくきてくれた。あと俺のことはハグリッドでいいぞ」

オスカーはハグリッドとエストのやり取りを聞いて居づらくなくなった。

「そつちのはプルウエットの仇の息子ですよ、ハグリッド」

クラリーナがニヤリと笑って、オスカーを指で指す。

ハグリッドの黄金色の瞳がオスカーを覗く。そしてニコリと笑った。

「確かにお前さんも親父さんによく似とる。けどな、フアングも吠えなかったしエストとも仲がいいんだろう？ 心配することはねえ。

あとクラリーナ、人を指で差しちやいけねえぞ」

「ハグリッドはいい人だね？」

確かにこのハグリッドという人物は人を偏見で見る人物ではないようだ。

それにハグリッドに注意されてむくれるクラリーナが面白くてオスカーは仕方なかった。

「ハグリッド。もう孵りそうだよ」

待ちきれないといった感じのチャーリーの声。

「なんの卵なの？」

「孵ればわかるよ」

パリっ、パリっという音がして卵が孵る。

中からでてきたのは頭が三つある蛇だった。長さは人間の腕位だろうか？

「すごい、ルーンスプールでしょ！ これ」

「おお、よく知つとるな。こいつは卵が魔法薬の材料になるからうちゆうて数が少ないんだ」

確かに幻の動物とその生息地で見たことがある。

けど、確かこの生き物の卵は販売が制限されていたはずだが。

「こいつらなんか頭同士で喧嘩してますよ、ハグリッド」

クラリーナの言う通り蛇はその三つある頭がお互いに威嚇し合っていた。

「クラリーナ、ルーンスプールは頭が互いに攻撃するせいで短命なんだ」

チャーリーが解説してくれる。

「ドロホフ。あなたパーセルタングだったりしないんですか？ 闇の魔術師の特徴の一つじゃないですか」

「あほか、パーセルタングなんてほとんど絶滅してるだろ、ルーンスプールより珍しいだろうよ」

近年でパーセルタングなんて例のあの人くらいだろう。

「だいたい、パーセルタングだってわかってても自分で言うやつなんていないだろうとオスカーは思う。」

「なんだ使えないですね、パーセルタングならこいつらを説得できるかと思っただけですけど」

そうこうしているうちにルーンスプールはお互いの首にかみつき合おうとしていた。

するとエストが噛まれるのも構わずルーンスプールを取り上げた。

「あつ。ちよつと痛いかも」

ルーンスプールはしばらくエストの指に噛みついてしたが、しばらくすると疲れたのか噛みつくのをやめた。

「おい、プルウエット大丈夫なのか？」

「オスカー、プルウエットじゃなくてエストだから。あと別にあんまり痛くはないかな」

エストがもとの場所にルーンスプールを戻す。

チャーリーとハグリッドはやれ、ウロコの赤みがかった色が美しいだの、こいつはメスなのかオスなのかみたいなの議論をし始めている。

「あの二人は魔法生物に関わるとあほになるんです」

クラリーナがやれやれみたいな顔をしている。

「エスト、マントを取って腕を見せて見ろ」

ハグリッドが先ほどルーンスプールに噛まれたエストの腕を見ている。

「見てから、なにやら小屋の奥でガサガサと探し物をして、なにやら銀色の軟膏を取り出した。」

「これで大丈夫だ。あんまり無茶をするもんじゃねえ」

「うん、ありがとう」

そのあと何やら、ハグリッドとチャーリーの議論が白熱したり、クラリーナがひたすらオスカーを煽ってきたり、エストがルーンスプールをしつけていたりした。

しかし、そろそろ夕食の時間が近づいてきたので学校に戻ることにした。

「じゃあ先に戻るね、ハグリッド、チャーリー、クラーナばいばい」
エストとオスカーはグリフィンドール組よりも先に戻ることにした。

しかし、エストがさつき軟膏を塗ってもらったときにマントを取り、そのまま忘れたことに気づいた。

「ちよつと取ってくるから待ってて」

ハグリッドの小屋と城の中間くらいでオスカーはエストを待っていた。

それが悪かった。ちよつとオスカーが暗い校庭で一人であることが外からよく見える状況になっていたのだ。

城から数人の生徒が出てくる。

見た目からしてグリフィンドールの生徒で、明らかに敵意のある視線をむき出しにして、杖を取り出していた。

数えると6人はいるようで、恐らく学年は一〜三年生だろうか？

オスカーはこれは不味いと思った。いつも襲われるのは城の中なので隠れる場所があるが、ここにはなにもない。

しかもあの大人数で上級生がいるのではこちらに勝ち目がないのは明白だった。

「オスカー・ドロホフ。いい度胸だな。お前みたいなやつがホグワーツを堂々と歩くなんて反吐がでるぜ」

オスカーよりも大柄な上級生であろうグリフィンドールの生徒が言った。

「そうだ、お前みたいな死喰い人の子供がなんでホグワーツにいるんだ？」

「よく、プルウエットの隣を歩けるよな？ 死にたくならないのか？」
「こいつがプルウエットに錯乱呪文か服従の呪文でもかけてるに違いない」

「俺の家族はドロホフに殺されたんだ。なのになんでお前はぬくぬく
ホグワーツで暮らしてやがる!!」

生徒達が次々とオスカーを呪う言葉を吐く。

「なんとか答えたらどうなんだ？ おい!!」

何も答えないオスカーに生徒達はいら立ち始めた。

「お前、ホグワーツにいないときは闇祓いの監視がついてるんだろ？

魔法省でパパが聞いたぞ」

「いつもやり返してこないのは暴力事件を起こしたら退学になるから
なんだろ？」

「ほら、いつもみたいに逃げてみるよ。ここには隠れる物もお前を
守ってくれるエストちゃんもいないぜ」

そういつて、生徒たちはついに呪いを打ち始めた。

「おらおら逃げてみるよ、ペトリフィカストタルス！ 石になれ！」

「インペディメンタ!! 妨害せよ！ おら逃げてんじゃねえ！」

「インカーセラス!!! 縛れ!!! この野郎 ボコボコにしてやる
！」

オスカーはプロテゴを唱えながら、呪文をよけ、なんとか活路を探
ろうとした。

しかし、ハグリッドの小屋にはまだエスト達がいるし、生徒たちは
城の方向に陣取っているので逃げる事ができない。

「インセンディオ！ 燃えろ！」

「エクペリアームス！ 武器よ去れ」

「クソっ ちよろちよろ逃げやがって！ おとなしくボコられるよ
!!」

オスカーはしばらく無傷で逃げ続けていたが、それがさらに生徒達
の怒りを誘った。

「なんなんだよてめえはよお！ 襲われてるんだからもっと怖がれよ
!! そのなんでも分かっていますみたいな顔がむかつくんだよ!!」

大柄な上級生が激昂する。

「レダクト!! 粉々!!」

上級生の放った呪文がオスカーの下の地面を粉碎した。

オスカーは衝撃で吹っ飛ばされ、砂煙で何も見えない。ただ後ろから誰かが走ってくる音が聞こえた。

「これでよけれねえだろ!! おら!! デイフエンド 裂けよ!!」

吹っ飛ばされ、倒れているオスカーに呪文が飛んでくるがその呪文がオスカーに届くことはなかった。

オスカーの前でエストが立ってかばったからだ。

エストの顔が上級生の放った呪文で裂けて、血が出ていた。

「ちっ！ 親が殺したやつの娘に守られていい気分だろうなあ!! オスカー・ドロホフ!!」

上級生が叫ぶ。だが、上級生以外の生徒はエストがけがをしたことで及び腰になっていた。

「エクスパルス!! 爆破せよ!!」

後ろから呪文が飛んできて、生徒達の足元を爆破した。

「抵抗できない相手に複数人で挑むとはなんて卑怯な!! グリフィンドールの風上にもおけません!!」

クラリーナとチャーリーが来たらしい。二人はエストと一緒に倒れているオスカーの前に立った。

「クソっ!! グリフィンドールの癖にドロホフをかばいやがって!!」

そう上級生がいうと生徒たちは城へと引き上げていった。

「オスカー大丈夫か?」

そう言ったチャーリーの手を借りてオスカーは立ち上がる。

「俺より、プルウエットは大丈夫なのか?」

オスカーは自分より、自分をかばって呪文を受けたエストの方が心配だった。

「プルウエットじゃなくて、エストだから。オスカー」

そう言って笑ったエストの頬からは血が流れていた。

「情けないことです。プルウエットに守られるドロホフもですが、抵抗しないドロホフを集団で襲うグリフィンドールの生徒はもつと度し難い」

クラリーナの言う通りだった。こうなることは随分前からオスカーには分かっていたはずだった。

なのに、オスカーは自分に甘えて、エストの傍にいてしまったのだ。
オスカーは自分の情けなさを呪った。

必要の部屋

次の日からオスカーはエストと行動することを辞めた。

朝食の時間もエストと違う時間に行きまわることにしたし、いろんな授業でエストの隣に座ることもしなくなった。

あえて違うドアや階段、廊下を使って移動をした。

それでも、秘密の通路や動く階段の動きを熟知しているエストの追跡を振り切るのは容易ではなかった。

前回の騒動がばれるのを恐れているのかグリフィンドールの生徒達が襲ってこなくなったのはオスカーにとっては不幸中の幸いだっただ。

しかし、そう長くエストから逃げることは難しかった。何せエストとオスカーは同じ寮で寝泊まりしているし、一年生の授業は皆同じ授業だからだ。

「オスカー！　なんで逃げるの!?!」

ついにオスカーはエストにつかまってしまった。

恐らくゴーストか肖像画がオスカーの場所を教えたのだろう。

「プルウエット、俺と一緒に行動するのは辞めろ。どうあっても俺は人殺しの息子なのは間違いない」

「なんで？　そんなことホグワーツ特急であつた時から分かつてたことでしょ?」

エストは泣いていた。

オスカーは自分のことがさらに情けなくなつた。父親は彼女の身内を皆殺しにし、その息子は泣かしているのだ。

「もともとドロホフの家の奴がプルウエットの娘と一緒にいるのがおかしかったんだ」

そう言つてオスカーはエストの手を払つた。

「エストはそんなに弱くないよ、オスカーと一緒にいて襲われても前みたいにはげがなんかしないよ?」

エストが何か言つていてもオスカーは聞くのを辞めた。

オスカーには自分自身がエストを傷つけている原因のように見え

てたまらなく憎くなった。

「オズカー!!」

エストの声が聞えなくなるまでオズカーは歩き続けた。

それからエストはオズカーに関わってこなくなった。

その代わり毎日図書館から大量の本を借りてきて夜遅くまで読んでいた。

一週間、二週間と過ぎていくうちにエストの眼の隈はひどくなっていくようになったがオズカーにはなにもできなかった。

しかし、オズカーはエストばかりに気を使ってはいられなくなった。

少しの間止んでいたグリフィンドールの生徒の襲撃が再開されるようになったからだ。

グリフィンドールの生徒の数は増えていて、オズカーは段々逃げきれるのが難しくなってきた。

「ステューピファイ!! 麻痺せよ!!」

しかも、前よりも唱えてくる呪いが過激になってきた。今もグリフィンドール生八人ほどに追われて空き教室に逃げ込んだのだった。

「おや、ドロホフ。なにやらピンチみたいですね?」

「ムーデイか」

空き教室には待つてましたみたいな顔をしたクラリーナが座っていた。

「今なら由緒正しき闇祓いの家の娘。クラリーナ・ムーデイが助勢してあげましょう」

「結構だ」

そう言つてオズカーは教室から出ようとしたがクラリーナに止められた。

「呪文を相手に撃てないあなたがどうやって八人から逃げ切るんですか? 闇の魔法使いの考えはわかりませぬね」

「放っておけ」

オスカーはクラーナが何を考えているのかわからなかったがろくなことにならない気がしたのだ。

「別にタダでしてあげようってわけじゃないですよ？ 助ける代わりにあなたにはしてもらおうことがありますから」

クラーナはそれだけ言うと教室の外へ出ていった。

「ルーモス・マキシマ!! コンフリンゴ!! 爆破せよ!!」

目くらましに呪文を使った後、クラーナはなんの容赦もなく校舎を破壊した。

轟音とともに廊下が天井から破壊され、空が見えている。

「ほら、何してるんですか？ 逃げますよ、フィルチが二、三秒でやってくるでしょう」

「やっぱりお前マッド（頭おかしい）だろ？」

オスカーはこの女は敵に回したくないと思った。

「はあ？ せっかく助けてあげたのになんていいいようなんですか？

これだから死喰い人の息子は」

とりあえずクラーナについて逃げる。管理人のフィルチに捕まればグリフィンドール生に捕まるよるも厄介なことになるかもしれないからだ。

いくつか階段の上り、廊下や通路を通りすぎた。

「うーんと、この辺のはずなんですよ」

「おい、どこに連れていこうって言うんだ？ この辺には何にもないはずだろ？」

そうここには大きな壁があるだけのはずで、それ以外になにもない場所のはずだった。

エストと一緒に大まかではあるが城の構造はだいたい理解していたが何も無い場所のはずだった。

「ええ、私もプルウエットに聞くまでは半信半疑でしたけどね」

そうクラーナが言うとも目の前の壁に巨大な扉が現れた。

「あったり、なかったり部屋、必要の部屋、色んな呼ばれ方をしていますが、少なくとも必要な時に現れる部屋って意味では共通しているですよ？」

クラリーナはオスカーを見てニヤリと笑った。

「少なくともホグワーツは貴方にこの部屋が必要だと思っ
ているみたいですね」

巨大な扉を開くと中はまるで闘技場？ のような構成になっ
ていた。

少なくともオスカーはこんな場所を見たことはなかつた。

「おや、これは立派な決闘場ですね、保護呪文までかけられて
いるじゃないですか」

何やら青い泡のようなものが闘技場のステージ部分にかかっ
ている。

「プルウエット、貴方がご所望のドロホフを連れてきましたよ」

「クラリーナ、ありがとうね」

そしてそのステージの上にエストが立っていた。

オスカーは困惑しながらもステージの上に足を運んだ。

エストは杖をこちらに向けて一礼した。

「私、エストレヤ・プルウエットはオスカー・ドロホフに決闘を挑
みます」

「私、クラリーナ・ムーデイが立会人を務めましょう」

そう言ってエストはこちらを真っ直ぐに見つめた。

「それで？ まさか正式な決闘を断るなんてことしませんよね？ 臆
病者のドロホフ君？」

クラリーナがオスカーを見てあざ笑う。

オスカーはここで全部終わらせるべきだと思った。

オスカーがエストに決闘で勝てば、エストもオスカーと一緒にい
ることを諦めるだろうと思ったのだ。

「分かった。俺、オスカー・ドロホフはエストレヤ・プルウエットから
の決闘を受ける」

オスカーはエストを真っすぐに見てお辞儀をした。

クラリーナがステージから下がって、決闘が始まった。

エストの顔には深い隈が刻まれていて、この為に色んな準備をして

いたのだろうかわかった。

しかし、オスカーはエストを気遣う余裕などない気がしていた。エストは恐らく同学年で最も魔法に優れた魔女だということは一年生ならば誰でも周知の事実だったからだ。

「グラディウスソーティア 剣よ出でよ」

エストが唱えると五本の剣が空中に浮かぶ。

「エンゴージオ 肥大せよ」

五本の剣がそれぞれエストの体と同じくらいの大きさになった。

「オパグノ!! 襲え!!」

文字通り、巨大な剣がオスカー目掛けて飛んでくる。

「プルウエットは貴方を本気で殺す気で決闘を挑んでいますよ、ドロホフ」

そんなことはクラリーナに言われなくても体と目でオスカーは理解した。

「レデュシオ!! 縮め!!」

「ディセンド!! 降下せよ!!」

剣を縮めて地に落とそうとしたが三本ほどしか通用しない。

残りの二本がオスカーを串刺しにしようとして迫ってくる。

「プロテゴ!! 護れ!!」

剣を盾の呪文で吹き飛ばす。しかし、オスカーは決闘が始まってから全く攻勢にでることができない。

「グラディウスソーティア!! 剣よ出でよ!! ルーパスソーティア!!

岩よ出でよ!!」

「エンゴージオ!! 肥大せよ!!」

エストは今度は浮遊する剣と岩を出現させ巨大化させた。

「ルーモス マキシマ!!」

時間を作るため、オスカーは目くらましを行う。

「っ!!」

「ボンバーダ マキシマ!!」

その間に今エストが出現させたものを爆破呪文で吹き飛ばし、距離を詰める。

遠距離でエストに勝てるわけがないとオスカーは感じたのだ。

「ノラードイグリタス!! 割れよ!!」

しかし、近づく前に地面がエストの呪文でぱっくりと割れてしまった。

はつきり言つてエストは戦慄するほどの呪文使いだった。恐らく五年生くらいまでの上級生ではエストには勝ち目がないのではないだろうか？

ステージの外で見届けているクラーナも啞然としている。

「ドロホフ、降参したほうがいいんじゃないですか？ いくらなんでもここまでプルウエットが強いと思つてませんでした。このままだとほんとにひき肉にされますよ!？」

「クラーナは黙つてて!! 私はオスカーと決闘しているの!!」

「グラディウスソーティア!! 剣よ出でよ!! スクートウムソーティア!! 盾よ出でよ!!」

「エンゴージオ!! 肥大せよ!!」

「オパグノ 襲え!! ロコモーター!!!! 周回せよ!!」

今度は剣と盾が現れ、剣はオスカーを細切れにしようと、盾はエストを守るように周回している。

さらにエストまでの地面はぱっくりと開いており、歩いてはとても越えれそうにない。

だが、オスカーはやはり突っ込んでいくことにした。

「プロテゴ マキシマ!!」

剣の攻撃を強引に盾の呪文で突破する。

「コンフリンゴ!! 爆破せよ!!」

しかし、エストが剣が盾の呪文に接触する瞬間に爆破呪文で剣ごと爆破しようとしてくる。

前転で爆破を避け、強引にエストが作り出した割れ目まで到達する。

「レビコーパス!! 身体浮上!!」

体を呪文で浮かせ、慣性で割れ目を突破する。

「ディセンド!! 降下せよ!!」

「ルーマス・ソレム!! 太陽の光よ!!」

降下呪文で強引に盾を打ち崩し、エストが現れた瞬間に光で目つぶしをする。

「ペトリフィカストタルス!! 石になれ!!」

しかし、光を打ち込んだのと同じ瞬間にエストが全身金縛り呪文をオスカーにぶち当てた。

「なんで最後攻撃するような呪いを打たなかったの?」

「ねえ? オスカー? なんで?」

エストがこちらに歩いてくる。その顔はオスカーがこれまで見たことがないほど激昂している。

「エストレヤ・プルウエット!! 決闘は終わりました! 杖を下げな

さい!」

クラリーナがエストを止めようとステージの上上がるようにしている。

「クラリーナ!! うるさい!! エクスパルソ!! 爆破せよ!!」

エストは金縛りで動けないオスカーの傍の床を吹き飛ばした。

「保護呪文がかかっているって言っても、金縛りしたあと爆破したら死んじゃうんだよ?」

エストは動けないオスカーの胸に杖を当てる。

「どれくらいエストが強いかわかった? オスカー? 今すぐにも

エストはオスカーをバラバラにできるんだよ?」

杖をオスカーの胸に当て、オスカーの眼を真っすぐに見て、エストは泣いていた。

「なんで最後に攻撃呪文を撃たなかったの!? なんで一緒にいちやダメって言ったのにエストを攻撃するのを戸惑うの? 最後に攻撃しければ勝てたかもしれないんだよ? ねえ? なんで? どうして?」

オスカーは自分の行動が結局のところ、エストを傷つけるだけだったことを恥じた。彼女と関わって以来、オスカーは自分の行動を恥じてばかりだった。

「なんでそんなに優しいのに近づくななんて言うの?」

クラリーナがステージの二人にたどり着いた時、エストは杖を下げ、オスカーの胸に顔をうずめて泣いていた。

「ごめん。プルウエット」

「決闘に勝ったんだから、これからはエストだから」

オスカーはエストをプルウエットと呼ぶのを止めた。

みぞの鏡

これまでの日常が戻ってきた。

違う場所があるとすれば、オズカーがエストをプルウエットと呼ばなくなったことだろうか？

他にはグリフィンドール生の襲撃が止まったこともあるだろう。

グリフィンドール生が襲ってきた際にエストがコンフリントゴとボンバーダを乱射し、廊下が大惨事になった後は襲撃がピタツと止んでしまった。

フィルチは続発する校舎への破壊行為に血眼になっている。

遂にはダンブルドア校長が夕飯の席で校舎内での爆破行為は辞めるように告知まで行ってしまった。

その際に明らかにオズカーとエストのいるスリザリンのテーブルを見て言ったのだから、恐らく犯人だとばれているとオズカーは思った。

「ねえ？ オズカーはクリスマスはどうするの？」

談話室で寝転がりながらエストが聞いてくる。

「家に戻っても誰もいないし、監視の闇祓いに迷惑かけるだけだからホグワーツにいるけど」

そう、ドロホフの家に戻っても誰もいないし、監視のためにわざわざ魔法省から闇祓いがこないといけないのだ。

「じゃあ、ハグリッドの小屋にクリスマスはいかない？ チャーリーは隠れ穴に帰っちゃうみたいだけど、クラーナは戻らないらしいから」

数年ぶりに闇祓いと屋敷しもべ妖精以外の連中と一緒にクリスマスを過ごせるかもしれないとオズカーは思い、気持ち少し明るくなった。

クリスマス休暇がやってきた。恐らく数年ぶりにオズカーは同世代の気の張らないでいい仲間とクリスマスを過ごすことができた。

スリザリンの寮にはエストとオズカー以外ほとんど人がおらず、い

つも気にしている他人の視点からも解放された。

クリスマス・イブの夜。オスカーはエストと談話室に放置されていたゴブストーンセットで遅くまで遊んだ後、悩みもなく眠りについた。

朝起きると、やっぱりここ数年は期待なんてしてなかったプレゼントが置かれていた。

中身は屋敷しもべ妖精からのオスカーお坊ちやま様へと書かれた包みに入った羽ペン。

オスカー・ドロホフ様へと達筆な字で書かれた包みの中身は万眼鏡だった。後ろにあった署名からして、見張りの闇祓いかららしい。

あとはエストから届いた大量の百味ビーンズ。自分もエストに百味ビーンズを送っていたから完全に同じ発想をしてしまったとオスカーはショックを受けた。

あとはO・Dと書かれた、銀色に緑色の蛇が刺繍されたセーターが入っている。包みにはオスカー・ドロホフ様へとしか書いていない。いったい誰からのものなのか？

オスカーは頭をひねりながら談話室へと降りていく。

すでに談話室ではエストが寝転がりながら百味ビーンズをかじっている。

「オスカー、メリークリスマス、百味ビーンズありがとうね」

「ああメリークリスマス、お前もな」

オスカーが持っている緑色のセーターを見てエストはハツとなる。

「オスカーにも届いたんだね？ それは多分モリーおばさんからだよ」

モリーおばさん？ 確かよくエストやチャーリーの話題に出てくる人物……、プルウエット家からウィーズリー家に嫁いだチャーリーの母親のはずだ。

つまり、父親のアントニン・ドロホフが殺したプルウエット兄弟の姉妹にあたる人物のはずだった。

「俺にクリスマスプレゼント？」

オスカーは自分にこのセーターを着る資格があるとは思えなかつ

た。

一体どんな気分で兄弟の仇の息子に服を編めるというのだろう。

「モリーお婆さんは優しいからね、ほらオスカー」

エストはオスカーからセーターをひったくって無理やり着せてしまった。

セーターは何か不思議な温かさがあるとオスカーは思った。

「これでおそろいだね」

確かにエストも同じ蛇のデザインが入った、銀と緑色のセーターを着ていた。

朝食を取りに行くとき大広間はいつもと違う装いだった。

クリスマスなのでクリスマスツリーやその他の飾りつけがされているのもそうなのだが、残っている生徒がほとんどいないのか、寮も教員も区別なく同じテーブルだった。

「あれ？ クラーナがいないけどどうしたんだろうね？」

確かにホグワーツに残っているはずのクラーナの姿が見えない。

「死喰い人でも探しにいったんじゃないのか？」

「まあ寝坊してるだけかもしれないね、クリスマスプレゼントが楽しみで寝れなかったとか」

あの女の子がそんな玉だとはオスカーには思えなかった。

とりあえず、教員四寮合同の騒がしい朝食は終わったが、少なくとも朝食の間、クラーナの姿は見えなかった。

「うーん、クラーナはグリフィンドールだから寮まで見に行けないもんね」

「スリザリンの生徒がグリフィンドール寮に入り込んだら大騒ぎだろうな」

ハグリッドは先ほどの朝食でワインをひっかけていたので、今日は小屋にいつでも駄目だろうと思い、二人はスリザリン寮に向かっていった。

「そっぴや昨日ハグリッドの小屋でも見なかったな」

クリスマス休暇に入ってから毎日のようにエスト、オスカー、ク

ラーナの三人はルーンスプールの世話をしにいつているのだが、なぜか昨日はクラーナの姿がなかったのだ。

「うーん？ ゴブストーンにでもはまっちゃったのかなあ？」

クラーナにはゴブストーンよりもあのバカでかい杖を振り回して魔法使いを吹き飛ばしている方が似合っているとオスカーは思った。

スリザリン寮に帰る途中でオスカーはトイレに行きたくなり、先にエストに帰ってもらった。

凍り付くような寒さの中、トイレを終えてスリザリン寮に戻る途中、特徴的な杖を持った女の子の後ろ姿が見えた。

オスカーは疑問に思った。朝食も食わずにこんなところをウロウロしている？ そもそもクラーナの所属するグリフィンドール寮はスリザリン寮とは反対の場所にあるはずだ。

オスカーはちよつとした好奇心に囚われ、クラーナの後をつけることにした。

クラーナはなにやらフラフラとしていた。何かおかしい。そもそもいつものクラーナならばオスカーの尾行くらいには気付きそうなものなのだ。

すぐにでも後ろ向いてこちらに杖を向けて、「油断大敵!!」「なんだドロホフですか？」とか言ってきたきそうな気がオスカーにはしていた。明らかにクラーナ・ムーデイの様子はおかしかった。

しばらく尾行を続けるとクラーナは古い教室のような部屋に入っていた。

壁のように椅子と机が積み上げられ、ごみ箱や黒板まで逆さにして置いてある。

なんとなくすべてが上下反転して見えそうな教室だった。

その教室のはしに部屋にはそぐわない、天まで届くような、金色の見事な鏡が置かれている。

クラーナはその鏡の前に座り込み、なにやら必死で鏡に見入っている。

オスカーがクラーナの真後ろまで来ても後ろのオスカーには気づ

かなかった。

鏡には上の方に字が彫つてある。

『すつうを みぞの のろっこ のたなあ くなはで おか のたなあ はしたわ』

とりあえず、クラリーナに声をかけてみることにした。

「ムーディ、朝食や小屋にも来ずになにやってるんだ？」

クラリーナはこれまで見たこともないような反応。オスカーの声にビクツと反応し、よろよろとこつちを向いた。

いつも自身満々のクラリーナの顔はどこかやつれており、目には隈が縁どられている。

「なんだ、ドロホフですか、驚かさないでください」

いよいよおかしい。いつものクラリーナのならば何かここでオスカーを煽るような言動をするはずなのだ。

自分がびっくりしているところを見られるのは恥だと思うはずだ。

それをごまかすような言動をとるはずだとオスカーは思った。

「私の様子がおかしいと思ってるみたいですね、ドロホフ。あなたもこの鏡を見れば分かりますよ」

そう言つてクラリーナは鏡の前からどいた。

そこに写っているのは自分の姿だった。ただし、ある事件が起こる前の、例のあの人がハリー・ポッターに倒される前の、今よりももっと幼い自分の姿が映っている。

それも一人ではない。オスカーと同じ髪色をした優しそうな女性と自分の同世代くらいの女の子が一緒に写っている。

オスカーの眼は鏡に釘付けになった。おかしい、あり得ない。彼女はもういなくなつたはずだ。

物理的にも、精神的にも、もう何も残っていないはずなのだ。

あり得ない。あり得ない。オスカーは思わず手を鏡に伸ばした。

鏡の冷たい感触が伝わってくる。鏡の中の二人は悲しそうな顔をした。

「この鏡はなんなんだ」

鏡の中の幼い自分が自分と同じ言葉を言っているのが分かる。鏡

の中の二人が一層悲しそうな顔をする。

「上に刻まれた文字を見れば分かりますよ、鏡文字になっているだけですから」

もう一度、鏡の上にかかれた文字を見る。その間もオスカーは鏡の中の二人から目を離すことができなかった。

『すつうを みぞの のろっこ のたなあ くなはで おか のたなあ はしたわ』

「私は貴方の顔ではなく、貴方の心の望みを写す」

俺は年をとつても、エストとホグワーツで出会つて、生活をしてああの二人を忘れられないっていうのか？

オスカーの心の中で自分に対する怒りが湧いてきた。

「ドロホフ、貴方が何を見たのかは知らないですけど、この鏡に魅入られるのはきつと必然なんだと思います」

クラーナもまた、鏡から目を離すことができないようだった。恐らく彼女は昨日からずっとここにいるのではないだろうか？ 目の隈と寒さに震える彼女の姿が目止まる。

クラーナの姿を見た後、自分の体に視線をずらすとさつきエストに着せられたセーターが見えた。

不思議なあつたかさを持つセーターは親の仇の息子に充てられたセーターだ。

このセーターを編んだ人は、今、鏡を見ている自分よりもっと多くの困難を乗り越えてセーターを編んだ気がした。

あつたかさは怒りに変わりつつあつた。この鏡はなんて嫌らしいものなのか、望みが純粹であればあるほどきつとこの鏡に魅入られてしまうに決まっている。

クラーナも、普段あんなに精神的な強さを発揮している彼女さえこんな風に魅入られてしまうのだ。

きっと彼女が見ている誰かも鏡の中で悲しい顔をしているんじゃないだろうか？

オスカーはそう思い、さらに怒りが湧いてきた。

「クラーナ・ムーディ。お前はこの鏡の中に何を見ているんだ？」

オズカーは鏡からクラリーナの意識を離そうと考えた。

「何を？ですか？」

クラリーナはやつれた顔でこちらを見る。

「簡単ですよ、いつも偉大な闇祓いがどうか言ってますけど、ここに見えているのは、私の後ろにいるのは五体満足で微笑んでいる私の家族ですよ」

クラリーナの顔は鏡の中の二人と同じくらい悲しそうな顔になった。「父も母も姉も、おじいさんもおばあさんも、偉大なアラスターおじさんも、みんな生きていて、五体満足で頭もおかしくならず笑っている姿ですよ」

あのクラリーナ・ムーデイの瞳から涙が流れていた。いつもどんな時も強気の彼女の眼から。

「なのに、笑っているのに、みんな悲しそうなんです。私の望みのはずなのに……」

なおさらオズカーの心は怒りに溢れた。こんな鏡は、人の心を弄ぶ鏡はここで壊すべきだ。そう思った。

「それはクラリーナが強いからだろう。偉大な人間になることじゃなくて、家族を望む人間の方が強いに決まっている」

そう言つてオズカーは杖を抜いた。

「ドロホフ……う？ 何を言つて……！！」

「ボンバ……！！」

くそつたれな鏡を粉々に爆破しようとした瞬間、オズカーの手に凄まじくしわの入った細長い手が置かれる。

「クラリーナ、得難い友人を得たようじゃの」

アルバス・ダンブルドア。ホグワーツの校長にして、恐らく今世紀最強の魔法使いがオズカーの呪文を止めていた。

恐らく目くらまし呪文か何かで隠れていたのだろうが、今の今まで気づくことすらできなかったことにオズカーは戦慄した。

「オズカー、それくらいにしてくれんかの？ この鏡は意地の悪い代物かもしれないが、色々と使い道があるので」

そう言われてもオズカーの怒りは止まらなかった。そもそも、ダン

ブルドアならばクラリーナが鏡に魅入られる前に防ぐこともできたはずだとオスカーは思った。

「本当に得難い友人を得たようじゃの、クラリーナ。彼がいればもうこんな鏡などに惑わされることはないじゃろう」

ダンブルドアがすべてを見通すような目でオスカーを見た。

オスカーは直感的に自分の心が見られているのではないかと思った。

「このみぞの鏡は今日、よそに移す。二人のクリスマスを台無しにして申し訳ない」

少なくともダンブルドアは本当に申し訳ないと思っっているようにオスカーには思えた。

そして、ダンブルドアがみぞの鏡を一瞬だけ見た、その瞬間の表情がさっきのクラリーナや鏡の中の二人と同じもののように思えたのだ。

「さあ、オスカー、クラリーナ、そろそろ戻ってはどうかね？ 今日クリスマスじゃからな、楽しまないといけない」

ダンブルドアは二人に退出を促した。

オスカーは寒さと空腹で震えるクラリーナに肩を貸して歩き出そうとした。

しかし、オスカーに疑問が湧いてきた。

「ダンブルドア先生。質問を一ついいですか？」

「うむ、君には迷惑をかけたからのう。一つだけ許そう」

ダンブルドアはこちらを見て微笑んだ。

「先生が見たものは僕たちと同じだったんでしようか？」

ダンブルドアはまた一瞬だけ悲しそうな顔をして微笑んだ。

「そうじゃの、今は君たちと同じものを見たかもしれん。じゃが君たちと同じ年のころにはみえなかつたじゃろうな」

オスカーにはその言葉の意味が少しだけ分かった気がした。

「じゃあの、メリークリスマスじゃ、オスカー、クラリーナ」

それからしばらくオスカーはクラーナに肩を貸して歩いた。

「もう、このへんでいいですよ」

グリフィンドールの寮が近づいてきたころ、クラーナは自分で歩こうとした。しかし、彼女は一晩中あの教室にいたせいか寒さで震えていた。

オスカーはさつきエストに無理やり着せられたセーターを脱いで、クラーナに無理やり着せた。

「ちよつと!?! なにするんですか!」

オスカーはこのセーターの不思議なあつたかさが今のクラーナには必要な気がしたのだ。

「一晩もくっそ寒いとこにいるのが悪いだろう」

「だからってこんな趣味の悪いセーターを着せる必要はないでしょう!?!」

そう言いながらもさつきより、クラーナの顔色は良くなっている気がした。

「クリスマスプレゼントだ。大事にしろよ」

「銀に緑ともろにスリザリんじゃないですか、しかもOとかどう考えてもオスカーのOでしょう?」

いつもの調子が戻ってきたのでオスカーはもう大丈夫だと思い、スリザリン寮に帰ることにした。

「ドロホフ。私からもクリスマスプレゼントをあげましょう」

何か後ろから声が聞こえる。少なくともクラーナが何か持っているとは思えないのだが。

「私のファーストネームで呼ぶことを許しますよ、さつきは勝手によんでみたいですけどね。オスカー、メリークリスマス」

そう言って、クラーナはグリフィンドール寮へ戻っていった。

三人兄弟

クリスマス休暇が終わって、生徒達が学校に戻ってきた。

オスカー、エスト、クラーナ、チャーリーの四人は相変わらずルースプールの面倒を見るため、授業の空き時間には森のはずれのハグリッドの小屋まで向かっているのだ。

「どうして、オスカーのセーターをクラーナが着てるの?」

「クリスマスプレゼントにオスカーから貰いました。貴方やチャーリーとお揃いとは知りませんでしたけど」

「そういうことじゃないの!　　というかこれだとオスカーだけ仲間外れみたいになっちゃうの!」

エストはプンプンして怒っていて、クラーナとオスカーを交互に見ている。

「オスカーからこれを貰わなかったら私が仲間外れになっていたわけですか、なるほど!」

「あああ、もうそうじゃなくて……　　って?!　　なんでクラーナがオスカーを名前で呼んでるの?」

「クリスマスプレゼントです」

「意味わかんないの!」

どうも、モリー・ウィーズリーからもらったセーターをクラーナに渡したのは良くなかったらしい。

いつもクラーナを困惑させているエストが今回はクラーナの手玉に取られている。

　　とうかクラーナのクリスマスプレゼントはクラーナの名前をオスカーが呼ぶことだった気がする。とオスカーは思った。

「エストが困らされているのは珍しいね」

「確かに、大抵こつちが困惑するからな」

「まあ来年はママにクラーナの分も送ってもらおうように頼んどくよ」

「そうしてもらった方がよさそうかもな」

男子二人が話している間も女子二人は姦しい。この二人が騒がしいのは珍しいと男子二人は思う。

「けどいつの間にクラリーナと仲良くなったんだ？ オスカー？」

「ダンブルドア校長にクリスマスプレゼントを貰ったんだよ、俺とクラリーナは」

「なにそれ！ というかオスカーもクラリーナのことクラリーナって呼んでる！ エストのことはずっとプルウエットって言ってたのに!!」

「まあクリスマスプレゼントだし」

「ええ、クリスマスプレゼントなので」

「絶対おかしいの」

「こんなにハグリッドの小屋への道中が騒がしいのも初めてだった。オスカーはあのクラリーナにあげてしまったセーターのあったかさがなぜか今も感じられる気がした。」

「じゃあ僕のこととチャリーリーでよろしく、オスカー」

「ああ、クリスマスプレゼントだ。チャリーリー」

「もうクリスマスプレゼントってなんなの！ 絶対ずるいもん」

「相変わらずエストがギャーギャー騒ぎながらもハグリッドの小屋についた。」

「チャリーリーが小屋のドアをノックする。」

「ハグリッド。僕らだよ」

「おお、はいつてええぞ」

「ハグリッドの小屋に入ると相変わらずファンクがこちらに向かってくる。なぜかファンクはオスカーによくなついていた。」

「オスカーみたいな闇の魔法使いの卵が犬に好かれるとは面白いですね」

「何に好かれれば面白くないんだよ、それ」

「やっぱり蛇でしょう。そこにいるルーンスプールとかバジリスクとかその辺ですよ」

「その辺に好かれたら『やっぱり闇の魔法使いでしたね、私の眼に狂いはありませんでした』って言うてくるだろお前」

「当たり前でしょう」

「クラリーナは相変わらずオスカーを煽ってくる。名前で呼ぶようになっててもそれは変わらないようだ。」

「なんだ。クラーナはオスカーと仲良くなつたんか」

「そうなのハグリッド、なんかいきなり仲良くなつて怪しいの」

「まあ僕もちよつと怪しいとは思うね」

何か二人には疑われているようだが、オスカーはあの部屋の鏡の話
を他の人にするつもりはなかったし、どうもクラーナも同じ考えの様
だった。

「クリスマスプレゼントです」

「クリスマスプレゼントだ」

二人が鉄壁のクリスマスプレゼントでプロテゴを張ると、エストは
頬を膨らました。

「ほら！ ハグリッドもおかしいと思うでしょ？」

「わっはっは、あんなもんだらう。もともと相性も良さそうだったし
な」

「それはそうかもしれないけど、絶対怪しいの」

「すまんが、エスト、ちよつとアン・カド・イグをなだめてくれるか？」
「うん」

ファンクがなぜかオスカーになついたように、ルーンスプール。ハ
グリッドとエストはアン・カド・イグと呼んでいる蛇は四人の中では
一番エストになついていた。

ハグリッドとチャーリーは悔しそうだったが、動物の考えることな
ので仕方がない。

そもそも名前自体もエストが童話から蛇の頭それぞれにつけて呼
び始めたので、それが大きいのではないかとオスカーは思っていた。

右側からアンチオク。真ん中がカドマス。左側がイグノタスらし
い。ルーンスプールは右側の頭が毒を持つので、童話の中で一番危険
な人物を右側に当てたらしい。

「こいつは口から卵を産むらしいですよ」

「ほんとか？」

「ほんとだよオスカー。ルーンスプールは魔法生物の中で唯一口から
卵を産む動物なんだ。これは凄く興味深いことなんだよ」

チャーリーが目を輝かしながら説明してくる。こうなるとチャー

リーは止まらなくなる。

オスカーは隣のクラリーナに目配せする。

「ハグリッド。なにか手伝うことはあるのか？」

「おお、じゃあ二人位でちよつと外の薪を取ってきてくれるか？ ア

ン・カド・イグは寒さによええんだ」

「じゃあオスカーと私で行ってきますよ」

「ほらー！ やっぱりオスカーとクラリーナは怪しいの！」

チャーリーとエストの追撃を二人は薪でかわした。

チャーリーの魔法生物談義に聞かれると日が暮れてしまうことを二人は知っていたし、さらにそれをハグリッドの小屋でやるとハグリッドも加わって、出歩くのが禁止されている時間ギリギリまで拘束されそうになることも知っていた。

「あの二人の魔法生物バカもほどほどにしといて欲しいモノです」

「それには同意する」

すでに切られた薪を取りに小屋の裏手の森まで向かう。

まだホグワーツは雪の深い季節だったが、薪置き場の周辺は魔法がかかっているのか雪が常に溶けている状態だった。

「貴方の趣味の悪いセーターにエストがあんなに反応するとは思いませんでしたよ」

「俺もあんなにこだわるとは思ってたかった」

「どうかだいたい貴方が人に貰ったプレゼントを他人に渡すのも悪いんですよ」

咎めるように目を細めてクラリーナはオスカーを睨む。だがそもそもオスカーは流石に緑に蛇が刺繍されているセーターを、普通にグリフィンドル生のクラリーナが着てくるとは思っていなかった。

「クラリーナが一晩中鏡を見つめてるからだろ」

「それはそうかもしれないですけど……」

ムムム…… とクラリーナは顔をしかめる。オスカーは前から思っていたのだが、クラリーナは随分と表情に感情がやすいと思った。

「まあ、いいです。じゃあなんか私からもクリスマスプレゼントをあげますよ」

「はあ？ クラーナの名前がどうのこうのじゃなかったのか？」

「あれはあの時はそれしか思い浮かばなかったんです。そもそもあなたの事を私も名前で呼んでますからノーカンですよ」

クラーナは腕を組んでなんでもコイ、という表情で見ってくる。

「じゃあ決闘の練習に付き合ってくれ」

「は？ 決闘ですか？」

「こんどはなんだそれ？ という顔をする。本当に分かりやすいとオスカーは思う。」

「前に俺はエストと決闘して負けただろ。さすがに女の子に負けたままだとアレだしな、でもエストに頼むわけにはいかないだろ」

今度は得心した!! という顔になるクラーナ。

「ふっふっふ。分かりました。任せておいてください。このアラスタールおじさん仕込みの私にかかればあなたを立派な闇祓いにしてあげましょう」

「いや別に闇祓いになりたくて決闘の練習がしたいんじゃないんだが」

これはダメだとオスカーは思った。チャーリーは魔法生物。エストは複雑な魔法や魔法のかかった物品。そしてクラーナは闇祓いとかそういう類のモノ。三人ともそれらのスイッチが入ってしまうと止まらなくなるのだ。

「エストは一年生としては異常なレベルの杖使いですから中々対策には骨が折れそうですけど、私が教えるからには大丈夫ですよ」

「いや、教えるんじゃないって、決闘の練習をしたいんですけど」

「油断大敵!! ですよオスカー。最初は決闘の立ち回りや呪文の有効範囲なんかを基礎として覚えなさいといけません」

油断大敵!! と言うときのクラーナはなぜかオスカーには芝居がかっているように見えた。

「確かにまあそんなのは授業でも習ってないし知らないけど」

「でしょう？ 大丈夫です。ムーディ家には闇祓いの戦闘に必要な教科書やノウハウが一杯ありますからね、それに最悪アラスタールおじさんにふくろうを飛ばせば教えてくれるでしょう」

「いや、マッドアイ・ムーディとかドロホフって苗字だけでアズカバンに送られそうで嫌なんだが」

オスカーの脳裏にはマッドアイ・ムーディとクラーナが二人そろって、吸魂鬼を引き連れオスカーを追い回す地獄絵図が浮かんだ。

「まあとりあえず心配しなくても大丈夫ですよ、あとは場所と時間くらいですけど、場所は必要の部屋でいいですし、時間も大丈夫でしょう？ ハグリッドの小屋にいる時に決めればいいですし」

「確かに、まあよろしく頼む」

「ふっ、破れぬ誓いでもしときますか？」

「断る。俺はまだ死にたくない」

一年生から破れぬ誓いをしないといけないとかどんな学校なのか、オスカーはホグワーツを疑わないといけないと思った。

「そろそろ薪を持って帰りますか、チャーリーも鎮まったでしょう」

「ああ、ロコモーター 薪を運べ!!」

オスカーは薪を魔法で小屋へと持って行った。

「あつ！ やつと帰ってきたの、ほらやっぱり魔法で運んでるし、絶対一人でも大丈夫だったでしょ」

「いや、寒かったし」

「そうですね寒かったです」

「寒い関係ないでしょ!! それ！」

エストはまだオスカーとクラーナを疑っているらしい。

「ハグリッド、どこに薪を置けばいい？」

「ああ、オスカーそこに置いといてくれ」

魔法で運んできた薪をドサツとルーンスプールがいる場所に近い暖炉の横に置く。

ルーンスプールの一番右の頭がジロつとオスカーをにらんだ。

「ほら、アンもオスカーとクラーナが怪しいって睨んでるの」

「いや、どっちかというところとエストと仲良くしてるのが気に入らないんじゃないのか？」

「エストと？ なんで？」

「エストに一番なついてるからな、取られるのが嫌なんだろう」

「なるほどね、アンは頭がいいんだね」

エストが近づくと、一番右の頭が頭を差し出し、それをエストが撫でる。

それを見たほかの頭も我先にと頭を差し出す。そして喧嘩を始めようとするが、エストの顔を見て静かになった。

「ルーンスプールを懐かせるのはかなり難しいんだけど、エストは凄いな」

「まあ確かに、それにしてもほんとにあの頭同士は仲良くないんだな」

「うん、僕も本には書いてあるのは見たけど、ほんとに仲が悪くなるんだね」

あのルーンスプールはどうもエストが見なくなると喧嘩を始めるらしい。そしてエストが見ると怒られたくないのか喧嘩を止めるのだ。

「あいつらとバジリスクを掛け合ったら、三倍目で殺せるようになるんですかね」

「お前の発想の方が俺よりよっぽど闇の魔法使いのそれじゃないのか」

「失礼な、私は闇祓いの卵として最悪の想像を常にしてるだけです」
「確かに、バジリスクは鶏の卵から生まれるけど、ルーンスプールの卵をヒキガエルの下で孵化させたらどうなるんだろう」

チャーリーがクラーナのあほな心配を本気で考え始める。

「あいつら仲悪いんだから、三頭ともバジリスクになったらお互いにらみ合って終わりだろ」

「二匹が相打ちになるんだから頭は一つのこるんじゃないですか？」

「それじゃ結局ただのバジリスクじゃないか」

その後もチャーリーが何か考察を続けていたが、オスカーはそんなもの創り出したら、それこそアズカバン行は逃れられないと思っ

た。
「それで結局こいつらはどうするんですかハグリッド？　いつまでもここにはおけないでしょう？」

「それはそうなんだけど、せめてあつたかくなるまではここに置いてやりてえんだ」

「確かに、アン・カド・イグは寒いのが苦手だもんね」

「僕もそれがいいと思うよ、ハグリッド。冬の間にはルーンスプールの保護してもらえる場所を探しておこうよ」

「おう、四人ともありがとうな」

ハグリッドは四人に感謝しているが、そもそも保護してもらったときにどうやって手に入れたと言い張るつもりなのか、オズカーには分からなかった。

水の妖精

青い泡の様な膜で覆われた部屋の一角でクラーナとオスカーは杖を振っている。

「インペディメンタは妨害呪文です。相手の動きを止めたり、魔力を多く込めれば吹き飛ばして呪文を中断することができます」

クラーナが青い膜の中を飛んでいる小鳥に呪文を唱えると、小鳥はポトリと地面に落ち動かなくなる。しかし、しばらくたつとまた立ち上がって飛び始めた。

「オスカーは盾の呪文は使えるみたいですから、攻撃呪文としてまず妨害呪文を覚えてはどうでしょうか」

「確かに、この呪文なら相手を傷つけずに止めることができるのか」

「そうです、相手の動きを止めるなら、失神呪文か全身金縛り呪文、そしてこの妨害呪文が有効です」

そういつて今度は別の呪文を飛び交う小鳥に打ち始める。

「ステューピファイ 麻痺せよ!! ペトリフィカストタルス!! 石となれ!!」

今度の呪文が当たった小鳥は完全に動かなくなった。

「しかし、失神呪文は当たり所が悪いと最悪、あの世行きになる可能性もあるそうですから、最初は妨害呪文と全身金縛り呪文を覚えるべきでしょうね」

「武装解除呪文はどうなんだ?」

「アラスターおじさん曰く、相手が杖を二本持ってたらどうするんだ? ええ? だそうです」

「なるほどな」

オスカーとクラーナは約束通り、決闘の練習を必要の部屋でし始めていた。

クラーナのマッドアイ仕込みの戦闘術をマスターするために、オスカーはまず、基本的な呪文を覚えることから始めていた。

しばらくは呼び出した小鳥や、小動物を目標として呪文の練習を行う予定だった。

「しかし、前にエストにけがをさせたグリフィンドールの生徒が言っ
てましたけど、オスカーが問題を起こしたら退学になるっていうのは
本当なんですか？」

妨害呪文で小鳥とアナグマを停止させていたオスカーが、クラリーナ
の方を振り向かずに答える。

「本当なんじゃないか？　そもそも俺の Hogwartz 入学はダンブルド
ア校長と見張りの闇祓いが推薦しなかったらこんな簡単にいかな
かっただろうしな」

また動き出したアナグマを今度は全身金縛り呪文で動けなくする。
「そうですか、忠告ですけどこの前のあの連中、懲りずにまたやってく
ると思いますよ」

オスカーの脳裏には以前の襲撃で傷ついたエストが浮かぶ。思わ
ず呪文に力が入り、妨害呪文を食らった小鳥が防護呪文の青い泡まで
吹っ飛んでいった。

「なるほどな、しばらくはこの練習を口実にしてエストと一緒にハグ
リッドの小屋に行かない方がいいみたいだな」

オスカーがまた妨害呪文を唱えるが、アナグマも小鳥と同様に青い
泡まで吹き飛んでいった。

クラリーナが冷めた目で小動物が吹き飛ぶ様子を見た。

「はあ。とりあえずアホのファッジに気を付けた方がいいですよ、あ
んななりと脳みそでも五年生で魔法省の大物の甥ですから」

「ファッジ？」

オスカーは練習にならないとばかりに頭を掻きむしってクラリーナ
の方を振り向いた。

「あなたを襲ってた大柄な上級生ですよ、ルーファス・ファッジ。魔法
事故惨事部の長、コーネリウス・ファッジの甥に当たりますね」

オスカーの頭の中にグリフィンドールの生徒を引き連れて歩いて
いた大柄な上級生が思い浮かぶ。

前回、エストに直接的にけがを負わした相手だと思いだした。

「そいつを聖マングォ送りにしたら退学は間違いなさそうだな」

「あなたはアスカバン送りかもしれないですね」

クラーナはなにやら楽しそうに笑ったがオスカーは面倒な相手だ
と思った。下手をすれば下らない呪いでさえファツジに当てただけ
で、オスカーの進退が怪しくなるからだ。

「まあ今は呪文を覚えて戦闘方法を学ぶことですね、備えあれば憂い
なし、油断大敵!! ですよオスカー」

青い泡の傍で気を失っている小動物の気を杖で戻しながらクラ
ナがそう言った。

「オスカー、それじゃあそろそろお暇しますか」

「ああ、チャーリー、エストがルーンスプールに乗って城に行かないよ
うに見張つといてくれ」

「わかったよ」

ハグリッドの小屋でのルーンスプールを世話の最中、オスカーとク
ラーナは呪文の練習の為、早めに抜けようとしていた。

「オスカーとクラーナは絶対怪しいもん!!」

「だからこの闇の魔法使いの卵は貴方に負けたのが悔しくて、決闘の
練習をしているって言ってるじゃないですか」

「決闘の練習ならエストでも教えられるし」

「それじゃあ何時までたってもオスカーは貴方に勝てないじゃないで
すか」

「うう…… 勝てなくてもいいでしょ?」

「エスト、それはオスカーの男としてのプライドがあるんだと思うけ
ど」

「むう、オスカーはクリスマスからいきなりクラーナと仲良くなりす
ぎなの」

エストが意気消沈したせいでルーンスプールがオスカーを睨んで
くる。どうもこの蛇は完全に自分を敵として認識したようだオス
カーは思った。

「じゃあハグリッド、また明日も来ますね」

「おお、クラーナ、オスカー、また来いよ」

ルーンスプールがプシャアプシャアと鳴いてエストの気を引こうとしているのを聞きながらオスカーとクラーナは必要の部屋へと向かった。

校庭を越え、城の中を進んでもグリフィンドールの生徒が襲撃をしでくる様子はなかった。オスカーは少し息をついた。

最近、クラーナの忠告通り、グリフィンドールの生徒がまたちよっかいをかけてくるようになっていたのだ。

しかし、必要の部屋がある階にたどり着き、現れた部屋のドアを開けようとした瞬間、ドタドタドターンと何かが転がり落ちるような音がした。

「何者ですか!!」

クラーナが音の方向へ杖を向ける。

「いったあ…… あっ?! ヤバ…… バレちゃった」

階段の下でオスカーと同じくらいの年の女の子がうずくまっている。ケバケバしいピンク色の髪には見覚えがなかったが、その顔や声には覚えがあった。

「あなた、ハツフルパフのニンファドーラ・トンクスでしょう? なぜ

私たちをつけていたんですか?」

「えっ? いや、その、なんといいですか……」

顔がはつきりと見え、クラーナが名前を呼んだことで誰なのかオスカーにもはつきりと分かった。

組み分け前に髪の毛の色を十分ごとに変えたりして、目立っていた女の子だ。確か何度か授業でも一緒になっていたはずだ。

「あなたの身内がこの闇の魔法使いの卵の親に殺されたなんて話は聞きませんが、何用ですか?」

「やゝ その何と言いますか」

「はつきりしたらどうですか!!」

「うっ…… だってみんながムーディとドロホフは怪しいっていうから、尾行してはつきりさせようと思ったんだけど」

クラーナが眉を吊り上げてトンクスを詰問する。しかし、オスカーにはこのトンクスが何か悪意を持って二人をつけていたようには思

えなかった。

「なんですか怪しいって?」

「だって、ドロホフとプルウェットはクリスマス前に喧嘩してて、クリスマスが過ぎたらなんかムーデイとドロホフと一緒にいるようになったから、みんなムーデイがドロホフをプルウェットから奪ったんじゃないかって言うんだもん」

「な…… なんですかそれは!? 私がこのアズカバンに送られそうな顔をしている男とどうにかなるとでも?」

クラリーナが顔を赤くして青筋を立てている。オスカーはクラリーナがオスカーを表現するとき闇の魔法使いとか、アズカバンとかつけないのはそろそろやめてくれないかなと思った。

「だって今も人気がない場所に一緒に向かってたし、そのセーターもスリザリンのデザインにオスカー・ドロホフのイニシャルが入ってるでしょ?」

「う…… それはまあ色々あるんですよ!! とにかく。私とオスカーがどうにかなってるとか、エストからオスカーを奪い取ったとかそんな事実はありません!!」

「じゃあいったいこんな場所で何してたの?」

最近エストをおちよくれるようになっていたクラリーナが珍しく劣勢に立たされているなどオスカーは思った。

「オスカー!! 貴方からこのアホのトンクスに説明してください!!」

「いや、アホってな…… 部屋の中を見せればわかるんじゃないの?」

「部屋の中? って言うか、そこってなんもない壁じゃなかったっけ?」

トンクスはようやく必要の部屋の扉に気づいたのか目を丸くしている。

「仕方ないですね、トンクス、貴方も必要の部屋に入れば分かりますよ」

「必要の部屋?」

クラリーナが扉を開けるといつも練習に使っている必要の部屋が現

れる。

青い泡の保護呪文のかかったスペース。呪文学、変身術、闇の魔術に対する防衛術に関する本が入った本棚。かくれん防止器や敵鏡、うそ検知器といった防犯用の魔法具。

いつ見ても魔法による戦闘を学ぶためにはこれ以上無いと言えそうな部屋だった。

「ワアーツ！ なにこれ？ こんな部屋がホグワーツにあったの？」

「あつた、というのは語弊があるでしょうね、現れると言った方がいいでしょう」

「現れる？」

「この部屋は本当にやりたいことがある人に沿った部屋になるらしい」

「本当に？ すげー！！」

トンクスは部屋に入るなり色々なものに手を伸ばし始め、かくれん防止器やスニースコープをひっくり返していた。

クラーナがそれを白い目で見ている。

「で？ 二人はこの部屋で何をしてたの？」

「何って、女の子にも勝てないオズカーを鍛えてるんですよ」

トンクスが何をいつているのか分からないという顔でオズカーを見る。

「この男はグリフィンドールのアホどもに襲撃されてたわけですけど、それをかんがみて自分の傍にいとエストを傷つけるからと言って彼女を遠ざけてたわけです」

「クリスマス前の喧嘩っていうのがそれなのね」

「それでエストレヤ・プルウエットはこの根性なしのオズカーに決闘を挑んでボコボコに打ちのめし、私の方が強いから傍にいろつて言っただけです」

「わあああ、プルウエットってカツコイイわね」

オズカーは二人の話を聞いて段々顔が赤くなってきた。

「で、女の子にボコボコにされたオズカーは強くなるうと思つて私に泣きついてきたわけです」

「プルウエットを守る為ってことでしょ？ ドロホフもカツコイイ」
オスカーは自分の顔がさらに赤くなったと思った。

そもそも決闘の練習を頼んだのはクラリーナがクリスマスプレゼントを要求しろと言ったのが始まりじゃないのかとオスカーは思う。

「ねえ？ 私も二人の練習に参加していい？ こんな面白そうなことやってみたいと思うに決まってるじゃない」

「ええ…… 練習にトンクスがですか？」

「あれ？ やっぱりドロホフと二人きりがいいってこと？」

「なんでそうなるんですか!! 貴方は授業でも色々ドジをやるじゃないですか!! 決闘の練習でそれがでないか心配なんですよ!」

「ちよつとそれはひどくない？ いくら私がドジをやるからって、ムーデイやドロホフを決闘にかこつけて細切れにしたりはしないと
思うんだけど」

「まあ俺はなんでもいいけど」

「さつすがドロホフ、カツコイイよ」

「なに調子いいことを言ってるんですかこの女」

クラリーナとトンクスはワーワーギャーギャーと言いつけているので、オスカーは動物を呼び出し呪文の練習を始めた。

ここまでの練習はうまくいっており、人間大の動物でも妨害呪文、失神呪文、全身金縛り呪文の効果を出すことに成功していた。

「ねえ、ドロホフちよつと待ってよ」

「なんだ？ トンクス」

「なんだって、私たちがまだ自己紹介してないでしょ？」

「そうですね、この女自分から入れてくれとか言っつて自己紹介もしてないです」

確かにトンクスは目立つので知ってはいたが、お互いに自己紹介をした記憶はないとオスカーも思った。

「私はニンファドーラ・トンクス、ハツフルパフの一年生よ。ニンファドーラなんてばかげた名前じゃなくてトンクスって呼んでね」

トンクスがこちらにウィンクしながら名乗る。

「オスカー・ドロホフだ。オスカーでもドロホフでも好きに呼んでく

れ」

「クラリーナ・ムーディです。私も好きに呼んでもらっていいですよ、ニンファドローラ」

クラリーナがにやりと笑ってニンファドローラとトンクスを呼ぶと、トンクスの顔に青筋がたつ。

「へえ、やっぱりクラリーナはオスカーとの二人の時間が邪魔されるのが嫌だと思ってるのね」

「なんですかそれは!! しつこいですね」

やっぱりこの二人は相性が悪いのだろうか？ エストとクラリーナの組み合わせでもここまでうるさくはないとオスカーは思う。

「なんでってこんな顔してるわよ、クラリーナ」

そう言ってトンクスは目をぎゅつとつぶって鼻をつまんだ。

するとクラリーナそっくりの顔と髪の色になった。

「あなたやっぱり七変化なんですね、というか人の顔になるのはやめてください」

「七変化？」

オスカーは聞きなれない言葉だった。

するとクラリーナそっくりの顔でトンクスがオスカーに答える。

「つまり、外見を好きなように変えられるのよ」

能力には感心したが、クラリーナの顔でトンクスの声が聞こえてくるのは何か気持ち悪いとオスカーは思った。

「七変化はパーセルタングとかと一緒に遺伝性の能力です、非常に珍しい能力ですけど自分の顔に変わられるのはむかつかますね」

オスカーは羨ましい能力だと思った。常に違う顔をしていけばグリフィンドルの生徒達をまくことだって容易だと思えたからだ。

「便利な能力だな、誰かのふりをすれば逃げるのは簡単そうだし」

「まあ確かに能力は凄い便利ね、こんな風にクラリーナをおちよくれるし」

そういってトンクスはクラリーナの顔のまま必要の部屋を再度物色しだす。

「くっそむかつかますねあの女、でもトンクスに協力して貰えばグリ

フィンドールのあほどもをなんとかできるかもしれない」
本物のクラーナはもう一人のクラーナを見て、何かを思いついたと
いう顔をした。

無言呪文

雪が解け始め、春が近づいてきた。ハグリツドの小屋にいるルーンスパールはもう小屋の中には入り切りそうにないほどの成長をしていた。

またルーンスパールの世話をするメンバーにトンクスが仲間入りしてからもう二ヶ月以上がたっていた。

「スタージスがね、魔法生物規制管理部のOBに知り合いがいるんだって、その人はスキヤマンダーさんの同僚だったらしいんだよ」

「スキヤマンダーって、ニユート・スキヤマンダー？ 幻の動物とその生息地の？」

「うん、その人ならルーンスパールがいつぱいいるブルキナファソにも顔がきくらしいの」

「まあその人にまかせるのが一番いいでしょうね、こいつらもう一月たったらこの小屋ごと丸呑みにしそうですから」

ルーンスパールは今プシュー、プシューといって大量のネズミや何かわからない肉を食べているが、狭い小屋に閉じ込められているストレスなのか、エストがないときはお互いの首を攻撃し合っているらしい。

それを止めているせいなのか、ハグリツドの顔や腕には最近生傷が絶えないようだ。

「その人っていつ来るの？ 二か月後とかだったらクラーナの言う通りにこの部屋ごと私たち食べられちゃうんじゃない？」

トンクスがルーンスパールを見上げながら言う。

「スタージスがふくろう便を送ったら、二週間後に準備して来てくれるって、返ってきたって言ったの」

「アン、カド、イグ、ごめんなあ、俺が面倒を見切れないばかりに……」

ハグリツドはルーンスパールの方を見て涙目になっているが、ルーンスパールの方はプシュー、プシューと言って威嚇しているようだ。

そもそもこの蛇はエスト以外に全く懐くそぶりがなかったとオス

カーは思う。

「ハグリッド、仕方ないよ、ルーンスプールにとつてはイギリスは寒すぎるし、なんか書物よりも凄いい速さでおつきくなっているからね」

チャーリーがハグリッドを励まそうとしている。確かにチャーリーの言う通り、幻の動物とその生息地に乗っていた大きさよりもはるかにルーンスプールは大きくなりつつあった。

「チャーリーたちもありがとうな、こいつも多分、みんなのことを親だとおもっちゃうよ」

エスト以外の四人はそれはないなと顔を見合した。現に今も威嚇されている。ハグリッドはヒックヒックと涙目のまま、小屋の外にルーンスプールのエサを取りにいった。

「まあルーンスプールはどうにかなりそうですね、そろそろ私たちは練習に向かいますか」

「ボス、了解です!!」

トンクスはそう言った途端、オスカーの顔を見ながら自分の鼻をつまんで顔を変えた。

するとそこにはオスカーそっくりの顔になったトンクスの姿があった。

「いつ見てもオスカーが二人いるのにはなれないの」

「当事者の俺はもつとなんか気持ち悪いな」

「トンクスの七変化はいつ見ても凄いな」

みんながその姿に口々に意見を言う。

トンクスがオスカーの顔でクスクス笑う。

「じゃあ先に出てクラリーナとデートしてくるわ」

トンクスがクラリーナの肩に腕を回す。

するとその腕をクラリーナが振り払って叫ぶ。

「その顔でデートとか言うの止めてください!! さぶいぼが立ちますよ!!」

「じゃあオスカーはしばらくたってから来てね?」

「ちよつと、その腕を回すの止めてください!! しつこいですよ!!」

二人がまたギヤアギヤア言いながら外へ出ていった。

「やっぱり三人はずるいの、なんか三人とも楽しそうだし」

「仕方ないんじゃない？ グリフィンドールの談話室じゃ、ファッジがオスカーを捕まえてやるとかなんとかずつと言ってるからね」

「まあルーンズプールをなだめれるのはエストだけだしな」

「それはそうだけど、なんか仲間外れな感じなの」

そう、ファッジが旗頭になってオスカーを捕まえようと最近、グリフィンドールの生徒は躍起になっている。

それを回避するためにトンクスが七変化でオスカーに化けて囷となっているのだった。

オスカーは内心、トンクスとクラリーナの事が心配ではあったが、当の二人はファッジを困らせることが楽しくて仕方ないようだった。

「まあそろそろ行ってくる。ルーンズプールの方はよろしく」

そういつてオスカーはハグリッドの小屋を出た。必要の部屋までの道中にはいくつか遠回りして行くことでグリフィンドールの生徒と出会うことはなかった。

途中、フィルチの飼っている猫、ミセスノリスにつけられて面倒ではあったが特にオスカーが規則破りをしているわけではないはずなので無視した。

必要の部屋に入るとまた二人がギャアギャアと言っている。

「だから、その顔でベタベタするの止めろって言ってるじゃないですか!! だいたいオスカーの顔になるのは途中まででいいという話だったでしょう!!」

「でもそれじゃあ面白くないでしょ？ あの仕掛け階段に挟まったファッジの顔は傑作だったわね」

「ファッジの顔は最高でしたけど、貴方がオスカーの顔でファッジを仕掛け階段にはめたせいで多分、フィルチがオスカーをマークしてますよ」

「なんで？ 校則を破ったわけじゃないでしょ？」

「あの後、切れたファッジが無茶苦茶に呪文を撃って肖像画が焼けてましたから、フィルチが飛んできてたんですよ」

「あ、それでファッジが捕まって、フィルチにオスカーの名前がで

るって言うことね」

オスカーは自分の顔が悪用されるということが恐ろしいことだと認識した。さっきのミセスノリスのマークは二人が話していることが原因だったのだろう。

「それでさっきミセスノリスに追っかけられたのか」

「あ、やっと来ましたね、ほらオスカーも来たんですからその顔止めてください」

「あちやあ、完全にマークされてるみたいね、ごめんねオスカー」

そういつてトunksは鼻をつまんで今度はクラリーナの顔になった。

しかめっ面のクラリーナとニコニコ笑っているクラリーナが並んでいるのは何とも言えない奇妙な感じだった。

「ごいつほんとに懲りませんね、まあとりあえずごいつは放っておいて、無言呪文についてこれからはやりましょう」

「無言呪文？ それってすごい難しいやつじゃない？」

「当然です、無言呪文は本来ホグワーツではふくろう、O・W・L・試験、つまり五年生の試験を突破した学生だけが履修する内容ですから」

クラリーナの顔はいつもにもまして真剣だった。

「つまり、イモリ、N・E・W・T試験レベルだということですよ」

「そうとう習得するのは難しいってことなのか？」

「ええ、まあこれまで私たちが練習してきた呪文のいくつかはすでにO・W・L・試験を受ける五年生が習得する内容も含まれていましたから、それほど一気にレベルアップというわけじゃないですけどね」

しかし、クラリーナの顔はなにやら難しそうである。

「問題は、これまでは二人に教えるなんてことを言っていましたけど、私もこの無言呪文はつかいこなせるわけじゃないんです」

クラリーナは無言で杖を振ると、柵に置かれていた、かくれん防止器が浮かぶ。

「こういうふうに簡単な浮遊呪文なら、使えるんですけど、これまで練習してきた失神呪文とか炎や水を出現させるような呪文は難しいで

すね」

確かに、これまでは呪文とその言葉によつて明確なイメージがあり、効果を生み出していたのだから、相当に無言呪文というものの習得が難しいことは予想できた。

「でもこの無言呪文つて戦闘だと凄く有利になるつてことよね？」

「ええ、トンクスにしてはまともな意見ですけど、無言呪文はとんでもないアドバンテージを得ることができます。なぜなら相手にはなんの呪文なのかわからないからです」

「呪文を防ぐふうにも、解除しようにも何の呪文かわからないとどうにもならないつてことか」

「そうです、失神呪文にしろ、全身金縛り呪文にしろ、反対呪文がありますけどなんの呪文か分からないと対処のしようがないですから」

三人は無言呪文について学ぶ為、先に教科書の内容を読むことにした。これまでの呪文の練習とは違い、無言呪文が何でどうやって使えるようになるのか理解しないと使えない気がしたからだ。

三人でしばらく六年生の教科書とにらめっこしていると、トンクスが飽きたのかクラリーナの顔でおしゃべりを始める。

「というか無言呪文まで覚えないとエストには勝てないの？ 結構この二か月くらいで色んな呪文を覚えたし、正直私たちのレベルって一年生じゃあ抜けてると思わない？」

「なぜ私の顔でいる必要性があるのかはわかりませんが、確かに私たちのレベルは一年生にしては抜けていると言えるでしょう」

トンクスはクラリーナの顔でほらやつぱりと言わんばかりの顔をする。

「じゃあやつぱり、エストのいないところでオスカーと練習したいだけじゃない？」

「またそれですか!! 違うつて言ってるじゃないですか!! エストは確かに一年生ですけどとんでもない杖使いです。変身術や呪文学でのあの子の実力は貴方もよく知っていますでしょう？」

オスカーとトンクスの脳裏に授業中のエストの様子が浮かぶ。確かにマクゴナガル先生やフリットウィック先生がエストに点数を与

えない授業というのは珍しいと言っていいだろう。

それほど彼女の魔法に対する才能はずば抜けていた。

「普通、一年生どころかN・E・W・Tレベルになるまで、出現呪文を使って決闘をするなんてことは難しいんです。大多数の死喰い人でさえ変身術や出現呪文を使って戦闘する人間はいないと聞きました。なぜか分かりますか？」

「戦闘中に集中しないといけないからか？」

「そうですねオスカー、戦闘中には呪文に集中せず、相手の動きに集中してできるだけ最低限の呪文で相手をやっつけることが理想なんです。そのためのタイムラグがない無言呪文です」

前回、必要の部屋で決闘をした際にエストがいくつもの剣を呼び出して操っていたことを思い出す。

そもそも一年生の変身術では多くの人間はマッチ棒を針に変えるのがやっつとであるし、出現させるというのは非常に難しい芸当であることが予想できた。

「エストはその変身術を使った決闘ができるの？」

「ええ、前回の決闘では複数の剣を呼び出して、肥大呪文で巨大化させてからそれを操って、オスカーをみじん切りにしようとしてましたから」

トunksがヒューと口笛を鳴らす。

「あほのトunksは放っておいて話を続けますけど、エストは多分それらを決闘中に苦も無くできる実力の持ち主です。確実に勝つためには無言呪文で速攻畳みかけることが重要でしょう」

「それか俺が変身術を覚えるってことか？」

「それも手ではありますけど、私もトunksも貴方もマッチ棒を針に変えるのがやっつとじゃないですか？」

「確かにな」

オスカーはエストに教えて貰ってマッチ棒を針に変えるのがやっつとだった。あの巨大な剣や盾を柔らかいスポンジに変えるなんて芸当はできそうにない。

クラリーナのマッドアイ仕込みの戦闘術を覚える方がよっぽどエス

トに勝つためには近道だと思えたのだ。

「でも、エストってその変身術を使った決闘の仕方って誰に教えてもらったんだろ？」

「確かに、エストは図書館に籠ってたし、それ以外の時も寮にも帰らずにどこかで練習してたみたいだったな」

「それは私も疑問でした。一人ではあんな短時間で戦闘方法を確立できるとは思えないです、私がエストに頼まれたのはオスカーとの決闘のお膳立てだけでしたから」

三人でしばらく考えていると、トンクスが思いついたという顔をクラリーナの顔でする。

「スタージス・ポドモア先生じゃない？」

本物のクラリーナがなるほどという顔をする。

「確かにあの口を開けばエストに点数を与える先生ならあり得ますね」

闇の魔術に対する防衛術ではそれこそ、本当にエストが口を開くたびにポドモア先生は点数をあたえていた。

「マクゴナガル先生やフリットウィック先生が決闘の仕方を教えるとは思えないしな」

厳格なマクゴナガル先生が決闘の仕方を教えるとはとてもじゃないがオスカーには想像できない。

「なら私たちもポドモア先生に無言呪文を教えて貰えばいいんじゃない？」

「ポドモア先生にですか？　けどどうやって説得するつもりなんですか？」

またあほなことを言い出したとばかりにクラリーナはトンクスを見る。

「だって、変身術を使った決闘法を一年生の生徒に教えるなんて、他の先生に伝えたら困ったことになるんじゃない？」

「なるほど、闇の魔術に対する防衛術の先生を脅すということですか」「そういうこと」

トンクスとクラリーナは同じ顔をして、ニヤリと笑った。

オズカーは二人の方が自分よりよほど闇の魔法使いに近いな
と思った。

七変化

スタージス・ポドモアは豊かな麦色の髪をした魔法使いだ。

陽気そうな顔に変わらず、授業や話す内容も陽気で明るく、授業自体にも人気があった。

エストやクラリーナの話では、かつて死喰い人と戦っていたダンブルドア傘下の組織の一員でもあったらしい。

しかし、陽気で気がいいのも考え物だとオスカーは思った。

「やあやあ、エスト君にオスカー君、クラリーナ君いらっしやいな、君たちならいつでも歓迎だよ」

「スタージス、前に決闘のこと教えてくれてありがとうね、ちゃんとオスカーに勝てたよ！」

「おや…… それはまあ、オスカー君にはご愁傷様としか言いようがないね」

スタージス・ポドモアは陽気に笑う。やはり、エストに決闘術を教えたのはポドモア先生に間違いないようだ。

「けど、教えてくれて良かったの？ もしかして教えてくれたことをマクゴナガル先生とかに言ったらちよつと不味いことになる？」

「いやあ、まあ一年生の決闘の手伝いを校長の許可なしにやったとなるとちよつと問題になるかもしれないね、でもオスカー君もエスト君もケガはなかったんだらう？」

「少しいだけ、ポドモア先生が目線をそらしたのをオスカーは見逃さなかった。」

「やっぱりね、そんな危険な魔法を一年生に教えるのは問題になるみたい」

「そりや当然でしょう」

そういつてエストの顔をしたトunksは鼻をつまんで、いつものトunksの顔に戻る。

「君はハツフルパフのニンファドーラ君……？」

「ニンファドーラじゃなくて、トunksと呼んでください。というところで、今度は私たちに無言呪文を教えて貰えますか？ エストには内

緒で」

「それはまた一体どういう……」

「簡単なことです、ポドモア先生。マクゴナガル先生達にはエストに決闘術を教えたことは言わないので、我々に無言呪文を教えてほしいということですよ」

「いやあ、それは、なんとというか、さらに問題を増やしているだけというか……」

ポドモア先生はオスカーに助けに来てくれと視線を投げてきたが、それを無視せざるを得なかった。笑っている二人の顔が怖かったのだ。

「いやあ、ポドモア先生を巻き込んだのは正解でしたね」

「本当ね、ポドモア先生が着いてきてくれるおかげで、フアツジをからかえなくなっただけは残念だけど」

「まあ無言呪文のイメージが分かる人に教えて貰うっていうのは正解だったな」

そう、それから三人はポドモア先生に無言呪文の個人教授をして貰っていたが、移動の際にもポドモア先生が随行してくれるので、フアツジを筆頭としたグリフィンドール生の襲撃を躲すことができていた。

「そう言って貰えるのは嬉しいけれども、君たちは本当に優秀だよ、この年で無言呪文のいくつかをマスターするとは」

ポドモア先生は本当に感心しているようだった。ただ、オスカー達だけに教えるのがエストに悪いと思っっているのか、授業ではさらに激しく点数を与えていた。

「僕も、ホグワーツの六年生の時には無言呪文にてこずったものだからね」

オスカーが無言で放った赤い光線がアナグマを打ち抜くとアナグマはピクリとも動かなくなった。隣ではクラーナやトンクスが同様に光線を無言で出している。

「エスト君も含めて今年の一年生は本当に豊作だね」

そういつてうんうんと頷いている。

「ポドモア先生、そろそろルーンスプールを迎えに行く時間じゃないですか？」

「おっとそうだったね、あのサイズのルーンスプールを運ぶとなると並大抵のことじゃないからね」

「うーんと、じゃあオスカー君、僕と一緒にルーンスプールを輸送する人達を迎えに来てくれるかな？ クラーナ君とトンクス君にはルーンスプールの方を船着き場へ向かわせるようにハグリッド達に言いに行ってくれるかな？」

「わかりました」

クラーナとトンクスはそれを聞いてハグリッドの小屋へと向かった。

ポドモア先生とオスカーは輸送のための魔法使いたちを迎えに正面玄関に向かう。

「知ってるかい？ 今回はダンブルドア先生もルーンスプールを見るみたいだよ」

「ダンブルドア校長先生がですか？」

「ああ、今回のルーンスプールはホグワーツに紛れ込んだものをハグリッドが育てたことになってるからね、それにあのサイズのルーンスプールなんてイギリスではそうそうお目にかかれないよ」

ダンブルドア校長からすれば全てお見通しということなのかとオスカーは考える。自分達のやっていること、必要の部屋で魔法の練習をしていることや、ポドモア先生に無言呪文を習っていることもダンブルドア校長からすれば全て見通していることなのかもしれない。

オスカーはクラーナとみぞの鏡の前で出会ったダンブルドアの全て見通すような目が忘れられなかった。

「ああ、あの一団だろうね、なんとはるばるアフリカはブルキナファソからやってきた人までいるらしい」

確かに玄関ホールにはホグワーツやイギリスの魔法族が集まるダイアゴン横丁等では見えないような恰好をした集団がいた。

なんとというか、部族？ とでも言った方がいいのか、羽根飾りが沢山ついた服装に顔にはいくつものタトゥーがあった。

「おおこれはオスカーとスタージスじゃな、ご苦労様じゃ、今、ルーンスプールを輸送する方たちには話をしたところじゃ」

オスカーとポドモア先生の背後から声がする。さつきオスカーが思い浮かべた通りの眼をしたアルバス・ダンブルドアが立っていた。「では船着き場の方にいこうかの、ミスター・ラブグッド」

そう言うと、輸送団の代表者らしき人がダンブルドアに向けて一礼した。ダンブルドアが歩き出した為、そこにいた全員は付き従って歩き始めた。

「オスカーとはクリスマス以来じゃな」

「夕食や昼食を含めなければそうなりますね」

ダンブルドアは何が面白いのか微笑んだ。

「そうじゃの、しかし、あの時はクラーナと友人になったようじゃが、なんとも君の周りには面白い人の輪があるようじゃ」

「人の輪？ ですか」

ダンブルドアの声は何か羨ましそうな声色だった。

「そうじゃ、ホグワーツでは寮ごとの結束は固いが、寮を越えた結束となると数えるほどしかないものなのじゃ」

オスカーはハグリッドの小屋からルーンスプールを移動させているであろう、エスト、クラーナ、チャーリー、トンクスの四人の顔を思い浮かべた。

「お互いの頭を攻撃し合うルーンスプールの世話が、三つの寮の五人を引き合わせるとはなんとも不思議なものじゃ」

やっぱり、ダンブルドアにはルーンスプールの世話をしていることも最初から筒抜けだったのではとオスカーは思う。

そういう話している間に、一団は城を抜けて、船着き場が見える校庭を歩いていた。

しかし、シャー!! という何かものしい叫び声が聞こえ、魔法の光線が行きかっているのが見えた。

「アン、カド、イグ、ダメ!!!」

「いかん!! アン、カド、イグ!! どうどう!!」

エストとハグリッドのなだめる声が聞こえるが、二人が収めようと

していたルーンスプールはわき目も降らずにグリフィンドール生徒
と思わしき一団に向かって行つた。

「ひいひいひい!! なんでルーンスプールが俺らに向かってくるん
だ。こつちにくるな、ステューピファイ!!」

「ダメだ!! 逃げる!!」

「おい、お前ら俺を置いて逃げるんじゃねえ!!」

グリフィンドールの生徒は散発的に失神呪文をルーンスプールに
向かって撃っているが、当たってもルーンスプールは気にすることも
なく突っ込んでいく。

「ダンブルドア!!」

「スタージス、これは少しやっかいごとのようじゃの」

そう言つて、ダンブルドアが杖を振るとルーンスプールの巨体は文
字通りに浮かびあがった。

ルーンスプールは浮かびあがりながらも、グリフィンドールの生徒
に噛みつこうと牙を向けていた。

オスカーとダンブルドアの一団がルーンスプールの傍へと近づくと、
グリフィンドールの生徒はちりぢりに逃げ、腰を抜かした大柄な
上級生、ルーファス・ファツジが残っていて、さらにルーンスプー
ルをなだめるエストとハグリッド、チャーリー、そして何か啞然とし
た顔をしているクラナとトンクスがいた。

ルーンスプールは三人になだめられながらも怒りが収まらないの
か、ファツジに向かって首を向けようとしている。

「いったいなにをしかしてここまでルーンスプールを怒らしたのか
の」

「ダ、ダンブルドア校長!? ああ、あのルーンスプールが俺に襲い掛
かってきたんです!!」

ファツジが腰を抜かしながらも弁明を始める。

「ルーンスプールは蛇の一種だからもともとは臆病で、よほどのこと
をしなければあのように我を忘れて襲いかかるようなことはない」

ルーンスプールを輸送するためにやってきた一団の代表者らしき
人、ミスター・ラブグッドが言った。杖を抜きながらも冷静にルーン

スプールを眺めている。

「多分、ファッジ先輩の呪文がエストに当たりかけたので、それが引き金になったんだと思います」

チャーリーが説明する。確かにルーンスプールのエストへの懐き方は格別だったので、もしエストに危害を加えるようなモノがあるのなら、ルーンスプールがあんなに怒り狂うのも無理はないとオスカーは思う。

「エストというのはあのルーンスプールを傍でなだめている女の子のことかな？」

ミスター・ラブグッドがチャーリーに聞く。

「はい、ルーンスプールは彼女に一番なついていたので……」

「ほう、あそこまでルーンスプールの信頼を勝ち得るとは、類まれな魔法生物の才があると言わざるを得ないな」

ルーンスプールはファッジへの興味がなくなったのか、空中に浮いている自分の体に戸惑いながらも、エストとハグリッドが与えるネズミを食らっていた。

「ダンブルドア先生!! アン・カド・イグは何も悪くないんで、もし何か罰をうけるんならアン・カド・イグじゃなくて、俺を罰して下せえ!! 止めれなかった俺が悪いんだ!!」

ハグリッドが涙目になってダンブルドアに言った。

「ハグリッド、ここに居る皆は誰もその主人を守ろうとしたルーンスプールに罰を下そうなどとは考えておらぬよ」

ダンブルドアが優しく言った。

「さて、そもそもルーンスプールを怒らす原因になった、ミス・プルウェットに呪文が飛んでくるようなことがなぜ起きたのかを理解する必要があると思うのじゃが」

ダンブルドアのその青い瞳がキラキラと輝き、黙っているクラリーナとトンクスの方を見た。

「わしは、ミス・ムーディとミス・トンクスがその理由を知っていると思うのじゃがどうかの？」

クラリーナとトンクスがお互いの顔を見合わせ、ファッジ先輩、ダン

ブルドア先生、そしてオスカーの顔を順番に見た。

「私がオスカーの顔を真似ていたのが悪いんだと思います」

トンクスがおずおずと言った。

「いえ、トンクスがオスカーの顔を真似ていたのは本当ですが、オスカーを真似ていたトンクスにちよっかいをかけてきたファッジ先輩を私が小馬鹿にしたのが悪かったです」

オスカーは二人の言動を聞くだけで、オスカーの顔に変化したトンクスとクラリーナがいつものようにファッジ先輩をやり込めようとしたであろうことが想像できた。

その後には運悪く、ルーンスプールを船着き場に運ぼうとしていたエストの傍に呪文が飛んで行ったのだろう。

「なるほどのう、ミスター・ファッジがミスター・ドロホフといささか大規模な鬼ごっこをしておることは知っておったが、そこに類まれなるミス・トンクスの七変化の才能が加わった結果ということかの」

ダンブルドアの眼がキラリとファッジ先輩を見つめる。ファッジ先輩は見られただけで肩をすくめた。

「ミスター・ファッジ、これは君の親御さんや親愛なるコーネリウスに連絡をしなければならぬ案件かもしれない。ヴォルデモートの配下の者ならともかく、その子供やましてや学友に危害を加えることがあつたとなれば、ミリセントの退任の件で忙しくしておるコーネリウスは深く悲しむじやろうな」

ダンブルドアが具体的に何を言っているのかは分からなかったが、ファッジ先輩の顔色はまるでマンティコアの尻尾の針で刺されたような色になっていた。

「ミス・トンクスやミス・ムーデイも上級生で遊ぶのはほどほどにするように」

クラリーナとトンクスが壊れたかくれん防止器のように顎を激しく上下させた。ダンブルドアはまた子供のようにはげ笑んだ。

「さて、では皆、船着き場に向かおうかしょうかの」

ダンブルドアの指示に従って一団は動き出した。ルーンスプールはすでに地面に下げられており、傍にエストとハグリッドがついてい

る。さらになぜか腰を抜かしていたファッジ先輩もついて来ていた。ファッジ先輩は何か吸魂鬼にキスをされた後のような、魂の抜けた顔をしていた。

船着き場はオスカーの記憶では、小舟がいくつか入るくらい場所だったと思っただが、なぜか巨大な帆船が鎮座していた。

「これならルーンスプールも無理なくブルキナファソまで旅行できそうじゃの」

確かにハグリッドの小屋が百個は入りそうな船だった。

「では申し訳ないが、ルーンスプールにお別れをしてくれるかの？」

ダンブルドアがエストとハグリッドを見て言った。

「長旅だから、エサのネズミもたくさんミスター・ラブグッドに渡し、ブランドデーも渡しといたからな」

ハグリッドの声は涙と鼻水でぐもつていた。

「俺は絶対、アン・カド・イグのことを忘れないからな」

ハグリッドは本当に悲しそうだった。

「エストもアン・カド・イグのこと忘れないから、アン・カド・イグもエストのこと忘れないでね？」

エストがルーンスプールの頭それぞれにキスをした。

「ではミスター・ラブグッドお願いできるかの？」

「ええ、ダンブルドア」

ルーンスプールは帆船に乗せられていった。船に乗せられる間、ルーンスプールの視線は三本の頭全てがエストの方を向いていた。

帆船が回転して渦の中に消えていく間、さっきの怒りに狂ったような声とは違う、悲しい声が響いていた。オスカーには渦が完全に消えた後も悲しげなシューシューという声が聞こえる気がした。

武装解除

もう今学期に入って何度目になるのか分からない必要の部屋。その内部はオスカー、エスト、クラリーナの三人ならば一度は見たことのある仕様になっていた。

「すっごい豪華な決闘場ね!!」

トungkスが周りを見回して興奮気味に叫ぶ。確かに、これまで三人で呪文を練習していた実用的な部屋の内装とは違い、色々と意匠がこらされた内装になっていた。

「僕は初めてこの部屋に入るけど、やっぱりホグワーツって本当に凄いいい」

「いやあ、こんなに豪華な場所で一年生から決闘とはね、エスト君とオスカー君が決闘チャンピオンになるのは時間の問題だろうね」

必要の部屋に入るのが初見になるチャーリーとポドモア先生の二人もそれぞれに感嘆の声をあげていた。

「いいですかオスカー、貴方が負けるということは貴方に教えた私が負けるのと同じことなんです。腰抜けのオスカーと言われて一生エストのケツに敷かれたくなかったら今日ここで勝つべきなんですよ」

オスカーはクラリーナ以外に腰抜けのオスカーという渾名で呼ばれたことはなかったが彼女なりの激励なんだろうと思うことにした。

なんだかねだ三カ月以上も彼女はオスカーの練習に付き合ってくれたのだ。

「ああ、ありがとうな、クラリーナ」

「礼はエストに勝ってからにしてください 油断大敵!! ですよ」

そう言っってクラリーナはオスカーにウインクをして、トungkスたちのいる観客席の方へと下がっていった。

「何々、クラリーナ。今から死にゆくオスカーへの末期のキスはできたの?」

トungkスがまたクラリーナの顔に変化してクラリーナを煽っている。

「あほなこと言っているとインセンディオでそのあほ変化ができないように、顔を焼いてやりますよ」

「オスカーがエストにみじん切りにされないか心配なんですって言えばいいのに」

「こいつ、全然ルーンスプールの件から懲りてませんね!!」

観客席ではもう一件決闘がおきそうな様相だった。

オスカーはステージの上に立つ。

前を見れば、エストはすでにステージの上で伸びをしている。以前同じようにここに立った時と違い、彼女の眼には隈がないし、なによりその顔と目は楽しそうに輝いていた。

オスカーは自然と少し緊張でこわばっていた体が柔らかくなった気がした。

「ねえ、エストが勝ったらクリスマスにクラーナと何があったのか教えてくれる?」

「分かった。じゃあ俺が勝ったらクリスマスプレゼントの百味ビーンズを一気食いしてくれ」

「なんかそれ、全然難易度が違う気がするの」

エストはそう言つて笑う。観客席からは「オスカー! 負けたら殺しますよ!」とか、「え? 何々、やっぱクリスマスになんかあったんだ」、「あほが食いついたじゃないですか!! エストも決闘が終わったら覚えておくことですよ!!」みたいな騒々しい声が聞える。

「じゃあ二人共準備はいいかな?」

ポドモア先生の麦わら色の髪がゆれる。

「危なくなったらすぐに僕が止めさせて貰うからね? じゃあ二人共お辞儀からだ」

二人はステージに立って真つ正面に向かい合い、お互いにお辞儀をした。

「俺、オスカー・ドロホフはエストレヤ・プルウエットに決闘を挑みます」

「では、私、スタージス・ポドモアが立会人を務めよう」

「私、エストレヤ・プルウエットはオスカー・ドロホフからの決闘を受けます」

ポドモア先生がステージ脇に下がった。

オスカーはエストの眼をはつきりと見た。先に呪文を唱えようとしたのは前回と同じくエストだった。

「グラディウスソーティア!! 剣よ出でよ!!」

エストが呪文を唱えて前回と同じく、剣を複数召喚する。さらにエストは肥大呪文を剣にかけようとしたが、オスカーは無言で杖を振って剣を粉々に破壊した。

エストの顔色が変わる。

「無言呪文とか反則だと思うな」

「一年生で召喚呪文を使いこなすやつに言われたくない」

そうやってオスカーは妨害呪文を唱えながらエストへの距離を詰めようとした。

しかし、エストは妨害呪文をひらりと避けながらまた召喚呪文を唱える。

「ループスソーティア!! 岩よ出でよ!!」

そう呪文を唱え終わると今度は巨大な岩が召喚され、呪文をあてることができなくなる。

「フラグランテ!! 熱せよ!!」

「レダクト!! 粉々!!」

オスカーは呪文に力をこめる為、粉々呪文を発音して唱える。

エストが熱した岩が粉々になって吹き飛ぶが盾の呪文でオスカーは回避した。

「アグアメンティ!! 水よ!!」

エストが熱した岩のかげらに大量の水をかけると、ステージの上は水蒸気で見えなくなった。

蒸気で隠れられれば、いかに無言呪文といえどもエストを視認していない以上、当てることができな

しかし、見えないのは相手も同じだとオスカーは思ったが、召喚呪文を使いこなすエストに時間を与えるというのは致命的だと思いません。

「プロテゴ!! マキシマ!!」

オスカーは盾の呪文を最大に展開して、先ほどエストが見えた場所

に走り出した。蒸気の中にエストの赤い目と黒い髪が見える。

「グラディウスソーティア!! 剣よ出でよ!! スクートウムソーティア!! 盾よ出でよ!!」

「エンゴージオ!! 肥大せよ!!」

「オバグノ 襲え!! ロコモーター!!!! 周回せよ!!」

オスカーがエストに与えてしまった時間で、エストは剣と盾を召喚し終わる。オスカーは無言の粉々呪文と最大展開した盾の呪文で強引に突っ切ろうと試みた。

エストに時間と距離を与えてはならない、前回の決闘の教訓であり、クラーナと延々に対エストの戦術を練った結論だった。

エストの傍にある盾に粉々呪文を唱えるのをオスカーは躊躇わないう。その躊躇いは決闘の練習に付き合ってくれた二人とポドモア先生、そして目の前に立っているエストへの侮辱に当たるとオスカーは気づいたからだ。

「プロテゴ!!」

もう一度盾の呪文を唱えて、浮かんでいる盾と襲い掛かってくる剣をはじき飛ばした。

オスカーとエストの間にはもう何もなかった。

次の呪文で勝負が決まる。オスカーはそう思った。

「エクスペ……!?!」

エストが呪文を唱えようとした瞬間、オスカーの杖から紅色の光線が出て、エストの胸に突き刺さった。

エストの杖はゆっくりと、半円を描いてオスカーの左手に収まった。

あたりに立ち込めていた蒸気が収まったのも同時だった。武装解除の光線と同じくらい紅いエストの眼がオスカーを見つめていた。

エストははつきりと笑った。

「オスカーはやっぱり優しいね」

「お前ほどじゃない」

「だから、お前じゃなくてエストなんだってば」

そう言うエストにオスカーは杖を渡す。

「ええつと、勝ったのはオスカー君でいいのかな？」

ポドモア先生がいつの間にか二人の傍に立っていた。何か二人の顔を交互に見て、罰の悪そうな顔をしている。

「そうだよ、ごめんねスタージス。エスト負けちゃった」

エストがポドモア先生に謝る。そう言えば、エストに決闘術を教えたのはポドモア先生だったのだった。

「エスト君の召喚呪文も見事だったよ、ただオスカー君の無言呪文はもつと見事だったということだけさ」

ポドモア先生はにっこり笑ってオスカーとエストを褒める。

どうも、ポドモア先生はオスカー達に無言呪文を教えたことをエストにバレたくないようだ。

「いやあ、ポドモア先生に無言呪文を教えて貰った甲斐はありましたね、オスカー」

「ほんとね、ポドモア先生の教え方が上手かったおかげね」

わざとらしく、クラリーナとトンクスがポドモア先生にお礼を言う。この二人はだれかをからかうときには息がぴったりなのだ。

「へえ、じゃあオスカーもエストもポドモア先生に決闘術を習ったのか、僕も習おうかな」

チャリーナがまるで凄い人を見るようにポドモア先生を見る。

「なにそれ!! スタージスどういふことなの？」

「いやあ、エスト君だけに教えるのはなんとというか不公平というかね？」

「うう…… でもやっぱりずるいの」

召喚呪文を自分だけ教えて貰った手前、エストは大きくでれないようだが、その顔が明らかに納得できないと語っていた。

「なんでオスカーは勝っちゃうのよ、エストに百味ビーンズ食べさせるより、オスカーとクラリーナのクリスマスの方が気になるんだけど」

「ほんとに貴方はどっちの味方なんですか?」

クラリーナがあきれた顔でトンクスを見る。

「面白くなる方の味方よ」

「やっぱりあほはあほですね」

「じゃあ、クラーナ、オスカーとクラーナのクリスマスロマンスの謎をかけて、私と決闘しない?」

「なんでそんなあほな理由で私が決闘しないといけないんですか? だいたい私が得る物が何もないじゃないですか!!」

「面白いじゃない?」

「私は面白くないですよ!!」

また二人は騒ぎ始める。本当にこの二人は騒いでいないとだめらしい。彼女達一人一人ならまだうるささはましなはずなのだが、乗算でうるさくなるんだろうなとオスカーは思う。

「いやあ、これ以上私の胃腸を痛めないように、決闘はちよつと遠慮してくれると嬉しいんだけどね?」

そう言つて、ポドモア先生は困つた顔をして笑つた。

オスカーとエストの決闘が終わつて、ルーンスプールの世話も終わってしまったので、オスカー、エスト、クラーナ、チャーリー、トックスの五人は中々集まることも少なくなつた。

ただ、そもそも集まる余裕がない時期に突入しようとしていた。学年末のテストである。

うだるような暑さの中、筆記試験や実技試験が行われた。正直いつて、オスカーは呪文学や闇の魔術に対する防衛術、変身術の実技は完璧だつたと思つた。

呪文学や魔術に対する防衛術で使用するような呪文は、クラーナとトックスと一緒に練習した数々の呪いに比べればなんてことではなかつたからだ。

変身術は身近にエストという心強い味方がいた。エストは最早呪文も必要とせず、動物をゴブレットや嗅ぎタバコ入れに変えることができたので、オスカーに付きつきりで変身させるイメージを教えてくれた。オスカーは代わりに無言呪文のイメージを教えることを約束させられた。

唯一、てこずつたのは魔法史だったが、これもなんとか大教室のうだるような暑さに耐えて、乗り切つた。オスカーは試験中に十回くら

いエストに頼んでアグアメンティを唱えて涼しくして貰おうかと思っってしまった。

そんなこんなで、オスカーのホグワーツでの一年は終わった。

寮対抗杯ではスリザリンが何年連続かの優勝をしていたが、これはポドモア先生がエストに点数を与えすぎたせいじゃないのかと、グリフィンドール生どころか、四寮全体の一致した意見だった。

ただ、残念ながらポドモア先生は今年で闇の魔術に対する防衛術を辞めてしまいうらしい。

ポドモア先生曰く

「ちよつとホグワーツは寒すぎたので、南の海でバカンスに行ってくる」

らしいが、グリフィンドール出身なのにスリザリンに点数を与えすぎたので、ホグワーツに居づらくなったのじゃないかと専らの噂だった。

試験の結果も出たが、予想通りにオスカーはほとんどの教科を難なくパスすることができた。特に実技がある教科はほとんど最高の評価を貰っていたし、薬草学や魔法薬学も隣に座っているエストのおかげか最高から一つ下だが、十分な結果だった。

隣のエストの結果を見ると、大方の予想通りに全ての科目で最高の評価を貰っていて、学年トップの成績なのは間違いがなかった。

ハグリッドが操る湖を渡る船に乗って、一年生は全員ホグワーツに特急が止まる駅へとたどりついた。オスカー、エスト、クラーナ、チャーリー、トンクスの五人はハグリッドにさよならを言った。チャーリーは何か、来年も面白い動物を飼いたいとハグリッドと話していたので、オスカーは少し嫌な予感がした。

あの二人のカワイイは他のみんなと違う概念だということはこの一年で思い知ったからだ。

五人はコンパトメントでエストに決闘の約束通りにパーティ・ボッツの百味ビーンズを一気食いさせたり、今年一年の思い出、ルーンスプールのことなんかを語りあった。

オスカーはエストやクラーナと出会ったホグワーツ特急に乗った

のが遠い昔のように思えた。

楽しい時間はあつという間に通り過ぎて、キングズ・クロス駅の九と四分の三番線にホグワーツ特急はついてしまった。

学生で込み合っていたのでプラットホームに出るには少し時間がかかった。

「ね？ 夏休みはみんなで隠れ穴にいかない？」

「何ですか？ 隠れ穴って？」

「僕の家のことだよ、ちよつとしたらみんなに招待のふくろう便を送るよ」

「いいわね、面白そう」

「オズカーも来るよね？」

「ああ、まあ闇祓いから許可がでただけけど」

そうこう話ながら五人は改札の外にでた。

「いい一年だった？」

チャーリーを思わず赤毛を持った女の人の、エストとどこか似ているような優しい声が聞えた。

「うん、友達も一杯できたし、いい一年だったと思うな、モリーおばさん」

とエストが答えたので、オズカーには目の前の人物が誰なのか分かった。

「でも、モリーおばさんのセーターをオズカーはクラリーナにあげちゃったんだよ？」

エストが咎めるようにオズカーとクラリーナを見る。

「ちよつとエスト！ その話は止めてくださいよ!!」

「あらあら、本当に貴方達仲がいいのね、セーターがみんなが仲良くなる理由になったんなら素晴らしいことだわ」

そう言つて、モリー・ウィーズリーはオズカーにウィンクした。いつか見たエストのウィンクとそっくりだとオズカーは思った。

「セーターありがとうございました。少ししか着れませんでしたが、凄くあったかかったです」

「まあ、どういたしまして」

モリー・ウィーズリーはそう言つて笑つたが、その顔からどうしてエストがあんな性格になったのか少しだけ分かった気がした。

「オスカー、準備はできたかな？」

オスカーの背後から、深みのある、人を安心させるような声が聞えた。

背が高く、肩幅の大きな黒人にも関わらず、威圧感を与えないその人物はオスカーを見張るために魔法省から派遣された闇払いだった。

「はい、いつでも大丈夫です」

そう言つてキングズリー・シャックルボルトにオスカーが返すと、クラリーナがオスカーを引つ張った。

「ちよつとオスカー、あなたの見張りの闇祓いってキングズリー・シャックルボルトなんですか？」

「ああ、ずつとそうなつてる」

「結構な有望株だつて、アラスターおじさんが言つてましたよ、スクリームジョールの次はあいつが中心になるだろうとかなんとか」

確かにキングズリー・シャックルボルトは見張られているオスカーからしても、そつがなく実に有能な人物だった。

死喰い人の子供であるオスカー本人にも正面から向かい合つてくれる人物であるし、魔法省が大つ嫌いなドロホフ家の屋敷しもべ妖精もキングズリーのことは認めているくらいだ。

伝説の闇祓いであるアラスター・ムーディから評価されてもおかしくないオスカーも思う。

「オスカーのご家族ですか？」

モリー・ウィーズリーがキングズリーに尋ねる。

「難しいところですが、保護者という面では間違つていないでしょう」

「では、オスカーを夏休みにウチの家に招く許可を頂けますか？ 恥ずかしながら、姪がどうしても言つてきかないので」

「魔法省に一度、許可を貰わねばなりません、アーサー・ウィーズリー氏のお宅なら間違いなく許可がでることでしょう」

二人の後ろでエストとチャーリーがガッツポーズをした。オスカーも心の中でガッツポーズをした。

二年目 失われた髪飾り 屋敷しもべ

「オスカー坊ちやま。お友達はお昼前にいらつしやるのでしたね？」

ドロホフ邸はいつもに増してピカピカに磨けあげられていた。オスカーの目の前にいる屋敷しもべ妖精のペンスはエスト達がオスカーを迎えに来ると聞いて、気炎を上げておもてなしをしようとしていたのだった。

「ああ、チャリーのお父さんの時間に合わせてお昼前に暖炉飛行でくるって言ってた」

「いらつしやるのは五人で間違いありませんね？」

「多分そうだ、エスト達四人とチャリーのお父さんで五人だってふくろう便が来たから」

こうやってペンスが来客の人数をオスカーに確認するのは今日で八回目だった。ドロホフ邸の応接間にはすでにキングズリーとオスカーの分を合わせて七人分の椅子と、皿やゴブレットが並んでいる。「ああ、オスカーお坊ちやまのお友達をおもてなしできるとは、このペンス、喜びに心が打ち震えています」

そうってペンスはオスカーの前で震えている。

オスカーはため息をついた。ペンスは小さいころからオスカーの面倒を見てくれているが、オスカーの為に何かするたびにこうして一生分の感謝とか言って、震えだすのだ。

「そろそろ、アーサー・ウィーズリーが言っていた時間になる」

キングズリーが暖炉を見ながらそう言った瞬間、応接間の暖炉がエメラルド色の炎に変わり、グルグルと高速で回転する人影が現れ始めた。

最初に部屋の中に姿を現したのは少し禿げ上がった赤毛の魔法使い、チャリーの父親であるアーサー・ウィーズリーだ。

「ああ、オスカー君始めまして、チャリーの父親のアーサー・ウィーズリーだ。キングズリーは久しぶりかな？」

そう言つて、アーサー・ウィーズリーはオスカーとキングズリーに挨拶をしたが、すでに暖炉は後続の訪問者を吐き出し始めていた。

「やっぱり死喰い人の家つて豪華なんですね」

「なにこれ？ 凄い広い家じゃない？ オスカーこんなところに住んでるの？」

「隠れ穴の何倍もありそうなの」

「間違いなく数倍はあるんじゃないかな、というかこの部屋だけで僕の家より広いかも」

エスト達の話声を聞いてウィーズリー氏は少し顔を赤くした。

「なかなかいい家だね、オスカー君」

「いえ、ドロホフの家にはもう僕と屋敷しもべ妖精だけですから、使わない部屋しかないですよ」

オスカーにとってはこの家にはいい思い出なんてなかったので、本当にただ広いだけの家だった。

「お客様は皆さまお揃いででしょうか？ ささやかながら、昼食を用意いたしましたので、召し上がっていただくことはできますでしょうか？」

そう言つて、ペンスはウィーズリー氏たちに完璧なお辞儀をした。

「オスカーがクリスマスプレゼントを貰つてた屋敷しもべ妖精つてこの子？」

「ああ、ペンスつて言うんだ。まあおもてなししないとペンスは死にかねないから、食べていつて貰えると助かる」

そう言つて、オスカーは席についた。なんだかんだオスカーはペンスが楽しみにしていたおもてなしくらいはさせてやりたかった。

ホグワーツにいる間はこの家にはペンス以外に誰もいないのだから、少しくらいペンスに楽しみを与えてあげてもいいと思つたのだ。

「じゃあエストも食べてくの、ペンスさん？ よろしくね？」

「このペンス、オスカーお坊ちやまのご学友であらせられるエストお嬢様からそのような言葉を頂けるとは、感極まる思いです」

そう言つてペンスは床に着くか付かないくらいの深いお辞儀をした。

「流石、死喰い人の家の屋敷しもべですね、私が見たことのある屋敷しもべ妖精の中で一番奴隷根性が染みついているみたいです」

「とか言ってクラリーナは一番最初に席に座ってるじゃない」

「ふん、あほのトングスに教えてあげましょう。屋敷しもべはこういうのをやりたくて仕方ない生き物なんですから、とつとと私たちは座って食べるのが屋敷しもべの為になるんですよ」

「ぜったい食い意地がはってるだけですよ」

この二人は相も変わらず喧嘩を始めようとしている。

「ほんつとにオスカーの家って広いね、ちよつとこの家の後だと隠れ穴に招待するのが恥ずかしくなりそうだな」

「人がいない家より、人がたくさんいる家の方がいいだろ」

オスカーはいつも寂しいドロホフ家よりも、ウィーズリー家の兄弟が沢山いて、両親がいるにぎやかな家のほうがよっぽど楽しいだろうと思った。

「ではささやかながらですが、昼食をお楽しみください」

ペンスがそう言つて、指をパチツと鳴らすとホグワーツの大広間のように、空の皿の上に突然食事が現れた。

明らかにいつもの昼食ではないようなメニューと量だったので、オスカーとキングズリーにはペンスが本当に力を入れて料理を作ったことが分かった。

「屋敷しもべ妖精って凄いなだね、一人？ 一匹？ いればモリーおばさんの仕事がなくなっちゃいそうなの」

「屋敷しもべ妖精は人の世話をするために生きるらしいからね、ママは家事の為に生きてるわけじゃないからやつぱり敵わないんじゃないかな」

オスカーの眼から見てもペンスは生き生きと動いていた。テーブルの向こう側では、クラリーナとトングスがどつちがたくさん食べるかの勝負をしているのをその大きな目で見ながら、皿が開いた瞬間に新しい食事を指をパチツと鳴らして召喚していた。

クラリーナとトングスはいくら食べても次の食事が出てくることに戦慄し、どつちが先に根をあげるのかチキンレースをしているよう

だ。

キングズリーとウィーズリー氏はなにやら話し込んでいた。

「アーサー、以前問題になったマグル製品への不正魔法使用の……
マندانガス・フレッチャーが沢山持っていたあれはなんだったかな
？」

「ああ、補聴器のことだろう。本来は耳が聞こえにくいマグルの為のものらしいのだが、呪文がかけられていて、文字通りに本物の耳が沢
山体中に生えてくるという代物だった」

「ああ、そのせいで先週のロンドンのとある通りが耳を体中から生や
した人間だらけになってたのか」

「あれのせいで四日も魔法省に缶詰めになってしまった。マندانガ
ス・フレッチャーめ」

しかし、『魔法省』という言葉がウィーズリー氏から発された瞬間。
キングズリーとオズカーはしまったという顔でお互いを見合わせた。
「魔法省!! 人の皮を被った獣がまたオズカーお坊ちやまに何をしよ
うというのですか!!」

パチツという音がして、ペンスが先ほどの礼儀と気品のある優し気
な表情ではなく、眼を見開いて憤怒を露わにしながらキングズリーと
ウィーズリー氏の間机の上に立ち、ウィーズリー氏を睨みつけてい
た。

「これ以上オズカーお坊ちやまになにをしようというのですか!! 闇
祓いに加えて、あんなおぞましいモノを玄関に置かせておいて何が足
りないと言うのですか!!」

ペンスは自分が朝早くから準備した食事を踏みつけるのも構わず、
ウィーズリーの眼の前に迫っていた。ペンスの眼は怒りで見開かれ
ていたが、少しだけ涙が浮かんでいた。

「お前たちがオズカーお坊ちやまに何をしたのか知らないとは言わせ
ません!! 心優しいオズカーお坊ちやまの心と記憶を踏みにじった
!! その上、学校にも行かせずに犯罪者と同じ見張りを付けて幽閉し
ようとした!! 小さく心優しいオズカーお坊ちやまが武器を持つお
前たちに何ができると言うのですか!! 恥を知れ!!」

そう言って、ペンスは指をウィーズリー氏に突きつける。

「ペンス!! やめろ!! テーブルから降りるんだ!!」

オスカーは慌てて、ウィーズリー氏の方へ向かいながら命令した。ペンスは傍にあった皿で自分を叩いて罰しながらも、ウィーズリー氏に向かって行こうとしていた。

「恥を知れ!! この家から出ていけ!! お坊ちやまには指一本触れさせないぞ!!!!」

「アーサー!! 他のみんなを連れて暖炉飛行で戻るんだ!!」

キングズリーが素手でペンスを取り押さえようとしているが、ペンスは無茶苦茶に自分を叩きながらウィーズリー氏の方へ向かっている。

「お前たちと闇の帝王と何が違うというのか!! お前たちがやったことを忘れないぞ!!」

「ペンス! 黙れ!!」

ウィーズリー氏が暖炉に煙突飛行粉を慌てて投げて、炎がエメラルド色に変わる。ウィーズリー氏は子供達を先に行かせようとして暖炉の前で待っているが、喋ることを禁止されたペンスは眼だけでも十分に分かる怒りを発しながら、そのウィーズリー氏の方へ向かって行こうとしていた。

「アーサー、君が先に行くんだ!」

「すまない、キングズリー。隠れ穴!!!!」

エメラルド色の炎の中へウィーズリー氏が回転しながら消えていく。

「君たちも早く!」

キングズリーが他の四人を急かす。四人は心配そうにペンスを押しさえつけるキングズリーとオスカーに視線を送りながら暖炉の中へと消えていった。

ペンスは全員がいなくなって随分たつても怒りに体を震わしていた。

「オスカー、すまない、せつかくの昼食を台無しにしてみましたようだ」

「いえ、ウィーズリー氏に先に忠告しておくべきでした」

キングズリーはオスカーにすまなさそうな顔をした後、ペンスの方を見てさらに憐れむような顔をした。

「ペンス、喋っていいぞ」

「申し訳ございません、お坊ちやまの学友の皆さまとそのご家族にご迷惑をかけ、昼食を台無しにしてしまいました」

ペンスはそう言って傍にあった燭台で自分を突き刺そうとした。

「ペンス、自分の体を傷つけるのを禁じる」

ペンスはそう命令されると、ぷるぷると体を震わせながらカーペットに崩れ落ちた。

「お坊ちやまのご学友との時間を台無しにして、お坊ちやまの命令を守れなかったペンスめにドロホフ家のしもべの資格はありません。どうか洋服をお与え下さい」

ペンスは涙を流しながらオスカーに解雇しろと願った。

「ダメだ。お前がいなくなったら誰がこの家を守るんだ？ だいたいお前がいなくなったら俺は本当に一人になってしまう」

そうオスカーは言った瞬間、ペンスはこれ以上無いくらい大声で泣き始めた。

「申し訳ありません。申し訳ありません。ペンスめは心優しいオスカー坊ちやまにふさわしい屋敷しもべではありません。」

そう言って、泣き崩れペンスが落ち着くまでオスカーとキングズリーは待っていた。

「申し訳ありませんでした。オスカーお坊ちやま。今すぐにも出発なさいますか？ すぐにトランクを用意いたしますが」

ペンスは泣きはらした赤い目をしていたが、完璧なお辞儀をオスカーにして見せた。

「キングズリー、いつでもいいんですか？」

「ああ、アーサーがついてからいつ出発しても大丈夫なような許可を貰ってある」

「ペンス、トランクを頼む」

「承知いたしました」

パチツと音がするとホグワーツ指定のトランクがオスカーの前に現れる。

「オスカーお坊ちやま、クリスマスはどうなさいますか？」

「うーん、まあエスト達と話して考えておく」

「承知しました。もし何かございましたらいつでもご連絡ください」

ペンスはいつもの礼儀と品性を取り戻していた。オスカーはこのペンスが苦手だったが、同時に好きでもあった。

「じゃあ行ってくるよ、ペンス」

「行ってらっしゃいませ、オスカーお坊ちやま」

そう言ってお辞儀をするペンスを後に、オスカーはエメラルド色の炎の中に入っていった。

オスカーとキングズリーがエメラルド色の炎の中を回転して出た先は、静かで寂しいドロホフ邸とは全く違う、モノが溢れて、狭くて、人が一杯いる空間だった。

「オスカー、大丈夫だったのかな？ 申し訳ない、私のせいで屋敷しもべ妖精の逆鱗に触れてしまったようだ」

「いや、アーサー、事前に注意しなかった私の注意不足だった」

ウィーズリー氏は本当に申し訳なさそうだった。

「ペンスは大丈夫だったの？」

「ああ、まあ魔法省の人がくるとあんな感じなんだよ、チャーリーのパパには申し訳ない」

「まあパパなら大丈夫だよ、ママも怒ったらあのくらい怖いしね」

「確かにモリーおばさんは怖いのに」

オスカーには優しそうなチャーリーの母親があんな怒りを見せることがあるとは信じがたかった。

「随分と屋敷しもべに愛されてるみたいでしたね、オスカーお坊ちやま？」

「クラーナはペンスにビビってたんだけどね」

「トunksだってビビって糖蜜パイを顔面にぶちまけてたじゃないですか」

「お前ら食べ物で遊ぶのはやめろよ」

「やっぱりオスカーお坊ちやまは私たちの競争に気付いてたんですね」

「オスカーお坊ちやま、分かってたんなら止めてくれればよかったのに、私たち食べすぎで爆発しそうだったのよ」

「分かった。分かった。もうオスカーお坊ちやまでいいよ」

いじられるネタがあるときにこの二人に近づくのは賢明ではないとオスカーは思った。

「そうです、おとなしくオスカーお坊ちやまは私たちにいじられていればいいんですよ」

「クラーナはぎっきの席でオスカーの隣に座れなかったから拗ねてるのよ、オスカーお坊ちやま」

「こいつあほ変化がなくてもむかつかますね、そう思いませんか？
オスカーお坊ちやま」

だがオスカーにはペンスの豹変なんか突っ込んでこない四人の心使いがありがたかった。この二人もオスカーを元氣付けようところな坊ちやま、お坊ちやま言ってるんだと思うとまだ耐えられる気がした。

「じゃあチャーリーの部屋にトランクを運んじやおうよ、オスカーお坊ちやま？」

「ああ、エスト、僕がオスカーお坊ちやまのトランクを持つよ」

オスカーはこの夏休み中、お坊ちやま呼ばわりされるのは耐えられないと思った。

隠れ穴

隠れ穴での生活はドロホフ邸とはまるで違っていた。ドロホフ邸ではオスカーとペンス以外は時々やってくるキングズリー以外は誰もいかなかったし、一人でいることがほとんどだった。

しかし、隠れ穴では寝ているときには隣にチャーリーがいたし、起きる時から寝るときまで常にだれかと一緒だった。

オスカーが不思議だったのはウィーズリー家の誰もがオスカーと話したがっていることだった。アーサー・ウィーズリーとモリー・ウィーズリーはまずオスカーが着いたときに自分たちのことをおじさん、おばさんと呼んでほしいと言ってきたし、チャーリーの兄のビルもオスカーには好意的だった。

とにかく、ウィーズリー家の誰もがエストと仲良くなったオスカーのことを知りたがっているらしかったのだ。

「つまり、オスカーはエストに決闘でボコボコにされたってことかい？」

昼食の時間にウィーズリーおじさんとビルとオスカー、クラリーナはエストとオスカーの決闘の話をしていて。ラジオからはセレスティナ・ワーベックの歌が流れている。

「そうですね、あの時のエストはなんの容赦もなかったですね、あとちよつとでオスカーはそのこのハンバーグみたいになっていたと思います」

「まああんまり否定はしないけどさ……」

「うむ…… なんとというか、エストはモリーに似たみたいだね……」

ウィーズリーおじさんはなにやら神秘的な顔もちだ。

「父さんも母さんとそういう経験があるってこと？」

「いやあまあ、その、モリーとのデートをメリイソート先生の罰則を食らって受けられなかったときは恐ろしいことになったね」

ウィーズリーおじさんは無意識のうちに何か肩をさすっている。

「あの時の呪いで父さんの肩は未だに変な動きをするというか、なんというか」

オスカーはクラリーナと目を合わせ、これからはできるだけエストを怒らせないようにしようと思った。

「クラリーナ!! オスカー!! 外に遊びにいこうぜ!!」
「いこうぜ!!」

話していると後ろから瓜二つな声がかけられる。チャーリーの弟のフレッドとジョージだ。二人はまだホグワーツに入れる年齢ではなかったが、すでに手が付けられないほどのやんちゃ坊主だった。

「トンクスが庭小人の面白い遊び方を教えてくれたんだ」
「一緒にやろう!!」

さらになお悪いのは、クラリーナとトンクスが二人にさらに悪知恵を教え始めたということだ。チャーリーとオスカーはすでに何回も、クラリーナ、トンクス、フレッド、ジョージの悪戯に巻き込まれていた。この四人を抑えることができるのはウィーズリーおばさんと怒った時のエストだけだった。

「ふっ…… あほのトンクスの浅知恵がどれほどのモノか確かめてあげましょう。オスカー行きますよ」
「ああ、じゃあちよつと失礼します」

と言って二人が席を立とうとした瞬間、何羽ものふくろうが部屋に入ってきた。ウィーズリーおじさんが手紙を受け取って、ビル、オスカー、クラリーナに手渡す。

「学校からの手紙だね、ダンブルドアは君たちがここにいることもお見通しというわけだ」

手紙は黄色い羊皮紙にオスカーとクラリーナの名前がそれぞれ書かれている。

「フレッド、ジョージ。チャーリー、エスト、トンクスを呼んできてくれるか?」

「合点承知!!」
「パパ、了解!!」

そう言って双子は別々の方向に飛び出していった。

少しの間、居間は手紙を読んできたため静かになった。そうこうしているうちに大量の洗濯モノを持ったウィーズリーおばさんとフレッド

ドとジョージに呼ばれたみんながやってきた。

エストはなにやらチャーリーのもう一人の弟、パーシーに教科書の内容を教えているようだったし、トンクスとチャーリーは何か泥だらけだった。

「あら学校からお手紙が届いたのね、アーサー、みんなを連れてダイアゴン横丁に行ったらどうかしら？」

「ああモリー、そう言おうと思っていたところだ。ロンとジニーの面倒を頼めるかい？」

「大丈夫よ、アーサー」

ということで、ウィーズリー家と愉快な仲間たちは煙突飛行粉でダイアゴン横丁へと買い物をする予定になった。

「さあ、お客様からだね、オスカー お先にどうぞ」

そう言つて、オスカーはウィーズリーおじさんから煙突飛行粉の鉢を突き出された。少しだけ、オスカーの後ろでなにやら話し込んでいるトンクスとフレッド、ジョージが気になった。

「じゃあお先に失礼します。ダイアゴンよこ……!?!」

「ちよつと押さないでくださいよ!!? うわっ」

オスカーが煙突飛行粉を投げて、エメラルド色の炎にダイアゴン横丁と言おうとした瞬間、フレッドとジョージがクラーナごとオスカーを暖炉の中に押し込んだ。

エメラルド色の炎の中に二人は回転しながら飲み込まれていった。後ろにクラーナの感触があったが、そもそもダイアゴン横丁と最後まで発音できなかったのではとオスカーは思った。

回転が長い間続き、いくつも暖炉を通り過ぎたように感じた。気づくと二人は埃と煤だらけの暖炉に放りだされていた。

「ほんとにあのあほのトンクスはろくなことをしませんね」

オスカーは石畳みに放り出された衝撃で思いつきり額を打っていたが、少なくとも自分の体自体は五体満足だと確認できた。

目の前のクラーナは肩を打ったのか、痛そうに片方の手を当てている。だがそれ以外は大丈夫そうだった。

「オスカー大丈夫ですか？ 普通に額から血がでてますよ？」

「そうなのかな？ まあそれよりとりあえずここから出た方がよさそう
だ」

オスカーはローブの袖で額の血を拭いた。周りを見回すと少なくとも、ホグワーツの一年生では使うことはないような怪しげな物品が並んでいた。

緑色のネックレス、しなびた白い手、あやしげな柵…… オスカーは魔法の道具に詳しくなかったが、これらの物品が生易しいモノではないことくらいは分かった。

「クラリーナ、とつとと通りに出よう」

「そうですね、私たちが教科書を買えるような店ではないみたいです」
店の外にでてここがどこなのかはよくわからなかった。怪しげな物品を販売する店がいくつも並んでおり、通り過ぎる人もどこか脛に傷がありそうな人ばかりだった。

木の看板にはノクターン横丁と書かれている。

「クラリーナ、ノクターン横丁って知ってるか？」

「ええ、ダイアゴン横丁に隣接する、闇市場みたいな場所のはずです」
「つまり、その辺を歩いてても戻れるかもしれないってことなのかな？」
「まあ戻れるんじゃないですかね、帰ったらトunksを灰まみれにしてやりますよ」

そう言つて二人で歩いていくが、明らかに低学年の二人組は浮いていて、ノクターン横丁を歩く人々はオスカーとクラリーナを指して、なにかぶつぶつ言っているようだった。

「陰気な場所ですね、死喰い人のドロホフに文句があるならかかって来いって言いますか？」

「ムーディの名前の方が効果的だと思うけどな」

「クラリーナ!! オスカー!! おまえさんたち、こんなところで何しちやるんか？」

オスカーとクラリーナはその大声に飛び上がった。後ろを見ると見間違はない大男、ホグワーツの森番のハグリッドが近づいてきている。

ハグリッドはオスカーとクラリーナをひよつと持ち上げてそのまま

運び始めた。まもなく、日の光とフォーテスキューのアイスクリームの看板、グリーンゴッツ銀行が見えてくる。

「お前たち一体ノクターン横丁なんぞで何をしとった？ 特にオスカーはあんなどこにしていると不味いことになるかもしれない」

「私たち、あほのトンクスに暖炉飛行を妨害されて、出る暖炉を間違えたんですよ、ハグリッド」

クラーナがハグリッドに説明する。確かに、キングズリーの見張りが無い状態であんな場所で捕まったりすれば不味いことになっていたらかもしれないとオスカーは思った。

「まあなんでもええが、誰かと一緒だったんか？」

「チャーリーの父親と一緒にダイアゴン横丁を回るはずだったんだけど」

「アーサーか？ まあそれならアーサーがくるまで俺と一緒におった方がええ」

「そのほうがいいでしょうね、なによりハグリッドと一緒になら目立ちますから」

そう言つて二人はハグリッドについて歩き出した。

「ハグリッドはなんでノクターン横丁にいたんだ？」

「俺はあれだ、その、卵とか色々…… まあほんとはレアの付き添いで来てたんだが、マルキンの店で時間がかかるつちゆうから……」

「卵？」

「大丈夫、何も買っちゃいねえ、ほれ、マルキンの店でレアが待ちっちょる」

オスカーは去年のルーンスプールもノクターン横丁でハグリッドが卵を購入したのではないのかと思った。

「レアって誰ですか？」

「今年、ホグワーツに入学するイツチ年生で、家族がいないから俺がついてきとる。去年のクラーナと一緒にだ」

オスカーは去年のことを思い出した。去年はキングズリーに付き添われて、教科書や大鍋何かを購入したのだ。キングズリーが見張りでなければ、オスカーもハグリッドに付き添われていただろう。いや

そもそも入学できていたのかも怪しいものだと思つた。

「ふーん、男ですかそれとも女？」

「女の子だ」

マダム・マルキンの店についた。ハグリッドのことを待っている女の子は店の前にはいないことから、まだ採寸中なのだろうかとおスカカーは思う。

するとドアが開いて、目の覚めるような金髪だが、男の子と見間違ふような短髪をした女の子がでてきた。

「おお、レア終わったか？」

「ああ、待たせてごめんねハグリッド」

「全然待つとらん、それにこの二人共に会えたしな、ほれレア挨拶するんだ。ホグワーツの先輩だぞ」

そうハグリッドが言うと、女の子がおスカカーとクラリーナの方を見た。笑顔で挨拶をしてくる。

「ああどうも、ボク、レア・マツキノンです。今年からホグワーツなんです、よろしく、先輩？」

マツキノンと言う名前を聞いて、おスカカーは思い出した。マツキノン。プルウエットと同じく、死喰い人の襲撃にあつて一家がほぼ皆殺しにされた純血の一族だ。

クラリーナも同じく反応していて、おスカカーとエストに初めて会つたときのような、獲物を見るような、値踏みするような目をしていた。

「ええ、よろしくお願いしますよ、私はクラリーナ・ムーデイです、こつちの男と一緒にホグワーツの二年生になります」

そう言うとクラリーナはもつと面白いことが起こるぞ、という目でおスカカーの方を見ってくる。間違いなく、ドロホフと名乗った時に目の前のレアがどういう反応をするのか楽しみなのだろう。

「おスカカー・ドロホフだ。ホグワーツの二年生で寮はスリザリン。こつちのクラリーナはグリフィンドルだけどな」

効果は劇的だった。おスカカーの口からドロホフと出た時点で、レアの顔色は真っ赤に変わり、眼を剥いておスカカーを凝視している。手はぶるぶると震えて、さつきマルキンの店で買ったであろう制服のロー

ブを取り落としそうだ。

さらに彼女が杖を持っていないにも関わらず、通りの木の葉やごみが舞い上がり、四人を取り巻く渦のようになっていた。幼少期に見られるような魔力の暴発に近い現象が起こっていた。

つまり、彼女は魔力が暴走しそうなほどの激情に駆られていることが外から見ても分かった。

「おやおや、これは一番の反応なんじゃないですか？ オスカー、好かれてますね」

「なんで闇祓いの家の娘と死喰い人の息子が一緒にいるんだ!! だいたいグリフィンドールとスリザリンは憎みあってるんじゃないのか!!?」

「私が誰と一緒にいるかは私が決めることです。家だとか寮だとかどうでもいいことですね」

「家がどうでもいいだ!!? ふざけるんじゃない!!!!」

「なんですかボクちゃん？ 私が自分の家やオスカーの家のことをどう思っているかと貴方には関係のないことですよ」

「クラーナ、やめろ」

クラーナに任せておくと、このままレアは爆発しかねない状態だった。割と人通りのあるダイアゴン横丁を行き交う人々が四人をじろじろと通り過ぎる振りをして見ている。

ハグリッドはこんな展開になることを予想できなかったのか、後ろでオロオロしている。

「あつ、アーサーおじさん、あれハグリッドとオスカー達なの」

「おおっ本当だ。良かった。見つからなかったら私がモリーに消失させられてしまうところだった」

後ろから、エストとウィーズリーおじさんがやってきていた。オスカーはなんとかなりそうだと思った。

「やあハグリッド久しぶりだね、おや？ 君はもしかして、マツキノン家の……?」

「やあアーサー、今レアを二人に紹介しようとしたところだったんだが、なんか相性が悪かったみたいでな……」

ハグリッドとウィーズリーおじさんがレアのことを話に出してもレアはクラリーナの方を睨みつけている。

「ねえ？ 二人共、その娘はだれ？」

エストがなんの空気も読まずにクラリーナとオスカーに尋ねる。クラリーナはさらに面白いことになったとばかりの表情になった。オスカーは嫌な予感がした。

「おやエスト、そうですね紹介しましょう。こちら、ホグワーツの新入生、レア・マツキノンだそうですよ」

そう言つてエストの視線がレアを捉える。レアの方は未だにクラリーナを睨んでいる。

「新入生なの？ エストはエストレヤ・プルウエットだよ？ スリザリンの二年生になるからよろしくね？」

今度の反応はもつと劇的だった。エストの名前を聞いた瞬間にまるで電球が切れたようにレアの顔色は真っ青になり、その両目は目の前のものが信じられないとばかりにエストとオスカーの間をゆらゆらしている。ぶつぶつと小声で何か言っており、「プルウエット」とか「ドロホフ」とかあり得ないとかが聞えてくる。

オスカーはレアが本当に不味い状態にあると思った。

「ハグリッド、マツキノンは次の買物があるんじゃないのか？」

「おおそうだったな、ほれ、レア、オリバンダーの店に行くぞ」

ハグリッドはレアを片手でひよいっと持ち上げて連れて行ったが、その間もレアの顔色は変わらず、ぶつぶつと何かを言っているようだった。

「あれ？ いっちゃった。エストなんかしたかな？」

「クラリーナが悪い」

「なんですかそれ、だいたいの原因はオスカーの名前ですし、私はオスカーの為を思つてマツキノンに忠告したというのに」

「どう見ても面白がつている顔をしてただろ」

「なんなの、またオスカーとクラリーナがわかんない話してるの」

エストまで怒りだしてしまった。オスカーにはお手上げだった。

「まあ、ハグリッド達は行つてしまつたみたいだし、みんなと合流して

「買い物を始めようか？」

そう言ったウィーズリーおじさんについてオスカー達は買い物を始めた。オスカーはその日間で、レアの顔や表情が忘れられなかった。

失われたダイヤモンド

楽しい夏休みは凄いい速度で過ぎてしまった。オスカーはエストやみんなと過ごすホグワーツが楽しみで仕方なかったが、『隠れ穴』での一か月はそれに匹敵するくらいの時間だった。

ウィーズリー兄弟と他の四人は良く、家の傍の畑で箒で遊んでいたがウィーズリー兄弟とエストはみんな箒で飛ぶのが上手かったし、トランクもそれと同じくらい飛ぶのが上手だったので、オスカーとクラーナが同じチームになってしまうといつもボコボコに負けていた。

最後の夜には豪華な夕食だったが、ウィーズリー兄弟のまだホグワーツに入学していない子供達はホグワーツ組が行ってしまうのを寂しがった。

翌朝、ウィーズリー家の眼の前には魔法省からレンタルした車が二台止まっていた。キングズリーとウィーズリーおじさんが借りてきてくれたらしい。

「魔法省から君への監視という口実で借りてきたんだ」

キングズリーがオスカーに耳打ちする。

「オスカーの死喰い人設定も役に立つときがありますね」

確かにクラーナの言う通り、今回に関してはオスカーという名目が役に立っている気がオスカーはした。なにせ、ホグワーツ組六人をトランクごと一気にキングズ・クロス駅に運ぶのは容易ではないからだ。

駅への道中は快適だった。魔法省から貸し出された車は見た目以上の容量を持っていて、六人分のトランクは悠々入ったし、他のウィーズリー家のみんなが乗っても車の中は不思議と一杯にならなかった。その上、信号待ちの度に一番前までワープした。

しかし、初めに乗った時刻が遅かったのか、九と四分の三番線に着いた頃にはすでにホグワーツ特急の発車まで二十分を切っていたので、みんなダッシュで特急に乗り込んだ。

「じゃあみんな、規則を破らずに元気で過ごすですよ」

ウィーズリー家のみんながオスカー達に手を振っていた。オス

カー達は開いているコンパートメントを見つけて、ホグワーツ特急が曲がって見えなくなるまで窓から手を振っていた。

コンパートメントは去年よりも騒がしかった。トンクスは夏休み中は禁止されていた七変化を使ってみんなをからかい始めたし、エストは相変わらず百味ビーンズを馬鹿みたいに試しまくっている。オスカーはエストがへんな味とかいうたびに口にスコージファイをかけた。

「そう言えばみんなはクイディッチの選抜試験を受けるの？」

「エストは受けようと思ってるよ？」

「私も!!」

トンクスがエストの顔で同意した。確かにこの三人は夏休みの遊びでも飛ぶのが上手かったので、寮の選抜メンバーに選ばれてもおかしくはないとオスカーは思った。

「私はパスですね、チャーリーやエストはおろか、フレッドとジョージにも勝てる気がしませんでしたからね」

「俺もパスだな、箒とか夏休みと一年生の飛行訓練の時しか乗ったこともないからな」

「あれー? もしかして二人でクイディッチの時間にまたなんかやる気なんじゃないの?」

「なんかって何ですか? もうエストと決闘するわけじゃないですし、これ以上決闘が上手くなっても相手がいないでしょう?」

去年までのクラーナとの戦闘訓練はエストとの決闘が目的だったし、そもそもあれはクラーナからのクリスマスプレゼントという扱이었다。今年是他の寮のみんなとは遊ぶことも少なくなるのだからかとオスカーは思い、すこし寂しくなった。

「じゃあ宝探ししない?」

「エスト、宝探しってなんだい?」

「ホグワーツにはお宝とか秘密の部屋みたいなのが隠されてるらしいの」

「スリザリンの秘密の部屋のことを言ってるんですか? 歴代の校長やダンブルドアが探しても見つからないものが見つかるとも思えない

いですけど」

ダンブルドアのすべてを見通すような目や、杖の一振りでもルーンスプールを封じてしまうような技量を見せられていたオスカーは、ダンブルドアが見つけれられないものをとても見つけられるとは思えなかった。

「うーん秘密の部屋が難しいなら、レイブンクローの失われた髪飾りっていう方かな？」

「それって頭が良くなるっていう、レイブンクローが持ってたっていうやつだよな？ ママが言ってたかもしれない」

「これ以上エストの成績が上がったら、先生方は点数の上限を突破させないといけなくなるな」

「もう……、別に成績の為じゃないもん。なんかニツクが言ってたんだけどね、ホグワーツを作った人たちのお宝の中でも。その髪飾りとグリフィンドールの剣はホグワーツにあるかもしれないだって」

「ニツクって首なしニツク？」

「そうだよ？」

「なんでグリフィンドールの寮霊と仲良くしてるんですか……」

だが、オスカーはもう何百年もホグワーツにいるであろうゴーストの話なら割と信憑性があるのではないかと思った。

ゴーストたちは人生？ 霊生？ に退屈しているためにホグワーツに流れる噂には敏感なのだ。

「だから、それを探してみようかなって思ってるんだけどどうかな？」

「まあいいんじゃないですか？ 見つからないと思いますけど」

「私も賛成。太った修道士にも聞いてみようかな？」

「僕も面白そうだと思うよ」

「オスカーは？」

「ああ、面白そうだし探してみるかな」

「やった!! じゃあ今学期の空いてる時間で探してみようね」

そうエストが言い終わるとそろそろホグワーツに着くというアナウンスが流れた。チャーリーとオスカーは女子陣が着替えるために一時的にコンパートメントから出た。出た際に隣の列車につながる

ドアに消えていく金髪がオスカーには見えた気がした。

ホグワーツ特急は間もなくホグズミードの駅に着いた。駅は雨こそ降っていなかったが、黒い雲に覆われていた。去年はハグリッドに引率されて湖をボートで渡ったが今年は馬車で行くらしい。

駅の外には百台ほどの馬車が奇妙な黒い、骨がむき出しに見える動物に曳かれて待ち受けていた。オスカーにはその生き物が馬というよりはドラゴンやトカゲといった爬虫類に近い生き物に見えた。翼も生えているが、鳥の翼というよりもコウモリなんかによく見えるのだ。

「なんかすごい生き物だなこれ」

オスカーは他の四人に話しかけたが、エスト以外は何を言っているのかという目でオスカーを見た。

「ほんとだね？　翼が生えてるからペガサスなのかな？」

エストが物怖じせずにその生き物のうなじを触ると、生き物は気持ちよさそうな顔をした。

「二人共なんのことを言ってるんですか？」

「えっ、もしかしてそこになんかいるの？」

クラーナとトンクスは訳が分からないという顔だったが、チャーリーはまさかという顔をして、エストが手を当てている場所を触りに行った。

「凄い!!　これって凄く珍しい生き物だよ!!」

「ほんとにそこになんかいるんですか？」

「ああ、何か馬とドラゴンを組み合わせたみたいなのがいる」

「オスカーとエスト以外には見えないってことなの？」

チャーリーとエストが触っている間、その生き物は嬉しそうにしていたのでオスカーは少なくとも、ルーンスプールよりは友好的な生き物だと思うことにした。

「これは多分、セストラルだよ、死を見た人にしか見えないペガサスの一種なんだ!!」

チャーリーがそう言った瞬間、奇妙な沈黙が流れた気がした。つまり、オスカーとエストが誰かの死を見たことがあるということに他な

らなかったからだ。

チャーリーは興奮していたが、いつもこういう雰囲気の際に気にしないエストでさえ、今回は沈黙していた。

「そろそろ乗りませんか？　組み分けとごはんを見逃すわけにはいかないでしょう？」

「そうね、クラーナがおなかをすかせてオスカーが食べられちゃう前に乗りましようよ」

「どうやって私がオスカーを食べるって言うんですか？　変身術でケーキにでも変ええる？」

「それはまあ食べるって言っても色々あるしね」

二人が気を利かせて乗り込むように促した。チャーリーはまだ興奮しているようだったが、オスカーとエストは馬車に乗っている間、しばらく無言だった。

「今年の闇の魔術に対する防衛術の先生は誰なんでしょうね？」

「確かに、ポドモア先生いなくなっちゃたしね」

「闇の魔術に対する防衛術は毎年、先生が辞めちゃうらしいよ」

去年のポドモア先生にはオスカーは世話になったので、他の先生になっってしまうというのは少し寂しかった。一番かわいがられていたエストも同様だろうとオスカーは思った。

「なんで一年で辞めちゃうのかな？　呪いがかかっているとかなのかな？」

「職種に対する呪いとかかけられるのか？　かけれたとしてもダンブルドアが解けない呪いがあるとあんまり思えないけどな」

「そうですね、偶然が続いているのか、相当ヤバイ呪いがかかっているのかどっちかでしょうか？」

「私は単に偶然だと思っただけだよ」

そんな談義をしている間に二人の沈黙は破られ、馬車もホグワーツの正面玄関前にたどり着いていた。

玄関ホームを抜けて、両開きの大扉を抜ければ新学期の宴が行われる大広間が見えてくる。空を模した天井は空の通りに真っ黒だったが、かえって燭台の炎やゴーストの真珠色の輝きが映えて見えた。

四つの寮があるテーブルに座りに行こうとみんなが分かれようとした瞬間、トunksが立ち止まった。

「ちよつとトunks。そんなところで立ち止まらないうでくださいよ、邪魔です」

「ママがいる」

「は？ 何言っているんですか？」

「あそこにママが座ってるんだけど」

そう言つてトunksは教員が座る席を指で差した。そこには見知っているスネイプ先生、スプラウト先生、マクゴナガル先生といった先生方に交じつて、柔らかそうな栗色の髪をした女の人が座っていた。その人はオスカー達の方を見ると一瞬、ウィンクした。

「なるほど、新しい闇の魔術に対する防衛術の先生つていうことですか」

「ええ〜!!!! 私何にも聞かしてもらつてなかつたんだけど!!!! パパもなんも言わなかつたし」

「トunksの両親らしいですね」

「クラーナどういう意味よ、それ!!」

「そのままの意味ですけど」

確かに、その女の人を見るとトunksの面影がある気がした。少しトunksよりも高慢というか気高くしたというかそういう印象が先に出るような顔だったが、眼は優しくそうだった。

「面白くなりそうだね？ オスカー？」

「まあトunksの母親つていうくらいだからな」

「だからどういう意味よ、それ!!」

しかし、あんまり各テーブルへの導線の上で立ち止まっているわけにはいかないの、オスカー達はそれぞれのテーブルに分かれた。

スリザリンのテーブルではエストは挨拶されていたが、相変わらずオスカーのことは無視された。

「あつ、男爵が座つてるあそこに座らない？」

「なんでもいいけど」

エストは血みどろ男爵が鎮座している席を示した。スリザリンで

も血みどろ男爵にひるまないのはエストくらいなものだとオスカーは思った。

「男爵、久しぶりなの」

「おお、これは姫、ご機嫌麗しく」

男爵はそう言って血まみれな服をはためかして一礼した。オスカーは少しだけペンスを思い出した。しかし、この男爵のエストに対する特別扱いはなんなのだろう？ オスカーは去年度の組み分けが終わって以来から疑問だった。

「ねえ、男爵は失われた髪飾りって知ってる？」

その瞬間、オスカーには男爵のただでさえ血の気の無い（ゴーストに血があるのかはわからないが）顔がさらに真っ青になったと思った。そうとうな衝撃を受けているようにオスカーには思えた。

「ほんとにロウエナ・レイブクローの持ち物らしいんだけど、ニツクがホグワーツにあるかもしれないんだって言ったの？ 何かしらない？」

「姫はそれを探すべきではない、断じて」

そう言っ、男爵は消えてしまった。オスカーは明らかに何かおかしいと思った。いつもの男爵ならエストとだけは長い間笑顔で喋るし、エストが城の中を移動するときにピーブズが何かしやうものなら、ボコボコにピーブズを打ちのめすくらいに好かれているのだ。その男爵が消えてしまった。

オスカーは少しだけ、失われた髪飾りについて胸騒ぎがした。

「変な男爵なの、なんでエストは探しちゃダメなんだろう？ ね、オスカーもおかしいと思うよね？」

「なんか、いつもの男爵じゃなかったな」

「うーんなんだろう？ あっ、組み分け始まるみたいだね」

大広間の中央に組み分け帽子が置かれて、今まさに組み分けが始まろうとしていた。

組み分け帽子が去年とは違う歌を歌って、組み分けが始まった。マクゴナガル先生が新入生を順番に呼び始める。

段々と一年生の列は少なくなってきた。オスカーは一年生の列の

中に見覚えのある金髪を見つけた。マクゴナガル先生が名前を読みあげる……

「マツキノン・レア」

間違いなく、ダイアゴン横丁でハグリッドに連れられていた女の子だった。

「オスカー、あの子なの」

「マツキノンだな」

レアはびくびくした足取りで前へでて、組み分け帽子を被った。少しの沈黙の中、帽子のつば近くの裂け目が動き、叫んだ。

「レイブンクロー！」

レアはまだびくびくした足取りで拍手で迎えられながらレイブンクローのテーブルへ座った。

「あの子、レイブンクローなんだね？ クラーナと喧嘩してたからグリフィンドールかと思ったの」

「なんでクラーナと喧嘩するとグリフィンドールなんだ？」

「だって、なんだかんだいって去年クラーナはグリフィンドールの生徒ばかりと喧嘩してたの」

「確かにそう言われればそうかもしれない」

オスカーはファッジ先輩の魂を抜かれた顔を思い浮かべた。確かにクラーナは他の寮ではなく自分の寮の先輩をおちよくっていた。

組み分けはつつがなく終わり、去年のエストのように何十分も待たされるような生徒はいなかった。

夕食が始まり、オスカーとエストはおなかを満たしたが、その間に男爵が戻ってくることはなかった。

「さて、すばらしいディナーを、みながそのお腹に収めているところで、学年度始めのいつものお知らせを始めよう」

ダンブルドアが話を始めた。ざわざわしていたテーブルは一瞬で静かになった。禁じられた森への立ち入り禁止やフィルチのバカバカしい規則が伝えられる。

「さて、今年は一人の先生を迎え入れることになった。なんとも闇の魔術に対する防衛術の先生を探すのは毎年難しくなっておるので、非

常にありがたいことじゃ。では、アンドロメダ・トンクス先生、闇の魔術に対する防衛術の新しい先生じゃ」

そう言つて、トンクス先生が立ち上がつて一礼すると大広間は拍手で満たされた。みんな美人の先生がくるのは嬉しいらしい。

ハツフルパフのテーブルを見るとトンクスが質問攻めにあつてゐる。

その後、ダンブルドアがホグワーツの校歌を指揮して、学生は寮へ向かうように促した。

「今年もよろしくね？　オズカー」

「ああ」

オズカーはエストの顔を見て、今年も楽しい一年だといいなと思つた。

悪霊の火

ホグワーツでの生活が再び始まった。

去年のようにグリフィンドールの生徒に襲撃されるようなことこそなかったが、やはりドロホフの名前が効いているのか、いつもの四人以外にオズカーと付き合おうというものはいない。

先生方はそのような態度を示す先生こそいなかったのがオズカーにとっては救いではあったものの、そもそも授業ではエストが嫌でも目立つので、オズカーが触れられるようなことはほとんどなかった。

去年から先生が変わったのは闇の魔術に対する防衛術だけだった。去年の先生はグリフィンドール出身にも関わらず、エストをえこひいきした疑惑があったので、今年の先生はスリザリン出身だったから、さらにえこひいきして点数を与えるのではないかとの噂が広まり始めている。

しかし、そんな噂は闇の魔術に対する防衛術の授業が実際に始まると霧散していった。

「とりあえず、自己紹介しておくわね、私はアンドロメダ・トンクス。今年一年の間、闇の魔術に対する防衛術の先生をすることになったわ、あとまだ座らなくていいわ、後ろに整理しててくれる？」

トンクスに似た魔女が自己紹介をする。やっぱり、どこかトンクスよりもきつそうな印象を受けるとオズカーは思った。オズカー達スリザリンの生徒はトンクス先生の言う通り、席から立って後ろに並んだ。

「魔法省の指導要領では、三年生では比較的大人しい闇の生物に関して実践的に学び、四年生では反対呪文、逆呪いについて学ぶことになっているの」

トンクス先生が杖を振ると、レッドキャップや河童と言った怪物たちの絵や、呪文をかけようとしている魔法使いに対して、これまた呪文をかけている魔女の絵が出てきた。

「だから二年生では闇の生物がどんな存在なのかとか、反対呪文はどうやって開発されたのか、そういう知識を蓄えることになっている

わ

また先生が杖を振ると絵は消えて、さつきオスカー達が座っていた椅子は綺麗に整頓され、教室の端に積み上げられた。

「けど、最初に闇の呪いがどういふものなのか見てみたいと思うわよね？ 知識を学ぶにしても、見たことがあるものを学ぶのとそうでないのでは大きな違いになるわ」

また先生が杖を振る。今度は必要の部屋で見たような青い泡がオスカー達を優しく包んだ。

「本当はね、六年生にならないとそう言った呪いは見せちゃいけないことになってるの、だから今からやることは内緒よ」

そう言っただけでオスカー先生はオスカー達にウィンクした後、今度は真剣な顔で杖を振った。

その瞬間、とんでもない熱量がオスカー達を襲った。赤と紫に近い色の炎が教室の中に現れたのだ。青い泡の保護呪文に守られているはずの生徒達にその熱が伝わってくる。

炎は様々な姿を取りながら、教室の中を荒れ狂った。巨大な蛇、山羊、悪魔、髑髏、おおよそ人が醜悪や邪悪だともうようなモノの姿を取り、暴れまわったのだ。

オスカーはその炎に魅入られた。

しばらく、炎が荒れ狂いやがて落ち着くと無事な姿のトンクス先生が現れた。

生徒たちは拍手喝采でトンクス先生を迎えた。

「オスカー？ ねえ、オスカー？ 大丈夫？ しつかりして」

その炎を憑りつかれたように見つめていたオスカーはエストの声で自分を取り戻した。

「ああ、大丈夫、大丈夫だ」

「ほんとに大丈夫？ 顔色がドクシーに刺されたみたいだよ？」

オスカーはドクシー妖精に刺されたことがなかったなのでその顔色がどの程度悪いのかわからなかったが、相当悪いことは伝わった。

「大丈夫だ。ちよつと暑かっただけだ」

「ほんとに？」

「ああ」

エストはまだ心配そうにオスカーの顔をのぞき込んでいた。

トunks先生が杖を振って、机と椅子を元に戻し、オスカー達に座るよう促した。

「さて、拍手をありがとう。じゃあそのドロホフ君、今の術はなんなのかわかる？」

オスカーはエストと話していたのが目立っていたのか、当てられてしまった。

「あく霊の火…… 悪霊の火です」

奇しくも、オスカーはさつき見た炎のことを知っていた。闇の魔術の中でも最も破壊的な魔術の一つ、悪霊の火だ。

「正解よ、スリザリンに五点あげるわ。そう、さつき見せた炎こそが、闇の魔術の中でも最も破壊的で破滅的な魔術の一つ。悪霊の火よ」

またトunks先生が杖を振ると巨大な蛇の姿を取った炎がマグルや魔法使いと思わしき人々やゴブリン、巨人、オオカミ人間といった生物を追い回している絵が浮かび上がった。

「あの炎は基本的にあらゆる魔法的な法則を破壊して、魔法使いやその他の生き物、闇の生き物、魔法具等を破壊するのよ、多くの魔法使いはあの炎を操ることができずにその代償を自らの体で支払ったわ」
絵が動いて、炎の蛇の後ろに立って笑っていた魔法使いを飲み込んだ。

「じゃあ、これから学んでいくものについても分かったことだし、教科書を出して、ちゃんとした授業に戻りましょう。貴方たちもあの炎に呑まれたくはないでしょう？」

そう言って笑ったアンドロメダ・トunksはニンファドーラ・トunksが悪戯をした時の笑い顔と本当にそっくりだったとオスカーは思った。

その後の授業は普通に進んだ。先生がとんでもない闇の魔法を使うこともなかったし、反対呪文の開発法だとか、闇の魔法生物の分類の歴史だとかを学んでいた。

だが、その授業の間中、オスカーは自分の顔色が戻ってないことを

自覚していた。エストは授業の間ずっとオスカーの方を心配そうにのぞき込んだ。

「じゃあ、今日の授業はここまでね、来週までに攻撃呪文の系統について羊皮紙一枚にまとめteくること、解散!!!!」

授業が終わるとエストはすぐにオスカーを医務室に連れて行くとした。

「マダム・ポンフリーに見て貰った方がいいの」

「大丈夫だって、エストはクイディッチの選抜があるだろ？ 早く行った方がいい」

そう言つて、オスカーはエストをクイディッチの競技場へ連れて行くとした。しかし、エストは頑として動かない。

「マダム・ポンフリーのどこに行くつて言うまでクイディッチの選抜にはいかないの」

そう言つて仁王立ちになるエストにオスカーは困り果ててしまった。

「おやおや、また決闘でもするんですか？ お二人さん」

後ろからクラーナが現れた、出てきた教室から見て妖精の魔法の授業が終わったところなのだろう。チャーリーも教室からでてきた。

「二人共こんなところで何してるんだい？ 今日スリザリンのクイディッチの選抜じゃなかったの？」

「なんでグリフィンドールのチャーリーが日程を知ってるのか分かんないけど、オスカーが顔色が悪いのに医務室に行かないつて言うの」

「だからちよつと暑かつただけだつて」

「暑かつただけじゃあんな顔色にならないの、アスカバンから出てきた後みたいなの顔色だったもん」

クラーナとチャーリーに説明すると、エストは腕を組んでオスカーを睨みつけ、クラーナとチャーリーはオスカーの顔をのぞき込んだ。

「確かにまだ百味ビーンズの外れを引いたみたいな顔をしてるよ、オスカー」

「分かりました。このあほのオスカーは私たちがマダム・ポンフリーに引き渡しますから、エストはクイディッチの選抜に行つたらどうで

すか？」

「むう…… 絶対にオスカーを医務室に連れてってね？」

クラリーナとエストがやり取りして、やっとエストはオスカーを開放してクイディッチの選抜に向かった。

「で？ 何があつてそのヌルメンガードに幽閉された顔になつたんですか？ 叫びの屋敷の幽霊にでも取り憑かれました？」

「別に授業中に気分が悪くなつただけだ。だいたい叫びの屋敷の幽霊とかもういなくなつて久しいんだろ？」

「それがそうでもないらしいよ、最近なんかまた音が聞こえるらしいって噂らしいんだ」

「ゴーストもよく引越しをするんだな」

そうやり取りするとクラリーナは大きくため息をついた。

「なるほど、エストにも私にもマダム・ポンフリーにも喋りたくないつてことですね」

「だから暑くなつただけだつて」

「それじゃすまない顔をしてたから、エストも私もチャーリーも貴方を捕まえてるんですけど」

「そうだよオスカー、普通に医務室に行った方がいいと思うけどな、マダム・ポンフリーはああ見えて口が堅いからね」

オスカーの脳裏にマダム・ポンフリーが浮かぶ。去年度にグリフィンドールの生徒に追い回されてけがをした際に何度も世話になつたが、確かにマダム・ポンフリーはいちいちその理由を聞いたりはしなかつた。

しかし、マダム・ポンフリーは生徒達のそういつた事情をダンプルドア先生にだけは伝えているのではないかとオスカーは思った。

「あら？ 貴方達、ニンファドローラのお友達よね？」

先ほどオスカー達が授業をしていた教室からトunks先生が出てきた。オスカーの顔を強引にのぞき込んでくる。

「ドロホフ君よくみたらなんか顔色が悪いわよ？ 三人ともちよつといらつしやい」

そういつてトunks先生は三人を強引に先生の居室へと連れて

行った。

トンクス先生の居室はキッチンと整理整頓されていて、まさに品と由緒のある魔法使いの部屋という感じだった。

オスカーはこういうところはトンクスには遺伝しなかったのだなと思った。

「ほら、これを食べなさい」

そういつてトンクス先生はオスカー達にチョコレートを手渡した。

「そのチョコレートを食べればだいたいの場合は顔色は良くなるわ」

チョコレートを食べると何やら体の中が熱くなつた気がした。

「ほんとは吸魂鬼とかレシフォールド用なんだけどね、ほら少しはましになつたわ」

オスカーの顔をのぞき込んでトンクス先生はそう言った。

「ここなら他の生徒もいないし、好きに喋れるわ。オスカー君、クラリーナちゃん、チャーリー君よね？ ニンフアドーラが去年はよくふくろう便で貴方達の話をしてくれてたわ」

トンクス先生が杖を振ると今度はティーカップが先生と三人の目の前に現れる。中には熱い紅茶が並々と注がれている。

先生は落ち着きある動作でそれを飲んだ。オスカー達も先生に習って紅茶を飲もうとした。

「それで？ オスカー君はエストちゃんとクラリーナちゃんのどっち派なの？ ニンフアドーラからのふくろう便は四分の三くらいその内容なのだけけど」

クラリーナが紅茶をむせ込んだ。チャーリーは隣でそれを見て笑っている。

「授業中はエストちゃんとべったりなのに、授業が終わったとたんにクラリーナちゃんと一緒にいるとはやるわね、そもそもスリザリンのオスカー君がグリフィンドールの生徒と仲良くしてるのも凄いわ」

トンクス先生は本当に感心しているという感じだった。

「やっぱり、トンクスはそればかりなんですわね、そんな事実はないですから!!!!」

「あらそうなの？ グリフィンドールとスリザリンのカップルって口

マンチックで先生はいいと思うんだけどね、私もマグル生まれの主人と駆け落ちした口だから応援するわよ」

そういつて顔を赤くしたクラリーナを笑うトンクス先生は本当にトンクスにそっくりだとオズカーは思う。さつき紅茶を飲んでいた人とは別人のようだ。

「オズカー、髪飾りのことを先生に聞いてみたらいいんじゃないかな？」

「確かにそうだな」

「あら？ 髪飾り？」

「そうです、レイブンクローの失われた髪飾りをいま私たちは探してるんです」

クラリーナは話題を変えたいのか、早口でまくし立てた。

「あれはおとぎ話よ？ 貴方達も知っているでしょう？」

「でも、おとぎ話ってというのは大概なにかの事実に基づいてできるものじゃないんですか？」

クラリーナがまた早口でそう言うと、トンクス先生はまた笑う。

「いいこと？ クラリーナちゃん。失われた髪飾りってというのは失われたという部分が重要なのよ」

「失われた…… ですか？」

「そう遙か昔、四人の創始者がまだいたころにね」

「つまり、どこにあるのか知っている人はいないってことですか？」

そうオズカーが言うとトンクス先生は、チツチッと指を振った。

「そうね、今生きている人に聞いても千年前のことなんて分かるわけないでしょう？ だって髪飾りが失われた時の記憶を持つ人はいないのだから」

そのトンクス先生の言葉を聞いて三人はハッととなった。最初に、髪飾りの話をエストは誰から聞いたと言っていたのか？ トンクスはあの時だれに聞いてみようと言っていたのか？

「ゴーストに聞けばいいっておっしゃっているんですか？」

「少なくとも数十年しか生きていない私に聞いても仕方ないし、ゴーストたちの方が私たちよりも生きた記憶を持つてるんじゃないかし

ら？」

三人はそれを聞いて顔を見合わせた。ゴーストならば千年前の記憶を持つ人すらいるかもしれないのだ。ゴーストの記憶が生きているかどうかは別として、失われた時の記憶が分かれば髪飾りがホグワーツにあるかどうかも分かるかもしれない。

「それにいいことを教えてあげるわ、ゴーストにはね、その人が死んだ日、絶命日を祝うっていう習慣があるのよ」

「絶命日？　ですか？」

「そうよね、死んだ日を祝うなんて私たちにはなじみがないことだけどね、ホグワーツのゴーストの絶命日なら、それは多くのゴーストが集まるでしょうね」

話を聞くゴーストが多ければ多いほど髪飾りのことを聞けるかもしれないし、もしかしたら千年前からいるゴーストすらいるかもしれないとオズカーは思った。

絶命日パーティ

「後で絶対どんなのだったか教えてよ？」

「ああ、まあ生きてる奴が行って楽しいものなのかは分かんないけどな」

「絶命日パーティ自体もそうだけど、髪飾りの方もだよ」

「まあ寮に帰ったら私が談話室で話しますよ」

クラリーナがやれやれという顔をしてチャーリーに言った。

「絶対だよ？ クラリーナ」

「チャーリーが練習から帰ってくる時間に眠くなってなかったらいますよ」

「クラリーナそれ絶対寝る気満々でしょ？」

「失敬な、あほのトンクスと違ってほんとに眠くなかったらいますよ」

「絶対寝る気なの」

そういつて、チャーリーをクイディッチの練習に四人は送り出した。ちなみにチャーリー、エスト、トンクスの三人は無事クイディッチの選抜に合格した。

チャーリーとエストはシーカー、トンクスはチェイサーになるらしい。オスカーはそれを聞いて、クイディッチの試合の際にどのチームを応援するかが難しくなると思った。

「で、太った修道士の絶命日パーティっていうのはどこでやるんですか？」

「地下牢だつて、こういうのは地下牢みたいな雰囲気のある場所でやるのがゴーストの常識らしいよ」

トンクスが答える。トンクス先生に聞いた後、トンクスが太った修道士に聞いたところ、直近で太った修道士の何百年目の絶命日パーティを行うことが分かったのだった。

「魔法薬の授業といい、スリザリンの寮といい、地下牢にはそういうのを集めるなんかがあるんですかね？」

「もう、なんかつてなんなの？ そもそもなんでクラリーナはスリザリンの寮の場所を知ってるの？」

「油断大敵です」

地下牢に向けて歩きながらクラーナが答える。

「答えになってないだろ」

「敵の本拠地は知っておかなければならないですよ」

「こんなこと言つてごまかしてるけどほんとはオスカーの寝室を襲撃するためでしょ」

「意味わかんないこと言わないでください」

こんどはクラーナがやれやれとトングスの方を見た。

「そもそも合言葉がわかんないと入れないの」

「どうせ純血とか聖二十八の一族とか穢れた血とかその辺でしょう？」

「ええ!? なんて知ってるの?」

「オスカーと秘密で会うためにお互いに教え合つてるとか?」

「しばきますよ、適当に言っただけですよ」

なぜかそのあとオスカーが二人に問い詰められたが、そもそも多分クラーナは本当に適当に言っただけなので、オスカーには答えようがなかった。

絶命日パーティーに出席するため、四人は地下牢へ進んでいたが、地下牢へと続く道はいつもと違いなにやら黒い蠟燭に青い炎を灯して飾り付けられていた。

「やっぱり、レイブンクロー寮に関連するゴーストに聞くのがいいのかな?」

「まあ普通に考えるとそうだよな」

「レイブンクローの寮霊は灰色のレディだったっけ?」

「そうですね、一概には言えないんじゃないですか? むしろ千年前からホグワーツ城にいるゴーストとかに絞ったほうがいいんじゃないですかね」

オスカーは確かにもし、創始者たちと同じところからいるゴーストがいるのなら、簡単に髪飾りの場所がわかるのではないかと思った。

「そんな昔からゴーストがいるのかな? ニックも太った修道士もそんなに前の人じゃないよね?」

「そうですね、ニックは十四世紀だか十五世紀だかに死んだとか言ってた気がします」

「太った修道士も何百回目とか言ってたから、そんなに前じゃないわね」

地下牢へと足をさらに進めると四人は凄い勢いで温度が下がってきているのを感じた。オスカーは寒さを防ぐためにローブから体がでないようにした。

地下牢の方から、非常に耳障りなガラスを金属でこするような、黒板を爪でひつかくような音が聞こえてくる。

「めっちゃ行く気なくなってきたんだけど」

トunksは身震いして、やる気のない顔をした。

「貴方が取り付けてきたんでしよう。主賓なんだからしつかりしてください」

「私まだ生きてるから招待に値しないんじゃないかな」

「四人共生きてるの」

「太った修道士がこつちに手を振ってるな」

地下牢の中は文字通りに現実の世界とは思えない光景だった。

何百もの真珠色のゴーストが浮かび、ダンスやら談笑なんかをそれぞれがしている。地下牢は道中にあつた青い蠟燭と真珠色のゴーストで全体が青白く光っているのだ。

ステージの上にはノコギリで耳障りな音楽を演奏している一団がおり、その横で太った修道士がオスカー達に向けて手を振っていた。

「凄いわね、デットテッドマンションみたい」

「なんですか？ デットテッドマンションって？」

「マグルの映画よ、こんな風にゴーストが一杯でてくるお話があるのよ」

「へえ、映画ってのはなんなのかよくわからないですけど、マグルにはゴーストなんて見えないのに不思議ですね」

「そんなの私にだって分からないわよ、てかめっちゃ寒いわ」

「それには同意するの」

「早く話を聞いて帰らないと俺らもゴーストの仲間入りしそうだな」

四人はブルブルと震えながら、話を聞くゴーストを探そうとしたが、そもそもゴーストが多すぎて誰に話かければよいのか皆目見当がつかなかった。

しばらくあてもなく歩いてみたが、ゴースト達は生きている四人に驚いたり、自分の首でポロを始めたたり、足と手を交換した状態で歩いていたりとどんだん四人の精神力を奪って行った。

すると、明らかに他のゴーストとは毛色の違う、けばけばしいオレンジ色のパーティ用の帽子を被ったゴーストが現れた。

「あれ、ピーブズじゃないんですか？」

クラリーナがそう言うのとピーブズはこちらを振り向いた。最初は意地の悪いニヤニヤ笑いをクラリーナに向けていたが、その横のオスカーを見ると微妙な顔になり、エストの顔を見るとめったに見せない緊張した顔になった。

「姫様はなぜこんなところに？ 男爵様はいらっしゃいませんか？」

ピーブズは直立不動の敬礼をエストに見せながら訪ねた。相変わらずエストには逆らえないらしい。

「エスト達はね、失われた髪飾りっていうのを探してるの、それでゴーストさんに聞こうと思ってきたんだよ」

「失われた髪飾りですか？ ピーブズめは存じあげません」

そういつてピーブズは後退して、消えようとしたがエストが引き留める。

「ピーブズ待つ。千年くらい前からいるゴーストって誰がいるのかな？」

「ピーブズめが存じ上げているのは男爵様とレイブンクローの姫様です」

「男爵様って血みどろ男爵ですよ？ レイブンクローの姫様って誰なんですか？」

クラリーナがそう聞くとピーブズはさらに怯えているというか、恐れ多いというか、おおよそピーブズに似つかない顔をした。オスカーがピーブズのそんな顔を見たのは、入学時にエストにちよっかいを出した瞬間に血みどろ男爵が激高したときだけだった。

「ピーブズめの口からは恐れ多いですが、レイブンクローの姫様とは灰色のレディと呼ばれている方のことです」

「なんで姫様なの？」

「それは灰色のレディがホグワーツ城主のお嬢様だからです」

一瞬の沈黙があった。今ピーブズは重要な事実を言ったのは間違いがなかった。オスカー達が探していたのは失われた髪飾り、ホグワーツ創始者の一人、ロウエナ・レイブンクローの持ち物だった。

「それって、灰色のレディがロウエナ・レイブンクローの子供ってことなの？」

「そうピーブズめはうかがっております」

「灰色のレディは今日ここに來てるの？」

「レイブンクローの姫様がこのような場所に來られるとは思いません。生者である姫様がこのような場所に來られていることにもピーブズめは驚いております」

四人は顔を見合わせた。衝撃の事実だった。間違いなく、灰色のレディならば失われた髪飾りがどうなったのか知っているはずだと考える。なにせ所有者の子供なのだから。

ピーブズは四人が事実を受け止めている間に消えていった。男爵にエストと話しているのを見られれば、とんでもないことになるかもしれないと思っっているのだろう。

「とりあえずここから出ない？ 寒すぎてとてもじゃないけど何も考えれないんだけど」

「俺もそう思う」

トンクスとオスカーが震えながらそう言って、オスカー達は絶命日パーティを後にした。

地下牢から離れると体の芯から震えるような寒さはなくなり、四人はホッと一息をついた。

「で？ 灰色のレディがレイブンクローの娘だっということが分かったわけですけど、とりあえずレディを探せばいいんですかね？」

「そうよね、そりゃあ持ち主の娘ならどこにあるか知ってるんじゃない

いの?」

「でも、灰色のレディはレイブンクローの寮霊だよね? エストがレイブンクローの生徒なら絶対最初に聞くとと思うな」

「聞いたところで教えてくれるとは限らないってことか」

そう言いながら、あてもなく歩いてきた四人はいつの間にか玄関ホールについていた。

ちょうどレア・マツキノンが校庭から玄関ホールを通って中に入ってきた。

「おや? マツキノンじゃないですか、ダイアゴン横丁ではお世話になりましたね」

クラリーナがそうレアに声をかけると、レアは可哀想になるくらいにビクツと反応した。

「クラリーナが喧嘩売るから怯えてるじゃないの」

「ダイアゴン横丁では向こうから喧嘩売ってきたんだから問題ないでしょう」

「問題しかないだろ」

しかし、オスカー達がそうやりとりしている間もレアはびくびくしており、ダイアゴン横丁で見られたような威勢の良さや自信のようなものが見られないとオスカーは思った。

「ねえ? レアはレイブンクローだね? 灰色のレディがどこにいるかって知ってる?」

「灰色のレディ? ですか? 時々、天文台の塔じゃない方の塔で話を聞いてもらっているの、今日もそこにいますけどね……」

「レアってもしかして、灰色のレディと知り合いなの?」

「ボクはレイブンクローにしては…… その…… あんまり魔法がでないから、そしたら灰色のレディが話しかけてくれたんです」

エストが尋ねると、おずおずとレアは灰色のレディとのいきさつを話してくれた。

確かに、知識や成績偏重のレイブンクローでは魔法に対する実績がないと追い詰められてしまうのだろうとオスカーは思った。

「マツキノンと言えば、ちよっと前までは魔法界でも指折りの名家

だったはずだと思っただけだ」

クラリーナがそう言っただけだ、またレアに視線を向けるとレアはまたビクツツと体を震わせた。唇は噛みしめられていて、こぶしはふるふる震えている。

「クラリーナうるさいの、ねえ今エスト達は灰色のレディに会いたいと思ってるんだけど、紹介してくれる？」

「そうね、灰色のレディに会わせてくれない？　クラリーナはなしでいいから」

「いいですけど……」

そう二人がクラリーナをぞんざいに扱おうとやっとならレアは少しだけ笑った。それでもクラリーナとオスカーの方を見ようとはしなかったが。

「いいじゃないですか、私たちが探しているのは失われた髪飾りですからね、マツキノンの成績もあがるんじゃないですか？」

「失われた髪飾り？」

「レイブンクローがつけてた髪飾りのことなの、なんかつけると頭が良くなるらしいの」

「先輩たちは成績をあげたいんですか？」

「エストの成績をこれ以上上げようとするんなら、まず成績の上限を上げないとだめだろうな」

「それには同意するわ」

「面白そうだから見つけようとしてるだけなの」

五人はレアの先導に従って天文台ではない方の塔へ向かっていた。確か三年生では古い学か何かをやるための塔のはずだった。

今日は太った修道士の絶命日パーティのせいかな、ホグワーツのゴーストはほとんどいなかったが、肖像画は別だった。

「小さな少女よ！　今宵もまた知恵ある姫に迷いを打ち明けるのか？」

「ついてこないでください！！！！」

「少女よ、その刃を抜き放ち、世間にその勇気を示すのだ！　さすれば迷いはなくなり、道は開けるであろう！！」

「だからついてこないでってば!!!」

カドガン卿と書かれた肖像画からずっと肖像画を渡り歩いてついでくるその人物は、なにやらレアに向けて叫び続けている。

「めっちゃうるさいんだけど、どうにかならならぬのこれ?」

「そうですよ、マツキノン、どうかしてください」

「そんなこと言われても、カドガン卿はどうにもならないよ、ボクがここにくるといつもこうなんだ」

レアは困り果てている顔だった。このカドガン卿とかいう肖像画は隣の肖像画が迷惑しているのも無視してレアを追いかけてくるのだ。終いには馬や鎧を落としても追いかけてきた。

「友に心を打ち明けることこそ、戦場に出向くことに匹敵する本当の勇気の一つである!! さあ、紳士、淑女諸君!! 進め、進むのだ!!」

塔の階段を上り、肖像画がない場所になってやっと、オスカー達はカドガン卿を振り切った。最上階と思わしき場所に出ると、天文台やグリフィンドールの寮があるであろう塔。黒い湖や禁じられた森といったホグワーツをあらゆる場所が見渡せる場所だった。

「いい場所ですね」

「そうだな、ホグワーツの全部が見える」

そろそろ日が沈み始めようとしており、ホグワーツは茜色に包まれようとしていた。

「レディ? レディ? いますか? ボクです。レア・マツキノンです」

レアが四方に向かって声をかけて、灰色のレディを呼ぼうとしている。オスカー達もどこからでてるのかと思いい、それぞれに別の方向を見回した。

「レア、今日はお友達が沢山いるのね」

声が聞えた。どこから聞こえたのかオスカーにはすぐに分かった。灰色のレディと思わしきゴーストは塔の床下から現れた。

オスカーはそのゴーストは幾回か廊下で通り過ぎたのを見たことがあったが、ちゃんと顔を見たことはなかった。

そのゴーストは長身で長い髪と床まで続く長いマントを着た、確か

に美しいゴーストだった。

そして顔を見ると、なぜ血みどろ男爵やピーブズがエストのことを
姫と言っていたのか分かった気がした。

創設者の娘

「貴方が灰色のレディなの？」

「そのとおり」

エストと灰色のレディは正面から向き合っていた。

似ている。オスカーはただそう思った。エスト以外の他のみんなもそう思っているだろう。もちろん、身長だとか年齢・髪質だとか、そういったことは違っていたが灰色のレディとエストは確かに似ていた。

印象として、灰色のレディの方が尊大で誇り高そうに見え、エストの方が優しい気な雰囲気があるようには感じられたが、それ以上に似ていると万人は考えるだろうとオスカーは思った。

「やっぱり、思ってたけど、二人はそっくりなんだ……」

レアが二人の顔を交互に見て、そうつぶやいた。

「それは違うわね、彼女は私よりも私の母に似ている」

灰色のレディはエストを真っ直ぐに見つめてそう言った。

「貴方のお母さんって、ロウエナ・レイブンクローのことなの？」

灰色のレディは静かに夕暮れに染まる塔の中で静かに佇みながら頷いた。

「ええ、貴方はとても母に似ている。貴方が成長したなら、レイブンクローの寮生ならだれもがそれに気づいたでしょう。千年時が経っても、レイブンクロー寮にある像は変わらぬまま今も置かれているのだから」

妙な気分だった。半透明なゴーストと実体のある生徒は夕日の中、そっくりな顔で問答を続けていた。二人の他に誰も喋ろうとは思えなかった。

「男爵がエストのことを姫と呼ぶのは、エストが貴方やロウエナに似てるからなの？」

男爵という言葉を聞くと灰色のレディは少し、悲しそうな、苦々しいようなそんな顔をした。

「そうでしょうね、あの男爵は貴方のことをそう呼ぶでしょうし、貴方

に初めてあつた時にはさぞ驚いたでしょう」

オスカーはホグワーツに初めて足を踏み入れたあの日、組み分けを終えてエストが自分の隣に座った時、隣にいた血みどろ男爵がした顔を覚えていた。彼はこれでもかというくらいにエストを目を見開いて見ていたのだ。

「聞いていいのかわからないけど、貴方は男爵とどう関係なの？
ピーブズは二人が千年前からここにいるゴーストだって言つたの」

そのことについて聞かれると灰色のレディの顔色が変わったようにオスカーには思えた。もちろんゴーストに血は通っていないのだから、真珠色の濃淡が変わつたとしか言いようがないが、まるで彼女は恥じ入って、顔を赤くしているようにオスカーには思えたのだ。

「貴方達は母の髪飾りを探していたのでしよう？ 男爵と私はあの髪飾りを巡って、このように現世を彷徨うことになったんです」

オスカーはあまりいい予感はしなかった。あの血みどろ男爵が血みどろになつた理由こそがその髪飾りに関わっている気がしたのだ。

「それは…… 聞いてもいいことなの？」

エストは不安そうな顔になり、一瞬だけオスカーに視線を移してから灰色のレディにそう聞いた。

「スリザリン寮の優しい少女、貴方はとても城の者に好かれている。ゴーストも、肖像画も、鎧や彫像達も、母が作つた階段や秘密の通路も、貴方が信頼に足る人間だといっている」

そう言つた灰色のレディはエスト以外の四人を見回した。
「ここに四寮の学生が集まっているのもそう。私が城に生きていたころから、四寮はいがみ合い、それが原因の一つとなつて私の母は体調を崩したのだから、それがどんなに素晴らしいことなのか私は知つてる」

またなにか悲しそうな顔で灰色のレディは塔から見えるホグワーツを見渡した。

「貴方なら、おろかだつた私よりもよっぽどあの髪飾りにふさわしいかもしれません」

今度は間違いなく、灰色のレディがそのことを悔いていて、自身に腹を立てていることがオスカーにはわかった。オスカーは去年度に何度もその顔を自分がしていたことを覚えている。

「私は最初に恐ろしい裏切りをしました。母よりも、あの時代最も賢く偉大だといわれた魔女よりも、私は重要で賢く、偉大な人物になりたかった。だから、私はあの髪飾りを盗み出したのです」

隣にいるレアの顔が悲嘆に暮れていた。まるで灰色のレディの胸の痛みをそのまま受けているような顔だった。

「母は、私が髪飾りを持って逃げたことを絶対に認めなかった。同じ創始者の三人にさえそれを言わなかった。でもそのあと、母は病気になるってしまった」

その場にいた生あるものはその話に夢中になっていた。千年前のおとぎ話、その生きた記憶が目の前で話されていたのだから。

「母は私が許されざる裏切りをしたにも関わらず、私を許して、私に会おうとした。死ぬまでになんとしても会いたいと、だから絶対に私を見つけ出すであろう男にそれを頼んだの」

オスカーにも、他の四人にもそれが誰なのかはもうわかっていた。「血みどろ男爵、今はそう呼ばれている男は私のことを愛していたわ。だから長い間、彼は私を探し求めて、はるか遠くアルバニアの森まで探しに来たのよ。でも私は彼を受け入れず、帰るのを断ったの」

灰色のレディは大きく深呼吸して、はつきりとより大きな声で喋り続けた。

「彼は生前は短気で知られていたの、彼は私が断ると激昂して、私を刺したわ。そしてそのあと、自分のしでかしたことに絶望して、私を刺した武器を使って自決した。それからずっと、何百年、千年近い時が経っても、彼は鎖を体に巻き付けて自分のしでかしたことを悔い続けているというわけよ」

もう日は沈みかけ、塔には夜のとぼりがおりかけていたが誰も何もしやべらなかつた。

「だから、失われた髪飾りは失われたまま、ホグワーツに戻ることはなかったわ、母もその後、髪飾りを取り戻すことなく亡くなったのだから」

ら」

そう灰色のレディは締めくくった。レアの瞳には涙が浮かんでい
たし、他の四人の表情も晴れないものだった。

「今の話は私たちにしたのが最初なのですか？　千年近い時間の中で
？」

これまで喋らなかつたクラリーナが理路整然と質問した。確かに、千
年近い時の中で他の人に灰色のレディが喋ったことはあるかもしれ
ない。そうなると失われた髪飾りも二人の最後の場所にあるとは限
らないのではないのかとオスカーは考えた。

しばらく、灰色のレディは沈黙していた。

そしてその後、灰色のレディが一瞬した表情はさっきの髪飾りを盗
んだと告白したときの表情と同じくらい自分を恥じる表情だったと
オスカーは思った。

「いえ、貴方達で二回目になります。その時話したのも貴方やその少
年と同じスリザリンの寮の生徒でした。しかし、髪飾りがホグワーツ
にないことは間違いないでしょう。彼が死ぬまでにホグワーツに
戻ったという話は聞きませんでしたから」

つまり、オスカー達以外にこの話を聞いた人物はホグワーツにその
髪飾りを戻すこともなく、死んだ。だから、失われた髪飾りは今もア
ルバニアにあるかもしれないし、その人物の家で眠っているのかもしれ
ない、どちらにしろオスカーはその髪飾りをホグワーツで見つける
ことはできないのだと思った。

「灰色のレディ、ありがとうなの」

そうエストが灰色のレディに礼を言うと、灰色のレディはその言葉
と自分の言ったことを噛みしめるような表情をしたあと、校舎の方へ
消えていこうとした。

「待ってくれ、貴方はどう思っているんだ？　貴方は髪飾りは失われ
たままでもいいと思っているのか？」

オスカーの口から言葉が飛び出た。髪飾りが原因で親子の不和が
起き、その体と家族を失うことになったのなら、髪飾りをどうしたい
のかは重要なことなのではないのか？　少なくとも、オスカーは自分

がそうだったのなら、ホグワーツへ、本当の持ち主がいた場所へ戻りたいと考えるだろうと思っただのだ。

呼びかけられ、こちらを振り向いた灰色のレディの顔はどこか泣いているようにも、衝撃を受けているようにも思えた。

「貴方は心優しいのね、でも心配は無用よ、あの髪飾りは誰にも使われずに、争いの元にならずに、失われた髪飾りであることが重要なので、灰色のレディは優しく言うと、静かに暗いホグワーツへと消えていった。」

オスカーには自分の罪の象徴が見つからないまままでいたほうが良いと納得できるまで一体どれほどの時が必要だったのか、見当もつかなかった。

五人は静かに塔の階段を下りていた。上るときは騒がしかった力ドガン卿も今回は何故か騒いでいなかった。

「私たちよりも先に灰色のレディから話を聞いた人ってだれだったんですでしょうか？」

「スリザリン寮の人って言ってたわ、それに彼って」

「マーリンとかなのかな？ スリザリンで一番有名な魔法使いだし」

「誰にしる、失われた髪飾りは失われたままか」

レアは四人の会話には混ざらずに黙ってついてきていた。

「エストが見つけたら、ホグワーツに戻しにいくと思うの、レディの話を聞いた人ならみんなそう思うんじゃないかな」

「そうね、だって頭が良くなるだけのはずでしょ？ 賢者の石みたいなずつと生きられるわけじゃないから、ずっとその人が持つても意味ないと思うわね」

「まあ実はノクターン横丁とかで埃を被ってるだけかもしれないけどね」

「魔法省が文化財として保護するレベルのものだと思うけどな」

確かに、クラーナの言う通りにノクターン横丁のような怪しい場所で見つけられているのかもしれないし、誰かの家で保存されているのかもしれない。

しかし、オスカーは灰色のレディがああいったのだからそれでよいのかもしれないと思った。

「ホグワーツに戻しに来たんならレディに挨拶するはずだもんね……
やっぱり、お宝ってないのかな」

「グリフィンドールの剣はどうなんですか？」

「真のグリフィンドール生なら取り出せるってやつ？」

「いったい何から取り出せるんだ？」

グリフィンドール由来の壺やロッカーでもホグワーツにあるのだろうか？ オスカーは一瞬、赤と金に装飾された壺を想像した。

「そもそも真のグリフィンドール生ってなんなんですか？ 死喰い人を百人くらい捕まえたら認めて貰えるんですかね？」

「それだとクラーナのおじさんくらいしか認められないの」

もう一つのお宝をこれから見つけるのは容易ではないとオスカーは思った。そもそもこれ以上ゴーストと関わるのは勘弁して欲しかったのだ。ゴーストに近づくと物理的に寒さを感じるのだ、オスカーはクラーナに取られてしまったウィーズリーおばさんのセーターが恋しかった。

「ねえ、みんなはクリスマスどうするの？」

「クリスマスですか？ 私はどうせホグワーツにいますけど」

「私はパパのところに帰ろうかな、ママと私がいなくて寂しいだろうし」
「俺もホグワーツだな」

恐らくエストはレアも含めた全員に聞いたのだろうが、レアは何かを考えているのか何も反応を示さず、上の空だった。

「実はエストに考えがあるの、ちよつと前にふくろう便を内緒で送ったんだけどね」

エストはオスカーの方を悪戯っぽく見ながら羊皮紙を取り出した。羊皮紙はオスカーがどこかで見たことのある筆跡で文章が書かれていた。

「じゃん!! オスカーのおうちでクリスマスを過ごす許可をキングズリーとアーサーおじさんに貰ってきたの」

「は？」

オスカーがエストから羊皮紙を取り上げると、確かにキングズリーの字でクリスマスマス休暇中にオスカーを含めた誰かを家に入れる場合は警備を引き受けると書かれていた。

「いつの間に……」

「だからね？ みんなでオスカーのうちにかかない？ 前に行った時はせっかくペンスさんに用意して貰ったのに、中途半端に帰っちゃったでしょ？」

「まああの屋敷しもべ妖精は喜ぶでしょうね」

「クラリーナそんなこと言って、ほんととは行きたくて仕方ないんでしょ？」

「うるさいですね、貴方こそ顔面が糖蜜パイとキスしたくて仕方ない顔をしていますよ」

「どんな顔よそれ」

「私の目の前にいる女みたいな顔です」

オスカーはしばらく羊皮紙を無言で見つめていた。ちよつとだけ羊皮紙が暖かく、さつき塔で灰色のレディと話していた時の寒さが和らいだ気がした。クリスマスにみんなで戻ればペンスは喜ぶだろうことが容易に想像できた。

「俺はキングズリーが問題ないならいいけどな」

「やった！ じゃあ決まりなの」

「凄い騒がしいクリスマスになりそうですね」

「頬がにやけてるわよ、クラリーナ、私も今年はパパに犠牲になってもらおうかな」

そう言えばレアの声が聞こえないと思い、オスカーは周りを見回すとすでにレアの姿はなかった。オスカー達がクリスマス話で騒いでいる間にどこかに行ってしまったのだろうか？

「レアがいないの」

「ほんとですね、髪飾りでも探しにいきましたかね？」

「いや、さつき hogwarts にはないって聞いたことですよ」

「大広間に飯でも食べにいったのか？」

「むう、レアも誘おうと思ってたのにな」

オスカーはクリスマスのことではほとんど頭がいつぱいになってい
たが、灰色のレディの話聞いていた時のレアの顔を少しだけ思い出
した。

ドロホフ邸のクリスマス

失われた髪飾りやグリフィンドールの剣を探す目途が立たなくなり、その後のホグワーツでの生活は滞りなく進んでいった。ハグリッドが危険な卵を貰ってくることもなかったし、決闘の準備をする必要もなかったからだ。

ただ、エスト、チャーリー、トンクスの三人が順番でクイディッチの練習に行かなくてはならなかったので、みんなで集まることができないのはほとんどなかったのだ。

そうしている間に、ハロウインは通り過ぎ、クリスマス休暇がやってきた。

エストが宣言したとおりに五人はドロホフ邸でクリスマス休暇を過ごすことになった。ウィーズリー家の皆もやってくることになっていた。ペンスにはしつこく魔法省関連のことで問題を起こさないように言いくるめたので大丈夫だろうとオスカーは思った。

「いったい何部屋あるのこの家？」

「三十何部屋ってペンスが言ってたけどな」

「三十!? オスカーいったいどれだけ子供作るつもりなのよ」

「なんで部屋の数だけ子供を持たないといけないんだよ」

ウィーズリー家に先んじて、五人はキングズリーと一緒にドロホフ邸にやってきていた。

「それはあれでしょ? スリザリンの生徒が良く言ってる、純血主義の実現ってやつよ」

「トンクス、それだと二、三世代後には魔法族はみんなオスカーの子孫になっちゃうの」

「ドラゴンとか、ペガサスならそういうこともあるらしいけど、人間だと難しいんじゃないかな?」

チャーリーはすぐに動物に例えたがるが、確かに自分は動物の様に沢山子供を作るのは難しいだろうとオスカーは思った。

「そうですね、三十の半分男だったとして、十五人が三回ですから、三千人以上の子孫が三代後にはいることになりますね」

「うええ、スリザリン寮はパンパンね」

「なんで全員スリザリンに入るの前提なんだ」

五人はウィーズリー家がやってくる前に応接間の模様替えをする予定だった。クリスマス休暇をドロホフ邸で過ごすペン스에伝えられたのが少し遅かったため、今、ペンスは客室の大掃除で大忙しなのだった。

なので、五人は先に応接間の飾り付けを行っていた。暖炉飛行でハグリッドが禁じられた森からツリー用の木を持ってきてくれていたので、応接間には巨大なモミの木がすでに鎮座している。

しかし、学校外では魔法を使うことができない為、五人はヤドリギやヒイラギの花飾りを手作業で飾りつけなければならなかったのだ。

「こんなおつきなツリーなんて、僕のうちには入らないからね、ロンは喜ぶだろうな」

「ロンは何歳なんだっけ？」

「僕と七年ずれてるから、五歳だよ」

「ちようど私たちとホグワーツでは一緒にならない年齢なんですネ」

フレッド・ジョージはギリギリ一緒にホグワーツに通うことになるが、ロンやジニーはオスカー達と一緒に行くことはできないだろう。オスカーはフレッド・ジョージが入学することで今以上に騒がしくなったホグワーツを想像した。

「クラリーナにいびられないから最高の年齢ね、ウィーズリーならグリフィンボールだろうし」

「なんですかそれは、私はグリフィンボール生をいじめたことはありませんよ」

「ファッジ先輩を爆破してたの」

「それは色々理由があったでしょう！」

ツリーに上って飾りつけをしていたクラリーナが憤慨していたが、みんなの雰囲気は良かった。なによりも、屋敷しもべのペンスがずっと上機嫌でせせこましく働いていることが大きいだろう。ペンスは五人がクリスマスに来ると聞いてからずっと上機嫌だった。パチつという音がしてペンスが現れた。

「オスカーお坊ちやま、ご学友の皆様、何か足りないものがございましたらペンスにお申し付けください」

こうやってペンスは一時間に三回は五人のもとに来て仕事を欲しがった。客室の掃除をしながらこれなのだから、やっぱり相当に器用だとオスカーは改めて思った。

「じゃあ糖蜜パイを夕飯にお願いするわ」

「こいつ絶対デブになりますよ、ホグワーツを卒業するころにはハグリッドもびつくりの大きさになってるでしょうね」

「大丈夫よ、その時は変身術で戻すわ」

「全然根本的な解決になってませんね、魔法が解けたら戻るだけじゃないですか」

「承知いたしました。ではご夕飯に用意しておきます」

トングスとクラリーナが言い争っている間にペンスはお辞儀をして消えていった。

「ウィーズリー家の人たちはいつくるんだったつけ？」

「ああ、ミュリエルおばさんにジニーやロンの顔を見せてからくるらしいけど、夕食までにはくるんじゃないかな？」

「ミュリエルおばさんはエストにもくるように凄いな数のふくろう便を送ってきたの」

「ミュリエルおばさんは僕たちの孫世代の中だとエストがイチ押しだからね、しかたないよ」

「でも、あの家に捕まったら絶対クリスマスが終わるまでは帰れないの」

五人で騒ぎ合い、魔法でしかどうしようもない場所はキングズリーやペンスに手伝って貰って、なんとか応接間の飾りつけを完了した。

応接間は巨大なツリーと足元には魔法の雪、壁やツリーにはたくさん飾りつけがされていて、オスカーはこんなにちゃんとクリスマスを祝える状態の応接間を見たことは生まれてから一度もなかった。

少し埃っぽくなったオスカー達はいったんシャワーを浴びてから、応接間に戻ってきた。すると、応接間にはもうウィーズリー家が到着していた。

「やあどうも、トンクスさん。アーサー・ウィーズリーです。こっちは妻のモリー」

「ええ、ウィーズリーさん。奥さん。テッド・トンクスです。夏休みは娘がお世話になりました」

さらにトンクスの両親までいつの間にかやってきたようだ。これはペンスが少し忙しくなるだろうなどとオスカーは思った。ただ、予定にない来客とは言え、ペンスのことだから料理は多めに作っていると思うのであんまり心配はしていなかった。

「ちよつとなんでママとパパがいるの？」

「いやあ、娘がお泊りするっていうから、いてもたってもいられなくなっただよ、ドローラ」

オスカーはトンクスのお父さんの少し膨れたお腹をみて、さっきのクラリーナの心配は割と的を得ているのではないかと思ってしまった。

「オスカー君ごめんなさいね、突然お邪魔しちゃって」

「トンクス先生、大丈夫です。うちの屋敷しもべは人が多いほど喜ぶと思いますので」

「あら、屋敷しもべがいるのね、実家を思い出すわ」

そう言ってトンクス先生はなにやら屋敷のタペストリーやら彫像やらを見に行ってしまった。続々と訪問者がオスカーに襲来した。

「オスカー、準備は大丈夫だったのかしら？　こんな大人数で押しかけて本当にごめんなさいね」

「ウィーズリーおばさん。大丈夫です。ほとんど屋敷しもべがやってくれますから」

「ママ、おつきいツリーがあるよ」

「本当にありがとうね、屋敷しもべは羨ましいわね、じゃあロン、ジニーを連れてあのツリーを見に行こうかしら」

ウィーズリーおばさんはジニーを抱きながら、なにやらテディベアを抱いているロンを連れてツリーの方へいった。ツリーの下ではフレッド、ジョージとクラリーナ、チャーリーが何やら魔法の雪を持って投げ合っている。トンクスがそこに乱入していく様子も見えた。

「君がオスカー君だよ？　テッド・トンクスだ。いきなり押しかけ

て申し訳ないな」

「大丈夫です。トンクスさん。いつもは寂しい屋敷ですから、人が多い方がよっぽどいいです」

「ありがたい、それといつもドーラが送ってくる手紙の内容は本当なのかな?」

「手紙……? ですか?」

オスカーは嫌な予感がした。テッドの顔はいつもクラリーナをからかうトンクスと同じ顔だったからだ。

「ああ、去年も今年も、君がスリザリンとグリフィンドールの綺麗どころを選び好みしているって内容だったね」

「いつものトンクスですね、トンクス…… 娘さんはそのことで特にクラリーナをからかうのが大好きみたいなんです」

「なるほど、ドーラはドロメダによく似たようだ」

オスカーは大きなおなかを揺らして笑うテッド・トンクスにもトンクスは良く似ていると思った。特に笑った時の顔や笑いのタイミングなんかがそっくりなのだ。

テッドはそのままトンクス先生の方へと行ってしまった。テーブルの向こう側ではエストがパーシー、ビルとなにやら話し込んでいた。

「別に予習とかしなくても大丈夫だと思っうな」

「それはエストの頭がいいからだって、ミユリエルおばさんが言ってたよ、あの子は絶対主席になる。私が見た中でもダブルドアと同じくらい賢い子供だった」

「パース、ミユリエルおばさんがエストのことをおかしくくらい好きなこととは知ってるだろう? あの手紙だと、あの屋敷は全部エストに継がせる勢いだったろ?」

「そうなの、別に勉強しなくてもどうにかなるの、エストも夏休みにちよつとやったただけだもん」

「うう…… でも」

みんななにやら色々なことをしているようだったが、オスカーはそろそろお腹が空いていた。するとペンスが隣に現れた。この屋敷し

もべはオスカーの腹時計を完全に熟知していたのだ。

「オスカーお坊ちやま、そろそろ夕飯を始めさせていだいてよろしいでしょうか？」

「ああ、頼む」

そうオスカーがペンスに言うと、ペンスは夕飯を始める旨をみんなに伝えて、みんなが席についた。指を鳴らせば、クリスマス用の七面鳥から、巨大な糖蜜ケーキ、クリスマスプディング、ホグワーツで食べたクリスマス夕食に勝るとも劣らないような内容だった。オスカーはみんなと談笑しながら腹いっぱいそれらを詰め込んだ。

「ねえ、アーサーおじさんは叫びの屋敷って知ってる？」

「叫びの屋敷？ ああ、ホグズミードにあるという幽霊屋敷のことかい？」

「そうなの、最近幽霊が戻ってきたらしいの、ね？ クラーナ」

「ええ、グリフィンドールの三年生がホッグズ・ヘッドで地元の人がそう言ってたのを聞いたって噂してましたね」

「そうなのか…… 残念ながらあの屋敷ができたのも、噂が広まったのも、私やモリーが卒業したあとだからね、そうだ、トンクス夫妻ならなにかご存知なんじゃないかな？」

ウィーズリーおばさんは、クラーナのホッグズ・ヘッドという言葉に嫌そうな顔をしていたのをオスカーは見た。ウィーズリーおじさんがそう言うと、テーブルの皆の視線がトンクス夫妻に集まった。

「パパとママはなんか知ってるの？」

「叫びの屋敷のこと？ うーん、確かにあの屋敷が噂になったのは僕らがホグワーツにいたころだったけどね」

「そうね、イギリス一恐ろしい幽霊がひと月に一回とんでもない悲鳴を上げるって話だったわね、あの暴れ柳が植えられたのと同じくらいだったかしら？」

「ホグズミードへの外出の時に、あの屋敷にどれだけ近づけるかって遊びが流行ってたね」

「ええ、テッドはあの屋敷を一周するって言って、一周する途中で腰を抜かしてたわね」

そうトunks先生が言うともみんなが笑って、テッドは少し顔が赤くなった。

「ああ、確かファイア・ウイスキーをひっかけた後に行ったんだけれど、扉という扉から窓という窓に板が打ち付けられていて、ネズミ一匹入れない状態だったのにゾツとしたのを覚えてるよ」

「その後、この人を私が浮遊呪文で三本の箒まで運んで行ったら、もう大盛り上がりだったわ」

テッド・トunksの顔はファイア・ウイスキーのように赤くなっていたが、楽しそうだった。

「え？　じゃあ叫びの屋敷つて入れないの？」

「そうよ、少なくとも、見える場所には入り口はなかったわね、まあ魔法がかかっているんだったらどこかから入れるのかもしれないけど」

「じゃあやっぱり、ゴーストなのかな？」

「まあ、来年になったらわかるんじゃないか？　ホグズミードに行けるんだし」

「確かにそうだよね、三年生のホグズミードは楽しみだな」

みんなはお腹に入ったご馳走と楽しい会話で居心地の良い時間を過ごした。オスカーは自分の家でこんなにたくさんの人と夜を過ごしたのは本当に初めてのことだった。

やがて眠くなってきたのか、ぐずり始めたジニーとロンをウィーズリーおばさんが寝かしつけに行き、それにフレッド・ジョージが続き、酒が入り始めた大人たちを残して、子供は寝室へと向かった。去年に引き続いてこんなにぐっすり眠れるクリスマス休暇になったことがオスカーは嬉しかったし、誰かにお休みを自分の家で言うことや言われることがこんなに心休まるものだとは思わなかった。

クリスマスの朝、オスカーは誰かに揺すられて目を覚ました。オスカーはペンスが起こしに来たのだろうと思った。

「ペンス……　クリスマスなんだからもう少し寝かせてくれ……」

「起きてください、オスカー」

ペンスの声ではなかったのでオスカーが目を開けると、クラーナが暗い部屋の中で何かを持って、オスカーを揺り起こしていた。クラーナとオスカーの足元には恐らくオスカー宛てであろうプレゼントが少しだけ山になっていた。

「クラーナ？ どうしたんだ？ クリスマスの朝に？」

「セーターです、セーターを見せてください」

「セーター？」

オスカーには去年クラーナに渡したウィーズリーおばさんからのセーターが思い浮かんだ。今年もセーターをよこせと言うのだろうか？

「ほら、その包みでしょう、多分ウィーズリーおばさんからのプレゼントです。私のも同じ包みに入っていましたから分かります」

確かにクラーナはオスカーの足元にあるのと同じ包みに入ったセーターを持っていた。

オスカーが足元にある包みを開けると、去年と同じように緑色にスリザリンのシンボルである蛇が銀色で描かれているセーターが出てきた。

「セーターがどうしたんだ？ またクラーナにあげればいいのか？ 今年は別に送ったはずなんだけど……」

「違いますよ!! ええ、実践的防衛術の本はありがとうございます。そうじゃなくてですね、イニシャルですよ、イニシャル」

「イニシャル？」

クラーナは赤に金色で獅子が描かれたセーターの胸部分に金の刺繍で描かれた英文字を指で指した。どう見てもO・Dと書かれている。クラーナのイニシャルはQ・Mのはずだ。

オスカーはハツとなって自分のセーターの同じ部分を見た。Q・Mと銀の刺繍で描かれている。

「やっぱり、絶対トククスとフレッド・ジョージの仕業ですよこれ」

「まあそうだろうな、どうやってやったのか分かんないけど、交換してもサイズが違うしな」

セーターを交換してお互いの体に当ててみたが、体格の小さいク

ラーナ用のセーターはオスカーには着れそうになかった。しばらく二人で黄昏していると、部屋のドアが開かれた。

「オスカー!! メリークリスマスなの、箒磨きセットありがとうね、エストのプレゼントも開けてくれた?」

エストは凄い勢いで入ってきたが、ベットの所で黄昏ていた二人を見ると目を丸くした。

「ええっ!? 朝からクラーナとなにしてたの? もしかして、ほんとにトンクスが言ってるような感じなの!?!」

「ちよつと! 違いますよ! 私たちのセーターがですね……」

「セーター? ああつ! また二人はセーターを交換してるの」

「交換はしていないですよ、ああつ!!!! もう!! トンクスの悪戯に決まっています!!!!」

オスカーのクリスマスは朝から大騒ぎだった。こんなにうるさいクリスマスを経験したのは生まれて初めてだった。

「ちよつと、朝から凄い元気ねって、何? どうしたの? 修羅場?」
トンクスがぼさぼさのピンク髪の毛のままあくびをして入ってきた。大騒ぎしている二人を見て目をギョツとさせた。

「ちよつと、トンクスどうせ貴方でしょう! セーターですよセーター!!!!」

「また、オスカーとクラーナがセーターを交換してるの」

「ええ、ちよつとなんなの、いくら三十部屋埋めないといけないって言っても十二歳から始めないでもよくない?」

「やかましいですよ!! 今度という今度は怒りましたよ!! 必要の部屋の決闘場でオスカーみたいに細切れにしてやりますよ!!!!」

「細切れにはしてないの…… 必要の部屋……?」

トンクスが加わってさらにオスカーの部屋はうるさくなった。このままだとドロホフ邸に泊まっていた人たちは全員起きてしまうのではないだろうか? オスカーは確実にそうなると思った。

「これですよ!! これ!!」

そう言って、二枚のセーターのインシヤルをクラーナは指した。

「えっ、もうばれたの、二人が着てきた所を写真に収めようと思ってた

のに」

「こいつ、やっぱり貴方がフレッド・ジョージに指示を出したんでしよう!!」

「必要の部屋!! 必要の部屋なの!!!!」

大騒ぎする二人よりも大きな声でエストが叫んだ。

「へっ? なんですか?」

「えっ何? 必要の部屋?」

エストの顔はなにか、ずっと考えていた難問が解けたような顔だった。

「レディは秘密の通路やホグワーツの階段をお母さんが作ったって言うってたの!!」

「レディ? 灰色のレディか?」

「そう、エストずっと考えてたの、もし髪飾りを手に入れたらどこに戻すのか」

「戻す?」

起きたばかりということもあつてオスカーの脳みそはエストほど高速で回っていなかった。

「そう、ロウエナ・レイブクロウがホグワーツの仕掛けを作ったんなら、絶対に必要の部屋もロウエナが作ったに決まってるの」

「まあ、あんな部屋を作れる魔法使いなんてレイブクロウくらいでしょうけど」

「だからもし、エストが髪飾りを見つけたら、レディに報告した後にあるの部屋に置きに行くの」

「エストはまだ髪飾りを探してたの?」

そうトunksがオスカーの方を見て聞いたが、そんなことをエストがしているところをオスカーは見えていなかったの、首を振った。

「違うの、レディは髪飾りを求めているなかったの、もう失われたままでいいって言ってたよね?」

「そうですね、失われたということが重要だと言ってました」

「だから、必要の部屋なの、必要の部屋なら本当に髪飾りが必要な人だけに見つけさせることができるの」

「よくわからないんだが？」

珍しくエストは興奮していた。こんなエストを見るのはオスカーがコンパートメントであった以来かもしれない。

「その人がアルバニアで見つけたのかは分からないけど、もし見つけたなら、自分の次に必要な人の手に渡るように必要の部屋に置くんじゃないかって思うの」

「他の人の手に渡るように？」

「そう、だってあのレデイが自分のことを喋りたいような人なんだよ？ きつと、エスト達以上にホグワーツに憧れて、色んなことを知ってた人だと思うの、だからそんな人なら必要の部屋のことも知ってたと思うし、次の人に見つけさすように必要の部屋に髪飾りを置くと思うの」

エストの眼はキラキラと輝いていた。自分と同じような考えを持つ人を見つけたような、どこか、一緒に規則を破る共犯者を見つけたような、そんな顔だった。

オスカーにはなぜ、エストがスリザリンに配属されたのか少しだけ分かった気がした。

だけれども、レデイが前に話した人物について語った時のあの表情が胸のどこかで引っかかった。

忍びの地図

オスカー、エスト、クラリーナ、チャーリー、トunksは目の前の光景に圧倒された。五人はホグワーツでここまで巨大な空間に出会ったことはなかった。

そびえ立つ壁のような何か積み上げられ、遙か高くにある天井そばの高窓から日差しが優し気に差し込んでいる。よく見ると、その積み上げられたものが雑多な物品だと分かる。

もし、これがエストの言うように、ホグワーツの住人が隠したいものを隠す場所ならば、あの物品は千年にもわたって隠され、積み上げられたものであり、この部屋はまさにホグワーツの歴史そのものだとオスカーは思った。

「凄いの、こんなにみんな隠したいものがあつたんだね」

「ほんとね、私もなんかやらかしたらここに來ることにするわ」

「流石に必要な部屋もトunksは吐き出すでしょう」

「人間隠してどうするんだ」

「うわ!! これ、もしかしてキメラの骨じゃないのかな……」

何千、何万冊もの本、そのどれもが何やら血痕やどす黒い染みがついていたり、そもそもカバーが明らかにヤバイ革を使つて作られていたり禁書か盗品の類と思われるものばかりが置かれている。

折れた箒が空を飛んでいたり、何か魔法薬がまだくすぶっている大鍋、半分だけ透明なマント、今まさに首を切り飛ばした後のような血がついた斧、ありとあらゆる禁じられた物品があるような場所だった。

「もし、失われた髪飾りがあるとしても、この中から探すのは難しいんじゃないのか？」

「うーん、こんなに一杯色々あるとは思わなかつたの、アクション!!!
髪飾りよ来い!!! うーん、ダメみたい……」

エストが呼び寄せ呪文を唱えたが、エストの声だけが巨大な空間に木霊して何か動く様子はオスカーには感じ取れなかつた。

「そういう重要な物品や、武器、透明マントなんかには呼び寄せ呪文は

効かないでしょうね」

「じゃあ、この山の中を探さないといけないうってこと？」

「ざっと見て千年分はありそうだよね」

「多分ほんとに千年分あるぞ」

オスカー達は千年分の山を見て途方にくれたが、何もしないわけにもいかないのでとりあえず探し始めることにした。

「失われた髪飾りってどんな特徴があるんだっけ？」

「銀色で、計り知れぬ英知こそ、われらが最大の宝なり！　って書いてあるんじゃないんですか？」

「そうなの、それで青い宝石が真ん中についてるってレイブンクローの寮で見つけたの」

オスカーはレイブンクロー寮へ一緒に連れてかれたことを思い出した。だがあの方式だとちよつと賢い人なら誰でも談話室に入れてしまうのではないだろうか？　オスカーは合言葉の方が安全な気がした。

「へ？　どうやってエスト、レイブンクローの寮に入ったのよ」

「レイブンクローの寮の合言葉はなぞなぞだったから、簡単に入れたの」

「へえ、レイブンクローは合言葉じゃないんだね」

「いやいやおかしいでしょう、私はスリザリンの合言葉を当てただけで、なんかからかわれたのに……」

五人の騒ぐ声が巨大な空間に響いていたが、そもそも部屋が大きすぎて全然見つかるとは思わなかった。

「そう言えば、なんで髪飾りって銀色なんだろうね？」

「銀色がどうかしたのか？」

「だって、レイブンクローの寮の色は青と銅なの、銀はスリザリンの色じゃない？」

「確かにレイブンクローの色ではありませんね、まあただ単にゴブリンの銀を使っただけな気がしますけど」

「てか見つかるとは思わなかったけど、これ見つけ出すのは不可能じゃない？」

「うん、これは一日どころか一年は探さないと思つからないと思つよ」
正直、五人は途方にくれていた。主にこの部屋が巨大すぎることで、部屋の中の物品が危険すぎるのが髪飾りの搜索を邪魔する大きな原因だった。

かみつきfrisビーのようなものがへろへろになりながらぶつかってきたり、牙のついた本がトングスの手に噛みついたり、終いにはオスカーとエストがベッドに押しつぶされかけた。

五人は夜になるまで探したがそれらしきものを見つけることはできなかつたし、必要の部屋から出るころには五人とも傷だらけになっていた。

「わかつたの、多分髪飾りは必要の部屋にはないの」

髪についた動く新聞紙のようなものを杖で吹っ飛ばして、疲れた声でエストが言った。

「なんでそんなことがわかるの?」

「必要の部屋はその人が必要な形になるはずなの、見つからないってことは、部屋はここにはないよって言ってるんだと思うの」

「まあ私たちには必要ないって思われたんじゃないですか? もうちよつとエストの成績が悪かつたら見つかつたかもしれないですね」

クラリーナが悪戯っぽく笑いながらエストをおちよくつた。

「もう、エストはレディに見せにしようと思つてただけなの!!」

「クラリーナはエストとオスカーがベッドインしたからご機嫌ななめなのよ」

「どつちかと言うと、二人共医務室のベッド行きだつたけどね」

五人は話ながらも足早になっていた。必要の部屋で時間を使い過ぎていて、もしかすると外出禁止の時間になろうかとしていたからだ。

「じゃあ私たちにはここで失礼しますよ」

「じゃあね、またなんか探すんだつたら言つてよ?」

クラリーナとチャーリーがグリフィンドールの寮がある方へ消えていった。三人は足早に寮へと急いだ。城に人が全然いないあたり、どうも外出禁止時間になっている気がしたのだ。

秘密の通路や動く階段を足早に三人は走り抜けた。

前方に真珠色の影が見えた。オスカーにはそれがグリフィンドールの寮霊、ほとんど首なしニックだと分かった。

「あ、ニックなの、もしかしてもう外出禁止の時間なのかな？」

「おお、エスト嬢、そうですね。少し生徒が出歩くのは不味い時間です。近くにフィルチもいましたから早く帰ったほうがいいですよ」

「ニック、ありがとうなの」

ニックの忠言を聞いて、オスカーはちよつと不味いなと思った。フィルチに捕まると面倒なことになると思ったのだ。三人はタペストリーの裏の秘密の通路を使って、近道し、仕掛け階段を上った。

「ああつ!! 痛つ、クソつ このつ」

トンクスが何段目かが絶対に消える仕掛け階段に足を挟まれていた。向こうの廊下にミセス・ノリスの姿が見えた。オスカーは少しだけ、ため息をついた。

「エスト、先に寮に戻ってきてくれ」

「えっ? でも……」

「トンクスを助けてすぐ追いつくから、早く、フィルチが来る」

「わかったの、ちゃんと寮に戻ってきてよ、オスカー」

オスカーは階段から足を抜こうとして、うんうん唸っているトンクスに駆け寄って、からだごと引っこ抜いた。

「ああ、ごめんね、私いっつもこれに引っかかるのよ」

オスカーはそのまま、トンクスをタペストリーの後ろの通路に隠した。

「トンクス、そこでちよつと黙ってる」

ミセス・ノリスがオスカーの隣でにやあと鳴き、オスカーが息もつかない間に勝ち誇った顔のフィルチがその後ろからやってきた。鼻息が荒く、獲物を見つけたとでかい野良猫と言った感じだ。

「捕まえたぞ、この時間にうろついてなにをやってたんだ? ええ?

どうせ廊下を壊したり、クソ爆弾を爆発させたりしようとしてたんだらう?」

「ちよつと、先生に呼ばれたあとに忘れ物をして、教室にとりにいこうと思つてたところなんだけど」

オスカーはできるだけ、タペストリーに目線を移さないようにしながら、そこから離れようとした。

「ダメだ、この時間は外出禁止だ！ ドロホフ、ついてこい！」

オスカーはため息をついてフィルチの後に従つた。オスカーはなんだかなだ言つて、一度も校則を破っていなかったが、今度はダメそうだと思つた。

当たり前だがオスカーはフィルチの事務室に入るのは初めてだった。鎖と手錠が天井からぶら下がっているし、何やら魚のような生臭い匂いが漂っていた。

壁には大量のファイイルが並べられていて、それぞれ生徒の名前らしきものが書かれている。擦り切れてよく読めなかったが、ジエーム……なんとかと、……ウスなんとかという生徒は恐るべき量のファイイルで棚を占領していた。

「オスカー・ドロホフ…… 罪状……」

フィルチが汚らしい羊皮紙にオスカーの名前を書いていた。どうも罰則に関する書類のようだ。

「夜間外出禁止を破つた…… 反抗的…… 以前にも廊下の爆破で疑いあり……」

嫌な単語が沢山聞こえてくる。オスカーは自分が廊下を爆破したことはないのにとぼちちりだと思つた。

ずるずると鼻をすすりながら、フィルチはあることないことオスカーの書類に書き連ねていた。

するとドンドンとフィルチの事務室の扉が叩かれた。

「フィルチ、いますか？ マクゴナガルです」

フィルチは虫食いだらけの椅子から飛び上がってドアを開けに行つた。マクゴナガル先生が立っていて、オスカーの顔を見ると部屋の中に入ってきた。どこか足を引きずっているようにオスカーには思えた。

「マクゴナガル先生？ なにか御用でしょうか？」

「ああ、ドロホフ、やっぱりここだったのですね、ファイルチ、ドロホフは変身術の居残りから抜け出したのです、よく捕まえてくれました」
オスカーは去年からエストに付きっきりで教えて貰っているので変身術で居残りを食らうような、低い成績を取ったことはない。むしろ変身術でオスカーより上の成績を取っているのはエストくらいしかいないのだ。

「そうだったんですか、ドロホフは禁止時間に歩いていたので今つかまえたところなんです」

「ええ、ファイルチ、ありがとうございます。じゃあドロホフは私が預かります。それと、また八階のトイレが水浸しになっていましたよ」

マクゴナガル先生のその話を聞くとファイルチは顔を真っ赤にした。

「またピーブズの仕業だ!!!! 今度こそとっ捕まえてやる!!」

そう言つて、ミセス・ノリスと一緒に箒を持ち出して、間抜けな恰好で飛び出していった。

マクゴナガル先生がさっきまでファイルチが座っていた虫食いだらけの椅子に座つてオスカーに向き合つた。

「ドロホフ、プルウエットにうつつを抜かして、変身術の成績が下がつたのでは目も当てられませんよ」

「トunks、お前が仕掛け階段にはまるからだろ、いい加減ドジを直せよ、それと声があんまり似てないぞ」

そうオスカーが言つと、マクゴナガル先生は鼻をつまんでショッキングピンクの髪をした、トunksの顔になった。

「あれ? どこでばれたの?」

「足を引きずつてたからな」

「オスカーよく見てるのね、ファイルチからかばつてくれてありがとうね」

「ああ別にいいよ、俺の罰則もこれでチャラだ」

そう言つとオスカーはさっきまでファイルチが書いていた書類を手に取つて、インセンディオで燃やした。

「オスカーもワルなのね、てかファイルチの事務室とか初めて入るわ」

「俺も初めてだ」

二人は主とペットのいなくなった部屋を見回した。石油ランプが天井からすこし寂しい光で部屋を照らしている。

オスカーとトンクスは一つの棚に目が行った。どうも生徒からの没収品が入れられている棚らしい、クソ爆弾、噛みつきfrisビーのようなゾンコで売っている商品や惚れ薬なんて名前の引き出しもある。

しかし二人はもつと気になる引き出しを見つけた。『没収品・特に危険』と書かれているのだ。それに引き出しは長い間使われていないのか埃が溜まっているように見える。

オスカーとトンクスは目配せした。トンクスが引き出しを引いて、オスカーが中のもをつかんだ。なにやらペラペラした質感だった。「羊皮紙？　これが特に危険なの？」

オスカーが棚から取り出したものはどう見てもただの羊皮紙だった。確かに随分と年季がはいった色をしているが、見た感じはただの羊皮紙だ。何も書かれていない。

「アパレシウム!!!　現れよ!!!」
オスカーが呪文を羊皮紙にかけたが何も変化がない。白紙のままだ。

「透明インクじゃないってこと？　うーんこういう魔法具にはあいさつよ、ママのヘアアイロンも挨拶しないとパーマが上手くかけられないしね、私はニンフアドーラ・トンクスです、よろしく?」

トンクスがそう言って杖を向けると今度は羊皮紙に変化が現れた。「私、ミスター・パッドフットがミス・トンクスにお礼申し上げます。埃っぽい引き出しから助け出していただいたことに感謝申し上げます」
なんと羊皮紙が挨拶をしてきた。オスカーとトンクスはまた顔を見合した。

「私、ミスター・プロングズはミスター・パッドフットに同意し、お礼申し上げます。また、間抜けのアーガス・フィルチからどうやって我々を救出したのか教えていただきたい次第」

オスカーは羊皮紙に杖を向けて喋った。

「マクゴナガル先生に七変化でトンクスが化けて、フィルチを追い出

したんだ。それで、ファイルの部屋の中を探ったらこれが、あんたらがでてきた」

また羊皮紙が文字を吐き出した。

「私、ミスター・ムーニーは諸君らの度胸と悪戯心に感服申し上げます。可能であれば、我々の能力を最大限に使っていただきたいとここに記すものである」

能力？ 最大限？ 文字で会話する以外に機能があるということだろうか？ オスカーは首を捻った。

「貴方達の力を使うにはどうしたらいいの？ なんか呪文を唱えるとか？」

文字がつづられ始めるがどこか要領を得ないというか、まるで答えが言えないように制限されているような内容だった。

「私、ミスター・ワームテールはその質問が正しいと申し上げる。貴方がたは正しい言葉を見つけないならない」

羊皮紙を机の上に置いて、二人は少し考えた。つまり、この羊皮紙を使うための言葉を見つけないければならず、この羊皮紙の中の人物たちはオスカーとトンクスにその言葉を言えないらしい。

「こういう時は総当たりでいいんじゃないか？」

「総当たり？ どういうこと？」

オスカーは羊皮紙に杖を充てて、アルファベットをAから順番に喋った。

すると最初に『わ』と『れ』に反応して羊皮紙が光り出した。

「ワオ、オスカーやるじゃない、最初の言葉はわれなのね」

さらにトンクスと交代で続けることで、『われ、ここに誓う、われ』までが判明した。

「だいたいどこまで来たんじゃないか？ あと少しって感じだ」

「そうね、というかよっぽどの悪戯人が作ったんでしょうねこれ」

地図に文字がまた吐き出された。

「私、ミスター・プロングズは諸君らの智謀に感服する。われら魔法いたずら仕掛人を継ぐ者に諸君らはなれるだろう」

「魔法いたずら仕掛人？ ちよつとだけ、よからぬ人たちって感じね」

トンクスの言葉に反応して、地図がまたさらに光り出した。「さっきのが正解なのか？ よからぬ人？」

地図はまた光った。どうもよからぬは正解の言葉のようだ。そしてまた地図が文字を綴る。

「私、ミスター・パッドフットは諸君らのような、悪戯や冗談を考える人々に敬服の意を示すものである」

「これもヒントじゃない？ この人たち、使われたくて仕方ないのよ」「悪戯や冗談を考える？ いや、たくらむか？」

地図がさらに輝いた。

「続けていつてみたらいいんじゃないかしら？」

「えーと、われ、ここに誓う、われ、よからぬことをたくらむものなり？」

地図はこれまでにないくらいに輝いたが何も起きない。

「オスカー！ 杖よ、杖を羊皮紙に当てないとだめなんじゃない？」

オスカーが杖を羊皮紙にあてると驚くべきことが起こった。オスカーの杖からインクがまるで生きているかのように出てきて、羊皮紙の隅まで、何度も何度も交差しながら伸びていった。

そして羊皮紙の最上部に文字が現れる。

ムーニー、ワームテール、パッドフット、ブロングズ

われら「魔法いたずら仕掛人」のご用達商人がお届けする自慢の品

忍びの地図

「これは地図か？」

「凄い、これ凄いわ、ホグワーツの地図よこれ！」

それは本当にとんでもない代物だった。これはホグワーツ全体の詳細な地図で、一年のところにエストにつき合わされて城の色んな場所といったオスカーでさえ知らないような場所が大量に示されていた。

「この動いている文字って、もしかして人なのかな？」

「ああ多分そうだな」

トンクスの言うようにたくさんの文字が地図の上を動いている。フィルチの部屋にはトンクスとオスカーの名前があるし、地図の端にはダンブルドア校長と思わしき名前があり、歩き回っている。地下牢

にあるスリザリンの談話室ではエストがまだオスカーを待っているようだ。さらになんとポルターガイストやゴーストまで表示されている。オスカーはこの地図が失われた髪飾りにも匹敵するような素晴らしいものなんじゃないかと思った。

「特に危険なのは納得ね、オスカーこれどうする?」

「エストは髪飾りがなくて意気消沈してたからな、これ渡したらそれも忘れるだろ」

「エストの点数ばかり稼ぐのは良くないと思うけどね」

オスカーがもう一度地図を見ると、八階からファイルチが戻ってくるのが見える。オスカーとトunksは興奮のあまり、ここがファイルチの事務室だということを忘れていた。

「ヤバイ、ファイルチが戻ってくる」

「え? ほんとじゃない、戻りましょう」

もう一度、マクゴナガル先生に変身したトunksとオスカーは地図のおかげで今度は誰にも会うことなくそれぞれの寮へ戻った。オスカーは合言葉で壁をすり抜けながら、談話室でオスカーを待ち、プリンしているであろうエストに地図を見せるのが楽しみだった。

叫びの屋敷

翌日はレイブンクロウ寮のクイディッチ練習日だったので、全員が集まることができた。五人は空き教室で地図を広げて盛り上がっていた。

「昨日からずっと見てたんだけど、この地図は凄いの、これは多分、変幻自在呪文とホムンクルスの術なの」

「ホムンクルスの術？ 変幻自在呪文？ エストなんなのよその術は？」

「凄い高度な呪文で、少なくとも、イモリ、NEWT（ニユート）レベル以上の呪文なの」

「この悪戯仕掛人とかいう、ふぎけた名前の奴らがそんな高度な呪文をですか？」

「うん、変幻自在呪文で多分一番有名なのは、死喰い人の腕の印で、ホムンクルスの術で有名なのは肖像画のはずなの」

オスカーとクラリーナは死喰い人の腕にある闇の印と同じ術ではないか？ というエストの言動を受けて、少しだけ地図を見る目が胡乱になった。

「変幻自在呪文はロウエナ・レイブンクロウが作った呪文だから、危ない呪文じゃないんだよ？ でもこれはほんとに凄いの、魔法のレベルもそうだけど、いったいどうやってホグワーツの細部まで調べることができたんだろう？」

「そうだよね？ 少なくとも、僕たちみたいな生徒だとこんな地図を作るような時間はないと思うんだよね」

確かに生徒は夜歩き回ることにはできないし、オスカーは放課後の自由時間だけでこの地図が作れるほどの時間が得られるとは思えなかった。

「透明になってたとか、トンクスみたいに先生に化けて校舎を夜に歩き回るくらいのこととはしないんだめだろうな」

「トンクスみたいなのが四人もいたとは思いたくないですから、目くらまし呪文か透明マントですかね？」

「ちよつとなによそれ、それよりこの地図には一杯ホグワーツの外につながる道があるじゃない？」

トンクスは地図の端の方にある、地図の道が途中で途切れている道を示した。確かにいくつかそういう道が示されており、いつも三年生以上がホグズミード村に行く道とは明らかに別の道である。

「これを使えば学校の外に出れるんですかね？」

「フィルチや先生方がどれくらい知ってるかだろうな、繋がってたとしてもバレたら終わりだしな」

「エスト、昨日の夜から今日の授業中までずっと地図を見てたんだけど、この四つの道はフィルチとミス・ノリスが時々見に来てたの」

エストが四つの道を示した。確かに今日の妖精の呪文の授業の間、エストは上の空で地図をずっと眺めていた。そのせいで、なぜかオスカーがエストの代わりにフリットウィック先生の前で魔法を実演することになってしまっていたのだった。オスカーはうまくできたと言うことでフリットウィック先生からヌルヌルヌガーを貰った。

「じゃあこの四つの道は使えないんだ。でも、他の道を使えばいつでもホグズミードに遊びに行けるってことだよな？」

「いいわね、それ」

「そんな頻？にいつでも仕方ないと思いますけどね、毎日、ホグズヘッドでファイアウィスキーでも飲むんですか？」

クラリーナがあまり興味なさそうに言うと、トンクスが誰かをからかうときのいつもの顔をした。

「クラリーナはオスカーとマダム・パディフットのお店に行くんでしょ？」

「なんですか？ そのパディなんとかとかいう店は？」

「ええ!? クラリーナ知らないの？」

その後、トンクスの言っていた店が上級生のカップルのたまり場になっている店だと分かって、クラリーナがトンクスに殴りかかったが、みんなが騒いでいる間もエストは地図のある部分をじっと見ていた。

「そこがどうかしたのか？」

「うーんとね、この道だけおかしいの、だってここには城が無いし、建

物もないの」

「確かに忍びの地図が示している、残り三本の学外につながる道の一つは校庭の何か所を示していて、そこには何か建造物があるということも書かれていない。」

「そこって暴れ柳がある場所じゃない？」

「暴れ柳ってあの、近づいたら殴りかかってくる木のことか？」

「オスカーは黒々として、近づくものすべてを攻撃するその木を一年の時に見たことがあった。たしか生徒が面白がって投げていた石を綺麗に打ち返しており、投げた生徒達はめでたく医務室行きになっていた記憶がある。」

「そうだよ、とっても珍しい木なんだって、スプラウト先生が言ったよ」

「じゃあその暴れ柳を燃やしてもしないとその道に行くことすらできないのか」

「スプラウト先生が珍しい植物っていうような植物を燃やしたら、下手したら退学じゃないですか？」

「じゃあこの道を使えないってことか……」

「つまり、実質的に使える道は二本で、その道もフィルチや先生方が知っている可能性も捨てきれないのだと、オスカーは思った。」

「何か、何か方法があると思うの」

「方法？」

「そう、だってクリスマス時の話覚えてる？ トンクスのママが暴れ柳は私たちの時代に植えられたって言ったの」

「叫びの屋敷のことを話してた時だっけ？」

「確かにオスカーもドロホフ邸でトンクス先生がそんなことをいつていたのを覚えていた。」

「言っていましたね、じゃあその時に危険なんで、その道を使わないように暴れ柳を植えたんですかね？」

「だったら道を壊したり、埋めちゃえばいいと思うな、エスト達は魔法使いだし、ダンブルドア校長ができないとは思えないの」

「エストの言う通り、この道を使えないようにするだけなら道を壊し

てしまえばいいことだ。つまり、暴れ柳を植えたということは、何らかの方法で道を使うことができ、そのための暴れ柳だということなのか？ オスカーはそんなにして使わせたくない道の先に何かがあるのか好奇心が湧いた。

「じゃあ、暴れ柳を傷つけずに止める方法があるってこと？」

「そうですね、そういう方法があるんならこの道を使うことができますし、この道の先に行ければ、なんで植えたのか理由も分かりますね」「こういう時は図書館なの」

五人は図書館に行つて、暴れ柳について調べることにした。マダム・ピンスは大人数で押しかけたオスカー達を白い目で見ていた。オスカーはちよつとでも騒いだら追い出されるだろうなと思った。

北大西洋の危険な植物、人食い植物、新世界の魔法植物、船を食べる植物、色んな植物図鑑を見ると、世の中にはおぞましい植物がいくらかでもあることが分かった。人間を消化したり、操り人形にしたりと、オスカーはルーンプールは大して魔法界では危険な生き物じゃないんじゃないかと思ひ始めていた。

「あつたよ、暴れ柳だ」

チャーリーが一つの本を掲げて、オスカー達を呼んだ。そこには確かに暴れ柳の生息地や生態が書かれていた。オスカーは絶対に将来何があつても、この暴れ柳の生息地に入ることはしないようにしようと思つた。

「体の一部分に何かに触れると硬直する。ですか？」

「つまり、暴れ柳のどこかを触れば止めることができるってことなのか」

「一部分つて、なんか全然具体的じゃないわね」

「まあ、僕たち魔法使いだしどうにかなるんじゃないかな？」

「とにかくどこかに何かを当てればいいんだよね？ 簡単なの」

五人は図書館を後にして、足早に暴れ柳に向かった。五人とも暴れ柳の向こうには何かあるのか気になっていた。五人がついても暴れ

柳はいつも通りにただ佇んでいた。

「サーペンラームス!!! 枝よ出でよ!!!」

エストが杖を振って、たくさんの枝を呼び出した。二百本くらいはあるだろうか？

「オバグノ!!! 襲え!!!」

その枝が、暴れ柳の上から順番に突き刺さっていった。暴れ柳は荒れ狂ってその枝を打ち落とそうとしたが、数が多いのでどんどん幹に突き刺さっていく。

「サーペンラームス !!! 枝よ出でよ!!!」

「オバグノ!!! 襲え!!!」

さらに枝を呼び出して、暴れ柳に突き刺していき、もう暴れ柳はハリネズミのような有様になりつつあった。

「ちよつと、暴れ柳が可哀想になってきたわ」

「ほんとですね、エストと決闘するときにはハリネズミにされるのを覚悟しないとダメみたいですね」

「あんなに刺されたたら、マダム・ポンフリーでも直せないんじゃないかな？」

「もう…… 後で消すから平気なの」

そうこう言っている間に、暴れ柳の根っこに近い部分まで、枝が突き刺さり始め、オスカー達の身長でも手で触れるようなこぶの部分に枝が突き刺さると暴れ柳は抵抗をやめた。

「止まった。あのこぶがその部分なのかな？」

「死んだふりだと怖いですね、あのぶつとい枝にやられたら一撃ですよ」

「もっかい動き出すまでどれくらいあるのか見とくか」

そして、十分ほどたつと暴れ柳はまた暴れ狂い始めた。枝が刺さっているのが嫌なのだろうか？ エストがピンポイントでこぶに枝を当てるとまた動かなくなった。

五人は大理石のように葉っぱ一つ揺らさない暴れ柳に近づいた。暴れ柳の根本には地下に続いているであろう穴があった。

「エバネスコ 消えよ」

エストが唱えると突き刺った枝は消えていった。少しだけ枝が刺さった後が縞模様のように残っていた。オスカー達は滑り落ちるように、傾斜のあるトンネルの中に入っていった。

「ルーモス」

五人はそれぞれ杖灯りと灯して、トンネルを進んでいった。トンネルは下向きに傾斜しているようにオスカーには思えた。

「どこにつながっているんですかね？」

隣にいたクラリーナが目を輝かせながら訪ねた。冒険するのが楽しいらしい。

「ホッグズ・ヘッドとかか？ ウィーズリーおばさんが話をするのが嫌なくらい、変な奴らが集まってるんだろ？」

「確かにそうですけど、違法なもののやりとりをダンブルドアが許すとは思えませんね」

「じゃあなにか隠してるのかしら？ ほら、髪飾りとか、グリフィンドールの剣とか」

オスカーも何かを隠しているのは確かだと思ったが、それが果たしてモノかどうかは怪しいと思った。

「うーん、でもそれならなんで行き来できるようになるのかな？ 封印しちゃって、ドラゴンにでも守らせればいいんじゃないかな、グリッソツツみたいに」

「というか、もし宝があるのなら、ダンブルドア先生の部屋だと思うの、だってダンブルドア先生が一番凄い魔法使いなんだし」

確かに、こんな二年生の生徒達で入れるような場所に貴重な宝を隠すとはオスカーには思えなかった。世界一強いかもしれないアルバス・ダンブルドアの手元に置くのが一番安全だろう。

さらに進むと今度はトンネルは大きく蛇行して、上向きに傾斜し始めた。

「そう言えば、もうそろそろ地図の外側にでてるのか？」

「あっそうなの、えーと、われ、よからぬことをたくらむものなりー」

五人がエストの手元にある地図を見ると、すでに五人の名前はホグワーツのどこにもなかった。つまり、ここはホグワーツの外側だとい

うことなのだろう。

「悪戯仕掛人たちもここまでしか案内してくれないってことですか」

「いよいよ秘密が見られるわけね」

五人はさらに捻じ曲がる道を期待を込めた足取りで進んだ。一瞬前の道が見えなくなるほどゆがんだ道だったが、五人は埃っぽい部屋にたどりついた。

「部屋？　なの？」

「部屋ですね、やけに埃っぽいですけど」

窓という窓全てに板が打ち付けられており、外は全く見えないし、外からの光も全く入ってこない部屋だった。何部屋かあるようだったが、家具という家具は全て打ち壊され、扉は壊れてぶら下がっていた。壁紙などはほとんどはがれきっている。その破壊痕はなにか、鋭い爪や牙で行ったような跡がついている気がした。

「ここってもしかして、叫びの屋敷の中なんじゃない？」

トンクスは打ち付けられて開かないドアを見てそう言った。確かに、トンクスの父親のテッドは叫びの屋敷の周りをまわって、ドアが全て打ち付けられて入れないのにゾツとしたと言っていた。

「ホグズミードに繋がってるなら、叫びの屋敷でもおかしくないな、というかこの家のなかからしてそうなんだろうな」

「じゃあ、イギリス一荒々しいゴーストが部屋の中をこんなにめっちゃめっちゃにしたの？」

しかし、オスカーにはその荒々しいゴーストの仕業のようには思えなかった。オスカーの知っているゴーストは、ポルターガイストのピーブズを除いて物理的にはほとんど何もできないはずなのだ。それに、爪や牙があるゴーストなんてオスカーは聞いたことがなかった。

「あれ、二階がありますね、この家」

クラーナが階段を見つけていた。オスカーはその階段に厚い埃が溜まっていることが見るだけで分かったが、クラーナや自分達が進んでいない場所にも埃が溜まっていない場所があるようにオスカーには見えた。

「クラーナ、だれか俺たち以外にも埃の上を歩いてたみたいだな、それも最近」

「うわ、ほんとですね、誰か来てますね」

明らかに二人分の足跡のように思えた。一つの足跡は大人の男のように思える大きさで、もう一つは女性か子供だろうか？ ずいぶんと大きさが違うとオスカーは思った。

「なんか二階のほうか、ゴーストの仕業っぽいですね」

「そうなの、なんか一階はガオーって吠えそうなやつが暴れたみたいな感じだったけど、二階は……」

そう、二階は破壊の毛色が違うようにオスカーには思えた。一階の破壊跡が物理的に引つかいたり、噛みついたり、蹴り飛ばしたりしたように見えるのに対して、いや二階にもそういった跡は見えるのだが、その後からなにかもつと別な力で、削られたり、吹き飛ばされたり、消されたりしたように思えたのだ。

「どんな怪物が暴れたらこんなことになるんだろう？ 僕、結構色々な動物を知ってるつもりだけど、こんな跡を残せる動物なんて、想像もつかないな」

「少なくとも、幻の動物とその生息地には載ってそうにないわね」

魔法生物飼学のケトルバーン先生やハグリッドは怪物の扱いが得意だとはオスカーは聞いたこともあるし、実際に世話をしているのも去年見たが、オスカーはこんな跡を残せる動物を制御できるとはちよつと思えなかった。

「あれ？ これバタービールの瓶じゃないですか？ 前に談話室の宴会で見ましたよ」

「ほんとだね、誰かここで飲んだのかな？」

そこには上部分だけが削り取られたバタービールの瓶が転がっていた。この部分だけ消失させた様に見える。オスカーは少なくともこの部屋をこのようにした何かと会うのは得策ではないと頭のどこかが告げている気がした。

決闘クラブ

暴れ柳の下を通って叫びの屋敷の中に入ってから二週間ほどたった。忍びの地図に書かれていた地図の残り二つの抜け道、大鏡の後ろの道と魔女のこぶから入れる道はどうもフィルチも知っていない道のように、オスカー達は今度みんなで行く計画を立てていた。

エストとオスカーが玄関ホールを歩いていると、興奮した顔で、クラーナとチャリーが張り紙の前で二人を手招きしていた。

「決闘クラブが始まるらしいよ」

「決闘クラブ？　去年必要の部屋でやったようなのと同じってことなの？」

「ええ、誰か先生が主催してやってくれるみたいですね、これでやっと合法的にトンクスをボコボコにして、遺灰をマツチ箱に入れてトンクス先生に渡すことができます」

「アズカバン行きだろそれ」

「トンクスの日頃の行いを考えれば、ウイゼンガモット大法廷も私を無罪にするでしょう」

クラーナは日頃のトンクスへのうっぶんを晴らしたくて仕方ないようだ。掲示されている羊皮紙には、今晚から決闘クラブを行うことが、ダンブルドアの許可サイン付きで示されている。

「オスカーは行くの？」

「まあ面白そうだし、クラーナが暴走して、決闘クラブに来てる人たち全員、セストラルが見えるようになっても困るだろ」

「僕はセストラル見てみたいけどね」

「なんですか、それだと私がヌンドウかドラゴンみたいじゃないですか」

「じゃあエストも行こうかな」

決闘クラブにはみな乗り気のように。去年の必要の部屋の練習やエストの実力を考えれば、決闘クラブでもオスカー達は上位の実力を示せるだろうとオスカーは思った。

「そう言えば、叫びの屋敷ですけど、最近はゴーストの噂がなくなつた

らしいですよ」

「なくなつた？」

「ええ、夏休みが終わってから噂があつたのに、クリスマスの後くらいから、ぴったり止んだらしいですけど」

「僕たちが行く前だし、関係はないのかな？」

「まあ、あの部屋の惨状を考えると、そのゴーストがいないほうがいいだろうな」

オスカー達は、叫びの屋敷と髪飾りの探索が終わってから、特に目新しいやることもなかったので、乗り気で決闘クラブが開催される大広間に集まつた。

大広間は夕食時と打って変わって、壁に沿って金色のビロードに覆われたステージが出現していた。天井は黒色の布で覆われ、いつもの空は見えない。蝋燭で照らされたステージがまさに決闘を行う場所として、煌々と光っていた。

オスカーは必要の部屋のステージほどではないが、十分に決闘の場所としてふさわしいステージだと思つた。

四寮の生徒ほとんどが来ているようで、大広間は人で一杯だった。

「誰がおしえるのかな？」

トンクスが楽しみそうに言つた。

「フリットウィック先生かもしれないの、スタージスがあの先生は実は決闘チャンピオンだったって言つてたの」

「ええっ!? あのサイズで？」

「トンクス、決闘の身長は関係ないですよ、むしろ小さい方が呪文が当たりにくくて有利です」

「そりゃあクラーナは小さいけど、フリットウィック先生のイメージと合わないというか……」

確かにトンクスの言う通り、クラーナに呪文を当てるより、ハグリッドに呪文を当てる方がオスカーには簡単に思えた。

「なんですか、小さいって！ 今日という今日はトンクスをボコボコにしてやりますよ」

「じゃあ、私が勝つたら、去年のクリスマスにオスカーと何があつたか

「教えてね」

「教えないですよ、私に得るものが全くないですから」

「あれ？ クラーナびびってるの？」

「こいつ!! いいでしょう、なんでも賭けてやりますよ!!! 私が勝ったら、そのクソ変化を一か月禁止です」

二人は売り言葉に買い言葉でオスカーには一言も言わずに、なにやらクリスマススのことを賭けようとしていた。

「二人は楽しそうだね、けどほんとに誰がおしえるのかな？」

「まあフリットウィック先生やマクゴナガル先生は結構な年だし、スネイプ先生とかなんじやないのか？」

五人が人込みと同じように騒ぎ合っているとステージの上に二人の人影が現れた。柔らかな栗色の髪と見慣れている寮監のシャンプーをつけているのかも怪しいドロドロの髪の毛が見えた。トンクス先生とスネイプ先生だ。

「ソノーラス!!! 響け!!!」

トンクス先生が自分ののどに杖を当てて呪文を唱えた。

「あれ、ママじゃん」

「よかったですね、ママに末期の姿を見て貰えますよ」

「私が勝ったら、絶対教えてよクラーナ」

「私に二言はありません」

さっきの呪文は声を拡大する呪文だったのか、トンクス先生の声は大広間に響き渡った。

「みんな静かにしてね、声は聞こえるでしょう？ 私のいたところは決闘クラブを毎週やってたんだけど、今はあんまりやってないみたいだから校長先生に頼んだのは正解だったみたいね、ああ、このクラブではセブルスと私が一応監督するから、あと先生が二人とも、スリザリんだからってひいきとかはしないから大丈夫よ」

トンクス先生がそう言うのと広間に笑いの波が起こった。スネイプ先生は普通にスリザリンをひいきするが、トンクス先生の前では不可能だろう。闇の魔術に対する防衛術の授業を受けた生徒達は言われ

なくてもそれを十分に理解していた。後ろのスネイプ先生は何か諦めたような表情をしている。トンクス先生に無理やり引っ張り出されたのだろうとオスカーは思った。

「じゃあ今から、私とセブルスで見本を見せるわね、一年生は決闘を見たこともないって子もいるだろうからね」

そう言うと、トンクス先生が杖を振って青い泡でステージを包んだ後、トンクス先生とスネイプ先生はステージの両端に立ってお互いにお辞儀した。二人は杖を相手に向けて正眼に構えた。

「この後、三つ数えたら決闘の開始よ」

大広間に集まった何百という視線は二人に集まった。

「一…… 二…… 三……」

スネイプ先生が先に叫んだ。

「エクスペリアームス!!! 武器よ去れ!!!」

紅の閃光がトンクス先生に突き刺さるかと思っただが、トンクス先生は半身ずらしただけでそれを躲して叫ぶ。

「インペディメンタ!!! 妨害せよ!!!」

今度はトンクス先生の杖から閃光が迸り、スネイプ先生を襲う。

「プロテゴ!!! 護れ!!!」

しかし、スネイプ先生の盾の呪文ではじかれ、青色の保護呪文の泡に当たって消えた。

生徒達から歓声が上がった。二人は杖を下ろして、ステージからこちら側を見た。

「まあこんな感じね、先生同士で殺しあってもしかたないでしょう？」

セブルスありがとう」

トンクス先生がそう言うとスネイプ先生はステージの上から降りた。

「じゃあ今度は生徒でモデルになってもらおうかしら？ 低学年がいいわね、みんなが分かる呪文でやってもらった方が、決闘がどんな形で行われるか分かりやすいでしょう？」

しかし、誰も低学年の生徒は手を上げなかった。そのため、トンクス先生はステージの上から見回した。すると先生はこつちの方に目

をつけた気がした。

「ミス・プルウエット、お願いできるかしら？」

トンクス先生がエストを指名した。周りにいる生徒がエストの方を見て、ステージまでの道を開けた。エストは困ったような顔でオスカーの方を見た後、ステージへと進んでいった。

「ありがとう、ミス・プルウエット、えーとじゃあ、二年生か一年生でミス・プルウエットと決闘したい子はいるかしら？ 美人さんよ？」

しかし、手は上がりそうになかった。オスカーは最もだと思った。美人かどうかは置いておいても、魔法の腕でエストに挑もうなんて生徒が二年生にはいると思えなかったからだ。またトンクス先生が困った顔をして、オスカー達の方を見た。

「じゃあ、ミス・ムー……？」

恐らく、トンクス先生がクラーナを呼び出そうとしていたところで、誰かがステージに上がった。短い金髪が蝋燭の火を浴びて光った、オスカーはその人物を知っていた。

「あら、ミス・マツキノンが引き受けてくれるみたいね、ありがたいわ」ステージに上がったのはレア・マツキノンだった。オスカーは違和感を覚えた。少なくとも前に会った際にレアは自信を失い、おどおどしていたし、あの状態の人物が誰も出ようとしないう決闘のステージに出ると思えなかったからだ。

オスカーの眼にはレアが自信満々に見えた。全校生徒の視線が集まっているにもかかわらず動じていない、その顔には何か笑みすら見えるようだ。

ステージの上にスネイプ先生が上がり、なにやらトンクス先生と話している。スネイプ先生は時々、レアの方を向いて、何か困惑した顔をしながら話している。

「マツキノンのハンバーグができあがりそうですね、私がエストと二年生最強を賭けて戦ってもよかったですけど」

いつの間にかトンクスと話していたはずのクラーナが横に来ていた。

「流石にそんな本気でやらないだろ、マツキノンは一年生だしな」

「まあそうでしょうけど、マツキノンは意外ですよね」

「俺もそう思ってた」

トunks先生とスネイプ先生の話は終わったようだ。スネイプ先生はどこか心配そうにレアを見ているが、レアの方はスネイプ先生に見向きもせず、エストの方を見つめていた。

「じゃあ、ミス・プルウエットとミス・マツキノンにやってもらいわ、さつき見たと思うけど、呪文がどこかに飛んでも大丈夫よ、保護呪文があるからみんなのそこには飛んでいかないわ、危なくなったら、私かセブルスが止めに入るからね、二人ともお辞儀して」

トunks先生の言葉を受けて、二人はさつきの先生二人と同じようにステージの両端に立ってお辞儀をした。

「行くわよ、一……二……三……!!」

三とトunks先生が言い終わった瞬間、レアの杖から赤色の閃光がエストに放たれた。速攻の無言呪文だったが、エストは無言で盾の呪文を展開して弾いた。

「無言呪文ですか!? マツキノンの成績が悪いとかいうのはなんの冗談だったんですかね?」

オスカーも驚愕していた。少なくともオスカー達は先生をつけてやつと無言呪文を覚えることができたし、無言呪文を使うようになった際にはポドモア先生は本当に驚いていたからだ。一年生で無言呪文を使えるというのは驚愕すべきことに違いなかった。

今度はエストが無言で呪文を幾本も唱えた。青や赤色の閃光がレアを襲うがそのすべてを杖も振らずに避けて見せた。

ステージ後ろのトunks先生は感心している顔をしていたが、スネイプ先生の方はレアの方をみて、驚愕したような顔をしていた。オスカーは何かがおかしいと思った。

「短期間で成績が悪いやつが無言呪文を使えるようになるのか?」

ステージ上では二人が無言で呪文を撃ちあっていた。色とりどりの光線が二人の間を行き交っていたがオスカーにはエストの方が押されているように見えた。エストは盾の呪文で弾いているがレアの方は体を動かすだけで避けていた。

エストに幾回か呪文は当たりかけていて、オスカーは自分の杖を握っている手が湿ってきたのを感じた。

危ないところを何回かエストが切り抜けたところで、オスカーは杖腕が誰かの手で押さえられているのを感じた。クラーナがいつのまにか杖を上げようとしていたオスカーの腕をつかんでいた。こつちを見て首を横に振っている。

オスカーはどうやらエストが押されている決闘を見て、杖を無意識に使おうとしていたらしい。

「ああ、ごめん……」

正面からだと分が悪いと感じたのか、エストはついに岩や盾を召喚し始めた。呪文の射線上に岩が置かれ、視線を遮った。レアが呪文で岩を粉々に砕こうとしたが、先に岩陰から呪文が飛んできて、当たりかけたがそれをレアは恐らく盾の呪文で防いだ。

今度は攻勢が逆転した。さっきまで盾の呪文も使わずに呪文を避けていたレアはエストが見えなくなった途端に呪文を避けられなくなった。

エストは無言で召喚物を展開し、さらに岩陰から呪文を雨あられと浴びせ始めた。ついにレアはステージ上に倒れ、そこにエストの赤い失神光線が命中するかと思った。

スネイプ先生が出てきて、エストの失神光線を無言で弾いた。トンクス先生もステージ上にでていた。なにやら二人を褒めているようだ。

「今の…… エストが見えているときは呪文を避けていた……？ まさか一年生が？ いくらなんでもおかしい……」

オスカーの手を捕まえていたクラーナは隣でなにかを呟いていた。良く聞こえなかったが何かがおかしいと言っていた。オスカーも先ほどの決闘には何か違和感があった。

「はい、素晴らしい決闘でした。一年生と二年生が無言呪文を使うとはね、先生ちよつと授業のレベルを考え直さないといけないかもしれないわ、ミス・プルウエット、ミス・マツキノンに拍手を!!」

トンクス先生がそう言うのと大広間は拍手に包まれた。ステージ上

にはまだ二人がいたが、レアは何か、魔法の道具を見つけた時のエストのような、魔法生物を見つけた時のチャーリーののようなそんな表情でエストの方を見つめていた。

「ええ!!!!」 ちよつとなんでオスカーとクラリーナは手を繋いでるの？

エストがステージに上がった間にやるとは、凄いわね」

「二人とも仲いいね」

オスカーとクラリーナがさつと手を離した。

「これは、オスカーがエストが心配で杖を上げようとしてたんです。だから手を掴んでただけです」

「その通りだ」

トunksはニヤニヤが止まらないようだった。後ろの方からエストがこつちに戻ってくるのが見えた。見た感じはケガがなさそうなのでオスカーは一息ついた。

「エスト、お疲れ様。凄かったよ」

「チャーリー、ありがとうなの、レアは凄かったの全然呪文が当たらなかったの」

「エスト、オスカーとクラリーナが手を繋いで貴方を応援してたわよ」

ニヤニヤしながらトunksはそう言った。これは本当に面倒くさいことになったとオスカーは思った。決闘でトunksをマツチ箱に入れるくらい小さくするのも名案かもしれないと思ったほどだった。

「ええっ!? やっぱ二人はクリスマスみたいなの!!?」

「だから、オスカーがエストを心配して杖を上げようとしたのを止めただけって言うてるじゃないですか!!!! やっぱトunksはここで終わらせます!!!!」

「ちよつと事実を言っただけじゃないの、何よ終わらすって」

「その減らず口を叩けないように、口を永久粘着呪文でくっつけてやります!!!!」

その後、トunks先生は二人ペアになって練習するように言い、クラリーナがトunksにこれでもかというくらいに呪文をかけ始めて、二人は大広間全体を使って鬼ごっこを始めてしまい、オスカー達はそれを止めないといけなかった。

そのせいで、寮に帰るころには五人共、疲労困憊の状態であったし、その中でもエストはなおさら疲れていたので、オスカーは決闘を見た時の違和感をエストに尋ねることができなかつた。

決闘クラブの翌日、授業がなく、グリフィンドールとハッフルパフの試合が行われる日、オスカーとエストが朝食を大広間で食べているとふくろうが二人の前に降り立った。二人にふくろうが来るのは、大抵ウィーズリー家のエロールかドロホフ邸で飼っているローガンというふくろうくらいだったので、二人は見慣れないふくろうが来たと思つた。

ふくろうが渡した便せんにはエストレヤ・プルウエット様宛だつた。エストがその便せんを開くと見慣れない字でこう書かれていた。

エストレヤ・プルウエット様。もし、失われた髪飾りについて知りたいのならば早急に叫びの屋敷まで来られたし。もしも先生方にこの内容を伝えたのならば、髪飾りは永遠に失われたままだと理解されたい。

差出人には創設者の後継者と書かれている。オスカーはエストと顔を見合わせた。オスカーの頭の中ではエストが呪文に当たりそうになつていた時よりも、遥かに大きな嫌な予感が発せられていた。

後継者

「オスカー……これ……」

「少なくとも、俺たちが髪飾りを探し知ってる人だろうな」
手紙には失われた髪飾りについて知りたいなら先生を抜きで叫びの屋敷に來いと書かれている。少なくとも、オスカー達が髪飾りを探している、さらに叫びの屋敷への行き方についても知っていることを向こう側は把握しているということだ。オスカーの頭の中に浮かんだのはいつもの五人となんでも知ってそうなダンブルドア校長を除けば二人だけだった。

「トンクス先生かマッキノンが怪しいけど、普通に考えるとトンクス先生が怪しい気がする」

「トンクス先生？」

「ああ、俺たちにゴーストに聞けばいいってヒントを与えたのも、暴れ柳について話したのもトンクス先生だろう？」

そう、今年に入って色んなヒントをオスカーはトンクス先生から貰っていると思った。少し怖いほどだ。

「確かにそうなの、でも創設者の後継者ってなんなんだろう？」

「さあな、トンクス先生がレイブンクロウの子孫ですつと髪飾りを持ってたとかか？」

「うーん、取りあえず、先生には言っちゃダメって書いてあるからクラーナを呼びに行ってみる？」

「他の二人は試合だしな」

二人は忍びの地図を取り出してクラーナの居場所を探した。クラーナは朝食をすでに終えて、グリフィンホール寮にいったん戻ってから、競技場に向かっているようだった。オスカーはクラーナに会いに行く道中、トンクス先生とレアの居場所を探したが二人の名前は見つからなかった。昨日の決闘クラブといい、どうもこの二人が怪しいとオスカーはさらに思った。

「あつクラーナ!! ちよつと来てほしいの」

「なんですか? どうせクイディッチの試合を見に行くんじゃないで

すか？」

「ちよつとおかしな感じなんだ」

二人はクラーナに手紙を見せ、トンクス先生とレアが怪しいのではないかと話した。

「確かに、状況としてはその二人が怪しいと思いますね、髪飾りと叫びの屋敷両方に当てはまるのはトンクス先生ですし」

「髪飾りが必要そうだったのはマツキノンの気はするけどな」

「決闘クラブだとレアはレディの時とは違って、凄い自信満々だったの」

エストの言う通り、あの時のレアの様子は明らかにおかしかった。ただオスカーはダイアゴン横丁でのレアを覚えていたので、彼女が決闘を望むような性格でもおかしくはないとは思った。

「まあ両方怪しいですね、確かトンクス先生の実家は純血で有名なブラック家だってトンクスが言ってましたし、マツキノンもそれと同じくらい古い一族のはずです」

「創設者の後継者を名乗ることくらいはできるってことなの？」

「まあその言葉が何を指しているのかはわからないですけどね」

三人はチャリーとトンクスに悪いと思いつつも、叫びの屋敷に向かうため、暴れ柳までやってきた。二回目なので、暴れ柳をスマートに切り抜け、三人は地下のトンネルへと潜っていった。

「何が目的なんでしょうね？」

「あの手紙か？」

「ええ、私たちそれもエストをピンポイントで呼び出した理由ですよ」「トンクス先生が昨日の決闘クラブでエストに感心したから、髪飾りを見せる気になったとかか？」

「うーん、見せるだけなら叫びの屋敷にする意味がわからないの」

三人は傾斜の激しいトンネルを進みながらも、一体だれが何の目的で呼び出したのかを話し合っていたが、一向に答えは出そうになかった。

「学校の中で見せると何か不味いんですかね？」

「ホグワーツの中だとなんか制限があるとか？」

「確かに姿現しとかはできないけど、魔法の道具にまで制限をかけられるのかな？」

「髪飾りの力は伝承の通りならちよつと頭が良くなるだけのはずですけど」

トンネルは上向きの傾斜を持ち始めていた、あとは何回か蛇行すれば叫びの屋敷に着くはずだ。

「じゃあレアなのかな？ 髪飾りを見つけたから見せたいとか？」

「確かにあの塔であった時とは別人のような自信でしたね、無言呪文を唱える一年生の成績が悪かったら、今年の五年生は誰もふくろう試験で単位をとれませんよ」

オスカーの周りには無言呪文を使える人間が沢山いるが、本来あれはイモリレベルの学生が持つ技能なのだ。一年生でそれが使えるのは明らかにおかしかった。

「それも髪飾りの力なのか？」

「だったら凄い力なの、みんなで貸し合いすればみんな無言呪文を使えるようになってちやうよ？」

「まあ会えばわかるでしょう」

クラーナがそう言うともう前に、埃っぽい屋敷の内部が見えていた。オスカーは以前来た時よりも何か屋敷の中が張り詰めているような、そんな感じがした。

何かが大暴れして、めっちゃめちゃに壊されている一階には誰もいなかった。オスカー達は杖灯りを頼りにしながら、二階へと上がった。

推定できない力で壊された跡がある二階の足が一本ないテーブルの上でバタービールを飲みながら、彼女は座っていた。

「先輩達、来てくれたんですね」

そう、オスカー達に話かけてきたのは、レア・マツキノンだった。男と見まがうような短い金髪に加えて、杖灯りとどこからか漏れてくる日の光にあてられて、レアの両目は赤く、煌々と光っていた。

「ボク、レディに聞いた後のクリスマスに八階を歩いていたら見覚えのない扉を見つけたんです」

レアは机の上から降りて、バタービールを置くところちらに歩きなが

ら、ローブの中から何かを取り出した。

「その中は大広間よりも大きな場所だったんです。でもあてもなく歩いていたら、これを見つけたんです」

レアが取り出したのは黒色にくすんだ銀色の髪飾りだった。髪飾りには計り知れぬ英知こそ、われらが最大の宝なりと彫られている。オスカー達は息を呑んだ。

「多分あそこは色んな人達が色んなものを隠す場所だったと思うんです。ああ先輩達ならもう知ってるのかもしれないですね、この屋敷にも迷わずこれたみたいですし」

レアの口調はオスカー達全員に向けられていたが、その視線はオスカーとクラリーナの方には一切向いておらず、ただエストの方に向けられていた。

「確かにこの髪飾りを持った時から、ボクの力がコントロールできるようになったんです、髪飾りの力は本物でした。それでも、プルウエット先輩には負けちゃいましたけどね」

レアはそう言って笑ったが、オスカーにはその眼が全く笑っていないように見えた。まるで獲物を捕まえる寸前の蛇のようだった。オスカーはそんな視線をどこかで見ることがある気がした。

「だから、一度プルウエット先輩に見て貰おうと思っただんです。レディが話してくれたのはプルウエット先輩のおかげですし、レディも先輩なら髪飾りがふさわしいって言ってましたから」

なぜ叫びの屋敷でそれをやる必要性があるのかは分からなかったが、レアの話していることには矛盾はなく、筋が通っているように思えた。実際にエストが気づいたように必要の部屋にそれは置かれていて、それが必要だったレアの手に渡ったのだろう。オスカーにはその流れるような説明がなぜか空恐ろしかった。

「ほら、手に取って見てください。多分、本物だと思います」

そう言って、レアは髪飾りをエストに手渡そうとした。オスカーはいつか経験した最悪の記憶と同じくらい、その行為に不安を覚えた。バタッ。

髪飾りをエストに渡した瞬間、レアは床に倒れ伏して、ピクピクと

痙攣し始めた。さっきまで自信にあふれていた顔は恐怖そのものに変わり、ぶつぶつと何かに謝っている。

「それを離せ!!!!」

オスカーは直観的にエストから髪飾りを取り上げようとした。しかし、目もくらむような銀色の光線がエストの杖から現れて、オスカー、クラーナ、レアの三人は部屋の端まで吹き飛ばされた。

オスカーは壁に叩きつけられ、もうろうとする意識の中で、いつも聞いているエストの声そのものにも関わらず、絶対に別人だと思われる声を聞いた。

「素晴らしい!! 同じ純血とは言え、魔力をコントロールできないまがいものとはモノが違う…… 魔法力も、杖への力の流れ方も、下手をすれば私の体以上か?」

エストは、オスカーがいつもそばで見ているエストと寸分も違うな、いその存在は、自分の手を開いて握って、自分の体を眺めていた。

「カップとロケットを持っていたあのおいぼれも創設者の後継者をかたっていたが、この体と流れる血は本当に本物かもしれない……」

エストの赤い目が、オスカーの知らない光り方をしていた。いつもの優しい気な光ではない、狂気が奥にあるような、見るだけで恐怖を覚えるようなそんな赤に見えるのだ。

エストが杖を振ると、驚くべきことにみるも無残に壊されていた部屋が、あるべき場所にあるべきものが戻るように修復されていった。破られたカーテンとカーペットが新品同様になり、椅子と机はあるべき足を取り戻した。

「オスカー…… あれはどうみてもヤバイです」

クラーナが体を痛そうに引きずりながらも近くまで歩いてきていた。オスカーはクラーナの肩を借りて、立ち上がった。レアは傍で倒れ伏し、まだ恐怖に震えていた。

「分かってる。髪飾りだ、髪飾りを取り上げよう」

オスカーはエストが杖腕でない方で持っている髪飾りを見つめた。明らかにエストの豹変は髪飾りが原因のように思えた。

「おや、アントニンの息子と偉大なオーラーの姪よ、もう立てるのか

？」

そう言つて、エストは髪飾りを自分の頭の上に乗せた。髪飾りはさっきの黒ずんだ色とは打つて変わり、エストの黒色の髪の上で銀色に輝いていた。まさに髪飾りは完全にあるべき場所に戻つたのだとオスカーは思った。

エストの狂気を孕んだ眼はいつかみぞの鏡の前でダンブルドアと出会つた時のようにオスカーのすべてを見通しているように見えた。

オスカーはエストに恐怖していることを感じた。魔法使いの前に立つて恐怖すること、この経験をしたのは二度目だった。

「素晴らしい、この体もそうだがお前たちもだ。ホグワーツの最も深い秘密の一つ、必要の部屋を見つけ出し、この髪飾りのありかまで見つけ出すとは…… 私が学生のころにお前たちのようなものに出会いたかつたものだ……」

その時、エストの顔に浮かんだ表情は、あのクリスマスで必要の部屋に髪飾りがあるかもしれないと語つたその時の顔をただただ邪悪にしたように思えた。

「オスカー、エストの…… やつの眼をみてはいけません」「目を？」

そう言うクラリーナを見て、エストはさらに感心したという顔をする。

「その年で、無言呪文を使える上に閉心術にも心得があるとは、本当に素晴らしいな、流石に闇払いの血統か」

エストがそう言つと、クラリーナは懸念事項が眞実になつたとばかりに深刻な顔をした。

「お前は どう見ても、エストではない、一体だれなんですか？」

クラリーナにそう尋ねられて、エストはゾツとするような大声で笑つた。

「分からないのか？ この私が？ この体も、お前たち三人も、他の者よりもはるかに私の名を知っているはずだ。嫌と言うくらいにな」

そう、エストらしきものが言つた瞬間にオスカーは最悪の想像が現実だつたことを理解した。オスカーには最初から分かつていた。エ

ストの前に立つて恐怖した瞬間から、オスカーの父親をアントニンと言った際にもだ。今の魔法界に目の前にいる魔法使いを知らないものなどいない……

「レイブンクローの失われた髪飾りを礎に、レイブンクローの血族であろう体と魂を使って、私が復活する。このサラザール・スリザリン最後の後継者が」

倒れているレアも、隣でなんとか立っているクラリーナも、実際に彼自身にあったことのあるオスカーもその名前を恐れていた。

「私こそが、ヴォルデモート卿だ。死を超越した魔法使いだ」

オスカーのよく知る唇で、オスカーの良く知る声でヴォルデモートはそう言った。

「お前たちは本当に優秀だ。だから私の配下にならないか？ オスカー、お前ならアントニンと比べるべくもない魔法使いになれるだろう」

ヴォルデモートは優しい気なエストの声でそう言った。

「エストはどうなるんだ。お前が体を侵しているエストはどうなる」

オスカーはなんとか口から言葉をひねりだした。まるで唇が凍り付いているようだった。その声は自分でも信じられないくらいに震えていた。またヴォルデモートは高笑いをした。

「大丈夫だ。くれてやるとも、私が完全に復活し、体も魂もぼろきれのようになつたものをな」

オスカーは気が付くとヴォルデモートに呪文を放っていた。赤い失神光線がエストの体に当たろうかというところで、ヴォルデモートは身をずらすだけで交わした。

「この私に恐怖しないとは、そんなにこの体が大事なのか？ アントニンの息子よ」

「オスカー!!! 奴は心を読むんです、真正面から呪文を撃つても絶対に当たれません!!!」

クラリーナが叫んでいる声も聞こえず、オスカーは無茶苦茶に呪文を撃ちこんだが、一つとしてエストの体には届かなかった。

「アントニンは息子に礼儀を教えるのを忘れたらしい」

ヴォルデモートはオスカーに杖ともう片方の手を向けた。するとオスカーの体がまるで金縛りにあつたように動かなくなった。

「お辞儀をするのだ。オスカー、昨日先生に決闘の方法を教えてもらつただろう？ それとも昔お前がやられたように服従の呪文が正しいのか？」

オスカーの体がまるで巨大な手で曲げられるように曲がつた。エストに向けてお辞儀をするように。

「よろしい、では杖を構えるのだ。礼儀に則り、勝者と敗者を決めようではないか？ また何もできずに何もかも失いたくはないだろう？」

ヴォルデモートの眼が真っすぐにオスカーを見通した。クラリーナの言っていたことが理解できた、決闘クラブでエストがレアに苦戦した理由もだ。ヴォルデモートはオスカーの心の中に入り込んでいる。怒りに溢れていたオスカーの心に恐怖が生まれた。勝てない、手の出しようがない、オスカーは負け、エストを永遠に失うことになる、オスカーはそう思った。

オスカーは中々杖をあげることができなかつた。杖を上げ、決闘を始めることはエストが失われることを意味していた。

「私を忘れて貰つては困ります」

クラリーナがその小さい体でオスカーとヴォルデモートの射線上に立っていた。クラリーナの体は震えていた。またヴォルデモートは邪悪な笑い声を上げた。

「オスカー？ それでいいのか？ 小さい女に護られ、自分で戦うこともできずに後ろで震えているのか？」

ヴォルデモートに嘲られてもオスカーの体は動かなかつた。目の前で震えながら立っているクラリーナがいるのに。

「いいだろう。オスカー、見せてやろう、私に立ち向かうものがどうなるのか、破滅とはどのようなものなのか」

ヴォルデモートが杖を振つた。クラリーナが同時に盾の呪文を発動したが、そもそもヴォルデモートは呪文の光線を出さなかつた。さきほどヴォルデモートが修復したカーペットの一部が蛇のようにうねり、クラリーナの足を絡めとつた。

「これがあらがうことのできない力だ。よく見るといい」

バランスを崩し、倒れたクラリーナに向けてヴォルデモートが呪文を唱えようとしていた。オスカーの体がやつと動き出した。クラリーナの前に立ってとっさに武装解除呪文を杖から発した。

「アバダケダブラ!!!」

エストの口を借りて唱えられた、死を意味する緑の閃光と紅の閃光が叫びの屋敷を照らしながらぶつかった。

オスカーの予想に反して二つの光線は拮抗していた。緑と紅が倒れ伏すレアとクラリーナを何が起きているのか理解できないオスカーを、そしてエストに取り付いたヴォルデモートの顔を、驚愕からとんでもない喜色にまみれたその顔を照らした。

ヴォルデモートが振り切るように杖を振ると二つの光線は消えた。

「素晴らしい因縁だ。兄弟杖とは…… お前たちはまさに強い力で結ばれているわけだ…… 特別だ……」

オスカーはカーペットを杖で切断し、クラリーナを助け起こした。ヴォルデモートが楽しさと邪悪さが共存した顔でオスカーを眺めた。「場所を変えよう、オスカー、今晚もう一度だけ、必要の部屋でお前からの挑戦を受けようではないか? レイブンクローの因縁深い場所で、この娘の運命を決めるわけだ、もちろん何人にも言ってはならんぞ? そうしなければ永遠に娘を失うことになるだろう」

ヴォルデモートはそう言うで一階の闇の中へ消えていこうとした。「エスト!!!」

オスカーはエストがヴォルデモートに完全に乗っ取られていると分かっているにも関わらず、エストに呼び掛けた。

「オスカー、必要の部屋で待ってるよ」

ヴォルデモートはエストそのものの声と表情でそう言った。

開心術

クラリーナを抱き起こしたオスカーの心臓はこれまでにないくらい早鐘を打っていた。どうしたらいいのか、何をしたらエストを取り戻すことができるのか、暗い部屋の中でオスカーの頭の中はそれだけで一杯になっていた。

「ダンブルドアです、ダンブルドアに言うしかありません」

「ダメだ!! 誰かに言ったら本当にエストが……」

オスカーの口から考える前に言葉が出ていた。クラリーナの考えは正しいとオスカーも思ったが、誰かに言った時点でエストが失われる。その恐怖がオスカーの頭の中を駆け巡っていた。

「例のあの人はダンブルドア以外には止められない、アラスターおじさんもそう言っていました…… 本当にあれが例の…… ヴォルデモート卿ならですけど……」

「あいつは髪飾りを取り上げようとしたら俺たちを吹っ飛ばした。髪飾りさえどうにかできればなんとかならないのか?」

「確かに、エストの体を壊すわけにはいかないですから、髪飾りを狙うのがいいでしょうけど……」

オスカーはいつの間にか座り込んでいたレアに視線を移した。さつきまで髪飾りを持っていたのはレアなのだ、オスカーはエストを取り戻すヒントがなんとしても欲しかった。

レアはオスカーの視線を受けただけで体をビクツと震わした。

「マツキノン、話ができるのか?」

「ヒツ…… ごめんなさい、ごめんなさい、ボクが髪飾りを見つけてしまったから……」

「マツキノン!! 話ができるかって聞いてるんだ!!」

「ヒツ…… できます、できます」

レアは心底怯えた青い顔でオスカーを見ていたが、オスカーにはレアを氣遣う余裕が全く残されていなかった。エストを取り戻すためには今日の夜までに方法を考えないといけない、オスカーにはほとん

ど時間が残されていなかった。

「オスカー！ 貴方が冷静にならないといけません。奴が貴方の心に入り込んだように恐怖は貴方の眼を曇らせているんです。落ち着いてください」

クラリーナがオスカーのローブを掴んで引き寄せ、オスカーの真正面から言い放った。オスカーはクラリーナの埃にまみれた顔を見て、クラリーナの瞳の中に写る己の情けない姿を見て、少しだけ自分の心の中が落ち着くのを感じた。

「すまん、マツキノン。なんでもいい、なんでもいいからあいつについて教えてくれ」

「は…… はい…… あの髪飾りはなにをしても壊れなかったんです…… ボクあの髪飾りを手に入れてから、成績は良くなったんですけど…… 時々記憶がなくなることがあって…… それで怖くなって、あの髪飾りをどこかに置いたりしたんですけど、その度にいつの間にか手元に戻ってきて…… それで叩いたり、暖炉の中に入れたりしたのに、壊れなかったんです……」

火の中にいれても壊れない？ 一瞬またオスカーの心は恐怖に支配されそうになったが、オスカーはいつの間にか手元に戻ってきたりする時点でやはり、エストに乗り移ったヴォルデモートと自称する何かの本体はやはりあの髪飾りなのだと言静に考えた。

「何か強力な闇の魔法で守られているということでしょうか？ まあ触れただけで人間を支配するような代物ですから、推して知るべきですわね」

「ただ、触れないと支配できないってことだろ？ エストから引き離せばなんとかなるかもしれない……」

「そうですね、エストから髪飾りを取り上げて、ダンブルドア校長や先生方に渡すことができればなんとかなるのかもしれない」

しかし、それはとんでもなく難しいとオスカーは思った。いくら同年代のエストの体に移ったとはいえ、奴の言動が本物ならばオスカーは今世紀最悪の魔法使いを出し抜かなければならないのだ。数々の力ある成人の魔法使い、闇払いを葬り、ダンブルドア以外には

止められないと言われた最強の魔法使いをたかだか無言呪文が使えるくらいの二年生にどうこうできるのか？ オスカーは絶望的だと思った。

それに奴はオスカーの心を読むのだ。もし何かオスカーに考えがあるとしても、オスカーが奴の目の前に立った時点ですべては筒抜けになってしまう。

そこで、オスカーはなぜクラリーナが奴の目の前に立てたのか疑問に思った。いくらクラリーナが勇敢とは言え、奴と目線を合わせてしまえば心を読まれてしまうのではないのか？

奴はさっきなにについてクラリーナを褒めていたのか？

「クラリーナ、さっきあいつが言っていた閉心術ってなんなんだ？」

「その名前の通り、心を閉じることです。閉心術の使い手と戦うには目をつぶるか閉心術を修めるしかありません」

「あいつの心を読む術に対抗することができるってことなのか？」

オスカーにはそれが願ってもない武器に思えた。違う、オスカーは最低限戦うのに必要なものだと考えなおした。あいつの目の前に立つにはそれが要だ、強くそう思った。

「そうです、卓越した魔法使いは対面しただけで相手の心を読めます。だからたとえ無言呪文であっても、相手に次に何をするのか筒抜けになつてしまうんです」

そうだ。エストがレアと決闘した際も、さっきオスカーがあいつに向けて呪文を撃った際もあいつは最低限の動きだけで呪文を避けていた。それは決闘をするには致命的な弱点になつてしまう…… オスカーはそれを痛いほど理解していた。

「それを防ぐのが閉心術です。自分の心を無にするか、それか相手に理解できない何かで心を満たすんです。そうすれば読もうとする相手の心をはねのけることができる……」

「それはどうやって使うことができるんだ？ 何か練習をすればいいのか？」

オスカーはそれこそ、今まさに必要としているものだと思い、期待を込めてクラリーナを見たがクラリーナの顔は全くもって希望的とは言

えなかった。

「開心術には呪文があります…… 開心術になれないものでもその呪文を使えば相手の心を開くことができます。だからその呪文に対抗できれば開心術をマスターしたといえるでしょう、しかし……」

「しかしなんなんだ？」

オスカーはその術を覚えることができるのならなんでもするつもりだった。

「開心術は一朝一夕で覚えられるものではありません…… もちろん術者の素質によりますが、私もアラスターおじさんに付きつきりで二か月もかかりました」

二か月…… オスカーに残されているのはあと六時間かそこらだろう。だがオスカーにはそれがどうしても必要だった。

「それを教えてくれ、今から練習を始めて欲しい」

「オスカー、貴方は分かっている、開心術とは人の心の中を覗き見るのですよ？ 貴方は精神的に今追い詰められている。そんな状態で心をのぞき見られて平常でいられるわけがない……」

クラリーナがオスカーを真剣な目つきで見た。オスカーは開心術を使えなかったが、クラリーナがオスカーの為を思っていることは見ただけで分かった。

「やってくれ、そうしないと俺はあいつの目の前じゃただの人形になってしまう」

「しかし……」

「クラリーナ、頼む」

オスカーはクラリーナを真正面から見て頼み込んだ。しばらく見詰め合って、クラリーナは大きなため息をついた。

「わかりました。しかし、覚悟してください、今からやるのは人の心、恐らく魔法使いが踏み込む一番深い場所なんですから」

オスカーは一番深い所だろうがどこだろうが、踏み込むつもりだった。

オスカーとクラリーナは叫びの屋敷で向かい合った。レアはさきほ

ど修復された椅子に座っておどおどと二人を見ている。

「いいですか？ 私が呪文を唱えます、そうしたら私は貴方の心に入り込もうとしますから抵抗してください」

「抵抗？ どうすればいいんだ？」

オスカーには心で抵抗しろと言われてもよくわからなかった。

「己の心をコントロールするんです。自分の感情に支配されず、己自身で己を満たさないといけません」

クラーナにそう言われても、オスカーにはそれがイメージできなかった。己をコントロールする？ いったいその言葉が何を示しているのか。

「いきますよ、オスカー!! レジリメンズ!!!」

クラーナが杖を向け、そう叫んだ瞬間、世界が回りだし、叫びの屋敷が目の前から消えた。音が遠くなり、現実の世界と違う何か切れぎれに現れては消えていった。

今より、ホグワーツ特急でエストやクラーナと出会った時よりも小さいオスカーが歩いている。ここは確か、ドロホフ邸の近くの森の中の小道だ。オスカーの記憶にそれは間違いなくあった。

オスカーは鼻歌を歌いながら笑顔で歩いている。ドロホフ邸では決して聞かして貰えないマグルのラジオから流れてくる歌だ……

オスカーは小道を抜けて、森の中の開けた場所に出た。オスカーは鼻歌を辞めて歩き出した。オスカーの顔は鼻歌を歌っている最中よりも笑顔になっている……

同じ年くらいの女の子とオスカーが遊んでいる。オスカーが手をかざすと木から木の葉が散った。女の子がそれを見て笑っている…… オスカーはそれを見てさらに笑顔になった……

オスカーはあの時の森の中に溢れていたリングのような花の匂いを思い出した。

また場面が変わった。オスカーと同じ髪色の女性がオスカーと女の子が遊んでいるのを眺めている…… オスカーと女の子が杖を使わずに魔法を使って遊んでいる…… トンボが魔法の力に囚われたのか、オスカーと女の子の周りを回っている…… 女性に気付いた才

スカーが女性の方にトンボを操って、トンボがブローチのように女性の胸元に止まった。

女性は困った顔をしながら笑った…… オスカーと女の子も笑顔になった……

オスカーの頭の中で声が響いた。あり得ない、二人にはもう会えない、ここは自分の記憶の中だ…… エストの為に戻らないといけな…… 自分が幸せな記憶に浸ることは許されない。戻らないといけない……

オスカーが気づくと、叫びの屋敷の埃っぽい床が目の前にあつた。片膝について、荒い呼吸でオスカーは床を見つめていた。いったいどれくらいの間、開心術にかかっていたのか。

クラーナが心配そうな顔でオスカーを見つめている。

「いいですよ、オスカー、貴方は自分で戻ってこれました。私をはねのけて自分を取り戻したんです」

しかし、オスカーは焦っていた。エストが危ないのに自分は自分すら支配できない…… 自分の記憶に浸り、ただただ床を見つめて、時間を浪費している。オスカーは自分に腹が立った。

「ちよつと休んでからまた始めましょう。心を整えるには時間があるんです」

「ダメだ、すぐにやってくれ」

「オスカー、自分で戻ってこれただけでも十分です。人に心をのぞかれるというのはとんでもない負担なんです」

「クラーナ、時間がないんだ」

そういうとまたクラーナは心配そうな顔のため息をついた。

「わかりました。やりますから、まずは深呼吸してください。体を心を平常に保つんです」

オスカーは二度三度深く息を吸って吐いた。少しだけ、早鐘を打っていた心臓と首元の脈が落ち着いた気がした。オスカーはできるだけ平常でいるように心がけようとした。

クラーナがオスカーの目の前に立ってもう一度杖を構えた。

「さあ、もう一度いきますよ、レヅリメンズ!!!」

またオスカーの目線からクラリーナと叫びの屋敷が消えた。

冷たい石畳の上に巨大なテーブルが置かれていて、そのテーブルの周りに沢山の黒いローブを被った人間が集まっている。だれもが鋭い眼光と不気味な雰囲気を漂わしていた。どうみても普通の人間たちではない。

しかし、その人間たちもテーブルの真ん中に王様のごとく座っている人物に比べれば、ただの人間と言わざるを得なかった。

鼻が裂け、怪しく光る赤い瞳は縦に切れており、まるでその顔は蛇のようだった。テーブルの周りの人間がその人物を恐れているのは誰が見てもよく分かった。

「皆、よく集まってくれた。今日は他でもない、我らが親愛なるアントニンのその息子に来てもらった」

その声を聞いて、聴衆がまるで嘲るように笑った。

真ん中に座っている男の傍に、髪の色は違うがオスカーと顔のパーツがよく似た色白の男が茫然とした顔で座っていた。

「純血の素晴らしい息子だな？ アントニン？」

そして、蛇のような男の傍に恐怖で色塗られた幼いオスカーが立っていた。瞳からは涙が流れ、ただテーブルの上を見つめている。

「そしてこのオスカーには非常に仲の良い友人がいるのだ。マグル生まれの、可愛らしい女の子だ」

男が杖を振ると、先ほど森の中でオスカーと遊んでいた女の子が金切声を上げて机の上で暴れているのが見えるようになった。

女の子からも周りが見えるようになったのか、オスカーの方を見て叫んだ。

「オスカー、助けて…… オスカー 怖い、怖い……」

もう一度男が杖を振ると女の子はまるで言葉が失われたように喋れなくなった。

「なあアントニン？ お前は息子に雑種を作らせたいのか？ このヴォルデモート卿の腹心であるお前の息子とそこの穢れた血とでだ……」

「我が君…… そのようなことは決して…… 我が君…… お許しを

……」

アントニンと呼ばれた男は必死にヴォルデモートに許しを請い、その隣に座っているオスカーによく似た髪色の女性はショックで何も言えないようだった。

ヴォルデモートが高笑いをした。

「ならば簡単だ。血が腐る前に切り捨てねばならない、当然、オスカー自身にやってもらおうではないか？」

ヴォルデモートはそう言うとおスカーに向けて杖を振った。

「インペリオ 服従せよ」

オスカーの表情が先ほどもまでの恐怖に彩られた表情ではなく、何も考えていないような気の抜けた顔になった。

「アントニン、お前の杖を貸せ」

ヴォルデモートはアントニンと呼ばれた男から杖を受け取ると、オスカーの手にその杖を添えた。

「オスカー、こうするのだ…… 私がアントニンに教えたのと同じ術だ…… 全てを焼く炎をコントロールするのだ……」

ヴォルデモートがオスカーに渡した杖から、赤とも紫とも言える炎が鞭のように噴き出た。

「アントニン…… お前の息子は素晴らしいな？ お前があれだけ苦労した術をいとも簡単にやってのけたぞ？」

オスカーの何の感情も見られない表情が炎に揺られて映し出されていた。テーブルの上では女の子が声にならない声で叫び続けている。

「さあオスカー、穢れた血を自分の手で焼きつくすのだ」

オスカーが炎の吹き出す杖を持ってテーブルへと進んだ。

ヴォルデモートがもう一度杖を振るとまた女の子の声が聞こえるようになった。

「オスカー、やめて、やめて、やめて、お願い、オスカー、オスカー!!」

女の子が恐怖の表情でオスカーに向けて泣き叫ぶ。オスカーはまったく動じずにテーブルへの距離を詰めた。女の子の音がどんどん

ん大きくなる……

女の子に炎があたる直前でオスカーの足が止まった。オスカーの顔はもう一度、さつきよりも大きな恐怖で色塗られた。オスカーは女の子の前で立ち尽くした。

「オスカー、お願い、お願い、助けて、怖いよ……」

「ほう、服従の呪文を撃ち破るとは…… アントニン、お前の息子は優秀なオーラーになれそうだな？」

しかし、オスカーはまるで石になったように体を動かすことができない様だった。女の子の前で炎の鞭を持ち、彫像のように固まっていた。

「アントニン？ 私は息子ができないときは父がその手を動かしてやるべきだと思うが？」

そう言われると、アントニンと呼ばれた男がオスカーの後ろに立ち、オスカーによく似た手でオスカーの手を動かそうとした。

オスカーは無茶苦茶な言葉を吐いて、手を動かして抵抗しようとしていた。

しかし、自分の何周りもある大人に手を動かされ、ヴォルデモートの魔法で固められた体を動かすことはできず、炎の鞭は確実に女の子に近づいていた。

「オスカー、やめて、やめて、熱い、熱いよ……」

炎の鞭が女の子の胸を焼いた。女の子の末期の叫びがオスカーの脳裏を駆け巡った。服が、人が焼ける匂いがした。押し付けられた杖から人の感触がした。必死にあがらい生きようとする最後の力が伝わってきた。

やがて声も、感触も、匂いも消えた。ヴォルデモートの高笑いが聞える。オスカーは自分の心が壊れていくのを感じた。

「…スカー!!!! オスカー!!!! 起きてください、しっかりしてください!!!!」

誰かが自分を呼ぶ声がオスカーには聞こえた。オスカーの心臓は恐怖で鳴り響いていて、その手には先の記憶の感触が残っている気がした。全身で冷たい汗をかいていて凍えるように寒かった。それなのにオスカーにはまるで自分の体が自分のものでないようにも感じられた。

「やっぱり、こんな状態で閉心術の練習なんてするべきじゃなかったんです。起きてくださいオスカー!!!!」

眼を開けるとクラリーナが泣きながらオスカーを揺さぶって、呼びかけていた。クラリーナが泣いているのをみるのは二回目だとオスカーは思った。

「良かった… 閉心術なんて… 誰かが人の心に入るなんて耐えられなくて当然なんです… ひどい経験があればあるほど、心をコントロールするのは難しいんです」

オスカーがクラリーナを泣かせてしまったのだとオスカーはやつと気づいた。オスカーをかばってあのヴォルデモートの前に震えながらも立てるような女の子を泣かせてしまった。

ヴォルデモートと父の力にあらがうこともできず彼女を殺してしまったオスカーを、今もエストがヴォルデモートの手にかかろうとしているのに、過去の恐怖におびえ自分を制御することもできないオスカーの為に泣いてくれているのだ。

オスカーは記憶の中の恐怖に怯え、冷たくなった自分の体が少しだけ、それでも確実に暖かくなった気がした。

「もうやめましょう、こんなことをしても体力と時間を消耗するだけです…」

クラリーナがそう言うのを聞いて、オスカーは自分のことが生まれてから一番恥ずかしくなった。殺してやりたくなくなった。自分を制御できないことがこんなに情けないことだと知った。まるでクラリーナの優しさがオスカーの心に火をつけた様だった。

「できるまでやってくれ」

オスカーは自分でもびっくりするほどはつきりした声でそう言った。クラリーナは本当に驚いた顔でオスカーを見た。オスカーはこれまでないほど自分の意識がはつきりしているのを感じた。

「時間がないんだクラリーナ、俺が記憶に怯えている間にもエストの魂は削られている」

オスカーはそう言うのと、少しふら付きながらもクラリーナの手を取って立ち上がった。

「オスカー!! あんな記憶を見て、心を保てるわけがありません!!!! 少なくとも、一度休むべきです」

クラリーナが泣きそうな顔でそう言ったがオスカーは首を振った。オスカーはエストの為にも、目の前のクラリーナの為にも閉心術を覚えなければならぬとはつきり自覚した。オスカーのあの記憶をクラリーナも見ているのだ。

「大丈夫だ。生まれてから一番集中できてると思う」

しっかりと真正面から見つめるオスカーをクラリーナは見た。

「オスカー…… わかりました。ですが次に完全に制御を失ったら、もうやめますよ、いいですね?」

「大丈夫だ」

オスカーは何故か次は大丈夫だという奇妙な自信があった。

レアが怯えた表情で見つめる中で、またクラリーナがオスカーに杖を上げた。

「いきます!!!! レジリメンズ!!!!」

また世界が変わろうとしたが、オスカーは抵抗した。

自分を保たないといけない…… 自分は一人ではない…… 誰かに想われている。誰かが自分を認識している。そして誰かを想っている自分がある…… オスカーは自分を想う誰かを通してはつきりと自分という存在を自覚しつつあった。

まるで周波数の合わないラジオのように、遠くで声が聞こえる……

「オスカーお坊ちゃまに何をされるのですか!!!!」

騒ぐペンスを黒衣をまとった魔法使いが杖で吹き飛ばした。埃一

つないドロホフ邸が荒らされ、家具や壁紙が散乱している……

しかし、オスカーには同時に呪文を唱えているクラーナの姿も重なって見えた。

「真実薬を飲ませろ、このガキも何か知っているかもしれない」

無色透明の薬を魔法使いの集団がオスカーに飲ませようとしているのが見えた。しかし、オスカーはこれが記憶だとはつきりと分かった。

現実の叫びの屋敷に強く心を集中した。自分は自分だ。過去の記憶ではない、ここにいるのだ。囚われているエストと目の前のクラーナのことを深く考え、オスカーは遠くに記憶を締め出した。

オスカーは現実の世界に戻ってきた。膝をついてもいないし、ましてや倒れ伏してもいなかった。

オスカーは自分の意思で開心術を突破した。クラーナが信じられないという顔でオスカーを見ていた。

「大丈夫だったろ？」

「ダメです、そう言うのがダメなんです。油断大敵です」

クラーナが瞳に涙をためてそう言った。

オスカーはクラーナをもう泣かせるわけにはいかないと思った。そして、開心術はオスカーの周りのすべてを客観的に見る視点をオスカーに与えていた。

オスカーはエストを救うために、もう一度、自分の周りにある全てを、人を記憶を魔法を全てを思い出し始めた。

計り知れぬ英知こそ

学校の中は静まり返っていた。オスカー達三人は八階の必要の部屋に向けて歩き出していった。途中でゴーストや肖像画達が動いているのが見える。その誰もがエストがどのような状態になっているかなど知らず、ましてやホグワーツの他の生徒達は各々の寮の談話室で語り合い、柔らかいベッドで眠ろうとしているのだ。

オスカーにはそれがどこか信じられなかった。はたして、彼らが日常を送っているホグワーツとオスカーが今歩いているホグワーツは同じ世界なのか？　これから世界で最も邪悪な魔法使いと再び対面すると言うのに、その事実がどこか信じられないのだった。

オスカーの頭の中には緑色のランプで照らされたスリザリンの談話室が浮かんだ。時折、湖の中を水中人や大イカが通り過ぎるのが見える場所だ。地下牢の冷たい石壁に包まれているのにオスカーはその場所がとても暖かい場所だと感じていた。

それが何故なのか？　その理由はオスカーには分かり切っていた。エストと一緒にいたからだ。窓の傍の二人のお気に入りの場所で、ゴブストーンをしたり、教科書や図書館から借りてきた本を読んだり、他の三人のことを話して笑ったり、オスカーにはそれがとても遠い昔のことにように思えた。オスカーはクラーナの開心術を破った時のように自分の記憶と意思で自分を満たしていることを感じた。

オスカーの目の前にはこれまで見たこともないような扉があった。必要の部屋に入るとき、いつも扉の形は変わっていたがこんな形ではなかった。

扉には銅の色をした大鷲が銀色の蛇に絡めとられている彫刻が彫られている。大鷲は苦悶の表情を見せ、蛇はその赤い目を光らせながら舌なめずりをしている。

明確に部屋の中の人物の心を表わしているのだろう。オスカーは隣の二人の顔を見た。クラーナの顔はいつも見ている強気な表情で、レアは恐怖の色が残っているがどこか決意を決めたような顔だった。

三人は顔を見合わせ、頷くと部屋の中へと入った。

部屋の中は緑色の光に満たされ、銀色と青色に壁は塗られていた。蛇が絡み合う彫刻が施された柱が沢山立ち並んでいて、天井は遥か高く見えなかった。

レアを扉の傍に残して二人は進んだ。部屋の奥、巨大な蛇の像にもたれかかるようにエストが立っている。エストの赤い目と黒色の髪、そして頭につけられた銀色の髪飾りが妖しく光っている。

「お前たちは勇敢だ……力の差が分かる程に賢いのに逃げなかった……」

エストの口を借りてヴォルデモートが喋る。いつもの声のトーンと高さなのに、それはどこか身震いするような邪悪さに満ちていた。

ヴォルデモートは真つすぐにオスカーを見つめて近づいてきた。

「なんと！ この短時間で閉心術をマスターしたのか？ 素晴らしいぞオスカー」

ヴォルデモートはオスカーを舐め回すような視線で見つめたが、何も読めない様だった。ヴォルデモートはさらに笑顔になった。

「本当に特別だ……魔法と強い意志が運命を結び付けている……魔法族の全てがお前たちの様な者たちならばどれだけ素晴らしいのか……」

そう言うとヴォルデモートは突然杖を振った。オスカーはとっさに盾の呪文を唱えたが、紅い光線はオスカーとクラリーナではなく、後方のレアに命中した。

ヴォルデモートの手にレアの杖が収まった。武装解除呪文だ。

「それがどうだ？ 魔法族には純血だと言うのに自分の力すら操れない愚か者がいるのだ……あのようなものに杖は必要なかろう？」

ヴォルデモートは高笑いをあげながらレアの杖を弄ぶと、ローブのポケットにしまった。レアは呪文で吹き飛ばされたのか床に跪いている。

「どうだ？ 若く賢い二人よ……私についてはこないか？ 私はこの学校にいるおいぼれとは違う……お前たちにより深い魔法の知識を与えることができる……」

オスカーは心を閉じているはずなのにヴォルデモートの声が自分

を甘く誘惑しているのが分かった。エストの口から紡がれる言葉は酷く魅力的でいて、身の毛のよだつ邪悪さを併せ持っていた。

「お前たちにとっては学校の教えなど酷く遅れているだろう？ なぜ遅れたものに合わせる必要があるのだ？　すでに六年生よりも進んだ魔法を使えるお前たちが？　おかしいと思わないのか？」

ヴォルデモートはエストの記憶に沿って、エストの声でオスカーを誘惑した。オスカーはそれがたまらなく腹立たしく、穢わらしいと感じた。

「さあ最後の勧誘だ……　私は優秀なものには寛容なのだ……　私と一緒に魔法の裾野を広げ、より深い魔法の真髄を見に行こうではないか……」

オスカーはこれまでにないくらいはつきりとした声で言った。

「地獄の釜の火が凍ったらまた誘ってくれ」

オスカーはヴォルデモートに向けて杖を向けた。隣のクラーナも同様に杖を向けるのが見えた。

ヴォルデモートはまた邪悪に満ちた笑い声をあげた。

「この闇の帝王に勝負を挑むか？　絶対的な死ですらとらえることができない存在に……」

オスカーとクラーナは問答無用で呪文を撃ちこんだ。失神光線を雨あられと打ち込むが、ヴォルデモートは杖を一振りするだけでそれらを防いだ。だが、杖を振らねば避けられないということはヴォルデモートが二人の心を読めないことを意味していた。

「さあ死そのものと踊って見せる!!」

ヴォルデモートは緑色の光線を打ち始めた。間違いなく死の呪文だ。通常の魔法では防ぐことのできない絶対的な呪文……　しかし、オスカーは盾の呪文でそれを弾いてみせた。

ヴォルデモートの顔に困惑が浮かんだ。クラーナが爆破呪文と失神光線を撃ちこんだがヴォルデモートは柱を蛇に変えてそれを受け止めた。ヴォルデモートはオスカーを見つめている。

「トム・リドル、お前の呪文は俺に通用しない」

オスカーがそうヴォルデモートを呼んで、髪飾りのある頭を狙っ

て、粉々呪文や粉碎呪文といった吹き飛ばす効能のある光線を浴びせるがヴォルデモートは銀色の光線でそれらを弾いた。ヴォルデモートの顔は困惑から驚愕に変わった。

クラリーナとオスカーがヴォルデモートの髪飾りを狙って猛攻を仕掛けるがヴォルデモートはその度に変身術や盾の呪文でそれらを防いだ。オスカーは魔法使いとしての差が二人がかりでも存在することを感じた。

「俺がお前の名前を知っていることがそんなに意外なのか？ トム？」

オスカーはできるだけヴォルデモートの興味をオスカーに集中させる必要があった。ヴォルデモートを正面から打倒することは不可能だ…… 出し抜かねばならない。オスカーはそれを明確に理解していた。

「貴様…… その名前をいったいどこで……」

ヴォルデモートはオスカーの顔を一心に見つめ、名前を知った記憶を探ろうとしていたがそれを読むことはできない様だった。

ヴォルデモートがオスカーに集中している間に髪飾りを狙って、ひたすらに攻撃をしかけるが、攻撃が頭に集中しているということとは相手にとっても守る場所が決まっているということだった。ヴォルデモートは銀色の盾のようなものを頭の近くに展開して、呪文を防ぎ始めた。

「ヴォルデモートとか闇の帝王とか、トムって名前がそんなに嫌だったのか？ なあトム？」

ヴォルデモートが激高した。緑色の光線がクラリーナを狙ったがオスカーはまたそれを弾き飛ばした。しかしその直後に銀色の閃光がクラリーナを弾き飛ばし、ヴォルデモートは飛ばされたクラリーナの顔をまじまじと見つめた。そして、疑問が解けたという顔で舌なめずりした。

「分かった。分かったぞ、灰色のレディだろうか？ お前たちはあの死に敗北した残りカスに教えを請うたのだろうか？ 確かに、あの愚かな女なら私の名前を知っている……」

「オスカー、ごめんなさい、少し読まれたみたいですよ……」

「大丈夫だ」

少し、足を引きずってクラリーナが立ち上がった。ヴォルデモートは不安要素が無くなったとばかりに笑ったが、まだオスカーは諦めてはいなかった。ヴォルデモートに隙ができるその一瞬を狙い定め、心を集中していた。

「いいぞ、オスカー、確かに私は何人にも言ってはならないとは言ったが、あのような残りカスどもなど人の範疇には入らないわけだ。本当に賢いぞオスカー」

ヴォルデモートは明らかにこの決闘を楽しんでいた。オスカー達が抵抗するのが本当に楽しいのだろう。アリの巣に水を入れて楽しんでる子供のような、無邪気な邪悪さがエストの顔で見事に表現されていた。

「髪飾りを持った私に、髪飾りを失った愚か者の知恵を借りて戦う…… 素晴らしい、千年にも及ぶ因縁が巡り廻っているわけだ……」

二人はその間も呪文を撃ちこみ続けるが、銀色の盾はオスカー達の呪文全てを封殺していた。オスカーはヴォルデモートの注意を惹き、銀色の盾を打ち破り、髪飾りをヴォルデモートの頭から奪わねばならなかった。

「俺にトムの呪文が効かない理由を教えてほしいか？ なあトム？」

オスカーはできるだけ侮蔑の感情を込めてトムと呼んだ。

「オスカー、私をあまり怒らせない方がいいぞ？ ホグワーツの格言をしらないのか？ 眠れるドラゴンをくすぐるべからずだ……」

そうヴォルデモートが言って杖を振ると足元の地面そのものが変化しだした。オスカーはとっさに爆破呪文で床を吹き飛ばした。

「そうか？ たかが二年生風情に……自慢の魔法が通用してないぞ？

スリザリンの後継者とか言ってたが、本当のところはどうなんだトム？ ほんとは純血ですらないんじゃないのか？ リドルなんて苗字は聞いたこともないぞ」

オスカーがヴォルデモートに真正面からそう言った。

ヴォルデモートの怒りが爆発した。ヴォルデモートはめっちゃめ

ちやに死の呪文を乱射したが、オスカーはそれら全てを弾き飛ばした。死の呪文が部屋のあちこちに当たって彫像や壁が破壊された。

しかし、オスカーとクラリーナは生きていた。ヴォルデモートは怒りで上気した顔で二人を見つめていた。オスカーはここにきて初めてヴォルデモートの余裕を取り払うことができたと思った。

「オスカー、私は寛大だが、私に血を語るとは…… このサラザール・スリザリン最後の後継者に……」

ヴォルデモートはそう言っただけで銀色の閃光でオスカー達を攻撃した。銀色の閃光をオスカーは防ぐことができたがクラリーナは完全に防ぐことができず、吹き飛ばされた。ヴォルデモートは連続で銀色の閃光を放ちながら、うねるように杖を振った。

クラリーナの足元が変化して、まるで蛇のような植物のつるになりクラリーナを吊り上げた。ヴォルデモートはオスカーに呪文を浴びせながら、クラリーナに向かって呪文を叫んだ。

「クルーシオ!! 苦しめ!!」

クラリーナの顔が苦悶に歪んだ。クラリーナは必死に耐え、ヴォルデモートと目を合わせないようにしようとしたが、つるがそれを許さなかった。

ヴォルデモートは今度こそ勝つたとばかりに高笑いをあげた。ヴォルデモートが余裕の表情でオスカーを見た。

「なるほど、杖の所有権とは…… オスカー、本当に賢いな…… 私ですら知らない魔法の知識を使って私に対抗したわけだ。素晴らしい」

ヴォルデモートはクラリーナに興味を失ったのか、磔の呪文を解き、オスカーだけを見つめた。本当に愉快だとその顔が言っていた。

「だが杖を変えればどうなるかな? 魔法力も制御できない愚か者を連れてきたのは失敗だったなオスカー、もしかしたら私相手に勝機があったかもしれない……」

そう言っただけで、ヴォルデモートはレアの杖を取り出そうとした。オスカーはヴォルデモートに向けて爆破呪文を唱えながら後ろに向けて叫んだ。

「レア!!! やれ!!!」

何か黒いもやをまとった不可視の力がオスカーの隣を通ってヴォルデモートに向かつて行った。爆破呪文を防ごうとしていたヴォルデモートにそれは命中した。

オスカー達が何をしても効果が無かった銀色の盾がゴングのような低い音を、不思議に背筋が寒くなる音を立てて吹き飛ばされ、盾の中にいたヴォルデモートがエストの体から大きく吹き飛ばされた。

銀色の髪飾りがエストの頭から離れて吹き飛ばされ、オスカーとヴォルデモートのちょうど中間に落ちた。

オスカーは走り出した。ヴォルデモートも髪飾りに向かつて来ようとしている。ヴォルデモートは杖を取り出そうとローブを触りながら叫んだ。

「出来損ないがよくも…… よくも……!!!! だがお前たちの魔法程度でそれが壊せるものか!!!!」

しかし、オスカーは間違いなくそれを壊せると確信していた。闇の魔術に対する防衛術でトンクス先生が言っていたことがオスカーの脳裏に浮かんだ。

『あの炎は基本的にあらゆる魔法的な法則を破壊して、魔法使いやその他の生き物、闇の生き物、魔法具等を破壊するのよ、多くの魔法使いはあの炎を操ることができずにその代償を自らの体で支払ったわ』
オスカーはその炎を知っていた。他ならないヴォルデモート自身に教えて貰ったのだから。オスカーはその炎を出す魔法を覚えていた。忘れるはずがない、この先何十年生きてもその感触をその炎を忘れるはずがなかった。

オスカーの杖から赤とも紫ともつかない炎が鞭のように噴き出た。炎は髪飾りの中心部分を明確に打ち抜いた。レイブンクローの象徴である青い宝石が炎に溶けていく、銀色が黒くくすんでいく。何か邪悪なものが泣き叫んでいるのが聞こえる。何か救えないものが離れたくない泣き叫んでいる。髪飾りが真っ二つに割れて、何かが天へと消えていった。

われらが最大の宝なり！

髪飾りを破壊した瞬間、ヴォルデモートはエストの体はその場に倒れ伏した。つるに捕まっていたクラーナも魔法が解け、床へ叩きつけられた。

オスカーはクラーナを助け起こし、ピクリとも動かないエストへと近づいた。エストの体には傷一つなかったが、意識を取り戻す気配がなかった。

オスカーは最悪の想像に駆られて近寄った。しかし、近寄れば確かにエストの鼓動を聞き取ることができたし、エストの体に少しづつ温かさが戻ってきていることが分かった。

後ろで扉が開く音をオスカーは聞きとった。クラーナが何か言っていたがオスカーにはあまり聞き取ることができなかつた。オスカーはエストが無事に目の前にいることで頭と心が一杯だった。

しかし、オスカーは何か先ほどの戦いでヴォルデモートから漂ってきたような、強烈なエネルギーが発せられているのを感じた。ヴォルデモートから感じたエネルギーは何か邪悪なものを感じ取ったが、そのエネルギーは純粋な怒りのように感じ取れた。

オスカーがやっと背後を見ると、アルバス・ダンブルドアがこちらに走ってくるのが見えた。オスカーは何故、クラーナや他の大人たちが口々にダンブルドアならばヴォルデモートに対抗できると言っていたのか理解した。

オスカーの見たことのあるアルバス・ダンブルドアの慈悲深く、全てを見通すような表情と視線はどこにもなく、その青い目からは冷たい怒りがエネルギーとなって発せられているように感じられた。

ダンブルドアの後ろにはマクゴナガル先生とスネイプ先生がそれぞれ信じられないという表情で付いてきていた。スネイプ先生が倒れているレアを介抱している……灰色のレディはオスカー達が最期に頼んだ要件、しばらくたったら先生方に伝えるという頼みを聞き入れてくれたようだった。

「これは……なんと……信じられん……」

オスカーもクラリーナも、すでに閉心術を続けるような体力は残されていなかった。ダンブルドアは二人の眼を見ただけで何かを理解した様だった。

ダンブルドアの表情がいつもの柔和なものに戻った。だがその表情は何か本当に信じられないものを見ているようでもあった。

「セブルス、ミス・プルウエットを医務室へ連れて行ってくれるかの？ わしの考えじゃと体力を少し消耗しているだけじゃが、君の眼やポピーからも診断をして欲しい」

ダンブルドアがそう言うと、レアの傍からスネイプ先生がこちらに走ってきて、エストを抱き上げた。

「先生…… エストは大丈夫なんでしょうか？」

オスカーはさきほどエストが確かに生きていることを確認したが、このまま永遠に起きないのではないかとという不安を消すことができずにいた。

「オスカー、大丈夫じゃ、セブルスは闇の魔法に魔法界でも最も詳しい男じゃ、ポピーも聖マンゴの最高峰の癒者と同じ腕を持つておる。二人に任せておけば大丈夫じゃ」

ダンブルドアから言葉を貰ってやっと、オスカーは体の力が抜けた気がした。エストは戻ってくる…… 喋って、笑って、一緒にいることが…… 叫びの屋敷で髪飾りをエストが触れた時から止まらなかった恐怖がさざなみのように遠くへと消えていく気がした。

隣でクラリーナの表情が同じ様に柔らかくなるのが見えた。

「しかし、三人には申し訳ないが今晚ここでなにがあつたのか教えてもらわねばならぬ、事態そのものが終わったのは分かっておるが、まだ何かあるのか分からぬのじゃ」

「アルバス、この子たちにはどう見ても休息が必要です。それも、魔法睡眠薬による本物の休息が……」

「ミネルバ、もつともな意見じゃが、彼らは何がどうなったのか理解せずに休むことはできないじゃろう」

オスカーの体は休息を求めていたが、心はダンブルドアに同意していた。オスカーはこの出来事にけりをつけ、そのついたという保証を

ダンブルドアという強大な存在にしてもらいたかった。

「申し訳ないが、ここでは安心して話すことはできないじやろう。わしの部屋へ来てもらおう」

ダンブルドアがそう言つて杖を振ると、三人の体と壊れた髪飾りが浮き上がった。オスカー達はそのまま、優しい力で浮かんだままダンブルドアの校長室へと運ばれた。

三人とマクゴナガル先生を連れてダンブルドアは進み、ガーゴイル像にスイートポテトと言つて道を開けさせ、螺旋階段を上った。

オスカーはダンブルドアの部屋に初めて入つたが、何やら沢山飾つてある肖像画達が興味深そうにオスカー達を眺めていた。オスカー達は優しくソファアールの上に下ろされた。

ダンブルドアは注意深く慎重に壊れた髪飾りを銀の道具が沢山置いてあるテーブルの上に乗せた。マクゴナガル先生は心配そうにオスカー達三人の方を見ていた。

「三人とも心体ともに疲れ切つておるのは分かつておる。じゃが、今回の出来事について、できるだけ丁寧に喋つてはくれぬか？」

ダンブルドアはキラキラした瞳でオスカー達の方を向いてそう言つた。

オスカーが口火を切つた。

「僕たち……俺たちはその髪飾りを探していました」

オスカーが壊れた髪飾りを示した。レアがウツと息を呑んだのが分かつた。

「そうじやの、この髪飾りがすべての原因なのじやろう。だがどのよううにそれを見つけ、どのようなことがあつたのかゆつくりと教えて欲しい」

それから、オスカーはゆつくりと髪飾りをどのように探したのかをダンブルドアに喋つた。

エストが首なしニックから髪飾りと剣の話聞いたこと……五人で探そうと決めたこと……トックス先生からゴーストに聞けばいいのではないかとヒントを貰つたこと……

絶命日パーティーでピーブズから灰色のレデイがヘレナ・レイブンク

ローその人であると聞いたこと…… レアと一緒に髪飾りはアルバニアにあると聞いたこと…… そしてオスカー達以外の誰かにそれを言ったことがあると聞いたこと……

そこまで聞くとダンブルドアは感心したという顔でオスカー達にこう言った。

「君たちは千年間にも及ぶ歴史の中で、たった二組しかしるべきでなかった秘宝のありかを知ったわけじゃな」

またレアがヒツツと声を震わしたのが聞こえた。オスカーはまた話をつづけた。

エストがクリスマスにレデイが教えた誰かならば必要の部屋にそれを置くのではないかと考えたこと…… 必要の部屋を探しても見つからなかったこと…… 暴れ柳の特性に気付いて叫びの屋敷に行ったこと…… そして叫びの屋敷にくるように手紙が届いたこと……

そこまで話してオスカーはレアの方を見た、レアは恐らく自分の責任に怯えていた。しかし、髪飾りを最初に見つけたのはレアだったから、オスカーはそのことを話さなければならなかった。

レアが叫びの屋敷にいたこと…… 髪飾りを触ったエストがヴォルデモートだと名乗ったこと…… 死の呪文とオスカーの武装解除呪文が対抗したこと…… ヴォルデモートが兄弟杖だと言って、必要の部屋で待つと言ったこと…… レアが必要の部屋で髪飾りを見つけたと喋ったこと…… レアが操られていたこと…… またダンブルドアは優しい顔でこう言った。

「ミス・プルウエットは確かに、トム・リドル以来の秀才と言っていいじやろう。恐らくあやつとは違う考えとは言え、同じ結論に至り、それは真実だったのじやから、それに兄弟杖とは、オスカーはミス・プルウエットと並々ならぬ絆で結ばれているようじゃ」

オスカーは話し続けた。ヴォルデモートがオスカーの心を読んだこと…… ヴォルデモートに対抗するために閉心術が必要だと考えたこと…… クラーナと閉心術の練習をしたこと…… なんとか心を閉じる術を見つけたこと…… そこまで話してオスカーはここか

らは自分の考えが主になり始めると思った。

「去年のクリスマスマスにみぞの鏡の前で見た二人が互いに想う心は本物だったわけじゃ、お互いに真の信頼を示したことでオスカーは心を操る術を身につけた。なんと素晴らしいことか……」

ダンブルドアは感慨にふけるように目を閉じた。

「俺は…… やつに…… ヴオルデモートに対抗するためにはあいつを出し抜かないといけないと思いました。正面から勝てるはずがないと思つたので、あいつが気にも留めないことを考えないといけないと思いました」

オスカーがヴォルデモートと言い放つたことで、マクゴナガル先生とレアがビクツと震えた。

「ドロホフ、貴方は先生方に言おうとは思わなかったのですか？」

ここにきてマクゴナガル先生が初めて発言した。マクゴナガル先生の声はどこか震えているようだった。

「あいつは誰かに言えばエストは戻らないと言いました。俺にはそれが怖かった…… それにあいつは必要の部屋で待つと言いました…… エストは必要の部屋のことを理解していません…… あいつもエストと同じくらい理解していません…… エストは必要の部屋は必要なモノが分かっていないと入れないと言っていました。だから、恐らくあいつが部屋の中にいる間は俺たちが入らないと他の人には入れないと思つたんです。だからレディに俺たちが入ってから先生を呼ぶように言いました」

マクゴナガル先生はオスカーの言葉の意味をなんとかかみ砕いて理解しようとしているようだった。

「ですが、灰色のレディには相談をしたのでしょうか？」

「はい、俺はあいつのヴォルデモートを理解しないといけないと思つていました。あいつはエストのことや俺の杖のことを特別だと言つていました。自分はスリザリンの後継者だとも…… だけどあいつはそれ以外のことには興味を持たないと思つたんです。それは多分、ここにいるレアのことや、あいつが囚われないといった死に敗れたゴーストであると思つていました。つまり、あいつにとって特別じゃないものを

使わないとあいつを出し抜けないと思ったんです。だからゴーストはあいつの人の範疇には入らないし、利用するべきだと思いました」

マクゴナガル先生はオスカーのその言葉を聞いて衝撃を受けたような顔になったが、ダンブルドア先生は微笑みながらオスカーを見ていた。

「それは正しくトム・リドルを理解できておるじやろう。トムは自分と同じ様に髪飾りのありかを知った君たちを特別じゃと思った上、その中でもレイブンクローの血脈を強く感じさせるミス・プルウエットに強く惹かれたのじやろう。自分と同じ様な創設者の血脈となればあやつが惹かれぬわけもない……そしてあやつ之死に対する恐怖をオスカーは正しく理解できたわけじゃ」

オスカーはダンブルドアが同意を示してくれているのでなんとか喋ることができていた。今考えると一体どれだけ危険と恐怖に溢れた行動をしていたのか、今になってその考え方の無謀さが理解でき始めていた。

「レディはあいつがヴォルデモート本人、トム・リドルであろうこと、兄弟杖で何が起ころのかということ、エストの杖の所有権が俺に移っているのではないかということ、そのためにあいつの呪文が俺に対しては有効でない可能性があること、そしてあの髪飾りを破壊しなければならず、髪飾りは尋常な手段では壊すことができないことを教えてくださいました」

「君はまさに正しい人間を頼ったわけじゃ、計り知れぬ英知そのものを持つ人間を頼り、ヴォルデモートを打ち破るための知識を手に入れたわけじゃ」

ダンブルドアは真つ二つに破壊された髪飾りの半分、『計り知れぬ英知こそ』と刻まれた部分を指でなぞった。

オスカーは少しだけクラリーナとレアに視線を送ってから、喋り始めた。

「俺はその尋常でない手段を自分が持っていることに気付いていました。クラリーナの開心術が、かつてヴォルデモート自身が俺に使わせた術なら、髪飾りを壊せるであろうことを思い出させていました……」

そして、レアの…… コントロール不能の力なら、あいつが気にも留めない力なら、ヴォルデモートを出し抜けるであろうと考えたんです」

ダンブルドアはオスカーのそこまでの話を聞いて、今度は感激した表情をしていた。オスカーはこれほどの人でもこのような表情をするのかと思った。

「君は、まさにスリザリンが誇りに思った特性を持つ生徒と言えるじゃろう。機知に富む才智…… 断固たる決意…… やや規則を無視する傾向…… そして周りを守る心を…… さらにそれらに加えて、素晴らしい勇気を持つておる。わしがグリフィンドールの出身だからかもしれないが、わしには君のその部分が眩しく見えてしまう」

「ダンブルドア、私の寮の学生に他の寮の方がふさわしいというのはやめて貰おう」

後ろの肖像画の一人がダンブルドアとオスカーの方を見て言った。肖像画はオスカーの方を誇らしげに見ていた。

「おお、フィニアス申し訳ない、思わず羨ましくなってしまったのじゃ」

オスカーはその肖像画の下にある組み分け帽子に目がいった。オスカーは去年組み分け帽子に言われたことを覚えていた。

「組み分け帽子はスリザリンとグリフィンドールで俺をどちらに入れるか悩んでいました…… 組み分け帽子は俺が真に守るべきものを見つけられるならグリフィンドールよりもスリザリンの方が偉大になれると、そう言いました」

オスカーがそう言うと、今度はマクゴナガル先生とクラーナがシヨックを受けた顔をしていた。クラーナの方は特にそれが分かりやすかった。なにせ口を開けてオスカーの方を茫然とみているのだから。確かにオスカーはこの話を誰にも話したことはなかった。

「なるほど、君は間違いなくそれを見つけたわけじゃ、そして君は類まれなる勇気と信頼をも手に入れた。かつてスリザリンとグリフィンドールが断琴の交わりを結んだ様に」

ダンブルドアはそう言って、オスカーとクラーナを交互に見た。オ

スカーとクラリーナの顔は少しだけ赤くなった。

「三人とも『ホグワーツ特別功労賞』が授与される。それに、一人ずつ各寮に二百点ずつ与えよう」

ダンブルドアがそう言ったのを聞いて、オスカーはトンクスが悔しがるだろうなと思った。これではハツフルパフが一人負けになってしまうからだ。

「ダメですー。ボクは何もしていません。ボクが髪飾りを見つけたせいでこんなことになってしまったのに……ボクが髪飾りなんか頼ったせいで……」

レアは泣きながらダンブルドアに訴えていた。彼女はこの部屋に入って、髪飾りという言葉が出るたびに、机の上に置かれた髪飾りを見るたびに罪悪感を感じていたのだろう。

「レア、君よりも遥かに優秀で精神的にも肉体的にも大人な魔法使いたちがヴォルデモート卿にたぶらかされてきたのじゃ、それに二人は君のことを何もしなかったとは考えてはおらぬじゃろう？」

ダンブルドアが悪戯っぽいキラキラした目でオスカーとクラリーナを見た。

「ええ、レアがいなければ俺たちの誰も生きて帰れなかったと思います」

「私もそう思います」

二人がそう言うのと、レアはまた泣き出した。

「レア、ホグワーツを創り出し、その当時最も賢いと言われた魔法使いでさえ、最後にはその英知よりも必要なものがあると思っておったことを君は知っているじゃろう？」

ダンブルドアは二つに破壊された髪飾りの残り半分、今度は、『我が最大の宝なり！』と刻まれた部分を指でなぞった。

「まさに君はこの最大の宝が何かわかったのではないかね？ 必要の部屋は君にまさしく必要なモノを渡したわけじゃ、ホグワーツでは助けを求める者には、必ずそれが与えられる。そしてそれは正しく、皆を救い、史上最も邪悪な魔法使いを打ち倒したのじゃ」

ダンブルドアが誇らしげな目で三人を見て言った。

「わしは君たちのような生徒を持てたことを心から誇りに思う。こんなにもホグワーツの校長であつて良かったと思つたことはない。さあ、三人とも今日は休むのじゃ、これからもホグワーツでの日々は続くのじゃから」

姉弟杖

オスカーは医務室で目を覚ました。魔法睡眠薬で一日眠ることになるとマダム・ポンフリーからオスカーは聞いていた。まだ早朝のようで、医務室には薄い朝の陽ざしが差し込んでいて、まだ誰も起きていないのか、物音は聞こえなかった。

オスカーは医務室から出て、顔を洗いに行くことにした。確か今日はハツフルパフがあの日には圧勝していなければ、グリフィンドールとスリザリンがクイディッチの優勝杯を賭けて戦う日はずだと思っただ。

オスカーはそういう日常のことを考えることができるのがことさらに嬉しかった。

マダム・ポンフリーに言わずに抜け出していたのがばれると厄介なことになるとオスカーは思い、医務室へと戻ろうとした、その道中でこの前日に良く見るようになった金髪が空き教室の方へと歩いていくのが見えた、彼女も起きたところなのだろうか？ オスカーはなんとなく彼女の後についていった。

彼女は空き教室で魔法を試しているようだった。妖精の呪文で一番最初に習う呪文、浮遊呪文を何度も唱えて、自分の羽ペンを浮かせようとしているようだが、あの決闘クラブで無言呪文を使用した彼女と同じとは思えないほど、羽ペンは動かなかった。

時折、杖からは火花が噴き出たり、なにか不可視の魔法の力が机や椅子を揺すっていた。

「発音は間違っていないのにな」

オスカーがそう言うと、レアはやっと気付いたのかオスカーの方を振り向いた。レアは練習をしているところを見られたのが恥ずかしいのか頬を赤く染めた。

「ドロホフ先輩……ボク、髪飾りが無くなったら魔法が使えなくなると思ってた……それで……」

オスカーはレアの杖をヒョイと取り上げ呪文を唱えた。

「ウインガーディアム・レヴィオーサ 浮遊せよ」

「羽ペンが高く上がってそこで止まった。オズカーが杖を下ろすと羽ペンはゆつくりと机の上に降りてきた。」

「杖の問題じゃないみたいだな」

「やっぱり、髪飾りがないと…… オブスキュリアルのボクじゃ……」

レアは下を向いてぶつぶつ言っていたが、オズカーは構わず、レアの手に杖を戻し、その状態で呪文を唱えた。

「ウインガーダイヤモンド・レヴィオーサ 浮遊せよ」

「え？ ちよつと先輩？」

もう一度、羽ペンは高く上がった。そしてオズカーがレアの杖から手を離しても羽ペンは落ちては来なかった。

「え？ え？ なんで？ 浮いてる……」

そして杖を下ろすと、それに従って羽ペンは戻ってきた。

「もう一回唱えてくれ、さっき浮いてたのと同じ杖への感覚で」

「はい…… ウインガーダイヤモンド・レヴィオーサ 浮遊せよ」

今度は高く飛びこそしなかったが少しだけ浮き、ユラユラと空気の抵抗を受けながら羽ペンは落ちていった。

「浮いた？ どうして……」

オズカーはまたレアの杖を上から握った。

「今度は一緒に唱えてくれ」

「ええっ!?! はい…… 「ウインガーダイヤモンド・レヴィオーサ 浮遊せよ」」

また羽ペンは高く上がって、オズカーが手を離してもコントロールできていた。

「浮いてる……」

レアは浮いている羽ペンを信じられないという顔で見ている。

「マツキノンは自分の杖と力が怖いのか？」

オズカーはそうレアに聞いた。オズカーにも自分の魔法の力が恐ろしく、その力を使いたくないと思った時、全く力をコントロールできなかった記憶があった。

「あの日言いましたけど…… ボクはオブスキュリアルだから…… 魔力をコントロールできないんです…… だから時々力が暴れて

…… みんなや家を壊してしまおう……」

「杖と魔法力は信じないと使えないんだ。灰色のレディが言ってただろ？」

そう、灰色のレディに杖について聞いた際にそのようなことを言っていた。杖は魔法使いに信じられないと力を発揮しないのだ。そして杖自身が魔法使いを信じないとやはり力を発揮しない。オスカーは無言呪文を覚えた際に無言で呪文を発動できると信じることが必要だった為、それが真実だと思っていた。

「聞きましたけど…… 自分の力なんて……」

「少なくとも、あの部屋で俺とクラーナはレアの力を信じてたけどな、それで助かったわけだし」

レアはオスカーのその言葉を聞いて、ショックを受けたような、すぐにでも泣きそうな顔をした。

「あの時は必死だったんです!! 髪飾りを見つけたのはボクだし、二人とエスト先輩を助けないとして、そればかりで頭が一杯になって……」

「じゃあその時のレアを信じたらいいんじゃないか? 俺たちはあの時レアを信じてたし、レアも自分を信じてたんだろ? だからあいつをぶっ飛ばすことができたわけだ」

「あのときの自分を信じる……?」

オスカーは閉心術を覚えた際に、いつかどこかの自分を信じること、誰かが信じる自分を信じるのが大事だと経験していた。そしてそれは初めて魔法を使った後に誰かがそれを見て笑顔になったのを見た後、さらに上手く使えるようになったのと同じことだと思っていた。

「じゃあもっかい唱えてくれるか? レアがすぐ使えるのを信じないと、俺はマダム・ポンフリーに黙って出てきたからそろそろ不味いんだ」

「ええっ!? わ、分かりました。 ウィンガーダイヤモンド・レヴィオーサ 浮遊せよ」

今度は羽ペンはオスカーが唱えた時と同じくらい高く上がった。

すぐに落ちてくることもなく、羽ペンは上がったままだ。

「できました!!!! オスカー先輩見ましたか!? できました!!!!

あつ、ボク、その……」

「まあなんでもいいけど、俺は医務室に戻る」

「あの…… ありがとうございました」

オスカーはそれを聞いた後、空き教室を後にして、医務室へと向かった。

医務室に帰る途中で誰かに背中を叩かれた。

「ちよつとオスカー、貴方が医務室から消えるから、マダム・ポンフリーとクラーナ、エストが怒ってたわよ」

「マダム・ポンフリーはまだしも、なんで二人が怒るんだ? どうせ嘘だろ?」

「そりゃあれよ、恐ろしい目に会って怖かった二人を、起きた真つ先に慰めにいかなかったからよ」

オスカーはあの二人が恐怖で震えるような相手なら、オスカーもそもそも五体満足では帰ってこれないだろうと思った。

「マダム・ポンフリーが怒ってたのはほんとだけどね」

トンクスとチャーリーは早朝だというのに三人を見舞いに来てくれたらしい、チャーリーに至っては今日も試合のはずなのに。

「試合なのにこんなところにきていいのか?」

「大丈夫だよ、スリザリンにはエストがいないからね、エストがクイデイツチに出たら、マダム・ポンフリーがスリザリンのチームを殺しちゃうよ」

「校医が殺してどうするんだ」

オスカーにはその様子が容易に想像できた。マダム・ポンフリーに逆らってはいけないのだ。

「まあ、あれよ、私たちの見舞いに感謝して、二人の顔を早急に見に行くべきね」

「早朝からうるさいと思ったら、トンクスですか? クイデイツチでも負け、特別功労賞を取り逃したので、騒いでるんですか?」

オスカー達の後ろからクラーナの声が聞えた。彼女も起きたのだ

ろう。

「ちよつと余計なお世話よ、せつかくオスカーとの感動的な目覚めを提供してあげようと思つてたのに」

「それこそ要らぬお世話でしょう、あほが来る前に起きて正解でした」
二人の言い合いやときどき茶々を入れるチャーリーの姿を見て、オスカーは本当に日常が戻ってきたことを実感した。

オスカーにはそれがたまらなく嬉しかった。

「あれ？ なにオスカーはニヤニヤしてるのよ、アレね、多大なる試練を乗り越え、クラーナと特別な絆ができて、私たちが知らないからニヤニヤしてるわけね」

「なにあほなこと言ってるんですか、こいつはほんとに必要な部屋に捨てとくべきでしたね」

そう言えば、クラーナは閉心術を修めているはずなのに、みんなの中でも一番表情が分かりやすいなどオスカーは思った。そして、閉心術の練習に付き合ってくれた札を言うのを忘れていたことを思い出した。

オスカーはみぞの鏡のクリスマスの一件から、クラーナに助けて貰つてばかりだと思つたし、クラーナとはできるだけ対等で正直にいたいと思つていた。

「クラーナ」

「なんですかオスカー？ 忘れない間に例のあの人の戦い方でも研究しますか？」

オスカーはいつもと同じ挑戦的な口調と表情でそう言つたクラーナを見て、自分をかばつて立つてくれたこと、閉心術の練習で泣いていたことを思い出した。オスカーの心の中にたまらない感謝の感情が湧き出てきた。

そして、閉心術を習得しているクラーナの表情をちよつとだけ崩してやりたいと思つた。

「クラーナ、ありがとう」

「えっ？ ちよつとオスカー……？」

オスカーはトunksとチャーリーの目の前でクラーナに抱き着い

て感謝を述べた。

「えええ!! オスカー、ちよつとほんとにどうしたの!!」

「ほんとに仲良くなったんだね」

「あいつからかばって立ってくれてありがとう。クラリーナがいなかったらあそこで終わってたと思う」

「お、オスカー? どうしちやっただんですか……」

クラリーナはしばらく体をばたばたさせていたが、しばらくすると静かになった。少しだけペパーミントの様な香りがクラリーナの髪の毛からした。オスカーはウィーズリーおばさんのセーターを着たのと同じくらい、あの記憶から帰ってきた時と同じくらい、体が暖かくなっているのを感じた。

「閉心術の練習の時、相手がクラリーナで良かった。記憶から帰ってきた時にクラリーナが居てくれてなかったら、あそこで終わってた……ありがとう」

「そ…… それは…… 闇の魔法使いの心を理解するのは…… 闇祓いの基本ですから……」

「あいつと戦ってる間も、クラリーナがいたからなんとか心がもつたと思う。ありがとう」

「え…… それは私も……」

オスカーがクラリーナを離すと、クラリーナはオスカーが見たことが無いくらい真っ赤になっていた。いつもはすぐにからかってくるトunksも何故か赤くなっていた。

「オスカーは結構積極的なんだね、ビルより凄いかもしれない」

「これは…… 私が茶々いれなくても全然よさそうじゃない……」

オスカーは三人が静まり返っている間に医務室へと向かうことにした。この静けさが嵐の前の静けさのように感じていたからだ。事実、医務室に入った後で何か大声で喋っているクラリーナとトunksの声が聞こえてきた。

「ちよつと二人の仲がそんなに進んでたら言ってくれてもいいじゃないの」

「な…… なんですか!?! 進んでいるって」

「だって二人でなんか二人にしかわからないこと言って抱き合ってたじゃないの、一体何の話してたのよ」

「そ…… それは開心術の内容だから言うわけには……」

「あら、やっぱり言えないような内容なのね」

「なんですかそれ!! く、口が裂けても言いませんよ!!」

「へく、そんなに大事な二人の秘密なんだ、ますます気になるわ」

「もうく!! なんなんですか二人の秘密って!! オスカーもおかしいし、トンクスはいつもより数倍うざったいし……」

マダム・ポンフリーは二人の大声を聞いて注意しようと向かって行ったので、オスカーはその間に医務室の中を歩き、エストのベッドへと向かった。

エストはいつも通りの表情でオスカーに挨拶した。

「オスカー、おはようなの」

「ああおはよう」

二人はしばらく無言だった。オスカーはエストが目の前で普通に喋って、座っているという事実を噛みしめていた。オスカーは日常と違うものがどれだけ大事で失い難いものなのか理解し始めていた。

ホグワーツでみんなと会って、食事して、授業を受けて、クイディッチを見て、テストを受けて、遊んで…… またそれが帰ってくるのを感じた。

「何も覚えてないのか?」

「そうだよ、叫びの屋敷でレアに髪飾りを渡して貰ってからは覚えてないの」

「髪飾りはエストが考えたところにあつた」

「そうなの? じゃアレアは必要の部屋で見つけたんだね? じゃあやっぱり、髪飾りを見つけた人はホグワーツのことが大好きだったんだね」

オスカーはそうやって笑うエストを見て、嫌でもヴォルデモートを思い出さずにはいられなかった。事実、オスカーはヴォルデモートがどう行動して、どう考えるのかを考えた時に、できるだけエストならどう考えるかを考えていた。

オスカーはエストとヴォルデモートは似ていると考えていた。しかし、二人は絶対的に違うとも思っていた。

「まあある意味ではそうだろうな、それと俺とエストの杖なんだけども……」

オスカーが杖について喋ろうとするとエストは何か、隠し事がばれたような表情をしていた。オスカーはやっぱりと思った。恐らくヴォルデモートはエストの記憶から姉弟杖のことを知ったのだろう。

「オスカーの杖…… ナナカマドにセストラルの尻尾の毛でしょ？」

オスカーはエストに自分の杖について喋った記憶はなかった。確かに今言った内容は間違いなく、オリバンダーがオスカーに言った杖の内容と同じだった。

「そうだけど…… いったいどうやって……」

「エストがオリバンダーさんのお店に行った時に教えて貰ったの……」

そうやってエストは自分の杖を取り出した。

「エストの杖はね？ オリバンダーさんが作ったんじゃないんだって、グレゴロビッチさんっていう遠い国の人が強い杖を真似してつくろうとした杖なんだって」

確かにエストの杖の材質をオスカーは見たことが無かったし、オスカーが杖を買った時もオリバンダーは通常使わない珍しい材料を芯にしていると言っていた。

「でね？ エストの杖…… ニワトコにセストラルの尻尾の毛が入ってるんだけど、オスカーも聞いたことあるよね？ ニワトコの杖、永久に不幸…… ニワトコの杖をもった人は不幸になっちゃうの」

確かにオスカーはそれを聞いたことがあった。魔法界では自分達のような子供でも知っているおとぎ話だ。ヒイラギの杖の人はカシの杖を持つ女の人と結婚しちやいけないとか、トネリコの杖を持つ人は頑固者だとか、そういう杖にまつわる話の一つだ。

「オリバンダーさんはその話はうそだって言ってたんだけどね、ニワトコの杖はナナカマドの杖と対になるらしいの、だからグレゴロビッチさんって人は同じセストラルの尻尾の毛を使って、ナナカマドで杖

を作れないかってオリバンダーさんに頼んだらしいの、オリバンダーさんの方がナナカマドの杖の作り方はうまかったらしいから、それでどっちがいい杖かわかるし、どっちの方が杖を作るのが上手いか分かるって言われたらしいの」

なるほど？ どうもこの二本の杖は杖作りの腕を競うために作られた杖らしい、オスカーがオリバンダーの店に行った時は、なんと珍しいのかなんとかしか言って無かった上に、死喰い人の息子がナナカマドの杖とは…… とか失礼なことを言われた記憶があった。

「でも、悪い魔法使いが大陸で暴れたせいでオリバンダーさんの店に二本とも残っちゃったんだって、で、先にオスカーがナナカマドの杖を買って行ったの、そのあとエストがニワトコの杖に選ばれて、オリバンダーさんは不思議じゃ不思議じゃって言い始めたの」

オスカーはオリバンダーがそう言うのが容易に想像できた。あの人物もチャーリーやエストと同じく、一定範囲の物事に対して滅茶苦茶に集中するタイプだと思えたからだ。

「エストと因縁のある家の男の子が、さつきこの杖と姉弟の杖を買って行ったって言ったの、姉弟の杖を持っている二人は不思議な絆で結ばれるって言ったの、それがニワトコとナナカマドなら最も強くなるだろうって言ったの、それがどこの家なのかなんてオリバンダーさんは言わなかったけど、エストにはすぐに分かったよ？」

オスカーは自分の杖を見て、エストの杖を見て、最後にエストの顔を見た。

エストは笑顔で言った。

「だからね、ホグワーツ特急で初めてオスカーに会った時、ドロホフの家の人？ って聞いたよね？ もう、絶対そうだと思うたの、ギリギリに乗ってね、偶然空いてたコンパートメントだったけどね、絶対絶対そうだと思うたよ？ それで、ほんとにそうだったの」

エストはオスカーと初めて会った日、運命じゃないかと言っていた。確かに杖にそんなつながりがあったのなら、そう言いたくもなる気持ちがる。

「しかも、寮まで同じになって…… それにねナナカマドの杖はね？

闇の魔法には使われないし、防御の魔法を使う時に強くなるんだって、オスカーはエストを最初絶対攻撃しようとしなかったよね？ オリバンダーさんの言う通りだったの、盾の呪文ばかりだったもんね、だから絶対絶対この二本の杖は特別なの」

エストは愛おしそうに杖を両手で包んだ。オスカーはどこかなにか大きな力が二人を包んでいたように感じた。ヴォルデモートからエストを取り戻したのは偶然ではなかったと感じた。

きつとこの二本の杖でなければヴォルデモートの死の呪文を防ぐことはできなかったのだろう。今こうして話すこともできなかったのだろう……

「エストは覚えてないけど、意識が無い間もこの二本の杖がオスカーと繋げてくれたのかな？ オスカーごめんね、このことを話したらなんか、繋がりが切れちゃったり、特別じゃなくなる気がしたの」

「大丈夫だ。誰に話してもこれは特別だ。それに今回も杖がエストに会わせてくれたんだと思う」

「そうなの？ でもこれは二人の秘密にしてね？ その方が特別な」

エストは満面の笑みでそう言った。

オスカーは特別な杖が無くて、特別な繋がりが無くても、エストの傍にいられるようになって思うた。

九と四分の三番線

髪飾りに関連した大騒動が終わって、オスカー達はホグワーツの日常に戻った。

クイディッチはグリフィンドールの優勝で終わり、後の日々はただ気温が上がっていき、オスカー達の流す汗の量と一緒に期末試験へのストレスだけが増えていった。

少しだけ変わったことと言えば、オスカーがホグワーツ特別功労賞を貰ったことで、スリザリンに二百点入ったおかげで、少しだけスリザリン生のオスカーに対するあたりが弱くなったことだろうか？

前のように寝室のルームメイトに無視されることもなく、授業中の教室や朝食の大広間でオスカーの周りを避けて座るといったことはされなくなった。

それはレアも同じ様で、オスカーとエストと廊下ですれ違う時は、いつもレイブンクロウの同級生と笑い合っていて、最後に二人に会釈をしてくるのだった。

レイブンクロウ生にとってはスリザリンとグリフィンドールの生徒だけで髪飾りを見つけたのではなく、レアも一緒に見つけたということでなんとか体面が保たれたらしい。

オスカーはいつも通りかそれ以上のホグワーツの日々が戻ってきてこれ以上なく嬉しかった。

「ねえ？ 髪飾りがあつたんだから、秘密の部屋もやつぱりあるのかな？」

学期末の試験の午前が終わって、五人は黒い湖のほとりにあるブナの木陰で話をしていた。この場所は湖の涼しさと木陰の恩恵を得られる場所で、オスカーとエストのお気に入り場所だった。

「秘密の部屋とか、髪飾りより例のあの人が出てきそうな案件じゃないですか」

「いいわね、今度はハツフルパフが功労賞を貰えば、ハツフルパフが二位まで上がるわ」

オスカーは期末試験の問題用紙をもう一度読みながら三人の会話に嘆息した。正直、これ以上例のあの人に今学期は会いたくはなかった。可能ならば一生自分の周りには近づいて欲しくないと思った。

「秘密の部屋って怪物が封印されてるんだよね？　どんな怪物なのか気になるね」

「スリザリンだし、闇の魔法生物じゃないのか？　コカトリスとかバジリスクとかアクロマンチュラとか？　少なくとも、例のあの人と同じくらいに会いたくないな」

「スリザリンはパーセルマウスだと言いますし、バジリスクじゃないんですかね？　その中だと」

オスカーは去年クラーナが言っていた首が三つあるバジリスクを思い出した。

「うええ、ちよつとそれはごめんね、トイレしてたらパイプを通ってきたバジリスクに丸呑みにされそうじゃないの」

「トンクス、バジリスクは眼で殺すから多分いきなり丸呑みにはしないの」

「トイレの配管を通るスリザリンの怪物とか、威厳が全くありませんね」

「うーん、ケトルバーン先生ならなんか知ってるのかな」

オスカーはトイレの中を通る怪物ならまだなんとかなりそうだと思うたが、そもそもこれ以上危険なモノ探しはしたくなかった。クラーナの言う通りに、例のあの方は絶対に秘密の部屋を探したであろうことがオスカーには容易に想像できた。

「それより、午後も闇の魔術に対する防衛術の試験があるだろ？　なんかテストしてくれよ」

オスカーはそう言っただけで闇の魔術に対する防衛術の本を四人に差し出した。

「ちよつと、オスカーに闇の魔術に対する防衛術の試験が必要なの？

普通にもう教える側なんじゃない？　ママが今回の事を聞いて、クラーナちゃんとオスカー君には私の授業は必要ないかもって言ったわよ」

「確かに二人は試験を免除でも良かったかもね」

「油断大敵!!!!」ですよ、二人とも、基礎を固めないといざという時にどうにもなりませんからね、その茂みからいきなり死喰い人が一ダース現れたらどうするんですか?」

クラリーナが傍にあるつつじの茂みを指でさしながら言った。

「ダンブルドア先生を呼ぶの」

「そうね、クラリーナとオズカーを盾にして、校長先生かマクゴナガル先生あたりを呼びにいくわ」

「なんで俺が盾にされてるんだ」

そう言つて、また四人はギャーギャーと騒ぎ始めた為、オズカーはもう一度本に目を落とそうとしたが、先ほどクラリーナが指した茂みが少し揺れているのに気付いた。誰かいたのだろうか?

「あの…… 先輩方、ちよつといいですか?」

茂みから遠慮がちに現れたのはレア・マツキノンだった。オズカーは彼女とは空き教室で会ったあと顔は何度も会わせているものの、会話は交わしていなかった。

「あれレアじゃない、久しぶりね、功労賞の自慢をしに来たの?」

「こいつは未だに功労賞のせいでハッフルパフが最下位になったのを根に持つてるので、気にしなくていいですよ」

「なんか、レアに対する態度が、トンクスとクラリーナで前の時と逆になつてるの」

「まあ二人はほつといていいから、どうしたんだ?」

「うん、二人に構つてると次の試験時間になつちゃうからね」

オズカーはあの出来事があつて、少しはレアにも自信がついたのかと思つていたが、レアは今もどこか不安げだった。

「あの…… 来年、時々私に魔法を教えて貰えませんか?」

「魔法……? 浮遊呪文みたいな感じつてことか?」

魔法を教えて欲しいと聞いて、オズカーの頭に思い浮かぶのは去年のクラリーナとトンクスとの特訓と、あの朝にちよつとだけレアの浮遊呪文を手伝ったことだった。

「そうなんです、あの朝にオズカー先輩に浮遊呪文を教えて貰つて、そ

れから色々他の呪文もできるようになったんです、それで……」

「ちよつと、オスカー、いつの間にレアにまで手を出してたのよ」

「手を出したって、ちよつとレアが困ってたから浮遊呪文を手伝っただけだぞ」

「貴方に純血キララーの称号をあげるわ、私もパパがマグル生まれじやなきや危ないところだったわ」

トックスが自分の肩を両手で触って震えている振りをしながら、新しい言葉を創り出していった。

「なんだよ純血キララーって」

「というか、いつの間にか二人は名前で呼び合ってるの、エストの時はあんなに長い間苗字で呼んでたのに」

「確かにオスカーは最初ずつとみんなのこと苗字で呼んでたね」

エストはオスカーが誰かを名前で呼ぶことに厳しいようにオスカーには思えた。去年クリスマスプレゼントを連呼したのが不味かったのだろうか？

「別にいいんじゃないですか？ 上級生が五人いれば色々な呪文を教えられるでしょう」

「あら、流石に抱き合ってたクラーナは余裕ね、ライバルとしてすら見てないってことね」

「しばきますよ、人にモノを教えるっていうのは教える側にも自分を見直すっていうメリットがあるんですよ」

「抱き合ってたってなんなの？」

「まあOKってことみたいだぞ」

「それはね、あの出来事の朝……「オツケーですよ!!! レアは心配しなくても先輩に任せておけば万事問題ありません!!!」」

「来年も面白くなりそうだね」

そう言つて、さつきよりも大きな声で騒ぎ始めた五人を見て、レアは恥ずかしそうに礼をして、後ろの方でオスカー達を見ていたレイブンクローであろう集団に戻っていった。

オスカーはチャリーリーの言う通り、来年も騒がしくなりそうだと、姦しい三人を見て思った。

結局、闇の魔術に対する防衛術はトングスの言うようにオスカーにとっては何問題ではなかった。正直なところ、実技が関連する授業、闇の魔術に対する防衛術、変身術、呪文学などはもはや、オスカーにとって問題になることはないのではないかと思いい初めたのだった。

隣にはエストという優秀な教師がいたし、他の生徒達は自分の生死がかかるほど必死に呪文を覚える必要性がないのだから上達は当たり前だとオスカーは思った。

ただ、結局試験の結果でエストにオスカーが少しだけ勝てたのは闇の魔術に対する防衛術だけで、それも一点差でしかなかった。ダンブルドアがエストのことをトム・リドル以来の秀才だと呼ぶのも無理はないことだとオスカーは感じた。

寮対抗杯は今年は久しぶりのグリフィンドールの優勝だった。エストが優勝決定戦に出場できずにスリザリンがぼろ負けしたのが大きかったが、そもそも、それで失った点数を補って余るほど、エストはスリザリンに点数を日頃から与えていたので、スリザリンの生徒がそれに関して責めることはなかったし、むしろグリフィンドールの連中が何かエストに危害を加えたのではないのかという論調だった。

他にはやっぱり今年も闇の魔術に対する防衛術の先生は一年で辞めてしまうようだった。トングス先生は寮の違いなく評判だったので、生徒達は皆残念がった。

トングス先生曰く、

「私が一年いない間に、家がまるでヌンドウが現れた後のような有様になっていたので、やっぱり家に帰ります」

らしい、トングスが言うには、トングスの父親、テッド・トングスは全く片付けができないらしい。それで、一年放っておいたら家ごとんでもないことになっていたらしいのだ。

なんと叫びの屋敷に行くときにトングス先生が忍びの地図にいなかったのも、グリフィンドール対ハッフルパフの試合にテッドを連れてこようとしたところ、家の惨状に気付き、それどころではなくなつたかららしい。

オスカーはそのテッドの性質は間違いなく、トunksに遺伝している気がしたが、それは言わないことにした。

一年の時と違い、五人はセストラルが曳く馬車に乗ってホグズミードの駅まで行くのだった。オスカーは以前乗った時に、セストラルが死んだ人にしか見えないと聞いて、静まり返ったことを思い出したが、オスカーとエストの杖の中身はセストラルの尻尾の毛で、それが二人を会わせてくれたことを考えると、そんなに不吉な生き物ではないように感じた。

オスカー、エスト、クラーナ、チャーリー、トunksの五人はコンパートメントの一室を占領して、今年の思い出を話し合ったり、来年のことを語ったり、爆発ゲームをしたりした。

「あのね、今年も夏休みに隠れ穴にしようと思うんだけどね、今年はWADA、魔法演劇アカデミーのチケットがあるの!!」

「えっ！ エストそれほんとなの？ WADAのチケットって中々とれないんじゃないの？」

「魔法演劇アカデミー？」

オスカーはWADAが何なのかさっぱり見当がつかなかった。ホグワーツでは確か長い間演劇が中止されているとか、ホグワーツの歴史とかいう本を髪飾りを探すために読んだ際に書いてあった気がするし、家でも演劇の話など聞いたことがなかったからだ。

「あんなでかい家に住んでるくせに知らないんですか？ WADAと言えば魔法界では知らない人がいないような演劇の名門ですよ。オスカーお坊ちやま」

「そうよ、チケットだって何ガリオンするか分からないわよ、まあオスカーお坊ちやまにかかればホイっと出せるのかもしれないけどね」

WADAが何か知らないがオスカーはまたお坊ちやまと連呼されるのは嫌だった。

「それってやっぱり、ミュリエルおばさんが送ってきたの？」

「そうなの、エストがクリスマスに行かなかったから、意地でも来てほ

しいみたいなの、それでみんなの分のチケットもあるから、ミュリエルおばさんの家にみんなでちよつとだけ来ないかってことなの」
「絶対ちよつとじゃ終わらないし、エストとビルが目当てだと思っけどね」

確かミュリエルおばさんというのは、ウィーズリーおばさんやエストの父親のおばに当たる人で、エストを猫可愛がりしているみたいな話をオスカーは聞いていた。

「まあなんでもいいんじゃないか？ どうせ隠れ穴にいくんなら一緒だろうし」

「オスカーお坊ちやまにはこれが凄いラッキーなことなの分かってないわね、行くに決まってるわよ」

「どうせ僕もおばさんの家には連れていかれるからね」

「うーん、申し訳ないですけど、もしかするといけないかもしれないです」

「えっ？ クラーナは何か用事があるの？」

確かにクラーナがこういった誘いに対してはつきりしないのは珍しいとオスカーは思った。夏休みもクリスマスもクラーナは真っ先に同意してくるからだ。それはオスカーと同じ様に家族がいなかったらであろうことも、薄々察しはついていた。

「ちよつと、アラスターおじさんといくところがあるかもしれないので、いつ隠れ穴に行けるかは分からないんです」

「そうなの？ じゃあ行けるようになったらすぐ来てね？ モリーおばさんも待つてると思うの」

「ええ、用事が終わったらすぐに行きますよ」

クラーナはそう言って笑ったが、その裏にどんな感情があるのかはオスカーには読み取れなかった。

閉心術の練習の際も、マッド・アイと練習をして学んだと言っていたし、何か闇掛い的なことを練習でもするのだろうか？ オスカーは少しだけ考えをめぐらしたが、人の家族のことを詮索してもしかたがないので考えるのを止めた。

キングス・クロス駅が近づいてくるのがホグワーツ特急の速度が下

がっていることから分かった。

オスカーは去年こうしてホグワーツ特急に乗って、駅に着こうとしているときよりも、自分の気持ちが見えると思った。

夏休みに隠れ穴でどんな楽しい生活が待っているのか知っているし、去年より、ペンスやキングズリーと過ごす少しだけの間のドロホフ邸も楽しみだった。それはクリスマスに楽しい時間をドロホフ邸で過ごしたことで、あの家に対する印象が変わったせいでもあるだろうと思った。

オスカーは初めて九と四分の三番線の柵を通り過ぎた時より、柵を通り過ぎるたび、ホグワーツへ行って帰ってくるたびに、自分の心が明るくなっていくと感じた。

三年目 豊かな幸運の泉 プルウエツト邸

オスカー・ドロホフは最近幸運だった。

去年までは嫌だったドロホフ邸での日々もどこか楽しく感じていたし、今日にでもエストたちが迎えに来て、エストやチャーリーの大叔母である、ミュリエルの家に遊びに行く予定だったからだ。

それに魔法省からの監視も最近になって弱まってきた。キングズリー曰く、魔法大臣がミリセント・バグノーノルドからコーネリウス・ファッジに変わったため、闇払い局と魔法惨事部の力関係が変わりつつあるのが理由らしい。

なんでも、次の魔法大臣筆頭と思われていたパーティ・クラウチが左遷され、これまでの対処が重すぎたのではないかと反動がきているらしいのだが、オスカーにはその辺の力関係は良くわからなかった。

少なくとも、家の玄関から吸魂鬼が消えたことや、キングズリーの許可や監視が無くても好きなどころへ行けることはオスカーにとつて望ましかった。

闇払いが云云かんぬんとか、魔法省の力関係がどうのこうのはクラーナの領分であって、自分の領分ではないとオスカーは思っていた。

「オスカーお坊ちやま、忘れ物はありませんか？」

「ああ、大丈夫なはずだ、教科書類は全部詰まってるし、新しい必要品は向こうで買いに行く予定だから」

ペンスが忘れ物がないかを聞くのはもう七回目だったので、完全に大丈夫なはずだった。

オスカーはすでに夏休みの宿題をやってしまったって、教科書や大鍋なんかもトランクに詰め込み終わっていた。

「今年もクリスマスはパーティを開かれるのですか？」

「それは分かんないな、できればいいと思ってるけど」

「ペンスめは万全の準備をしてお待ちしております」

ペンスは明らかな期待を込めてオスカーを見た。

オスカーは毎年クリスマスパーティーを開かないといけなくなつたと思つた。魔法史の宿題レポートで火あぶりされる魔女や魔法使いの考察について書いたが、もしオスカーについてレポートを書くのなら、クリスマスパーティーを毎年自宅で開くようになった理由は屋敷しもべ妖精だと書かねばならないだろう。

暖炉の赤とオレンジの炎がエメラルド色に染まり始めた。暖炉の中から人影がコマのように回転しながら現れる。

チャーリーと同じ赤毛のウィーズリーおじさん、エスト、チャーリー、トンクスが暖炉から吐き出されてきた。

ウィーズリーおじさんはオスカーの顔を見てにっこりした後、隣のペンスを見て少し申し訳なさそうな顔をした。

「やあオスカー、元気そうだね、ペンスも元気かな？」

「ええ、ウィーズリーおじさん、迎えにきていただいてありがとうございます」

「とんでもない無礼を働いたペンスめにお言葉を頂けるとは、恐悦至極であります」

クリスマスの時も大丈夫だったのでオスカーは余り心配していなかったが、今回も問題はなさそうだった。

「オスカーお坊ちやまの家は相変わらず広いわね」

トンクスがドロホフ邸の応接間を見回してそう言った。相変わらず、この家にいるときはオスカーのことをお坊ちやま呼ばわりしないといけないらしい。

「ミユリエルおばさんの家もオスカーの家と同じくらい広いし、やっぱり旧家の家は広いんだろうね」

「確かにミユリエルおばさんの家は広すぎて、昔迷子になったことがあるの」

「やったじゃないオスカーお坊ちやま、子供はいくらいても大丈夫じゃない？」

「なんでトンクスの発想は家の広さと子供の数が直結してるんだ？」

どうもトンクスはクラーナがないからか、オスカーにやたらと絡

んできそうだとオスカーは思った。

「オスカー準備はいいかな？　とりあえず直接おばのミュリエルの家に向かうことになる」

「いつでも大丈夫です」

「じゃあチャーリー、先に煙突飛行でどこに行くのか例として見せてくれるか？」

「オツケー、パパ」

チャーリーはそう言うのと暖炉の傍にあつた煙突飛行粉を手に取り、炎をエメラルド色に変え、「プルウエツト邸!!!」と叫んで消えていった。

「じゃあオスカーから行ってくれるかな？　またノクターン横丁とかに行つてしまうと今度こそ私はモリーに消失させられてしまうからね」

「分かりました、トンクス押すなよ？」

「押さないわよ」

オスカーはトンクスの方をちらつと見ながらそう言った。前回煙突飛行を行った時はトンクスとフレッド・ジョージのせいでもんだい所に飛ばされたことは、オスカーの記憶に新しかったからだ。

「じゃあペンス、あとはよろしくな」

「はい、オスカーお坊ちやま、お元気で」

オスカーは煙突飛行粉を投げ入れ、エメラルド色の炎の中へと消えていった。

回転しつつ沢山の暖炉が見える中、オスカーは目標の暖炉へとたどりついた。少なくとも、前回のようにヘンテコな闇の物品は見当たらなかつたし、ウィーズリー家の人たちとダンブルドアと同じくらい年がいつているであろうおばあさんがオスカーの方を見ていた。

おばあさんは鉤鼻で羽の着いたピンク色の帽子を被っていたがオスカーには彼女がミュリエルおばさんなのであるうことが分かった。眼がエストにそっくりなのだ。縁がどこか赤く見えるその眼はオスカーが良く見るエストの眼によく似ていた。

暖炉からはどんどん後続が吐き出されていた。エストとトンクス、

最後にウィーズリーおじさんが出てきた。なぜかトunksは糖蜜パイを持っていた。恐らくペンスにねだったのだろうとオスカーは思った。

「ああミュリエル、ご機嫌よろしく……」

ウィーズリーおじさんがそう言っつてミュリエルおばさんに挨拶しようとしたが、ミュリエルおばさんは完全に無視してエストの方へと歩いてきた。

「エストレヤ、やっと来てくれたね、去年のクリスマスも来なかったじゃないか」

「だってオスカーのうちに遊びに行つてたもん、去年も夏休みの最初は行つたでしょ？」

「オスカー？ ああドロホフの子かい？」

そう言っつてミュリエルおばさんはオスカーの方を見てきた。ウィーズリー家の兄弟はみんな赤毛だったのでオスカーの存在はわかりやすかつた。

ミュリエルおばさんは胡乱気な値踏みするような目でオスカーを見た。

「確かにドロホフの子だね、顔の作りがそっくりだよ」

「ミュリエルおばさんはそう言っつて次にトunksの方に視線を移した。

「あんたはブラックの家の子かい？ あんたも顔の作りが似てるよ」

「ブラック？ 確かにママの実家はブラックらしいけど」

「まあ、赤毛以外だとわかりやすくていいね、ウィーズリーの子はみんな赤毛で見分けが付かないよ」

ミュリエルおばさんはもうオスカーとトunksに興味をなくしたのかエストの方へと視線を戻した。

「オスカー、トunks、先にトunksを運んじやおう、ミュリエルおばさんは当分エストに付きつきりだと思っつたらね」

チャーリーがやれやれと言う顔をしてオスカーとトunksに言っつた。

確かにウィーズリー家の人たちが口々に言っつてミュリエルおばさん

はエストがお気に入りと入りのは事実のようだ。

それに物事に対する興味のあるなしが大きいというのはどこかエストにつながるものをオスカーは感じた。

チャーリーの言う通りプルウエット邸は広がった。少なくとも、ウィーズリー家のみんなとオスカー、トンクス達全員分の部屋があったからだ。

ただオスカーは隠れ穴のみんなが嫌でも近くにいないといけな狭さが少し懐かしくもあつた。

ミユリエルおばさんとエストとの協議の結果、オスカー達はWAD A（魔法演劇アカデミー）の公演が終わるまではプルウエット邸に滞在するらしい。

「チャーリー、エスト、トンクスの三人がクイディッチのチームに入つてんの？」

「オスカーの兄貴とクラーナの姉貴だけクイディッチをやつてないの？」

オスカー、チャーリー、トンクスの三人はフレッド・ジョージの話相手になっていた。

確かにオスカーの周りには双子の言う通り、各寮のクイディッチチームに入っている人間が多いのは確かだった。これはクイディッチチームが全寮合わせても二十八人しかいないことを考えると恐るべきことだった。

「そりや二人は私たちのいない間は秘密の通路を使ってホグズミードのお店でデートしてるから、クイディッチなんてやつてる暇はないのよ」

「三人共ホグワーツでは有数の飛び手だからな、フレッドとジョージも入学したら十分チームに選ばれるくらい上手いと思うぞ」

オスカーはトンクスの戯言を無視してフレッド・ジョージを褒めることにした。ウィーズリー家はクイディッチに熱くなる人が多いのでどうにかなるだろう。

オスカーが過去にエストにクイディッチの話を振った時は、半日の

間、チャドリキーヤノンズとかいう万年最下位のチームの話をされて困ったことがある。

「秘密の通路？　ホグワーツにはそういうのがあるの？　かつけえ」「入学したら教えてよ？　ホグズミードには三年生からしかいけないんでしょ？　二年生から破つてデートとか流石オズカー兄貴だ」

オズカーは頭が痛くなった。オズカーはトンクスほど双子を操れそうになかった。オズカーが秘密の通路を知っているのは確かだが、クラーナとデートに行った記憶などない。

「そうよ、オズカーは死喰い人の息子だけあって、管理人のフィルチの書類を燃やしたり、没収品・危険!!　って書いてある棚からヤバイものを取り出したり、やりたい放題なのよ」

「まあ確かにトンクスの言ってることは大体はあってるよね、危険動物を飼ったり、一年生から決闘したりだもんね」

チャーリーまで敵側に回ったことにオズカーは驚愕した。これだとまるで自分が超危険人物ではないかとオズカーは思った。そもそもそのほとんどがオズカーは巻き込まれただけのはずであるのにな。「ヒュー!!　それなのに先生につかまったりしてないんでしょ?」

「これが本物のワルか……　俺たちも見習わないと……」

フレッド・ジョージがオズカーを見習ってホグワーツを抜け出した。廊下やトイレを爆発して捕まったなんて話がウィーズリーおばさんに伝われば、オズカーの信用が、ドジをしないトンクスなんて存在くらい信じられなくなる気がした。

「けど五人は色んな寮なのに、レイブンクローだけなんでいないの?」

「レイブンクローってやっぱり勤勉なの?」

確かにオズカーの周りにはレイブンクローだけ同級生はいなかった。がり勉、確かにあの寮の連中にはそういうところがあるかもしれない。

「まあ、普通はあんまり他の寮の連中とは付き合わないからな」

「フレッド・ジョージ、安心しなさい、すでにレイブンクローの下級生をオズカーが攻略済みよ」

「レアのことだね」

チャーリーが完全に敵側に回ってしまい、オスカーには手の打ちようがなかった。

「レア・マツキノン、オスカー犠牲者三号の純血の魔女よ」

「いい加減しぼくぞ」

「流石オスカー兄貴だ!!」

「全寮制覇だ!!」

オスカーはさらに頭が痛くなってきた。トンクスとフレッド・ジョージは年々手が付けられなくなっている。

去年はロンのティディベアをフレッド・ジョージがタランチュラに変えてしまつて大騒動だったらしい、とにかく、成績以外ではポンコツなトンクスがただでさえうるさいフレッド・ジョージに加わると大事故が起こりかねない。

それにいつもならからかわれるクラリーナがいないせいでオスカーは自分が防波堤状態になっていると思つた。

「トンクスはそんなにクラリーナがなくて退屈してるのか？ 俺をサンドバッグにしてもなんも出ないぞ」

「え？ 確かにクラリーナいないと張り合いがないけど、オスカーと話してても私は楽しいわよ?」

「僕も楽しいけどね」

そう言つて普通に二人が笑うとオスカーは何も言えなくなつてしまった。

「そう言えばなんでクラリーナの姉貴はいないの?」

「去年は最初に来たのにな」

フレッド・ジョージが顔を見合わせてから、オスカーに聞いてきた。確かにこの双子は悪戯こそするが、なんだかんだクラリーナと一緒にいることが多かった気がオスカーはした。

「そりゃオスカーとエストのいないところでデートしてたからでしょ」

「少なくとも夏休み始まつてからは会ってないけどな」

「マッドアイと用事があるつて言つてたよね」

ホグワーツ特急では行けるようになったら来ると言つていたので、用事が終わつたら来るのだろう。オスカーはそれまでトンクスを封

印する術を考えなければならぬと思った。しかし、杖が使えない今、永久粘着呪文をトックスの口にかけることは難しかった。

「マッドアイってアラスター・ムーディ？」

フレッド・ジョージが何かを思い出すような顔をして言った。

「そうよ、クラリーナのおじさんね」

「まえパパのそこに行つた時にいた人だよな？」

「うん、魔法の眼がグルグル回ってて面白かつたな」

「確かにクラリーナに似てたね、フレッド・ジョージに油断大敵!! って言つてたし」

なるほど、あのクラリーナの口癖はマッド・アイ・ムーディから移つたものなのかとオスカーは思った。結構な回数、クラリーナとの節目節目でそれを聞いた気がするからだ。

「そろそろ夕飯なんじゃない？ この家にも屋敷しもべはいるのかしら？」

「テッドさんみたいなお腹になつてもしらぬいぞ、さつきも糖蜜パイをペンスから貰つてただろ」

「オスカー良く見てるわね、あとパパと一緒ににはならないから大丈夫よ」

トックスはそう言ったが、外見以外はテッドの方にトックスは似ているとオスカーは思つていた。オスカーの予想ではこのままいけば外見もそっくりになるだろう。

オスカー達は夕飯を求めて大広間の方へ向かつて行つた。

夕飯が終わって、オスカーはお腹が少しもたれていたのでプルウェット邸の中を一人で歩いていた。オスカーは人が沢山いて賑やかなウイーズリー家の団欒が好きだったが、慣れてはいなかった。

一人で歩くところの家の大きさが良くわかつた。少なくとも、ドロホフ邸と同じかそれ以上の大きさはあつたし、古さはこの家の方が上だろう。

部屋には時々名前が書いてあつた。たしか客間として提供されていた部屋には書いていなかったもので、家族用の空間に入り込んでし

まったのだろうか？ オスカーは他の家族の部屋を盗み見るようで少し気が咎めたので、戻ろうとした。

しかし、オスカーの目線は良く知っている名前を捉えた。

明らかにモリーの部屋と書かれている。そしてその隣にはギデオンの部屋、フエービアンの部屋と書かれていて、一番端にはエストレヤの部屋とある。

オスカーは明らかに自分が踏み入れてはいけない場所に足を運んでしまったと思った。

少なくとも、オスカーは自分がこの空間にいていい資格があると思えなかったのだ。だというのに、オスカーはギデオンとフエービアンという名前をしばらく眺めていた。

「死喰い人の息子だと言うから、もつと臆病なやつだと思ってたけどね、中々肝が据わってるじゃないかえ」

その声を聞いてオスカーがハッと振り向くと、ミュリエルおばさんがエストとよく似た眼でオスカーを見ていた。

「ええ？ 自分の親父が殺した人間の部屋を眺めるなんてね、普通の人間にできるようなことじゃないよ」

その眼はヴォルデモートやダンブルドアのような心を見通すような目ではなかった。だというのにオスカーは自分の心が丸裸にされているような気がした。

「すみません、勝手に屋敷の中を歩いて……」

オスカーはなんとか口から言葉をひねり出した。

「別に私はあんたが屋敷のどこを歩いたって気にしないけどね、むしろ安心してくらいだよ」

ミュリエルはニヤリと笑ったが、オスカーはその笑いを見ても全く安心できなかつた。モリーおばさんやエストの笑っている顔とどこか似ているというのに、彼女の笑い顔はどこか人の悪意が見えているように思えたからだ。

「私はね、エストレヤと同じくらい賢い魔法使いを一人だけ見たことがある、誰だか分かるかえ？」

ミュリエルおばさんのその言葉を聞いてオスカーには二人の魔法

使いの顔が浮かんだ。最初にヴォルデモートが、次にダンブルドアだった。

「あんたも知ってるアルバス・ダンブルドアだよ、アルバスの学生時代を知ってるのはもう魔法界にも数えるくらいしかないだろうけどねえ」

ダンブルドア？ オスカーにはダンブルドアの学生時代と言われても全く想像ができなかった。あの絶対的な魔法力と慈悲深い性格を持つダンブルドアがオスカーやエストと同じ様にホグワーツに通っている姿を想像することができなかったからだ。

「アルバスの周りには色んな奴らが集まっていたし、魔法界の偉大な方々とも文通をしてたけどね、アルバスの友達なんて呼べるのはドジのエルファイアくらいだったろうねえ」

またミュリエルおばさんが笑った。やっぱりオスカーにはその笑い顔が何か悪意を含んでいるように感じた。憎しみとかそういうドス黒いものではなく、ただ単純に人を傷つけるとげとか針のような悪意だった。

「でもねえ、少なくとも私はアルバスが自分と同格だとか、自分が理解されたいなんて相手をホグワーツで見つけられたとは思えなかったねえ」

ダンブルドアを理解する？ あの今世紀で一番偉大な魔法使いを？ オスカーにはミュリエルおばさんの言っている意味がいまいちよくわからなかったが、何か嫌な予感がした。

「色んな賞や栄光を得てアルバスが満たされたと思うかい？ 私はね、その頭が良ければよいほど、魔法が上手ければ上手いほど、どうしようもなくなっていくと思ってるよ」

このミュリエルという女性は何が言いたいのか？ オスカーにはそれがもう分かっている気がした。だけどオスカーはそれを理解するのが嫌だった。

「アルバスは今世紀で一番の魔法使いなんて言われてるけどねえ、少なくとも結婚もしていないし、親はアズカバン送りで、母親とスクイブの妹は事故で死んで、弟とは喧嘩別れだ、私はあんまり幸せとは言

えないと思うねえ」

これもオスカーは想像などしたことがなかった。アルバス・ダンブルドアの家族がどうかなんて考えたこともなかったからだ。あんな優しい人の父親がアズカバン？ 弟とも喧嘩別れ？ 母と妹は事故で死んだ？

「ああ、あんたの父親もアズカバンだからアルバスとは境遇が似てるかもねえ…… もう何が言いたいかくらいは分かるんじゃないかえ？」

つまりこのミュリエルはエストがダンブルドアのようになるのではないかと言っているのだ。オスカーはさつきエストと聞いて連想した二人の魔法使いの片方がどうなったのかを知っていた。そしてもう一人の魔法使いがどうであったのかも聞かされた。

オスカーは不安になったが、一方で目の前のミュリエルに対する怒りがこみあがってきた。あの杖について話した時から、オスカーはエストの傍にいようと思った。ヴォルデモートの末路やミュリエルの言うようなダンブルドアのような状態には絶対にさせないと思っていた。

オスカーはエストに似ているその眼を真っ直ぐに見た。

「エストがそうなるんじゃないかって言うんですか？」

「別にわたしは何も言っていないけどねえ…… いい目になったじゃないかえ」

ミュリエルおばさんはそう言って笑った。オスカーは自分の眼が変になったのかと思った。さつきまでの悪意のある笑いではなく、オスカーが良く知っているエストやモリーおばさんの笑い顔にそっくりだったからだ。

オスカーはやり場のない怒りと、からかわれたという事実を持って余した。

そしてミュリエルおばさんの後ろからエストの声が聞こえた。

「ええ？ オスカーはミュリエルおばさんと何やってるの？」

「ああエストレヤ、お前のオスカーには私の話に付き合っただけで貫つてたのさ」

「ミュリエルおばさんがそう言うと、オスカーは自分の顔が赤くなつていくのを感じた。完全にこのおばあさんにしてやられたと思ったからだ。」

「エストの部屋の前で？ ミュリエルおばさんが座りもしないで？ 絶対ウソなの」

「そう言うとエストはオスカーの方に視線を移した。オスカーは自分の顔がもっと赤くなつていくのを感じた。」

「なんでオスカーはそんなに真つ赤なの？ もう!! ミュリエルおばさんいったいオスカーになにしたの!!」

「勝手に赤くなつてるだけだよ、私の同級生の話をしていただけさ」
「ミュリエルおばさんの同級生なんてほとんど土の下に決まってるの

!!」

「その後もギヤアギヤア口論する二人をよそにオスカーは、やっぱり隠れ穴かホグワーツに早く行きたいと思った。」

豊かな幸運の泉

オスカー達プルウエット邸へ滞在していた一団はミュリエルおばさんとWADA（魔法演劇アカデミー）へと向かった。

トックス曰く、WADAはマグル世界のRADA（王立演劇アカデミー）と呼ばれる超一流の演劇学校に相当するものらしいのだが、オスカーはそもそもマグル世界のことを知らないし、演劇の世界のことも知らなかった。

とにかく凄い劇を見られるくらいの印象しかオスカーは持っていなかった。

「あのね、WADAの先生は昔ホグワーツで教えてた先生なんだった」
WADAはロンドンの中心部に位置しているらしく、オスカー達は魔法使いらしくない移動手段、地下鉄を使って移動していた。

エストとウィーズリーおじさんは地下鉄に興味しんしんだったが、モリーおばさんが咎めるような目で見てくるので二人は余り目立った行動をできていなかった。

「ホグワーツの先生？ どの教科なんだ？」

ウィーズリーおじさんは始め、ウィーズリー家に置いてあるフォードアングリアという車種での移動を提案したのだが、全員乗れないのでミュリエルおばさんに却下された。

その後、ミュリエルおばさんは姿現しでの移動と決まったのだが、何せ子供が多く、オスカー達をロンドンに運ぶには相当な回数行わねばならず、近くに暖炉もないので地下鉄での移動に決まった。

「ヘルベルト・ビーリーって名前で、スプラウト先生の前の薬草学の先生なんだった」

「そうなの？ じゃあハツフルパフの先生なのかしら？」

「確かに薬草学の先生はハツフルパフのイメージがあるよね」

地下鉄で話しながら移動している間もオスカー達は周りのマグルから奇異の視線を受けていた。トックス曰く、オスカー達の恰好はマグルの中では浮いている恰好らしい。

「ビーリー先生と言えば、昔クリスマスに演劇をしてたらしい先生

だったね、モリー？」

「そうね、私たちが入学するころには大講堂がケトルバーン先生のせいで燃えてしまってもうやってなかったわね」

なにやら物騒な話がウィーズリー夫妻の方から聞こえてきた。なぜ演劇の話で大講堂が燃えるのだろうか？

「大講堂が燃えたってなんなの？　アーサーおじさん？」

「ああ、どうも劇の見世物の一つとしてアッシュウィンダーに肥らせ呪文を使って巨大化させたって聞いたね」

「アッシュウィンダーに肥らせ呪文？　それを大講堂でやったの？　パパ？」

「私がやったわけじゃないけどね」

オスカーにはいまいちアッシュウィンダーが何なのか理解できなかったが、なにか物騒なモノをケトルバーン先生が大講堂に持ち込んだことは分かった。

「ちよつと、チャーリー、アッシュウィンダーってなんなのよ」

「アッシュウィンダーは魔法の火から生まれる蛇で、生まれてすぐに凄く高熱の卵を産むことで知られているんだ」

確かにそんな記述をオスカーは幻の動物とその生息地で読んだ記憶があった。

「愛の妙薬の材料だよ？　アッシュウィンダーの卵って？」

「そうだよ、でも凄く危険なんだ、普通の木造の家でやったら間違いく火事になるくらいにはね」

「大講堂って木造だよな？」

オスカーにはケトルバーン先生の行動が正気の沙汰とは思えなかった。

「つまり、木造の大講堂に肥らせ呪文で大きくなったアッシュウィンダーの卵を持ち込んだってこと？」

流星のトunksもやばいだろそれ、みたいな顔をしていた。

「それで私やアーサーのいたころにはホグワーツでは演劇は禁止されてしまったのよ、なんでも大講堂はまる焼け、医務室は負傷者でいっぱいなのクリスマスだったらしいわ」

「オスカーは医務室が一杯になるような状況になったら、マダム・ポンフリーが事件の首謀者を消失させてしまう気がした。そういう話している間に地下鉄のスピードが下がるのをオスカーは感じた。」

「ああ、そろそろ着くみたいだね」

「ウィーズリーおじさんがうずうずしながら、電動の扉の前に立った。確かに地下鉄はWADAの最寄り駅にいったようだ。」

「トンクス、この扉もあー、機電の力で動いているんだったね?」

「そうです、ウィーズリーおじさん、機電じゃなくて電気ですけど」

「ああ、マグルの技術は素晴らしい、ホグワーツ特急だって自動では扉は開かないよ」

「いつも人の話を聞かないトンクスの話がウィーズリーおじさんに無視されているのはオスカーにとつて新鮮だった。それにチャリーやエストの性格は幾分かウィーズリーおじさんから来ている気がした。」

「その後も、切符を自動で吸い込む機械や電気力で光る掲示板を見てはウィーズリーおじさんは大騒ぎし、ウィーズリーおじさんが引張っていくまでそれは続いた。」

「凄い立派な建物だな」

「オスカーはWADAというものについていまいち理解できていなかったが、その巨大な演劇場を見て、トンクスやクラーナが色々言っていた意味が少し分かった。」

「少なくともオスカーはこんな巨大で立派な魔法関係の建造物をホグワーツ以外では見たことがなかった。」

「聖マンゴ魔法疾患傷害病院は巧みに隠されているし、魔法省は水洗トイレか公衆電話から入らねばならず、外見は見えないからだ。」

「オスカーはこんなに堂々とロンドンの街中に鎮座しているとは思っていなかった。少しだけこれなかったクラーナが可哀想だと思っただ。」

「なんか昔マグルの人たちが頑張って作った劇場を強引に魔法で見えなくしたららしいの」

「ええ、WADAってそんな過去があったの?」

「まあ聖マンゴもマグルの建物を貰ってるしね」

魔法で隠されている敷地内に魔法使いや魔女たちが次々に姿現ししてくる。オスカー達のようなホグワーツに通っている子供は少なく、年配の人が多いように感じた。

「今日は演出のヘルベルト・ビーリー先生の最後の公演らしいわよ」
「あらそうなの？　じゃあ演目はなんなのかしらね、長いことやっぺらっしやったから色々考えられるけど……」

年配の魔女二人がオスカー達の横を通りながら喋っていた。どうもさつき地下鉄で話題になっていた先生の最後の公演らしい。

「エストレヤ、こっちだよ」

その声を聞いてオスカー達が見ると、明らかにランクの高そうな席へと向かう階段の傍でミュリエルおばさんが手招きしていた。

オスカーは先日 of 問答でちよつとミュリエルおばさんが苦手になっていたので、できるだけミュリエルおばさんから離れて座ろうと思った。

オスカー達が階段を上がって席のあるフロアに着くと、思った通り明らかに貴賓席と思われる席だった。どこか周りの人たちも旧家の魔法族と思われる人たちがばかりだった。

「オスカーこっちに座りなさいよ」

トンクスがフレッド・ジョージと一緒に座っている席でオスカーを手招きした。ミュリエルおばさんはトンクス達の反対側で、お気に入り of エストとビルを両脇に配置していた。オスカーは二人の尊い犠牲に感謝して、トンクス達の方へ向かった。

「あれ？　やっぱりエストの傍に座りたかったの？」

「いやミュリエルおばさんの横にならなくて安心してたことだ」

「オスカーもミュリエルは苦手なの？」

「純血キラー of オスカー兄貴が？」

オスカーの両サイドでフレッド・ジョージの声がやまびこのようにこだました。オスカーはこの席もこの席で災難な席な気がした。

「そもそも純血キラーってなんなんだ」

「そりゃオスカーが純血を次々に落としていくからでしょ」

「百発百中!!」

「魔法族は二世代後にはオスカーの子供で一杯になるって聞いたけど」

オスカーは頭が痛くなってきた。騒いでいるオスカー達の方を貴賓席にいる人たちが少し迷惑そうに見ていた。

その中でブロンドの髪を持った女性がトングスの方を凝視していた。オスカーはその女性が少し気になり、そっちに目線をやると女性は目線をハツとそらした。

オスカーはその女性をどこかで見たとような気がした。

「これは、これは、これは……アーサー・ウィーズリー」

オスカー達の後ろで聞き覚えのない声がウィーズリーおじさんを呼んだ。

だが、オスカーはその男を知っていた。声こそ聞いたことがなかったが、そのプラチナブロンドの髪を持った男を知っていた。

「ルシウス」

ウィーズリーおじさんはほんの少しだけ会釈したように見えた。オスカーはウィーズリーおじさんが他の大人にそんなそっけない挨拶をしたのを見たことがなかった。

「ああ、マグルなんとか局は繁盛していますかな？ 近頃はコーネリウス大臣に変わって、無駄な仕事の仕分けが進んでいるようですが…… この席を買うのに家でもお売りになりましたかな？」

ウィーズリーおじさんは一瞬で耳から首もとまで真っ赤になった。「マルフォイ、君のような人間が大手を振って歩けるような時代になったことを感謝したほうがいいと思うが？ 闇払い局は今暇をしてるらしいから喜んで仕事を引き受けるだろう」

ウィーズリーおじさんがそう言うのとルシウス・マルフォイの顔にも赤みがさした。

「アーサー、辞めて、劇の前だし、子供達やオスカー達もいるのよ」

ウィーズリーおじさんがウィーズリーおじさんを引っ張ったが、ウィーズリーおじさんは真っ正面からマルフォイ氏を睨みつけていた。

ルシウス・マルフォイはウィーズリーおじさんを一瞥して、オスカー達子供が座っている席に視線を移し、オスカーとトンクスがいる場所で一瞬、目を見開いた。

その後、さつきトンクスの方を見ていたブロンドの髪の女性の傍に座った。ブロンドの女性の傍にはロンと同じくらいの少年が座っているのが見えた。

「今の人ってルシウス・マルフォイ？」

「ああ、そうだと思う。俺も見たことがあるからな」

「パパのライバルなんだ」

「金をばらまいて死喰い人の疑惑をごまかした悪いやつだって言った」

フレッド・ジョージが口々に悪口を言っつて、マルフォイ氏が座っている方を睨みつけたが、トンクスは珍しい表情をしていた。

なにか悩んでいるような表情で、オスカーはそれがトンクスに似つかわしくなくと思った。

「ルシウス・マルフォイがどうかしたのか？」

「うーんとね、ママの妹さんの夫なのよ、マルフォイさんって」

「ええ!! トンクスってマルフォイと親戚だったの？」

「全然似てないじゃん」

確かにトンクスの母親のアンドロメダはブラック家の出身だったと聞いたことがあった。それなら純血の一族はだいたい親戚だろう。

ブラックと聞いてもオスカーにはかの有名な死喰い人、シリウス・ブラックくらいしか思いつかなかったが。

「まあパパと結婚したせいで全然会わないらしいけどね、もう一人の姉妹はオスカーのパパと同じ場所にいるらしいしね」

「まあいいんじゃないか、マルフォイ家って言ったら純血主義の急先鋒だしな」

「そうだよ、純血はオスカーに任せておけば大丈夫ってトンクス言っただでしょ?」

「純血キラー!!」

純血だからといって誰とでも仲良くできるとはオスカーには思え

なかったが、双子はトunksを元氣付けようとしているようだった。「まあ別に大丈夫よ、二人ともそろそろ静かにしないとダメよ」

オスカーはトunksが双子を注意したので、明日は流星群が降るのではないかと思った。

そうこうしている間に、劇場の照明が消え、あたりは静かになった。舞台に一人の老人が上がって、魔法のスポットライトを浴びているのが見えた。老人が一礼すると劇場中から拍手が沸いた。

「皆さま、この度はWADAの定期公演に起こしくださってありがとうございます」

老人が拡声呪文を使っているのかはわからなかったが、すさまじく良く通る声だった。

「このWADAの定期公演も数えるのが馬鹿らしくなるくらいの回数、私は演出を指導してまいりました」

なるほど、オスカーはこの老人が誰なのかがわかった。さつき魔女が噂をしていた、ヘルベルト・ビーリー先生なのだろう。

「しかし、この不肖ヘルベルト・ビーリーも引退ということ、今回の劇はこれまで絶対にやってこなかった演目を皆様にごらん頂こうと思っております」

絶対にやってこなかった劇？ オスカーはWADAの常連ではなかったから、それが何を指しているのかわからなかったが、周りの大人達が息を呑んでいるのが分かった。

「それでは、どうぞご覧ください、豊かな幸運の泉」

スポットライトが消え、ビーリー先生の姿が見えなくなり、観客の拍手とともに舞台の幕が上がった。

それと同時にルシウス・マルフォイが憤った顔で席から立ち、子供とブロンズの女性を連れて退席していくのが見えた。

子供は何故退席するのか分からないという顔で両親らしき二人を見ていたが、マルフォイ氏の顔は怒りに染まっていて、ブロンズの女性も同様だった。

舞台上で演劇が始まった。オスカーは魔法の演劇を見るのは初めてだったが、なるほど、トunksやクラーナが騒いでいた理由が良く

わかった。それに恐らくマルフォイ氏が退席した理由もだ。

豊かな幸運の泉はオスカーでも知っている童話だ。

一年に一人だけ、不幸な人間が幸福を得ることのできる豊かな幸せの泉にたどり着くことができる。

その幸運の泉へ、三人の魔女とマグルの騎士が向かうのだ。

最初の魔女はアシャ。重い病にかかっている、泉がその病気を癒し、自分を救ってくれることを望んでいる。

二番目の魔女はアルシーダ。悪い魔法使いに家も杖も奪われて、泉が不運な自分を救ってくれることを望んでいる。

最後の魔女はアマータ。恋人に捨てられ、その心の傷を泉が救ってくれることを望んでいる。

三人はお互いを憐れみ、協力して泉にたどり着こうと誓い合う。泉にたどり着くのがたった一人だけだとしてもだ。

なのに、間違えてアマータはマグルの冴えない騎士を泉への道へ連れてきてしまう。

そこで、アマータ以外の二人はアマータを責める。泉にたどり着ける確率が下がってしまうからだ。

マグルの騎士はラックレス卿と言った。このヘタレの騎士は、アマータが責められているのを聞いて、自分が魔女に勝てるはずがないから、泉は諦めると言う。

これにアマータは怒った。

「意気地なし」

そう言って、騎士を叱りつけ、泉への道中、魔女たちを守るように言うのだ。

三人の魔女と騎士は泉へと向かった。

しかし、その道中に怪物が現れる。怪物は言う。

『苦しみの証を支払って行け』

四人が何をして、怪物は動かなかった。しかし、アシャが絶望して泣き出すと怪物はその涙をなめとって消えた。

四人はさらに進んだ。今度は急な坂道で、地面にこう書かれていた。

『努力の証を支払って行け』

四人が坂道を登っても登っても、その坂道に終わりはなかった。みんながくじけかけたころ、アルシーダが汗水を垂らしながら、みんなを応援した。

すると垂れた汗を地面が受けると今度は進めるようになった。

四人がさらに進むと、今度は川が行く手を阻む。

川底にはこう書かれていた。

『過去の宝を支払って行け』

四人が何をしてもその川を渡ることはできなかった。

そこでアマータは恋人との幸せだった記憶を川へ流した。

すると、川の中に飛び石が現れて、川を渡れるようになった。

四人はついに幸運の泉の目の前までたどり着く。

しかし、体の弱いアシヤが倒れてしまう。三人はアシヤを泉に連れて行こうとするがアシヤはもうだめだから放っておいてくれと言う。

ここで、アルシーダが傍にあった薬草を摘んで、アシヤに薬として飲ませた。

アシヤは瞬く間に元気になり、自分には泉は必要ないと言った。

そして、自分を助けてくれたアルシーダが浴びるべきだと言った。

しかし、アルシーダはこの薬草があれば自分はお金を稼ぐことができるからもう泉は必要ないと言う。

このやり取りを見て、騎士はアマータに浴びるように言う。

しかし、アマータはもう恋人との記憶を振り切ることができたから、私は幸福だ。だから騎士に浴びる様に言うのだ。

そして、騎士はその泉を浴び、アマータに結婚を申し込む。

騎士は自分を奮い立ててくれた優しいアマータが素晴らしい女性だと分かったからだ。

アマータも自分が手を取るにふさわしい騎士の手を取った。

そして四人は手を取り合い、ずっと幸福に暮らす。

本当は泉には幸運の力などないのに、それを知ることもなく。

これが豊かな幸運の泉だ。オスカーは変身術や拡声魔法、色んな魔法動物を使った劇を存分に楽しんだ。

幼いころに聞かされた童話が目の前で実際に繰り広げられるのは素晴らしいものだった。

ルシウス・マルフォイが帰ったのはこの童話のマグルの騎士と魔法の下りが気に入らないからだろう。

オズカーはこの童話を父や純血を誇る者たちが忌み嫌っているのを知っていたが、オズカーはこの童話が好きだった。

彼女たちは泉の力を借りずに幸せを掴み取るのだ。お互いの信頼の結果として。それは色んな魔法よりも素晴らしいことだと思った。

劇の幕が下りてしばらく経つても拍手は鳴り響いていた。オズカーも拍手を続けていた。

「私、この話をママがバカみたいにしてくるもんだから、あんまり好きじゃなかったんだけど、いい話ねこれ」

トンクスが拍手をしながらオズカーに言ってきた。確かにこの劇はマグルの男と魔法の話だから、テッドとアンドロメダにはぴったりの話かもしれない。

トンクス先生は確か駆け落ちしたと言っていたし、トンクスに読み聞かせたがるのも無理はないだろう。

「それにあのアマータって凄くクラリーナに似てない？ あの意気地なしとかヘタレとか、騎士に言うところが、初めて会ったころのクラリーナとオズカーみたいだったわ」

確かにオズカーはクラリーナにヘタレだの、アズカバンにいそうな顔だの、腰抜けだのと言われた記憶があった。よく考えなくてもクラリーナの方がアマータよりボロクソに言っている気がした。

「クラリーナがいたらからかえるのに残念ね」

オズカーはせっつかく良い余韻に浸っているのに、二人の騒ぎに巻き込まれるのは嫌だと思ったが、確かにクラリーナもここにいた方が良かったと思った。

オーラー

WADAでの公演が終わって、オスカー達は隠れ穴へと移動した。案の定、ミュリエルおばさんがエストを留めおきたがったが、エストはなにやら交換条件を結んで脱出した。

もう余り夏休みは残されていなかったが、オスカーは去年と同じ様にウィーズリー兄弟と箒で遊んだり、パーシーの予習につき合わされたり、トンクスがジニーにへんなことを教えるのを止めたりした。

隠れ穴に滞在してしばらくたつとホグワーツからのふくろう便がやってきて、オスカー達に必要な教科書や物品が書かれた手紙が届いた。

ただ、今年は他にも重要なニュースが届けられた。ビルが監督生に選ばれたのだ。

ウィーズリーおばさんの喜びようは見ているオスカー達でさえちよつと幸せになるくらいだった。

「今夜はパーティーにしないかね」

そう言つて、ウィーズリーおばさんは隠れ穴をパーティー仕様に変えようとし、オスカー達もそれを手伝った。

フレッド・ジョージがケーキの中にクソ爆弾を隠そうとしているのをオスカーとチャーリーが発見して止めたり、ビルの監督生のバツチが無くなったと思ったら、パーシーが磨いていただけだったり、ロンがグールお化けを発見したりと色々騒がしかった。

ただ、その日の夕食はオスカーがドロホフ邸でペン스에作つてもらった夕飯に負けないくらい素晴らしいものだった。

「ねえエスト、ミュリエルおばさんになんて言つて解放してもらつたの？」

チャーリーがチキンをほおぼりながらエストに聞いた。確かにその条件はオスカーも気になっていた。

「簡単なの、オスカーのお家でやるクリスマスパーティーにミュリエルおばさんも呼ぶつて言つたの」

オスカーはバタービールをむせ込んだ。隣のロンがオスカーの背

中を叩いてくれた。

「やったじゃないオスカー、ミュリエルおばさんも攻略完了よ」

オスカーは涙目になりながらトンクスを睨んだ。そしていつの間にかクリスマスはドロホフ邸で過ごすことが前提になっている事実
に気付いた。

「色々突っ込みどころしかないんだけど」

「ごめんねオスカー、でもクリスマスにミュリエルおばさんを連れてこないとふくろうの嵐に会っちゃうの」

エストは手を合わせてオスカーに謝ってきたが、確かに去年のクリスマス前にエストは大量の手紙を受け取っていたのを覚えていた。オスカーはため息をついた。

「まあペンスが全部やってくれるから、俺はトンクスが糖蜜パイでデブにならないか心配するだけだけだな」

「だからデブにならないって言うてるでしょ、クラーナがいないからって、オスカーが言わなくても良いのよ」

トンクスの言動を受けて、結局クラーナは夏休みが終わりかけているのに来ることはなかったなと思った。

「ねえ、みんなは今年どの教科をとるの?」

「僕は魔法生物飼育学は絶対とるよ、あとは占い学とかルーン文字とか?」

そう言えば、ふくろう便には新しくどの教科を履修するのか決める
とのが書かれていた。新しく増えたのは、魔法生物飼育学、数占
い、古代ルーン文字、占い学、マグル学だったはずだ。

「俺はなんも決めてないな、チャリーと同じでもいいかな」

「私も決めてないわね、ママが占い学はやめときなさいって言った
けど」

「そうなの? 全部取れば良いのかな? ビルも全部取ってるみたい
だし」

オスカーは全部履修するというのはよくわからなかった。そもそも
もこの量の授業を今やっている授業に加えてやると言うのは、一日で
は時間が足らなくなると思ったからだ。

「ちよつと、エストと同じ教科を取ったら絶対トップになれないのに、そのエストが全教科取ったら地獄絵図よ」

「そんなこと無いもん、去年の学期末はオスカーが闇の魔術に対する防衛術ではトップだよ？」

「一点だけどな」

そうエストとオスカーが言うと、トンクスは意外そうな顔をした。「え？ そうなの？ てつきり全教科エストがトップだと思ってたわ」

「確かに僕もそうだと思ってたよ、グリフィンドールはクラリーナが実技と魔法薬学とかは寮トップだったけど、エストに負けました!! とか言ってたからね」

確かにクラリーナは闇払いになるための教科は集中して勉強しているのに、エストに勝てないと嘆いていた気がした。わざわざスリザリのテーブルまで来て成績を比べに来ていたのだ。

「いいことね、これなら我が家に来ている子供たちはみんな監督生や首席になれそうだよ」

ウィーズリーおばさんがオスカー達の話聞いていたのか上機嫌でしゃべりながら、ケーキを切り分けていた。

オスカーは、廊下を爆破したり、ルーンスプールを勝手に飼ったり、フィルチの部屋から地図を盗んだりというオスカー達の行動をウィーズリーおばさんは知らないのです言っているのだと分かっていたが、ダンブルドア先生はそれらのいくつかを知っているのです、果たしてオスカー達を監督生に選ぶのか疑問だった。

「ママ、かんとくせーにえらばれるのはそんなにいいことなの？」

オスカーの隣で口をクリームまみれにしながらロンがウィーズリーおばさんに尋ねた。

「そうよロン、監督生や首席に選ばればアーサーの様に魔法省に勤めやすくなるのよ」

「パパと同じ場所で働くの？ ビルやエストも？」

「それはまだわからないのよ、ロン」

「でも、ケーキが食べられるんならばくも監督生になろうかな」

ウィーズリーおばさんは笑いながらロンの口を拭いた。オスカーはその後ろでパーシーがこちらに聞き耳を立てているのが分かった。監督生云々や成績の話が気になるらしい。

「明日はダイアゴン横丁に買い物にいかないといけないから、チャーリーたちもどの教科を取るのか決めないとダメよ」

ウィーズリーおばさんはそう言って違うテーブルにケーキを運びに行った。

「オスカーはエストと同じ寮だからエストと一緒にじゅぎょうを受けるの？」

ロンがまた口をクリームまみれにしながらオスカーに聞いた。

「まあ寮が同じだとそうだな、魔法薬学とかはグリフィンドールと一緒にだから、チャーリーやクラーナも一緒にだけだな」

「いいな、ぼくも早くホグワーツに行きたい」

「残念ながら、ロンが入るころには私たちは卒業しちゃってるわね」

ロンはトンクスがそう言うのを聞くと少し涙目になった。

「でもロンの同い年には凄い有名人がホグワーツに入ってくるんだよね？」

エストがウィーズリーおばさんと同じ様にロンのクリームを拭いながら言った。

「有名人？」

ロンは何を言っているのか分からないという顔でエストの方を見た。

「ロンも知ってるでしょ？ ハリー・ポッターなの、多分計算するとロンはハリー・ポッターと同級生なの」

ハリー・ポッター、恐らく魔法界で最も有名な名前の一つだろう。オスカーは自分より年下の、ロンと同じ年の男の子がダンブルドア先生やヴォルデモートと同じくらい有名だということが何か不思議だった。

「いったいどんな生活をしているのだろうか？」

「友達になれるかな？」

「ハリーのお父さんとお母さんは両方グリフィンドールだったって聞

いたの、だからきつとロンとハリーは同じ寮の同級生だし、きつとお友達になれるの」

確かに例のあの人を倒した男の子で、両親ともグリフィンドールなら、グリフィンドールに入る可能性が高いのだろう。

オスカーはいつかその男の子に会ってみたいと思った。いったい家族を失って、自分だけが生き残り、その結果魔法界一有名になるというのがどういふ心境なのか知りたかったのだ。

「確かに羨ましいわね、友達になったらサインを貰って日刊預言者新聞で売り出すとかできそうね」

「トunks、あの良くわからない本を書いてるロックハートさんでもサインは売らないんじゃないかな」

チャーリーがトunksに突っ込んでいた。オスカーも流石にサインを売るハリー・ポッターは見たくないし、会いたくもなかった。

隠れ穴での日々は矢のように過ぎ、キングスクロス駅からホグワーツ特急に乗る日が来た。去年は魔法省から車を借りたのだが、今年はおスカルの監視も消えたためどうなるのかと思っていると、キングズリーが一台車を借りて、もう一台はウィーズリーおじさんのフォードアングリアで行くらしい。

なんでも、ファッジ大臣に変わってからちよつと車を借りるのが難しかったが、闇払いの任務で使う捜査用という口実で借りてきたらしいのだ。

オスカー達はキングズクロス駅の九と四分の三番線について、一台のコンパートメントをまるまる占領してから、ウィーズリー家やキングズリーのいる場所に戻った。

「オスカー、君にこれを渡しておく」

キングズリーがポケットからなにやら羊皮紙を取り出して渡してきた。

羊皮紙にはキングズリー・シャックルボルトはオスカー・ドロホフの法定後見人として、週末のホグズミード行きの許可を与えるものである。と書かれていた。

オスカーはすっかり忘れていたが、ホグズミードに行くのは許可が
いるのだった。

「ありがとうございます。キングズリー」

「君が行けなくなると、多分君の周りの子たちが悲しむだろうからね」
キングズリーが深い人を安心させるような声で言った。確かにオ
スカーが行けないことでオスカーよりも、周りのみんなが悲しむかも
しれない。忍び地図があればこっそり行くことも可能かもしれない
が。

「キングズリー・シャツクルボルトか？　こんなところで何をしてる？」
オスカーとキングズリーの後ろからコツコツという音と一緒に、唸
るような声が聞こえた。

「これはアラスター、今後見人を務めている少年の見送りの最中でし
て」

「後见人？　じゃあこの坊主がドロホフのせがれか？」

「確かに僕はオスカー・ドロホフですけど……」

その老人はオスカーを普通の眼とグルグル回る青い目の両方で見
た。

オスカーもその老人を観察した。鼻は削がれ、顔は余すところなく
傷だらけだ。さっきのコツコツという音の正体もわかった。この老
人の片足は恐らく義足なのだ。

しかし、オスカーはその老人にいくつか見覚えを感じた。WADA
デルシウス・マルフォイの妻らしき人物を見た時と同じだ。

恐らくダークグレイだったと思わしき白髪だらけの髪や、グルグル
回る魔法の眼ではない方の眼、その黒い眼をオスカーは知っていた。
「ああ、オスカー久しぶりですね、この人が私のおじさんのアラス
ター・ムーデイです」

老人の後ろからクラリーナがでてきた。オスカーは少しだけ、クラリー
ナが前に見た時よりも目の下にクマができてるように思えた。

そして老人の正体もわかった。伝説の闇払い、マッドアイ・ムー
デイこと、アラスター・ムーデイだ。

「ふん、確かに憎らしくなるほどアントニン・ドロホフに似ている」

ムーデイは魔法の眼でオスカーの体を舐め回すように見ながら、唸った。

オスカーはダンブルドア先生やミユリエルおばさんと言った老人の眼を見てきたが、この人物の眼は油断も隙も無いように思えた。感情ではなくただ油断なく見定めているという感じだった。

「だが、髪の色が違うな、あいつの写真は眼に焼き付くほど見てきたからわかるぞ」

オスカーは色んな人に会ってきたが髪色のことを言われたのは初めてだった。確かにオスカーの髪色は母のものだった。近い人よりも、恐らく長年父の敵だった人物からそれを指摘されるのは不思議な感覚だった。

「ちよつとクラリーナじゃない、いつの間にオスカーと一緒にいるのよ」
トンクスがこつちに走ってきた。ウィーズリー家やトンクスの家族もこつちに歩いてくるのが見える。

「なんですか一緒って、おじさんがキングズリーを見つけたから喋りかけてただけですよ」

「おじさん？ この人がマッドアイ・ムーデイ？」

オスカーはこのマッドアイの風貌を見ながら、マッドアイと初見で呼び捨ててるトンクスの精神は大したものだと思った。グリフィンドールの方が向いているのではないだろうか？

「なんだ、肝の据わった娘っ子だな、顔からして、ブラックの家の子か？」

「それを言われるのは夏休みで二回目よ、クラリーナのおじさん、私はニンファドローラ・トンクスです」

オスカーはクラリーナとトンクスがなんだかんだ一緒にいるのと同じで、このマッドアイとトンクスも案外相性がいいのではないかと思っただ。

「アラスター、お久しぶりです」

「アーサー・ウィーズリーか、その子はギデオンの子か？」

今度はウィーズリーおじさんがマッドアイに挨拶をしており、マッドアイの眼はエストの方を向いていた。

「そうだよ？ エストはエストレヤ・プルウエットだよ、貴方はクラナーのおじさん？」

「なるほど、死喰い人の子供より周りの娘っ子の方が肝が据わっているようだ」

そう言つてまたムーデイの眼が一瞬オスカーの方を向いた気がした。

しかし、マッドアイの言動を完全に無視して、ウィーズリーお婆さんが今度はみんなにサンドイッチを配り始めた。

「さあ、オスカーたちの分もありますからね、大丈夫よ、クラナーちゃんの方も作ってきたわ」

そう言つて、ウィーズリー兄弟やオスカー達にサンドイッチを配つた後にみんなを一回ずつ抱きしめた。オスカーはセーターと同じくらい体が温かくなった気がした。

ウィーズリーお婆さんがこうしてサンドイッチを配っているということは出発の時間が近いのだろうと思い、オスカーが時計を見ると出発まであと五分しかなかった。

「クラナーはトランクをまだ載せてないんじゃないのか？ そろそろ出発だぞ」

「そうですね、じゃあアラスターおじさん、多分クリスマスマスをお願いします」

「ああ、クラナー、気を付けてな」

オスカー達は列車に乗り込んで、コンパートメントの窓から見えないくなるまで手を振った。

オスカーはコンパートメントに自分以外のいつもの四人がいるのを見て、これからホグワーツに行くのだという気分が自分の中で高まっているのを感じた。

「クラナーのおじさんはやっぱり雰囲気のある人だったよね？」

チャーリーがクラナーの方を見ながらそう言った。チャーリーの言う通り、オスカーもあれほど雰囲気のある人物にはそう会ったこともなかった。ダンブルドア先生くらいだろうか？

「確かにアスカバンの半分を埋めたって感じの雰囲気はあったわよ

ね、あのグルグル回る眼のせいもあるかもしれないけど」

「それにオスカーへの態度が最初の頃のクラリーナそっくりだったの」

確かに最初の頃のクラリーナはもつとオスカーに辛らつで、口を開けば闇の魔法使いとか、アズカバンのヌルメンガードだの言われた記憶がオスカーにはあった。

「まあおじさんだし似てるのはしょうがないんじゃないのか？」

「つまりちよつと一緒にいれば、オスカーは伝説の闇払いであるマツドアイも攻略できるってことね」

「相変わらず、トンクスは意味の分からないことを言いますね」

トンクスは夏休みから引き続き、オスカーのことを純血キラーだと言いつ張りたらしい。オスカーはよっぽどトンクスの方がマツドアイとの相性が良さそうに見えた。

「クラリーナがいない夏休みの間にオスカーは着々と純血を攻略してたのよ、ドアの外にいるレアみたいだね」

トンクスが喋りながらコンパートメントのドアを指すと、ドアの向こう側に短い金髪が見えた。

「レアと夏休みには会ってないだろ」

オスカーはそう言いながらコンパートメントのドアを開けた。レアは突然ドアが開いたのにびつくりしたのか、眼を丸くしてオスカー達の方を見ていた。オスカーは少しだけ、去年見たよりもレアの髪の毛が伸びている気がした。

「あつ、あの…… 先輩方……」

「魔法の練習が云々じゃないのか？ 入ればいいだろ」

「あ…… 失礼します……」

レアはおどおどとオスカーの向かい側、トンクスの隣に座った。オスカーはトンクスがニヤニヤ笑っているのを見て、先手を取って黙らせ呪文を唱えた方がいい気がした。

「魔法の練習は必要の部屋でやるの？」

エストが期待を込めてオスカーとクラリーナの顔を交互にみた。そう言えば一年生の頃の魔法の練習にはエストは参加しておらず、いつも羨ましそうな顔をしていたのをオスカーは思い出した。しかし、オ

スカーは去年の記憶から余り必要の部屋を使いたくなかった。

必要の部屋という言葉が出ると、レアは少しビクツと反応し、クラーナは何か考え込んでいるようだった。

「なんの魔法を練習するのかによるけど空き教室で十分なんじゃないか？」

「まあ確かに毎回八階に集まるのも面倒ですし、四寮から一番近い位置の空き教室とか、スペースでいいんじゃないですか？」

オスカーとクラーナが揃ってそう言うと、エストはちよつと期待が外れたという顔をした。トunksはさらにニヤニヤしているようだった。

「レアにはオスカーやクラーナ達が一年生の時に練習してた魔法とかを教えるの？ できれば僕も無言呪文を勉強したいんだけど」

確かにエストはオスカーに変身術を教える代わりにとオスカーから無言呪文をマスターしていたし、三年生のメンバーではチャーリーが唯一無言呪文をマスターしていないのをオスカーは思い出した。

「そんな感じでいいんじゃないか？ 少なくとも五年生までの覚える呪文と六年生の技術のはずだしな、ほんとは」

正直、去年度色々あってオスカーの感覚は少しおかしくなっていたが、本来なら三年生でも持て余すような呪文と技術のはずなのだ。

「でもそれだけじゃ面白くないの、もっと面白い呪文を勉強しない？」

エストが時折見せる、悪戯っぽい顔をしてそう言った。

「なんなのエスト？ 面白い呪文って？」

トunksがさつきからしていたニヤニヤ顔を中断してエストに尋ねた。

「守護霊の呪文なの、すつごく古くて難しい魔法なんだけどね、色んな使い道があるし、すごく面白い魔法なの」

守護霊の呪文？ オスカーはその呪文を聞いたことがあった。確か一年生の時にお世話になった幻の動物とその生息地に書かれていたはずだ。

「守護霊の呪文なんて本気ですか？ 昔はそれを使えるっただけでウイゼンガモットに選ばれたなんて言われてる呪文ですよ？」

「そ…… そんなに凄い呪文なんですか？」

クラリーナがそう言うと言うことはそれほど高度な呪文なのだろう、少なくとも魔法界の最高法規を決めるウィゼンガモットに使えるだけで選ばれるというのは、尋常ではないとオスカーも思った。

「すごい呪文なの、吸魂鬼を唯一追い払える呪文だし、それに呪文を唱えるのに必要なモノがすごく面白いの」

「必要なモノ？ エスト、呪文を唱えるのに必要なモノがあるの？大抵杖を振るだけだと思っただけ？」

チャーリーがピンとこないという顔でエストに尋ねた。オスカーもいまいち想像ができなかった。

「幸せな記憶ですよ、有体の守護霊、つまりちゃんとした形を持っている守護霊を創り出すには魔法使いの持つ一番幸福な記憶が必要なんです」

クラリーナが真剣な顔でそう言った。幸せな記憶？ オスカーはそれを聞いてもあまり頭の中にパツとはでてこなかった。

「クラリーナの言う通りなの、すごく面白いよね？ つまり守護霊は魔法使いの持っている幸せの記憶そのものなの」

「幸せの記憶…… いいわね…… それ…… すごく面白いわ!!」

クラリーナとエストの話聞いて、トンクスはさっきまでのニヤニヤ笑いではなく、何かを思いついた時のような顔をしているとオスカーは思った。

「幸せの記憶ですか？ あんまりボクには想像できない呪文ですね……」

「トンクス、舞い上がっているところ悪いですけど、恐らく尋常な呪文ではないですよ、人の心や記憶を介在する魔法は他の魔法と比較にならないほど複雑で困難な魔法になるんです」

レアはなにやら俯いて必死に何かを思い出すようにしながらそう言い、クラリーナはいつもにまして真剣な表情でそう言った。

オスカーはクラリーナが同様のことを言っていたのを覚えていた。閉心術の練習前に、オスカーにクラリーナが説明した時と一緒の表情と声のトーンなのだ。

「あら？ クラーナは簡単に守護霊の呪文を使えそうだと思ったんだけど違うの？」

「はあ？ どういう意味ですか？ 人によって簡単に使えるなら高度な呪文なんて言われませんよ」

オスカーはまた嫌な予感がした。トックスの顔が夏休みで散々みたオスカーをからかうときの顔になっていたからだ。

「だって、幸せの記憶は簡単でしょ？ オスカーに抱きつかれ……」「いいでしょう!! 久しぶりに会ったから我慢してましたけど、二度とその口を開けなくしてやります!!」

いつものようにトックスとクラーナは取っ組み合いを始めてしまった。しかしオスカーはそれを見て、ホグワーツの日常が帰ってきつつあることを感じた。

逆転時計

オスカー達はレイブクロー生のコンパートメントに戻ったレアと別れ、セストラルの馬車で城へと向かった。

五人の話題は今年の闇の魔術に対する防衛術の先生は果たして見つけたのか否かということだった。

「スネイプ先生は闇の魔術に対する防衛術をやりたがってるんじゃないのか?」

「そうですね、自分の寮に露骨な依怙彘肩をして、シャンプーをする術を知らない先生は、あの授業をやりたいらしいって聞きますね」

クラーナのスネイプ先生に対する評価は辛らつだった。確かにスネイプ先生はスリザリンを依怙彘肩するし、シャンプーの仕方を知っているかは怪しかった。

「もう…… そんなにスネイプ先生は悪い人じゃないはずなの」

「エストやオスカー達には優しいけどね、クイディッチ場の予約とかでも中々凄い手を使ってくるから、僕も擁護できないかな」

グリフィンドールからの評価は最低の様だった。スネイプ先生はまさにスリザリンの教授という感じではあるとオスカーは思った。

「まあ私はママがいなくなつてほつとしてるけどね、去年は授業中ずつと怒られっぱなしだったわ」

「それは貴方がドジをしまくるからでしょう、グリンデローを教室から逃がして大騒動になつてたじゃないですか」

オスカーはトングスと一緒に闇の魔術に対する防衛術や魔法薬学の授業を受けたくないなと思つた。体がいくつあつても足りなさそうだからだ。

「ダンブルドア先生は一杯魔法使いの知り合いがいるだろうし、大丈夫なんじゃないかな? エストもなれるんだつたら、ホグワーツの先生になつてみたいの」

「エストが先生だと変身術が似合いそうね」

確かにエストのイメージは変身術の授業での活躍が大きい気がオスカーもした。マクゴナガル先生は授業での依怙彘肩など絶対にし

ないだろう先生だが、授業でエストを褒めない日などないからだ。

「うーん、変身術はマクゴナガル先生のイメージがあるからね、なんかエストだと厳格なイメージがないからちよつとイメージできないかも」

「確かにあの授業はマクゴナガル先生の前はダンブルドア先生が教えてたらしいですから、グリフィンドールのイメージがありますね」

グリフィンドールの二人はあの授業はグリフィンドールの授業というイメージがあるようだ。オスカーもあんまりエストとマクゴナガル先生を重ねてみるのは難しかった。

「変身術はグリフィンドールで、魔法薬学はスリザリン？ スネイプ先生の前の先生もスリザリンの寮監だったって聞いたことがあるの」
寮監のイメージがその授業と寮を結び付けている気はオスカーもしていた。変身術はグリフィンドール、魔法薬学はスリザリン、薬草学はハツフルパフ、呪文学はレイブンクローという感じだ。

「そう言えば闇の魔術に対する防衛術の先生はスリザリンでその前はグリフィンドールね、じゃあ今年はその二つの寮以外か、またグリフィンドールなのかしら？」

「まず見つけることが重要だと思うけどな」

オスカー達は闇の魔術に対する防衛術の先生が見つかったことを祈りながら、大広間へと向かった。

大広間にオスカー達が入ろうとすると、マクゴナガル先生が待ち受けていたかのようにオスカー達の前に現れた。

「プルウエット、少し来てもらえますか？ 少し授業の時間割のことでお話があります」

「マクゴナガル先生？ えーっと、わかりました、オスカーちゃんとエストの分の料理をとって置いてなの」

そうやってエストとマクゴナガル先生は恐らくマクゴナガル先生の部屋の方へと消えていった。

「授業の時間割？ エストは全部とるとか言ってたけどそのせいなのかしらね？」

「まあそうじゃないか？　だって普通に時間割を組むと絶対全部受けられないからな」

四人はそれぞれのテーブルへと向かって行った。

スリザリンのテーブルについて、オズカーは一応同級生や寮の同室のメンバーに挨拶をされたが、オズカーが血みどろ男爵の傍に座ると誰も寄ってはこなかった。

「少年、姫はどうしたのだ？　一緒ではないのか？」

血みどろ男爵が相変わらず銀色の血まみれの青白い顔でオズカーに聞いた。血みどろ男爵は髪飾りの騒動の後、エストとオズカーに優しくなったとオズカーは思っていた。エストには元から優しくかった気がしたが。

「エストはなんか授業の時間割のことでマクゴナガル先生に呼ばれていったんだけど」

「ああ、なるほど、姫は優秀であるからな、少年、できるだけ姫と同じ時間を過ごすのだぞ」

血みどろ男爵は勝手に納得して、オズカーに忠告した。オズカーは千年の間、ヘレナ・レイブンクローにしでかしたことを悔い続けている血みどろ男爵が時間と言うと、なにやら重く聞こえた気がした。

そうこうしている間に大広間の中心に組み分け帽子が置かれ、組み分けが始まろうとしていた。

いつもマクゴナガル先生が組み分けをする一年生を呼んでいたと思っただが、今年はフリットウィック先生だった。

幾人かの新生生がフリットウィック先生のキーキー声で呼ばれて、組み分けされていった。

今年の新生生は去年度と同じく、オズカーの年のエストのような長いこと組み分けがされない新生生はいなかった。

「ああ!!　組み分けに間に合わなかったの、ちょっと男爵詰めて欲しいの」

後ろからエストの声が聞えた。エストはなにやら走ってきたようで、男爵を押しつけて（ゴーストを押しつけることができるかどうかは難しいが）オズカーの隣に座った。

組み分けが終わり、ダンブルドア先生がたち上がって、話を始めた。相変わらずダンブルドア先生の顔は慈悲深い笑顔で覆われていたが、オズカーは去年度感じたダンブルドア先生あのとんでもないエネルギーをどこか感じる気がした。

ダンブルドア先生を見ることでオズカーはホグワーツに帰ってきたことを実感した。

「おめでとう！ 新学期おめでとう！ 新入生の皆はようこそホグワーツへ！ そして在校生の皆はおかえりじや、今年もホグワーツでの一年が始まる」

オズカーはダンブルドア先生の隣に見たことがない人物がいることに気付いた。ダンブルドア先生やミユリエルおばさんと同じくらい年を取っている人物に見える。

エストもその人物に気付いたようだった。

「また今学期、新しい先生を迎えることになった。闇の魔術に対する防衛術の先生を見つけることは年々難しくなっておるから、ありがたいことじや」

そうダンブルドア先生が言うと、その人物が立ち上がった。長身のダンブルドア先生よりも背が低く、白髪が頭の周りを取り囲んでおり、まるでタンポポの綿毛のようだった。

「わしの旧友でもある。エルファイアス・ドージ先生じや」

オズカーはその名前に憶えがあった。ミユリエルおばさんがダンブルドア先生にとって、唯一ともだちと呼べるだろうと言っていた人物だ。

「ミユリエルおばさんの話によくでてくる人なの、おばさんはクラーナがトンクスにドジとかアホとか言うのと同じくらい、あの人のことをドジのドージって呼んでたの」

やはりオズカーの記憶には間違いがないようだ。オズカーはちよつとだけトンクスが闇の魔術に対する防衛術の先生をやっているのを想像し、人狼を檻から逃がすトンクスの姿が頭の中に浮かんだので、考えるのを辞めた。

「ああ、この度は私のような人物を迎えていただきありがとうございます。どう

か一年間よろしく」

ドージ先生は、ゼイゼイとした高い声でダンブルドア先生からの紹介に答えた。

グリフィンドールからひと際大きな拍手が上がったようだ。

「さあ、これでお話は終わりじゃ、宴の始まりじゃ」

ダンブルドア先生がそう言うと、金の皿とゴブレットに食べ物と飲み物が一杯になった。

オスカーはお腹が減っていたことに気付いた。

「エスト、マクゴナガル先生との話は大丈夫だったのか？」

「うん、大丈夫だよ、授業を全部取るにはちよつとだけ魔法が必要なんだけどね、成績は大丈夫だろうけど、クイディッチチームをやりながらやるのは大丈夫？ ってマクゴナガル先生が心配してたの」

「結構きついんじゃないのか？」

確かにエストはスリザリンクイディッチチームのシーカーなので、ただでさえ負担が多いのだ。

「多分大丈夫なの、マクゴナガル先生に特別措置っていうのを貰ったし、それに昔スリザリン生でクイディッチチームをやりながら、イモリ試験で全部の最高成績を取った人がいたんだって」

「特別措置？」

そんな超人がスリザリンにいたのなら、魔法省の高官か闇払いにでもなっているのだろうか？ それにオスカーはエストの言う特別措置が少し気になった。エストは首から下げてあり、制服の胸のところに隠れて見えない何かを触った。

「うーんとね、オスカーにも秘密なの、マクゴナガル先生に言っちゃダメって言われたから」

「まあマクゴナガル先生が言うんなら言わない方がいいんだろうな」

マクゴナガル先生は少なくとも生徒にウソを言う先生ではないし、生徒達のことを考えてくれる先生だ。オスカーは去年の経験から思う思っていた。

「新しい授業もあるし、みんなで魔法の練習をするっていうのはけっこう難しいかもな」

「確かに難しいの、クイドイツの練習も授業も寮が違くと時間も違うの、うーん皆が特別措置をして貰えれば簡単に合わせれるのに……」

エストはまた胸元の何かを掴んで考え込んでいるという顔だ。

「それに時間を決めるのもみんなが集まらないといけないから難しいね、何か方法を考えようかな？」

「方法？」

オスカーも毎回練習の時間を決めるために集まったり、一回目以降は練習の後に時間を決めたとしても、誰かが何かの理由でこれにならなかった場合にそれを確認するのは難儀なことだと思っていた。

「うん、忍び地図の時に変幻自在呪文のことを話してたよね？」

「死喰い人の闇の印がどうのこうのとか、ロウエナ・レイブンクローが創ったとかなんかだったか？」

「そうなの、あの呪文をかけた何かと忍び地図があれば簡単に集まれると思うの」

確かにあの闇の印は人を集める方法としては非常に優秀な様に思えた。少なくとも持ち物の検査をしたりしても分からないし、誰かが見てもどこに集まるかだとか、いつ集まるのかが分からないからだ。

しかし、オスカー達は別に非合法な活動や、校則に反することをやるうとしていないわけではないので、そこまで高度な方法で集める時刻や場所を伝えるものが必要なのかとオスカーは思った。

「よくわからないけど、そんなに大層なものが必要なのか？」

「もう…… オスカーはわかってないの、エストはああい魔法の道具とかを作ってみたいの、あと忍び地図も卒業までにちよつといじつてみたいと思ってたの」

確かにエストが色んな魔法をかけられている道具が好きなのは嫌なほどオスカーは知っていた。去年度はそれが高じてとんでもないことになったのだから。

「だからね、何か時間を表わせるものに変幻自在呪文をかければいいと思うの、そしたらだれかの時間に合わせてみんなの時間が変化するの」

オスカーはエストがそう言うのを聞いて、きつき血みどろ男爵が言っていたことを思い出した。エストとできるだけ同じ時間を過ごせと男爵は言っていたのだった。

エストはできるだけだけみんなの時間を取りたいのだろう。オスカーはそう思うと何かアイデアを出したくなかった。

「呪文をかけるんなら、生徒が持ってもおかしくないものがないだろうな、大鍋、教科書、羽ペン、お金、杖……」

オスカーは Hogwarts 入学時のふくろう便に書かれていた物品を思い出した。これらのどれかなら闇の印と同じく検査されても問題ないだろうからだ。

「ガリオン金貨なら時間は数字で表示できるけど、場所が難しいの……」

オスカーにはガリオン金貨が良い案に思えたのだが、確かに場所の表示は難しいだろう。

「じゃあやっぱり忍び地図みたいに普段は羊皮紙とかの方が良いんだろうな、文字でいくらでも伝えられるわけだし」

忍び地図の隠匿性はオスカーからみても完璧に思えた。正直、どうやってフィルチが悪戯仕掛人たちからこれを取り上げたのか想像がつかなかったからだ。

「確かに羊皮紙…… あっ!! 教科書のページを忍び地図の写しに変えればいいの!!」

「忍び地図の写し? そんなことができるのか?」

そんなことができればすごく便利だとオスカーは思った。忍び地図があれば先生やフィルチを避けることができ、夜中まで外にいても捕まる心配がないし、だれかに会いにいくときも凄く便利だからだ。これも去年、オスカーは身に染みるほど味わっていた。

「できるはずなの、変幻自在呪文を使えば元の何かに合わせて他の何かを変化させれるはずなの」

「それなら遅くまで練習してもフィルチに捕まらなくてすむな、トンクスがドジをやらかしても大丈夫だ」

オスカーはフィルチの部屋に入るのもう御免だった。

「守護霊の呪文も面白そうだし、今年も色々楽しそうなの」
オスカーはそう言って夕食を頬張る。エストを見ながら、去年度のよ
うな大騒動にならないことを祈った。

動物もどき

ホグワーツでの日々が始まった。スリザリンの最初の授業は占い学だったので、オスカーとエストは去年灰色のレディに会った塔に登っていた。

「トレローニー先生は本物の予見者なのかな？」

「なんか有名な人のひ孫なんだろう？ あれひひ孫だったか？」

確かオスカー達が指定された教科書の一つの著者がトレローニー先生と同じ苗字だったはずなのだ。しかし、オスカーはエストと一緒に教科書を読んでみたが、さっぱり意味が分からなかった。

エストでさえ理解できないようで、二人で読み合ってもオスカーは先週死んでいることになっていたり、ホグワーツに地下鉄が来週激突するなんて占いしか二人にはできなかった。

「予見者は予見するときはほとんど何も覚えてなかったりするって聞いたけど、そんなのを教えられるのかな？」

「百個くらい占つとけば一つくらい当たるんだろ」

正直オスカーはあんまり占い学に期待していなかった。これから来る未来が分かっていたらなんとかできるかもしれないが、もし決まっただけで、変えることができないのなら知る意味などない気がしたからだ。

「うーん…… 特別措置も神秘部だし…… 予見も神秘部って書いてあったし…… やっぱりほんとの予見もあるのかな……」

エストはなにやらぶつぶつ言って考え事モードだった。オスカーはこうなると人の話をエストが聞かなくなるのを知っていたので、取りあえず塔に登ることにした。

前回あったガドガン卿が前のスリザリン生に絡んでいたので、オスカーはエストをつれて横を通り抜けていくことにした。ガドガン卿の相手をするのは双子とトングスの相手をするものの二倍くらい体力がいることだと知っていたからだ。

オスカーとエストが踊り場まで着くとスリザリンの生徒達がそこに集まっていた。踊り場の天井には跳ね扉があるようだった。あそ

ここが古い学の教室なのだろうか？ オスカーは他の教室と違い、なにやら雰囲気にこだわっている気がした。

「あの扉が教室なの？ シビル・トレローニー先生って書いてあるね」
エストがそう言うやいなや、銀色のはしごがオスカーとエストの前に降りてきた。オスカーはしようがないのでみんなに率先して登ることにした。

部屋の中に入って最初に感じたのはとにかく暑苦しいことだった。オスカーが部屋の中を見回すと暖炉の上に巨大なやかんが乗っていて、何か気分が悪くなるくらい匂い、紅茶を無理やり濃くしたような匂いと蒸気が立ち上っていた。

それに部屋の中は何故か深紅の薄明りで満たされていて、窓は全てカーテンで閉め切られていた。オスカーは部屋の中の息苦しさからカーテンを開けて深呼吸したい衝動に駆られそうになっていた。

「この部屋暑いのは、それにトレローニー先生はどこなの？」

エストがローブをパタパタしながら部屋の中を見回した。後ろのスリザリン生たちも二人の周りに集まって先生を探した。

「古い学へようこそ…… おかけなさい…… 子供たちよさあ」

教室の奥の暗い場所から消え失せてしまいそうな声があった。オスカーは最初にあつたところのクラーナが油断大敵!! と言うときの、芝居がかっているようなそんな印象を声から受けた。

トレローニー先生はひよろひよろした痩身の女性だった。大きな眼鏡のせいで先生の眼が何倍も大きく見え、オスカーは昆虫のようだと思った。オスカーたちは小さな丸テーブルの周りに置いてあるクッション付きの丸椅子に座った。

「皆さまがお選びになった古い学は魔法の学問の中でも最も難しい学問です…… 初めにお断りしますと、内なる目の備わっていない人はこの学問を学んでも無駄だということですよ……」

相変わらずトレローニー先生が神秘があった声、オスカーが座って冷静に聞くとやっぱり芝居がかって聞こえる声で授業の説明を始めた。

「書物はこの学問のある一定の場所までしか教えません…… 限られ

たものに与えられる天分が無ければ、どんなに優秀な魔法使い、魔女でも未来という神秘のボールを払うことはできないのです……」

正直なところオスカーはあんまりこの先生のことや占い学を本気にしていなかった。占い学が発達していれば、クイディッチでの賭けは一切成立しないだろうからだ。クイディッチの勝敗が占えるのならもつと多くの生徒が占い学を選択するだろうとオスカーは思った。

それに、目の前のエストの眼がいつもの授業中の楽しそうな眼ではなく、何か疑っているような眼になっていて、オスカーはあんまりい予感はしなかった。

その後、トレローニー先生は数人の生徒になにか不穏な予言、ペットは大丈夫かだとか、おじいさんは元気なのかとか聞いていた。オスカーはやっぱりこの先生は怪しいと思った。そもそも不穏な予言が当たるのなら、もつと慎重に喋ると思ったからだ。

「さあ皆さん、未来の霧を晴らすの五ページ、六ページを開いてお茶の模様を見てみましょう…… わたしも皆さんにまじって未来の霧を晴らすお手つだいをして回りましょう……」

オスカーとエストは教科書、未来の霧を晴らすの指定されたページをめくって、書いてある通りに紅茶を飲んだり回したりして、その後のお茶つぱを見てみた。

残念ながらオスカーの未来の霧は一向に晴れそうになかった。

「オスカー、エストのお茶になんか見える？」

「エストの顔が見える」

「それは写ってるだけなの」

オスカーは暑苦しい教室の空気と紅茶の甘ったるい匂いで頭がぼうつとなりながら、紅茶に写るエストの眼が、やっぱりミュリエルおばさんに似ているなど思っていた。

「じゃあ今度はオスカーのお茶をしてみるの」

エストがじつとオスカーの前に置いてある紅茶を見つめた。エストのローブの間から鎖につながれたガラス細工のようなものが一瞬、教室の紅い光を反射した。

「うーん…… 黒い服に山高帽みたいに見えるの…… あと杖みたい

なのも見える気がするの……」

オスカーも紅茶を見てみたが、せいぜいおつきいどんぐりとでかい棒のようにしか見えなかった。オスカーが見ている間にお茶つばは動き、今度はどこかブラッジャーに落とされて主を無くした筈のように見えた。

「うーん、クラリーナになんか起こるのかな？」

「黒い服と杖からしか連想してないだろそれ」

するといつの間にかトレローニー先生が二人の傍にきて、紅茶をのぞき込んでいた。オスカーには紅茶に写ったトレローニー先生の眼鏡とお茶つばが合わさって、黒いコガネムシの様に見えた。

「斧…… 攻撃…… 余り幸せなカップではないようね……」

トレローニー先生がさつきよりもさらに芝居がかった、霞むような声でそう言った。オスカーは最近幸せとか幸福なんて単語をよく聞く気がした。

オスカーはトレローニー先生が何を言うかよりも、疑いというよりはちよつと攻撃的にすら見えるエストの眼の方が心配だった。

「別にそんな物騒なモノには見えないの、トレローニー先生の眼鏡が映ってるだけなの」

「おやこれは羽？ おお…… 不幸な現実から逃げられる可能性があるのかも知れない……」

エストの言動を完全に無視してトレローニー先生は予言を続けた。オスカーはちよつとだけ希望を持たすのは一気に絶望へ叩き落とす前振りのような気がした。

トレローニー先生は紅茶のカップを二回回してもう一度お茶つばを見て、目をつむり、息を呑んだ後に悲鳴を上げた。

「ああ、なんてこと…… 可哀想な子ね…… 聞かないほうがよろしいわ……」

トレローニー先生が心底気の毒そうにオスカーの方を見た。クラス中の視線がオスカーに集まっているのがオスカー自身にもわかった。エストの眼がますます冷めて攻撃的になっている気がした。

「もったいぶらないで言えばいいの」

エストが冷たく言い放っている間に他のスリザリン生がオスカーの紅茶をのぞき込んで、なにやら何か見えるとか談義し始めた。残念ながらオスカーにはせいぜい翼がないトンボくらいにしか見えなかった。トンボの眼の部分はトレローニー先生の眼鏡だ。

「あなた、これはセストラルですよ……セストラル……死の象徴です……」

なるほど、オスカーは納得した。さっきの羽はやっぱりあげて落とすためのふりだったようなのだ。トレローニー先生は今にも死にそうなる病人を見るような眼でオスカーを見つめていたが、オスカーは隣のエストの方が怖かった。クラスの皆はオスカーを気の毒そうな眼で見ている。

「セストラルなんかホグワーツに一杯いるの」

「これは死の予告ですよ……気をつけることね……」

トレローニー先生はオスカーとエスト以外のスリザリン生の反応に満足したようだった。しかし、エストは納得が行かない様だった。「どう見たってセストラルには見えないの」

今度はトレローニー先生の目の前に立ってそう言い放った。オスカーはしばらく忘れていたが、エストはやる時はクラーナより過激な行動にでるのだ。

トレローニー先生はエストを眼鏡で大きく見える目でじろつと見た。先生はせっかく作った神秘的な雰囲気壊されて機嫌を損ねたように見えた。

「こんなことを言っておめんあそばせ。あなたにはほとんど特別な天分と言うものを感じませんのよ」

オスカーは久しぶりにエストが怒っているのを見た気がした。それまでは冷めていた眼がギラギラと紅く光っている気がしたのだ。

「特別な天分を持つてるなら、本当に予見できるなら人が死ぬのなんて簡単にいうべきじゃないと思うの」

エストはトレローニー先生との距離を一步詰めて、息の届きそうな距離でそう言い放った。トレローニー先生は嫌そうな顔をして、エストから目を逸らした。

「今日の授業はここまでにしましょう。皆さん、カップをここに返してくださいるかしら」

トレローニー先生はエストをいないものとして扱って、クラスのみんなにさつき配った紅茶のカップを回収し始めた。オスカー達スリザリン生はみんな先生にカップを返して、教科書をカバンにしまったが、エストはその間もずっと、トレローニー先生を睨みつけていた。

「また会う時まで……あなた方が幸運でありますように……」

オスカーはエストが動こうとしないので、無理やり引っ張ってはしごを降りることになった。オスカーにはエストが相当おかんむりなことが分かっていった。

次の授業はエストお得意の変身術だったので、オスカーはそれで機嫌が直らないかなと淡い期待を抱きながら、塔の階段を下りて行つた。途中でガドガン卿がこつちに構おうとしてきたが、エストが睨むとガドガン卿のポニーが怯えて逃げてしまい、乗っていたガドガン卿もそのままどこかの肖像画へ消えていった。

「あの先生はクソなの」

オスカーはエストの口からそんな言葉が出るのは初めて聞いた。ほとんどの人間に対してエストが厳しいことや罵ることを言うのをオスカーは聞いたことがなかった。

まして、ホグワーツの先生に対してはどの先生に対してもエストが敬意を持っていることは言葉の節々からオスカーは感じていたので、オスカーにとって結構な驚きだった。

「まああれだろ、占い学は雰囲気を楽しむものなんだろ」

「オスカーは死なないし、多分あの先生はペテン野郎なの」

そりゃ自分もいつかは死ぬだろうと思つたし、そもそもトレローニー先生は野郎ではないとオスカーは思ったが、口を挟まないことにした。一通り吐き出してもらつた方がいい気がしたのだ。

「自分が特別だつて思ってるんならあんなふうに適当なことをいって……」

「痴話げんかですか？ 廊下の端までエストの声が聞こえていますよ」

「エストが怒ってるのは珍しいね」

廊下の角から顔を出したのはクラリーナとチャーリーだった。その後ろにはグリフィンドール生の姿が見えるので、今授業が終わったところなのだろう。

「もう…… 占い学の授業がひどかっただけなの」

「僕たちも今から占い学を受けに行くところなんだけど、そんなにひどいの？」

「取りあえず俺には死の予兆が見えてるらしいから、龍痘にかかった人と同じくらい思いやってくれ」

オスカーがそう言うと、三人は笑った。

「グリフィンドールはなんの授業だったんだ？」

「変身術だよ、マクゴナガル先生がすごいを見せてくれたよ」

「といってチャーリーが横目でクラリーナの方を見ながら言った。オスカーはその目配せの意味は分からなかった。

「エスト達も今から変身術なの、すごいのはってなんなの？」

「そうですね、見たらわかると思いますよ、ええ」

クラリーナももったいつけて、それがなんなのか教えてはくれなかった。それにオスカーはクラリーナの元気がいつもよりない気がした。エストが怒っていたのと対比してみているからなのか、それともチャーリーの目配せがあつたからなのかはわからないが、そんな気がしたのだ。

「そうなの？ じゃあ楽しみにしとくの」

「まあ二人とも死の宣告をされないように気を付けてくれ」

オスカーはエストの機嫌が変身術の授業で直ることを期待して、教室へと向かった。

変身術の教室に入ると、すでに座っていたスリザリン生達がおスカーとエストの方に視線を集めた。しかし、エストがもう怒っていないのを見て、スリザリン生の視線はオスカーに対する可哀想な目に変わったようだった。

はたしてその視線の意味が、死の予兆をトレローニー先生に予言されたことなのか、それとも怒れるエストの相手をさせられたことなのかはオスカーにはわからなかった。

マクゴナガル先生が入ってきて、授業が始まった。少なくとも、マクゴナガル先生はオスカーに死の予兆が見えると言って、宿題を免除してくれたりしなさそうなことはその顔をみただけでも分かった。

「今日の授業は人の動物への変身を扱いますが、もちろん、あなた方が今日変身するわけではありません。変身術の一例として、それを知識に入れてもらいます」

マクゴナガル先生が板書を書きながら、どのような手段で人から動物への変身が可能なのかについて説明していった。そしてその中の一つが動物もどき、つまりアニメーガスだった。

「誰か動物もどきについて説明できる人はいますか？」

マクゴナガル先生が厳格そうな顔で教室を見回した。いつも通り隣のエストの手が挙げられる。

「ではミス・プルウエット、お願いします」

「はい、動物もどきは魔法使いや魔女が動物に変身する能力です。その特徴は変身術や魔法薬を使用した変身は杖や薬が必要なことに對して、動物もどきはそれらの必要性がないことです。それと動物もどきが変身できる動物はその人の内的要因で決定されていて、特定の動物にしか変身できないことです。そして非常に困難で珍しい能力として知られています。現に今世紀イギリス魔法省に登録された動物もどきは八人しかいません」

いつものエストの気の抜けた喋り方とは違う、理路整然とした説明が聞えた。オスカーはいつものエストの説明よりさらに力が入っている気がした。それは何かを期待しているようでもあった。

「ミス・プルウエット、完璧な説明です。スリザリンに五点与えます」マクゴナガル先生が杖を振って教室の前の方の机や椅子をどけ、スペースをつくった。

「動物もどきは杖を使わない非常に希少な能力の一つです。非常に複雑な方法の変身なので、まかり間違えば使用者は非常に残酷で不可逆な状態に陥ります。そして、動物の能力を魔法使いの思考を保ったまま使用できる強力な能力です」

マクゴナガル先生が杖を教卓に置いてみんなの方を向いた。クラ

スの皆の視線がマクゴナガル先生に集まり、ポンという音がしたと思うと、教卓の上に先生の眼鏡と同じ模様が目の周りにあるトラ猫が教卓に鎮座していた。

トラ猫は前足で顔を洗う様な仕草をしたり、教卓の上を歩き回ったがその動作の一つ一つにどこかマクゴナガル先生の面影が感じられたし、その眼からはマクゴナガル先生の厳格な雰囲気が出ていた。

またポンという音をしてトラ猫の姿が消え、マクゴナガル先生が現れた。スリザリン生たちもこれには拍手をしたし、オスカーも拍手した。

「みんな拍手をありがとう。これが魔法省が動物もどきを厳しく規制する理由です。私は猫ですが、最初の動物もどきはハヤブサに変身することができましたし、逃亡や潜入といったことにも悪用することが可能なのです」

確かに杖なしで動物に変身するというのは逃げるのに非常に役立つし、そうだとオスカーも思った。それこそハヤブサに変身した魔法使いなんで捕まえるのはほぼ不可能だろう。

「凄いの、動物もどきはほんとに数えるくらいしかいないはずなの」
オスカーはエストが古い学のことをすっかり忘れていたようだったので、少し安心した。

「では他手段での人から動物への変身へ戻りましょう。動物もどきにならなくても体の一部分を変身させるだけでも十分な効果を発揮する場合があります……」

マクゴナガル先生の真面目な授業はその後も続いた。オスカーは多少厳しい授業でも、トレローニー先生のあの暑苦しい授業より何倍もマシだと思った。

変身術の授業が終わって、オスカー達は魔法の練習の予定を立てるため、空き教室へと向かっていた。朝食の時にみんなに声をかけていたのだ。

「動物もどきになる方法ってマクゴナガル先生に聞いたなら教えてくれるのかな？」

「間違ったら大変なことになるんだろ？ 高学年にならないとダメ

「じゃないのか？」

「うーん…… 確かに…… クラーナに聞いてみようかな……」

クラーナはエストほど変身術に精通していなかったはずなので、あんまり聞いても無駄な気がオスカーはした。よくわからない反対呪文とか、闇の生物の殺し方とか、死喰い人の特徴とかなら聞かなくても教えてくれそうなものなのだが。

「忍び地図と教科書がどうのこうのはどうなったんだ？」

「あつそれはもうできてるの」

「じゃあ今日みんなに言うのか？」

「うん、これでみんなすぐに集まれるようになるはずなの」

今年の組み分け時に話をしていった忍びの地図を写して表示するとかなんとかは、もうどうにかなくなってしまったらしい。忍びの地図が増えるとフィルチの仕事量が大変なことになりそうだとオスカーは思った。

「クラーナがもう来るといいんだけど……」

エストがそう言うのを聞いて、オスカーは少し元気がなさそうだったクラーナの顔を思い浮かべた。

守護霊の呪文

オスカーとエストが空き教室につくと、すでにクラリーナ、チャーリー、レアの三人が部屋にいて、あとはトunksだけのようだった。「占い学はクソですね」

クラリーナが出し抜けにそういった。どうやらクラリーナもトレローニー先生に絡まれたようだ。

「クラリーナにはグリムが取り付いているらしいよ」

「グリムってビリウスおじさんが見たって言ってた犬のこと?」

「そうだよ、まあほんとにいるかは怪しいらしいけどね」

エストとチャーリーがグリムについて話している。グリム……

オスカーもその名前は知っている。確か墓場に現れる犬のことで、見たら死んでしまうとかそんな感じだったはずだ。

「よかったな、俺のセストラルより強そうだ」

「なんで取り憑かれてる悪霊みたいなので勝負しないといけないんですか?」

「悪霊を戦わせれば片方は生き残るんじゃないか?」

「それだと私が死んじゃうじゃないですか」

確かに、実際に見たことのあるセストラルよりも、グリムの方が強そうではあるとオスカーも思った。

「エスト、さっき言ってた地図がどうのこうのをした方がいいんじゃないか?」

「あつ! そうなの、まだトunksが来てないけど先に配っておくね」

エストはカバンから数枚の羊皮紙を取り出した。何も書かれていない真っ白な羊皮紙だ。それをみんなに配って歩いた。

「これは…… なんですか? 羊皮紙?」

レアが頭をひねりながら羊皮紙をひっくり返したり、日の光に透けさしたりしている。

「この状態だとただの羊皮紙なの、クラリーナ、なんか呪文で秘密を暴けないかためしてくれる?」

「いいんですか？ スペシァリス・レベリオ！ 化けの皮剥がれよ！
アパレシウム！ 現れよ！」

クラリーナが羊皮紙に呪文を唱えたが、羊皮紙はただの羊皮紙のまま
だった。

「うん、この状態なら何も反応しないはずなの」

「それで、この羊皮紙はなんなのエスト？ 忍び地図のコピー？」

チャーリーが手で羊皮紙を弄びながらエストに尋ねた。

「うーんとね、教科書を出してくれる？」

みんながそれぞれ違う教科書を取り出して、机の上に置く。変身術
入門、魔法史、未来の霧を晴らす、幻の動物とその生息地…… 全部
違う教科書だった。

「で、好きなページを選んでこの羊皮紙を差し込むの」

■ エストが魔法史の教科書に羊皮紙を差し込むと、羊皮紙は最初から
教科書の一部だったようにページをコピーして、教科書の一ページの
振りをしている。横からでも悪人ラブロックだかボドロックだかの
血生臭い歴史を途切れることなく読むことができている。

「教科書の一ページのふりをするってことですか？」

「まだあるの、オスカー、忍びの地図を開いてくれる？」

オスカーはポケットから忍び地図を取り出した。そう言えば、オス
カーはレアの前で忍びの地図を使ったことはあるが、ちゃんと説明し
たことは無い気がした。

「我、よからぬことをたくらむものなり」

羊皮紙を縦横無尽にインクが駆け巡り、ホグワーツ全体の地図が表
示される。すると、忍びの地図の動きに合わせてオスカー達の教科書
にも地図が表示された。

「すごい…… これって教科書が地図になっちゃったんですか？」

レアが自分の変身術入門を閉じたり、地図上で自分の名前を見つけ
たりしながら感心した風に言った。

「うーん、それは違うの、あくまで忍びの地図に合わせて教科書を変幻
自在呪文で変えてるだけなの」

「忍びの地図本体が動いてないと写しは動かないってことですか？」
「そうなの、ホムンクルスの術をかけた羊皮紙を短期間に六枚も用意できそうになかったから、取りあえずこうしてみたの」

オスカーも自分の未来の霧を晴らすに表示されている地図を手に取って見てみたが、忍びの地図と寸分違わぬものようだった。

「これで、遅くなくてもファイルチに会わずに寮に帰れるわけだ」

「一番必要なトンクスがいませんけどね」

「忍びの地図にもちよつとだけ仕掛けを加えたの」

エストはそう言うと、羽ペンをローブのポケットから取り出して、忍びの地図に何かを書き足した。するとオスカーの持っていた教科書が少し熱くなり、地図の上にエストが書き足したであろう日時が表示されている。

「わっ……ちよつと熱くなるんですね、これ」

「ほんとだね、何か書き足したらわかるわけだね」

教科書を同じように持っていた二人にも熱は確認できたようだった。

「そうなの、で、消したいときは杖を向ければそれで終わりなの」

エストが杖を振ると忍びの地図に書き足された内容はスツと消え、それに合わせてみんなの教科書の表示も消えた。

「でね、忍びの地図をオスカーかクラナが持っていればいいと思うの、二人はクイディッチチームがないから、一番来やすいと思うし」
「普通にオスカーが持っていればいいんじゃないですか？ 一番使いなれてそうですし、まあファイルチにマークされてるのはいただけませんけど」

「マークされているのは俺のせいじゃないと思うんだけどな」

オスカーは明らかにファイルチにマークされていた。どうも書類を燃やして証拠を隠滅したことがばれているらしい。

「いかがわしい計画もそこまでよ、神妙にするのね」

トンクスが教室のドアを音を立てて開けながら言った。しかし、あんまり勢いよく開けたのでドアは跳ね返って閉まってしまった。オスカーは年々トンクスのドジがひどくなっている気がした。

「なんなんですか騒がしいですね」

クラリーナがドアを杖で勢いよく開けると、風船ガムのようなピンク色の髪をしたトンクスと新入生の挨拶で見た、闇の魔術に対する防衛術の先生、エルファイアス・ドージ先生がニコニコしながら立っていた。オスカーは反射的に忍びの地図をローブに閉まった。

「ふっふっふ…… 守護霊の呪文はすっごく難しいって、エストもクラリーナも言ってたでしょ？ だから、おじいちゃん先生を連れてきたわけよ」

オスカーは最近、トンクスの髪の色が彼女の感情を大まかに表していることに気付いた。風船ガムのようなシヨッキングピンクはオスカーの推理ではそうとうなご機嫌状態だった。

どうもトンクスは一年の時のポドモア先生の先例にならって、ドージ先生を連れてきたらしい。オスカーはエストの言っていた通りに、ドージ先生がほんとにドジなら、ドジが二乗でとんでもないことになるなど思った。

「やあやあ、私はエルファイアス・ドージだ。トンクス君以外の授業はまだだろうから、自己紹介をさせて貰おう」

ドージ先生が高いぜえぜえと聞こえる声でそう言った。

「君たちのことはトンクス君やアルバスから聞いている。ウィーズリー君、ムーディ君、マツキノン君、プルウエット君、ドロホフ君だね？ トンクス君からは守護霊の呪文を教えて欲しいということと、もう一つお願いを受けている」

ドージ先生は先生から見て左側から、オスカー達を見回した。そして、どうもトンクスはまだ何か企んでいるようだ。オスカーにも分かった。シヨッキングピンクの髪にニヤニヤした顔をしている時は、注意した方がいいとオスカーには分かっていた。

「守護霊の呪文を使うには幸せな記憶があるんでしょう？ それに今日の授業でケトルバーン先生に会ってピンときたのよ」

トンクスがみんなの前にてそう言った。髪の色がピンクからどこか赤くなりつつあった。

「ケトルバーン先生が守護霊の呪文と何か関係があるんですか？ あ

の先生は魔法生物飼学の先生でしょう?」

クラリーナはピンとこないようだったが、オスカー達、WADA（魔法演劇アカデミー）に行つたメンバーはトンクスが何がしたいのかだいたい分かっていた。

トンクスはクラリーナに向けて分かっているかばかりに指を振つた。

「クラリーナが見損ねたWADAの演目はなんだったと思う?」

「はあ? 劇の演目ですか? バビティ兎ちゃんとか汚れたヤギのブツブツ君ですか?」

「センスがないわねクラリーナ、私たちが見たのは豊かな幸運の泉よ」

一瞬、空き教室には沈黙が流れた。

「はつきり言つて全く話の流れが読めないですよ、トンクス」

クラリーナは分からないとばかりに首を振つた。オスカーにはトンクスがなにをいいたくて、なにがしたいのかだいたい分かっていた。

「だから簡単な話よ、豊かな幸運の泉で最後の試練を破るのは幸せな記憶でしょ? 守護霊の呪文に必要なのも幸せの記憶じゃないの、つまりそういうことよ」

「劇に守護霊の呪文を使うってことですか? あんまり努力するべき場所じゃないと思いますけど……」

「違うわよ、守護霊の呪文を覚えて、劇も私達でやって、最後にカツコよく守護霊の呪文を決めるわけよ」

クラリーナは完全にこいつはバカだという冷めた目でトンクスを見ていた。トンクスの髪の毛はあんまりにもクラリーナの反応が悪いせいか、シヨツキングピンクから紫色に染まりつつあった。

「あの…… トンクス先輩、ホグワーツでは劇は禁止じゃないんですか? ボク、去年読んだ、改訂ホグワーツの歴史でそう書いてあったのを覚えてるんですけど……」

「さすがレイブンクロー、本を読み漁っている寮なだけなことはあるわね、レア、でも禁止したのはディペット校長で、今の校長はダンブルドア先生よ」

なぜかレイブンクローを小馬鹿にしながら、トンクスが言った。オ

スカーは未だにハツフルパフだけ、特別功労賞をもらい損ねたことをトンクスが根に持っているのではないかと思つた。トンクスの髪色はシヨツキングピンクに戻り始めていた。

「そして、このおじいちゃん先生こと、ドージ先生はダンブルドア先生の親友でもあり、ウイゼンガモットの一員でもあるすごい人よ、つまりこの先生に言ってもらえばケトルバーン先生が大講堂を全焼させたこともチャラつてことよ」

みんなの注目がドージ先生の方に集まつた。なるほど、確かにダンブルドア先生の親友で偉い立場の人から説得してもらえれば、ホグワーツで劇をすることも可能なのかもしれない。そういう点でオスカーからみても、ドージ先生はおあつらえ向きの存在の様に思えた。「トンクス、劇をするのはおもしろそうだと思うけど、エスト達だけでやるの？ 豊かな幸運の泉はそんなに登場人物は多くないけど、演出とか大道具とかエスト達だけじゃできないと思うんだけど？」

「大丈夫よ、エスト、大道具とか動物とかはすでにケトルバーン先生とハグリッドをお願いしてきたし、演出も時々、WADAで教えていたチョーリー先生からふくろう便を貰えるようにおじいちゃん先生に掛け合つてもらつてるわ」

まだ今学期の授業は始まつたばかりのはずなのだが、トンクスはどうやって短時間でこれほど手を回したのだろうか？ オスカーは色々不思議だつた。

「いいね、それ、大講堂でやらなければ肥らせ呪文を使った、アツシユワインダーだつて使えそうだし…… 三年生じゃ触らして貰えない魔法生物もケトルバーン先生やハグリッドと一緒になら……」

チャーリーは劇ではなく、魔法生物の方にしか興味がなさそうだつた。

「実は昼に私からアルバスに話をしたんだが、彼もこの話には乗り気なようだから、君たちがやりたいのなら話を進めて貰いたい。私やアルバスの学生の頃は演劇は盛んだったからね、ホグワーツで学生の活動が活発になるのは喜ばしいことだ」

なるほど、ダンブルドア先生が後ろにいるのだろう。オスカーはト

ンクスの思い付きがなぜこんなに具体性を持っているのかだいたい理解できた気がした。

「ということよ、クラリーナ、どう？ やる気になった？」

「なんで私に聞くんですか？ そんなにやりたいならやればいいと思いますけど……」

トンクスの髪色がまたショッキングピンクから赤になりつつあった。ちよつと興奮しているということだとオスカーは判定を下した。多分トンクスはクラリーナになにか言いたいことをこれから言うのだろう。

「そりや重要なのは劇の配役でしょ？ 私はクラリーナがアマータ役をやればいいと思うのよ」

「は？ はあああ!? な、なんで私がアマータなんですか？ 別にここにいるメンバーでやりたいんなら、あなたでもエストでもレアでもいいでしょう？」

クラリーナはみんなに同意を求めるように周りを見回した。オスカーは豊かな幸運の泉をWADAで見終わった時から、トンクスはこのことをずつと考えていたのだろうなと思った。

「ぷっ…… 確かにこのメンバーでアマータをやるんならクラリーナかもしれないね」

「確かにイメージはあつてると思うの」

「ボ…… ボクもこのメンバーで選ぶのならクラリーナ先輩かなと思います……」

チャリーが半笑いで同意を示し、エストとレアも同意しているようだった。クラリーナが助けを求める様にオスカーの方を見てきたが、オスカーは黙秘することにした。

「な…… なんなんですか!? もう…… 絶対おかしいでしょう！」

「はい、というわけでヘタレ騎士、ラックレス卿はオスカーがよろしくね」

「なんでだよ」

「そうですね、死喰い人の息子がマグルの騎士とか絶対におかしいでしょう！」

案の定、オスカーは自分にも火の粉が降りかかってきたと思った。クラリーナの言う通り、オスカーは自分ほどマグルの騎士に似つかわしい存在はないだろうと思った。

「じゃあ、オスカーとチャーリーでどっちの方が運が無さそうだと思うのよ？」

オスカーはそれこそなんだそれとは思った。確かにラックレス卿は不幸の騎士とか言われているが、運が無さそうだから選ばれるというのの意味が分からなかった。

「うーん、なるほど……」

「確かにそういう選び方をするならオスカーかもしれないの」

「な……なるほど……」

オスカーはメンバー全員から運が無さそうだと思われることにちよつとショックを受けた。魔法薬の教科書に書いてあった幸運薬とかいう、胡散臭そうな薬が頭の中に浮かび始めた。

「まあほんとはオスカーとクラリーナはクイディッチチームに入っていないしね、メインの配役は二人の方がいいと思うのよ」

「最初からそう言えばいいじゃないですか！」

なぜ、運がないと全員から思われていることを気づかさなければならなかったのか、オスカーはやっぱり、トンクスの口を永久粘着呪文でくつつけた方がいいと思いはじめていた。

「ほかの役はどうするの？ トンクス？」

「そうね、私としてはアシャをレアが、アルシーダがエストかなと思つてたんだけど、どうかしら？」

「なんで言い始めたあなたがなんの役もやらないんですか？」

クラリーナは配役を押し付けられて、ちよつと顔を赤くしながらトンクスに聞いた。オスカーも言い始めたトンクスが何もやらないというのはあまり納得できなかった。

「うーんとね、私は七変化だから誰の代役でもできると思うのよ、だから私以外の人に役を振り分けておいて、その人が練習にこれなくなったら私が代役を務めようと思つてただけで、だめかしら？」

オスカーはトンクスらしからぬ、知的な発言だと思つた。それにこ

の劇に関してトンクスはそうとう考えていたように思えた。トンクスとドージ先生のドジ×ドジで知的になってしまったのだろうか？

オスカーはちよつと二人に失礼なことが頭の中に浮かんだ。

「エストはそれでいいと思うの、それなら無理なく練習できそうだし」「ボクも理にかなつていてと思います」

「二人がいいんならそれで決まりなんじゃない？ 僕は大道具とイモムシの準備をしようかな？」

オスカーはクラリーナと顔を見合わせた。二人とも互いが微妙な顔をしているのに気付いた。トンクスの手のひらで踊らされたような気分だったからだ。

「おや、決まったのかな？ できれば慎重に配役を決めた方がいいと私は思う。前回、大講堂が炎上した理由はアッシュワインダーだけではなく、三人の魔女役の生徒達がラックレス卿を巡って、劇の最中に決闘を始めたことだったからね」

オスカーはあんまりエストとクラリーナが決闘しているのは想像しなくなかった。少なくとも同学年で止められる人がいない気がしたからだ。オスカーが止めに入っても五体満足で帰ってこれる気がしなかった。

「やったわ、これで決まりね、練習する場所はおじいちゃん先生かケトルバーン先生に取つて貰えるし、あとはダンブルドア先生が理事会に掛け合つてOKを貰えれば完璧よ」

「分かりました。やればいんでしょう。でも、いったいいつ上演するのを目標にするんですか？」

クラリーナが諦めたという顔でトンクスに聞いた。確かに、守護霊の呪文を覚えるのは相当難しそうだし、それに並行して劇の練習をするというのはかなり時間がかかるのではないだろうか？ それに配役のあるエストはただでさえクイディッチチームに入っていて、授業を全部とっているのだ。

「期末テストの勉強が始まる前の春くらいを目標にすればいいと思うんだけど、どうかしら？ あの時期ならクイディッチの試合もないし、外でやつても寒くないと思うのよ」

「まあいいんじゃないか？　どれくらい守護霊の呪文を覚えるのが難しいかわからないしな」

オスカーもそれなら、みんなに対する負担が軽くなるのではないかと思った。

「あつレアはごめんね？　ほんとに魔法の練習をするだけだったはずよね？」

「大丈夫です。劇をするのは面白そうですし、ボクはクイディッチをやっていますから、魔法の練習をする時間はあると思います」

「ありがとうねレア」

トンクスとレア、エストは期待を込めた楽しそうな顔、チャーリーはぶつぶつなんの魔法生物をだせるのか教科書をめくって楽しそうな顔、クラーナはどこかしてやられたという顔だった。オスカーはみんなでやることがあるのというのは楽しみだったが、トンクスの発案だったので、最後に変なオチがついてしまわないか、ちよつとだけ心配だった。

ファイア・ウイスキー

トunksがオスカー達に何も言わずに色々勝手に決定してから、数週間が経った。

オスカー達は当初の予定通りにレアに一年生の時練習した呪文を教えたり、チャリーリーの無言呪文の練習に付き合いながら、劇の準備を進めたり、守護霊の呪文についてドージ先生に聞いたりした。

「もつと苦労するのかもしれないけど、普通に全部マスターできたじゃないですか」

エストが変身術で出現させた、フェレットやアグマといった小動物をレアが見事に失神させるのを見ながら、クラーナが言った。

「そうですね…… 最近何か調子がいいんです。杖が言うことを聞いてくれるっていうのか……」

レアが自分の杖を少し不思議そうに見ながらそう言った。オスカーは灰色のレイディが杖について言っていたことを思い出した。

杖を信じないと魔法を使うことができないという話だ。

「レアの杖の素材ってなんなの？」

「素材ですか？ ボクの杖の素材は黒クルミだったはずですよ」

エストはレアからの返答を聞くと、何かを思い出すような顔をして、その後目を見開いて笑顔になった。オスカーはその顔が何か考えたことが現実であった時にする顔だと知っていた。

「黒クルミの杖はね、心に迷いがあるとあんまり力を発揮しないって、オリバンダーさんが言ってたから、レアの心の迷いが無くなったから、魔法を使えるようになったんじゃないかな？」

「心の迷い？ ですか……」

レアは少し目をつぶり、何か考え込むような顔をした。オスカーにはレアが自分自身に迷いがないか考え直しているように見えた。

「そうなの、最悪の場合は杖の持ち主を変えないと使えなくなっちゃうって言ってたけど、レアは杖に認められたんじゃないかな」

「杖の持ち主…… 認められた……」

レアはもう一度自分の杖を見つめ直し、強く握りしめた。

オスカーはエストとレアのやり取りを見て、もしかするとレアにかかった武装解除呪文と自信を少しレアが取り戻したことが、黒クルミの杖に影響しているのではないかと思った。

「というか、なんでエストはそんなに杖の素材に詳しいんですか？」

オリバンダーさんは私が杖を買った時も喋りたがりでしたけど、他の人の杖の話なんてしないんじゃないですか？」

「うーんとね、エストが杖を買った時は半日くらいかかったの、それであんまり時間がかかるから、試す杖の素材について色々教えて貰ったの」

オスカーは組み分けの時といい、エストの何かを判断するときは何にでも時間がかかってしまうのだろうかとちよつとだけ考えた。

「半日って、あほみたいいな時間ですね……」

オスカーもあの不気味なオリバンダー老人と半日一緒に過ごすのはちよつとごめんこうむりたかった。

「色々教えてもらったし、ちゃんと杖も見つかったから楽しかったの、そうだ、クラーナの杖がなんの素材なのかも聞いていい？」

エストは少しオスカーに視線を送りながらクラーナに聞いた。オスカーもクラーナの杖の素材は気になった。オスカーはエスト、自分、レアの杖の素材しか知らなかったが、オリバンダー老人の言う杖と持ち主の関連性の方が占い学よりも信頼できそうだと思ったからだ。

「私の杖ですか？ 私の杖はイトスギですよ」

クラーナは自信満々に人よりも明らかに大きな杖を突き出してそう言った。

それを聞いたエストの顔はさっきのレアの杖について聞いた時よりも笑顔で、正に考えていたことが当たったという顔だった。

「イトスギの杖は英雄になる人が持つ杖って言ったの！ すごく勇気があつて、自分やほかの人の心に向き合える人、人のために自分を捨てられるような人が持つ杖なんだって」

オスカーもそれを聞いて、クラーナにピッタリの杖だと思った。去年の叫びの屋敷や必要の部屋での出来事が頭の中に浮かんだからだ。

「自分の心に向き合うですか……」

しかし、クラリーナの顔色は映えなかった。クラリーナの目線はさっきのエストと同じように一瞬だけオスカーの方を向いた後、話相手のエストではなく、どこかなにか違うものを見つめているようだった。

オスカーは考えていたクラリーナの反応と違ったと思った。クラリーナなら、自信満々の顔で未来の闇払いに相応しい杖ですネとか言いそうだと思ったのだ。

「イチャイチャしてるとこ悪いけど、おじいちゃん先生から理事会の話聞いてきたわよ」

「エストと話してただけですよ」

トンクスがドアを開けるなり、クラリーナをからかっていた。

「へえ？　だれと話してたら『だけ』じゃなくなるのかしら？」

「いいから理事会の話がどうなったか言えればいいでしょう」

「チャーリー、どうだったんだ？」

オスカーは話が進みそうにないので、トンクスの後ろにいたチャーリーに聞いた。ダンブルドア先生がホグワーツの理事会にかけあつた内容の判断が今日伝えられるはずだったのだ。トンクスとチャーリーはドージ先生にその結果がどうであったかを聞きに行っていたのだ。

「オツケーらしいよ、理事会は反対は一票だけで他はみんな賛成なんだって」

「これで大手を振って練習できるってことよ、さあクライマックスは情熱的なラブシーンにしないとね」

「あたまわいてるんですか？　教養的な内容にしないと、せつかく許可されたのにまた禁止されてしまうでしょう」

トンクスの髪色がピンク色だったので、正直なところ理事会の結果がどうであったのかチャーリーに聞かなくてもオスカーは分かっていた気がした。

「じゃあこれから劇の練習をし始めるんですか？」

「そうよ、レア、頭の固いクラリーナとオスカーにちゃんとダメ出しするのよっ。」

「顔の形がすぐ変わるトunksの脳みそはポリジューズ薬よりやわらかいですけどね」

レアもトunksとクラリーナが騒ぎ始めると話が終わらないことに最近気づいたのか、話題を振ってくれているようだった。

「台本とかは昔のがあるんだよね？」

「そうよ、ビーリー先生がホグワーツでやってたころの台本ができたのよ」

「あの台本なんか焦げてましたけどね」

ホグワーツの歴史ある台本がどこからともなく見つかったらしい。オスカーもその台本を読んだが、確かにところどころ焦げ跡があったて、焦げ臭い匂いすらするようだった。

「台本には大道具の演出はダンブルドア先生がやったって書いてあったの、きつとすごい演出だったはずなの」

「すごい演出過ぎて大講堂が大炎上でしたけどね」

どうもクラリーナはよっほど劇をやりたくないらしい。オスカーはいちいちクラリーナが辛らつだと思った。

「ちよつとクラリーナはメインヒロインなんだからもつと乗り気になりなさいよ」

「はあ？ ラブシーンがどうかあほなことばかり言うからでしょう」

「豊かな幸運の泉でアマータをやりたい女の子なんて魔法界にどんだけいると思ってるのよ」

「そ……それはそうかもしれないけど、トunksからは悪意がひしひしと感じられるんですよ」

確かにトunksがいつもにましてクラリーナにからみ続けているのは、他の人から見ても一目瞭然だった。

「オスカーはやる気満々なのに、可哀想よ？」

「なんですかそれ！ オスカーも黙ってないでなんか言ってくださいよー！」

それに最近みんなが止めようとしても止まらなくなっていて、最後に流れ弾が飛んでくるとオスカーは思っていた。

「トunksにいちいち反応するのは、まね妖怪と正面から戦うようなものだろ」

「いいねオスカーそれ、相手がトunksだとそれっぽく聞こえるよ」
なぜかチャーリーにはバカうけした。オスカーはチャーリーのつつこみが一番鋭いのではないかという考えを最近するようになっていた。

「ほらオスカーは否定してないじゃない？」

「相手にされてないだけなの」

「まね妖怪、トunks先輩……なるほど……」

「あほですねトunks」

トunksが集中砲火を浴びていたので、オスカーはなんとか鎮火させることができた気がした。最近のオスカーの対トunks・クラーナの戦績を考えると上々の結果だった。

「ホグズミード休暇はどこいくんだ？ もうハロウインだろ？」

「先輩方はホグズミードに行けるんですね、いいなあ」

「そりやマダム・パディフェットの店……」

「ホグズ・ヘッドの方がまだましでしょう」

オスカー達の話は劇から直近に迫っているホグズミードへいける休暇へと変わっていった。忍びの地図でいくつも学校の外にいける道を知ってはいたが、オスカー達は結局去年色々あって秘密の通路を使うことはなかったし、純粋に学校の外へいくことはみんな楽しみにしていた。

ハロウインの朝、オスカーとエストはほかの三人と玄関ホールで待ち合わせして、ホグズミードへと向かった。オスカーはフィルチがやっている許可証の検査で、他の人の三倍も時間を取られた。フィルチはなんとかして、オスカーに罰則を与えたいようだった。

「ええ？ こんど夜中に城を出歩いたり、廊下や肖像画を爆破してみろ、先生方が来られる前にお前を鎖で宙づりにしてやるぞ」

オスカーは肩をすくめるしかなかった。その中でやったのは夜中に出歩いたことくらいだったからだ。フィルチの中でオスカーは狡

猾に罰則をすり抜けている生徒に見えているらしい。

「未来の死喰い人は検査も厳重みたいですな」

「みんなの悪事が全部俺のせいになってる気がするんだけどな」

「気のせいよオスカー、さあどこから回るの？」

ホグズミードにはいくつか生徒に人気の場所があった。英国一荒々しいゴーストが住む叫びの館、ハニーデュークスのお菓子の店、ゾンコの悪戯専門店、バタービールが飲める三本の筈といったところだ。

「ねえ先に叫びの館を見に行かない？ 多分あの屋敷を中から見たことがある生徒はエスト達だけなの」

「確かに、ゴーストの正体を知っている僕たちが見に行くのも面白いかもね」

オスカー達はエストの先導にしたがって、叫びの屋敷に向かった。叫びの屋敷は村外れの小高い丘の上に建っていて、すべての窓やドアは打ち付けられてふさがれており、ぼうぼうに生える草と湿っぽい地面が合わさって確かに不気味ではあった。叫びの屋敷の傍にはオスカー達と同じような三年生たちが遠目から叫びの屋敷を眺めていた。「丘の上だからトンネルでいけたんですね」

「あのトンネルが途中からずつと上りだったのはそういうことだったのか」

オスカー達は不気味そうにして一定の距離から近づかない生徒達に一べつもくべつに叫びの屋敷のすぐそばまで近寄った。確かにあげようとしても打ち付けられた木材はびくともしなかつたし、それ以上に入れないように何か魔法がかかっているようだった。

「パパはこの屋敷を回っただけで腰を抜かしたらしいけど、ゴーストの正体がレアだと思うとちよつと悲しくなってくるわね」

「テッドさんの時は違うものだと思うけどね、明らかに爪や牙の跡があったから」

「そうですよトンクス、腰を抜かさなないように気をつけたほうがいいですよ」

オスカーはテッドさんのところに話題になったものの正体も、少なく

ともゴーストではない気がした。学生なのか先生なのかは分からないが、何か生徒達にみせられないような状態になった誰かをここに閉じ込めていたような気がしたのだ。正直、人が変身して牙や爪を持つような存在などオスカーは一つくらいしか思いつかなかったので、想像するのをやめた。

「牙や爪があつて、人がなつちやう？ うーん人狼がホグワーツに入れるとは思えないし…… 変身術で戻れなくなつちやうか？」
「もういないみたいですから、あんまり考えてもしかたないと思ひますけどね」

「そうよ、正直ママとパパの時代とかどうでもいいわ、私たちは腰を抜かすこともないしね」

オスカーはこういう時にエストの思考が止まらなくなるのを知っていたし、それを止めてくれる二人がいるのはありがたかった。暗い話をし続けてもしかたないと思つたのだ。

「テッドさんはファイア・ウイスキーを飲んでから行つたつて言つたよな、あれつてそんなにうまいのか？」

「僕もファイア・ウイスキーは気になるよ、パパとママはあれをよつぽどのがあつた時だけ飲むようにしてるからね」

ドロホフ邸にも何本かオグデンのファイア・ウイスキーがあることをオスカーは知つていた。ペンスも重要な客が来る時だけそれをお出ししますと言つていたはずだ。オスカーは魔法界の大人たちが口々に言うファイア・ウイスキーなるものがどのようなものなのか気になつていた。

「ファイア・ウイスキーは成人になるまで飲めないつてミュリエルおばさんが言つてたの、お子様には分からないとかなんとか」

「そうですね、大人たちはあれを信仰してますよね」

「ファイア・ウイスキーを飲めば大人の階段を駆け上がれるつてことね」

トunksはそう言うつと鼻をつまんで、トunks先生を優し気にしたような魔女に変身した。ローブのサイズが合つていなくてちぐはぐに見えるが、大人の魔女の様に見える。

「エスト、ローブをどうにかしてくれない?」

「いいけど、大人に変身してどうするの?」

エストが杖を一振りすると変身したトンクスの体に合わせてローブのサイズが変わった。今のトンクスとトンクス先生を比べればみんな姉妹だと思っただろう。

「三本の箒でファイア・ウイスキーを注文する気ですか? それだとトンクスしか飲めない気がしますけど……」

「ホグズミードにはもう一つバーがあるでしょ?」

トンクスは悪戯っぽく笑った。オスカーはいつも知っているトンクスの顔と違うのにトンクスの笑い顔だとわかるのは不思議だと思っただ。

「ホグズ・ヘッドのことだよな? たしかに、ハグリッドもあそこで昔キメラの卵を買ったって言ってたし、あそこなら僕らがファイア・ウイスキーを飲んででも大丈夫かもしれない」

オスカーはキメラの卵が売られているような場所に入るのは果たして大丈夫なのかと思った。ノクターン横丁の怪しい店並みや脛に傷のありそうな人たちが頭の中に浮かんだのだ。

「念のために大人が買ったことにすれば大丈夫だと思うのよ」

「今のトンクスなら、生徒を引率してる先生みたいに見えるから大丈夫かもしれないの」

「ホグズ・ヘッドに生徒を連れてく先生はだいぶヤバイですけどね」
オスカーはホグズミードに来たのはこれが最初なのに、そんなに冒險して大丈夫かと思ったが、ファイア・ウイスキーには興味があった。「トンクス、先に金を集めたい方がいいと思うぞ、あれけっこうな値段するだろうからな」

「オスカーお坊ちゃまにそういわせるなんてよっぽどね」

「そうじゃなきゃ、うちで家宝みたいな扱いになつてないよ」

オスカー達はトンクスを先頭にして、ホグズ・ヘッドへと向かった。ホグズ・ヘッドは大通りから離れた横道、その突き当りに建っていた。

ドアの上にボロボロの看板がかかっている。イノシシの首が切ら

れて、その首の血で白い布が赤く染まっている絵だ。オスカーはホッグズ・ヘッドがバーというよりは宿に見えた。

「じゃ、いくわよ」

トンクスが楽しそうな声で言い、先頭に立って入っていった。オスカーはトンクスの髪の一ふさが赤くなっていることに気付いた。

ホッグズ・ヘッドのバーは非常にみすぼらしく、汚く、不衛生に見えた。ペンスはオスカーがここに行ったことを知ったらすぐにでも風呂に入れと言うだろう。それに何か家畜のような臭い、ヤギのような臭いがした。

窓はほこりと煙か何かで黒く染まっていて、外の光をほとんど取り込んでいなかったし、床は土だと一瞬思ったが、実際には石畳の上でありえないほどのほこりが積もっているようだった。

オスカーはあたりを見回したが、あやしい人物ばかりだった。ほとんどの人間がマスクかフードのようなもので顔を隠していたし、血にしか見えない怪しい液体をグラスに入れて飲んでいる人、生肉にしか見えないものをむさぼっている人、人間にはありえない勢いで羽ペンを動かしている人などにかく話しかけるのをためらわざるを得ない人物ばかりなのだ。オスカーはクラリーナのおじさんでさえここでは目立たないのではと思った。

オスカー達はテーブルを確保したあと、バーテンに注文をしに行った。

「ファイア・ウイスキーをグラスで五本よ」

「二ガリオン、三シツクルだ」

トンクスがさつきみんなからかき集めたお金をテーブルにだそうとして、そのままぶちまけたのでバーテンは非常に嫌そうな顔をした。

バーテンは長い白髪にあごひげを伸ばした人物だった。オスカーはその人物を見た瞬間にいつかと同じ感覚を覚えた。ミュリエルおばさん、マルフォイ氏の妻らしき人、クラリーナのおじさん…… オスカーはその人が誰か知っている人に似ていると思ったのだ。

バーテンがファイア・ウイスキーを五本のグラスになみなみと注ぐ

間、オスカーは誰と似ているのか考えていたが、結局誰なのか思い出すことができなかった。

五人はそれぞれグラスを持って、テーブルに戻ることにした。オスカー達はトunksに運ばせるとファイア・ウイスキーが全て床に飲まれてしまう気がしたのだ。バーテンは明らかに子供なオスカー達がグラスを持つていくのに嫌そうな顔をしたが、何も言わなかった。

オスカー達は埃っぽい椅子に座って、それぞれグラスを持った。「えーと、じゃあ、豊かな幸運の泉の成功を祈って、乾杯よ」

トunksがそう言ったのに合わせて、オスカー達は互いに乾杯した。

オスカーはファイア・ウイスキーを初めて飲んだが、確かに大人たちが重要に思う飲み物なのは間違いないと思った。飲んだ瞬間はのどが焼けるようだったが、のどを通り過ぎ、胃のあたりまで入ると、何か体に火が付くような感覚があった。

「すごいね、これ、なんか体が燃えているみたい」

「そうなの、ファイア・ウイスキーって名前の通りなの」

「ワオ！　って感じだわ、大人はズルいわね」

「確かにこれなら言われるだけのことはあるな」

四人は口々にファイア・ウイスキーの感想を言い合ったが、クラリーナは黙ったままだったので、オスカーがクラリーナの方を見ると、グラスのファイア・ウイスキーは四分の一も減っていないのに、クラリーナの顔はすでに真っ赤になっていた。

「クラリーナ、大丈夫なのか？」

「だいじょうぶってなにかだいじょうぶなんですか？　おすカー？」

オスカーは全く大丈夫ではないことがそれだけでわかった。

「これパパが外で脱ぎだして、ママにボコボコにされた時と同じくらい出来上がってる気がするわ」

「クラリーナ、大丈夫なの？」

「なにができてあがっているんですか？　えすともなにかだいじょうぶなんですか？」

「ダメだねこれ」

チャーリーが両手を挙げて首を振った。オスカーもダメだなと思っただ。

「今なら、クラリーナに劇で言わせられないような恥ずかしいセリフもやってもらえそうね」

「げきですか？　そうだ！　なんでわたしがあまーたなんですか？　とんくす？」

「なんでって一番似合いそうだったからよ、オスカーを励ましたり、一番芯が強そうでしょ？　意気地なしくて一番いいそうじゃない」

「そんなことわないです、わたしより、あしややくのれあや、あるしーだやくのえすとのほうがあまーたにふさわしいです」

クラリーナはそう言うのと、ファイア・ウイスキーを半分ほど飲み干した。オスカーが周りを見るとバーにいる人間がオスカーたちの方に聞き耳を立てている気がした。血のグラスを飲んでいる人も、生肉をほおぼる人も、羽ペンの人もみんな動きをやめているようだったからだ。バーテンも汚いぞうきんのようなものでグラスを拭くのをやめているようだった。

「エストもクラリーナはアマータにあつてると思うの」

「あつてないです！　れあはまじめにじぶんとむきあつてますし、えすともいろいろあるのにあかるくてゆうしゆうです、ふたりともまっきのんやぶるうえつとのなにふさわしいです」

クラリーナの顔はさつきより赤くなっているようだった。オスカーはこれ以上クラリーナに飲ませないほうがいい気がした。

「僕はクラリーナも十分に優秀だと思うけどね、そうじゃないとグリフィンドールはみんな劣等生になっちゃうよ」

「俺もそう思うし、ちよつと飲むのやめたほうがいいんじゃないか？

クラリーナ？」

「だめです！　わたしはだめです！　いくじがないんです！　おすかーみたいにはなれないし、むーでいのなまえにもあまーたにもふさわしくありません！」

クラリーナはオスカーが止めたにも関わらず、また四分の一ほどファイア・ウイスキーを飲んだ。クラリーナの眼はぼやっとしていて、完全

に泥酔しているように見えた。

「ここはアレね、オスカー、キスでクラリーナの酔いをさますのよ」

「あほか、とつととグラスをとりあげたほうがいいだろ」

「なんですか？ とんくす、きすしてほしいんですか？」

クラリーナはなぜかトンクスの方に近づいていって、ほつぺたにキスしようとした。

「ちよつと方向がちがうわよ！ ほら、オスカーの方にいきなさいよ！ ちよ、ちよつと！」

クラリーナはトンクスのほつぺたにキスを敢行した。し終わったクラリーナがオスカーの方を見たので、オスカーは嫌な予感がした。

クラリーナはグラスに残っていたファイア・ウイスキーを全て飲み干した。クラリーナの顔色は赤ではなくもはや青くなっている気がした。

「おすカー？ なんであのとときだきついたんですか？ なんでですか？」

「あのととき？ ああ、あれはちよつとクラリーナをちよつとびつくりさせようと思つて……」

クラリーナがオスカーの方に距離を詰めてきたので、オスカーは後ずさったが残念ながらホツグズ・ヘッドは狭かった。

「ふあいあ・ういすきーをのんだのとおなじくらいあつたかくなりました。でもすぐくびつくりしました。だからおかえしです」

「おい、クラリーナ？」

クラリーナはオスカーに抱き着いてきた。オスカーはペパーミントのような香りとファイア・ウイスキーの酒の匂いをかいだ。しかし、クラリーナはなぜか風邪でもひいたようにブルブル震えているようだった。

「なんかきもちわるくなってきました。やばいです。ああ……」

「おい、クラリーナ、ちよつと！ やめろ！」

二つの匂いとは違う匂いがしたのがオスカーにはわかった。オスカーは二度とファイア・ウイスキーをクラリーナに飲ませないことを心に決めた。

一人目の魔女

ホッグズ・ヘッドでの一件から数日経ったが、オスカーはクラリーナにどう接したらいいのか分からなかった。そもそも話題にだすと二人とも不幸になる気がしたのだ。誰かに相談しようにも、ファイア・ウイスキーを飲んだことを大人に言うことはできなかったし、そもそも女の子にアレをかけられた経験がある人がどれくらいいると云うのだろうか？ オスカーはちよつと悩んだあと考えるのをやめた。「オスカーくらいになると女の子の汚いところでも受け止めてくれるってことよ」

オスカーとクラリーナは無言で黙らせ呪文をトunksに唱えた。トunksはしばらくウーウー言っていたが、そのうち静かになった。

オスカーはレアとチャーリーの無言呪文のいい手本になったと思っただ。

レアはすでにオスカーたちが一年生で覚えた魔法をすべてマスターして、無言呪文の練習を始めていた。チャーリーの方はクイディッチの練習もあり、無言呪文には結構苦勞しているようだった。で、二人の上達度はオスカーの見た目では同じくらいに見えた。

レアとチャーリーはクラリーナの張った青い保護呪文の泡の中で向かい合っていた。お互いに無言で武装解除を唱える練習をしているところだった。

レアが集中した顔もちで杖を振ると紅色の光線がチャーリーの胸にあたり、チャーリーの杖が弧を描いてレアの方へ飛んで行った。しかしレアはできたことが信じられないのか飛んできた杖に反応することができず、顔に当たってしまった。

「やったの！チャーリーは追い抜かれちゃったね」

エストが呼び寄せ呪文で杖を回収しながら二人に声をかけた。チャーリーはちよつとだけ悔しそうな顔で、レアは杖が当たった額を抑えながらも嬉しそうだった。トunksはまだウーウー言っていた。オスカーはちよつと可哀そうになったので呪文を解くことにした。

「夏休み前は浮遊呪文くらいしかできなかったのに……先輩方のお

かげです！」

レアの額はちよつと赤かったが満面の笑みだった。オスカーはあの朝、浮遊呪文と一緒に練習したときのレアの顔や声と比べて、自信が感じられると思った。

「これでレイブンクローの連中がレアに何か言うようなことはないでしょう」

「レアは俺よりよっぽど自分の寮の人間と仲がいいだろ」

オスカーが廊下でレアと会う時は、常に誰かレイブンクローの学生と一緒にだったし、スリザリンの寮生とはちよつと喋るくらいでほとんど一緒にいないオスカーと比べれば、よっぽど受け入れられているとオスカーは思っていた。

「うーん抜かされちゃったなあ…… 粉々呪文とかは上手いことできるんだけど……」

「まあ他の呪文ができるんなら、だいたいコツはつかめてるだろ、俺らの時もどれかできるようになったら、他の呪文もできるようになつたしな」

「そうね、これならクリスマス前に劇の練習と守護霊の呪文にとりかかれそうね」

オスカー達はチャーリーとレアの進み具合に合わせて、守護霊の呪文を練習してはおらず、先に劇に必要な物品だとか、セリフの書き起こしだとかの準備をしていた。

「やつぱり難しいのかな？ ドーヅ先生もあれがつかえるんなら、ふくろう試験で特別点が貰えるって言ってたし」

「そりゃそうでしょう、そもそもホグワーツの指導要領に乗ってるか怪しいレベルの呪文ですから」

「守護霊の呪文を無言で使えるようになったら、寮のみんなに自慢できるか……」

守護霊の呪文には幸せな記憶が必要だと聞いていたので、今のいい雰囲気なら意外と簡単に覚えることができるのではないかとオスカーは考えた。

「ねえ、いつかいハグリッドのところに行かない？ 劇で使えるような魔法生物を見せてくれるって言ってたんだ」

チャーリーは少し上気した顔でそう言った。オスカーはチャーリーが武装解除されたのは、魔法生物が気になって集中しなかったせいではないかと思った。

「たしかに最近、ハグリッドの小屋に行っていないな」

「ボクも今年はあるまりハグリッドに会いに行けてないです」

「そうですね、そろそろ違法な生き物を飼っていないか見に行かないとドラゴンやキメラが禁じられた森に出現しかねないです」

そう言えば、レアはクラーナと同じようにハグリッドに引率されて、ダイアゴン横丁に買い物に行っていたことをオスカーは思い出した。オスカーはみんなで顔を出した方がハグリッドは喜ぶだろうと思った。

オスカー達は空き教室を片付けて、六人で校庭の外れにあるハグリッドの小屋へと向かった。

「ハグリッドいる？ 僕たちだけど」

「おお、はいっちょよくれ！ ちよつと散らかつてるがな」

チャーリーがドアを叩くと小屋の中から、ハグリッドの野太い声とフアングがうれし気に吠えるのが聞えた。

オスカーはいつもとハグリッドの小屋の様子が変わっている気がした。ハグリッドの小屋の暖炉はあんな形をしていただろうか？ フアングに飛び掛かれながらそう思った。

「二緒にいるのはレアか？ 久しぶりだが大丈夫だったんか？ ダンブルドア先生が色々あったちゆうてたが」

「うん、ボクは大丈夫だよ、ハグリッド」

エストは何やら暖炉の方へと歩いて行った。オスカーはフアングに顔をなめられ続けていてそれどころではなかった。

「ハグリッド…… これ…… もしかして？ すごい！ 誰が作ったの？ フリットウィック先生？ それとも、もしかしてダンブルドア先生なの!!？」

エストはなにやら暖炉の火を見て大興奮しているようだった。オスカー以外の四人も暖炉の方へ近づいていった。オスカーは中々ファンングを引き離せなかった。どうもファンングは久しぶりにオスカーに会ってうれしいようだった。

「おお、これはダンブルドア先生が創ったんだ。しかし、よく分かったな、これがちよいつと特別な火だって」

「特別な火ですか？ 悪霊の火みたいな魔法がかかった火なんですか？」

オスカーはクラリーナが言った火の名前にいい思い出はなかったが、暖炉の中で燃え続けている火は、オスカーの知っている悪霊の火とは比べ物にならないほど、暖かでどこか神々しさまで感じられる気がした。

「なんの火なんですか？ エスト先輩？」

「そうよ、ハグリッドもエストももったいぶらないで教えてくれればいいのに」

「ほんとにこれがダンブルドア先生が作ったんなら、多分、グブレイシアングブレイシアンの火なの」

オスカーはその火の名前を聞いたことはなかった。しかし、レアは何かピンと来たようだった。

「グブレイシアングブレイシアンの火って、グブレイシアングブレイシアンの火の枝のことですか？」

絶対に消えない？」

「そうなの、創れる魔法使いなんてもうほとんどいないはずなの」

今度はチャーリーチャーリーがそれを聞いて、何かに気付いたようだった。オスカーは魔法生物関連なのは間違いないだろうと思った。

「もしかして、これでアッシュウィンダーアッシュウィンダーを呼び出す気なの、ハグリッド？」

「おお、さすがに良く分かつとるな、アッシュウィンダーアッシュウィンダーは魔法の火をほうっておくとうまれてくるわけだから、この火があればいくらでも捕まえることができるっちゆうわけだ」

「じゃあ、劇に使えるような生き物ってアッシュウィンダーアッシュウィンダーなんだね」

オスカーの脳裏にところどころ焦げた昔の台本が浮かんだ。前回

ホグワーツの劇が禁止になった原因はアッシュワインダーが主だったはずだが、結局アッシュワインダーを使うのだろうか？　しかし、オスカーはダンブルドア先生が一枚噛んでいるのなら、そんなに心配しなくてもいい気がした。

「結局アッシュワインダーを使うの？　ハグリッド？　私たちの劇は外でやる予定だから、大講堂みたいに燃えないとは思うけど大丈夫なの？」

さすがのトンクスも大炎上は不味いと思っっているようでオスカーは安心した。

「ダンブルドア先生がじきじきに凍結呪文をと覚えてくれるつちゆうことだから、心配せんでもええ、この小屋にもおんなじ呪文をかけてもらつちよるから大丈夫だ」

「なら大丈夫なんじゃないですか？　まあ前回の劇もダンブルドア先生がいたのに燃えちやったらしいですけど」

クラーナがちよつとだけ幸先の悪そうなことを言った。しかし、それは事実だった。

「ちよつとクラーナ、そんな不吉なことばかり言っていると口から汚いも……」

「ぶっ殺しますよ」

トンクスは懲りずにホッグズ・ヘッドでの一件でクラーナをいじりたいようだった。オスカーはファンングにローブをよだれまみれにされていて、その一件をちよつと思いついていたところだったのでやめて欲しかった。

「ねえ、そう言えばあの時なんでクラーナはオスカーに抱き着いたの？」

エストが首を傾けてそういった。オスカーはさらにファンングのよだれまみれになることを選んだ。これ以上、あの出来事の話に関わりたくなかったからだ。チャーリーがオスカーの方を気の毒そうに見ていた。

「ええ！　そ……　そんなの覚えてないですよ！　トンクスがオスカーについてなんか言ったのでそれでオスカーの方に行っただけで

す」

「そりゃあ、エストが寝てた朝に二人は熱烈な……」

「グブレイシアン火の火で永遠にその口を焼き続けてやりますよ！」

「ちよつと、全然わかんないの」

三人が大騒ぎを始めてしまい、ハグリッドがそれを楽しそうに見ていた。

「そうだ、誰か薪を取ってきてくれないか？ おまえさんたちのお茶やケーキを出すにはちよつと火がたりねえ」

「僕がいくよ」

「あつ、ボクも行きます」

オスカーはフアングと戯れていた結果、小屋から出る切符を逃してしまった。チャーリーとレアの二人が薪をとりに行っても、三人は相変わらず騒ぎ続けていた。

「しかし、おまえさんたちとレアが仲良くなって、俺は安心したぞ」

ハグリッドがオスカーの横でロツクケーキを取り出しながら言った。オスカーはあまりロツクケーキが得意ではなかった。火であぶらないと歯の方がやられてしまうからだ。

「安心したって、ハグリッド、何が？」

オスカーはこの短時間でフアングの腹をなでることでよだれまみれにならない術を身に着けていた。

「レアは去年しよつちゆうここに来とったからな、寮にもなじめんと言っとった」

「ああ、でも今は寮の友達もいるみたいだし大丈夫だと思うけど」

オスカーはレアがここによくきていた理由はなんとなくわかった気がした。ハグリッドは動物にも人間にもやさしいからだ。

「ダンブルドア先生もレアのことは心配しとったし、ダイアゴン横丁でおまえさんたちと会った時も、おまえさんたちならレアと仲良くになれるかと思っとったんだ」

トンクスがオスカーの顔に化けながら他の二人をからかっているのを横目で見ながら、オスカーはダイアゴン横丁で初めて出会った時のレアを思い出した。思えばあの時から、レアが魔力をあまりコント

ロールできず、木の葉やごみを浮かべていた気がした。

それに、レアの出自を考えれば、エストやクラーナとなら仲良くなれそうだとハグリッドが考えるのは無理のないことだと思った。

・「あの時はなんかタイミングが悪かったと言うか……俺の名前がなければあんなことにならなかつたと思うけど」

「おまえさんのことを責めてるわけじゃねえぞ、オスカー、おまえさんたちはよくやっとする。少なくとも俺が見てきた同じ年の魔法使いや、魔女の中もおまえさんたちは一番だし、ダンブルドア先生だって、おまえさんや、おまえさんたちのことはこれでもかつちゅうくらい褒めてるんだ」

やっぱりオスカーはレアがハグリッドの小屋に来ていたのは間違っていないし、正解だったと思った。この小屋はグブレイシアンの火がなくても暖かいのだ。

「だから俺はおまえさんたちと今日、レアと一緒にいるところを見て、安心したつちゅうわけだ。笑つとつたし、去年みたいにびくびくもしてねえ、いまのあの娘を見て、誰が他の生徒を傷つけると思うんだ？」

「レアが他人を傷つけられるとは思えないけど……」

「ほんとにな、あの娘自身がそれを一番怖がってるつちゅうのに、理事会の一部の連中は……」

オスカーはハグリッドのコガネムシのようなまんまるい瞳がどこか濡れているような気がした。ハグリッドは巨大なキッチンペーパーのようなもので鼻をかんだ。

トンクスが黙らせ呪文を受けて、またウーウー言っているのが見えた。なんと言葉がだせないのにクラーナの前で吐く真似をしているようだった。オスカーは本当に永久粘着呪文でトンクスの口をふさいだ方がいい気がしてきた。

「ハグリッド、戻ったよ、薪はどこに置いたらいいの？」

チャーリーが戻ってきて、ハグリッドに聞いた。薪はレアが浮かべて持ってきたらしい。

「おお、ありがたいな、じゃあ暖炉の傍に置いといてくれ」

「ほらハグリッド、ボクもこうやって魔法で薪を運ぶくらいできるよ」

うになったんだよ?」

レアは薪を杖で操って暖炉の横に置こうとしたが、迫真の演技をしているトンクスが低空を飛行していた薪にけつまずいた。トンクスは黙らせ呪文を受けているせいで、痛いと言えないようだった。

オスカーは杖を一振りして薪を暖炉の横に集めた。

「まあ今のはトンクスのあほが悪いからノーカンだろ」

トンクスはなにかオスカーに向けて悪態をついているようだったが、口をパクパクさせているようにしか見えなかった。

オスカー達は笑った。薪を入れなくても、ハグリッドの小屋はやっぱり暖かいようだった。

その日は外出時間ギリギリまでオスカー達はハグリッドの小屋で話したり、ロックケーキに自分の歯で戦いを挑んだりした。

翌日、オスカーとエストはドージ先生がとってきているはずの空き教室に向かった。今日から守護霊の呪文の練習をしようと話していたので、オスカーは楽しみだった。

二人が空き教室につくとまだ誰もいなかった。オスカーはレアが先に来ていないのが意外だった。レアは授業が終わると真つすぐに練習しに来ていたし、この曜日はレアの授業が六人の中で一番最初に終わるはずだったからだ。

「レアが遅いね? グリフィンツールとハツフルパフは午後も薬草学があるはずだし、これだと人があつままないの」

オスカーはレアが連絡もなしに休むとは思えなかった。昨日はハグリッドの小屋で楽しそうにしていたし、突然風邪でもひいたのかと考えた。すると、教室のドアが叩かれた。

「はい?」

エストが気の抜けた返事をする、ドアが開かれた。そこにいたのはオスカー達の寮監、スネイプ先生だった。

スネイプ先生は相変わらずドロドロの髪の毛に暗い表情だったが、オスカーにはスネイプ先生が少し困っているように見えた。

「ミス・プルウエット、ミスター・ドロホフ、今日、ミス・マツキノンを見たかね？」

「見ていないです、スネイプ先生、レアに何かあったんですか？」

オズカーは少し不安になった。レアは叫びの屋敷でレアの発作を見てくれていたのはスネイプ先生だと、オズカーとクラーナに話していた。レアの寮監ではないスネイプ先生が探しているということはその関係で何かあったのではないかと思ったのだ。スネイプ先生の目がオズカーの眼をとらえたが、スネイプ先生の顔色に変化はなかった。

「いや、今朝の朝食の後からミス・マツキノンの姿が見えないとのことだ。もし何か分かったら、我輩や他の先生方に伝えるように」

スネイプ先生はそのまま扉を閉めて去っていった。オズカーはポケットにあった忍びの地図を取り出そうとした。またドアが叩かれた。

「はーいなの」

またエストが返事をするので今度はスネイプ先生ではなく、オズカー達より年下に見える女の子たちが数人入ってきた。オズカーはその女の子たちがレアと一緒に行動をしていた一団だとわかった。

「あの……プルウエット先輩とドロホフ先輩ですよ？ レアを見ませんでしたか？」

先頭に立っていた女の子がオズカー達に聞いた。どうも彼女たちもスネイプ先生と同じくレアを探しているようだった。

「さつきもスネイプ先生が来て同じことを聞いたけど、エスト達は昨日ハグリッドの小屋で別れてから、レアを見ていないの」

「そう……ですか……」

一団は落胆しているようだった。オズカーはなぜレアがいなくなったのか気になった。忍びの地図を開けばレアがいる場所はすぐに分かるだろうと思ったが、理由があつて隠れているのなら、先生方に伝えるのを待った方がいいと思っただからだ。

「スネイプ先生は朝食の後にレアがいなくなったって言ってたけど、何があつたんだ？」

オスカーが聞くと一団はすこしびくつとした。しかし、恐る恐るといった感じで紙の切れ端をオスカーの方に差し出した。

「なにこれ？ 日刊預言者新聞？」

切れ端は真新しい日刊預言者新聞のようだった。切れ端の中にある写真の人物がオスカーの方にウインクした。オスカーはホググズ・ヘッドのバーテンに会った時と同じ感覚にとらわれた。誰に似ているのかはすぐにわかった。白黒だが、髪の色も瞳もレアにそっくりだ。写真の右下にはマーリン・マツキノと書かれている。

「私達、新聞でレアと同じ苗字でそっくりの人がいたからレアに知らせてあげようと思って……」

オスカーは日刊預言者新聞の記事を走り読みした。ホグワーツで演劇が再開されることについて書かれているようだ。ダンブルドア校長のインタビューは得られなかったので、数人の理事のコメントを得たと書かれている。

「それでレアに新聞を渡したら、すっごく青い顔になって、その時テールに置いてあるグラスとか皿が揺れたり割れたりして、それを見たレアがもつと青くなって、そのまま走り出して行っちゃったんです」

オスカーは何が起こったのかだいたい察しがついた気がした。この新聞の内容が悪いのだろう。一団の一番後ろにいた女の子が涙目で、鼻をヒックヒックさせながら喋った。

「私達あんまり新聞の内容は読んでない状態で渡しちゃったんですけど、よく読んだら、なんか、レアが病気じゃないかみたいなこととか、他の生徒にとって危険なんじゃないかって書かれてたんです……」

オスカーは日刊預言者新聞の切れ端を下の方まで読んだ。なんと、劇の配役としてレアがアシャ役をやることが書かれている。オスカーはどうやってその情報はこの記事を書いた人間が知ったのかわからなかった。

その後に書いてあることをオスカーはあまり読みたくなかった。昨日、ハグリッドと喋った心配ごとが本当になる気がしたからだ。

日刊預言者新聞にはレアが国際魔法使い機密保持法に引つかかる存在、オブスキュリアルではないのかということがご丁寧に聖マンガ

の癒者のコメント付きで載っていた。それによるとレアは非常に危険で、とても少年や少女が魔法を学ぶホグワーツに置くことはできないだろうと書かれている。しかも、レアの殺された家族の写真まで載せて、先の戦いで心が壊れてしまったのだろうと煽り文句まで載せられているのだ。

オスカーは思わず強く切れ端を握ってしまい、ちよつとやぶいてしまった。切れ端の最後には記者、リータ・スキーターとあった。

「それで？ レアを見つけてどうしたいんだ？」

オスカーは自分の声が少し低くなっていることに気付いたが、そのままレイブンクローの一団に聞いた。後ろではエストが心配そうにやりとりを眺めていた。

一団はさらに怯えているようだったが、一番後ろの鼻声の女の子がこういった。

「レアに戻ってきて欲しいんです。だって、レアは私たちに魔法を撃つたりなんてとてもすると思えないし…… 最近はすごい楽しそうだったのに、走っていくときすごい真つ青だったし……」

すると一団の女の子達は勢いづいたのか、口々にオスカーに尋ねた。

「そうです、だから先輩方、レアがいきそうな場所を知りませんか？」
「私達、レアと仲良くなったのは夏休み前からだから、あんまりどこに行ったのか分からなくて……」

「レイブンクロー塔の中にはいなかったんです。灰色のレディにも探してもらってるんですけど、まだ見つかってないみたいだし……」

オスカーはレアがいくのなら、灰色のレディがいた占い学の塔か、ハグリッドの小屋ではないかと頭の中に浮かんだのだが、スネイプ先生や灰色のレディがわからないとなると、別の場所のようだった。

「わかった。何かわかったらすぐに伝える。さつきスネイプ先生にもそういわれたところだったしな」

「おねがいます」

レイブンクローの一団はオスカーにちよつと礼をして、そのまま去っていった。オスカーは間髪を容れずに忍びの地図を開いた。

「レアはどこにいっちゃったんだと思う?」

エストがオスカーの横から地図をのぞき込んでそういった。

「忍びの地図を見ればわかるはずだ、城の中にいるならな、我、よからぬことをたくらむものなり」

羊皮紙に地図が完全に表示され、オスカーはエストと手分けして、地下から順番に丁寧にレア・マツキノンの名前を探した。しかし、オスカーとエストは五回、それを繰り返してもレアの名前を見つけることはできなかった。

「ホグワーツにいないってことなの?」

忍びの地図はうそはつかない、なにせゴーストや猫すら表示してしまうのだ。しかし、オスカーは忍びの地図が完全ではないことを知っていた。そして、レアが追い詰められた時に行きそうな場所、レディのところでも、ハグリッドのところでもなく、助けが必要な時に行きそうな場所、地図に見えない場所がどこなのかわかった気がした。

オスカーは地図をポケットにそのまましまっただけだ。

「ちよつとオスカーどこにいくの!?!」

「八階だ」

オスカーは仕掛け扉や秘密の通路を使って、最短の順路でそこへ向かっていった。オスカーは一年生の時にグリフィンホール生に会わないように、いろんな道を使ってそこに行っていたので、最短の道も覚えていたのだ。

「八階?もしかして、必要の部屋なの!?!」

「そうだ。ホグワーツの外にでないんなら、あそこしかありえないはずだ」

次の階段を登れば、必要の部屋が現れる壁のはずだった。オスカーとエストは数段飛ばしで階段を上った。そして、やはり壁には扉があった。その扉はオスカーが必要な部屋に入るときにみたどの扉よりも小さな扉だった。

オスカーは扉を見てそつと一息ついた。扉が現れるということは、レアが少なくともオスカーとエストに会う気があると思ったからだ。オスカーは大きく息を吸って、エストと視線を合わせた後、ゆつく

りと扉を開いた。

ホツグズ・ヘッド

オスカーは必要の部屋に入って拍子抜けした。てつきりあの大講堂や大広間よりも広い、ホグワーツの隠し事すべてが収められている場所に繋がっていると思っていたのだ。

しかし、オスカーとエストが入ったのは小さな部屋だった。椅子も机も窓もない。石造りの床と壁があるだけの部屋だ。燭台におかれた五本のろうそくが寂しげに部屋を照らしていた。

「レアがいらないの、でも必要の部屋の中に入れたしなんかおかしいね？」

そう、エストの言う通り、必要の部屋に入れたということはレアがそこにいないとおかしいはずなのだ。もし、必要の部屋の中にレアがいなかったり、レアが誰とも会う気がないのなら、入れないはずだとオスカーは考えていた。

二人が狭い部屋のなかほどまでくると、壁が動き出し、オスカーの身長だと少しかがんで入らないといけなくらいの高さがある扉が現れた。オスカーの目測だと、レアやエストの身長くらいなら無理なく入れるように思えた。

「必要の部屋からどこかにつながってるってことなのか？」

「八階以外にも必要の部屋とつながってる場所があるってこと？ 位置検知不可能呪文？ 変幻自在呪文？ ぜんぜんわからないけど、とんでもない魔法なの」

扉をあけると中は結構な高さのあるトンネルだった。トンネルは真鍮製のランプがいくつも取り付けられていて、ゆっくりとした傾斜の階段を照らしていた。

二人は恐る恐る、トンネルの中を進んでいった。しばらく石造りの階段だったが、階段が終わって、角を曲がると踏み固められた土の地面に変わった。

「オスカー、やっぱりこのトンネルって忍びの地図には写ってないの？」

エストにそう言われて、オスカーはポケットにある地図をとりだして見てみたが、一見した感じではオスカーとエストの名前はホグワーツの中にはなかった。

「ないな、必要の部屋には忍びの地図がきかないのか、悪戯仕事人たちがこのトンネルのことを知らなかったのかはわからないけど、写っていないみたいだ」

「叫びの屋敷へのトンネルは地図にのつてたのに、ここはのつてないんだね、さっきの階段は八階から地面か地下まで降りてきた感じだったし、このまま学校の外までいくのかな？」

たしかに石造りから土に地面が変わったのは八階から降りてきて地面の下の秘密の通路を通っているのかもしれない、オスカーもエストと同意見だった。それに叫びの屋敷への通路は途中で登ったり、下がったりしたがこの通路はずっと平坦なようだった。

「叫びの屋敷は丘の上にあったから途中から登りだったけど、この道の行先はそんなに高い場所じゃないのか？」

「うん、必要の部屋の中で方角がちゃんとあつてるのかわからないけど、多分ホグズミードの方に向かつてる気がするの」

つまり、このトンネルはホグズミードに向かう八番目の道だということだろうか？ オスカーはいったい誰がこの通路を作ったのか気になった。それとも誰かが作ったのではなく、必要の部屋が作り出したのかとも思った。

「レアはホグワーツの外に行きたかったのかな？」

「ホグワーツの外に？」

オスカーは自分がレアのことをちゃんとわかっているのか分からなかったが、確かに他の誰かと会いたくないのなら、どこか誰とも会わない遠くに行きたいと思うのかもしれないと考えた。灰色のレディやハグリッドにすら会いに行かなかったのはそういうことなのかもしれない。そして、オスカーは頭の中で果たしてレアに会っても何を話せばいいのか、それをやっと考え始めた。

「うーん、そうじゃないならレアが必要な何かがこのトンネルの先にあるのかな？」

「必要な何か？ 必要の部屋でも用意できないものって何か？」

オスカーの頭の中に必要の部屋が用意できそうにないものが浮かんだ。最初に浮かんだのは食べ物だった。確か変身術の授業で出現や変身させることができないうもの一つとしてあげられていたはずだった。

「そう、必要の部屋で用意できないものをどうにかして用意するためなら、必要の部屋がその場所まで連れて行ってくれるんじゃないかって思うの」

オスカーはエストの話聞いて、学期末のダンプルドア先生の話思い出した。必要の部屋はレアに必要なモノを渡した。そしてホグワーツでは助けを必要としている者には必ずそれが与えられるという話だった。

オスカーはもう一度忍びの地図を開いた。真鍮のランプに照らされて、ホグワーツの中を動く人の名前が見える。ハグリッドの小屋のそばにはスネイプ先生の名前が、古い学の塔の近くではさつきレアを探しにきたレイブンクローの一団らしき名前があった。

レアがどう考えているのかオスカーにはわからなかったが、少なくともオスカーはレアがホグワーツに必要とされていると思った。

しばらく真つすぐな土の地面が続いていたが、二人の目の前にまた石造りの階段が現れた。階段を上ると入り口の扉と同じような扉があった。オスカーはゆっくりとその扉を開けた。

扉を開けるとオスカーは最近かいだことのある臭いを感じた。強烈な家畜のような臭い、ヤギのような臭いだ。扉の先には擦り切れた絨毯が見え、泣きそうな顔のレアと不機嫌そうな顔をしたホッグズ・ヘッドのバーテンがオスカーとエストの方を見ていた。

オスカーは二人を見下ろすような位置にすることがすぐわかった。下の方からぱちぱちと暖かい音が聞こえる。どうもこの扉は暖炉の上にあるらしい。

二人は扉を閉めて降りようとしたが、その途中でオスカー達が扉だと思っていたものが肖像画だということに気付いた。肖像画の中で金髪のオスカー達と同年代くらいの女の子が虚ろに微笑んでいた。

オスカーはその女の子にもバーテンやアラスター・ムーディに感じた様な既視感を感じたのだった。

「今日はずいぶんと来客が多い様だな」

バーテンが不機嫌な声で二人の方に声をかけ、その青い眼でオスカーの眼をとらえた。青い眼はまるでオスカーの全てを見通しているようだった。オスカーは今度こそこのバーテンが誰に似ているのかがわかった。むしろなぜ気づかなかったのかと考えた。

「ダンブルドア先生？」

「えっ？」

バーテンはオスカーがそう言うのを聞いて、さっきよりもよっぽど不機嫌な顔になった。しかし、その顔もひよろりと長い体もアルバス・ダンブルドアにそっくりだった。

「俺はお前たちの先生になったことは一度もないがな」

「ミュリエルおばさんが言ってたの、ダンブルドア先生には弟さんがいるって、名前はアバーフォースさん」

アバーフォースはミュリエルおばさんの名前がでるとダンブルドア先生の名前が出たのと同じくらい嫌な顔をした。しかし、否定はしなかった。

「性悪のミュリエルか、どうせあることないことお前たちに吹き込んだんだろう」

「妹さんの葬儀の席でダンブルドア先生を殴り飛ばしたって言ったの」

アバーフォースはさっきまでの顔と違うが、嫌悪感のある顔をした。オスカーはその顔をよく知っていた。オスカーが自分自身を嫌だと思つてるときにする顔と同じだったからだ。そして、エストの話聞いてさっきの肖像画の女の子がだれなのかわかった気がした。

「ふん、俺が誰かはどうでもいいことだろう。お前たちはこの娘に用があるんじゃないのか？」

アバーフォースは視線をオスカー達からレアの方へ移した。レアは自分が話題になったとたん、ビクつと震えた。レアのまぶたは赤くなつていて、オスカーから見ても泣きはらしていたであろうことがわ

かった。

「どうでもいいことはないけど、エスト達はレアを探しに来たの」

「ああ、いろんな人がレアを探してるぞ」

レアの瞳に涙が浮かんだ。レアは机の上に置いてあったバタービールをがぶ飲みした。

「もう、ボクはホグワーツには戻れないですよ、日刊預言者新聞にある記事が載ってしまったし、記事の通りに聖マンガに入院した方がいいんです」

「そんなことないの、だってこの三か月くらいレアと一緒にいたけど、別に入院しないといけないことなんてしてないの」

エストはレアが何を言っているのかまるで理解できないという声のトーンだった。

「あの記事をみんなが持ってきて、すごく怖くなったんです。みんなが私のことまるで化け物を見ているような気がして、それに自分……」

「あの娘達はそんなこと考えてないはずなの、だってさつきもレアを探しに来てたし」

「そうじゃないんです！ ボクは、自分が自分が怖いんです！」

レアが勢いよくバタービールをテーブルにたたきつけた。しかし、明かにその振動では揺れないような場所の椅子が部屋の端まで吹き飛ばされた。レアはそれを見て真っ青になった。それを見ていたアバーフォースの顔がオスカーが見たことがないほど痛々しい顔に変わった。

「ほら、今を見ましたか？ 朝だって、ボクはテーブルの上のモノを壊してしまっただけです、今も一緒です。皿やグラスや椅子ならいいですけど、これがヒトだったらどう思いますか？」

レアはバタービールを離して、自分の手を握ったり開いたりしながら見つめた。レアの眼は明確な恐怖に彩られているようだった。

「でもスネイプ先生と一緒に訓練をしてるんだろ？」

「してます。最近が発作が全然起きなくなっただけです。でも今のを見ましたか？ ボクはちよつとあんな新聞記事を読んだだけでも、い

「誰を傷つけるか分からないですよ？ スネイク先生だって、オスカー先輩たちだって、寮のみんなだって、ボクがそばにいたらどうなるかわからないんです！」

オスカーはレアに何を言えればいいのか分からなかった。オスカーはレアと同じどころか明確に誰かを自分の力でもとに絶対に戻らないように傷つけたことがあるのに、レアになんと言えればいいのか分からなかった。レアの気持ちがきつとこの中で一番わかるはずなのに、オスカーはいくら考えても、レアを慰めるような言葉が浮かんでこなかった。

「魔法の力はレアが信じていればきつと答えてくれるはずなの、レアの杖もそうだったでしょ？ 魔法は自分を信じて、杖を信じて、誰かを信じないと使えない特別なものなの、だって魔法は自分やみんなを幸せにするためのものでしょ？」

エストはレアの眼をはっきりと見ながら、ゆっくりと力強くそういった。しかし、それを聞いたレアの顔は信じられないくらい憤った顔だった。オスカーにはその怒りが他の誰でもなく、レア自身に向けられていることがわかった。

「ボクの…… ボクの魔法の力は誰かを幸せになんかしない！ 誰もボクを信じないほうがいいんだ！ 魔法の力だって、何も何一つコントロールできないボクを信じない方がいいに決まってる！」

今度はバタービールのビンが吹き飛ばされて、肖像画の傍の壁に当たり、大きな音をたてて割れた。肖像画の女の子が悲しそうな目でオスカー達を見ていた。

「あのとき…… あのとき…… ボクが魔法の力をちやんとコントロールできていたら、パパに外で見せようなんて思わなかったら、パパもママも誰も死なずにすんだんだ！ 二人がボクだけ助けて死ぬ必要なんてなかった！」

レアの瞳から大粒の涙が滝のように流れて、擦り切れたカーペットを濡らした。オスカーはエストの手が震えているのが見えた。それでもエストはその紅い目でレアのことを真つすぐに見つめていた。

「だからボクは魔法なんて使えない方がいいに決まってるんです……」

自分も魔法も何一つコントロールできないボクなんて、ずっと閉じ込められていたほうが何倍もいいんだ」

「そんなの絶対絶対おかしいもん！　だってレアのお父さんやお母さんはレアを助けたんでしょ！　命が無くなってもレアが大事だったんでしょ！　なんでそんなこと言うの！」

エストは手はおろか肩まで震えていて、その眼はレアの方を見据えていたが今にも泣きだしそうだった。オスカーは二人に何も言うことができなかった。アバーフォースは二人のやりとりを見て、青い眼を大きく見開いていた。そして、さっきのレアと同じくらい自分自身に対して憤りを感じているように見えた。

「だって、ボクが魔法を使えなければ、使わなければ、ボクがいなければ二人とも助かったんだ！」

「絶対絶対間違ってる！　レアは魔法が使えても、コントロールできなくても全部レアでしょ？　二人はどんなレアでも、二人にとって特別でしょ！　なんで、どうしてそんなこと言うの！」

二人はお互いに立ち上がって、涙を流しながらにらみ合っていた。オスカーには二人が何も悪いことをしていないはずなのに、どうして、こんなに傷つけあわないといけないのか分からなかった。それに二人に何も言うことができない自分自身が情けなかった。

するとアバーフォースが立ち上がって、二人がにらみ合っているテーブルの上に大きな音をたてて、バタービールのびんを三本置いた。二人はハツとなって椅子に座り直した。

「愚かで間抜けで救いようのない魔法使いの兄弟の話聞け」

アバーフォースが唐突に不機嫌な声で話を始めた。アバーフォースが杖を振るとどこからかコップがやって来て、オスカー達三人にバタービールを飲むようにつつき始めた。

「あるところに父と母、長男、次男、そして末っ子の娘の家族があった。五人は魔法使いだった」

オスカーはアバーフォースの顔がさっきの二人と同じくらい、苦痛にまみれているように見えた。

「娘が六歳の時、マグルの子供たちが娘に乱暴をした。娘が魔法を使

うのを見て、怖がったのだろう。説明のできない不思議な力を見て、それを娘が説明することができないのを見て、恐ろしくなったのか、彼らは娘に乱暴した」

アバーフォースは果たしてこの話をオスカー達以外にしたことがあるのだろうか？ オスカーはアバーフォースの顔を見て、彼がよほどの怒りに耐えながら喋っていることがわかっていった。

「娘は様子がおかしくなった。魔法を使うことができなくなった。しかし、魔法の力は消えたりしない。その力は外ではなく内へと、娘の体と心に向かった。娘は心と頭がときどきおかしくなった。決して誰かを傷つけるような娘ではなかった。それでもときおりおかしくなった心と力を止めることができなくなった。まるで爆発するようにその力は荒れ狂った」

レアの眼が恐怖で丸くなったように見えた。オスカーはその娘がどんな状態だったのか、どうしてアバーフォースがレアの話を聞かずにあれほど苦痛にまみれた顔をするのかようやくわかり始めた。

「父はマグルのやつらに復讐した。復讐はできたが父はマグルを襲った罪でアズカバンに収監された。父はなぜマグルを襲ったのか絶対に言わなかった。言えば娘が一生聖マンゴに閉じ込められるかもしれないことを分かっていたからだ。父は娘に会うことなくアズカバンで死んだ。娘のことを分かる人間が一人いなくなった」

アバーフォースは立ち上がって喋り始めた。座って話すのは、じつとして話すのは耐えられないようだった。

「家族は違う場所に引っ越した。娘を隠す必要があったからだ。娘は病気だという噂を流し、できるだけ外に出さないようにして、母親がつきつきりで娘の面倒をみた。弟は娘と仲が良かったから、母親が娘の面倒をみることや、発作を止めることをよく手伝った。そうしている間に上の兄弟はホグワーツにいく年になっていた」

暖炉の炎に照らされてアバーフォースの深いしわのある顔が照らされた。オスカーは年をとっても彼の怒りと失望と悔しさがその時のまま刻まれているようだと思った。

「兄弟の兄は非常に優秀で有能な魔法使いだった。後の世にその世紀

で一番偉大な魔法使いと呼ばれるほどの魔法使いだった。彼にとつてはホグワーツですらその能力と野心をとどめることができなかつた。同格のような相手もいなかつた。もちろん、娘の面倒をみることや家に縛られることは彼にとつては才能の浪費だと思えただろうし、わずらわしかつたに違いない」

オスカーはミュリエルおばさんがプルウエット邸でエストやダンブルドア先生について言っていたことを思い出した。

「兄の卒業とほとんど同時に、娘が十四歳の時、事故が起こつた。弟がいれば発作を止めることができたかもしれない、しかし二人の兄弟はホグワーツだつたし、母は老いていた。娘を止めることができないうほどに。母は死んだ。娘のことがわかる人間が一人いなくなつた」

レアとエストの眼が大きく見開かれた。オスカーはこの話をあまり聞きたくないと思つた。アバーフォースの顔はこれまでのどれよりも怒りに満たされているように見えた。

「兄はホグワーツを卒業した。ホグワーツで得られるほとんどの榮譽に加えて、いろんな雑誌や有名人にも称賛されて。だが娘の面倒を見る人間が必要だつた。娘のことがわかる人間は世界に二人だけだつた。弟は娘の面倒を見ると言つた。兄が娘のことをわずらわしいと思つていることがわかつていたし、自分なら娘をなだめられると思つていたから。しかし、兄は弟のことを思つたのか、それとも兄としての責任感からか弟をホグワーツに通わせ、自分が面倒を見るといつた」

三人にはその兄弟が誰なのか、優秀な兄が誰なのか分かつていた。その弟がいつたい自分自身と誰に怒りを抱いているのもだ。

「兄は優秀な魔法使いだつたから、数週間の間。娘が家や色々なモノを壊すのを発作を止めることができていた。しかし、兄は飽きていたし、自分の境遇に失望していただろう。兄の偉大な能力が使われるのは頭のおかしい娘を止めるためだけ、正に才能の浪費だ。そして兄は自分と同格の相手に初めて出会つた。運命的だつただろう」

もはやアバーフォースは怒りを全く抑えられないように見えた。凄まじい怒りがその青い目を通して伝わってくるようだつた。

「ひと世代前はその世紀で一番危険な魔法使いと言われていた魔法使いだった。しかし、まだ彼は若く才能ある魔法使いだった。その魔法使いとその世紀で一番偉大な魔法使いが出会った。彼らが意気投合するのは早かった。唯一同格で相手のことがわかる友人ができたからだ。兄が娘のことをないがしろにするのは時間の問題だった。世界で二人しか娘のことがわかる人間はおらず、その一人は娘から遠い場所にいるのにな」

オスカーは本当にこの話を聞きたくなかった。誰も悪いことをしようとしていないのに、父は娘の仇をとっただけなのに、母は娘の面倒をみただけなのに、兄はやっと自分の理解者を手に入れることができたのに、弟は家族のことを思っただけなのに、娘はなにも悪いことをしていないのに、全てが不幸な方へ向かっていったからだ。

「兄と危険な魔法使いはある計画を立てていた。自分たちの力と頭を使って、魔法族たちを日の元にだして、娘を隠せなくてもいい世界を作る計画だ。そのために娘をつれて世界を旅して、演説をして、仲間を増やす計画だ。そして弟も休暇で家に帰ってきていた。弟は娘がないがしろにされていること、そしてそんな計画についていくようなことは、娘がそんなことに耐えられないことは見ただけでわかった」

エストは手が白くなるほど強く自分の杖を握っていた。まるで杖を持っていないとアバーフォースの話聞くのが耐えられないようだった。レアは大きく眼を見開いて、青い顔で震えていた。

「弟はそれを兄と魔法使いに言った。魔法使いは怒り狂った。彼にとって兄との計画を有象無象に止められることは許せなかった。彼は弟に磔の呪文をかけた。兄が弟をかばって杖を抜いた。弟と兄とその親友とみつどもえの決闘になった。娘は決闘の音にも自分の兄たちが争う姿にも耐えられなかった」

アバーフォースの顔が真っ青になった。彼の顔には先ほどまでの怒りよりも、自分のしたことに対する恐れと後悔がありありと表現されていた。

「多分、娘は兄たちを助けたかったのだろう。世界で二人だけ自分のことを分かる人間が争うのを止めたかったのだろう。娘の力と三人

の呪文が交錯した。三人が気付いた時には娘は死んでいた」

オスカーは肖像画の女の子を見た。女の子は痛々しい顔でアバーフォースを見ていた。オスカーはクラリーナとクリスマスにみぞの鏡を見たあの日、ダンブルドア先生が何を言っていたのか、ダンブルドア先生が何を見たのかやつとわかった気がした。

「誰がやったのかはわからない。だが娘はいつてしまった。永遠に」
アバーフォースは踏ん張る様な、自分にかつを入れるような顔をして、レアの方を真つすぐにみた。

「これで分かったか？ どうなるか分かったか？ 娘がどうして死んだと思う？ 二人しか彼女のことを分かる人間がいなかったからだ！ 愚かだまぬけで救いようのない二人しかだ！」

レアはうつむきながら、ヒックヒックと泣いていた。

「自分から閉じこまってどうなると思う？ 今世紀で一番偉大な魔法使いさえ理解者がいないとどうなったと思う？ 救いようのない弟が誰にも言わずにあほうな行動をした結果どうなったと思う？ アリアナはどうやったら助かったと思う？」

オスカーはアバーフォースの眼からはオスカーがダンブルドア先生から一度だけ感じたことのあるとんでもないエネルギーが発せられているように思えた。それは誰かを助けるために悪意に向けられている純粋な怒りのようだった。

「娘、お前が一人なら、閉じこもるのもいいだろう。だがお前を分かってくれる人がいるなら、それはお前自身だけではなく、周りを不幸にするだろう」

オスカーはどうして必要の部屋とホッグズ・ヘッドがつながったのか、どうして必要の部屋はレアをここへ連れてきたのか、ようやくわかった。

「ここにお前を追ってきた二人が、さっきの兄弟のような愚かで間抜けで救いようのない人間に見えるのか？ お前のために泣くような人間がそう見えるのか？」

もはやアバーフォースの声はまるでレアにすがっているようにも聞こえた。エストは泣きながらもアバーフォースの話聞いていた。

オズカーはどうしたら彼のように自分を見つめ直し、まるで自分の罪の象徴のようなレアを助けて、励ますようなことを言えるようになるのだろうかと思った。

「この二人の他にもお前を探している人間がいるんだろう？　なら自分の場所へ戻れ、ホグワーツへだ！」

アバーフォースの声が小さな部屋に響いた。明らかに怒りが込められているにもかかわらず、オズカーはその声がどこか暖かなものだと感じた。

「ねえ、レア、帰ろう？　エストもレアと守護霊の呪文の練習をしたいし、レイブンクロウの娘たちも、スネイプ先生もレアのことを探してるよ」

エストがレアを肩を叩いてそう言った。

「ボク……　うう……　でも、やっぱりみんな記事を見たら怖がるに決まってるし、オズカー先輩たちやスネイプ先生は強いから……」

オズカーはレアのカバンから変身術入門を取り出した。レアの変身術入門はオズカーやエストのものよりも新しいにも関わらず、何度も読み込まれたあとやたくさんの書き込みがあり、レアがどれほど魔法を練習しているのか示しているようだった。

オズカーは目的のページを見つけた。そのページは何度も開かれているのがページの具合からわかった。オズカーはレアがオズカー達との練習を楽しみにしてくれていたことが伝わってくるようで、胸が温まる気がした。

そのページはエストが呪文をかけた羊皮紙で、忍びの地図の写しが表示される場所だった。

「ほら、これを見ればわかるだろ、レアの友達はまだレアを探してる。それにあの娘たちは根拠もなくレアを怖がったりしないだろ、レイブンクロウなんだろう？」

レアはオズカーの差し出した地図を見た。地図の上ではオズカーがさつき見た時に占い学の塔にあった名前がホグワーツの色んな場所に表示されていた。レアはそれを見てもっと大きな声で泣いた。大粒の涙が地図の上の名前をにじませて、いろんな名前と重なって見

えた。

オスカーはオスカー達のやり取りを見て、肖像画の女の子が、アリアナ・ダンプルドアが少しだけ微笑んだのを見た。

まね妖怪

ホッグズ・ヘッドからレアを連れ帰ってから数日たった。オスカーは日刊預言者新聞がなぜレアのことや劇の配役について知ることができたのかが気になっていた。

リータ・スキータなる人物がどういう人物なのかオスカーは知らなかったが、エストやトunksスいわく、日刊預言者新聞の飛ばし記事やスキャンダルなどをよく拾ってくる記者だとウィーズリーおばさんやトunks先生が言っていたとのことだった。

オスカーは自分について書かれるのは正直どうでも良かったが、他のメンバーがレアのようにやり玉に挙げられるのではないかと心配していたのだ。

しかし、守護霊の呪文や劇の練習が始まり、みんな忙しくなっていたし、11月が終わりクイディッチの年内最後の試合が近づいてくるとクイディッチチームに入っているメンバーはそれぞれどころではなくなってしまうほど忙しそうだった。

そしてその中でも特にエストの過密スケジュールっぷりはオスカーから見ても心配だった。オスカーはエストの言っていた特別措置が何なのかだいたい予想はついていた。エストはオスカーと同じ授業にはいつも一緒の机で受けており、それと同じ時間の授業にも休まず出席しているようだったので、エストが首からさげているものが何であれ、どういう効果を持つものなのかはだいたい分かりつつあったのだ。

しかし、その道具が何であってもエストの疲れを癒すような効果はなさそうだとオスカーはエストに元氣が出る呪文を唱えながら思った。呪文を唱えると確かにエストは元氣そうな顔になったが、目の下のクマは消えていなかったし、オスカーは隣のペアが呪文をかけすぎで笑いが止まらなくなっているのを見ると、この呪文に頼りきるのはいく良くない気がした。

「はい、そこまで、クイディッチの試合も近いようだから今日の宿題は

無し、以上！」

フリットウィック先生がキーキー声でそう言っただけで呪文学の授業が終わった。今日は呪文学の後に闇の魔術に対する防衛術の授業がある予定だった。

「ドージ先生は次の授業は実地授業だって言ってたよね？」

「ああ、グリーンデローとレッドキャップはやったからそれ以外なんだろうけどな」

二人は次の教室に向かいながらいったい何の魔法生物が出てくるのか話していた。闇の魔術に対する防衛術の三年生の授業では比較的身近にいるような魔法生物の実地授業がメインだった。ドージ先生はフリットウィック先生と同じくらい優しい先生だったので、授業はすぐに評判になっていた。

オスカーが教室に入るとすでにスリザリン生が何人か並んでいた。中心にある洋服ダンスのようなものを囲んで並んでいる。オスカーたちもその洋服ダンスを囲む列に加わった。

「ああ、みんな揃ったかな？」

ドージ先生が洋服ダンスの隣に立って、いつものせえぜえとした苦しそうな声で話すと、洋服ダンスが突然ぶるぶる震えだし、バーンという大きな音を立てて、少しだけ床から飛び上がった。

洋服ダンスの近くにいた生徒が何人か飛び上がった。

「心配しないでいい、これはボガート、まね妖怪だ」

ドージ先生がそう言うのと今度は洋服ダンスの蝶番の部分がガタガタいいはじめた。

「さて、ボガート、まね妖怪がどんな生き物なのかわかる人はいるかな？」

オスカーの隣で手が真つすぐに上がった。

「ミス・プルウェットお願いできるかな」

「はい、ボガートは暗くて狭い場所を好みます、そしてその姿を見た人は誰もいません。一番の特徴は人の前に出るとその人が一番恐ろしいと思っただけで何かに変身することです」

「うん、素晴らしい説明だ。スリザリンに五点」

まね妖怪、たしかにオスカーもその存在を二年生の授業で聞いたことがあった。魔法使いの家についての間にか住み着いている生き物だったはずだ。

「さて、今ボガートは非常に怖がっている。他でもない私たちにだ。なぜかわかるかね？」

スリザリン生にドージ先生がそう尋ねるともつと大きな音をたてて洋服ダンスが震え始めた。近くにいる生徒達は不安そうな目でそれを見ていた。またオスカーの横でエストの手が拳がった。

「おお、じゃあもう一度ミス・プルウエットにお願いしよう」

「たくさん人がいるとボガートが何に変身したらいいのか分からないからです。なので誰の恐ろしいものに変身するのか混乱すると考えられます。そして、誰かにとって恐ろしいものが他の人にとって恐ろしいものだとは限りません」

ドージ先生はエストの返答を聞いてやさしい顔で笑った。

「本当に素晴らしい回答だ。スリザリンにもう五点。彼女の言う通り、我々がボガートに対抗する最も簡単な手段は複数人であることだ。一人では耐えられない恐怖でも二人なら、三人ならもつとたくさんなら簡単に耐えることができる。そして、ボガートが一番嫌うものが笑いだ。ボガートは人が愉快だと思う感情を嫌う。なので呪文は簡単だ。リデイクラス！ ばかばかしい！」

いつものぜいぜい声ではあるがよく響く声でドージ先生が唱える
と洋服ダンスがまたガタガタ震えた。

「さて、呪文は簡単だがボガートを退治するにはもう一工夫必要だ。それは君たちが一番怖いものをばかばかしくすることだ。バジリスクが怖いならば焼きにしてしまえばいいし、バンシー妖怪が怖いならば声をだせなくしてやればいい。リデイクラスの呪文とともに君たちの恐怖の存在をばかばかしいものに変えてしまおうんだ」

恐怖の存在をばかばかしいものに変えてしまう。たしかにその方法ならば簡単に自分の恐怖と向き合うことができるのだろう。オスカーはそう思ったが、そもそも変えることができないほどの恐怖と出

会ったことがあるのならそれは通用するのだろうか？ オズカーは自分の中で嫌な予感がせりあがってくるのを感じた。

「さて、では君たちに順番にボガートと対峙してもらおう。みんな自分の一番怖いものを思い浮かべてくれるかな？　そしてその姿をばかばかしいものにどうやって変えることができるのか想像してみよう」スリザリン生たちはみな目をつぶってぶつぶつ言ったり、うんうん言ったりしていた。

オズカーも嫌な予感がしていたが考えた。

この世で一番恐ろしいものは何なのか？

最初にヴォルデモート卿が頭に浮かんだ。ハリー・ポッターに打ち倒される前の完全なヴォルデモート卿。切れ込んだ赤い目を持ち、高笑いをする恐るべき魔法使い。オズカーがヴォルデモート卿を何かに変えることを考え始めたとき、ヴォルデモート卿の姿が銀の髪飾りをつけたエストの姿に変わった。

そして銀の髪飾りから、オズカーは炎を連想した。ヴォルデモート卿の高笑い……　倒れている誰かの姿……　自分の杖から吹き出ている炎……　オズカーは自分の動悸が早くなっていることが分かった。

オズカーはこの世で一番恐ろしいものが何なのか理解した。自分が一番耐えられないものが一体何なのかすぐにわかった。

そして、オズカーはそれを彼女をばかばかしいものに変えることなど自分にはできはしないことを理解した。オズカーは自分の背中に嫌な汗が流れていることがわかった。

オズカーは周りを見回した。周りの生徒たちはほとんど目がつぶって自分の一番恐ろしいものが何なのか考えているようだった。しかし、オズカーのように動悸が早くなったり、嫌な汗をかいていそうな生徒はいなかった。

オズカーは隣のエストを見た。オズカーはエストを見た時に自分が考えたことが嫌だった。エストなら自分と同じくらい恐ろしいものを想像したのではないかと思ってしまったのだ。

しかし、エストは真つすぐに洋服ダンスを見つめていた。オズカー

がほとんど見たことがないほど真剣な顔だった。オスカーはますます自分のことが恥ずかしくなった。

「さてみんな準備はできたかな？　じゃあ前の人から順番にいこう」みんなが頷いて杖を取り出す中、オスカーは焦っていた。オスカーは自分の一番恐ろしいものを何かに変えることなどではししないと理解していた。おかしなものにばかばかしいものに変えることなどではししないのだ。そんなことは許されない。オスカーには分かっていた。

ドージ先生が洋服ダンスを開けて、まね妖怪が飛び出してきた。

パチン！　最初にまね妖怪は三本の頭がある蛇に変わった。ループスールだ。

「リデイクラス！」

生徒が唱えると三本の頭がリボン結びになった。教室に笑い声が響く。次の生徒が前にでた。パチン！　今度は巨大なナメクジだった。

「リデイクラス！」

叫ぶように生徒が唱えるとナメクジの上から大量の塩が振ってきたように見え、どんどんその体が小さくなった。

その後も生徒たちが前にでるとボガートは色々な姿に変わり、生徒たちの笑い声に困惑した。巨大なゴキブリ、ミイラ男、しゃべるゾンビ、中にはなぜかマクゴナガル先生の姿もあった。そして段々とボガートは混乱しているようだった。今やボガートの姿は安定せず、マクゴナガル先生の杖がミイラ男の足になっていたり、バンシー妖怪がミイラの包帯を巻いていたりした。

一番後ろの方にいたオスカーとエストまで順番が回ってくるところで、ドージ先生が生徒たちの前に出ようとした。

しかし、ドージ先生が前にでるよりも早く、エストがまね妖怪の前に立っていた。

パチン！　まね妖怪の姿が変わった。オスカーはその姿に見覚えがあった。スリザリン生全員が見覚えがあった。

誰がどう見てもまね妖怪が変身したのはエストレヤ・プルウエット

その人だった。

黒い髪、紅い眼、オスカーより少し低い身長。どれを見てもエストにしか見えない。服装と持ち物だけが違う。まね妖怪が変身したエストはプルウエツト邸でエストが着ていた服を着ていて、いつも肌身離さず持っているニワトコの杖を持っていなかった。

それにどこかその目や表情が何かを諦めているような、やる気のない顔をしているようだった。

「リデイクラス！」

エストがはつきりとそう唱えるとまね妖怪のエストの姿が変わった。なぜかまね妖怪のエストの服装がゴシック風のひらひらした黒いドレスのようなものになって、頭の上には銀色のティアラが乗っていた。黒い髪と合わさってまるで人形のようなようだった。まね妖怪のエストが顔を赤くして、それを見た本物のエストも顔を赤くした。スリザリン生が本物と偽物のやり取りを見て笑うと、まね妖怪は破裂して、幾千もの煙の筋になって消えていった。

「みんなよくできた！」

ドージ先生が今度こそ前に出てきてそう言った。ドージ先生の目はエストに向かっていて、本当に感心している顔だった。

「まね妖怪と対決したスリザリン生一人につき五点をあげよう」

オスカーは内心、自分の順番が回ってこなかったことに安堵していた。さっきのエストのやり取りを見ても、スリザリン生がみんな笑っているのを聞いても、自分の順番が回ってくるのが不安で仕方なかったからだ。

「さて、授業はこれで終わりだ。みんな次の授業までに二年生で習ったボガートについての記述をまとめて、今日見た本物と比べてどうだったか考察してレポートにまとめること」

スリザリン生はみんな興奮しながら、まね妖怪との対決を口々に喋りながら教室を出た。

そしてオスカーは授業を思い返し、自分がまね妖怪と対峙しなかったのは偶然ではないのかと思つた。さつきドージ先生が前に出ようとしたのはエストや自分にまね妖怪と対峙させたくなかつ

たからではないのか？

「なあエスト、さつきドージ先生がエストの順番の時にボガートの方へいこうとしてたのって……」

「うん、エストとオスカーの順番が来る前に退治しちゃおうとしてたんだと思うの」

エストは少し疲れた顔でオスカーの方を見て頷いた。

「だから今から聞きに行かない？ ドージ先生なら教えてくれると思うの」

オスカーは先日のホッグズ・ヘツドの一件といい、今日のまね妖怪といい、自分よりエストの心がはるかに強いことを感じていて、自分がさらに情けなく感じられた。

そしてそれゆえにエストのことが少し心配だった。いくらエストが優れているとしても授業を全て受けて、魔法や劇そしてクイディッチの練習を同時にやっても大丈夫なのだろうか？

なぜエストはそんなに全部を頑張れるのだろうか？ オスカーはさつきみたまね妖怪のエストの様に、もう少しやる気のない顔をする時があってもいいのではないかと思った。

二人がドージ先生の居室を訪ねるとまだドージ先生は帰ってきておらず、中にはなぜかクラーナがいて、空いている窓から外を眺めているようだった。

「あれ？ クラーナどうしたの？」

「いや、それはこっちのセリフでもあるんですけど……二人こそどうしたんですか？」

「俺たちはさつき闇の魔術に対する防衛術だったんだけど、それとちよつとドージ先生に質問があったから来たんだけど……」

オスカーにはエストの元気が少ないのと対比でそう見えるのか、クラーナがちよつといつもより強気に見えた。

「もしかして、スリザリンもまね妖怪の授業だったんですか？ グリフィンドールは午前中にやったんですけど」

「そうなの、そのことでドージ先生に質問しようと思ってきたの」

クラーナはオスカー達がまね妖怪の授業を受けたところだと聞いて

て、ちよつとまゆをあげてニヤツと笑った。

「へえ、ちなみになにに変わったんですか？ まあオスカーのはどうでもいいですけど、エストのは気になりますね」

オスカーはクラリーナがニヤニヤしながらそう言うのを聞いて、クラリーナにはオスカーのまね妖怪が何に変わるのかばれている気がした。

「なんなのそれ、オスカー言っちゃだめだからね？」

「エストのまね妖怪はエストに変身したけど」

「ちよつと!? オスカー！」

オスカーはスリザリン生がさつき興奮気味にまね妖怪について喋っていたので、エストのまね妖怪がエストになることはすぐに噂になると思っていた。

なので、クラリーナに話したのだがどうもエストの不興をかってしまったようだった。

「は？ エストですか？ 自分自身？ 自分が一番怖いってことですか？」

「もう…… そうだよ？ なんかダメなの？」

「いやダメってことは無いですけど……」

クラリーナは本当に驚いているようだった。オスカーも自分自身が一番怖いというのはなんだか不思議な話だと思った。

「ちなみにそのエストは本物とどこか違ったんですか？」

「ああ、なんかミユリエルおばさんのとこで着てた服を着てて、やる気なさそうな顔で…… あとは杖を持つてなかったかな」

「なんでオスカーはそんなに色々覚えてるの!？」

さつき見たからとしかオスカーには言いようがなかったが、今日は珍しいエストが顔を赤くする日なのだと思った。

「杖ですか？ ああオスカーとの特別な杖ですもんね」

「えっ？ なんでクラリーナが杖のことを知ってるの？」

ニヤニヤしながら言ったクラリーナだったが、エストが一転して真顔でそう言ったのを聞いて、今度は地雷を踏んづけた感じの顔になって、オスカーの方を見た。

エストも困惑した顔でオスカーの方を見た。

オスカーはそういえば、杖のことをクラーナ、レア、そして灰色のレディと話あって知ったことをエストに話していなかったことを思い出した。

「えっと、あの朝は言わなかったけど、姉弟杖だつて気付いたのがクラーナとレアと一緒に灰色のレディに聞きにいったからなんだ」

「そうだったんだ……」

エストはそれを聞くとうつむいて何かをかみしめているような顔をしていた。オスカーにはエストが杖を強く握りしめているのが見ええた。

クラーナがオスカーの方に近づいてきて耳元でささやいた。

「ちよつと、すごいショック受けてるじゃないですか、どうにかしてくださいよ、エストの担当はオスカーでしょう、すごい気まずいです」

エストの担当というのはオスカーには良くわからなかったが、クラーナの言う通りにエストがショックを受けているのは本当のようだった。オスカーはエストが杖に対して何度も特別だと言っていたことを思い出していた。しかし、ここは話題を変えた方が良さそうだった。

「リディークラスで変わった服装ってなんだったんだ？」

「えっ？ 服装？」

オスカーが苦し紛れにそう聞くと、エストは一瞬ぼかんといい顔をして、その後顔をさつきよりも赤くした。

「ちよつとオスカーなに聞いたんですか？ 怒らせたんじゃないですよね」

「いや、エストがエストの偽物にリディークラスを唱えたら、なんか黒い……なんて言うんだ？ ゴシツク？ なんかひらひらしたやつがついた服に変わったからなんなのかなって思ったんだけど、あと頭の上にティアラが乗ってたな、レイブンクローのやつとは違う感じのやつ」

「だからなんでオスカーはそんなに覚えてるの！」

エストは顔を真っ赤にしてオスカーにつめよってきた。

「へえ、まあエストの家は旧家ですしそういう服装をすることもあるんじゃないですか？ 私にはよく分からない趣味ですけど」

「エストの趣味じゃないの、あれはエストが小さいころにミュリエルおばさんが無理やり着せてた服なの、あのティアラもうちの家に昔からあるティアラらしいの、モリーおばさんの結婚式にも貸し出したらしいの、だからあの服のことはもういいの」

エストはオスカーが聞いたことがないくらい早口でまくしたてた。「プルウエットの家に伝わるくらいだからゴブリン銀なんですかね？

どんな感じだったんですか？ オスカー？」

「ええ？ 人形みたいで綺麗だと思ったけど、ああティアラは多分銀色だったな」

オスカーがそう言うと、エストはさらに顔を赤くして何も言わなくなった。すると扉が開いてドージ先生が帰ってきた。

「おや、何か用かな？ 相変わらず仲がいいみたいでいいことだが」

ドージ先生は相変わらさずせいぜいと苦しそうな声だったが三人をみてニツコリしながらそう言った。

「なんで私をまね妖怪と対峙させなかつたんですか？」

クラーナが相変わらずの勝気な声でそう言った。オスカーとエストはクラーナの用が二人と同じだったので顔を見合わせた。

「なるほど、二人も同じことを聞きに来たのかな？」

ドージ先生が二人の方を向いたので、オスカーとエストは頷いた。クラーナはそれを見て驚いた顔をした。ドージ先生は優しい声でこう言った。

「君たちをまね妖怪と対峙させたら、教室が混乱するようなものが、三年生の生徒達では耐えられないようなものに変身するのではないかと思っただよ」

正直な返答だった。確かに去年の出来事といい、オスカーは自分や他の二人、クラーナの家族のことは分からなかったが、三人のまね妖

怪がヴォルデモート卿やそれに匹敵するようなものに変身すれば教室が混乱することは間違いないと思った。

「まね妖怪や吸魂鬼と対峙するとき、ひどい心の傷を持っているほど、恐れるものが強くおぞましいほど、対峙するのは困難になる。君たち自身がどう思っているのかは別にして、前の戦争の産物が教室に現れるのは、三年生の生徒達の前に現れるのは早すぎると思ったのだ」

オスカーがクラリーナの方を見るとエストがさつき杖を握りしめていたよりも強く、手が白くなるほど握りしめられているのが見えた。「もちろん君たちの勇気を評価していないわけではない、それにエスト君のあのまね妖怪には本当に感心させられた」

オスカーは開心術をマスターしてはいなかったがドージ先生がウソを言っていないことや、オスカー達生徒のことを考えていることは分かった。

「正直なところ、最も恐ろしいものが明確な怪物になる場合のほうがよっぽど与しやすい。人が恐れるものはもつと複雑で戦いのようなものだったりもする。エスト君の自分自身というのはまさに典型かもしれない」

オスカーは自分が一番恐ろしいものを思い浮かべた。いったいどうやって戦えばいいと言うのだろうか？ 今、ドージ先生から直接話を聞いている時でさえ、オスカーは戦いようがないと思っていた。

「しかし、君たちなら大丈夫だろう。まね妖怪と戦う時、なにをすれば有利になると言ったのか覚えているかな？ 一人で立ち向かえないのなら、二人で立ち向かえばいい。恐怖そのものと一人で向かい合う必要はないのだ、ああ説教のようになってしまった。年を取るといかなあ」

ドージ先生はそう言って笑った。エストは食いしぼるような顔をして、クラリーナの手は固く握りしめられていた。オスカーはドージ先生が言ったことをなんとか飲み込もうとしていた。しかし、オスカーは恐怖そのものと複数人で戦うには恐怖と戦うのと同じくらい困難で勇気が必要だと思った。

クイデイツチ

クイデイツチ年内最後の試合が間近まで迫っていた。今年はグリーンドール対レイブンクローの試合が長引いたせいで、雪の降り始める十二月まで試合がずれ込んでいたのだ。

試合を見に行っていた生徒達や先生達もスニツチが二日経っても見つからないとは思っていなかった。

オスカーもいい加減この競技のスニツチと言う要素は少し欠陥があるんじゃないのかと思っていたが、シーカーであるチャーリーとエストの手前、そんなことは言えなかった。

試合自体はマクゴナガル先生の熱願により、一週間後に再開され、チャーリーが四日目にスニツチをやつと取って終わった。

なので残る試合はスリザリン対ハッフルパフだけだった。

「試合は明日だしそろそろ終わつた方がいいんじゃないのか？」

ホグワーツには連日吹雪が吹き荒れていて、スリザリンもハッフルパフも体力温存のために前日は練習をしないことにしたらしく、エストとトンクスの二人も守護霊の呪文と劇の練習に来ていた。

オスカーは緊張を紛らわすために二人がいつもと同じことをしたいのだろうと思っていた。

「うーん、守護霊の呪文ができたらなんか試合も上手くいく気がしたんだけど……」

「じゃあなおさらエストに成功してもらおうわけにはいかないな」

オスカーの顔に変身してクラーナとセリフの読み合わせをしていたトンクスがオスカーの顔でオスカーの口調を真似ながら言った。

「もう！ オスカーの顔で言うことややこしいの！」

「まあ本物のオスカーの言う通りにそろそろ切上げた方がいいかもね、僕の試合みたいに四日もスニツチが見つからなかったら体力が大事になるから」

チャーリーが少し疲れた声で言った。オスカーもまたスニツチが四日も見つからなかったらクリスマスが先に来てしまう気がした。

「まあ焦らなくてもいいんじゃないですか？　実際、私たち誰も有体の守護霊を創り出せていないわけですし」

クラーナの言う通り、オスカー達は誰も守護霊を創り出すことはできていなかった。オスカーはエストができないような呪文があるということが意外だった。

もう一つ意外なことがあるとすればレアが一番進んでいるように見えることだろうか、オスカー達が白いモヤのようなものしか出せないのに対して、レアの白いモヤは時々何かの形をとる時があったのだ。

「そうね、レアも明日はお仕事があるしね」

トunksがいつもの自分の顔とショッキングピンクの髪に戻りながらレアに言った。

「ホントにボクが明日やるんですか？　台本と紹介文はマクゴナガル先生から貰いましたけど……」

「大丈夫よ、逆にもっと有名になっちゃえばいいのよ、レアは特別功労賞を貰ってるせいでちよつと有名だし大丈夫、大丈夫」

トunksは何かをレアのために取り付けてきたようだったのだが、もったいぶってオスカー達には言ってはくれなかった。

他の四人は多分トunksなりにレアを励ましているのだろうというところで何も言わなかった。ただオスカーはまたホッグズ・ヘッドでファイア・ウイスキーを飲んだ時のようにオチがつかないか心配だった。

「エクスペクト・パトローナム！　守護霊よ来たれ！」

エストが懸命な顔で、何かを必死で思い出すような顔で守護霊の呪文を再び唱えたが銀色のモヤのようなものが辺りを漂っただけで形をとることはなかった。

それを見たエストの顔は酷く疲れているようにも何かに失望しているようにも見えた。オスカーはエストが守護霊の呪文を失敗するたびにこの顔をするのと知っていた。

「まあほんとにそろそろ帰るか、夕食の時間もあるし」

オスカーは杖を振って、空き教室の机と椅子を元の位置に直し始め

た。強制的にでも練習をお終いした方がいいと思ったのだ。

オスカーも守護霊の呪文を練習したときに思ったのだが、この呪文は酷く体力や精神力を消費するように思えた。

自分の一番幸福な記憶を思い出して呪文を唱えているはずなのに、呪文ができないと言うのはその記憶がまるで一番幸福なのではないと言われている気分になったからだ。

オスカーはクラリーナがこの呪文は生半可なものではないと言っていた意味がわかり始めている気がした。まね妖怪と同じく、自分と向き合うというのは酷く難しく疲れるものなのだ。

実際に疲れるのが分かってからはクイディッチチームのメンバーはエスト以外、劇の練習の方を主軸にするようになっていた。

オスカーは呪文の練習に妥協しないエストのくまが最近ますます濃くなっていることを知っていた。

「私も手伝うわよ」

トンクスがそう言って杖を振ったが、机は上下逆さまになってもとの位置に戻った。

「まあ…… まあまあのお出来ね」

「どう見ても全くできてないでしょう。どうやってこの机で勉強するんですか？」

オスカーはため息をついてトンクスがひっくり返した机を元に戻した。

その後、エストは夕食の時も食べ終わって談話室にいる時も、オスカーに何か言うことはなかった。

試合前になるとエストは毎回、オスカーにクイディッチのあれこれについて語ってきていたので、オスカーは今回もそうだろうと思っていた。

しかし、クイディッチ試合前の緊張を吹き飛ばそうとする生徒達の騒ぎの中、エストはただ椅子に座って湖が見える窓を眺めている。

黒い湖を写す窓に談話室の緑の光とエストの紅い眼が写っていた。オスカーはいつもの場所にエストといるだけなのに沈黙が嫌だった。

オスカーは毎回のごとく聞かされる、万年最下位のチャドリ・キャノンズがどののだとか、ウロンスキー・フェイント、ホークスヘッド攻撃フォーメーションなどと言ういつの間にか覚えてしまったクイディッチの技を喋っていたかった。

「緊張してるのか？」

やっとエストにオスカーが言えたのはそれが精一杯だった。エストは窓から目を離してオスカーの方を見た。

オスカーにはいつもの何倍もエストの顔が疲れているように見えた。

「うーんと、多分緊張はしてないと思うの」

エストは首を傾けて笑った。オスカーにもエストは緊張してないように見えた。ならばどうしてそんなに疲れた顔になるのか不思議だった。

「緊張してるのか、試合するのが負けるのが怖いのか分かんないの、オスカーは自分のことって、自分がどうして何を考えてるのかって分かる？」

オスカーはエストの言っていることが何なのかは分からなかった。何を言っただけなのかも分からなかった。

「分からないと思うけど、とりあえず疲れてるんなら寝ればいいんじゃないか？ エストが疲れてて喜ぶのはトunksだけだろ」

「それはそうかもしれないの」

エストは笑いながら何か違うことを考えているようだった。無意識のうちにエストの指が胸元の金色の鎖を触っていた。

「選手！ 就寝だ！」

そうこうしているうちにスリザリンチームキャプテンの声が談話室に響いた。オスカーはその声がありがたかった。とりあえずエストをベッドに向かわせた方がいい気がしていたからだ。

「うーん、じゃあオスカーまた明日ね」

「ああ」

エストはそう言って女子の寝室の方へ消えていった。オスカーも寝室に戻ろうとするとスリザリンクイディッチチームの面々に取り

囲まれた。

「それでオスカー君、うちのシーカーの調子はどうなんだ？」

一番ガタイの大きいキャプテンとキーパーを務める六年生が言った。オスカーも身長は大分伸びてきたがキャプテンの顔はオスカーより顔一つ分上だった。

「どうとは？」

「それはウチの姫様の調子が良ければ俺たちが負けることはないからだ」

ビーターを務めるキャプテンと同じくらいガタイのいい五年生が真面目な顔でそう言った。

「その通り、去年僕たちが唯一負けたのもエストレヤ嬢が医務室で出れなかったときだけなんだ」

「つまり、姫様が調子良く試合にのぞめればバカ勝ちできる」

「ということでおスカー後輩がウチのシーカーの機嫌を取れるかですりザリンの勝ち具合が決まってくるんだよ」

もう片方のビーターと二人のチエイサーが口々にそう言った。後ろで残りのメンバーもうんうんと頷いている。みんなオスカーよりもガタイが良かった。オスカーはエストとこのメンバーがホグワーツでどう呼ばれているのか知っていた。それに男爵とピーブズの姫様呼びがいつの間にか広まっているようだった。

「調子は…… 多分色々あって疲れてるんだと思いますけど…… 機嫌はそんなに悪くないと思います。さつきも笑ってましたし」

オスカーはまね妖怪やホッグズ・ヘッドでの一件、守護霊の呪文、胸元の特別措置を思い出しながらそう答えた。

「疲れている…… 練習しすぎたか……」

「僕らの基準で練習しすぎましたかね……」

「姫様が飛べなくなったら終わりだぞ……」

「これはキャプテンの責任では」

オスカーの予想以上にスリザリクイディッチチームはショックを受けているようだった。キャプテンなど目頭を掴んで悩んでいる。「試合前にオスカー君を使おう」

「まあ幸運薬みたいなもんですね」

「幸運薬を使ったら失格処分だけどまあオスカー後輩ならいいだろう」

なぜかオスカーが魔法薬のような扱われ方になっていたが、クイディッチチームの面々はオスカーの肩を順番に叩いて寝室へと消えていった。

「じゃあオスカー君、明日はよろしくな」

最後にキャプテンがなぜかオスカーにバタービールを手渡して消えていった。とりあえずオスカーも寝ることにした。

翌日、オスカーはいつものようにエストと一緒に大広間へと向かった。エストが大広間に入るとスリザリンのテーブルから拍手が起こり、ハッフルパフのテーブルからはやじが飛んだ。談話室で待ち受けていて、二人を護衛するように歩いていたクイディッチチームの面々がハッフルパフのテーブルに凄んだ。

ハッフルパフのテーブルではトンクスが冗談を言つてハッフルパフのクイディッチチームを笑わせているようだったが、オスカーはトンクスの髪色からトンクスの気分があまり良くないことが分かった。

オスカーが大広間の天井を見ると外は猛吹雪のようで、全く空はおろか雲さえ見えなかった。

スリザリンのクイディッチチームはみんな余り食欲がないようで、エストもいつもの半分くらいしか食べていなかった。

その後キャプテンがグラウンドと雪の具合を確認すると言つて選手を急かした。エストが立ち上がる前にキャプテンはオスカーの肩を叩いてから出ていった。

「吹雪みたいだけど大丈夫か？」

「クイディッチのローブは防水呪文がかかっているから大丈夫だと思うけど、視界はどうにもならないかもしれないの」

オスカーにはエストの声はいつも通りに聞こえた。

「じゃあ頑張ってくれ、隣のチャャリーの解説を聞きながら見てるよ」「グリフィンドールのシーカーの解説を聞きながらってなんかおかし

いの、じゃ、行ってくるねオスカー」

エストが大広間から出ていくとまた拍手が起こった。オスカーも猛吹雪の中、クイディッチ競技場へと向かった。

オスカー達はいつも座る場所があった。普通、ホグワーツの寮生たちはそれぞれの寮の場所に座って、それぞれのローブを着て、応援旗を振り回すのだが、オスカー達は二年生になってからは解説席の傍に陣取っていた。

「くっそ寒いですね、トンクスとエストには試合後に解凍呪文をかけるかといけないうんじやないですか？」

クラーナが震えながらそう言ったがオスカーも同感だった。正直この中で箒で飛ぶのは正気の沙汰ではないように思えるのだ。

「うん、この雪で四日もスニッチが見つからなかったら死人がでるとおもうね」

チャーリーが自分の試合を思い出したのか遠い目をしながら言った。

「あれ？先輩たちってここで見てるんですか？」

三人が後ろを見るとマクゴナガル先生に連れられたレアの姿が見えた。

「レア？マクゴナガル先生？」

「おや、ドロホフにウィーズリー、ミス・ムーディ、そう言えば貴方達はいいつもここにいますね」

マクゴナガル先生が鼻についた雪を取り払いながらそう言った。マクゴナガル先生が連れているという事は…… オスカーはトンクスが取り付けてきたことが何なのか理解した。

「マクゴナガル先生、もしかして、新しいクイディッチの解説ってレアなんですか？」

チャーリーがマクゴナガル先生に尋ねると、マクゴナガル先生は神妙な顔で頷いた。

「そうです。ミス・トンクスがあんまり薦めるものですからやってみようことにしました。まあミス・トンクスよりも暴走しない解説にな

ることでしょう」

「ボクはあんまり自信なかったんですけど、トンクス先輩がとりあえずやってみろって」

レアは少し恥ずかしそうだった。

「大丈夫ですよ、あほのトンクスよりましな解説になるでしょう」

「まあそうだろ」

オスカーもクラリーナに同意だった。トンクスが解説したのではハツフルパフ偏向の解説になることは間違いなかったからだ。

「ではミス・マツキノン、行きますよ、拡声魔法のチェックをしないとイケません」

「あっ…… わかりました」

レアが解説席へと消えていって、すぐにフィールドに選手たちの姿が現れた。吹雪であまり良く見えないが、緑のローブを着ている一番小さい人影がエストのはずだった。

「えーと、聞こえていますでしょうか？ あー、あー、本日は晴天なり」
レアの声がクイディッチ競技場に響き渡った。オスカーはいくらなんでも今日は晴天じゃないと思った。他の観客もそう思ったのか吹雪の音に負けないくらいの笑い声が起こった。

「本日の解説はボク、レア・マツキノンが担当します。よろしくお願います」

緊張したレアの声が響く。フィールドの真ん中ではハツフルパフの黄色とスリザリンの緑が相対するように並んで、真ん中でそれぞれのキャプテンとフーチ先生が立っていた。

「ええ、ちよつと台本通りですけれどもそれぞれのチームの紹介をします」

先にスニッチが放されて吹雪の中へ消えていった。

「スリザリンチームは最早周知の事実としてこう呼ばれています。プルウェット親衛隊です。紅一点のエスト先輩…… プルウェット選手の手を守る男たちのチームです」

観客たちから大きな笑い声が起こり、スリザリンのスタンドからは大きな拍手が起こった。最早この名前はスリザリン寮すら受け入れ

ているようだった。

「ハツフルパフチームはええつと、トンクス先輩…… ええつと失礼しました…… ニンフアドーラとゆかいな仲間たちと呼んで欲しいと書かれています」

今度はスリザリンススタンドからの大きなやじが巻き起こった。オスカーは一年生のクリスマスに貰った万眼鏡でトンクスの方を見た。トンクスはどうもハツフルパフのチームに仕組まれてレアにニンフアドーラと呼ばれたようだった。

髪色がピンクやら赤やらに点滅しているのがその証拠だった。

「なお、ニンフアドーラ選手が相手チームのチェイサーに変身して、ゴールを決めるのは禁止だとフーチ先生から通達するように言われています」

観客、特にハツフルパフの観客は大爆笑のようだった。確かにオスカーもあれはせこいと思っていた。クイディッチの反則は七百以上あるらしいが七変化を使った反則は多分珍しいだろう。

「オスカー、良く見えないんですけどもう始まりますか？」

「ああ、いまフーチ先生がキャプテン同士に握手するように言ったところだと思う」

オスカーはハツフルパフのひよろつとしたキャプテンが握手したあとに顔を苦痛にしかめながら箒に乗るのを見た。スリザリンのキャプテンが指をへし折る勢いで握ったのだろう。

フーチ先生のホイッスルと大歓声とともに十四本の箒が飛び上がった。

「さあ、試合が始まりました。クアツフルはスリザリンのチェイサー、ギャンボル選手が持っています……」

レアはクアツフルのありかを解説していたが、観客の視線は全く別の場所を向いていた。

「パーキン挟みだ！」

隣のチャーリーが興奮して叫んだ。オスカーは過去のエストの語録の中からその単語を引っ張ってきた。確か、二人のチェイサーが相手のチェイサーを挟みこんで、最後に真っ正面から三人目のチェイ

サーが突進する技だったはずだと思い出した。

オスカーがあわてて観客の視線の先を追うと、なんとエストがハツフルパフの二人のチェイサーに挟まれるようにして飛んでいた。そしてその真正面からハツフルパフのビーター二人がやってきて、ブラッジャーを打ち込もうとしていた。

「序盤から凄い展開になりました！ ハツフルパフは攻撃と防御を放棄して、スリザリンのシーカーを潰しにかかりました！」

オスカーは万眼鏡の倍率をあわてて合わせてエストの顔が映るようになった。エストは口を真一文字にして飛んでいる。オスカーはその顔を何度か見たことがあった。何かをやると決めた時の顔だ。

ブラッジャーが撃ち込まれる寸前でエストは一度両手を箒から離して、箒を支点に一回転して逆さまにぶら下がった。オスカーもこの技を知っていた。

「なんとプルウエット選手、ここでなまけもの型グリップ・ロールです！」

エストはそのまま下が見えない状態で地面へと急降下した。エストを挟んでいた二人のチェイサーはその勢いのまま衝突し、そこに二つのブラッジャーが撃ち込まれ、もんどりうって失速した。

エストは急降下しつつ綺麗な円を描いて何事もなかったかのように飛び始めた。

観客から吹雪にも負けないような大歓声が上がった。スリザリンのスタンドでは緑色の絨毯がゆれながら大きな拍手をエストに送っていた。

「レアは普通にクイディッチの解説できてるじゃないですか」

オスカーは一息つきながらクラーナの言う通りだと思った。少なくともオスカーは技の名前がパツとはでてこなかったからだ。

「ハツフルパフは試合開始から思い切った手に出ましたが代償は高くつきました。スリザリンが三十点のリードです」

「でもこれでスリザリンのビーターは当分エストにかかり切りになるだろうね」

チャーリーの言う通り、スリザリンのビーター二人はまるでエスト

を護衛するように周りを周回していた。

エストは何かを二人に言っているようだったが、二人は盛んに首を振っている。エストは説得を諦めたようで、スニッチを探すためかさらに上空へ飛行した。

その間にスリザリンがもう一度得点した。これでハツフルパフとスリザリンは四十点差だった。

「クアツフルがやっとハツフルパフに戻りました！　ハツフルパフの三人のチェイサー、ブラッグ選手、ラフキン選手、ニンファドローラ選手が矢じりのような陣形でスリザリンのスコア・エリアへと向かっています！」

オスカーにもこの陣形が何なのかはわかった。ホークスヘッド攻撃フォーメーションだ。スリザリンのチェイサーがクアツフルを奪おうとして突っ込んだが、三人が絶妙なタイミングでお互いにパスをしてクアツフルを渡さない。

「さあ、スコア・エリアまであと少しです。スリザリンのビーター二人はまだシーカーの傍……　上空からスリザリンのシーカーとビーターが突っ込んできました！」

レアの言う通り、上空から加速をつけてエストとビーターの二人がハツフルパフの三人目掛けて急降下してくる。しかもブラッジャーがその軌道上を飛んでいる。

スリザリンのビーター二人が、同時にブラッジャーを打ち込んだ。さつきブラッジャーをくらったチェイサーのラフキンの背中に命中し、ラフキンはジグザグに落ちていき、なんとか地面ギリギリで箒の制御を取り戻した。

「ドップルビーター防衛です！　この試合は次々に伝統的なクイディッチの戦術が飛び出します！　ブラッグ選手もプルウエツト選手を避けようとして失速しました。しかし、ニンファドローラ選手がスコア・エリアに突入します！」

髪の毛を真っ赤にしたトンクスがスリザリンのキャプテンであるキーパーが守る三本の輪っかに向かって飛んでいく。トンクスがクアツフルをシュートしたが、キャプテンは箒の柄でそれを弾き飛ばし

た。

「シユートは失敗です！ 再度スリザリンの攻撃になります！」

スリザリンのスタンドから大歓声上がる。エストと二人のビーター、そしてキャプテンを称える歌のようなものをスリザリン生が口ずさんでいるのが吹雪を通して聞こえた。スリザリン生の先頭ではスネイプ先生が陰気そうな顔で笑っているのが見える。

「ハッフルパフが最初にエストを潰そうとしたのは正しい気がしませんね」

「そうだね、スリザリンはエストが活躍するだけで目に見えて士気が上がるからね」

オスカーも二人と同じ考えだった。実際にエストの突撃で防衛に成功したスリザリンはさらに二十点加点して、六十点のリードだった。

しかし、それよりも大きな問題があった。吹雪がどんどん強くなっているのである。もはや観客たちからも途切れ途切れにしか選手たちの影は見えなかった。それに吹雪の轟音でレアの解説の声もかき消されつつあった。

オスカーは万眼鏡でエストの姿を探したが、時々映るのはスリザリンの緑のローブとハッフルパフの黄色いローブが切れ切れに見えるだけだった。

「スリザリンが八十点のリー…… 攻撃は…… フルパフに移りました！」

レアの声から、さらにスリザリンがリードを広げたことが分かった。吹雪が少し休まり、スリザリンのゴールポストにトンクスがまたシユートしているのが見えた。

今度は完全にキャプテンがシユートをキヤッチした。トンクスの髪色がほとんど黒のような青色になっていた。オスカーはトンクスの髪色がこんな色になるのを見たことがなかった。

「ハッフルパフの攻撃はまた失敗しました！ スリザリンの勢いが止まりません！」

吹雪で見えなくてもエストが作りだしたスリザリンの流れは止

まっっていないようだった。

「これはスリザリンが止まらないね、うーんあんまりスリザリンの勝ち点が増えるのは良くないんだけどなあ」

チャーリーがこれは困ったという顔でそう言った。

「とりあえずエストでもハツフルパフのシーカーでもいいですから、スニッチを取って終わらしてくれませんかね、こんなのがチャーリーのときみたいにも四日も続いたら hogwarts の人間は半減しますよ」

クラーナはガタガタ震えながらフィールドの方を見ていた。オスカーは自分達でさえこんなに寒いのだからエストやトンクスはその比ではないだろうと思い、クラーナ同様早く終わって欲しかった。

「ここでギャンبول選手にブラッジャーが命中しました！ 取り落とされたクアツフルはニンファドーラ選手にパスされました！ スコア・エリアに向かっています。しかし、ゴールポスト付近ではすでにスリザリンのビーターが……!!」

ここでレアの解説が止まった。そして観客が猛吹雪にも負けないくらい歓声を上げ始めた。

「スリザリンとハツフルパフのシーカー、プルウエツト選手とスタン・プ選手がスリザリンのゴールポストへ向かっています!! スニッチが見つかったのでしょうか!! しかし、プルウエツト選手の方が速い!!」

オスカーも万眼鏡をスリザリンのゴールポストへ向けた。トンクスの黒と黄色、エストの黒と緑色が凄いい勢いでゴールポストへと向かって行くのが見えた。その後ろでハツフルパフのシーカーがなんとか追いつこうとしている。

「ブラッジャーもスリザリンですし、終わりですかね」

クラーナがそう言った瞬間、ひと際大きな吹雪がフィールドを真っ白に染め上げた。オスカーはひどく嫌な予感がした。そしてブラッジャーが何かに当たる音が響いた気がした。

白色の視界の中で黒と緑色の何かが雪で真っ白のグラウンドに向けて真っ逆さまに落ちていくのがとぎれとぎれに見えた。

二人目の魔女

オスカーはそのままグラウンドへ突っ込もうとしたが両脇のチャイリーとクラリーナに止められた。二人が少しオスカーを落ち着かして、グラウンドへ降りる階段からエストが落ちたと思われる場所へ向かった。

「ブラッジャーの……ご…… 誤打により、プ…… プルウエツト選手が墜落しましたが、スニツチはハツフルパフのシーカー、スタンプ選手が取得しました。試合終了です」

オスカーが雪をかき分けて進んでいる上空でレアの声が響いていた。魔法も使わずに進もうとするオスカーを見かねてか、クラリーナが通り道にある雪を溶かして道をつくった。

「最後にニンファドローラ選手…… トンクス選手がゴールしたので、試合結果は百六十対八十でハツフルパフの勝利です」

三人がエストの元につくと、フーチ先生が魔法で造った担架の上にエストをのせて医務室へと運ぶところだった。

エストが落ちたと思わしき場所は雪が少し赤くなっていた。オスカーが何も言えないでいるとクラリーナが切り出した。

「フーチ先生、エストは大丈夫なんですか？」

「うーん、私は癒者じゃないからなんとも言えないけどね、息はしているから大丈夫だと思うよ」

エストの周りに青い顔をしたスリザリンのクイディツチチームが降りてきた。その後ろからハツフルパフのチームも降りてくる。

「ただ、頭を打ってるかもしれないから早くポピーに見て貰わないとね、この娘ときたら杖を握りしめているのに何も魔法を使わなかったみたいだからね」

担架の上のエストは右手で杖を握りしめていて、額からは血が流れていた。

何も言わずに突っ立っているオスカーの隣にトンクスがやってきた。トンクスの顔色はスリザリンチームの面々よりも青く、オスカー

が見たことのあるテッドの黒い髪とほとんど同じ髪色だった。

「ほら、あとの見舞いは医務室でするんだね、ここだとけが人もあんだ達も凍えてしまうだろう」

フーチ先生が杖を振るとエストの担架が動き出した。クラリーナが担架の進む方向へ道をつくった。

ハツフルパフチームのメンバーはトングスの肩を叩いて、励ましの言葉をかけてハツフルパフのスタンドの方へ向かった。

オスカー達とスリザリチームは無言のまま担架と一緒に医務室へと向かった。

「こんな猛吹雪の中クイディッチなんて！　ほんとに狂気の沙汰だわ！」

マダム・ポンフリーはエストの姿を見るやいなや大声でそう言い、ベッドの上にエストを優しくおろした。その後杖を何度か振って、うんうんと頷いた。

「多分、この娘は今日は起きないでしょう。それに少なくとも今晚は安静にしないといけません。可能ならば今週一杯はここにいてください。さあ貴方達も談話室に戻りなさい。体を温めないで貴方達も体を壊しますよ」

そう言っただけでカーテンをシャッターと閉めて、オスカー達を追い出しにかかった。

「マダム・ポンフリー、エストは大丈夫なんですか？　フーチ先生は多分大丈夫だと言っただけですけど」

また全員が喋らなくなったのでクラリーナが質問した。

「ええ、大丈夫ですとも、幸いどこかに血がたまっていることもなさそうですし、落ちた時のショックと疲労で寝込んでいるだけでしょう。しかし、特別措置の学生にクイディッチをさせるなんて……　こんなことはミスター・クラウ……　以来だわ……　この子は女の子なのに……」

マダム・ポンフリーは最初のうちは答えてくれたが、あとは誰かへの愚痴へ変わっていった。

オスカー達は医務室の外へでた。オスカーとトングス、エストにブ

ラッジャーを打ち込んでしまったビーターの一人は扉の前から動くうとしなかつたが、クラーナとキャプテンがため息をついて三人を無理やり引っ張った。

「こんなところで一晩中待つつもりですか？ マダム・ポンフリーは大丈夫だつて言つたでしょう？ だいたいトングスのローブは雪でびしょびしょでしょう！ さっさと着替えないとほんとに風邪をひきますよ」

他のスリザリンチームとチャリーが無理やり三人を連れていった。オスカーの脳裏にはベッドに運ばれた後もずっとエストの手に握りしめられていた杖が焼き付いていた。

オスカーはどうやってスリザリン寮に戻つて、寝室で寝たのかあまり思い出せなかつた。少なくともほとんど眠れていなかった気がした。

朝日が昇るか昇らないくらいの時間に起きてオスカーは医務室へ向かつた。窓から見える外の天気は昨日の猛吹雪がウソのような晴れ模様だつた。医務室の扉には鍵がかかつていないようだった。

医務室の中は朝焼けの色で赤く染まっていた。マダム・ポンフリーはどこかに行つていて、少なくとも姿は見えなかつた。昨日、エストが寝かされたベッドへとオスカーは向かつた。

「エスト、起きてるか？」

「オスカー？ うん、起きてるよ」

カーテンを開くと、パジャマ姿のエストがベッドの上に座っていた。いつもローブに隠れて見えない首から下げられているものがあるらわになつていた。

金の鎖でエストの首に下げられているそれは、複雑な金細工の中にはめ込まれた、ガラス細工の砂時計だつた。

「オスカー、心配しなくても、体は別に大丈夫みたいだつてマダム・ポンフリーは言つてたの、それより試合はどうなつたの？」

オスカーは少し言い返したい気分になつたが、試合の結果をそのまま伝えることにした。

「試合は最後にトunksが得点して、スタンプがスニッチをとったから、八十点差でハツフルパフの勝ちだ」

それを聞くとエストはまだ右手に持っていた杖を握りしめた。
「そうなんだ。初めて負けちゃった」

エストはクイディッチの試合前の夜よりも疲れた顔でオスカーにそう言った。オスカーはそれを見て、エストに色々言いたい気分が抑えられなくなっていた。

「なあ、クイディッチ、魔法、劇の練習、取ってる授業、どれでもいいけどちよつと休んだ方がいいんじゃないのか」

「え？ でもクイディッチはエストがいないと練習にならないし、守護霊の呪文もまだできてないし、劇もまだ練習しはじめたばかりだし、授業はせつかくマクゴナガル先生が魔法省に頼んで特別措置を取り付けて貰ったし……」

オスカーは自分が怒っていることにやっと気付いた。オスカーはエストが特別措置だと呼んでいる砂時計を窓から投げ捨てたい気分だった。

「特別措置があってもエストの体が二つになつたりしないだろう？ どうみても色々やりすぎだろう」

「体が二つには……でも、昔はスリザリンのクラウチさんって人がクイディッチチームをやりながら、特別措置を取り付けてもらってイモリ試験で十二科目パスしたって先生方が言ってたもん」

オスカーが少し強い口調でエストにそう言うと、エストは少し困惑した顔になったが、即座に言い返してきた。オスカーはエストの目線が段々鋭くなってきたと思った。

「エストはそのクラウチさんって人じゃないし、その人は他に守護霊の呪文や劇の練習なんてやってなかったんじゃないのか」

「そうかもしれないけど、疲れてクイディッチで負けたわけじゃないし、昨日だって吹雪じゃなかったら勝ってたはずだもん」

二人はここが医務室なのを忘れて、大声で言い合っていた。オスカーはクイディッチの試合とエストが言ったことで、フーチ先生が落ちる自分の体に呪文をかけもせずに杖を握りしめていたと言っ

たことを思いだした。

「そういうことじゃなくて…… もっと自分のことを考えろって言うてるんだ！ エストは魔法やクイディッチができるかもしれないけど、特別に体が丈夫だとか、特別疲れないってわけじゃないだろ！」
オズカーがそう言い放つとエストは唇をかみしめて泣きそうな顔になった。オズカーは自分が言い過ぎたことに気付いた。

「エストは…… エストは…… ずっと自分のこと考えてるのに……
なんでそんなこと言うの！ オズカーはわかってくれてると思つてたのに！」

エストは涙を流しながら医務室からパジャマ姿で出ていってしまった。オズカーはどうすればいいのか分からずにその場に立ちつくしていた。

医務室の扉がもう一度開かれたがそこにいたのはエストではなく、トunksだった。

「オズカー？ エストが泣きながら飛び出していったんだけど……
ちよつとオズカーも大丈夫なの？」

オズカーは今自分がどんな顔をしているのかわからなかった。どうして、倒れたエストを責めることを言って、泣かしてしまったのか分からなかった。

「なぜ早朝の医務室で大声で騒いでいるんですか！ 安静が必要だと
言ったでしょう！」

マダム・ポンフリーがオズカーたちの大声を聞きつけてやってきたようだった。オズカーは自分が情けなく、トunksにも、マダム・ポンフリーにもエストが飛び出してしまった理由を話せる気がしなかった。

その日からオズカーとエストは冷戦状態だった。お互い一緒に行動こそしていたが、必要な時しか喋らなかつた。

オズカーはエストにどうやって謝ったらいいのか分からなかつた。それにエストはクイディッチの練習こそ年内はなかつたが、未だに全部の授業に出席しているようだったし、守護霊の呪文の練習も劇の練

習も最後までやっていた。オスカーはそれを見るたびに怒りが湧いてくるのだった。

「ねえレアもオスカーのうちに呼ぶのよね？」

トンクスがオスカーとエストの放っている空気に耐えられないとばかりにそう言った。レアはさきほどほとんど守護霊を形にしている、得意げになっているところだった。

「え？ ああ…… そう言えば何も言っていないな」

オスカーはエストのことで頭が一杯で、クリスマスが直前に迫っていることにトンクスがそう言ったことで初めて気づいた。

「やっぱり言っていないのね、レア、クリスマスにオスカーのうちに行くわよね？ 他のメンツは強制参加だから」

「オスカー先輩のお家ですか？」

トンクスはエストが落ちてからいつもに増してハイテンションになっている気がオスカーはした。

「うん、去年もやったんだけど、オスカーの家でクリスマスパーティーをしないかって思ってるんだ。去年はハグリッドが大きなクリスマスツリーを持ってきてくれたしね」

チャーリーがすかさず説明にはいった。オスカーとエストは黙ったままだった。

「そうですね、レイブンクローの友達はみんな家族のところに帰るらしくて、ボクはホグワーツに残ろうと思ってたんですけど、行ってもいいなら行きたいです」

「じゃあ決まりね、オスカー、ちゃんとペンスに言っておいてよ、あと糖蜜パイも」

いつもはうるさいトンクスの声も今のオスカーにはありがたかった。

「トンクスがデブへの道をひた走るのはどうでもいいですけど、私はクリスマス直前までいけないと思いますよ」

「はあ？ なによそれ、オスカーとセーターの交換しないの？」

トンクスはまるで意味が分からないという口調でクラーナに言った。

「そもそもなんでセーターを交換するのが前提になっているんですか！ アラスターおじさんとちよつと用事があるんで、クリスマス休暇の最初の方はいけないってだけでですよ」

「なんてこと…… クリスマスの楽しみがまた一つ減ったわ」

トングスがショックを受けたような顔をした。オスカーはそろそろあの冗談を止めて欲しかった。今年も去年ウィーズリーおばさんから貰ったセーターを着ているが、イニシャルがクラリーナのものになったままだった。

「ということで明日のホグズミードはクリスマスプレゼントを買いにいくわよ、レアも秘密の通路から来る？」

「それはちよつと遠慮しておきます……」

レアが引き気味にそう答えた。オスカーはよくよく考えるとホッグズ・ヘッドはホグズミードにあるので、レアはホグズミードにすでに行っているようなものだと思った。それにあの通路なら絶対にフィルチにばれない気がした。

ホグズミードに行ってもやっぱりエストとオスカーはお互いに何も喋らなかつた。前はホッグズ・ヘッドと叫びの屋敷で時間を全部使ってしまったので、今回は三本の箒やゾンコの悪戯専門店、ハニーデュークスといった普通の場所を周ることにしていた。

いつもなら楽しめるはずのハニーデュークスの甘い匂いや色とりどりのお菓子も、臭い玉やクソ爆弾といったフレッド・ジョージが喜びそうな悪戯グッズもオスカーは楽しむことができなかった。

オスカーはエストへどう謝ったらいいのか相変わらず分からなかつたし、エストへのクリスマスプレゼントも思い浮かばなかつた。

オスカーはそれが自分がエストのことをわかっていないと思いき知らされているようでもたまたまなく嫌だった。

オスカーとエストが一緒にいると微妙な空気が他の三人にも伝染しているようだった。このままでは三本の箒でバタービールを飲んでも余り楽しくないだろうなとオスカーは思った。

「うーん…… もう、わかつたわ、ちよつとオスカーを借りてくから、

みんなは三本の箒でバタービールを飲んでいて」

トunksが唐突にそう言った。三本の箒はもう目の前にあるのだ。

「はあ？ どこ行くんですか？」

「クラリーナが絶対に行きもしない場所よ、ほらオスカー行くわよ」

トunksはオスカーの腕をとってそのまま脇道に連れ込んだ。脇道には洒落た小さな喫茶店があった。看板にはマダム・パディフィツトの店とある。

「ほら、ハッポよ」

トunksに連れられて入ると、店内はフリルとリボンで飾り立てられていた。オスカーはフリルで一杯の服を着たまね妖怪のエストを思い出した。

「あそこに座りましょうよ」

トunksは一番端のテーブルを指して、二人でそのテーブルに座った。隣のテーブルでは先日にもスニッチをとったハツフルパフのシーカー、スタンプが栗色の髪の女の子と一緒に座っていた。スタンプはトunksとオスカーを見ると驚いた顔をして、トunksの方に手を振った。

「うちのシーカーはスニッチは中々取れないのに女の子を捕まえるのは上手いのよね」

トunksがオスカーの耳元でそう言った。オスカーが店内を見回すとカップルだらけで、みんなキスをしたり、手と手を絡み合うように、俗に恋人つなぎと言われるようなつなぎ方でつないでいた。

「お二人さん、注文は何にするのかしら？」

艶やかな黒髪の、ハグリッドを二回り位小さくしたような体を持つ女性が話しかけてきた。オスカーはこの人物がマダム・パディフィツトなのだろうと思った。

「じゃあ、コーヒーを二つお願いするわ」

トunksが注文した。オスカーは隣のテーブルの二人がキスをし始めたので気まずい気分になった。

「で？ せっかく女の子とカップル御用達のお店に来たのに、頭の中

はエストのことで一杯のオスカーおぼっちゃまは結局どうして喧嘩してるのかしら？」

オスカーはトンクスの顔と髪色を見た。トンクスの眼は真剣で髪色は紫と言ったところだった。オスカーはトンクスが面白半分で聞いているわけではないことがわかった。

多分、エストが落ちたことに責任を感じているのだとオスカーは思った。

オスカーは正直なところ、もうエストにどうしたらいいのか分からなかったの、ありのままトンクスに医務室で何があつたのか喋ってみることにした。

「ああ……なるほどね、エスト第一主義のオスカーがエストと喧嘩するなんてって思ってたけどそういうことなのね」

オスカーが話し終わるとトンクスは額を抑えてウンウン唸っていた。

「もう、お前のことが心配だ！俺のために休めええええええって言えばいいんじゃないかしら」

オスカーはトンクスが真顔でそんなことを言ったので、コーヒーをむせ込んだ。

トンクスは心底失礼なやつとも言いたげな視線でオスカーを見た。

「今のが冗談だとしても、ちょうどクリスマスだし、俺がプレゼントだあああああってやれば喧嘩は終わると思うんだけど」

オスカーにはさつきとの違いがさっぱりわからなかった。

「分かってないって顔ね、つまり、オスカーが何考えて言ったのかエストに言えばいいって言ってるのよ、私にはオスカーがエストを理解できないとかしようとしてないようには見えないうって言ってるのよ、わかる？」

トンクスの言葉をオスカーはなんとかかみ砕こうとした。しかし、トンクスの言う通りにするのは凄く難しいことのように思えた。

ただ、トンクスに話したことで、話す前よりもエストの問題が少しだけ解決可能なものに近づいているような気がした。

それに、オスカーは自分も辛い所があるはずなのに、レアやエスト、そしてオスカーのために動いてくれているトンクスが少し心配だった。

「ああ、ちよつと考えてみる…… トンクスは大丈夫なのか？」

「へ？ 私？」

オスカーの発言にトンクスは目を丸くした。

「いや別に大丈夫ならいいんだけど、レアのことがあった時とか、エストが落ちた時からトンクスのテンションもおかしいから」

オスカーがそう言うと、トンクスは髪色をショッキングピンクにして笑い出した。

「オスカー、あなたあほでしょ、今はエストのことを考えとけばいいのよ」

トンクスは本当に愉快そうだった。オスカーはいつものトンクスに戻ったようで、自分の気分も少し明るくなった気がした。

「そんなに他の女の子のこと考えたいなら、誰かの顔に変身してキスしてあげてもいいわよ、ここでキスすれば一週間で噂がホグワーツ中に広まるはずだから」

そう言つてトンクスはなぜかクラリーナの顔に変身して、オスカーの手を取ろうとしてきた。オスカーは椅子に座つて逃げられる範囲で必死に避けた。

二人がテーブルをはきんで奇妙な攻防を繰り広げていると隣のスタンプが何かをこつちに差し出していた。

「ほら、これ君らとスリザリンのシーカーのことが載ってるよ」

スタンプはそう言つてオスカーに日刊預言者新聞を渡し、女の子と恋人つなぎのまま店から出て行った。

トンクスがオスカーの手からひったくつて新聞を読んだ。

「なによこれ…… このリータ・スキータとかいう記者、本当に糞野郎ね」

トンクスの髪色が真っ赤になっていた。オスカーは嫌な予感がした。

「ほら、オスカーも読んじやった方がいいと思うわ、どうせ新聞に載つ

たらあつという間に広まるんだし」

オスカーは新聞の写真に写っている人物が誰なのかすぐに分かった。ギデオンとフェービアン・プルウエットだ。オスカーは父が報道されるのと同時に二人の顔写真が掲載されるので、その顔を良く知っていた。知らなくても、エストやモリーおばさんの顔からすぐに気づいただろう。

記事の内容はまたしても劇のことで、何年も前に危険だという理由で廃止されたのに復活させるのは校長の横暴だと数人の理事が訴えているという記事だ。

その中で今度はアルシーダ役をエストがやるということが書かれている。

そして驚くべきことにエストの出生についてとエストの杖とオスカーの杖の関係が書かれているようだった。なんでも、エストの出生記録から考えるとエストの母親の命日や病気の進行具合と整合性が取れない、エストは本当にプルウエット家の人間なのか怪しいという記事で、またしても匿名の聖マンガの癒者の証言とのことだった。

さらにアントニン・ドロホフと死喰い人たちがギデオン・フェービアン両名を殺害し、家も完膚なきまでに破壊したことや、エストの持っている杖がアントニン・ドロホフの息子の杖と兄弟杖であると書かれている。

記事は最後に上記のことからエストは悪い魔法使いに家を破壊され、杖すら悪い魔法使いと関係があり、まさにアルシーダにふさわしい魔女だと書かれているのだ。

オスカーは沸々と怒りが湧きあがってくるのが分かった。そもそもどうやってエストと自分の杖のことを知ったのか？ あの杖のことを知っているのは、オスカー、エスト、クラーナ、レア、そしてダンプルドア先生、マクゴナガル先生、オリバンダー老人だけのはずだった。

オスカーにはその誰もがリータ・スキータなる人物に口を滑らせるとは思えなかった。

「ちよつとオスカー大丈夫なの？　すごい怖い顔してるわよ」

オスカーが前を見るとトunksの髪色は話始めたときと同じ、紫色に戻っていた。

オスカーはこんな記事を書かれているのにエストに謝ることすらできない自分が、トunksに心配されている自分が嫌だった。

賢者の贈り物

オスカーは自分の家に帰った後も、みんなでクリスマスの飾りつけをしても、ウィーズリー家の人たちやトンクスの両親がやってきても、エストにどうやって謝ればいいのかを考えて続けていた。

そして、その事と間近に迫っていたクリスマスでいったい何をエストに渡すのかという問題がオスカーの頭の中でほどくことができなほほど有機的に結びついていった。

クリスマスプレゼントに何を渡したらいいのか分からないという事実が、エストがオスカーに言ったように、オスカー自身が彼女のことを分かっているという事実には他ならないとオスカーは思い続けていた。

「エストは多分、オスカーから貰えるものだったらなんでも喜ぶと思うけどね」

結局オスカーは一人で考え続けていても答えが出ないと考え、ちょうどいつもご飯を食べるドロホフ邸の広間で座っていたチャーリーとレアにエストに何を渡したらいいのかを聞いてみた。

しかし、チャーリーもレアも笑いながらもよいのではないかと言うだけだった。

「ボクもそう思います。そんなに考えなくてもいいんじゃないでしょうか？ それこそ新しい羽ペンだとか、変身術の本とかそういうのでいいんじゃないですか？」

「そうなのか？ でも、それがエストが欲しいものなのか分からないしな……」

オスカーがそう言うと、チャーリーとレアはお互いに顔を見合わせて笑った。オスカーには自分が今言ったことのどこがおかしいのかさっぱりわからなかった。

「何かおかしいこと言ったのか？」

「いや、最近同じようなこと聞いたからちよつとデジャヴだったただけだよ」

「ボクもそうです、プレゼントは本当に何でも大丈夫だと思います」

オズカーは二人があんまりニコニコしながらそう言うので、すっかり困惑してしまった。休みに入ってからクラリーナとは会っていないので分からなかったが、どうもオズカーが真剣に考えていることをチャーリー、トンクス、レアの三人はずっと樂觀的に考えているようだった。

オズカーは暖炉の傍に座って、これまでのクリスマスプレゼントとエストの好きなモノを考えていた。百味ビーンズ、箒磨きセット、魔法のかかった道具、クイディッチ、チャドリー・キャノンズ、変身術…… オズカーはどれもピンと来なかった。

すると暖炉の火がエメラルド色になり始めた。誰かが暖炉飛行でやってくるようだ。

「クラリーナ先輩ですか？」

「分からないな、あと来てないのはクラリーナとキングズリーと……」

暖炉の中から回転する人影が現れる。オズカーは中から現れる人影を見て、少し気後れした。ピンク色の帽子に鉤鼻、嫌でもエストの眼を思い出させるその眼、暖炉の中から現れたのはミユリエルおばさんだ。

「何だい、見たこと無い子がいるね、チャールズ、この子は誰だい？」
ミユリエルおばさんはオズカーの隣の椅子をひつつかんで座り、レアの顔をじろじろ見始めた。チャーリーはちよつと嫌そうな顔で答えた。

「レア・マツキノンだよ、僕とエストより一学年下のレイブンクロードけど」

「ああ、あんたがマツキノンの家の子かい、日刊預言者新聞に載ってたから名前は知ってるよ」

ミユリエルおばさんの返答を聞いてチャーリーはだから言いたくないんだという顔をした。レアの方は日刊預言者新聞を読んだと聞いて、ビクツと体を震わした。

「ええ？ 別に取って食べやしないんだから、そんなにビクビクすることはないかえ。私やアルバスが子供の頃ならまだしも、今は別にリータ・スキータが書いたようなことはないだろう？ だいたい日刊

預言者新聞で喋るような人間がアルバスより賢いと思うのかえ?」

オスカーも確かに、ダンブルドア先生より賢い人物がああ怪しい記事を書く、リータ・スキータのインタビューに答えるとは思えなかった。

「この家は客人の荷物を運んでくれないのかい?」

「ペンス」

「はい、お荷物は客室の方へお運びさせていただきます」

オスカーがペンスを呼び出すと、ミュリエルおばさんと一緒に暖炉から吐き出された巨大なトランクを持って消えた。

「だいたい劇をやるなんて、エストレヤは全く教えてくれなかったよ、ちよつと前の日刊預言者新聞でやつとあの娘が出るって知ったんだからね、劇に出るマツキノンの娘もここにいるんだから、あんた達も一枚かんでいるんだろう?」

ミュリエルおばさんはエストによく似たその眼で、責めるようにオスカーとチャーリーを見た。オスカーはやっぱりこのおばあさんが苦手だった。

「お、オスカー先輩はラックレス卿役なんです……」

レアがおどおどしながら答えた。オスカーは余計なことを言うなという視線をレアに送るのを必死に我慢した。

「あんたがかい? 確かに幸が薄そうなところは合ってるかもねえ」

ミュリエルおばさんは本当にゆかいそうに笑った。オスカーはミュリエルおばさんにまでついてなさそうだと思われることに結構なショックを受けた。

「それより、あの記事は色々へんなこと書いてあったけど大丈夫だったの?」

チャーリーがミュリエルおばさんにそう聞いたが、ミュリエルおばさんは全く意に介していないようだった。

「あの記事かい? リータ・スキータが色々と大きさに書くのはいつものことだろう? 私もいつも楽しんでるよ、それにエストレヤがうちの子なんてことは目を見れば分かることだろう?」

オスカーはミュリエルおばさんのことをエストが距離を取りなが

らも、嫌っていないのがなぜわかる気がした。

「有名になって良かったくらいだよ、あの娘はどうせアルバスと同じくらい賢くなるかもしれないんだ。むしろ、あの娘が有名になってどっしり構えないといけないのは私やあんた達の方じゃないかえ？

特にあんたはしつかりするんだよ」

ミュリエルおばさんは笑いながらオスカーの背中をバンバン叩いた。オスカーは衝撃で椅子から落ちそうになった。

しかし、オスカーはミュリエルおばさんの言葉でミュリエルおばさんがエストやダンブルドア先生に言っていたことを思い出し、それに加えて、アバーフォースが言っていたことを思い出した。

アバーフォースはダンブルドア先生のことをなんと言っていたのか、ミュリエルおばさんと同じことを言っていないなかったか？ 今世紀で一番偉大な魔法使いでさえ理解者がいなかったらどうなったと思うのか？ そう言っていないなかっただろうか。

ミュリエルおばさんやアバーフォースがダンブルドア先生について言っていたこと、エストが泣きながら出て行った時に言っていたこと、オスカーはそれらが繋がっていくような気がした。そして、オスカーはやっぱり自分が情けなくなった。きつと一番一緒にいるはずなのに、色んな人がどうすればいいのか教えてくれている気がするのに、それをできないからだ。

「それで、エストレヤとウィリアムはどこにいるんだい？ だいたいアーサーとモリーも挨拶にすらこないじゃないか」

相変わらず、すぐに興味が移るのがミュリエルおばさんらしいとオスカーは思った。

結局、オスカーはクリスマスプレゼントを考えつかなかった。クリスマススイブの朝になっても、昼食を食べ終わっても、夕食を食べてイブの夜になっても考えつかなかった。

オスカーとエストがあんまり暗いのでフレッド・ジョージは無理やり明るくしようとして、ミュリエルおばさんの椅子の下でクソ爆弾を爆発させた。残念ながらミュリエルおばさんは遺言書から双子の名

前を外すことになりそうだった。

オスカーはみんなが明日のクリスマスを楽しみにして寝ている間もずっと寝れずに考え続けていた。

どうやったらエストに謝ることができるのか、どうやったらエストの欲しいものが、エストのことが分かるのか考えていた。

そして、どうして自分はエストに謝ることができないのか、どうしてエストのことが分からないのか考えていた。

オスカーは考えた。どうしてアバーフォースはレアを励ますことができたのだろう。オスカーはあの時、自分が見たことのある大人の中で彼が一番辛そうに見えたと思った。

どうして辛いのか、レアが妹に重なって見えたから、妹を死なせてしまった自分が許せなかったからだ。オスカーは思った。

だがオスカーはレアにホグワーツに帰れと言った時のアバーフォースを思い出した。あの時彼の声や表情は怒りでも悲しさでもなく、レアにすがっているようではなかったのか？ あれはそう言うものではなくて、怖がっているようだった。オスカーは思った。

どうして怖いのだろう、オスカーは何故か考えたく無くなってきた。考えれば考えるほど、自分のことが嫌になってくる気がした。考えるのが、それが分かるのが怖い気がした。

なんで怖いのか、オスカーは簡単だと思った。アバーフォースはきっと、そうレアが壊れてしまいそうで怖かったのだ。いつか妹を救えなかったように、兄に言葉が届かなかったように、自分の言葉が届かなかったら、言葉が彼女を傷つけてしまったら、そう考えると怖かったと思っただのだ。

オスカーはベッドで仰向けになって目をつぶっていたが、ハッと目を開けた。

怖かったのだ。オスカーはそう思った。自分はエストが落ちて傷つくと怖かった。だからあんなに怒っていて、腹がたつたのだ。そしてそれを言って泣かしてしまったのが、傷つけてしまったのが怖かったのだ。これ以上エストに嫌われてしまうのが、彼女が遠くに行ってしまうのが怖かったのだ。オスカーはそう思った。

オスカーはまた自分が情けなくなった。あの時、もつときつと別の言い方があったはずなのだ。エストは誰よりも頑張っているのに、オスカーは自分が一番それを見ているのに、何も言わずにそれを否定してしまったと思った。またエストが落ちたり傷つくのが怖くて、自分がそれを見るのが怖いせいで何も考えずに彼女を傷つけてしまったと思った。オスカーは自分の頭が後悔で沸騰しそうだと感じた。

オスカーはエストが医務室から出て行ったあの時、自分は自分のことをずっと考えていると言っていたのを思い出した。

オスカーは思い出した。エストのまね妖怪はいつたい何に変身した？ エストは守護霊の呪文を失敗するたびにどんな顔をしていた？ オスカーは血が出そうなほど自分の手を握りしめた。

最後にエストは何と言って医務室から出て行ったのか、オスカーはもう一度思い出した。エストは彼女はオスカーならわかってきていると思っただのと言っただのだ。

オスカーは自分がエストに渡すクリスマスプレゼントが分からな
いのは当たり前だと思った。オスカーは自分の部屋から出た。

オスカーは今すぐエストに謝りたかった。トunksが言っていたことは全く持って正しかった。オスカーは今考えていることをエストに言っ
て謝りたかった。

オスカーは広間を抜けて、客室の方へ行こうとした。

「オスカー？」

「エスト？」

暖炉もついていない広間でエストが一人、椅子に座っていた。

「オスカー、ごめんね、クリスマスプレゼント、何も思いつかなかっ
たの」

オスカーは謝りたいのは自分なのに、先に謝られてしまったと思っ
た。エストの眼は一年生のいつかの時の様に、くまで縁どられてい
た。

「おかしいよね、オスカーにあんなこと言ったのに、オスカーが欲しい
モノが分かんないの、オスカーのこと分かってないの」

オスカーはいつもこうだと思った。会った時から、いつもエストは

自分より強くて勇気があると思った。自分が勝手に離れていった時も、今も、そしてオスカー自身が何度繰り返しても何も変わっていないことを感じた。

「だからね、オスカーの言う通り、逆転時計は返して普通の授業に戻ろうと思うの、オスカーやみんなを心配させるなら、特別措置も意味ないの」

「それじゃダメだ……」

「え？」

エストはローブから金の鎖でつながれた砂時計を取り出し出していた。オスカーはこれでは駄目だと思った。自分は謝っていないし、どうしてエストが魔法の道具を使っても、頑張っていたのかすらわかっていない。オスカーは一年生の勝手に離れた時にエストがあそこまでしてくれたのに、オスカーはどうしてエストがそうしたのかすらわかっていなかった。今回も同じことをしても何の意味もない、オスカーはそう思った。

「なんでエストはそんなに頑張るんだ？ その時計も、守護霊の呪文も、劇の練習も、クイドイツもなんでやりたいんだ？ なんでクイドイツで落ちても、守護霊の呪文を失敗して辛そうでも、人より一杯授業を受けて眠そうでも、どうしてやりたいんだ？」

「え？ え？ オスカー？」

エストは完全に混乱した顔だった。

「俺はエストに渡すクリスマスプレゼントが分からないくらい、エストのことが分からないんだ。教えてくれ」

オスカーが改めて、エストの眼を真つすぐ見ながらそう言うと、エストは一瞬、視線を下げた後、オスカーを見つめ直した。

「エストが色んなことをやる理由？ それを言えばいいの？ オスカー？」

「そう、教えてくれ」

エストは胸に手をあてて息を吸った。

「エストはね、特別になりたいし、特別な、特別じゃないといけない

の

「特別？」

オスカーは特別という言葉に引っかけかりを覚えた。エストは何度かこの言葉を使っていなかっただろうか？ レアの時…… 占いの時…… 杖の話の時…… オスカーはエストがひとときわ感情を出す時にこの言葉を使っていたような気がした。

「そう、だって、エストが特別じゃないと、エストが生まれる時に死んじゃったお母さんの意味がないでしょ？」

オスカーは自分がエストのことを何も理解せずに色んなことをこれまで言ってきたと思った。

「お父さんも叔父さんも、エストが特別じゃないと、エストが頑張らないと死んじゃった意味がないでしょ？ それはエスト以外の誰も証明できないもん」

二年間も一緒に過ごしていて、オスカーは本当に何もエストのことを分かっていなかった。オスカーはそう思った。さつき自分がどうして謝れないか気付いた時よりも、頭の中と心臓を血が駆け巡っている気がした。

「前にも言ったよね、オスカーと会ったのも二本の杖も特別だって。だってね、すごい大人の魔法使いだって、戦ったり、死んじやったりしても止められなかったのに、最初からそんなことなかったみたい繋げて、会わしてくれただよ、だからあの時すっごく嬉しかったの、きつとこれまでの全部よりずっと特別なんだって」

オスカーは杖腕、左腕に持っていた杖をきつく握りしめた。

「ニワトコの杖はね、不幸になっちゃうって言われてるけどウソなんだって、持ち主が特別な人じゃないと、すごい魔法使いじゃないということを聞かないからそう言われるんだって、だからね特別じゃないとダメなの、だってエストが特別ならみんな幸せだし、周りの人も杖も特別になるでしょ？」

オスカーは違うと言いたかった。どうしてエストだけがそんなに頑張れないといけないのだろうか？ エストの家族はエストのた

めに命を賭けたはずなのにどうしてそれがエストを縛り付けているように見えるのだろうか？ エストの杖は自分とエストを繋ぎとめてくれているのにどうしてそれがエストをがんにがらめに縛り付けているように感じるのだろうか？ オスカーはどうしようもないほど、それらをほどいて、かき分けたかった。

「でも、オスカーやみんなが心配するようなこ……」

「エストは、エストがレアに言ったこと覚えてるのか？」

「レアに…… 言ったこと？」

オスカーは懸命に思いだした。オスカーはあの時のアバーフォーエスのような勇気が欲しかった。あの時のエストのような誰かを、自分の心を傷つけてでも誰かを助ける勇気が欲しかった。

「エストはこう言っただろ、どんなレアでも特別だって、レアの両親にとつてどんなレアでも特別だって言っただろ」

エストは目を丸くしてオスカーの顔を凝視した。オスカーにはエストが怖がっているように見えた。オスカーはエストがどんな顔をしてても全部言い切ろうと思っていた。

「じゃあエストの家族だってそうなんじゃないのか？ ケガするくらい頑張らなくて、エストのことは特別なんじゃないのか？」

エストは決して視線を外さなかったが、瞳には涙がたまっているように見えた。それでもオスカーはトンクスが言ったように、自分が今思っていることを全部、全部言い切ろうと思っていた。

「もし、そう思うんだったら、ちよつとでいいから、疲れたとかきついとかでいいから言ってくれよ、俺はクリスマスに何を渡したらいいのか分からないくらい、エストのことが分からないんだ」

もうエストの瞳からは涙がこぼれ落ちていた。それでもオスカーは口から出てくる言葉が止まらなかった。

「それに、それに、俺にだって、俺にだって特別なんだ。別に杖がなくなつて、どこの家だって、あの時会わなくなつて、エストのことは特別だ!!」

オスカーがそう言い切ると、エストはもう完全に号泣していて、泣きながらしやつくりをあげていた。

「オスカー…… オスカー…… ごめんね、ごめんね、エスト……」
それからしばらくエストは泣き止まなかった。しばらくたって、しやつくりが落ち着き、目を真つ赤にしたエストは首から逆転時計を取り外して、オスカーの方へ近づいてきた。
「オスカー、ありがとうね、でも逆転時計はもう使わないことにするの」

オスカーは少し不安になった。エストの言葉を借りて、なんとかエストに伝えたいことを伝えたいと思った。それでも、また傷つけてしまったのではないかと思うと不安だった。

エストはオスカーの傍まで寄って、すこしだけ背伸びをして、逆転時計の金の鎖をオスカーの首にかけた。

「だってね、オスカーとの時間の方が特別だもん」

エストはそう言ってオスカーに抱き着いた。オスカーは時々匂う、オレンジのような柑橘系の匂いを感じた。自分より暖かい誰かの体温を感じた。自分とは違う誰かの鼓動を感じた。

オスカーは体温が違って、心臓の音のリズムが違って、今の時だけは、一緒の時間にいる。そう思った。

煙突飛行

「エスト、そろそろ離してくれないのか？」

広間には時計がなかったので時間がオスカーには分からなかったが、随分な時間、エストに捕まっている気がした。

オスカーがエストの頭越しに窓を見ると、クリスマスイブの夜は明けて、日が昇り始めているような明るさだった。

すると、火がついていなかった暖炉にエメラルド色の炎が灯った。誰かがドロホフ邸の広間の暖炉へ煙突飛行してくる予兆だった。

オスカーはその誰かが誰なのかは分かっていた。来ると言っても来ていないのは一人だけ、クラーナだけだったからだ。

「エスト、クラーナが来るみたいだから離して……」

「嫌なの」

オスカーは逃げられなかった。オスカーが体をひねったりしている間に暖炉の中に回転する人影が現れて、灰を髪から落としながらクラーナが現れた。

オスカーにはクラーナがクリスマス前よりもやつれて見えた。夏休みの後にキングズクロス駅で会った時と同じように、目が疲れているように見えたのだ。

クラーナは学校指定のトランクを引きずりながら歩こうとして、オスカーとエストを見つけ、目を点にした。

「な！ なんですか!? 二人で抱き合って私を迎えてくれるとはずいぶんな歓迎ですね」

「ほら、クラーナが暖炉飛行で来たんだって」

「嫌なの、だって離れたら、またクラーナとセーターの交換をし始めるに決まってるの」

「はあ!? なんてエストまでトランクのあほの話を真に受けてるんですか？」

クラーナはトランクを大きな音をたてて取り落とすくらい憤慨していたが、エストはクラーナの方を見もしないで、オスカーから離れなかった。

「だって、普通、グリフィンボール生が緑と銀でできた蛇の絵が描いてあるセーターなんて着ないもん」

「それは一年生のときだけでしよう！」

なぜかお互いに顔を合わせもしないで言い争いを始めてしまったので、オスカーは途方に暮れた。

「ペンズ！ クラーナのトランクを……」

「結局一年生の時のクリスマスに何があったのか教えてくれないもん。だいたい今もお互いのインシヤルが入ったセーターを着てるの」「なんなんですか！ 喧嘩していたと思ったら抱き合ってるし、なんで抱き合った状態の人間に色々言われなはいけないんですか！

そもそもあのセーターはトンクスと双子の悪戯だって言ったじゃないですか！」

ペンズはバチつという音とともに現れて、クラーナのトランクを消した後、広間の灯りと暖炉の炎を灯し、オスカーに視線を送った後、またバチつという音とともに消えた。オスカーは生まれて初めてペンズにお仕置きを許可した方がいい気がした。

「ほら、やっぱり一年生の時のクリスマスから話を逸らしたの」

「ほんとになんなんですか！ 喧嘩売っているんですか？ そもそも抱き合っていないで、私に話があるんならこっち見て話したらどうなんですか！」

「嫌なの」

「なんなんですか!!」

クラーナは大きな足音を立てながらオスカーに向かって歩いてきた。オスカーは本当に途方にくれていた。そもそも、エストとクラーナが喧嘩したり言い争いするのをオスカーは見たことがなかった。だいたいそういうのはトンクスの領分だったからだ。

クラーナの黒い眼はエストと同じ様にくまで縁どられていたが、最初に見た疲れではなく、怒りの方が色濃く見えているようだ。オスカーは思った。

「クラーナ、朝飯は食べたの……」

「オスカーは黙っててください、私はエストに喧嘩を売られたんです」

オスカーはエストにもクラリーナにも自分の言葉が届かない様子なのでお手上げ状態だった。

「抱き合ってるって言うんなら、クラリーナだって、ファイア・ウイスキーの時に同じことをしてたの、それにやっぱりクリスマススの事を話そうとしないもん。どうせまたクリスマスプレゼントです！　とか言っでごまかすに決まってるの」

「だから、顔を見て話せて言ってるじゃないですか！」

クラリーナは直接、エストをオスカーから引き離そうとしたが、エストは永久粘着呪文をかけられた様に離れなかった。オスカーは二人の力で体のあちこちが痛かった。

「ゲロを吐いてごまかしてたけど、あの時、お返しですとか言ってたの覚えてるもん」

「本気で喧嘩売ってるみたいですね、もう遠慮しません！」

オスカーは二人がいつもの状態ではないと思った。もうオスカーのローブやセーターはめっちゃめっちゃになっていたし、クラリーナはエストの髪の毛を引っ張ってでも引き離そうとしていたが、エストはそれでも離れなかった。

すると広間の扉が開かれた。二人は大声で言い争っていたので誰か起きたのだろうとオスカーは思った。

「いくらクリスマスだからって、朝から騒ぎすぎじゃないの？　いくら私でも起きちゃうわ……　ちよつとほんとに喧嘩してるじゃないの」

トックスだった。オスカーは最悪の人選だと思った。

「クラリーナの姉貴の声が聞こえるけど、来てたの？」

「プレゼントに貰ったゾンコの商品のお礼を言わないと……」

フレッド・ジョージだった。オスカーは絶望した。

「あらあら、朝から元気なのね」

トックス先生だった。オスカーはどんどん火に油が注がれている気がした。

「離れろって、言ってるじゃないですか！」

「嫌なの！　絶対離れないもん！」

オスカーは絶対に体中があざや爪痕だらけになっているだろうと思った。二人がオスカーのいろんな場所を掴んだり、引っ張ったり、爪をたてたりするのをオスカーは黙って耐えていた。

「ちよつとオスカー、ほんとに修羅場ってどうするのよ」

「いやなんでもいいから二人を離してくれ、話を通じないんだ」

オスカーはオスカーが思っていたよりもトンクスに話を通じそうなので助けを求めた。

「エストが喧嘩してるの初めて見たんだけど」

「俺も、怒ったら怖いけど絶対喧嘩しないと思ってた」

フレッド・ジョージは何故か感慨深げに見るだけで、オスカーの助けになりそうになかった。

「あらあら、いいわね、一人の男を巡って、スリザリンとグリフィンドールが勝負するわけね」

オスカーはトンクス先生が一番役に立たないと思った。

「ちよつと流石にやめなさいよ、みんな起きちやうわよ」

「トンクスは黙ってて!!」

「トンクスは黙ってください!!」

トンクスは信じられないという顔でオスカーの方を見たが、その顔をしたいたのはオスカーの方だった。

「オスカー、ほんとに何をやったのよ……」

「だから早く、二人を引き離して……」

するとついにクラーナはオスカーからエストを引き離した。しかし、二人はその勢いのままドロホフ邸の埃一つない石畳を転がっていった。

「やつと顔を見せましたね、さあなんで私に喧嘩を売ってきたんですか？ オスカーとイチヤイチャしてるのを邪魔されて嫌だったんですか？」

「クリスマスプレゼントなの」

「こいつー!」

オスカーはトンクスの百倍くらいエストはクラーナを怒らせるのが上手いと思った。二人は押し合ったり、お互いの手足に関節技のよ

うなものをかけ合い、何度もお互いにマウントを取り合いながら転がっていった。

「邪魔されなくなかったんなら、あんな暖炉の目の前じゃなくて、どっちかの部屋でイチヤイチャしてれば良かったんですよ!!」

「だからクラリーナへのクリスマスプレゼントなの」

「もうほんとに許しません!!」

ついにお互いの手が出そうになったので、オスカーとトンクスは二人を引き離そうとしたが、先にトンクス先生が杖を振った。二人は空中に浮かばされて、強制的に引き離された。浮かび上がった時に、クラリーナのローブのポケットから何か名札のようなものがこぼれ落ちた。

「だいたい喧嘩してたのはなんだったんですか！ あれですか気を引くためですか！」

「クラリーナはいつつもずるいの！ いつつもいつの間にか仲良くなってるもん！」

「ほら、流石にやめないとダメでしょ？ 二人とも可愛い顔が台無しになってるわよ」

トンクス先生の呪文に捉えられても、二人は空中で言い争いを続けていた。ジョージがクラリーナの落とし物を拾ってオスカーに渡してきた。

「ここはオスカーの兄貴がガツンと決めるべきところじゃないの？」
「確かに、こう俺のために争うんじゃないかな？」

フレッド・ジョージは調子の良いことを言っていたが、オスカーの見たとところ二人の喧嘩にビビっているようだった。オスカーも正直なところビビっていた。二人が杖を持っていたら、オスカーの体はマッチ箱に入れられるくらい小さくなっていたかもしれないとオスカーは思った。

オスカーは名札のようなものに書かれた文字を読んだ。名札には聖マング魔法疾患病院・解除不可能性呪い・特別隔離病棟・入室許可証と書かれており、本人の欄にクラリーナのサインが、保護者の欄にマッドアイのサイン、許可者、担当癒者の欄にもオスカーの知らない

だれかのサインがあった。オスカーの読んだ面の裏には入室する場所に誰かの詳細が書いてあるようだった。しかし、誰かの見舞いにクラーナが使っているモノならば、オスカーは余り立ち入るべきではない気がしたので視線を外した。

それから随分と二人は浮かびながら言い争っていたが、流石に疲れたのか段々静かになっていった。

「オスカー、ほんとに何があったのよ、正直、二人があんなになると思っただけだったんだけど、あの二人がぶちぎれるなんてそうそうないわよ」

「いや……俺もそう思うんだけど……まあ二人共疲れてそうではあったけど……」

トunks先生は二人が静かになったのを見計らってゆっくりとおろした。

「エビスキー 癒えよ！ ほら、二人とも魔女なら魔女らしく杖がある時に決闘するのよ？ 決闘の仕方は教えたでしょう？」

オスカーはトunks先生の方が、トunksよりやっかいな気がしていた。それに二人の傷を癒していたが、実際のところオスカーの方が重傷だった。

「ここでどつちを慰めに行くのかは重要だと思うね、我が弟、ジョージ」

「ああ我が兄、フレッド、これはガリオン金貨よりも重要だ」

フレッド・ジョージが何やら言っていたがオスカーは無視して、とりあえずクラーナの落とし物を届けることにした。オスカーはまだ体中が痛かったがクラーナに近寄った。

「なんですか？ オスカーはエストとイチャコラしてればいいんじゃないですか？ せっかくのクリスマスなんですから」

「いや、これ落としたら」

オスカーが許可証をクラーナに差し出すと、クラーナはオスカーが見たことのない表情をした。オスカーはその表情がクラーナに全く似合っていないと思った。オスカーにはクラーナが酷く怖がっているように見えた。

「読んだんですか？」

「え？ 聖マンゴのお見舞いにいるなんかじゃないのか？」

クラリーナはオスカーの眼をはつきりと見つめたが、オスカーはクラリーナの視線がいつもの強気なモノではない気がした。

「わかりました…… じゃあ寝室を借りますね、昨日はあんまり寝れなかったですし、もう疲れました」

「去年使ってた部屋をペンスが用意してるはずだけど……」

「ありがとうございます。じゃあオスカー、メリークリスマスです」

「ああ、メリークリスマス、クラリーナ」

クラリーナはそう言うなり、扉に向かって歩いていった。オスカーにはクラリーナの後ろ姿がひどく疲れて見えた。よれよれになったロビーの端から見える、クラリーナのセーターに描かれているライオンが伸びてしまつて、疲れているように見えたのもあるかもしれない。オスカーはエストの方へ視線を移して、エストがまだおかんむりなのに気付いた。エストはこっちの方を見て、口を膨らましているように見えた。オスカーはエストにつけて貰った時計を使いたい気分になった。

「オスカー、クラリーナの機嫌は直つたみたいだけど、エストも相当あれなんだけど」

「フレッド、これは何点だと思う？」

「俺では点数を測れない…… ここからの展開が大事だと思うね」

「オスカー君が一番傷だらけじゃないの、羨ましいわね、傷だらけにしても欲しいと思われてるなんて」

トンクス先生がオスカーの傷を癒してくれたが、オスカーはもう相当に疲れていた。そもそもオスカーは昨日からろくに寝れていなかった。それに外野がものすごくうるさかった。

「エスト、なんであんなクラリーナを怒らせたんだ？」

「クリスマスプレゼントだもん」

オスカーが尋ねてもエストはプイッと横を向いてそう言うだけだった。オスカーは流石にちよつと怒りたくなってきた。

「クラリーナは疲れてたみたいだし、クリスマスだろ？」

「だって、クラーナは怒らせないと絶対本当のことを言わないもん」

エストは少しバツが悪そうにオスカーに答えた。確かにクラーナは怒らせるといつも何か言葉を滑らせる気がオスカーもしていた。

「じゃあ、クラーナに何か聞きたいことがあってわざと怒らせたのか？」

「む…… そうじゃないけど…… クラーナは絶対本当のことを言わないんだもん。守護霊の呪文がなんでできないのか相談した時も…… 動物もどきのことを聞いた時も……」

オスカーもエストがオスカーと喧嘩しているときに、何か守護霊の呪文のことでクラーナと話合っているのは知っていた。しかし、本当のことを言わないとは一体何なのかオスカーには良く分からなかった。

「良くわからないけど、流石に今回ののはエストが悪いだろ、どう考えても怒らそうとしてたし、クラーナが起きたら謝れよ」

オスカーがそう言うと、エストはオスカーから視線を外した。

「クリスマスプレゼントだろ」

「うううううう…… 分かったの」

エストはそれを聞いてしぶしぶ謝るのを約束した。オスカーも大分疲れていて、正直、寝室に戻って寝たかった。だいたい届いているはずのクリスマスプレゼントの確認すらしていなかった。

「見たかジョージ、怒れるエストを鎮圧したぞ」

「ああフレッド、純血キラーの二つ名は伊達じゃない」

オスカーはフレッド・ジョージに構う元気はなかった。

「オスカー君は気を付けないと、いつの間にか朝食に愛の妙薬が入っているかもしれないわよ?」

トunks先生が悪戯っぽくそう言ったが、オスカーはそれを聞いてますます疲れた気がした。

「やるじゃないのオスカー、チャーリーやレアも呼んだ方がいいかしら?」

オスカーはとにかく寝ることに決めた。

オスカーは自分の部屋で目を覚ました。起きると首筋に痛みが走った気がした。部屋にあった鏡を見ると、トックス先生が治しそこねたのか恐らくクラリーナがエストを無理やり引き離したときにできた爪痕がまだ残っていた。それにエストに首にかけられた逆転時計がオスカーの胸元でゆつくりとガラス細工の中の砂を落としていた。

オスカーは寝る前の、エストとのことや、エストとクラリーナの喧嘩が現実だということを感じた。そして、足元に小高く積まれたプレゼントを見て、やっとクリスマスが来た気がした。

ウィーズリーおばさんからきた包みをあけてオスカーは今年の分のセーターを取り出した。念入りにイニシャルも見たが、今度はちやんとオスカーのイニシャルになっていた。

オスカーはすっかり伸びてしまったセーターを脱いで、新しいセーターに着替えた。他の包みを開けてみると、なんとキングズリーからのプレゼントは日刊預言者新聞の一年分の定期購読権の権利書というものだった。一緒についていた手紙にはリータ・スキータには気を付けるようにと書かれていた。オスカーはちよつと伝えられるのが遅いと思った。

他にも、ロンとジニーからお手製の蛇の形をしたお菓子が届いたり、チャーリーからセストラルの動く人形が届いたりした。クラリーナからのプレゼントは金色のくねくねしたアンテナ、小型の秘密発見器だった。

時計を見るとちよつとお昼過ぎだったので、オスカーはペンスが昼食を用意しているのを期待して、広間へと向かった。

「わかりました。エストがイチヤイチャしてるのを妨害した私が悪かったですよ、ごめんなさい」

「わかったの、ほんとの事言わないクラリーナをからかったのが悪かったの、ごめんなさい」

オスカーが広間に入るとちよつどエストとクラリーナがなにやらお互いに謝りあっているようだった。オスカーは二人が本当にお互いに申し訳ないと思っているのかは疑問だと思った。

「あらオスカー、家主がこんな時間まで寝てていいの？」

トunksがニヤニヤしながらオスカーにそう言った。なぜか後ろのフレッド・ジョージも笑っていた。

「オスカー、メリークリスマス、朝は大変だったみたいだね」

「チャーリー、メリークリスマス、セストラルありがとうな」

なぜかチャーリーも笑っているようだった。オスカーはエストとクラーナのやり取りを面白がっているのだと思った。

「オスカー、先輩…… それ……」

「オスカーはクラーナとお揃いなのか？」

「え？ ジニー？ お揃いって何が？」

レアがおそろおそろといった感じで、ジニーは楽しそうな顔でオスカーのローブの間を指で指した。

オスカーがハツとして、ローブを脱いでセーターを見ると、なぜかさつき見た緑と銀の蛇柄ではなく、緑と赤が半々で、銀の蛇と金の獅子がいるデザインに変わっていた。さらにイニシャルの部分までクラーナのモノに変わっていた。

「はあ!? さつき見た時は普通だったのに……」

オスカーがトunksとフレッド・ジョージを見ると腹を抱えて笑っていた。オスカーは昨日から溜まっていた疲れと怒りが寝たことで解消されたと思っていたが、一瞬で復活した気がした。

「あああああああ! やっぱり! セーター! もう! 謝らなければ良かったの!」

「ちよつと、これ、なんですか!? 時間経過の変身呪文!? なんでこんな悪戯に高度なことを!!」

そこからはオスカーはどつと疲れた気がして、もうみんなが騒ぐのを見つめるだけだった。いつの間にか傍にいたペンスに昼食を用意して貰って、食べながら大騒ぎを見つめていた。

「ペンス、なんであの時、一瞬で消えたんだ?」

「このペンス、ドロホフ家の屋敷しもべとして、オスカーおぼっちゃまが女性の方とご一緒の時にお邪魔になるようなことは致しません」

そう言うとペンスは完璧なお辞儀をして消えた。オスカーはもつと疲れた気がした。クラーナがトunksを追い回しているのが見え

た。オスカーは良く大暴れしたあとなのにあんなに動ける元気があ
るなど思った。

「ねえオスカー、ホグワーツに戻ったら、忍びの地図を貸してくれる
？」

「忍びの地図？ いいけどどうしたんだ？」

「ちよつとね、キングズリーにいいことを聞いたの、もしかしたら、す
ごく珍しい動物を捕まえられるかもしれないの」

オスカーがキングズリーの方を見ると、なぜかこっちに向かって
ウインクをしてきた。いったい何をエストに吹き込んだのだろうか
？ オスカーは最近のエストのぶっ飛んだ行動を見ていると少し不
安だった。

「珍しい動物？ 確かに忍びの地図にミセス・ノリスはのってるけど、
動物なんだったらチャーリーかハグリッドに協力して貰ったほうが
いいんじゃないのか？」

「うーんとね、多分、それじゃだめなの、魔法生物飼育学じゃでこな
い感じの生き物なの」

エストの眼はまだ少しクマで縁どられていたが、何か楽しいことを
考えている眼だったのでオスカーは心配しないでも良さそうだと
思った。

オスカーは疲れてはいたが、大騒ぎしているみんなや楽しそうな顔
をしているエストを見て、やっとクリスマスらしく幸せになりつつあ
ると思った。

コガネムシ

オスカーにとって、一年生と同じくらい色々なことがあったクリスマスが終わった。オスカーたちは相変わらず、守護霊の呪文と、劇の練習を行っていたが、練習をするにあたってドージ先生からプレゼントがあった。

「検知不可能拡大呪文なの」

「アラスターおじさんのトランクと一緒にですね」

ドージ先生に渡されたトランクには、いくつもの部屋があり、それぞれ劇の進行に合わせた大道具が準備されていた。最後にでてくる幸運の泉であったり、渡れない川であったり、そのほとんどが驚くべき術で再現されていた。

オスカーは、自分たちが習っているような変身術を習い続けたとしても、ここまでのいろんなものを創り出すことが本当にできるのかと思っただ。

それぐらい舞台のセットは素晴らしいものだった。

「ほんとに凄いね、流石はダンブルドア先生ってとこなのかな？」
「今世紀で一番偉大な魔法使いってやっぱり凄いよね」

オスカーたちはトランクの中でセリフや演出であったりを練習したり、時々、巨大な鏡でW.A.D.A.にいるはずのチョーリー先生からアドバイスを貰ったりしていた。

先生方のプレゼントでオスカーたちの士気が上がったのは確かだった。しかし、誰も口に出すことはなかったが、劇を成功させるにあたって大きな問題があるのも確かだった。

守護霊の呪文だった。この呪文が非常に難しい呪文だということ。クラリーナが最初に言っていたし、教えてくれているドージ先生の言葉からもオスカーは理解していた。

しかし、これほど人によって難易度に差がでるとオスカーは思っていないかった。エストが中々成功させることができなかつた時にオスカーは驚いたが、自分自身にとって、これほど難しい呪文があると思っていなかったのだ。

今や、オスカーたちの中で有体の守護霊を創り出すことができないのは、オスカーとクラリーナだけだった。

「ねえ、今日はもう切り上げない？ 多分、この呪文はひたすらやり続けてもうまくいかないの」

「あと二、三回やったらやめる。先にトランクの中のみんなに言つていってくれ」

オスカーがそう言うのと、エストは頷いてトランクの中に消えていった。トランクの外で呪文を練習しているのはオスカーとクラリーナだけだった。

オスカーは守護霊の呪文を唱えるにあたって、色んな記憶を思い出した。エストに決闘で勝ったとき、自分の記憶から自分を取り戻して戻ってきたとき、必要の部屋からエストを取り戻した次の日の朝、少し前のクリスマス。色んな記憶を思い出して守護霊を創ろうとした。

しかし、創ろうとするたびにオスカーはそれらが本当に一番幸福な記憶ではないのではないかという気持ちを抑えることができなかった。そう思う度に杖から出る銀色の何かは形を失っていった。

オスカーは毎回、それを見るたびに森の中の風景が、りんごのような香りが、たくさん飛び交っているトンボの群れが、誰かの笑い声が聞こえる気がした。オスカーはその記憶を使えば守護霊の呪文を成功させることができるのではないかと思っていた。けれども、オスカーはそれをしたくなかった。

それをするとオスカーは自分を許せなくなる気がしたのだ。そしてその記憶以外で守護霊の呪文を成功させないと、周りのみんなを裏切っているような気がして、どうしようもなく自分が嫌になる気がしたのだ。

オスカーはまた杖の先から消えていった銀色の何かを見届け、まだ懸命に呪文を唱えているクラリーナの方へ視線を移した。

「エクスペクトパトロナーナム！ 守護霊よ来たれ！」

クラリーナは目をつぶって眉間にしわを寄せ、何かを思い出すように呪文を唱えたが、やはり銀色のもやはもやのまま、風に吹かれた煙の様に消えていった。

オスカーは呪文を唱えている自分もあんな風に見えるのだろうか
と思った。クラリーナは呪文を唱え続けていた。

「エクスペクトパトローナム！ 守護霊よ来たれ！」

クラリーナが呪文を続けて唱える度に、杖から出る銀色の何かはど
ん形を取ることはなくなり、よりもやは薄くなっているようだ。

そして、それを見るたびにクラリーナの顔は何かに失望しているよ
うな顔になっているようにオスカーには見えた。オスカーはそれを見
るたびに、クリスマス前のエストを思い出してしまつて不安になるの
だった。

「おや、二人とも練習中かな？ ちよつと悪いんだが、これをアルバス
に届けてくれないかな？」

二人の後ろから、ゼイゼイとした声が響いた。ドージ先生がいつの
間にか二人の後ろに立っていて、口ウ付けされた封筒を二人に差し出
していた。

「ちよつと私は四年生の子の補習があつてね、私の足でふくろう小屋
に行くの間には間に合わないからね、お願いできるかな？」

「大丈夫ですけど……」

オスカーは練習を切り上げるにはちよつといいタイミングだと
思った。エストの言う通り、このままやつても守護霊が出てくる気は
全くしなかつたのだ。

「オスカー、校長室に行くのなら合言葉がいるんじゃないですか？」

杖をしまい、いつもの強気な眼に戻つたクラリーナがオスカーにそう
いった。オスカーも思い出した。ダンブルドア先生の部屋に入るに
は合言葉が必要なのだ。

「ああ、合言葉はポルボロンだね、よろしくお願いするよ」

オスカーとクラリーナは用事を頼まれた旨を羊皮紙に書き置きして、校
長室へと向かつた。オスカーもクラリーナもお互いに何か喋ることは
なかつた。オスカーはクラリーナがこういう時に何か話を振つてこな
いのは珍しいと思つた。

二人は校長室の前にあるガーゴイル像にたどり着き、ポルボロンと
唱えた。ガーゴイル像はうやうやしく飛びのいて、オスカーとクラリー

ナの前に螺旋階段が現れた。

二人が校長室のドアをノックすると、中からダンブルドア先生の声が聞こえた。

「お入り」

ダンブルドア先生は二人の顔を見ると驚いた顔をした。オスカーはその青い目を見たことでアバーフォースを思い出した。オスカーはこうして改めてダンブルドア先生を見ると、アバーフォースが最初にダンブルドア先生の兄弟だとわからなかったのは不思議だと思った。

「なんと、オスカー、クラリーナ、二人とは先学期ここで会った以来かな？」

すぐにダンブルドア先生はいつもの優しい顔に戻った。オスカーはドージ先生から渡された封筒を差し出した。

「ドージ先生から渡すように言われました」

「なるほど、エルファイアスの届け物を渡しにきてくれたわけじゃないな」
ダンブルドア先生はオスカーから封筒を受け取ると、またニッコリとした。

「これから理事の一人と予定があつてのう……これが必要だったのじゃ」

ロウ付けを外して、ダンブルドア先生は中の手紙を読み、ふんふんと頷くとまたオスカーとクラリーナの方へ視線を移した。

「それで、劇の方は上手くいっておるかな？ わしもあのセットを創るのに久しく使っていなかった腕を振るつたので、少々期待しておるのじゃ」

「劇の練習は問題なく進んでいると思います」

クラリーナが間髪入れずにそういったが、オスカーはクラリーナが少し目線をダンブルドア先生からずらした気がした。

「ダンブルドア先生、話を変えてしまって申し分けないんですが、守護霊の呪文のコツというのはあるんですか？」

オスカーはダンブルドア先生に質問を試してみることにした。ダンブルドア先生は時々変身術を教える教室を開いているし、生徒が聞け

ば教えてくれる気がしたのだ。それにオスカーは自分一人では永遠にコツをつかめないのではないかと思っていた。

クラリーナの視線がまたダンブルドア先生の方に戻るのをオスカーは今度ははつきりと見た。

「なるほど、守護霊の呪文のコツとは…… そうじゃな、二人は自分が幸せな記憶を使っているのかね？」

「自分が？ ですか？」

ダンブルドア先生は優しく微笑みながらそういったが、オスカーはダンブルドア先生の言った意味があまりよくわからなかった。最も幸せな記憶を使っているのだから、自分が幸せなのは当たり前ではないのかと思っただ。

「そうじゃ、よく考えてみるといいかもしれないのう。君たちが、君たち自身が本当に幸福な記憶でないかと真に強力な守護霊は作れぬ」

オスカーはますます混乱した。つまり、オスカーが今まで使っていた、思い出していた記憶ではオスカー自身が幸福ではなかったというのだろうか？ オスカーはそんなはずはないと思っただ。

「大切なのはどうして幸福なのかじゃよ、オスカー、クラリーナ」

ダンブルドア先生はいたずらっぽく笑って二人にウィンクしたが、オスカーにはさっぱり言葉の意味が分からなかった。どうして幸福なのか？ オスカーはそんなことはわかりきっていると思っただ。みんなと一緒にいたり、遊んだり、そういうことが幸福なのに理由があるのだろうか？ オスカーはそれだけで十分幸福なはずだと思っただ。ダンブルドア先生の言っていることがさっぱり分からなかった。

「二人とおしゃべりしたいのは山々ではあるのじゃが、ああ歴代の校長たちも君たちと喋りたいようじゃが、さっきも言った通り、理事実との約束があるのでのう」

オスカーが後ろの肖像画を見ると、肖像画たちはなんとダンブルドア先生にブーイングしているようだった。

「あの理事と喋るのは時間の無駄ですぞダンブルドア!!」

「その通り、功労賞を貰った二人と話す方がよっぽど有意義だ」

「ダンブルドア、確かにあの十分に純血の尊さを理解している理事と

話すのは有意義だが、二人と話す方がもつと有意義ではないかね？」
口々に肖像画たちがダンブルドア先生に言葉を投げつけた。ダンブルドアはちよつとびつくりしている様だった。

「フィニアス、あなたと話が合う日がくるとはおもわなんだが、約束があるのう」

ダンブルドアは肖像画にそう言った。オズカーは最後に喋りかけてきた肖像画が、去年、ダンブルドアの話に割り込んできた肖像画だと分かった。

「ああ、フィニアスはスリザリン出身の校長なので、オズカー、特に君のファンなのじゃ、去年もわしが、君の勇気をグリフィンドール向きじゃと言ったら割り込んできたじゃろう？」

オズカーはダンブルドア先生の言葉を聞いて、去年、あの肖像画、フィニアスが言っていたことを思い出した。確か、私の寮の学生を他の寮の方が合っていると云うなというニュアンスのことを言っていたはずだった。

「その通りだダンブルドア。我らスリザリン生は選択の余地があれば常に自分自身を助けることを選ぶ。しかし、だからこそ彼の行いがより勇敢になるのだ。それをグリフィンドールの方が合っているなどと……」

「フィニアス、申し訳ないが理事と話さないと、校長たちが楽しみにしている劇に横やりがはいるかもしれないのう」

ダンブルドア先生がそう言うと、フィニアスも含めて校長たちが静かになった。ダンブルドア先生はもう一度二人の方を見た。

「さて、では二人とも体や勉強に障らない程度に劇の方を頑張って貰いたい。それと、ホッグズ・ヘッドのバーテンに会ったら、わしがよろしく言っていたと伝えておくれ」

オズカーとクラリーナはダンブルドア先生の見送りを受けて校長室を後にした。

オズカーとクラリーナが校長室から出て、螺旋階段を下ると、珍しい人物に出会った。

「ムーディにドロホフか……」

一年生の時にオスカーを追い回していた主犯、ファツジ先輩だった。

「お前たちがでてきたってことはまだ来られて無いってことか」

「どういう意味ですか？ ファツジ先輩。ダンブルドア先生はこの後理事に会うって言ってましたけど」

クラーナがファツジ先輩に聞くと、ファツジ先輩は嫌そうな顔をした。

「言つとくがお前らに用はないぞ、俺はおじさんに挨拶をしてこいって言われたからここに居るだけだからな」

「だから誰に用があるんですか？」

控えめに見積もって、ファツジ先輩はクラーナの三倍くらいの体積があつたが、クラーナはファツジ先輩に対して強気だった。

「お前らに関係はないけどな、マルフォイさんが来るから挨拶しにきただけだよ、あの人は魔法省はもちろん、魔法界のいろんなところに顔が利くからな」

「マルフォイ…… ルシウス・マルフォイですか……」

クラーナはその名前を聞いて何か考えているようだった。オスカーはその名前を聞いてピンと来た。ダンブルドア先生がさつき校長たちに言っていたことの意味が分かったのだ。

「ああそうだ。あの人はまだお若いのにホグワーツの理事をしてらっしゃるんだよ、ほら聞いたんならあっちいけ」

ファツジ先輩はしつしと追い払うしぐさをした。オスカーはとりあえずファツジ先輩に従って、空き教室に戻ることにした。

「劇に反対してる理事っていうのはルシウス・マルフォイなんだな」

「ええそうみたいですわね、トンクスが提案した劇に反対してるのがトンクスのおじさんっていうのはなんかアレですね……」

オスカーはクラーナに言われて初めてその事実気付いた。確かに、それはずいぶんと皮肉な話だとオスカーは思った。

オスカーがそのことをちよつと考えながら歩いていると、不意にクラーナが歩みを止めた。

「オスカー、なんで私たちが守護霊の呪文をつかえないんだと思いま

すか？」

クラリーナは真剣な声色でオスカーにそう聞いた。オスカーはクラリーナに応えることができなかった。さっきのダンブルドア先生の話をオスカーはさっぱり分かっていなかったからだ。

「そうですね、控えめに言っただけで、私たちは優秀なほうだと思います。なにせあの闇の帝王が褒めていたくらいですから、普通の呪文ならこんなに苦労しないと思います」

オスカーはクラリーナが本気で話をしているのが分かった。クラリーナが自分自身のことを言うのに、ヴォルデモート卿や死喰い人の言葉が簡単に借りるとは思えなかったからだ。

「多分、私たちには共通点があると思います。なんだかわかりますか？」

オスカーは考えた。クラリーナとの間にあつて、他のみんなとの間にない共通点…… オスカーはすぐに思い立った。自分が守護霊の呪文を失敗して、気を紛らわすために周りを見回して、クラリーナの姿を見るたびに思い出していたことだったからだ。

「閉心術？」

「そうです、私はそこにヒントがあるんじゃないかと思っています」

クラリーナにそう言われてオスカーも守護霊の呪文と閉心術の関係を考えてみた。閉心術を使うことで自分の幸せな記憶が何かわからなくなっているとしても言うのだろうか？ オスカーはそんなはずはないと思った。閉心術を使って、ヴォルデモート卿に対抗した時、考えたのは自分の意志で自分を満たすことだったからだ。それはむしろ守護霊の呪文と相性が良さそうに思えたのだ。

「良く分からないな、むしろ相性が良さそうに思えるんだけど……」

「そうですね、確かに自分を自分でコントロールできる閉心術士の方が相性が良さそうだと最初は思いました。でも、何か考え違いをしているんじゃないかって思うんです」

オスカーは最初に守護霊の呪文を成功したレアを思い浮かべた。確かに彼女は一番オスカーたちの中で感情を制御できないように思えた。つまり、感情をそのまま表せる方が守護霊の呪文と相性が良い

のだろうか？ オスカーはますます良く分からなくなってきた。

「まあ、考えても分からなかったからオスカーに聞いてみたんですけどね」

「俺もダンブルドア先生の話を聞いても分からなかったからな」

オスカーはクラリーナが守護霊の呪文のことを自分に相談してくれたことが少し嬉しかった。エストの様に自分だけで傷ついているわけではなさそうだったからだ。そして、オスカーはエストがクラリーナについて言っていたことを思い出した。たしか、守護霊の呪文の相談と…… 動物もどきのことでほんとのことを言ってくれないと言っていたはずだった。オスカーは少し考えてみたが、そもそもエストが言っていたことの意味が分からなかったし、クラリーナがそうそう嘘をつくとは思えなかった。

「とりあえず帰るか、みんなを待たせてもあれだしな」

「そうですね、またエストに喧嘩を売られるのは勘弁して欲しいです」
オスカーはクラリーナがそう言って笑ったので少し安心した。二人は練習をしていた空き教室に戻ろうと足を再び進め始めた。

しかし、二人が空き教室に近付くと、どうも様子がおかしいことに気づいた。他の四人のずいぶんと興奮した声が聞こえるのだ。

「じゃあこのコガネムシがあのかそ野郎ってことなのね？ エスト」

「トunks、多分このクソ記者は女の人だから野郎じゃないの」

トunksの声も、エストの声もどこか勝ち誇ったような声だった。

「ええ!? ほ… ほんとですか？ 確かに、なんか触角とか目のあたりとかがあのかそ野郎のメガネっぽいかもしれない……」

「レアはこいつに色々やられたんだから、仕返ししないとダメよ、ちよつとチャーリー、なんかコガネムシに良く効くお仕置きとかないの？」

「コガネムシにお仕置き？ うん…… オスのコガネムシの群れの中に突っ込むとか？」

「ええ…… 私前から思ってたんだけど、チャーリーが一番えげつない考え方するわよね、ちよつと引いたわ……」

みんな興奮して何かについて喋っているようだった。オスカーは

クラリーナと目線を合わしてから空き教室に入った。

オスカーが教室に入ると、何やらガラス瓶のようなものをみんながのぞき込んで見えた。

「あら、手紙を届けに行っただけにしては随分と長かったわね」

「ダンブルドア先生と歴代の校長に捕まってたんですよ、で？ 何に騒いでいるんですか？」

トンクスは相変わらずの口調だったが、オスカーは彼女の髪が真っ赤だったので相当興奮していることが分かった。

「ねえ、オスカー、クラリーナ、これなんだと思う？」

エストはニヤニヤしながら、オスカーとクラリーナの前にガラス瓶を差し出した。ガラス瓶の中には太ったコガネムシが一匹、枝や葉っぱとともに入っていた。オスカーはこの冬の時期にこんなに太ったコガネムシがいるのかと思った。エストが変身術で出したのだろうか？

「なんですか？ コガネムシ？」

クラリーナも分からないようで、頭をひねっていた。

「ここにね、忍びの地図があるの」

エストは待ちきれないとばかりに忍びの地図をオスカーとクラリーナに見せた。忍びの地図のエストが指し示す場所には空き教室があり、オスカーやクラリーナ達の名前があった。

「リータ・スキータ……？」

クラリーナがそうつぶやいた。オスカーがもう一度、忍びの地図を見てみると確かにリータ・スキータの名前がオスカーたちと重なるように表示されていた。

オスカーは周りを見回したが、どこにも人の姿はなかった。エストたちが興奮していることを考えると、答えは一つしかなさそうだった。

「このコガネムシがリータ・スキータ？」

「そうなの！ 忍びの地図が嘘をついてないなら、このコガネムシはリータ・スキータなの！ これでエストとオスカーの杖のことが新聞に載ったのがなんでなのか分かったの、クラリーナとドージ先生の部屋

で喋ったとき窓が開いてたでしょ?」

確かに、オスカーとエスト、クラリーナがドージ先生の部屋にいた時、窓が開いていたはずだった。

「多分ね、コイツは窓枠にでもとまってたんだと思うの、どうやってホグワーツに入ったのかは分からないけど、時々入ってきてはこの姿で飛び回ってたんだと思うの」

「でも、コガネムシに変身なんてできるのか? 虫に変身したら人間の考えなんてできなくなるんじゃない?」

確かに、エストの言う通りなら杖の話が漏れた理由は説明できそうだった。しかし、オスカーはそれでもこのコガネムシが人間だとは信じがたかった。それにマクゴナガル先生の話では動物に変身した場合、通常は人の心を保てなくなるはずだった。

「動物もどきなの、虫に変身して人の考え……」

「ありえませんが!! 動物もどきは今世紀に入って八人しかいないはずです!! リータ・スキータの名前は魔法省の名簿にはありません!!」
エストが話している途中でクラリーナが遮った。オスカーにはさっきまで落ち着いていたはずのクラリーナの顔色がどこか青く見えた。

「そうだよ、エストも名簿を見たし、クラリーナに聞いたから知ってるの。名簿の一番新しい登録者はクラリーナのお姉さんのはずなの、それから誰も新しい動物もどきは登録されてないの、もちろんリータ・スキータの名前はどこにもないの」

エストはそう説明して笑った。オスカーは登録されていないという事実がリータ・スキータにとって悪く働くためだろうと思った。しかし、エストの顔色とは反対にクラリーナの顔色は刻々と青くなっていっていった。

「私、マクゴナガル先生に動物もどきの授業の時に聞いたんだけど、未登録で動物もどきの能力を悪用するとアズカバン行きらしいわよ」

トンクスもニヤニヤしながらガラス瓶をちよつと傾けたりして、コガネムシが必死に枝にしがみついているのを見ながら言った。クラリーナの顔色はそれを見てさらに青くなった。ほかのみんなはコガネムシに注意がいついて気が付かないようだったが、オスカーは明

らかにクラリーナの様子がおかしいと思った。

「うーん、僕もあんまり信じられないけど、確かにそれならリータ・スキータが色んなスキヤンダルをすっぱ抜けるわけだよね」

「動物もどきって、他の人の魔法で元の姿に戻せるんですか？　というか、この状態で人間に戻られたらガラス瓶くらい割れちゃうんじゃないか……」

レアが恐る恐るという感じで、ガラス瓶をつつくとコガネムシはその衝撃で底まで落ちて、足を上にしてもがいていた。クラリーナは大きく目を見開いてそれを見ていた。オスカーはクリスマススの時に見た表情、クラリーナに一番似つかわしくない表情だと思った。クラリーナは明らかに怖がっていた。

「大丈夫なの、このガラス瓶には割れない呪文をかけてあるから、もとに戻ったら大変なことになるの、それに動物もどきを人間に戻す呪文は七年生の教科書に書いてあるの」

「そうね、ちよつとこのデブチンのコガネムシには反省してもらわないとダメね、こつちの都合のいい時まで人間の姿には戻らないでいてもらいましょうよ」

クラリーナは本当に信じられないという顔でエストとトンクスの顔を見ていた。オスカーはクラリーナにとつて、エストとトンクスはおぞましいものに見えているようだと思った。オスカーは流石に見えていられなかった。

「クラリーナ、大丈夫なのか？」

「私……　私は……」

みんなの視線がクラリーナに集まった。クラリーナは一瞬オスカーに視線を送った後、もう一度ガラス瓶の中のコガネムシに視線を移した。

コガネムシはさつき落ちた時の衝撃で触角が少し折れていて、ガラス瓶がつるつるで足でつかむことができないからか、まだ体をひっくり返したままもがいていた。

クラリーナはそれを見て、また大きく目を見開いた。クラリーナは杖を手が白くなるくらい握りしめていた。

「ちよつと、クラーナ、顔が真っ青だけど大丈夫なの？」

「クラーナ？ どうしたの？」

トンクスとエストがそう聞いたが、クラーナはまるで二人を怖がっているように目線を合わせようとしなかった。

「私は…… ごめんなさい。ごめんなさい…… き…… 気分が悪いので帰ります」

クラーナはそう言うなり、耐えられないとばかりに飛び出していった。オスカーはこんなクラーナを見たことがなかった。みぞの鏡の前にいたクラーナでさえあんな表情をしてはいなかったと思った。彼女があんなに怖がっているのをオスカーは見たことがなかった。

誰も喋らない空き教室の中、コガネムシが起き上がろうとして、足についた爪でガラス瓶をひっかく音が、カシャカシャという音が、オスカーにはひどく大きく聞こえた。

三人目の魔女

クラリーナが突然帰ってしまったから数日経った。オスカー達はそのことについて誰も触れなかった。クラリーナもそのことについて触れなかった。

ガラス瓶に捕らえられたリータ・スキータは未だ捕らえられたままだった。正直なところ、オスカー達はこの瓶詰めにされた記者をどうすればいいのか分かっていなかった。

魔法省に突き出す。日刊預言者新聞に密告する。ダンブルドア先生に報告する。色んな案がオスカー達の間で浮かんだが、結局どれが一番いいのか分からず、ただ瓶詰めにされたままだった。

それよりもオスカーは前のエストの様にクラリーナがなってしまうのか心配だった。守護霊の呪文の練習を前よりも懸命にやっているようだったし、ドージ先生に頼んで、何か別の練習もしているようだった。

今日もクラリーナはドージ先生の所に一人で向かった。クラリーナはオスカー達に何をやっているのか話す気はないようだった。

「今日、朝ご飯食べてる時にハグリッドがアッシュワインダーが生まれすぎて大変だから、来てくれないかって言ってたんだけどどうする？」

チャーリーが待ちきれないという顔でそう言った。

「凍結呪文が必要なら、エストを連れて行けばいいんじゃないの？」

「ちようどクラリーナもいなくなったし、オスカーが取られる心配はないわよ？」

「なんなのそれ……別にクラリーナがいたからってそんな心配はしてないの」

「エストをからかったトングスの髪色がピンク色ではなかったの、オスカーはちよつと不思議だった。」

「俺はここで呪文の練習をしとくから、みんなで行ってきてくれ」

オスカーは最初からそのつもりだった。オスカーはクラリーナがドージ先生の所から帰ってきた後も守護霊の呪文の練習をしている

ことを知っていた。オスカーは少なくともクラーナが戻ってくるまではここで練習をしているつもりだった。

「ボクは今日はトランクでセリフと動きの練習をしようかなって思います」

「じゃあ私もレアに付き合おうわ、そしたら他の人の動きと合わせられるでしょうし」

レアとトングスの二人も今日はハグリッドの所へ行く気はないようだった。

「じゃあエストとチャーリーで行ってくるの、肥らせ呪文をかけなければ多分魔法で運べるの」

「多分、卵も貯まってるんだよね…… 僕たちは愛の妙薬を作るわけじゃないから使えないけど」

オスカーはエストとチャーリーを見送って、一人で呪文の練習に戻ろうとした。

「それで？ オスカーは何か言われてないの？」

「何か？ どういう意味だ？」

何故かトングスはトランクの中に入らず、オスカーに質問してきた。トングスの髪色は赤みがかかった紫と言ったところだった。

「その様子なら、オスカーにも何も言ってる無いのね」

「クラーナ先輩のことですか？」

レアがちよっと心配そうな顔でそう言った。

「そうよ、明らかにおかしかったでしょ？ いつものクラーナならリータ・スキータを捕まえたら喜ぶと思わない？」

「確かに、そうかもしれません……」

「絶対そうよ、だってファツジ先輩ごと階段を爆破して喜ぶようなやつよ？」

オスカーはそんなことをしていたのかとファツジ先輩が少し可哀想になった。そして、それをトングスがオスカーの顔でやっていたことを思い出して、先日会ったファツジ先輩の反応に納得がいった。

「オスカーもおかしいと思ったからあの時そう言ったんじゃないの？」

「そうだけど……正直なんでクラリーナがああなつてたのかはわからないしな」

オスカーはそういってローブのポケットからガラス瓶を取り出した。エストにオスカーが持つててと言われ、忍びの地図と一緒に渡されたのだった。

ガラス瓶の中は大量の葉っぱが詰められていて、太ったコガネムシの姿は見えなかった。

「その人に聞けばわかるんでしょうか？」

レアはガラス瓶を指で指した。オスカーも確かにこれを見てクラリーナの様子がおかしくなったのだから、この人物、リータ・スキータに聞けば何か分かるのかもしれないと思った。

「けどそいつから話を聞くには、人間の姿に戻さないといけないわよ？ 逃げられちゃうかもしれないし、ホグワーツの中で元の姿に戻られても、どうやって先生に説明するの？」

オスカーは正直、ガラス瓶の中身がどうなるかと知ったことではないと思っていたが、確かに話を聞くのならホグワーツの外の方がいい気もした。戻られてもホグワーツの外に追い出す方法がない気がするのだ。劇が終わるまではガラス瓶の中身には瓶の中でじつとしてもらうか、ホグワーツの外にいて貰いたかった。

「先輩たちのホグズミード休暇はずいぶんと先ですよ……」

「そうね、それにホグズミードで元の姿に戻すにしても、逃げられないような場所でやらないとダメな気がするし、他の人に見られても言い訳するのが面倒ね」

コガネムシが突然三本の箒でリータ・スキータに変身するのを想像して、オスカーはこれはないなと思った。つまり、ホグズミードで元に戻すにしろ、リータ・スキータが逃げられない状況で、コガネムシから元の姿に戻っても大丈夫な場所が必要だった。

ホグズミードについて考えている時、オスカーは何か最近、ホグズミードに関連することを言われたことを思い出した。そして、同様に悩んでいるレアの顔を見て完全に思いだした。

「ホッグズ・ヘッドのバーテンなら大丈夫なんじゃないか？ 何が

あつても黙つてくれそうだし、何なら今からでもいけるだろう？」

「アバーフォースさんですか？ 確かにあそこなら誰にもばれずに行けますけど……」

レアがちよつと気後れした顔で言った。オスカーはレアがアバーフォースに言われたことを思いだしているのだろうと思つた。ただ、アバーフォースの方はレアが来ることを拒みはしない気がした。

「ホツグズ・ヘッド？ ファイア・ウイスキーを飲んだところよね？ 忍びの地図の秘密の通路で行くつてこと？」

「あんまりみんなには言つて無かつただけど、必要の部屋からあのバーにいけるんだよ」

「はあ？ 何よそれ、レアをファイア・ウイスキーでいただくこうとしてたつてこと？」

オスカーはやつぱりトンクスと喋つていると頭が痛くなつてくる気がした。

「バ、バタービールしか飲んでないです……」

「あほだろ、あそこのバーテンはダンブルドア先生の弟なんだよ、だからもし何かあつても大丈夫だろうし、大抵のことをしても黙つてくれると思うんだよ」

「何よそれ！ すごい重大な情報じゃないの！ ダンブルドア先生に弟さんがいたなんて初耳だわ」

トンクスの髪色はほとんどピンク色にもどりつつあつた。オスカーは本当にトンクスは調子のいい人間だと思つた。

「じゃあ今から行きましょうよ、クラーナもないしちようどいいわ」「今からですか？ エスト先輩たちが戻つてきたら誰もいないのは不味いんじゃない？」

「大丈夫よ、どうせチャリーとハグリッドが盛り上がつて帰つてこないわ」

オスカーにもその様子が容易に想像できた。それにガラス瓶の中身をクラーナがない間に処理してしまいたいののは確かだった。

「でぶちんのコガネムシを捕まえたエストには申し訳ないけど、こんなキモイ虫はとつと処分するに限るわ」

トンクスはガラス瓶を指ではじきながらそう言った。葉っぱの中で何かがガサガサと慌てて動いたようだった。

オスカー達三人が必要な部屋につくと、必要の部屋はまるで待っていたように扉を創り出していた。オスカーは一年生のころにクラーナとトンクスと来た時は幾度か壁の前を行ったりきたりしないとなかったのに、エストやレアの一緒の時はいつもそこにあるように扉が現れると思った。

三人は真鍮のランプに照らされた道を進んでホッグズ・ヘッドへとたどり着いた。

「うわ、この臭い…… 確かにホッグズ・ヘッドね」

トンクスは着くなりだしぬけにそう言った。オスカーは肖像画になっっているドアを閉めて、暖炉から降りた。肖像画のリアナは虚ろではあったが、確かにオスカー達に向けて笑っていた。

「また来たのか？ ホグワーツに戻れと言っただろう」

アバーフォースが扉を開けて、部屋に入ってきていた。オスカーには隣のレアがビクツと震えるのが見えた。

「アバーフォースさん、ダンブルドア先生がよろしく言ってくれと言っていました」

「ふん、兄がそう言うときは大抵ろくでもないことが起こる前触れだ」
アバーフォースは鼻を鳴らしながらそう言った。だがオスカーはアバーフォースの目線の動き方がダンブルドア先生にそっくりだと思った。人を見るとき視線の動きが、目をみてそれから体全体を見るような視線の動きがそっくりだった。

「あなたがダンブルドア先生の弟さんね」

「お前は…… 前にカウンターに金をぶちまけた魔女か……」

アバーフォースがものすごく嫌そうにトンクスを見た。オスカーはあの時のトンクスは大人の姿だったはずなのに見破られていると思っただ。

「お前じゃなくて、トンクスよ。じゃあアバーフォースさんにお願ひがあるんだけど」

オスカーはこういう時のトンクスの凶々しきは役に立つと思った。自分ならこんなに嫌な顔をしている人間に何か頼もうとは思えないと考えたからだ。

それからトンクスはリータ・スキータのことをアバーフォースにありのまま話した。アバーフォースは話を聞くとさっきのトンクスを見た時と比べて、百倍くらい嫌なものを見る目で、まるで汚物を見るような目でガラス瓶を見た。

「この部屋には姿くらましができない呪文がかかっている。部屋の外に出さなければそいつが逃げることはないだろう。下にいるから何かあつたら言え」

アバーフォースはそう言うと言と扉を開いて下の階へ消えていった。オスカーはずつと気を張っていたレアが息を吐くのを見た。

「じゃあこいつを出せばいいのね」

「トンクス、先に俺らが杖を出しておいた方がいいだろ」

「おっと…… そうね、いきなり暴れられても困るわ」

オスカーは杖を抜いて、この部屋唯一の扉の前に立った。ガラス瓶はエストが防音呪文をかけていたはずなので中のリータ・スキータにはオスカー達の会話は聞かれていないはずだった。

三人はそれぞれ杖を抜いて、ガラス瓶を取り囲んだ。トンクスが瓶のふたをあけて、中身の枝や葉っぱごとテーブルにぶちまけた。

その瞬間、テーブルの上に女が現れた。折れた宝石縁の眼鏡、カールした髪型、長い爪、オスカーはその手に杖が握られているのが見えた。女が何か言おうとした瞬間、オスカーは反射的に盾の呪文を発動した。

傍の二人と女はオスカーの放った盾の呪文で体勢を崩した。その瞬間を逃さず、オスカーは杖を振るい、紅の閃光が女の胸を貫いた。女は壁まで吹き飛ばされ、杖だけがオスカーの手に収まった。

女は壁際に座り込んでゲホゲホとむせ込んでいたが、オスカーは杖をずっと向けていた。動物もどきは杖が無くても変身できるはずだったからだ。

「ヒュー、オスカー容赦ないわね」

「あほか、杖を持ってただろ」

「全然反応できなかった……」

オスカーが改めて女を見ると強烈な既視感に襲われた。オスカーはこの女を見たことがあった。それも今と同じ様な場所で……ヤギのような臭いと女の寶石縁の眼鏡がオスカーに思いださせた。

「お前、ファイア・ウイスキーを飲んでいた時にいただろ」

「え？ 私たちがホッグズ・ヘッドで飲んでた時ってこと？」

「そうだ。羽根ペンで何かを書いてた魔女があのとときいたはずだ」

オスカーは頭の中で色んなものが繋がっていく気がした。あのと、確かクラリーナが劇のことを話していたはずだった。そして、レアの記事が出たのはその後のはずだということを思いだしたのだ。

「流石に死喰いの息子さんは容赦ないですね」

「その椅子に座れ、変身するそぶりをちよつとでも見せたら、失神させて、ダンブルドア先生か闇払いに突き出す」

オスカーはできるだけ抑揚のない声で女にそう言った。女は怖い怖いとばかりに体を震わせるふりをしながら椅子に座った。

オスカーはこの女がこの状況を楽しんでいるようにしか見えなかった。つまり、何か余裕のある状態に見えた。

「リータ・スキータですよ？」

レアがおそろおそろ言うとうと、女はニッコリと笑って、レアに喋りかけた。

「そうなんです。日刊預言者新聞のエース記者こと、リータ・スキータとはあたくしのことなんです。アシヤ役のお嬢さん？」

「うるさいわよ、あなたは私たちに聞かれたことだけ答えてればいいのよ」

トングスは髪色を赤くしながらリータ・スキータにそう言った。

「へえ、それでアンドロメダ・トングスの一人娘さんと、アントニン・ドロホフの一人息子さんはあたくしに何を聞きたいんですか？」

オスカーはやはりこのリータ・スキータという女は全く油断できないと思った。恐らく、オスカー達全員のプロフィールを、オスカー達がお互いに知っているより深く調べているに違いなかった。

「レアとエストを記事にしたのは何故だ？ いや、そもそもなんでホグワーツの劇のことを記事にしようとした？」

「なんでって、感動的じゃないよ？ 二人はまさにアシャ役とアルシード役にふさわしい生い立ちじゃない。実際に反響も大きかったじゃない」

オスカーはこのリータが話をずらそうとしている気がした。オスカー達をわざと怒らそうとしている気がしたのだ。

「なんでホグワーツの劇を記事にしようとしたのか聞いてるんだ。そもそもなんでお前はあの時ホッグズ・ヘッドにいた？ 答えろ」

オスカーは杖を上げてリータの胸に狙いを定めた。リータは少し唇を噛み、なぜかトンクスの方をちらっと見た後、喋り始めた。

「情報提供があったじゃない。ホグワーツの校長が無理やり危険な劇を復活させようとしているから、記事にしてくれというお話だったじゃない。それでホッグズ・ヘッドに行ったらあんたたちがいたじゃない」

「何よそれ、一体だれがそんなこと頼んだのよ」

オスカーはそれが誰なのかおおよその検討はついていた。劇に反対していて、日刊預言者新聞の記者を動かせるような人物……リータは質問したトンクスの方を向いてニヤリと笑った。

「あんたたちの学校の理事のひとりじゃない。これ以上は守秘義務で言えないじゃない。記者には信用が大切じゃない」

「ボクには貴方に信用があると思えないです」

「マーリン・マッキノンの一人娘さんに教えてあげるじゃない。記者にとっては売上こそ信用じゃない。読者はわたくしの記事を沢山買う。つまり、読者はあたくしのことを信用しているじゃない」

そう言って笑うリータの顔は、オスカーが見たことのない種類の邪悪さを持っていた。

「お前はまだ記事を書く気だったなら、何について書く気だったんだ？ 俺のことか？」

オスカーが杖を突き出しながら喋ってもその邪悪な笑みは消えなかった。

「死喰い人の息子の記事なんて怖くてかけないじゃない。それにヘタレた騎士の話なんかしなくても、泉の魔女は、メインヒロインはまだ

残っているざんしょ？」

「やっぱりクラーナについて書く気だったのね！」

トンクスの髪の毛はオスカーが見たことのないほど真っ赤に染まっていた。そして、オスカーもこのリータという女がオスカーが知らない種類の残酷さを持つ人間だと認識しつつあった。

「当然ざんしょ？ 劇の配役を誰が決めたかは知らないざんすけど、今回の三人の配役は完璧だったざんす。仮にあたくしが決められたとしても、怖くてやれないざんす」

「どういう意味よー！」

リータは両手で自分を包んで、怖いとばかりのリアクションをした。オスカーはリータの言葉を聞くたびに気分が悪くなる気がした。「もしかして知らないで役を決めたざんすか？ まあもし知っていて決めたんなら、あんたは真ん中の妹の方ではなくて、あの残酷な姉の方の性格に似たとしか思えないざんすね、ああ、確かにあんたがここで変身していた姿は、あたくしの同級生にそっくりだったざんす」

トンクスの髪色が赤ではなくて、もつと暗い色に、どんどん黒い色に近づいているようだった。

「それにあんた達が知らされていないということは彼女はあんた達に知られたくなかったということざんしょ？ あたくしだったらあんな配役をされたら傷つくざんすねえ……」

「黙れ！ 聞いたことだけに答えろと言っただろ！」

オスカーはまるでこのリータの言葉は毒のようだと思った。いったいどうしてこんなに人を傷つける言葉を吐くことができるのだろう？ オスカーにはこのリータという女の言葉は考えに考え抜かれて、人を傷つける様に創られているように感じられた。

「どうしたんざんす？ ああ、二人は身内がアズカバン送りだから仲がいいざんすか？ 確かにアントニン・ドロホフの息子がベラトリックス・レストレンジの姪と仲がいいと書いた方が受けはよさそうざんすね、マツキノ、プルウエット、ムーデイなんて名前よりよっぽど信憑性があるざんす……」

リータが最後まで言い終わるまでに、レアがテーブルに置いてあつ

たバタービールの瓶でリータの顔をぶん殴った。リータの宝石縁の眼鏡が完全にひしゃげて、片方だけになって耳から下がっていた。

「なんでそんなひどいこと言えるんですか！　もうこいつは絶対に許せない!!」

「な… 何をするぞん…」

レアの怒りは収まらない様で今度はバタービールの瓶を思いっきり投げつけて、リータの口に当たった。歯が何本がおかしな方向に折れた様にオスカーには見えた。

「トunks先輩だって、オスカー先輩だってみんなのこと考えてるのに！　なんでこんな…　こんな奴なんかにひどいこと言われないといけないんだ!!」

次は椅子をかかげて殴りかかろうとしたので、オスカーとトunksはレアを止めないといけなかった。

「お前は何も知らないくせになんでそんな分かったようなことを言うんだ!!　あることないこと書いて!!　皆の顔も知らないくせに！　こんな奴、コガネムシの時にフクロウにでも食べさせてやれば良かったんだ!!」

レアは泣きながら叫んでいて、二人に止められながらも椅子をリータに投げつけた。リータは手でかばおうとして、長い爪が折れたようだった。

オスカーとトunksがレアを落ち着かせるまで随分時間がかかった。オスカーはレアが杖を使わなくて良かったと思った。恐らく、杖を使っていたらリータの残骸を動物もどきの悪用者の残骸として魔法省に提出しなければならなかっただろうからだ。

「分かったか？　お前は動物もどきだってばらされたら終わりなんだぞ？　俺の父親と一緒にの場所に行きたいなら行かせてやる」

「分かったぞんすから、あの娘をどつかにやるぞんす」

リータは酷い有様だった。眼鏡は完全に元の形を保っていないかつたし、真っ白い歯も何本か折れ、髪の毛はぼさぼさになり、手入れされた長い爪は何本か折れたりはがれたりしていた。オスカーは治癒呪文をリータにかける気はさらさらなかった。

「いいか、じゃあお前はこの先、俺たちに関する嘘八百の記事を書かないと誓え、ちよつとでも俺たちの誰かがそう感じたら、お前は即刻アズカバン送りだ」

「この先ざんすね、分かったざんす」

オスカーにはリータが神妙にしているように見えた。もうオスカー達に関わりたくないと思っっているようだった。

「二人もそれでいいか？」

「私はいいわよ、これで劇の邪魔になることはなさそうだしね」

「ボクは…… それでいいです。どうせこんな奴、こんなこといつまでも繰り返してられないはずです」

オスカーはこのリータという女をできるだけ早く自分達の周りから遠ざけたかった。この女がいるだけで皆が不幸になる気がしたのだ。

一階へ続くドアを開けて、リータをオスカーは外に出した。そして杖を向けながら、先ほど武装解除した杖を渡した。

「ミスター・ドロホフ。もう一度聞くざんす。約束はこの先、あんた達のことについて嘘八百を書かないざんすね？」

「ああそうだ。お前が約束を守るなら俺たちも約束は守る」

それを聞いてリータはニヤツと笑った。オスカーは全身に悪寒が走ったのが分かった。

「いいことを教えてあげるざんす。速報以外の日刊預言者新聞の記事は三日前に記事を投稿するざんす」

リータは何を言おうとしているのか、オスカーはどんどん嫌な予感が高まってくるのを感じた。

「約束は守るんざんすよ、オスカー・ドロホフ、ニンファアドーラ・トンクス、レア・マツキノ。あたくしは破っていないざんすからね、明日の新聞を楽しみにするざんす」

オスカーが杖を上げようとした瞬間、リータは邪悪な笑みを浮かべてバチっという音と共に姿くらましをした。

次の日、日刊預言者新聞にホグワーツの演劇に関する三回目の記事

が載った。

『幸せの記憶』

本誌の特派員、リータ・スキータはこれまで二回にわたって、ホグワーツ魔法魔術学校における演劇の再許可の問題について記事を寄せてきた。

本件は昨年度九月、ホグワーツ魔法魔術学校の変人校長、アルバス・ダンブルドアとその友人でもあり、長年ウイゼンガモットの評議員を務めているエルファイアス・ドージから理事会に提案があり、いくつかの反対があつたにもかかわらず、強行採決された案件である。

そして、これまでその劇の配役について先の戦争の犠牲により傷ついた二人の少女が選ばれていると記事上では記述した。

本記事では三人目、魔法界でも屈指の人気演目である『豊かな幸運の泉』のメインヒロインであるアマータ役の少女がどうして選ばれたのかについて報告するものである。

アマータ役に選ばれたのは、クラーナ・ムーデイ。グリフィンドル寮、三年生に在学するダークグレーの髪と黒い瞳を持つ可愛らしい少女である。

ムーデイという苗字から、彼女がこれまで魔法界に何代にもわたって優秀な闇払いを輩出してきたムーデイ家の血族であることがわかる。

現に彼女は伝説の闇払い、マッドアイ・ムーデイこと、アラスター・ムーデイの姪にあたる。そして、変身現代を購読していた方ならば、彼女の姉、イライザ・ムーデイについてもご存じではないだろうか。

イライザ・ムーデイは変身現代への寄稿回数二十回と若年ながら現代の変身術に多大なる功績を残した魔女であり、非常に困難な魔法の一つ、動物もどきの最年少登録記録、及び現在最新の登録者である。そして彼女は先の戦争で姿を消した闇払いの一人でもある。

先の戦争で語られる悲劇において、闇払いはそのエピソードの多くを担っている。恐らく一番有名なのはフランク・ロングボトムとアリス・ロングボトムの悲劇であると考えられる。

ロングボトム夫妻はベラトリックス・レストレンジ、バーティ・ク

ラウチ・ジュニアと言った凶悪犯によって気が狂うまで拷問され、死んだ方がましとまで呼ばれる状態に、廃人へと変えられてしまい、例のあの人が没落して数年経つ今となっても聖マンガ魔法疾患病院で治療が続いている。

しかしながら人の形を保っているという意味ではかの夫妻でさえ慰めのある状態であるかもしれない。

聖マンガ魔法疾患病院には特別隔離病棟が存在する。この特別隔離病棟には他の人に危害を加える可能性のある状態にある人物が収容されている。そして、イライザもこの特別隔離病棟に収容されている。

聖マンガ魔法疾患病院のとある癒者は証言する。「あんなに痛ましく、恐ろしいものは見たことがない」また違う癒者は証言する。「あそこに行った後は彼女の叫びと彼女の爪の音がいつも耳から離れない」動物もどきは全てその変身形態が登録されている。魔法省の名簿で誰でも簡単に確認することが可能である。イライザの変身形態は高い知恵を持ち、人肉を好む蜘蛛、アクロマンチュラである。

動物もどきの特徴は人の心を保ったまま動物に変身できることである。ただし、それは正規の手段で動物、人間に変身する場合である。この変身を何らかの手段で妨害されたり、正規のプロセスを踏まない場合、非常に不可逆で残酷な状態になる。伝説ではクインタペッドと呼ばれる魔法生物は敵対する一族によってこの状態に変えられた動物もどきであると考えられている。

彼女、イライザは戦争末期に死喰い人の集団に囚われ、不完全な変身の結果、半身半獣の状態になり、人の心を失い、その場の死喰い人を全滅させた後、魔法省闇払い局、魔法生物危険規制管理部が全員で出撃し捕らえられた。

この事件は当時の魔法省にとって衝撃の事件であり、魔法大臣ミリセント・バグノールド自ら緘口令をしいた。本記事が掲載できるのは無論、魔法大臣が代替わりしたためである。

さて、ここで元の豊かな幸運の泉の配役の話に戻りたいと考える。この演目でアマータが最後に捧げるのは捨てられた恋人との幸福な

記憶である。

ではアマータ役にイライザの妹を選んだ人物は何を考えて、配役したのだろうか？ 姉妹は年の離れた姉妹であり、妹の物心がつかない年齢で両親は死去している。本記事を執筆している筆者から見ても、妹にとつて姉がどのような存在であったのかは想像に難くない。

そしてこの配役を考えた人物が、これまでの二人における配役を考えるにいったいどのような幸せな記憶を捨てると言っているのかを想像するのも難しくないと考える。

執筆者の私はこのような形で、先の戦争の犠牲者である少女たちを利用して劇に利用するような人物、今回提案を行ったアルバス・ダンブルドアとエルファイアス・ドージの人格を疑わざるを得ないと考える。

果たしてこのような形で行なわれる豊かな幸運の泉に本当の幸せが訪れるのであろうか？ 読者の皆様様には一考していただきたい。

闇の魔術に対する防衛術

「それで？ トンクスは私に何を言いたいんですか？」

「何って……」

オスカーはドア越しにクラリーナとトンクスの会話を聞いていた。ホッグズ・ヘッドでリータ・スキータとの一件があった次の日、朝刊に劇のことが掲載された。

これまでの記事と同様に、わずか一日の間で記事の内容はホグワーツ中に広まったようだった。

しかし、クラリーナは一見これまでと変わらないように見え、いつもと同じ様にオスカー達に一言告げて、ドージ先生のところへ行くこうとしていた。それをトンクスが追いかけて、途中の教室に連れ込んだのだった。

オスカーは後ろから二人の後を追いかけたが、教室に入ろうとして二人の会話のトーンを聞き、入るのを少し戸惑っていた。

「良くわかりませんが、私を追いかけて話があるって言うってここに連れてきたんですから、何か話があるんでしょう？」

「それは……アレよ、わかるでしょう？」

「アレじゃ何も分かりませんよ、あほが進行して語彙力まで無くなっただんですか？」

オスカーはエストと喧嘩した後のクラリーナと同じくらいクラリーナの声色がとげとげしく聞こえた。

「なっていないわよ、つまり、あれよ、最近様子がおかしいじゃないの」「様子がおかしい？ 何の話ですか？ 私の目の前に髪の毛の色がおかしい魔女ならいますけど……」

クリスマスのエストや、ホッグズ・ヘッドでのリータと同じで、オスカーはクラリーナがわざとトンクスを怒らせようとしているように聞こえた。

オスカーには扉についていた窓から、トンクスが髪の毛をかきみだしているのが見えた。

「だから！ あのクソ記者を瓶詰めにした時から、クラリーナは様子が

おかしいって言ってるのよ！」

「良くわからないですね、様子がおかしいってなんですか？」

トンクスの髪色は赤色になった。オスカーにはクラリーナがちゃんと答える気が無いように聞こえた。

「ドージ先生と一体何をやっているのよ、私たちには何も言っていないじゃない」

「ああ、私が守護霊の呪文を使えないと不味いでしょう？ 実際に劇で使うのは私なんですから、だからちよつとコツを聞きに行ってるだけですよ」

クラリーナはそんなことかというような口調だった。トンクスの髪色がさらに濃い赤になったようだった。

「ウソよ、じゃあなんでオスカーを連れて行かないのよ」

「別にオスカーは使えなくても劇には問題ないでしょう？ マグルの騎士役なんですから、それにオスカーを連れていったらまたエストがうるさくなるでしょう」

オスカーはクラリーナがそんなことを気にするとは思えなかった。むしろこれまでのクラリーナなら嬉々としてやりそうなものだと思うのだ。

「クラリーナがそんなこと気にすると思えないわ、それに守護霊の呪文の練習をしてたんなら、オスカーにそのヒントくらいあげてもいいんじゃないの？」

「別に、ヒントをあげられないくらい練習が芳しくないだけです」

トンクスはクラリーナが全く取り合う気が無いようなので、齒がゆいようだった。

「もういいわよ、だからクラリーナは大丈夫なのかって言ってるのよ」

「はあ？ 大丈夫って何がですか？ 私がトンクスに心配されるようなことはないと思いますけど、私としてはあなたのドジが進行しないのかの方が心配ですね」

オスカーはそろそろ入った方がいいと思いはじめた。もし喧嘩をし始めたら、いつものような喧嘩ではなく、クラリーナがエストとしての喧嘩の様に止めれなくなる気がしたのだ。

それにここはホグワーツで二人共杖を持っているはずだった。

「明らかにあのでぶちんのコガネムシを見て、様子がおかしくなつてたじゃないの！」

「あの時は気分が悪くなつたつて言ったでしょう」

「ウソよ！ あの後エストが言つてたわよ、クラーナは動物もどきの話になるとちゃんと取り合つてくれないつて」

「エストに話すような知識がないだけですよ」

二人の口調がさらに激しくなっているようだった。オスカーは入るタイミングが掴めなつた。

「なんでそんなに話そうとしないのよ」

「だから何の話ですか？ トンクスに心配されるようなことは思い当たらないつて言つてるんです」

トンクスの髪色は今や燃えるような赤毛だつた。チャーリーやウィーズリー家のみんなよりもその赤が赤く見えるとオスカーは思つた。

「今日の新聞を読んだからよ……」

「今日の新聞ですか？ 今日の新聞に私が心配されるような内容は無かつたと思ひますけど」

クラーナの口調がやつと取り合う気のない口調から、少しだけ変わったようにオスカーには聞こえた。

「だつて、クラーナのお姉さんのことが載つてたじゃないの、それもあのリータ・スキータが書いていたし……」

「だから何ですか？ 私の姉のことが新聞記事に載つたからなんだと？」

まるでできるだけ感情を押し殺そうとしている様に、できるだけ冷静を保とうとしているようにその声は聞こえた。

「だつて…… あんなに酷いことがあつたなんて知らなかつたし……」

それにあの記者は動物もどきだつたし……」

「つまり、私が可哀そうだとでも？ あの記事を見て、可哀そうな私に情けをかけに来たつてことですか？」

「そうじゃないわよ！ だつて、あんなことがあつたら誰だつて触れ

「それだ、くだらないだろう……」

「それはどういう意味ですか？」

オスカーはこれまでの二人の会話を聞いて、クラーナがトングスの言葉を聞き、できるだけ言葉を選んで回答しているように聞こえていた。だが、今回はクラーナからトングスの言葉を遮り、その言葉には明確な感情の色がのっていると感じた。

「ど…… どういう意味って何よ」

「触れられたくないと思っっているというのはどういう意味だと聞いているんです」

嫌な予感がするとオスカーは思った。何かに火がつく前のようだった。

「だ…… だって、あんな事が…… あんな酷いことがあったら触れられたくないのは当たり前だし、みんなに知られたら嫌じゃない……」

「そんなのはあなたが決めることじゃない！」

クラーナの大声がドア越しのオスカーにまで響いてきた。

「いいですか、ニンフアドーラ・トングス。私がいつ姉のことを触れられなくないなんて言いましたか？ いつ私がそんなことを言いましたか？」

「え…… だって、動物もど……」

「私は…… 私の姉は…… 誰かに言うのを！ 誰かに知られるのを恥じるようなことをしたことは一度だってない!!」

トングスはクラーナの逆鱗に完全に触れてしまったようだった。オスカーはどうやって二人の間に入ったらいのか分からなかった。

「他の誰がなんと言ったって!! 私は誇りに思ってます!!」

「そ…… そんなつもりじゃ……」

「じゃあどういふつもりで言ったんですか!!」

クラーナがこれほど怒っているのをオスカーは見たことがなかった。エストと取っ組み合いをしている時でもこんな声をしていなかったとオスカーは思った。

クラーナの声には言い訳を許さない力があつた。

「だって、クラリーナが辛いんじゃないかって……」

「トングスに何が分かるんですか!!」

オスカーはクラリーナの言葉が自分にも刺さった気がした。トングスの髪色がクイディッチの試合の後に見たような黒色になっていた。「父親も母親もいて、クリスマスだって一緒にいられるじゃないですか! ダイアゴン横丁だって家族といけるじゃないですか! 何が分かるんですか!!」

「わ…… 私…… ほんとうにそんな……」

クラリーナの言葉はトングスにもオスカーにも刺さっていたが、喋っている本人を一番深く刺し貫いているようだった。

「いいですか! これでわかったでしょう! 私はふさわしくない!! あの記事が書いている様なアマータにふさわしい人間じゃないんです!!」

「そんなこと……」

「そんなもこんなもない!! だから私のことなんか放っておいてください!!」

クラリーナはトングスにそう言い切ると、扉に向かって走ってきた。オスカーは慌てて扉の前からどいた。扉から出るなりそこにいたオスカーに目もくれず、ドージ先生の部屋がある方へクラリーナは駆けだしていった。

オスカーは教室に入った。オスカーはトングスが泣いているのを初めて見た。

「私…… 私…… 最低だわ……」

トングスの髪色はテッドの髪色そのものだった。オスカーはトングスの本当の髪色はこの色なのだろうと思った。

「レアもエストもクラリーナも、みんなのこと何も知らないで一人で騒いでたのよ」

オスカーは少し前の自分を見ているようだと思った。オスカーはトングスがみんなのことを考えていたと知っていた。

「私が一番意気地なしだわ。そのせいでクラリーナを傷つけちゃった」
そんなことはない。オスカーは強く思っていた。彼女に意気地が

ないのなら、勇気がないのならクラリーナに話をするなどできない
と思っていた。心配だと、直接言うことができるとは思えなかった。
オスカーはそれがどれだけ難しく、勇気がいることなのか知ってい
た。

「守護霊の呪文なんてなくて……」

「クラリーナのところに行くぞ」

「え……？ オスカー？ ちょっと！」

オスカーはトングスの手を取って立ち上がらせた。オスカーはト
ングスがこんな顔をしているのが嫌だった。馬鹿なことを考えてい
る顔の方が好きだった。

自分を心配してくれて、奮い立たせてくれたトングスがこんな顔に
なっていることに我慢ならなかった。リータ・スキータのような奴に
ひっかき回されていることに腹が立った。

豊かな幸運の泉はみんな幸せになる話のはずだった。

オスカーは忍びの地図を取り出した。クラリーナの名前はドージ先
生の部屋の隣にあった。オスカーはトングスを連れて歩き出した。

「ど…… どうしちゃったのよ、オスカー」

「傷つけたんなら謝ればいいだろ」

トングスを引つ張りながらオスカーはそう言った。

「けど…… もっかいやつても同じなんじゃ…… またクラリーナが
……」

「同じにはならない」

オスカーが引つ張つてもトングスは動こうとしなくなった。オス
カーはトングスの目を真っ直ぐに見た。

「そんなの分からないじゃない！ だって私は全然クラリーナのこと分
かってなく……」

「分かってないなら、これから分かればいいだろ」

「えっ？」

「俺にはトングスがクラリーナのこと考えてないなんて思えないし、分
からないでいいと思っっているみたいには見えない」

オスカーがそう言うとトンクスは目を丸くした。トンクスの髪色に少しずつ色が現れ始めた。

「ほら、行くぞ」

もう一度トンクスを引つ張ると今度は抵抗しなかった。

クラリーナがいるはずの部屋はもうすぐそこのはずだった。その部屋の前にはドージ先生が優しい顔で立っていた。

「クラリーナは中ですか？」

「ああ、この中だよ」

オスカーはドージ先生の言葉を聞いてからトンクスの方を見た。トンクスの髪色は青色で顔には不安が浮かび上がっていた。

「トンクス、ここで待っていてくれ、ちよつと経ったら呼ぶから」

「え？」

「クラリーナが話せそうになったら呼ぶから」

トンクスに言い残してからオスカーは部屋のドアに手をかけた。

「オスカー君、闇の魔術に対する防衛術で大切なのは何か覚えているかな？」

「大切なことですか？」

「ああ、ある闇の生物に対する防衛術は、闇の魔術に対する防衛術全体で最も大切なことだ。それができなければ、我々は絶対に闇の魔術に對抗することはできないだろう」

オスカーはそれが何なのかすぐにわかった。そして、この部屋にもっと早く来るべきだったと思った。それが何なのかオスカーはクラリーナから教えてもらったことがあつたはずだったのだ。

「まあ私は全く心配していない。ここに来たということがそれを証明しているのだから」

ドージ先生の声はせいぜいとしんどそうな声だったが、オスカーにはそれが力強く聞こえた。オスカーは頷いて、ドアを開いた。

部屋の中は闇の魔術に対する防衛術で使う教室だった。敵鏡、かくれん防止器、秘密発見器。いつか必要の部屋で見たような魔法の道具が並んでいた。

部屋の真ん中にガタガタ動く洋服ダンスが置かれていて、クラリーナ

はその前に立っていた。

「今度はオスカーにバトンタッチですか？」

「そうだ。トンクスに謝ってもらおう」

クラリーナがオスカーを真つ直ぐに見た。オスカーにはその視線がいつもより強気に見えた。ただ眼は泣きはらしたように赤かった。

「扉の前にいたってことは話を聞いてたんでしよう？」

「そうだ。最初から全部聞いてた」

クラリーナの目線がもつと強烈になったようだった。オスカーはその表情を最近何度も見ていた。レア、エスト、アバーフォース、三人が自分自身を嫌だと思っているときにする表情にそっくりだった。

「じゃあもう私のこいつが何に変わるのか分かりますよね？」

クラリーナががたがた揺れる洋服ダンスを指し示した。オスカーはクラリーナのそれが何に変わるのか分かっていった。そして、どうしてドージ先生とまね妖怪の話を聞いていた時にあんな顔をしていたのかやつと分かった。

「なんかおかしな話ですね、オスカーは私のみぞの鏡に何が写るのか知ってますから、一番望むものと一番怖いものを知られているってわけですね」

オスカーはクラリーナの言う通り、両方分かっていった。そして両方分かってはいるが故にクラリーナの表情が痛ましかった。クラリーナは話続けた。話さないと言葉を出さないと辛い様だった。

「いつだったか、エストが杖について喋ってた事を覚えてますか？」

クラリーナが自分の長い杖をかかげるように持った。

「この杖はイトスギの杖なんです。オリバンダーの老人は私をこの杖が選んだ時に喜んでました。姉さんと同じだって」

そうイトスギの杖。オスカーはエストがその話をした時に、まさにクラリーナにふさわしい杖だと思ったのだ。

「イトスギの杖はエストの言う通り、英雄の杖って呼ばれてるらしいです。なんでも自分や人の心の闇に向き合うことを恐れない人が持つ杖らしいです」

またクラリーナは最初の表情に戻った。自分自身に憤っている顔だ。

オスカーは誰かがその顔をするのが嫌だった。

「こんな私にふさわしくない杖はありません。みぞの鏡に囚われる私が？ まね妖怪すら退治できない私が？ 笑える話ですね」

クラーナは乾いた笑みを浮かべたが、オスカーはこんなに笑いとほど遠い表情を見たことがなかった。

「それに加えて、アマータなんてこんなにあつてない配役も無いでしょう。トンクスに心配されて、逆に怒り出す私が？ トンクスの言う通り、私は姉さんのことを知られるのが嫌だったんですよ、私は怖かったんです。トンクスやあなたやみんなにそうだって知られるのが怖かったです。きつとだから怒ってごまかそうとしたんです」

クラーナは歯を食いしばって言い切った。オスカーは黙って聞いていた。全部聞かないといけない気がしたのだ。

「分かりますか？ 私には勇気がないんです！ みぞの鏡に……自分と向き合う勇気が！ 姉さんと向き合う勇気が！ イトスギの杖にグリフィンドールにふさわしい勇気がないんです!! オスカー!! 私にはあなたみたいな勇気がないんです……」

クラーナは全て言い切った様だった。オスカーは言い返したかった。オスカーはイトスギの杖にクラーナほどふさわしい魔女を知らなかった。グリフィンドールの金と赤が、獅子がそして勇気が、クラーナよりふさわしい人を知らなかった。

「俺はクラーナより勇気がある人に会ったことはない」

「そんなわけないでしょう！ きつき言った通り、私には勇気がないんです!! あなたみたいに自分の記憶に……自分の怖いものに向き合うことすらできないんです!!」

オスカーは思った。いったい誰が命をかけてヴォルデモート卿の前に立てるといふのだろうか？ 一体誰がおぞましい他人の記憶と向き合えるというのだろうか？ オスカーはそんな人を一人しか知らなかった。

「勇気がないんならその人は苦しんだりしない。苦しんでそれでもやろうとしない」

始めてホグワーツに来たあの日、組み分け帽子に言われたことをオ

スカーは思い出した。勇気がないのならそのことを分かりやすいのだ。気づきもしないのだ。苦しむこともできないのだ。クラナは泣きそうな顔でオスカーの話を聞いていた。

「閉心術の訓練で制御を失って戻ってきたとき、クラナがいてくれてよかった」

オスカーは知っていた。他人を心配だと、傷つけたくないとそう伝えるだけのことにどれだけの勇気が必要なのか、この半年で嫌というほど思い知らされていたのだ。

アバーフォースがトンクスがみんなの顔が浮かんだ。相手に伝えるのか？ 相手に理解されるのか？ 相手を傷つけないのか？ それだけで不安になるのだ。そしてもし伝わらなかった時にいっただれほど自分が傷つくのか、オスカーはその怖さを知っていた。

「それが一体なんの証明になるって言うんですか！」

「すぐくうれしかった。安心した。俺はいてもいいんだってそう言ってもらえたみたいだった」

では一体、人の記憶に入り込むのは、人の心に入り込むのはどれほどの恐怖なのだろう。オスカーは想像すらできなかった。それも、誰かの命がかかっている状態で、その恐怖を十分に理解した状態で、どれだけの勇気があればそんなことができるのだろう。オスカーはあの時、クラナがいてくれて本当に良かったと思った。

「だ…… だからそんなのは何の……」

「俺は記憶を見たのが怖かった。エストもああなるんじゃないかって怖かった。でも、隣にクラナがいて、あれを見たはずなのにいてくれて、やつと勇気がでたと思う」

クラナの瞳には涙が浮かんでいた。オスカーはクラナが泣くのを見るのは三度目だと思った。オスカーは思った。どうしてあの時あんなに安心したのか、あんなに勇気がわいたのか。簡単だった。怖かったからあんなに安心したのだ。怖かったからクラナの勇気が際立って見えたのだ。そしてそれを見て自分も勇気がでたのだ。オスカーはやつと色んなことが分かった気がした。

「だ…… だから……」

「クラーナがそう思わなくても俺はそう思ってる。クラーナに勇気があるって」

オスカーは周囲を見回した。金色のくねくねしたアンテナ、秘密発見器。クラーナがクリスマスプレゼントにオスカーに贈ったのと同じものが部屋の隅に見えた。オスカーは歩いて傍までより、それを手でつかんだ。この魔法の道具は嘘を見つけると震えるはずだった。

「俺は世界で一番クラーナに勇気があると思ってる。勇気があるからそんなに悩んでるんだと思ってる。色んなことを正面から考える勇気があるって思ってる」

秘密発見器は微動だにしなかった。代わりにクラーナが泣く声だけが空気を振るわしているようだった。

「勇気があるからみぞの鏡やまね妖怪が難しくなるんだと思う。ダンブルドア先生とフィニアスって校長がした話を覚えてないか？」

「ウウツ…… な…… なんて幸せなのかとオスカーがなんで勇敢に見えるかですか？」

そう、オスカーはやつとわかった。あの校長たちはしつかりとコツを教えてくれていたのだ。どうして幸せだと思うのか、どうして勇気があるように見えるのか。簡単なことだった。

「多分、俺が守護霊の呪文を使えなかったのはなんで記憶が幸せなのかわからなかったからだと思う」

「なんで…… ですか？」

「俺が認めたくなかっただけで簡単なことだったんだと思う。不幸なことが嫌なことがあるから幸せだって、もう会えないからあの時は幸せだったって思ってるんだって、それを認めるのが嫌だったんだ」

オスカーがそう言うのを聞いて、クラーナはシヨックを受けた顔になった。オスカーはエストがどうして守護霊の呪文を使えるようになったのか、レアがどうして最初に使えるようになったのか、きつと同じことなんだろうと思った。

「クラーナのまね妖怪が倒せないのも同じことだと思う。勇気があるから、正面から見てるからそいつは倒せないんだ」

オスカーはクラーナの手を取って、洋服ダンスに向かった。クラー

ナは洋服ダンスに近づくと明確に歩くスピードが遅くなった。

「クラリーナは俺の一番怖いものが何かわかるんじゃないのか？」

クラリーナは何も言わず、泣きそうな顔で唇を噛みながらオスカーを見つめていた。

「まね妖怪の授業の時、まね妖怪が何に変身するか分かって、俺は怖かった。どうやって倒したらいいのか分からなかった。笑いを誘うような馬鹿馬鹿しいものに変えるなんて絶対できないと思った」

クラリーナは黙って聞いていた。その表情は恐ろしいものを見るようだった。

「だって、そんなこと許されなかった。俺はそんなことするくらいなら逃げた方がいいって思ってた。きつとあの時、エストがまね妖怪を退治しないで、ドージ先生が前に出なかったら、きつと逃げてた。クラリーナみたいに何度も向き合ったり、そんなこと絶対できなかった」

オスカーはそれを言うのが怖かった。エストにもクラリーナにもトックスにもチャリーにも、キングズリーやペンスにだって言うのが怖かった。自分が臆病だと、恐怖の記憶と向き合うのが怖いと認めるのが怖かったのだ。

「だから、記憶に向き合えるクラリーナは俺より勇気があるし、あの時、記憶に向き合えたのはクラリーナのおかげだって思ってる」

オスカーはクラリーナに言うのが怖かった。クラリーナに拒絶されるのが怖かった。それでも言わないといけないとオスカーは思った。クラリーナが向けてくれた勇氣に返さないといけないかった。そう思ったのだ。

「今度は俺の番だろ？ ドージ先生だって言ってただろ？ 二人でやればいいって」

「オスカー……」

クラリーナはオスカーが握っていた手を握り返した。オスカーは杖を取り出した。

オスカーが杖を振ると洋服ダンスの扉が開き、中からまね妖怪が現れた。オスカーは先に前に出た。まね妖怪が形を取り始めた。ホグ

ワーツでは見ることもないマグルが着る服を着た女の子の体だった。胸のところには焼き焦げた跡があり、どこかその服が、肉が、何かが焼ける匂いすらするようだった。オズカーはクラリーナと繋いでいる手を握りしめた。クラリーナはその手を握り返した。

「リディークラス!!」

まね妖怪の姿が変わった。今度はホグワーツのローブだった。スリザリン生が着るローブ。黒い髪に光のない紅い目、それはエストの体だった。

今度はクラリーナが前に出た。杖を振った。

「リディークラス!!」

カシヤ、カシヤとハサミが床をする音がした。何メートルもある巨大な体に巨大なハサミ、黒い巨体が教室に現れた。しかし、何よりもそれを怪物としているのは本来八つの目があるはずの場所にあるのが人の顔だという事だった。

「クラリーナ…… どこにいるの…… 見えない…… 何も見えない……」

クラリーナがオズカーの手を強く握った。オズカーはできるだけ優しく握り返した。クラリーナに似た黒い瞳とダークグレーの髪を振りかざしてその顔はいろんな方向を見ていた。見当違いの方向を見ながらクラリーナの名前を呼んでいた。顔が動くたびにハサミと爪が一緒に動き、床や天井を擦って、カシヤ、カシヤと音をたてた。よく見ると足のいくつかは人の足だった。爪の先に人の手のようなものが見えた。

「リディークラス!!」

クラリーナが叫ぶと、クモの怪物の顔が変わった。オズカーにはそれが誰なのかわかった。アラスター・ムーディだ。魔法の目がクモの目があるべき場所でグルグルと回っていた。

オズカーが前にでた。オズカーはまね妖怪を混乱させないといけない、そう思っていた。

「リディークラス!!」

今度はグリフィンドールのローブを着た女の子だった。ダークグ

レーの髪、黒い瞳、どう見てもクラリーナの体だった。だがなぜか体からクモのハサミが飛び出していた。オスカーはクラリーナの方を見た。クラリーナは少し笑っている様だった。

「死ぬ前に自分の死体を見るとは思いませんでしたよ、リディークラス!!」

また大きなクモの化け物だった。しかし体にはいくつも焼き焦げた跡があった。そして極めつけにその顔は八つの目がある男の子の顔だった。クラリーナがオスカーの方を見た。

「俺も目が八つになるとは思ってたな、リディークラス!!」

二人が呪文を唱えるたびにまね妖怪は混乱し、二人の恐怖が入り混じったような、何か変わらないものへと姿を変えていった。そして、ついに耐えられなくなり、幾千もの煙の筋になって消えていった。

クラリーナはそれを見届けると床に座り込んだ。オスカーも一緒に座り込んだ。

「オスカー、ありがとうございます」

「俺もまね妖怪は倒してなかったからな、これでやっとスリザリンに五点つてわけだ」

「オスカー…… ありがとうございます……」

クラリーナはそう言っていて泣いていた。オスカーはどうすればいいのかわからなかった。クラリーナはオスカーの手を離さなかった。しばらくオスカーは泣いているクラリーナの横に座っていた。

「オスカー…… もうちょっとだけ、手を握っていてもいいですか?」

「それはいいけど…… 油断大敵なんじゃないか?」

「えっ?」

扉が開いて、トンクスとドージ先生が中に入ってきていた。トンクスの髪色は相変わらず青色だったがドージ先生は満面の笑みだった。

「素晴らしい、二人でまね妖怪を倒したわけだ。ただ、同じ変身能力を持っていても、ちょっとトンクス君は強敵かもしれないな」

「愛しのオスカーの話なら聞かなくてことなの?」

トンクスは口を膨らませてクラリーナにそういった。クラリーナは杖をローブのポケットにしまって泣いていた目をぬぐった。

「そ、そんなわけじゃ……」

「じゃあなんで、手を繋ぎながらしゃべってるのよ」

クラリーナの顔が赤くなった。それでもクラリーナは手を放そうとしなかった。

「な…… なんでもいいじゃないですか、それよりトンクスには謝ります」

「なんでも良くないわよ!! なんなのよ!! 私の時は怒って逃げていったくせに、オスカーがちよつと手を繋いだらコロッとしちやつてるじゃないの!! クラリーナのことなんか分かるわけなかったわ!!」

オスカーはトンクスがクラリーナに怒っているのを見たことがなかった。いつも立場が反対だったからだ。

「別に手を繋いだから何かあったわけじゃないですけど……」

「じゃあなんで手を繋いだままなのよ!! 説得力がかけるもないわよ、クリスマスにクラリーナがエストに言っただけを言っただけじゃないわよ?」

トンクスの髪色は一瞬で真っ赤になっていた。相当怒っているらしかった。

「オ…… オスカー……」

クラリーナはオスカーに助けを求めたが、オスカーには助けようがなかった。オスカーはとりあえず手を離せば解決すると思ったが、クラリーナは放しそうになかった。

「何がオスカーよ、ちよつとこっち向きなさいよ!! だいたいオスカーもクラリーナに甘すぎなのよ!!」

「いやそんなこと言われても」

トンクスは烈火のごとく怒っていた。髪色と同じく顔も真っ赤だった。

「エストが言っただけのはほんとだったじゃないの、いつの間にか仲良くなってるって言うって」

「いつの間にかってわけじゃ……」

「あああああ!! ムカつくからその手を繋ぎながら答えるのやめなさいよ!! だいたいどうしていつもみたいに反論してこないのよ!!」

なんでクラーナのくせに顔赤くしてモジモジしながら返してくるのよ!! そういうのはレアの仕事でしょ!!」

オスカーはトンクスの声で鼓膜が破れそうだった。

「何なのよ!! めちゃくちゃムカつくわ、オスカーもムカつくわ、何が傷つけたら謝ればいいよ!! 一人でゴマしてんじやないわよ!!」

トンクスはとにかく怒っている様だった。謝る相手がいなくなつたせいだろうかとおスカーは思った。

「だから、その手を繋いでこっち見るのやめなさいよ!!」

まね妖怪の百倍くらいトンクスはうるさいとおスカーは思った。ただオスカーは怒っているトンクスでも、さっきの部屋に入る前の顔よりは百倍はマシだと思った。

三本の箒

オスカー達は雪が溶けだしたホグズミードに休暇で来ていた。劇の公演前の最後の休暇だった。今回はエストの強い希望もあって、三本の箒にみんなで行くことになっていた。

ホグズミードの表通りにあるほとんどの店にはいつの間にか劇のポスターが張ってあった。オスカーはそれをハグリッドが配って回ったことを知っていた。前に小屋に行った時にハグリッドが自慢していたからだ。

ポスターにはエストのかけた魔法がかかっていて、劇の公演までの残り日数が日替わりで変わったり、幸運の泉が水を延々と噴き出す絵が描かれていた。

「それで？ エストはなんで三本の箒に行きたいのよ？」

「みんなが会いたい人がいるはずなの」

目の前にはもう三本の箒の看板があった。そう言えばオスカーは結局三本の箒に入ったことがなかった。前はトunksに連れられてカップルご用達の店について行かれてしまったからだ。

「会いたい人って誰だい？ エスト？」

「チャーリーとクラーナとエストは会ったことのない人なの」

「良くわからない人選ですね、だいたいエストが会ったことが無いんですか？」

「会えばわかるの」

オスカー達は三本の箒のドアを開けて中に入った。中は人でごった返っていて、アルコールの匂いとお菓子の甘い匂いが混ざり合ったような独特の匂いがした。

エストはごった返している人込みの中を迷わずに進んでいるようだった。オスカー達は店の奥にある少し大きなテーブルにたどり着いた。そこには忘れもしない人間が座っていた。

宝石縁の眼鏡にカールした髪型。今日はけばけばしい緑色の服を着ていて、爪はどうもつけ爪に変わっているようだった。どう見てもそこに座っているのはリータ・スキータだった。

オスカーの隣にいたトンクスの髪色が真っ赤に染まった。エストがリータ・スキータの正面にある席に座って、ローブのポケットから何か羊皮紙を取り出した。オスカーは杖を取り出してエストの隣に座った。ほかのメンバーも席についた。

「それで？ ミス優等生は何をお望みぎんすか？ そもそもあんたたちとの約束は終わったはずぎんす」

「エストはスキータさんと何も約束してないの」

リータは臭液を飲まされた様な顔になった。リータが何か言い返そうとする前にハイヒールを履いた女の人がテーブルにやってきた。

「劇に出る皆さんは注文はどうするのかしら？」

「バタービールを六本お願いするの」

「劇に出る前の取材なのかしら？ バタービールはサービスしておくわ」

「マダム・ロスマルタ。ありがとうなの」

エストがそう言ったことでオスカーはやっとその人物が三本の箒のマダム・ロスマルタだと分かった。マダム・ロスマルタは小粋な笑みを浮かべてカウンターへと消えていった。

「こいつがリータ・スキータなんですか？」

「そうよ、このセンスのない眼鏡かけてるクソ女がリータ・スキータよ」

「死喰い人の姪っ子さ……」

「へんな口を叩くんならすぐにダンブルドア先生かクラーナのおじさんにふくろうを送るの」

リータは今度はにが虫をかみつぶした様な顔になった。チャリーがやれやれという顔でオスカーの方を見た。オスカーはやっぱりあの時、エストをホッグズ・ヘッドに連れて行くべきだったと思った。

「それで？ ミス優等生はあたくしに何をお望みぎんすか？」

「簡単なの、ちゃんとした約束をした上で、ちゃんとした記事を書いてくれればいいの」

エストが羊皮紙をずいっとリータの方へ突き出した。何の変哲も

ないただの羊皮紙のようだった。

「あれ以上なんの約束をしろと？　あたくしは何もあんた達についてあの後書いていないぞんす」

「どうせ劇が迫ったらまた書くの、誰がスキータさんに書かせてるか知らないけど、今度はエストたち個人のことじゃなくて、家族のこととか、あとはケトルバーン先生とかドージ先生の事を掘り起こして書くに決まってるの」

リータの顔色はさらに悪くなった。リータはチエリーの入った蜂蜜酒を一気に飲み干した。マダム・ロスマルタがバタービールを持ってきたので、オスカーはみんなにそれを配った。

「だからここにサインしてくれればいいの、そしたら少なくとも劇のことやエストたちのことで悪いことを書かないって安心できるの」

「その紙にサインしろってことぞんすか？　いったいその紙には何の効果があるぞんす？」

「スキータさんがそういうことをするとエストにすぐわかるようになってるの」

エストがニコニコしながら紙をさらにリータの方へ突き出した。オスカーはやっぱりエストを敵に回したくないと思った。

「嫌と言ったら？」

「アズカバン送りなの、動物もどきの囚人は初めてだろうからきつと特別な牢屋が作られるの。杖を使わないで変身できる動物もどきならもしかしたら逃げれるかもしれないの、だからいい先例になると思うの」

フレッド・ジョージがエストをあんまりからかわない理由がオスカーには良く分かった気がした。トンクスの赤い髪色がどんどん薄くなっていった。

「どうやら選択の余地はなさそうぞんすね……」

リータが少し震えながら羽ペンを取り出して、羊皮紙にサインした。リータはサインした羊皮紙をオスカー達のほうへ滑らせた。

「綴りが違うでしょう」

クラリーナがサインを見てリータの方へ杖を上げた。どうもリータ

は最後の抵抗をしたようだった。エストとチャーリー以外の三人が杖を向けていた。

「えーっと、スキータさん？ この三人は平気で階段を爆破するってことで管理人のフィルチから目をつけられてるから、あんまり逆らわないほうがいいと僕は思いますけど」

「そうよ、今言ったチャーリーなんて、コガネムシのあんたをオスのコガネムシの群れに突っ込もうとしてたわよ」

リータはそれを聞いてチャーリーをまるで人でなしを見るような目で見た。オスカーもやつぱりその発想は考えるのも嫌だと思った。

リータはもう一度羊皮紙を手にとってサインした。エストが日刊預言者新聞の切り抜きを取り出して、サインを見比べた。

「これで安心なの」

「エスト、もしこいつがそれでもやったらどうやってわかるんだ？」

「簡単なの、顔がパーになるの」

「は？」

オスカーはエストが言ったことが良くわからなかった。どういう意味なのか分からなかったのだ。オスカーは他のみんなを見回したが、誰も理解できていなかったようだった。

「エ、エスト、パーってなんなんだ？」

「だからパーになるの」

エストは笑顔だったがオスカーも含めて誰も笑っていなかった。

「パーとは…… 何ぞんすか？」

「だからパーになるの、色々取れるの」

リータがサインをした羊皮紙を杖で丸めてポケットにしまいながらエストはそう言った。オスカーは何が取れるのかチャーリーの発想と同じくらい想像したくなかった。

「エスト、こいつがそんなになっても聖マンゴにいけば直っちゃうんじゃないの？」

トンクスは絶対に直ってほしくないという声色だった。

「大丈夫なの、ドージ先生にどんな魔法なら治しにくいか聞いたの、二十回位違う呪いを込めたから二十の二十通りの組み合わせを解かな

いと解けないの」

「何ですかそれ、解く前に一生が終わりますよ」

「間違えたらドン！　っていくのもかけたの、だからスキータさんが聖マンゴに入院したら多分すぐわかるの」

リータの顔色はどんどん悪くなっているようだった。反対にトックスの髪色はどんどんショッキングピンクに近づいていた。

「ドン！　ってなんなんだいエスト？」

チャーリーの顔はひきつっていた。オスカーは自分の顔もあんなっているだろうと思った。

「ドン！　はドン！　なの、バン！　じゃなくてドン！　なの」

「なんですかそれ、レダクトとボンバーダみたいなものですか？」

「違うのレダクトとコンフリンゴなの」

つまり粉々に砕くか、滅茶苦茶に爆破するかの違いらしかった。オスカーは聖マンゴの癒者のことが心配だった。

リータはもはや目で見てわかるくらい震えていた。オスカーは絶対にエストが差し出す書類にサインをしないことを心に決めた。

「期限は……　いつまでさんすか……」

「そんなものはないの」

震える声で言ったリータにエストが満面の笑みで言った。オスカーは以前クラーナと一緒に飛ばされたノクターン横丁の怪しい店で、あの羊皮紙が売られていても違和感がないのではないかと思っ

た。「エストが死んじゃっても解けないの、今見てた人たち全員が証人なの」

オスカーはリータが死ぬのが一番手っ取り早い呪いを解く方法なのではないかと思った。

トックスはドン引きしているのかいつの間にか髪色が青色になっていた。

「それと後は劇の宣伝の記事を書いて欲しいの」

「これ以上、まだ要求するさんすか……」

「お願いなの」

オスカーはエストに弱みを見せてはいけないのではないかと思っ
た。それにエストがスリザリンだということの意味が良くわかりつ
つあった。

「スキータさんは週間魔女にも投稿してるの、スキータさんに書かせ
てるのは誰か聞かないけど、それは日刊預言者新聞に書けて言われ
てるだけじゃないの？」

リータは無言だったが、答えないということは恐らく肯定を示して
いるとオスカーは思った。

「だから週間魔女でいいから劇のことを書いて欲しいの、別に劇が終
わったあとでもいいから、ちゃんとやりましたって書いて欲しいの」
「ギャラは貰えるさんすか？」

「バタービールはただなの」

そもそもそのバタービールはマダム・ロスマルタのおごりだったの
で、エストのふところは全く痛んでいないはずだった。

「何か意味があるんですか？ 劇が終わった後に記事を載せて」

「よっぽどのことをしないと劇を反対している偉い人はしつぽをださ
ないの、多分その人…… 一人かどうか分からないけどエストたち
じやどうにもならないだろうし、だからこそ劇が終わった後もちゃん
と終わりましたってしないとダメだと思うの」

オスカーはエストに質問したクラリーナと目線を合わせた。オス
カーもクラリーナも裏で糸を引いている人物が誰なのか見当はついて
いた。オスカーは一瞬トクスの方を向いたが、彼女は何か考えてい
るようだった。

「だからお願いしてるの。スキータさん」

「わかったさんす。少なくとも劇が終わった後の週間魔女なら問題な
いはずさんす。どうせあんたたちの劇のことばかり日刊預言者新
聞に載せるわけにはいかないさんす。世間はあんたたちより魔法省
や有名人の失態の方が好きさんす」

そう言うリータは立ち上がって、逃げるように三本の箒から出て
行った。オスカーはリータが全くエストの方を見ようとしなかった
のが少し面白かった。

「私、エストが出す書類にはこれから絶対サインしないわ」

オスカーはトunksと同じことを考えていたので、ちよつとシヨックだった。エストはそれを聞いてポケットからリータのサインがある羊皮紙を取り出した。

「これのこと？ ただの羊皮紙なのにな？」

「見た目はでしょ？ 忍びの地図といい、これからは何にも書いてない羊皮紙の方が怪しいと思っちゃうわ」

「僕もそうだね、パパが脳みそがどこにあるか分からないものは信用するなって言ってたけど、今はそれより何も書いてない方が怪しい気がするよ」

エストはニヤツと笑って取り出した羊皮紙に杖を振った。すると羊皮紙は燃えだして、小さな灰になりテーブルの上に降り積もった。オスカー達はあつと声を出した。

「ちよつとエスト！ どうするのよ、あのクソ女を縛るものがなくなっちゃうじゃない！」

「そんなもの初めからないの」

エストが笑いながら言った。オスカー達は少しの間その意味を考えていた。最初にクラリーナが分かったという顔をした。

「最初から…… はったりだったってことですか？」

「つまり、スキータが何か書いてもパーになったり、ドン！ っていかないのか？」

「そうなの、パーもドン！ もないの」

リータもオスカー達も最初からエストに謀られていたらしかかった。オスカー達はちよつと現実を受け入れるのに時間が必要だったが、トunksがシヨツキングピンクの髪色で腹を抱えて笑い始めた。

「つまり、ぷぷっ、あのクソ女はただの羊皮紙に名前を書いてビビってたの？」

「そう、スキータさんにとってあれはすっごく怖い紙だったの」

「それ凄く皮肉がきいてるわ」

オスカーもトunksの言う通り皮肉がきいていると思った。何せいつも嘘八百の記事を書いて、他人を怖がらせたり、傷つけたりして

いる人物がなんの変哲もないただの紙を怖がっていたのだ。

「そうですね、確かに皮肉がきいてますね、私たちが気にしなければあの女の記事も意味がなかったはずだったんですから」

「なるほど、あの人に対しては一番きくのかもね、ある意味一番そういうものの怖さを分かっているわけだし」

クラリーナとチャーリーは思案している顔だった。みんなの反応を見て、エストは近くにあった劇のポスターを持ってきた。

「だからね、どう思っているのが重要だと思うの」

「どう思っているのか？ スキータがビビってるってことか？」

「それもそうなの、あのね、エストは今日の事、劇の最後のシーンの練習をしてて思いついたの」

エストは笑いながらポスターに描かれている幸運の泉を指した。オスカーは少し考えた。幸運の泉の最後のシーン…… どう思っているのが重要…… オスカーはハツとなってエストの方を見た。

「幸運の泉もほんとはそんな力なんてないの、でもね、みんながそう思っているから意味があるの、多分羊皮紙も新聞もいっしょなの」

確かにその通りだとオスカーは思った。まね妖怪が形をとるのもオスカーが思っているから形をとるし、守護霊の呪文もオスカーが思っているからきつとあの形をとったのだ。つまりそう思っていないと意味がないのだ。たとえ違う意味だったとしても、その人がそう思えばそういう意味を持つのだ。オスカーは色んな思考が自分の頭の中で回っている気がした。

オスカーはそれらのことがとても重要なことのように思えた。そして、オスカーの胸の中で突っかかっている最後の問題を解決するにはどうしたらいいのか少し分かった気がした。

エストがやったようにそう思わせないといけないのだ。エストを取り戻した時の様にそう思わせないといけないのだ。オスカーはそう思った。

オスカーは絶対に最後まで劇をやり遂げるつもりだった。そしてオスカーは確信していた。このまま劇が普通に終わるはずがないはずだと。

豊かな幸運の泉はみんな幸せになる話のはずだった。だからオスカーはこの話を初めて聞かして貰った時に好きになったのだ。

「だから、豊かな幸運の泉が終わればみんな幸せになるのかなって思うの、ダンブルドア先生、ドージ先生、ケトルバーン先生、ハグリッド…… 手伝ってくれた大人の人も多いし、最後までやれたらいいなって思うの」

「まあそうね、おじいちゃんたちの方が楽しみにしてるわね」

オスカーはきつと知っていた。誰がこの劇を一番楽しみにしていたのかと言うことを。

「じゃあ乾杯ね、まあ私とチャーリーは出ないし、レアもないけど乾杯よ」

トunksがショッキングピンの髪を揺らしながらグラスをあげた。他のみんなもオスカーもグラスをあげた。

「乾杯!!」

オスカーはいつか考えた時の様に、もう一度、自分の周りにある全てを、人を記憶を魔法を道具を全てを考え直し始めていた。

姿をくらますキャビネット棚

オスカーは忍びの地図を見ながらホグワーツの二階へと進んでいた。今学期になって何度か聞いた名前がそこにはあった。

本来その名前はこの時間、校庭にある劇のステージ前になければならないはずだった。劇を再開するにあたって、その内容がふさわしいモノかどうか審査するためにホグワーツに来ていたはずだったからだ。

ほとんど走りながらその名前の元へ進んでいるオスカーのロープの中で、逆転時計が何度も胸にぶつかっていた。

オスカーの名前がそこに近づいてもその名前が動かないことから、オスカーは少なくとも気づかれていないと考えた。その代わりに忍びの地図のあちこちにオスカーのよく知っている名前と、知らない名前が現れては消えてを繰り返していた。忍びの地図の特性とホグワーツでは魔法使いが消えたりできないことを考えるとそれはおかしな現象だった。

二階のその場所、黒いキャビネット棚の傍に男が立っていた。オスカーはその男を知っていた。ヴォルデモート卿の腹心の一人と思われていたにも関わらずアズカバンに投獄されなかった男、今も魔法界に強力な力を保ち、ダンブルドア先生や恐らく魔法大臣ですら無視することのできない男だった。

ルシウス・マルフォイは油断なく杖を構え、何か手鏡のようなものを時折見ながら周りを見回していた。

ハグリッドが禁じられた森の木を幾本か切り倒して造ったステージの上には、すでに豊かな幸運の泉のセットがたたずんでいた。

観衆たちが待ちわびる中、ステージの上が魔法で暗転した。外は真昼だったにも関わらず、ステージの上を暗くするのは恐るべき魔法には違いなかった。暗闇の隙間から昼の太陽の光が漏れており、夜明け

前のような明るさだった。

どこからかナレーター、語り部の声が聞こえてきた。

「魔法の園の丘の上、高い壁に囲まれて、強い魔法に守られた『豊かな幸運の泉』がありました」

舞台の中央にあつた泉が高くせり上がり、いつそう高く水を吹き上げた。そしてその周りを石垣のようなものが取り囲んだ。

「一年にたった一度だけ、夜明けから日没の間に不幸な者が一人だけその泉を浴びることが出来ます。その泉を浴びれば永遠に幸福になれるのです」

上手、客席から見て右側から三人の魔女が歩いてきた。それと同時に魔法で造られた幻影らしき沢山の人影が現れた。

「王国中からあらゆる人々が集まりました。老若男女問わず、魔法が使える使えないを問わず、皆が自分こそが泉を浴びることができるようになり、夜が明ける前に集まったのです」

沢山の人影が薄くなり、舞台の下手、客席から見て左側にいた三人の魔女がピンポイントに照らされた。

「重い苦しみを抱えた三人の魔女がその端っこで出会いました。夜明けを待ちながらお互いの悲しみを語り合っていたのです」

三人の魔女の一人、金髪の魔女が一層照らされた。演出なのか、緊張からなのかどこか顔色が悪かった。

「最初の魔女はアシャと言いました。彼女はどんな癒者にも治せない病気にかかっていたので、泉が病気を治し、救ってくれることを望んでいました」

次に黒髪の魔女が照らされた。彼女は三人の中で一人だけ杖を持っていなかった。

「二番目の魔女はアルシードと言いました。彼女は悪い魔法使いに杖も家も奪われました。なので、泉が貧しく力のない自分を救ってくれることを望んでいました」

最後に少し身長の小さいダークグレーの髪の魔女が照らされた。彼女はどこか痛々しい顔をしているようだった。

「三番目の魔女はアマータと言いました。彼女は愛した男に捨てられ

てしまいました。なので、心の傷を泉が癒して救ってくれることを望んでいました」

三人の魔女はお互いに杖を、アルシーダは持っていなかったのを掲げるように上げた。天に何かを誓うようだった。

「魔女たちはお互いに憐れみ合い、もし誰かが泉にまみえる機会を与えられたなら、力を合わせてたどり着こうと誓いました」

ステージの上の暗闇が少し晴れ、今度はオレンジ色の光が現れた。そして、壁に穴が開きそこからツタが現れてステージの上でのたつくた。

人影の幻影を突き抜け、一番目の魔女、アシヤにからみついた。アシヤはアルシーダの手首を持ち、アルシーダはアマータのローブをつかんだ。

いつの間にかステージの上に馬に乗った騎士がいた。アマータはそのどこかさえない騎士のさえない鎧に服をひっかけ、三人の魔女とさえない騎士は壁の向こう側へと飲み込まれていった。舞台は再び暗転した。

ルシウス・マルフォイは現れたオスカーの姿を見て、一瞬目を見張った。そして何かに悪態をついた様だった。

「マルフォイさん、あなたは理事でしょう。舞台に行かなくていいんですか？ ドージ先生はあなたが舞台の審査の為にわざわざいらっしゃると言っていました」

「ドロホフの息子…… 確かオスカーだったか？ 君はどうなのかね？ 穢れた血の騎士の役ではなかったかな？ 劇はもう始まっているはずだが？」

マルフォイはオスカーを油断なく見つめた。オスカーはマルフォイの顔に何一つ感情を読み取ることはできなかった。

「俺は魔法使いです。同時に二か所に存在することくらいできます」
オスカーの言葉をマルフォイは理解しようとしているようだった。

マルフォイの視線がオスカーの首元の金色の鎖で止まった。

「三年生……なるほど……君はそういうことか……全部知ってからここに來ていると言うわけか」

そう言うなりマルフォイはオスカーに杖を上げて赤い光線を打ち込んだ。オスカーはそれを杖を振るだけではじき飛ばした。マルフォイはそれを見て驚きを隠せないようだった。オスカーを見る目にさらに油断がなくなった。

「あなたの主人よりもあなたの方が気が短い」

「私に主人はいない」

オスカーは考えていた。なぜこの場所でなければなかったのか、どうしてマルフォイはこの場所を選んだ？ これからマルフォイが事を起こすにしろ、この場所で待たなければいけない理由は何なのか考えなければならなかった。それを解決しなければここに來た意味がないはずなのだ。

「どうやって見張りを突破した？」

「俺はあなたの見張りが何なのかは知らない。だけど俺の家の屋敷しもべは優秀だ」

オスカーがそう言うのとマルフォイは少し感心した顔になった。

「ほう……しかし、勇敢なのはいいことだがなぜ一人できたのかな？」

「あなたは油断しないし狡猾な人だ。俺の父親と違ってアズカバンに放り込まれなかったのは偶然じゃない。ちよつとでもダンブルドア先生や他の先生方に動きがあれば何もしなかったはずだ」

前の戦争において一線級で戦っていたはずなのに破滅していないというのは恐るべきことだった。前の戦争はどちらの側についたに問わずあらゆるものを奪っていった。オスカーはそれを嫌というほど知っていた。

「つまり私をおびき出すために先生方に伝えなかったというわけだ。逆転時計を使ってまでそれとは……君は忘却呪文の恐ろしさを知らないわけではあるまい？ 成長しても、時を越えても、何も過去から学ばなかったようだな!!」

マルフォイはそう言い放つと本気でオスカーに呪文を向けてきた。オスカーはそれを盾の呪文でいなしながら相手の動きを見ていた。

二人は杖を向け合い、呪文を放ち合いながら動いていた。二人が避けたり弾き飛ばした呪文が部屋の四方に散った。オスカーは気付いた。マルフォイは明らかに黒色のキャビネット棚に呪文が当たらないように動いていた。

「そのキャビネット棚か」

オスカーは杖の動きを変えた。鞭を振るように杖を振った。ほとんど紫色の炎が鞭の様にうなつてキャビネット棚に襲い掛かろうとしたが、マルフォイは杖を振ってキャビネット棚を吹き飛ばした。

「その呪文…… その年で使いこなすとは…… 偉大なオーラーの素質どころではないようだ」

オスカーはマルフォイに杖を向け直した。オスカーは思った。何をすればいいのかはつきりしたと。キャビネット棚にどういう能力があるのか分からなかったが、少なくとも破壊すればいいはずだった。そしてキャビネット棚が髪飾りよりも破壊しにくいとは考えにくかった。

「泉の水を浴びれるのは！ 幸福になれるのはたった一人なのに！ 三人でも多いのにもう一人なんて!!」

アシャとアルシーダはさえない騎士を連れてきてしまったアマータにそう言った。さえない騎士が照らされて語り部の声が響いた。「このさえない騎士は壁の外ではラックレス卿、不運の騎士と呼ばれていました。そして騎士は自分を連れてきた三人が魔女だと気付きました。馬に乗った試合でも、剣の決闘でも優れているわけではない自分が恐るべき魔法を使う魔女に勝てるはずがないと思いました」

ラックレス卿は三人の魔女に言った。

「魔法も使えぬ自分ではあなた方に勝ち目はない、自分はおとなしく身を引き、壁の外に戻りましょう」

ラックレス卿がそう言うのと今度はアマータが照らされた。アマータは酷く怒っているように見えた。

「意気地なし!! 騎士よ、剣を抜くのです!! そして私たちを助け、幸運の泉へ導くのです!!」

また舞台が暗転した。

呪文の応酬を続けながら、オスカーは少し撃ち負けていると考えた。マルフォイはオスカーの呪文からキャビネット棚を守りつつ、オスカーと渡りあっていた。

ヴォルデモート卿の時のような絶望的な差をオスカーは感じていなかったが、それでも一人では不利だと、技量で負けているとオスカーは感じていた。

一、二回、オスカーのローブがマルフォイの呪文で焼け焦げ、他にもほほに呪文がかすり、そこから血が流れていた。

「確かにその年で私と渡り合うとは感嘆するべき技量だ。しかし、だからこそ惜しい」

「何が惜しいっていうんだ」

隣にクラリーナがいれば勝てる戦いだ。オスカーはそう思ったが今のオスカーは一人で、クラリーナは舞台の上のはずだった。

再びオスカーは炎でキャビネット棚を狙ったが、マルフォイは傍にあった机をオスカーの方へ動かしたので、オスカーはそれを避けるために動かざるを得なかった。

「分からないのか? 過ぎたる力は他人を傷つけるということだ。我々純血の力あるものはそれを自覚しなければならない」

オスカーはマルフォイの言葉を黙って聞いていた。決定的な隙を見つけないければならなかった。オスカーは魔法使いの決闘が一瞬で決まることを知っていた。

「君はそれを一番分かっているだろう? オスカー・ドロホフ。我々が穢れた血の者たちを傷つけているのだ。奴らと我々を分けると言

うのは、結局のところ、奴らを守っているということなのだ」

杖をオスカーは強く握りしめた。オスカーはマルフォイの言葉を認めるわけにいかなかった。穢れた血という言葉を確認するわけにはいかなかった。近づくことで傷つくことを恐れるわけにはいかなかった。それを証明しなければいかなかった。目の前の男にそれを伝えなければいかなかった。オスカーはその為にこの場に立っていた。

光を遮っていた魔法が解かれ、舞台上は明るかったが、実際の太陽とは別の太陽とおぼしき光の玉が舞台上にはあった。

舞台の上には魔法界でもほとんど見ることはないような不思議な植物が生い茂っていた。四人はその中に一本だけある道を進んでいるようだった。

そして舞台の奥に見える泉のふもとらしい場所にたどりついた。

しかし、そのふもとには巨大な白い怪物が丸まっていた。良く見るとただ巨大化させて色を白に変えたアツシユワインダーだとわかったはずだが、客席から見分には十分に怪物だった。

その白い怪物、いも虫が口を開くと語り部の声が響いた。

「苦しみの証を支払っていけ」

ラックレス卿が剣を抜き、怪物に挑んだが剣は折れてしまった。アルシーダは石を投げつけ、アシャとアマータが呪文の光線をぶつけたがいも虫はびくともしなかった。実際にはいも虫の手前でなんらかの呪文がそれら全てを弾いているようだった。

舞台にあった光の玉はより高く、ちょうど舞台の真上まで上がった。語り部の声が響いた。

「太陽が沈むまでに泉につかなければならないにも関わらず、怪物を退治できないので、アシャは泣き出してしまいました」

アシャがその場に座り込んで泣き出すと、いも虫が動き出した。真っ白いアツシユワインダーは何らかの呪文で操られているのか、ア

シヤの顔に舌を押し付けた。

すると、その怪物はそのまま下手へと消えていった。語り部の声が響いた。

「苦しみの証とは涙のことだったのです」

「俺の前でたとえ誰であつても穢れた血と言うことは許さない」

オスカーはキャビネット棚ではなく、明確にマルフォイを狙つて炎を繰り出した。オスカーはその呪文を人に向けたことはなかった。しかし、今、それが必要だった。

マルフォイはそれを避けるため天井をシャンデリアごと落下させた。炎は軌道を変えられ受けながされた。ほこりで視界が狭まった。

「ほう？　なら純血の血なら流してもいいのかな？　ああ、君の周りが純血の娘ばかりなのは傷つけてもいいと考えているからかね？」

「あなたはなぜここまでして劇を邪魔するんだ？　リスクしかないはずだ」

マルフォイとの会話を続ける必要があつた。あと少しだった。

「君は忘れてしまつているのかもしれないが、普通純血の者は純血を守れと育てられる。何故なら血が人を繋ぎ、魔法を守っているからだ」

「半純血だろうとスクイブだろうとマグルだろうと血がつながれば一緒じゃないのか？」

オスカーの言葉を聞いてマルフォイは笑つた。

「違う。唾棄すべき考え方だ。特別な血を守らなければならぬ、価値あるものを守るから価値が生まれているのだ」

「俺には価値があるように思えない」

オスカーの本心だった。少なくとも自分自身や目の前の男が彼女やトンクスより価値がある人間だと思えなかつた。

「そうだな、君の様に忘れてしまつているのなら仕方ないのかもしれないな」

マルフォイの後ろに人影が音もなく現れた。

「あなたの主人から学んだことが一つだけある」

「ほう？ まああれだけのことがあって学ばないのならどうしようもないだろう」

そうオスカーは学んだのだ。決して一人でいてはならないということ。

「闇の魔術に対抗する術は一つだけだ」

「心外だな、私は君に闇の魔術を使っていない。むしろ使っているのは君の方だ」

ホグワーツでは出会っただけで不運だと思えるものが浮かんでいた。

「二人で戦わないことだ」

ピーブズは持っていたバタービールの瓶で思いっきりマルフォイを殴りつけた。マルフォイは態勢を崩して、床に倒れ伏した。

その隙をオスカーは逃さなかった。紅い光線がマルフォイを確実に射抜いた。飛んでくる杖をオスカーはキャッチした。それを見たピーブズはオスカーに一礼して消えていった。

武装解除呪文で吹き飛ばされたマルフォイはオスカーの方を睨んでいた。しかし、オスカーの方を見てニヤリと笑った。

「時間切れだ」

マルフォイがそう言うのとキャビネット棚の扉が蝶番がこすれる音を立てながら開き始めた。

今度は舞台が実際に下手から上手に向かって傾いていて、四人は一生懸命にその坂を上っているようだった。しかし、どういうからくりなのか彼らが実際に進んでいるように見えるにも関わらず、客席からは全く進んでいないように見えていた。語り部の声が聞こえた。

「四人は泉へ続く坂を登り始めましたが、この坂はいくら登っても進めない坂でした。坂には文字が書かれていました。努力の成果を支

払っていけと」

舞台にまるで何かを焼き付けたような文字が浮かび上がった。努力の成果を支払っていけとおどろおどろしい文字で書かれていた。

四人はまた坂を進んでいるようだったが、一向に進むことはできず段々とペースが落ちて行つた。その中でアルシーダだけがペースを落とさなかった。そして他の三人を励ますのだった。

「みんな、頑張るの、くじけたらダメなの」

また語り部の声が響いた。

「アルシーダの額から汗が落ちました」

実際にアルシーダの額から輝く水のようなものが落ちた。するとその汗のようなものの輝きが文字の方へと向かい、焼き印のような文字はまるで溶けるように消えていった。

「努力の成果とは汗のことだったのです」

文字が消えた坂を四人は進み、舞台の上手へと消えていった。

「いくら君がその年で無言呪文をマスターしているほど優秀だったとしても、そいつはどうしようもないぞ」

息も絶え絶えにマルフォイがそう言った。キャビネット棚が開いた。中から何かゼイゼイと何かを吸い込む音が聞こえた。

オスカーはキャビネット棚から何が出てくるのか分かった。ぞつとするような冷気がオスカーの体を襲っていた。ローブを皮膚を通り抜けて、肉に骨に、そして心が冷たくなっていった。

黒い頭巾をかぶった影だった。頭巾からはまるで水中で腐ったような手が突き出ていた。それはオスカーに思い出させていた。声が聞こえる。オスカーを呼ぶ声が聞こえる。高笑いと一緒に声が聞こえる。オスカーが今感じている冷たさと反対のことを誰かが叫んでいた。

吸魂鬼、オスカーはその存在を知っていた。そしてそれを撃退するための呪文を知っていた。しかし、オスカーの体はどんどん冷たく

なっていた。声が高笑いがどんどん大きくなっていく。

「君の記憶はごちそうだろう。そいつらにとっては幸運なわけだ」

マルフオイの声が遠くで聞こえた。オスカーは幸運という言葉で耳で拾った。心のどこかで怒りが湧いていた。決して幸福でない気持ちだった。ずっとオスカーは怒りを感じていた。

どうして幸運で、幸福ではないのだろうか？ どうして一緒にいたいだけなのに、一緒に楽しみたいたいだけなのに誰かを傷つけてしまうのだろうか？ きつとお互いに想っているだけなのに不幸になるのだろうか？ どうしてそれを見るだけで、そう想っている人が傷ついているのを見るだけでどうしようもないほど怒りが湧いてくるのだろうか？ どうして彼女と一緒にいたかっただけなのに不幸になったのだろうか？ 理不尽に対する怒りが心に満ちていた。声が遠くに消えていった。高笑いが消えていった。ただ怒りが決して幸福ではない怒りが満ちていた。

オスカーはそれを見た。ただ幸福を吸い込むだけの抜け殻だった。この世にあつてはならないものだった。この世にある最も穢れたものだった。まさにオスカーが怒っているものを具現化したものだった。

それを倒すには幸福が必要だった。一番幸せな記憶が必要だった。オスカーには分かっていた。最悪の記憶があるから幸福なのだ。心の中にずっとあるから、今が幸福なのだ。

どうしてレアを説得したアバーフォースとエストがあんなに強く見えたのか、どうしてエストを傷つけそうで怖かったのか、どうしてクラリーナが隣にいてあんなに安心したのか、オスカーは分かっていた。どうしてみんなのことを考えていたトunksが報われないと許せないのか分かっていった。全部含めて幸福なのだった。

「エクスペクトパトロナーナム!! 守護霊よ来たれ!!」

吸魂鬼にそれは飛んで行った。明確な形を持ったそれが、眩く輝く銀色の羽をはばたかして、吸魂鬼にぶつかった。吸魂鬼はキャビネツト棚の中へと消えていった。

銀色に輝いている以外は大きさも形も一緒だった。森の中で数え

きれなくらい飛んでいたのと一緒だった。銀色のトンボがオスカーの指にとまって、煙の様に消えた。

遂に舞台の上手には泉の姿があった。しかし、四人のいる下手と泉の間には大きな川が実際に舞台の奥から手前に流れていた。

ラックレス卿は持っていた盾を浮かして川を渡ろうとしたが、そのまま沈んでしまい、三人の魔女に助けられた。三人の魔女は川を魔法で飛び越えようとしたが、なぜか川のそばまで来ると透明な壁があるかの様に進まなかった。

語り部の声が響いた。

「川の底には文字がありました。過去の宝を支払っていけ、そう書かれています」

また前回と同じ焼き印の様な文字が川底に現れた。四人は集まり、お互いに頭をなにやらひねっているようだった。

「四人は言葉の意味を考えました。そしてアマータにはその意味が分かりました。アマータは幸せだったころの記憶を取り出しました」

アマータが川の前にでて、杖を振った。白く輝く八本足のそれが、巨大な蜘蛛が川の底へと消えていった。文字も蜘蛛と一緒に消えていった。

文字と白い輝きが消えると川に石のようなものが浮かびあがってきた。四人はその石を足場にして川を渡った。語り部の声が響いた。「過去の宝とは幸福な記憶だったのです」

杖を失い、吸魂鬼を撃退されたマルフォイは今の自分の状況が信じられないという顔だった。

オスカーはマルフォイに言いたいことがあった。オスカーはそれだけの為にここに来ていた。

「今やっている劇はあなたの姪が提案したんだ」

「私の家族は息子と妻だけだ」

「あなたは…… あなたはそう思っているわけだ」

オスカーの杖から紫とも赤ともとれない炎が噴き出した。マルフォイのシルバードブロンドの髪の毛の先が燃えて無くなった。その炎はキャビネット棚に叩きつけられた。キャビネット棚は衝撃で真つ二つになり、煌々と燃え盛っていた。

「あなたはスリザリン生だ」

恐怖に染まったマルフォイの目を真つ直ぐに見つめてオスカーは言った。マルフォイとのやり取りで色んな感情がオスカーの中で生まれては消えていったが、今はただ怒りが心を燃やし尽くしているようだった。

「スリザリン生なら身内を大事にするべきじゃないのか？」

マルフォイの杖を投げ捨てて、オスカーはそこから去った。木の焼ける臭いの中で、やるせなさだけが燃えカスの様に残っている。オスカーはそう思った。

泉は目の前にあり、美しい木々や花々に囲まれて光っていた。また舞台は少し暗くなり、茜色の光がどこからか舞台を照らしていた。

しかし、すぐそこに泉があるにも関わらず、アシャが倒れた。三人がアシャを引っ張って、泉へと連れて行くこうとしたがアシャはこう言った。

「苦しいんです…… 触らないでください……」

アルシーダが周りの草花を摘み始め、ラックレス卿の水筒を奪い取り、草花と一緒にアシャの口に流し込んだ。

するとアシャはさっきまでの苦しみがなかった様に立ち上がった。

「治りました!!」

アシャは他の三人に言った。

「私は泉はいりません。アルシーダに浴びさせましょう」

しかし、アルシーダはアシャの言葉も聞かず、薬草を集めていた。「この病が治せるんなら、私はいくらでもお金を稼げるの！ アマータに浴びせればいいの！」

それを聞いてラックレス卿は一礼し、アマータを泉へと促した。しかしアマータは首を振った。語り部の声が響いた。

「アマータはすでに幸せだったのです。幸運の記憶を断ち切ることができただけで十分に幸せだったのです」

アマータがラックレス卿に言った。

「どうぞ、あなたが浴びてください。騎士道を尽くしたあなたが浴びるべきなのです」

ラックレス卿はそれを聞いて、ほとんど暗闇につつまれつつある舞台の中で、泉へと進んでいった。しよぼくれた鎧の音を響かせながら。

『豊かな幸運の泉』を浴びたラックレス卿は実際に光輝いているように照らされて三人の魔女のもとへ戻ってきた。

舞台はまた照らされていて、最初にあつた沢山の人影の幻影が現れていた。語り部の声が響いた。

「ラックレス卿はさびた鎧のままアマータに言いました」

ラックレス卿とアマータが強く照らされた。

「自分がこれまで見た、どの女性よりもやさしく美しいアマータの足元にひざまずいて言いました」

ラックレス卿はアマータの足元に片膝をついて、手を差し出した。

「どうか貴方の手を、貴方の心を私にください」

アマータはラックレス卿の手をとって立ち上がらせた。語り部の声が響いた。

「ラックレス卿はアマータに結婚を申し込んだのです。そしてアマータも自分の手と心をゆだねるにふさわしい騎士の手をとったのです」
ラックレス卿はアマータの手で立ち上がると真つすぐにアマータの方を見た。アマータは言葉と手の余韻をかみしめるような表情で目をつぶっていた。

ラックレス卿はアマータにキスをした。

最後の魔女

舞台の下手にある楽屋にオスカーは急いでいた。時間通りに戻らないと色々と問題があったからだ。地図を表示したままだった忍びの地図を白紙に戻してオスカーは楽屋に走る。

ステージの上にはダンブルドア先生がいて、何かを観客に向かって喋っているのがステージの後ろから見えた。すでに劇は終わっているようだった。

楽屋裏の暗幕まで来て、オスカーは様子がおかしいことに気付いた。

「おおおお、オスカー……」

「お、オスカー先輩……」

「やっぱりオスカーはビルよりやる時はやるんだね」

暗幕の間からオスカーは楽屋の中の様子をうかがったが、明らかに様子がおかしかった。

チャーリーは面白そうに笑っていたが、レアの顔は赤かったし、クラーナにいたってはゆでだこのような状態だった。そんな状況なのにエストが何も喋らないのもおかしいとオスカーは思った。

オスカーは暗幕の裏で待っていて、ここで誰にも見られずに入れ替わる予定だったが、四人の状況からして大問題が発生しているのは明白だった。

明らかにオスカーが考えていたことの外側に行くようなことが起こったと見て取れたのだった。

「ちよつと鎧を脱いでくる」

「オスカー、待つの」

これはばれたとオスカーは思った。オスカーの経験からして、エストの声のトーンが何かを問い詰める時のモノだと分かったからだ。

オスカーは暗幕をくぐって楽屋の中に入った。五人は入ってきたオスカーの姿を見て、一瞬固まった。オスカーはエストまで目を丸くしたので少し予想と違う反応だと思った。

「え？ オスカー先輩が二人……？ え？ ああ!! ああ!!」

「は？ ど、どういう……」

レアは完全に気付いた様子で、クラリーナは何か色々一杯一杯のようだった。

「出てくるのが早すぎよ」

「何をやらかしたんだ」

「そういうことだったの……」

鎧を着たオスカーはオスカーにニヤツと笑ったが、エストは何か安心した様子だった。鎧を着た方のオスカーが兜を脱いで、顔を少ししかめるといつものシヨツキングピンクの髪の毛が見えた。

「何があつたかはクラリーナに聞いた方がいんじゃないかしら？」

トunksはオスカーが見たことがないくらいニヤニヤして笑った。オスカーがクラリーナの方を見るとこれもまた見たことがないほど赤い顔で目をまん丸にしていた。

「ごめん…… 我慢できないかも……」

チャーリーは何か笑いをこらえているようだった。オスカーはらちが明かないので、クラリーナに何があつたか聞くために距離をつめた。

オスカーが近づくとクラリーナはまるで怖がっているかのように後ろに飛びのいた。

「わ、わっわっわ、ちよつと、そ、それ以上近づかないください」

「クラリーナ？」

クラリーナが顔を真っ赤にして、オスカーの方に手を出してこっちに來るなどジェスチャーしたので、オスカーはかなりシヨツクだった。

「オスカー今の見た？ いけるわ、このまま本物が上書きすれば一発よ」

「何言ってるんだ？ クラリーナ、何があつたんだ？」

オスカーはクラリーナに聞いたが、クラリーナは心ここにあらずという感じで、自分の唇に手をやり、その後にオスカーの方を見てさらに顔が真っ赤になった。

「いけるわ、本物がキスすれば世界一強力な守護霊が創れるわよ」

オスカーはやっとトunksが何をしでかしたのか分かった。オス

カーはこれ以上クラーナが赤くならないと思っていたが、さつきよりもさらに赤くなっていて、こんなに人が赤くなれるのかと思った。

クラーナがどうしようもなさそうだったので、エストとレアの方へオスカーは視線を移した。エストはまだ何かに安心しているようだったが、レアは明らかに怒っていた。

「なんでオスカー先輩が出なかつたんですか？ みんなでやれるって楽しみにしてたのに……」

「そ、そうなの、なんで入れ替わってたの？」

「え…… ちよつとオスカー、説明しなさいよ」

「トunks先輩にも聞いてるんです!!」

レアがなぜかテーブルの上に置いてあつたバタービールの瓶を持ったのでオスカーは嫌な予感がした。なぜいつもレアが感情をあらわにしている時に限ってバタービールの瓶があるのかは分からなかつたが、さつきのピーブズのフルスイングから、レアのリータに対するフルスイングを思い出したのだ。

「ええ…… オスカーなんとかしなさいよ」

「どういうことですか？ 理由も聞かないで引き受けたんですか？」

「そうなの、おかしいの」

相前にレアは怒っているようだった。しかし、オスカーはここではみんなに説明できる気がしなかつた。一人一人になら説明できる気がしたが、全員一度に説明するのは難しいと思っていたのだ。

「オスカー先輩も答えられないんですか？ ちよつと今回はボクも頭に来ました」

「そうなの、頭にきたの」

エストはレアに追従しているだけな気がオスカーはしたが、レアにこの場で納得のいく回答をオスカーはできる気がしなかつた。

「決闘です。決闘で勝つたら何があつたのか言つて貰います」

「そう、決闘なの、決闘……?」

レアは本気のようなだった。なぜか杖ではなくバタービールの瓶をオスカーとトunksに向けていたが、その眼は本気だった。オスカーとトunksはホッグズ・ヘッドでのリータの姿を思い出して体を震わ

せた。

そして、ドージ先生が劇をやる前に言っていたことを思いだした。確か劇が禁止になった理由は三人の魔女がラックレス卿を巡って決闘をしたことだったはずと言っていた。レアのバタービールの瓶にならって杖を向けているエストを見てから、まだ後ろで赤くなっているクラリーナをオズカーは見た。

クラリーナが赤くなっている理由が怒りへと変わるのには、いつものクラリーナとトンクスの事を考えると時間の問題だと思えた。オズカーはルシウス・マルフォイと決闘をするより、三人の魔女と戦う方がはるかに難しいと考えた。

それにまだステージの上ではダンブルドア先生が喋っているのが聞こえていて、観客もまだいるようだった。ここで大騒動を引き起こすわけにはいかなかった。せつかく劇を平穏無事に終わらせたのに、リータやマルフォイのつけ入る隙を与えるわけにはいかなかったのだ。チャーリーは腹を抱えて爆笑していて使い物になりそうになかった。

「トンクス」

「何よ」

「逃げるぞ」

「は？ ちょっと?! オズカー!」

オズカーは盾の呪文を使ってみんなの体勢を崩し、その間にトンクスの手を引いて逃げだした。少なくともこの場さえ凌げればどうにかなると思っただのだ。

「なんで逃げるんですか!! 戻って来てください!!」

「せこいの!!」

二人の声を後ろにしながらかく城へと逃げだした。忍びの地図はオズカーが持っていたので、城の中に入れば見つけるのはほとんど不可能なはずだった。

「オズカー、いったいどこまで逃げるのよ」

「劇が終わるまで、あの二人から見つかからない場所までだろ」

とにかく劇が完全に終わって、観客がいなくなるまでは騒動を起こ

すわけにいかなかった。すでに十分騒動になっている気がオスカーはしたが、それについては考えるのをやめた。

「絶対見つからない場所にいけばいいのよね？」

「そうだけど……」

鎧をガシヤガシヤと鳴らしながらトンクスが笑う。オスカーはよくここまでトンクスがこけずに走ってこれたと思った。

「千年の禁忌を破る時が来たようね」

「はあ？」

「ちよつとこれかぶってなさいよ」

トンクスはオスカーの頭に兜をかぶせると迷いなく城を進み始めた。

ハツフルパフ寮の入り口は厨房へつながる廊下にあった。山積みになったたるをトンクスがどこかで聞いたことのあるリズムで叩くと入り口が開いたのだ。

「これ間違えるとあつついお酢が降ってくるのよ、私はもう十回くらいくらつてるわ」

たるが開いた入り口はトンネルの様になっていて、少し進むとまるでアナグマの巣のような、暖かで居心地の良い円形の部屋が現れた。ハチを思わせる黄色と黒の内装に加えて、オスカーが薬草学でしか見たことのない植物がそこら中にあつた。

「今は劇を見に行つてるから誰もいないけど、流石に連れ込んだのを見られるのは不味いわよね、オスカーこつちよ」

トンクスに連れられて、オスカーは談話室の壁にあつた丸いドアの方へ進んだ。談話室を歩くと上から垂れているつたやシダがオスカーの肩を優しく撫でた。それに壁にかかっているヘルガ・ハツフルパフらしき肖像画が、金色のカップをかかえてオスカーとトンクスに微笑みかけていた。

丸いドアの向こう側はまたアナグマの巣穴の様にトンネルになっていて、いくつかの部屋があるようだった。トンクスはその部屋の一つにオスカーを案内した。

部屋の中は寝室だった。スリザリンの緑色の光で満たされ、湖の音が聞こえる寝室と違って、銅のランプが暖かい光で満たしていて、静かな部屋だった。

「ここ女子寮じゃないのか？」

「そうよ？ オスカーも兜を脱いだら？」

トンクスは鎧を脱ぎながらそう言ったがオスカーは色々疑問だった。

「スリザリンの寮は男子は女子寮に入れないって聞いたんだけどな」

「それは根暗なスリザリンだからでしょ？ ハツフルパフは善良だからそんな間違いは起こらないのよ」

オスカーはグリフィンホール寮にもスリザリンと同じ機能がありそうな気がしたが、突っ込んでも何も出てきそうにないので他の事を聞くことにした。

「ルームメイトがいるんじゃないのか？」

「大丈夫よ、みんな劇を見に行ってるし、多分連れ込んだことがばれても黙っててくれるわ、流石に監督生とかただの顔見知りくらいの人にばれたらヤバイけどね」

オスカーは反論できそうになかった。少なくともレアやエストがこの場所を見つけることは不可能だと思えたとし、これ以上に見つかりにくい場所があるとは思えなかったからだ。

「それで？ なんで逃げたのよ？ 説得すれば良かったんじゃないの？」

「あそこで決闘されたらまた問題だって言われるだろ」

トンクスがベットに座ってニヤニヤしながらオスカーの方を見る。オスカーは勢いでトンクスと出てきてしまったが、一番トンクスに理由を話すのが難しいと考えていた。

「じゃあそれはそれでいいわよ、なんで入れ替わる必要があったの？」

そのエストのプレゼントを使えば良かったんじゃないの？」

「なんでトンクスがこいつの効果を知ってるんだ？」

「なんでって、私も使うかどうかスプラウト先生と話してたからよ、まあエストでもあんなに疲れてたんだから私じゃ無理だったと思うけ

どね、で？　なんで使わなかったの？」

ローブの中の逆転時計をオスカーは常に意識していたが、それを自分が使うわけにはいかないと思っていた。

「エストは自分が使わないために俺に渡したんだ。俺が使うわけにはいかない」

「ひゅー、相変わらずエストのことになると熱いのね」

トンクスの髪の毛のショッキングピンクがさらに鮮やかになったようだった。

「そうね、なら誰と会いに行ってたの？　劇より大切な用事なくらいだから大物なんでしょうね」

トンクスは相変わらず上機嫌だったが、オスカーはトンクスの言い方からすでに誰に会いに行つたのかばれていると考えた。

「なんで分かつたんだ？」

「あれ？　失われた髪飾りを見つけて、千年も破れなかった防御を通り抜けたオスカーにも分からないことがあるのね」

トンクスはローブから焼け焦げた台本を取り出した。その台本は以前の劇で使われた台本でトンクスはそれを自分用の台本として使っているとオスカーは知っていた。トンクスは台本の中の一ページをオスカーに見せた。そのページだけ焼け焦げた跡がない。

「オスカー、あれは特に危険なのよ？　フィルチですら分かつたのよ？」

「そういうことか……　写しか」

オスカーはすっかり忘れていたが忍びの地図を使うと写しに地図も写ってしまうのだ。つまり、オスカーがマルフォイの位置を確認しようとして地図を使ってから、さつき消すまでずっと地図は台本に現れていたのだ。オスカーは自分が誰と会つたのかトンクスは理解していると考えた。少し力が抜けたとオスカーは感じた。

「それで？　私の叔父さんに会いに行つたのはなんでなのよ、それも誰にもそれを言うつもりがなかったみたいじゃないの」

オスカーは誰にも話さなかったわけではなく、血みどろ男爵とピーブズには話したと思っていたが、それよりもどうトンクスに自分が考

えていたことを伝えたらいいのか分からなかった。

「トunksだつて見ただろ？ マルフオイさんがWADAで豊かな幸運の泉が始まったら怒つて帰つたところ」

「そうね見たわ、でもそれがどうしたのよ、叔父さんが劇に反対してる理事だからつてオスカーが一人で会いに行く理由にはならないんじゃないの？」

さらに力が体から抜けたようだとオスカーは思った。つまり、最初からトunksは劇に反対している理事が誰なのかは分かっていたのだ。オスカーは結局自分がやっていたことは余り意味のあることではなく、周りの人を理解できているつもりで理解できていなかったと思つた。

「マルフオイさんは俺が会つた人の中でも多分一番用心深いと思う。トunksの前で言うのもあれだけど、俺の父親と違つてアズカバン送りにならなかつたのはそういうことだと思つてる」

「確かにそうかもね」

トunksの髪色が少しだけ鈍つたような気がオスカーはした。

「でも俺はそれしか手がないんなら直接何かしてくるつて思つてた。日刊預言者新聞に書かせて止めれないんなら、直接劇を止めに来るんじゃないかつて思つてた」

「じゃあオスカーはそれを止めに行つてたつてことなの？」

今度は気のせいではなく、確実に髪の色が青色をおびてきたのをオスカーは見た。

「ああ、なんて言うか最後の手段になったらマルフオイさん自身が出てくるつて思つたから、マルフオイさんを油断させて、現場を見つけないといけないと思つたんだ」

「その現場を見つけたのね」

オスカーは知つていた。父親もヴォルデモート卿もこちら側に属する人間が最終的に自分自身で事を運びたがることを。

「そうなる。だからその現場に俺一人で行つてマルフオイさんを油断させる必要があつた。それに俺をどうにかしないとどうにもならないつて思わせないといけないつて思つてた」

「どういうことよ、どうにかしないといけないって」

トングスの髪色がまた青に近づいた。オスカーは全部話すのが嫌だった。

「俺がいるからって妨害を諦められたらダメだって思ってた。だってそうしたら捕まえられないだろ？ だからこいつを使った」

オスカーは胸元から逆転時計を取り出した。砂がゆつくりとガラスの中を落ちていった。

「俺が未来から来たって思わせれば俺をどうにかしないといけないんだろ？俺はマルフォイさんがどうやって妨害するか分からないけど、マルフォイさんが俺がそれを知ってるって思えば、俺をどうにかするしかなくなる」

「じゃあそのローブに穴が開いてるのも、顔が切れてるのも叔父さんと決闘してきたってからってことなの？オスカーをどうにかしないといけないって叔父さんに思わせて、決闘してきたってことなの？」

青い髪がゆれていた。今や完全に髪色は青色になって段々その色も黒に近付いているようだった。

「ああ。マルフォイさんの杖を取り上げて、吸魂鬼が出てきたキャビネット棚を燃やしてきた」

「きゅ、吸魂鬼!?!」

「どうやったのかは分からないけど、キャビネット棚から吸魂鬼が出てきた。マルフォイさんがあそこにこだわったってことは、キャビネット棚がないと呼び出せないんじゃないかって思ったから、真つ二つにして燃やしてきた」

「何よそれ……ワルなんてもんじゃないわね、オスカー」

トングスは茫然としていたが突然目に力が戻った。

「オスカーが一人で行ったのは叔父さんの現場を捕まえたかったってことは分かったわ、でもなんでそんなことしたのよ、だって、ダンブルドア先生に話すとか、私とかクラナとかでもいいけど、誰かに話したり、一緒に行けばそんな怪我することもなかったんじゃないの？」

最初はオスカー一人でも誰かが後ろに隠れていれば良かったじゃ

ないの」

オスカーは余り言いたくなかった。オスカーはなぜ自分が一人でやりたかったのか分かっていった。マルフォイに言つてやりたかったことがあったのに加えて、もう一つの理由もトングスに言いにくかったからだだった。

「劇はやり切らないとダメだったし……」

「じゃあダンブルドア先生とかマクゴナガル先生とか誰でもいいじゃないの、あの二人なら叔父さんが気付かないようなやり方も分かったんじゃないの？」

「それは…… だから…… トングスに知られずに解決したかったんだ」

「へ？」

オスカーがそう言うのとトングスは眉を上げて、口をポカンと開けた。

「ダンブルドア先生や他の先生に言つてマルフォイさんを捕まえたら嫌でもみんなに伝わるだろ、そうしたらトングスにだつてわかるだろ、あのクソみたいな記事を書かせたのが誰かって」

「は？ 何なの、オスカー、あなたそんな理由で元死喰い人かもしれない人と吸魂鬼をぶつ飛ばしてきたの？ 一人で？」

トングスはさつき吸魂鬼と聞いた時よりも信じられないという顔だった。

「そうだよ、トングスが元から知つてたんなら意味なかったけどな」

オスカーがそう言うと、トングスの髪色が見たことがないほど色んな色に凄いスピードで変わつて、最終的にシヨッキングピンクに戻つた。

「プツ…… なによそれ…… オスカー、あなたラックレス卿とは別の意味でアレなんじゃないの」

トングスは大声で笑つていた。オスカーはさつきの自分の発言にそんなに笑うことがあったのだろうかと思つた。

「それに結局レア達を怒らせたし…… 俺一人で勝手に色々やったせいで、劇みたいにみんなが幸福にはならなかったな」

「そんなことないわよ」

オスカーの眼を真つ直ぐにとらえてトンクスが言った。

「謝ればいいんじゃないの？ どうせクラーナとエストは別のことで怒ってるだけだし、レアだってちゃんと言えれば分かってくれるわよ。大体、オスカーが私に言ったんでしょ、傷つけたんなら謝ればいいって」

今学期に入っつてずっとトンクスに対して思っていることをオスカーは思いだした。

「それに私は意味ないなんて思っでないわよ、今の話を聞いて凄く嬉しいと思ったわよ?」

オスカーは素直にそれを聞いて嬉しかった。

トンクスはみんなに対してバカなことはやるがそれでも正直だった。オスカーはトンクスのみんなに対する誠実さがハツフルパフに相応しいと思っでいた。

クラーナへの仕打ちはどうかと思っだが、トンクスとクラーナの回のやり取りを考えるとトントンかもしれないとオスカーは思っ直した。

トンクスの髪色はショッキングピンクと赤色が今や混ざり合っでいた。

「トンクスはクラーナよりわかりやすいよな」

「はあ? なによそれ、どういう意味よ」

オスカーが突然言っ出したことにトンクスはついていけない様だった。オスカーはクラーナの表情が一番分かりやすいと思っでいたが、トンクスの髪色はそれ以上に分かりやすかった。

「髪の色で何考えてるか大体わかると思っでるんだけど、気付いてるのか?」

「へ?」

するとトンクスは自分の髪色を見て、ショッキングピンクだということを確認しているようだった。

「それはちっちゃいころだけで、今はそんなに変わらないはずよ!!」

今度は意識しているのかトンクスの髪色はショッキングピンクの

ままだった。オスカーの経験上、焦ったり怒ったりするとトンクスの髪色は赤まじりになるはずだった。

「オスカーのくせになんでニヤニヤ笑ってるのよ!! いいわ、もし今私の髪色を変えられるんなら、ニンフアドーラって呼んでもいいわよ」

「はあ? なんだそれトンクスの方がいいんじゃないのか?」

「うっさいわよ、どうせ変えられる自信がないんでしょ? ママにからかわれて練習したんだからそんなに勝手に変わらなはずよ」

オスカーは少し考えた。トンクスの名前を呼ぶことに興味はなかったが、髪色を変えるにはトンクスを驚かせるにはどうしたらいいのかを考えていた。それに正直、変身されて好き勝手やられたことに對して少し、仕返しをしたかった。

「なんでもやっていいのか?」

「魔法で色変えましたとかはダメよ」

トンクスが感情を表わしている場面をオスカーは考えた。オスカーはトンクスは髪色よりも表情の方が変化しにくいと思っていた。トンクスが激しく表情を変化させていたのは…… クラーナとトンクスと自分が何かをやっているときがオスカーの脳裏に浮かんだ。クラーナと喧嘩していた時ともう一つ何かあったはずだった。オスカーは思いだした。あの時のトンクスの反応が珍しいとオスカーは思っていたのだった。

「ほんとに魔法以外ならなんでもやっていいのか?」

「しつこいわね、いいわよ、キスでもなんでも来なさいよ、今ならクラーナと間接キスができるわよ」

オスカーは正直に向き合うのが一番効果があるのではないかと思っていた。トンクスが照れていた状況を思いだして、それを再現するのが一番いいと思った。

オスカーはトンクスに近付いて肩を両手で持った。トンクスはオスカーの方を睨めつけるだけで全く髪色も表情も変化させなかった。

「トンクス、俺はトンクスのこと凄いと思ってる」

「なによそれ? 褒めたって髪色は変わらないわよ?」

トンクスの言う通り、髪色はシヨッキングピンクから全く変わらなかった。

「だって誰かに対して逃げないからだ。元気がなくなってたレアにだって、エストやクラーナのことにだって、ずっと心配そうにしてたし、色々やろうとしてただろ」

「は？ はあ？ な、なんなのよ」

顔の方は少し焦っているようだったが、髪色は変わらなかった。

「エストと仲直りできたのだって、トンクスのおかげだし、クラーナとまね妖怪を倒せたのもトンクスのおかげだって思ってる」

「それは勝手にオスカーがコマしただけじゃないの」

「トンクスに言われなかったらどうにもならなかったと思ってるし、あの時、トンクスがそう思ってるって言ったのを聞いて、俺はさっきトンクスが言ったみたいに嬉しかった」

「だ、だからなんなのよ」

トンクスは相変わらずベッドの上に座っていたが、目線をオスカーから離し始めた。

「だから、劇を最後までやりたかったし、横やりが入るのが許せなかった」

「オスカーが怒ることじゃないでしょ」

「だって、トンクスはずっと考えてたんだろ？ 劇を見た時も楽しそうだったし、ドージ先生を連れてきた時も楽しそうだったろ？」

「私が楽しいのとオスカーが怒るのは関係ないでしょ」

シヨッキングピンクの髪が先の方から少し濃くなっているような気がした。

「だから自分のしたことだから、あんなに辛そうな顔してたんじゃないのか？ エストが落ちた時も、クラーナの様子がおかしくなった時も俺には辛そうに見えた」

「オスカー、一体何……」

「だから嫌だった。双子と一緒にマルフォイさんの話した時にトンクスは変な顔をしてた。フレッド・ジョージだって気付いてた」

「そりや微妙な顔くらいするわよ、姉妹で会わなくなるなんておかし

いもの」

トunksはもう完全にオスカーから視線を離していた。

「俺はそれが凄いつて言ってるんだ。だってトunksはいつつもみんなのこと考えてるだろ？ レアだってリータを殴つてるときにそう言つてただろ？」

ついに言い返すことをトunksはやめたようだった。

「なのにそれが通じないなんておかしいだろ？　なんでよりによつて劇を反対してるのが叔父さんなんだ？　いくらトunksがドジだつてそんなのおかしいだろ？　俺はそう思つてた。だからトunksが知る前に解決したかつたし、マルフォイさんに言つてやりたかつた。だつておかしいだろ？　なんでそんな風になるんだ」

髪の色が色んな色に変わりつつあるようだった。

「意気地なしつて言つたのはトunksだろ？　劇は最後までみんな幸せになるんだろ？　なんで最後までトunksが傷付かないといけないんだ？　俺はそう思つてた」

「意気地なしつて言つたのは私に言つたわけで、オスカーに言つたんじゃない……」

トunksが消え入るような声でそう言つた瞬間、座つていたトunksの力が抜けたようで、トunksの肩を掴んでいたオスカーごとベッドに倒れ込んだ。何か甘いお菓子の様な香りがした気がした。

色とりどりに変わるトunksの髪の毛がオスカーの手の下敷きになつていた。

「トunks……　ニンファアドーラ、俺はニンファアドーラのみんなの事考えてるそういうところが本当に……」

オスカーが続けて言おうとした瞬間にトunksがオスカーを突き飛ばした。オスカーは向かい側にあるベッドまで飛ばされた。

「ああああああ、あんたね!!　女の子みんなにそんなこと言ってるんじゃないでしょうね!!」

「ニンファアドーラだから言ってるんだ」

オスカーがそう言うと、トunksは髪の毛どころか顔まで真っ赤になつた。

「いったいその魔女に対する攻略術をどこで習ってきたのよ!! そのニンファドローラって呼ぶのやめなさいよ!!」

「髪の色を変えるには何してもいいんじゃないのか?」

「うっさいわよ!! そういうのはエストとクラリーナにだけしとけばいいのよ!! あんたほんといつか後ろからインペリオされるわよ!!」

そう言つてトンクスは枕やらなにやらをオスカーに投げつけた。オスカーは杖を取り出していなかったのでモロにそれを受けるしかなかった。

誰のモノかも分からないベッドでオスカーはそれをあまんじて受けていたが、トンクスはベッドまで歩いてきて、オスカーのローブの首元を引き寄せて叫んだ。

「いい? ニンファドローラって呼んじやダメよ!!」

「髪の毛の色は変わって……」

「あんたホグワーツを火の海にしたいの!! 言つとくけど本気でエストとクラリーナが喧嘩しても私は止めないわよ!!」

トンクスは大声で叫んでいたが未だに顔も髪も真っ赤だった。すると、ハツフルパフの生徒らしい女の子三人が部屋のドアを開けた。三人はベッドの二人を見て、目を大きく見開いた。トンクスがあんまり大声で叫んでいるせいで二人は三人が近づいて来る足音が聞こえなかったようだった。

「トンクス…… 私は応援してるわ……」

「グリフィンボールの子にキスしてた人をその日のうちに連れ込むなんて……」

「ちゃんとスコージファイかけといてね」

三人のハツフルパフ生はそのまま回れ右をして、消えていった。ご丁寧にコロポータスで鍵までかけていった。

「ど、どうしてくれるのよ!! あいつら噂好きだから一週間で広まるわよ!!」

「さっき黙っててくれるって言ってただろ……」

「あんたがベッドの上に倒れてるのが悪いのよ!!」

「それは俺を吹っ飛ばして枕とか兜とか投げたからだろ」

「何余裕の顔で言い訳してるのよ!! ああもうどうするのよ!!」

トunksはその後しばらくシートに顔をうずめて動かなかった。その間ずっと髪の毛の色は真っ赤だった。オスカーはどうしたらいいのかさっぱり分からなかった。

そもそもトunksがこんなに取り乱しているのはクラリーナと喧嘩した時くらいだった。

オスカーが色々考えているとトunksがシートから眼だけ出してオスカーの方を見ていた。髪の毛の色はやっぱり真っ赤だった。

「いい、ニンファアドーラって言っちゃダメよ? パパみたいにドーラも駄目よ」

「わかった」

「今日のごとはエストとクラリーナには内緒よ、言ったらクルーシオした後にあんたの首を消失させるわよ」

「わかった」

「どこで何してたかちゃんとした言い訳を考えとくのよ、あの二人は無駄に勘がいいわよ」

「わかった」

エストとクラリーナの勘がいいことをオスカーは良く知っていた。しかしいくら二人でもハツフルパフの寮にいたとは想像できないだろうとオスカーは思っていた。

トunksはまた少し動かなくなった後、突然立ち上がって、姿見の前まで行き、髪の毛の色をレッドと同じ様な色に戻してからオスカーの方へやってきた。

「はあ、もう疲れたわ」

「ああ俺も疲れた」

「あのねえ…… いやもういいわ」

トunksは言った後にオスカーの心臓のある方の胸を指で突いた。「で? オスカーはどうだったの?」

「どうって何が?」

「楽しかったの?」

オスカーはトunksが何が言いたいのか分からなかった。

「あのね、あんたも言ってたでしょ？ そう思ってることが大事だった」

トunksはまたオスカーの胸を突いた。

「劇をやったのは楽しかったかって聞いているの、オスカー、あんたが楽しいって思っていないと意味ないでしょ？ 自分がそう思わないといけないんじゃないの？ 人の事考える前にまず自分でしょ？」

オスカーはトunksがそう言ったのを聞いて、突かれた部分から暖かくなっていくような気がした。

「言つとくけどまたニンファドーラとか言い出したらシレンシオするわ、あんたとクラーナにやられすぎてすっかり私も覚えたのよ」

ちよつと疲れた顔でトunksはそう言った。髪の毛の先が少しピンク色になっていた。

「で？ どうなのよ」

「楽しかったと思う」

「ならいいわ」

苦しみの証・努力の証・過去の宝

オスカーは大変だった。

まずレア、エスト、クラリーナの三人をチャーリーが爆笑する中、事の次第を説明するのが大変だった。

次にそれからというもの、しばらくの間、エストはオスカーに怒つてろくに口を聞いてくれない上に、クラリーナはオスカーが近づくだけで飛び退いた。

さらにそれを誰かに相談しようにも、レアは自業自得ですけどねと言ってオスカーを助けてくれなかったし、チャーリーは爆笑するだけで役に立たず、トンクスはニヤニヤ笑っているだけだった。

極め付きには、スリザリンのクイティツチチームがオスカーの所に大挙してやってきてエストの機嫌が悪いことでオスカーを責め立てた。

オスカーは劇が終わって忙しく無くなったはずなのに疲労困憊だった。

ただマシだったのは日刊預言者新聞が最近はボージン・アンド・バークスという店が全焼したとか、ファツジ新体制の魔法省が吸魂鬼を一匹逃がしたとか、そういう普通のニュースを書くだけになり、リータが約束を守っていることを確認できていることだけだった。

劇が終わって一週間ほどたった朝食の時間、何やらグリフィンドールのテーブルが騒がしい様だった。凄まじい数のふくろうがグリフィンドールのテーブルに襲来している。

オスカーはミュリエルがエストにふくろうを送ってきた時でもあれほどの数では無かったなと思っていた。

「なんかあったのかな？ 最近ふくろうの便が遅れてたみたいだけど、それにしても凄い数のふくろうなの」

「ふくろうの土砂降りってああいうのの事を言うんだろな」

しよせん他人事だと話すオスカーとエストの前にも一羽のふくろ

うが降り立つ。茶色の森ふくろうだった。オスカーは朝食の皿を左右に避けて、ふくろうから封筒を受け取った。

封筒には『ホグワーツ エストレヤ・プルウェット様』と書かれていて、封筒の後ろを見ると『週間魔女 編集部』と書かれている。オスカーは去年の事や今年の日刊預言者新聞の事もあつてあまり郵便物が好きではなかった。

「エスト宛てだ。差出人は週間魔女編集部らしい」

スクランブルエッグを頬張っていたエストがオスカーから無言で封筒を受け取った。頬張りすぎて喋れないようだった。

封筒を破いて中からでてきたのは恐らく週間魔女の冊子だった。オスカーは同じ様な冊子をウィーズリーおばさんが読んでいたのを見たことがあった。

しかし、エストは表紙を見るなり顔色を変えて、スクランブルエッグを全てのみ込んだ。中身を数ページ読んだ後、オスカーの顔を見て、次にグリフィンドールのテーブルの方に視線を移したようだった。

オスカーもグリフィンドールのテーブルを見ると騒ぎが少し収まり、誰かがスリザリンのテーブルにやってきているようだった。

ローブや髪の毛をふくろうの羽まみれにして、魔法薬の教科書より分厚い封筒の束を持って、こつちに歩いてくるのは顔を真っ赤にしたクラーナだった。

「エスト!!! 今すぐ、あのリータ・スキータとか言うクソ虫をアズカバン送りにしに行きますよ!!!」

クラーナはそう叫んで封筒の束をオスカーの目の前に叩きつけた。封筒は全てクラーナ宛てのようだった。

「それは無理なの、スキータさんは約束は破ってないの……」

「はあ? そんなの知りませんよ!!! 私は今すぐ魔法省に通報してやります!!!」

大広間の半分くらいの視線をクラーナとエストは集めているようだった。スネイプ先生が騒ぎを聞きつけてこつちに来るのがオスカーには見えた。クラーナを捕まえてグリフィンドールから減点す

るのがオスカーには簡単に想像できた。

「エストたちは約束しちゃったの……」

「私はこんな頭の軽い雑誌に載せてくださいなんて約束してないですよ!!!」

「クラリーナ、スネイプ先生がこっちに来てるからもうちよつと静かに……」

オスカーがクラリーナにそう言うと、クラリーナはさらに顔を赤くして、エストが持っていた冊子をひったくってオスカーに投げつけた。

「なんでオスカーは他人事みたいな顔してるんですか!!!」

オスカーは投げつけられたそれを見て、自分の顔から血が引いていくのがわかった気がした。週刊魔女の表紙はどう見ても、劇の最後のシーンのオスカーとクラリーナだった。

ペラペラとページをめくると誹謗中傷等はないものの、こつぱずかしくなるような事が多分に書かれていた。オスカーは頭を抱えた。

「なんなんですか!!! このクソ雑誌に書いてある歯が浮きするような文章は!!! 何が魔法界の深い溝を埋めるキ……」

クラリーナは途中まで自分で言っただけ顔をさらに赤くした。そして今度は封筒の束をオスカーとエストに突き出した。

「ありがたくもない手紙が大量に届いて私のローブは羽だらけですよ!!! ああ、決めました。トンクスをふくろうに変えてやります!!! それで Hogwarts を十周はしないと元に戻しません!!! それかチャリーリーのアホが言っただけみたいにおスふくろうの群れに突っ込んでやります!!!」

トンクスがふくろうになるとやっぱり毛色が変わるのだろうかとか考えながらオスカーはクラリーナが突き出した封筒の中身を読んだ。

届いた手紙にはクラリーナを応援してるだとか、胸がキュンキュンしただとか、貴方の心情を考えると涙が止まらないだとか書かれていた。

「喧嘩かね? ミス・ムーディ、ミス・プルウエット」

スネイプ先生がいつの間にかすぐそばまで来ていた。オスカーはスネイプ先生がオスカーとエストがグリフィンドル生と一緒にい

るときに近づいてくるのは珍しいと思った。

魔法薬学の授業の時でも、グリフィンドールの二人といるときは余り近づいてこない気がしていたからだ。それ以外るとき、スリザリン生とグリフィンドール生が分かれているときはいちゃもんをつけてグリフィンドールを減点し、エストが答えるたびにスリザリンに点を与えていた。そのせいでそんな印象があるのかもしれないとオスカーは考えた。

「スネイプ先生、ちょっとクラーナにふくろうが一杯来てたから大声がでただけなの」

「おやなるほど…… ミス・ムーディ、魔法界のヒロインにこんな事を言うのは酷かもしれないが、あまり朝食の席では騒がないでくれたまえ」

スネイプは机の上に置かれていた週間魔女をチラッと見て、クラーナにそう言った。クラーナは怒りなのか恥ずかしさなのか、さらに赤くなってスネイプ先生に言い返そうとした。グリフィンドールから十点ばかり引かれるのが容易に想像できたので、オスカーはクラーナの肩を引つ張った。

「わわっ…… お、オスカー、なんなんですか……」

クラーナはオスカーが触った途端に一気に飛び退いた。最近やつとマシになってきたと思っていたのに避けられてオスカーは結構ショックだった。

「スネイプ先生、クイディッチ競技場の予約をグリフィンドールより先にしたいってキャプテンが言ってたの」

「ああ、その件はマクゴナガル先生と交渉中だ……」

エストがスネイプ先生との話題を変えてくれているようだった。オスカーはクラーナをとりあえず座らした。

「減点されたいのか？ とりあえず週間魔女のことは無視するしかないだろ」

「そ、それはそうですけど……」

オスカーとクラーナの様子を見て、血みどろ男爵が鼻を鳴らした。オスカーは今日はあまり話かけてこない人物ばかりがこっちに興味

があるようだと思った。

「少年、寮外の友人をつくるのは好ましいことだが寮生とも仲を深めた方がいいぞ」

「そうですね……」

「血みどろ男爵って喋りかけてくるんですね……」

血みどろ男爵と二人が喋っている間に、エストと話し込んでいたスネイプ先生がやっと教職員のテーブルに戻るのが見え、入れ替わりにトンクスとチャーリーがこっちにやってくるのがオスカーには見えた。朝食の時間はもうほとんど終わっていて、大広間はだんだん人氣が無くなり始めていた。

「やったじゃないクラーナ、全国デビューね」

「ほんとにぶっ殺しますよ、今なら許されざる呪文を使っても許される気がします」

オスカーは二人が大騒ぎし始めたのを見て、逆転時計を使った方が本当に丸く収まったのではないかと思い、自分の判断力を疑い始めていた。

「週間魔女はママも料理のページを見るために読んでるからね、多分うちの家族は全員読んでるんじゃないかなあ」

チャーリーがそう言うのを聞いて、オスカーは初めて夏休みに隠れ穴に行くのが少し嫌になった。これは深刻な事態だった。

「少年、選択は重要だぞ、それと余り他の寮に入り込むのは慎むようなな」

血みどろ男爵は意味深なことを言っただ鎖をがちやがちややりながら消えようとした。

「他の寮ってなんなの男爵」

オスカーとトンクスは顔を見合わせた。二人は見られたハツフルパフの三人には口止めをしていたがゴーストや肖像画には口止めをしていなかった。血みどろ男爵が珍しくちよつと困ったような表情をしていた。

「髪飾りの時にエストと一緒にレイブンクロー寮に入り込んだんじゃないんですか？」

「今年はそんなことしてないの、ね？ オスカー？」

エストに同意を求められ、オスカーは返答に困ってトンクスの方を見た。トンクスはあからさまに目が泳いでいて、髪の毛の先っぽが赤くなっていた。エストがオスカーとトンクスの様子を鋭い眼で見ている。オスカーはトンクスも閉心術をマスターした方がいいと思っ

た。
「順当に考えれば、オスカーが入ったのはハツフルパフ寮なの、ね？ 男爵？」

男爵は何も答えずにオスカーの方をチラツと見ていた。無言は同意を意味していた。オスカーは灰色のレデイがやってきて血みどろ男爵をアルバニアに連れて行ってくれないかと思った。

「なんでハツフルパフ寮なんですか？」
「だって、オスカーが黙ってどこかに消えたのは最近だと二回だけなの、劇の時と劇の後なの」

そう言っただけでクラリーナにはエストがどうしてそう思ったのか分かったらしかった。オスカーが思っている通り、二人共勘が冴えているようだった。

「問題はなんで二人が嘘をついていたのかって言うことですか？」
「そうなの、ハツフルパフの寮に逃げ込んだって言えなかった理由があるはずなの」

何故かチャーリーはもう爆笑していた。最近、オスカーは自分が追い詰められているときに限ってチャーリーが笑っていると感じていた。オスカーはさっさとトンクスと言いつつ訳を考えないとすぐにボロが出ると思った。

「で？ なんでですか？ トンクス？」
「なんで私なのよ、オスカーに聞きなさいよ」

「俺に聞かれても答えられないぞ、言うなって言ったのはトンクスだからな」

「ちよつと、あんた裏切るつもりなの！」

オスカーはこれは明らかに状況が悪いと思った。それにどうもエ

ストの機嫌が週間魔女が届いてから明らかに悪くなっている気がしていた。

「そう言えばトンクスって、オスカーを呼ぶとき、あんたじゃなくて。あなたじゃなかったの？」

「はあ？　何よそれ、オスカーをどう呼ぼうと私の勝手よね？　ハツフルパフ寮に入ったっていうのもエストの想像だし、いちゃもんよ」「ハツフルパフ寮で言いたくないことがあったってことだよ？　ハツフルパフの学生に聞けば分かるんじゃないかな」

「そうですね、午後の薬草学の時間に聞けばいいですね」

オスカーとトンクスはチャリーを睨みつけたが、チャリーは相変わらず半笑いだった。オスカーはここで黙っていてもあそこで何があったのかばれるのは時間の問題ではないかと思った。

「トンクス、どうするんだ」

「ここはあれよ、小さい事実で大きい事実を隠せばいいのよ、オスカー、上手く丸め込むのよ、魔女に対する攻略術で〇優をとったあんなならできるわ」

無理難題だとオスカーは思った。確かに逆転時計やエストの羊皮紙といい、何かに視点を集中させれば乗り切れるかもしれないが、そもそもオスカーは何を隠せばいいのか分からなかった。

「それで？　オスカーは何か言い訳を考えついたんですか？」

「どうせすぐにばれるの、魔法使いの口に戸は立てられないの」

オスカーの事を良く知っているであろう二人から何かを隠すのは相当難しかった。ちよつとでも違和感があればすぐに気づかれてしまうからだ。オスカーはあのやり取りの中で一番インパクトがあるであろう事が何なのか考えた。

「トンクスは名前で呼ばれるのが嫌だろ」

「そうですね、あほのニンフアドーラはそう呼ばれるのが嫌みたいですね」

「テッドさんとトンクス先生につけて貰った名前なのにもったいないの」

オスカーはあそこで二人がベッドの上にいたことをハツフルパフ

生に見られた事が一番の問題だと考えた。つまり、そこから二人の考えの焦点をずらせばいいと考えたのだ。

「それでなんだけど、劇が終わるまで隠れてる間暇だったから、トンクスが賭けに負けたら名前でもいいって言っただけだ」

オスカーがそう言うのと二人がトンクスの方を見た。さっきまでの視線と何か意味合いが違うような気がオスカーはした。

「それで俺が多分賭けに勝ったから、ニンファアドーラって呼んでたら他のハツフルパフ生に見られて、それを黙ってくれって言われたんだ」

「オスカー、あんたバカじゃないの……」

トンクスは信じられないという目でオスカーを見た。オスカーは特に問題ないはずだと思っていたので、その目線が意外だった。

「ニンファアドーラはオスカーと何の賭けをしたの？」

「私も気になります、ニンファアドーラ」

オスカーは二人の口撃がトンクスに向いたのでちよつと一安心した。オスカーは二人にあまり嘘をつきたくなかった。

「なんでもいいでしょ、話はそれで終わりよ、あとニンファアドーラって呼ぶのやめなさいよ」

「オスカーに呼ばれるのはいいのに、私たちはダメなんですか？ ニンファアドーラ」

「そうなの、友達なのに悲しいの、ニンファアドーラ」

「ニンファアドーラって、トンクスのお父さんやお母さんはそう呼んでるよね」

トンクスはこれでもかという憎しみの表情でオスカーを睨みつけた。オスカーにはお手上げだった。

「つまり、ニンファアドーラにとって私たちはただの友達で、オスカーは家族同然ってことですか？」

「バカ言ってるんじゃないわよ!!! だいたいあのあとオスカーもニンファアドーラって呼んでないでしょ!!!」

「ニンファアドーラ、髪の毛が赤くなってるの、凶星なの」

トンクスは自分の髪の毛を持ち、一度しかめるような顔をして、エ

ストと同じ様な黒髪に色を変えた。

「オスカー、結局ニンフアドーラとなんの賭けをしたんだい？」

「今、エストとクラーナがニンフアドーラにやったことを俺ができるかできないかだけど」

「オスカー、ほんとに首から上を消失させるわよ」

三人のやり取りを聞いて、またエストとクラーナのトンクスを見る目が変わった気がした。オスカーはそろそろこの話題をやめたかった。それに血みどろ男爵もいつの間にか消えていたし、大広間も人がほとんどいなかった。

「ニンフアドーラって、もしかしてわざとドジをやってますか？」

「エストもニンフアドーラは何も考えてないと思ってたけど、これからは考え直すの」

「どういう意味よそれ!! だからあなた達に言いたくなかったのよ!!

オスカー、ほんとあんたアホじゃないの!! いつか朝食にアモルテンシアを入れられるわよ!!」

結局、五人は昼食の時間になるまで大広間で騒ぎ続けていた。オスカーは安易に他の寮に入ることをもうしまいと心に決めた。

劇が終わってからの学校生活は矢の様に過ぎて行つた。週間魔女が発刊されてからちよつと機嫌が悪かつたエストがグリフィンドルチームのビーター二人を叩き落とし、スリザリンのビーター二人が大暴れした結果、スリザリンはスニッチこそチャリーにとられたものの、クイディッチトーナメントで優勝した。

オスカーは何故かクイディッチチームのメンバーに胴上げされて、試合前にエストの機嫌を損ねる様をお願いされた。オスカーは丁重にお断りした。

期末試験は特に問題がなかった。期末試験の頃にはエストの機嫌は直っていたし、オスカーは実技のある闇の魔術に対する防衛術、呪文学、変身術に加えて、薬草学と魔法薬学でもエスト以外に負けることが無くなった。エストは十科目の試験で最高の成績だった。オスカーがエストに勝てたのは占い学だけで、闇の魔術に対する防衛術は

同じ点数だった。逆転時計も試験の時にエストがマクゴナガル先生に返却していた。

今年も闇の魔術に対する防衛術の先生は一年で辞めてしまうようだった。ドージ先生いわく、もともと一年の約束だったらしく、体力的に持ちそうにないと言っていた。オスカーは闇の魔術に対する防衛術の先生とは、他の科目の先生よりも関りがあるのに毎年いなくなってしまうと思っていた。そしていい加減この科目は呪われているというのが本当ではないのかと考えていた。

ホグズミード駅からキングズ・クロス駅へ向かう道中、オスカー達五人はまたコンパートメントを独占していた。相変わらず爆発スナップだの、百味ビーンズの、一気食いなんかをしながら帰りの時間を過ごしていた。扉の外側に金髪が見えたのでオスカーは皆が何か言う前にドアを開けた。

「オスカー、魔女を呼び寄せる呪文とか覚えてるんじゃないの、あんた」

「どんな呪文だよ」

「あ…… す、すぐ戻りますからドアを開けたままでも……」

オスカー達は詰めて座ってレアの場所を開けた。クラリーナがレアを強引に座らせた。オスカーは良く考えなくても魔女ばかりになっ
てしまつて、チャーリーと自分は肩身が狭いと考え始めた。

「レアは夏休みは暇なの？」

「そうですね…… ボクは家で宿題をしてるだけだと思います……」

レイブンクローのみんなは家族とバカンスにいつちやうみたいなので」

「じゃあレアも隠れ穴決定なの」

「なんですか？ 隠れ穴って？」

レアは不思議そうに首をひねった。オスカーも隠れ穴という名前が何なのか最初は分からなかったので、真つ当な反応だと思った。

「僕の家だよ、夏休みは結構みんな泊まりに来てるんだ」

「ただレアも来るんなら人数的にあの家も限界かもしれないね、そもそも男ばつかりの家ですし」

「クラーナ、そんなにオスカーの家に行きたいなら行きたいって言えばいいのよ」

「ニンファドローラは黙ってればいいんですよ」

ふざけているトンクスを置いておいても、確かにあの家のキャパシティが限界に近付いているのは確かかも知れなかった。それに前に一緒にグリーンゴッツに行つた時にウィーズリー家が違う意味で限界ギリギリの生活をしていることもオスカーは知っていた。

「最初の方だけ、ウチかエストの所にいればいいんじゃないのか？

隠れ穴には屋敷しもべもないしな、正直、あの量のごはんをつくるのは大変だろ」

「それはそうなの、モリーおばさんは確かに大変そうなの、エストたちは魔法使えないから手伝えないし」

オスカーはクリスマス以外にも人が来た方がペンスも喜ぶだろうと考えた。それに今年になってやっと玄関から吸魂鬼が消えたので、外に遊びに行くこともできるはずだった。

「えつと…… どうなってるんですか？」

「うーん、とりあえずパパとママの様子を見てからふくろうを送るよ、エロールがみんなのところに届くのはちよつと時間がかかるかもしれないけど」

「あれならローガンを先になんか持たせて送るけどな」

「その方が助かるよ、エロールは悪天候だとほとんど飛べなくなってるから」

ウィーズリー家のふくろう、エロールはかなりの高齢になってきていて嵐の中だとよく行方不明になっていた。実際、去年の夏休みにも、オスカーの家にいるふくろうのローガンがエロールをわしづかみにして手紙ごと運んできたことがあったのだ。

「それでいいんじゃないの？ 正直、隠れ穴は女の子の部屋が一つしかないし、限界だと思うわ、あとレアはなんか他に用事があるんじゃないの？」

「そうでした……」

オスカー達の視線がレアに集まった。オスカーはレアの髪の毛が

学期の始まりより伸びている気がした。それでも短いことに違いはなかったが。

「あの…… ありがとうございます。先輩達と練習したおかげで、守護霊の呪文も使えるようになりましたし、呪文学と変身術ではほとんどトップの成績になりました」

レアは言うのが恥ずかしいのか、手を開いたり握ったりしていた。それでも視線はみんなと同じ高さだった。

「オスカー先輩とエスト先輩には他にもお世話になりましたし、ボクもちよつとだけ自分を信じる事ができたと思います。ありがとうございます」

オスカーはレアの一言を聞いて、トンクスに胸を突かれた時から頭の中を時々グルグル回っているものがまた大きくなつた気がした。

「あの時はアバーフォーズさんがほとんど喋ってただけなの、だから来年ホグズミードに行けるようになったら、挨拶しに行けばいいの」「そうですね…… ちよつと怖いですけど」

「大丈夫よ、あの人あのクソ虫を私たちよりヤバイ目で見たもの、それにファイア・ウイスキーを飲んでも黙っててくれるしね」

トンクスはそう言った後に意味深にクラリーナの方を見た。「ニンファドローラ、いい加減死にたいようですね」

「何よ、私は何も言つて無いわよ」

オスカーはレア、エスト、クラリーナ、トンクスの順番に顔を見た。チャーリーはまた半笑いでトンクスとクラリーナの漫才を見ていた。

あの時、クラリーナは酔っ払つて何を言つていたのか、確かレアに対して自分と向き合っていると聞いていたはずだった。オスカーはホッグズ・ヘッドのレアを、クリスマスのエストを、まね妖怪の前のクラリーナを順番に思いだした。

「あのバーテンがダンブルドア先生の弟なんて、中々信じられないよね」

「弟さんと言えばチャーリー先輩の弟さんは来年入学なんじゃないですか？」

「パースは来年入ってくるの」

みんな自分と向き合っているためにあれほどリータの記事に苦しめられたのではないのか？ オスカーはトングスの言葉を思いだした。まず自分からだ。オスカーは思った。自分はリータの記事にされたらみんなの様に悩むことはできなかったのだろうか？ マルフオイが言っていたように何かを忘れていないのか？ オスカーはだんだんとやるべきことが見えてきた気がした。

「パーシーはエストになついていたみたいですから、グリフィンドールになつたら悲しみそうですね」

「誰かさんと誰かさんみたいね、スリザリンとグリフィンドールで」

クラーナの守護霊の姿を見た時に、オスカーは守護霊が取る姿がその人にとって必然的なモノだと分かった。では自分の守護霊はどうなのか、オスカーはその意味を知らないといけないと思った。

「誰かなんて誰なのか私には全然わかりませんね、はつきり言ったらどうですか？」

「何よ、赤い顔してモジモジしてたくせに開き直ってるんじゃないわよ」

「やっぱり今すぐ窓から放り投げてやります」

誰かが誰かの事を思ってたやったりやっていることでも、時にはそれに真っ向から向かって行かないといけないとオスカーは一年間でやっと分かっていった。誰かを分かっているつもりで分かった気になっただけだと、分かっていた。

「行きのホグワーツ特急とやっつてることが全く変わってないの」

「そのほうがいいのかもね、色々あっても変わらないんなら」

「トングス先輩とクラーナ先輩は仲良しですよね」

いいタイミングなのだと、ホグワーツから帰るタイミングほどいい時間があるとはオスカーには思えなかった。

「何が仲良しなんですか！！！！ このニンファドーラのせいで未だにクソみたいな手紙が週に十通は届くんですよ！！！！」

「あら良かったじゃないの、というかオスカー全然喋らないわね、黙らせ呪文でもくらったの？」

「お前らがうるさいからバランスをとってるんだ」

そう、バランスが重要だった。オスカーはホグワーツ特急のスピードが下がっているのを感じながらそう思った。誰かのことを知ったのなら、自分のことも知らないといけない。オスカーはそう思った。

四年目 蘇りの石 ふくろう便

トンボが行き交う森の中をオスカーは進んでいた。どうしてこんなにトンボが多いのか小さいころのオスカーには分からなかったが、この森の傍には小川と小さな池があり、そこでトンボは生まれている様だった。

森の中を無言で進んでいたが、オスカーはいつかしたようなリンゴの様な香りを感じることはできなかった。いつかの記憶のように木漏れ日が差し込んでいなくなかったし、記憶と同じなのは木々と飛び交うトンボだけだった。

倒木の上に座り込んで少し考え込んでいるオスカーだったが、ふいに周りを飛んでいたトンボがいなくなったのが分かった。

オスカーの眼の間にドサツと言う音をたてて何かが落ちてきた。

「エロール？」

落ち葉の上で悲し気な鳴き声を上げているのはウィーズリー家のフクロウ、エロールだった。疲労困憊で地面や木々に立つどころか、完全に寝転んで荒い息をたてている。

エロールを掴んでなんとか倒木の上にとまらせてやると、エロールは右足を差し出した。ウィーズリー家からの便りがやっと届いたようだった。

内容はやっぱり夏休み中、みんなを泊めるのは隠れ穴に検知不可能拡大呪文をかけないとだめだろうということ、だめそうなので順次、オスカーの家に向かうということだった。

オスカーが手紙を読んでいると倒木になんとか立っていたエロールを吹っ飛ばして、違うフクロウがオスカーの隣にとまった。全身真っ黒いこのフクロウはドロホフ邸のフクロウのローガンだった。

ローガンは褒めるとばかりに左足を差し出した。オスカーは手紙を足から取ってから頭を撫でてやり、後ろで悲しげな声をあげている

エロールをもう一度ローガンの横にとまらせてやった。

ローガンはエロールを一べつした後、ドロホフ邸の方向へ飛び去って行った。オスカーはホグワーツ魔法魔術学校と蟻印が押されている手紙を開けた。

手紙にはオスカーがホグワーツに入る前に一度だけ見たことのある、細長い奇妙な文字が書かれていた。

オスカーがダンブルドア校長に頼んだこと、記憶を思い出すことは可能かということと、その方法を教えて欲しいという内容に対する返答だった。

手紙にはホグワーツが始まった週のある曜日に校長室へ来て欲しいと書かれていた。

オスカーは具体的な方法が書かれているか、不可能だと書かれているかと思っていたので、少し拍子抜けした。しかし、ダンブルドア校長が時間をとってくれると言うことは期待できるかもしれないと思いを直した。

まだ疲れて息が荒そうなエロールを掴んで、オスカーはドロホフ邸への帰り道を進み始めた。

最近、何度も行き帰りとしていた道を進みながらオスカーは考えていた。記憶を思い出して何になるのかということだった。オスカーは自分が思い出せない記憶があることは分かっていたし、そもそも何が思い出せないのか分からない記憶すらあると思っていた。

しかし、思い出さないといけない記憶があることは確かだった。オスカーは彼女の名前を思い出すことが出来なかった。オスカーを尋問した厳しそうな魔法省の人間を除いて、あのとときいた魔法省の人達や聖マンゴの癒者たちも辛い記憶ならば思い出さない方がいいと言っていた。

キングズリーも、自分が思い出さないといけないと思うまでは思い返すべきではないと言っていたことをオスカーは覚えていたし、これまでそれにオスカーは従ってきたのだった。

しかし、周りのみんなのことや、守護霊の呪文、まね妖怪のことを

通して、オスカーは思い出さないといけないと考えていた。それも誰かに教えられるのではなく、自分で思い出さないといけないとそう思っていた。

オスカーが思考の渦の中を回っている間に家についていた。手の中ではエロールが悲し気な声をあげていた。どうやらいつの間にか手に力が入っていたらしかった。

「ああ、ごめんなエロール。ペンスが水とエサを用意するからちよつと待っていてくれ」

扉を開いて家の中に入ったオスカーはちよつとおかしいと感じた。いつもの通りなら、ペンスがすぐにでも現れて、服を預かったりするはずだったからだ。

広間の方へ歩いていくとよく聞こえなかったが、誰かの声が聞こえるようだった。

「ほら、ペンスにオスカーの好きなモノを聞いとけばいいのよ、オスカーポイントの稼ぎ時よ」

「確かに、オスカーはあんまり好き嫌いしないの、ごはんの時は全部食べてるし」

「オスカーお坊ちやまの好きなモノですか？」

もう誰かが来ているらしかった。オスカーは複数人の声が聞こえることからキングズリーではないと考えた。

「オスカーお坊ちやまが小さいころは色んなお菓子を作って欲しいと言われたことがあります」

「オスカーがお菓子ですか？ トンクスが糖蜜パイばかり頼むならわかりますけど……」

「オスカーはハニーデュークスに行ってもあんまりお菓子買わないからなあ」

まだ遠くてあまり声が聞えなかったが、いつもの四人が先に来たのだろうとオスカーはあたりをつけた。

「はい、こういったお菓子なのですが……」

パチンという音が廊下を進んでいるオスカーの方にも響いてきた。

「あんまり見たことないお菓子だよね？ ホグワーツとか隠れ穴でも

食べたことないの」

「ほんとだ、僕も食べたことないや、外国のお菓子かな？」

「私も食べたことないですね、あ、でも結構いけますねこれ、手がかかっている感じのお菓子ばかりですし」

「え？ みんな食べたことないの？」

オスカーは広間のすぐそこまで来ていた。

「トunksは食べたことあるの？」

「そりや何度もあるわよ…… ってそういうことね、これマグルのお店、スーパ〜とかで一杯売っているやつよ、このメンバーだと食べたことなくてもおかしくないわ」

広間に入るとエスト、クラーナ、トunks、チャーリーの四人がテーブルの上に置かれているお菓子を頬張りながら話しているのがオスカーから見えた。

「へえ、マグルのお菓子かあ、パパなら喜びそうだなあ」

「マグルのお菓子って機械でつくったり、普通の砂糖をつかわなかったりするんだけど、これはちゃんとした材料と手でつくってあるから本物よりおいしいわよ」

「でもオスカーがマグルのお菓子ってあんまりつながりがよく分からないの」

「なんの話してるんだ？ あと着くのが早すぎだろ」

オスカーが声をかけるとペンスがオスカーの方へ駆け出して、オスカーが持っていたエロールと手紙を受け取った。

「オスカーお坊ちやまの好物についてのお話をしてたのよ」

「好物？ よく分からないけどそんなの知ってどうするんだ？」

「そりや寮対抗のオスカーポイントを貯めるのよ」

「ハツフルパフは減点三百点だな」

ペンスがエロールを持って姿を消すのを見ながらオスカーはそう言った。そもそもオスカー自身、好物と聞かれてもパツとでてこなかった。ロツクケーキは歯が痛いから食べたくないとか、エストにつき合わされて百味ビーンズを一気に食べるのは勘弁して欲しいとかはあったかもしれないが、好きなモノと聞かれてもすぐにはでてこな

かったのだ。

「ペンスさんがここにあるお菓子をオスカーにつくってたつて言ったの」

エストが指し示すテーブルの上をお菓子をオスカーは見た。しかし、オスカーの記憶にはほとんどないお菓子ばかりで、少なくともここ数年ほど食べた記憶も見た記憶もオスカーにはなかった。

「ペンスはマグルのお菓子って言ったし、パパが後からくるから渡してもいいかな、オスカー？」

「ああ、いいけど……」

オスカーは手に取って食べてみたが、その形にも色にも味にも特に思い出すことはなかった。マグルのお菓子という点が少しだけ気になり、あたりを見回したがペンスはいなかったので聞きようがなかった。ただ、オスカーの周りの四人の中でクラリーナだけちよつと心配そうな顔をしていた。

「まあお菓子の話はいいんじゃないですか？ それより誰かレアに連絡したんですか？ 私たちが連絡しないといつまでたつても来れないですよ」

「あら？ クラリーナはオスカーポイント貯めなくていいの？ 今、ペンスにどうやって作るのか聞いておけば手作りお菓子プレゼントでクリスマスに大幅加点よ、あとレアは暖炉飛行でくるから大丈夫よ」

「結局誰が加点するんだよそのポイント、審査基準はなんなんだ」

トンクスが創るよく分からない単語にオスカーはツツコミを入れざるを得なかった。そもそも魔法使いは手作りで何かを作ることはいらないはずなのだ。ウィーズリーおばさんや他の魔法使いも杖を使って、食材や鍋といった調理器具を操り料理をするはずだった。「手作りってところがポイント高いに決まってるじゃないの、ママが言ってたわよ、魔法でできることを自分の手でやるから特別になるつて」

「確かにウチのママもセーターは自分で編むから意味があるつて言ってたね、自分の手で編んだモノを着てもらえれば、自分の思いを着て貰っているようなモノだつて」

トンクスとチャーリーがそう言った後、エストとクラリーナが一回だけオスカーの方に視線を移してまたずらした。オスカーは毎回そのセーターに悪戯を仕掛けているトンクスに言われたくはなかったが、確かに手編みや手作りの方が思いがこもっていいような気がした。

「いい加減、セーターに悪戯をしかけるのはやめて欲しいですけどね」
「そうなの、トンクスが言えることじゃないの」

「ハツフルパフはクリスマスのたびに三百点減点だな」

三人から口々に言われたはずのトンクスは何故かニヤニヤ笑っていて、オスカーはちよつとだけ嫌な予感がしたのだった。

驚くべきことにオスカーの所にエロールがたどり着いてから数時間までこれまでクリスマスにドロホフ邸に来ていたメンバーが全員集合していた。夏休みに加えて、休日だったのもあったかもしれない。段々大人たちもこの家に来る遠慮やためらいが無くなってきている様だった。

ウィーズリーおばさんが来るとすぐにエストは飛んでいって何かを話している様だったし、トンクスとチャーリー、レアはウィーズリーの下の子を連れて外に遊びに行った様だった。オスカーは今日も何も思いだせなかったこともあって、余り外に出たい気分では無かった。

いつもはひと気の無いドロホフ邸を歩いて広間の隣の部屋に入ると何故か、トンクス先生とクラリーナという、オスカーのほとんど見たことのない組み合わせの二人が話込んでいた。

「あら？ オスカー君じゃないの」

「ああどうも……」

オスカーの姿を見ると、何か羊皮紙にメモを取っていたクラリーナがそれをポケットに入れた。オスカーにはクラリーナがトンクス先生と何を話していたのかは全く想像がつかなかった。

「そうね、今クラリーナちゃんの相談にも乗ってあげたところなのよ、特別に元先生としてオスカー君の相談にもものつてあげるわ」

「相談…… ですか？」

「そうよ、何か聞きたいこととかあれば答えるわ、ニンファドーラのことでもいいわよ」

トunks先生に聞きたいこと…… オスカーには開けっぴろげなトunksについて何か聞くべきことがあるとは余り思えなかった。クラーナがオスカーの方をなにかいぶかし気な目で見ていた。

「えーと、そうですね、どうしてトunks先生はマグル生まれのテッドさんと結婚されたんですか？」

「あらあら聞きたいの？ ニンファドーラからはオスカー君の周りにはマグル生まれの女の子はいないって聞いてたけど、もしかしてニンファドーラが知らないだけでいるのかしら？」

「いいいです」

オスカーはまたこれなのかと思っちょつとため息をついた。トunksの性格はやっぱトunks先生の責任だと思った。

「クラーナちゃんは知らないの？ オスカー君の周りのマグル生まれの女の子」

「え…… し、知らないと思います……」

「あら？ ほんとかしら？ まあでも相談はオスカー君の周りの女の子の話じゃないわね」

オスカーにはクラーナの反応が意外だった。少なくとも本当にオスカーの周りにマグル生まれの女の子はいなかったし、クラーナも知っているはずだったので、もっとおどおどしきりとはつきりと答えると思っただのだ。

「うーん…… そうね、スリザリンの学生って、ちよつとこう言うところだけど、恋愛とか考え方が重いか、粘着質だと思うのよね」

トunks先生とクラーナの視線がオスカーの方を向いた。オスカーはまるで二人に考え方が重かったり粘着質だと思われているようだと言われているようで、ちよつと気まずかった。

「別にオスカー君がそうだって言ってるわけじゃないわよ、スリザリン生全体を通してそうだって言ってるの、私も含めてね」

オスカーは身近なスリザリンの人間を考えた。エスト、トunks先

生、スネイプ先生…… オスカーが一番トunks先生と言う人物に当てはまりそうだと思ったのは血みどろ男爵だった。血みどろ男爵は十世紀も自分の行為を悔い続けているのだ、彼はまさに考え方が重い男だと言えると思ったのだ。

「そういう人つてね、すぐ周りが見えなくなつて自分が見えなくなつちやうのよ、でも他の人がいれば自分のことが見えてくるのよ」

オスカーはダンブルドア先生の話の様にトunks先生の言葉の意味が良く分からなかった。かみ砕こうとしても、いまいち理解ができなかった。ただ、考え続ける人が周りや自分が見えなくなるのはオスカーには納得できた。去年のオスカーがきつとそうだったからだつた。

「それもね、自分とすごく違う人の方が見えてくると思わない？ 男と女でも、年上と年下でも、マグルと純血でも、スリザリンとグリフィンドールでもいいわ、だつて違うひととだつたら何が違うのか良く分かるでしょう？ 何で違うのかつて考えるでしょう？ そうしたら自分がどんな位置について、どんな考え方をしているのか見えてこないかしら？」

オスカーはトunks先生が言ったことを考えてみた、自分と違う人といれば自分がどういう考え方をしているのかわかる？ それは去年感じてきたことと同じではないだろうか？ アバーフオースやエストの考え方、クラーナやトunksの考え方、自分と違うからみんなの考え方を知ることが理解できたのではなかったのだろうか。

「私の実家がどこかは知っているわよね？ 純血よ永遠なれ、高貴なる由緒正しきブラック家よ、何世紀にもわたつてスリザリン生だけを輩出してきた家で、例外はあの有名ないとこくらいね」

オスカーもブラック家の名前は知っていた。たしかエストやチャーリーもブラック家とは親戚にあたるはずなのだ。

「だからテッドに会つた時に際立つて見えたのかもね、色んな考え方とか、センスとかそういうことがよ、そうしたらこれまで自分がどんな位置について、どんな考え方をしたのか見えてきたわ」

オスカーはどこかで同じ話を聞いた気がした。そう、あの時もク

ラーナと一緒に聞いたのだ。トンクス先生が言ったことはホグワーツの校長室でのフィニアスという校長が言っていたことと似ていた。スリザリンだからこそ、自分を第一に考えるような人間だからこそ、その人物が示す勇気は際立って見えるのだと言っていたのだ。オスカーにはそんなに似ているところがないはずなのに、あのフィニアスという校長と目の前のトンクス先生がどこか重なって見えた。

「最初にスリザリンの人は考え方が重いか言ってたわよね？ もちらんスリザリンは保守的だし、野心的でもあるわ、でもそれは自分のことや家族のこと、自分の未来のことを真剣に考えているつてことよ、これってすごく良いことよね？ もちろん行きすぎなければただね」

確かにそれはホグワーツでのスリザリンのイメージと合っているうだとオスカーはおもった。

「私はスリザリンであんな実家の生まれだからこそ、真剣に考えることができたし、すごく違う人と会ったおかげで自分のことが分かったと思うわ、そうしたら凄くテッドが魅力的に見えたのよ、どうかしら？ 答えになっっているかしら？」

オスカーもクラリーナもトンクス先生の話に何も返すことができなかった。オスカーはただその話を聞いて、早くダンブルドア校長に会いに行くべきだと考えた。自分はずっと大切なことを忘れたままになっっているような気がしたのだ。

「あれ？ ママと三人で何してるの？」

トンクスが部屋に入ってきたようだった。オスカーはさっきの話を聞いて、どうしてトンクスがあんな性格をしているのか分かった気がした。

「そう言えば、ニンファドローラは周りの話ばかりで自分の話はしてくれないわね」

「へ？ 何の話なのよ」

「トンクスは人のことばかりからかって、自分の話をしないつてことですよ」

トンクスは珍しく眉を下げたこれは面倒くさいという顔をした。

いつもはクラリーナがトunksに話しかけられてする顔だったので、オスカーは何かおかしかった。

「自分の話？ 私はクラリーナやオスカーみたいなのに、相手がむかついてるのに手を繋いで人と受け答えしたりしないわよ？」

「ニンフアドローラはオスカーにだけはニンフアドローラって呼ぶのを許してるんです」

「許してないわよ!!」

トunks先生とクラリーナがいるとトunksのヒエラルキーが下がるといふのはオスカーにとって新しい発見だった。

「オスカー君本当なの？ この娘はほんとにニンフアドローラって呼ばれるのを嫌がるのよ」

「賭けに勝ったら呼んでいいって言われて、賭けに勝ったのは本当です」

「もう!! オスカーお坊ちやまは黙ってなさいよ!!」

結局のところ、オスカーはなぜトunksがニンフアドローラと呼ばれるのが嫌なのか良く分からなかった。

「そもそもなんでニンフアドローラはニンフアドローラって呼ばれるのが嫌なんですか？」

「クラリーナだって、可愛い妖精のニンフアドローラなんて名前をつけられたら呼ばれるのは嫌になるわよ」

「私は可愛い名前だと思っただけどね……」

オスカーにはトunksの感覚も、その名前を付けたであろうトunks先生の考えも分からなかった。ただ少なくとも、トunks先生がちゃんとした考えや思いを持ってその名前を付けたであろうことは疑い様がないと考えていた。

さっきの話を出来るような人が簡単な理由で名前を付けるとは思えなかったからだ。

「なんかさっきの話みたいだな」

「なんですかオスカー、さっきの話みたいって」

「だってトunksは凄くニンフアドローラって言われるのが嫌なんだから」

？ だから逆にニンフアドーラって呼ばれるのが際立って、なんて言うかエストみたいに言うのと、特別に聞こえるんだろうなって思っただけだ」

「は？ はあ!? オスカーあんた一体何を言い出ししてるのよ!!」
「ニンフアドーラポイントをスリザリンに百五十点追加ですね」

トンクス先生の前だと言うのにトンクスの髪の手つぽがちよつと赤くなっていた。それを見て、トンクス先生がオスカーやクラリーナが見たこともないくらいに笑った。

「それは傑作ね、確かに際立って特別な名前になるし、それを呼ぶことが許されている人も特別ってことになるわね」

「確かに特別ですね、自分の寝室に連れ込むくらいですから」

トンクスがふくろうもかくやという勢いでオスカーの方を向いたが、オスカーは首を振った。少なくとも前学期ではハッフルパフの寮に入ったとしか言っていなかったはずだった。

「その反応を見るとやっぱり特別なんじゃないですか？」

オスカーはトンクスこそ閉心術を覚えた方が良いと何回目か分からない思いを抱いた。恐らくクラリーナはトンクスを引つ掛けたのだった。

「何が特別なのよ!! オスカー、もうちよつと手をつないでいて貰えますか…… とか言ってたくせに!!」

「はああああ？ なんですかそれ、全然関係ないでしょう!! ニンフアドーラって名前が特別って話をしてたんでしよう!!」

「うるさいわよ!! 大体、オスカーはあれから一度もニンフアドーラなんて呼んでないじゃないの!! 何度もしつこいのよ!!」

これは何時もの二人に戻ったとオスカーは思った。トンクス先生がいる前でもやっぱり大して変わらない様だった。

「いいわね、言葉とか名前とかかって、人が関わる度にどんどん色んな意味とか思いとかが加わって、だんだん違うものになってくるのよね」

オスカーはトンクス先生がそうつぶやくのを聞いて、やっぱり名前は重要だと思った。そしてそれ以上に名前に関わる色んなもの、記憶だとか自分のその時思ったことだとかが重要なのだと思った。

むしろ、それがなければなんの意味もないのだ。いろんな言葉もそれだけでは意味がないのだ。誰かの思いが乗っていないとその意味はないとオスカーは思った。

漏れ鍋

みんながドロホフ邸に来てから数日後、ホグワーツからふくろうがやって来て、新学期に必要な教科書や物品が明らかになった。

これまではウィーズリーおばさんがダイアゴン横丁へ行く音頭を取っていたが、今年はこれまで以上に大人数だった。

結局みんなで暖炉飛行をしてダイアゴン横丁に行くことになった。オスカーは先にグリーンゴッツ銀行からお金を引き出す一団に加わることになった。

ウィーズリーおばさん、ビル、クラーナ、レアとオスカーがほとんど経験したことのないメンバーだった。

「ビルはグリーンゴッツを受けるんですか？ グリフィンドールでは去年女子たちがその話題を結構してましたけど」

「ああ、ママには内緒だけどね、内勤じゃなくて呪い破り志望だし、ママはちよつと危険な仕事よりも僕に魔法省を受けて欲しいだろうからね」

真っ白い建物に続く真っ白い階段を上りながら、ビルがオスカー達の方を向いてシーっと言うように唇に手をあてた。ハンサムなビルがやるとなんでも絵になるのだとオスカーは思った。

「みんな、早くあがってらっしゃい。私たちがお金を引き出さないと買い物ができないでしょう？」

すでに階段を登りきっていたウィーズリーおばさんがオスカー達を呼んでいた。四人は慌てて階段を登り始めた。

磨き上げられた観音開きのブロンズの扉の奥には何人もの小人たちが歩いているのが見えた。

扉の奥にはさらにもう一つ扉があつて、奥の扉も開いてはいたが、そこには泥棒への警告として宝の他に潜むモノがあると書かれていた。

「この宝の他に潜むモノってなんなんでしょうか？」

レアが疑問を口に出すとビルが楽し気に答えた。

「今日はそれが何か分かると思うよ、久しぶりにエストの金庫からお

金を引き出すみたいだからね、チャーリーの奴は悔しがらるだろうなあ」

何百人もの小鬼たちが秤で宝石の重さを計ったり、魔法使いに対応したりしている中をオスカー達は進んでいった。

「六つ分の家からお金を引き出したいのだけど」

手の空いている小鬼にウィーズリーおばさんが話かけた。六つの家と聞いて、小鬼は少し訝しい顔をした。もちろんオスカーは余り小鬼の表情が分かるわけではなかったのでそれが正しいのかは分からなかったが。

「鍵はお持ちですか？」

「ええ、ウィーズリー、プルウエット、トンクス…… みんな鍵を出してくれる？」

オスカー、クラリーナ、レアの三人はそれぞれ鍵を小鬼の前に出した。小鬼は六つの鍵を時間をかけて丹念に調べている様だった。オスカーはウィーズリーおばさんがプルウエットの鍵と呼んだ鍵だけさらに入念に小鬼が調べている気がした。

「ではグリップフックとボグロッドに案内させましょう」

オスカー達の対応をしていた小鬼の机の後ろからまた小鬼が現れた。五人はグリップフックに従って、金庫への道へと案内された。

石造りの急傾斜のある小さな道を進むとトロツコの線路が現れた。グリップフックが口笛を吹くと四面編成のトロツコがやってきた。

最初にグリップフックが、二両目にウィーズリー家の二人、三両目に後の三人が乗り込み、一番最後の車両にボグロッドが乗り込んだ。オスカーは隣のクラリーナの顔が何故か青くなっている気がして少し嫌な予感がした。

トロツコが洞窟の冷たい空気を切り裂いて、グリップフックが運転している様子も無いのに何度もレールを切り替えながら、右に左にどんどん進んでいった。最初にトンクス家の金庫についた様だった。ウィーズリーおばさんが金貨をトンクス先生に渡された巾着に詰めていたがオスカーはちよつとそれどころではなかった。

「クラリーナ、なんでトロツコがあるのが分かったのにこつちのグ

ループに来たんだ？」

まだ五家分の金庫に行かないといけないのにクラーナの顔は真っ青だった。オスカーはどうして漏れ鍋で時間を潰しているグループの方に行かなかったのかが不思議だった。エストの様にパーシーに捕まっていたり、トンクスの様に両親と一緒にロンドンのマグルの街へ出かけているなんて理由は無かったはずだったからだ。

「大丈夫です…… 多分……」

クラーナは青い顔で器用に眼だけをオスカーの方へ動かしてそう言ったが全く大丈夫そうに思えなかった。

「全然大丈夫そうじゃないと思います……」

全くもってレアの言う通りだとオスカーは思った。正直、オスカーはいつぞやのホッグズ・ヘッドでの一件があったのでクラーナの青い顔というのは少しトラウマだった。

トロツコはさらに深くへ進んだ。地下湖の傍のあたりまで潜って、鍾乳石や石筍だらけになったあたりでやっと、ウィーズリー、ドロホフ、マツキノン、ムーデイの金庫があった。クラーナの顔は次の金庫へ進むたびに青くなっていった。ウィーズリー家の金庫は相変わらずほとんどすっからかんだったが、オスカーはそんな事を気にしている余裕が無かった。

ただ杖が使えない状況ではオスカーは何もすることは出来なかった。

「ここから一気にスピードが上がると思うよ」

ビルがそう言うのを聞いて、クラーナの顔はさらに青くなり、オスカーの顔まで青くなった。

一行をのせたトロツコはますます深く、スピードを上げて、地下深くへと潜っていった。幾度も幾度も地下溪谷を通り過ぎて、大きな滝の傍を通ってついにスピードが落ちた。

オスカーは隣のクラーナが何とか耐えきったのを確認してからトロツコから降りた、その瞬間、地面と空気の振動から何か巨大なモノが動いている気配を感じ取った。

「ほら、入り口に書いてあった潜むモノのお出ましってわけだよ」

オスカー達が洞窟の角を曲がると、巨大なドラゴンが鎮座していた。オスカーはドラゴンをこれまでに見たことは無かったが、随分と不健康そうなドラゴンに見えた。

地面に巨大な杭で繋がれていて、ここから動くことができないのかうろこははがれかけており、目は白がかったピンク色だった。ドラゴンはオスカー達の方を恨みがましい眼で睨みつけていた。

ドラゴンが吠えると同時に火が一行に向かって飛んできたが、距離がありすぎるのか届くことはなかった。

「クラーナ、気分は大丈夫なのか？」

「なんか、ドラゴンのおかげか引つ込みました」

「ここから出たことがないんでしょうか…… このドラゴン……」

クラーナの顔色が元の肌色に戻っていた。オスカーはそれを見てクラーナを元に戻す時は決闘であるとかそういう緊張感があればいいのではないかと考えた。

ボグロツドが金属製の道具のようなものを振ると、金属にハンマーを叩きつけた様な音が鳴り響いた。

「キシヤアアアアアアアアアアアアアアアア!!!!」

ドラゴンが咆哮を上げながら後ずさりした。ドラゴンがあとずさりしたことで後ろにいくつかの金庫があるのが見えた。四つか五つほど同じ木の扉があるのが見える。ボグロツドが鳴らす道具の音とドラゴンの咆哮が洞窟の壁に反響しながら、オスカーの体や鼓膜を揺らしていた。

ドラゴンが奥へと追いやられ、金庫への道ができた。オスカーはチャーリーは来なくて正解だったのではないかと思つた。チャーリーの性格を考えると、こういう状態のドラゴンを放っておけるとは思えなかったからだ。

グリツプフックが木できた金庫の扉に指を押し付けると扉が開いた。

「流石にプルウェット家の金庫ですね」

「凄い……」

確かに金庫の威容は凄まじかった。そもそもこれまでの金庫より

も大きかったし、ガリオン金貨で金庫の奥が全く見えない状態だった。それに甲冑や何の動物かも分からない巨大な生物の骨や、これまた巨大な宝石類、なかには人の骨まで入っている様だった。

しかし、一番目立っているのは中央に置いてある箱とその上に置いてあるティアラだった。オスカーはそのティアラを去年見たことがあった。ティアラの下の箱にはオスカーが見たことのある紋章が書いてある様に見えたが、かすれて良く見えなかった。

ウィーズリーおばさんは慣れた様子で金貨をまた巾着に入れていた。またドラゴンを追いやりながらオスカー達はトロツコへと歩いた。

「あのいくつかあった金庫の中なら伝説のお宝があってもおかしくなさそうですね」

「確かに…… 何かを隠すならこの金庫が一番かもしれない……」

「このことホグワーツくらいだろうな、何か大事なモノを置くのなら」
今度のトロツコは登りだったが、やっぱり真っ青になったクラリーナの顔を見てオスカーは戦々恐々だった。

なんとかスコージファイやオブリビエイトの必要も無く、元の小鬼たちが沢山いる広間に戻ってこれ、オスカーはホッと一息ついた。

相変わらず広間は小鬼と魔法使いでごった返していたが、その中でもやたらと目立つ人物が歩いていった。風を切るように歩くその魔女は、長い緑のドレスに狐の毛皮の襟巻をつけ、さらにもう一押しとばかりに本物のハゲタカのはく製がついた帽子を被っていた。

「ネビルとミセス・ロングボトムじゃないですか、久しぶりですね」

クラリーナが恐らくその魔女に声をかけた。良く見るとその魔女はロンと同じくらい少年を連れていた。オスカーはロングボトムという名前を憶えていた。クラリーナの事が新聞に載った時に同じ様にその名前が載っていたからだ。

「おう、おう、久しぶりですね、クラリーナ。ほらネビル挨拶しなさい」
「こんにちは……」

丸顔の少年はおどおどしながらオスカー達に挨拶した。ウィーズリーおばさんとビルはまだ小鬼と何かの手続きをしているようだった

ので、ここにいるのは三人だった。

「あなた方も存じあげてますよ、去年は日刊預言者新聞や週間魔女に何度もでてましたからね」

ミセス・ロングボトムがそう言うのを聞いて、さつきまで青かったクラリーナの顔が赤くなった。

「ミセス・ロングボトム、あの記事は大体嘘ですから……」

「レア・マツキノンにオスカー・ドロホフでしょう？ ミネルバからも貴方達の事は聞いていますよ、それにクラリーナ、注目を集めると言うことはそれだけ貴方達に能力があるということでしょう。恥に思うことはありません」

オスカー達三人の方を見てから、ミセス・ロングボトムはネビルの方を見てため息をついた。

「貴方は貴方のお姉さまと同じ様に才能を示しているというのに、ネビルときたら…… この子はいいい子ですが、まだ魔法の才能を示さないのです。このままでは Hogwartz に入学できるかも怪しいでしょう」

ネビルと言われた少年はますます縮こまって、泣きそうな顔になった。

「そんなことは無いと思いますけど…… フランクさんとアリスさんの息子なんですから、ねえネビル？」

「でも…… 僕一度もみんなみたいに不思議なことを起こせたことは無いし……」

ネビルはクラリーナにしどろもどろに答えた。オスカーも見えていちよつと可哀想だった。するとレアがネビルの傍まで行って、同じ視線になるように膝をかがめた。

「ねえ、ボクはレアって言うんだけど、ネビルは魔法を使う自信がないんじゃないかな」

「自信……？」

オスカーは意外だった。レアはアバーフォースや目の前のミセス・ロングボトムの様にちよつときつそうなる年上の人は苦手だと思っていたからだ。クラリーナもそう思ったのか、オスカーと視線が合った。

「そう、多分魔法の力が無いと思ってるから出てこないんじゃないかな？ もつと楽しくて、頼もしいモノだと思っただ方が上手くいくかもしれないよ」

「頼もしい……？」

レアはネビルにウインクして、オスカー達の方に戻ってきた。ネビルはちよつと間の抜けた不思議そうな顔をして、レアを目線で追っていた。

「さて、私たちはこれから金庫へ行くので失礼しましょう。皆さんにお会い出来て良かった。ネビル、ほらちゃんと挨拶をするんです」

「うん。バイバイ」

「またね、ネビル」

ネビルは手を振りながら、ミセス・ロングボトムに連れられてオスカー達がさつきでできたトロツコの方へと消えていった。

ちよつとするとウィーズリーおばさんとビルが戻ってきたので、オスカー達はグリーンゴツツから漏れ鍋に戻ることにした。

グリーンゴツツの階段を下りる最中、オスカーはやつぱりさつきのやり取りが意外だったので、レアに聞いてみることにした。

「レア、さつきなんでネビルに話しかけたんだ？」

オスカーが尋ねると、レアは意外そうな顔をオスカーに向けた。どうしてそんな事を言うのかとまるで顔が言っている様にオスカーには見えた。

「えつと…… 前にオスカー先輩に浮遊呪文と一緒にやつてもらった時がありましたよね、あの髪飾りの一件の朝ですけど……」

確かにオスカーは髪飾りの一件があった朝、みんなより早く起きて練習するレアを見つけて一緒に浮遊呪文を使ったことがあった。

「なんかネビルがあの時とか…… 一年生の頃のボクと被って見えたから……」

レアは魔力を上手く使えず苦勞していたが、それが未だに魔力の兆候が見えないネビルと被って見えたのだろうか？ 近い状況を経験したので、それをレアはネビルに伝えたかったのか？ オスカーは最近似たような話を聞いた気がした。

「だからボクはネビルに話しかけたんだと思います。言ったことはほとんどあの時のオスカー先輩と同じことだったと思うんですけど…… 違いましたか？」

オスカーはレアがさっきの顔をしていた理由が分かった。オスカーもレアにそのことを話していた時、自分が似たような経験をしたからそれを話したはずだったのだ。誰かが誰かを見て、思いだしたり気付いたりしたことが繋がっているのだろうか？ オスカーはちよつと不思議な気分だった。

「いや…… 同じだと思う……」

「なんだあの時、浮遊呪文を教えただけって聞いてましたけど、やっぱりそういうことを言ってたんですね」

なぜかクラリーナがオスカーの方をまたかという様な目で見ていた。オスカーは一体クラリーナが何を指してそう言っているのかさっぱり分からなかった。

三人は喋っている間に前のウィーズリー家の二人に置いていかれていたので、慌てて二人を追いかけた。

グリーンゴッツから帰ってきた後、オスカー達はいくつかのグループに分かれてダイアゴン横丁に買い物に行き、レアとオスカー、ウィーズリーお婆さん、ロンのグループは先に買い物が終わらせて漏れ鍋に戻っていた。しかしウィーズリーお婆さんはロンのベストを買い忘れたと言つて、またロンを連れてダイアゴン横丁に戻ってしまったので、オスカーはレアと一緒にバーテンのトムが出してくれるかぼちやジュースを飲みながら他のみんなを待っていた。

すると、突然ジニーがオスカーの目の前に現れて質問した。

「ねえ、オスカーはエストの事好きなの？」

「え？ 好き？ まあ好きか嫌いかって言われれば好きだろうけど」

「じゃあクラリーナの事は？」

「好きなんじゃないか？」

「ジニーの事は好き？」

「ああ」

「やった!!」

ジニーはそう言うとおスカルの膝の上に乗っかってきた。その様子を見て、目の前で目を丸くしていたレアが笑った。

「ボク、ちよつと今のはびっくりしました。ジニー、なんでそんな事聞いたの？」

「フレッド・ジョージとトンクスがおスカルに聞いたら、一シツクルくれるって言ってたから」

オスカルの予想通りだった。実際にオスカルが後ろを振り向くと、件の三人がこつちを見てぶつぶつ言っている様だった。

「ジョージ、見たか？ やっぱり小細工は通用しないんだ」

「ああ、フレッド、我らが妹まで毒牙にかかってしまったようだ」

「あいつほんとに恥ずかし気もなく言うわね、面白くないわ」

トンクスが面白くないのは大体オスカルにとって良いことだった。

ジニーが三人を見てからオスカルに言った。

「トンクスの事は好き？」

「うーん……」

オスカルはここは保留しておくのが正解だと考えた。

「まあ純血キラーだし」

「まあ気を取り直して、ビルの監督生バッチを磨いてるパースをからかいに行こうぜ!!!」

フレッド・ジョージがトンクスの肩を叩いて励ます様な振りをした。

「あんまりレアのポイントも稼ぎすぎない方がいいわよ、私はどうなっても責任取らないからね」

トンクスはそれを全く意に介さず、オスカルとレアにそう告げて出て行った。双子は慌ててそれについていった。

「ポイントって何ですか？」

「ああなんかその人に良いことをすると寮対抗でポイントがたまるといい、ちなみに今、俺のポイントはハツフルパフが断然の最下位だ」

レアもオスカーも笑い、それにつられて多分分かっていないジニーも笑った。

「ねえ、オスカーとレアはハリー・ポッターのこと知ってるの？」

「ハリー・ポッター？ ジニーはなんでハリーの事を知りたいんだ？」

「だって、ハリーは凄い人なんでしょ？ 例のあの人を倒した人だし、カッコイイわ」

ジニーはキラキラした目でオスカーとレアの顔を見た。どうもジニーの中ではハリー・ポッターはスーパースターになっているようだった。

ただこれにはオスカーは困った。ハリーのことをオスカーは大して知らなかったし、そもそも去年のエストが言っていたことを考えると、ハリーとジニーは一歳しか変わらないはずだった。つまり、まだハリーは小さい子供のはずなのだ。そんな子供の事をオスカーが喋れるはずもなかった。

「赤ちゃんのハリーにはボク会ったことあるよ」

「ホント!？」

意外な所から助け船が出たとオスカーは思った。エストの話だと、レアやエストの家族はポッター夫妻と同じ組織に入っていたはずなので、順当な話だとオスカーは思い直した。

「有名な傷跡ができる前だけど、リリーさんと一緒に緑色の眼だったと思う。あれから会ってないから今はどんな姿なのか分からないけどね」

レアが喋る内容を相変わらずジニーは目を輝かせて聞いていた。

「レアはハリーの家族と知り合いなのか？」

「そうです。ママはリリーさんと仲が良かったんです。まだジニーくらの年の頃にリリーさんとジエームズさんの結婚式に出たこともあります」

オスカーは意外なところで有名人と繋がっていると考えた。そしてその後、レアが喋る人物がハリーを除いて全てもうこの世にはいないことに気付いた。

「どんな人？ ハリーのお母さんとお父さんって？」

ジニーの質問は止まらない様だった。オスカーはレアの方を見たが、レアは余り悲しそうな雰囲気ではなく、何か懐かしむような顔だった。

「二人共、ホグワーツではグリフィンドールで揃って主席だったらしいから、凄く優秀な人だったみたいだよ。リリーさんはマグル生まれなのに凄まってママが良く言ってたの覚えてるよ」

オスカーはレアの言った、グリフィンドール、主席、マグル生まれと言うのを聞いて、頭に別々の三人の顔が浮かんだ。そのせいかあまりリリーという人物の性格を想像することができなかった。

「ジェームズさんは確かクイディッチでチェイサーをやっていて、リリーさんは魔法薬学が凄く得意なんだって聞いたかな」

「やつぱり、ハリー・ポッターは家族も凄いんだ」

ジニーの反応が良いせいかわレアも気持ちよく話せている様だった。

「あとジェームズさんとリリーさんには凄く仲がいい人たちがいて……ボクも時々遊んで貰ったことがあるんだけど、シリウ……」

レアは途中まで言いかけて言うのを止めた様だった。レアの顔がそれまでの懐かしむ顔ではなく、何かを耐えている顔になっていた。オスカーの膝に座っているジニーがそれを見て体をむずむずと動かした。

「リーマスさんとピーターさんって言う人だったんだけど、優しくて面白い人たちだったよ、今はもうリーマスさんしかいないはずだけど何やってるのかな……多分、今いる人たちの中で二人を一番知ってるのはリーマスさんじゃないかなあ……」

レアはまた元の顔に戻って、何かを思い出している様だった。オスカーは誰かの家族や周りの人たちの話をするといつも、この世にいないかどこかに閉じ込められて出てこれない場所にいるかだと思った。

「ハリー・ポッターと仲良くなれるかな？ ロンは同じ年だけどジニーは一つ下だから……」

そう言うジニーはさっきまでと違い、ちよつとだけ不安そうだった。

「大丈夫だよ、ボクも先輩達よりいっこ下だしね、それにジニーは可愛

いからきつとハリーの方から話しかけてくるよ」

「ホント……?」

「ホントだよ、それにボクは先輩達と違って一年だけハリーやロンとホグワーツで一緒になるからね、ジニーのことよろしくって言っとくよ」

オスカーは去年バタービールの瓶を持って大暴れしていたレアと同じ人物とは思えないほどレアが優し気に見えた。ただ何故かジニーは少し渋い顔だった。

「それはダメかも」

「ええっ? どうして?」

「ハリーがレアに取られたら嫌だもん」

レアはちよつと苦笑いしながらオスカーの方を見た。オスカーはハリーがガールフレンドに困ることはなさそうだと思った。

「別にボクはハリーをジニーから取ったりしないよ」

「ホントに? でもトンクスがオスカーをめぐってホグワーツではちでちをあらう? 戦いがあるって言ってたよ? レアもそうじゃないの?」

今度はオスカーも苦笑いになった。オスカーの中でハツフルパフのポイントを示す宝石が全て流れ出たのが分かった。

「トンクスはあほだから本気にしちやダメだ」

「そうなの? じゃあオスカーはどんな女の子だったら一緒にいたいなの? オスカーをおとせる? なら誰でもおとせる? ようになるってこれもトンクスが言ってたよ」

オスカーはだんだん頭が痛くなってきた。オスカーと一緒にいた女の子とハリーと一緒にいたい女の子が一緒だとはとても思えなかった。

そもそもオスカーは一緒にいたいと思う女の子と言われても、エストとはいっても一緒にいるし、クラーナやトンクスを含めても誰と一緒にいたいかわれられても答えられそうに無かった。

オスカーはちよつと考えを変えた。ジニーの問いは誰と一緒にいたいではなく、どんな女の子ということだったからだ。

「ちよつと前、トunks先生から聞いた自分と違う人かな」

オスカーは昨日聞いたトunks先生の話を思い返していた。自分と違う人だから自分が見えるという話だった。オスカーには自分にはそれが必要に思えた。

「じゃあトunksじゃないの?」

「トunks?」

「トunks先輩ですか?」

笑いながら言ったジニーに二人が尋ねた。

「だって、トunksはみんなの中で一人だけじゅんけつじゃないって言うってたよ、だから一番違うんじゃないの?」

確かにジニーの言う通りかもしれない。トunksが時々、オスカー自身や他のみんなとは違う視点からモノを言うのは幾度もあった様に思えたからだ。それが父親がマグル出身だと言うところから来ているのもおかしくはない気がした。

「違うって言うっても色々あるからな、男と女とかスリザリンとグリフィンドールとか」

「じゃあエストはオスカーとすごく一緒だよな?」

「確かにエスト先輩とオスカー先輩はいつも一緒ですね」

二人の言う一緒にそれぞれ別の意味にオスカーには聞こえた。その人の要素が一緒なのか、それとも距離的に一緒なのかだ。オスカーはエストとの距離は近くても、色んな要素がエストとは他の人よりも離れている気がした。

それに二人共スリザリンに組み分けされたが、一体どの部分が二人をスリザリンに組み分けした理由なのかオスカーには分からなかった。

「会ったことは無いけど俺とハリーは多分全然違うだろうから、俺の事を聞いても仕方ないし、やっぱりジニーがハリーに会ってから色々考えればいいと思うけどな」

「ハリーに会ってから?」

「ボクもそう思うよ、だって会わないとハリーがどんな人か分からないからね」

会って、話して、一緒にいて自分と色々比べないとその人の事は分からないのだ。むしろ一緒にいても全然分からないのだ。オスカーはその事を良く知っていた。

「じゃあロンに頑張ってもらうね、ロンがハリーと友達になったらジニーの家とかオスカーのお家にくるかもしれないでしょ？ そうしたらジニーがホグワーツに入る前に会える!!!!」

「ロンは責任重大だね」
「頑張ってもらおう」

オスカーはかのハリー・ポッターがドロホフ邸に来るのが想像できなかったが、それはそれで面白そうだと思った。

四つの寮

ドロホフ邸では連日ホグワーツの一年生用の教科書を持って、ビルやエストを追い回すパーシーと言うのが風物詩になっていた。

「パース、多分そんなに予習しなくても大丈夫なの」

「でもエストは入学前に呪文学の呪文を全部マスターしたんでしょ？」

「そうだけど、他のみんなはそんな事無かったし、別にホグワーツに入ってからでも十分勉強には追いつけるはずだよ？」

オスカーとチャーリーがちょうど二人が話してる場所に着いた時も、いつもの様に二人が練習している所の様だった。教科書や羽ペン、羊皮紙が散らかっている机の横でかごに入れられた、スキヤバズという指の一本欠けたネズミがチーズをかじっていた。

「ねえ？ オスカーもチャーリーも夏休みにこんな教科書を開いたりしてなかったよね？」

「まあパースはちよつとやりすぎだよね、この調子だと一年生の授業でやる事が無くなっちゃうんじゃないかな」

「俺は誰もいなくて暇だったから割と呪文は練習してたかな、そんなにはやって無かったけど」

ホグワーツに入る前のオスカーは家にキングズリーが来るとき以外はペンスしか喋り相手がいなかったため、ホグワーツの教科書や家にあつた本を使って呪文を勉強していたのは確かだった。

と言つても、パーシーの様に呪文どころか全部の授業を聞いて羊皮紙に書き留めたりはしていなかった。それに練習していたオスカーよりも、エストやクラナの方がよほど呪文を知っていたと一年生の頃を思いだした。

「ほらパース、教科書をしまつて遊んだ方がいいの、このままだとホグワーツに入つても教科書と羽ペンしか友達がいなくなっちゃうの」

「じゃあ、寮はどうやって決めるの？ パパもママも誰も教えてくれないんだ。テッドさんやアンドロメダさんもはぐらかすし……」

ルは湖の巨大イカが決めるとか言ってたし……」

ホグワーツの組み分けを一年生に言わないのはホグワーツでのちよっとした冗談だった。オスカーも伝統に則って少しパーシーをからかいたくなった。

「ホグワーツには地下に迷路があつてね、そこに一人一人順番に森番のハグリッドの案内で入るの」

エストが神妙な顔で喋り始めた。オスカーもそれに続いた。

「中には色んな魔法生物とか、蛇、獅子、鷲、穴熊とか野心、勇気、英知、誠実みたいな各寮の要素に関する謎解きがあるんだ」

最後にチャーリーがしごく真面目な声で締めた。

「みんな死んじやったりはしないから心配しなくても大丈夫だよ、出口には各寮の寮監と寮生が待つてて、新入生を歓迎するからね」

オスカーはアドリブで三人が繋げたにしにしては随分と真実味がありそうだと思った。パーシーは三人の話を聞いてつばをごくつと飲み込んだ様だった。

「出れなかつたらどうなるの?」

「さあ? 出れなかつた人にエスト達はあつたことが無いから分からないの」

すげなく言うエストを見てパーシーはさらに顔をこわばらせた。オスカーも段々面白くなってきたので続けた。

「確かに出てこれなかつた人にホグワーツではあつたことはないな」

「僕もないなあ、どうなるんだろうね? 組み分けで死んだ人はいないってハグリッドは言つてたから、死んじやうわけじゃないと思うけどね」

パーシーが基本呪文集を食い込むくらいの強さで握りしめていた。オスカーはちよつとやりすぎたかと思ひ始めた。

「みんな何をやってるのかな? ちよつとこつちに混ぜてくれないか? あつちは女性陣が強すぎて居づらいんだ」

後ろからウィーズリーおじさんが話しかけてきた。オスカーとチャーリーは目配せした。多分、ウィーズリーおじさんも向こうの部屋のウィーズリーおばさん、トンクス先生が率いる女性陣に絡まれる

のが嫌で来たに違いなかったからだ。オスカーとチャーリーもそれが理由でこっちの部屋に逃げてきたのだった。

「パパ、パースに組み分けを説明してたんだ」

「パースは組み分けが心配みたいなの、アーサー叔父さん」

チャーリーとエストがそう言うのと、パーシーは耳が少し赤くなった。組み分けにビビっていると自分の父親に思われたくない様だった。

「心配ってわけじゃないよ……」

「パース、パパはどの寮に入っても大丈夫だと言ってるだろう？ エストやオスカー君はスリザリンだけど、チャーリーとも仲良くやってみるじゃないか？ とにかくホグワーツに行くのを楽しみにした方が良い」

ウィーズリーおじさんがそう言うのを聞いてもパーシーは浮かない顔だった。オスカーは自分は組み分けの事は大して考えていなかったと思い返していた。どうせスリザリンなんだろうと思っていたし、ホグワーツ特急に乗ってからは考える余裕もなかったからだ。「それにホグワーツの各寮にはどれも素晴らしい特徴があるんだ、ほら先輩のみんなに聞いてみたらどうだ？」

ウィーズリーおじさんの言葉を聞いて、パーシーがオスカー達三人の方を向いた。

「グリフィンドールにどんな人が選ばれるかはパースは知ってるだろう？」

パーシーはチャーリーの方を向いて答えた。

「勇敢で決断力がある人が選ばれるんでしょ？」

「そうなの、でも自分勝手で人の話を聞かないってことでもあるの」

長所と短所は表裏一体ということなのだろうか？ オスカーはグリフィンドールの人物を何人か思い浮かべた、ウィーズリー家のみんな、クラーナ、マクゴナガル先生、ダンブルドア先生……パーシーの言葉に当てはまりそうな人間は何人もいた。ただ、エストの言葉に一番思い当たりそうなのは占い学の塔にいるカドガン卿だった。

「でもグリフィンドールは闇の魔法使いが少ないし……」

「実は一番闇の魔法使いが少ないのはハツフルパフなの、グリフィンドールじゃないんだよ？ ニックと太った修道士が言ってたから多分ほんとなの」

パーシーは結構シヨックだった様だった。確かにオスカーもグリフィンドールは闇の魔法使いとは一番縁が遠そうなのがしていたので意外だった。グリフィンドールから闇の魔法使いが出たことがあるのだろうか？ すぐに頭にはそんな魔法使いは出てこなかった。

「トunksを考えれば確かに一番闇の魔術と縁が遠そうだな」

「ハツフルパフの特徴も分かるよね？ パース？」

「誠実で勤勉……」

考え込む顔をパーシーはしていた。オスカーも結構この話は考えさせられると思っていた。寮ごとの特性の話をするのはトunks先生の話を含めて夏休みで二回目だったし、結構思い当たることがあると思っただけだった。

「まあトunksは少なくとも成績はいいし、本当にたちの悪いことはしないよね」

「トunksも調子に乗らなければいい人なの、スプラウト先生も優しくていい人だし」

「逆言えば外れたことはできないってことでもあるな、あと競争とかそういうのは興味があんまり無いみたいだ」

つまりいざと言う時に行動できなかったり、大事な時に自分を優先できないと言う事でもあるのだろうとオスカーは思った。

今度は扉からレアが部屋に入ってきた。レアの顔はどこか疲れて見えた。

「ちようどいいことにレアが来たの」

「え？ 何ですか？ ボクはちよつとあっちの部屋の空気についていけなくて……」

レアも向こうの部屋のテンションについていけない様だった。今や何故か隣の部屋からはセレスティナ・ワーベックの大鍋は灼熱の恋に溢れが聞こえていた。オスカーには全く隣の部屋の様子が想像できなかつた。

「レイブンクローの特徴は知恵と創造性？」

「レア、どうなんだ？」

「レイブンクローの特徴ですか？　そうですね、それで大体あつてると思います。ただそれは頭でつかちで変わり者つて言うことでもあつて監督生が言つてました」

知恵に貪欲で、創造的、変わり者？　つまり個性的……　オスカーはグリフィンドールと同じ様にレイブンクローの人間に当てはまりそうな人を考えてみた。レア、フリットウィック先生、古い学のトレローニー先生、マグル学のクイレル先生……　しかしいくら考えても一番該当しそうなのは目の前のエストだった。

「最後はスリザリンだけど、目の前に二人いるし分かり易いんじゃないかな」

チャーリーの言葉を聞いてパーシーはオスカーとエストの方を見たがますます分からなくなった様だった。ウィーズリーおじさんはオスカー達の話を優しい顔で見ている。

「スリザリン……　野心的で狡猾？」

困った顔で二人の方をパーシーは見た。その横ではレアがスキヤバーズの檻をカタカタ揺らしていた。スキヤバーズがレアの方を見て、全く動かないので心配している様だった。

「確かにオスカーは狡猾かもね、結構色んな校則を破つてると思うのに一度も捕まつてないからね」

「ほとんど冤罪ばかりだと思ふけどな、フィルチは全部俺がやったと思つてるみたいだけど」

ダンブルドア先生に言われたことを今度はオスカーは思いだしていた。確かスリザリンが誇りだと思ふ素質について言つていたはずだった。

「ダンブルドア先生はスリザリンが生徒に欲しいと思つた要素は……　機智に富む才智とえーと、断固たる決意、ちよつと規則を無視する事……　最後は周りを守る心つて言つてたと思ふ」

「つまり、臨機応変に対応できること、自分で決めたことは絶対やること、ルールをちよつと守らないこと、周りの人を大切にすること

なの?」

「確かに誰かさんと誰かさんには合ってるかもね」

「ボクもダンブルドア先生が言ってたのは凄く合ってるなって思いました」

チャーリーとレアがオスカーとエストの方を見て笑った。

「でも、それは他の寮と同じ様に弱点になっちゃうの、グリフィンドールと同じ様に人の話を聞かなかつたり、周りの人が大事過ぎて他の人が嫌いになっちゃったりするの」

そう、エストやトンクス先生が言った様にやっぱいい点は弱点にもなってしまうのだった。いい点が大きければ大きいほど弱点も大きくなってしまおうとオスカーは思った。

「でも…… 僕にはどれも無いかもしれない、勇気とか知恵とか……」
パーシーはオスカー達の話を聞いて、ちよつと自信を無くしている様だった。しかしオスカーはそんなに心配することなのかと考えた。オスカーもそのどれかがあると組み分けの時に思っていなかったからだ。

「私は組み分けはその時に勇気や知恵があるから選ばれるのではない
と思ってるよ」

ウィーズリーおじさんがみんなを見回しながら言った。

「勇気がないから勇気が欲しいんじゃないかな? 知恵や誠実さが欲しいから賢くなろうと、誠実であろうとするんじゃないかな? 欲しいと思っただけ努力すればいつか手に入るだろう? 勇敢であろうと勇敢なことをすれば勇敢に見えるし、実際に勇敢だ」

オスカーにはウィーズリーおじさんが言っていることが非常に重要な事に思えた。初めから身についているのではなくて、そうあるとうとするからそうなるのだとウィーズリーおじさんは言っているのだった。

「だから私はパースやフレッド・ジョージ、ロンやジニーがどの寮に入っても気にはしない。自分に一番合った寮で、一番必要なモノが手に入るだろうからね、ホグワーツはそういう場所だ」

では自分には何が無く、何が欲しくて、スリザリンに入ったのだ

ろう？ オスカーは考えてみた。あの時組み分け帽子に何を言ったのか、記憶をたどって見ると、勇気と守るべきモノと言っていたはずだった。

「だから、今はホグワーツに行けるのを楽しみにしておけばいい。私もホグワーツの七年間は最高だったし、モリーに会ったのもホグワーツなんだからね」

勇気？ 守るべきモノ？ どれも無いとオスカーは思った。そもそもどうして自分はその二つが欲しかったのか、スリザリンの特性の通りに自分の周りのモノを守りたかったのだろうか？ ウィーズリーおじさんから重要な事を聞いたはずなのに、オスカーの頭の中はずっと堂々巡りの考えが廻っていた。

結局、全員が夏休みの終わりまでドロホフ邸にすることを決めた後、珍しい人物がやってきた。その人物はみんなの身内の中でも、ミュリエルおばさんの次くらいにオスカーが苦手な人物だった。

「お前たちが喜びそうなモノがあるぞ」

その人物は片方の青い目をグルグル回しながら、そこにいたオスカー、エスト、クラーナ、レアを呼びつけた。エストがオスカーを無理やり引つ張って連れて行った。

オスカーはその青い目がじっと自分を見ている気がしていた。

「ほれ、お前たちの家族が大体写つとるだろう」

アラスター・ムーディがポケットから取り出したのは写真だった。それも古いボロボロの写真だった。

写真を見ただけで、身近な人や、身近な人の面影のある人物がいることが分かった。

「ダンブルドアとアバーフォース、アバーフォースの方は一度しか会ったことが無かったな、わしもいる」

こうやって二人並んでいるとよく似ていることが分かり、ますますオスカーは初めて会った時にアバーフォースがダンブルドア先生の弟だと分からなかったのが不思議だった。それにムーディはまだ鼻

があつて、クラリーナと同じダークグレーの髪が白髪になっていなかった。

「こっちはポッターの二人と仲のいい三人だな」

ムーディが指し示したのは眼鏡をかけたクシャクシャの髪の毛の男の人、緑の眼をした魔女だった。その二人の横には誰かの面影を感じるハンサムな男の人、しよぼくれた眼をした小男、ボロボロの服を着た優しそうな男がいた。

「スタージス・ポドモア、エルファイアス・ドージ、こいつらはお前たちを教えていたから知っているだろう？」

オスカーが知っているよりも若い二人の先生が写真の中で笑っていた。もつともドージ先生の方はこの時でも随分な年齢だったが。

「フランクとアリス・ロングボトム、それにイライザだな」

丸い人懐っこい顔の魔女の横にクラリーナによく似た魔女がいて、こちらに笑いかけていた。驚くほどクラリーナにそっくりだった。日刊預言者新聞の記事が真実ならばこの後、彼らには悲惨な運命が待ち受けているはずだった。

「マーリン・マッキノン、ドーカス・メドウズ……」

レアにそっくりな魔女がやはりこちらに笑いかけている……オスカーはやはりこの写真を自分が見るのはいけない気がした。自分にはこの人たちに見られる価値が無い気がしたからだ。

「キャラドック・ディアボーン、それにフェービアンとギデオンの兄弟だな」

最後の二人を見て、オスカーは心臓がひっくり返った気がした。エストとモリーおばさんの面影のある二人の人物がこちらに笑いかけていた。ホグワーツに入る前や、魔法省で何度も写真を見たはずなのに動悸が止まらなかった。よく考えればオスカーはエストのいる横で二人の写真を見たことは無かったからだだった。

「アラスター、そこでみんなに何を見せているんです？」

後ろから聞くだけで分かる声が響いた。振り返るといつの間にかキングズリーがオスカー達の後ろにいたのだった。

「シヤックルボルトか。局の調整は終わったのか？」

「ええ、ガヴェインと私が彼の穴を埋めます」

「ふん、体のいい避難と言うわけだ」

「吸魂鬼の件がファッジ以前の執行部締めあげに使われていますから……」

二人は何やら魔法省内部の話をし始めている様だった。クラーナはそれに耳を立てている様だったが、オスカーには話の半分も分からなかった。

「ファッジが何をやろうと執行部はボーンズ、局はスクリームジョールで決まりだろう。もともと惨事部出身のファッジが口を出せる話では無い」

「しかし、戦闘状態に無い今、人員が多すぎると言うのは事実ですから……」

オスカーもボーンズとスクリームジョールと言う名前には憶えがあった。確か二人共魔法省に連れて行かれた時に喋ったことがあったはずだったからだ。単眼鏡の魔女とライオンの様な魔法使いという覚えではあるが思いだすことができた。

「ちよつと、闇祓いが揃ってるじゃないの」

「トunks、お菓子を食べながら話すのはやめた方が良いと思うよ」

トunksとチャリーが手にやたらお菓子を持って、部屋に入ってきた。相変わらず二人は暇があればペンスからお菓子を貰っているらしかった。

「ねえ？ 闇祓いにはどうやったならなれるの？」

「トunksが闇祓いですか？ 足を引っ掛けて死喰い人にばれるのが関の山だと思いますけど……」

「でも、トunksは七変化だし結構向いてそうかもしれないの」

みんなの視点が闇祓いの二人に集まった。この二人がみんなの注目になることは結構珍しいことであるはずだった。

「シヤックルボルト、説明しろ」

ムーデイがキングズリーを顎でしゃくった。どうもムーデイの方もトunksの扱いが苦様な様だった。オスカーは最初の頃のクラーナを見ているようで少し可笑しかった。

「もしかしたら知っている人もいるかもしれないが、闇祓いの試験を受けるにはかなりの成績が求められる」

オスカーはキングズリーと結構な付き合いになっていたが、闇祓いの話を聞くのは初めてだった。自分には最も縁遠い職業だと思っていたからだった。

「どの教科の成績が必要か知っているかな？ ああもしすでに知っている人がいたら少し遠慮して置いて欲しい」

すでに口を開きかけていたクラリーナにキングズリーがウィンクした。

「うーんと、闇の魔術に対する防衛術よね、やっぱり」

「それに変身術と呪文学かな、呪文を使えないと戦えなさそうだしね」

トunksとチャーリーが言った三つの科目は最もだとオスカーも思った。闇祓いと聞いて真っ先に思い浮かべるのが闇の魔法使いとの戦いだからだ。

「あとは魔法薬学…… ですか？」

「そうなの、変身したり何かを聞き出すには魔法薬なの、それに魔法薬を作ったり、解毒を考えるなら薬草学もいると思うの」

「じゃあ、闇の魔術に対する防衛術、変身術、呪文学、魔法薬学、薬草学で五つなのか？ どれも一年生からある科目ばかりだな……」

どれも一年生の頃からずっとある科目ばかりであるとオスカーは考えていた。つまりこれらの科目は基本であって、非常に重要な科目であるとオスカー達自身も考えていると言う事だった。

「完璧だ。闇祓いの試験を受ける為にはそれら五つの科目において、NEWT試験、七年生でやる試験だが、ここでE、期待以上の成績を取る必要がある」

偶然ではあったがオスカーは今でた五つの科目において、エストに次ぐ成績を持っていたので受けるだけなら可能ではないかと思った。「それに、性格的な試験、戦闘時に感じるプレッシャーに対する耐性の試験や、変身・隠遁・追跡なんて試験、その場の対応力を試す試験なんかもある。もちろん戦闘の試験もだ」

クラリーナは真剣にキングズリーの話の聞いている様だったし、トン

クスも興味がありそうだった。逆にチャーリーとエスト、レアの方は二人よりも興味が無さそうに見えた。

「それに試験に合格してもそれから三年間は研修、どちらかと言うと修行みたいな期間をこなさないと一人前の闇祓いとしては認められない」

修行？ 七年間のホグワーツの課程が終わってもまだ学ぶことが沢山あるのだろうか？ それほどの修練を積んだ魔法使いが集まっても、ヴォルデモートとの戦争においては常に劣勢であったというのは恐るべきことだった。

「ホグワーツで他にやらないといけないことってあるの？ 成績を上げる以外で」

相変わらずトンクスは物怖じせず質問をしていた。こういう話ではうるさくなるとオスカーが思っていたクラーナの方は最初にキングズリーが出鼻をくじいたせいか少し静かだった。

「戦闘技能を上げるだけなら決闘クラブにでも出ればいいだろう」

これまで静かだったムーデイがこちらを見て言った。

「アラスターおじさん、決闘クラブはトンクス先生が辞めてからは再開されていません」

「それなら心配は無い、今年の教師は確実に再開させるだろうからな」
どういう意味だろうか？ すでにムーデイはホグワーツにおける闇の魔術に対する防衛術の先生を知っているのだろうか？ オスカーはキングズリーの方を見たが、こっちに首を振るだけだった。
「どういうことよ、今年の先生は確実に再開させるって」

「お前たちには戦う為の技能が足りていないと言う事だ。個人で戦う経験も複数人で戦う経験も含めてだ」

実践的な戦闘を教える先生がくるということなのだろうか？ オスカーは余りパツとイメージがわかなかつたが、確かにホグワーツではそういった授業がほとんど無いのは確かだった。

「でも……今は戦争中じゃないですよね？ そんなに戦う為の技術が必要なんでしょうか……」

「マツキノン、むしろ今だから必要なのだ。戦争中ならばみな必死に

戦う術を学ぶだろう。だがそれ以外の時はどうだ？ 闇の魔法使いはその牙を闇の中で研いでいるというのに、ホグワーツでぬくぬくとお勉強か？」

ムーデイがそう言うのと有無を言わさぬ迫力があるとオスカーは思った。

「わしに言わせれば平和な時代こそ、大きな戦争の合間の時間に過ぎない。大陸での二度の戦争や前の戦争の合間に過ぎないということだ」

このオスカーの眼の前の人物は幾度も魔法界における戦争を乗り越えて、闇の魔法使いと戦い続け、アズカバンの独房の半分を埋めたと言われる人物だった。

「グリーンデルバルドや闇の帝王がお前たちより修練を積んで無かったと思うのか？ ダンブルドアやテセウスと言った闇の魔法使いに立ち向かった魔法使いたちが日頃から修練を積んでいなかったと思うのか？ 油断大敵!!! 闇の帝王かどうかは分からんが、奴らはいっかは帰ってくる」

オスカーはやっとクラナの口癖の正体が分かった。本物の方がやっぱり迫力があつた。

「まあそんなに心配することは無い。そうならない為に私たち闇祓いがあるのだから、君たちはホグワーツでいつも通り勉強すればいいんだ。それにホグワーツにはダンブルドアがいる。へたをしなくても魔法省よりも安全な場所だ」

ムーデイの雰囲気を押されていたオスカー達はキングズリーの深い声で少しだけ緊張が解けた様だった。

「じゃあ取りあえず今まで通りやれば良いってことね」

「トunksはまずドジを直すところから始めた方がいいと思いますけどね」

「多分それは杖なしで守護霊の呪文を使うくらい難しいの」

「確かにね、アクロマンチュラにお手をさせるくらい難しいよね、そんな事が出来たら論文が書けちゃうよ」

「ちよつといくら何でも言いすぎじゃないの」

皆が口々に色々なことを言い始めて、ムーデイがつくつたちよつと重苦しい雰囲気や、あの写真のことはどこかに行ってしまった様だった。

それから、ムーデイとキングズリーは何かを話込み始めて、レアやトックス、チャーリーはまたペンスからお菓子を貰ってくると言って厨房の方へ言ってしまった。

「でも、誰か戦闘を教えることができる先生が来るんだね、多分闇の魔術に対する防衛術だと思うけど」

「まあ大体想像はできますけど、誰が来るのかですね、私はてつきりあの二人のどつちかが来るんだと思ってました」

クラリーナはそう言って、話込むムーデイとキングズリーの方を見た。

「マッドアイとキングズリーのどつちかってことなのか？」

「ええ、何かアラスターおじさんは忙しそうにしてみましたし、ダンブルドア先生が闇祓い局と話してるって話も聞きました。アラスターおじさんならダンブルドア先生とも旧知の中ですし、キングズリーはオスカーの事でダンブルドア先生と繋がりがあるんでしょう？」

確かにキングズリーとダンブルドア先生がオスカーが入学する時に魔法省にかけ合ってくれたのは確かだった。そう言えば尋問の時に加えて、あの時もさつきでたボーンズという魔女とスクリームジョールと言う魔法使いに会ったのだった。

「まあそうだな」

「確かにキングズリーとクラリーナのおじさんならいくらでも決闘や戦闘の事を教えてくれそうなの」

「でもあの言い方だとどうも違うみたいですね、ただあんまり現役バリバリの闇祓いが出てくるとは考え難いんですけど……」

いつもの業務を放り出して闇祓いが先生になりにくるとはオスカーも考え辛かった。

「闇祓いになるとホグワーツの先生になりやすくなるのかな？」

「むしろ魔法大臣じゃないですか？ まあ魔法法執行部そのものに入った方が魔法大臣にはなりやすいかもしれないですけど」

オスカーには闇祓いも魔法法執行部も良くわからなかったが、どっちにしろ入るのは非常に難しそうだった。

「それにトunksが闇祓いのこと聞いたのは意外だったの」

「それは俺も思ったな、クラーナがあんまり闇祓い、闇祓いって言うてたから頭の中に刻まれたのかもな」

「なんですかそれは、私も意外でしたけどね」

ハツフルパフの話をした時と同じ様に、トunksが一番戦いとかそういうことに縁が遠そうだとオスカーは思っていたのだ。トunksの生まれや育ちがみんなの中ではチャーリーと同じくらい平和なのも関係しているかもしれなかった。

「けどなんか試験だけならこのままいけば俺でも受けれそうな感じだったな」

「オスカーは闇祓いになりたいの？」

エストが意外そうにオスカーの方を向いた。オスカーはそんなに自分がなりたいたいものについて考えたことは無かった。だから闇祓いの事もそこまで考えて言ったわけではなかった。クラーナの方はエストと違って、どこか……期待している眼のような気がオスカーはした。

「まだ良く分からないな、ただある意味じゃ一番近い職業でもあるし、成績の事を考えたらなんか当てはまってると思っただ」

「オスカーは闇の魔術に対する防衛術では一番の成績ですし、向いてるかもしれないね」

「ふーん……」

クラーナはまだこの話題をしたい様にオスカーには見えたが、エストの方はオスカーの話聞いて何か考えている様だった。

「クラーナは普通に闇祓いを目指すんだろ？」

「ええ、ふくろう試験では少なくともあの五科目ではO優をとりたいたいと思ってます。魔法薬学以外はEでもNEWTレベルに進めるらしいですけど、スネイプとか言うシャンプーできない先生はO優じゃないと進ませてくれないらしいですから」

やっぱりこの話題だとクラーナが饒舌に喋っているとオスカーは

感じた。

「エストは何かあるのか？」

「うーん…… じゃあオスカーは分かる？ エストがなりたくないもの」

エストは悩んだ顔をしながらオスカーに問いかけた。エストのなりたいもの…… またダンブルドア先生やヴォルデモートが連想された。オスカーは毎回エストの事やエストの将来の事を考える度にその二人が出てくるのが嫌だったが、今回はこれがヒントになる気がしていた。

「ホグワーツの先生か？ 何年の時だったか覚えてないけど、ホグワーツ行きの馬車で言ってただろ？ 確かあの時もクラリーナがスネイプ先生のことボロクソに言ってた気が……」

「オスカー覚えてたの？ 正解なの」

「なんだかんだオスカーは人の言ったこと良く覚えてますね……」

「どうやら正解だったらしくオスカーはちよつと心の中で一息ついた。

「まあ四年生が終わったら、進路についての相談があるらしいですからそこで話せばいいんじゃないですかね」

「相談って誰にするんだ？」

「寮監ですよ、私だったらマクゴナガル先生、二人だったらスネイプ先生ですね」

スネイプ先生に進路の相談？ オスカーは余り想像できなかった。スネイプ先生は確かに寮監だったが、オスカーはそれほどスネイプ先生の人となりを知っているわけでは無かったし、向こうもそう思っていると考えたからだ。

「じゃあその時間けばいいかな…… スネイプ先生は先生の中だと若い方だし、どうやってなったのか聞いてみよう……」

エストがそうつぶやいてるのを聞きながら、オスカーはまた思いを巡らせていた。何になりたいのか？ オスカーは自分のなりたいたいのすら、自分の事すら分からないとそう思った。

死の秘宝

夏休みはいつもあつという間に過ぎるとオスカーは思っていた。毎年一緒に過ごす人の数が増えていて、その数が増えるほど時間も早く過ぎる気がしたのだ。

しかし、多くなればなるほどキングズ・クロス駅への交通手段が問題だった。オスカーへの監視はもう無いも同然だったので魔法省から車を借りることも出来なかつたし、闇祓い局の車も最近コストカットだとかで余り数が無いようだった。

そのためにアーサーとテッドの発案でマグルのレンタカーを借りに行くということになった。アーサー、テッド、キングズリー、オスカー、チャーリーと何故か全員男で借りに行くことになっていた。

「キングズリーはなんでマグルの格好がそんなに上手いんだ？」

オスカーがキングズリーの服装を見てそう言った。街を歩くマグルやテッドと変わらない格好にオスカーには見えた。この五人の中だとアーサー、チャーリー、オスカーの格好がマグルからは少し浮いて見える気がした。

「私は仕事で時々マグルの重鎮を護衛しないとイケない。その為に違和感の無い服装も大事なのだ」

「なるほど…… 僕はマグル出身だからマグル学は取らなかつたけど、そういう意味ではマグル学も大事なのかもしれないな」

オスカーは闇祓いの仕事と言えば魔法界の中枢に位置する仕事だと思っていたので、マグル学が重要かもしれないというのは意外だった。マグル学を設けているダンブルドア先生や教えているクイレル先生はそういうことを意識して教えているのだろうか？

「おおあれが、れんたカーなるものを貸してくれる場所なのかな？」

アーサーはオスカー達より一足先にレンタカーの貸し出し店まで行っている様だった。

「パパのマグル好きはどうにもならないよね」

オスカーは無理やり話題に魔法生物を入れてきたり、魔法生物やクイディッチの話になると饒舌になるチャーリーが言えることでは

ないと考えていたが、ここはノーコメントにすることにした。

全員が店に入ると店員に大人たち三人が何やらカードの様なモノを出している様だった。オスカーはちよつとそれが気になったので先に帰ってきたテッドに聞いてみた。

「テッドさん、あれは何を出したんですか？」

「ん？ ああ…… あれは免許証ってやつだよ、車の運転って魔法使いの姿現しや姿くらましと同じで、結構危ないんだ。それで許可を得た人はその証拠にあのカードを持つてるのさ。魔法使いなら許可されてない魔法使いが使える分かるけど、マグルだとそうはいかないだろう？」

「そういう意味があつたんですね」

オスカーからすると全く新しい概念だった。箒にもし免許証なるものがあれば自分は発行されないだろうとオスカーが考えていると、何故かテッドがオスカーの肩に腕を回して耳元で話かける。チャーリーはやたら時間のかかっているレジの二人の所に向かって行ってしまうた。

「ところでオスカー君、結局クラリーナちゃんに決めたのかい？」

「クラリーナ？ 何の話ですか？」

「週間魔女を僕も読んだよ、やるときはやるじゃないかオスカー君」

またオスカーは頭が痛くなってきた。そもそもドロホフ邸に帰った時も何故かペンスが宝物の様に週間魔女のオスカーが載っているページを飾っていたり、フレッド・ジョージが着いた瞬間にそのページを拡大コピーしたものを広間に張り付けたりしていたからだ。この話題をされるのは夏休みで四回目だった。

「あれは俺ではなくてトンクスなんです」

「トンクス？ ドーラのことかい？」

「そうです、諸事情で俺が出れなくて代役をして貰ったら、トンクスが最後にあんなこととして大騒ぎになりました」

テッドはそれを聞いて少し考える顔になった。

「じゃあオスカー君はまだフリーってわけかい？」

「フリー……？ そうだと思えます？」

オスカーにはテッドが何が言いたいのかわからなかった。そもそもオスカーは余り年上の男の人と仲良く喋ったことは無かったし、キングズリーとテッドは随分とタイプが違う様に見えた。

「ならなおさら色々考えないとな…… そうだ、マダム・パディフィツトのお店にはオスカー君は行ったことはあるのかな？ あの店は僕たちの頃からずっとデートスポットなんだ」

「あのやたらピンクで埋め尽くされていて、でっかい女の人が店主のお店ですよ？ それなら行ったことがあります」

トンクスに連れられて入った店をオスカーは覚えていた。オスカーとトンクス以外の客は全員いちやついていたのだ。あの光景は割とオスカーからするとショッキングだった。

「へえやつぱりやるじゃないか、あそこに男一人でいけるとは思えないし君の周りの誰かと一緒だったんじゃないのかい？ エストちゃんかクラリーナちゃんかな？」

「トンクス…… 娘さん…… ニンファドーラに連れられて入りました」

オスカーは一瞬時間が止まった気がした。オスカーの首に回されていた腕がズルつと落ちてテッドの顔が固まり、しばらくテッドが喋らなかつたからだ。

「あの…… テッドさん？」

「よし、みんな待ってるだろうからちょっと帰るのを急ごうか……」

再度オスカーの肩に手を回したテッドに連れられて、オスカーはアーサーが借りたやたらと大きい車に乗って帰ることになった。

家に戻るとすでにみんな荷造りの準備が終わっている様だった。オスカーは車から降りた瞬間、またテッドに連れられてトンクスの所へ連れて行かされた。

「ドーラ、オスカー君と一緒にマダム・パディフィツトのお店に行つたっていうのはほんとなのか？」

テッドがそう言った瞬間にトンクスの首がオスカーの方を向いた。オスカーは最近トンクスの首が回るスピードが速くなっていて、もし

アニメーガスになったらふくろうに変身するのではないかと思いつめていた。

「オスカーあんたね、大事なこととかは絶対喋らないくせになんでそんな余計なことは喋るのよ」

「じゃあ行ったっていうのはほんとなのか…… オスカー君はちよつと競争率高すぎると思うけどなあ……」

「パパがうるさいからあっち行きましょう」

今度はトunksが服を引っ張って隣の部屋にオスカーは連れられた。この家の人間は勝手に人をどこかに連れて行く癖でもあるのかとオスカーは疑い始めていた。

「オスカーって入れ替わった時とかは誰にも何も喋らなかつたくせに、最近余計なことは喋りすぎじゃないかしら？」

「あの時は誰にも喋らなかつたわけじゃなくて…… ペンスと男しや……」

「オスカーお坊ちやま、お呼びでしようか？」

オスカーがペンスと言う言葉を放った瞬間にバチツと音がしてペンスが現れた。

「いや、ペンス、特に呼んだわけじゃ……」

「ペンス、オスカーって昔からこんな感じなの？　なんて言うか、会ったところは全然喋らなかつたくせに、最近見境なく余計なことを言うてる気がするわ」

ペンスはトunksの発言を聞いて、ただでさえ大きな目をさらに見開いた様だった。

「僭越ながらペンスめがトunks様に申し上げますと、オスカーお坊ちやまは最近昔の様に良くおしゃべりされる様になりました」

「何よそれ、オスカーが静かだったのはここ最近ってことなの？」

ペンスはオスカーの方をちらりを向いた。オスカーはペンスがトunksに知られて困ることを言うと思えなかつたので頷いておいた。

「ペンスめはオスカーお坊ちやまがトunks様方と以前のお坊ちやまの様にお喋りになられているのを見て、感激の極みであります」

ペンスの言葉を聞き、トunksは片眉だけを上げて首を捻った。オ

スカーが聞いてもペンスの言う事はさつき言ったことを繰り返しているだけに聞こえた。

「まあとにかくオスカーお坊ちやまは大事なことは言うべき時に言うようにしろってことよ、あと余計なことは口をチャックしてなさいよ」

「最近してると思うんだけどな、トンクスはいつもそんな事を言うてくるだろ?」

オスカーはトンクスの言っていることがちゃんと理解出来ていなかった。マダム・パディフィットの店でも、ハツフルパフの寮でもトンクスは誰かに伝えてみると言ってくれている気がしていたのだ。それなのに最近、トンクスはオスカーの口をチャックしろと会うたびに言っている気がしたのだ。

「全然できてないわよ、いつできてたのか言ってみなさいよ」

「うーんと…… トンクスとハツフルパフ寮でニンフアドーラ云々の賭けをした時とか?」

「あんたいい加減にしなさいよ、あれのどこが大事なことだったのよ」
「嬉しかったとかそう言うことを言うのが大事なんじゃないのか?」

そう言っているオスカーの方をこれはダメだとばかりに、片手で髪をかき乱しながらトンクスが呆れた眼を見た。

「ペンス、オスカーって昔からこんなことばかり言ってるの?」

「オスカーお坊ちやまは昔から変わらずお優しいお方です」

「昔からこれって…… 最近静かだからどうにかなってたってことね…… ほんとにいつかとんでもないことになるわよ……」

最近トンクスが言うようになったとんでもないことと言うのが果たして何を指しているのかオスカーはやっぱり良くわからなかった。

トンクスとのお喋りが終わって、その後のキングズ・クロス駅までの道中、テッドがオスカーに絡んできたがオスカーには参考にならない話ばかりだった。

だいたいテッドの学生時代の知り合いのハツフルパフの男子学生がスリザリンの女子学生にひどい目に遭わされるという内容で、要約すると誰か付き合う人は一人に決めないとひどい目に遭うというこ

とらしかった。

オスカーはテッドの話よりもトンクス先生のテッドを見る目線の方が段々怖くなっているのが気になっていた。

「いいかい、オスカー君、心配ないと思うけど、ここぞって時に心の内を見せると効果があるんだ。そうすれば凄い武器になるんだ」

「はあ…… わ、分かりました」

オスカーはテッドが物凄く良いことを言っている気がしていたが、どんどん強くなるトンクス先生の視線が怖かったので、早くテッドとの会話を切り上げたかった。

テッドがトンクス先生に回収されると入れ替わりでキングズリーがやってきた。

「オスカー、ダンブルドア先生と闇の魔術に対する防衛術の先生によるしく言っておいてくれるかな?」

「ダンブルドア先生と闇の魔術に対する防衛術の先生ですか? わかりました」

「ああ、じゃあホグワーツで頑張ってくれ」

オスカーはその後、ウィーズリーおばさんからお手製のサンドイッチを貰って、ホグワーツ特急へと乗り込んだ。オスカーが乗り込んだ瞬間、ホグワーツ特急は汽笛を上げて出発した。コンパートメントからエストが顔を出して手招きしていたので、なんとか満杯のホグワーツ特急で座ることができた。

コンパートメントにいたのはいつもの四人でレアやパーシーはいなかった。ビルは監督生なので専用のコンパートメントのはずだったが、その二人がいらないとは少しオスカーからすると意外だった。

「レアとかパーシーはいないんだな」

「レアはレイブンクロウの連中の方へ行くって言っていましたね」

「パーシーは一年生の女の子の所に放り込んできたの」

悪戯っぽく笑うエストを見ながらオスカーはちよつとだけパーシーの幸福を祈った。

「オスカーはテッドさんにやたら捕まっていたよね」

「なんでだろうな、同じ男ならチャーリーでもいいのに」

「パパもオスカーもすぐ変なこと言うから気が合ってたんでしょ」

オスカーはトunksに変なことを言うとは言われたくなかった。

「でもトunksのお母さんは美人ですし、トunksのお父さんはよく捕まえられましたよね、ハッフルパフのマグルの男とスリザリンのブラック家の女って凄いい組み合わせですよ」

「そうね、パパはロミオとジュリエットみたいとか、ママは豊かな幸運の泉みたいって言ってたわ」

「ロミオとジュリエットってなんなの？」

トunksの口調からすると劇か物語の様だったがオスカーも聞いたことが無かった。トunksはまたかという顔をして説明し始めた。

「お菓子といい結構通じないこと多いわね、ハッフルパフだと割と通じるんだけどね。ロミオとジュリエットって言う、なんか敵対する家の二人が恋愛する話がマグルの世界では有名なのよ」

「面白そうですね」

「面白そうなの」

「パパは好きそうだね、マグルの話ってだけで」

みんなは興味を示した様だったが、トunksはあんまり楽しそうな顔では無かった。

「でもあんまりいい終わり方の話じゃないわよ、最後は二人共死んじやって、それでやっと二つの家が仲直りするって話だもの」

「へえ、なんか家の設定だけは毛だらけ心臓の魔法戦士と逆な感じですね」

「死んじやってから気づいても意味ないの」

「マグルの話も結構悲劇とかがあるんだね、あっちの話の方が魔法のこと良くわかってないから魔法で全部解決しちゃうと思ってたんだけどなあ……」

この話もトunks先生が言っていた話と同じなのだろうか？ そのマグルの二人も違うから惹かれ合ったのか？ みんなが喋る中、オスカーは一人で考えを巡らせていた。

「車内販売ですよ、何かいかがですか？」

「じゃあこの辺とこの辺を適当に下さい」

最後に入ったオスカーが一番ドアから近かったので、車内販売のおばさんに注文した。良く見ずに注文したので、カエルチョコやヌルヌルガールと言った、あんまりいつもオスカー達が注文しないお菓子もあった。エストはさっそく百味ビーンズを一気に口に入れていて、なんとも言えない顔をしていた。

「あの車内販売のおばさんって、凄い昔から同じ人がやってるらしいですよ、アラスターおじさんがホグワーツに通ってた頃もいたらしいですから」

「それ、ミユリエルおばさんも言ってたの、あのおばさんは私が子供の頃からずつとおばさんだって」

「そうなのか？ 実は人間じゃなかったりするのかな？」

「あんな人間らしい魔法生物は聞いたこと無いけどね」

車内販売のおばさんが実は魔法生物で、ホグワーツ特急から逃げ出す人をぶちのめしたりするのだろうか？ オスカーはいくらなんでも想像しすぎだと考えた。

そもそもオスカーはホグワーツ特急から降りようとする理由が無いと考えていた。

ちよつとだけ曇り空の中を疾走するホグワーツ特急に揺られながらオスカー達はホグワーツへと向かっていった。今年は特にみんなでやることも無さそうだと考えながらオスカーは逃げようとするカエルチョコを食べていて、手持ち無沙汰だったので、カエルチョコについてきたカードを眺めていた。

「オスカー、何のカードだったんだ？ アグリッパだったら何かと交換して欲しいんだけど、夏休みにアグリッパだけロンがどこかにやっちゃったんだ」

「ダンブルドア先生だな、どこかに出かけてるみたいだけど」

カエルチョコレートのカードにはアルバス・ダンブルドアと書かれていて、写真が写る部分には誰もいなかった。

トンクスがオスカーの横からダンブルドア先生のカードをひったくった。

「男子はこのカード好きよね、パパも一杯集めてたわ、えーと？ アル

バス・ダンブルドアは凄く悪い魔法使い、グリンデルバルドをやつつけて、凄く錬金術師のフラメルと一緒に錬金術を研究しました。やつぱりダンブルドア先生って凄く人ね、生きてる人でカードに乗っちゃうんだから」

「グリンデルバルドは大陸では並ぶものがないくらいの闇の魔法使いですし、フラメルは賢者の石を造った人ですね、どっちも教科書の中の人物ですよ」

ゲラート・グリンデルバルド、確か魔法史ででてきた人物だとオスカーも知っていた。もう一人のフラメルはあまり覚えていなかったが、賢者の石はオスカーも聞いたことがあった。

「賢者の石ってえーと？ 死んだ人を生き返らせる石？ あれ？ ずっと生きられる石だっけ？」

「後ろの方なの、賢者の石は金属を金に変えて、寿命を延ばせる命の水を造ることができる石のこと」

「もう一つはあれだよな？ エストが好きな兄弟の話に出てくる石のことじゃないかな」

死んだ人を蘇らせる石、オスカーもその話は聞いたことがあった。魔法族の子供ならば誰でも知っている話ではないのかとオスカーは思った。

「三人兄弟の話をしてるんですか？ 杖と石とマントの話ですよね？」

「なんか死からは逃げられませんよバーカみたいな話ね」

確かに話の趣旨はあってそうなのだがいくらなんでもそれはないだろうとオスカーは思った。ただオスカーはあの話はあまり言いたいことが良くわからない話だと子供のころから感じていて、最後がみんなハッピーエンドで終わる豊かな幸運の泉の方がよっぽど好きだった。

「もう!! 確かに最後はそんな感じだけど、バーカなんて言う話じゃないの!!」

「昔々、曲がりくねった道を…… あれ？ 夕方？ 真夜中？ に三人の兄弟が歩いていましただっけ？」

エストがトunksの言いように怒っている横でチャーリーがなにやら三人兄弟の話を始めた様だった。

「多分夕方ですね、親とかは子供を怖がらせるために真夜中って言うんですよ、えっと、渡れない様な川があったので、三人は橋をかけて渡りました」

「この後おしやべりな『死』が話しかけてくるのよね、三人が死ぬと思ってたから怒ってて、それで三人になんかあげようって言うわ」

そう、この話では『死』が直接登場人物に話かけてくるのだ。オスカーはそのイメージができなかったのだ。読み聞かせられたころもそうだったが、今もオスカーはイメージできなかった。

「長男は決闘するのが好きだったから『死』が一番強い杖を下さいつて言ったの、『死』を克服した魔法使いにふさわしい杖をくださいって、そうしたら傍にあったニワトコの木から一本枝をとってきて長男に渡したの」

エストがオスカーの方を見て少し笑った。オスカーは頭の中でエストの言った『死』の克服とニワトコの杖がどこかで繋がっていたことがあった気がした。

「確か次男はもつと『死』を馬鹿にしようとして、死んだ人呼び戻す力を超越せつて言うんだよな、それで『死』がその辺にあった石を持ってきて、これ使えば呼び戻せるって言って渡したんだっただか」

死人を呼び戻す石、そんなものが本当にあるのだろうか？ 賢者の石があるのだからこの石があってもおかしくない気がオスカーはしたが、教科書に書かれたりしていないことを考えるとやっぱりないだろうと思ひ直した。

「三男がマントだよな？ 確か三男が一番賢くて、謙虚だったから『死』を信用してなかったんだ」

「そうですね、それで『死』に見つからずにここから進むものが欲しいって言って、渋ってる『死』から透明マントを奪い取るんですね」

この話は三男が一番賢いと何度も言及されるのだ。オスカーはどうして一番賢いのか聞いてみたことがあったのを覚えていたが、どうして彼が一番賢いのか納得できなかったことがない気がしていた。

「その後、長男はアホだったから、俺は無敵の杖を手に入れたって言うちやあって、寝てる間に殺されちゃうのね」

「それでまず一人を『死』が自分のモノにしちゃうの」

次にオスカーの分からなかったのがこれだった。どうせ人間はみんな死ぬはずなのだから、『死』が絶対に勝つのではないのかと言うことなのだった。絶対に勝てる『死』が怒るというのもそもそも良くわからなかった。

「次男は…… 昔、死んじやった結婚したい相手呼び戻すんだよな、でも本当に戻ってくるわけじゃなくて…… 結局一緒になりたくて自分も死ぬんだよな」

「これで二人目も『死』のモノになっちゃうの」

オスカーは自分が使ったらどうなるのか考えてみた…… 自分も死にたくなるのだろうか？ 自分は自分だけではないのに？ それに余りにも傲慢な様にも思えた。ただ、オスカーは目の前にそれがあつたら使わずにいられるかどうか、自信がなかった。

「でも三男は頭が良かったから、寿命で死ぬまで『死』に見つけられなかったんだよね、それで『死』と友達になって死にましたってお話だよな」

「そうなの、最後はお友達になって終わりなの」

『死』が友達になる？ これもオスカーには良くわからない表現だった。長い間、見つからなかったから友達になったのだろうか？

「やっぱり良くわからない話よね？ というかそもそも透明マントと比べて他の二つは強力過ぎないかしら？ どう考えても釣り合っていないわ」

「別に釣り合っている必要はないんですよ、あれは教訓の例として出てるアイテムなんですから、それに透明マントもこの話みたいは何十年も使えるマントなんてないですよ、アラスターおじさんのマントだって、何年かごとに買い替えないとダメだって言っていました」

確かに三つのアイテムは釣り合っていない気がするし、マント以外は余り実際にあるとは思えないアイテムだった。

「確かにどれも凄いアイテムだけどほんとに無いわけじゃないと思う

の、少なくとも杖はあったんだと思うの」

「ニワトコの杖がですか？　もしかして極悪人エグバートとか、悪人エメリックの話にでてくるアレのことですか？」

「そう、だってニワトコの杖は相手を倒したらその人のモノになるの、だから三人兄弟の話にでてくる杖かは分からないけど、少なくともそういう杖があったのは確かなの」

オスカーとクラーナは思わずエストが持っている杖に視線が行った。確かにエストが持っている節くれだった杖はニワトコの杖だったし、倒した人のモノになるという特性をオスカーは身を持って知っていた。それにオスカーはエストの杖が有名な杖を真似て造られた杖だと言っていたのを覚えていた。

「じゃあ杖はあったかもしれないってことだよな？　マントも似たようなのはあるし石もあるのかな？」

「良くわからないけどあるんじゃないの？　だって、こういう話って元ネタがあると思うのよ、一から話を造るのって凄く難しいもの」

トンクスがそう言ったのを聞いて、エストが待つてましたと言わんばかりの顔になった。

「そうなの、ほんととは『死』が三つのアイテムを造ったんじゃないって言われてるらしいの」

「そりゃ、『死』がほんとにいるんなら私たち魔法族だけならまだしも、その何倍もいるマグルに会いに行くので忙しくて、三つもアイテムを造ってる暇なんてないでしょう」

「もう!!　三人兄弟の話はおとぎ話なの、でも三人兄弟は多分実在の人物なの」

三人兄弟？　そう言えばオスカーはエストが三人兄弟の名前がどうのという話を一年生の頃にされたことがあったのを思いだした。

「ああ、ルーンスポールの頭につけてた名前の人か」

「そう!!　そうなの!!　長男はアンチオク、次男はカドマス、三男はイグノタス、それで苗字はペベレル、この兄弟が多分ほんとにアイテムを作った人だって言われてるらしいの」

実際にいた？　最強の杖や死者を蘇らせる石を造った人物が？

オスカーにはホグワーツの創始者やマーリンと同じくらい伝説的な人物の様に思えた。

それにエストは髪飾りの時と同じ様に魔法的なアイテムに興味があるようだった。むしろ興味をもった理由がこの話なのではないかとオスカーは考えた。

「それでこの三つのアイテム、死の秘宝って言われるらしいんだけど……」

エストはそう言いながら、羽ペンと羊皮紙をカバンから取り出した。

「死の秘宝ってなんか物騒な名前ね」

「それはそうなの、『死』が造って、死を克服するから死の秘宝なの」
みんなが見えるように机の真ん中に羊皮紙に置いて、エストは羽ペンを走らせた。

「ニワトコの杖」

エストは羊皮紙に一本の真つすぐな線を引いた。

「蘇りの石」

真つ直ぐな線の上に丸を描いた。

「透明マント」

二つの記号を囲むように三角形を書き足した。

オスカーはこんな記号には見覚えが無かったし、三人兄弟の話聞いた時もこの話や記号を見たことは無かった。

「これが死の秘宝の印らしいの、イグノタスの墓にはこのマークが書いてあるんだって」

「これが死の秘宝の印？ グリンデルバルドの印じゃないんですか？」

クラーナがそう言うと、エストはさらに顔がほころんだ様だった。「そうなの、ミュリエルおばさんも言っていたの、これはグリンデルバルドの印だって、でもね？ イグノタスのお墓はグリンデルバルドが生まれるより昔からあるんだよ？ つまり、グリンデルバルドは死の秘宝を知ってたはずなの、むしろ知ってこの印を使ったんだと思うの」

「どういうことだろうか？ ヴォルデモートの前は最も危険だと言われていた魔法使いがこの印を使っていた？ 以前の最も危険な魔法使い？ オスカーはその言葉をどこかで聞いたことがあったはずだった。」

「うーん？ 例のあの人と同じくらいヤバイ人なのよね？ そんな人なら最強の杖を欲しがってもおかしくないわね」

「でもそのカードに書いてあるみたいにダンプルドア先生がやっつけたんだろ？ 最強の杖を持ってたんなら負けないんじゃないのか？」

「ダンプルドア先生はニワトコの杖を持つてる人より強いのかもね」

オスカーはこの話があまりいい話ではない気がしていた。なぜかオスカーは直接的な繋がりが無いはずなのに、エストとダンプルドア先生、そしてヴォルデモートが頭の中で奇妙につながっていくような気がしたからだ。

「だからね、ほんとにあるのかもしれないって思ってるの、髪飾りもあつたでしょ？ 死の秘宝だつてあつてもおかしくないの」

「そんな伝説のアイテムばかり見つけてたら、グリーンゴッツの呪い破りや魔法史家が私たちに授業をして欲しいって、何百ガリオンも持ってやってくるでしょう」

オスカー自身もあまりそういうアイテムに関わりたくは無かった。由緒あるアイテムであればあるほど、そこに周りや自分の身が危なくなるような因縁がついて回りそうだったからだ。

「ふーん、じゃあほんとにあつたらどのアイテムが欲しいのよ、ちなみに私は優等生だから透明マントね」

「僕も透明マントでいいかな、あれがあれば禁じられた森にも入り放題だし」

トリンクスとチャーリーが残りの三人を見回した。

三人は同時に答えた。

「杖なの」

「石」

「透明マントじゃないですか？」

三人は答えを聞いてお互いの顔を意外そうに見交わした。

「この童話は、『死』に何をしても無駄って話でしょう？ 杖で力を持つても、石の魔法でなんとかしようとしてもどうにもならないから、受け入れろってことなんですよ、だからマントを選ぶのが正解なんじゃないですか？」

クラーナの言うように確かにそれは正解なのだろうとオスカーは思ったが、欲しいかどうかと言われればオスカーはやはり透明マントを選べるとは思えなかった。

「そうなのかな？ お話だと透明マントが正解だって、三男の人だけが賢くて愚かじゃないって書いてあるけど、ほんとにそうなのかな？」

「どういうことですか？ そりゃあ、本当に三人の兄弟が死の秘宝？ を造ったんなら魔法使いとしては賢いでしょうけど……」

実際に三人兄弟が死の秘宝を造ったのなら、それは驚くべき技量であり、ホグワーツを造った四人にだって匹敵するだろうし、とても賢くないとはオスカーは言えないと思った。

「うーんとね、エスト、ペベルルの名前を家にあつた『生粋の貴族―魔法界家系図』って本で調べただけで、石を造ったカドマスさんには子供がいるの」

「あれ？ その人って結婚したい人と一緒になりたくて死んじゃった人だよな？」

「そうなの、なんかおかしいよね」

童話はあくまで童話ということなのだろうか？ オスカーはまだエストの言いたいことが分からなかった。

「別に史実と伝説が違うなんてよくあることでしょう？」

「それはそうなの、でもね？ カドマスさんはどんな気持ちで石を造ったのかな？ 死者を呼び戻す石なんて並大抵な努力と才能じゃ造れないの、ダンブルドア先生だって多分造れないの」

つまり、三人兄弟の話にあるような死を貶める様な動機ではとても造れるようなモノではないとエストは言っているのだった。

「だから、きつとあつたんじゃないのかな、造らないといけなかった理

由が。多分、『死』を馬鹿にするんじゃないやなくて、もつと違う理由があったんじゃないかと思うの、ほんとに石があるか分からないし、造った理由ももうわからないと思うけどね」

もしそんな理由があったのなら果たして次男、カドマスは愚かで賢くなかったのだろうか？ とでもオスカーはそう言い切れる自身が無かった。

「まあほんとにそんな理由あるんならそうかもね、じゃあ杖はどうなの？ 杖にもそんな理由があるのかしら？」

トックスの言葉を聞いてエストは一瞬だけ、自分の杖に目をやった。

「道具や力は悪くないの、大切なのはなんでそういうものが欲しいのかだと思ふの」

去年のリータが嵌められた羊皮紙の話をおスカーは思いだした。どう思っているのかが重要だとエストは言っていたのだった。

「力が欲しい理由なんていくらでもあると思うの、自分が認められたいとか、誰かを守りたいとかそういう理由でもいいし、誰かに勝ちたいとか、凄い魔法を使いたいとかでもいいと思うの」

「それがダメなんじゃないかってこの童話は言ってるんじゃないですか？ 過ぎた力が災い呼び寄せるって感じでしょう？ 死の杖なんて呼ばれてますけど、どっちかと言うと持つてる方が殺されてますからね」

確かに力が欲しい理由など色々あって、否定できないような崇高な理由だってあるだろう。オスカーはそう思ったが、クラーナの言っていることも正論だった。エストやクラーナの言う通りなら、歴史はその人物の力が目立った結果、その人の死を招いたことを示しているのだった。

「でもそういう杖なら逆に思い知ることができるんじゃないのかな？」

特別な杖だからその人も特別になるんでしょ？ 特別な杖だから自分の力とか自分の事を見るようになるんじゃないのかな？ そうしたら、自分に相応しい力になるんじゃないのかな？」

特別だから特別になる。オスカーは何度も何度もその特別という

言葉を聞いている気がした。

「地位とかと一緒に求められているから、その水準まで能力を上げる様に努力したり、意識できるって言いたいんですか？」

「そう、それなの、先生って言われてたら先生みたいな行動をするでしょ？ みんなに期待されたらそれをやらないといけないって思うでしょ？ 杖もそれと一緒になんじゃないのかな？ それに杖で強くなりたいたい、特別になりたいって認めることができたら、間違うことなんてないと思うの」

求められることで自分がどの場所にいるのか理解できるといふことなのだろうか？ 力を求める自分自身の理由が分かっていたら、間違わないですむということなのだろうか？ オスカーはエストの言っていることが正しく理解できてる自信が無かった。

「じゃあエストはその為に杖が欲しいのか？」

「うーんそうかも、他にも理由はあるけどね」

また一瞬自分の杖を見たエストをオスカーはじっと眺めていた。オスカーはいつもこういう話の時にエストが何を考えているのかわからないのだった。

「じゃあ、オスカーはなんで石が欲しいのよ」

「そう言えばそうだったね、エストの話があんまり長いから忘れてたよ」

どうして石が欲しいのだろう？ オスカーは返答することが出来なかった。彼女にあつて自分は何をしたいのだろうか？ オスカーにはそれが想像出来なかった。ただあるのは会えるのなら会わないといけないという気持ちだけだったからだ。

「死んだ人に会えるんなら会わないといけない気がするからか？」

「なんで疑問形なのよ」

トングスに聞かれても返すことがやはりオスカーには出来なかった。

「どうして会いた……」

「まあいいじゃないですか？ いい加減重い話ばかりでうんざりですよ、ニンフアドーラ、なんか面白い話をして下さい」

「はあ？ 私に喧嘩を売る要素が今あったの？ そんなにオスカーと他の女の子が喋るのが嫌なの？」

「ニンファアドーラを面白い姿に変えて、面白い話と言うことにしましょう」

エストが何かを聞こうとしていたところをクラリーナが無理やり遮り、トンクスとドタバタを始めてしまった。実際の所、話が中断されたことにオスカーは安心していった。本当に石があったらどうしたらいいのか、どうして石が三つの中で一番良いと思うのか分からなかったからだ。

騒がしいコンパートメントの扉を誰かが叩いたのがドアから近いオスカーには分かった。ドアの窓を見ると、ちよつと不安そうなパーシーが多分一年生だと思われる女の子と男の子を連れて、コンパートメントの中を見ていた。

組み分け帽子

新入生らしい二人を連れ、パーシーを見て、オスカーはコンパートメントのドアを開けた。パーシーは不安そうな、女の子は疑問を持っているような顔をしていて、もう一人の男の子は腕を組んでこつちを見ていた。

「どうしたんだパーシー？」

「みんながホグワーツで色んな寮の人が仲良くしてるはずないって言うから……」

それを聞いてオスカー達はお互いの顔を見合わせた。トンクスが自己紹介しろとばかりにオスカーをあげて示した。

「取りあえず、みんな入ればいいんじゃないかな？」

チャーリーに促されて、新入生たちはコンパートメントに入ってきた。

「オスカー・ドロホフ、スリザリンの四年生」

「エストレヤ・プルウエット、スリザリンの四年生だよ、今年も選ばれたらシーカーなの、パースの従妹でもあるけど」

「チャーリー・ウィーズリー、グリフィンドールの四年生、僕も今年も選ばれればシーカーでパースの二番目の兄」

「クラリーナ・ムーディ、グリフィンドールの四年生です」

「ニンファアドーラ・トンクス、ハッフルパフの四年生で私も選ばれればチエイサーね、あと苗字で呼んでね」

パーシーがほらとばかりの顔で隣の二人を見ていて、女の子はちよつと驚いている様子で、男の子はなぜかチャーリーとエストの方を見ていた。

「自分はオリバー・ウッドと言います。クイディッチのチームにはどうやって選ばれるんですか？」

オスカーはなるほどと得心した。このウッドという男の子は恐らくクイディッチの話になると人の話を聞かなくなるタイプだった。

「そうだね、各寮で選抜の試験をやってそれぞれのポジションを決める感じかな、ただ一年生は箒を持つちゃいけないことになってるし、

もう百年くらい一年生はクイディッチのチームメイトには選ばれて
ないはずだよ」

チャーリーの言葉を聞いてウツドの顔が目に見えて悲嘆に暮れて
いた。オスカーはさっきの自分の予想は的中している様だと確信し
た。

「私はジェマ・ファレーイです。スリザリンとグリフィンドールは仲
が悪いと聞いたんですが…… 親や大人たちの冗談だったんですか
？」

「冗談じゃないわ、そのエストとクラーナなんて杖がなくても取っ
組み合いをするくらい仲が悪いもの、杖があるときなんてホグワーツ
が火の海よ」

トンクスがそう言った瞬間に無言呪文が二発、トンクスに命中して
言葉が発せられなくなった。どうやら黙らせ呪文の様だった。

「仲が悪いのはホントだけど、個人個人で仲がいい人もいるの」

「ええ、このうんうん言っているニンファドローラの親もスリザリンと
ハッフルパフの出身ですから」

ジェマは眉を寄せて難しい顔で三人を見ていた。オスカーももし
新入生でこんな状況を見れば自分も困惑するのは間違いないと考え
ていた。

「まあパースにはパパが言ってたけど、どの寮に入っても大丈夫だよ、
ここには大体の寮のメンバーがいるし何かあったら言ってくれれば
いいよ、今年クイディッチのチームに入れてくれとかは無理だけど
ね」

フオローしたはずのチャーリーの言葉を聞いて、ますますウツドの
顔が悲惨なことになっていた。

「ほら、仲良くしてるってほんとだっただろ？」

「ウイーズリーが自信なさげに言うからじゃないの」
「確かに」

どうもやっぱパシーはこういう立ち位置らしかった。

「ねえ、二人ともパースはちゃんと二人とお喋りしてたの？」

「いえ、ウイーズリーは喋ってるより基本呪文集を開いている時間の

方が長かったし、ウツドはクイディッチの技の話でうるさかったです」

ボロクソだった。オスカーは結構この女の子の性格がきつそうだと考え始めていた。

「もう…… せっかく新生生とお喋りできるチャンスなのに…… 組み分けされちゃったら他の寮の人と喋るチャンスはあんまりないんだよ?」

「それはそうだけど…… じゃあエストやオスカーはどうやってクラーナやトンクスと知り合ったの? チャーリーは分かるけど……」

オスカー達はまた顔を見合わせた。オスカーはみんなと初めて会った時のことを思い出し、少し笑ってしまった。

「なんでオスカーは笑ってるんですか」

「クラーナは直接エストとオスカーのコンパートメントに来たの、気合が入ってたの」

「気合が入ってたって何やったんだい?」

クラーナの見事な名乗りをオスカーは未だに憶えていた。あの名乗りのせいでエストに出会ったショックが少し収まった事だ。エストがクラーナがいつかやった様に杖を高く上げた。

「私の名前はクラーナ……」

「ストップ!! ストップ!! なんでエストはそんなにノリノリなんですか!!」

「結構似てたな」

トンクスがよつぽど喋りたいのか必死で黙らせ呪文の逆呪いを自分の喉にかけているようだった。新生生の三人はぽかんとした顔で五人のやり取りを眺めている。

「でもなんでクラーナはオスカーがいるって知ってたの?」

「アラスターおじさんが話してたんですよ、私と同一年の子供がいるって。流石にエストと一緒にいるとは思わなかったですけど」

「そこでエストに先を越されたわけね、これは大きなアドバンテージだわ」

またクラーナから無言の黙らせ呪文が飛んだが、トンクスは盾の呪

文で弾き飛ばした。オスカーはドアの方に盾の呪文を張って、三人に当たらないようにした。

「トングスは僕とエストじゃなくて、オスカーとクラーナが先に知り合ってたよね」

「ああ階段から転げ落ちてた」

「ええ、ニンファドローは私たちをつけて間抜けにも階段から転げ落ちてましたし、そもそもなんか組み分けの時からおかしな奴がいるって噂になってましたよ」

「何よそれ、私よりエストも含めた三人の方が噂になってたわよ、クリスマスで略奪愛だーって」

そう、トングスは会った時から階段から転げ落ちたり、仕掛け階段に引つかかったりとだいたい何かやらかしていたのだった。オスカーは何やら懐かしい記憶が蘇ってくるようだった。

「トングスが目立ってたのもホントだし、クラーナがオスカーのセーター着てたのも、オスカーがエストと喧嘩してたのも凄い話題になってたよ」

「グリフィンドールではそんな話聞かなかったですよ」

「そりゃクラーナの目の前ではしないでしょ、だいたいグリフィンドールなのに緑に銀のセーターを着れる精神が凄いわよ」

「それはエストも思ったの、でもあんまり堂々してるから慣れちゃったの」

どうも一年生の話をするのはクラーナの状況不利の様だった。三人の方は何が何だか分かっていない顔で上級生を見ていた。

「俺たちはこんな感じだけど、各寮の関係はこんな感じじゃないのは本当だろうか」

「そうです、クイディッチの試合前なんかはアホがあちこちで呪いをかけ合ったりしますしね」

「ふっ…… だからこそ、対立しあう寮の二人の関係が際立って見えるの……」

今度は呪文ではなく、クラーナがトングスに百味ビーンズの袋を直接投げつけた。食べていたエストが抗議の視線を二人に送った。そ

してオスカーとクラリーナの顔を見て、ジエマは何かを思い出した様だった。

「あつ!! もしかして、オスカー先輩とクラリーナ先輩って週間魔女に載ってた二人じゃ?」

「確かに母さんが読んでたのに載ってた気が……」

オスカーはいい加減週間魔女にはうんざりだった。エストの判断は大概間違いなかったがこればかりは大きな間違いだと、オスカーでさえ思わずにいられなかった。

「五分程度でホグワーツに到着いたします。荷物につきましては別途学校に届きますので、車内へ残してください」

車内のアナウンスが流れる同時にオスカーは列車のスピードが落ちていくのを感じた。窓から外を見るとホグズミードの村々が曇り空の下に見えた。

「着くみたいだから新入生のみんなは同じ寮になったらよろしくな」

「そうですね、どうせウィーズリーはグリフィンドールでしょうけど」

「オスカーとクラリーナはホグワーツでは一番有名な……」

今度はクラリーナがカエルチョコをトンクスの顔面にぶつけた。カエルの足が取れて、ピンク色の髪の毛に引っかかり、そこでピクピクと動いていた。

「トンクスとクラリーナは特別騒がしいだけなの、何かあったら言うてくれれば大丈夫」

「うん、ほんとにヤバそうなら言うてくれればいいよ」

「そうよ、この廊下を爆破して、ファイルチの職員室を荒らして、下級生をホグズミードの酒場に連れ込むオスカーに任せとけばいいわ」

オスカーはさつきトンクスにぶちまけられた百味ビーンズを魔法で集めて、トンクスの口に突っ込んだ。トンクスの顔色と髪の色が色んな色に変わった。

騒いでいる間に列車は駅についてしまった様だった。

「一年生はハグリッドが誘導するから、手荷物だけは持ってハグリッドのところに行った方がいい」

「そうだね、ほら外にいるあの大きな人がハグリッドだよ」

時間と天候の関係で薄暗くなっているホームに、大きなカンテラで照らされたハグリッドの巨体が見て取れた。

一年生たちは自分たちのコンパートメントに一度戻って荷物の確認をするようだった。オスカー達はそのまま人でごった返している列車からなんとか出て、セストラルのひく馬車に乗り込んだ。

「毎年、この話をしている気がするけど、闇の魔術に対する防衛術の先生は誰なんだろうね」

「まあ完全にあの職業は呪われてるよな、ほんと今年は誰なんだろう」
闇の魔術に対する防衛術、この科目の先生は本当に毎年変わっていた。偶然でないのなら、

呪われているのかそれともあえてダンブルドア先生が交代させているのかのどちらかだとオスカーは考えていた。

「クラーナの叔父さんの言い方だと、決闘を教えられる人なんだよね？」

「まあ、その後大体の予想はできたんですけど、ちよつと大物すぎるんですよね」

「決闘を教えられて大物？　なんか強そうな人がくるのね」

クラーナも確信の無さそうな言い方だった。

「ただ前も言いましたけど、スネイプはあの職を狙ってるらしいですし、クイレル先生も志望してるって聞きましたよ」

「クイレル先生ってマグル学のだよな？」

「ええ、トンクスのお母さんが私がやらなかったらクイレル先生がなつてたかもって言ってました」

クイレル先生が闇の魔術に対する防衛術の先生？　オスカーはクイレル先生には失礼だとは思っていたが、あの先生は怪物や闇の魔法使いに相対したら気を失ってしまいそうだと考えていた。

「あの先生って見るからにレイブンクローって感じの先生よね、寮監のフリットウィック先生はなんかちっちゃいのに肝が据わって見えるのに」

「フリットウィック先生は組み分けされるときにグリフィンドールと

レイブクローでどっちにするの？ って組み分け帽子と悩んだって言ってたの、それがもしかしたら関係してるのかな」

「へえ、勇敢で賢いから学生時代は決闘チャンピオンだったのかな？」
オスカーはフリットウィック先生が決闘している姿は、さっきのクイレル先生が戦っている姿と同じくらい想像できなかったが、呪文学で色々な呪文をまるで苦も無く使っている姿を考えると、とても敵に回したいとは思えなかった。

「もうホグワーツだな」

「闇の魔術に対する防衛術の先生を見に行きますか」

セストラルの馬車から降りて、五人は石の橋を渡ってホグワーツ城の中へと入った。人の流れに身を任せながら、相変わらず荘厳な雰囲気の大広間が見えてきた。

何百本というろうそくが宙に浮かび、天井には外の天気そのまま映し出されている。広間は各寮ごとのテーブルがあり、すでに大方の学生は席についている様だった。

一番奥にはダンブルドア先生を中心にして先生方が並び、その前に三本足の椅子が置かれていた。

「やっぱり、ルーファス・スクリームジョールですよ…… 次の闇祓い局の局長間違い無しって言われている人物です」

クラーナがオスカーの耳元でささやいた。ダンブルドア先生の隣にライオンのたてがみの様な髪型をした、強そうな人物が座っていた。その髪型も、黄褐色の髪色も、力のありそうな目も、全てがその人物がどんな人生を歩んできたのかを語っている様だった。

「ああ、俺も一回会ったことがあるから間違いないと思う。確かに大物なのかもな」

「ちよつと何二人はこそそ喋ってるのよ。寮ごとのテーブルに別れないといけないからって、いちいちお別れの挨拶をしなくてもいいでしょ」

オスカーは年を経るたびにトンクスがうるさくなっている気がした。これはルーンスパールが大きくなるスピードと同じくらいスピードであり、悩ましい事実だった。

「ニンファドローラはうるさいですよ、じゃあまた授業で会いましょう」
「じゃあね、多分パースはグリフィンドールだと思うけど、みんなの寮に行ったらよろしくね」

「わかったの」

「ああ」

グリフィンドールの二人がテーブルへと消えていった。

「今年もオスカーが何をしでかすのか楽しみにしとくわ」

「俺は黙らせ呪文をできるだけ使わない様に祈っとく。数が多くなる
と全身金縛り呪文の方が効率が良いつて気づくかもしれないからな」
「喋らない生き物に変えちゃうの」

トンクスはオスカーの顔に変身して、怖いとでも言うように自分の
肩を抱いて震えているふりをした。オスカーはそろそろ七変化をも
とに戻す呪文を覚えたかった。

トンクスと別れてスリザリンのテーブルに向かうと、同級生やスリ
ザリンクイデイツチームのメンバーがオスカーとエストに挨拶を
した。二人は最早指定席になりつつある血みどろ男爵の隣に座った。

「男爵、今年もよろしくね」

「ああ、ご機嫌麗しく。そろそろ姫は少年に縄をかけた方がいいかも
しれない」

「縄？」

エストが男爵の発言を聞いて首をかしげた。オスカーはトンクス
と同じようなことを男爵が言い出す気がしていた。オスカーはこの
男爵が割と余計なことを言う性質だと言うことに去年気付いたから
だ。それに男爵はオスカーの味方に付いたり、相談に乗ってくれたり
はするが基本的にエストの味方であって、オスカーとエストを天秤に
かけた場合、エストに味方するのは確実だった。

「少年、余り他の寮の女の子ばかりと仲良くするのは良くないぞ、スリ
ザリンにそういう男子がいるとゴーストの間でも噂になっている」

「なんなんだそれ、俺じゃないし俺だとしても絶対トンクスあたりが
流してるだろ」

「そうなの、別にオスカーはインカーセラスで縛らなくてもどつかに

行ったりしないもん」

これは驚愕の事実だった。ただでさえオスカーはその出自でグリフィンドール生に追い回されたり、えん罪でフィルチとミセス・ノリスにマークされたりしているのに、これ以上謎の噂が増えるのはごめんだった。それにやっとオスカーはスリザリンの同級生ともちやんと喋れる様になってきたのだ。

「まあ慎むようにすることだ。ここぞという時と相手だけに心に向けてるから尊く感じるのだぞ」

血みどろ男爵はテッドと同じようなことを言っていたが、オスカーは流石に血みどろ男爵の様に十世紀に渡って後悔し続けることにはなりたくなかったので、一応心に留めておくことにした。

血みどろ男爵の説教をオスカーが聞いている間に組み分けの準備が進んでいる様だった。

新入生たちがマクゴナガル先生に連れられてやってきた。新入生は大広間の天井に驚いたり、教員や学生たちのテーブルを不安そうに見つめていたりした。

「あつ、パースがいるの」

「ウツドって男の子と一緒だな」

マクゴナガル先生が三本足の椅子にボロボロの帽子を置いた。上級生と先生方の視線が組み分け帽子に集まった。

注目と静寂の中、組み分け帽子のつぎはぎの一部分が開いて喋り始めた。

『今は昔、そのまた昔

さかのぼること一千年

学び舎が建つその場所で

集った四人がこう言った

望みは一つ一つだけ

並ぶものなき学び舎を

我らの思いを伝えよう

我らの知識を伝えよう

我らの全てを伝えよう

そして起こった大事業
偉大な魔法使いの卵をば
偉大な魔法の卵をば
次代の次代の時代まで
育て伝えんその全て
次代の次代のその先へ
スリザリンが伝えるは
何をも阻まぬ野望であり
それを成する狡猾なり
レイブンクローが伝えるは
何をも知る知識であり
それを成する英知なり
ハッフルパフが伝えるは
何をも拒まぬ誠実であり
それを成する勤勉なり
グリフィンドールが伝えるは
何をも向かう勇氣であり
それを成する度胸なり
四人が伝えるその全て
しかし人には分からぬもの
自分が何を成すべきか
自分が何を求めるか
自分に何が足らぬのか
創始者四人の亡き後に
誰が伝えんその全て
誰が選ばんその全て
ならば私が伝えよう
君が求めるその全て
君が持てるその全て
恐れずかぶれば伝えよう
君が行くべきその道を

いざ始めよう組み分けを!!」

組み分け帽子の歌が終わった瞬間に大広間中から拍手が巻き起こった。いつも一緒に拍手することの無いグリフィンドールとスリザリンも、教師陣も大広間みんなが拍手をしていた。

オズカーは毎年組み分け帽子の歌が変わっていくのを知っていたが、今年の中々力が入っていきそうだと感じた。

マクゴナガル先生がアルファベット順に新入生を呼び出す中、オズカーはさっきのチャーリーとエストの話进行を思い出していた。フリックとウィック先生はレイブンクローとグリフィンドールで組み分け帽子が迷っていたと言っていたと言うのだ。

オズカーは気になった。なら一年生の時にあれだけ組み分け帽子を待たしていたエストはどうだったのか？ オズカー自身はグリフィンドールとスリザリンを薦められたが、エストはどうだったのか。オズカーはエストの事を知りたかったし、組み分けのことも興味があった。

「エスト、なあ聞いてもいいか？」

「えっ？ 何？」

組み分けに魅入っていたエストがオズカーの方を向いた。オズカーはエストと一緒に過ごす様になって四年目に入ろうとしていたがエストの自身の事を去年のクリスマス様の様に聞いてみたりしていなかったし、オズカー自身の事を喋ったりは余りしてなかった。

むしろ、一番一緒にいるのに他の人の方がオズカーについては詳しいかもしれない。もちろん、朝何を食べるだとかそういうことはお互いに詳しくはなかったかもしれない。

「組み分けのこと聞いてもいいか？」

「え？ 別にオズカーにだったらエストは隠し事はしてな…… うん、言っちゃいけないって言われたりしてなければ答えるよ？」

何かちよつと間があった気がしたが、オズカーはエストがこう言うだろうことはわかっていた。

「二年生の時、なんでエストはあんなに組み分けに時間がかかったんだ？」

エストはオスカーに聞かれて、嬉しそうに口角を上げた。

「組み分け帽子さんとね、お喋りしてたの」

「あんなに長く？ 二十分くらい座ってたろ？」

オスカーは少なくともこの三年間の組み分けで、エストよりも長い組み分けは見たことが無かった。そもそもオスカー自身の組み分けですら長い方であったはずだった。

「そうなの、喋ってる時はあつという間だったんだけど、他の人より凄い長い間喋ったみたいだったんだね。その後でオスカーが隣だったし、お腹も減ってたからあの時はあんまりおかしいと思ってなかったけど」

組み分けは粛々と進められていたがエストはオスカーに話すのに夢中で全く眼中にない様だった。

「それでね、組み分け帽子さんはエストはレイブンクローに行ったなら絶対偉大になれるって言うってたの、なんかその理由……魔法とか血縁とか性格とかそういうのがあり得ないくらい向いてるって言うってたの。この千年だと一番かもしれないよって」

やっぱりオスカーがレイブンクローの特性について考えた時の直観は間違いではなかったようだった。それに灰色のレディと古い学の塔で喋った時の記憶もオスカーの中でレイブンクローとエストを関連づけるのに一役かっているかもしれないなかった。

「じゃあなんでスリザリンだったんだ？」

「そうなの、組み分け帽子さんも迷ってるみたいだったの、こんなに向いてる人に他の寮を紹介してもいいのかなって。でも、組み分け帽子さんはエストにエストが欲しいものを手に入れたいなら、それが何か知りたいならスリザリンに行くのが一番早いかもしれないって言ったの」

オスカーは自分の組み分けを思い出した。組み分け帽子はオスカーを守るべきものを得れるならグリフィンボールよりも偉大になれると言ったのだ。エストにはレイブンクローに入ったなら偉大になれて、スリザリンなら欲しいものが手に入ると言った？ オスカーにはその違いが分からなかった。

「そう!! そうなの。エストはエストの欲しいものって何って聞いたんだけど組み分け帽子さんは答えてくれなかったの。でも、とにかく自分で選べって言ったの。どっちでも大丈夫だけど、どっちか選べって。エストは自分の欲しいモノって何か分からなかったし、それが早く手に入るんだったらそれが分かるんだったら、そっちの方が偉大になるよりいいと思ったからスリザリンにしたの」

エストでも自分が欲しいものがわからないのだろうか？ オスカーにはそれが意外だった。エストからはいつも、日常でも、授業でも、誰かと向き合っている時でも、とにかく行動する際に強いエネルギーの様なモノを感じると思っていて、それがいつ間にかオスカー自身にもちよつとずつ影響している気がしたからだ。

「エストはよく、特別って言うだろ？ レイブンクローでなら偉大になれるんなら、そっちの方が特別なんじゃないのか？」

オスカーがそう言うのとエストは頬を膨らました。オスカーの言動が気にいらぬ様だった。二人きりの時にエストがこういう顔をするのは珍しいとオスカーは思った。誰かがスリザリンに選ばれた様で周りのテーブルから拍手があがったのでオスカーもならって拍手した。

「エストはスリザリンで良かったと思ってるの。オスカーとも一緒だったし。それに自分のやりたいことで特別にならないと、自分の欲しいものもわかんないと特別になる意味がないと思わない？」

言い終わるとまたエストはニコツとオスカーに笑いかけた。オスカーはこういう時にやっぱりエストにうまく返すことができなかった。

「ああ…… そうかもしれない」

オスカーが静かになるとエストが矢継ぎ早に話しかけてきた。

「それで、スリザリンとレイブンクローとどっちがいいのか組み分け帽子さんとお喋りしてたの、組み分け帽子さんは元はグリフィンドールの持ち物なんだって教えてくれたよ、あとダンブルドア先生の部屋で色んなことを聞きながら次の年の歌を考えるんだって」

今度ダンブルドア先生の部屋で時間があれば、あの帽子に喋りかけ

てみようとオスカーは思った。

「あの…… ここ座つても大丈夫ですか？」

「え？」

「えっ？」

二人が間抜けな声を上げると、ホグワーツ特急で会ったジェマが傍に来ていた。スリザリンに組み分けされた様だった。

「座って大丈夫だ。スリザリンへようこそ」

「そうなの。ジェマ。スリザリンへようこそ」

「ありがとうございます。お邪魔でした？」

ジェマは首をかしげてオスカーとエストの方を見たが、オスカーはちよつとジェマが本気で言っているのか怪しいなと思った。

「大丈夫だよ？ うーんと、なんか聞きたいことはある？」

「どつちかというとお二人の事を聞きたいですけど、やっぱりスリザリンのことを教えてください」

「俺たち？ 呼び方はオスカーとエストでいいぞ。レアは何回言つても先輩って言ってくるけど…… スリザリンの何を聞きたいんだ？」

チャーリーが新しい魔法生物を見るような目でジェマはオスカーとエストを見ていると、オスカーは感じていた。

「えつと、よく聞く噂は本当ですか？ 純血じゃないとつま弾きにされるとか、ひいおじいさんに魔法大臣がいないと虐められるとか、闇の魔法を全員がマスターしてるとかそういうやつです」

「そんなのはだいたいウソなの、エスト達の周りには純血が多いけど、半純血の人もスリザリンには結構いるはずだよ？ それにスリザリンはあんまりいじめつてないの。寮がでっかい家族みたいなものだから…… だからジェマに何かあったら、エストとかオスカーでもいいし、スリザリンの誰かに言えばなんとかしてくれるはずなの」

「ああ、言ってくればなんとかするし、魔法とかテストとかもレイブンクローと違って、同じ寮生同士で争ったりは少ないからな。あと闇の魔法はヴォルデ…… 闇の帝王が元気だった頃はあったかもしれないけど、今はほとんどないはずだ」

オスカーがヴォルデモートの名前を言いかけたので、ジェマの目が

一瞬だけ見開かれた。

「でも、その…… 死喰い人が一杯いたって言うのは事実だし、他の寮と仲が悪いのは本当なんですよね？」

「それはそうなの、他の寮と溝があるのは事実だし、うちの寮はうちの寮最優先で他に容赦しないことも多いの。死喰い人とか闇の魔法使いも事実だけど…… でもジエマはスリザリン出身で一番偉大な魔法使いって知ってる？」

「一番偉大な魔法使い？ 例のあの人ではないし…… 歴代の魔法大臣の誰かですか？」

ジエマの答えを聞いてエストが悪戯っぽく笑った。オスカーはエストがスリザリンの紹介をする時にいつも誰を使うのかはよく知っていた。

「マーリンだよ？ あの魔法使いで一番有名で偉大なマーリンはスリザリンの出身なの。寮の寝室に行ったら分かるけど、マーリンの冒険がタペストリーに書いてあるもん。それに闇の魔法使いはスリザリン以外からも出てるから、スリザリンの専売特許ってわけではないの」

「マーリンが……」

これはジエマにとっては相当意外なことだった様だった。ジエマは目を白黒させてオスカーとエストを見ていた。

「まあそれに闇の魔法の噂とか、他の寮と仲が悪いって言うのはいいこともある。よっぽどのが無い限り、スリザリン生を攻撃してくるやつはいないからな。スリザリンでハブられでもしない限りは」

オスカーがちよつとだけエストの方を見ると、エストもオスカーと同じく一年生の頃を思い出しているのか笑っていた。

「あと、スネイプ先生は絶対スリザリンの学生に理不尽なこととはしないって言うのは大きいかもしれないの」

「まあこれは魔法薬学の授業にならないと分かんないけどな」

「なるほど…… ありがとうございます」

オスカー達が喋っている間に組み分けはどんどん進んでいる様だった。ホグワーツ特急で会ったウッドという少年はグリフィン

ドールに組み分けされていた。パーシーも普通にグリフィンドールに組み分けされて、クラーナに背中をバンバン叩かれて机に顔を突っ伏していた。相変わらずグリフィンドールのテーブルは騒がしかった。

「あつ、ダンブルドア先生のお話が始まるの」

「あの人がダンブルドア先生ですよね？」

「そうだな、今の魔法界じゃ一番偉大で強い魔法使いだろうな」

ダンブルドア先生が立ち上がると、それまで騒がしかった大広間が静かになった。

「新入生の皆は入学おめでとう!! 古顔の皆にはお帰りじや。今年もホグワーツでの一年が始まる!! まさに喜ぶべきことじや」

青い眼がスリザリンのテーブルからも見えた。オズカーは一瞬だけ、ダンブルドア先生と目が合った気がした。

「そして、新しい先生を紹介しよう。恐らく今年はこれまでのホグワーツのどの年よりも、実践的な闇の魔術に対する防衛術を受講することができるじやろう」

ダンブルドア先生が隣に座っているスクリームジョール先生に視線をやった。

「紹介しましょうぞ。魔法省は闇祓い局から一年だけ来てもらうことになった、ルーファス・スクリームジョール先生じや」

ライオンの様な風貌の魔法使い。ルーファス・スクリームジョールが立ち上がった。オズカーはダンブルドア先生とスクリームジョール先生が並んでいるのを見て、ちよつとだけ意外だった。スクリームジョール先生はいかにも強そうな風貌なので、ダンブルドア先生が圧されて見えると思ったのだが、むしろスクリームジョール先生の方がダンブルドア先生の迫力に苦勞してそうに見えたのだ。

「ルーファス・スクリームジョールだ。この卒業生で、長年闇祓い局に勤めている。今年一年、よろしく願います」

挨拶が終わると拍手が鳴り響いた。オズカーが教員のテーブルを見ると、一応全員が拍手をしていたが、スネイプ先生だけはどこかおざなりでスクリームジョール先生の方に視線を合わせていなかった。

「続いて面白い通知がある。おっとそれまでにいつもの通知をしておこう。校庭にある森は生徒は立ち入り禁止じゃ、それに授業の合間に廊下で魔法を使ったり、廊下や階段を爆破したり、ポルターガイストを誰かに焚きつけたり、飾り棚を真つ二つに焼き切ったりしてはいかん。これらの規則については管理人のフィルチさんの部屋に長いリストになって張ってある」

エストがオスカーの方を見ていたし、ハツフルパフのテーブルから視線が来ている気がオスカーはしたが、意地でも視線をダンブルドア先生から外さないことにした。

「それにクイディッチチームに参加したいものは今から二週間後までにフーチ先生に連絡するように、さてようやく本題じゃの」

じつとダンブルドア先生から視線を外さなかつたオスカーには、ダンブルドア先生の青い眼が何かを期待するようにキラキラつと光るのを捉えた。

「ホグワーツでは時折決闘クラブが教師の許可付きで開始されておるわけじゃが…… 無論、無許可の決闘クラブがいくつかあることも知っておる」

ダンブルドア先生が大広間を左右に見回すと何人かがビクツと震えた様だった。オスカーもそういう集まりがいくつがあることは知っていた。

「今年是我の名前と、スクリームジョール先生の監督の下で大規模な決闘クラブを行いたいと思っておる。詳細なルールについては後日、スクリームジョール先生から発表があるが、クイディッチと同じく、優勝した学生の所属寮には大量の得点を与えることにした」

大広間が突然ざわつき始めた。どの学生も大きなイベントが増えると言うことになって浮き足だっているようだった。すでに腕まくりをして自分の杖を取り出している者もいた。

「ホグワーツ全体での寮同士の交流を深めるため、学生の皆の魔法の研鑽の為に是非こそぞって参加して欲しい。では以上じゃ、皆、お待ちかねの夕食の時間じゃ、さあ、かつこめ!!」

ダンブルドア先生の号令と同時に皿の上に七面鳥や糖蜜パイが現

れ、ゴブレットにはなみなみと飲み物が注がれていた。

「ねえ、オスカーはでるの？ 決闘クラブ？」

「まあみんながでるんならでるかな」

七面鳥にかぶりついていたエストが半分何を言っているか分からない声で尋ねてきていて、オスカーもパンプキンパイを頬張りながら答えた。

「クラリーナのおじさんが言ってたこと覚えてる？」

「言ってたこと？」

ムーデイが言っていたのは、闇の魔法使いに備えて勉強しろと言っていたのと…… オスカーはあまりにも油断大敵!! のインパクトが強すぎてあまり出てこなかった。

「レアに一人で戦う技術もだけど、複数人で戦う技術もいるって言ったの。だからもしかしたら今年の決闘クラブではペアで決闘したりするのかな？」

「そういう決闘もあるのか……」

「もしそうだったら一緒にやろうね、いつつもこういう時にオスカーと一緒にできないもん」

確かに、オスカーは何かと戦ったり、そういう勉強をする時にエストと一緒にではないことが多かった。一番魔法が得意で頼りになるはずなのにだ。もちろん、戦闘の知識や技術という点ではクラリーナに軍配が上がるかもしれないが、オスカーには今のエストと決闘するのは、大人の魔法使いと相對するよりも厳しくなると容易に想像できた。

「ああそうだな、確かにそう言うことはしたことはないしな」

「やった。ちゃんと覚えといてね」

「お二人は仲がいいんですね」

今度は糖蜜パイを食べながら、ちよつと目を細めてジェマが二人の方を見ていた。

「それはそうかも」

「仲はいいかもな」

「いや、これは凄くいいって言うんです」

オスカーはジェマの言う通りだと思った。いつも一緒にいるエス
トと仲がいいのは当然のはずだったからだ。

魔法基本法則

今年の闇の魔術に対する防衛術の先生は一味違う。そんな噂が他の寮とはあまり情報伝達の無いスリザリンにも流れてきた。

これまでもトンクス先生の評判や、ポドモア先生がエストをやたらえこひいきしている等の噂は流れてきたが、今回の噂はちよつと違う様だった。

いわく、流石は実戦を見てきた人がやる授業だ。いわく、これまでの座学偏重の魔法省の指導要領とは一味違う。そんな話が流れてきており、一番授業が始まるのが遅かった四年生、特にスリザリン生もスクリームジョール先生の授業を受けるのが楽しみな様だった。

オスカーもエストに連れられて、昼食を済ませるなり、闇の魔術に対する防衛術の教室へ向かっていた。すでに教室の前には列ができて始めていたが、なんとか二人も一番最前列に座れそうだった。二人の机の前には闇の魔術に対する防衛術にもかかわらず、魔法薬が入っているとかわらぬ大鍋があった。エストが大鍋を見て、なんだか不思議な顔をしていた。

「確かになんかいつもの授業とは違う感じだよな」
「そうだな、良く分からないものが一杯あるしな」

教科書、闇の力・護身術入門を机の上に取り出しながら、オスカーは教室を見回した。オスカー達は教室の左翼に位置していて、そこには大鍋があつたが、もう片方の右翼にはつがいらしきふくろうが檻に入れられていた。

スクリームジョール先生がやつと教壇に立った。オスカーはやつぱりこの人物は明らかに色んな点で迫力があり、力強さを印象づける動きをしていると思つた。その黄みがかつた鋭い眼も、少し足を引きづつてはいるが軽やかで力強い歩き方もだ。

「初めまして、ルーファス・スクリームジョールだ」

教壇の上で生徒達に一礼し、スリザリンのクラスをスクリームジョール先生は見回した。

「さて、今年一年間、闇の魔術に対する防衛術を担当するわけになったわけだが…… 前任の先生方…… ポドモア先生、トンクス先生、ドージ先生からの手紙によると、君たちはどうも魔法省の指導要領よりも進んだ場所まで勉強しているようだ」

ニコリとも笑わずにスクリームジョール先生は言い切った。

「これは喜ばしいことだ。私は魔法省から来たわけだが、残念ながら魔法省の学習指導要領は少し甘さがあると言わざるを得ない。もちろん、魔法省は伝統的にホグワーツの校長と校長が任命する先生方に裁量権を渡しているわけだから、その裁量権に期待しているともとれるが」

オスカーにはスクリームジョール先生は自分の発言に自信を持っている様に見えた。なんとというか、百パーセント信じ切っているというのか、とにかく妙な説得力があつたのだ。エストがオスカーの耳元でささやいた。

「すつごくはつきり言う先生だね、やっぱり」

「そうだな」

オスカーと同じく、エストも同じ様な印象をスクリームジョール先生に抱いている様だった。確かに、キングズリーやムーディ、目の前のスクリームジョール先生といい、喋り方や見た目ですら闇祓い局の人間には雰囲気は備わっていた。

「その為、今年度も学習指導要領はキチンと遂行する。しかし君たち四年生にはそれに追加して、これまでどんな魔法に我々が悩まされてきたのかを勉強し、理解し、その対応策を学んでもらう。さらに校長先生との協議の結果、決闘、すなわち実践的な戦いにおける魔法の使い方も授業時間外で見学、体験してもらおうことになる」

あの決闘クラブの話はスクリームジョール先生から持ち出したと言う事なのだろうか？ 授業のために授業以外の場所まで仕組みを変えたと言う事なら、恐るべき行動力だった。

スクリームジョール先生は自分が何をするのかの宣言を終え、次に出席簿を持ってスリザリンの全学生の名前を読み上げた。

「さて、一回目の授業では魔法使い、魔女が行う最も重要で制御不能な

事項について予備知識を学ぶ。このクラスでアダルバート・ワツフルリングが提唱した基本魔法法則の第一法則が分かるものは？」

やはりエストの手が真つすぐに挙がった。オスカーにはワツフルリングが美味しそうな名前だなあとという、トンクス並みの感想しか思いつかなかった。

「ではミス・プルウエット」

「はい、最も深い神秘、命の源、自己の精髓を弄ぶ者は、通常では考えられない危険な結果を覚悟すべしです」

「よろしい。スリザリンに十点。ではこの自己の精髓とはなんなのかな？」

スクリームジョール先生が杖を振るとふくろうをのせたテーブルが真ん中へとやってきた。

「あらゆる魔法薬の中で、最も危険と言われている魔法薬を知っている者はいるか？」

またエストの手が真つすぐに挙がった。スクリームジョール先生は一度クラスを見回してから、エストの方を向いた。

「では続けて、ミス・プルウエット」

「多分……アモルテンシア、魅惑万能薬です」

エストが目の前の大鍋を見ながら言った。大鍋は三つあって、一つは色が無い液体であり、一つは何か生理的な嫌悪を感じさせる臭いと見ための液体で、最後の一つは湯気がらせん状を描いていて、真珠の様な色をしていた。

「スリザリンに十五点。あらゆる魔法薬の中で最も危険であり、悲惨極まりない事故を引き起こしてきたと言われているのが、アモルテンシア、世界一強力な愛の妙薬だ」

またスクリームジョール先生が杖を振ると、大鍋がオスカーの前を通り過ぎてスクリームジョール先生のいる真ん中まで運ばれていった。真珠色の大鍋が通り過ぎるときにオスカーは不思議な匂いをかいた。リンゴの様な香り、オレンジの様な香り、ミントの様な香り、甘いお菓子の様な香りが順番にした気がしたのだ。

愛の妙薬だと聞いて、クラスにはちよつと不思議な笑いが伝搬した

が、スクリームジョール先生の顔は厳しいままだった。

「さて、では魔法省に最も打撃を与えた魔法が何か知っている者は？」
またまたエストの手が挙がった。スクリームジョール先生はまたクラスを見回して、何故かオスカーの方を見てきた。

「このクラスでやる気があるのはミス・プルウエットだけか？ 最初
は誰でも間違えうモノだ、千の考えは一つの行動に及ばない。ではミス
ター・ドロホフ。何か分かるかね？」

オスカーにはそれが何か分かっている気がしていた。恐らくスク
リームジョール先生はオスカーが答えられるからあてたのだった。

「服従の呪文……」

「その通りだ。スリザリンに十点。かつて魔法省が闇の魔法使いと戦
争状態にあった時代。最も体制側を悩ませたのがこの服従の呪文だ」

スクリームジョール先生が何を言いたいのか？ 自己の精髓とは
何か？ オスカーは何となくその予想はついていた。その種の呪
文や技術を練習する際にいつもクラリーナがなんと言っていたのか、初
めて聞いたのは……

「これだけ例が出れば、ワッツフルリングの言う自己の精髓とは何を指
しているか分かるだろう？ 精髓、物事の一番大事な場所、恐らく
我々魔法使いが足を踏み込む一番深い場所。すなわち人の心や魂、記
憶と言った要素のことだ」

そう、開心術の練習をした時にクラリーナが同じことを言っていたの
だ。今のスクリームジョール先生と全く同じことをオスカーは聞いた
ことがあった。

「有名な死の呪文でもなく、残虐な磔の呪文でもない。直接的な暴力
よりも、服従の呪文の様な人の心を悪戯に捻じ曲げる力の方が魔法界
に暗い影を落としてきた」

仲良くつがいで寄り添っているふくろうの片方にスクリーム
ジョール先生が杖を向けた。

「インペリオ!! 服従せよ!!」

オスカーにはそのふくろうの目が焦点を合わさなくなつたように
見えた。ふくろうは寄り添っていたつがいの片方を無視して、檻の中

で一番スクリームジョール先生の近い位置へと動いた。

「この呪文をかけられれば耐性の無いものは完全に支配される。術者が強力な魔法力を持つていればいるほど強力な支配となる。かつて、多くの魔法使いがこのふくろうと同じ状態になった。自分の伴侶すら自分にいつ杖を向けてくるか分からない時代だ」

こんどはスクリームジョール先生は服従の呪文にかかったふくろうの毛を一本抜いて、悪臭のする魔法薬に入れた。オスカーはいつの間にか自分の手が真っ白になるほど握りしめられているのに気づいた。

「ここにあるのは憎悪の魔法薬だ。一般に愛の妙薬に対する解毒薬として知られている。ただし、愛の妙薬も憎悪の魔法薬も本当に愛や憎しみをつくり出すわけではない。強烈な執着かその逆をつくり出すだけだ」

もう一度スクリームジョール先生が杖を振ると今度は操られたふくろうがもう片方のふくろうを檻の端に押さえつけた。抑えつけられたふくろうが悲しい声を上げた。操られていないふくろうにスクリームジョール先生が憎悪の魔法薬を飲ませた。

操られたふくろうが体を使って相手を傷つけないように抑えているのに対して、今度はもう片方が一方的に攻撃し始めた。服従の呪文の効果なのか、操られたふくろうはいくら嘴や爪で引っかかれ、羽が飛び、赤くその羽根が染まっても反撃しようとしなかった。

「服従の呪文や魔法薬を使えば人の感情や理性を無視した行動をさせることができる。今のふくろうと同様の状況を人間相手でも再現できると言う事だ。これがどれだけ恐るべき状況か分かるか？　いくら杖の腕に自信があるものでも、自分の良く知る人間や仲間と思っていた人間に杖を向けることができるか？　闇の魔法と戦うとは、強力な呪文や逆呪いを覚えて戦うのが全てではない。むしろほとんどがこう言ったどうしようもない状況との戦いだ」

遂に力尽きたのか、服従の呪文で操られていたふくろうが檻の底に落ちた。弱弱しく痙攣している。オスカーは悪霊の火を見た時よりも、まね妖怪が何に変身するのか考えた時よりも、背中に嫌な汗が流

れていて、自分の目が見開かれていると自分で感じ取った。

「そして我々魔法省の重要な仕事の一つでもあるが、非常に恐ろしい魔法がある」

またスクリームジョール先生が杖をふくろうに向けた。今度は憎悪の魔法薬を飲ませたふくろうにだ。

「オブリビエイト!! 忘れよ!!」

ふくろうの目の焦点が完全に合わなくなり、ふらふらとしている。スクリームジョール先生がその間に倒れているふくろうから毛をむしり、アモルテンシアの大鍋に入れ、まだふらふらしているふくろうに飲ませた。

「憎悪の魔法薬の解毒薬は愛の妙薬だ。つまりこのふくろうは元の状態に戻ったわけだ。記憶以外は」

愛の妙薬を飲まれたふくろうが、檻の下で血だまりをつくつていてまだピクピクと動いているふくろうを不思議そうな顔でのぞき、首を傾げた。

「忘却呪文は我々とマグル社会との関係を保つために非常に重要な呪文だ。しかし、悪意を持つて使えば、悪事の全てをかき消すことができる。その上服従の呪文と組み合わせれば、手の付けられない様な悪事を行うことすらできるだろう」

またスクリームジョール先生が杖を一振りするとふくろうの檻は消え去った。教室には愛の妙薬の時の笑いなどこれっぽっちも残っていないかった。あるのは嫌な沈黙と緊張だった。オスカーはまだふくろうがいた場所を見続けていた。

「いいか? 君たちが戦うのは、自分と周りの人間を守る為の術が相手をするのはこう言った魔法だ。人の底知れぬ悪意と一時の欲望が、人の精髓をよこしまに捻じ曲げれば、考えられないほど悲惨な状況になる。だからこそ、闇の魔術に対する防衛術を受けるにあたって、君たちはきちんこの魔法基本法則を守ってもらいたい。そうでなければ、魔法省があっても、闇祓いがいても、私が君たちに教えても何の意味もなくなるだろう」

オスカーにはスクリームジョール先生の言っている言葉が四分の

一も入ってこなかった。オスカーはこの三年で色んなことを経験して多少はストレスや自分の苦手とすることや向き合うのが辛いものとも向き合えるようになったと思っていた。しかし、今、頭の中を支配しているのは目を閉じたい、背けたいという考えと感情だけだった。その感情がなぜどうして巻き起こっているのかすら自分で理解できていなかった。どうしてこんなに見えるのが辛いのが分からなかった。

「それでは本来の闇の魔術に対する防衛術の授業に戻ろうと思うが、今の話で何か質問があるものは？」

さつき手を挙げると言われたはずのスリザリン生は誰も手を挙げなかったが、ちよつとした沈黙の後、やはりオスカーの隣から手が挙げられた。

「ではミス・プルウエット、何かね？」

「まだ、真ん中の魔法薬を説明してもらっていません」

クラスの見線が真ん中の魔法薬の入った大鍋に集まった。確かに両サイドの愛の妙薬と憎悪の魔法薬の説明はあったが、真ん中の透明な魔法薬の説明は無かった。

「ではこの魔法薬は何だと思う？」

「ベリタセラム、真実薬です」

「その通り、スリザリンにもう十点与えよう」

はつきり言って、点数の大盤振る舞いだったが、スリザリン生の誰もが気にはしていなかった。スクリームジョール先生の授業や発言は気持ちのいいモノでは無かったが、力があつたからだ。

「この透明な魔法薬はベリタセラム、たった三滴、かぼちゃジュースや蜂蜜酒に入れるだけで、飲んだ人間は聞かれたすべての事柄について答える。自分の好きな食べ物から、最悪の記憶まで自分の意思に関係無しにだ。飲んでみたいという人間はいないだろう？」

オスカーはその名前に聞き覚えがあつた。いつか家にやってきた魔法使いがそれを自分に飲ませたはずだった。

「この魔法薬は作るのが非常に難しい上、使用は常に制限されている。人の記憶や心の内を明かす、数少ない技術であるからだ。この他には

非常に卓越した開心術と呼ばれる技術の持ち主のみが、杖技でもって同様の事柄を行える。両方とも、開心術と呼ばれる技術や耐性を持たせる魔法薬で防御は可能ではある。しかし、君たちがその二つの方法のどちらかを使える魔法使いと出会ったのなら、潔く抵抗は諦め、救助を待つことだ」

衝撃的な発言だった。諦めろとはどういうことなのか？ オスカーには分からなかった。

「こう言っているのは、この二つを使えるような魔法使いは非常に卓越した魔法使いか、それを可能とする組織力を持っているからだ。しかし、この様な手段を取らない、取れない魔法使いなら対抗できると簡単に考えてはならない。そのような魔法使いには秘密を聞き出す別の方法がある。もつと原始的で簡単な方法だ。秘密を聞き出す本人か、親しい人を拷問すれば良いのだ」

つまり、戦うなと言う事なのだろうか？ 理不尽は目の前にいつやってくるのかも分からないのに？ オスカーは理解しがたい様で、それが正しいとも感じていた。危うきに近付くのは愚か者のやることなのだ。しかし、自分ならまだしも、周りの親しい人が危険にさらされて黙っていられるのだろうか？ オスカーはスクリームジョール先生が何を言いたいのか分からなかった。

「私の言っていることが分かるか？ なぜ卓越した魔法や技術、暴力的で残虐な魔法を使ってまで人はそのようなことをするのか？ 価値があるからだ。魔法基本法則の第一の法則で弄んではいけないと言っているモノはそれほどの価値があるのだ。君たちはそれを胸に刻み、守らなければならぬ。これは闇の魔術に対する防衛術の基本であって、名前の通り、あらゆる魔法使いと魔女にとっての基本事項だ。私の知る偉大なオーラーの言葉を借りるなら、油断大敵ということだ」

価値があるとは？ 人の心や魂に価値があるのはオスカーにも分かっていた。しかし、基本法則を守るとはどういうことなのか、守っていない魔法使いはどうなるというのか。

「確かに私は厳しい口調で守れと言ったが、もつと希望的な話をして

もいい。この法則はできてから何年もたつが常に守られてきた。そうでなければ闇の魔法使いが魔法界を支配しているはずだからだ。現実には常に法則は守られ、闇の魔法使いは打ち破られている。であるから、君たちが守れるのも当然のことであるはずなのだ」

だから普通に生きると言う事なのか？ オスカーはさつきから頭の中が疑問で一杯だった。確かに闇の魔法使いは打ち破られてきたかもしれない。けれどそれは魔法基本法則が守られてきたためだと誰が証明できると言うのか？ 当時も今も杖すら持たないだろうハリ・ポッターに聞けば教えてくれると言うのか？ そもそも守ってきた人は悲惨な目に遭ってないと言うのか？ エストやレアの両親は？ クラーナの姉は？ 彼女は？ オスカーには分からなかった。「さて、では本来の闇の魔術に対する防衛術の授業に戻る。君たちが今学期の終わりには魔法基本法則を守った上で、私の教える全ての項目を修めることを期待している」

その後は延々と通常の授業、攻撃呪文として考えられるあらゆる呪文の反対呪文についての講義が始まったが、オスカーはほとんど聞いていなかった。エストがオスカーの手をとって教室から連れ出すまで、ずっと頭の中で考えていたからだだった。

自分は果たしてその基本法則を守れてきたのだろうか？

エストに手を引かれて教室からでた後も、オスカーは結局うわの空だった。何度かエストに何か言われても生返事で、エストの後を歩いて行つた。次の授業は一コマ空いてから魔法薬学のはずだった。

「オスカー、ねえ？ 聞いているの？」

「ああ、なんだって？」

気づくと少し怒った顔のエストが目の前について、やっとオスカーは戻ってきた気がしたのだった。

「だから、なんであの時すぐに服従の呪文って思いついたの？」

「スクリームジョール先生に聞かれた時か？」

「それ以外に何があるの？」

やはりエストは怒っている様だった。オスカーは結構な間、エスト

に生返事をしたり、おぎなりの対応を取っていたようだった。

「確か誰かから聞いたんだ」

「誰か？ キングズリー？ アーサー叔父さん？ クラーナの叔父さん？」

「えつと…… その三人じゃなくて……」

オスカーはすぐに出てこなかった。確かに誰かと服従の呪文の話をした際に、魔法省にとって一番脅威な魔法こそが服従の呪文だと聞いたはずだったのだ。

「なんですか？ 呼びましたか？」

「魔法薬学まで時間があるね」

オスカーとエストがいる中庭にクラーナとチャリーがやってきたようだった。グリフィンドルとスリザリンは魔法薬学の授業を一緒に受けていたので、その日の時間割が近いモノになるのは当然だった。

「クラーナの名前は出したけど、クラーナを呼んだわけじゃないの」

「なんかご立腹ですね、デートを邪魔しちゃいましたか？」

「クラーナまでトンクスに似てきたの」

「それは無いでしょう。怒りますよ」

オスカーはやつと思いだした。魔法省で出会ったリーダー的な人物がそれを言っていたのだ。

「クラウチ、クラウチって言う魔法省の偉い人が言ってたんだ。エストと医務室で話した時も名前が引っかけたってただけど、あの時はそれどころじゃ無かったし……」

「クラウチ？ バートミウス・クラウチ、バートイ・クラウチですか？」

「魔法法執行部の元部長の？」

「僕もパパからその人のこと聞いたことがあるよ、凄いエリートで完璧な人だって」

オスカーはエストに回答したつもりだったが、良く分からない方向に話題が飛んでいる様だった。

「エストが知ってるクラウチさんは、クイディッチをやりながらNEWT試験で十二ふくろうを取った人なの、あれ？ NEWT試験なの

に十二ふくろううっておかしいかも」

「なんですかそれは…… 超人じゃないですか」

「そもそもなんの話なんだい？」

バーテミス・クラウチなる人物は、学生時代からよほどの怪物の様だった。やはり、魔法法執行部とはよほどの人物でないと所属できないらしい。

「俺が闇の魔術に対する防衛術で、魔法省に打撃を与えた魔法は何かって聞かれて、服従の呪文って答えたんだ。で、エストがなんで知ってたの？ って聞いたんだよ」

「ああ、スクリームジョール先生の授業を受けたんですか」

クラリーナは何か納得しているようだった。

「でも、オスカーがクラウチさんに会ったことがあるんだね？ キングズリーと魔法省に行ったの？」

「確かに、僕も何度かパパについて行ったことあるけど、会ったことないや」

オスカーは少し答えに詰まった。オスカーがクラウチに会ったのはオスカー自身の尋問の時だけだったからだ。そもそもオスカーの家に踏み込んできた人間こそ、バーティ・クラウチその人だった。オスカーはそのイメージが強すぎて、その人が他に何を言っていたのかを忘れていたのだった。

「まあ私も会ったことがありますし、とんでもない人ですよ。あの人は次の魔法大臣間違いなしって言われてましたし、実質的にバグノルド前大臣に代わって魔法省を指揮して、闇の帝王と戦っていた人物ですから」

「えっ!? そんなに凄い人なの？」

「そうだよね、パパや近くに住んでるデイゴリーさんも、クラウチさんに睨まれたら魔法省では終わりだつて言ってたしね」

やはり、聞けば聞くほどとんでもない人物のようだった。しかし、オスカーはその人物と同じ名前を新聞で何度も読んだことがあった。父親の顔や名前と一緒に新聞に載っていたはずだった。

「じゃあ昔新聞に載ってた死喰い人って、あのクラウチさんの息子な

のか？ やっぱり？」

「そうですね、クラウチは魔法界でも指折りの名家ですけど、有名な死喰い人のバーティ・クラウチは魔法法執行部のバーティ・クラウチの息子です」

「えっ？ えっ？ 何がなんだか分かんないの、じゃあスリザリンの超人はどっちなの？」

「さあ？ 年代で考えればいいんじゃないですか？」

「クイディッツ優勝杯には僕らの七年か十年くらい前にクラウチって名前があつたと思うよ」

つまり、エストの言うクラウチさんとは死喰い人の方の可能性が高い様だった。

「まあ結局、息子の方はアズカバンに収監されてあつという間に亡くなり、父親の方はそのスキャンダルで魔法法執行部は首になり、傍流の部署に島流しになったはずですよ」

「ええっ…… エストもちっちゃいころちよつと新聞読んでたけど全然知らなかったの……」

「僕も知らなかったな、パパはあんまり職場のそういう話をしないし」
オスカーはまた考えていた。さっきのスクリームジョール先生の話だ。この二人のバーティ・クラウチなる人物は魔法基本法則を守れていなかったのだろうか？ 二人の周りの人も？ 二人共、魔法の才能という面ではこれ以上無い人物の様に聞こえると言うのにだ。

「まあオスカーはエストがそう言うふうにならないように気を付けた方がいいんじゃないですか？ スリザリンでクイディッツ選手で主席は確定でしょう？ まんまじゃないですか」

「そうよ、オスカーにもしもの事があつたら、エストがダークサイドに落ちて、しゅこー、しゅこーって言うマスクを着けて現れて、クラーナとバトルすることになるわ」

「何を言ってるのか全然分らないんだが」

突然現れたトンクスはやっぱり何を言っているのか、さっぱりオスカーには分からなかった。スクリームジョール先生の言っていたこと以上に分からなかった。

「オスカー、あんたもマグル学とってるんだからそれくらい分かりなさいよ。マグルに変装できないわよ、特にアメリカとかでは」

「オスカーがマグルに変装ってなんかすごく違和感があるね」

「マグルの騎士の役をやってたのに…… 確かに考えるとなんかおかしいかも」

「うーん…… 確かに似合わないですね、甲冑ならともかく、マグルの服とか着たり、マグルが使ってる良くわからない機械とかを使ってる姿が思い浮かばないです」

オスカーは皆の自分のイメージがいったいどうなっているのか、運が無さそうと言われた時と同じくらい気になった。

「みんなはスクリームジョール先生の闇の魔術に対する防衛術は受けたの？」

「ええ、受けましたよ」

「うん、多分スリザリンが最後のはずなの」

スクリームジョール先生はどのクラスでもあの内容を話したり、ふくろうで実演したのだろうか？ オスカーは他のみんながどう思ったのかが気になった。というのも、みんなと喋って、やっと他の人の事を気にする余裕ができてきた気がしたのだった。

「じゃああの最初の脅しみたいなのをみんな受けたのね？ なんかふくろうが可哀想だったわ」

「でもあれは凄くためになることを言っているはずですよ」

「そうだよね、なんかもつと直接的って言うか、実務的なことをする先生だと思ってたから、ああいう心構えみたいなことを言うのは意外だったかな」

みんなはやっぱり自分ほどあの内容を重く受け止めていないのだろうか？ オスカーはみんなの顔を順番に見てみて、余り真剣な顔ではないのを確認した。クラリーナが自分を見ていたので一瞬目が合った。

「守護霊の呪文の時のクラリーナと似たことを言ってたよね」

「まあ私もアラスターおじさんに言われたことを言っただけですけどね」

「そうなの？ でも良く分からないと思ったわ。だって普通の事しか言って無いじゃないの、あんなふくろうを血まみれにして言う必要あつたのかしら？」

「ふくろうが可哀想なのは僕も思ったけど……」

トunksにとつては普通の事だったのか？ オスカーは結局、まだ良く分かっていなかった。スクリームジョール先生の言いたいことがだ。

「普通って何が普通なんだ？」

「へ？ だって、心とかそう言うのを大事にしましょうってことなんじゃないの？ 相手とか自分とか、そんなのみんなできてるでしょ？」

「それを意識してやれてるって言うてるんですよ、それに追い詰められた時にそれができるかってことですよ」

オスカーにはトunksの言っていることも、クラーナの言っていることも両方正解だと思えた。

「みんながそう言う状況に追い詰められないようにするのがスクリームジョール先生の仕事じゃないの？ 闇祓いってそういう仕事だと私は思ってたんだけど」

「そりやそうでしょうけど、みんながそういう心構えを持つのはいいことでしょう？」

「スクリームジョール先生は、今は先生として来てるからああやって言うのは正解なのかも」

先生だからああいったことを言ったのか？ しかし、オスカーにスクリームジョール先生が闇祓いとしての経験からあのようなことを言っているのではないかと思わざるを得なかった。

「僕はそんなに深く考えなくてもいいと思うんだけどね、だってそれこそ魔法使いとしてちゃんとやってればいいって言ってたし、単に最初だから気合を入れただけだと思うけど」

オスカーはそのちゃんとした魔法使いだという自信が無かった。

「ちゃんとした魔法使いって、みんなそうなのか？」

「少なくともオスカーは違うわね、ちゃんとした魔法使いは学校の柵

を焼き切ったりしないわ」

「そうなの、一人で何も言わずにどっか行ったりしないの」

「そうですね、違う寮の寢室に行つて誰かを押し倒したりしないです」

トunksが無言で呪文をクラーナに放つたが、クラーナは杖を一振りしただけでそれを逸らした。段々と二人の戦いは高度になる様だった。

「まあこう言われてる間はオスカーは大丈夫だよ」

「まあそうかもな」

また半笑いになっているチャーリーを横目で見ながら、オスカーは闇の魔術に対する防衛術での緊張がすっかりほぐれていることに気づいた。

決闘トーナメント

魔法生物飼育学は魔法薬学以外ではほとんどないグリフィンドルとスリザリンの合同での授業だった。今日の授業はニーズルと言う、ほとんど猫の様な魔法生物についてだった。

「ニーズルは怪しい人物とか、嫌な人物を見分けることができるんだよ」

「へえ、じゃあトunksとかスネイプには当然噛みついてくれるんでしょうね、魔法生物飼育学がハツフルパフと一緒にじゃなくて残念です」

「あんまりトunksと一緒に危ない動物の授業は受けたくないの」

相変わらず勝手に解説し始めるチャーリーの声を横耳に挟みながら、オスカーはケトルバーン先生の助手をしているハグリッドの助手という、下請けの下請けみたいな仕事をしていた。

「よし、よし、オスカー、そこに木を下ろしちよくれ」

ハグリッドの言葉に従って、魔法で浮かせた木をオスカーは下ろした。これでやっとニーズルの繁殖用の小屋ができるらしかった。

ハグリッドはニーズルを四頭ほど、出来上がった小屋の中に放った。オスカーにはやつぱり猫と何が違うのかよく分からなかった。

「ありがたいな、オスカー。一匹ニーズルを持っていくか？」

「いや、多分飼えないしいいよ」

オスカーは生き物を自分が飼えるとは思えなかったし、自分に猫の様なこの動物が似合いそうには無いのは確かだと思っていた。そもそもさつきケトルバーン先生がニーズルを飼うには魔法省で許可が必要だと言っていたのも覚えていた。

「そうか？ ニーズルは頭がええから、お前さんが道に迷った時は頼りになるぞ？ それにお前さんなら、動物に嫌われることもねえだろう」

何故かハグリッドはオスカーにニーズルを与えたい様だった。オスカーはそんなに自分が道に迷いそうに見えるのかと考え始めてしまいそうだった。

「いやほんとに大丈夫だって」

「そうか…… まあお前さんなら、道に迷ってもどうにかなるだろうな」

ハグリッドは何故かオスカーの方ではなくて、未だに何故かトランクと魔法生物飼学は受けたくないと言う話を続けている三人の方を見ていた。三人は話に夢中でオスカーとハグリッドの方を見ていなかったし、他の生徒達は向こう側でケトルバーン先生がなぜかニフラーと大格闘しているのを実況している様だった。

「あー、オスカーは…… あれだ、ほれ、誰と組むんだ？」

「組む？」

ハグリッドが何故か聞きにくそうにオスカーに聞いてくるのに加えて、組むと言う良く分からない単語が出たため、オスカーは困惑しざるを得なかった。ハグリッドはまだオスカーの方を見ずに三人の方を見ながら喋っていた。

「お前さんは組む相手が沢山おるだろうが…… できればレアと組んでやってくれんか？ あの子はちよいと元気になったが、両親がおったころは比べものにならないくらい元気だったし、ちよいと自信をつけてやればいいと思うとる」

「レアと？ だからハグリッド、組むってなんなんだ？」

レアがもつと元気だった？ 確かに時々、感情を爆発させそうになるレアを見ると、もともとの性格はもつと明るかったり、活発だったりのりしたのかもしれないと思うところはあったが、やっぱり組むというハグリッドの言葉がオスカーには分からなかった。

オスカーがもう一度質問したことで、ハグリッドはハツとした顔になった。

「おお、ちよいと早い話だったかもしれん。今のは聞かなかったことに…… いや、やっぱり今の話は覚えといってくれ、すぐわかるだろうから」

「すぐわかる？」

ハグリッドはそう言うなり、ケトルバーン先生の所へニーズルの小屋が完成したことを言いに行ってしまった。授業の時間はそろそろ

終わりだったし、ハグリッドがケトルバーン先生とニフラーの戦いを仲裁しているのを見ると、もう授業は終わりそうだった。

「オスカー、ハグリッドの手伝いは終わったんですか？」

「終わったみたいだな、ケトルバーン先生を救出したら授業も終わりだと思う」

クラーナだけが隣まで来ていた。チャーリーとエストはどこから抜け出したのか、小屋にいたはずのニーズルの一匹を杖で捕まえていた。またチャーリーのうんちくが始まっているのが口の動きだけでオスカーには分かった。

「オスカーもこの後、決闘クラブに行きますよね？」

「行くと思うけど……ただ、夕方にならなかつと話があるからってダンブルドア先生に呼ばれてるから、あんまり長くなると途中で帰らないとダメかもな」

この授業の後には決闘クラブの説明が行われる予定だった。オスカーもエストに言われて行くつもりだったが、その後にはダンブルドア先生との予定が入っていた。クラーナはオスカーの話を聞いて、少しだけ眉を潜めた。

「ダンブルドア先生がですか？ オスカー一人だけを？」

「ああ、多分そうだと思うけど……」

オスカーは少し迷った。夏休みに送った手紙の内容はダンブルドア先生とキングズリーしか知らないはずだったし、他の誰にも話してはいなかった。それにオスカーは誰かに心配されるのは嫌だったので、何をダンブルドア先生に聞いたのかを喋るつもりは余りなかった。

しかし、クラーナはオスカーの周りの同年代の中で唯一、オスカー自身の過去に何があったのかを知っているはずだったし、オスカーが何かどうしようも無くなった時に聞く相手として、クラーナが一番頼りになると思っているのは確かだった。

「ふーん、何か予想はついているんですか？ ダンブルドア先生との話の」

「話の予想……？」

オスカーは全くダンブルドア先生がどんな話をするのかの予想はついていなかった。はつきり言って、自分の頭で思いだそうとする以外の解決策が浮かばなかったのでダンブルドア先生に相談したのだ。

「全然分らないな」

「なんですかそれ？ 何か怪しいですね、ダンブルドア先生ですから意味の無いことはしらないと思いますけど。もうファッジを爆破したからって退学になるとは思えないですし……」

オスカーがほとんど何も言っていないのに真剣に考え始めるクラナを見て、オスカーはダンブルドア先生に何を相談したのかをクラナに言うのをやめた。まだどうにもならないわけでは無かったし、問題に真正面から向き合うだろうクラナに言えば、助けてくれると思っていたが、オスカーは目の前のクラナをそんなに心配させたくは無かったのだった。

あごに手をやって、真剣に考えているクラナをオスカーが見ていると、ケトルバーン先生とハグリッドが生徒達を呼び集める声が聞こえた。

「まあとりあえず、決闘クラブに行きましょう。トンクスを今度こそ合法的にボコボコにしてやりますよ」

「エピスキーの準備はしとく」

もし決闘クラブが今年は毎週の様に行われるのなら、オスカーは自分分はマダム・ポンフリーの手伝いができるくらい治癒呪文が上手くなってしまうだろうと考えながら、生徒達が集まる方へ向かった。

決闘クラブは以前、トンクス先生とスネイプ先生が開いた時と同様に大広間で行われる予定だった。オスカー達は連れ立って大広間へと入ったが、先に入っていた生徒達と同様に昼食の時とは違う大広間の様子に目を見張った。

一体何をどうやって短時間で用意したのかは分からなかったが、大広間には岩肌が露出した山の一斜面、木々が生い茂る森、ホグズミードに似た街並み、図書館……といった場所が再現されている様だったのだ。

「すごいねこれ、変身術?」

「うーん…… 多分変身術だけど、大広間に呪文をかけてるわけじゃなくて、検出不可能拡大呪文を使った何かを持ってきて大広間に置いてるのかな?」

理屈はオスカーには分からなかったが、この色んな場所の再現が何を目的にしているのかは推測できた。

「決闘場じゃなくて、色んな場所での決闘をさせるのか?」

「そうみたいです。まあ魔法使いが何も無いただっぴろい場所に立って、二人でお辞儀して戦うなんて普通はあり得ないですから」

「へえ、場所が違うと色んな戦い方がありそうね。オスカー、邪魔だからって燃やしちゃダメよ」

ちよつと自分が何かをするとこれだと、オスカーは思った。少なくとも決闘相手が見つからないからと言って、悪霊の火を振りまく様になれば、それこそ死喰い人以上に闇の魔法使いになってしまうはずだった。

「トングスの発想の方がヤバイだろ。チャーリー並みになってきたぞ」

「それはいくら何でも言いすぎだわ。謝るなら今の内よ」

「トングスが色んな意味で危険なのは一年生の頃から分かってることですね」

広間の入り口で生徒達が押し合い圧し合いをしながらガヤガヤと騒いでいると、スクリームジョール先生が少し高くなっている岩肌部分に現れた。隣には今回もスネイプ先生が立っていたし、今回はなんと他の各寮の寮監たちもその後ろにいる様だった。

チャーリーとエストもオスカーの傍まで寄ってきた。生徒達の視線は先生の方を向いていたが、下級生達はずま先立ちをしても見えない状況だった。

「今回のこの企画を始めるに当たって、説明を始める。最初にダンブルドア校長からこの企画を決闘トーナメントと呼ぶと連絡があった。そのため以後はそう呼称する。次にこの決闘トーナメントの意義だが、防衛術の実践を目的として、その実践力の向上を行う。実際の演

習と優秀な例の見学を同時に行うことでそれを可能にする」

事務的な口調だったが、生徒達のざわざわは少しボリユームが小さくなり、その説明を興味津々で聞いているのが音だけでも分かる。

「では便宜的にはその実践を競技と呼ぶが、その競技は多種のフィールドにおける二対二の決闘とし、先にチーム二人の杖が使用不能になった場合及び、失神した方が敗北とする」

エストの言った通りに二人ペアでの決闘の様だった。フィールドといい、人数といい、どうも生徒達の考えていた決闘とは違っていたようで、ざわざわはどんどん大きくなっていくようだった。

「ね、言った通りでしょ？ オスカー」

エストがオスカーの隣でささやいた。そしてオスカーはさっきのハグリッドが言っていたのが恐らくこれだろうと考えた。確かにこのトーナメントで活躍できればもっとレアにも自信がつくかもしれない。なかった。

「そして、年齢制限は今回設けない。もちろん上級生の方が有利ではある。しかし実際の状況では術者同士の技量が異なることが当たり前であるし、自分の力量以上の相手の方が練習になるだろう」

つまり、一年生ごと、四年生ごとの様な区分は無いようだった。オスカーは七年生や六年生と戦うのは相当難しいと考えた。上級生なら無言呪文さえ容易に使ってくるはずだったからだ。

「流石にビルと決闘するのは厳しいことになりそうですね……」

「やっぱりビルって決闘が強いわけ？ ハッフルパフにも聞こえてくるくらいだし」

「グリフィンドールの上級生だと抜けてますよ、主席は多分確定だと思いますし」

オスカーもビルの決闘の腕の噂は聞いたことがあった。いつもやたらと顔が映えるのに加えて、決闘の腕まであるので女の子の黄色い声が絶えないという噂がスリザリンにすら聞こえてきていた。

「さらに今回の決闘トーナメントの優勝者の所属寮には一人につき、百五十点の得点が与えられる。準優勝では七十点、三位には五十点だ」

単純に二人いれば三百点の得点が入ると言う事なのだろうか？

これではもはやクイディッチの試合があっても、その寮に学期末の寮杯は確定してしまうと簡単に予想できた。生徒達のざわざわがさらに大きくなった。

「そして重要な条件を付け加える。登録単位である一チームであるが、同じ寮同士でのエントリーは禁止する。必ず違う寮同士の生徒でのチーム構成を求める。学年の違いは禁止しないが、必ずこの違う寮というルールは順守すること。この競技は闇の魔術に対する防衛術の講義の一部である以上、その最も重要な要素である協力性を重視するため、このルールを設定する」

生徒達のざわざわはもはやざわざわでは無かった。オスカーの周りの生徒達が明らかに困惑している顔のようだった。ホグワーツでは基本的に寮同士は競い合う関係にあるのだから、その困惑は当然のモノではあった。

オスカーは隣のエストの顔が止まっているのが見えた。どうも今回も、オスカーはエストと一緒に決闘と言った荒事には挑戦できそうになかった。

「そして、エントリーに関してさらに告知する。トーナメント制であつてもこれだけの量の人数では時間がかかりすぎる。よつて今回と二週間後の二回目の時間を使って、エントリー者をしぼる。具体的にはエントリー希望者は一対一で決闘してもらい、先に三勝したものがエントリー可能だ。敗北回数は数えない。ただし、今回と次回の二回の間には三勝しなければならぬし、決闘相手はこちらの魔法で決定する」

もやは生徒達は口々に話合っていた。生徒達がしている顔は様々で、不安そうな下級生、もう杖を取り出しているグリフィンドール生、真剣にスクリームジョール先生の方を見ている集団、何か耳元でささやきあっているスリザリン生など、皆、この短時間で色んなことを考えているようだった。

「へえ面白そうじゃないですか、とりあえず三勝しないとエントリーすらできないってことなんですね」

「そうだね、とりあえず勝たないとペアを決めることもできなさそうだね」

グリフィンドールの二人は割と乗り気なようだった。今回はスリザリン生の集団性はあまり役に立たなさそうで、勝気なグリフィンドール生の方が向いてそうであった。

「それではエントリー希望者は大広間にある白い線より前にでることだ、前にでた時点で出場するとみなす。また、ペアの決定については今回の結果を受けて、一か月後の三回目の最初までに取り決めること」と

スクリームジョール先生が杖を振ると、さっきまでであった色んなフィールドが消えて、いつもの大広間と、いくつものオスカーの腰くらいまではありそうな高さの決闘用のステージが現れた。スクリームジョール先生の言った、白い線も大広間の真ん中あたりに現れた。

生徒達はざわわしながらも何人かが白い線に向かって進み始めた。当たり前ではあったが、五年生以上の生徒が多いようだった。

「私たちも行きましょうよ、一年生でやったエストを倒すための修行がようやく生きてくるわね」

「まあ四年生相手なら勝てるんじゃないですかね？」

「七年生や六年生相手だと難しいと思うんだけどなあ」

他のみんなが喋りながら白い線に向かっていているのに、エストはだんまりを決め込んで歩いていった。オスカーはこれが怒っているときの様子だとわかっていった。少なくともこの状態のエストと決闘するのだけは避けたいと感じざるを得なかった。

やがて、エントリー希望者の生徒達はだいたい線を越えたようだった。スリザリン生のテーブル全体の人の数より少ないくらいだったので、二百人くらいではないかとオスカーは見積もった。

これ以上、白い線を越える生徒がいなのを見て、スクリームジョール先生がまた解説を始めた。

「それではエントリー希望者を締め切る。名前を呼ばれた者は各決闘ステージへ向かうこと、それぞれのステージでは先生方がそれぞれ一人ついていただく。またエントリー希望者で途中で棄権するものは

その都度、そこにおられるフィルチさんの名簿に杖を向けに来るよう
に。ではエントリー希望者でないものも、以後は線を越えて良い」

ステージは全部で十個ほどあるようだったので、生徒達全員が決闘
するのは二十回ほど行わなければならない様だった。午後全ての時
間を使うとは言え、二回で時間が足りるのか怪しいとオスカーは思っ
た。それにオスカーは夕方にはダンブルドア先生との約束があった。
「では、一回目の選考を開始する……」

ステージを担当する先生の名前と、決闘する生徒の名前が呼ばれて
いた。ほとんどのステージが呼ばれ終わって、最後のステージ、マク
ゴナガル先生のいるステージだけが残った。大広間の真ん中で一番
目立つステージだった。それに、オスカー達からはまだ誰も呼ばれて
いなかった。

「マクゴナガル先生が担当されるステージは…… ウィリアム・
ウィーズリー、オスカー・ドロホフの二人だ」

グリフィンドールとスリザリンの集団から声があがった様だった。
オスカーはどうもついていないと感じた。エストの機嫌は悪いし、
チャーリーの兄でホグワーツでも決闘の腕で知られるビルが相手と
は完全にババを引いたと思ったからだ。それにビルは自分と違って
人気者だったので、比べられるのも嫌だったのだ。

「面白いカードですね」

「ビルとオスカーが医務室送りになって出場できなくなれば、ハッフ
ルパフの勝率が上がるわ。オスカー、ビルと相打ちが一番よ」

「ママに言ったら学校に苦情のふくろうを送ってきそうだね」
「応援してるの」

オスカーが人込みから前に出る途中で、スリザリン生の何人かから
肩を叩かれた。中にはイケメンをぶっ飛ばせみたいなのを言う生
徒もいた。最後にクイディッチチームのキャプテンがオスカーの背
中を思いつきり叩いたので、オスカーは人込みから出たとたんに倒れ
そうになった。

ビルはすでにステージの前について、涼しげな顔をしていた。決闘前
だと言うのに、特に緊張しているようには見えなかった。

「お互いついてないな、クラーナが嘘を言うとは思えないから、オスカーの決闘の腕は相当なんだろう?」

「生徒と決闘したのはエストくらいだから、自分がどれくらいなのかは分からないんだけど」

「エストの相手をできる相手を相手するなんて、ついてないと思うだろう?」

ビルはオスカーにそう言ってウィンクしてから、決闘を始める定位置についた。オスカーも同様に動いた。マクゴナガル先生が杖を振って、保護用の青い泡がステージを包んだ。他のステージも同じ青い泡に包まれ始めていた。

「それでは監督の先生の合図で始めること、監督の先生が終了を告げれば速やかにやめること、先生の指示を無視した場合。即座に失格とみなす」

さつきオスカーがビルに言ったことは本当だった。オスカーは去年は時々、チャーリーやレアの練習は手伝ったが、ちゃんとした決闘をしたことは一年生のエストが最後だったし、それ以外では髪飾りとキャビネット棚の一件があるだけだったので、生徒と決闘したことはほとんど無かったのだ。

マクゴナガル先生が相変わらず厳格な顔でビルとオスカーを見た。スネイプ先生と違って、マクゴナガル先生がこういう場所でえこひいきをするとオスカーには考えられなかった。もちろんクイディッチなら別かもしれないが。

「ウィーズリー、ドロホフ、準備はいいですか? 今回は実際の決闘をイメージしているので、お辞儀はありません。合図をしたら始めるように」

オスカーは杖を上げて、ビルに向かって半身になった。ビルの力量が分からない以上、これまで戦った最強の相手をイメージしなければならなかった。

「では、始め!!」

ノータイムでビルが無言で杖を振り、赤い光線が発せられた。オスカーは体をずらしてそれを躲した。杖の方向から光線の位置を見て、

呪文を使わずに躲せるものは躲せ、一年生にクラーナと練習した内容は、ヴォルデモートやマルフォイとの戦いでそのままオスカーの体に染みついていった。

無言呪文であっても、杖を振った瞬間は隙が生まれる。その瞬間を逃さずに、自分のリズムで相手を崩さないといけない、オスカーは自然とその動きができることを実感できていた。負けてもリスクの無い戦いは久しぶりで、オスカーは何か体が軽い気がした。

オスカーが杖を振るとビルの足元がスポンジ状にふわふわになり、ビルの態勢が崩れた。直接攻撃呪文を発するのではなく、周りの状況を変化させる、これはヴォルデモートがオスカー達に何度もしかけてきた技だった。相手の心が読めない以上、相手が呪文を防げない状況をつくりださないといけないのだ。オスカーはそのメリツトを理解していた。

ビルに対して距離を保ちながら、武装解除呪文をオスカーは連発したが、盾の呪文でビルに全て弾かれ、ビルは態勢を立て直した。

「凄いな、グリフィンドールの決闘クラブに今度入らないか？ おつと…… マクゴナガル先生、失礼」

決闘クラブは許可されているモノは無かったはずなので、ビルの言うものは隠れてやっているモノのはずだった。マクゴナガル先生の冷たい眼がビルに向かっていった。

ビルが杖を振ると同時にオスカーも杖を振っていた。ビルの杖からはひもが、オスカーの杖からは緑色の炎がそれぞれ出ていた。呪文がぶつかり、ひもが黒く燃え始めたが、またビルが杖を振るとそれは矢に変わった。

「デプリモ!! 沈め!!」

火とひもへのビルの変身術と同時にオスカーは叫んだ。ビルの足元のステージが大きく崩れて、完全に形を保たなくなった。無言呪文は戦闘では有効だったが、発音した方が威力や発動率が上がるのは事実だった。

ビルがまた態勢を崩している間に、オスカーはフリペンドで矢を泡の外へと弾き飛ばした。オスカーは確信した、これは勝てる勝負だ

と。

オスカーは崩れて低い位置にいるビルに向かって、失神光線と武装解除呪文を撃ち続けた。呪文は高所から撃つべし、これもまた、一年生の時にクラーナに暗記させられそうなほど言われた事だった。上から撃った方が、相手の体を狙いやすく、逆は狙いにくいのだ。

ビルは呪文を避けるか弾きながら崩れた場所から動こうとした、オスカーは相手に杖を振る間を与えなかった。崩れて斜めの部分にビルが差し掛かった時点で、オスカーは杖をステージの残骸に振って、斜めの部分を滑らかに変えた。

決定的だった。呪文を撃ちこまれている最中に足を取られれば避けることは困難だった。紅い光線がビルの右手に当たって、杖がオスカーの方へ飛んできた。

「そこまでです。この決闘はドロホフの勝ちです」

マクゴナガル先生がそう言うと、スリザリン生から歓声が上がった様だった。ビルが崩れたステージから上がって、オスカーに手を差し出した。オスカーも手を出して握手した。

「ほんとに凄いな。今のままでも、呪い破りの実技試験に受かるんじゃないかな、オスカーなら」

「いや、最初の呪文を避けたのが運が良かったんだ」

「そんなことないよ、なんなら今回のこのトーナメント、オスカーに賭けてもいいし…… そうだ、この後三勝できたら、オスカーにペアを組むように申し込みにいこうかな」

オスカーはビルの杖を返して、二人でみんながいる位置に歩いて行った。ビルはいつもオスカーの周りにいる面子を一通り眺めた。

「いや、やっぱりさっきのは忘れてくれ。勝てない勝負はするわけには行かないな。僕はグリフィンドールだけど、ちよつと分が悪すぎるね、勇気がおきないよ」

そう言って、ビルはまたオスカーにウィンクして、グリフィンドールの六年生らしき集団の所へ戻っていった。オスカーは戻る途中でスリザリン生に肩をさつきより強く叩かれた。良くグリフィンドールをぶちのめしたのだ、イケメンが負けて気分がいいのだと色々と言

われた。

「やるじゃないの、なんかグリフィンドールの生徒が賭けをしてるらしいけど、オスカーに賭けようかしら」

「自分の寮に賭けろよ」

「そうなの」

「うーん、エストもいますしスリザリンの点数が上がりすぎるのは良くないですね」

「クラーナに稼いでもらわないと、ビルが出場できなくなったら大変だよこれ」

ちよつとエストの機嫌が直っている様だったので、オスカーは割と一安心していた。それに、やはりマルフォイやヴォルデモートとの決闘は確かに自分の経験として、確かに感じることもできたのも大きかった。相手が誰なのかによるが、オスカーの感覚ではエストやクラーナと組めば、マルフォイやビル一人相手なら確実に勝てるのではないかと考えていた。

その後、オスカーとエストは先に三勝して勝ち越した。そもそもスクリムジヨール先生が呼ばないと決闘できないので、先にエントリーを決めるのはかなりの運がいる様にオスカーは感じていたが、他のみんなんも二勝していたし、意外なことにレアが出ているのも遠めから見えたのだった。

「やっぱり、ビルかクラーナと組むのが一番勝てる気がするの」

「まあそうだろうな、見た感じ下手な七年生よりよっぽど強い気がするし」

先に終わってステージを見回していても、グリフィンドールの二人の杖使いは抜けて見えた。オスカーはビルに勝てはしたが、障害物等の変身術を使いやすい状況で戦えば、一対一ではかなり厳しいのではないかと、その後の決闘を見て考えていた。

「あ、クラーナが勝ったの」

「トンクスとチャーリーもいけそうだな、この回でみんなエントリーできるんじゃないか」

クラーナはレイブンクロウの五年生を何もさせずに下して、スネイ

プ先生が嫌な顔をしているステージからこちらに向かってきていた。その後ろではトンクスとチャーリーもほとんど勝てそうな感じだった。どうも、無言呪文のスキルは大きい様だった。

「勝ちましたよ、とつととエントリーを決めちゃいましょう」

「そうなの、クラリーナ、エストと組まない?」

「えっ…… エストとですか?」

エストはクラリーナと組むことにしたようで、オスカーはちよつと手ごわすぎると考えた。はつきり言って、ほとんど勝てる気がしなかったのだ。グリフィンドールの賭けに参加できるのなら、オスカーは十ガリオンくらい二人のペアに賭けたい気分だった。

「だって、ビルかクラリーナと組むのが一番勝てそうだもん」

「エストはそんなに優勝を狙ってるんですか?」

オスカーにはどこかクラリーナが困っているように見えた。チラチラとオスカーの方へ視線を送ってきていたからだ。

「優勝だと百五十点だよ? クイディッチで優勝しても、こつちで一位を取れないと意味が無くなっちゃうの」

「そ、それはそうかもしれないですけど……」

ちよつとどもっているクラリーナにエストが畳みかけていた。出会った最初の頃のエストのテンションについていけないクラリーナの様だとオスカーは思った。

「ちよつと、私も勝ってきたわよ。あれ? エストはクラリーナと組むの?」

「なんかそうみたいだけどな」

トンクスも勝って帰ってきたようだった。一番奥のステージではチャーリーがちよつと勝っているのが見えた。全員これでエントリーできそうだった。エストとクラリーナはまだ何か話していた。

「ビルはまだ終わってないみたいだし、それに上級生と組むかもしれないし……」

「それはそうですけど…… その…… 私は……」

「へえ? 戦略的な妥協ってことかしら? じゃあオスカー、私と組みましようよ」

「ああだいいじよ……」

「トunksはダメです!!」

「トunksはダメなの!!」

オスカーとトunksはいきなり二人が入ってきたので驚いた。こんなに息の合っている二人を見たことはほとんど無かったのだ。

「な、何なのよ。二人で組むんじゃないの」

「トunksはダメなの!! また劇の時みたいな悪戯するに決まってるもん」

「そうですよ、どうせ私たちの顔に変身してまたなんかするじゃないですか!!」

トunksの信用はゼロどころかマイナスだった。確かにトunksの性格を考えるとまた変身して何かをやらかすのは考えられることだった。オスカーもそれには同意しざるを得なかった。この夏休み、それでかなりのダメージを受けていたのを忘れてはいなかったのだ。「しないわよ、ハツフルパフの点数が稼げるチャンスだし、だいたいそんなにオスカーがとられるのが嫌なら嫌って言えばいいじゃないの」「そうじゃなくてトunksが信用できないの」

「未だに週間魔女の件でふくろう便が届くんですよ、分かりますか? ウエールズの魔女なんていくら送ってくるなって書いても、毎回反吐がでそうな手紙を一週間に一回は送ってくるんですよ!! ふくろうを毎回変えて!! 前なんかふくろうじゃなくてフラミンゴが運んできましたよ!!」

オスカーとエストもピンク色の鳥がグリフィンドールのテーブルに向かっていているのを先週目撃したので、クラーナがウソを言っているわけではないと理解していた。

「私が一番信用できるってことを分かってないみたいね。だいたい私は二人みたいに杖も使わずに誰かさんの家でクリスマスに取っ組み合ったりしないわ」

「ベッドでスコージファイが必要な状況になったりしないの」

「コロポータスで扉閉めないと言が聞こえそうな状況になったりしません」

「何なのよ…… ハツフルパフのみんなの方が全く信用できないじゃないの……」

三人が大騒ぎして話にならなそうだったので、オスカーはチャリーが帰ってくるのを待って、ペアを組んだ方が問題が起きずに済む気がしていた。男友達の方が疲れな気がしたのだ。

「ほら、レア、今がチャンスよ」

「レイブンクローの点数を掴むチャンスでもあるわ」

「行っちゃいなさいよ」

「え、ええ……」

いつの間にかオスカーの後ろに青色のネクタイを付けた集団がいた。レアといつかホツグズ・ヘッドに行く前を見た、レイブンクローの集団だった。集団に押し出されて、レアが前に出てきていた。

「オ、オスカー先輩……」

「どうしたんだ？」

「レアは三勝したんです」

「レイブンクローでは一番早く」

「一度も負けてないんです」

レアが答える前に後ろの集団が答えている様だった。オスカーは割とレイブンクローのイメージが、もっと勉強最優先でギスギスしているイメージだったので、この集団は何か新鮮だった。

「凄いな、五年生とかでもまだ勝ててない人がほとんどなのに」

「ありがとうございます…… それで、その」

レアが横目でまだ騒いでいる三人を見た。トンクスがハツフルパフを呪おうとしている話や、どうやってフラミンゴやサンダーバードを止めるのかという良く分からない話をしているようだった。

「先輩はまだ誰とも組んでないんですか？」

「なんかあの三人は大騒ぎしてるし、ビルはやっぱやめたって言って戻ったから、まだ組んでないな、チャリーはケトルバーン先生となんか喋ってるみたいだし」

レアはオスカーが三勝したことをもう知っているようだった。やっぱりレアは横目で三人を申し訳なさそうに見ていた。

「じゃあ…… その、ボクと組んでもらえませんか？ 迷惑じやなかつたらですけど……」

レアがそう言うのと後ろのレイブンクローの集団がガッツポーズをしているようだった。オスカーは三人がうるさいのも、ハグリッドに頼まれたのもあつたし、それに夏休みにトunks先生に言われたことを憶えていた。先生が言っていた違う人云々は、組み分け帽子の言っていたことを考えればレイブンクローかハッフルパフの人間が当てはまっている気がしたのだ。

「大丈夫だ。俺もせつかく勝つたのに、一緒に出る人がいないとか なったら悲しいからな」

「ほんとに大丈夫ですか……？」

またレアは三人の方を見た。三人は今度はどうやったら、アンデスコンドルを大広間に入れないで済むかという訳の分からない話をしているようだった。

「大丈夫だろ」

「じゃ、じゃあよろしくお願いします」

「ああ、よろしく」

レアはそのまま、レイブンクローの集団に取り囲まれて帰っていった。オスカーは取りあえず意味の分からない事を言っている三人を止めることにした。

「だから、ヒップグリフかセストラルを使えばいいの」

「そんなのチャリーかハグリッドみたいな魔法生物バカしか仕付けられないでしょう」

「箒で捕まえればいいのよ」

「レアと組むことにしたから」

オスカーがそう言うのと三人全員の視線が集まった。

「ほらね、私で我慢しとけば良かったのよ。またレアポイントをオスカーが稼ぎまくるわよ」

「レアポイントってなんか別の意味になってない？」

「三勝する前に言っとくべきでした……」

三者三様の反応の様にオスカーには思えた。エストは何も考えて

無さそうな顔、トンクスはまたかという顔で、クラリーナはちよつと後悔した顔だった。ちよつとチャーリーもケトルバーン先生との話が終わってやってきた。

「三勝してきたよ？　なんか変な空気だね？」

「チャーリー、私と組みましようよ。なんかクラリーナとエストはレアに横からオスカーをかつさらわれたみたいだし」

「いいけど、じゃあ、エストとクラリーナが組んでるの？」

「そうみたいだな」

結局、エストとクラリーナのペアが結成されてしまった様だったの
で、オスカーは七年生や六年生に勝っても、優勝は難しいのではない
かと考えていた。

「ちよつと二人が色んな意味で強すぎて、逆に後悔してる気がするね」

「確かにな、声をかけにくいだろうし」

「オスカーあんたやっぱリアホなんじゃないの？」

オスカーは他の人に言われるのと、トンクスにアホと言われるので
は色んな意味で効果が違う気がした。

憂いの節

決闘トーナメントの一回目が終わって、オスカー達はそれぞれの寮の帰路につこうとしていた。すでにオスカーはダンブルドア先生の部屋に行くとエストには言っていたので、一人で寮に帰らずにそのまま校長室へ向かうつもりだった。

「あれ？ オスカーは地下じゃないの？」

「オスカーはなんかダンブルドア先生に呼ばれたらしいの」

城の上層階に寮があるグリフィンドルの二人と離れた後、オスカーは地下牢と厨房傍に寮のあるエストとトンクスとは別の道を行こうとしていた。

「ついにキャビネット棚を燃やしたことがばれて退学になるの？」

「ならないだろ、というかその話は組み分けの時の話からして、もうばれてるだろうしな」

「あの時ちよつとダンブルドア先生がこつち見てたもんね」

恐らく Hogwartz で何かをダンブルドア先生に秘密にして行うのは、ほぼ不可能ではないのかとオスカーは思っていた。それに、髪飾りの時のダンブルドア先生のイメーჯや皆が言うイメーჯから、オスカーの中でもダンブルドア先生という存在がどこか伝説的になっているのは確かだった。

「まあちよつと早いけど行ってくるよ」

「退学になったらパパに言っつてマグルの学校を紹介してあげるわ」

「縁起でもないの」

「じゃあまた」

そう言っつて、オスカーはダンブルドア先生の部屋へと向かい始めた。オスカーは良く考えると、ダンブルドア先生の部屋に一人で行くのは初めてだと気付いた。前回行つた時はクラリーナと一緒にだつたし、その前はクラリーナ、レア、マクゴナガル先生と一緒にだつたのだ。

いくつか仕掛け階段や通路を通つて、校長室に向かつていたが、どうも時間が余り過ぎている様に感じた。空き教室の時計を見ると、約束の時間へはまだ一時間ほどあるようだつた。これはちよつとつく

のが早すぎると考えていると、何か大きな物音が聞こえてきた。

「ミス・ファアレーイがお前の悪口を言っていたよう……」

「そんなことは言って無いわ」

「抜かしたよう…… とんでもないあばた面だつて」

オレンジ色の帽子が見えた。それに一年生らしき女の子に、ずんぐりした女の子のゴーストも一緒だった。

「だから言って無いってば!!」

「ウソ言っても駄目よ、みんなが私のことどう言ってるか知ってるもの」

「そうだ、可哀想なマートルにひどいことを言ってたじゃないか、聞いたぞ」

女子トイレの前の廊下で騒いでいるのはポルターガイストのピーブズ、ジエマ、それに…… オスカーはそのゴーストと喋ったことは無かったが、存在は知っていた。彼女は確か嘆きのマートルと言われているゴーストのはずだった。

「みんながどんな陰口を言ってるのか、知らないと思ってる？ 嘆き

のマートル、どブスのマートル、デブのマートル……」

「だから言っていないって言ってるでしょ!!」

「にきび面に涙が映えるよう……」

マートルの瞳からは涙が流れていて、困った顔のジエマに、酷薄な笑い声をあげるピーブズと、見るだけでオスカーは頭が痛くなってくる気がした。

「ピーブズ、ジエマ、何やってるんだ?」

オスカーが話しかけると、ピーブズの動きが完全に止まって、その眼だけがオスカーの周りを見回していた。どうも、エストがいらないかどうかを判断しているらしかった。

「ピーブズは他に用ができたので失礼します」

「え?」

ピーブズは血みどろ男爵やエストが出てくる前に退散したい様で、あつという間に廊下へと消えていった。ジエマがその様子を目を点にして見ていた。

「それで？ どうしたんだこれ？」

「えっと、私がトイレから出たところでピーブズに捕まって、そしたらそこにマートルもいて……」

ジエマが説明している間も、マートルは何か自分を蔑むことを呟きながら泣いていた。ちよつとオスカーにはどうしたらいいのか分からない状況だった。

「ええっと、マートルでいいの？」

「何よ…… あんた…… 知ってるわ、あんたはゴーストの間でも有名なもの。スリザリンのお姫様と一緒にいる男の子でしょ」

マートルは泣くのを止めて、オスカーの方を見てきた。そして何かを思いだすように、首を傾けた。

「あんた…… こんなに近くでみるのは初めてだったけど、凄く似てるわね。私の同級生に」

「同級生？」

今度のマートルは何か不思議な顔をしていた。オスカーはマートルがどれだけ昔のゴーストか知らなかったが、オスカーの先祖に似た人間でもいたというのだろうかと考えた。

「あなたの評判とは逆のスリザリンの男の子だった。マグル生まれを嫌ってて、穢れた血って何回か言われたのを覚えてるわ。まあオリブ・ホーンピーに眼鏡を笑われたことの方がむかついたけど」

「俺がそいつに似てるって言うの？」

「なんの話ですか？ オスカー先輩？」

マートルはまだ何か思いだす顔だった。オスカーとジエマのスリザリンのローブを見て、何かを思い出そうとしていた。それにオスカーはマートルはマグル生まれだという事実を初めて知った。

「あなたのゴーストでの評判は、どっちかというと、あの監督生に近い。あんたにそっくりな男の子がついて歩いてたイケメンの監督生。まああの人には色んな人がついて歩いてたの覚えてるけど」

「その監督生と俺に似てる奴の名前は？」

「オスカー先輩？ 何の話なんです？」

オスカーは嫌な想像しかできなかった。スリザリン生で自分に

そつくりな顔、マグルが嫌い、スリザリンの監督生について歩いていった……

「監督生はリドルで、男の子はドロホフだったわ」

「ドロホフ？ オスカー先輩の家族の人ですか？」

やはりオスカーの嫌な予感は的中した。つまり、目の前のマートルはオスカーの父親と同級生で、当時の監督生というのがヴォルデモート卿なのだ。

それにオスカーは何か嫌な気分だった。自分と同じ年頃の父親とヴォルデモート、それに目の前のマグル生まれの魔女だったマートル、繋がってはいないはずなのにどこかで色んなモノが繋がっている気がしたのだ。オスカーは自分がこういう気分になる時は大抵、信じられない様な何かで色んなモノが繋がっているとこれまでの経験から考えていた。

「マートルはなんでゴーストになったんだ？」

オスカーがそう聞くと、マートルの顔はこれまでの自信の無い顔ではなく、誇らしく、聞きたいことを聞いてくれたという顔だった。

「オオオオウ…… それは私が死んだときのことを聞いているの？ それとも戻ってきた理由？」

「両方だ」

「死んだときのこと？」

ジェマはオスカーの隣で少しビビっているようであったし、オスカーにはこの後、ダンブルドア先生との用事があったが、オスカーは周りの事を完全に忘れていた。マートルに話を聞くのはそれらよりも重要なことであると考えていたのだ。

「怖かったわ、さっき私とこの女の子がいたトイレだったのよ。オリブ・ホーンピーが眼鏡をからかったから、小部屋で泣いてたら、男の子の声が聞こえて…… それで文句いってやろうとしたら死んだのよ」

「死んだ？」

「どうやって？」

マートルはまるでウイゼンガモットの議長が裁判をするときの様

に、偉そうに座っている振りを空中でした。

「覚えてるのは、目玉が二つあっただけよ、それから体が金縛りみたいになって、ふっと浮いて、気付いたら、オリーブ・ホーンピーに取りついてやろうとして戻ってきたわ」

「目玉……？」

ジェマは疑問に思っているようだったが、オスカーはそれよりも他の事が気になっていた。ヴォルデモートが学生時代に彼女が死んだという事実だった。どうしてもオスカーにはヴォルデモートとマグルの女の子の死が繋がって見えた。

「ホーンピーってやつに取り憑くためにゴーストになったのか？」

「そうよ、あいつの人生を台無しにしてやりたかったし、それに死んだのに忘れられるなんて嫌だったわ」

「なんか後ろ向きな理由……」

オスカーには、どうしても、マートルの話が自分と繋がって見えた。スクリームジヨール先生のふくろうもそうだったが、色んなモノがまるで自分が考えてることと繋がっている様で、少し、気味が悪いくらいだった。

「そうか…… 話してくれてありがとう。マートルはほんとはなんて名前なんだ？」

「名前？」

「嘆きのマートルが本名じゃないだろ？」

隣のジェマはこれでもかという驚いた顔でオスカーを見ていたし、当人のマートルも何を言われているのか分からないといった顔だった。

「マートル…… マートル・ウオーレン」

「じゃあ俺はオスカー・ドロホフだ。マートルがさっき言った、ドロホフの息子だ」

オスカーが名乗っても、やっぱり信じられないという顔でマートルはオスカーの方を見ていた。

「あんた…… オスカーの噂って本当なのね、血みどろ男爵が喋るだけのことはあるわ」

「あの男爵は意外と余計なことを言うからな」

「えっ、鎖をガチャガチャするだけって思ってた」

「いったいゴーストの間でどんな噂が流れているのか、オスカーはちよつと想像したくもなかった。週間魔女の一件で、人の噂が独り歩きするのはちよつと恐ろしいモノだと感じていたからだ。」

「じゃあ、俺はダンブルドア先生に呼ばれてるから」

「オスカーだったら、私のトイレに招待してもいいわ」

「オスカー先輩って、もしかして見境ないんですか？」

ジェマが何か言っていたが、取りあえずオスカーは校長室へ向かうことにした。どうしても、さっきのヴォルデモートとマートルのつながりについてダンブルドア先生に聞きたかったのだ。マートルはトイレに戻ったようだったが、オスカーが足早に歩いてても、ジェマはついてきた。

「スリザリン寮に戻れないのか？」

「違います。ちよつと聞きたいことがあって……」

オスカーはジェマの質問に答えるために止まった。校長先生に聞きたいのは確かだったが、約束まではまだ時間があった。ジェマは時々、エストに授業について色々聞いている様だったし、オスカーはスリザリンの後輩に何かを聞かれたことが無かったので、相談に乗れるのなら、乗ってみたかったのだ。

「オスカー先輩は女の子が好きなんですか？」

「は？ えーと、そうだな、普通に女の子が好きだと思うけど」

「どんな女の子でもいいんですか？」

「いや、そんなことはないと思う」

オスカーはさっぱりジェマが何を言いたいのかわからなかった。

しかし、どうもジェマの視線は真剣だった。

「じゃあ、ムーディ先輩と付き合ってるんですか？」

「クラーナ？ いや違うと思うけど」

「ならトunks先輩ですか？」

「トunks？ それも違うんじゃないか」

ジェマの視線はもつと真剣になったようだった。

「あれですか？ 女の子とは平等に付き合う的な？ それともつかえひつかえですか？」

「そんなことは考えてないし、したこともないんだけど……」

「いったいジエマの視点からは自分がどう見えているのかオスカーは心配になってきた。」

「なら、大切にされた方がいいと思います。スリザリンは身内を大事にするじゃないですか」

「え？ ああそうだな」

「私がオスカー先輩だったら一択だと思います」

「一択？」

「それに、女性へのクリスマスプレゼントはちゃんと考えた方がいいと思います。特に今年は」

「わ、わかった」

ジエマがあんまり強い口調で言うので、オスカーは思わず頷いてしまった。それを見て、ジエマは満足したようだった。

「じゃあ失礼します」

「ああ、ピーブズにあつたら取りあえずエストの名前を出しとけばいいと思うぞ」

「分かりました。オスカー先輩もエスト先輩の名前を先に出すべきだと思いますけど」

そう言って、ジエマはスリザリン寮へと向かったようだった。オスカーはそれを見届けてから、校長室へと足を進めた。

「ワツフル」

校長室前のガーゴイル像にオスカーが合言葉を話すと、前回と同じく、うやうやしくガーゴイルは後ろに下がって、階段が現れた。

オスカーは合言葉が毎回お菓子の名前だったので、正直、お菓子の辞典か何か名前の分かるものがあれば、あてずっぽうでもあたるのではないかと登りながら考えていた。

校長室は相変わらず美しい円形の部屋であり、いつかダンブルドアに対してブーイングをしていた歴代の校長たちは寝ている様だった。入ってきた扉の脇には金色の止まり木があったが、そこには何もい

なかった。オスカーは校長室を見回したが、ダンブルドアはまだいないようで、部屋にあった奇妙な時計も、まだ二十分ほど約束までは時間があることを示していた。

オスカーが気になったのは、前回は置いていなかった、底の浅い、何か銀色のモヤが入っている、噴水を受ける為の水盆に似たものだった。その銀色のモヤはどこか、守護霊の呪文で出てくる、守護霊を構成する霧に似ているとオスカーは思った。

少し、その水盆に魅入られていたオスカーだったが、学期初めにやろうと思っていたことを思いだした。部屋に並んでいる棚を見回すと、黒い、つぎはぎだらけの三角帽子が目についた。その隣のガラスケースには、黒ずんで真つ二つになった、レイブンクロウの髪飾りが収められている。

オスカーはもう一度部屋を見回して、ダンブルドアがいないことや、校長たちが眠っているのを確認し、棚から帽子を取ってかぶった。帽子はいつかの時よりも小さく感じたが、それでも前が見えなくなっていた。

帽子の小さな声がオスカーにささやいた。

「君はオスカー・ドロホフだ。そして理由を知りたがっている」

オスカーは一瞬、思考が止まった。しかし、切り出した。

「そうだ。偉大になれるとか、守るべきものとか、いったい何なんだ？」

「わたしは君の中にあるものを見てにすぎない。そして君が欲しいと思うモノや、君に足りないモノ、君に必要なモノが手に入る寮に組み分けした」

オスカーは一年生の時に言われたことを一言一句違わずに覚えていた。組み分け帽子は守るべきものを手に入れるなら、グリフィンドールより偉大になれるとオスカーに言ったのだ。

「さよう……君はもちろんグリフィンドールでも上手くやれる可能性がある」

オスカーは自分の心が完全に読まれていると感じた。この帽子はオスカーが喋らなくても答えを返してくるのだ。

「むしろ、本来的には君はグリフィンドールに向いているかもしれない。しかし、君に必要なモノはスリザリンで手に入るものだ」

スリザリンで手に入るモノ？ オスカーにはそれがさっぱりわからなかった。

「もちろん、必要なモノが得られる寮に組み分けしたとしても、それが手に入るとは限らないし、すぐ手に入れる者もいれば、人生の終わりに差し掛かって手に入れる者もいる。そして、わたしは話さない。わたしは組み分け帽子、組み分けをする帽子だ。組み分けをして、そこから生徒を導くのはわたしの仕事ではない。そしてそれを見つけるのは君だ」

自分で見つけろと言ってるのか？ オスカーには組み分け帽子があえて答えを隠してる様にしか思えなかった。わざと抽象的な言葉を使って、自分に見つけさせようとしている。オスカーはそう感じた。

「分からないのなら、聞いてみればいいのではないかね？ スリザリンの偉大な先達に」

そう言ったきり、組み分け帽子は喋らなくなった。少しして、オスカーは帽子を脱いだ。手にあったのは物言わぬ、ぼろきれのような帽子だった。

オスカーが帽子を棚に戻しても、ダンブルドアはまだこないようだった。校長たちの肖像画を見ると、何人かが目をぴくぴくさせた。頬をかいたりして、その中で緑色に銀色のローブを着た賢そうな魔法使いが、オスカーの方をあくびの途中で驚いた顔を見ていた。

「貴方は、確か……」

「いかにも、私はフィニアス・ナイジェラス・ブラック。 Hogwartz の元校長で、君と同じ、スリザリン出身だ」

オスカーが何も聞かない間に、待ちきれないとばかりにフィニアス・ナイジェラスは自分で名乗った。その名前を聞いたことで、オスカーの中でおぼろげに重なっていたトンクス先生と、目の前の肖像画のフィニアス・ナイジェラスがブラックという苗字で重なった。

「ダンブルドアに用事があるのかね？ ミスター・ドロホフ」

「はい。あと…… 十分くらいで約束の時間なんですけど」

「なるほど、早く着くとは感心だし、君は他の生徒と違って、ホグワーツの校長に対する礼儀ができているというわけだ」

「なんだかオズカーはむしろがゆくなってきた。ダンブルドアが言っていた、寮が同じなので自分を好いているというのは本当らしかった。確かに歴代の校長の肖像画を見ても、フィニアス・ナイジエラスやオズカーと同じ、緑と銀色のスリザリンのローブを着ている肖像画はあまりなかったので、無理がないことかもしれない。」

「では、ダンブルドアが来るまでの間、何か聞きたいことがあるかね？」

「尖った顎髭を撫でながら、めったに見せたことが無さそうな笑顔でフィニアス・ナイジエラスは言った。」

「ブラック教授にですか？」

「うむ。スリザリンの先達として、後輩の質問には答えねばなるまい」
組み分け帽子が言っていたのはこう言う事かとオズカーは思った。確かに、ホグワーツの校長にもなった人物で、スリザリン出身となれば相談相手としては申し分ないかもしれない。」

「スリザリン、スリザリンに入ったら何が手に入るんでしょうか？」

「オズカーがそう聞くと、フィニアス・ナイジエラスはちよつと目を見開いた。」

「なるほど…… なるほど…… なるほど…… 君はその辺の若いやつらと違って、自分が正しいと思いがあっていないし、鼻持ちならぬ根拠の無い自信も持っていないわけだ。そしてホグワーツの校長に聞いたと…… では聞こう。スリザリンの特徴とは何かね？」

「オズカーはもう何度もその問いを聞いた気がしていた。特徴、確かにスリザリン寮には他の寮とは違う空気や色があるのはオズカーも感じていたが、果たして、それは自分とエスト、自分とさつき喋ったジエマ、自分とスネイプ先生やトンクス先生との違いほど大きなものなのか？ オズカーはその辺りが分からないと感じていた。」

「野心的、狡猾、純血主義…… そういったことですか？」

「まあ外の連中が言うのはそう言った要素だろう。君は二年生の時にダブルドアが言ったことを覚えているだろうか？ 私は彼と色んな点で意見が合わないが、あれは良くスリザリンの特徴を表わしていた」

オズカーは夏休みにパーシーやみんなに言ったことをもう一度思いだした。

「機智に富む才智、断固たる決意、規則を無視する傾向、周りを守る心だったと思います」

フィニアス・ナイジェラスはオズカーが一言一言、言うたびに大きさに頷いてみせた。

「その通り、まさに偉大な創始者が求めた要素だ。そこに蛇語や純血という要素も入るだろうが、本質的にはそれらの要素だろう。では君はそれらが何のために必要で、いったいどこから出てきたと思うかね？」

どこから出てきたのか？ 寮の持つ特徴がどこからか発生したと言うのか？ オズカーはまた考えて見た。目の前のフィニアス・ナイジェラス、トンクス先生、エスト……もしかすると何かヒントを言っていたのかもしれないと考えたからだ。

そして、クラーナと一緒に前回この部屋に来た時のことを思い出した。あの時、フィニアス・ナイジェラスはスリザリン生について何か言っていたはずだった。確か、スリザリン生は常に自分自身を救うことを選ぶと、だからこそいざという時の勇気は際立つのだと。

「自分のためだと言うことですか？」

フィニアス・ナイジェラスは声を上げて笑った。ブラックという名前を聞いたせいとか、トンクスの名前の話をしていた時に、声を上げて笑っていたトンクス先生と笑い方が似ているとオズカーは思った。

「いかにも、君がさつき言った素晴らしいスリザリン生の特性も、純血主義も全てそこから生まれているはずだ。然り……我らスリザリン生は選択の余地があれば、自分自身を救う事を選ぶ。だからこそ、偉大な魔法使いを何人も排出し、魔法史のページを埋めてきた。かのマーリンも、偉大という意味では闇の帝王も……」

「それは……」

フィニアス・ナイジェラスが言ったことは、確かに事実だった。そもそもオスカーが記憶について思いだした方が良いと考えたのも、ハツフルパフの寮でトunksに自分自身はどうなのかと問われたのが大きかった。

「自分自身とその周りを勘定に入れて、それでも目的を達成する意思と能力があるからこそ、我らは自らの野心を満たす事を可能にし、強力な指導者になれる素質、偉大になれる素質があるのだ。分かるかね？ ミスター・ドロホフ。これはグリフィンドールの勇敢で気高い自己犠牲ではできないことなのだ」

「スリザリンで手に入るのはいさ言ったことなのですか？」

自分自身も含めて全て導くような力が自分につくと、フィニアス・ナイジェラスが言っているようにオスカーには聞こえた。

「然り。しかし、臆病なグリフィンドール生や、性悪なハツフルパフ生がいる様に、ほとんどのスリザリン生は素晴らしい特性の一部だけを着けるに過ぎない。それは純血主義がなぜあるのかも理解していない生徒がいることから分かる。いいかね？ 純血主義は我が我らの血を家族を、つまり自分自身とその周りを誇りに思っ、守り、行動しているに過ぎない。もちろん、最初は分かっていなくても、そう言った場所に身を置いている間に身につく者もいるが……しかし……もし……本当の意味でスリザリン生の特性を全て満たせるような……真のスリザリン生に相応しい者がいるのなら……」

フィニアス・ナイジェラスが言い淀んだので、オスカーは少し辺りを見回した。すると、歴代の校長たちがいつの間にか起きていて、オスカーとフィニアス・ナイジェラスの話に聞き耳をたてているのが分かった。中にはラツパ型の補聴器を出してまで聞こうとしている校長もいた。

「フィニアス、一人で全て満たさなくてもいいのではないのか？ スリザリンは身内の結束が強いじゃから、全ての特性を寮で満たすことは可能じゃろう？」

「ダンブルドアか……もう少し、外出していればいいものを……」

オスカーはその声を聞いて振り向くと、ダンブルドアと赤と金色の鳥がオスカーの後ろに立っていた。フィニアス・ナイジェラスはその声を聞いてあからさまに嫌そうな顔をした。

「さて、オスカー、遅れて申し訳ないが、フィニアスに礼を言ってから話を始めようかの」

「分かりました先生。ブラック教授、お話ありがとうございました」
「うむ。問題ない。今度は他のスリザリン生も連れてきたまえ。ダンブルドア、私の時間を奪ったのだから次の企画をしておいてくれたまえ」

フィニアス・ナイジェラスは大様に頷いた。後ろの肖像画達がオスカー達のやり取りを見て、フィニアス・ナイジェラスの方を指で指したり、何かひそひそ言っていた。

「フィニアスありがとう。オスカー、あの水盆の方へいこうかの」

オスカーはさつき気になった水盆の方へ、ダンブルドアに連れられてついでに行った。オスカーはさつきフィニアス・ナイジェラスに言われたことも、マートルとヴォルデモートのことも、そして記憶のことも目の前の偉大な魔法使いに聞いて見たかった。

「オスカーから夏休みに手紙が届いた時は、肖像画の校長たちが随分と喜んだものじゃ」

「いえ、突然お願いの手紙を送ってしまったて申し訳ありません」

ダンブルドアは悪戯っぽく笑って言った。青い目がキラキラと光った。

「大丈夫じゃ、オスカーも知っているじやろう？ ニワトコの杖の持ち主はナナカマドの杖の持ち主に惹かれると言う」

ダンブルドアがそう言ったので、オスカーは思わずダンブルドアの杖を見た。確かにそれはエストの杖とほとんど同じ形をしていた。しかし、その杖はオスカーが見たことのあるどの杖よりも古く見えた。

「ではまず、オスカーの記憶の話からしよう。他に話したいこともあるじやろうが…… それはその話の後じゃ」

「はい…… 忘却術をかけられた記憶を戻すことは可能なのですか

？」

ダンブルドアの言った通りにオズカーは記憶の事から聞くことにした。

「非常に難しい話じゃ、聖マンガにもそれ専用の治療病棟があるくらいには難しい話なのじゃ、しかし不可能ではない」

「どうやるのですか？ 逆呪いか何かがあるんでしょうか？」

単純に呪文や魔法薬で直るのなら、オズカーは今すぐにでもそれをした方がいいと考え始めていた。

「オズカー、忘却術を破る一番簡単な方法は苦痛じゃ、磔の呪いやそれに匹敵する苦痛ならば忘却術を破ることができる。それも気が狂うほどのじゃ」

オズカーは言葉が出なくなった。ダンブルドアがそんな許されざる呪文について生徒に話すということは、それ以外の解決法が本当に無いことを示していると分かったからだ。

「しかし、苦痛で破ることができるとはどういうことか分かるのか？

苦痛とは人間の何かね？ オズカー？」

「苦痛……？」

何なのか？ 痛いと思うこと…… オズカーはまた考えて、気づいた。

「感情ですか？」

「素晴らしい、その通りじゃ、強い感情こそが忘却術を破る手立てになる」

オズカーはそれを聞いて思いだした。彼女のことを思い出したのは魔法省で…… 聞かれたくないと思っっていることを何度も聞かれて、段々と色んな事を思い出したのだ。

「でもどうやって、感情？ それは記憶に関して感情を持てばいいのですか？」

「そうじゃ、つまり、オズカーがその記憶に関して、嬉しかったり、辛かったりするのなら思いだせる確率は上がるじゃろう」

オズカーはダンブルドアの言っていることは間違いない気がした。それに幸いなのか、それとも不幸なのか、オズカーが思い出したいそ

れには、開心術やまね妖怪等、つらく心が動く時が多いはずだった。

「そして、その為に使うのがこれじゃ、憂いの篩という」

「憂いの篩？」

ダンブルドアが銀色のもやが入っている水盆を指した。相変わらず水盆にはもやが漂っていたが、オスカーはどこか人の顔が見えたり、声が聞こえてくる気がした。

「これは非常に貴重で古い魔法具なのじゃ、オスカーはホグワーツがなぜここに造られたのか知っておるかの？」

「なぜ？ ですか？ 魔法の力が強かったからではないのですか？」

「いったいどうこの水盆とホグワーツの話が繋がるのか、オスカーには見当もつかなかった。

「実は、ホグワーツがこの地に造られた理由の一つがこの憂いの篩じゃと言われておる」

「この水盆がですか？」

「そうじゃ、この憂いの篩はホグワーツができる前からここにあってと言われておる」

「ホグワーツができる前から？」

だとすれば、この憂いの篩と呼ばれる魔法具は千年近く前からここにあることになるのだ。オスカーはちよつと灰色のレデイにでも聞いてみたくなった。

「さて、では今の話を聞いて、この憂いの篩の力が何か分かったかの？」

記憶を思いだすために感情を呼び起こす必要がある、そしてホグワーツよりも早くあり、ホグワーツをこの地に造る理由になったモノの力…… オスカーはそれらの情報に加えて、銀色のもやが、さつき何に似ていたと考えていたのかを思い出した。幸せの記憶、守護霊と似ていたのだ。

「記憶？ 記憶がこの中には入っている？」

「そうじゃ、これは憂いの篩、またの名をペンシープ。魔法使いの記憶をここにとどめることができる」

ダンブルドアが憂いの篩に杖をやり、銀色のもやを一筋取り上げ

て、自分の頭に戻した。そして自分の頭に杖をやって、新たに一本、銀色のもやを憂いの篩へと入れた。

「ホグワーツの創始者は記憶をとどめるこの魔法具を見て、ここにホグワーツを創ろうと考えたのじゃ、なんとも素晴らしいことだと思わないかの？ まさに記憶と思いと知識を伝えるのに、これ以上無い場所だと言う事なのじゃ」

「記憶……」

オズカーは少し、恐ろしくなった。自分は自分の覚えていない記憶を見て、耐えられるのだろうか？ そもそも失った記憶の中のオズカーは何をやっていたのかすら覚えていないのだ、もし、さらに取り返しのつかない記憶を取り戻したのなら、さっきのフィニアス・ナイジェラスのように、自分自身のことを考えることができるのか、自信が無かった。

「ではオズカー、少しだけわしの記憶の旅にいかがかの？ 心配することは無い、ワシは君より長く生きている分、君より恥ずかしいことも沢山してきておるからもう」

「はい……」

二人は銀色のもやが渦巻く水盆へと近づいていった。

ドラゴンフライ

ダンブルドアが自分の耳に杖をやると、水盆の中にある銀色のもやと同じものが出てきた。オスカーにはそれが記憶なのだろうと直観的に分かった。

今度は水盆の中にダンブルドアは指を入れてかき混ぜ始めた。オスカーはその動作をじっと見ていた。

「君の記憶を呼び覚ますような記憶がわしにあればよかつたのじやが、しかし、この記憶は随分と君の興味を引くじやろうと思う。それに、わしには分からないことも君なら分かるのかもしれない。オスカー、この憂いの篩に顔をつけるのじや」

「はい……」

水盆に渦巻く、銀色の記憶に首を突っ込むと、オスカーは一瞬顔がひやりとした。少しの間、暗闇の中を落ちて行く感覚があり、気づくと賑やかな街角に立っていた。

石畳で覆われた道路の上を道を行く馬車が隣を通りすぎて行った。オスカーはマグルの服装に詳しくなかったが、どう見ても街行く人の服装や風景自体が相当に昔のモノに見えた。

「さて、オスカー、もう記憶の中のわしはだいぶ先にいつてしまっている様じや、少し歩くかの」

「分かりました、先生。ここはロンドンですか？」

「そうじや、それももう何十年も前のマグル達が住むロンドンじや」
オスカーの予想はあたっていたようだった。ダンブルドアは覚えているのか、迷いなく進み、鉄の門を通って、みすばらしい中庭に入った。その一番奥まった場所に、石造りの雰囲気の良い建物が鉄柵に囲まれて建っていた。

ダンブルドアはその建物の入り口へと歩いて行った。ドアは開いていて、オスカーもダンブルドアに続いた。

「トム・リドルの生い立ちについて、何かお話しただけませんか？
か？ この孤児院で生まれたのだと思いますが？」

オスカーがさつき聞いたダンブルドアの声よりも、少し違う、若さがある声が聞こえてきた。

「そうですよ。あのことは、何よりはつきり憶えていますとも。なにしろわたしが、ここで仕事を始めたばかりでしたからね。大晦日の夜、そりや、あなた、身を切るような冷たい雪でしたよ。ひどい夜で。その女性は、当時のわたしとあまり変わらない年頃で、玄関の石段をよろめきながら上がってきました。まあ、何も珍しいことじゃありませんけど。中に入れてやり、一時間後に赤ん坊が産まれました。それで、それから一時間後に、その人は亡くなりました」

若い頃のダンブルドアらしき、ビロードのスーツを着た人物と、何か不安でもあるのか、気難しげな顔をした、手に酒をもった女の人が話していた。

「これは、ヴォルデモートのことを言っているんですか？」

「そうじゃ、ここはトムの生まれ育った場所じゃ」

老いたダンブルドアがそう言っつて、オスカーは少し信じられない気分だった。この建物は清潔ではあったが、明らかにオスカーから見て、みすばらしい外見かつ内装だったからだ。それはスリザリンの末裔だと自分で言っつていたヴォルデモートが育つた場所としては、なんとも考え難い場所だった。

「わたしにこう言いましたよ。『この子がパパに似ますように』。正直な話、その願いは正解でしたね。なにせ、その女性は美人とは言えませんが、せんでしてね——それから、その子の名前は、父親のトムと、自分の父親のマールヴォオを取っつてつけてくれと言いました——ええ、わかつてますとも、おかしな名前ですよ？ わたしたちは、その女性がサーカス出身ではないかと思っつたくらいでしたよ——それから、その男の子の姓はリドルだと言いました。そして、それ以上は一言も言わずに、まもなく亡くなりました」

「さて、わたしたちは言われたとおりの名前をつけました。あのかわいそうな女性にとつては、それがとても大切なことのように思っつたからね。しかし、トムだろうが、マールヴォオだろうが、リドルの一族だろうが、誰もあの子を探しにきませんでしたし、親戚も来やしません

でした。それで、あの子はこの孤児院に残り、それからずっと、ここに
にいるんですよ」

その女性が言っていることがオスカーにはさつき聞いた、ここが
ヴォルデモートの出生地だと言う事よりも信じ難かった。ヴォルデ
モートが、トム・リドルが孤児だった？

「ダンブルドア先生……ここはマグルの孤児院ですよね？」

「そうじゃ、ここはマグルの子供達が住む孤児院であり、ここでトムは
マグルの子供や孤児院の職員に囲まれて育ったのじゃ」

スリザリンの末裔が、世界で一番恐れられている魔法使いがマグル
の孤児院で育った？ オスカーにはやっぱり信じられなかった。こ
んな自分の家よりも小さい家で、マグルの子供に囲まれて、魔法の事
など一切教えられないだろう場所で育ったであろう事実が、オスカー
には信じ難かったのだ。

オスカーが混乱している間にも、若いダンブルドアと女性の話は続
いているようだった。

「オスカー、そろそろわしが移動するようじゃ、では会いに行くかの」
オスカーは無言で二人のダンブルドアについていった。女の人は
若いダンブルドアを案内する途中で、灰色の服を着た孤児を叱ったり
していた。汚いと言うほどでは無かったが、オスカーはペンスがいれ
ばもつとましな服を子供に着せるだろうし、廊下や部屋の中も磨きあ
げられているだろうと考えていた。何より、オスカーはこの孤児院の
雰囲気ほとんど光の入らない、スリザリンの談話室よりも遥かに暗
く感じたのだ。

オスカーと老いたダンブルドアは若いダンブルドアに続いて、女の
人が案内した部屋に入った。

「これがヴォルデモート？ ホグワーツに入る前の？」

「その通りじゃ、十一歳のトム・リドルじゃ」

若いダンブルドアと少年のトム・リドルは何かを喋っている様だっ
たが、オスカーには余り聞こえていなかった。こんな、他の孤児と同
じ灰色の服を着て、ぼろ箆筒に椅子が一つ、他にはベッドしかない部
屋にいるのが、あのおぞましい魔法使い？ 人の不幸や恐怖を笑う不

愉快な高笑いをする、赤く血走った眼を持つ魔法使い？ オスカーはトム・リドルを凝視していた。

「きみが狂っていないことは知っておる。ホグワーツは狂った者の学校ではない。魔法学校なのだ」

若いダンブルドアがそう言うのと、沈黙が流れていた。オスカーにはトム・リドルが内心でとんでもなく混乱しているであろうことが分かった。トムは動きを止め、目だけをダンブルドアの方へ何度も何度も動かしていた。

「魔法？」

「そのとおり」

「じゃあ…… じゃあ…… 僕ができるのは魔法？」

「きみは、どういったことができるのかね？」

「いろんなことさ……」

オスカーの眼から見ても、トムは興奮していた。興奮の渦がトムの体から首、そして顔へと昇っているのが見えるようだった。

「物を触らずに動かせる。訓練しなくとも、動物に僕の思いどおりのことをさせられる。僕を困らせるやつには嫌なことが起こるようにできる。そうしたければ、傷つけることだってできるんだ」

トムは興奮のあまり、立っていられなくなったのか、少し前のめりになって、ベッドの上に座った。まるで信じられないモノを見る目でトムは自分の両手を見ていた。

「僕はほかの人とは違うんだって、知っていた。僕は特別だって、わかっていた。何かあるって、ずっと知っていたんだ」

「ああ、きみの言うとおわり」

若いダンブルドアの声よりも、オスカーにはそのリドルの動作、表情、声、そして、『僕は特別』、その言葉が耳に残って離れなかった。オスカーの中で強烈にクリスマスのエストと目の前のトム・リドルが関連づけられた。もはやオスカーが考えまいとしても、どうしても繋がって見えた。

そして、オスカーにはトム・リドルが自分の場所を初めて与えられたようにしか見えなかった。これから色んな人や世界を恐怖に陥れ

ていく、その場所が、自分が特別だと肯定してくれる、最初の場所が与えられたようにしか見えなかった。

「きみは魔法使いだ」

明らかな喜びの表情がトムの顔に浮かんだ。十一歳という年齢にもかかわらず、十分に整っていると分かるその顔に浮かんだ喜びの色は、どこか本能的な衝動でそのハンサムな顔を上書きしていた。

オスカーには二年前のクリスマスで必要の部屋に髪飾りがあると確信した時のエストと、そのトムの顔が重なって見えた。オスカーはその顔をエストがするときには、エストが何か考えていたことが本当だと確信した時の顔だと経験的にわかっていた。

「これが…… これが…… トム・リドルですか？ ヴォルデモートですか？ 世界一邪悪な魔法使いがマグルの孤児院で生まれ育った？」

「そうじゃ、これがホグワーツに入る前にわしが出会ったトムじゃ」

トムと若いダンブルドアはしばらく喋っていて、筆筒を燃やしたり、何か言い合ったりしている様だったが、オスカーには分からなかった。なぜこんな場所で育った人間があんな魔法使いになったのかが分からなかった。

「オスカー、そろそろ一度戻ろうかの？」

「はい…… 先生」

ダンブルドアがオスカーの手をとると、二人はまた来た時の暗闇を登って、沢山の校長たちが興味深げに二人を眺める校長室へと戻っていた。

「憂いの篩がどういったものか分かってくれたじやろうか？」

「はい…… リドル…… ヴォルデモートはマグルの孤児院で生まれ…… それにあいつは自分は特別だとすでに気づいていた…… 魔法に初めて会ったはずなのに」

オスカーはダンブルドアの質問にうわのそらで答え、少し不味いと思っ、ダンブルドアの顔を見ると、その青い眼はオスカーの方を興味深げに眺めていた。

「そうじゃ、あやつはすでにあの年で魔法を行使し、自分が人と違うという意識を持つておった。魔法と言う言葉を知りもしないのにじゃ。オスカー、他に何か感じたことはあるかの？」

「俺には…… まるで、あいつが初めて……なんていうのか……場所？ 認識？ そういう自分を認めてくれているモノが初めて与えられたように見えました」

ダンブルドアはオスカーの言葉にうんうんと頷いているようだった。オスカーはそれ以外に何も言いたくなかった。エストやミュリエルから聞いたダンブルドアの話と重なって見えたなどと目の前のダンブルドアには言いたくなかったのだ。

「ふむ…… やはり興味深い話じゃのう。ではもう一つ記憶に付き合つて貰えるかの？ これもまた、あやつに関わる記憶なのじゃ」
「わかりました……」

またダンブルドアが自分の頭から記憶を憂いの篩に入れ、かき混ぜた。ダンブルドアが先に入ったので、オスカーも続いた。

オスカーは目を開けて少し周りを見回した。なぜなら、少し様子は違うものの、そこはさつきまでいた校長室だったからだ。オスカーの知るダンブルドアと少しだけしわが少なく見えるダンブルドアが並んでいた。そして、その目の前に座っているのは……

オスカーは思わず目を見開いた。まるでひどく焼け爛れたようなその顔をオスカーは見たことがあった。血走っているその眼をオスカーは間近でみたことがあったのだ。

「わたくしは実験した。魔法の境界線を広げてきた。おそらく、これまでになかったほどに」

「ある種の魔法と言うべきじゃろう。ある種の、ということじゃ。ほかのことにに関して、きみは…… 失礼ながら…… 嘆かわしいまでに無知じゃ」

ダンブルドアはまるでヴォルデモートを憐れむような口調で、そしてそれを聞いたヴォルデモートは笑っていた。その笑い顔はミュリエルやリータの笑い顔よりも遙かに邪悪で、いつか叫びの屋敷でオスカーが見た笑みにそっくりだった。

「古臭い議論だ。しかし、ダンブルドア、わたくしが見てきた世の中では、わたくし流の魔法より愛の方がはるかに強いものだという、あなたの有名な見解を支持する者は皆無だった」

「きみはおそらく、間違ったところを見てきたのであろう」

愛がヴォルデモートの言う魔法。闇の魔法よりも強い？ オスカーにはヴォルデモートとダンブルドアが何を喋っているのか理解できなかった。

「それならば、わたくしが新たに研究を始める場として、ここ、ホグワーツほど適切な場所があるでしょうか？ 戻ることをお許し願えませんか？ わたくしの知識を、あなたの生徒たちに与えさせてくださいませんか？ わたくし自身とわたくしの才能を、あなたの手に委ねます。あなたの指揮に従います」

ヴォルデモートはそう言ったが、オスカーにはヴォルデモートにそんな気があるとは全く思えなかった。それにダンブルドアはそれを聞いてさらに警戒の色を強めたようだった。

「すると、きみが指揮する者たちはどうなるのかね？ 自ら名乗って、という噂ではあるが『死喰い人』と称する者たちはどうなるのかね？」
ヴォルデモートは痛いところを突かれた、言われたくないことを言われたようにオスカーには見えた。

「わたくしの友達…… わたくしがいなくとも、きつとやっています」

「その者たちを、友達と考えておるのは喜ばしい」

ヴォルデモートの言葉にはさつきまでの余裕ぶり、見下すような響きが無くなっていた。明らかにダンブルドアに対して警戒していたのだ。

「むしろ、召使いの地位ではないかという印象を持っておったのじやが」

「間違っています」

「さすれば、今夜ホッグズ・ヘッドを訪れても、そういう集団はおらんのじやろうな、ノット、ロジエール、マルシベール、ドロホフが、きみの帰りを待っていたりはせぬじやろうな？ まさに献身的な友達

じや。雪の夜を、きみとともにこれほどの長旅をするとは。きみが教職を得ようとする試みに成功するようにと願うためだけにのう」

オスカーはヴォルデモートのこのセリフを聞かすために、ダンブルドアがこの記憶に連れてきたのではないかと考えた。すでにこの時から、この時よりも前の学生時代から、オスカーの父親はヴォルデモートに付き従っていたはずだった。

「相変わらず博識ですね、ダンブルドア」

「いや、いや、あそこのバーテンと親しいだけじや。さて、トム……」

ダンブルドアは飲んでいたワインらしき飲み物を置いて、ヴォルデモートの方を見た。オスカーにはそのバーテンが誰で、なぜ死喰い人たちの正体がばれたのかわかった。

「率直に話そうぞ。互いにわかっていることじやが、望んでもおらぬ仕事を求めるために、腹心の部下を引き連れて、きみが今夜ここを訪れたのは、なぜなのじや？」

「わたくしが望まない仕事？とんでもない、ダンブルドア。わたしは強く望んでいます」

「ああ、きみはホグワーツに戻りたいと思っておるのじや。しかし、十八歳のときもいまも、きみは教えたいなどとは思っておらぬ。トム、何が狙いじや？一度ぐらい、正直に願い出てはどうじや？」

ヴォルデモートが教職を望んでいた？ オスカーの頭の中でまた嫌な連想が浮かんだが、それよりも、ヴォルデモートがここ、ホグワーツに来た理由が気になった。

「あなたがわたしに仕事をくださるつもりがないなら——」

「もちろん、そのつもりはない、それに、わしが受け入れるという期待をきみが持ったとは、まったく考えられぬ。にもかかわらず、きみはやってきて、頼んだ。何か目的があるに違いない」

目的…… オスカーはその理由が何かピンときた。ヴォルデモートがホグワーツに来たかった理由。それも色んな場所を巡った後に……

「オスカー、記憶はここまでじや。一度戻ろうかの」

ダンブルドアがそう言つて、オスカーの手を持つと再びの暗闇が一

瞬あり、今現在の校長室へと戻っていた。

「一度座ろうかの？ 少し話をわしもしたいので」

「はい」

オスカーとダンブルドアは向かい会って座った。赤と金色の鳥がオスカーの傍まできて、頭を差し出したので、オスカーはその頭を撫でた。鳥の頭からは不思議な温かさが伝わってきた。

「さて、わしが君に記憶を見せたのは憂いの篩の効果を説明するのに加えて、君に助言を貰いたかったのじゃ」

「俺にですか？ ダンブルドア先生が？ スネイク先生やスクリムジョール先生、それにもつと色んな魔法使いや魔女と先生はお知り合ではないんですか？」

オスカーにはダンブルドアが何をもつてそう言ったのか分からなかった。

「君にじゃ、オスカー、他にもない君に。確かに前の戦争の時代、ヴォルデモートの手を逃れた魔法使いは何人かいた。ポッター夫妻やロングボトム夫妻は三度もあやつの手を逃れたし、それ以外にも雄々しく戦った者達もいる。しかし、あやつを仮初の体とは言え、撃退したのは君じゃ」

「それは…… クラーナやレアや灰色のレディや…… それに単に運が良かっただけで……」

実際に賭けがはまっただけであり、細い線の上を、踏み外せば死ぬだけの線の上を運よく渡っただけだと、オスカーはそう思っていた。

「その運が良かったのが重要じゃよ、それに君はあやつのことをよく分かっておった。そうでなければ運がいいと言える状態まで持つていくことはできなかつたじゃろう」

オスカーは何も言い返す気がしなかつたし、ダンブルドアが自分に何を求めているのか分からなかつた。

「そして…… 君は死喰い人の中でも最も古くからあやつに付き従っている人物の息子でもある」

それは確かに事実だったし、ヴォルデモートが孤児院で生まれ育つたのと同じく、オスカー自身には変えようのない事だった。

「ではオスカー、あやつはなぜホグワーツに来たと思うかね？」

「髪飾りを置きの来たのだと思います。レディはあいつがホグワーツには戻ってこなかったと言いましたが、あの時に来た事を知らなかったのだと思います」

ダンブルドアはこれまでよりも力強く頷いた。オスカーはやはり自分の想像は正しかったのだと考えた。

「そうじゃな、わしもそう思っておる。恐らくあやつはあの時に必要の部屋に髪飾りを置いたのじやろう。そしてそのためにホグワーツに来たのじや」

それを聞きながら、やはりオスカーは自分の父親とヴォルデモートの話が出たため、マートルのことを聞きたくなくなった。

「先生、少し…… 話が変わるのですが、嘆きのマートル…… マートル・ウオーレンはヴォルデモートや俺の父親が通っている時代に死んだと聞きました」

今度はダンブルドアが驚いているようだった。その驚きようは先ほどの記憶の中のダンブルドアよりも大きいようにオスカーには見えた。

「なんと、確かにマートルはトムや君のお父上が学生だったところに亡くなったのは確かじゃ」

「何か…… 関連があるのですか？ マートルは何も言ってませんでした、俺には偶然には思えなかったので聞きました」

ダンブルドアにとってはそれが予想外の話題だったことがオスカーには分かった。珍しく、ダンブルドアが次に何を言うのか考えているように見えたからだ。

「そうじゃの、マートルが亡くなった原因も、それが人物であれ、動物であれ、呪いであれ理由は判明しなかったとだけ言っておこう」

「ダンブルドア先生がいたのに…… ですか？」

オスカーは信じられなかった。ダンブルドアのおひぎ元で謎の死亡事件が起きたというのだろうか？ どう考えても、ヴォルデモートとマートルの死は繋がっているようにしか思えなかった。

「そうじゃ、わしはそれを止めることができなかった。その上、その原

因は公式上は突き止められた事になっており、非常に信憑性が低い
が、一人の学生が退学になり、そして一人の学生はその原因を突き止
めたとして、君と同じ特別功労賞を授与された」

特別功労賞のトロフィーを貰った時、前の特別功労賞が誰だったの
かオスカーは見ていた。

「貰ったのは、学生時代のヴォルデモートだったはずですよ？ 確
かにトム・リドルとトロフィーに名前があったのを見ました」

「そうじゃの、君に隠しごとをしても仕方がないが…… 恐らくあや
つが何らかの形でマートル・ウオーレンを殺害し、それを違う誰かに
押し付けたのは間違いないとわしも思っておる」

学生時代にすでに殺人事件を起こしていた？ あの小さな少年が
数年も経たないうちに？ オスカーはやはりヴォルデモートが理解
できなかった。

「そうですか……」

「うむ、少し話しがずれてしまったが、君に意見を求めたのはやはり正
解だったじやろう。そして君にはもう少し、協力してもらいたいこと
がある」

「俺にですか？」

協力して貰う事？ 自分に今から死喰い人になる準備をして、もし
ヴォルデモートが復活したらスパイにでもなれとでも言うのかとオ
スカーは一瞬考えた。しかし、ダンブルドアがそんな事を言うとは思
えなかった。

「恐らく君にしかできないことじゃ…… 君の御父上、アントニン・ド
ロホフは最も古い死喰い人でもあり、あやつ、ヴォルデモートからも
周りからも腹心と思われていた一人じゃ」

それを言われただけで、オスカーはなんとなく予想がついた。予想
通りなら、記憶を取り戻すことと関連しているはずだった。

「もし、ヴォルデモートについて何かお父上が言っていたことを思い
だしたのなら、わしに伝えて欲しいのじゃ」

「分かりました。それはどんなことでもという事ですか？」

「そうじゃ、あやつの学生時代を知る人物は少ない上、その中でもあち

ら側の人間の話を聞くことは余りにも困難なのでな」

「はい、何か思いだしたら先生にお伝えします」

いったいダンブルドアは自分に何を求めているのか？ 何のためにヴォルデモートに関する記憶を集めているのか、オズカーは少し考えてみたがあまり見当はつかなかった。

オズカーがもう一度ダンブルドアの方を見ると、ダンブルドアはオズカーの方を見て、ニツコリと笑っていた。

「さて、では本題に入ろうかの。憂いの篩の効果はわかったじやろう？ 記憶を取り出す魔法は困難な魔法ではあるが…… 君は似たことをしたことがあるのではないかな？」

「守護霊の呪文のことをおっしゃっているんでしょうか？」

これまでにオズカーが少しでもかかわったことのある記憶に関する魔法や技術は、魔法薬でやった忘れ薬、トunksがこけて粉々に割った Hogbuzmird に売られていた思い出し玉、それに開心術に閉心術、そして守護霊の呪文だった。

「その通りじゃ、自分の取り出したい記憶をイメージして、頭…… じめかみの部分に杖をやって記憶を取り出すのじゃ、さっきのわしのよういの」

「記憶をイメージ……」

どの記憶をイメージすれば良いのか？ 彼女との記憶なのか、母親との記憶なのかそれとも…… オズカーはしばらく考えて、守護霊の呪文のことを考え、それを道しるべのようにして取り出そうとする記憶を決めた。

何故か、オズカーは自分の杖がいつも使う時よりも自分と繋がっていて、まるで体の一部に近づいている。そんな気がした。

オズカーは杖をこめかみにあてて、記憶をイメージし、ゆつくりと杖を離していった。何か自分の一部が離れて行くような、体ではないどこかの痛みがした気がして少し目をしかめた。眼を杖にやると銀色のもやが杖にまとわりついているのが見える。

「憂いの篩に入れるのじゃ」

銀色のもやをそのまま憂いの篩にやって、オズカーはさつきダンブ

ルドアがやったように自分の手でそれを混ぜた。不思議な冷たさがオスカーの手にまわりついてくる。

「さて、準備ができたようじゃの？　では一人でいくかね？　それともわしがついていった方がいいかの？」

ダンブルドアの言葉に驚いて、オスカーは少し口をポカンと開けていた。てつきり問答無用でついてくるのだろうか？　オスカーは思っていたのだ。

「ついてきて貰いたいです。戻り方もいまいち分らないですし」

「ふむ……　ではお邪魔するでしょう。わしも他の人の記憶に、その記憶の持ち主と一緒に入るのは久しぶりなのだろう」

そう言うダンブルドアに頷いて、オスカーは憂いの篩に頭を突っ込んだ。また冷たい感覚と、暗闇があり、いつの間にかオスカーはトンボの行きかう木立の中にいた。

ほとんど同じような風景が続く場所だったが、オスカーにはどこに行けばいいのかが分かった。後ろにダンブルドアがいるのを確認し、目的の場所へと迷いなく進んだ。

風が葉や木を揺らす音に加えて、子供の声が聞こえてくる。二人分の声で、男の子が女の子に質問しているようだった。

「●●●はマグルの学校に通ってるんだろ？　マグルの学校って何を教えるんだ？」

「何って何だい？」

「ホグワーツでは呪文とか薬の作り方とかを習うって昨日僕が話しただろ？　じゃあマグルの学校では何を習うのか気になったんだ。母さんやペンスはマグルの事なんか知らないし……」

「オスカーの言う、呪文とかそういうのがほんとなのかは私も分からないけど、私の学校ではそんなの習わないよ」

ペンスが用意しただろうピカピカの服を着た、ホグワーツに入る前のオスカーと同じ年くらいの女の子が喋っていた。小さなオスカーは何か小包のようなものを手に提げている様だった。

「じゃあ何を習うんだ？」

「最近始まった授業は社会とか理科かな」

「社会？ 理科？ それは何をやるんだ？」

女の子はまるで小さいオスカーの方を何か面白いおもちゃを見るような目で見て見ているとオスカーは思った。それに対して小さいオスカーの方は、本当に色んな事を聞きたくて仕方がないように見えた。

「理科はその辺の草とか虫とかそういうのの話かな」

「その辺の？」

二人は自分達のいる周りを見回していた。夏の木立の中を沢山のトンボが相変わらず行き交っていた。

「うーん…… オスカー、トンボを捕まえてよ、前やってたやつ」

「魔法がみたいの？ やってでもいいけど、●●だつてできるだろ？」

「僕ばかりやってても練習にならないんじゃないか？」

「アレが魔法かどうか分からないし、私はオスカーみたいに上手くできなから」

「分かったよ」

気の無い返事だったが、小さいオスカーにとっては彼女からお願いされたのが嬉しいようだった。小包を下において、腕をまくりトンボの方を真剣に見つめた。

すると幾匹も飛んでいた内の一匹が二人の方へ来て、女の子が手を合わせて水をすくう時のようなかっこうをしている中にとまった。オスカーはそれを見て得意気だった。

「ほら、オスカー、これみてよ」

「これって？」

「トンボの眼つて、いっぱい小さいのがあつまつてできてるのが見えるだろう？」

「うわ…… なんか一杯あつて気持ち悪いな」

「もう…… せつかく私が習ったことを教えようとしてるのに」

微妙な顔をしているオスカーを見て、女の子は少し怒っているようだった。今度はそれを見た小さいオスカーがちよつと不味いと思つた様だった。自分で自分を見ているオスカーからしても、この頃の自分は両親とペンス以外の人間にほとんど会ったことが無く、同世代の人間とのコミュニケーションの取り方がわからないのだろうと思わ

ざるを得なかった。

「これって小さい眼が一杯集まってるらしいんだ」

「眼が一杯？ なんの意味があるんだ？」

「それぞれ別の場所を見れるらしいよ、だからトンボは後ろも前も全部一緒に見えるんだよ」

「へえ、便利だな何でも見えるって」

今度は女の子の方が得意気に見える。女の子からすると、常識のよ
うなことを知らないオスカーは話して面白い存在なのかもしれない。
オスカーは自分が体験したときとは違う見方ができるようになつて
いる気がした。

「何でもは見えないんじゃないかな？」

「え？ でも今、前も後ろも見えるって言ったじゃないか」

小さいオスカーは何を言っているのか分からないという顔で、それ
を見た女の子はもっと得意気に口角を上げた。

「だって、こいつは自分は見えないだろう？」

「はあ？ そんなの当たり前だろ…… 確かに見えないけどさ」

「ほら、オスカーも答えられなかった。私も先生に問題を出されて答
えられなかったから一緒だね」

「そんな一緒いらないよ。マグルの先生って言うのは意地悪なんだ
な」

余り納得していないと言う顔を小さいオスカーはしていた。そし
て、さつき置いた小包を取り出そうとした。するとそこでまるで擦り
切れたローブの様に辺りの景色がぼやけ、銀色のもやがあたりに現れ
たようだった。チャンネルの合わない魔法ラジオのように遠くで二
人の声が聞こえている気がした。

「ここは記憶があやふやなのじゃろう」

後ろからダンブルドアの声が聞こえて、思わずオスカーは飛び上
がった。オスカーは完全にダンブルドアと一緒に記憶に入っていた
ことを忘れていた。

「俺の記憶がないから再現できないってことなんでしょうか？」

「そうじゃ、ほれ、そろそろ戻ってきたようじゃ」

また二人の姿と声が戻ってきた。小包は明けられていて、小さいオスカーの口には何か黒っぽいものがついているようだった。

「オスカー、チョコが口についてるよ」

「え？ あっ」

オスカーはそれを見て、夏休みのペンスの話を思いだし、おぼろげに記憶が蘇ってきた。この時、前日にマグルのお菓子を貰い、それを少し持って帰ってペンスに作ってもらったのだ。そしてお菓子を渡して、女の子にペンスや家の事を自慢したかったのだ…… それに、この時の女の子の反応が良かったので、それからドロホフ邸にいた頃も、オスカーは何度もペンスに言って作って貰っていたのだ。

「トンボの話でもいいけど、もっと話をしてくれよ」

「トンボの話を聞きたいのかい？ えっと、先生はトンボは生き物だけど、色んな意味があるんだって言ってたかな」

「色んな意味？」

オスカーは二人の会話を聞きながら、必死に何か思いだせないかと考え続けていた。さつきお菓子の話を思いだしたことを受けて、とにかく思いだせないことが、忘れていたことが、そのまま何もしなかったことが許されざることだった気がして仕方が無かったのだ。

「イギリスだとドラゴンとか悪い意味のことが多いらしいんだけど、他の国では違うんだって」

「ドラゴンの何が悪いのかは分からないけど、違うって何が違うんだ？」

ダンブルドアはオスカーの後ろで、じっと成り行きを見守っているようだった。

「トンボってどいつを見ても前にしか飛ばないだろう？」

「まあそうかも」

「だから、前に何があっても進み続ける勇気の意味があるんだって」

「そう考えるとかつこいいかもな、さつきは気持ち悪いと思っただけど」

「ほんとは空中で止まったりバックしたりもできるらしいけどね」

「なんなんだよ…… それ」

小さいオスカーは女の子にいいように弄ばれているように見えた。

しかし、今のオスカーから見ても二人共楽しそうに見えたのだった。「ねえ、魔法って空を飛ぶこともできるんだよね？」

「うん。呪文で浮かしたり、箒とか絨毯に乗って飛ぶんだよ。僕も一回絨毯には乗せて貰ったことがあるし、●●●は空を飛びたいのか？」

質問を聞いた女の子は視線を飛んでいるトンボに移し、手を伸ばしてちよつと集中する顔を見ると、トンボの群れがこれまでの軌道を変えて、高く飛んで行った。

「やっぱりオスカーみたいに上手くできないね。うーんと、私はどつちかと言うと高い所に行ってみたいかな、ここは田舎だし、私は山に登ったことも無いし、ロンドンに行ったことも絨毯や箒に乗ったこともないから」

「箒にはホグワーツで乗れるらしいし、それにホグワーツは何本も高い塔がある城だって母さんが言ってたよ」

やはり、小さいオスカーは魔法界の話や女の子にするのが楽しいようだった。自分の世界の話をするのも、女の子が興味を持ってくれるのも両方楽しいのだろうとオスカーは思った。

「じゃあオスカー、私にもオスカーが言うホグワーツに入学するための手紙が来て、ホグワーツに行けたんなら一番高いところまで行こうよ」

「手紙は絶対くると思うけど…… いいよ。でも行ってどうするんだ？」

「だって……」

また、景色や声が乱れ始めた。オスカーが覚えておらず、憂いの篩が再現できないのだ。そして、オスカーはもう自分が入れた記憶が終わりであることを覚えていた。

自分は確かにどうして一番高い所まで行きたいのかを聞いたはずなのに、それを覚えていない。どうしてもそれが許されないことである、そんな気がオスカーはしたのだった。

「終わりのようじゃの？」

「はい、先生」

ダンブルドアに答えた瞬間、浮遊感と暗闇があり、いつの間にかオスカーは校長室へ戻っていた。静まり返った校長室で、ダンブルドアの青い眼と歴代の校長たちの視線がオスカーに突き刺さっていた。

「さて、どうだったかね？ わしとしては外出禁止時間以外は君に天文台の塔に出入りする許可を与えたいところじゃが……」

「それは今の俺には必要ないと思います。それよりも…… 今日のようなことを何回かお願いできるんでしょうか？」

なぜ高い所まで行きたいのか思いますが、そんな自分が一人でホグワーツで一番高い所までいく自信がオスカーには無かった。

「そうじゃったの、わしもできるだけ時間をつくりたいところなのじゃが…… 恐らく取れない状況もでてくると思うての。わしがいない時間はセブルスにお願いしておいた」

「スネイプ先生ですか？」

「そうじゃ、スネイプ先生は閉心術や開心術、真実薬のエキスパートであるし、なにより君の寮監じゃ。なので、今日と同じことをする時はわしが担当するかセブルスが担当するかを君にふくろうで送っておこう」

「ありがとうございます」

オスカーはダンブルドアの後ろ盾があるというのには心強いと考えた。果たして他の事を思い出すことができるのかは分からなかったが。

「では今日も大分時間が過ぎてしまったことじゃから、そろそろ時間にしたと思うが、何か他に聞きたいことはあるかの？」

聞きたいこと…… オスカーが考えたのは、このダンブルドアの間や記憶を思い出すという行為そのものについてだった。

「この…… 俺が思い出すとしていうことと言うのは、周りのみんなに言うべきなのでしょうか？」

「そうじゃの、君には頼りになる仲間がいるわけじゃ。話せば君を心配して助けてくれるじゃろう。これはチャドリー・キャノンズが最下位でシーズンを終えるのと同じくらい明白なことじゃ」

ダブルドアの言う通りだった。だからオスカーは周りのみんなに話すのが嫌なのだ。もちろん自分がそういったことを過去にしかしてしまったことが知られるのは怖かったが、それ以上にみんなを心配させることが嫌だった。

「しかし、こればかりは自分で決めねばならないじやろう。自分の秘密を話すのはもちろんその人間を信頼していることの証拠でもある。しかし、親しいが故に言えないこともあるじやろう。オスカー、君が決めるのじゃ、誰にいつ何を話すのか。全てを喋るのか一部を喋るのか、何も言わないのか。どれをとつても同じくらいの勇気があることじやろう」

どれをとつても同じくらい勇気がある？ 黙っていることにも勇気があるのだろうか？ オスカーはまだ分からないことが増えた気がした。

「最後は自分が決めねばならぬ。しかし、そう言ったことはスリザリンの得意とするところじゃ、ではオスカー、決闘トーナメントの方も期待しておる。もちろん、わしよりもフィニアスの方が期待しているようじゃが」

もう時間は終わりだとオスカーは感じた。フィニアス・ナイジェラスがダブルドアの後ろで激しく頷いていた。それに他の校長たちもオスカーに向かって手を振っていた。

「分かりました。今日はありがとうございました」

「いや、わしの方が収穫は沢山あったのじゃ。ではおやすみ、オスカー」

「失礼します」

オスカーは螺旋階段を下りながら、また色んなことを考えていた。天文台や自分で決めるということや、スリザリン寮の話、トム・リドルの孤児院、色んなことが頭の中で回っていた。そして、結局、どれを見てもどれを考えても、一人では何も分からない気がしたのだった。

オーク樽熟成蜂蜜酒

一回目のホグズミード休暇がやってきた。五人は玄関ホールに集まって、どこを周るのか談義をしていた。

「いい加減ちゃん和三本の筭で飲みましようよ、なんかいつも誰か居なかったり、余計な奴が居たりするじゃないですか」

「そうね、前はあの女が居たものね」

「その前はトunksとオスカーがどっか行つてたの」

三本の筭でオスカーは落ち着いて飲んだことが無かった。前はリータ・スキータが現れて杖を取り出すはめになっていたからだ。クラーナの言う通り、普通のホグワーツ生が楽しんでいるような楽しみ方をオスカーはしてみたかった。

「いいんじゃないか、俺も落ち着いてなんか飲んでみたいし」

「ただ、先にダービツシユ・アンド・バンクスカどこかで買い物しない？ 次の休暇はクリスマススの直前だしね」

確かにクリスマス休暇までは休暇は無かったし、オスカーはチャーリーの発言を聞いて、ジエマが言っていた事を思い出したのだった。

校長室での出来事が余りに印象深すぎて、今の今までオスカーは忘れていたのだ。そして、今年のクリスマスプレゼントはちゃんと考えろと言っていたことは、どう考えても、ジエマと一番接点があるのはエストだったので、エストに対するプレゼントを考えろということなのだろうとオスカーは考えた。

「うん、じゃあ買い物してから三本の筭に行きましょう。あの辺の店でテキトーに買い物してから順次集合ね」

「エストも買い物はしたいしそれでいいかな」

「じゃあとつとと行きましよう。どうせオスカーがフィルチに捕まるに決まっていますよ」

「もうあれは毎回やりすぎて新鮮味が無くなってるよね」

「そろそろ濡れ衣を晴らしたいんだけどな」

フィルチがホグズミードへの外出の度にオスカーをみっちり取

調べをするのはもう恒例行事となっていた。毎年、フィルチのオスカーに対する疑念は積もりに積もっていつていたのだ。

「いいか、もし今年度お前が柵を燃やしたとか、ピーブズをけしかけてシャンデリアを落としたとか、廊下や階段を爆破したとか、立ち入り禁止の場所に入ったみたいだな噂を聞いたら、校長先生やスネイプ先生が何と言おうと事務所で逆さづりにして、退学処分にしてやるからな」

「校則は破ったことがないはずなんだけど」

フィルチはオスカーの許可証を穴が開くほど睨みつけ、なんとか偽物だと証明しようとした後、オスカーの顔に鼻を近づけて、まるで罪の匂いを嗅いでいるかの様に鼻をならした。

オスカーは正直、後ろがつまっていたのでさっさと進みたかった。後ろでは今年初めてホグズミードに行くであろう三年生達がオスカーの事を指さして何か喋っている様だった。

他の人の四倍は時間を使って、やっとオスカーはホグズミード行きを認められた。これなら秘密の通路を使った方がリスクはあるものの楽なのではないかとオスカーは考えてしまった。

「フィルチにも下級生にも大人気じゃないのオスカー先輩」

「どういう意味だよ」

「どういう意味も何も、決闘トーナメントで目立ったからじゃないですか？」

「ビルとオスカーが一番目立つ場所だったの」

「最初のあれは目立ってたし、あの後オスカーが相手してたのハッフelpの主席とレイブンクローの監督生だったからね」

ちよつとオスカーは困惑していた。ホグワーツに入ってから悪い意味で目立つことはあつたが、そうではない目立ち方は余りしたことがなかったからだ。劇は鎧をつけていたからほとんど顔は出なかったし、週刊魔女の写真も基本的には後ろ姿しか映っていなかった。

「じゃあ俺はやたら損な相手と当たってたってことか？」

「まあでも、エストやクラーナの相手をするよりましなんじゃないか

な？」

「それは間違いないわ、私的には二人がぶつかってぶつ飛ぶのが一番寮のためになると思ってたんだけど」

その二人が消えれば、レイブンクローとハツフルパフが得をするのは間違いなかった。しかし、今の発言は二人のトunksポイントを大幅にダウンさせた様だった。

「じゃあうちの寮ではニンフアドーラ対策術を寮生に周知しておきま
す」

「杖でどこを先に狙うとか、どんな術を使うかとかグリフィンドールとスリザリンで共有するの」

共通の敵がいればスリザリンとグリフィンドールでも団結できるのだろうか？　こんなことで団結されても、グリフィンドールやスリザリン本人は困るのではないかとオスカーは思った。

「ペアを組む時と言い、敵にする相手を間違えてるわよ。目標を間違えると大変なことになるってスクリムジョール先生が言っていたわ」
「僕もトunks対策術を習った方がいいかなあ」
「ふくろうの必須科目だろ」

五人は騒ぎながらホグズミードへの道を行き、店屋が立ち並ぶ通りについた。今回は本当に珍しく、イロモノな場所に行く予定が無かったので、みんなバラバラに店に入って行った。

オスカーはその中でチャリーがさっき言っていたダービッシュ・アンド・バングスという魔法の道具を売っている店に入った。エストが好きなモノや、クラーナから前回もらった秘密発見器のことを考えると、本以外で二人に渡すものは魔法の道具が一番考えやすいと思っただのだ。

万眼鏡やかくれん防止器と言った定番の商品や、メラメラ眼鏡のよ
うな何に使うのか良く分からない商品も沢山置いてあった。しかし、
どうもオスカーはクリスマスに渡すモノとしていいモノがあると思
えなかった。

「なんかいいモノあったの？」

オスカーが商品棚の前で悩んでいると、後ろにトunksが来てい

た。オスカーはこういう事を一番聞きやすそうなのは、からかわれることを除けばトunksだと考えていた。

「ないからちよつと考えてるんだ。なんかジエマから今年のプレゼントはちやんと考えろとか言われたし」

「あの二人はあんたから貰えたらそれだけで喜ぶんじゃない？」

何も言っていないのに、誰に対するプレゼントを選んでいたのかはバレバレであったようだった。

「そんなこと言われてもな…… じゃあトunksは何が欲しいんだ？」

「はあ？ あんたほんとアホになってるんじゃないの？ 二人の話をしてるのに私の話してどうなるのよ。稼ぐポイント間違ってるわ」

トunksはそばに置いてあったメラメラ眼鏡をかけ、バカにするように手をひらひらと振って、その上、鼻でオスカーを笑う。

「そのメラメラ眼鏡でいいの？」

「私は週刊魔女のバックナンバーをプレゼントするわ」

「それはやめてくれ」

「じゃあアホなことはやめるべきね」

オスカーはもうあれ以上週刊魔女を見るのはごめんだった。ペンスは五冊も週刊魔女を持っていたのだ。それにフレッド・ジョージが思いだしたように引き延ばした写真をドロホフ邸のタペストリーにはるので、いい加減うんざりだったのだ。

「そうだ…… なんかプレゼントの事を言ってただろ、夏休みにお菓子の話をしてた時に」

「手作りがどうのこうのって話？ ほんとあんた良く分からない話は覚えてるわよね」

「その話だ。確かに手作りの方がそれっぽいかもな」

「男から手編みのセーターとか手作りのお菓子って、流石になんか違うでしょ」

自分で作ったセーターやお菓子を取りあえず目の前のトunksに渡す絵面をオスカーは想像したが、はつきり言ってあまりいい風景になると思えなかった。

「やつぱりなんか違うな、それで？ トンクスだったら何が欲しいんだ？」

「あんたなんだかんだ言っただけで諦めがほんとに悪いわよ。そうね……誰かがバカなことする前に分かるモノとかが欲しいわね。バカなことをするって分かったら忍びの地図を見て、エストかクラリーナに追いかけさせるわ」

オスカーはトンクスの言っていることを理解しようとして、馬鹿馬鹿しいメラメラ眼鏡をかけた顔をじっと見つめたが、馬鹿馬鹿しいということしか分からなかった。

「分かった。ちよつとクリスマスまで考えてみる。今日はもう三本の箒に行こうと思うけど、どうする？」

「エストとチャリーがクイディッチの用具を見てたからそつち寄つてから行くわ。多分、クラリーナのアホが早々に買い物終わらしてはるはずだから捕まえといて」

「ああ合流して席とつとけばいいんだろ」

「ファイア・ウイスキー飲ましてお持ち帰りしちゃダメよ」

今度はメラメラ眼鏡を外してウイंकして出て行ったトンクスをオスカーは見送った。オスカーはなんだかんだ言っただけで、自分の事を聞かれるのが実はトンクスは苦手ではないのかと最近になって思い初めていた。

ダービツシュ・アンド・バングスを出て、ホグワーツの制服でにぎわう Hogwarts ミードのメインストリートを歩きつつ、オスカーは三本の箒に向かった。トンクスの言う通りなら、早々に買い物終わらしたクラリーナがどこかにいるはずだった。

人でにぎわう三本の箒に入って、ダークグレーの髪の毛を探してみたらオスカーは中々発見できなかった。カウンターの向こうで、他の人に飲み物を出していたマダム・ロスマルタがオスカーの方を見て、さっきのトンクスのようにウイंकしてきた気がした。その後、しばらく目を凝らして、やつと大きな鉢植えに植わっている植物の影にその髪の毛が見えた気がした。

「その木の後ろだと全然見えなかったんだが」

「オスカー一人ですか？ ああ、これはわざとです」

「一人だけど…… わざと？」

「なんか入った時に、先に店内に座ってた三年生の集団にさっきのオスカーみたいに指をさされて、週刊魔女がどうのこうのみたいなのが聞こえてきたんですよ。だから見えない位置に動いたんです」

いい加減本当にオスカーは週刊魔女の編集部を燃やしたい気分だった。こんどリータに会ったのなら、インセンディオくらいなら許容範囲なのではないかとオスカーは考えた。

「先に取りあえず飲み物買ってくる。残りの三人がどれくらいかかるか分からないしな、クラリーナはどうする？」

「私はバタービールをお願いします」

さっきのクラリーナの話からして、二人で買いに行くのがためらわれたので、オスカーはマダム・ロスマルタに一人で注文しに行った。

「あら？ ラックレス卿さん、今日は一人なの？」

「後から来ると思います。バタービールを一つと…… なんか俺が飲めるもので、おすすめはありますか？」

マダム・ロスマルタやホグズミードの商店を開いている人たちには去年、劇のポスターを貼って貰ったせいでオスカー達の顔が割れていた。特に三本の箒ではハグリッドが何度も行って、大声で劇の話やみんなの話をしたせいか、マダム・ロスマルタもハグリッドと同じくらいにはオスカー達のことを知ってるようだった。

「そうね、蜂蜜酒をちよつと飲んでみたらどうかしら？」

「じゃあそれとバタービールを一本お願いします」

オスカーは自分がどれくらいお酒が飲めるのかは分からなかったが、取りあえずプロに頼んで、クラリーナに渡さなければ大丈夫ではないかと考えた。

バタービールと蜂蜜酒を持って、テーブルに戻ると 鉢植えの向こう側にあるちょうど見えないテーブルにオスカーがよく知っている巨体が座ったのが見えた。

「ハグリッド？」

「先生方みたいですね」

ちょうど二人の姿は鉢植えの植物で向こう側からは見えない様だった。声を聴くに、ハグリッドとマクゴナガル先生、フリットウィック先生だとオスカーには分かった。

「アイスさくらんぼシロップソーダ、唐傘飾りつき」

「ギリウオーターのシングルで」

「ホット蜂蜜酒五ジョッキ分」

マダム・ロスマルタが先生陣の注文を受け取って、飲み物を取りに行くのが木の間から見えた。その間にも三人が話をしているようだった。

「しかし、彼がホグワーツにやってくるとは思わなかった」

「スクリムジヨール先生のことですかい？」

「そうですよ、ハグリッド。私も魔法省にいた事があるので分かりませんが、闇祓い局は魔法省でも肝入りの部署ですし、先生は其中でも指折りのオーラーです」

どうもスクリムジヨール先生の話が始まった様だった。クラーナはオスカーが見て分かるほど、木の向こう側に聞き耳を立てている。自分の方を見ているオスカーに気づき、クラーナは声が喋っても漏れないくらいオスカーに近づいた。

「どうする？」

「三人がいつくるか分かりませんし、それまで盗み聞きしますか？」

「じゃあ聞きながら飲んどくか」

「そうですね、乾杯です。オスカー」

「ああ、乾杯」

木の向こう側ではマダム・ロスマルタが戻ってきたのがグラスを置く音で分かった。フリットウィック先生の特徴的なキーキー声が聞こえてくる。

「ホグワーツの新しい先生の話をしてらっしゃるの？」

「そうなるね、ロスマルタ。初めは魔法省がホグワーツへの影響を強めようとしているなんて言われていたが、どうもそうではないらしい」

「ファッジがダンブルドアがいるホグワーツに手出しできるわけがね

え」

「ハグリッド、ファッジ大臣ですよ。ファイリウスの言う通り、スクリムジョール先生がいらっしやっしたのは魔法省内で色々ごたごたしているのが理由の様です」

これは夏休みにキングズリーとムーデイが話していた事だとオスカーはピンと来た。目の前のクラーナも闇祓いの話とあってより真剣に聞いている様で、バタービールを飲む手が止まっていた。

「ごたごたとは何のですの？」

「それは大臣が魔法事故惨事部の出身であることと、闇祓い局が未だにダメージを引きずっていることでしよう」

「闇祓い局や魔法警察部隊は戦争の矢面に立っていたし、何よりバーティ・クラウチがいなくなっただけの大きい」

「ファッジが大臣になったのも、その…… あ…… ミスター・クラウチがいなくなっただのと、ダンブルドアが断ったからちゅうことだっでことですかい？」

「そう言うことだね、ハグリッド」

バーティ・クラウチ、その名前をオスカーは最近良く聞く様だった。相変わらずクラーナのバタービールは減っていないかった。

「じゃあ、ファッジ大臣と魔法省の執行部や闇祓い局がいわゆるごたごたをしていて、その余波でスクリムジョール先生がホグワーツに來たんですのね」

「その通りだロスメルタ。少なくともホグワーツの教師陣はそう思っている。ミネルバならもう少し詳しい話を知っているはずだが」

「ええ、ファイリウス。戦争が終わって、戦闘用の人員や部署、役職等を減らそうと言う動きがバグノールド大臣の頃からあったようですが、前大臣にも例のあの人がいなくなった後の闇祓いに起こった事件二つが大きかったようで、心情的に動けず。ファッジ大臣に代わってやっと始まったでも、自分の出身部署ではないですし、クラウチ氏のやり方で來た執行部の人員が早々従うことが無いと言う話のようですね」

「マクゴナガル先生。闇祓い局が弱つとるちゅうのは人が足りないの

ではないんですかい？」

ハグリッドの質問はもつともだとオスカーも思った。弱っている闇祓い局の人員を減らすのは問題ではないのだろうか？　そして、二つの事件と言うマクゴナガル先生の言葉を聞いた途端にクラリーナはバタービールを半分一気に飲んだ。

「ハグリッド、君も知ってるだろう？　闇祓いには許されざる呪文の使用が戦争中は許可されていたことを」

「フィリウスの言う通り、魔法警察部隊と違って、戦闘以外に捜査や人員を従えることもする闇祓いには他にも戦争に期して色々なそう……　悪い言い方ですが、権力が集まっていたのです。しかしそれは戦争中の話ですから元に戻さないといいけません。そうですね、闇祓い自体の人数を減らすと言うよりは、闇祓いが影響を及ぼせる人間が減ると言う事でしょう」

「とにかくファッジ大臣と闇祓い局の仲が良くないということですね」

オスカーにはハグリッドとマダム・ロスマルタが話について行けていないと感じた。オスカーも正直なところ、マクゴナガル先生の言っていることが半分も理解できているのかは怪しかった。

「そうなるね、ロスマルタ。それに闇祓いの志望者が戦争が終わって激減してるのも、彼が Hogwartz に来た理由にあるのだろう」

「それは……　まともな魔法使いの親なら、あの戦争の後に子供を闇祓いにさせようなんて早々言えないでしょう」

「ええ、もともと闇祓いは最高の者しか採らない最難関の職業ですが、それ以前に目指す人間が Hogwartz でも減っているのです」

「だけど、クラリーナはちげえ。あの娘は俺がマッドアイ・ムーデイの代わりにダイアゴン横丁について行った時からなるっていつちよった」

今度はクラリーナがバタービールを全部飲み干した。オスカーはクラリーナが飲んでいたものがバタービールで良かったと思わざるを得なかった。

「クラリーナ？　あのアマータ役の女の子ですか？　週刊魔女に載っていた？」

「その娘ですよ。そうですね…… 彼女はイライザの妹ですから、目指すのが当然なのかもしれません」

「私がみた中でもイライザは杖使いがずば抜けていたが、あの娘もそれに負けないくらい上手い」

「アラゴグを見て、逃げねえ女の子なんてクラリーナの姉さんくらいしかいねえ」

正直、オスカーは先生方の話を盗み聞きしたのを後悔していた。普通のホグワーツ生の様に楽しく飲めると思っていたからだ。空のグラスを時々口に運んで、何も入っていないことを思いだしたように下げられることを繰り返しているクラリーナをオスカーは見たく無かった。

「道理で見たことのある顔だったわけですわ」

「フィリウスの言う通りでこれまでかなりの数の生徒に変身術を教えってきましたが、イライザに匹敵するのは今教えているミス・プルウェットくらいでしょう」

「確かにその二人やその周りはずば抜けて優秀だ。二人はもちろん、ミス・トンクスもまあちよつとミスはするが素晴らしい術の冴えだし、決闘トーナメントではミスター・ドロホフは素晴らしかった。それにミスター・ウィーズリーは……」

「魔法生物とクイディッチに関しちや、チャーリーは俺が見た生徒の中でも違うモノを持つちよる」

やつと話がクラリーナの姉からずれたようだったが、クラリーナの動作がさつきから全く変わってなかったため、オスカーはクラリーナの空いたグラスを取り上げて、自分のほとんど飲んでない蜂蜜酒を押し付けた。オスカーの行動に驚いて目を開き、何か言おうとするクラリーナに、片指で先生方を指し、もう片方を自分の口にやって静かにするようオスカーはジェスチャーした。

「あの劇の子たちはそんなに優秀だったんですの？」

「まあずば抜けているでしょう。戦争の影響を物心ついた状態で色濃く受けている世代だから当然かもしれないですが」

「それよりも驚くべきは違う寮なのに仲がいい事だと私は思うね」

「ちげえねえ。生まれや色んなことがあるはずなのに一緒にいれるの

はまったくすげえ」

やつと、木の向こう側からテーブルにグラスを置く音が聞こえた。オスカーが押し付けた蜂蜜酒をクラリーナは今度はチビチビと飲んでいた。

「ではそろそろ戻りますか、生徒達が帰る前に戻らないとまたファイルチが門のところで渋滞をつくるでしょう」

「違くない」

「ほい、ロスメルタまた来るぞ」

「皆さままたいらっしやい」

ハグリッド達三人は帰った様だった。マダム・ロスメルタがグラスを戻す音や、他のホグワーツ生が騒ぐ音が三本の筈に聞こえていた。オスカーはクラリーナに何と喋っていいのか分からなかった。早く三人に来て欲しかった。クラリーナは本当にゆっくりと蜂蜜酒を大事そうに飲んでいて、まだ四分の一も減っていなかった。

「ビルが呪い破りを目指すって夏休み言っていましたよね？」

「ビル……？ ああグリーンゴッツに行った時か？」

「そうです。その時言ってたでしょう。ウィーズリーおばさん……」

チャリーやビルのお母さんは危険な仕事や職業に反対するだろうって」

「言ってたな、魔法省を受けて欲しいだろうって」

ほとんど視線を蜂蜜酒からずらさないまま、クラリーナはオスカーと喋っていた。オスカーからは蜂蜜酒のグラスに映っているクラリーナがゆらゆらして見えた。

「私はウィーズリーおばさんがそう言うのが分かります。さつきもマダム・ロスメルタが言っていましたけど、まともな親なら危険な仕事を選ばせないだろうってそう言う事がです」

「誰だって危険な事を身内にやって貰いたくないだろうけど、でも誰かがやらないといけないことだし……」

オスカーにはクラリーナが自分に何と喋って欲しいのか分からなかった。できるのは取りあえず聞くことだけだった。それにモリー・ウィーズリーが恐らくそう考えるに至った理由はオスカーにも関わ

ることだった。

「まあそうでしょうけど……」

とここまで言っていてクラリーナは顔を上げて、オスカーの方を向いた。オスカーはちよつとクラリーナの顔が赤くなっている気がした。

「そうだ、オスカーは…… えっと、そうですね今度グリフィンドールの六年生の監督生がインターンに行くんですけど」

「インターン？」

「学生の中に少し働いてみて、どんな職業なのか知るみたいな機会があるんですよ。それで、グリフィンドールの寮生たちがその監督生が帰ってきたらなんかお祝いするらしいんですけど」

「へえそう言うのがあるのか」

オスカーは初めて知った知識だった。学生の中に職場がどんなモノか知れるというのは結構面白そうだとオスカーは思った。

「それで…… その人が帰ってきたその日にサプライズでケーキやら横断幕みたいなのを作って驚かすってみんなが言ってるんですけど、そこに入れる動物の絵をグリフィンドールの獅子にするか、その人の守護霊にするかでもめてるんです」

「その人は守護霊の呪文を使えるんだな、決闘トーナメントで当たらないといいけど…… ああインターンってやつでないのか？」

「そうです。その人はいいはずですよ。それで、オスカーはどう思いますか？ というか自分の守護霊が入ったモノって嬉しいですか？」

確かに守護霊は自分の寮の象徴以上に自分を象徴しているモノのはずだから、プレゼントにはこれ以上無いモノの様にオスカーは思った。

「その話だと横断幕とケーキに獅子と守護霊を分けて入れればいいと思うけど…… まあでも自分の守護霊を描かれたモノを貰ったら嬉しいんじゃないか？ だって自分の事をそれだけ知られてるってわかるわけだろ？」

「そ、そうですね。その…… オスカーは嬉しいんですか？」

自分の守護霊。トンボが入っているモノを貰って自分は嬉しいのか？ 記憶の事をほとんど思いだせない自分がそれを貰って嬉しい

のか？　しかし、もし貰えるのならやはり言ったようにそれだけ思いが込められているということのはずなので、やっぱり嬉しいのではないかとオスカーは考えた。

「多分嬉しいと思うけどな。まあ俺に聞いても参考にならないと思うけど」

「なるほど……　分かりました」

クラリーナはそれだけ言っつて、蜂蜜酒を半分くらいまで飲み干した。さっきまでのチビチビを考えると随分早いペースだった。

「遅くなったの」

「箒磨き粉の新しいやつが出てたんだよ。ごめんね」

「ちよつと待たせすぎたかもね、あれ？　クラリーナそれ蜂蜜酒じゃないの？　私まだ飲んだこと無いのよ、ちよつとくれない？」

クラリーナが蜂蜜酒をテーブルにちようど置いたタイミングで三人が来たようだった。クラリーナは少し据わった目でトunksを見ていた。

「ダメです。これは私が貰ったんです。トunksにはあげません」

「ええ、何よそれ。オスカー、ファイア・ウイスキー以外でお持ち帰りしようとしたんじゃないでしょうね」

「なんだそれ」

「なんかもうクラリーナが出来上がってるの」

クラリーナがトunksに酒を渡しても渡さなくても、飲み物は足りないようだったので、オスカーはチャーリーともう一度マダム・ロスメルタに注文しにいった。

「なあ、チャーリーの家に置いているあの時計ってどつかで売ってるモノなのか？」

「時計？　家とか学校とかいのちが危ないって書いてあるあれのこと？」

「その時計の事だな、チャーリーの家族九人分の針があるやつ」

「うーん……　多分売ってるモノじゃないと思うんだけどね、ママは同じ時計は見たこと無いって言ってたし。エストに聞けば何かわかるかもしれないけど」

「そうなのか、あれも忍びの地図と似たようなものかな」

オスカーがさっきのトンクス話を聞いて、真っ先に思いついたのがチャーリーの家に置いてある時計だった。あの時計ならば誰かが危ない事をした時に分かると思ったのだ。ただ、そういう道具はエストの方が詳しいだろう事は分かっていたが、オスカーはほとんど家族のほずなのにあの時計に針が無いエストに聞くのがちよつとはばかられたのだ。

二人は今度はバタービールを四本もってテーブルに戻った。

「じゃあ一緒に練習しないってことなの？」

「そうです、私とエストはトンクスを粉みじんにするため、紳士協定を結びました」

「どの辺が紳士なんだ」

「オスカーは黙っててください。つまりですね、トーナメントから脱落するまではペア以外では手の内をばらさない様にしようって事です」

蜂蜜酒のせいかクラーナは饒舌だった。相変わらずトンクスにとられないように蜂蜜酒のグラスを両手でしっかりと固定していた。

「そんなに決闘の手の内がばれたら不味いの？」

「クラーナは魔法薬とか、変身術とかそう言うのも重要になつてくるって言ったの」

「普通の攻撃呪文以外ってことか？」

「そうです。決闘場以外で決闘するのは失神呪文を馬鹿の一つ覚えみたいにバンバン打つだけにさせないって意図があるんだと思います」

魔法薬がどのようなにして決闘の役に立つのかは余りオスカーには想像できなかつたが、変身術が決闘では恐ろしい効果を発揮するのは身を持って知っていた。特にエストが使うのなら一段と警戒しないといけなかつた。

「魔法薬を持ち込むってことだよな？ OKなのかな？」

「まだルールはちゃんと言われてないわよね。まあ小さくして隠せば持ち込めそうだけど…… けどエストもクラーナもいいのかしら、お互いに秘密にしたら色々逆効果だと思っけどね。ねえちよつとくら

いくれてもいいじゃない。私のバタービールを飲んでもいいわよ」「うるさいですよ。今度という今度はボコボコにしてやります。それにこれは私のです」

「今度からクラリーナにはバタービールしか飲ませちゃダメなの」「ホントは俺が飲んでるはずだったんだけどな」

結局オスカーは蜂蜜酒をオーグリーの涙くらいしか飲めていなかった。それにクラリーナやエストと一緒に練習をしないとすることは、レアと一緒にトーナメントに出るにあたって、何を練習するのか自分で主体的に考えないといけないとオスカーは思った。

一通り三本の箒で騒いで、クラリーナがちよつと静かになったのを確認してオスカー達は学校へと戻った。結局トunksは蜂蜜酒を飲むことはできなかったようだった。オスカーとエストは厨房へ向かうトunksと別れて、地下牢にあるスリザリン寮へと向かった。

少し早く寮へと戻ってきたため、湖を通して緑の光が差し込む談話室には人が少なかった。良く授業の事を聞きに来るジエマは談話室にはいない様だったので、二人は湖の見える窓際の椅子に座った。エストはいくらでもモノが入るようにしたポーチから、ハニーデュークスで買ったらしき百味ビーンズをボリボリと食べている。

「さつきチャーリーにも聞いたんだけど、隠れ穴にある時計があるだろうか?」

「時計? モリーおばさんがやることを示す方? それともウィーズリー家みんながどこにいるか分かる方?」

「後ろの方だな、あれって忍びの地図みたいなものなのか?」

それを聞いてエストは百味ビーンズを食べる手を止めた。最後に十粒ほど一気に食べたのが舌に来たのもあるかもしれない。最後に

「似てるかもしれない。どっちもホムンクルスの術なのは間違いないと思うし」

「その術って具体的に何をしてるんだ?」

「うーん…… 説明するのは難しいんだけど…… 本を探す時ってタイトルとか人の名前を探すよね?」

「そうだな」

「貸し出してるかどうかのリストがあれば図書館にあるかはすぐわかるけど、実際にあるかは本棚の前まで行かないと分からないよね？」
「まあ図書館から盗んだんなら、マダム・ピンスに大イカのエサにされかねないけどな」

実際に魔法が何をやっているのかを理解するのは非常に難しい話だった。変身術の授業でも、取りあえず術は成功してもその理論を理解している学生が沢山いるとはオスカーには思えなかったからだ。

「これだと本の名前が…… 難しい言い方をすると、依り代になつて
るの」

「依り代？」

「そう、その物体とかモノそのものじゃないけど、その状態を示すモノのこと。本の名前がリストにあるかどうかはその状態を示してるの」

「本体がどうなってるのかを示してるモノってことか」

「うん。他の例だと…… スリザリン寮って言葉はうちの寮生全部の事で、緑の宝石はスリザリン寮の得点って状態を示している依り代なの」

オスカーにもだいたいエストが何を言いたいのかが分かってきた。やはり、こういう魔法に関して分からないことをエストに聞けるという環境は確実にオスカーの能力を上げていた。

「この本体を人にした時に、対応した依り代を創り出す術がホムンクルスの術だと思うの」

「その人の状態を示すモノを作るってことか？」

「そう。忍びの地図だと、まるで地図の上ではもう一人の人間が歩いてるみたいでしょ？」

地図の上に人間を創り出しているのと同じだということだろうか？ なぜこの術がホムンクルスの術と呼ばれているのかはオスカーには余り理解できなかった。

「どの程度の状態を読み取ったモノを依り代にするのかが難しいし、それに他の要素も入れないといけないの。だって、言うならホグワーツの地図はホグワーツそのモノじゃないし、あの時計の職場が示して

るのはアーサーおじさんの職場だから魔法省のことだけど、あの時計の職場って所自体が魔法省そのモノじゃないでしょ？」

「じゃああの地図とか職場って場所も依り代だってことか？」

「まああそこにかかっているかどうかは分からないし、必要の部屋が忍びの地図に現れないことを考えると、多分ホグワーツそのモノ自体のホムンクルスを作っているんじゃないと思うけど。でも部分的にはそうかもしれないの。だって階段が動いたら地図も動くでしょ？」

「確かに……でも、ホグワーツとか魔法省ってなんか……地図には現れないんじゃないかなかったか？」

オスカーはやっとエストの言っていることが分かってきた。どうも人間だけでなく、他のモノ、建物すら生きているモノに見立てて変化をさせているという事のようにだった。

「位置発見不可能呪文のこと？ 確かにあれは地図の中で発見できなくなるけど、その建物や場所の中とかでは認識できるし、それに魔法の対象をその位置じゃなくて、その位置の傍で消えたとかにして置くとか、そもそも人間が依り代になっているんなら、その中からの情報を受け取れるわけだから問題ないと思うの。だってあれはあくまで建物や場所を地図や人の眼から消す魔法で対象はそれだけなの」

「魔法をかける対象が違うってことか…… こういうのを聞いているとその…… 本体の状態の一部だけなら依り代を作るのは簡単なのか？」

「それはそうじゃないかな。例えば…… 人間で一番簡単なのは生きてるか死んでるかじゃないかな？ だって魔法力でも心臓の鼓動でもないけど、人のそれを魔法の対象にすればいいの」

エストの話聞いて、オスカーはだいたい何をやればできそうなのかは分かった気がした。それにクリスマスまでにダンブルドア先生と喋る機会があれば、たとえ図書館で分からなくてもどうにかかなりそうではあった。

「ホムンクルスの術って結構色んなことに使えそうな感じだな」

「魔法を上手く使うコツの一つが対象を選ぶことだからそれはそうなの。変身術でも一部を変えるのと全体を変えるのでは全然難易度が

違うでしょ？ だから対応させる状態だけを選ぶホムンクルスの術は凄く難しい呪文のはずなの。だって普通にただ呪文をかけたら抜き出す状態とか情報が大きくなりすぎちゃうの。忍びの地図はホグワーツにいる人間っていう凄く大きな対象から必要な状態を選択して、最低限の魔法だけで動いてるから凄く……なんていうか……シンプルで賢い魔法の道具だと思うな」

相変わらず、こういったことを喋らせると止まらなくなるのがエストだったが、オスカーはこうやってガラスの横で二人で話をするのが好きだった。

「面白いよね？ スクリムジョール先生が第一法則が守られているってことはずっと闇の魔法使いが負けてきたってことだって言ってたでしょ？」

「言ってたな」

「もしかしたら誰かがホムンクルスの術を魔法界全体に魔法をかけたのかもしれないの。魔法界が悪くなったら分かるように」

オスカーはそういう別々の場所やモノや色んな意味を結び付けて話してくれるエストの話の話を聞くのが好きだった。

それは、そういう話を聞けるということがそもそも色んな事を示してくれている気がしたからだ。

悪戯仕掛け人

二度目の決闘トーナメントの日になったが、オスカー達はすでに出場を決めていたので他の生徒達が決闘し合っているのを見ているだけだった。

出場を希望していた生徒達のほとんどが決闘を終え、スクリームジョール先生が決めていた時間になった。

「ではこれまでで、予選を終了とする。三勝以上したモノはエントリーする二人分の名前を羊皮紙に記入し、次の決闘トーナメントの間までに大広間に設置する箱に入れること」

やはり大広間はざわついていて、他の寮と組んで何かをやるという事自体がホグワーツではやりにくいことだと示しているようだった。「次にどのような条件で競技を行うのか説明する。今回三勝したのはエントリーした百七十七人の内、二十八人だ。その為十四ペアが最大で本選にエントリーできる」

運営している教師の側では具体的な数字が分かっているようだった。オスカーは何百人も生徒がいるうちで自分の周りの全員がエントリーできてきているのは結構な確率だと感じていた。

「その為、トーナメントの決勝まではおおよそ三試合から四試合してもらふことになるだろう。また今回のシード枠には体力的な問題を考慮して、下級生を優先的に取り上げることとする」

オスカーはそれを聞いて自分達には有利に働くのではないかと考えた。決闘トーナメントに出場している学生の中にはあまり四年生や三年生で本選まで残っている学生がいなかったからだ。

「私たちもそうですけど、レアと組むオスカーはほぼ確実にシード枠なんじゃないですか？」

「多分そうだと思う。本選に残ったのは六年生が一番多そうだしな」

意外なことに最上級生の七年生には余り本選出場者がいない様だった。単純に考えれば一番技量が高いのは七年生のはずなのだが。

「七年生があんまりいないのはイモリ試験にかぶるかもしれないからかな？」

「それに就職関連とかもあるからじゃない？」

「じゃあ割と私たちには色々有利に働きそうなわけね」

つまり七年生には他にも重要な用事がある人が多い為、このトーナメントに出てくる人間が少ないということだった。

「次に本選の詳細なルールについて説明する。すでに君たちを取り囲んでいるように、本選では多種のフィールドで戦ってもらう」

ホグワーツ生たちは自分達の周りに広がっている市街地や荒野、森、ホグワーツらしき城の中、図書館の中といった風景を見回した。「二対二でやってももらうことは最初に伝えた。それに加えて、この競技ではフィールドにあるモノを変身術で変化させることも自由とするし、エントリーする二人以外の人及び人に準ずる生物の協力を得る以外は何を持ち込んでも自由とする」

また生徒達にざわざわが広がっていき、オスカーの隣ではクラリーナがそれ見たことかとはばかりにちよつと胸を張っているようだった。

「じゃあ箒とか魔法薬とかさそう言うのでもいいってことだよね？」

「そういうことでしよう。まあ事前に朝食に魔法薬を忍ばせるとかはダメでしょうけど」

「オスカーは朝食に注意した方がいいわね」

「なんで場外で戦わないといけないんだよ」

「人に順ずるってことはヒッポグリフとかなら持ち込んでもOKなのかな？」

オスカーはちよつと決闘トーナメントが怖くなってきた。突然決闘場に暴れ柳やルーンスパールが現れて決闘どころではなくなる可能性を思い浮かべたからだ。

「いくらエストでもヒッポグリフを引き寄せ呪文で呼び寄せるとかはできないでしょう」

「そんな大きなモノを呼び寄せられるなら、ホグワーツの天井を呼び寄せた方が早いのに」

「大広間の天井をぶつ壊すのは止めてくれよ」

「またオスカーがフィルチに追っかけられる理由が増えるわね」

「水中人とかケンタウルスはダメでも、ドラゴンやアクロマンチュラ

なら大丈夫ってことか……」

オスカーはチャリーやハグリッドのブツブツを聞かないことにした。流石にいくらチャリーやハグリッドが怪物や魔法生物が好きでも、決闘場に持ち込むためにドラゴンやキメラを手に入れてくるとは考えたくなかったからだ。

「以上、細かいルールは大広間に設置する箱の隣に置いておくため各自で確認すること。次回は試合順の発表と一回目の本選を行う。それではこれから五回の競技の中で、競技に参加する者も観戦する者も授業では得られないモノを掴み取って貰う事を願う」

決闘トーナメントの説明が終わって、ホグワーツ生たちはそれぞれみんな散り散りに帰り始めた。まだ外出禁止の時間までは時間があつたため、生徒達はそれぞれ遊ぶ予定を立てて、ゴブストーンをしたり、宿題をするために図書館に行く予定を立てているようだった。

「じゃあ私とエストはちょっと別行動しますね」

「オスカー、多分時間ギリギリまで寮に帰らないと思うの」

「何よほんとにそんな本気で戦略を練る気なの？ どうせ何試合もするんだから一緒なんじゃないの？」

どうも二人は初日から練習をする気が満々のようだった。オスカーとしては、なんだかんだオスカーを通して喋ることが多かったり、クリスマスに喧嘩したりしていた二人が仲良くなるのは嬉しかったが、逆にその二人に決闘トーナメントについては聞けないというのは結構厳しいモノを感じていた。

「秘密はちゃんと秘密にするから意味があるの」

「そうですよ、秘密とか戦い方を知っている人間が相手にいたら逆手に取られるでしょう？ よく知っている人や味方が敵に回る程恐ろしいことは無いですよ」

確かに、相手に勝つためにはできるだけ相手の情報を集めて、勝ち筋を掴み、計画してそれを実現するだけの実力が無くてはいけない。オスカーはそれを十分に理解していた。

「ふーん。じゃあ二人にとってオスカーは強敵ってわけね」

「僕らにとっても強敵だけどね、まあ脱落するまでは一緒にやらなく

てもいいんじゃないかな」

「その方が試合の時は面白いかもな」

「まあなんでもいいですけどトンクスはボコボコにします」

「トンクスと当たったらただけどね？　じゃあね」

そう言っ行ってしまった二人を見て、トンクスはやれやれと額に手をあてて大きめにジエスチャーした。それを見たチャーリーが苦笑していた。

「僕はオスカーがクラリーナと組むのかなって思ってたんだけど違うんだね」

「なんか三人が良く分からないこと言ってる間にレアに頼まれたしな」

「ここに来てダークホースの台頭って感じね」

トンクスは相変わらずなんでもからかうのに忙しいようだった。しかし、オスカーはアホなことを言ったり、階段から落ちたりと言ったドジだったり、家事の呪文や整理整頓が絶対的にできないトンクスだったが、魔法に関してハツフルパフでは恐らく一番できる魔女だという事を知っていた。性格からして監督生に選ばれるかは甚だ疑問だったが。

「トンクスとチャーリーも二人で練習するのか？」

「クラリーナをはめる罫を考えるわよ、オスカーがエサになってくれれば一発でしょうけどね」

「二応するんじゃないかな？　ただ僕ら二人共今年もクイディッチがあるし、エスト達みたいにそんなに予定を合わせれないと思うんだよね」

この二人にも決闘の事を相談できないとなると、いよいよオスカーはホグワーツで相談できる相手がほとんどいなくなってしまうのだった。スリザリン寮の同級生と喋るようにはなつたし、決闘の事なら寮の得点に関係するのでスリザリン寮の雰囲気からして協力はしてくれるはずではあったのだが。

「まあ、オスカーは取りあえずレアをホッグズ・ヘッドに連れてってお持ち帰りはしちやダメよ？　あとクラリーナには蜂蜜酒も禁止ね」

「なんかトンクスに言わせるとオスカーは毎回女の子にお酒飲ませる奴になってるよね」

「だからボク、ホッグズ・ヘッドではバタービールしか飲んでないです…… 三本の筭でもバタービールしか飲んでないですし」

トンクスはレアがオスカーの後ろにいるのを分かって言った様だった。今日はレイブンクロウの女の子たちはレアにはついてきていなかった。

「オスカーは女の子の綺麗なところも汚い所も受け止めるように精神を鍛えるべきね」

「そうなくてもトンクスは受け止められそうにないな」

「またハツフルパフは減点みたいだね、じゃあ僕らも行ってくるよ」

さらにまたいつもの五人の内の二人が行ってしまったので、レアとオスカーは二人になってしまった。

「その…… 練習とかするんでしょうか？ レイブンクロウの監督生と主席はボクに色々と決闘に役立つ呪文とかをリストにして渡してはくれたんですけど。自分達も出るからあんまり手伝えないかもって言ってる」

「練習はしようと思ってたけど…… レアは何か覚えたいとかそういうことはあるのか？」

オスカーはそんなに自分がレアに教えられることがあるとは思っていなかったの、レアに聞くことにした。しかし、レアがした顔はちよつと決意のこもったような顔だったのでオスカーは意外だった。

レアはあたりを見回して、誰も聞いていないことを確認してから、少し息を吸ってオスカーに話した。

「えっと…… 多分危険だし、あんまり先生にも教えて貰えないと思うんですけど…… オスカー先輩はあの時…… クラーナ先輩と閉心術の練習をしてましたよね？ ボクもあれをマスターしてみたいんです」

「閉心術……」

オスカーにはレアが相当勇気を出してオスカーに切り出しただろう事が分かった。叫びの屋敷でのオスカーとクラーナのやり取りを

レアは見えていたし、ホッグズ・ヘッドの一件や日刊預言者新聞の内容から、レアが記憶や心の内を見られるのに抵抗が無いと思えなかったからだ。

「もちろん、優秀な七年生とかでも開心術を使えるような相手がいると思えないので、完全にボクのがままなんですけど……」

「俺は大丈夫だけど……　と言うか、そもそも開心術自体を呪文しか知らないからな……」

そもそもオスカーはクラーナに開心術を使えるようになったと言われはしていたが、問題を解決するためにすこしかじっただけであり、ちゃんとした教育を受けたわけでは無かった。

「い、一応図書館から本は借りてきました」

レアは少しビクビクしながらカバンの中から開心術や閉心術に係りありそうな本を数冊取り出していった。申し訳なさそうではあるものの、レアは最初から閉心術の練習をやる決意してきているようだった。

「それに……　オスカー先輩が開心術を使えるようになれるんだっから決闘トーナメントでは凄い武器になると思うんです」

「そりゃそうだけどな……　取りあえず場所を移すか？」

レアとオスカーの二人は大広間の外の廊下で立って喋っていたので、結構な人数の学生たちが通りがかるたびに二人の方を見ていたのだ。

「えっ？　はっはい」

あわててカバンに本を入れるレアを見ながら、オスカーはどこで練習をするべきなのか考えていた。必要の部屋にはなんとなくもうエラストとクラーナがいそうな気がしていたし、閉心術の練習をすると言って空き教室を貸してくれる先生にもオスカーは心当たりがなかったのだ。

忍びの地図を見ながらオスカーはホグワーツの五階に向かっていた。ざっと地図を見た感じでは飛行訓練をする場所にトンクスとチャーリーの名前はあったが、エラストとクラーナの名前は空き教室にも校庭にも見つからなかったため、どうもオスカーの予想は当たって

いるようだった。

五階の大鏡の後ろ側、ここにホグズミードに繋がる秘密の通路の一つがあることをオスカーは忍びの地図で前々から知っていた。それに、一度エストと一緒に探検した時に、この通路が空き教室並みとは言わないが人が十人近く入れることも知っていたのだ。

「インセンディオ」

鏡の裏側には誰が設置したのか燭台があったため、オスカーは呪文で火をつけた。照らし出された秘密の通路は二人が何か呪文の練習をするには十分すぎる程の広さだった。

「去年のトランクがあれば練習する場所に困らなかつただけだな」

「劇の練習に使ってたトランクですか？」

「それだな、あれなら一組ずつ練習する部屋があるからな」

「確かにあれは便利でした」

レアと会話しながらオスカーは自分のカバンから色んなモノを取り出した。取りあえずクツションや闇の魔術に対する防衛術の本を取り出した。一応練習をしようとは思っていたが、何の練習をするか決めていなかったのだ。

「それって検知不可能拡大呪文ですか？」

「ああ、エストがポシエットにかけるときに俺のカバンにもかけてもらったんだ。魔法のトランクまでとは言わないけどカバン十個分くらいは入ると思う」

「やっぱり先輩たちは仲いいですよね……」

ちよつと何か考える顔をしながら、レアは秘密の通路の地べたに座って開心術や閉心術関連の本を広げていた。

「ディオオーディオ 掘れ」

オスカーは秘密の通路の壁を呪文で少し掘って、土の塊や石を取り出した。もう一度杖を振って、その土や石をちよつとした椅子と机に変身させた。一番強いイメージの机と椅子だったのでドロホフ邸に置いているモノと同じ外見をしていた。

「取りあえず座って読むか？」

「は…… はい」

よく考えなくてもオズカーはレアと余り学校で二人きりで喋ったりにかをしたたりすることはこれまで無かった。夏休みに漏れ鍋で喋ったのも珍しいくらいだったのだ。もともとオズカーの名前を聞いただけで怒っていたレアを考えればこれは大きな進歩だった。

「取りあえずレジリメンズを使えば練習はできそうだな」

「そうですね…… 開心術はマグルの言う読心術とは違う、心とは重層的なモノであり、記憶と感情によって幾重にも渡って細分化されているモノである。まるで本を読むように読むことなどできない。卓越した開心術士は自分の意図した感情や記憶を読みだすため、相手の心情を意図した場所へと誘導させる。最も簡単なのは恐怖やショックで傷ついた人間を誘導することである…… 何か読んでも良く分からないです」

確かに開心術の魔法的な理論はいまいち良く分からなかった。そもそも本自体が読ませるように書かれていない様にオズカーにも感じられたのだ。それにもともと開心術の起こり自体が、開心術に天賦の才を持っている魔法使いを研究して発展してきたようにこの本では書かれていた。天賦の才のある魔法使いや魔女は、人間に高く共感するだけで練習をすることなく、ただ眼を見るだけでその人の心の動きを理解できると書かれているのだ。

「正直、かなり危険だと思うし、それに俺でいいのか？」

「いって何がですか？」

レアは何もわかっていないとばかりに首を傾けた。

「俺が開心術…… レジリメンズの呪文を唱えたら、レアの記憶とか俺が見ることになるんだぞ？」

「それは…… その…… なんていうかオズカー先輩以外に多分頼める人はいないと思いますし、先輩たちの中でも…… 開心術が使えるようなエスト先輩とかクラーナ先輩は……」

レアはオズカーの方を時々チラチラと見ていたが、視線が安定しないようだった。オズカーには何となくその二人に頼みにくい理由が分かった。三人を去年リータがターゲットにしたであろう理由が関係していると考えたのだ。

「見た内容は黙ってることを約束する。何なら破れぬ誓いでもするか？」

「や…… 破れぬ誓いですか!? そんなことは大丈夫です。そう、オスカー先輩はタフそうなので、お願いしようと思って……」

オスカーは一年生の時にクラーナが破れぬ誓いがどうか言っていたのを覚えていた。それは結構話題を逸らすには上手く働いてくれたようだった。

「ホントにやっていいのか？ 正直、見られるのって凄く嫌だろうし、それにすぐ終わるかも分からないぞ。一か月とか二か月とかもつとかかるかもしれない。クラーナも時間がかかったって言ってたし」

それにオスカーは余りレアが閉心術に向いているようには見えなかった。感情をコントロールするという事が性格的に向いていないような気がしていたのだ。

「う…… や、やります!! 色々…… 決闘トーナメントとか、この先に何を覚えたらいいのかとか考えて調べてたんですけど…… 閉心術の感情とか…… その、自分をコントロールするって言うのが一番ボクに必要なだと思っただけです……」

オスカーは開心術に天賦の才を持っているわけでも、練習したわけでもなかったからレアの瞳から何かを読み取れるはずは無かったが、それでも本気だという事くらいは声と表情から伝わってきた。

「じゃあやるか、もし危ないこととかになったらすぐやめるし、先生やマダム・ポンフリーに連絡するからな」

「え……？ わ、わかりました」

オスカーは失神呪文の練習にでも使えるかと思って持ってきたクッションをレアの周りに魔法で配置した。

「これは？」

「レアが叫びの屋敷の事をどれだけ覚えてるか分からないけど、あの時、俺は普通に制御を失って倒れたからな。だから先に敷いてるんだ」

「なるほど…… あの…… 閉心術のコツってありますか？」

オスカーはそれを聞かれるだろうと閉心術の話題が出た時から考

えていたが、良い伝え方が全く思いついてはいなかった。

「正直、なんて言うか上手く伝えられる気がしないんだが…… 確かクラリーナは己を己で満たせって言ってたし、本には感情を無にするか一つの感情で満たせって言っていたな」

「感情で満たせ？」

初めて閉心術を使って、クラリーナのレジリメンスから戻ってきた時、オスカーが考えていたのは安心感と自分に対する怒りだった。それを理解しつつそれで満たされていたのだ。制御ができないほど強い感情で満たされていたのに同時にまるで頭の中が透き通っていると感じるほど明確に色んな事を考えることができたのだ。

「俺たちが怒ったり嬉しかったり悲しかったりするときがあるだろうか？」

「それはありますけど……」

「そういう時って何も考えられない時と、そういう時だから頭が働いている感じの時がないか？」

「何にも考えられない時と働いている時……？」

レアはいかにもオスカーの言っていることが分からないという感じ
で口を真一文字に結び、目を細めていた。

「うーん…… 嬉しい時とかなんかやりたい時の方が分かり易いかもしれない。そういう時って次のことやりたくて仕方なかったりしないか？ 魔法でもゴブストーンでもクイディッチでも何でもいいけど、上手くいつてる時にそういう風にならないか？ そう言う時ってなんか感じてるけど考えてるって言うか……」

「それはわかると思います…… 確かに夢中でやってるけど考えてるかも」

オスカーも自分で考え直してみた。そういう気分や頭の回転の時…… 自分がどう思っているのか理解しているときに考えることができるかどうか閉心術では重要な気がしていたのだ。

「多分、俺は心を空にするっていうのはできそうに無かったし、正直、あんまりレアにも向いてると思えない。だったら自分がどういう感情とかどう思ってるかを理解できるかが重要だと思っ」

「どう理解しているか……」

果たして自分の理解が正しいのかオスカーには自信が無かったが、一応レアの前だったのでできるだけ自信があり気に言ったのだった。

レアはやはり何かを考え続けているようだった。しかし、オスカーもこの閉心術という技術についてきちんと理解できていないと考えていたので、これ以上何か言えそうに無かった。

「不安なら止めとくか？ 多分不安定な状態でやっても上手くいくモノじゃないだろうし」

「え？ や、やります!!」

レアは慌ててオスカーの方に杖を向けたが、オスカーには余り上手く行く気はしなかった。不安のある状態で、落ち着いていない心もちでやっても上手く行く気がしないのだ。

「ホントにやるのか？」

「やります。ボクに付き合わせてしまってますし、練習はやっぱり数をしないと感覚も分からないと思うので……」

オスカーの方も少し不安だった。開心術という人の心に入り込むという事自体が未知の領域であり、それでいったい何がどうしてしまうのかが予想できなかったからだ。

「お願いします」

「分かった」

燭台に光るインセンディオで灯した光だけが二人を照らしていた。オレンジ色の光をレアの金髪が反射していた。オスカーにはレアの眼の中に写っている自分の姿が見えていた。

「レジリメンズ!! 開心!!」

オスカーがそう叫んだ瞬間、いつか見たように世界が回り出して秘密の通路とレアが目の前から消えた。音が遠くに消えていく。何か、何かが直接伝わってくる。何枚にも重なった鏡のような、水面の様な、そして近づけば消える霧のようなものが目の前に幾重にも見える。

そして段々と明確になっていく、何かの映像と感触と匂いと雑多な感触が伝わってくる。誰かの感情が感性が伝わってくるのだ。

どうして魔法ができるのにもっと教えてくれないのか？　こんなに魔法を使えるのにもっと褒めてくれないのか？　家に置いてあつた呪文集を読んで、親の杖を勝手に借りて使ってみれば全部使えたのにどうしてももっともっとやらしてくれないのか？　なんで家から出てはいけないのか？　どうしてちゃんと説明してくれないのか？　なぜ？　どうして？　なんで？　納得できないという感情が、フラストレーションがこんこんと湧き出る泉の様に溢れ出していた。

金髪の髪の毛の長い女の子がベッドの上に寝転がりながら退屈そうに天井を見上げている。女の子が手を少し動かすだけで、ミニチュアの箒のようなモノが部屋の中をクルクルと飛び回った。オスカーはそれを杖なしでやるのは非常に難しいことだと知っていた。

「レア、リリー達が来たわよ」

少し遠くから女の人の声が聞こえた。声を聞いて、集中を失ったミニチュアの箒が一瞬落ちそうになったが、女の子が中指でそれを指しただけで空中に止まり、そのまま元々箒があつたであろう台座の様なモノに正確に着地した。正直、オスカーは同じ事をやれと言われても出来る気がしなかった。

ドアがノックされて、何人か人が入ってきた。どの人物も二十歳かその程度の年齢に見える。オスカーは全員を写真で見たことがあつた、一人はくしゃくしゃの髪の毛の男、それに緑の眼をした女、この二人こそポッター夫妻のはずだった。次にしよぼくれた眼をしたどこかネズミの様な男、ボロボロの服を着た優男、それに……　オスカーは最後の人物を写真で見た時に既視感を感じたのが何故なのか分かった。

写真では小さかつたので分からなかつたが、こうして目の前に等身大に見えるのと誰なのか分かる。シリウス・ブラック、ヴォルデモートの手下の中でもナンバーツーにいたと日刊預言者新聞に書かれていた人物だ。オスカーも新聞で何度も見たことがあつたし、それになぜ誰かの面影を感じたのかも分かった。

「なんで騎士団は勇敢なはずなのにこんなにコソコソしてるの？」
「なるほど、マッキノンのお姫様はやっぱりキツイな」

「シリウス、あんまりからかわない方がいいよ、レアはもうこの年で全身金縛り呪文が使えるらしいからね」

鼻につくほどハンサムなシリウス・ブラックが小さいレアをからかうのを隣のみすぼらしい男がいさめた。オズカーにはあまりこの人たちのパワーバランスというかヒエラルキーのようなものが良く分からなかった。

「そりや怖い。なあワームテール？ お前が三年生の時より優秀なんじゃないか？」

「シリウス、マーリンの娘なんだから当然だろう……」

ワームテールと呼ばれた男にオズカーは違和感があった。この男以外はみんなかなり幸せそうな顔をしているというのに、まるで何か後ろめたい事があるようにその視線は色んな場所を行ったり来たりしていたからだ。

「リーマス、レアにハリーを撫でて貰いたいんだけど」

「ああこの位置だと邪魔だねリリー」

「ハリー？ ハリーを連れてきたの？」

どうもみすぼらしい男はリーマスという名前らしかった。レアが前に名前を覚えてくれたのはリーマスとピーターという人物だったので、ワームテールという明らかかなあだ名で呼ばれている人物がピーターなのだろうとオズカーはあたりをつけた。

「レア、ホグワーツでは君とハリーは一年かぶるだろうからよろしく頼むよ」

「こんなキツイ七年生に面倒みられるのは私だったらごめんだね」

「パッドフット、うるさいわ」

リリーがシリウスの事をパッドフットと呼んでいて、恐らくこの五人があだ名で呼び合うような仲だということがオズカーには分かったが、同時にパッドフットやワームテールという名前がどう考えてもどこかで聞いたことのある名前な気がしていた。

オズカーにもゆりかごの中でこつちを見ている緑色の眼をして、もうくしゃやくしゃの髪の毛をしている赤ん坊が見えた。まだ有名な額の傷は無いようだった。

「ハリーよろしくね？　ボクはレア・マツキノンだよ？」

レアが手をゆりかごに伸ばすとハリーが小さい手でレアの指を掴んだ。まるで握手のまねごとのようだった。余りに手を離さないの
でレアはさつき遊んでいたミニチュアの箒を片手をかざすだけで呼
び寄せてハリーの目の前で飛ばした。

するとハリーは目の前で飛ぶ箒に注意が移ったのか、レアの手を離
した。

「大変だ。俺たちのハリーがレアに弄ばれてるぞ、プロングズ。俺も
今度の誕生日には箒を送ろうかな？」

「シリウスはうるさいよ」

「なんだお姫様はご機嫌斜めか？」

どうもこのシリウスという人物はトンクス並みに落ち着かない人
間の様にオスカーには見えた。ただ、ここにいる人物の中でも一番リ
ラックスして見えた。気を許した人間の中にいると感じているのが
オスカーにも分かる程だった。

「シリウス、リリーと一緒に下でちよつと話をしてくるからレアの相
手をしてあげてくれ」

「話ってパパとママとってこと？　何の話？」

「大人の魔法使いしかできない話だ、なあムーニー？」

「そうだね、まあちよつとしたふわふわした問題よりもだいたい簡単な
話ではあるね」

話題から遠ざけられ、ちゃんと大人たちが話す気が無いと感じたの
か、レアは頬を膨らまして怒っているようだった。その間にジェーム
ズとリリーはハリーを連れて下に降りて行った。

レアが少し手を振るとピーターが少し態勢を崩して本棚に倒れ込
んだ。他の二人がそつちを見ている間に扉の方へとレアは走ったが、
一瞬でシリウスがレアの服の後ろを掴んで引き戻した。

「正直、私たちよりよっぽど問題児になると思わないか？　ムーニー
？」

「いやあ、レアに杖を持たしてたらピーターは今頃聖マング送りかも
しれない」

杖を振って本棚を元に戻しながらリーマスが答える。ピーターの方はレアに本棚にぶつけられたはずなのに怒るでもなく、その顔色はやはり不安に満ちているように見えた。

「じゃあこの使わなくなった教科書セットはいらないんだな？」
「え？」

シリウスは自分のポシェットの様なモノから何冊か本を取り出しているようだった。それはオスカーも見ただことのある本ばかりで、恐らく三年生くらいまでのホグワーツの教科書だった。

「これが欲しかったら静かにしておくことだな」

「新品じゃないんだ……　もしかしてブラック家って貧乏？」

「リーマス、ピーター、多分こいつは私たちを超える逸材だぞ。レアが入学したら、フィルチが聖マンゴ送りになるのを日刊預言者新聞を毎日見て確認しないといけない」

シリウスがそう言うはずと不安な顔をしていたピーターも含めて笑った。そしてその隙にレアはドアを手を振るだけで開け、さらに階段の下にあるドアまで手を回すような動作だけで開けた。正直、オスカーは魔法使いや魔女が幼いころに杖なしで魔法を行使できることを知ってはいたし、自分もやっていたが、ここまでのレベルで使いこなす子供がいるとは思っていなかった。

それにハリーの年から考えればまだレアは七歳くらいのはずだったが、自分を相手にしない大人を出し抜こうとする意志といい、随分と成長の早い子供に見えた。

下の方からジェームズやリリーに加えて、女の人と男の人の話が聞こえてくる。

「一応、キャビネット棚を設置はしたから最悪レアだけは逃がせるはずなのよ」

「それじゃ多分足りない。ダンブルドアは我々騎士団の中にスパイがいると考えている。忠誠の呪文を考えた方がいい」

「しかし、あの呪文は秘密の持ち主が今度は危なくなってしまう」

「でも、今の保護呪文もいつまで持つか分からないし、裏切り者がいたり、魔法省がもし陥落したりしたら意味がなくなるわ……」

嫌だ。嫌だ。嫌だ。聞きたくない。キャビネット棚には入りたくない。目の前で笑っていた人が裏切っていたなんて考えたくない。自分が外に出ていたせいで助からなかったなんて認めたくない。嫌だ。嫌だ。嫌だ。

下の会話が聞こえてきた途端。誰かの強い感情がオスカーに流れしてきた。そして段々と目の前が薄くなってきた。遠くで記憶の中の会話がまるで周波数の合わないラジオの様に聞こえるのだ。

「ほん…… に凄い…… 魔法の…… 方だな……」

「この年…… 凄…… ホ…… ツが…… しみ」

そしてオスカーが気づくと、秘密の通路に戻っていて、クッションに座り込んでハアハアと息を荒らげているレアの姿が見えた。オスカー自身の頭もまるでぶっ続けて何かを考え続けたり、何か強い感情にさらされ続けた後の様な疲労感が広がっていた。

「レア、大丈夫か？」

「オスカー…… 先輩……」

オスカーは自分のカバンを持って、レアに近づいた。レアは汗だけで、顔は青く、少し動悸が激しかった。オスカーには今彼女がどういう状態なのかだいたい分かっていた。クラリーナに介抱された時の様に、嫌な汗が流れて、まだ記憶の中のモノが現実だと感じられるのだろう。

「ほら、こっちを見てくれ」

「はい……」

やっとクッションから顔を上げてオスカーの方を見たが、やっぱり顔は青かったし、記憶の中のような自信ありげな目の輝きは無かった。あるのはいつもよりもさらに弱気に見える目だった。

オスカーはカバンからバタービールを取り出した。なんとなく今日の朝、レアの事を考えるとバタービールと繋がったので、談話室に置かれていたのを拝借してきたのだ。

「多分ぬるいけどコレを飲んだらいいんじゃないか」

「すいません……」

レアはクッションに半分倒れ込むように座りながらバタービール

をゆつくりと飲んだ。そんなにすぐには動悸や顔色は戻らなかったが、だんだんと良くなってきたらとオスカーは思った。

「ボク…… やっぱり向いてないんでしょうか、閉心術」

「そんなことは無いだろ、俺もあんな感じだったしむしろもつと酷かった」

オスカーはできるだけ、自分がクラーナにして貰った様にレアに対応したかった。自分の嫌な記憶を見るというのはとんでもないストレスのはずだったからだ。

「未だに信じられないんです。シリウスさんがずっと騎士団のスパイをしていて、パパやママやジェームズさんやリリーさんを売ったなんて。その後ピーターさんを殺したなんて」

「あの人が……」

レアは震える唇でそう言った。やはり有名な死喰い人こと、シリウス・ブラックがマツキノ一家がレア以外全滅した事件での原因らしかった。

それにオスカーには今さつきみたシリウス・ブラックが仲間を売ったとはとても思えなかった。どう見ても自分が信じ切っている仲間の中で安心して居るようにはしか見えなかったのだ。まだあのおどおどしていたピーターなる人物が裏切ったと言われた方が信じる事ができただろう。

「まあ続けることが大事だって自分で言ってただろ？ それに小さいころにあんな魔法を器用に使えたんだからすぐ使える様になるだろ」
「や、やっぱり全部見えてたんですか？」

レアは記憶の事で震えるのではなく、恥ずかしさで震えているようだった。

「あのまま入学してくれば、マツキノのお姫様がファイルチを病院送りにしてくれて、俺がマークされることも無かったな」

「オスカー先輩はそんなことばかり言ってる、ほんとに死喰い人になっちゃいますからやめてください」

レアは本気で言っているようだった。オスカーはちよつとあの有名な死喰い人と比べられるのは嫌だった。それにどつちかと言うと

シリウス・ブラックの言動はトンクスに近いような気がしていたので、トンクスに似たことを言っていると言われているようで二重でショックだったのだ。

「まあとりあえずできるまで付き合おう。できたら…… そうだな、あの杖なし魔法の練習でもするか？　今もレアはできるのか？」

「杖なし魔法ですか？　今はできないと思います……」

「じゃあそれが次の目標だな、先ずは閉心術からだ」

「分かりました…… 先ずは閉心術…… まだ最初……」

ぶつぶつと言っているレアを見ながら、オスカーは結構長丁場になりそうだと感じていたし、それに人の心の中に入るといのが非常に危険だという事を理解しつつあった。

ただ、知らない人を理解したり、仲が縮まるという意味ではこれ以上無い機会かもしれないと思い始めていた。

スニベルス

「魔法薬学に使う材料の整理？」

「ああ、スネイプ先生に魔法薬学の後にやって欲しいってちょっと前に言われたんだ。結構時間かかるらしいから先に寮に戻つてくれ」

「それはいいけど…… ふーん…… オスカーが？ なんか意外かも、スネイプ先生つてオスカーの事ちよつと苦手だと思ってたから」「苦手？」

決闘トーナメントの説明があった翌日。大広間で朝食を食べながら、オスカーはダンブルドア先生から届いた手紙に書かれていた、憂いの篩をスネイプ先生の居室に動かしたので、魔法薬学の手伝いに行くと言ってくれば良いと言う内容に従ってエストに話していた。

エストに本当の事を言わずに行くと言うのがオスカーの中でどうしても引つかかっていたが、まだ踏ん切りがオスカーの中ではついていなかった。しかし、エストは全く別の要素が気になったようだった。

「うん。苦手だと思うの。スリザリン生だからオスカーが何かやったらかばったり、授業中は加点するけど、あんまりオスカーの方に自分からは来ようとはしないよね？」

「ああ、確かにそれは俺も思ったことあるかもしれないな」

オスカーはスリザリン生だったので、一年生の頃からスネイプ先生と関わる機会も多かったはずだったが、確かに余りスネイプ先生の方から何か注意されたり、特別関わる様な機会は無かった。むしろ、グリフィンボール生の方が嫌がらせをされているという意味では関わってるはずだった。

「二番分かるのは…… 今日魔法薬学でグリフィンボール生と一緒にだけど、オスカーがいるとよっぽどの事がないとそのテーブルの傍でいつもみたくない事を言わないよね？」

「クラーナとなんか鍋の混ぜ方でバトルしたり、チャリーリーの魔法薬にはセンスが全く見られないみたいなあれだよな？」

「そう、そもそもなんか余り近づいてこないって言うか、明らかにそう言うこと言う回数が減ってると思うな」

去年度にクラーナが手紙の束を持ってスリザリン生のテーブルにやって来た時もそうだったが、確かにスネイプ先生はオスカーとエストがグリフィンドール生と一緒にいる時は余り近寄ってこない気がした。

オスカーはあくまで自分とエストがグリフィンドール生と一緒にいる時だけそんな感じがすると思っていたのだが、エストからはオスカーがいるときに近づきたくないと思っっているように見えているしかなかった。

「それって苦手なのは俺なのか？ エストじゃなくて？」

「うん。だって、一年生の最初の方とか、その…… 去年あんまり喋らなかつた時とか、オスカーと一緒にいないときはスネイプ先生はエストの方に来るし、グリフィンドール生にもこれでもかかって言うくらい嫌がらせしてたの」

オスカーは普通に意外だった。スネイプ先生はそんなに明確にオスカーの事を苦手と考えているのだろうか？ オスカーにはその理由がいまいち分からなかつたのだ。それにそれならなぜダンブルドアからの頼みを受けて今日、憂いの篩を使うオスカーの様子を見ていくれるのだろうか？と考えたのだ。

「なんなんだろうな？ 何もスネイプ先生にしたことは無いはずなんだけど」

「そうだよね？ それにスネイプ先生ってなんか嫌いな学生にはもつと容赦ない感じだもん。この前も膨れ薬を爆発させたグリフィンドール生に一晩かけて地下牢を磨かせたらしいの」

「まああれはクラスの半分がマダム・ポンフリーの世話になって、マダム・ポンフリーも怒ってたしな」

いまいち、オスカーにはスネイプ先生が何を考えてそうしているのか分からなかつたが、とりあえず授業に向かうことにした。朝食もそろそろ終わりの時間に近づいていたからだ。

「そう言えばこの料理ってやつぱり、ペンスさんみたいな屋敷しもべ

「が作ってるのかな？」

「そうなんじゃないか？ ペンスがホグワーツにはイギリスのどの屋敷よりも沢山の屋敷しもべがいるって言って…… あれ？ ペンスに聞いたんだっただけかな……」

「そうなんだ。でもあんまり見たことないかも」

「とりあえずいつまでスクランブルエッグ食べてるんだ。それ何個目だよ」

「そろそろ行かないとダメかな？」

オスカーも見なかったが無かったが、ホグワーツには凄い数の屋敷しもべがいると聞いたことはあった。二人がカバンを持って大広間から出ると、今度はレアに捕まったのだった。

「おはようございます。お、オスカー先輩ちよつと時間いいですか？」

「レア？ エストがずつと食べてたせいであんまり時間無いし、レアも授業があるんじゃないの……」

そこまで言いかけた所でオスカーはレアが大広間の外でずっと待っていたのではないかと思った。もうクリスマス休暇が間近でホグワーツも冷え込んでいたので、ホグワーツの廊下は相当に寒かったはずだったし、レアの両手はローブにさつきまで包まれてはいたが、ちよつと赤くなっているようだった。エストは少し離れた場所で二人の様子を見ているようだった。

「大丈夫だけど、どうしたんだ？」

「その…… 昨日はボクに付き合わせて迷惑をかけてしまったので、何かもう一度言おうと……」

「それは大丈夫だろう？ また練習する時は言ってくれ、悪いけど今日は無理だけだな。それにこんな寒いとこで待たなくても、スリザリンのテールに来てくださいればいいしな」

「それは…… エスト先輩と喋っている時は……」

レアがちよつと申し訳なきようにエストの方を見た。エストは少しわざとらしくそうにあくびをしているだけだった。

「クラーナは喋ってる時でも封筒の束を叩きつけてくるし、大丈夫だ」
「それはクラーナ先輩だからできることで…… わ、わかりました。」

またボクから連絡させて貰います」

「じゃあ授業に遅れるなよ」

「は、はい」

レアはカバンを持って、慌てて授業へと向かって行った。少し距離を取っていたエストがオスカーの方へ近づいてくる。オスカーは決闘トーナメントで当たるまではお互いの練習の事を聞かないというのを守ってくれているのだろうかと思った。

「エスト達もそろそろ行かないと怒られちゃうの」

「そうだな、仕掛け階段に乗れないとちよつと不味い時間かもな」

だがオスカーは余り遅れる心配はしてはいなかった。この城をエストと一緒に歩く時とそれ以外の時を比べると、エストがいる時は何か城の色んなモノが好意的に動いているような気がしていたからだ。

魔法薬学の授業は今日最後の授業だった。まだ何も入っていない大鍋が置かれているテーブルに、オスカーはエスト、クラーナ、チャリーと一緒に座っていた。

今日の授業内容は解毒薬らしく、スネイプ先生は授業の最後に解毒薬ができていくかどうかを誰かに毒薬を飲ましてテストすると言った。

「さて、今日は解毒薬を煎じるわけだが…… あくまで今日は単一の毒薬に対する解毒薬だ。この中でゴルパロットの第三の法則を知っている者はいるか？」

スネイプ先生がそう言った途端、オスカーの両隣で手が拳がった。オスカーから見ると微妙にクラーナの方が少し早く手が拳がった様に見えた。しかしこの後どうなるのかはオスカーもスリザリン生もグリフィンドル生も全員が知っていた。

「ではミス・プルウエット答えたまえ」

「はい、ゴルパロットの第三の法則とは混合毒薬の解毒薬の成分についての法則で、その解毒薬の成分は、毒薬各々に対する解毒薬の成分の総和よりも大きいことを説明しています」

スネイプ先生はクラリーナの方を一瞥もせずにエストをあてた。オスカーが受けてきた魔法薬学では毎年繰り返されてきた風景だった。「よろしい、スリザリンに十点。さて、この法則はミス・ブルウエットが説明した様に単一の解毒薬では無く……」

スネイプ先生が言っている事はオスカーには半分も分からなかった。こういう時にどうしたらいいのかもオスカーは良く知っていた。最初にクラリーナに聞いて、その後エストに聞けば良いのだ。

エストが言うことはほとんど本質的で正鵠を得た回答なのは確かだったが、そう言ったことは基本的な事が分からないとそもそも理解できないのだ。エストが考えたり、言っている事が一緒にいるオスカーからすると話がまるで飛んでいるように感じる事が良くあった。

その分、オスカーからすればクラリーナの方がそう言ったことを感じることは少なかったし、いつもの会話でも大体、エストが言ったことをクラリーナが筋道を立ててこうなのか？ と聞くことでみんなが理解すると言ったことが多いと感じていた。トンクスが良く分からぬ方向へ話題を飛ばしたり、チャーリーが魔法動物に結び付けなければの話だったが。だから、とりあえずクラリーナに聞いて、その後エストに聞けば大体の事は他の生徒達よりも理解できていると思っていたし、事実成績もそうなっていた。

「それで？ このゴルバロットの第三法則って何なんだ？」

「はあ…… ゴルバロットの第三の法則」ですよ。単純に毒薬って色んなのが混ざると他の効果が表れたり、より性質の悪い効果が出たりするんです。だからその効果を打ち消すためにも元々の毒薬を打ち消すための成分に加えて、新しい効果分を打ち消すための成分を解毒薬に加えないといけないって言ってるんです」

「でもこんな授業でやるような毒薬はベゾアール石で大体解毒できちゃうし、そうじゃない薬はスカーピンの暴露呪文を唱えるからこんなのを考えてる暇は無いの」

ゴルパロットの第三法則は大体何を言っているのか理解できたが、エストの言っていることは、まずオスカーにはスカーピンの暴露呪文

が何か分からなかったし、ベゾアール石が辛うじてだいたい何にでも効く解毒薬だと言うのしか分からなかった。クラリーナの隣のチャーリーはクイディッチの練習で疲れているのか、スネイプ先生の授業だと言うのに半分寝ていた。

「本来のこの法則自体の使い方は緊急で解毒薬を作ることじゃないでしょう？ 多分、最初に毒薬を作る人間があらかじめ解毒薬を作る場合とか、新しい効果を検証する時に使われるモノなんじゃないんですか？ そりゃあエストが言うようにふくろうレベル以下の授業ならベゾアール石で大丈夫でしょうけど」

「法則自体はそうなの。でも、この授業でのスネイプ先生の言い方からすると効果があった後に解毒するのを想定している様に聞こえない？」

「ゴルパロットの第三法則は分かっていたからとりあえずチャーリーを起こしてくれ」

スネイプ先生がこっちに時々視線を送っている事にオスカーは気づいていた。こうして授業中に私語をしていたり、誰かが寝ていればすぐに飛んでくるのがスネイプ先生のはずだったので、朝、エストと話したようにスネイプ先生がオスカーの事を苦手だと思っていると言うのは正しいのかもしれない。

それから解毒薬を煎じるのが始まったため、ちよつとみんな喋る暇は無くなった。解毒薬が大体出来上がった位で、スネイプ先生はみんなの大鍋を見て歩いて回っており、エストの大鍋ではスリザリンに点を与え、オスカーとクラリーナを素通りし、チャーリーの大鍋を見て意地の悪い顔をした。

「ふん、ドロドロ髪の毛の闇の魔術に対する防衛術の教師になれない誰かはやっぱり根性がねじ曲がってますね。それにスクリムジヨール先生が来たから大きく出れないでしょう。あんまりでかい顔ができないからこうやって魔法薬学で憂さを晴らしてるんですよ。ほんと、あのコウモリみたいな魔法使いはそろそろ頭にスコージファイをぶちまけてやりたいです」

「なんでスクリムジヨール先生がいるとスネイプ先生が大きく出られ

ないんだ？」

完全に諦めたらしいチャーリーは意気消沈しており、エストは隣のテーブルのスリザリン生を助けていた。そしてクラリーナは少しやつてしまったと言う顔をしていた。

「えつと…… 言っていないのか分からないですけど…… スネイプは元死喰い人だったらしいんですよ」

オスカーはそれを聞いた途端にスネイプ先生の左腕をオスカーは凝視した。しかし、当たり前だが、長いローブのせいで腕を見ることはできなかった。クラリーナの方に視線を移せば困った様な、心配している様な顔になっていた。

「ダンブルドア先生が保証人になって戦争の途中にこっち側に戻ってきたからアズカバン送りは無しになったって叔父さんが言っていました。でも叔父さんはいくらダンブルドアの保証があつても怪しい話だつて、スネイプくらい頭が切れれば本当かどうか確かめることは難しいだろうって考えらしいです」

クラリーナの話聞きながらもまたオスカーはスネイプ先生の方に視線を移していた。スネイプ先生がオスカー自身の事が苦手だと言うのは、スネイプ先生が元死喰い人だったので合わす顔が無いからなのか？ スネイプ先生はあの時、ヴォルデモートを取り囲んでいたフードの中にいたのか？ そう言った考えに吞まれそうになったが、隣のエストやクラリーナを見て、直接、死喰い人に手を下された家族に対してはスネイプ先生が、オスカーに似た対応を取っていないことを思いだした。

「そうなのか、良く分からない立ち位置なんだな」

「そうなんです。まあ死喰い人に恥じないくらい性格はねじ曲がっているとは思いますが……」

「何の話？」

エストが入ってきて、オスカーとクラリーナは顔を見合わせた。スネイプ先生が元死喰い人だったと聞いた時のエストの反応が想像できなかったからだ。チャーリーはやけくそになったのか色んな材料を加えてさらに煮込んでいた。

「スネイプ先生の話だ。俺が苦手なんじゃないかって朝言ってただろ？」

「確かに言ってたけど……でも、もしかするとオスカーじゃなくて、オスカーと誰かが一緒にいるのが苦手なのかもしれないかも」

「オスカーと誰か一緒にいるのがですか？　確かにオスカーがいるとあんまり下手なことをしない気がしますけど」

確かにそれも考えられる話ではあった。しかし、いったいそれほどいう理由なのか？　オスカーにはさっぱり考え付かなかった。

「そう。ゴルパロットの第三の法則と一緒にだよね？　一人ではそれだけだけど、組み合わせると変な効果が起こるのって人間でも一緒なの」「うーん、言いたいことはわからないでもないですけど、私たちに暴露呪文をかけてもスネイプがオスカーと誰が苦手なのかはわからないでしょう？　それに人間を組み合わせれば違う特性がでるなんて当たり前じゃないですか、その為に魔法省とかホグワーツみたいな組織や学校があるんですから」

「なるほどな。俺とグリフィンドル生と一緒にいるのが嫌だとかか？　良く分からないけどそろそろチャーリーの大鍋をどうにかしないと、毒薬飲むのがチャーリーになった時にえらいことになるな」

オスカー達はスネイプ先生が少し生徒へ意地の悪いことをしている間に、アルマジロの胆汁の予備が入った瓶を呪文で動かして床に叩きつけた。そしてスネイプ先生がその対応をしている間にチャーリーの異臭のする魔法薬を消失させて、オスカーが作った解毒薬を入れ、補充呪文をかけた。スネイプ先生はアルマジロの胆汁が意図的にこぼされたことに気づいたようだったが、チャーリーの解毒薬については今度は素通りした。

魔法薬の授業がやっと終わった。相変わらずグリフィンドルの生徒には辛く、スリザリンの生徒には甘い授業だった。

「オスカー、今度なんかハニーデュークスでおごるよ」

「よろしく。まあスネイプ先生にはばれただろうけどな、あと俺はこれからスネイプ先生の手伝いだから」

「スネイプの？」

「そう。なんか意外だよな？ オスカー以外でスネイプ先生にもつと気に入られている学生は一杯いるのに」

正直、オスカーはエストとクラーナに隠して、憂いの篩を使い続けられる気は余りしなかった。二人にウソをつくのは容易では無かつたし、それに憂いの篩やレアとの開心術は何か、オスカー自身の感情をどんどん増幅していつているような気がしていたのだ。

「ダンブルドア先生と言ひ、オスカーは目をつけられているとかですか？ と言いか前のダンブルドア先生の部屋に呼び出されたのは何だったんです？」

「ああ、あれは……もし闇祓いがキングズリーやダンブルドア先生を通さずに何か聞きに来たらこう対応しろみたいな話だったな」

これは、夏休みにキングズリーに相談した時にいざと言う時の言い訳として提案されたモノの一つだった。ダンブルドア先生の所に行つた夜、遅くまで待っていたエストにも同じことをオスカーは言つたのだ。しかし、オスカーは余りそれを言い訳に使いたくなかつたし、みんなの良心につけこんでいる様で嫌だった。

「なんですかそれ!! 学生に戦争中でも無いのにそんな事聞くなんて」

「もう何年も前の話だし、捕まつてない死喰い人も一杯いるけど、オスカーに聞いて捕まる死喰い人が残つてるとは思えないの」

「うん。パパがどうせ服従の呪文に従つてたつて連中は言うし、それに自分で自分の記憶を消したりまでするんだつて言つてたよ」

「自分の記憶を？」

オスカーは思わず、チャーリーの方を見てしまった。忘却呪文を使って自分の記憶を消す事にどういう意味があるのだろうかと考えたのだ。

「記憶がなければ真実薬や開心術を使つても効果が無いからですよ。それに加えて服従の呪文でやらされたつて言つたら、証明のしようが無いんです」

「そのせいで沢山の連中を逃したつて言つてたよ」

「自分の記憶を否定してまで生き残りたいなら、最初からやらなければ

ばいいのに」

エストが最後にボソツと言った言葉がさつきまで使っていたアルマジロの胆汁の様に、オスカーの耳にべたべたと引っ付いて離れなかった。

オスカーは手紙に書かれていた通りに、先に魔法薬の教室から出てスネイプ先生の研究室の前で待っていた。しばらくしてスネイプ先生がやってきたが、スネイプ先生は余りオスカーの方を見ようとしなかった。

スネイプ先生について研究室に入ると、部屋はかなり暗く、棚には魔法薬やその材料となる植物や動物の標本らしきモノが並んでいた。まさに魔法薬の教授の研究室という感じではあった。

そして、オスカーも知っているアルマジロの胆汁やドクツルヘビの皮と言った魔法薬の材料がぎつしりと詰まった棚の上に、ルーン文字が刻まれた石の水盆が置かれていた。

「ミスター・ドロホフ、ドアを閉めたまえ。鍵もだ」

オスカーは言われたとおりにドアとそのカギをしめた。少なくとも誰かに自分の記憶を見られたくは無かったからだ。

オスカーがドアを閉めて戻ると、部屋は蝋燭の灯りで少し明かしくなっている場所があり、そこに憂いの篩と椅子が二つ置かれていた。

「座りたまえ、ミスター・ドロホフ」

「はい」

二人は椅子に座ってお互いに向かい合った。オスカーはスネイプ先生の冷徹で暗い目から何も読み取ることはできなかつた。嫌悪も好奇心も何もだ。

「さて、ミスター・ドロホフ。我輩はダンブルドア校長から君が憂いの篩を使うのを見守っていれば良いと言われている。しかし、我輩は君がどれほどこの行為についてダンブルドア校長と話をしたのかわからない」

未だオスカーはスネイプ先生からなんの表情の変化を読み取れはしなかつた。まるでその顔は能面の様で、ダンブルドア校長から言われてやっていることについて、何の感慨も持っていない様に見える。

「君は閉心術をすでに習得していると聞いている。しかし今やっていることは閉心術とは全く逆の行為に近い。憂いの篩を使い、自分の記憶を視覚的に感じ、感情を呼び起こす。それは非常に危険で無謀な行為だと言っているだろうか。特に君の様な年の魔法使いにとっては大抵これは理解しているか？」

「はい。先生」

あくまで事務的に自分の責務を果たそうとしている。オスカーにはそう見えた。

「よろしい。あくまで我輩は教授として、寮監として君が憂いの篩に入るのを見守るだけだ。君の記憶にダンブルドア校長の様に同行したりはしない。もし危険な状態になれば我輩やマダム・ポンフリーが対応するだろう。君はあくまで憂いの篩で向き合いたまえ、その方が感情を呼び起こすという意味では効率的だろう。では始めたまえ、時間は有限だ」

「分かりました。先生」

そう言うとスネイプ先生は立ち上がって、他の作業を始めた様だった。

オスカーは一旦憂いの篩の前で深呼吸した。そして目をつぶって何の記憶を見るのか考えた。彼女に関する記憶か？ それともダンブルドア校長に言うべく、父親に関する記憶か？ しかし、オスカーの中にはそれらの記憶と同じほどはつきりしないモノがあった。

それは彼女の事があった以降の母親に関する記憶だった。母親もすでに亡くなつてはいたが、オスカーはどうして母親が死んだのか正確に覚えてはいなかった。魔法省で死喰い人と闇祓いの戦闘に巻き込まれて死んだとは聞かされていたが、その時、ドロホフ邸で父親やペンスと言った面々とどういった話をしていたのかを覚えてはいなかったのだ。

色んな記憶や想いが頭の中で流れる中、オスカーはどの記憶を見るのかを決めた。こめかみに杖をやり、奇妙な感覚が少しあって、杖には銀色の蜘蛛の糸の様なものがかまわりついていた。オスカーはそれを憂いの篩に落とし、銀色は渦を巻いた。

またゆっくりと深呼吸して、オスカーは頭をつけた。

いつもの感覚と暗闇の後にオスカーはドロホフ邸の中にいた。どこもかしこも磨き上げられた石の壁と床、真っ赤なカーペット、豪華な机や椅子。今も変わらないペンスの管理の賜物だった。

そんな館の中を小さいオスカーは歩いていた。手には何かが握り占められていた。オスカーにも見覚えがあるモノ、どう見てもカエルチョコレートのカードだった。

「オスカーお坊ちやま、外套をお貸しください。夕食までは少し時間が……」

「分かったよペンス。母さんはどこにいるの？」

「奥様は広間にいらっしやいます」

ペンスに上着を渡すなり、小さいオスカーは広間の方へ走り出した。何かを言いたくて仕方ないという顔だった。

広間にいたのは確かに母親だった。ドロホフ邸にはほとんど写真が残っていないなかったので、オスカーも顔を見るのは久しぶりだった。オスカーと同じちよつと赤っぽい茶髪に人の好きそうな少し丸い顔をしている。

「母さん。マグルの写真は動かないんだって」

「オスカー、そんな事はお父様が戻られた時は言っではダメよ？」

「分かってるよ。でも写真は動かないんだって、●●●はこのカードを見て驚いてたんだ。なんて言っただけかな…… そう、テレビみたいだって」

小さいオスカーは彼女から聞いたテレビについて必死に説明している様だったが、今聞くといまいち要領を得ない説明で良く分からなかった。しかし、母親は小さいオスカーの説明をゆっくりと相槌を打ちながら聞いている。

「じゃあ、写真みたいに動く絵をラジオみたいに受け取って見られる箱なのね？」

「そう、そう言っただけだ。それになんか向こうにはクイディッチが無くて、その代わりのスポーツがあつてそれが流れたりするんだって」

「それは良いわね。私たちもクイディッチワールドカップを家で見てみたいもの」

二人が話しているとペンスが現れて、テーブルにいくつかお菓子を置いていった。それには夏休みにペンスが出していたマグルのお菓子がいくつか入っている様だった。

「あと、豊かな幸運の泉とか三人兄弟の話も知らないんだって」

「あらそうなの？　じゃあオズカーが教えてあげたの？」

「うん。でも毛だらけ心臓の魔法戦士の話は何か悲しいから嫌だって言ってたかな」

「オズカー、そんな悲しくて怖い話を女の子にしなくてもいいでしょ？　豊かな幸運の泉の話をしてあげれば良かったのよ」

「だって全部教えてくれて言うから……」

小さいオズカーは自分の善意で教えたのに、そういう態度を取られたのが少し嫌だったようだったし、母親にそう言われたのも納得がいていないようだった。

「じゃあ代わりに何か教えて貰ったの？」

「うん。何かピーターパンって言うのと、何とかの国のアリスって言うのなんだけどどっちも魔法がもうあるって分かったからなんかおかしい感じだっけって言った」

「そうなのね、でもオズカー。絶対●●●ちゃん以外のマグルの人に言っってはダメよ？　魔法があることは。それに●●●ちゃんと会う時はあの森の中じゃないとダメよ？」

「分かってるよ。あの森は魔法使いじゃないと近寄れないんでしょ？」

「そうよ、お父様がそのように魔法をかけたから近寄ることはできないわ」

何度もそれを言われている様で小さいオズカーはいい加減うんざりしていると言う顔だった。

「あとペンスみたいな屋敷しもべはいないんだって」

「じゃあ家事をするのは大変ね」

「その代わりなんか掃除機とかそういうスコージファイの代わりにな

る道具とかがあるらしいんだけど…… そう、何か●●●はホグワーツにも屋敷しもべがいるのかって言ってたんだ」

そう小さいオスカーが言った途端に周りが薄い銀色のモヤに包まれた。記憶がはつきりしておらず再現出来ていない証拠だった。しかし、本物のオスカーにはそこでなんと言っていたのか思いだすことができた。そしてその先の記憶もだ。

オスカーは一度、憂いの篩から出てスネイプ先生の視線がある中、記憶を一度自分の頭に戻し、もう一度憂いの篩に入れ、頭を入れた。「ホグワーツには沢山の屋敷しもべがいるわ。みんな普段は厨房で働いているの」

「厨房があるの?」

「そうよ。厨房はハッフルパフの寮の傍にあるのだけど、大きな果物の絵にあるなしをくすぐると入れるのよ。そこには沢山の屋敷しもべがいて、きつと入学してオスカーが●●●ちゃんと一緒に行けば、ペンスみたいに色んな世話を焼いてくれるはずよ」

「ふーん、じゃあそう言ってみる」

オスカーは今の今まで屋敷しもべがホグワーツに沢山いることも、厨房へどうやって入れればいいのかも忘れていた。ハッフルパフの寮に入った時にその傍を通ったはずなのに、それを忘れていたのだ。

「また会う約束はしてきたの?」

「うん。また来週会おうって。日曜日はマグルの学校が無いらしいんだ」

「じゃあ何かまた持って行かないとダメね。そうだ。ペンス」

バチつという音がしてペンスが二人の傍に現れた。ペンスは相変わらず見惚れるようなお辞儀をした。

「ペンス、これを持ってきてくれる?」

母親は指で何かを押すような動作をした。小さいオスカーにはその動作が何を示すのか分からないのか、首をかしげていた。

「かしこまりました」

ペンスはそれだけで何か分かったのか、また音を立てて消え、戻ってきた。その手にはちよつと古い感じのカメラが握られていた。

「どうぞ、奥様」

「ありがとうペンス。オスカー、●●●ちゃんは写真に驚いてたんでしょう？ 今度会った時に写真を撮ってくれば家で動く写真にしてあげれるわ」

「使ってみたいけどいいの？」

カメラは年季は入ってそうではあったが、管理がいいのか動かすには問題無さそうに見えた。

「大丈夫。結婚の時にいこのキングズリーに貰ったんだけど、お父様はあんまり写真に写るわけにはいかないから余り使えなかったの。オスカーに使って貰った方がカメラも嬉しいはずよ」

「じゃあ今度撮ってくる」

そこまでで、銀色のモヤが広がって記憶は終わった。オスカーはしばしの暗闇と謎の冷たさを感じながらスネイプ先生の研究室へと戻ってきた。

スネイプ先生がオスカーの方を相変わらず冷たい眼差しで見ている。

「ミスター・ドロホフ。そろそろ外出禁止時間だ、今日は切り上げて貰う」

「はい。先生」

今日一日だけでも色んな収穫があったとオスカーは思った。同時に情けなくもあった。覚えていないといけないことをまだまだ忘れていた気がしていたのだ。

「次はクリスマス休暇以降になるとダンブルドア校長は言っていた。ふくろう便を待ちたまえ」

「分かりました……」

オスカーはそこでクリスマスプレゼントの事を思いだした。ホムンクルスの術についてダンブルドア先生に会えたら聞こうと思っていたのだった。

「スネイプ先生、余り関係の無い質問なんですけど、ホムンクルスの術とこののはご存じですか？」

するとスネイプ先生はスリザリン生にはほとんどしないような顔

をした。グリフィンドル生に見せるのと同じ、嫌悪感のある顔だ。しかしその顔は一瞬でまた能面の様な感情の感じられない顔に戻った。

「ああ知っている。我輩の学生時代にそれを悪用した産物をチラリと見たこともある」

オスカーはそんなモノをホグワーツで一度しか見たことは無かったため、忍びの地図のことではないのかと思ったが、それは今聞くことでは無かった。

「あの術というのは…… 変化させる対象というのは紙とか石板とかそういう変化が分かり易いモノの方がいいんでしょうか？」

「一概にそう言うことはできないだろう。魔法、特に変身術においてはイメージが重要になる。変身術の基礎において、針山に変える対象はヤマアラシだろう？ あれと同じで変化させたいものと外見のイメージ合い…… 象徴的につながっている方が魔法は上手くいく」

「なるほど…… ありがとうございます」

そう言つてオスカーはスネイプ先生の目を真つすぐに見ようとしたが、先にスネイプ先生は目を逸らした。まるでオスカーの目をのぞき込みたく無いようだった。

オスカーにはいまいちそれがピンとこなかった。スネイプ先生が人と目を合わせるのが怖いと言うような度胸がない人とは思えなかったし、それに仮にもしもオスカーが開心術の優れた使い手だったとしても、スネイプ先生が開心術をマスターしていないとは思えなかったからだ。

死喰い人の事やオスカーへの対応等、オスカーにはスネイプ先生に聞きたいことがいくつもあったが、思いだしたことをまとめ直す時間がオスカーは欲しかった。

「失礼します」

「ああ最後に、魔法薬学でウィーズリーにおせっかいを焼いたりする前に、ミス・プルウエットとミス・ムーディを静かにさせたまえ」

やはり全部ばれているらしかつた。オスカーにはなぜスネイプ先生がそう言った時に他の生徒と同じ対応をしないのかが分からな

か
っ
た。
。

ぬくぬくとしたクリスマス

クリスマス、クリスマスが近づいていた。オスカーは去年、かなり印象深いクリスマスになってしまったのを感じていたので、なんとか今年は穏便なクリスマスを過ごしたかった。

それに去年はクリスマスプレゼントで延々と悩んでいたが、今年は何をするのかをはっきりと決めていたのが大きかった。

何度かマクゴナガル先生のところに行つて、オスカーは変幻自在呪文やホムンクルスの術について聞いた。意外に思うほどマクゴナガル先生は親身に対応してくれていた。

「ドロホフ、あなたがどうしてこの様な術について理解を深めたいのかは聞きませんが、生徒が変身術について興味を持ち、実際に行動するのは喜ばしいことです」

「ありがとうございます。マクゴナガル先生」
「決闘トーナメントを楽しみにしています」

何か、完全にマクゴナガル先生に勘違いされている気がしたが、オスカーは考えない事にした。レアとの練習は続いているものの、やはりレアと閉心術の相性は余り良くないようで、それにかかりきりになり他の練習はできてはいなかったからだ。

今日もマクゴナガル先生と話し終わって、五階の大鏡の裏で練習をする予定だったが時間的にも大して練習ができるとはオスカーは思つてはいなかった。閉心術の練習は体力も時間も大きく使う行為で、クリスマスも近かったし、オスカーもそんなにはやる必要は無いだろうと考えていた。

鏡の裏についてもまだレアは来ていなかったもので、また魔法で灯りを灯すと、炎にゆられてオスカー自身が創ったドロホフ邸にあるそっくりの椅子が写しだされた。

オスカーはそれを見て、やっとクリスマスプレゼントに何を作るのかのイメージがついた。これまでずっとプレゼントがどういったことをするものなのかは考えついていたが、それをどんな外見にするのかを思いついてはいなかった。

「ペンス」

「お呼びですか？ オスカーお坊ちやま」

バチツという音がして、オスカーが恐らく生まれてから一番聞きなれているだろう声が響いた。相変わらず文句のつけようのないお辞儀姿だった。

「ペンス、えつと…… カメラ…… 母さんが…… 多分キングズリーから貰ったカメラってまだあるのか？」

「はい保管されています。承知いたしました。すぐにお持ちいたします」

オスカーは少し拍子抜けした。ドロホフ邸にはほとんど母親や父親、オスカー自身の写真は残っていないからだ。名前を知りもしない先祖の肖像画なんかはいくつもあつたが、自分の知っている身内の写真をほとんど見たことは無かつた。だからカメラももう無いのかと思つたのだ。

またしもベ妖精が現れる時特有の音がして、ペンスが現れた。ペンスの手には憂いの篩で見たのと同じ、古いがよく手入れされたカメラがあつた。

「ありがとう。ペンス」

「ペンスめにはもつたいないお言葉です。オスカーお坊ちやま。それではまた何かございましたらお申しつけ下さい。クリスマスの準備はほぼできております」

そう言うともた音をたてペンスは消えた。オスカーの手にはカメラがあつたが、きつと母親から教えてもらったはずのカメラの撮り方をオスカーは覚えてはいなかつた。しばらく、カメラの色んな所を押してみたり、写真を撮ってみたりしたが果たしてうまく使えているのか、正しい方法なのかの自信がオスカーには無かつた。

そうこうしている間に結構な時間がたつていて、外出禁止の時間まであと一時間ちよつとくらいだろうとオスカーが考え始めたころ、やつとレアがやって来た。

「オスカー先輩、遅れてすいません…… カメラ？」

「大丈夫だけど…… ああカメラだな」

オスカーとカメラという組み合わせにピンとこないのか、少しレアは悩んでいるような微妙な顔をしていた。

「オスカー先輩は写真を撮るんですか？」

「いや今まで…… 多分ほとんど撮ったことは無いんだけど、ちよつと…… そうだな、みんな…… 去年劇をやったメンバーで写真を撮ろうかなって思って、家から持ってきてもらったんだ」

本当の写真の使い道をオスカーは言うわけにはいかなかったが、そのメンバーで写真を撮りたいというのは本当だった。

「ただ、俺はあんまりカメラの使い方とか上手くないし…… ああそうだった。現像の仕方とかも分からないんだよな」

「ちよつと見せて貰ってもいいですか？」

「ほら」

レアはカメラを持ってきつきのオスカーと同じようにいじったり、オスカーの方にカメラを向けてシャッターを押したりした。その後、なぜか領いてからカメラをオスカーに返した。

「レイブンクローの友達に凄い魔法使いのカメラに詳しい子がいるんです。その子にちよつとカメラを教えて貰ったことがあるので、ボクも少しだけなら写真を撮れますし、それに現像もその子に頼めばやって貰えると思います」

「そうなのか？ でもちよつと悪いしな……」

「だ、大丈夫だと思えます…… その、レイブンクローの三年生で決闘トーナメントにでてるのはボクだけなので、だいたいのことは言えば助けてくれるはずですし、それにボクは最近ずっとオスカー先輩に迷惑をかけ通しなので……」

なぜか少しレアの元気が無くなってしまったので、オスカーはこれは頼んだ方が良さのだろうと考えた。それに閉心術の練習はあまり上手くいって無かったので、ちよつと気分転換をしたいのもあった。「じゃあレアに頼む。それに…… そうだな、あんまり時間も無いし、今すぐみんなを集めるか」

「は、はい!!! って…… 今すぐ？ ですか？」

「うん。我、良からぬことをたくらむ者なり」

オスカーはポケットから忍び地図を取り出して開いた。変身術で作ったテーブルの上にそれを広げる。相変わらず、チャーリーとトックスの名前は練習場にあり、エストとクラーナの名前は見つからなかった。ハグリッドの名前はハグリッドの小屋の中にあるのもオスカーは確認した。

羽ペンを取り出して、オスカーは忍びの地図に文字を書いた。

『ハグリッドの小屋に集合。緊急。オスカー』

自分のカバンから魔法薬学の教科書を取り出して、その文字が書かれていることをオスカーは確認した。レアも自分の変身術の教科書を取り出して確認しており、オスカーの字が地図と同じく現れていることを確認できた。

「取りあえず、チャーリーとトックスを回収しに行くか」

「わ、分かりました」

オスカーとレアの二人は箒の練習場にいたチャーリーとトックスの二人を回収し、その後、忍びの地図で八階にいきなり現れたエストとクラーナがハグリッドの部屋に向かうのが見えたので、四人もハグリッドの小屋に向かうことにした。

「で、オスカー、緊急ってなんなんだい？」

「まあ着いてから言う」

「いやにもつたいぶるのね、ねえレア、教えてくれない？」

「えっ？ お、オスカー先輩が言わないのならちよつと……」

ハグリッドの小屋に向かう道中で、オスカーは一年生の時に何度も何度もルーンスプールの世話の為にこの道中を歩き来たことを思い出した。そのころと比べると随分みんな仲良くなれたのではないかとオスカーは考える。

「ほらやっぱりレアポイントをオスカーが稼いでるわ。すっかりオスカーのいいなりじゃないの」

「なんか人聞きの悪いことを言うなよ。それにレアのことを簡単に人に言われたことをやる性格なんて思っていると、全身金縛り呪文でやられる……」

「ちよ…… ちよつとオスカー先輩!!!!」

「へえ、レアは全身金縛り呪文が得意なんだ。決闘トーナメントでは気を付けないとね」

赤と緑のローブがハグリッドの小屋の前に立っているのが見え、それに小屋の中からハグリッドの巨体と黒い小さな影が出てくるのが見えた。フアングはわき目もふらずに小屋に近づいているオスカーの方へ向かってきているようだった。

「お、オスカー先輩、あ、ああいうのはな、内緒ですよ!!!」

「全身金縛り呪文が使えるのはホントだろ？ マツキノンの……」

「ダメ、ダメです!!! ほんとに死喰い人になっちゃいます!!!」

「オスカーに言うとおんまりシヤレにならないよね」

「死つていうより女じゃないの」

オスカーはフアングの相手をしないとイケなくなったので、他の人間の相手をしている暇が無くなった。相変わらずフアングはオスカーをよだれだらけにすることに余念が無かったので、杖で浮遊させてずっとお腹をくすぐっていた。

「何なの？ 緊急つて？」

「そうですよ。結構急いで来たのになんか全然深刻そうじゃないじゃないですか」

「まあちよつと緊急なんだよ。ハグリッドにも入って貰いたかったし」

「おお、何か分からんが何でもやればええ」

エストとクラーナは二人とも仁王立ちで腕を組んでオスカー達を待っていた。オスカーは余り真剣に受け止めずにバックからカメラを取り出した。

「それカメラですか？」

「カメラなんか持ってたの？ オスカー」

「結構古いわよねそれ？ なんかレンズが二つあるし」

「納屋にあるパパのコレクションに何個か同じ様なのがあった気がするなあ」

「ああ、緊急の要件って言うのはこれなんだ」

四人の言葉を聞きながら、オスカーはあたりを見回してどつちを向

いて撮ればいいのかを考え、ホグワーツの城をバックに撮れば一番構図が良いのではないかと思いついた。オスカーはレアにカメラを渡した。

「レア、城をバックに撮ればいいんじゃないか？」

「そうですね、ボクもそう思います」

「なんだ写真を撮るのか？ いいカメラだな。オスカー」

「ありがとう。ハグリッド」

いつの間にか腕組みが解けているエストとクラーナはもちろん、他のみんなをオスカーは見回した。結局、ホグワーツに入るときに何も無かったオスカーが手に入れたのは今見渡しているみんなのはずだった。だからクリスマスプレゼントに入れるモノとして、これが一番良いのではないかと思ったのだ。

「緊急とか書いたけどほんとは何も無いんだ。ただちよつとカメラが出てきたからみんなで写真を撮ろうと思っただけど……」

「いいじゃないの、まあ去年の劇の衣装で撮った方が良かったかもしれないんだけど」

「まあ騎士団の写真みたいにはトンクスがいる以上なりそうにないし、いいと思います」

「それだとなんかちよつとドジで終わりそうだからダメかも」

三人は良く分からないことで笑っていたし、どうも今回の発案は結構上手くいったようだ。オスカーは思った。

「レアが写真を撮るんだ？ 写真ができたなら貰えるのかな？ オスカー？」

「ボクがレイブンクローの友達に現像してもらうことになってるので…… その後オスカー先輩から配って貰えるかと……」

「わっはっは。写真に写るのは久しぶりだな。俺なんか写っていないのか？ オスカー？」

「ハグリッド、写ってる人は多い方がいいと思うんだ。それに写真は後で配るよ。じゃあレア、日が沈むまでに撮ろう」

「分かりました…… 皆さんならんで貰えますか？」

ホグワーツの城をバックに六人は並んだ。レアはそれをカメラの

レンズから覗いて、何度かうんうんと頷いた後、カメラに呪文をかけて空中に固定した。その後、オスカー達の方へ走ってきた。

「これでいつでも撮れるはずです…… フィルムに余裕があれば何枚か撮りますけど……」

「じゃあ何枚か撮つといてくれ」

「はいじゃあ、撮ります!!!!」

オスカーは空中に浮いたフアングになめられながら何回かシャッターが押されているカメラになんとか笑顔を作ろうとした。今年は去年よりもまともなクリスマスが送れそうだとよだれだらけになりながら考えていた。

写真を撮った数日後、クリスマス前では最終になるレアとの練習で、オスカーがまた椅子に座って待っていると、ちよつと息を切らしたレアがやってきた。

「お、お待たせしましたオスカー先輩…… 写真もできました」

「ありがとうございます。レア」

レアは自分のカバンからオスカーが渡したカメラと封筒を取り出した。ただ、レアの表情が少し心配そうな顔なのがオスカーには気になった。

「あの…… フィルムを全部現像してもらったんですけど…… ハグリッドの小屋の前で撮った写真に加えて…… 違う写真も出てきました……」

「違う写真？」

オスカーには何の写真なのか余り検討がついていなかった。レアは少し申し訳なさげにオスカーに封筒を渡した。

「はい…… 多分、オスカー先輩とご家族の写真だと思うので入れておきました」

「ああ、ありがとうございます。なんかお金がかかったんなら言ってくれれば渡すよ」

「いえ、それは大丈夫です」

インセンディオを付けた燭台の灯りを頼りにオスカーは封筒を開

けた。中には先日撮ったばかりのみんなの写真が十枚ほど入っていて、クリスマスプレゼントに使うには十分な数だった。それにみんな笑顔だった。

その写真の束の一番奥から出てきたのは…… オスカーにはどうしてレアが申し訳なさそうなのかが分かった。最後の写真は小さいオスカーと母親と…… 彼女が写っている写真だった。

トンボこそ写っていないかったが、場所はオスカーが何度も見たことのあるドロホフ邸近くの森に間違いなかったし、こっちに笑いかけてくる三人にオスカーは目を離すことができなかった。見ると心に決めて見る憂いの篩と違って、まるで不意打ちの様に見せられたその写真を見て、オスカーはどうしても目を離すことができなかった。

オスカーにはどれくらい自分がその写真を見ていたのか分からなかったが、やつと写真から目を離すことができた時、みんなや自分がホグワーツの城をバックに笑っている写真とその写真が同時に視野に入った。

どうしても、レアが目の前にいると分かっているのにオスカーには表情をコントロールすることも、閉心術の様に心をコントロールすることができなかった。

写真を撮った事すら覚えていないことが激しく心の中で暴れている気がした。口から血が出るほど歯を噛みしめていたし、写真を握っていた手が白くなるほどだった。森の中でこれから何が起こるかも知らずに笑っている自分の顔と、ホグワーツでのんきに笑っている自分の顔を見比べて、オスカーは全く自分が後悔も進歩もしていないし、それをあり得ないほど思い知らされている気がしたのだ。

「オスカー先輩…… あの…… 大丈夫ですか？」

「ああ、ごめん……」

果たしてレアの閉心術の相手をしているのが自分で良いのか、それにいつになったら名前や記憶を取り戻すことができるのか、クリスマス前だと言うのに誰かをきちんと祝福できる状態になれるのか、オスカーにはその自信が無かった。

ベッドの上でオスカーは悩んでいた。本当に悩んでいた。オスカーにとってホグワーツに入ってからクリスマスは色んな事があった。みぞの鏡であったり、セーターが書き換わったり、エストとクラーナが喧嘩したりと本当に色々あったのだ。

しかし、今度の悩みはそれらを全部組み合わせたモノの様にオスカーは感じていた。何せ、もう三時間以上オスカーはベッドの上で悩んでいるのだ。

クリスマスプレゼントを開けて、今年はウィーズリーおばさんからプレゼントが手編みの手袋が変わっており、もうセーターで悩まなくてもいいと思った後の出来事だった。

すでに朝食の時間は終わって、もう昼食の間になるかという時間になってもオスカーは悩んでいた。正直、どうしたらいいのか分からなかった。

すると、オスカーの部屋がノックされた。

「オスカー、入るわよ」

入ってきたのはトンクスだったので、オスカーは一息ついた。

「やっぱり起きてるじゃないの。一体朝食も食べないで何してるのよ」

「何って…… ああ、メリークリスマス、トンクス。クリスマスで最初に会うのがトンクスなのは初めてだな」

「メリークリスマス…… なるほどね」

ベッドに座っていたオスカーの横にトンクスは割り込んで来た。それだけで枕元に置いてあった時計や本がトンクスに吹っ飛ばされて床に転がった。いい加減、トンクスが動くだけで何か引つ掛けたり、壊れたりするのは慣れっこだったのでオスカーは何も言わなかった。

問題なのは二人が座っているベッドに広げられているセーターだった。

一枚は緑色の糸に銀色の糸で見事にセストラルが描かれていた。今にも飛び立ちそうなセストラルは尻尾の毛が二股に分かれている所が印象的だった。

もう一枚は赤色の糸に銀色の糸でトンボが描かれていて、印象的なのはトンボが斜めを向いておらず、セーターの首元の方、真つすぐの上に向かって描かれている所だった。

「詰んだわねオスカー。緑がエストで、赤がクラリーナでしょ？ でも蛇じゃないのね」

「蛇？」

「だってスリザリンの象徴は蛇でしょう？ クラリーナのはオスカーの守護霊だから分かるけど…… これセストラルよね？ 何でセストラルなのよ？」

「それは…… 多分、俺とエストの杖の芯がセストラルの尻尾だからだろ」

オスカーが二股に分かれたセストラルの尻尾の毛を示して言った。トンクスの髪の毛はご機嫌な時専用のショッキングピンクだった。

「ヒュー!!!」 オスカー想われてるじゃないの」

「あのなあ…… 絶対これ夏休みにトンクスが手編みがどうか言ったらせいだろ、あと毎年俺とクラリーナのセーターに悪戯するからこんな事になってるんだぞ」

オスカーには想われているというよりもそっちの要素の方が大きく感じた。多分、二人が毎年、毎年ウィーズリーおぼさんのセーターに悪戯されているのを見るのが嫌なのだろうと思ったのだ。事実、最初の年はオスカーのセーターをクラリーナが着ていただけでエストは大騒ぎしていたし、次の年もその次の年も二人は大騒ぎしていたからだ。

「いいじゃない。ママが言ったのはこれだったのね、私はこういうの得意じゃないから教えてあげられる人を探してたってわけね、エストはチャリーリーのママだろうし」

「クラリーナがトンクス先生に、エストがウィーズリーおぼさんに手編みを教わってたってことか？ 確かに何か時々夏休みに二人組になってたな……」

オスカーは夏休みも学校に入ってから二人と喋っていたはずだったが、全くこうなるとは予想できていなかった。

「どうしろって言うんだ……」

「どつちか着ればいいじゃないの」

さも当然と言う顔のトンクスの顔を見て、オスカーはため息をついた。正直、オスカーは去年のクリスマスマスの一件が割とトラウマになっていた。あの時、二人共疲れていたとは言え、あそこまで喧嘩すると思っていなかったのだ。今回のセーターもクリスマスというのが手伝って大きな火種になるのではないかと考え、二人がいるであろう広間に行くに行けなくなっていたのだ。

「ああそうだ、トンクス、あの良く分からない本ありがとうな。なんだったか…… えっと、魔女の真実の姿を見る？ 真実薬が無くても見える魔女の心の姿…… ギルデロイ・ロックハート監修…… うわ!! なんだこれ、八ガリオンもするのか」

オスカーはトンクスから貰った良く分からない本を見て驚愕した。ピラには監修者らしき、イケメンだが何か胡散臭い魔法使いが真っ白な歯を見せてこちらに笑いかけている。そしてその後ろには定価八ガリオンと書かれていたのだ。

「そうよ。一番面白い…… じゃない、オスカーのためになりそうな本を買ってきたのよ。ちなみにこれをホグズミードの本屋で買ったら、ハツフルパフの友達に気が狂ったのかと思われたわ」

「俺も気が狂ってるのかと思った。ベゾアール石があったらトンクスの口に無理やりねじ込むとこだ」

ペラペラとめくったが見た感じ、ためになることは書かれておらず、延々と監修者の自慢が書かれているようにしか見えなかった。オスカーにはこの本に八ガリオン出す価値がともあるとは思えなかった。チャドリー・キャノンズの優勝にかける八ガリオンと同じくらい価値が無さそうだった。

しかし、なぜかトンクスはちよつとだけニヤニヤしていたので、この本にも何か意味があるのだろうかとおスカーは思った。ただ、ここで杖を使うことはできず、呪文で確認することはできなかった。

「でも今年のおスカーのやつはセンスあったわ。一枚だけ出てきた時には果たし状でも入れたのかと思っただけ。それにあの写真はこの

ために撮ってたのね」

「それは良かったけど、なんだよ果たし状つてもっとましな例えあったらろ」

トunksはカエルチョコレートのカードとほとんど同じ外見のカードを持っていた。あほな事を言っただけだが、なんだかんだカードを持っているトunksは楽しそうだったので、オスカーは間違っただけでいいんじゃないかと安心した。

「だって、オスカーが手紙で私に告白してくるわけじゃないの。だったら、果たし状か絶縁状か…… いいとこ吠えメールね」

「俺はどういう存在なんだよ」

何が悲しくてクリスマスに吠えメールを送らなければならぬのか。オスカーは少なくともそんな人間になりたくなかったし、周りの皆がそうなるって欲しくは無かった。

「まあほんとにこれはセンスあるわ。今年はオスカーとクラナのセーターに何もなかったからゆっくり起きたんだけど、そしたらプレゼントにこれが入ってたからオスカーを探しに広間に行ったのに、扉の外でフレッドとジョージが私にエストとクラナが朝から同じ場所に座ってそわそわしてるって言ってたのよ。それに一向にオスカーが来ないって、だから広間に入らずにオスカーの部屋に来たのよ」

「えーっと…… まあ気に入ってくれたんならなによりだ。みんな同じデザインだけだな」

つまりトunksは他のみんなに挨拶する前にオスカーの部屋にやって来たらしかった。プレゼントを気にいって貰えたのは嬉しかったが、トunksがからかうためにやって来たのは明白だった。

オスカーは自分の分のカードを取り出した。カエルチョコレートの偉人が描かれている場所にはオスカー達の写真が、下の説明文にはカードの効果とみんなの名前が書かれている。

「誰かがヤバくなったら熱くなるんでしょ？ それとヤバイ人の名前が赤くなるって書いてあるわ」

「まあまだ誰もヤバくなってないから分からないけどな」

トunksはカードを大事そうに持っていて、その後持ってきた自分のポシエツトの中にしまったようだった。

「それで？ まあ来年はさらにややこしくするために…… 私が贈らなくてもレアにセーターを送って貰えばいいとして、とつとどつちか着なさいよ」

「いやもう去年のやつを着たままの方が」

「いいからその前のやつ脱ぎなさいよ」

トunksは無理やりオスカーが着ていた前にウィーズリーおばさんから貰ったセーターを脱がそうとした。オスカーはベッドに広げているセーターを巻き込むわけにはいかなかったし、なんだかんだトunksを力で振り払うわけにもいかなかった。髪の毛や姿は安定しなかったが、オスカーはあくまで男の子でトunksは女の子だったからだ。

「ほらいい加減観念した方がいいわ。一回、火の雨が降れば地面が固まるわ」

「固まるわけないだろ」

狭いスペースでオスカーのセーターを掴んで離さないトunksからオスカーはなんとか遠ざかろうとした。するとまたオスカーの部屋がノックされた。

「オスカー、入るの」

「入りますよ、オスカー」

オスカーにはこのあとどうなるのかだいたい分かった気がした。オスカーは絶対にトunksと同じベッドにいるのは二度とやらない方がいいと二人が入る前から考えていた。

文字通り二人は部屋の中を見て、目を見開いて完全に二秒ほど停止していた。オスカーとトunksも停止していた。

「なっ…… なっ…… なっああ!! まさかふ…… 二人共起きて来ないと思ったら、も、もしかして、昨日の夜からずっと一緒にいたんじゃないですか?!!」

「ええええええええ!! そ、そうなの!? でも確かに昨日二人共同じくらの時間に居なくなっただけ」

オスカーはトングスのドジが完全にも移り始めているかと思えなかった。しかもハツフルパフの寮でやったことをドロホフ邸でも再現していて、全く進歩がみられない自分が情けなくなってきた。

「そんなわけないでしょ!! なんで毎回こうなるのよ、誰かがタイミング考えてるんじゃないでしょうね!!」

「じゃあどう説明するんですか!! 二人共、起きて来ないと思ったらオスカーの部屋のベッドで盛ってるじゃないですか!!」

「そうなの!! オスカーの服ははだけてるし、トングスの髪の毛だって真っ赤なの!! こんなの現行犯以外の何物でもないの!! 大体トングスには前科があるもん!!」

「セーターだけだし、トングスの髪の毛は今ので赤くなっただろ……」

「ああ、もう何なの!! あなた達が二人そろってセーターなんか贈るからじゃないの!! 何よ盛ってるって!! あなた達の方がよっぽどいつも盛ってるじゃないの!!」

なんと今度は全員怒っている様でオスカーには手の付けようが無かった。そもそもオスカーは今年のクリスマスは一度もベッドから動いていないのに災難に巻き込まれていて、もはや自分に安息の地などないのではないかと考え始めていた。

「あれでしょう!! クリスマスの夜、みんながいる中で二人でいる背徳感みたいなものがあるんでしょ!!」

「いくら温厚なハツフルパフでも怒る時は怒るわよ!! 何なのよその背徳感って!!」

「ハツフルパフの寮ではもうやりにくいし、スリザリンの寮には入れないからオスカーのお家でやるなんて、段々と賢くなってるの」

「杖は魔法を使えなくてもしばいたり突くことくらいはできるのよ!! あんた達いい加減にしなさいよ!!」

オスカーにはどうして自分のカードが熱くもならず、自分の名前が赤くならないのかが分からなかった。自分のかけた呪文は失敗したのだろうか? 何度かカードを確認したが、熱くもなかったし、名前

の色も変わらなかった。つまり命に係わる災難ではないという事だった。

「これよ、これ!! あなた達が二人そろってこんな贈るからよ!! どっちかを着させようとしてあんな状態になってたのよ!!」

トンクスはベッドの上に立って、二枚のセーターを二人の前に突き出した。二人はその二枚のセーターを見て、それからオスカーの顔を、その後お互いに顔を見合わせた。

「なんで赤なの?」

「は? なんですか?」

「だから、何で赤なの? スリザリンの色は緑に銀だもん。トンボはオスカーの守護霊だからわかるの。なんで赤を使ったの?」

「えつと…… それは……」

クラリーナは声を詰まらせて、オスカーの方を困った顔で見た。しかし、エストがその後何も言わずに真顔でクラリーナの方を見ていたのに耐えられなくなったからか、喋り始めた。

「オスカーは…… 組み分けの時にグリフィンドールかスリザリンで組み分け帽子が迷ったって言ってましたから、グリフィンドールの赤とスリザリンの銀色にしてみましたらどうかなって思ったんです」

「そうなの?」

「何それ初めて聞いたわ」

エストとトンクスがオスカーの方を見たので、オスカーは答えざるを得なかった。

「それはホントだ」

オスカーがそう言うと、しばらくエストもトンクスもクラリーナが編みだはずのセーターを見ており、その間クラリーナは落ち着かないように、二人とオスカーの方を交互に見ていた。

「へえ、てつきり二人共自分の寮の色をセーターの色にしたと思ってたけど違うのね」

「違うの」

「違いますよ」

トンクスに関わる事だけ二人は息が合うようだった。正直、オス

カーはこの災難続きのクリスマスマスをなんとか終わらせたかった。そもそもオスカーは朝食さえ食べていなかったのに昼食の時間が近づいていた。

「エスト達のセーターは…… まあなんでも…… 良くは無いけど、なんでトングスはオスカーの部屋にいたの？ アロホモラが要らなかつたからコロポータスしてたわけじゃないでしょ？」

「そうですよ!! トングスは一度も広間に来なかつたじゃないですか、スコージファイを使つてないって言うなら、朝起きて直接この部屋に来たつてことですか？」

「ほんとになんで今日そんなに言ってくるのよ!! どっちも使つてないし、ハツフルパフ寮でも使つてないわよ!! 二人もオスカーからカードを貰つてるんでしょ？ 私はこれ貰つたからオスカーに何か言おうと思つて広間に行つたけど居なかつたから、この部屋に来たのよ!! それなのになんなのよ!! 二人のどっちかが直接、セーターはどうだったの？ セーターはどうでした？ つて聞きに来てればあんなキャンキャン騒がなくても良かったのよ!!」

トングスはオスカーが贈つたカードを取り出して、相変わらず髪を真つ赤に染めて怒つていた。相当頭にきているらしかった。ただ、オスカーにはどうにもできなかつたし、多分、自分はお礼を言いに来ただけなのに、どうしてこんなに言われなさいいけないのかについてトングスは怒っているのだろうとあたりをつけた。

「そんなに怒らなくてもいいでしょう!! キャンキャンつて何ですか!!」

「そうなの!! 二人でいた理由にはなつてないし、だいたいトングスが怒る理由なんてないもん!!」

「クリスマスだしそんなにみんな怒らなくてもいいだろ……」

「もういいわよ。どうせオスカーはセーターを交互に着るんでしょ？」

「じゃあ別に今日着なくてもいいわ。お腹減つたし行くわよ」

「え？ おい…… トングス？」

オスカーはそのままトングスに連れられて、前のセーターのまま部屋から連れ出された。部屋の外にはフレッド・ジョージとレア、トン

クス先生がいてトンクスに連れられてでてきたオスカーを意外そうな目で見ていた。

「フレッド、これはとんでもないことになったんじゃないかな？」

「ああジョージ、掛け金は元返しだ」

「せめぎ合ってる状態だと他がその間に成長してくるのよね」

好き勝手なことを言う三人をトンクスが睨んだ。三人では無く、後ろにいたレアがちよつとビビっている様だった。

「トンクス先生、レア、フレッド・ジョージ、メリークリスマス」

「メリークリスマスです。オスカー先輩」

「あんたバカじゃないの、とつとと広間に行くわよ」

ずんずん進みながら廊下に置いてある良く分からない彫像やカーペットの端、鎧、壺なんかに足を引っかけそうになるトンクスをちよつと誘導しながらオスカーは広間に向かっていった。エストとクラーナは追いかけてはこなかった。

「トンクス、クリスマスなんだしそんなに怒らなくてもいいだろ。二人も置いて来ちやったし……メリークリスマスもプレゼントの礼も言えてない……」

「うるさいわよ。だいたいなんでオスカーが怒ってないのよ。カードの意味ないじゃないの」

「え？　なんで俺が……」

「あのね……もういいわ。決闘トーナメントで誰かに当たったら絶対名前を赤くしてやるんだから」

二人が広間に入るときつき部屋の近くにいた人達以外全員がもう起きている様だった。ジニーとロンが入って来た二人を見て、近づいてきた。

「エストとクラーナはどっちが勝ったの？」

「二人とも負けたのよ」

ジニーはそう言うトンクスの顔を不思議そうな顔で見た。ロンの方は一体何の話をしているのかまったくわかっていなさそうだった。

「メリークリスマス、ロン、ジニー」

「メリークリスマス、オスカー、チャドリー！　キャノンズの選手名鑑あ

りがとう……」

ロンはちよつと恥ずかしそうにもごもご言った。オスカーはエストとチャーリーからロンがチャドリー・キャノンのファンであることを聞いていたので、それを贈ったのだった。ただエストといい、ロンといい、あんな絶対負けるチームの応援をどうしてできるのかは疑問だった。

オスカーとトンクスが机につくと同時に料理が机に現れた。その後二人の真正面にそわそわした顔のテッドが座りに来たのだった。

「パパうるさいわ」

「まだ何も喋ってないだろうドーラ。というか何があつたんだ？ アンドロメダは今年もつと面白くなると言つて、オスカー君の部屋に行つて帰つてこないんだが……」

「だからうるさいつて言つてるのよ」

トンクスはテッドに全く取り合う気が無さそうだった。テッドが困った顔でオスカーの方を見てきたが、オスカーももう何がなにやら分からなかった。

「オスカー君…… えーと、エストちゃんとクラリーナちゃんはどこに行つてしまつたんだい？」

「二人は…… まだいるんなら俺の部屋にいます」

テッドは眉を寄せて、必死に状況を理解しようとしている様だったが、当事者の一人のオスカーもそもそもどういう状況になつていいのか理解できていなかった。

「うーんと、もうお昼の時間だし二人は他のみんなと一緒に食べないのかな？」

「いいのよ。エストとクラリーナは自分の事ばかりだし、練習だつて秘密にするつて言うし、そのくせはつきり言わないし…… とにかく待つ必要はないわ」

荒々しい手つきでシチューを食べるトンクスは髪の毛は赤く、やはりまだ怒っているようだった。ときどき思いつきりシチューにスプーンを入れるせいでオスカーの方にシチューが飛んできていた。オスカーとテッドはそんなトンクスを見て顔を見合わせた。テッド

はトunksに聞こえない様にオスカーの耳の傍で喋った。

「ドーラは相当怒ってるみたいだね。僕が誕生日プレゼントを置き忘れた時以来かな？　こんなに怒ってるのを見たのは。オスカー君、なんで怒ってるのかわかるかい？」

「そんなことしたんですか……　いや、なんとなく怒ってる理由は分かるんですけど……あそこまで怒る……　うーん」

オスカーは自分が贈ったカードが原因なのではないかと考えていたが、それにしてもここまで怒っている理由は良く分からなかった。

「オスカー、メリークリスマス。カードありがとう。それにしても今年はエストVSクラナは無かったんだよね？　さつきまで二人はここにいたし」

「ああチャーリー、メリークリスマス。万眼鏡のクイディッチ対応レンズありがとうな。まあ、エストとクラナは喧嘩してないかな」

オスカーはチャーリーと喋りながら横目でトunksを見た。トunksはもうシチューを食べ終わった様だった。まだやつぱり髪の毛は赤みがかっていた。

「トunksはなんで怒ってるの？」

「いやはつきりとは……」

「怒ってないわよ」

「いやドーラはどう見ても怒ってるよ」

「怒ってない」

少しトunksは意固地になっているようだった。オスカーにはこれに対する解決策はあんまり浮かんではこなかった。そもそもトunksがなぜ怒っているのが分からないと解決のしようが無かったからだ。

「ちよつと二人が言いたいことがあるみたいだよ」

聞けばすぐにわかる人を安心させるような深い声が聞こえた。いつの間にか後ろにキングズリーがいるようだった。それにウィーズリー夫妻や他のウィーズリーの兄弟、さつきオスカーの部屋の前にいた四人も広間に戻ってきていた。そしてオスカーの部屋にいたはずの二人もだった。

「なんで二人がセーターを着てるのよ」

トンクスの髪色がやつて来た二人を見てようやく赤くなくなった。エストとクラリーナの二人はなぜかお互いにオスカーに贈ったはずのセーターを着ていた。確かにエストが赤色、クラリーナが緑色のセーターを着ているのはオスカーからするとかなり違和感があった。よく一年生の時、クラリーナは緑色のセーターを着ていたと思わざるを得なかった。

「だってトンクスがバカみたいに怒るからじゃないですか、なんか空気悪いですし」

「セーターを着てる理由になってないでしょ。だいたいそんな事したらそのプレゼントの意味ないじゃないの」

「だから着てきたの。結構オスカーのサイズ大きいの」
「当たり前でしょ。そもそも一回同じサイズの作ってるんだからそんなの最初から分かってるじゃない……」

トンクスは額を手で押さえて首を振った。オスカーからするとトンクスらしからぬ知的な行動に見えた。何かいつもと三人の関係が逆転しているような気がした。

「まあとにかく今日はエストのセーターを着てますよ。トンクスが言いたいのはこういう事なんじゃないですか？」

「エストもクラリーナのセーターを今日一日は着とくの。スリザリン生が赤い服を着るって結構面白いし、色って色んな意味があるよね」

「あのね…… あんたたちいつかそれじゃすまなくなると思うけど…… まあいいわ。クリスマスなのに怒ってた私が悪かったわ」

何とか丸く収まったようだった。オスカーはちよつと一息ついて、今、広間に全員が集まっていることに気付いた。

「今、みんな集まってるし写真撮らないか？」

「オスカー、あんたがだいたい原因…… でも写真は撮りたいわね」
「ペンス、カメラを持ってきてくれ」

オスカーがそう言った瞬間にカメラを持ったペンスが現れた。この展開を予想していたのではないかという早さだった。

「オスカーお坊ちやま。恐縮ではありますが、ペンスめは奥様から

しやったーの押しかたを覚えていただいたことがありますので、ペンスにお任せいただければと」

「ダメだ。ペンス。お前も写真に入るんだ。えっと…… みんなで写真を撮ろうと思うんですけど…… 誰か魔法でシャッターを押して貰えますか?」

「じゃあ僕がやろう。それにしても二眼カメラって珍しいね、オスカー君」

トックスをなだめることもできず、相手にされることもなかったテッドが進み出てくれた。

「これは二眼カメラというのかい? オスカー君、テッド? 私もいくつか持っているんだが、いったいこれはどういう仕組みで……」

「アーサー、それは撮った後に聞いてちょうだい。それにいくつか持っていると言うのも後で聞かして貰いたいわ」

ウィーズリーおじさんはあつという間にウィーズリーおばさんに引っ張られて消えていったので、写真はどうか撮れそうだった。一行はハグリッドが今年も送ってくれた大きなクリスマスツリーとタペストリーをバックにして写真を撮ることにした。

「そうね、オスカー君の隣が重要になってくるわよ」

「オスカーの隣はペンスを置いとけばいいのよ」

ちよっかいをかけようとするトックス先生にトックスが返して、やっぱり今日のトックスは一味違うようだと思わざるを得なかった。

「その様なことは余りに身に余る行為で……」

「ペンス。写真を撮るときに隣にいることを命じる」

「承りました……」

オスカーが余り屋敷しもべに命じることはしたくなかったが、今回ばかりはせざるを得なかった。ペンスは目をうるうるさせて、今にも泣きそうだった。

「パス、ちよつと手伝ってくれ」

「我ががホグワーツの優等生のパスに手伝って貰えれば一発だ」

「え？ 一体何を……」

フレッド・ジョージとパーシーは何か後ろでやっている様だったが、それに注意を向ける前にオスカーは後ろにいたビルに肩を叩かれた。

「なるほどね、オスカー達がやっぱり決闘トーナメントで上がってくるんじゃないかな。他の寮同士でこんなに色々できてる人たちは聞いたこと無いからね。でもオスカー、ちよつとそろそろ色々考えないと…… 仲が良いのも、不味いことになるんじゃないかな？」

「えつと…… ちよつと考えてみるかな？」

ビルの言っていることをオスカーは余り理解できている気がしなかったし、何よりもうそろそろシャッターが押されそうだった。オスカーの隣は結局ペンスとキングズリーだった。

「じゃあシャッター押すよ。三、二、一……」

「ちよつと、パース、押しちやダメなの!!!」

「わわ、なんですか!!! フレッド!!!」

「なんで私まで押すのよ!!!」

パーシーとフレッド・ジョージがそれぞれエスト、クラーナ、トックスをオスカーに向けてシャッターと同時に押したせいで、オスカーは玉突き事故の様に前に押し出されてしまい、そのまま写真を撮られてしまった。

オスカーは何か朝から写真まで、今年のクリスマスは、ずっと振り回されている気がしてならなかった。

バタービール

クリスマスが終わって、決闘トーナメントの本選が行われる日になったが、オスカーとレアの練習は上手くいってはいなかった。相変わらず、レアはオスカーのレジリメンスを自分の意思で弾くことができなかつたし、むしろ段々と悪化しているようにさえ思えるほどだった。

スクリムジョール先生の話では下級生を優先的にシードにするはずだったので、エントリーした中で一番学年の低いレアがいるというだけで、ほとんど確実に一回戦は決闘しなくてもいいはずではあった。

「オスカーとレアでシードが一つ埋まっても、人数的には私とエストかトックスとチャーリーのどっちかの組がシードになるはずですね」「十四組だとそうなるはずだな、シードだと三回、そうじゃないと四回勝たないと優勝まではいけないはずだしな」

オスカー達は完全に様相を変えた大広間に用意されたベンチに座っていた。今や大広間はいつもの大広間の数倍の大きさがあるように見えたし、真ん中の何も無い空間を取り囲むようにベンチが設置されていたのだ。

クイディッチの競技場とまではいかないにしろ、ホグワーツの全校生徒が座れて、なおかつどの位置からも決闘場らしき何も無い空間を見ることができていたので、十分豪華な決闘場、スタジアムだと言えた。「それでは組み合わせを発表する。事前に連絡した様に下級生を優先した組み合わせになるように配置させて貰った」

スクリムジョール先生が杖を振ると、大広間の真ん中にタペストリーが四枚、どの方向からも見える様に現れた。白地の布にトーナメントの組み合わせとそれぞれの名前が、赤、緑、黄、青色で示されていた。

「エストとクラリーナがシードじゃないのね、て言うかシード枠同士を二回戦でぶつけるってどうなのよこれ」

「まあ下級生を優先って言うたから、下級生同士ぶつけた方が体力

的に楽なんじゃないかって考えたんじゃないのかな？」

トンクスとチャーリーの言う通り、オスカーとレア、チャーリーとトンクスの組がシード枠かつ、二回戦でぶつかるような組み合わせになっており、エストとクラリーナに関しては一回戦から試合があり、オスカーやチャーリー達とは決勝戦までは当たらない構成になっていたのだ。

「クラリーナの言ってたトンクスをボコボコにするって言うのは決勝まで行かないとできないの」

「今日はエスト先輩とクラリーナ先輩たちだけ試合なんです…あれ？先輩たちの相手って、レイブンクローとスリザリンの監督生なんじゃ……」

レアの言葉を聞いてオスカーももう一度タペストリーを見ると、確かにスリザリンの女の監督生とレイブンクローの男の監督生らしき名前がエスト達の一回戦の相手だった。

「確かにそうだな、監督生は一学年に八人だけのはずなのにな」

「どこが下級生を優先した組み合わせなんですかコレ、むしろ難易度が上がってませんか？」

「サイコーね、ハツフルパフ以外で潰し合うのが一番戦略的よ」

「ハツフルパフ生のエントリーが一番少ないから、そうなるのは必然なの」

タペストリーに示されたトーナメント表を見て、広間の生徒達にはざわざわが広がっていた。実際、自分の寮の有力株が潰し合っていたりと言う事もあったし、それにどの試合に全力を賭けるのかと言うのも結構な問題であるはずだった。

「それでは一回戦を始める。まずは第一試合からだ。ステージはここだ」

スクリムジョール先生がそう言ったのと同時に、広間の何も無い部分にまるで生えてきた様に険しい、ごつごつとした岩山らしき風景が現れた。ところどころにサボテンの様な植物、それに小さな洞窟の様なモノまで見え、オスカーはすぐにでもレッドキャップなんかそこから飛び出してきそうだと考えた。

「これステージにあたり外れがあるな」

「そうだよ、どのくらいの種類のステージがあるのか分からないけど、場所に合わせた戦い方をした方が断然有利だよ」

「そう言う練習もしないとダメなのに……」

レアは少し険しい顔をして、始まろうとする試合を見ていた。一回戦はビルとハツフルパフの監督生のペア、それに相手はスリザリンの監督生にハツフルパフの六年生のペアだった。

「ちよつといきなりハツフルパフ同士じゃないの。何よこれ、トーナメント表に悪意を感じるわ」

「取りあえずビルでどんな感じなのか見るの」

「そうですね、他の学生がどんな感じで戦うのかは見ものですし、どんなステージなのかも確認しないと不味いですね」

一回戦に出る四人が岩山の様な場所に移ると、レイブクロウ生が固まって座ってる場所以外から歓声があがった。それに他の学生が座っているベンチが、試合を見やすくするためか少し浮き上がっている様だった。オスカーがステージと試合をする四人の位置を見た感じだと、初めの位置からは相手のペアの姿を見ることができない様に思えた。

「試合のルールはこれまで通知してきた通りだ。それでは始め!!」

開始の合図と同時にビルのペアは移動を始めた様だった。オスカーは万眼鏡をポケットから取り出して、チャージャーに貰ったレンズをはめてから試合を見ようとしたのだが、隣のトンクスにひったくられた。

「クリスマスの本代として貸してもらおうわ」

「あの本全く読む気が起こらないんだが」

「人生損してるわよ。オスカー」

オスカーがトンクスの相手をしている間に試合が進んでおり、ビルのペアはあつという間に岩山の一番高い場所に陣取ったようで、そこから対戦相手のペアを見つけようとしている様だったが、高い場所に上ったせいで逆に場所が対戦相手にばれていた。

「姿くらましが使えないとやっぱり戦い方は限られますね」

「あの術を使える様にしちゃうと試合時間内に終わらないんじゃないのかなあ」

「高い場所の方が有利なんでしょうか？」

「そうとは限らないの……」

スリザリンとハッフルパフのペアは、ビルたちが登った岩山をモノを掘る呪文であるデイフォデオで遠くから掘り始めた様だった。一人では相当な時間がかかりそうな量を二人であつという間に掘りつくそうとしており、ビルのペアは岩山が崩れる前に離れざるを得なかった。

「うーん…… どっちを応援したらいいのか分からないわ」

「そうだな、何かみんなの応援もクイディッチの時とは違う気がする」

クイディッチだと明確にどっちの寮の応援かが分かれるのだが、この試合では三寮の学生が戦っているせいで、応援のしどころが微妙になりあんまり盛り上がってはいなかった。

「やっぱりなんだかんだビルは凄いですね」

「まあママもミュリエルおばさんもビルはお気に入りだしね」

今度はビルの方が積極的に攻勢にでていて、ペアの盾の呪文で守られながら、相手の足元を泥沼にへと変え始めていた。スリザリンとハッフルパフのペアは足元を取られて、上手く呪文を撃つことも避けることも難しくなっている様だった。

「ビルがオスカーにやられたのと同じ感じだよな」

「俺のも他の人の真似だけだな」

「よっぽど変身術が得意な人と決闘したんだね、オスカー？」

エストがオスカーの方を向いたが、オスカーは上手く返す事が出来なかった。オスカーがそれを思いついたのは、ヴォルデモートに操られていた時のエストの相手をしたからだったからだ。少なくとも、オスカーはそれ以上の使い手を相手にしたことは無かった。

「エストがそれを言うんですか？ 変身術ってだけなら、私はマクゴナガル先生やダンブルドア先生…… それに…… ねえ…… そうですね、とにかくそれくらいしかエストより使える人を見たこと無いですよ」

「もう終わっちゃいました…… 障害物があんまり無いと決闘の腕だけで決まっちゃうんでしよっか」

オスカーがエストに気を取られている間に、ビルのペアが勝利していた。グリフィンドール生とハッフルパフ生から大きな歓声がある。

競技者全員がステージから退場すると、ごつごつとした岩山は消えて、いつもの大広間の床に戻った。

「まあエストとクラーナにあたるのは運が良くて何試合も後だし、対策はバッチリできそうね」

「それより、オスカー達の対策をしないといけないけどね」

「クイディッチの練習に関わるといけないから棄権とかはないのか？」

「ダメよ。カード全部を真っ赤にするまで戦うのをやめないわ」

「そんなことしたらトunksは多分退学なの」

オスカー達は他の生徒の決闘をさかなにして、色んな事を言い合ったり、話しあったりしていた。試合があるはずのエストとクラーナは相手が七年生の監督生のはずだと言うのに特に緊張してはいなさそうだった。

「そう言えば、オスカー先輩、今日は緑のセーターなんですわ」

「まあ一応寮の対抗戦でもあるから、緑の服を着てた方がいいと思っただけだな」

オスカーはできるだけ、エストとクラーナとトunksの方を見ない様にして言った。正直なところ、オスカーはクリスマススの喧嘩が毎年大きくなっている気がして、少しトラウマになりかけていた。もし、杖があるホグワーツで喧嘩をされたら止めれる気が全くしなかったのだ。

「呪文で黄色か青色に変えて欲しい？」

「色が変わるのはトunksの髪色だけで十分だな」

「そうですよ、そんなマグルが一杯設置している信号機みたいな……」

そろそろ行ってきましたね」

「行ってくるね」

「行ってらっしゃい」

「頑張ってください」

「じゃあ頑張れよ」

「同士討ちで頼むわ」

何か言い合いになる前に、エストとクラーナの試合の時間が迫っていた。二人はベンチを降りて、真ん中のステージへと向かって行った。またスクリムジョール先生がステージに近づいて開始の合図をするようだった。

「競技者は初期位置に立つように…… 今回のステージはここだ」

これまで数試合あつて、森や荒野、市街地の様な場所があつたが今回はもつと別の場所だった。文字通り、大広間の床から何本もの高い本棚が生えてきた。ホグワーツの図書室よりもさらに高い本棚が延々と続いている様で、それに加えてホグワーツの図書室と同じ木の机や椅子があるようだった。

「マダム・ピンスがいらないとなんか違うわね」

「いたら真つ先にスクリムジョール先生があぶないだろうな」

「これじゃ本棚が高すぎて何も見えないんじゃ…… どうやって戦うんだろう?」

「良く燃えそうだよな? オスカーが相手の時はこのステージじゃないといいなあ」

チャーリーに失礼なことを言われた気がしたが、オスカーは試合の行方に注目していた。さつきトックスから取り返した万眼鏡を取り出して、エストとクラーナをアップで見ている。二人はお互いに何かを喋っているようだった。

「それでは始め!!」

試合開始と同時にオスカーは自分の眼を少し疑った。さつきまで万眼鏡で見えていた二人がもう片方の主席ペアを見ている間に消えていたからだ。もう一度万眼鏡で二人がいた辺りを確認すると、何も無いはずの場所で本棚から本が取り出されたり、椅子が動いたりしていた。

「目くらまし呪文か?」

「先輩たちはそれで見えないってことですか？」

「ちよつとせこすぎない？ グリフィンドールのやることなの？」

「クラリーナだけならあんまりしないかもしれないけど、エストと一緒だからね。なんだかんだエストはクイディッチの時も手段をあんまり選ばないし」

相手のペアはまだ戦略の練っている様で最初の位置から動いてはいなかったが、見えない二人は動き始めていた。二人がいるであろう一番近い位置の本棚から本が一齐に取り出され、空中に浮いたと思うとそれらが移動して本棚の上へと続く階段になった。

二人がその上を歩いているのが空中に浮いている本が微妙に浮き沈みしていることで分かる。その浮き沈みが終わったと思うと、浮いていた本が全て鳥に変わった。

「完全にあの二人を組ましたのは失敗でしょ。これ」

「距離があつたらエストの変身術があるし、詰めたらクラリーナが出てくるんだろうな……」

「ホントにオスカーが燃やすしかないんじゃないのかなあ」

「あ、相手も七年生の二人ですし…… まだ何か決まったわけじゃ……」

鳥がステージ全体に広がって、一匹が相手のペアを見つけると全体がその場所に殺到する。恐らく、本棚の上にいるであろう二人には鳥の動きから相手のペアがどこにいるのかが分かったはずだった。

その上、殺到する鳥は相手に近づく直前で石化している様で、相手のペアがそれを打ち落とそうとすると石像はくだけ散つてかなり厄介な様だったし、そもそもあり得ない数だった。相手のペアは打ち落とすのを諦め、近くの机を肥大呪文で巨大化させ、鳥と同じ様に石化呪文で石に変えて簡易な盾にして凌いでいた。

「絶対あの二人と当たりたくないわ」

「先輩方と当たっても勝負になる自信が無くなってきました……」

全部の鳥が防がれると今度はずらつと並んでいる本棚のいくつかの下部が爆破された様だった。順番に一行全て爆破されていつているのをオスカーは眺めながら、大体何をしようとしているのかの想

像がついた。

「ちよつとえげつないな」

「マダム・ポンフリーで済むといいんだけどなあ」

鳥の嵐が終わってやつと前に進むうとしていいる主席のペアの下に、爆破されて支えを失って倒れた本棚が起点となり、ドミノの様に倒れていく本棚が襲い掛かった。大広間に本棚の倒れる音と舞い上がる埃が充満する。埃が晴れると、二人が上にいるであろう本棚の列だけが立っている状態で、他の本棚は全て倒れており、最初のステージの状態から様変わりしてしまっていた。

「これでグリフィンドールとスリザリンで中和されてるなら、エストとオスカーのスリザリン、スリザリンならどうなってたのよ」

「この後燃やすとか？」

「チャーリーはいい加減燃やすから離れろよ」

「むしろグリフィンドールとスリザリンで悪化してるんじゃない？」

主席のペアはなんとか無事な様だった。スリザリンの主席の方が少しフラフラしているようではあったが、何とか立つことはできていたのだ。しかし、本棚の上から赤い光線が放たれて、スリザリン生の胸に正確に突き刺さった。

倒れたスリザリン生にレイブンクロー生が近寄ろうとしたが、途中で足が止まった。目くらまし呪文が解かれて、赤いローブと小柄な体が見え、その杖はレイブンクロー生のあごに突きつけられていた。

二、三の言葉の応酬があった様だったがまた赤い光がちらついてレイブンクロー生が倒れた。観客の生徒達からどよめきがあり、しばらくしてからグリフィンドール生とスリザリン生から歓声があがった。

「完勝って感じだな」

「あのペアのオッズがまた下がるね」

「あんなのどうしろって言うのよ。ハグリッドにドラゴンかカメラでも貸してもらわないとダメだわ……」

「こ、こんなの閉心術なんてやってる場合じゃ……」

試合が終わってもざわめきは収まらない様だった。二人が完膚なきまでに破壊した図書館のステージは消えていたが、さっきの試合の

衝撃は消えてはいなかった。涼しい顔で二人はベンチまで戻ってきた。

「わりと簡単に終わったの」

「不意を突けたのでなんとかになりましたね。長期戦だと年上の主席の二人の方が魔法力の分、有利になるでしょうし……」

「いや、不意も何も無いだろ」

「そうよ。ちよつとせこすぎるわよ。いきなり姿を消すなんて半分反則だわ」

まだざわめきが収まらないところを見ると、エストとクラーナが言っていることの方が間違っているとしかオスカーには思えなかった。

「なんですか？ 戦いではセコイも何も無いですよ。だいたい目くらまし術は闇祓いはみんな使えるような術ですし、追跡には絶対必要な術です」

「クラーナの言う通りだし、ホメナムレベリオをかければすぐ見えちゃうの」

「そういう問題じゃない気が…… でもおめでとうございます」

「ああお疲れ」

「これで優勝候補筆頭なんじゃないかな？」

「ハツフルパフがヤバいわ……」

トンクスが衝撃に打ちのめされていたが、それは他のホグワーツの生徒も同じ様だったし、他の試合と比べて見ても別次元の試合だったのは確かだった。その後も何個か試合があったモノの、インパクトという意味でエストとクラーナのペア以上の試合は存在しなかった。

「取りあえず私たちは練習に行くけど、エストとクラーナはこれ以上練習しなくていいわ」

「どういう論理なんですか？ 錯乱呪文でもかけられましたか？ まあトンクスはいつもこんな感じですけど」

「良く分からないのはいつもの事なの」

言っていることはおかしかったが、言っている意味はオスカーにも良く分かった。これ以上練習されて、隠し札やとんでもない切り札を

持たればそれこそどうしようも無くなるからだ。もちろん、今のままでも十分にどうしようもなかったが。

「オスカー先輩…… 行きましよう」

「ああ、じゃあみんなまたな」

エストとクラリーナの試合がオスカー達も含めて、ホグワーツの生徒達に危機感を覚えさせたのは確かだった。なにせ百五十点の点数がかかっていたし、いくら並外れているとは言ってもまだ二人は四年生だったからだ。それこそ、オスカーの知っている主席や監督生は大体プライドが高かったし、そういう意味で、今日負けた監督生の二人は結構なショックを受けたはずだった。それに決闘トーナメントにエントリーしている人間は、主席や監督生でなくとも、少なからずそういうプライドなんかの要素を持つ人間が多いはずだった。

「先輩…… 閉心術の訓練にこれ以上時間を使っても大丈夫なんでしょうか……」

「レア？」

五階の大鏡の裏へと向かういつもの道を行く途中で、レアはオスカーに話かけてきた。その顔はいかにも深刻という感じで、眉が寄せられていた。

「エスト先輩やクラリーナ先輩が相手だとすれば…… 閉心術の訓練をしても……」

「まあとりあえずいつもの場所まで行ってから考えるか」

「え？ はい……」

オスカーは落ち着いて話した方がいいと考えたので、とりあえずは五階の鏡の裏までの道を急ぐことにした。廊下は少なくとも寒かったし、誰かに聞かれる可能性も、落ち着いて喋れる椅子も無かったからだ。

いつも通り、オスカーは鏡の後ろに来て燭台にインセンディオを灯りを灯した。

「ジェミニオ そっくり」

そして燭台を複製の呪文でいくつかコピーして、それにも灯りを灯した。

「もうここも寒いし、それにちよつと暗かっただろ？ そんなに持たないだろうけど、俺たちが練習している間くらいは呪いで複製した燭台も持つと思うんだけどな」

「そうですね…… これだけあれば結構暖かいです」

いつもより多くなつた燭台に照らされたレアの顔は深刻さと言うよりも、申し訳なさが現れているように見えた。

「それで、閉心術の訓練をやめるのか？」

「はい…… これ以上時間を使つても…… それにもつと実用的な呪いとか逆呪いとか…… そう言うのをしないと…… エスト先輩達や他の先輩方の対策とかもしないと、勝ち目がないんじゃないかって…… 閉心術の訓練はボクの時間だけじゃなくて、オスカー先輩の間も全部使つてしまいますし……」

オスカーは何をレアに言えばいいのかを考えた。確かにレアの言う通り、エストやクラーナの試合を見て、オスカーも危機感を感じ無かつたとは言えなかつた。ただ、ここで閉心術の訓練をやめるのが果たして本当にいい選択なのかと言う事がオスカーの頭の中で引つかかつていた。

少なくともレアは相当覚悟を決めてこの練習をやりたいた言つたはずだったし、相当に辛い行為を成果がほとんど出ないのに、もう何か月も繰り返しているのはオスカーが一番知つていた。

「えつと…… そう…… 一回、俺の事は置いといて、レアは試合に勝ちたいのか？ それとも閉心術を覚えたいのか？ どっちなんだ？」

「え……？ ボクがどっちをしたいのか…… ですか？」

「ああ、レアはどっちをしたいんだ？」

閉心術の訓練をするにあたって、オスカーは始めた時から、自分がクラーナにやって貰つた様にできるだけの事をしようと思つていたし、それに今は叫びの屋敷の時の様に時間が制限されているわけでも、誰かの命がかかつてしているわけでは無かつた。

「分からないです…… せっかく出れたし、オスカー先輩も組んでくれるし、寮のみんなも応援してくれるから、出来るなら試合にも勝ちたいですし…… でも、ボクには閉心術の訓練が必要な気がするんで

す……」

「じゃあ…… どうして両方ともそう思うんだ？ それに…… そう…… どうして自分はそう思うんだ？ 他人がどうじゃなくて」
「どうして……」

口を真一文字にして、額にしわを作りながらレアは考えている様だった。オスカーも考えてみた。自分がレアの立場なら、どうしてそうしたいのか？ どっちを優先するのか？ それはどうしてなのか？ 試合に勝ちたいのはみんなに認めて貰いたいから？ 期待に応えたいから？ それは何故なのか？ 二人は鏡の裏で沢山の燭台に照らされながらしばらく考えていた。

「上手く考えがまとまらないんですけど…… 多分、両方とも自分って意味では一緒なのかもしれないです。ボクの中ではってことなんですけど……」

「どう一緒なんだ？」

「その…… 多分、試合の方は自信をつけたいんです。魔法をもう上手くコントロールできるって、みんなのために使えるって自信をつけたいし、それを認めて貰いたいのかな…… それで…… 閉心術の方は…… こっちは…… 心って言うのか頭って言うのか分からないですけど、それをコントロールしたいんだと思います。それで……」
「それで？ どうしたんだ？」

唇を少し噛みながらレアは言葉をつむごうとしていた。オスカーはそれをゆっくり待った。

「やっぱり…… 試合の自信をつけたいとかそう言うのも、結局それをなんて言うのか…… 証拠にして…… ボクはレイブンクローですけど…… その…… 頭を納得させたいんだと思うんです。納得させて、コントロールしたいんです。だって、自分で思うだけじゃ納得できないから……」

「じゃあ両方とも同じことをしてて、閉心術の訓練の方が…… 直接的ってことなのか？」

オスカーにはレアの言っていることが非常に重要な事の様に思えた。閉心術の訓練を自分がやった時には、あまりにも他のプレッ

シャーが強すぎて今の様にゆつくりと考えたことは無かったからだ。「そうだと思います…… だから、自分に、ボクについて言う意味なんだったら閉心術の訓練の方が重要なものかもしれないです」

「ならそれでいいんじゃないか？ 閉心術の訓練をチャージャーとトンクスとの試合までに終わらせて、勝てばどっちも達成できるだろう？」
レアはオスカーのその言葉を聞いても、本当にそれが正しいのか未だ悩んでいる様だった。それにオスカー自身もそれが正しいのかどうかは断言はできなかった。

「そうですね…… ボクがそれまでに終わらせないと……」

「別にそんなに言う事はないだろう？」

「え？」

「試合に負けても、閉心術の訓練を続けない理由にはならないだろう？
ここは叫びの屋敷じゃないし、誰かが時間を決めてるわけじゃないだろ」

レアは眼を丸くしてしばらくオスカーの方を見ていた。その後、ちよつと泣きそうな顔をしたがまた唇を噛むような表情をしていつもの顔に戻った。

「ありがとうございます…… オスカー先輩」

「じゃあちよつとだけ練習するか？ 申し訳ないけど、この後ちよつとダンブルドア先生の部屋に行かないといけないんだ」

「わ、分かりました……」

何故いつも、決闘トーナメントの日とかぶるのかは良く分からなかったが、オスカーがダンブルドア先生の部屋で憂いの篩を使う日は今日だった。

二人はいつもの様にクツションを敷き詰めて準備を始めた。

「じゃあ行くぞ…… 三、二、一、レジリメンズ!!!」

真つすぐにこちらを見ているレアの眼を見ながらオスカーは呪文を唱えた。オスカーは閉心術の呪文を使うたびに、段々と使い方が分かってくるような気がしていた。

この呪文…… この技術は非常に恐ろしいモノだと段々と分かってきたのだ。人の心はまるで大きな渦巻いている底なしの海の様

ほら、その遊びはやめなさいって言っているでしょう」

「ジエームズさんやシリウス達は俺たちが護衛すればダイアゴン横丁で買い物するくらい余裕だって言ってたのに……」

「それも状況が変わったのよ…… ドーカスやエドガーにまで……
とにかく今は家から絶対に出てはダメなの」

レアはチャンバラをしていたナイフとフォークを器用に操って食器棚に戻し、面白くなさそうな顔をして、食卓のある部屋から二階の自分の部屋に戻った。二階の部屋には最初に記憶に入った時とは違い、オスカーが実際に見たことのあるのとそっくりなキャビネット棚が置かれている。

またレアの感情が満ち引きする潮の様に、何度も打ち付ける波の様に伝わってくる。キャビネット棚に近づくと、強烈な恐怖と自責の感情が伝わってくるのだ。そして信じられないくらいの自分に対する怒りの感情が恐怖と代わり替わりに叩きつけられる。

『嫌だ。キャビネット棚には入りたくない。嫌だ。入ったらもう会えなくなる。嫌だ。嫌だ。自分のせいだ。嫌だ。嫌だ。恐ろしい。自分のせいだ。どうすればいいのかわからない。誰も助けてはくれない。嫌だ。自分が、自分が、嫌だ』

ベッドに寝転がりながら、ホグワーツの教科書をペラペラとめくり、片手をかざすとタンスの上から杖が飛んでくる。それは今のレアの杖とは形は違っていたので、レアの家族の誰かの杖なのだろうと想像できた。

そしてもはや、この年齢としては驚嘆に値するレベルの魔法のコントロールでレアは魔法を行っていた。杖なしでも、それは十分に分かってはいたが、自分に合っている杖では無いにも関わらず、浮遊呪文から、インセンディオやアグアメンティと言った一年生では使える魔法使いがほとんどいない魔法まで使いこなして見せていたし、さらにその痕跡も完全に消し去っていた。

一年生の時のレアを知っているオスカーからすれば、本当に同一の人物なのかと疑問を抱かないといけないほどの杖使いだった。

そして、それをしている最中も延々と感情が伝わってくるのだ。そ

れは段々とレアが恐れている日がやってくることに對する恐怖一辺倒から、自分自身に對する怒りの割合が増えてきている気がした。

『嫌だ。魔法を使えたからどうだと言うのか。嫌だ。魔法がもつと使えなければ。嫌だ。もつと下手なら、使えなければ。嫌だ。魔法なんか使えなければ。嫌だ。調子に乗ることも無かった。嫌だ』

オスカーは鏡の後ろに立って、燭台に照らされている自分自身をもう一度強く認識した。感情の渦に巻き込まれて、オスカー自身の頭もズキズキと痛み始めていた。そして、オスカーはそれがレアが閉心術の訓練をする時に限界に近づいている時の兆候だと知っていた。

自分の意思でこの記憶と感情の渦から出ようとオスカーは思い始めた。自分は自分であって、他の誰かでは無い。確かにここに、鏡の裏に立っていると強く思い始めると、段々とレアの記憶に白いモヤがかかって、次第に音や映像に周波数が合わなくなってくる。

なんとか完全に現実に戻ってくると、オスカーの予想通り、やはりレアはクツシヨンの上に倒れ伏して、荒い息で汗だくだった。

「レア、大丈夫か？」

「また…… また…… できない…… あの日まで行くこともできない……」

目を開けずにクツシヨンに倒れ込んで、苦痛に顔を歪めながらレアはブツブツと何かを呟いていた。オスカーはカバンからハニー・デュークスのチョコレートと三本の箒のバタービールを取り出した。

落ち着くにはバタービールがいいとオスカーは知っていたし、チョコレートの方は本来吸魂鬼用らしいがこういう時にも効くことをキングズリーに聞いていた。

「ほら、ここはホグワーツの五階の大鏡の裏だ。それにもう練習は終わったし、今はホグワーツの三年生だろ？」

「また…… 出来なかった。コントロールできてない…… ごめんなさい。ごめんなさい」

「時間はあるだろ。できるまでやればいい。ほら早く食べて飲むんだ」

「全然、進歩できてないです。ごめんなさい…… いただきます……」

レアは黙って、バタービールを飲んで、チョコレートを食べていた。そうすることが一番良いともう知っていたからだ。オスカーは毎回、レアの記憶に入りながらレアが恐れているモノを自分も恐れつつあることを自覚していた。それはレアの感情に引つ張られていることもあつたし、自分自身がレアと同じ様にそう思わなければならぬのに、それを忘れているのではないかと言う漠然とした恐怖が湧き上がってきているからだと考えていた。

「あの…… このバタービールとかのお金……」

「それは大丈夫だ。バタービールもチョコレートもタダで貰ったからな」

「タダ？」

「ちよつとヤギの臭いがしないか？ そのバタービール」

レアは鼻をバタービールの瓶に近づけた。そして、ハツとした顔をしてオスカーの方を見た。

「アバーフォーオスさんですか？」

「ああ、ちよつと色々あつてアバーフォーオスさんも俺たちがこう言う事をやってるって知ってるんだけど、そしたらふくろう便で俺の寮の部屋に送られて来たんだ」

「まだ何もできてないのに……」

レアはバタービールの瓶をきつく握っている様だった。本当はダンブルドア先生にオスカーがこの練習をしていると言った後に、ふくろう便が寮の部屋に送られてきたのだった。名前は無かったが、臭いだけで誰が送ってきたのかはすぐに分かった。そもそもふくろう便に気付いたのもルームメイトがヤギ臭いと言って騒いだせいだった。「取りあえず、ダンブルドア先生との時間までここにいるから。レアも適当に落ち着いたら寮に戻ってくれ。ああ余ったのは適当に持って行ってくれ。それ毎週俺の部屋に届くから」

「わ、分かりました……」

「今度ホグズミードに行くときに会いに行けばいいだろ」

「そうします……」

次のホグズミード行きには絶対にホッグズ・ヘッドを行先として入

れないといけないと、オスカーは自分の頭の中の予定帳に忘れない様にメモした。

ゴーストの指輪

ガーゴイル像を合言葉でびよんとどかして、オスカーは螺旋階段を登っていた。毎回、来るたびにガーゴイル像の表情が変わっている気がしたので、案外あのガーゴイル像も突然喋り出したり、気にいらない人間は絶対に入れなかったりするのだろうかと少し考えながら校長室についた。

ノックをするとダンブルドアのどうぞという声が聞こえる。オスカーが校長室に入ると、憂いの篩の上に現れている銀色の影が何かを喋っているのをダンブルドアは見ている。

「やあオスカー、久しぶりじゃのう。クリスマスはどうだったかの?」「お久しぶりです。クリスマスは…… そうですね…… ちよつと去年よりも滅茶苦茶だったかもしれないですけど、セーターを二つ貰ったので暖かかったと思います」

「なんと!! それは羨ましいのう。わしはいつもクリスマスには厚手のウールの靴下やセーターが欲しいと思っておるのじゃが、わしにプレゼントをくれる人は本ばかり贈りたがるんじゃ」

そう言いながら、ダンブルドアは憂いの篩に透明なガラスの瓶を近づけて、記憶をそこに入れていく。オスカーはダンブルドアから目を離して、後ろの肖像画達を見た。今日の肖像画達はオスカーとダンブルドアの方を向いたり、寝ていたり、隣の肖像画と喋ったりと様々だった。

「さて、オスカー。スネイプ先生に一度、憂いの篩と一緒に君の事をお願いしたがその時はどうだったかの?」

「どう? ですか?」

「そうじゃのう。スネイプ先生は余り生徒達についてわしに話してくれることは少ないのじゃが、君の事は特に余り話してくれないのじゃ」

「俺の事をですか? 確かに魔法薬学だと他の学生のテーブルよりもスネイプ先生は近づいてこないかもしれないですね」

魔法薬学の時の話と同じく、ダンブルドアもスネイプが余りオス

カーについて触れない様になっているのか？ オスカーは頭の中でスネイプが何を考えているのか想像したが、正確な答えが出る程オスカーはスネイプの事を知ってはいなかった。

「なるほどのう。君はグリフィンドールの生徒達とよく一緒におるから、近づきにくいのかもしれぬ。スネイプ先生は学生時代、良くグリフィンドールの生徒達と競い合っておった」

ダンブルドアはそう言ったが、オスカーから見ても、スネイプのグリフィンドール嫌いは少々異常なレベルではあったので、競い合っていたで済まされるレベルでは無かったのだろうと考えた。

「さて？ では始めるかの？ 今日ファイニアスはどこかへ行っておる様じゃし、トロールの居ぬ間に洗濯と行こうかの」

「はい。」

確かにいつもオスカーに喋りかけてくるファイニアス・ナイジエラスは額縁の中にはいなかった。オスカーは三回目になる作業を憂いの節の前で始めた。ダンブルドアがいる前だったので、今回は何の記憶を入れるのかは決めていた。こめかみに杖をあてて、何かが消えていくような感覚と共に銀色のもやを取り出し、それを憂いの節に入れた。

「今日はオスカー一人で記憶に入って貰えるかの？ わしは君が良い収穫を得れることをここで待っているとしよう」

「分かりました。」

てつきりダンブルドアも一緒に入るモノだと思い、オスカーは記憶を選んだのだが少しあてがはずれた様だった。

オスカーは少し心を落ち着けてから、憂いの節に頭を入れた。また、一瞬の暗闇と冷たい感覚があつて、今年度何度も見ているドロホフ邸の中にいた。

オスカーは広間でペンスと小さいオスカーが何かを話している横にいた。二人は何か色んなごちゃごちゃしたものをテーブルの上に出しながら喋っている様だった。

「前のカードは正解だったし…… ペンス、何かマグルの世界に無いのではないの？」

「今日お渡ししたお菓子はどうでしたか？ ハニーデュークスでオスカーお坊ちやまくらいの年齢の方には人気だとお聞きしたのですが……」

ペンスに聞かれて、小さいオスカーは眉を寄せ、ちよつと難しい表情をした。

「ハエ型ヌガーとヒキガエル型パーミントはダメだった。魔法使いは頭がおかしいって言われた」

「なんと…… 申し訳ありません。このペンス、この身をもってオスカーお坊ちやまにお詫びを……」

「ペンス、そんなのどうでもいいからなんか新しいのを出してよ。今度はカメラと一緒に持っていきたいし…… 何か絶対驚くお菓子が無いかな？」

「ハッ、かしこまりました。このペンス、必ずやオスカーお坊ちやまのご希望の品を手に入れて参ります」

ペンスは直立不動の体勢になったかと思うと、小さいオスカーの方に深々と頭を下げ、バチツという音とともに消えていった。それを見届けた小さいオスカーの方は、まだ机の上に広がっているお菓子や魔法のかかったおもちゃ、それにホグワーツの一、二年生で使う教科書なんかを読んだり、手に取ったりしていた。

オスカーはこれ以上ここにいるても仕方ないと考えたため、次に過去の自分が足を運ぶ場所に行くことにした。今年の夏休みにクラーナとトンクス先生が何か、今考えれば恐らくセーターの事を話していたであろう広間の隣の部屋だった。

「エティ、お前もオスカーもできるだけ家から出ない様にしろ。買い物は全てペンスを通してやらせる様にこれからはするんだ」

「そんなに外は危ないんですか？」

空いた扉から男と女の声が聞こえてくる。オスカーは母親を見た記憶はほとんど無かったが、父親の方は何度も何度も見たことがあった。日刊預言者新聞に毎日の様に載っていたり、最近になっても死喰い人や戦争の事が話題になるたびに載る顔だったからだ。

「それもあるが、あの方は最近非常に不機嫌だ。これもスネイプがあ

のお方に何かを吹き込んだ後、ポッターを探せと言われてから……これほど機嫌が悪いのは、指輪をつけられて夏休みから帰って来られた以来だ……」

「でもオズカーは一人だし、家に籠っていてもホグワーツに入る前に魔法の練習もできないわ。あの子はあんなに才能があるのに……」

指輪？ オズカーも覚えていなかったが、明らかに父親はヴォルデモートの話を母親に漏らしていた。これはダンブルドアに報告すべき事に思えた。それにスネイプの名前とポッター夫妻の名前が出てきており、オズカーはそういった名前とこの頃から関わり合いがあったという事実には驚いた。

「絶対に出るなど言ってるわけじゃない。せめて外に出るときは一緒に出る様にしろと言ってる。それに何かあったらこの家から出て、お前の実家に帰れ」

「そんな……」

「お前のいところは闍祓いだ。実家に帰れば魔法省も手出しできないだろう」

「でも……」

オズカーはこんな会話を二人がしているのを聞いたことも見たことも無かった。しかし、オズカーの後ろでは小さいオズカーが近づいてくるのが見えていたので、これはあくまでオズカーが忘却呪文をかけられて消された記憶ではない為に再現ができてるのだと考えた。つまり、憂いの篩はオズカーが直接覚えていなくても、呪文で忘却されていなければその周辺の出来事も再現しているらしかった。

「オズカー、エティ、今日は家から絶対に出ない様にしろ。ペンスに今日の夕飯はいらないとっておけ」

「え？」

「分かりました……」

小さいオズカーは部屋に入っていくなり言われたため戸惑っていたが母親は頷いた。父親はそのまま玄関の方へと歩いていった。

「父さんはもう出かけるの？」

「そうよ。お仕事なんだから邪魔しちゃダメよ」

「でも最近はいアゴン横丁にも行けないし、新聞もラジオも繋がらないし、外の話とか……」

「ダメよ。ホグワーツに入れば段々外の事は分かってくるわ」

不満そうな顔の小さいオスカーだったが、何とか飲み込んだ様だった。オスカーは父親の方を追いかけた。すでに玄関を開けようとしている所だったので、オスカーはギリギリ父親が開けた扉に滑り込んだ。

家の外の森に続く小道には二人の黒いローブに仮面をつけた男が立っていた。しかし、二人からは父親と家が見えていない様でキヨロキヨロとあたりを見回していた。

「カルカロフ、ロジエール、家の傍では無く森の中で話すと言ったはずだ」

「なんだ。ドロホフ、俺たちにワインの一杯でもないのか？ マツキノンの祝い酒はまだやってないだろう？ ボーンズやフェンウィックから連チャンだ」

仮面の下から出てきたのは髭の男と短髪の男だった。恐らく髭の男がカルカロフで、短髪の男がロジエールだとオスカーには分かった。ロジエールは酷薄な笑みを浮かべていたし、カルカロフの方はどちらかと言えば不気味な笑みだった。それにオスカーは父親が何をしていたのかを今は知ってはいたが、こうして自分の住んでいた家のすぐ外でこういう会話が行われていたとは知らなかった。そして、出てきたマツキノンという名前もオスカーの頭の中にずっしりと重くのしかかった。

「そうだな。私たちに嫁さんや息子も紹介してくれないのか？」

「今日は、ポッターとプルウェットの話だろう」

今度は父親の口から違う名前が出た。その名前もオスカーの頭の中で何度も何度も洞窟で発された音の様に響いていた。そして、その言葉の響きにはさつきまで母親と喋っていたのとは別の、ロジエールと同じく残酷かつある種の愉悦的な響きが含まれていた。

「そうだ。あの方は特にポッター夫妻を狙われているし、それに余り機嫌が良くない」

「だがあの兄弟を殺ることができればあの方もお喜びになるだろう。ロングボトムやポッターの二人、ムーデイなんていう俺たちが世話になってる奴らの中でもとびつきりだからな」

「ムーデイはどっちだ？ 爺の方か？ それとも若い女の方か？ 伝説のオーラーをぶっ飛ばしても、女の方を組み伏せても楽しいだろうなあ。それにポッターの家は裏切り者が秘密の守り人になれば終わりだろう」

もう、オスカーは吐き気すらしそうだった。どうして、さつきまで母親の心配をしていざとなったら実家に逃げろと言っていた人間がこんなことを言うのかがおスカーには全く分からなかった。三人の顔も声も、オスカーにはこれまでになく邪悪に見え、その声はマンドレイクの鳴き声を耳当て無しで聞くよりも有害だった。

「まあ我々の勝利は最早揺るがないだろう。こつちについたのが正解だった」

カルカロフがいかにももう終わりだという口調で言った。死喰い達は自分達の陣営が勝利することを確信している様だった。

「闇祓いの方はどうやって魔法省を切り崩すのかだな、まあ執行部長のお坊ちやまがどうにかしてくれるだろう」

「今から楽しみだ…… 磔の呪文の悲鳴でも、服従の呪文を時々解きながら色んな事をやらせるのもいい…… ドロホフ、お前の呪文で焼いてやるのもいいだろうな」

限界だった。オスカーはどれくらいの時間の記憶を憂いの篩に入れたのかも、憂いの篩がどれくらいこの記憶のオスカーから離れても再現してくれるのかが分からなかった。オスカーが玄関の方を振り向くと扉の間から小さいオスカーがこちらを見ている様だった。この会話を聞いた記憶がないので、子供の頃は少なくとも聞いてはいないはずだったが、この会話を聞いていれば自分ももつと慎重になつたのでは無いか？ という気持ちはどこから生まれてきたのだった。

後ろからまだ死喰い達の会話が聞こえはしたが、オスカーは死喰い達を見ている小さい自分に近づいた。遠すぎて聞こえない会話をしている三人を小さいオスカーは興味深げな眼で見ている。オス

カーはその姿を見て、今の自分も何かを見ているだけで、何も聞いていないし理解できてないのではないかという疑念がふつふつと湧き上がってきた。

これ以上ここにいるのが耐えられなくなってきたため、オスカーは憂いの篩から出ることにした。

「オスカー、今日は前回より少し早いようじゃな」

「はい…… ダンブルドア先生が言っていたことかは分かりませんが父親のことでいくつか思いました？　　ことがありません」

オスカーは早く誰かと会話をして、とにかくさつき見て聞いたモノを吐き出したかった。ダンブルドアは落ち着いた笑顔でオスカーの方を見ていた。

「それはありがたいのう。落ち着いて喋ってくれば良い」

「はい、えつと…… 何から…… 父親はロジエールとカルカロフという男と家の前で喋っていました」

「ふむ…… オスカー、その記憶の日時を覚えておるかの？」

「はい、えつと…… 多分、七月が終わったくらいだと思います」

ダンブルドアは何かを考え込んでいる様だった。そしてまたその青い眼がオスカーを見通す様に見つめた。

「では続きを聞こうかの」

「それで…… ロジエールがマッキノン家と…… ボーンズ家、フェンウィック家でしょうか？　それを連続で…… 殺したので祝杯をあげようと言っていました」

「なるほどのう。まあその後、ロジエールはアラスターと戦って亡くなるわけじゃが…… 他には何かあったかの？」

あの後、ロジエールといういかにも邪悪な男が死んだという事実や、父親がアズカバン送りになったという事実はオスカーの中で、何か食べ合わせの悪いモノを食べた後の様に気持ち悪さとなつて渦巻いていた。

「他には…… 次はプルウエットの兄弟だとか、ポッター夫妻は……」

裏切り者が秘密の守り人になれば終わりだと言っていました。それに闇祓いは執行部の息子がどうにかするだろうと」

「まさに一連の戦闘の真つ最中だという時じゃったようじゃの。事実あの半年で不死鳥の騎士団の大半が命を落としたわけじゃ」

いつも喋っているみんなの肉親や知り合いが、オスカーが森の中で外の事も知らずに遊んでいる間に命を落としていて、自分がどれだけ無知で愚かだったのかをオスカーは思い知らされている気分だった。

「ダンブルドア先生、ロジエールが言っていた裏切り者というのは…… シリウス・ブラックの事ですか？」

「言葉の流れからすればそうじゃろう。それにポッター夫妻が秘密の守り人を選ぶのなら、シリウス・ブラックを選ぶじゃろうし、ピーター・ペティグリューの最後の言葉が本当ならば、彼がポッター夫妻を売ったのは事実じゃろう。状況的な証拠もそれを示しておる。加えて、それ以前の情報も彼から流れていたと考えるのが自然じゃ」

「それと……、秘密の守り人というのは何なのか聞いてもよろしいですか？」

「そうじゃの、秘密の守り人とは何かの秘密を誰かの頭の中に入れ込む呪文じゃ。この呪文は非常に強力な保護呪文で、拷問で口を割らせても効果が無い上、例えとして家をこの呪文で守れば、ヴォルデモートやわしであってもその家を見ることも壊すことも出来ぬ」

つまり、絶対の信頼を置いたシリウス・ブラックにポッター夫妻は裏切られたという事だったし、レアとダンブルドアの言葉が事実なら、あのプレゼントを持って友人と共にレアの相手をしていた人物は、大人も子供も赤ん坊も関係なく、全て殺されると分かっていたながら売り渡したという事だった。

オスカーには果たしてそれで何が得られるというのかが分からなかった。

「さて、オスカー、他に思いだしたことが無いようなら……」

「ヴォルデモートの事を一つだけ、父親が母親に言っていました……」

ダンブルドアの眼がこれまでに無い真剣さでオスカーの方を向いていた。

「それは何かの？」

「スネイプ先生が何かをヴォルデモートに伝えてから機嫌が悪いと

…… こんなに機嫌が悪いのは指輪をつけて夏休みから戻ってきた以来だと言っていました……」

「それは…… それは本当じゃな？ 君のお父上、アントニン・ドロホフがヴォルデモートことトム・リドルが、指輪をつけて夏休みに戻ってきた時に機嫌が悪かったと言ったのじゃな？」

「は…… はい、そうです」

カッカツカと音を立ててダンブルドアはオスカーの目の前を歩いて行ったり来たりして、時々ブツブツ言いながら、何かを考えている様だった。その後、ダンブルドアはまたオスカーの眼を見た。ダンブルドアの眼はどこか勝利と何か僅かな希望がある様にオスカーには見えた。

「オスカー、君にわしは感謝せねばならない。これは間違いなく、ヴォルデモートが戻ってきた時の武器になるじやろう」

「今言った事がですか？」

「そうじゃ、闇は形を持たないから闇なのじゃ。光にあてられて形が分かれば対処の仕様があるじやろう？ 君の言った事はヴォルデモート…… いや、トム・リドルの姿を確かにわしの前に浮かび上がらせたのじゃ」

つまり、今の指輪を持って夏休みに帰ってきたことがヴォルデモートを倒すための重要な情報だと言うのだろうか？ これだけではオスカーも考えようが無かったが、ダンブルドアならば有益な情報へと結び付けられるのだろうかと考えた。

「さて…… それではどうするかね？ 少し微妙な時間になってしまった様じゃ…… もう一度記憶に潜るには少々時間が無いようじゃ」

「はい。ダンブルドア先生、残りの時間、閉心術についてお聞きしてもいいですか？」

「ほう？ それはこれの時間を決める手紙に書かれていたレアとの練習じゃな？ 弟からの贈り物は届いておるかの？」

「はい。アバーフォースさんからのプレゼントは毎週俺の部屋に届いています。届くたびにルームメイトがスコージファイをかけた上で泡頭呪文を自分自身にかけてますが…… それで、閉心術のコツと言

うか…… 理論みたいなのを教えていただけないかと……」

ダンブルドアは少し悪戯っぽい顔をした。それにダンブルドアの後ろの肖像画達もオスカー達のやり取りに今回も注目しているようだった。

「閉心術…… そうじやの、感情や心を操るといふのは大の大人でも非常に難しい技術なのじや。しかし、わしが思うに大人になるにつれて覚えやすくなる技術じやとは思う」

「大人になるにつれてですか？」

「うむ。子供の頃は分からなくとも、いずれ目の前の事実よりも、大事なモノがあることや、何かに直面した時に思い直させてくれるモノができるのじや」

「思い直させてくれるモノ……」

オスカーは考えた。どうして怒りや悲しみや憎しみに溢れている時に違う考え方ができるのか、自分自身が大変なのに、それでも何かを考えないといけないと思う事ができるのか。初めてできた時にどうしてそう思ったのかだ。

「それにこういうことは大体スリザリン生の方が得意なのじや」

「当たり前だ。そんなことはスリザリン生の特徴が如実に示している」

肖像画から偉ぶった声がした。案の定、フィニアス・ナイジェラスが肖像画に戻っていて、オスカーとダンブルドアに声をかけていた。

「ここは君の大先輩の話を聞くとしよう」

「当然だダンブルドア。後輩の学生に道を示すのは当然のこと、そしてスリザリン生が己を律する技術について聞くのは必然だ。いいかね？ ミスター・ドロホフ。前にも言ったが、自己のプライドが高く、気高い自己犠牲をして自分の感情に酔うグリフィンドールには分からないだろうが……」

相変わらず、相当にスリザリンが好きで、グリフィンドールが大嫌いな所は変わってはいなかったが、少なくともこのフィニアス・ナイジェラスという人物は自分自身の事を全く偽らず喋っているであろうことがオスカーには分かっていた。

「自分自身を勘定に入れて、目的を達成できる可能性が我々にはある。そのために自己を律することが必要なのだ。純血にふさわしい行動が、家にふさわしい、寮にふさわしい行動が求められるのだ。もし真のスリザリン生がいるならば、それを重く受け止め、何か行動する際にそれがふさわしい行動か考えることができるだろうか？　それがあれば感情に酔うことなく、自らを見つめて、自らの感情を理解する余裕が生まれ、本当の目的を果たす行動をとることができる」

フィニアス・ナイジェラスらしい言い方ではあったが、それは先ほどのダンブルドアが言っていたことと同じことを言っているとオズカーは感じた。何か自分の感情を度外視できるほどの何かがあれば、その余裕を持つて感情を理解できると言っているのだ。

「ミスター・ドロホフ。君がその様に自らを律する方法を学ぶのなら……」

「オズカー、学びたいのは君ではなくレアじゃったの？」
「はい。そうです」

フィニアス・ナイジェラスは自分の言葉が遮られたのが頭に來たのか、ダンブルドアの方を思いつきり睨んでいた。

「そういうことじゃからフィニアス、教え方をオズカーは求めている様じゃ」

「そんなことは分かっている。簡単な話だ。閉心術の練習を自らしているという事は、すでに自分で自分を理解しようとしているという事だ。然り、ならば簡単な事、その娘に自らが一体何にふさわしい行動をとろうとしているのか教えてやれば良いのだ。そういった行動をとるという事自体が、何かにふさわしい行動をとろうとしている事なのだから簡単な事だろう」

一体何のためにそんな事をしているのかを教えろとフィニアス・ナイジェラスは言っていた。すでにそういうことをすること自体が何かのために動いているのだから、それを教えれば良いとそう言っていた。オズカーは自分に当てはめて一度考えた。どうして恐怖に震えていては、自らに対する怒りに震えてはいけけないと思ったのか、何のためにそうしたのかを考えたのだ。

理由はいくつかあったかもしれないが答えは簡単に出たのだった。「分かりました。ありがとうございます。ダンブルドア先生、ブラツク教授。明日…… レアと練習して、もう一度考えて見ようと思いません」

「そうじゃの、そろそろ外出禁止の時間じゃ、次の時間と場所はわしからふくろうで送ることにしよう」

「うむ。今度こそ、スリザリン生と訪問してくれたまえ」

「では失礼します」

何か満足そうに頷いているフィニアス・ナイジェラスを少し見ながら、オスカーは校長室を後にした。仕掛け階段や廊下を通って地下に向かいながら、オスカーはさっきのフィニアス・ナイジェラスの話を考えた。

フィニアス・ナイジェラスの話は良い様に働けば、恐怖や怒りといった感情を制御できるという事だった。しかし、それは良心やいい意味での恐れでさえ無視することができる力の様にもオスカーには感じられたのだ。

何かを達成するために感情や心をコントロールする。それは目的を達成するためには正解かもしれないが、何かボタンを掛け違えばさつき憂いの篩で見た三人の様に、残酷な出来事でさえ笑ってできる様になるのかもしれない。

そうならない為にはどうすれば良いのかを考えながらオスカーは地下牢まで来ていた。

「オスカー、今帰りなの？」

オスカーはちよつと飛び上がった。エストの声が明らかに誰もいない場所から聞こえてきたからだ。それもオスカーのすぐ傍からだ。

「あ、そっか、ちよつと時間も不味かったし、フィルチに見つかるかもしれないからって呪文をかけてたの」

声の出どころを良く見ると、まるでカメレオンの様に周りに色を合わせたエストが目の前にいた。エストが杖を自分に向けて上から下に下ろしていくと、エストの黒髪や紅い眼、スリザリンの緑のローブ

が順々に現れた。

「目くらまし呪文か？」

「そうなの。どうせ前の試合で使っちゃったから、あんまり隠しても意味ないよね？」

「そうかもな、談話室に入るか」

「うん。えつと…… なんだっけ？ 今日変わったんだよね？」

「ルーンスプール」

オスカーがそう言うのと、石壁が消えてスリザリンの談話室への道が開いた。二人は連れ立って、相変わらず、緑色で暗い談話室へと入っていった。

まだ談話室では数人が勉強したり、ゴブストーンをしたりしていた。いつも二人が座る場所は幸運な事に空いていたので二人は自然とそこに座った。

「二人で一緒に帰ってくるだけあって、オスカー先輩今日は緑のセーターなんですね」

「ジエマどっからできたんだ」

「そうなの。椅子の後ろ？」

「ちよつと、変身術の宿題で聞きたいところがあつたんです。今週はスネイプ先生が羊皮紙十枚分の宿題を出したのに、今度はマクゴナガル先生が五枚分の宿題を出してきて……」

どうもちょうど椅子の陰になっている部分で延々と宿題をジエマはやっていらしい。恐らく二人のどちらかがもう少し早く帰ってくるのだろうと考えていたのか、テーブルの上の飲み物はもう空だった。

「まあバタービール余ってるし、飲むか」

「あ、三本の箒の奴ですよ？ トンクス先輩がオスカー先輩はすぐ女の人に飲ますって言ったのは本当だったんですね」

「三本の箒じゃなくて、ホッグズ・ヘッドのだし、トンクスの言ってることの八十パーセントは嘘だ」

「ほんとだ。ちよつとヤギ臭いの」

結局レアに何本か渡したのにアバーフォースが何本も何本も送っ

てくるせいで、オスカーのカバンはバタービールが何本も入っていたのだった。ついでにチョコレートの方もオスカーはテーブルに広げた。

二人は代わる代わるにジエマの宿題を見た。大体、エストの言っていることをオスカーがジエマに翻訳するという作業だった。ジエマは宿題をどうすれば良いのか分かったようで、必死に魔法薬の教科書から魔法薬のリストをピックアップして、羊皮紙に書き写していた。「ねえ、今日はダンブルドア先生と何のお話をしたの？」

「今日は閉心術の話だな、どっちかと言うとフィニアス・ナイジェラスって人の方が喋ってたけど」

「フィニアス・ナイジェラス？ 誰なの？」

「何代か前の校長先生で、スリザリン出身なんだ」

「スリザリン出身の校長先生がいるんだね」

何か時々、聞き耳を立てているのかジエマの羽ペンが止まったり、耳がピクピク動いている気がオスカーはした。

「それに…… 多分、トンクスのひいひいおじいさん？ だぞ、多分」
「ええええええええ!! トンクスのひいひいおじいさんがホグワーツの校長なの？ やっぱり髪の色が変わったり、変な悪戯したり、廊下を歩くだけで甲冑を全部足に引っ掛けて倒したりするの？」

「多分ひいが多いし、そんなドジじゃないと思う。まあ名前がフィニアス・ナイジェラス・ブラックってただけだから、もしかしたらただの親戚かもしれないけどな」

「ちよつと待ってね……」

エストがポシエットを何度か開けたり閉めたりしながら本を取り出した。『生粋の貴族―魔法界家系図』と書かれている。

「ほら、ペベレル家を調べた時に使った本なの。この本、呪文がかかってて、多分色んな家の家系図？ が更新されるとそれに合わせて動くの。多分ブラック家だったら載ってる……」

確かに本の中にはブラック家の名前がまるまる一章さかれて記載されていた。そこにはフィニアス・ナイジェラス・ブラックの名前はあったが、トンクスの名前が見つからない様だった。

「おかしいの。シリウス・ブラックの名前も無いし…… フィニアス・ナイジェラスさんの兄弟とか息子だと年がおかしいの。あれ？ でもベラトリックス・ブラックってベラトリックス・レストレンジの事だよな？ じゃあ……」

「このナルシッサ・ブラックとベラトリックス・ブラックの間がトンクス先生なんだろうな、消されてるけどな」

何か乱暴な消され方でアンドロメダ・ブラックと書かれているはずの場所は消されていた。良く見ると家系図にはいくつもいくつもそういう場所があるようだった。

「確か、トンクス先生はシリウス・ブラックがいとこだって言ってたな」

「じゃあ、このフィニアス・ナイジェラスさんから直系で繋がってる最後の…… レギュラス・ブラックって書いてある人の横がシリウス・ブラックかな？」

「そうだろうし、とりあえずトンクスのやつがブラック教授の子孫なのは確かだな」

「驚愕の事実なの」

ジエマは相変わらず、オスカー達の話の盗み聞きしているようで、余り宿題は進んでいないようだった。十枚分の羊皮紙の宿題なのに一枚もまだ書き写せていなかったからそれは良く分かった。

「まああの部屋にいくと多分スリザリン生は大体ブラック教授に話しかけられるんじゃないか？ 俺もほんと俺がダンブルドア先生に閉心術のことを聞いたのに、後ろからいきなり話し始めたしな」

「へえ、あつ!! でもエストも今、その練習してるよ？ もう閉心術は使える様になったの。オスカーとクラーナはお互いに使えるから言ってもいいよね？ どうせ決勝戦まであたらなないし」

「は？ 閉心術？」

「うん。なんか割と簡単だったの。クラーナは怒ってたもん。普通は!! もつと!! 時間がかかるモノなんですよ!! ってなんか怒ってたの」

オスカーは至極簡単にクラーナがそう言っている様子が想像でき

た。そして、やっぱりエストとクラーナのペアが順当に一番上まで上がるのではないかとこれも簡単に想像できた。オスカーとレアが苦勞している間に二人はドンドン進んでいる様だった。

「な、なるほどな。じゃあ、エストに聞くけど。ダンブルドア先生が閉心術はスリザリン向きだって言ってる、それがなんでなのかをブラック教授が言ってたんだけど、何か分かるか？」

「スリザリンが閉心術に向いてる理由？」

エストは口と鼻に手をあてて、いかにも考えているというポーズをした。そしてその後、ちよつと笑いながらオスカーに答えた。

「うーんとね、あんまり自分に自信が無いからじゃないかな？」

「自分に自信が無い？」

「エスト先輩がですか？」

ジエマはもう宿題をするのを諦めたのか、完全に羽ペンを置いてこつちの話に交ざってきた。

「エストだけじゃないけど、スリザリンのみんなかな？　だって、自分に自信があつたら純血とか家とかスリザリンの歴史とか言う必要が無いでしょ？」

「確かにそうかもしれないです」

ジエマは最近大体エストの言うことに同意するので参考になるか難しかったが、エストの言っていることはさつき校長室で聞いたことと繋がっている気がオスカーはした。

「でも、その自信を純血とか歴史とかは埋めてくれるよね？　私は俺は僕は純血だから凄いいんだぞって、思ったら最初は自信がなくてもやれるかもしれないの。別に家とか純血じゃなくても、家族とか大切な人でもいいけど……」

エストはオスカーの方を見た。オスカーはいつもよりも視線が優し気な気がした。

「それで、自分に自信が無くて、周りのモノを使おうとするから閉心術に向いてるんじゃないかな？　だってやっぱりこれが無いとダメだって思っていると、ほんとにエストのやってること合ってるかな？　って思っちゃうよね？　ほんとに自信が無かつたら人に聞くけど、

最初は自分で確かめちゃうもん。それが閉心術に向いてる理由なんじゃない?」

「どうなんですか? オスカー先輩?」

二人の視線が集まって、オスカーはちよつとむずがゆかったが、答えざるを得なかった。

「まあジエマが閉心術の事知ってるか分からないけど、だいたいエストの言ってることはダンブルドア先生とブラック教授が言ってたことと一緒かもな」

「じゃあ、質問してもいいですか?」

「誰に?」

「エスト先輩とオスカー先輩にです」

「まあなんでもいいけど」

最近ジエマはやたらとオスカーとエストの周りをウロチヨロしたり、オスカーがクラリーナやレアといると何か胡乱気な視線を送ってきたりするので、ちよつとオスカーは警戒していた。

「二人は、えつとさっきの自信が無くなった時? その時は誰に聞くんですか?」

「うーんとね、どんな時にかによると思うけど、学校だったらとりあえず横のオスカーに聞くし、あとはチャーリーとかビルとかクラリーナにも聞くかな? お家なら…… ミュリエルおばさんに聞いても仕方ないから、モリーおばさんか、アーサーおじさんに聞くの」

「俺もとりあえず横のエストに聞くし、あとは周りのみんなにも聞くな、家ならキングズリーがいるはずだし……」

ジエマは何かうんうんと頷いていた。そしてちよつと意を決する様に手をパンと鳴らして握った。

「じゃあお互いの事を聞くときはどうするんですか?」

「そのまま聞いたらいいだろ」

「そうなの」

「そ、そうじゃなくて聞けない時です」

「聞けない時?」

「そういう聞けないこともありませんか? ほら男と女なんですか」

ら」

オスカーとエストはお互いに顔を見合して考えた。聞けない事？ クリスマスのプレゼントとかだろうかとオスカーは考えて見たが、あんまりいい具体例は浮かばなかった。多分、人間関係に悩んでいる時だったら、取りあえずなんだかんだトunksに聞きに行くのではないかとオスカーは思った。前のクリスマス前の喧嘩の時がそうだったからだ。

「うーん、分かんないの具体例が思いつかないし、オスカーの好きなモノを聞くんならペンスさんとか？」

「誰ですか？ ペンスさんって？」

「オスカーのお家の屋敷しもべなの」

「うわ、やっぱりお金持ちなんですねオスカー先輩…… って屋敷しもべ妖精なんですか」

何か一人でジェマはツツコミを入れていたが、正直、オスカーもエストもジェマが何を聞きたいのか良く分かっていなかった。

「じゃあ、もつとクローズな質問にします。恥ずかしくて言えない時とかどうするんですか？」

「恥ずかしくて言えないなら黙ってればいいの。だって、それは自分に自信が無いんじゃないの？ 確信があったらそんなに恥ずかしくて言えないことなんてないと思うもん」

「まあ俺もそうかな、良く分からないけどな」

ジェマは何かまた考えている様だったが、別に相手はトunksやフレッド・ジョージではないので、オスカーは余り心配してはいなかった。

「なるほど…… 分かりました。参考にして、私も作戦を立ててみます」

「参考？ 何かジェマは恥ずかしい事があるの？ 実は一人で夜お手洗いに行けないとか？ オスカーを連れて行けば、ピーブズくらいなら逃げてくの。あと吸魂鬼くらいなら大丈夫だよ？」

「エストでも変わらないだろ」

「分かりました。オスカー先輩たちのことは良く分かりました。私は

一人でもトイレに行けます。でもマートルのトイレは嫌です」
オスカーは正直、後輩のトイレ事情などどうでも良かったが、一応先輩としてそれくらいならするつもりだった。スリザリンはなんだからだ寮ごとの結束が一番固いのだ。

合同授業

ダンブルドアやフィニアス・ナイジエラス、エストと話をした次の日。オスカーは朝の時間の間にレアを捕まえようと考えていた。

夜の間、頭の中でなんとか形にまとめようとしていた閉心術についての話を今日の間におきたかったからだ。

それに大広間の掲示が確かなら、決闘トーナメントでのチャーリーとトンクスとの試合はすぐそこまで迫っていた。

「今日の闇の魔術に対する防衛術ってハッフルパフと合同だよな？」

「って前の授業の時に言ってたな。防衛術の授業で合同って初めてだけれどな」

今日は朝から昼まで闇の魔術に対する防衛術の授業が入っている予定だったが、スクリムジョールの意向で、クラス同士を合わせた合同の授業になる予定だった。

相変わらず、エストはゆっくりスクランブルエッグをオスカーからするとあほだどしか思えないほど口に入れていた。

そのエストの後ろにハッフルパフの集団に何か言ってからこっちに向かってくるトンクスの姿が見えた。

「今日は学年トップの闇の魔術に対する防衛術が見れるわけね」

「できればトンクスと一緒に危ない動物の授業は受けたくないの」

「インカーセラスとイモビラスは使えるから大丈夫だろ…… 多分」

エストとオスカーがトンクスの事をからかったにもかかわらず、トンクスの髪色は相変わらずのショッキングピンクだった。

「何よ。朝から二人の時間を邪魔したから怒ってるわけ？ 別に私が

二人にデイフエンドをかけてるわけじゃないんだから、そんなに邪険にしなくてもいいじゃないの」

「そういうわけじゃないの。だいたい去年だって、薬草学の授業で、耳当ての代わりにナメクジゼリーを耳に詰めてマンドレイクの授業を受けてたんでしょ？ それで外れかけて失神寸前だったってチャーリーが言ってたもん」

「命に関わるドジは流石にしないだろ…… 多分…… 俺は信じてる

ぞ」

「何なのよ。多分信じてるって」

オスカーはできる限りの脳みそをフル回転して、トunksがそういった状況で信じられる証拠や前例を思い出そうとしたが、かなり厳しかった。

「だいたい信じてるってことだ。じゃあ、俺はレアと話してくるから、先に行つてくれ」

「へえ…… 何か私たちの前だと喋れないことつてわけね」

「次の試合相手の前で喋らないのは当たり前なの」

このままだと際限無く話が続きそうだとオスカーは感じたので、早々に切り上げることにした。別にエストやトunksに聞かれて困る話をしに行くわけでは無かったが、余り閉心術の練習の事は周りに話す事ではないと考えてもいた。

青い服を着たレイブクロー生が沢山いるテーブルに近づくとオスカーはジロジロ見られていると感じた。このレイブクロー生達は他の寮よりも『優秀』だと言われるという事実結構な誇りを持っているとオスカーも考えていたし、期末試験等でもそう感じることは多々あった。だから、オスカーはちよつと決闘トーナメントで目立つたせいで視線が飛んでくるのだろうと考えた。

レアの短い金髪は大広間の入り口の方にあつた。いつも通り、去年スネイプ先生が探しに来た後にやってきた集団と一緒にいる様だつた。

「レアつて髪を伸ばさないの?」

「そうそう、いっつも男の子みたいに短いじゃない? せつかく綺麗な金髪なんだし伸ばしてみたら?」

「手入れもしないといけないし…… それに魔法の練習には邪魔になつちやうから……」

オスカーが色んな魔法の原理やエストのチャドリー・キャノンズ好きと同じくらい不思議に思っている事の 하나가、どうして女の子は群れを作るのかと言う事だつた。そう考えると、エストやクラーナはあんまりそういう集団の中にはいない気がしてちよつと不思議になつ

だが、目の前にある問題はレアに声をかけにくいと言う事だった。

「プルウエット先輩は髪が長いし、レアも長くすればワンチャンかも」
「他の二人はあんまり長く無いよね？ でもいきなり雰囲気変えるのって、私が男なら結構ぐつと来そう」

「いいなあ、ちよつと影のある先輩と二人きりって…… 凄いチャンスじゃん？」

「なんで毎回そういう話になるの……」

やっぱり、オスカーは女の子の集団に対して喋りかけにくかったが、どつちにしろ青いローブを着た集団の中ではオスカーが今日着ているセーターの色は目立っていた。

「嫌な人とは組まないだろうし絶対チャンスよね」

「マーリン…… いや、スクリムジョール先生が与えたチャンスに決まってるわ」

「だから…… そういうのじゃ……」

「レア、ちよつと話できるか？」

オスカーが話しかけると、レアはちよつと飛び上がる様な反応をして、他の学生達も鎮まりかえったため、オスカーは何かやってしまったのかと心配せざるを得なかった。

「お、オスカー先輩？ 今のはいつもみんなが言ってるだけで、ぼ……」

ボクがどうこうって話じゃないですから……」

「レアは暇です」

「なんなら一日貸せます」

「あげます」

「そ、そうなのか…… あんまり時間はかからないと思うけど、ちよつと借りていく」

無駄に口をヒューヒュー鳴らそうとするレアの友人たちから、目を白黒させているレアを連れ出して、オスカーは大広間の端の方に行つた。人に聞かれないという意味では大広間の外の方が良かったが、なによりまだホグワーツは寒かった。

「マフリアート 耳塞ぎ」

「え？ その呪文……？」

オスカーが周りに向かって呪文を唱えるとレアはもう呪文の方に意識が移っている様だった。

「ああこの呪文は夏休みにトunks先生に教えて貰ったんだ。先生やテッドさんが学生の頃に流行った呪文らしくて、他の人に話を盗み聞きさせない様に雑音を流せるらしい」

「ボク、その呪文聞いたことがあります…… 確か、ママやその友達が使ってたかも…… でも呪文の本とかでは見たこと無いです」

つまり、普通の呪文集とかには載っておらず、レアの両親やトunksの両親が同世代なのなら、その辺りで発明された呪文だと言う事なのか？ とオスカーは少し推理してみたが、今回は呪文の事を話して来たわけではなく。閉心術の話をして来たのだった。

「そうなのか…… まあなんか夏休みにいくつか呪文を教えてくれたし、後でレアにもそれが要りそうなら教えるけど…… 閉心術の練習を今日しないか？」

「そうですね…… 試合までもう全然日数が無いですし……」

「昨日、ダンブルドア先生と喋って、閉心術についてちよつと聞いて来たんだ。できればそれが頭の中にある間にやってみたい」

「ダンブルドア先生にですか？」

閉心術と聞いた瞬間に険しい顔になったレアにも、ダンブルドア先生と言った瞬間に少し毛色の違う目の光ができた気がした。それにオスカー自身も、自分達だけでやるよりも、ダンブルドア先生の言葉を参考にしてやった方が、ちよつと自信が出てくる気がしたのだ。

「そうだ。だからもしかしたら上手くいくかもしれないだろ？ 俺は授業が全部終わったらいつものところにいるから、時間があつたら来てくれるか？」

「わ、分かりました…… 行きます」

「じゃあ、何か入り口で待ってるみたいだから行くよ。放課後にまたな」

「はい……」

レアはまた騒がしい集団に囲まれて、何か色々と聞かれている様だった。オスカーは入り口でこつちを見ている二人の方へと向かっ

た、先に行ってくれと言っても、二人は先に行ってくれそうに無いのは最初から分かっていた。

「先に行ってくれて言っただろ」

「エストと一緒に歩いたら、スリザリンのクイディッチチームに袋叩きにされちゃうわ」

「トンクスと一緒に歩いたら、ホグワーツ中の鎧さんが足をかけられて倒れちゃうの」

「俺と一緒に変わらないだろ」

相変わらず、スリザリンのクイディッチチームが過保護なところも、トンクスが足を引つ掛けたり、仕掛け階段にはまるのも、オスカーにはどうしようも無かった。

三人は闇の魔術に対する防衛術の教室に向けて歩きながら、闇祓いについての話をしていた。

「なんか最近、周りに闇祓いの人が多いよね？ キングズリー、クラナの叔父さん、スクリムジヨール先生……」

「こういうの軍…… 軍靴の足音がするって言うのよね。パパが言ってたわ」

「魔法使いはそんなの履くのか？ 闇祓いだったら履いててもおかしくないけど……」

オスカーはキングズリーが着ている服を意識して見たことは無かったが、戦闘用の格好として、服や靴がそれ用のモノだったとしてもおかしくは無かった。

「まあそんなの知らないけど、闇祓いなんてほとんどはほとんど会えないレアキャラじゃないの？ この機会に色々聞いといて損は無いわ」

「夏休みかクリスマスにオスカーのお家に行けば会えるの」

「トンクスは闇祓いに興味があるのか？」

そう聞くと、トンクスはこれまでよりも壮大に鎧に足を引つ掛けた。ガシャンと大きな音が廊下に響いて、その後も起き上がれない鎧が悲しそうにカシャカシャ音を鳴らしていた。

オスカーは鎧を魔法で元の状態に戻してやった。鎧はオスカーに向けてお礼の様に一度兜を鳴らした。

「あるわよ。クラーナが闇祓い、闇祓いってうるさいからあんまり言わないけど。自分で人を助けられる職業だし、かつこいいじゃない?」
「でも、人を助けるなら聖マンガ病院の癒者とかでも同じなんじゃないの?」

「先に助けられるじゃないの。傷ができる前にそれを止めた方がいい気がしない?」

「そうかもしれないな…… それにトンクスに毒やけがの治療をしてもらうのは生きて心地があんまりしないしな……」

「ぶっ飛ばすわよ」

クラーナの前では余り言わないというのがトンクスらしく、オスカーは思わず少し笑ってしまった。去年の事を考えれば、トンクスの自分で誰かを助けられるという、闇祓いに惹かれる理由は納得できるモノだったからだ。

「ふーん…… クラーナもトンクスもなんかいいね。なりたいものが決まってるかもしれないって…… そういうのって変わったたりしないの?」

「そりゃあ、途中で何回か変わるんじゃないの? みんな小さい頃はシンデレラになりたいとか…… 二人にはシンデレラじゃダメね、アマータになりたいとかそういうこと言ってただろうし、この後も変わってくんじやないの?」

「なりたいモノは変わっても、やりたいことはあんまり変わらないって事? 助けるためになるのが闇祓いってことでしょ?」

「まあそういう風にも言えるのかもしれないわね。自分のやりたいこととか、かつこいいことをできる人にみんななりたいんだから当たり前だとは思うけど」

自分のやりたいことをできる人間になる…… オスカーはまだ自分のやりたい事が何なのかは良く分からなかった。自分の周りの人、例えばキングズリーが何をやりたくて闇祓いになったのかもオスカーは知らなかったし、昨日喋ったダンブルドア先生も何がやりたくてずっと先生を続けているのかもオスカーは知らなかった。

「トンクスが誰かを助けに行くと、なんかやらかす心配の方が大きい

気がするけどな…… あんまり自分の事勘定に入れなさそうだし」

「あのね…… あんたにだけは言われたくないわ」

「なりたいモノがあるって凄いなと思うの……」

エストは何か考え続けていて、こういう状態になると相当の事をしないと戻ってこないことをオスカーは知っていたし、トクスの方はこれ見よがしにため息をついていた。幸いな事に闇の魔術に対する防衛術の教室はすぐそこだった。

闇の魔術に対する防衛術の教室は半分が机と椅子。もう半分はレッドキャップやグリーンデローといった色々な闇の生き物が入った檻が配置されていた。すでに生徒達はほとんどが座っているようで、オスカー達は一番前まで行かざるを得なかった。

相変わらず、スクリムジョール先生は少し足を引きずってはいたものの、足取りは軽敏で姿勢はマクゴナガル先生と同じくらいピチットしていた。

スクリムジョール先生はハツフルパフとスリザリンの全員分の出席を取った後、いつもの様に授業を始めた。

オスカーはこの先生がどんな風に授業をするのかにも慣れてきていた。最初に授業で何を教えたいのか、つまり授業の目的を話して、その後にここまでを理解することを望むと言うのだ。何を伝えたいのかを伝えて、ここまで理解せよと言うやり方は確かに非常に具体的で分かりやすかった。

「本日の授業は二寮の合同で行っている。これは決闘トーナメントと同じく、君たちに協力を培って貰うのを目的としている。本日の授業では、君たち魔法使いや魔女が少し協力するだけで、どんな効果を生み出す事ができるのか、上辺だけでも掴んで帰って貰う事を望んでいる」

そして、この次に何を始めるのかもオスカーを含めて、ほとんどの生徒がもう分かっていた。生徒に質問をするのだ。常に自分で考えて、意見を言わせるというのはこの授業で一貫している事でもあった。

「マグルと違って、我々魔法使いは組織性や協力的という点で劣って

いると言わざるを得ない。これは色んな箇所に現れている。誰か、どうしてそうなったのか答えられる者はいるか？」

オスカーの両隣で手が挙がった。オスカーは魔法薬学の授業を受けているようでちよつとだけおかしな気分になった。

「では、ミス・プルウエット」

「はい。魔法族は人数がいなくても、色んな事をできるからです。私たちは傷を癒すことも、傷をつけることも、移動することも、燃やすことも、水を出すことも一人で行う事が出来ます。でもマグルは……水を汲むのでさえ、ちゃんとした井戸や水道を複数人で造らないといけません」

マグルと魔法族の違い……確かにエストの言うようにオスカーも含めた魔法族は、一人で色んな事ができるのかもしれない。それがゆえにマグルよりも協力することができていないというのだろうか？

オスカーがちよつと真剣に考えようとしていると横のトンクスが羊皮紙にメモを書いて滑らせてきた。メモには『なんで私が手を挙げたら笑ったのよ』と書かれていた。

「よろしい。スリザリンに五点与える。我々魔法族はできることが多いために協力することに對するメリットを考え難い。これは我々の大きな欠点だ。誰か、マグルの協力性や組織性の産物として現れたモノの代表例が分かる者はいるか？ これは非常に巨大なモノで、恐らく今後も魔法族が造ることは無いであろうモノだ」

スクリムジョール先生がそう言うとしばらく教室が鎮まりかえった。隣のエストもまだ考え付かない様だった。そうしていると、いつも挙がるエストの方ではなく、もう一方から手が挙がった。今度はオスカーも笑わなかった。

「ではミス・トンクス」

「えつと……多分、街？ 都市じゃないかなって。ロンドンとか」

オスカーもその答えは正しそうだと思った。ロンドンの町をオスカーはそんなに歩いたことは無かったが、ホグワーツ城よりも高いマグルの建物がいくつも立ち並んでいることは知っていたし、恐らく魔

法族は造ることをしないだろうからだ。

「その通りだ。ハツフルパフに五点。ロンドン、ニューヨーク、パリ、東京。こういった大都市を我々は必要としないし、造ることも無い、もちろん我々が造った建造物が少しあったり、我々も少しながら住んでいるだろう。しかし、我々は彼らの様に海を埋め立て、川の流れを変え、地面を埋め尽くすほど家を建てたりはしない」

数という意味でも、協力するという意味でも確かにマグルに魔法族は負けているとオスカーも思った。だいたい買い物をする時でさえ、このイギリスで魔法族が魔法族の格好をして買い物ができるのは、ダイアゴン横丁とホグズミードくらいなのだ。

「我々は彼らよりも早く移動できるから固まって住む意味は無い、その上彼らの様な数はもともといない。しかし、だからと言って協力をしないとと言う理由にはならない。かつてマグルからの迫害が強まった時代に、我々は各地のウイゼンガモットの様な議会や連盟を合わせて、国際魔法使い連盟を創り出した。ウイゼンガモットを元にして魔法省も生まれた。その結果として、我々はマグルと住み分け、お互いに傷つけること無く暮らしているわけだ」

住み分けができてないと傷つけあうのだろうか？ オスカーは毎回、スクリムジョール先生が言っていることはほとんど事実で正しいはずなのに、疑問が浮かんでくるのだった。真剣に考えているオスカーにまた隣から羊皮紙がやってきていた。『なんで答えないのよ。しかも今度は笑わないし』と書かれていた。

「つまり、我々が協力すれば、もともとマグル達よりも個々でできることが多いのだから、より大きな事を実現できる。例えば、クイディッチのワールドカップの場合、マグルなら何年もかけて競技場を作らねばならないが、我々なら最短で半年あれば作製することもできる」

オスカーはちよつとめんどくさくなつたので、トンクスに返信を書こうとしたが、書く前にもう片方から羊皮紙がやってきた。『トンクスと何してるの？』オスカーは本当にめんどくさくなつたので、もう書かないで真面目にスクリムジョール先生の話聞くことにした。

「だから我々も協力し、組織を作ることによって色々な事が可能になる。その上、色々な事態に対応することもできる。魔法省なら、危険生物の管理、闇の魔法使いへの対応、魔法法の適用や運営等がそれにあたる」
スクリムジョール先生はこの学校に来てからずっとこれに関して言っている様だった。誰かと協力しようと、色々な事に備えろとそう言っているのだった。

「ではこのクラスで全身金縛り呪文が使える者は手を挙げたまえ」

突然の問いだったが、クラスのほとんどが手を挙げた様だった。全身金縛り呪文自体は一年生でも使える呪文だったので、クラスのほとんどが手を挙げるのは普通の事ではあった。

「いいか、使えるところを挙げる者にはこの後にチェックを行う可能性がある。では妨害呪文を使える者は？」

手がだいぶ少なくなった。妨害呪文自体は四年生から五年生に覚える呪文だったので無理は無かった。

「武装解除呪文」

「失神呪文」

「爆発呪文」

その後も十種類以上の呪文について、スクリムジョール先生は聞いていた。最後まで手を挙げれていたのはオスカー達を含めて数人だけだった。

「これでこのクラスがどんな呪文を使えるか分かったわけだが、いいか？ 君たち一人一人ではない。このクラスだ。このクラスは私が今質問した色々な呪文、あれだけの呪文があれば成人の魔法使いとも決闘をできる様な種類の呪文だ。それを使えるわけだ。それに呪文が使える人間でも、箒に乗れない、魔法薬を作れない、魔法生物の知識が無い、そういった人もいるだろう。しかし、これだけの数がいれば恐らく四年生でも成人の優秀な魔法使い一人よりもよほど色々な状況に対応できるだろう」

これだけの人間がいれば、色々な状況に対応できると言う。それは呪文が唱えられるかどうか、魔法薬を作れるといった単純な事だけを指しているのだろうか？ オスカーはもっと破滅的で、悲惨な状況

でも人がいれば対応できるのかどうかを聞きたかった。

「これがイギリス魔法界全体ならもつとだ。魔法省はマグルと魔法使いを闇の魔法使いや闇の魔法生物から守ることができる。聖マンガ魔法疾患傷害病院は龍痘といった病気から我々を守っている。ホグワーツでは、君たち魔法を学ぶ事を望む生徒に魔法の知識を渡す事ができる。これで協力することや組織を作ることの意味が分かっただろうか?」

スクリムジヨール先生が杖を振ると、グリーンデローやレッドキャツプが入っている檻の向こうに巨体の入った檻が見えた。恐らくトロールが入っている様だった。

「それでは実践してもらおう。君たちは何人かでグループを作り、あのトロールを失神させてもらおう。もちろんあのトロールたちにはすでに失神してもらう契約を結んでいるから、一方的に攻撃しているわけではない。数人でできないのならば、もっと複数人で挑みたまえ。挑戦する時は私に言ってからすること、その他分からないことはすぐに質問する様に。では始めだ」

しばらく、生徒達にはざわざわとしたどよめきが広がっていたが、スリザリンの何人かはすぐにグループを作って、トロールに挑みに行くようだった。トロールや巨人の説明を聞かれてもいないのに始めたチャーリーが言っていたことをオスカーが思い出すと、トロールや巨人は失神呪文やその他の呪文に対して、抵抗力を持っていると言っていたはずだった。

「オスカーが燃やすのは禁止よね?」

「失神させろって言ってただろ、あとさつき笑ったのはなんか魔法薬学みたいだったからだ」

「何よ。魔法薬学って」

「いつもエストとクラリーナが隣で手を挙げるから、何かエストとトックスが手を挙げるのを見て、思っただけだ」

「ふーん。魔法薬学はそんな感じなのね」

他の学生達もグループを作って挑みに行ったり、他のグループがトロールに挑んでいるのを見たりしていた。

「ねえ、オスカー。一回二人で同時に同じ呪文を唱えてみない？」
「同時に？」

「そう、同時なの」

「あれ？ 私は仲間外れってわけね」

「うん。一回だけやってみたいの」

エストはトンクスを歯牙にもかけずにスクリムジョール先生の了解を貰った後に、オスカーをトロールの檻まで連れていった。

檻の中のトロールは何かオスカーの方を指してブーブーと言っていたが、オスカーにはトロール語は分からなかったので何のことだか分からなかった。

「やっぱりエストの方が猪突猛進よね。こういうところをクラーナは見習った方がいいわ」

「ここにいないのに何言っているんだ」

前のグループが四人ほどで何回か、呪文を撃っており、妨害呪文で止めた所で顔に失神呪文を撃ちこもうとしていたが、トロールは激しくブーブー言うようになっただけで、全くもってピンピンしていた。

「じゃあオスカー、三、二、一でやるね？」

「わかった」

二人は檻の前に立って、トロールに杖を向けた。横でトンクスがニヤニヤした顔で、その後ろでは結構な数の生徒達がオスカー達を見ていた。まだ誰も成功していないのと、エストがいるせいで注目を集めている様だった。

「三、二、一…… ステューピファイ!!! 麻痺せよ!!!」

「ステューピファイ!!! 麻痺せよ!!!」

二人の杖からは、オスカーがこれまで見たことが無いくらい強力な赤い光線が発射されて、トロールの左胸に命中した。その光線はこれまで生徒達が撃っていた光線の数倍の太さがありそうだったし、何より撃っているオスカーの髪の毛が逆立ち、ちよつと鳥肌が立つ位な上、杖も震えていた。

失神呪文を受けたトロールは白目を剥いたと思うと、フラフラと檻の中で二、三步前後に歩いてその後、背後にドスンと倒れた。

生徒達にきつきのスクリムジョール先生の話が終わった時以上のどよめきが広がって行った。スクリムジョール先生はトロールの方へ歩いて行って、様子を見ている様だった。

「ちよつと!! 今の何なのよ!! ラブラブステューピファイとか言わないでしようね!!」

「なんなんだよ。ラブラブステューピファイって。もうちよつとなんかネーミングがあるだろ…… エスト、何だったんだ? 今の?」

「二本の杖は特別な。無理やり戦わせても戦わないし、一緒に使えば凄いつてオリバンダーさんが言ってたの。夏休みに行ったら教えてくれたよ? 何かアメリカの魔法学校では有名なお話らしいし」

さも当然の様に話すエストに唾然としたオスカーとトンクスは顔を見合わせた。正直なところ、人に向けて撃てばただでは済まない事になりそうな威力だったからだ。

「ラブラブ失神光線やばすぎるわ。組織も協力もあつたもんじゃないじゃない」

「普通変えるのはラブラブの部分だろ…… つつても終わっちゃったな。スクリムジョール先生がトロールを起こそうとしてるし…… もうちよつと沢山の人で時間かけてやる予定だったんだろうな」

スクリムジョール先生がトロールに向けてエネルギーやリナビートを唱えている様だったのだが、トロールは相変わらず白目を剥いて倒れたままだった。

「スクリムジョール先生のせいでオスカーと一緒に出来なかったし、ちよつと気分いいかも」

「スクリムジョール先生がいなかったら、決闘トーナメントも無いだろ……」

「これからはあんた達二人と一緒に相手にすることは絶対にしないわ。ラブラブ失神呪文で死んだなんて記録を魔法史に刻むのは嫌なもの。今度のオスカーのペアがレアで良かったわ」

トンクスが恐らくこれから一週間位はラブラブ、ラブラブとうるさいのがオスカーには簡単に想像できたので、もうオスカーはげんなりとし始めていた。

結局、トロールはそれからうんともすんとも言わなくなってしまうので、闇の魔術に対する防衛術の授業はそこまでで切上げになってしまった。その後、昼食までの時間も、昼食に行くまでの道中もトンクスはラブラブ、ラブラブとうるさかったし、トンクスがラブラブ、ラブラブと言うせいでホグワーツ中にトロールがラブラブ失神光線でノックアウトされたという、わけのわからない伝説が伝わっているようだった。

オスカーはあんまりラブラブ、ラブラブとそこら中から聞こえてくるので、午後の授業が終わると足早にいつもの五階の鏡の裏に向かった。

鏡の裏にはもう燭台に炎が灯っていて、レアが一人で本を読んでいる様だった。

「あ、オスカー先輩。お疲れ様です」

「ああ、早いな。俺も結構急いできたんだけど……」

「何か、クイレル先生の授業がトロールの面倒を見るってことで中止になっちゃったんです…… レイブンクローの友達は…… その…… オスカー先輩とエスト先輩のラブラブステューピファイでトロールが五十メートル吹っ飛んで失神したんだって言ってたんですけど……」

やっぱり話はどんどん大きくなっていく様だった。あれだけの巨体を五十メートル吹っ飛ばせるのなら闇の魔法使いもラブラブ失神呪文を覚えなさいといけなくなるはずだった。

「ラブラブと五十メートルは嘘だな。トロールを失神させたのは本当だけだ」

「そうなんですか？　なんかそれ以外にも普通の失神呪文よりピンク色だったとか……」

「そんなわけないだろ。赤色だったぞ」

オスカーはちよつと疲れてきたが、閉心術の練習をする前なのにレアの顔色は良さそうだったので、やっとラブラブ失神呪文が効果的に作用しているようだと考えた。

「まあ失神呪文の事は取りあえず置いて、閉心術の話をしてもら

「いか？」

「わ、分かりました……」

オスカーは午前中の闇の魔術に対する防衛術のせいでごちゃごちゃになっっている頭の中を整えて、閉心術の話を考えた。ダンブルドア先生、フィニアス・ナイジエラス、エストと話したことをまとめてレアに伝えないといけなかった。

「前話したコツとかの話とどれだけ違うのか分からないけど……取りあえず、何か自分の事を客観的に見ないといけないうモノがあればいいって言ってたな」

「見ないといけないモノですか？」

「そう。ブラック教授…… 何代か前の校長先生とエストは…… スリザリンだったらそういうのは例えば純血の誇りだとか、家や家族の事だって言ってたな。そういうのがあれば自分が凄く怒ってる時とか、悲しい時でも、そういうのにふさわしい行動をしているか確かめるだろうから、その時の感情を理解できるはずだって言っていた」

「いったん自分の感情を外から見れるくらい大事なモノ……」
レアはまた考え込んでいる様だった。エストと同じでこういう時にはレアも話かけても全く反応しないだろう事をオスカーはこの半年くらいで分かり始めていたので、話しかけずに見守っていた。

そしてしばらくたってから、レアは自分の何も髪が無いはずの場所でまるで髪を撫でつける様な動作をした。その後、オスカーの方を真っすぐに見た。

「何となく…… 何となく分かった気が…… オスカー先輩、開心術をお願いできますか？」

「いいけどいきなりでいいのか？」

「はい…… それと…… 申し訳ないんですけど、今回は…… 失敗したら…… その、オスカー先輩に凄い迷惑をかけるのかもしれないです……」

「迷惑？」

一体レアが何を言おうとしているのか、オスカーにはさっぱり分からなかった。分かるのはいつものレアよりもさらに何かを自分の中

で決めた様に見えるという事だけだった。

「ボク…… これまで、閉心術の訓練だからできるだけ心を平常にしようと思つて、一番考えたくないことは考えない様にしていました。でも、それが悪いんじゃないかなつて思つて…… だから、今回はあえてそれを考えようと思つて…… でも、もし今までみたいに失敗したら、これまでより取り乱して…… オスカー先輩に凄い迷惑をかけると思つてんです」

一番考えたくない事…… オスカーは自分が閉心術の訓練をした時の事を思いだした。できる様になつた時、一体何の記憶を見たのか？ そこには大きなヒントがあつたのかもしれない。

「レア、叫びの屋敷で俺がクラリーナに無理を言つて、閉心術の訓練して貰つた時のこと覚えてるか？」

「はい…… あの時は全然想像もできなかったですけど……」

「できる様になる一回前の訓練で、俺は多分、一番考えたく無い事、吸魂鬼が来たら真つ先に思い浮かべる記憶を見たんだ。外から見たら分からないかもしれないけどな。でも、その後、閉心術を使える様になつた。最初からそれがヒントだったのかもしれない。だから、レアもそうすればいいんじゃないか？ あの時のクラリーナみたいな感じになれるのか分からないけど、出来るだけはやってみるよ」

「ありがとうございます……」

レアは唇を噛みしめている様だった。それでも、自分からクツションやいつも練習に使っている物品を用意して、練習の準備を始めた。

オスカーは自分の準備をしないとイケないと思つた。もし、これまでの記憶よりもより深い記憶、感情に入るのだとすればこれまで以上にオスカー自身の負担も大きくなるはずだからだ。それでも、オスカーは絶対にやると決めていた。あの時、自分がして貰つたことを他の人にもしたかつたし、ここで逃げたりすれば自分の記憶と向き合うことなど一生かかってもできない気がしたからだ。

二人はお互いに向かい合った。黄色の眼にオスカー自身の姿が映っていた。そして、レアの眼からもオスカーの眼の中にレアが映っているはずだった。

「お願いします!!」

「分かった。開心!! レジリメンズ!!」

いつもと何かが違う気がしていた。これまでと同じ様に世界が回り出して秘密の通路とレアが目の前から消える。音が遠くに消えていく。レアの感情がそのまま伝わってくる。

目の前の人を失望させたくない。友達を失望させたくない。傷つけない。自分自身をコントロールしたい。もうこんな自分は嫌だ。恐らく記憶の感情ではなく、目の前にいるレア自身の感情がそのまま伝わってくるのは初めてだった。

そして、幾重にも重なって、何度も打ちつける波の様に伝わってくる感情が段々と重く、強くなってくるにつれて、オスカー自身の頭もまるでそれをアンテナの様に拾って、レアの感情に引つ張られる。

いつもならもうレアのいつかの記憶が見えるはずなのに、どんどんと奥へ、深くへと潜っていくようだった。さっきまで感じていた重い油の様な感情すら、まるで深い深い海の中のその一番上の表層の部分で起こっているただの小さな波の様に感じられた。

目の前に見えるそれはきつと、今のレアが感じたり、レア自身の中で巻き起こっている全ての感情が生まれてくる源泉の様だった。

オスカーは全く単純に恐ろしいと思った。そこに入れば二度と戻ってこれなくなる気がしたのだ。自分自身がかき消えてしまう気がしたのだ。弱い意思で入れば間違いなく、レアの感情のるつぼに巻き込まれて、自分自身すら分からなくなる気がしていた。

それでも、オスカーは逃げないと決めていた。目の前のレアが開けた場所を見て、彼女を理解しないといけないと分かっていた。自分自身の事が分からない人がいるのなら、それで苦しんでいる誰かがいるのなら、誰かが伝えないといけないと分かっていた。そうしないと一人だけでは自分の姿が見えないのだ。

閉心術

オズカーが感じたのは違和感だった。

余りにも記憶ははつきりとしていて、これまでオズカーが見てきたどの記憶よりも明確に世界が映像と音声で縁どられていたのだ。

そして、オズカーが覚悟していた、レアの思考や想いというモノが全く感じられなかった。ただただ、その記憶の世界がオズカーの五感を通して感じられた。

髪の毛の長いレアは奇妙な行動を彼女の家の前でしていた。家の近くには境界を示す申し訳なさげな石垣が見えるのだが、その石垣のギリギリまで色んなモノを飛ばしてはギリギリでコントロールして自分の方へ戻しているのだ。

いつか見た箒のおもちや、石ころ、その辺を飛んでいたであろう蜂、本、色んなモノを自分で投げつけたり、魔法で飛ばしたりしながら石垣を飛び越えるギリギリで自分の手元に何度も戻している。

退屈そうな顔をしながらそれを延々と繰り返すレアをしばらく見て、オズカーはやっと何をやっているのかに気付いた。

「レア!! なんでもまた家から出ているの!! それはやめなさいって言うっているでしょう!!」

これは保護呪文の及ぶギリギリまで色んなモノを飛ばしているのだ。恐らく、石垣の外側からは石垣の中が見えず、また入れない様に呪文がかけられているはずで、レアは外に出れない当てつけにこんなことを繰り返しているのだろうとオズカーは思った。

マーリンの怒鳴り声を聞いても、レアは全く反省する素振りも見せず、逆にマーリンの方を睨みつけていた。

「だって、ここにいないとパパが帰ってきてても分からないし、今日はハリーへのプレゼントを渡すために誰か来るんじゃないの?」

「とにかく、家の中に入りなさい。それにその遊びは絶対にしてはダメ」

何かへの当てつけもあつたようだが、レアは父親の帰りや外からの便りをいち早く受け取るために家の領域の内側とは言え、外にいる様

だった。

オスカーには家の中で知っている人にしか会えず、ほとんど外に出ることができないレアの気分はなんとなく分かった。オスカー自身が物心ついた時から、家の中と呪文のかかった森の中でしか世界も人も知らなかったからだ。

家族の誰かが外出してしまった時に姿現しで戻ってくる玄関の傍で待っていたり、暖炉飛行で帰ると言っていたので、何時間も広間の暖炉の前でペンスと一緒に待っていたりとオスカーには似たような経験があった。

そして、お土産を持って帰ってきたり、何より外の話をして貰い続けたのだ。家の中しか知らない人間にとって、家族や新聞、ラジオから伝わってくる世界こそが彼や彼女の世界の全てであることは間違いが無かった。

「なんで？ あの石垣の内側ならここでボクが例のあの人の名前を言ったって、バンシー妖怪と大声大会をしたって分からないんじゃないの？」

「いいから早く入りなさい!!」

「だからなんで!? 何で何にも説明してくれないの?」

マーリンの一边倒な命令にはレアは全く納得しそうに無かった。記憶のレアを見れば分かることだったが、この年の子供にしては驚くほど考えることができているし、その辺のオスカーの同級生よりもよっぽど賢そうに見えた。

恐らく、普通の大人相手に話すよりも論理的に筋だつて説明しなければ彼女を納得させることは難しそうだった。

「家に入ったら説明するわ。とにかく家に入りなさい。入らなかったら、誰が来ても部屋に入れっぱなしよ」

マーリンが最後通牒の様にそう言うと、レアは眉間にしわを寄せ、唇を噛むような顔、文字通り拗ねた顔をして家の中に入った。

「コロポータス!! 扉よくっつけ!!」

マーリンはレアが家に入ったのを確認して扉に呪文を唱えた。グチャっという音がして扉が閉まる。この呪文を唱えることで同時に

鍵も閉まるという事をオスカーは知っていた。

家の中にはすでに誰かを迎える準備ができていて、五人分の食事がもう用意されていた。壁にかかった時計はお昼前の時間を示していた。

「ほら、もうパパやそれにジェームズ達の誰か二人が来るって連絡があったのよ。レアに手伝って貰おうと思ったのに……レア、どうしてそんなにすぐ部屋から居なくなるの？ どれだけ心配するか……」

「説明は？ なんで外に出ちゃいけないの？」

レアは全くマーリンの言い分はお構いなしだった。彼女にとっては納得できる理由があるのかどうかが一番の重要事項であるようだった。マーリンはそれを聞いて、さっきの拗ねたレアそっくりの顔をした。

「家全体には魔法がかかって……」

マーリンが話始めると同時に家の外からバチっという誰かが姿現しでやってきた特有の音がした。

「帰ってきた!!」

レアはいきなり立ち上がって、さっきマーリンが呪文を使って閉めた扉を、扉に向けて手首を捻る動作と前に向かって押すような動作だけで開けてしまった。

「レア!! やめなさい!!」

「なんだ？ もうレアを部屋から呼んでるのか？」

ドアの外にいたのは恐らくレアの父親だった。オスカーはレアの父親を初めて見たが、レアの髪の色が一体誰から貰ったモノなのかは一目見ただけで分かった。

オスカーは内心、死喰い人達の襲撃が始まったのかと思っただけだったので、体こそ今の記憶の中では無いものの、安心から一息ついた。「ハリーへのプレゼントは？ 他の人は一緒じゃないの？」

「レアはまた外で遊んでたのよ。ちよっと目を離したただけですぐにこれよ」

「今日くらいはいいんじゃないか？ それなら、ピーターとシリウス

がもう来る予定らしいから、外で待つておくか？ あとハリーへのプレゼントはまだ秘密だ」

父親は持つていた小包を杖で家の中へと放り込むと、二人を連れて外に出た。外にはさつきレアが遊んでいた小さな庭に椅子が数客とテーブルがあった。

「どこに行つてたの？ まだ開いてるお店がある？」

「ダイアゴン横丁の店はほとんど閉まっている。漏れ鍋は閑古鳥が鳴いているし、まだやってるのはグリーンゴッツとオリバンダーの店くらいだろう。今はホグズミードの方が安全だ」

「安全じゃないと困るわ。あそこは休日になればホグワーツの生徒で溢れかえるのに」

「じゃあプレゼントを買つたのはホグズミード？ ハニーデュークス？」

オスカーの聞き違いでなければさつきからレアは延々と質問を続けていた。しかし、父親の方は特に変わったことも無いと言う顔をしていたし、マーリンの方もちよつとあきれ顔ではあったが、そんなに変つたモノを見る目はしていなかった。つまり、いつもこうだったのだからとオスカーは思った。

「そうだよ。行つたのはホグズミードだ。あそこはホグワーツも近いし、ダンブルドアの傍では死喰い人も表立って活動できない。それに面白い話を聞いたな……」

「面白い話？」

「ホッグズ・ヘッドでダンブルドアと誰かが喋っているのを盗み聞きしたのはセブルス・スネイ……」

「ニコ!! レアの前でそういう話はやめて!!」

「おっと。ごめん」

「なんで？ セブルス・スネイプって誰？ 死喰い人？ 騎士団？」

その名前にオスカーは驚いた。昨日見た記憶の中で出てきた名前と一緒に何かを言つたせいで機嫌が悪くなつたと言つていたはずだった。いつたいダンブルドアは誰と何を喋つていて、スネイプは何

を聞いたのか？ オスカーの中で疑問が一つ増えた。

「この話は終わり、なんでも質問ばかりはダメ」

「ママの言う通りだな、これをレアに買ってきたんだ」

「え？」

レアの父親、ニコはポケットからレアの髪色と同じ髪留めを取り出して、レアではなくマーリンに渡した。

「ほら、ママがホグワーツの時にずっとしてた髪型と同じにレアもして貰えるぞ」

「髪型？ どうでもいいし、変えたら何か変わる？」

「せっかく綺麗な髪色なのに、あの頃の私と同じ髪型にしたら逆に目立ってしまうわ。どうせ、ホグズミードに行ったから思いついたんでしよう……」

マーリンはそう言いながらも、レアの髪を束ねて後ろの方で髪留めで留めた。髪留めのサイズよりも明らかに大量の髪を束ねていたので何か魔法がかかっているのだろう。レアもマーリンも全く同意を示していないのに、嫌な顔どころか少し笑顔でされるまま、するままだった。

しばらくすると、後ろから束ねられた髪の色が見える以外はオスカーの知っているレアに近い姿になった。

「ほら、これでホグワーツの頃のママにそっくりになった」

「そっくりになっても、まだホグワーツには行けないし……」

「ホグワーツに行きたいなら、もっとお行儀良くしないとダメ。入学を知らせるふくろうも来なくなってしまおうわ」

またレアは拗ねた顔でマーリンの方を見た。レアからすれば、この狭い空間の中で唯一外に出れると思っっているのがホグワーツの話なのだから、そんな顔も当たり前なのかもしれないなかった。

「行儀が良くなくても、魔法を使えるし。三年生で覚える呪文ももう覚えたのに……」

「また勝手に杖を持ちだして練習してたのね……」

「ちよっとくらいならいいだろう。ホグワーツに入ったら家ではレアの魔法を見ることはできないし…… パパも小さい頃にそんなには

使えなかった。ほら、何かやってみてくれ」

ニコが笑顔でそう言うと、レアの顔もニコと同じ様に笑顔になった。

オスカーは三人の言動を聞いて、笑顔になるべきはずなのに焦燥感が隠せなかった。ホツグズ・ヘッドにレアを取り戻しに行った時に彼女は何と言っていたのかを思い出したからだ。『パパに外で見せようなんて思わなかったら』レアはそう言って泣いていた。

レアは前に出て、さつきと同じ様に色んなモノを操って飛ばして見たり、マーリンとニコが座っている方に向けて、腕を大きく開いた後そのまま閉じて両手を合わせた。そうすると二人の椅子が動いて優しくぶつかつた。

三人共笑顔だった。一羽の雀が庭のテーブルの上にやってきたので、レアは手の上で見えないお手玉で遊ぶ様な動作をした。そうすれば雀は飛ばたいしていないのに、トランプリンの上で跳ねているように上下に弾んだ。

「雀……？ マーリン!! レアを連れて家に入れ!!」

笑顔だったニコは突然顔色を変えて、叫んだ。オスカーは何が起こっているのかを考えた。恐らく…… 保護呪文が無くなっているのだ。動物も人間も例外なく、保護呪文を唱えていれば家を認識できないし、入れないはずだった。そうでなければ、家がある近くにドラゴンやカメラを放り込めば保護呪文の意味など無くなってしまう。

ニコは杖を取って、石垣の外を見た。そこにはオスカーの見覚えのある黒いマントとマスクをつけた人間たちが一ダースは揃っていた。「なんだ？ マツキノン、もう少し自慢の娘さんの魔法を我々にも見せてくれないのか？」

先頭の男が仮面を取らずに言った。オスカーにはそれが誰なのか仮面越しからでも分かった。アントニン・ドロホフ、オスカーの父親に間違いが無かった。

「ポーン、ポーンと雀が可愛かったじゃないか？ ちいぢやな、ちいぢやなレアちゃんを同じ様にポーン、ポーンと打ちあげたら、可愛いだろうねえ」

ドロホフの隣で女が仮面とフードを取った。その声も姿もオスカの良く知っている人物、トンクス先生にそっくりだった。にもかかわらず、その声には隠しきれない残酷な響きが乗せられていた。ベラトリックス・レストレンジ、ロングボトム夫妻を拷問した魔法使いだ。

「こつちに杖を向けてるって時は殺る気があるってことだろう？ マツキノン。いいなあ、子供がいるとやりがいが出ていけねえ。ボーンズの時は子供がいたから楽しかったぞ？ さあ楽しませてくれよ。もう姿くらましはできないんだからな」

さらにその隣の男も仮面を外した。ロジエールに間違い無かった。ロジエールの言葉に死喰い人達が酷薄な高笑いをあげた。全員、これから始まる戦いと残酷な見世物に酔っぱらっているようだった。

「俺はお前の家を見つけるのは苦労したんだ。なあニコ？」
「トラバース……」

最後に一人が進み出て、家の敷地の中まで入った。その瞬間にベルが鳴っているような警報音が響いた。恐らく、家の中に誰かが入ったら分かるように呪文がかけられていたのだ。

「お前には学生時代から世話になっていたからな。可愛い女の子じゃないか。羨ましい」

家の中に入ったトラバースに続いて、ロジエールと数人が続けて入ってきた。他の死喰い人達は後ろから杖を構えている。

マーリンはレアを自分の後ろにやって、じりじりと家の入り口へと近づいており、ニコはトラバースと杖を向け合っていた。

「お嬢ちゃん？ お嬢ちゃんが外にみんなを連れ出してくれたのかな？ ありがとうって言わないとな」

トラバースがそう言った瞬間にレアは押し出す様に手を動かした、それだけでとっさに杖を振ったロジエール以外の敷地内に入った死喰い人達が家の外まで吹き飛ばされた。

「おお、いいぞ。レアちゃん。このトラバースとか言うのは口と頭は回るが、へっぴり腰で有名なんだ。もっとやった方が楽しみがいる」

ロジエールがいかにも楽しそうにレアに声をかけた。その後ろで吹き飛ばされたトラバースが杖をレアに向けて振った。何の呪文かは分からなかったが、その呪文はレアをかばおうとしたニコの杖腕で無い方の腕に当たり、それにレアの後ろから束ねている髪の毛にも当たった。

ニコの腕とさつき留めたばかりのレアの髪はそれだけで千切れ飛んだ。血がマーリンの体とレアの顔にかかった。

「ニコ!!」

「今だ!! 行け!!」

恐らく、ニコが盾の呪文を唱えてロジエールが一瞬動けなくなった。その瞬間にマーリンは杖で扉を開けて、家の中へとレアを連れて入ったのだ。

「鬼ごっこか…… いいなあ。まあトラバース、俺はこんな手負いには興味ないからやれよ」

「黙れ!! ロジエール!! 俺が全員やる!!」

しかし、ニコが呪文をロジエールとトラバースに唱えようとした瞬間に後ろの死喰い人達から呪文が突き刺さった。ニコは杖ごと家中へと吹き飛ばされた。

「パパ!!」

「レア、いいから二階へ行くのよ!!」

マーリンはレアを連れて、二階への階段を上り始めた。後ろからトラバースが呪文を唱える声が聞こえる。それは最悪の呪文だった。

「アバダケダブラ!!」

オスカーにはレアの視点からしか見えなかったが、緑色の光が階段の下から漏れてくるのが見えた。そして、レアを抱えているマーリンの体が震えているのも分かった。

「マーリン!! 無駄だぞ!! そのキャビネット棚が繋がっている場所は分かっているんだからなあ!!」

下から、トラバースが吠えた。マーリンの顔がさらに青くなったが、同時に何かを決意した顔にもなった。

「レア、よく聞いて、説明するのは一回だけよ」

レアは無言で頷いた。下からトラバースとロジエールが上がってきている音がしていた。マーリンがドアを魔法で閉めたが、破られるのは時間の問題だった。

「このキャビネット棚はどこかに繋がっているけど、どっちかを壊せば途中のどこかでひっかかるの。聞いて、レア。どこかで誰かを待つのよ。貴方が見つかるまで隠れているの」

足音はもうそこまで迫っていた。アロホモラが効かないのか、強引に爆破呪文で破ろうとしているトラバースの声が聞こえる。マーリンがキャビネット棚のドアを開けた。

「ママも一緒に……」

「誰かが壊さないとダメなの。レア。パパもママも貴方を愛しているわ」

「ママ!! 嫌、嫌、嫌、嫌だ!!」

マーリンがレアをキャビネット棚に入れるのとドアが吹き飛んだのは同時だった。オスカーが練習で何度も見ていたのとそっくりな眼がレアを通してオスカーを見つめていた。レアの視点からはキャビネット棚が閉められるのと同時に光が消えた。

「やだ!! 開けて、嫌だ!!」

暗い中で呪文と怒号が飛び交っているのが聞こえる。そして、誰かが倒れる音と恐らくトラバースのモノであろう勝ち誇った声が聞こえるのだ。

しかし、レアにあるのはオスカーから見えるのは暗闇だけだった。外の音は聞こえるのに暗闇だけだった。

死喰い人達の声が聞こえる。相当な数の人間がマツキノンの家を荒らしているようで、足音と何かを話し合う声が聞こえるのだ。しかし、レアにあるのはただ光の無い暗闇だけだった。

「じゃあ、ガキを取り逃がしたってことなのか? ちゃんと調べたのか? キャビネット棚の先を?」

「そうだ。キャビネット棚からは誰も出てきていない。先には暖炉もポートキーも無かったはずだ」

「マーリンが壊しやがったからだ…… あのガキは飛ばされる途中で

どこかに引つかかったに違い無い……クソ!!」

トラバースが何かを蹴り飛ばす音が聞こえた。それは木や石と言った家や家具の材料を蹴り飛ばした音では無かった。

「両方殺しちまったのが悪いだろう。先に母親か父親を捕まえときや逃げられずにすんだんだ」

「うるさいぞ。ロジエール!!」

「おうおう。お前がそんなに感情的なのは珍しいな。なんだ？ 今蹴り飛ばした死体と何かあったのか？」

「黙れ!!」

さらに新しい足音が増えた様だった。レアの感性は何も見えないせいか、耳だけが研ぎ澄まされている様だった。

「可愛い。可愛いレアちゃんを逃がしたのかい？ ご主人様が何とおっしゃるか……」

「ベラトリックス、何をしに来たんだ？」

「簡単な事さ、トラバース。すぐにキャビネット棚を壊したってことはこの近くにいるんじゃないのかい？ どこか見えないところで震えているに違い無いんじゃないのかねえ？」

ベラトリックスの言葉にレアの体が震えた。

「そうか…… そういうことか……」

「簡単だな。お前がせっつかく髪の毛を切つてあげたんだから。代わりにモノをつけてあげるって言えば出てくるだろう」

「そうだよ。ロジエール。聞こえてるかな？ ちっちゃな、ちっちゃな、ベイビー・レアちゃん？ 出ておいで。レアちゃんの髪の毛に合わせる綺麗な髪が一杯あるよ。どっちの色も選び放題だ。キャハハハハ!!」

記憶だと分かっているのに、オスカーはレアの感覚では無く、自身自身の感覚として鳥肌が立ち、嫌な汗が背中を流れているのが分かった。そして、何より余りのおぞましさと理不尽に対する怒りが自分自身の中で駆け巡っているのが分かった。

それから何度も死喰い人達の怒号や家を呪文で破壊しているのか、凄まじい破壊音、そしてメラメラと何かが燃える音がレアの耳を通し

て聞こえていた。

しかし、結局死喰い人達はレアを発見することはできなかったようであり、いつしかその音も遠くに消えていった。

音も感覚も光も全てが遠くに行くに従って、違う事が起こりつつあった。

開心術を開始して、記憶に入ってからオスカーはただ記憶だけでありのまま見ていた。レアの心の動きや感情が伝わってくることは無かった。

しかし、今は違った。もはやそれはオスカーからしてなんと例えれば良いのか分からなかった。何も聞こえない暗闇の中で、オスカーは激しい感情の嵐の中にいた。それはオスカーが知っている嵐だとかそういうレベルのモノでは無かった。

感情が起こっている時にその感情を溜める水槽の様なモノがあるとして、それは今や完全に満杯であり、にもかかわらず、新しい感情が湯水のように噴き出して一杯の器の中をさらに満たし続け、内側から凄まじい圧力で押し続けていた。

オスカー自身の頭の中も、レアから伝わってくる感情で頭の中が一杯になり、爆発しそうだった。

『あの時、外に出てなければ』『姿現しの音と同時に外にでなければ』『ママの言う事を聞いておけば』『トラバースに魔法をかけなければ』『ママの手を掴んで一緒に入っていれば』

あの時あすれば良かったというレアの後悔と自責の念が延々と伝わってくるのだ。そしてそれらはレアの頭の中を荒れ狂った後に違う感情を引き起こし、また頭の中、心の中を満たして、抜き身の刀の様にズタズタに引き裂いていた。

『ママの言う事をいつも聞いていれば』『魔法なんてホグワーツに入ってからで良かった』『ボクのせいじゃない、違う!! ボクのせいだ……』『まだパパやママが死んだって見たわけじゃない、でもロジエールはそう言った、それに緑の光を見た』『認めないなんて、ボクのせいじゃないなんて、思っちゃいけない』『嫌だ、嫌だ、嫌だ、嫌だ!!』

行先の無い感情が、何度も何度も行先を求めて荒れ狂って、傷つけ

て、そして新しい感情を引き起こし続けた。その過程でオスカーからしても、もはや自分自身というモノが一度バラバラに引き裂かれていた様だった。何も聞こえない暗闇の中で、自分という存在だけがある中で、今ある状況を何とか受け入れようとして、かみ砕いて認識できるようにしようとしたが、それは余りにも受け入れられない状況であり、変えられない状況に耐えるために、心と頭がそれに合わせようとして、何度も組みなおし、形を変える過程で、それは今や形が無いほどバラバラになっていた。

『外に出なければ警報が鳴る呪文があつたから助かった』『ボクが外に出たせいで二人は死んだ』『外に出たくないと思っていれば二人は助かった』『ボクのせいで二人は死んだ』『ボクが魔法を見せたいなんて思わなかつたら、構って欲しいなんて、褒めて欲しいなんて思わなかつたら二人は助かった』『ボクのせいで二人は死んだ』『最初から魔法なんて、魔法の力なんてなければ二人は助かった』『意味がない、意味がない、要らない、信じられない、こんな力意味がない、二人はもう会えない、褒めて貰えない、力があつてもコントロールできても意味がない、こんなモノいらない!! 最初からなければ良かった!!』

レアの中を駆け巡っていく感情に合わせて、周りが震えていた。いったいレアがどこにいるのかはオスカーにも分からなかつたし、レア自身にも分からなかつたが、レアの力が周りに渦巻いて、レアを含めて周りの全てを攻撃し、破壊しようとしているようだった。

オスカーはやっとレアと会った時にどうして魔法をコントロールできなかったのかが分かつた。

もちろん、ホッグズ・ヘッドでの一件で何故そうなつたのかは聞いていた。しかし、今やっと記憶を見て、レアから伝わってくる、きつとレアが感じたり、考えたりしたモノのほんの一部を感じただけでどうしてそうなつたのかがやっと正しく分かつたのだ。

もう時間の感覚が分からないほど、レアは暗闇の中で何かに感情や力を向けることができずにあがいて、もがいて、バラバラにズタズタになっていた。

すると誰かの声が聞こえた。

「シリウス!! いつ死喰い人が戻ってくるか分からない!! いったん戻ろう!!」

「ピーターの言う通り、シリウス。ここは応援を呼ぶべきだ。私たちが三人だけでは……」

「見なかったのか!! 壊された居間に食器が何個あったと思う!! 五つだ!! 誰の分だと思ってる!! ニコとマーリンとレアは三人家族だ!!」

恐らく、ピーター、リーマス、シリウス・ブラックの三人だった。感情を抑えられない吠える様なシリウスの声が響いていた。物音からして、三人はレアを探している様だった。

「まずはニコとマーリンの体は回収できたんだから、もう一度ダンブルドアかムーディか誰かを連れて来る……」

「違う!! 俺たちはもつと早く来るべきだった!! お前と俺がもつと早く来るべきだった!!」

「シリウス、落ち着かないとダメだ。それに姿をくりますキャビネット棚があつたんだからレアは無事かもしれない」

レアは三人の声を聞いても何も反応しなかった。ただ、彼女の中ではいまだに感情が暴れ続けていて、それが際限の無いエネルギーとして、辺りを震わし、破壊し続けていた。

「だからだ!! キャビネット棚はぶつ壊されていた!! それならレアはまだ近くににいるかもしれない!! あれは壊れていれば行先までいけない!!」

「そうかもしれないが、向こうにたどり着いてるかもしれないだろう? 今のシリウスは冷静じゃない」

「冷静なわけないだろう!! レアはまだホグワーツにも行って無いんだぞ!! リーマス、俺だってあんな風に家に閉じ込められるのが嫌だったんだ!! それなのに…… なんてこんな年でこんな目に遭わないといけないんだ!! 俺たちは何もできないって言うのか!! クソっ、クソっ!!」

シリウス・ブラックの自分自身を責める声が響いていた。オスカーには分からなかった。これが自分でレアやレアの家族、ポッター家を

裏切って売り渡した男の態度なのだろうか？ 演技としてやっているのだとすれば、この声だけでも怒りが伝わってくる声の主は恐るべき男だった。

「シリウス…… あれは……？」

「何だピーター!! 黒い…… 何だあれ？」

「ピーター、シリウス、多分触れない方が…… 魔力の暴走かもしれない……」

レアの周りで巻き起こっている破壊の渦はどんどん抑えが利かなくなっている様だった。もはや、レアの周りを取り囲んでいた木や土や泥は力で巻き上げられて、吹き飛びつつあった。そして、レア自身も黒い霧の様なモノの中で、体が現れたり、消えたりしていた。

「あんなことが起こるのか？」

「確か、闇の魔術に対する防衛術の関連で読んだことがある。昔、マグルが魔法使いを迫害してた頃に、魔法を否定するように教えられて、力がコントロールできなくなつて暴走する子供がいたと」

「じゃあ、あれはレアだつてことか？ あの子が魔法を否定だつて？

そんな……」

レアは恐らく何も見てはいなかった。ただ、行き場の無い感情に従つて、黒い力が周りに渦巻いて時折近くにあるモノを巻き上げたり、バラバラに引き裂いているだけだった。それは全く収まる気配が無かった。

「レア!! 聞こえるか!! 俺だ!! シリウス・ブラックだ!! リーマスやピーターもいる!!」

「シリウス、近づかない方がいい」

「あぶない!!」

レアが目を開いたためにオスカーはやつと外が見えた。シリウスは黒いもやに攻撃されているにも関わらず、杖も使わずにレアに近づこうとしていた。

「ダメだシリウス。一度レアを眠らせるべきだ」

「俺に攻撃しろつて言うのか!! 俺たちは大人なんだぞ!!」

「シリウス、危険すぎる」

最初にピーターが、次にリーマスがレアに杖を向けた。シリウス・ブラックは杖を向けようとしなかった。赤い光線が視線に広がって、記憶が終わった。

オスカーはやっと鏡の裏側に戻ってきた。燭台の炎が優しく通路を照らしている。自身もフラフラだったのでオスカーは一度椅子に座ったが、レアの方はクッションに座り込んで手で顔を覆っていた。

何をレアにすれば良いのか、オスカーは考えた。自分が閉心術の訓練をした時、クラーナは自分に何をした？ 今、どうすればいい？ いったい何をすればいいのか？

はつきり言つて、オスカーが考えて、想定したよりもよほどレアの記憶は酷かった。いったい何をレアに言えばいいのか？ レアは悪くないと言えればいいのか？ 可哀想だと言えればいいのか？ それは余りにもレアにとって失礼だとしてオスカーには思えなかった。

あれだけの事を自分自身で正面から受け止めようとしているのだ。その結果、受け止めきれずに力が暴走していたのだ。そんな相手に一体誰が可哀想だと言えるのか？ オスカーには言えなかった。

しかし、何を言うにしろオスカーはレアの近くへと行くことにした。さっきのシリウス・ブラックでは無いが、とにかく物理的にしろ、心理的にしろレアとの距離を詰めたかった。

頭はさっきの記憶に引き続いて何かでパンパンになっている感じがしたが、何度も何度もバラバラになった様なレアの感性が伝わってきた後にただ座ったり、立ったりしてはいられなかった。何か言わないと目の前で荒い息を吐いているレアが文字通り、細切れになってそのまま消えてしまいそうな気がしたのだ。

「レア、大丈夫か？」

「……るせないんです」

レアは膝をついて、顔を手で覆って、青い顔に荒い息で震えながらずつと何かをぶつぶつと言っていた。

「レア、何を言ってるんだ？」

「許せないんです。許せないんです。すぐに言い訳を考える自分が、逃げ道を考える自分が」

オスカーはレアと同じ目線まで顔を持っていくためにクッションに座った。唇を噛みしめて、青い顔をしているのも、涙が流れているのもレアの小さい手では隠せていなかった。

「他に何が許せないんだ？」

「魔法が使えなくなったことも、前みたいな喋り方や、考え方や、自分をコントロールできないことも、それが全部あの時の事が原因だと思ってることが許せない」

信じられないほど強いとしかオスカーには思えなかった。エストやクラリーナやトックス、アバーフォースにモリー、オスカーにはどうしてそういう行動や考え方ができるのか分からないほど強いと思える人に何人か会ってきた。

その中でも、今、オスカーの目の前で震えている金髪の女の子はこれまで以上に強く見えた。

「まだ何かあるのか？」

「何回思いだしても、誰かが裏切ったせいだとか、状況が悪かったとか、いくらでも…… いくらでも言い訳が思いつくのが!! 許せない!! 助けてくれたみんなも、親戚のみんなも、ハグリッド、アバーフォースさん、寮のみんな、エスト先輩、オスカー先輩…… みんなに助けて貰ってるのに、ずっと、ずっと考えても、考えてもどうにもできないのが許せない……」

オスカーはレアに熟知り顔で閉心術について喋っていたのが情けなくなつた。少なくともオスカーは会ったことのある誰よりも、目の前のレアほど自分自身の事を理解しようとしている人間を知らなかった。彼女は自分に起こったことを飲み込んで、解決するために、前に進もうとするために、自分自身にできる限り自分や自分に起こったことを考えて、把握してなんとかしようとしているのだ。

やっと顔から手を外したレアはとめどなく泣いていた。

「今だって、こうなるって、分かってたのに!! こうなるって、分かってたのにオスカー先輩に甘えて、最初に言い訳して、結局何もできて

ない!!」

泣いているのに、オスカーにはやっぱり目の前のレアが強く見えた。こうなると分かっている、同じことをできる人間が何人いると言うのか。オスカー自身も記憶を取り戻すことを、一番近くにいるエストや、記憶を見たことのあるクラーナ、トックスやチャーリーに言うことができていないのだ。

心の中が血みどろになる程、もがいて苦しんで、それでもやろうと思える人間が弱いはずが無かった。

「やっぱり、ボクに閉心術なんて……」

「レアは閉心術に向いている」

「え?」

やっとレアはオスカーの眼を見た。レアに向けて喋っていると、まるでオスカーは自分自身に言い聞かせている気がいつからかしていたのだ。

「やる前に言っただろ、閉心術には自分の事を客観的に見れるモノが必要だって」

「それをボクはできてないから……」

「できてるだろ、今見た記憶がレアをどんな時でもこれは正しいことなのかって、思い直させているんだろ」

「でも…… でも…… そのせいでいつも、いつも……」

そうきつとレアは自分がどうしてこういう気持ちになるのかをいつも理解しようとしていたはずなのだ。理解しようとしてバラバラになってしまうほどに。

「先に許せないって思うんだろ? あんな事をした自分を信じることなんてできないって、だから理解してるはずの気持ちを理解できないと思ってしまうんだろ? 冷静な自分の方が信じられないんだ。だから結局、感情が出てくるんだ」

「そ、それは……」

「レアは自分で思っているより、自分の事を分かっているよ。俺なんかよりよっぽど分かっている。なんで自分がこう思うのかを頭で理解してるんだ。でも、レアはその自分の頭を信じられないんだ。それで最

後には感情が溢れてくる」

「だって、だって、また失敗する。取り返しがつかなくなる…… 考えて、操らないといけないのに…… ボクの考えは間違ってる……」

オスカーも同じだったはずだった。閉心術の練習をした時に、何かの感情で最初から自分を満たしてコントロールすることができなかったのは、感情よりも、自分の考えや理性の方が信用ならないと思っていたのだ。だって、自分がまず最初にコントロールできるのは自分の考えのはずだった。それで、失敗した時も考えて行動してははずなのに、取り返しのつかない大失敗をした。だから信用できなかった。でも、理性を信用して感情と両立できるようになったはずだった。それはほんの少しですぐに感情が勝る様な状態かもしれないが、少なくとも前よりもできる様になったはずだった。どうしてそれができたのか、オスカーは知っていた。

「間違えばいいだろう、そうしないと何が間違ってるか分からない」

「それが分からない!! ボクの考えが間違ってるって一体どうやって分かるって言うんだ!!」

「俺が言えればいいだろう? 客観的に見て、その感情で大丈夫かどうか確かめてから行動できるようになるのが閉心術なんだったら、俺がレアが合ってるかどうか見るよ。初めはそれでできてるか、間違ってるか見るよ。そうしたら分からないか?」

レアは眼を大きく開けて、口を少し開いたままでオスカーの方を見た。レアにとって完全に予想外の言葉だったようだった。

「そうしたら、ちよつとずつでも自分のこと許せるように、自分の考えが合ってると思えるようになるんじゃないのか? あんなことをやった自分の考えや理性でも、本当に大事な時は自分の感情を抑えることや、逆に表すことができる様になるって思えないか?」

「でも、そんな、だって、ボクにそんな価値が……」

「あるだろ、無いならさつき自分で言ってた人もそうだし、俺もレアを助けないだろ」

「だって…… だって……」

最初は誰も自分を信じられないのだ。もし最初から自分の事を信

じられる人がいるのなら、その人はきつと誰も最初から最後まで信じられない人なのだろう。

だから誰かに信じて貰えないと、自分の事を信じることができない。オスカーもそれを知っていた。そして誰かにそれをすることがどういう事なのかも。

「俺もレアを見るから、レアも俺を見ていてくれ。レアより俺の方がよっぽど信じられないんだから」

「そんな……先輩は……」

レアはしばらくクッションに座り込んで動かなかった。オスカーもクッションに同じく座って考えていた。今の話は考えとか自分の頭の中の話だった。でも体も頭も心も含めた全体の話になれば別の話になるのだろうと思った。

実際、閉心術のコツを掴んだとしても、自分自身が正しいと思うことなどできるのだろうか？ さつき記憶で出てきた死喰い人達、父親、ロジエール、ベラトリックス、トラバースといった人間たちも、間違いなく閉心術を使えるはずだった。彼らはきつと自分が正しいと理解しているのだ、思い込んでいるのだ、感情でも理性でもその両方で。それが誰かにとって正しいことでないはずでも。

「オスカー先輩」

「どうする？」

「もう一回やって下さい」

「分かった」

オスカーはまたレアと向き合った。レアは今度はクッションの傍には立たなかった。ただただ真つすぐにオスカーの方を見ていた。オスカーはもう何となく、レアの眼を見るだけで今何を考えているのかわかる気がした。閉心術とはきつと誰かを己から締め出す術では無く、誰かに己の考えてるモノを見せるモノだという事が段々とオスカーにも分かっていった。だから、老練な閉心術の相手にも偽りの考えや心を見せることができるのだ。

「行くぞ!! レジリメンズ!!」

閉心術を使つて、ちよつとオスカーは後悔した。全く以て、これま

での開心術の様にレアの記憶や心の中に入り込む感覚や、自分が意図してレアの感情を誘導することはできそうに無かった。その代わりにレアが見せたいモノを見せられている気がした。

ダイアゴン横丁、古い学の塔の最上階、叫びの屋敷、その次の日の空き教室、ハグリッドの小屋、ホッグズ・ヘッド、劇の練習をしたトランク、劇の舞台、ホグワーツ特急、ドロホフ邸、漏れ鍋、大広間、そして今いる場所。恐らく、レアは意図してオスカーと喋った場所を全てオスカーに見せていた。レアの考えは読めなかったが、明らかに意図してレアとオスカーが関連した場所を全部見せようとしていた。

その間、レアは倒れ込むこと無く、じつとオスカーの方を見ていた。逆にオスカーはレアに丸裸にされている気すらした。

「凄いな、これわざとやったんだろ？」

「ちよつと、オスカー先輩の事を考えてました」

「自分の顔を人の視点で見るのは恥ずかしいんだが」

「オスカー先輩、ここは鏡の裏なんです……」

してやったとばかりにオスカーに向かって笑うレアの顔は記憶の中のマーリンやニコにそっくりだった。

勇気と誠実と

「オスカーは何か戦術を考えて来たんですか？」

「戦術？ 透明になったり、本を鳥に変えたりってことか？」

「目くらまし呪文はともかく、あんなのはエストだからできる芸当ですよ……」

決闘トーナメントの試合当日、また午前の授業は魔法生物飼育学だった。今日の授業内容はヒツポグリフで、クラスの最初の方の生贄に選ばれたオスカーとクラーナは一足早くヒツポグリフにお辞儀をして、その首やくちばしを撫でることに成功していた。

「正直、戦い方みたいな練習はレアとほとんどしてないな」

「そうなんですか？ エストは中々オスカーが帰って来ないって言うてましたけど……」

クラーナはオスカーの方を見上げる様に見た。その黒い眼が少しだけ心配の色を帯びている気がオスカーはした。ヒツポグリフのくちばしを撫でながら、オスカーはしばらく無言でクラーナの眼を見つめていた。

「な…… なんですか？ 何か私の顔についてますか？」

「いや…… なんか、レアとの練習のせいで……」

どうもレアとの閉心術の練習のせいか、オスカーは人と目が合った時にしばらく目を見つめてしまう癖がついてしまった気がした。クラーナはヒツポグリフを撫でようとして、手を動かしたが少しずれてヒツポグリフの目に当たりそうになった。ヒツポグリフは飛び退きながらいなないた。

「一体何の練習…… まさか…… オスカー、レアを相手に閉心術の練習をしてたんじゃ不是吗？」

オスカーは何か図体のわりにオドオドしているヒツポグリフのくちばしを撫でて、クラーナからの質問に無言を貫いた。正直、オスカーはエストとクラーナに何か隠し事をして上手くいく気はほとんどしていなかった。

「ちよっと聞いてますか？ オスカー？」

さつきは少し動揺したにも関わらず、クラーナはヒツポグリフを挟んでオスカーに向かい合った。なぜか腕を組んでオスカーを睨みつけていた。

「ほんととは閉心術の練習じゃなくて、閉心術の練習だけだな」

「どつちでも変わりませんよ。言わないでも分かると思いますけど、どれだけ危ないか分かってますか？」

こんな風に語気を強めた言い方をクラーナがしてくるのはオスカーにとって久しぶりだった。劇が終わってからは一年生の時のような強い言い方で話してくることは、ほとんど無かったはずだったからだ。

「クラーナもエストと同じ様な事をしてたんじゃないのか？」

「それは一時間もやって無いです。なんとなくですけど…… これまでの練習全部それに充ててたんじゃないんですか？」

何も言っていないのに、オスカーは心を読まれている気すらした。話すのに詰まって、髪の毛をオスカーがかき乱すとクラーナは思いつきりため息をついた。

「やっぱり…… 本当に危ないんですよオスカー。少し間違えば最悪の方向に行くかもしれないんですよ？」

「まあレアはもう大丈夫みたいだから。むしろ朝喋った感じだと元気になったくらいだ」

オスカーが目を逸らして、またヒツポグリフのくちばしを熱心に撫でようとする、クラーナは一回足をドンと踏み鳴らした。ヒツポグリフがまた驚いて少し飛びあがり、オスカーの手にくちばしが当たった。

「ちよつと、ほんとに聞いてるんですか？ あれはやる側も滅茶苦茶消耗するんですよ？ どうせ、オスカーの事だからやれるだけ付き合おうとか言ってやってたんじゃないんですか？」

オスカーは怖くなってきた。クラーナの推測はほとんど合っていたからだ。本当に自分は閉心術をマスターしたのか怪しくなってきた。ヒツポグリフは足踏みにビビり、クラーナに怒るところか、ハグ

リッドが生徒達とヒツポグリフにお辞儀をし合わせている方へ走って行ってしまった。

「レジリメンスを食らってるみたいない気分なんだが」

「トックスじゃないですけど、オスカーはバカなんですか？」

「いや……俺にはそんなに影響無かったと思うんだけどな」

「エストが……エストが言っていましたよ。最近、オスカーの口数が少なかったり、朝いつも起きてくる時間とずれてるって」

クラーナはオスカーから見て、なんだか不思議な顔をしていた。怒っているのか、心配しているのか……それともどこか悔しがっているのか、オスカーはクラーナが心配して言ってくれていると思っていたが、どうも不思議な表情だった。

「まあほんとに大丈夫だって、もう練習も終わったしな。今日勝てるんなら、これからは別の練習をするつもりだし」

「ホントですか？　と言うかそもそも閉心術の練習に問題があるんじゃないか……」

「ミスター・ドロホフ、ミス・ムーディ。最近わしのキメラを見なかったか？」

いつの間にか二人の傍にケトルバーン先生が立っていた。オスカーはクラーナの口が止まったので少しホッとした。このままだと何でもかんでもばれてしまう気がしたからだ。

「キメラってケトルバーン先生が学期の初めに逃げ出したって言ったキメラのことですか？」

「そうじゃ。ちよつと前までは校庭をうろついていると良く連絡があつたんじゃが、最近それすら無くなってきたんじゃ」

控えめに言つて、ドラゴンやバジリスクといった危険生物と同じレベルの生物が校庭をうろついているのはとてもいい事とは言えなかった。

「禁じられた森に逃げ込んだとか？」

「それならハグリッドかケンタウルス達が見つけておるじやろう」

「じゃあ誰かが捕まえたとかなんですか？」

「キメラを捕らえる檻は相当な魔法使いでないと作れん。専門の魔法

使いか…… それこそ、ダンブルドアの様な魔法使いでないとな」

オスカーとクラリーナはお互いに顔を見合わせた。そんな芸当ができる魔法使いはいくらホグワーツでもそうはいないはずだったし、生徒でやりそうなのはエストくらいだったが、クラリーナの反応を見る限り、それも違うようだ。オスカーは思った。

「と言うかどうして私たちに聞いたんですか？ ケトルバーン先生？」

「それは君たちが一番やりそうだからじゃ。特に…… 君たちが一緒にいる二人なら、ハグリッドの様にばれることも無くできるだろう。しかし、どうも違う様じゃ」

「キメラを捕まえてどうしようって言うんですか？」

そもそもオスカーにはキメラを捕まえる意味が分からなかった。チャーリーのいつもの勝手に始まる解説を思い出しても、退治できたのはペガサスに乗ってなんとか退治したギリシャの一件だけだとか、どこかのクイディッチ選手が休暇中に食べられたみたいなの血なまぐさい話しか話してなかったはずだったからだ。

「キメラは素晴らしい生き物じゃ。一つの生物でありながら、たくさんの生き物の特性を表わしておる。わしならキメラを傍で見れるなら腕や足の一本や二本を渡しても大丈夫じゃ。それに動物と向き合う時は自分が傷つくのを恐れてはいかん。相手の方が怖がつておることの方が多いんじゃないかな」

「ケトルバーン先生、キメラの素晴らしさではなく…… いや、分かりました。もし見たら先生にすぐ連絡します」

「おお。ミスター・ドロホフ。いい返事が聞けて嬉しい。それでは放課後のアレもほどほどに頑張りましたまえ」

ケトルバーン先生はキメラの素晴らしさを語る満足げな顔でハグリッドや生徒達がいる方へ行つてしまった。多分、単にキメラについて喋りたいだけだったのだろう。オスカーは無理やり自分を納得させた。

「魔法生物バカは一人で十分だと思いませんか？ だいたい、ケトルバーン先生には手足のストックが一ダースもあるわけじゃないじゃ

ないですか……」

「俺たちは全部合わせても四本しかないし、キメラの素晴らしさを語られてもな……」

オスカーはキメラの素晴らしさを喋られても全くもって理解できなかったし、目の前のクラーナも同じようだった。

「キメラ…… まあ、どの姿が本当の姿か分からないって意味ではトunksみたいな生き物ですね」

「去年のまね妖怪よりだいぶレベルアップしたな。グリフィンドールにトunksポイントが入るんじゃないか？」

そもそもキメラは変身しているのでは無く、色んな要素が入っているというだけだった。変わるのと色んなモノを持っているのでは、大きく違うのではないかとオスカーは思った。

「ポイントはオスカーにあげますよ。それにそんな風に余裕こいてオスカーがレアと見つめ合っていた間に、チャーリーとトunksはなんか色々してみたみたいですから、気を付けた方がいいですよ」

「色々って何なんだ？」

「クイディッチバカでもあるチャーリーがなんだかんだ時間をあつちの練習にさいてましたからね、それに何かここ最近はおぼろぼろになって帰って来てましたし」

それはかなり重大な情報だった。オスカーはチャーリーとエストにクイディッチの話を振ると永遠に話が終わらないので、よっぽど機嫌を取る時でないと話が振らなかったが、つまりチャーリーがクイディッチに賭けている情熱とはそれくらいのモノだった。

それと同じくらいの練習をしているという事は警戒しないといけないのは間違いないのだ。

「おぼろぼろ？ トunksがハグリッドに変身してチャーリーを投げ飛ばしてるとかかか？」

「いくらトunksの頭にかぼちゃジュースが詰まっても流石にそれはしないでしょう」

いったいおぼろぼろになる練習とは何なのか？ オスカーには全く想像できなかった。トunksもチャーリーもそういう意味では面白

いペアだった。これがエストとクラリーナならもう少しは考えようがあるかもしれないが、もちろん技量的にオスカーが対応できるかは別だったが。

「チャーリーは時々意味わからないこと言いますし、トックスはそもそも意味わからないですけど、チャーリーは運動神経いいですし、トックスもあれでハツフルパフで一番の魔女ですからね」

「守護霊の呪文もレアの次にできてたしな。まあ何が起きるのか楽しみにしとくよ」

酷い言いようだったが、クラリーナが二人を信用して信賴していることをオスカーは知っていた。前の闇の魔術に対する防衛術でトックスが闇祓いについて言っていたことを思いだして、オスカーはちよつとおかしな気分になった。二人はなんだかんだ言つて認め合つていたり、同じ方向を見ている気がしたからだ。

「クラリーナはエストに誘われなかったら誰と組むつもりだったんだ？」

「誰とつて…… お…… いやいや、何をいきなり聞いてるんですか?!」

「いや、トックスはあの時、クラリーナと組みに来たんじゃないかと思つただけど……」

「トックスがですか……？ 普通にエストじゃないんですか？」

上手く説明はできなかったが、去年もクラリーナに対して直接行動したのはトックスが最初だったし、それに前回、トックスが闇払いに対して興味があると言つたその理由が何となくクラリーナに当てはまる気がオスカーはしたのだ。単に闇祓いの話からオスカーの頭の中で勝手にクラリーナと結び付けられた気がしないでも無かったが。

「まあそんな気がしたってだけだけどな」

「うーん…… じゃ、じゃあ、オスカーは誰と組みたかつたんですか？」

「俺が？」

「そうです…… なんか誰に誘われてもOKつて言いそうですけど…… みんなに言われたらどうするつもりだったんですか？」

みんなに言われたら？ 組むことができないうエストを除いて、オスカーは考えてみた。ハグリッドに言われていたからレア？ それとも…… トンクス先生の言うように自分とは違う要素を持っている人物？ 組み分けの時はスリザリンとグリフィンとドルと言われたから、アンドロメダとテッドと同じ様にハッフルパフのトンクス？ 単純に一番決闘トーナメントで頼りになりそうだし、叫びの屋敷や必要の部屋で戦ったクラウナ？ それとも、チャーリーと男同士で組んだ方が気楽だった？ オスカーはいまいち答えが出てくるとは思えなかった。

「ねえ、ずっと何の話をしてるの？」

「け、決闘トーナメントの話ですよ」

「そうなの？ オスカー？」

「チャーリーとトンクスが何やってくるか分からないって話だな」

今度はケトルバーン先生ではなく、エストがやってきていた。チャーリーの方は何か夢中でヒツポグリフの相手をしているようで、とても他の事には目がいかない状況だった。オスカーは決闘トーナメントのことすらチャーリーは忘れているのじゃないかと、少し心配になった。

「確かにそれは分かんないかも。あ、でもチャーリーとトンクスが最近箒で校庭を飛んでるって話は聞いたかも」

「箒？ 箒で飛んで決闘するってことか？」

「チャーリーならできなくもないかもしれないね……」

これはヒントになるのではないかとオスカーは思ったが、空を飛んでいる相手にどうやって呪文を当てれば良いのだろうか？

「でも、大広間はそんなに高いわけでも広いわけでも無いよね？」

ちよつといつもより広がってる気がするけど。それに箒で飛んだらどこにいるか丸わかりだし、エストもそんなに箒で飛びながら呪文を相手に当てれる気がしないの」

「まあ複雑な呪文は難しいでしょうし、失神呪文や武装解除呪文が限度でしょうね」

確かに隠れることはできそうに無いし、それに向こうはこっちに向

けて呪文を唱えないといけないので、盾の呪文で冷静に弾くことは可能な気がした。

「でも楽しみかも、なんか面白いことしそうだよね。トンクスは何かクリスマスからやる気が上がったみたいだし」

「何かブチ切れてましたからね。大概空回りしてエライことになるんですけど……」

「俺やレアにはブチ切れてないだろ…… まあ緊張しても仕方ないし、楽しむ感じで行くよ」

エストがやってきたせいで、クラーナの質問は流れてしまったようだが、オスカーは特に答えを出せそうに無かった。クラーナの言う通り誰でもOKしそうだったし、スクリムジョール先生が決めたルールが無ければ一番最初に言ってきたエストと組んでいたことは間違い無かった。

ちよつとオスカーは考えることが増えたが、それは今の所、自分の記憶の事以上に考えたり、悩んだりすることでは無いと思った。太陽はもうオスカー達の真上まで昇っていて、決闘トーナメントまでの時間はほとんど残されていなかった。

今日の大広間は前回よりも熱気がある気がオスカーはした。面白いことに学生たちが座っている席がいつもの様なそれぞれの色順では無く、ペアごとの色順になるように移動していた。

オスカーとレア、チャーリーとトンクスの試合は最初だったので、オスカー側は緑色と青色で、相手側には赤色と黄色のローブで席が埋め尽くされていた。それにいつもクイディッチの試合で見えるような横断幕や手持ちの旗なんかをみんなが持っていた。

これは同じ寮同士だどうなるのかオスカーは少し気になった。どっちも応援するのだろうかと思ったのだ。

「レア頑張ってね」

「勝てば一緒にいる時間が増えるわ」

「私たちの賭け金も増えて三本の筈でいっぱい飲めるわよ」

「優勝すればなんかトロフィーに名前を書いて貰えるらしいって聞いて

た」

「わ、分かったから……」

オスカーの隣でレアはいつもの友達たちから激励の様なモノを受けていた。オスカーも前にビルと決闘した時の様にクイデイツチのキャプテンや喋ったことも無い上級生から肩を叩かれたり、女と気軽に喋れるハツフルパフを潰せだとか、グリフィンドールの鼻っ面を殴り飛ばせだとか、グリフィンドールのシーカーをクイデイツチシーズンが終わるまで面会謝絶にしろだとか言われたが、レアの方がよっぽど応援して貰っている気がして少し羨ましかった。

「ほら見てこれオスカー。なんかグリフィンドールの人たちが賭けをしてるらしくて、ちゃんとオスカーに賭けてきたの」

「なんだそれ。いったい誰が元締めしてるんだ？」

「さあ？ わかんないの。でもほら、何か一試合ごととか、誰が優勝するかに賭けれるの。それで、今の間に優勝の人を選ぶと倍率が高いから、オスカーの名前でオスカーに賭けて来たの。試合に出てる人は相手には賭けられないらしいから…… なんかエストとクラーナは倍率が低かったし」

「ええ…… じゃあ俺もエストとクラーナに賭ければいいのか？」

「それだと何かわざと高い方になるように先に決めたみたいになっちゃうかも……」

どっちにしる試合に出ている人間が賭けたらいくらでも悪いことをできそうな気がしたが、オスカーは試合に集中した方がいい気がした。

「じゃあまあ、勝てば百味ビーンズくらいなら食べれるってことだな」
「今日の試合には十ガリオンくらい賭けてきたからファイア・ウイスキーでも大丈夫だよ？」

「チャーリーを失神させなくても、俺が勝ったらチャーリーが卒倒しそうな額になりそうだな……」

「だから頑張ってきてね？」

「分かった」

エストが観客席に戻るのを見ながら、オスカーは向こう側を見た。

トunksがハツフルパフの学生と何か喋っていたり、チャーリーがクラーナやパーシーといったグリフィンドールの学生達と何か喋っている様だった。

「お前のために勝ってくるって言った方がいいと思います」

「それだとエストと当たったらどうするんだ？」

「その時はその時考えればいいんじゃないんですか？」

「ドツボにはまるだけなんじゃないかそれ……」

「スリザリン生として応援してます」

「ありがとう。ジェマ」

相変わらず、ジェマはエストに何かしろと言ってくるのは変わらないう名前を付けた方がいいのではないかと思うようになるくらい、エストと一緒に談話室にいると話しかけてくるのだった。パーシーがついてくるのは流石に寮が違うので夏休みの様な光景は見られなかったが、正直、パーシーがジェマに変わっただけの様な気がオスカーはした。

「それでは、二回戦を始める。最初の試合のステージはここだ」

一回戦の時の様に、スクリムジョール先生が言うと同時に広間に街が現れた。文字通りの街で、漏れ鍋の外にあるロンドンの街並みに似ている気がオスカーはした。ホグズミードの様な村では無く、石畳で覆われ、石造りの家や集合住宅がいくつも並んでいる。それにオスカーが立っている場所からチャーリーたちが立っている場所まで一本大きな通りが伸びていた。その通りから、何本も小さい路地が色々な方向へと延びている様だった。

「どうしますか？ オスカー先輩？」

「何か戦略があるわけじゃないけど…… 正面から行った方がいい気がする」

「正面から？ ですか？」

「ああ、最初から相手が見えてるし、二人が何かする前に正面から決闘した方がいいと思う。エストとクラーナ以外の同級生なら…… 自分の事を過信してるわけじゃないけど、正面から行ってもどうか

なると思う」

「確かに…… 去年の練習とかあのコガネムシ相手でも、オスカー先輩は反応が早いですし……」

ヴォルデモートやマルフォイ、ビルの相手をどうにかすることがオスカーはできていたので、正直、油断さえしなければどうかできるとオスカーは思っていたのだ。

それに、レアがリータ・スキータの事をコガネムシと呼んだので、思わずオスカーは少し笑ってしまった。別にチャーリーやトンクスと決闘して死ぬわけでは無いのに、それでもちよつと固くなっていたオスカーの体が、笑ったことで力が抜けて軽くなった気がした。

「試合のルールがこれまで説明した通りだ。もし危険な事態に陥った場合は即座に試合を中止し、先生方が止めに入る。それでは始め!!」

オスカーとレアは真っ直ぐに街の中の大通りを進むことにした。どうも、どこかの街並みをそのままコピーしてきたのか、街中の看板にはクリーニングすぐできますだとか、フィッシュアンドチップス四ポンドなどとマグルの金銭でメニューが書かれていた。

チャーリーとトンクスはオスカー達が真っすぐ進んでくるのを見ながら何か呪文を唱えた。二人は杖と…… オスカーからは遠くても良く見えなかったが、何かカバンの様なモノを観客席から呼び出したようだった。

「ここで箒に乗るのか?」

「箒ですか? でも…… エリアの外に出たら失格なんじゃ……」

「それにあれ何を持ってるんだ?」

「あれって…… 劇の時のトランクですか?」

オスカーは何か嫌な予感がした。朝、ケトルバーン先生と喋った時なんと言っていた? 何かはダンブルドアの様な魔法使いで無いと作れないと…… あのトランクは誰が作った? オスカーの頭の中で言葉が再生された。『久しぶりに腕をふるった』他の誰でも無く、オスカーはダンブルドアからそう聞いたのではなかったのか?

「レア、路地に入るぞ」

「え? でも正面から……」

「いいから早く!!」

オスカーは何本も伸びている路地にレアを引つ張って入れた。もし、オスカーの最悪の想像が当たっているなら、それこそ、大人の魔法使いと決闘した方がよほどマシな状況になるはずだった。

「オスカー!! 出てきなさいよ!! 言ったわよね? 絶対、カードを赤くしてやるって」

「僕は別にオスカーに恨みはないけど…… なんかグリフィンドールのみんながビルを倒したり、女の子を一杯侍らせているのが気にいらないうって言ってたから伝えとくよ」

二人は箒に乗って上空から喋っているらしかった。周りの建物を確認するとどうも中にも入れるらしかった。オスカーは二階と屋上に登れそうな階段がついている建物を探した。

「アロホモラ!! レア、登ってあいつらが何をするか見ないと」

「え? でも箒に乗ってるからすぐにばれちゃうんじゃない?」

「ばれても呪文自体は盾の呪文で防げるから」

「わ、わかりました」

二人が屋上まで登るとチャリーとトンクスが円を描く様に空中を飛んでいるのが見えた。そして、二人はお互いに顔を見て頷くと、トンクスが持っていた魔法のトランクの口を開けて下に向けた。

「ガオオオオオオオオオオン!!」

大きな唸り声と一緒に、何か重量のあるモノが地面に落ちた音がした。金のたてがみに痩せたヤギの様な胴体、そして恐らくドラゴンの様な尻尾、間違い無くあれはキメラだった。

「あ、あれって…… キメラですか?」

「ケトルバーン先生が逃がしたって言ってたやつだろ……」

「き、キメラを倒さないといけない?」

「俺たちがやってるのは相手を失神させるか杖を取り上げることだ。キメラを倒す事じゃない」

キメラの唸り声が響いていた。オスカーは考えた。これは明らかに先生達による中止が入る危険な状態では無いかと思っただが、先生たちの助けはまだ入りそうに無かった。この状況をどうすればいいの

か？ キメラはオスカー達だけを狙っているわけではない。箒から落ちればチャーリーやトンクスを狙うだろうし、外に出れば生徒や先生を狙うだろう。つまり、さっきレアに言ったようにチャーリーとトンクスを戦闘不能にするか、キメラを先生方がいる方に誘導すればいいはずだった。

「オスカー、キメラはなんだかって猫なんだよ」

レアとオスカーの二人がどうすればいいのか確認し合っている間にチャーリーとトンクスが箒に乗ってこつちに向かっていた。トンクスは杖を構えて、チャーリーは杖の代わりに何かを手持っている様だった。

「ステューピファイ!!」

レアが失神呪文をチャーリーに唱えたが、隣のトンクスが張ったであろう盾の呪文に弾かれた。手に持っていた何かをチャーリーがレアに向けて投げる。オスカーはそれをこつちも盾の呪文で防御したが、それは見えない盾に当たった瞬間に割れて、呪文が解けるとレアに何かがかかった様だった。

「臭い玉？」

チャーリーとトンクスの二人はそのままオスカー達を通り過ぎて飛んでいった。オスカーはトンクスの箒に魔法のトランクが括りつけられているのを見た。それにレアの言う通り、チャーリーが投げた球から出た液体、それがかかったレアからは何か鼻につくようなツンとした臭いがした。

次の瞬間、何かが壊れる音と一緒に砂ぼこりがオスカー達の後ろの方から立ち上った。明らかにキメラがオスカー達の方へ向かって、家々を叩き潰しながら進んできているのだ。

「冗談だろ…… レア、観客席の方へ行くぞ」

「これ…… もしかしてマタタビ？ キメラはボクを狙っているんですか？」

「いいから行くぞ!!」

オスカーはレアを思いつきり引っ張って、進ませた。あと一分もしない間にキメラはオスカー達が立っている建物を叩き潰すはずだっ

た。石造りの街並みを身体能力だけで叩き潰すとは恐るべき力だった。オスカーはケトルバーン先生をとつとと退任させたくなくなった。

二人は家の間を飛び越えながら最初に入ってきた入り口に向かった。路地が一人しか入れない大きさなのと、コピーするのが面倒だったのか、ほとんどの家が同じ高さなのでなんとかなっていた。しばらく屋上を走り続けるオスカー達の後ろから破壊音が響き続いていた。

「ガオオオオオオオオオン!!」

また大きな唸り声が響くと破壊音が消えた。オスカーは大通りの方を見て驚愕した。キメラが障害物の無い大通りを全速力で走っているのだ。どう見ても、オスカー達を先回りするために障害物の無い走りやすい場所を進んでいる様だった。

「お、オスカー先輩…… キメラはボクを狙ってますから、ボクが囮になってその間に……」

「アホなこと言ってる場合か!!」

とにかく、キメラをなんとかしてこの試合をしているフィールドからどこかにやらないといけなかった。正直、オスカー自身もレアもキメラと正面から戦って一分も持つとは思えなかったし、そんな状態でレアを囮にするのはできそうに無かった。

チャーリーとトンクスの姿は見えず、あと少しで試合のエリアの外、観客や先生方がいる場所まで着きそうだったが、なんとキメラはオスカー達が入ってきた場所に座り込んでこつちを見ていた。

「そんな……」

レアが走るのを止めてしまった横で、オスカーは屋根の上についていた彫像に変身術をかけた。屋根の上にあった三体の天使の彫像は三体のシベリアンハスキーに変わった。

「行け!!」

シベリアンハスキーたちは器用に階段から下まで降りて、キメラの傍まで近づいた。しかし、ハスキーたちが吠えてもキメラは全く相手にすることも無く、真つすぐにオスカーの横にいるレアの方を見ていた。

どうすればいい？ レアを囷にして観客席にキメラを誘導する？
レアが外に出た時点で試合はオスカー達の負けになる。それでも怪我をするよりはマシなのか？ どうかして、キメラを外に誘導するにはどうしたらいい？

「ほら、とつとと降参しなさいよ。あんたのカワイイハスキー達じゃ、私のカッコいいキメラには何もできないわ」

「別にトングスのキメラじゃないけどね」

大通りを挟んで向こう側にある建物の上にトングスとチャリーが立っていた。キメラの方は何度も吠えたり、キメラに噛みつこうとするハスキーが鬱陶しくなったのか大きな唸り声をあげた。

「とにかくがをしない間に降参した方がいいわ」

「オスカー先輩、やっぱりボクがトングス先輩たちが来た方の入り口まで逃げますから……」

レアが言いかけた瞬間にオスカーの視界が少し赤くなった。大通りが火の海になっていた。キメラが火を噴いたのだ。文字通り、ハスキー達の内、二匹は黒焦げになったが、なぜか一体だけはキメラの後ろに陣取っていて無事だった。

「うん。流石に僕も降参した方がいいと思うよ。ほら、正直、キメラってドラゴンよりヤバイ生き物だと思っただよね」

チャリーが何か楽しそうな表情で火を噴いたキメラを見ながら言った。その瞬間、火を噴いたキメラにみんなの視点が集まっていた。オスカーはトングスの箒に括りつけられた魔法のトランクを見た。二人の箒は建物の屋上に浮かんでいて、手や鎖で固定されてはいなかった。

「アクシオ!! 魔法のトランク!!」

オスカーがそう唱えた瞬間、トングスの箒ごと魔法のトランクがこつちに向かってきた。火に見とれていた二人は一瞬動きが遅く、盾の呪文で防御することができなかった。

しかし、屋根から飛び出そうとした瞬間にトングスが箒を掴んだ。そしてそのまま箒の浮力とトングスにかかっている重力に従って、ゆつくりと大通りに向かって落ちてくる。

ずっとレアに視線が固定されていたキメラが動き出した。明らかに大通りに落ちてくるトunksを狙っている。

「トunks!! 逃げろ!!」

屋上から飛び降りて、落ちる前にレビコーパスを自分に唱えながらオスカーは大通りに降り立った。キメラが凄まじい勢いでトunksの方に迫っていた。屋上にいるレアとチャーリーは状況について行けないのか、二人ともキメラの方をただただ見ていた。

「ガオオオオオオオオン!!」

キメラがトunksのもとにつく前にオスカーは紫色の炎を鞭の様にキメラの前に叩きつけた。これまでほとんどモノに見向きをしなかったキメラがそれを避ける様に飛び退いだ。

オスカーの後ろでやっとなトunksがなんとか立てた様だった。しかし、この状態で火を噴かれればオスカーにはどうすることもできなかった。なんとかして、トunksを守りつつ、キメラから逃げないと行けなかった。

「トunks、魔法のトランクを開けろ」

「え? え? でも……」

「いいから開けろ!!」

生き残ったシベリアンハスキーがキメラの尻尾にかみついている、キメラはそれを鬱陶しがっている様だったし、さっきまではレアに視線を固定していたのに今度はオスカーの方から視線を外さなかった。どうもキメラは明確にオスカーの事を敵だと認識しているようだった。

「す、ステュービファイ!!」

上からレアの声が聞こえると同時にドサツと人が倒れる音がした。レアがオスカーとトunksに視線を集中しているチャーリーに呪文を唱えたようだった。レアはオスカーの言った試合を終わらせる方法を忘れてはいなかった。

あとはキメラを何とかして、トunksを戦闘不能にしないといけなかった。

「トunks。どうやってキメラをトランクに入れたんだ?」

「と、トランクの口をキメラのどこかに当てればいいのよ」

この状態でトックスを戦闘不能にすればキメラのエサになることは間違い無かった。つまり、キメラをトランクの中か観客席に誘導してから、トックスを倒さないといけない。

キメラがオスカーの方を見て、息を吸い込もうとした。オスカーは直観的に分かった。火が来る。

火が来る前にオスカーはキメラの眼を狙って紫の火を放った。当たった瞬間に、猫が良くするシャーという威嚇する声を出しながら一気に飛び退いた。その音はオスカーが聞いたことが無いほどの重低音だった。

「トックス、俺がキメラの相手をするから、トランクを持って後ろに回れ。できればレアと合流してなんとかトランクを当てる。それかキメラの後ろに設置できれば俺がアクシオでトランクを呼び出してキメラに当てる」

「わ、わかったわ」

オスカーが杖を構えている後ろでトックスがトランクを持って走って行った。それにレアが屋上から降りて、大通りにできていた。なんとかしてオスカーはこっちに視線を向かさないといけなかった。

「アグアメンティ!! 水よ!!」

安直な発想だったが、オスカーは水をキメラにぶち当てた。それこそ、多少炎に巻かれても大丈夫な様に先に水を撒いておきたかったし、キメラの視線をオスカーの方に向けておきたかったのだ。もつとも普通に考えればキメラの炎は普通の炎では無く、何か魔法効果がある可能性があったので、水や炎凍結呪文でどうにかなるかは怪しかった。

「ガオオオオオオオオン!!」

またキメラが吠えた。オスカーは吠えた瞬間に水では無く紫の炎で攻撃した。今度はキメラがオスカーの方へ進みながら左右に避けて炎を躲そうとしたが、オスカーは水平に炎の鞭をふるった。キメラのたてがみが焼かれて、苦しそうな鳴き声を上げてまた飛び退いた。

その間にトunksとレアがキメラの後ろへ回ったのをオスカーは確認した。しかし、キメラはずっと視線を固定していたオスカーでは無く、いきなり後ろを向いた、それも息を吸いながら。

オスカーは時が遅くなった気がした。この距離では明らかに自分の攻撃は届かない。間違いなくキメラは炎を吐く。

「アクシオ!! 魔法のトランク!!」

レアとトunksがトランクを開いてキメラに向けると、キメラが炎を吐く瞬間、そしてオスカーが呪文を唱えた瞬間は一緒だった。

炎がさつきオスカーが撒いた水に当たって水蒸気が発生する。白い蒸気で何も見えなくなる。一瞬の沈黙の後にオスカーの手にトランクがやってきた。あの射線上にはオスカーとキメラしかいなかったはずなので、キメラは間違いなくトランクの中に入った様だった。

オスカーは蒸気が収まるのを待った。いったい、二人が黒焦げになっていたらどうすればいいのか。蒸気が収まるまでの間、オスカーはさつき感じた様にまた時が遅くなっている気がした。

「オスカー!!」

「お、オスカー先輩!!」

白い水蒸気が消えた後に見えたのは二人のレアだった。どっちも短い金髪でレイブンクローのローブを着ていた。左のレアがオスカーの事をオスカーと呼んだ。右のレアがオスカーの事をオスカー先輩と呼んだ。

オスカーは二人の眼を見た。それだけでどっちにも呪文をかければいいのかは分かった。もちろん、どっちにも呪文をかけるのが一番だったかもしれないが。

「エクスペリアームス!! 武器よ去れ!!」

オスカーは右のレア、オスカー先輩と言った方に呪文をかけた。杖と恐らくトランクの鍵がくるくると回りながらオスカーの方へと飛んできた。そして少し吹き飛ばされた右のレアの髪色や顔の形が変わった。

「そこまで!! 試合は終了だ!!」

拡声呪文で大きくなったスクリムジョール先生の声が響いた。オスカーはトランクに鍵をかけながら、なぜか生き残っていたハスキーに顔をなめられながら、二度とキメラと戦う事がない事を願った。

百味ビーンズ

失神したチャーリーをエネルギーで意識を戻してから、チャーリーとトンクスを連れ、オスカーは自分達が出てきた方の入り口に戻った。

オスカー達が戻るとスリザリンとレイブンクロー生は総立ちで迎えてくれたが、スネイプ先生とフリットウィック先生がオスカー達を待ち受ける様にその前に立っていた。

それにマクゴナガル先生とスプラウト先生、ケトルバーン先生、スクリムジョール先生もこっちに向かってくるのが見えた。

生徒達は盛り上がっていたが、明らかに雲行きが怪しかった。

「ミスター・ドロホフ、その魔法のトランクはケトルバーン先生に渡すように、それと一通りの試合が済み次第、我輩の研究室に来たまえ。もしマダム・ポンフリーに医務室に行くように言われた場合は、先にそちらに行きたまえ」

「分かりました。スネイプ先生」

オスカーがスネイプ先生に言われているのと同じ様に、他の三人も寮監に何かを言われている様だった。スネイプ先生と入れ替わりにケトルバーン先生がオスカーの方へやってくる。

「魔法のトランクとは見事じゃったな」

「ケトルバーン先生、お渡しします」

「知っておるか？ ミスター・ドロホフ、かのニュート・スキヤマンダーは魔法のトランクに様々な魔法生物を入れて旅をしたと言う……もしかしたら君もそういう仕事に向いておるかもな」

無言でケトルバーン先生にオスカーはトランクを渡した。正直、二度と魔法生物をトランクに入れることはしたく無かった。もし、こんな事を仕事にした日には、自分の手足がそれこそ十ダースは必要だと思っただからだ。オスカーには魔法生物飼育学の教科書は書けそうに無かった。

みんなが寮監からのお小言が終わったのと同位に、向こう側の観客席からクラリーナがやって来たようだった。

「いつペン死んでみたら良かったんですよ!!」

クラリーナがチャーリーとトンクスを思いつき殴り飛ばした。ホッグズ・ヘッドでのレアのフルスイングばりの力の入りようだった。

「おい、クラリーナ、チャーリーは失神呪文を食らったばつかり……」

「オスカーは今黙ってて下さい!! なんてあんなコントロールできないモノを持ち込んだんですか!!」

チャーリーとトンクスは何が起こっているのか分からないといった顔で、叩かれて赤くなっている頬を手で触りながら目を丸くしていた。

「チャールズ・ウィーズリー!! あなたに聞いてるんですよ?」

「えつと…… 箒で練習したらキメラをちようど見つけたし……」

「はあ? 幻の生物とその生息地を読まなかったんですか? キメラの魔法省分類はなんて書いてありましたか? ケトルバーン先生がコントロールできない生き物を自分がコントロールできるって思ってたんですか? 聞こえてますか?」

「いや、聞こえているけど……」

トンクスとクラリーナが喧嘩していた時もクラリーナは相当怒っていたが、今回は怒りの種類が違うようにオスカーは感じた。それに比しても本気で怒っている様だった。

「ニンファドローラ・トンクス!! なんでこんなことしたんですか?」

「普通にやったら勝てないかもって思ってたし、ちようど箒で飛んでたらキメラがいたのよ…… それにチャーリーがニユート・スキヤマンダーみたいに魔法のトランクがあれば捕まえられるのになあって言ってたし…… 私がトランクを劇の後預かってたから……」

オスカーはてつきりあのトランクは劇の後に、ダンブルドア先生かドージ先生に返したモノだと思っていた。どうもチャーリー、トンクスとキメラにトランクと最悪の組み合わせが重なったとしかオスカーは思えなかった。

「生徒だけで捕まえるのも論外ですけど、あれを対戦相手に放つたらどうなるかわかんなかったんですか?」

「流石にキメラを出したらオスカーでも降参すると思ってたんだよ。あと、先生が止めに入るかと思ってたし……」

「バカなんですか？ 止めない先生方も、逃がしたどっかの先生も、降参しないオスカーもバカですけど、なんでこうなるかもしれないって分かってたのにやめなかつたんですか？」

オスカー達の近くに先生方がまだ数人いるのに、クラリーナはお構いなしだった。今のクラリーナはスネイプ先生が茶々を入れに来てても、杖で殴り飛ばしそうな勢いだった。唾然として突っ立っていたオスカーの足に、さつきからずつとシベリアンハスキーがすり寄っていた。仏頂面だったが、何だか褒めてくれとでも言いたげな眼をしている気がオスカーはした。

「だって…… クリスマスの後はクラリーナ達の鼻をあかしてやろうと思ってたのよ…… そこにキメラとトランクがあつたから……」

「分かってるんですか？ キメラに食べられなくても、キメラが傷跡を付けたらマダム・ポンフリーや聖マンゴの癒者だって治せないかもしれないんですよ？ トンクスが落ちた時にオスカーが降りてこなかったら……」

これまで怒っていたクラリーナが押し黙ってしまって、みんなに沈黙が流れた。オスカーはできることが無いのですり寄ってくるハスキーを撫でてやった。

「クラリーナ、次の試合が終わったらもう出番なの。みんなお疲れ様」

「試合が終わったらマクゴナガル先生やスプラウト先生の話をちゃんと聞いて下さいよ。絶対ですよ？ 分かってますよね？」

「わ、分かったよ」

「分かったわ」

エストが出てくることでクラリーナの話が終わる。それにレイブンクロウの友達に囲まれていたレアもオスカー達の方へ来るようだった。

「オスカー…… おめでとうなの…… あのね？」

「ああ、ありがとう。どうかしたのか？」

「あの…… ううん。エストの試合が終わったら…… オスカーとス

ネイプ先生との話が終わったら話すの」

「分かったけど……」

オスカーはまたちよつと嫌な予感がした。いつものエストなら言いたいことがある時は特に場所に関係無く喋るはずだったからだ。ここでは場所が悪いという事は…… 何か喋りにくいことのはずだった。エストに連れられて、クラーナはステージの入り口の方へ行ってしまった。

「フリットウィック先生にちよつと怒られちゃいましたけど、点数も貰いました」

「俺はスネイプ先生にこの後来いって言われたな」

「そうなんですか？　なんか不味い事が？」

「なんだろうな？　心当たりがありませんでどれか分からないな」

「オスカー先輩がそう言うのと、何かシャレにならないので止めて下さい……」

レアと喋りながら、オスカーはエストに何を言われるのだろうかと考えた。何か試合でしかしたのか？　それとも最近何かあったのか？　オスカーには思い当たる節が無かった。

次の試合がもう始まっていて、場所は湿原だった。湿原に人の高さよりも高い葦が生えており、恐らく出場している生徒はお互いに相手の姿が見えないはずだった。

上から見ている観客たちには生徒達の姿が見えており、片方のグループが何やら魔法薬が入っているらしき瓶を何本も取り出していた。

「ちよつとオスカー、試合前に言っておきますけど……」

「クラーナ？　試合の準備しなくていいのか？」

「それはまあなんとかなりますけど…… あれは不味いですよ……」

レアと次の試合を観戦し始めていたオスカーの所にクラーナがやってきていた。てつきり試合前の準備をエストとしに行つたとオスカーは思っていたので、少し意外だった。クラーナは準備を怠らないタイプに見えたからだ。クラーナが来ると近くに座っていたトンクスとチャーリーがちよつと気まずそうな顔色になった。

「不味いって?」

「何って、例の炎の鞭みたいなアレですよ。そりゃ、アレじゃないとキメラに効かなかったかもしれないですけど……先生方にはアレがどんな魔法かばれてますし……それに……」

「それに?」

クラリーナはかなり言いにくそうだった。一度クラリーナは決闘トリーナメントのステージ入り口近くにいるエストの方を見た。

「あの魔法……エストの前で使ったの初めてじゃないんですか? というか私も二年生のあの時以来ですけど……その、とにかくそういうことですよ」

そう言うなり、クラリーナはエストの方へ走って行ってしまった。オスカーは嫌な予感がした。オスカーが使った魔法は、元々、オスカーの父親が好んで使っていた魔法だと聞いたことがあった。

「何か不味いんですか? オスカー先輩?」

「いや……」

オスカーにはレアが何を言っているのか余り聞こえていなかった。どンドン頭の中で想像が膨らみ始めていた。エストはトンクス先生の授業で悪霊の火を見ても何も反応しなかったのでは無いのか?

「試合はそこまで!!」

違う事でオスカーの頭が一杯になっている間に試合が終わってしまった。どうも、魔法薬を使って相手を倒そうとした結果。両チーム共に魔法薬にやられてしまったようだった。

「あれって生ける屍の水薬でしょうか……?」

「睡眠薬を霧にして撒こうとしたら自爆しちゃったのね」

「というか、観客席の方まであの霧流れてるけど大丈夫なのかな?」

他の三人が話している間も、オスカーは頭の中に試合の状況は入ってこなかった。オスカー達のいる向こう側のスタンドは、魔法薬の霧が流れてきて大混乱になっている様だった。先生方がステージに入って、生徒を回収したり、魔法で霧を押しとどめたりしていた。

「トリーナメント表だと、この試合の勝った方がオスカーとレアの相手よね?」

「そのはずです」

「もしかすると、両方負けになるのかな？ それだと一気に決勝までオスカー達が上がっちゃうね」

次の試合が無くなるかもしれないというのに、やっぱりオスカーは別の事を考えていた。確かにオスカーが使う炎の色と悪霊の火の色は違うし、悪霊の火の様に、バジリスクやキメラ、ドラゴンの様な姿を取ったりはしなかった。むしろクラリーナの言うように炎の鞭の様な外見だった。

そうこうしている間に、観客席の倒れている生徒達も運び出されて、次のステージが現れていた。今度のステージは小川の流れる森の様な場所だった。

「オスカー、そういやあんたエストが決闘してるのに大丈夫なの？」

「え…… なんだってトンクス？」

オスカーが聞き返すとトンクスは訝しい顔をした。何かがおかしいといった感じで、あごに手をあててオスカーの方を見ていた。

「キメラってなんか人をおかしくする能力とかあったりするの？」

「いや、そんなの無いはずだけど」

「じゃあオスカーがエストの出る試合で、ステージの方を見ないで上の空って理にかなってないわ」

「確かに……」

トンクスが柄にもなく理にかなってないなどと言ったので、オスカーはやっと周りを見ることのできた。確かにもう試合は始まっていて、エストとクラリーナはまた目くらまし呪文で透明になっているようで見えなかったし、もう一方のペアは小川の上流の方へと迷いなく進んでいる。

「理にかなってないって何なんだよ」

「オスカーの法則に反してるわよ。レア、オスカーがエストに呪文が当たって暴れ出したらいけないから、二年生の時の決闘クラブのクラリーナみたいに、手を繋いであげるといいわ」

「ええっ、手…… 手を繋いでたんですか？」

「そう言えばあの時のエストの相手はレアだったよね」

オスカーはトンクスが何の話をしているのかが分かった。今の状況は二年生の決闘クラブの時と一緒だったし、あの時、オスカーはエストがけがをするのではないかと思っただけだったのだ。ただ、あの時とは違ってエストの隣にはクラリーナがいるはずだったし、それにそうそう杖比べでエストが負けるとはオスカーも思っていなかった。

あの時よりも、オスカーが考えているのはもっと自分本位な事だった。

「今度はオスカーの法則って何なんだ……」

「その一、エスト第一。その二、相手を決めずにバカな事を言う。その三、自分の事を考えない。どう？ だいたい合ってるでしょ？」

「じゃあ今は第一法則なわけだね」

「と言うより法則に反してるとって話なんじゃ……」

その二は何の事を言っているのかオスカーには分からなかったが、一と三はだいたい何が言いたいのかは分かった。だが、一番問題なのは、恐らく今、その二つをオスカー自身が守れていないと感じていることだった。

「意味わからないだろ…… 結局レアとトンクスはキメラの炎は大丈夫だったのか？」

「僕が寝てる間だから何があったのか分からないんだけど、大丈夫だったの？」

「キメラと一緒に炎はトランクに入っちゃいました」

「これ完全に法則の通りじゃないの」

トンクスはやれやれと椅子の手すりに肘をついて、オスカーの方を見た。レアとトンクスは大丈夫そうだったので、オスカーはまた試合の方へと視線を移した。

エスト達の相手のペアは小川の上流で木を切り倒していた。どうも、その木を変身術で石に変えて、簡易なダムのようなモノを作っている。エストとクラリーナの姿は相変わらず、見ることはできなかった。「取りあえず、今回は私とチャリーが悪かったわよ。クラリーナとエストの石でできた鳥の雨とか、本棚の爆破とかも危険度ではいい勝負だと思っけど…… キメラはクラリーナの言う通り、やりすぎだった

わ」

「うん。僕も初めて女子に殴られたかもしれない……。ほんとはオスカーだったらキメラもどうにかするかなってちよつと思ってたんだけど……。よく考えなくてもやりすぎだったよ」

「でも、次の試合も生ける屍の水薬だったですし、本棚の爆破とかキメラとか、なんかどんどん危なくなってる気が……」

「まあ誰も死ななかつたしいいだろ。流星に今回のだったらカードが赤くなってたかもな」

オスカーがそう言うと、チャリーの色は変わらなかったがトクスの方は珍しく渋い顔をした。オスカーは最近、色んな人がいつもとは違う顔をする様になっている気がしていた。

試合の方では何かベルの様な音が森に響いていた。これがオスカーが知ってる魔法ならば、恐らく人が何かの範囲内に入ったことを示していた。相手のペアが呪文を唱えるとエストとクラナの姿が現れた。

「試合が動きますね……。相手のペアはあんなの作ってどうするんでしょう?」

「だいぶ水が溜まってるよね?」

レアとチャリーは試合の方に意識が行っている様だったが、オスカーはトククスが小声で話しているのが聞こえた。

「悪かったわよ。クリスマスにはあんなこと言ったのに、自分で一番できて無かつたんだから。いつの間にかやろうとした事がすり替わってたし……。あの時言いたかつたことと逆の事をしちゃったし…… 劇の時と一緒に周りが見えてなかつたのよ」

ぼそぼそ言っているトククスの言葉を聞いて、オスカーはまたハツ年に入って、ずつと自分の記憶の事を考え続け、今日、試合前にクラナからエストが自分の様子がおかしいと言っていたと聞かされるまで、周りがどんな風に見ているかなどと考えてはいなかつたのだ。

「エクソパルス? ボンバーダ?」

「鉄砲水ってやつかな？」

相手のペアはダムを爆破呪文で吹き飛ばし、エストとクラリーナに向かって噴き出させた。二人は相手がダムを決壊させた瞬間に移動しながら、自分達の前に壁を土で作り、元あった川の方へ誘導するように地面を掘った。水は元の川の方へ流れて、二人には当たらなかったようだった。

だが、オスカーは試合の方が動いているのに、自分の事を考えていた。あんなに悪霊の火は恐ろしかったはずなのに、今や咄嗟に躊躇することも無く使っていた。一年生の時、あんなに一緒にいるのが怖かったはずなのに、エストからどう見られているかなどと最近考えたことがあったのか？

「うわ。凄い……一瞬で……」

「ホントにエストは周りの状況を変えちゃうのが上手いよね……」

「クイディッチもそうだけど……」

「あのペアはやっぱリヤバイじゃないの……どうせクラリーナがとどめをさすに決まってるわ」

鉄砲水が終わり、小川は普通に走れるくらいの水高になった。小川を越えて相手のペアは追い打ちをかけようとしたが、エストが杖を振ると小川は凍り付いてしまい、相手のペアは動けなくなった。ペアが足を動かそうと杖を氷に向けている間に、クラリーナが失神させて試合は終わった。

「そこまで!! 試合は終了だ!!」

エストとクラリーナが引き上げてくるのを見ながら、オスカーはエストに何を話したらいいのかが分からなかった。結局、エストが何について話したいのかも分かっていないのだ。

「あっ!! そう言えば、何で試合の最後で私が偽物だって分かったのよ? あと、あの時、レアがオスカーの事をオスカーって読んでたわよね? 先輩付けした私の方がなんで偽物って分かるのよ? それにそのオスカーみたいな顔した犬どうするのよ」

「確かにオスカーみたいな顔してるかもしれない……ハスキーって笑ってるのか泣いてるのか分かりにくいし」

「なんなんだそれ。レアが先輩を抜いた理由は俺も知らないぞ」

「あの時は何か言わないとダメだと思ったから……」

ハスキーはやつと構ってもらって嬉しいのか、何かハアハア言っていた。もちろん、顔は相変わらず、仏頂面で何を考えているのかはチャーリーの言う通り、分かりにくかった。オスカーは自分もこんな感じに見えるのかと考えた。

「ちよつと全然なんで分かったのかの理由になってないじゃないの。あとその犬はそうね…… オスカー・ジュニアとかでいいんじゃない？」

「この子、女の子だけどね」

「第二法則に関連しているわね」

「もとに戻すのもアレですし、ハグリッドに預けた方が……」

「その名前は却下だ」

間違いなく、オスカー・ジュニアという名前が付けば、オスカーは色んな災難を被るに決まっていた。オスカーあれ取ってこいだとか、オスカーが走ってるだとか色んな事を、この犬が何かするたびに言われると考えたのだ。

「ちよつと勝ったんですから何か言ってくれてもいいじゃないですか」

「あら、おめでとうクラーナ。オスカーがキスして祝福してくれるわよ。ジュニアの方だけだよ」

トunksはハスキーをクラーナの顔の前に持っていった。ハスキーはクラーナの顔をなめてベトベトにした。クラーナはスコージファイを自分の顔に唱えて、それからハスキーをトunksから取り上げた。

「この犬、オスカーが変身術で出した犬でしょう？ オスカーって名前なんですか？」

「何よ。オスカーを飼いたいの？ エストみたいに？ エストはどこ行ったのよ？」

「何ですか飼うって。エストはグリフィンドールの連中から賭け金を

回収するって言っていましたよ」

「オスカー先輩を飼う……なるほど……」

「キメラより危ないかもね」

「なんなんだ……」

流石に犬の名前をオスカーにするのは、オスカーとして何としても避けたかった。今の会話だけでも、名前がオスカーになる危険性は示されていたからだ。それにオスカーはエストと寮は一緒だが別に飼われてはいなかった。

「ミスター・ドロホフ、スリザリン生は出番が終わったようだ。私の研究室に来たまえ」

「スネイプ先生？ 分かりました」

試合が全て終わったらと言っていたはずだったが、スネイプ先生がエスト達の試合が終わるなりオスカーの所に来ていた。オスカーは何か早めた理由でもあるのかと考えた。このままだと、エストにおめでとうと言う事は出来無さそうだった。スネイプ先生はもう歩き出していた。

「言い忘れてたけど、おめでどうクラーナ。それにエストに寮に戻ってる様に言っておいてくれ、後、その犬の名前はオスカー・ジュニア以外でよろしく。ちゃんとその犬の名前をつけてあげてくれ」

「分かりました。ニンファドーラみたいに自分の名前を嫌がるようになるは大変ですからね」

「私はオスカー・ジュニアでいいと思うんだけどね。クラーナもその名前だから自分で抱いてるんじゃないの？」

「ぶっ殺しますよ。ドーラ・Ⅱとかの方がいいんじゃないですかね」

「まね妖怪ならいい名前だね。ドーラ・Ⅱ」

「オスカー先輩、また練習は朝言って貰えれば……」

「分かった。じゃあよろしくな」

スネイプ先生の後を追って、オスカーは大広間から出ようとした。その間、グリフィンホール生が集まっている席の方を見たが、オスカーはエストを見つけることは出来なかった。

いつものスリザリン寮へ行くのと同じルートでオスカーはスネイ

プ先生の研究室へと向かった。どちらも地下牢にあるので、寮へ帰るのにはそんなに時間はかかりそうでは無かった。

オスカーは憂いの篩を使う以外でスネイプ先生の研究室に入ったことは無かった。相変わらず、保存用なのかアルコールや薬品の臭いがする薄暗い部屋だった。

「ミスター・ドロホフ、そこに座ってすこし待ちたまえ」

「はい。スネイプ先生」

オスカーには相変わらず、スネイプ先生の表情が分からなかった。いつ見ても、グリフィンドル生が失敗した時くらいしか笑わなかったし、オスカーと相對する時、スネイプ先生の表情が変わるのをオスカーは見たことが無かった。

スネイプ先生はオスカーを座らせた後、部屋を出て、中々戻ってこなかった。オスカーは腕時計を持っていなかったのだからなかつたが、体感で一時間くらいたってやっと戻ってきた。スネイプ先生は出し抜けに言った。

「なぜ呼ばれたのか分かっているかね？」

「自分が使った魔法のことでしょうか？」

探るようにスネイプ先生の目線がオスカーを捉えたが、オスカーもスネイプ先生もお互いに何も読み取ることはできなかつたようだった。

「そうだ。もちろん、カメラが現れたにも関わらず、試合を続けるという無謀な選択をしたことも、スリザリンの寮監として諫めなければならぬことだが、それ以上に君が使った魔法は問題だ」

座っているオスカーに対して、スネイプ先生は研究室をカツカツと音を立てて歩きながら喋った。

「我輩はあの魔法を見たことがある。それに恐らくあの場の先生方ならば…… ダンブルドア校長やスクリムジョール先生ならば、何の魔法なのか分かっていただろう。ミスター・ドロホフ、君は何の魔法か分かっているのかね？」

「あれは悪霊の火だと聞きました」

また視線がかち合って、スネイプ先生とオスカーはお互いの顔を見

た。やはり、二人共お互いに何も見出すことはできなかつた。オスカーは何の魔法かは分かつてはいたが、その魔法を使う事の味が分かつていたかは怪しかつた。

「我輩の認識が正しければ、あの魔法を使用していた魔法使いは一人しか知られていない。そして、君がその魔法を使えば、その魔法使いとの関連性がことさらに強調されることだろう」

スネイプ先生が左腕に右手で触りながら言った。無意識の行動だったかもしれないが、オスカーはその腕に何があるのかを知っていた。

「いいかね？ ミスター・ドロホフ、闇の魔術とは…… 多種多様、千変万化、流動的にして永遠なるものだ。それと戦うだけでも、幾つもの首を持つ怪物と戦うとことに等しい。しかし…… 使うとなれば…… それは最早、自分自身が多種多様で流動的に、怪物に等しくなるという事だ。のまれぬ為には自分自身を完璧に掌握し、柔軟で創意的にならねばならない。それは君の年ならなおさら難しいだろう」

オスカーにはスネイプ先生が闇の魔術に対してどう考えているのか分からなかつた。闇の魔術に対する防衛術に志願しているというのは聞いていたし、今の言い方は…… 表情こそ無かつたが、どこか憧れの様なモノがあるようにも感じられた。チャャーリーやエストが好きなモノを喋る時と同じで、どんどん自分自身持っているイメージが言葉に表れているようだった。

「通常、この手の魔法について、ここホグワーツでは使う事はおろか、学ぶことさえN E W Tレベル以上でなければ許されない。そのため君の魔法は……」

スネイプ先生が言い切ろうとした瞬間、研究室のドアが叩かれた。スネイプ先生が答える前にドアが開いて人が入ってきた。片足を少し引きずる様な歩き方なのに、俊敏さを感じる動き、スクリムジヨール先生だ。

「セブルス、試合が全て終わってから彼と面談するのでは無かつたのかな？」

「スリザリン生の試合は全て終わったので……」

オスカーは最初に言ったより早めにスネイプ先生がオスカーを呼び出した理由が分かった。恐らく、スクリムジョール先生の横やりを防ぐためだったのだ。スクリムジョール先生がここに来ていとう事は試合は全て終わったのだから。

「ふむ…… ダンブルドアの力添えがあるとしても、君の経歴でホグワーツの教授という職が許されているのは少々意外ではあるが…… さて、ミスター・ドロホフ、授業以外で君と話すのは随分久しぶりだな」

「はい、スクリムジョール先生。お久しぶりです。キングズリーがダンブルドア先生と闇の魔術に対する防衛術の先生によろしくと言っていました」

スネイプ先生は表情を変化させなかったが、スクリムジョール先生の事が苦手であろうことは確かだった。他の先生ならこんな風に横やりを入れさせなかっただろうからだ、それもスリザリン生の前ならなおさらだった。

「ああ、シャックルボルトには私の穴を埋めるために動いてもらっている…… しかし、ミスター・ドロホフ。あれは問題だ。人は個人の人格よりも、印象で人を判断する」

「スクリムジョール先生、ミスター・ドロホフにはすでに我輩が……」
「全ての人間が君と喋れるわけではない。ホグワーツの生徒だけでも君が喋ったことのない人間は多いだろう。魔法界全体ならばなおさらだ。君を他の人間がどう見るか分かるか？ アントニン・ドロホフの息子で、学生相手の決闘で、キメラが出てきたとは言え、父親と同じ魔法を使う魔法使いということだ」

スクリムジョール先生はスネイプ先生の言葉を完全に無視して言い切った。真つすぐにスクリムジョール先生はオスカーを見た。尋問の時もオスカーはこんな感じで真つすぐに見てきたことを覚えていた。

「もちろん、シャックルボルトやスネイプ先生や、ダンブルドア校長から君が、ホグワーツに入ってから、多少のトラブルはあったとしても、何か自分から能動的に人を傷つけたとかそういう問題があったと

は聞いていない。しかし、君は自覚しなければならぬだろう。人からどう見られているかという事を。人は印象だけで人を判断するし、勝手に君に対して敵意を抱いたり、君を見るだけで痛みを抱いたり、怒りを感じるかもしれない。いいかね？ 他の人とは違い自覚せねばならない」

「はい…… スクリムジョール先生」

それはエストとのやり取りがあつて、やっとオスカーが思うようになったことだった。一年生の時、エストと一緒にいるのが怖かったり、グリフィンドール生に追われていた時は感じていたはずなのに、いつの間にか忘れていたことなのだ。

「では行きたまえ。キメラに対して、自分の持つ知識や経験。つまり、スリザリン生の言うところの機智を使って対応したのは見事だった。スリザリンに五十点与える」

「そんな……」

「行きたまえ、すでに生徒達はそれぞれの寮に戻っているだろう。それに生きる屍の水薬の効力次第では君は決勝戦にいくことになるだろう。私はスネイプ先生と話がある」

「分かりました……」

オスカーはスクリムジョール先生とスネイプ先生が話しているのをよそに、研究室から出て行つた。何か、オスカーの胸の中が釈然としなかつた。

あの魔法を使う事を禁じられると思つていたし、スネイプ先生は事実そう言おうとしていたはずだった。しかし、スクリムジョール先生に逆に点数を与えられて、オスカーはもつと魔法が使いにくくなつた気がした。あの魔法を使つて、褒められたり、点数を与えられた方がオスカーとして何か納得できないし、何かに対して裏切りをしている気がしたのだ。

もう生徒達は寮に帰つたのか、あまり廊下はひと気が無かつた。オスカーは少し重い足取りでスリザリンの寮へと向かつた。

「オスカー、もう終わったの？」

「エスト？」

いつかと同じ様に、エストがオスカーの後ろにいた。なぜかハニーデュークスの袋に入った大量の百味ピーンズを持っていた。

「これね？ 今日掛け金で買ってきたの。それと…… オスカーつてレアと鏡の裏で練習してるんだよね？ なんか凄い数の燭台と椅子二つがあつたし……」

「あの通路からホグズミードに行ったのか？」

「そうだよ？ でもあそこなんかあんまり爆破呪文とか使っちゃダメかもね。ちよつと崩れそうだったし…… そうだ、多分談話室にいると人に囲まれちゃうし、あそこいかない？ 燭台に火をつければあつたかいよね？」

「いいけど……」

まだ外出禁止の間では無かったが、忍びの地図を開いて、オスカーとエストは五階の鏡の裏に向かった。ハニーデュークスの袋を見られると少し不味い気がしたのだ。地図を見ると、トンクス、クラーナ、チャーリー、レアがちよつと自分達の寮に戻っているところだった。フィルチはピーンズを二階で追いかけているようだった。

「他のみんなと行ったのか？」

「そうだよ？ 一応本屋さんも行ったんだけどね、トンクスがロツクハートつて怪しい人の本をオスカーにプレゼントしたから、もしオスカーがおかしくなったらその本を読むように言つて言つて言つたの」

「怪しい人の本をおかしい時に読んでどうするんだ。それにあの本…… 値段は高かつたけど全く役に立たなそうだったぞ」

「そうだよね？ モリーおばさんもファンだけど…… なんかイケメンなだけだよ」

相変わらず、トンクスの言う事は良く分からなかった。しかし、五階までの道中でエストと話すための種にはなつたのだった。

ハスキーは何かミディルという名前になって、ハグリッドに預けられたが、どうもミディルという名前でも、オスカーという名前でも反応するようになったとか、ちよつとレアの髪の毛が伸びた気がするだとかとりとめのない話をした。

五階の鏡の裏は、燭台に火をつけると、スリザリンの談話室とは違った暖かさがあつた。

「それで…… 何の話なんだ？」

「取りあえず、百味ビーンズあげるね」

「ああ…… なんだこれ…… 胡椒か？」

「うーん…… エストのは…… なんだろ、豆板醬？」

「豆板醬ってなんだ？」

「東洋の調味料らしいってミユリエルおばさんが言ってたの。なんか旅先で食べたやつを屋敷しもべに作らせてたときがあるとかないとか」

百味ビーンズ、オスカーとエストが初めてのクリスマスにお互いに贈ったものだった。その時はあまり喋れていなかったし、お互いに何が好きなのかも知らなかったのだ。

「うんとね、あの魔法の話なの。鞭みたいなやつ」

やっぱり、クラーナとオスカーがその事だろうと予想した通りだった。オスカーはあんまりにもエストが事も無さげに言ったので返す言葉が無かった。

「あの魔法、エストは見たことあるの。悪霊の火だと思うけど…… あの鞭の形で思いだしたの。多分、どこで見たのか、オスカーには分かるんだと思うんだけど……」

「ああ、多分分かる」

セストラルが見えるのはオスカーとエストだけだった。そして、父親の悪行の中で一番有名なのを考えれば、それがどこで見たモノなのかは簡単に分かった。

「聞いていいのか分かんないけど…… オスカーはどうやってあれを使える様になったの？」

「それは……」

オスカーは何と答えればいいのか分からなかった。エストからすれば、恐らくあの魔法は見ることにすら嫌なはずなのだ。

それに…… オスカーはあの魔法を初めて使った時の事を喋りたくなかった。自分自身のためにも、目の前のエストのためにも。オス

カーは自分自身ですら重くて、つぶれそうな事を誰かに喋りたくなかった。精神的に自分よりはるかに強いダブルドラアやキングズリーならまだしも、特に目の前のエストには喋りたくなかった。

「俺はエストに喋りたくない」

「え？」

エストは予想していなかったとばかりに顔を歪ませた。

そういうモノをオスカーはエストに背負ってもらいたくなかった。そういうモノとできれば無縁のままできて欲しかったのだ。エストもクラーナもレアも、これ以上何かを背負うべきでないとオスカーは思っていた。

「俺が使える様になった理由を話しても、多分、エストはいい気はしないと思う。俺の勝手な考えだけど……」

「そうなんだ…… それって…… うん、でもオスカーが喋りたくなったら喋ってくれるんでしょ？」

「え？」

「だって、クリスマスに言ってたもん。ちよつとでいいからオスカーに言つてつて、それって逆もそうでしょ？ エストに言いたくないのはエストのためなんですよ？ エストもあの時のオスカーみたいにしてるし、ほんとにオスカーが危なくなったら言ってくれるんでしょ？」

「それは……」

オスカーは何も言えなかった。確かにそういうことだった。限界になる前に言ってくれればいいと言っているのだ。エストは。オスカーは自分で勝手にエストを守っているつもりなのに、いつも勝手に守られているのだった。

「それに…… あれって闇の魔術に近いよね？」

「ああさつきスネイプ先生とスクリムジヨール先生と話をしたけど……」

「うん。でも闇の魔術って闇の魔術自体が悪いわけじゃないよね？」

「闇の魔術自体が？」

さつきのスネイプ先生と言い、オスカーは余りエストの言っている

ことが良く分からなかった。闇の魔術は闇の魔術で、そのモノの存在こそが薄暗いモノのはずだった。

「だって、闇の魔術ってたただあるだけだもん。今日のカメラも闇の魔術も別にあるのが悪いわけじゃないよね？ 死の魔法や磔の魔法だって、禁止される様になったのは発明された時より、ずつとずつと後なんだよ？」

「死の呪文が……」

「だからどう使うかだよね？ 今日、オスカーがあれを使わなかったら、トンクスはガブリっていかれてたかもしれないし…… ほんとにどう使うかだと思ふの。別に普通の魔法でも人が死んじゃうことはよくあることなの」

「それはまあそうだけど」

確かに、悪用しようと思えば悲惨な事態を簡単に作ることは普通の魔法でも可能だった。

「それにね？ なんて言うか…… 理解しないとどうにもできないよね？ 死の魔法も当たつちやいけないって知つてなきやいけないし、悪霊の火もどうやってとどめるのか知らないダメなの。嫌いだからしくらないじゃ何も分かんないの」

「確かにそうだけど……」

「なんでもそうだけど、おいしい部分だけ見ても何にも見えないし、不味い部分だけ見ても不味いままなの。どっちも味わわないと何が良くて何がダメか分かんないよね？ それに何が当たりかも分かんないの」

百味ビーンズをボリボリ食べながらエストが言った。今日、恐らく、エストはこれを言いたくてわざわざみんなを連れてハニーデュークスまで行ったのだろう。

「エストの中にも多分、おいしいとこと、不味いところがあるの。でも、ほんととはどっちも無いとダメなのかなって。できればみんなにはおいしいところばかり見せたいけどね？」

「俺は不味いところばかりかもな」

「だからね、もし、ほんとに不味いところを食べないといけなくなったら

…… クリスマスプレゼントでくれればいいかなって」

「ちよつと前に終わったばっかりだけどな」

オスカーはそれがすぐに来る気がした。結局、オスカーは自分自身を守るのが一番下手だった。

アザレア

「最近はスクリムジョール先生の授業で使う魔法薬の為に材料が少なくなっているため、我輩は魔法薬の整理に戻る。十分に気を付けて行うように」

「分かりました。スネイプ先生」

相変わらぬ土気色の顔色に、感情を感じさせない表情で、スネイプ先生は研究室の奥にある、材料の保管庫に去っていった。

今日は授業の無い日であり、オスカーは午前中からスネイプ先生の研究室を訪れていた。朝から憂いの篩を使うと言うのは、オスカーにとって初めての経験だった。

この練習を午前中してから、お昼の後にレアと練習する予定だった。翌日はホグズミード休暇だったし、それにレアとの開心術やエストと悪霊の火について喋ったこともあって、今の間に記憶を見たほうが何か感触をつかめる気がした。しかし、朝という事もあるのか、オスカーは何の記憶を見ればいいのか中々決心がつかなかった。

しばらく、銀色のもやが入っていないただの水盆を眺めていた、しかし本当に何を見れば良いのかオスカーには見当がつかなくなっていた。またしばらく、肌寒い研究室で考えて、やっと思いついた。何も分からないのなら、最初の記憶を見れば良いのではないのかと考えたのだ。

憂いの篩の前に立って、いつもやるようにこめかみから銀色のもや、記憶を引き出した。けれどいつもと違うのは、何度か憂いの篩に對して、その作業を繰り返した事だった。

何個かのもやが憂いの篩の中で、最初はばらばらだったのに、混ざり合って一つの銀色になった。オスカーは見るのを躊躇する前に頭を突っ込んだ。毎回、記憶を見る前に躊躇する自分が何か嫌だったからだった。

開心術で誰かの記憶を見るのと違う、一瞬の暗転と何か分からない冷たさを感じた後、立っていたのはドロホフ邸の玄関の前だ。

オスカーが入れた記憶が正しいのなら、それは最初の最初の記憶だった。小さいオスカーが玄関から出て、森の中へと入っていく。館の前にある小道をきれいになぞるように通って。

自分の家と目の前の小道、それに館の庭の一部である森だけが、そのころのオスカーにとつての世界の全部だった。

母親と父親とそれにペンズから口が酸っぱくなるほど、オスカーはそこから出てはいけないと言い聞かされていたし、小さいオスカーはそれを守っていた。

今考えれば、マグル避けの呪文に加えて、レアの家と同じ様に保護呪文がかけられていたのだろうとオスカーは思った。父親が死喰い人達と自分の家から少し出て喋っていたのがそれを示していると考えたのだ。

もちろん、いまホグワーツで生活をして、色んな人と喋るようになったオスカーからすれば、森の中に面白いモノがあるわけではなかった。

ただ、そのころのオスカーが時間を使えるのは、家によくいる母親かペンズと喋ることか、ドロホフ邸に置いてあった結構な量の本を読むことくらいだった。

それにドロホフ邸にいる生き物と言えば、ペンズと家族三人にローガンというフクロウが一羽だけだったし、その点、森に行けば虫や花や草や、運が良ければウサギや鳥を見ることができた。

だから、オスカーからすればチャーリーがあんなに魔法生物や生き物が好きなのが不思議だった。ウィーズリー家は人で一杯だったし、色んな人と喋れただろうからだ。

よつぽど、自分の方が自然や生き物なんかを好きになってもおかしくないと考えたのだ。

森の中で小さいオスカーは落ちていた大きな枝を集めて、何か小さい小屋を作る真似事をしているようだった。木の上に引っかかっている、木から離れた枝を、手をかぎして魔法で落として集めていた。

オスカーはちよつと不思議な感覚だった。自分もあんな風にレアと同じく、手をかざしただけでモノを動かせたはずだった。それが杖を使うようになってからはいつしかできなくなっていたのだ。

それこそ、オスカーとレアが決闘トーナメントの練習としてやろうとしていることに違い無かった。

ただ、あんまり、小さいオスカーの挙動を見ても、参考にはなりそうになかった。杖を落とすくらいのは行動はほとんど集中せずに行えている様だったからだ。

上を見ながら、小さいオスカーは時々手を振って杖を落とし、それを拾い集めて歩いていた。そして、上に視線が集中していたせいか、いつしか森の端、森と森の間の小さな小道のところまで出ていた。

小さいオスカーは小道の方を見て、それまで大事そうに持っていた杖を取り落とした。杖は大きな音を立てて落ちたが、小さいオスカーは全く気付いていなかった。

シルバーブロンドの少し長い髪をした女の子が、一人で平らな石の上に座って、顔をしかめながら、そばにあるツツジの花を手を触れずに開いたり閉じたりさせていた。

小さいオスカーはそれを自分がいる森からは出ずに眺めていた。その眼には信じられないモノを見る色と憧れと期待が込められている様にオスカーには見えた。

それから、女の子がツツジの花を魔法の力加減を間違えたのか、木からちぎって落としてしまい、小道にバラバラにしてしまつて、ため息をついてどこかへ帰るまで、小さいオスカーは棒立ちでそれを見ていた。杖を拾うことも、動くこともその間ずっと小さいオスカーはしなかったのだ。

女の子がいなくなったあと、小さいオスカーは手をかざしてバラバラになったツツジの花を浮かせた。その後、自分の方へ寄せながら、元あった形になるようにバラバラになった花びらとがくをくつつけて一つの花にした。

浮いているその花を小さいオスカーはしばらく見ていた。そして、ゆつくりと壊さない様に、白いツツジの花を手を取った。

記憶が暗転して、別の場所が変わった。暖炉が暖かに燃えている。ドロホフ邸の広間で小さいオスカーと母親が喋っているようだった。「マグルは魔法を使えるの?」

「それは難しいお話なのよ。オスカー。オスカーはスクイブって呼ばれている人達を知ってる?」

「魔法族なのに魔法が使えない人?」

「そうよ。そういう人達はあんまりマグルと変わらないし、結構マグルと結婚したりするの。そのスクイブの人から何代も経った後、突然魔法を使えるマグルの子供が出てくるの」

小さいオスカーは難しい顔をして、何とか母親が言っていることを理解しようとしているようだった。ただ、オスカーには分かっていた、何とかしてさつき見た女の子と会っていいという理由が小さいオスカーは欲しかったのだ。

「そういう人をマグル生まれの魔法使いや魔女って呼んでるの。もちろん、どこかで魔法族の血が混ざっているはずだから、その言い方が合っているかは分からないのよ」

「ホグワーツにもいるの? マグル生まれの人はホグワーツに行けるの?」

今度は母親の方が難しい顔をした。確かに、今、オスカーが小さいオスカーくらいの子供にこういう事を聞かれたとして、どう答えればいいのかは難しい気がした。

「それも色んな考え方があるけれど、今の校長先生。アルバス・ダンブルドア先生はマグル生まれの魔法使いや魔女を受け入れているわ」

母親の言葉を聞いて、小さいオスカーは何か期待を持った顔になった。その息子の反応を見て、母親はさらに難しい顔になった。

「けれど、それは難しいお話なのよ。中世より前の頃は、私達魔法族はマグルに傷つけられていたし、私達もマグルを傷つけていたのよ。マグル生まれの子供や混血の子供が魔法はダメだって教えられて、む

りやり魔法を封じ込めておかしくなってしまうたり、お互いに傷つけ合っていたの。だから私たちはマグルの前から姿を消したのよ」

「なんでそうなったの？」

「オスカー、オスカーはオスカーとちよつと違う人を見てどう思う？ オスカーはまだ杖が無いけど、オスカーと同じ年で杖で魔法を使ってる人を見たらどう思う？」

また小さいオスカーは難しい顔になった。それはやっぱり、母親がしていた顔によく似ていた。

「ずるい？ 羨ましい？ そう思わない？」

「うん」

「そういうことよ。マグルからしたら、私達はそう見えるの。でも、私達は魔法を捨てることなんてできないでしょう？ 魔法は私達の道具じゃなくて、体の一部なんだから捨てることなんてできないし、そんなことをすればおかしくなってしまうわ」

「でも、じゃあ、魔法を使えるマグル生まれの魔法使いや魔女は違うんじゃない？」

小さいオスカーが聞きたかったのはこの部分なのだろう。それに、母親はどうして小さいオスカーがこんなことを聞いているのかだいたい察している様にオスカーには見えた。

「オスカー、魔法が使えるから魔法使いなのかしら？ 魔法族の子供だから魔法使いなのかしら？ それとも、魔法が使えないからマグル？ マグルの子供だからマグル？ 魔法も誰から生まれたのかも、その人には選ぶことはできないわ」

「選べない……」

それは今のオスカーにも分からない話だった。

「そうよね、お母さんも分からないわ。でも考えてないとダメなのよ。そうしないと傷つけあってしまうの。ずっとずっとそうだったの。違う人と違う人が会えばそうなるのよ。どっちがどっちではなくて、両方なの」

小さいオスカーは黙り込んでしまった。多分、何を言っているのかちゃんとは理解できていないのだろう。そしてこれも、今のオスカー

にもきちんと理解できているのか怪しかった。

「それに…… こういう話はお父さんには話してはダメよ？」

「なんで？」

「さっき言ったけれど、生まれや能力だけじゃなくて、考え方にも色々違いがあるの。お父さんはずっとマグルと関わってはダメって考えて生きてきたのよ。お母さんの元いた家でもそういう風に考える人もいたわ。だから、お父さんはこういう話は嫌いなものよ。でも、オスカーがどうするのかはオスカーが決めないとダメ」

「でも、さっき考えないとダメって……」

本当に小さいオスカーは混乱しているようだった。オスカーも、今の話を聞いて疑問を抱かずにはいられなかった。

「お父さんもお母さんも、他の色んな大人も色んな考え方をしてるんだけど、それは色んな事があつてそういう風に考えているの。でも、オスカーはまだまだ色んな事がある前よね？ まだこのお家と家の周りしか知らないわ。だから、お母さんやお父さんやペンズや、これから会う色んな人が色んな事を言うけど、その中で一番合う考え方を選べばいいの。それに嫌な話をされるのは誰だつて嫌でしょう？ お父さんだつてそういうなのよ」

「うん……」

オスカーには分からなかった。嫌な話だからと言って、話さないのが正解なのだろうか？ それとも黙っているのが正解？ 傷つけ合わないように考えているのにな？

「それにそういう考え方がどうしてそうなのかを自分で考えて、経験しないとダメなの。人に言われたからそうなのかじゃないの。人が経験して、考えたことが考え方になるけど、それをオスカーが自分で感じて、考えて自分のモノにしないとダメになってしまうの」

「難しそうだし…… そんなのできるの？」

母親が言っていることは小さいオスカーにはあまりに難しいことのようにオスカーには思えた。

「オスカーは運がいいから大丈夫ね。スリザリンは前からある考え方とか、他の人の経験なんかを自分のモノにするのが得意なの。これは

ちよつと難しい言葉で既知つて言うんだけどね。ただ、ちよつと新しいことに踏み出すのが苦手かもしれない。それにグリフィンドールは自分でやってみるのが得意だわ。でもこれは良く考えないつてこどももあるの。でも両方あれば、さつき言つてたことが両方できるのよ」

「両方？」

「お父さんはスリザリんで、お母さんはグリフィンドールなのは知つているわよね？ だから、オズカーは両方。自分や過去のことや、相手や新しいこと、その二つから色んなモノを感じて、自分のモノにできるはずなのよ」

オズカーはこんなことを母親と喋つたのを覚えていなかった。覚えていれば、オズカーは学校に入学したときや、今年、夏休みにトンクス先生や、ウィーズリーおじさんと喋つた時に思い出しただろうと思つたのだ。いくら小さい頃だつたとしても。

自分はいったい何を忘れていて、何を思い出しているのか？ オズカーには段々、分からなくなつていた。もちろんこの会話で小さいオズカーが聞きたいと思つていたことは全然別の話で、それしか覚えていないのかもしれないし、オズカーは事実それを頼りにこの記憶を憂いの篩に入れたのだ。しかし、今になつてもう一度聞けば、あのころ理解することもできなかった会話の方が、今のオズカーの心に深く残つたのだつた。

「だからお母さんはオズカーにグリフィンドール生みたいなことを教えるわ。それをどうするのかはオズカーが決めないとダメよ？」

「グリフィンドール生みたいなこと？」

「そう。お家と外の間にかかつている魔法は、お家から誰かがその間を越えてしまつていいる間は働かないのよ。だからその間なら、誰かを入れることができるの。それにこのお家の周りは魔法力を持たない人には近づけなくなつていいるのよ」

小さいオズカーはその話を聞くなり、大声でペンスを呼び出した。

「ペンス!! あれを持ってきてよ」

「オズカーお坊ちやま、どうぞ」

ペンスはバチツという音と一緒に現れて、小さいオスカーに小瓶に入った白いツツジの花を手渡した。それを貰うなり、小さいオスカーは走り出して、そのまま、玄関から外へと出て行ってしまった。

「ペンス、家の敷地の中からは、あなたは誰かに呼び出されないと出れないけれど、家の敷地の中ならどこでも見張れるはずよね？」

「はい。ご主人様が、外にわたくしめが出ると情報が外に漏れるとおっしゃった為、わたくしめはご主人様の命令が無ければ出れません。ですがお屋敷の敷地の中ならばどこでもお任せください」

「オスカーを見てあげて頂戴。やっぱり、戦争中とは言え、一人ではダメなのよ。それと、この事を貴方の主人の命令以外に自発的に喋ることを禁じます。ごめんなさいね。ペンス」

「もつたいないお言葉です。奥様。このペンスの命に代えましても、オスカーおぼっちゃまをお守りいたします」

温かい会話のはずなのに、オスカーが感じているのは恐怖だった。みんなさつき言った誰かの事を考えた行動をしているはずなのに、オスカーには破滅へのピースが刻一刻と揃いつつあるようにしか見えなかった。

母親が言ったグリフィンドールの特性の様な冒険は、文字通り、伝統的で保守的なスリザリンの特性が薄皮一枚で守っていた何かをいともあっさり打ち砕くことになるのだ。そうなるとオスカーは知っていた。なのに、どうしてそうなったのか、オスカーは思い出すことができないのだ。母親の言ったように、考え続けたり、向き合うためにそれが必要なのに、オスカーにはそれが思い出せなかった。オスカーはその土俵にさえ立てていなかった。

次の記憶は、オスカーにとって、一番世界が広がった記憶なのに、これまでの狭いけれども優しい世界が広がった世界と一緒に壊れる、始まりの記憶だった。オスカーにはそれが分かっていたし、それを見るのが言い訳ができないほど怖かった。

きつと、それはホグワーツ特急での出会いより、叫びの屋敷や、必要の部屋や、クリスマスや、まね妖怪や、ハツフルパフの寮や、大鏡

の裏よりもオスカーの世界が明確に広がった記憶だった。

だから見るのがずっと怖かったのだ。けれども、他のみんなは周りのみんなはきつとオスカーの様になっても、向き合うのだろうとオスカーは思っていたし、鏡の裏で記憶を見た後に、やっぱりオスカーは自分がまた情けなくなつたし、自分が許せないのだった。

また、森の端まで小さいオスカーは歩いて行って、平たい石の傍で待っていた。今日もまた来るはずだ。そう小さいオスカーは思っているに違い無かった。

ツツジの花や、小道の小石や落ちている枝を浮遊させたり、小さな蟻を操っていたりと、女の子は毎日の様にそこで魔法の力を試していたのをオスカーは知っていたのだ。

だから、何度も、何度も喋りかけたかったのだ。自分なら、もっと大きな枝や石を浮かべることや、もっと自由自在に虫を操ることだってできたし、力の加減を教えて、花を傷つけずに開いたり閉じたりだつてできるはずだった。

家の敷地、この森から出れさえすれば喋ることができるのに。間には一本の木しか生えていないのに、小さいオスカーにはその禁を母親に背中を押されるまで破ることが出来なかったのだ。

じつと木の間から、小さいオスカーは花の入った小瓶を握りしめて待っていた。オスカーにも、期待と不安で入り混じって、汗で滑りそうになっている手の感覚が伝わってきそうだった。

やっと、マグルの学校で使うらしき手提げかばんを持って、女の子はこつちへと歩いて来る。ただ、小さいオスカーには気づけなかったのかも知れないが、今、オスカーが見れば、女の子の目はちよつと赤くなっていたし、少し、唇を噛んでいる様な表情だった。

けれども、この時のオスカーにそれを気づけと言うのは無理な相談だっただろう。彼も彼で一杯、一杯だったし、やっと話せるという期待と不安で満たされていたのだ。

女の子は平たい石に座るなり、思いつきりカバンを地面に叩きつけた。その衝撃でカバンの留め具の部分が壊れてしまい、女の子は自分でやったことなのに焦っている様だった。

小さいオスカーの方も、何か機嫌が悪そうに見える女の子を相手にどうしたらいいのか分かっていないようだった。

ガチャガチャと必死に留め具の部分をいじったりして、女の子は直そうとしていたが、それは全く上手くいきそうになかった。それを女の子も感じたのか、ますます泣きそうな顔になった。

「なんで魔法を使わないんだ？」
「誰？」

女の子は突然声が聞こえてきたことにびっくりしている様だった。文字通り、座っているのに飛び上がりそうな勢いだった。しかし、小さいオスカーの方はそんなことなどお構いなしに木の間から出ていって、女の子のカバンを取ろうとした。

「ちよつと、これは私のカバンだよ。それにいったいどこから出てきたんだ？」

「いいから、直らないと不味いんじゃないのか？」

「それはそうなんだけど……」

カバンを掴む女の子の力が緩むなり、オスカーはそれをひったくった。そして、少し集中した顔をして、手をカバンの留め具の部分にかざした。

すると、ゆがんではまらなくなっていた部分がゆっくりと元の形になって、オスカーがはめようとすればぴったりとはまり、カバンを閉じることができた。

「ほら」

「これ……これ……これ…… いったいどうやったんだ!!」

それを見た女の子はまさに驚天動地と言った顔で、何度も何度もカバンを閉じたり開けたりした後、カバンを持って、小さいオスカーの方に迫った。

「何って、えつと…… お前…… 君？ もやってたじゃないか、ここですつと」

「ここでずっと……?? もしかして、私がここで、あの超能力を使うところを見てたってことなのかい?」

「超能力? なんだそれ、あれは魔法だ」

「魔法? あのちよつと浮かしたり、虫が行く方向を操るのが魔法?」
信じられないという顔で女の子は自分の両手を見た。そしてその後、小さいオスカーに近づいて、両手で肩を持った。

「じゃあ、じゃあ、じゃあ、あれはホントにある力で、嘘じゃない?」

私が嫌な髪型にされたときに勝手に髪が戻るのも、迷子になって泣きそうなきにいつのまにか自分の部屋に戻ってたのも魔法? 私はおかしくない?」

「おかしいわけないだろ、まあマグルがどんな風に魔法を考えてるのなんか僕は知らないけど……」

まだ女の子は夢心地の様だった。目の前に突然現れた小さいオスカーの存在も、魔法の存在も信じられないようだった。

「えつと…… じゃあ…… 何か見せてよ。さっきの直したのでもいいけど…… 何か魔法をもつと見せてよ」

「これ…… 僕が最初に…… 君を見た時に…… 魔法を失敗して、落として行ったんだ」

小さいオスカーはおずおずとローブのポケットから、ツツジの花の入った小瓶を取り出した。女の子は信じられないモノを見る目でそれを見ていた。

「それ、私が失敗して、バラバラにしちやつたやつだ……」

「魔法を見たいんだろ? 僕はまだ、父さんや母さんみたいに杖が無いから、爆発呪文とか、姿くらましとかは使えないけど…… これくらいならできる」

手に持っていた小瓶を小さいオスカーは思いっきり、地面に叩きつけた。小瓶は地面に当たって、バラバラになり、白いツツジもまたバラバラになった。

「こういうのは…… 結構、頑張らないとできないんだ。杖があれば簡単なんだろうけど……」

難しい顔で小さいオスカーが手を小瓶を叩きつけた場所に向ける

と、まずバラバラのガラスの欠片になった小瓶が小道の色んな場所から浮かび上がって元の形を取り直した。

バラバラになった白いツツジの花も、最初に円を描くように花びらだけが空中で回っていた。その後、がくの部分が下からやってきて、そこに回っていた花びらが順番にくっついていった。

女の子は目を丸くして、その花が形を取り戻していくのを見ていた。最後に元の形になった花が女の子の手の上に落ちた。

「凄い!! 凄い!! ほんとだった。手品じゃない!! 私はおかしくなかった!! 先生やお父さんやクラスのみんなの方がおかしかったんだ!! ねえ、ねえ、君はなんて名前なんだい?」

「お、オスカー…… オスカー・ドロホフだけど……」

「じゃあ、オスカーでいいんだよね? 私は●●●●!! ねえ、いったいどこからでてきたんだい? それになんで私を見てたのに何も言ってくれなかったんだ? それに、それに…… とにかく、一杯聞きたいことがあるんだ!!」

女の子の剣幕に押されながら、小さいオスカーは色んな質問に答えていた。オスカーは知っていた。いつも母親に帰れと言われている時間を過ぎても帰らずに、日が落ちるまで、ずっと平たい石の上に座って二人で話込んでいたことを。

オスカーは生まれて初めてその時、家族以外の誰かと喋ったのだ。生まれて初めて、自分と同じ年の子供と喋ったのだ。初めて、喋りたいたと思った人間と喋ることができたのだ。初めて、大人や自分を見守る相手でない人から魔法を認めて貰ったのだ。

家族以外の誰かに魔法を見せたのも、魔法で笑って貰ったのも、同じ年でこんなにも世界が違うことも、何もかも、全てが新しく、何かが広がっていく気がしたのだ。

それはオスカーが忘却術から一番最初に思い出した記憶だったはずなのだ。彼女に杖を向けた記憶よりも先に。なのに、オスカーはレアの記憶を見るまで、それを見る勇気が湧かなかった。それが何よりも、今のオスカーの世界を締め上げている様だった。

ワンドレス・マジック

まだ入れた記憶を全て見てもいないのに、オスカーはスネイプ先生の研究室へと戻って来た。冷たい石畳の感触と薬の様な匂いがオスカーにも感じられたが、それ以上に自分の体を血が巡っている気がした、それなのに、オスカーの頭の中には何か悪い血が溜まっていて、出ていかない気がするのだ。

「まだ、時間ではないが、もういいのかね？」

セブルス・スネイプがオスカーの方を向いてそう言った。相変わらずオスカーの目には合わせようとしなかったし、土気色の顔からは何も感じられなかった。

その顔を見て、オスカーの中に果たして目の前の感情の無さそうな人物にも、今の自分と同じような自分の中にある何か、自分の中をえぐり取ったり、自分の中から外への動きをがんじがらめに固めている様な感覚を感じるのか？ そんな疑問が巻き起こっていた。

「スネイプ先生…… スネイプ先生は……」

「何かね？ ミスター・ドロホフ？」

何と言えばいいのか？ スネイプ先生、あなたは私の様な経験や感覚をしたことがありますか？ とでも聞けばいいのか？ オスカーには言葉が出てこなかった。

「いえ…… なんでもありません」

「ふむ…… ではここままでいいかね？ やる前に言ったかもしれないが、我輩も暇ではないのだ」

「はい……」

オスカーはスネイプ先生に挨拶して研究室から出ようとした。まだ、頭の中ではずっとモヤモヤしたものが回っている気がしたが、少なくともこの少し陰気染みた場所にいるよりはいい気がしたのだ。

「ああ、それにミスター・ドロホフ。君とミス・マツキノンの次の相手だが…… あの生ける屍の水薬は少し期限が過ぎていたようだ。ほぼ確実に彼らは次までにベッドから起きることはできないだろう。それを考慮に入れておきたまえ」

「分かりました。失礼します……」

スネイプ先生からすればいい情報としてオズカーに与えたのかもしれないなかったが、オズカーの頭の中には全然入っていなかった。オズカーの頭の中に浮かんでいるのは、スネイプ先生の研究室の中にあつた沢山のガラス瓶から連想される、さつき見たばかりのガラス瓶とその中の花だった。

レアと練習するのは午後だったし、大広間で昼食を食べるにもまだ時間があつた。ただ、座つていても、オズカーは気分が晴れそうなかれでも無かつたので、とにかく城の中を歩いていった。

授業の無い日なので、学生たちが行く場所は各寮の談話室や、クイデイツチの練習場、暖かいころなら黒い湖、ふくろう小屋、それに中庭なんかに限られているはずなのに結構な数の生徒とオズカーはすれ違った。

赤、緑、青、黄と色んなローブを着た生徒とすれ違う。ほとんどが同じ色のローブを着た集団だが、時々違う色の組み合わせもあった。

ホグワーツ特急でやって来た時から、オズカーはできるだけ考えない様にしたつもりだったし、そもそもホグワーツでの生活は家の中と違って、目まぐるしく色んな人がいたので考える暇が与えられないのもあつた。

つまるところ、あの出来事がある前、オズカーがホグワーツについて考える時に一番心配だったのは寮のことだった。出来事の後にはホグワーツ特急で考えていたように、どの寮でもどうでも良くなつていたが、出来事が起こる前は違つたはずだった。

簡単な話彼女と話して、色んな事を知って世界が広がる度に、色んな違いがあるのが分かつていて、同じ寮になるのは難しいのではないかと思つていたので。

それが実際にホグワーツに来て、違う寮の人と仲良くなればなるほど、そういつたことが無ければ……　つまり……　オズカーはそれを認めるのも嫌だったし、考えたくなくなつたし、誰かと一緒に歩いていく時にそんなことが頭に浮かんでくるのは、自分以外の誰に対しても

失礼で、頭の中が最悪な状態になるのだった。

「貴方は…… こうして会うのは久しぶりですね。レアと貴方は決勝まで残れたようで、なによりです」

「灰色のレディ？」

あてもなく歩いているうち、オスカーはタペストリーの裏にある秘密の通路にまでできていた。いつぞやにトンクスを隠した通路と同じ場所には、それと同時期に喋った相手がいた。

「その通り。スリザリン寮の少年。しかし貴方は二年前よりも色んな場所で噂になっていきますね。それはゴーストの間でも同じことです。本来なら私もレイブンクロウの寮生としか基本的には喋らないのですが……」

オスカーには灰色レディがこれ以上に無く、話をするにいい相手だと思えた。正確には血みどろ男爵の方が合っているかもしれないが、ゴーストになってしまい、謝る相手がもういない灰色のレディはまさに何かを聞いてもらうに一番いい相手だと思えたのだ。

「レディ、質問をしてもいいですか？」

「貴方は髪飾りを戻してくれました。二度と誰もが惑わされない形で。だから私に答えられることなら答えましょう。それは貴方はもちろん、レアやスリザリンの少女のためにもなります」

目の前の真珠色で半透明のゴーストは、英知の代名詞として知られる偉大な魔女の娘だった。オスカーは一度、本当にどうしようもなくなる寸前で彼女の知識に助けてもらったのだった。

「凄く失礼なことかもしれないんだけど……」

「私は、ヘレナ・レイブンクロウは一度や二度の非礼を許すほどには、貴方に感謝していません。オスカー・ドロホフ」

まさにオスカーが聞きたいことは、目の前のレディが感謝しているモノと一緒に違いなかった。彼女の後悔の象徴こそ、あの髪飾りに違いなかった。

「えーと…… その、もう取返しが見つからないけど…… 謝りたいとか、自分をどうにかしたいと思った時に…… いったいどうしたら良いのかを…… 俺は聞きたい」

ヘレナ・レイブクロウの半透明の目がオスカーを捉えた。誰かに良く似たその顔には、隠しようのない賢さが表れているようにオスカーには見えた。

「賢さ…… いえ、頭の良さは必ずしも人を幸せにはしません。それは、忍耐、勇気、機智全てに同様に言えることです。それらを人よりも持つ者は、それらによって人とは違う何かを世界に見出すことでしょう」

ヘレナが言うことは誰かと同じで、少し抽象的でわかりにくかった。しかし、オスカーは経験的に後になって、そういつたことが一体どういう意味を持っていたのかが分かることを知っていた。

「私が言えることは、貴方の感性、感情、論理、痛みは貴方だけのモノであるという事です。全てが貴方を創り、貴方に影響を与え、貴方を変えていく。貴方が貴方の外の何かを感じるのも、貴方の中の何かを感じるのも、そして貴方が感じている何かに対する答えも、貴方が求めて、納得しなければならぬ」

■ 貴方、あなた、アナタ、貴方…… 何度も繰り返されるその言葉に、オスカーの頭の中は混乱していた。

「自明のことですが、確かに今の貴方の中に答えは無いのかもしれない。しかし、答えは貴方が見つけなければなりません。誰かに尋ねるのも答えを聞いているのではなく、貴方自身の中にあるモノに対して、貴方が見つけようとしている何よりの証でしょう。そして、それは私の様な現世に残った哀れで惨めな残光ではなく。今を強く生きている近い人に求めるべきでしょう」

つまり、私に聞くなという事なのだろうか？ 遠回しに聞くなと言われている？ だが、目の前のヘレナがこの状況でそんなことを言うとはオスカーは思えなかった。

「もし、ゴーストや肖像画達に流れている噂が確かならば、貴方の傍には、英知、忍耐、機智、勇気のどれか、若しくはその全てが必要だったとしても、求めることができ、答えに近づけることができることだと思います。そして、それは互いを照らし、燃やすモノで、若ければ若

いほど、強く働き、新しいモノを形作ることでしよう」

近くに求めろ？ 答えに近づく？ いくらなんでも抽象的過ぎて、オスカーには分からなかった。オスカーが求めているのはもっと具体的で、直接的なモノだった。

「この様な問いを学生から貰えるのも、貴方の様な若い魔法使いがそういういったことを他の魔法使いや魔女と探すことができるホグワーツであることも、私はとても嬉しい。一千年たっても、四人が形作ったモノが、貴方達を支えていることが私は嬉しい」

四人？ それがホグワーツの創始者の事を指しているのはいくらオスカーでも分かった。でもそれが支えている？ オスカーの頭の中がクエスチョンで一杯なのに、ヘレナの顔はどこか嬉しそうだった。

「貴方が答えを見つけることも、トーナメントで活躍することも、私はレイブンクローの寮霊ですが、両方とも祈っています」

レイディは言うだけ言うとそのままどこかへ消えてしまった。オスカーは文字通り、霧に包まれた様な気分だった。さつきまでのまるで頭の中に悪い血が溜まっている様な感覚こそ無かったが、今度はまるであてもないどこかへ飛ばされた気分だった。

「あの…… オスカー先輩は女の人だったら、ゴーストでも人間でもなんでもいいんですか？」

「ジエマ？ 聞いてたのか？」

「いや、最後のレイディの応援してますしか聞いてないんですが、灰色のレイディってレイブンクローの人としか喋らないって噂なのに……」

今度はタペストリーをくぐってジエマがいつの間にか、オスカーの後ろにいた。オスカーは前回のマートルと言い、何かゴーストとジエマはセットになっているのだろうかと考えてしまった。

「そもそも、こう、キメラに勝ったんだからその勢いで一気に行っちゃったりしなかったんですか？ 二人とも試合が終わったあといなくなっていて、二人で帰ってきたし……」

「キメラ？ あのあとはスネイプ先生の研究室に呼ばれてたから……？ そもそも何の話なんだ？」

ジェマは相変わらず何かを考えているようだった。いつもオスカーとエストの間の様子を見ては、ジェマは何かを考えている様だったし、その様子が、トックスがオスカーとクラーナが一緒にいる時にする雰囲気とどこか似ている気が、オスカーはしているのだった。

「やっぱり、一線を越えればもうどうにでもなるって、お母さんが言っていたので、私もそうなるように動こうと思うんですけど、どうですか？」

「はあ？ 一体何の話なんだ？」

「どうせ向いてる方向が一緒なら、むりやり一回くつつければ、もう二度と離れないと思うんです」

さっきのレデイと話を同じくらい、ジェマが何を言っているのかオスカーには分からなかった。

「スリザリンはちよつと規則を破るって聞いたし…… 一回やってみます。そうしないとどんどん先輩以外のつながりが増えていく気がするんです」

「そ、そうか……」

ジェマは自分の手にもう一方の手をポンと置いて、何かを決意したようだったが、オスカーは何か気苦労が絶えないことが起こる前と、同じ雰囲気を感じてしまった。

「じゃあ、ちよつと仲間を募ってきます」

「そうか、頑張れ。ジェマなら監督生でもなれると思うぞ」

そのまま、ジェマはどこかへ行ってしまった。オスカーは余り、ジェマに対してどう対応したらいいのかは良く分かっていなかった。そもそも年下の相手というのをウィーズリーの兄弟やレアくらいしか相手をしたことが無かったし、特にエストになつきつつある様子のジェマに対しては良く分かっていなかった。

レデイにジェマとどっちもまるでオスカーの話を聞かずにどこかへ行ってしまったようで、オスカーの頭の中は五里霧中という感じだったが、少なくとも、スネイプ先生の研究室を出た時よりはよっぽどマシな状態にはなっていた。

エストとオスカーがスリザリンのテーブルで昼食を食べ終わるころ、レアがスリザリンのテーブルまで近づいてくるのが見える。最初の頃に大広間の外でオスカーを待っていたことを考えると、オスカーは何となくレアが変わっている気がした。

「なんですか、レアってスリザリンのテーブルに来るような性格でしたか？ やっぱり、オスカーなんかしたでしょう」

「クラリーナ、来てもらって悪いけど、まだエストは食べてるの」

「エストはいつも食べるのが遅いんじゃないかって、馬鹿みたいに食べてるだけですよ。トンクスにさんざんデブになるって言ってきたけど、正直エストの方が……」

「クラリーナ、練習ではあんまり消耗したくないけど、決闘なら受けて立つの」

オスカーは何となく、エストとクラリーナの関係も少し変わってきている気がしていた。もともとちよつとだけ間があつた二人の空気が段々と埋まりつつあつた気がしたのだ。

「だいたいクラリーナはあんまり食べないから、ちよつと小さいままなの。もうちよつと食べないと」

「うるさいですよ。姉さんや母さんも小さかったんですから、これはどうしようも無いんです」

「まあ体が小さいと酒は不利だけど、決闘は有利だよな」

そうオスカーが言うと、クラリーナとエストがオスカーの方を見てきたので、オスカーはちよつと落ち着かなくなつた。しかし多分、クラリーナの酒に関して一番ダメージを受けているのはクラリーナを除けばオスカーだった。

「オスカー先輩、あ……先輩方……」

「レアは身長がでかくていいですよ。さぞお酒も強いんでしょう」

「いきなり言ってもなんのことか全然わかんないの」
「お酒……?？」

オスカーとトンクスはレアとバタービールがなんとなくイメージでつながっていたが、エストとクラーナはそうではないはずだった。

「そうだ。明日のホグズミードは一回、ホッグズ・ヘッドに行かないか？ アバーフォースさんに挨拶したいし、ああ、ファイア・ウイスキーは無しでだけど」

オスカーがそう言うと、クラーナが頬を膨らまして睨んできた。そう言えば、クラーナとチャーリーのグリフィンドールの二人は、余りアバーフォースと喋ったことは無いはずだった。

「確かにいいかもしれないの。普通にバタービールを飲めばいいんだし」

「そうですね。別にわざわざファイア・ウイスキーがどうか言わなくても大丈夫です」

「ファイア・ウイスキー??」

「じゃあ、チャーリーとトンクスにも会ったら言つといてくれ」

今日は授業が無い日だったが、オスカーは部屋から持ってきていたカバンを持って立ち上がった。このままだと延々とクラーナと酒に関する話が続きそうだったし、まだエストのスクランブルエッグは結構な量が皿に残っていた。

オスカーがそのまま入り口の方へ足を進めると、レアは何やら沢山本が入ってそうなカバンを持って慌ててついでにきた。青いローブを着た一団が座っているテーブルから、何人かが多分レアに向かって手を振っていた。

「どんだけ一杯本が入ってるんだ？ 持つか？」

「いえ、自分で持ちます。図書館から、杖なし魔法。ワンドレス・マジックに関する本を借りられるだけ借りてきたんです」

五階に続く階段を上りながら、レアはひいひい言っていた。見た目通り、そのカバンは随分と重そうだった。

「だから持つか？」

「自分で持ちます…… 上級生に言つて、閲覧禁止の棚からもちよつと借りてきてもらったんです」

閲覧禁止の棚…… 特にマダム・ピンスが神経質になっている棚の事だとオスカーは覚えていた。一年生の頃、ポドモア先生がエストに言われるままにサインして、普通に貸し出して貰っていたので、あんまりレアな感じはしなかった。

これ以上言つてもレアはオスカーにカバンを渡しそうには見えなかった。二人はそのまま五階の大鏡まで歩いていった。

もうオスカーは通路の中の燭台に火を灯すのにも慣れてしまった。鏡の裏の秘密の通路は、初めて来たときよりも、複製の呪文で作った燭台でより明るく、暖かくなっていたし、変身術で作った椅子にはいつの間にかクッションが置かれて、机の上にはアバーフォースが送つて来たバタービールや、山盛りの百味ビーンズが置かれていた。

二人はとりあえず、閉心術の練習を始めた時と同じ様にレアが持ってきた本を広げた。

「あんまり、ホグワーツにもワンドレス・マジックに関する本は無かつたんですけど……」

「これだけ本があるのにか？」

「これは…… レイブンクローの先輩に何か昔、ワンドレス・マジックに関して論文を変身現代に投稿しようとした人がいて…… その人が参考にした本を借りてきたんです」

「凄いな、その人はワンドレス・マジックを使えたのか？」

変身現代…… オスカーはその名前を見たことも聞いたこともあった。ときどきエストが面白い記事があったと聞いて、購読していたり、何より…… クラーナのことを新聞記事に載った時にもその雑誌の名前が載っていたからだ。

「うーん多分使えないと思うんですけど……」

「多分？ 卒業生なのか？」

「はい、なんかザ・クイブラーっていう雑誌に今は色んなモノを発表しているらしくて……」

レアはちよつと自信なさげに一冊の雑誌を机の上に乗せた。ザ・クイブラーと書かれたその雑誌には『コーネリウス・ファツジ大臣とグリーンゴツツ上層部の小さな共謀。 聖二十八の一族？ 魔法族はどこから来たのか？ ケンタウルの雌はどこにいるのか？』など良く分からない見出しが大量に書かれていた。

「あの…… ボクもこの雑誌はちよつとなんていうか、適当と言うか、怪しい雑誌だとは思うんですけど。このラブグッドさんって言う女の人が書いてること自体は多分、そんなにはおかしく無くて……」

「俺たちの問題はワンドレス・マジックだし…… ケンタウルの雌はまあいいだろ、チャーリーかケトルバーン先生に任しておこう」
「は、はい」

二人はザ・クイブラーは放っておいて、図書館から借りてきた本に目を通し始めた。本の内容はそのほとんどが、杖や箒といった魔法使いや魔女が使う道具の必要性について書かれていた。

「魔法力は大抵の場合、荒れ狂う炎として表現される。我々の内にある混沌としたそれをコントロールし、世界に魔法として顕現させるのに我々は杖を使う。杖はヨーロッパで発明されたモノであり、魔法力をコントロールする道具として今では世界で受け入れられている」

オスカーは本の一節を読んで、自分の杖を見た。確かに、幼少の頃に必死で集中して行った魔法よりも、よっぽど強力で複雑な魔法を使うことができていた。

「えつとこつちには…… 杖を使わぬ複雑な魔法の代表例は動物もどきと魔法薬である。また、杖を使わぬアフリカの魔法使いや魔女は、ヨーロッパの魔法使い以上に動物もどきに精通し、単純な魔法、呼び寄せ、衝撃、炎、水といった魔法程度ならば平均的な魔法使いでも杖なしで行うことが出来る。これらは彼らが機密維持法で訴えられた時の予防線として使われる…… アフリカの魔法使いは使えるって

書いてあります」

杖は必ずしも魔法使いに必要なというの、オスカーにとって新しい目線ではあった。ただ、オスカーは今自分の杖腕にある杖なしで、ここまで来ることができるとは思えなかった。

「単純な魔法くらいなら使えるってことか？ うーん…… レアはその…… 小さい頃に杖なしでも魔法を使ってたよな？ あれっていつの間にか使えなくなってたか？ 俺もいつの間にか意識しない間に使えなくなってる気がするんだよな」

「そうですね…… ボクもいつの間にか使えなくなってる気がします。まだあんまり試してないんですけど……」

「とりあえずやってみるか」

オスカーはとりあえず、小さい頃やった様に、何かを手を触れずに動かすことをやろうとした。テーブルの上に乗っているバタービールのビンを動かそうとしたのだ。

レアもオスカーの様子を見ている様だった。オスカーがバタービールのビンに視線を集中して、フリペンド、衝撃呪文を使うイメージで吹っ飛ばそうとすると、なんとバタービールの中身が凍ってしまった。

「凍った？ うーん、変身術の授業の時に水をワインに変えようとして沸騰させた奴なら知ってるんだけどな」

「何をしようとしたんですか？」

「吹っ飛ばそうと思ったんだけどな、頭の中で無言呪文みたいにフリペンドを唱えるイメージでやったんだけど……」

こう見えても、オスカーはホグワーツで習う呪文や変身術に苦労したことはほとんど無かった。唯一の例外は守護霊の呪文くらいだったが、隣にいつもエーストがいることもあって、習った呪文を授業中にできないなどという事はほとんど無かったし、覚えた呪文を失敗するという事もほとんどしたことが無かった。

「ボクもやって見ます。ちょっと呼び寄せるイメージで……」

レアもさっきのオスカーと同じ様に、凍り付いたバタービールのビンに視線を集中させ、手をかざした。すると今度は粉々にビンが砕け

散った。

「なるほどな…… 小さいころと何が変わったんだろうな？」

「変わったこと……」

オスカーがレパロでピンを直しながら言った。何かがホグワーツに入る前とは変わっている様だった。昔なら、少し動かすくらいのこととは簡単にできるはずだったし、今やったレパロの呪文でさえ、杖無しでやることだってできたのだ。

「オスカー先輩は…… ボクと違って、ホグワーツに入った後、多分苦労せずに杖で魔法を使えましたよね？」

「そうだな、エストやクラーナがいたから凄いできるって実感は無かったけど、大抵の呪文は使えたし、昔、杖を買って貰ってない時に習った呪文。盾とか爆発呪文みたいなのも一年生の時には使えたな」

■ もとに戻ったバタービールのピンを見ながら、レアはまるでそこに無い髪をいじるようなしぐさを右手でしながら何かを考えているようだった。

■ 「難しい呪文って…… なんか、ボク、イメージがしにくいんだと思ってるんですけど……」

「イメージがしにくい？」

何かエストの様なことをレアが言い出した様にオスカーは感じた。一緒に授業を受けている時、オスカーは良くこんなことをエストから言われることがあった。大概、この後にエストは自分で勝手に納得してしまうのだ。

「モノを浮かばせる。灯りを灯す…… ボクはそういう一年生で習う呪文って、凄い分かりやすくって、想像しやすい魔法だと思うんです」

「確かにそうかもな」 ■

「それで…… 難しい呪文、それこそ守護霊の呪文って、そもそも自分の守護霊が何かって分からないし、何をするものなのかも分かりにくいし、幸せの記憶ってなんなんだってボクは思ってたんだ」

思わずオスカーはレアの顔をまじまじと見てしまった。レアはし

ばらく考え続けていてその視線にも気付かなかったが、ずっとオスカーがレアを見ていると、流石に気付いたのかちよつと赤くなった。

「い、今のは……」

「いや、そのまま続けてくれ、マツキノンのお姫様」

「や、やめてください……」

多分、記憶や最初に出会った時の口調を考えると、レアはこっちが素なのだろうとオスカーは思った。本来はオスカーの周りにいる誰より強気な口調で喋っていたに違いなかった。

「お、おほん…… それで…… あんまりうまく説明はできないんですけど、杖を使ってもイメージがしにくい魔法は難しいんだと思うんです。無言呪文が有言の呪文より難しいのはイメージが不確かになる…… 口の動きと連動して記憶の中のイメージを引き出すのが無くなるんだから……」

オスカーはなんでレアがレイブンクローなのかだいたい分かってきた。感情の振れやすさも、恐らく何かを考え始めると、とめどなく考え続けることから来ているのではないかと考えると納得できたのだ。

「何か言いたいのかと言うと…… ボクたちはもう、杖でのコントロールに慣れてしまっているから…… 杖でのサポートを前提とした魔法力の出し方が、頭の中のイメージと結びついてるんじゃないかと思うん…… です……」

一通り言い切るとレアはちよつと眉を下げ、不安そうな顔でオスカーの方を見た。

「え、えつと…… ボクの話……」

「そうだな。エストとこういう感じで話をする時、よく例えて話をするんだけど」

「エスト先輩？ たとえ？」

「うーん、例えば…… 杖を使ってる時はクラリーナの体で、使っていない時はハグリッドの体だとすれば。ホグワーツからハグリッドの小屋

まで歩くのに何歩歩くかのイメージって全然違うよな？ それで、俺たちはこの場合はクラーナの歩幅に慣れてるから、突然ハグリッドの歩幅になったら、何歩歩くかのイメージが出来なくて、ハグリッドの小屋はとっくに通り越して、禁じられた森や、ホグズミードまで行ってしまおうとかそういうことだよな？」

「そ、そうですね。だいたいあつてると思いますが……」

レアは話を通じたと思ったのか、ちよつと息を吐いて安心した顔だった。オスカーの方はレアの立てた仮説は結構正しいのではないかと思った。つまり、杖が無い時のイメージを取り戻さないとワンドレス・マジックは難しいのではないかという事だ。

「オスカー先輩は…… エスト先輩とこういう感じの話をよくしてるんですか？」

「こういう感じってのはあんまりよく分からないけど…… そうだな、だいたいエストがなんか考えてて、いきなりこれってこういうだよね？ みたいな感じで言ってくるな。それで何か勝手に納得したり、お互いに考え方が合ってるのかを確かめようとして、何かに例えて言ったりすると、そういう見方なんだ…… とか言ってる感じがするな」

「そういう見方…… なるほど…… 速さ？」

レアはオスカーの言葉を聞いてぶつぶつと言っていた。オスカーはやつぱり、結構エストとレアは似たようなところがある気がしていた。言い出すと止まらないあたりはチャーリーも近いかもしれないが、何となくあつという間に何かに対して意識が深く潜っていつてしまつてるところに似た色を感じていた。

「ボク、結構、レイブンクローでも誰かと話すときに話が飛んでしまうと言うか、多分、最初の話題からそれに対する何かの答えまで一気に言つてしまつて…… みんなでいる時は誰かがだいたい分かってくれるんですけど……」

「さっきの何々なんだ。つて言う、昔のお姫様の口調が出たらそう思えばいいのか？」

つまり、やつとレアはオスカーの前でちよつと慣れてきたという事

なのかとオスカーは思った。やっぱり、初対面の時の対応から少し壁があつたのだろうかとおスカーは思っていた。

「そ、そういうのじゃなくて…… その、オスカー先輩はすぐにちゃんと理解して返してくれるから…… ボク、ボクはどう言ったらいいのか…… そのなんか会話してて、安心というか、気持ちいいんですけど…… 考えがなんかストップしないから…… でも、その相手からするとどうなのかと思って……」

「そんなのは心配しなくていいと思うけどな。エストはもつと自分のペースで喋るし、チャーリーは何でも魔法生物の話に持っていくし、クラーナはなんか容赦が無いし、トックスは意味の分からない方向へ飛んでいくし…… それに、レアがそういう風に考えてるときって、さっきのワンドレス・マジックの話もそうだけど、真剣に考えてるときなんだろう？」

「あ…… はい……」

レアは今度は口をぽかんを開けて、目を丸くしていた。オスカーの方は、レアだけでなく…… レアと同じようなプロセスで考えをしていそう…… エストやさつき喋ったばかりの灰色のレディも、そういう風な感覚を喋っている時に感じているのだろうかと思った。それに、さつき言った他の三人もそれぞれが喋るときに違った感覚を得ているのだろうかと思ったのだ。

「ただ、とりあえずさっきの話が本当なら、俺たちは杖無しで魔法を使ってみて、感覚を取り戻すしかないかってことなのか？」

「そうだと思います…… 杖を使って魔法を使う感覚と、杖無しで魔法を使う感覚が両立するのは分からないんですけど。小さい頃の…… モノを飛ばしたり、扉を開けたりくらいなら頑張ればできるんじゃないかと」

「やって見るか」

「はい」

その後、オスカーとレアの二人は百味ビーンズをうんうんと言つて動かしてみたり、燭台の炎を消そうとしてみたり、色々やってみた。

しかし、結局、これにはかなりの時間がかかりそうだったのと、閉心術の練習も疲れたが、この練習も信じられないくらいの集中力が必要だった。

それにオスカーは何か違和感と言うのか、これまで杖という自分の外にある、厳格で理性的なルールで実行していた魔法を、自分の中にある、荒れる感情的な生まれのままの魔法力で再現するというのは何か、一緒の事をしているはずなのに、根本的に何かが違う気がしていたのだ。

自分の中のイメージと意識…… 論理だけでは魔法力をコントロールできない、そんな感触がオスカーにはあった。

結局二人は、結構な遅くまでやっても、大してワンドレス・マジックの進展は無かった。

「とりあえず今日はこんなもんだろ。次の試合は多分俺らは無いだろうから、まだ時間はあるしな」

「はい…… ただ。もし不戦勝なら決勝に行っちゃいますよね？ まだ一回しか試合をしてないのに……」

「まあどうにかなるだろ。キメラが出てくるわけじゃないしな」

「エスト先輩とクラーナ先輩が相手だと、キメラよりも勝ち目が無いかもしれない……」

実際、オスカーもキメラの相手と、エストとクラーナのペアの相手、どちらもできるだけしたくは無かった。それにいくらシードとは言え、試合回数が少なすぎだった。戦闘の経験や勢いだって試合には影響するはずなのだ。

帰るに当たって、レアが相変わらず大量の本をカバンに入れようとしているのを見て、オスカーは自分のカバンを差し出した。

「こっちにいくつか入れといてくれ。こっちならあんまり重さは関係無いから」

「えっ？」

「図書館の本で期限が決まってるなら俺が返しといてもいいし、時間があるなら練習の前に行ってもいいしな。ダメか？」

「い、いえ…… ボクもどれを読んだらいいのかあんまり分かってな

「いので……」

「次の練習までに何冊レアなら読めるんだ？」

「えっと…… 今週は変身術と古代ルーン文字のレポートがあるから…… 二、三冊？」

オスカーは三冊残して、他の十冊くらいの本をオスカーのカバンに放りこんだ。近いうちにオスカーはエストに検知不可能拡大呪文を教えて貰おうと思った。

「レイブンクローの英知を借りとくよ。あと、灰色のレデイにあつたらありがとうつて言つといてくれ。午前中に会つてちよつと喋つたんだ」

「あ…… レデイ？ 分かりました……」

確かに、灰色のレデイの言う通り、オスカーは自分の周りに色んなモノがあるのかもしれないと思った。それと同時に、一体、オスカー自身は周りにとってはどんな色を持った存在に見えているのか、そういう考えもいつの間にか生まれていた。

忘却術

強烈なヤギの臭い、相変わらず、この場所の臭いは何も変わってはいなかった。オスカーは珍しく一人でホッグズ・ヘッドに向かった。エストとチャーリーにはクイディッチ用具店に行つてから行くと言われたし、クラーナはふくろうの郵便局、レアとトンクスはどうも寮の友達と遊んでから来るとのことだったからだ。

ほこりがまるで土間の様に踏み固まれたホッグズ・ヘッドの中にオスカーは足を踏み入れた。相変わらず、顔を外に出したくない人たちが何人か、洗っているのか分からないグラスで多分オスカーが想像しない方がよいモノを飲んでいた。

「アバ……」

「何人だ？ 何人できた？」

「えつと…… 全員で六人来ます」

「上にながれ」

アバーフォースと名前を言い終わる前に、オスカーは前に二度くらい来た上の階へと案内された。暖炉と…… 女の子、アリアナの肖像画が置かれている部屋だ。

「先に置いとくぞ。無くなつたら取りに来い」

「あ、アバーフォースさん。俺のところに贈られてきたバタービール……」

「そんなもんは知らん」

バタービールのビンを一ダースほど置くと、アバーフォースはそのまま下へと行ってしまった。多分、またあの洗ったことがあるのだからないぼろ雑巾で、汚いグラスを拭きに戻ったのだろう。それにオスカーがお礼を言おうとしても、アバーフォースは贈ったことすら認めない気の様だった。

最近、みんなが集まることも少なくなっている気がオスカーはした。せつかくのホグズミード休暇なのに、オスカーは一人でバタービールのビンをあけて、レアから借りた本を広げていたし、それを見ているのは虚ろに笑っているアリアナだけだった。

こつちに笑いかけてはくるが、喋ろうとはしないアリアナを見て、オスカーはアバーフォースは一体どういう気分で彼女と一緒にいるのだらうと思った。レアをエストと呼び戻しに来た時の話が全部本当ならば…… 何かしつとりとした考えを巡らせようとしていたオスカーの集中を、下から聞こえてくるドタドタした足音が切らせた。こういう騒がしさを運んでくるのは誰なのかをオスカーは良く知っていた。

「うわ。オスカー一人？ 一人で飲んでるの？ クラーナと一緒にだったんじゃないの？」

「クラーナは何か家の手紙を出すって言って、ふくろうの郵便局に行っただぞ。時間かかるから先に行ってくれて言われたしな」

「クラーナってあほよね。毎回ホグズミードで時間作ってるのに……」

「時間？」

「オスカーはもつとバカだけど」

多分、何のことなのかをトンクスは喋る気が無いのだろうとオスカーは思った。だいたいこういう口調の時のトンクスはひたすらオスカーをバカにしてくるパターンだと知っていたからだ。

「エストとチャーリーはどうせクイディツチ用具店で、レアはまだあのちよつとレイブンクローナーにあほっぽい集団と一緒によね？」

「そのはずだな。あほっぽいって……」

「そうね。ちよつとそつちに座つてよ」

「え？ ああ……」

部屋に置いてある一番大きいテーブルではなく、もう一つある小さな丸テーブルを挟んで座るようにトンクスはオスカーに言った。今日のトンクスの髪色はショッキングピンクではあったが、少し鮮やかさが無い気がオスカーはした。

「他の人がいない時にあんたに会うことはそんなに無いから言うけど……」

「なんだ？ クリスマスにトンクスのシチューが飛んできて、俺のローブのしみになってた話か？」

「ぶっ飛ばすわよ。そうじゃなくて…… その…… えつと…… 呼び寄せ呪文でトランクごと私が落ちた時に…… その、あの後、私は何も言わなかったでしょ？」

オスカーはやつと何をトックスが言いたいのか分かった。あの試合の後、トックスがぶつぶつ言っていたのを聞いていたし、トックスは見た目や言動ほど、そういうことを気にしないわけではないことも知っていた。

「あれは俺が呼び寄せ呪文を唱えたから……」

「違いわよ。トランクを奪うのはあの時では普通の事だし、それにあの時、私は何もできなかったし、オスカー以外誰も動けてなかった。オスカーが降りてこなかったらクラナの言った通り、良くて聖マンガ送りだったと思うわ」

やっぱり、気のせいでは無くて、シヨツキングピンクがちよつと紫染みてきたのが見えているオスカーには分かった。そもそも、外で誰かと喋っている時にトックスの髪色が変わるのは余りオスカーは見たことが無いのに、こうしてちゃんと喋る時は結構な頻度で変わっているのを見ている気がした。

「だから言つとくわ。助けてくれてありがとう。正直、カメラが迫ってきた時に何も考えれなかったし、オスカーが私に何かやれって言つて、オスカーの背中でカメラが見えなくなってやつと動けたのよ。だから、冗談とか悪戯で言ってるんじゃないって、ほんとに言ってるのよ」
トックスがいきなり入ってきてから怒涛の勢いで話が進んでいたが、オスカーは何とかついていけていた。それに、オスカーはそんな風な言い方をしなくても、こういう事を冗談でトックスがするはずがないことも知っていた。

「冗談だとは思わないし、それに…… まあ、ハツフルパフの寮でした話みたいになるけど…… トックスが本当にちゃんと喋ってるかどうかなんて、髪色を見たらわかるけどな」

「は？ あ…… あんたねえ……」

自分の髪を慌てて触って、それからオスカーの方をトックスは睨んだ。しかし、またため息をついて話し始めた。どうも今回は結構ト

クスとしては色々考えることがあったのか、冗談もほとんど入れずに喋り続けるようだと思つた。

「その…… まだ同じ話なんだけど…… 劇の時の話で、クラーナが近い人がケガをしたらどうなるかとか、すぐ考えちゃうことなんてわかりきつてたのよ。それこそオスカーと私は…… なのに、あんな怒らせちゃったし……」

「今のをクラーナに言ったら喜ぶと思うけどな」

「うっさいわよ。言うわけないし、それにクラーナはプライド高いからそんなの言ったら怒るに決まってるじゃないの」

オスカーはクラーナから、誰かが危険な事をするのが嫌だという気持ちの方が分かると、一度直接聞いていた。だから、トンクスが言っている事には…… 本当にそうなのだろうか？ という疑問が湧いた。確かに、表ではそうやって怒るかもしれないが少なくとも…… だがオスカーもあまりクラーナがそれを聞いてどういう反応をするのかはシミュレーションできなかつた。

「俺だつたら嬉しいけどな」

「あのね、あんたは自分がだいぶ面白い性格してるってことを覚えて方がいいわ。私がニュート・スキヤマンダーであんたを教科書に載せるんなら、危険度で×を五つ付けるもの。オスカー・ドロホフ。キメラも逃げる火を吐き、魔女、特に純血をつけ狙う。ホグワーツに生息。最大で住処の部屋数と同じ、三十の子供を持ち、繁殖力も旺盛」

「それ…… 二年生のクリスマスに言つてた話か。よく覚えてるな」

「あんたも良く覚えてるわね」

二年生のクリスマス、クラーナがセーターの悪戯に気付いてオスカーの部屋にやってきたり、エストが髪飾りの場所に気付いた日の前の日の話のはずだった。

「クリスマス…… ああ…… キメラをチャーリーと使つた私が言えることじゃないんだけど…… オスカー、私がオスカーに寮で言つたこと覚えてる？ ドーラって言うなっていう話じゃないわよ」

クリスマス？ トンクスはいったい何からこの話題を持ち出したのか？ オスカーはそつちも気になつたが、問いの方も考えた。ほと

んど考えなくてもオスカーは思い出すことができた。去年のホグワーツ特急に乗った時から、それをずっと考えていたからだ。

「自分でしょって言ってたことか？」

「ほんとに何でも覚えてるんじゃないの？ オスカー」

「いや、あれはどうでもいいことじゃなくて、俺が……」

「まあ、とにかく、キメラをぶっ放した私が言えることじゃないんだけど。オスカー、自分のこと考えなさいよ」

文字通り、オスカーの頭の中にクエスチョンマークが浮かんでいた。トンクスから見たオスカーの顔も疑問に満ちていた。オスカーはこの一年間、ずっと自分の事を考えていたはずだと考えていたからだ。

「俺は……」

「キメラも劇の件も、そうね、エストが落ちた時もそうだったけど、先に自分の事を考えた方がいいわよ。助けてもらったり、思われてる方は嬉しいかもしれないけど。それで先にオスカーがつぶれたら……」

多分、あんたが考えてるよりとんでもないことになるわよ」

トンクスの言う自分の事を考えるとは、オスカーが自分で思っているモノとは違うのか？ オスカーはそれを考えていた。オスカーは自分が忘れていることが許せないから、自分について考えていると思っていたし、他の誰かが嫌な顔をしたり、辛い顔をするのが嫌だったし、それを座して待っている自分が嫌だったから行動すると思っていた。何か思い違いをしているのか？ オスカーはそこが分からなかった。

「トンクスの言う自分の事を考えるって……俺には分からないって言うか……俺は結局、多分、トンクスが言ってるような事を自分の事だと思ってる……」

オスカーが喋り始めると、トンクスはいつかハツフルパフの寮でやった様に、オスカーに近づいてきて、今度は指では無くグーでオスカーの心臓がある方、左胸に手を押し付けた。自分のモノではない誰かの感触がオスカーにも伝わった。二人は寮で倒れ込んだ時と同じくらい顔が近かった。

「正直、私はオスカーの事、分かるようで、分からないわ。でもこうやったら、あんたと私は別の人だってことくらいわかるわよね？」

「別の人……？」

確かに、こうして誰かの感触があれば、自分とは違う誰かだと認識することができると、オスカーからするとトunksが喋っている息遣いすら認識できる距離だった。

「だからオスカーと…… そうね、ニンファドローは別の人間なわけ。私は私のために息をしてるし喋ってるわ。カメラが目の前に迫ってきて怖いのは私だし、なんとかしないといけないのは私なわけ。自分が辛い時に最初にかしなないといけないのは自分だってみんな思ってるわ。だって、自分の事を解決できないのに何もできないもの」

どうして今日のトunksがこんなに真面目に喋っているのかはオスカーには分からなかった。カメラの事件がトunksに効いているのだろうか？ だが、オスカーには本当に真剣に喋っている事が分かっていた。そうでなければトunksが自分で自分の名前を使わないだろうからだ。

「自分の事だけ考えろって言ってるわけじゃないわよ。でも自分の事を助けるべきじゃないの？ それで自分だけで足りなかったら…… そうね、大体の人間は誰かにいいことされたらやり返すのよ。毎年やってるプレゼントと一緒にね」

「それは……」

オスカーは誰かに喋りたいが喋りたくなかった。灰色のレディや…… 尋ねはしなかったがスネイプ先生ならまだ喋れたかもしれないな。思ったが、目の前のトunksはオスカーが小さいころあったような事とは真逆の育ちをしているはずだった。

思いつき上がりかもしれないが、クラリーナの事が新聞記事に載った時のトunksの事を考えれば、エストと喧嘩をした時の様にトunksに全部話してしまえば、どんな反応をするのかはきつとオスカーには分かっていて、それに、オスカーはエストやクラリーナと同じで、トunksにはそういう話と無縁でいて欲しかった。純血キラーだとか、部

屋の数だけ子供が云々だとかそういう話をしている欲しかった。

「私だからこんななんですのよ？ だいたい、どっかのプライドの高い二人がどっかの誰かさんの話を私に聞いてくるなんてよっぼどだと思っけどね。それに……」

トunksはエストとクラナの顔を順番にやって、顔を替えるごとに笑って見せた。別々の顔なのにトunksが笑っているのと分かるのは不思議だった。

「この二人の顔がエライことになる前に私なら行動するわね。まあ決闘トーナメントの時にも、あんたじゃない二人に言っただけど、私で我慢しといてもいいわよ。今なら、一時間八ガリオンに負けとくわ」

「俺……俺は……」

オスカーが言いかけたところでドアが開いた。レアが半開きのドアから、こつちを目を丸くして見ていた。

「あっ……す、すいません……ボク……ちよつと下で時間をつぶしてきます」

「ちよ、何なのよ!! レア!! 何もやましいことはしてないわよ!!」

「え? で、でも、クリスマスにオスカー先輩の部屋から手をつないで出てきたのはトunks先輩で……今も二人であんな近づいて……」

「つないでないわよ!! 引っ張ってただけに決まってるでしょ!!」

「バタービールのビンは違うテーブルで空いているのに全然減って無いし…… 何人か来るはずなのにわざわざ小さいテーブルで……」

「ちよつと、思考をやめなさいよ!! レイブンクローっぽいことを発揮しなくてもいいわよ!!」

「でも……私で我慢してもいいわよつて……」

「レアが思ってるような意味じゃないわよ!!」

オスカーはやつと学んだ。恐らく、トunksとの物理的な距離が問題なのではないかと思っただのだ。ハツフルパフ寮、自分の部屋、そしてここ、全部トunksとの距離が近づくと、こうしてトunksが誰かと大騒ぎしていると思っただのだ。

「ほ、ボクが思ってるような意味つて何ですか?」

「な……ちよつとオスカー、あんたいったいレアに何したのよ?」

「と、トunks先輩…… ボクはトunks先輩に聞いてます……」

「えええ…… ほんとにレアが何かおかしくない？」

やっぱり気のせいでは無くて、オスカーはレアがちょっと変わった気がした。初めて会った時や、劇の後に怒っていた時の様な性格が段々と普段の時でも出てきている気がしたのだ。

「トunks、マツキノのお姫様には気を付けないと吹っ飛ばされるぞ」

「お、オスカー先輩、その呼び方はやめてください!!」

「これ手遅れな奴じゃないの…… 私は責任取らないわ」

オスカーはとりあえず席を大きなテーブルに移動して、バタービールのビンをもう何本か開けた。もう湿っぽい話をしてもし方がないと思ったのだ。ただ、思わず色々言おうとしてしまった何かがオスカーの中で彷徨っていて、何か動かずにはいられなかった。

「それで…… ボクが思ってるような意味って……」

「ちよ…… オスカー、これ他の二人よりヤバイことになってても知らないわよ。私はほんとに何もしないわよ。ほら、レア、オスカーに聞きなさいよ」

「トunks、ちゃんとレアには答えた方がいいぞ。全身金縛り呪文がレアは得意だからな」

「オスカー!! あんたねえ!!」

「オスカー先輩!!」

正直、オスカーは面白くなってきた。どうもトunksとレアは面白い相性をしているようだったからだ。もしかしなくても、オスカー達のヒエラルキーに変化が起きそうではあった。

「飲みなさいよ。最初からレアには黙ってバタービールのビンを渡しとけば良かったのよ」

トunksは面倒になったのか、新しく開けたバタービールのビングラスに入れずにレアに渡した。レアは自分に渡されたバタービールのビンを見て目を白黒させた。

「一気飲みしろって事ですか？」

「そうよ、ここにあるの全部飲んだらさっきのに答えてあげるわ」

「なるほど…… 分かりました」

「トunks、やめろ。ほんとにやるぞ」

オスカーは知っていた。ほんとにやると言ったら、レアは本当にやり切ってしまうし、練習でアバーフォースが贈ってきたバタービールを消費していたのはほとんどレアだった。それもいくらバタービールはアルコールが弱いとは言っても、オスカーのカバンに入る分全部飲んでもレアは顔色一つ変わらないのだ。

「は？ 何言ってるの…… ちよ、ちよつとレア」

「何ですか？」

「いつも…… あなた三本の筈でどんな風に飲んでの？」

すでに二本のビンを空にしたレアは口についた泡を拭いて、トunksに答えた。

「友達にマダム・ロスメルタに見えない様にして貰ってから。グラスにエンゴージオをかけてます」

「ええ…… それってバタービール？」

もう一本を半分くらい空にしてから、また泡を拭いて答えた。

「バタービールの時もありますけど…… 蜂蜜酒だったり…… あ、一回はなんか友達がカウンターに座ってた大人の魔法戦士に頼んで、ファイア・ウイスキーを買ってきて…… その魔法戦士がボクたちが肥大呪文をかけたファイア・ウイスキーを見て、一気飲みしたらおこるって言ったので、ボクがそれを飲みました」

「ちよつと、オスカー、こいつヤバイわ」

「こいつって……」

そうこう言っている間に、恐らく一人につき二本分で一ダースあったバタービールが、もう半分からになってしまった。

「レア、ストップ。ストップだ。これだとみんなの分が無くなるから」

「そ、そうよ。ストップしましょう」

「アバーフォースさんにボクがお金をだして貰ってきたらいいですか？」

「多分、あの人、レアから絶対にお金受け取らないぞ。俺もさつき、これまでのお礼言おうとしたら、そんなもん知らんって言われたし、多

分このバタービールもそうだぞ」

「え……」

やっとレアがバタービールを飲むスピードが弱まった。すでに八本空になっていた。オスカーはクラリーナとは別の意味でレアに何か飲ませる時は注意しないといけないと理解した。

「ちよつと…… レアとクラリーナをこう、マンティコアとかカメラみたいに組み合わせれば、身長もお酒もちょうど良くなるんじゃないの？」

「私は何ですか？ またあほなこと言ってるんでしょう？ と言うかエストを止めるのを手伝って下さいよ」

「エスト？」

扉を開けたクラリーナの後ろにはチャーリーもいたが、エストの姿はオスカーには見えなかった。

「そうなんだよ。エストが何か、ホッグズ・ヘッドを綺麗にするの！！ っって言ってるんだよね」

「ホッグズ・ヘッドを綺麗にですか？」

「確かに汚いし臭いわよね」

ちよつと、オスカーも急展開すぎて頭がついていかなかった。真剣なトunksに、バタービールを湯水のように飲み干すレアに、掃除を始めるエストと、オスカーが事前に考えていたホッグズ・ヘッドでのひと時とは全く違っていたからだ。

「とりあえず下に降りればいいのか？」

「そうした方がいいと思います…… 今さつき、なんかあのバーテンに綺麗にしているよね？ とか聞いてましたから」

「アバーフォースさんはフンとしか言っていなかったけどね。多分本気にしてないんだろなあ」

「それヤバイやつじゃないの。レアと言い、ヤバイやつばかりだわ」

「え？ ボクヤバいですか？」

リータ・スキータを目の前で逃した階段を降りて、オスカーは一階のバーまで降りてきた。何やらガシャ、ガシャやドン、ドンといったモノが動く音が聞こえていた。

「お前ら…… いったいあの娘は何がしたいんだ？」

「アバーフオースさん…… どういう状況なんですか？」

「わかるわけないだろう。とにかく、客をあつという間に叩き出して、机やグラスを端に退けおった」

一階のバーにはオスカーが来た時には数人の怪しい客がいたはずなのだが、今や誰もいなくなっていて、机や椅子は全部部屋の端の方へと積み上げられていた。バーの真ん中でエストが杖を振っている。

オスカーがエストに近づこうとすると身振りで止まれとエストが合図してくる。

「ちよつと床のこれをはがすからどいててね」

「床？」

またエストが杖を振ると、床に恐らく何百年という年月に渡って降り積もり、踏み固められて石の様になったほこりがボコボコと言う音を立てながら剥がれていった。

そして、何百年も見えなかったであろう石畳が下から現れた。また、今度は壁にはまつているまるで曇りガラスの様になった窓ガラスへと杖を振れば、外の光がホッグズ・ヘッドへと差し込むようになった。

「ちゃんとした魔法がいるのはこのくらいだと思うの」

「なんでもそもそ掃除なんかしてるんだ？ というか他の客はどうしたんだ？」

「だって汚いもん。他のお客さんはね、クラーナの叔父さんが今から来ますって言ったらあわてて出て行ったの」

「なんでそこでアラストー叔父さんの名前が……」

確かに、ダンブルドア先生の名前と同じくらい、その名前は薄暗い人たちにとって効果がありそうだった。少なくとも、オスカーはこんな所でしか飲めない人たちがマッドアイの魔法の眼を気にしながら飲めるとは思えなかった。

「でもまだ汚いけどどうするのよ？ というかこれ床は石畳だったのね、てつきり土だと思ってたわ」

「こういうのは魔法使いよりくわしい人たちがいるの。オスカー、ペ

ンスさんって呼べる？」

「え？ ああ、ペンス」

エストに言われるままにオスカーはペンスを呼んだ。バチツと言う音と共にペンスが相変わらず完璧なお辞儀をして現れた。

「どうなされましたか？ オスカーお坊ちやま？」

「ああ、エストが……」

「オスカーお坊ちやま、この様な不衛生な場所に入入りしてはなりません。このペンス……」

「ペンスさん、その為にオスカーに呼んでもらったの。ねえ、屋敷しもべってペンスさん以外もいるよね？」

一瞬でオスカーをここから連れ出すべく喋り始めたペンスをエストが遮った。オスカーはなるほどと思った。確かに、屋敷しもべ妖精以上に掃除が上手い生き物は存在しないだろうからだ。

「これは失礼いたしました。エストお嬢様。確かに我々の様な屋敷しもべは沢山おります」

「ホグワーツにはいっぱいいるよね？」

「はい、イギリスのどの屋敷よりもホグワーツには屋敷しもべが詰めしております」

「じゃあ、その人たちを呼ぶことはできる？」

「申し訳ございません。エストお嬢様。ここはドロホフのお屋敷では無いので、わたくしめはオスカーお坊ちやまのご命令でないと動けないのです」

「エストの言う通りにやってくれ」

「承りました。すぐに戻ってまいります」

ペンスはまた音を立てて消えた。確かに屋敷しもべがホグワーツに沢山いるというのは母親の記憶を見て、オスカーは思っていた。しかし、ペンスが屋敷の外ではオスカーの命令が無いと誰の命令も聞かないというのはオスカーにとって新しい事実だった。

「他の屋敷しもべを呼ぶんですか？ エスト先輩？」

「だって一杯いた方が早く終わるでしょ？」

「本気でこのホッグズ・ヘッドを綺麗にする気なんですか？」

「まあでも、屋敷しもべが一ダースもいればあつという間に綺麗になつちやうかもね」

アバーフォースは全く展開について行けない様で、諦めたのかカウンターの向こう側に引っ込んで、ぼろきれでグラスを拭いていた。

次の瞬間、まるで爆竹の様にバチつと言う音が連続でして、色んな服装、ベッドカバーやら、ティーバック、靴下なんていう良く分からないモノをまとった大量の屋敷しもべが現れた。オスカーはペンスが屋敷しもべとしてはかなり服装に気を使っている方なのだという事を初めて知った。

「つれて参りました。エストお嬢様。この屋敷しもべ達はあなた様の言う事なら喜んで聞くと言っております」

「なんか、エストって、肖像画とかゴーストとか、ホグワーツに住んでるモノから好かれてるわよね？」

「そうかな？ 血みどろ男爵はそうかもしれないけど……あのね。この建物を綺麗にして欲しいんだけどできる？ ホグワーツの生徒とか先生も使わらしいし、あそこにいるアバーフォースさん、校長先生の弟さんにもOKは貰ったの」

果たしてアバーフォースが本当にエストが何をしようとしているのか分かってOKを出したのかは怪しかった。だが、屋敷しもべたちにとつてもダンブルドア先生という名前は大きかったらしく、さらに屋敷しもべ達の姿勢が良くなった気がした。

「オスカーお坊ちやま。このペンスも承ってもよろしいでしょうか？」

「ああ、いいけど」

「ありがとうございます」

そこからはあつという間だった。恐らく長年の埃やタバコの煙などで真っ黒になつていた柱や壁などはあつという間に元の色を取り戻し、屋敷しもべ達はアバーフォースの傍にある食器やカウンターも輝くほどに磨き上げた。もうぼろきれはぼろきれでは無く、純白の布巾になつていたし、床の石畳には埃一つなく、つるつるで燭台の炎が反射して見えるくらいだった。

オズカーは魔法使いだったが、まさにこのホッグズ・ヘッドの変わりようは、魔法使いの卵からしても魔法の様だった。

「凄いなこれ」

「ヤギの臭いもどっかにいっちゃいました……」

「一匹欲しくなってきたわ。うちにも一匹必要って分かったもの」

「屋敷しもべは大きな屋敷じゃないと来ないんだよ。それに多分、トックスの家より、僕の方が必要だろうなあ」

アバーフォースは周りを何度もキョロキョロと見回して挙動不審だった。恐らく、こんな状態のホッグズ・ヘッドなどアバーフォースでさえ見たことも無いのだろう。

しばらくすると、机や椅子が浮かび上がってもとあった位置に戻った。この状態のホッグズ・ヘッドならば、マダム・ロスマルタと立地条件という要素さえなければ、三本の箒といい勝負ができるのではないかとオズカーは思った。

「オズカーお坊ちやま。エストお嬢様。上の階まで全て終わりました。しかし、オズカーお坊ちやま、余り汚い場所に足を運ぶのはお控えください。オズカーお坊ちやまは強力な魔法使いになられるかもしれないませんが、世間には龍痘を始めとして、魔法使いに危険な病気も潜んでおります。ではまた何時でもお呼び下さい、このペンスいつでも呼び出しをお待ちしております」

ペンスはバチっという音と一緒に消えた。ホグワーツの屋敷しもべ達も先に帰った様だったので、ホッグズ・ヘッドはもうオズカー達六人とアバーフォース、アリアナの肖像画しか人はいないはずだった。

「はあ。あの屋敷しもべはほんとに筋金入りの屋敷しもべですよ。あそこまでいくと奴隷根性でも見るところがあります」

「ちよつと夏休みに代わって下さいって言ってきたら？ オズカーお坊ちやまのお世話ができるわよ。オズカーのローブからパンツまで洗い放題じゃない」

「ニンファドローラは脳みそをスコージファイして欲しいんですか？ そうなんですよね？」

二人は相変わらずだったのでオスカーは安心した。カメラの騒動があつて何か変わるかと思つていたが、何も変わらないようだったからだ。ちょうど二人が何故かお互いにスコージファイをかけ合つているその時、完璧に清潔感の漂うホッグズ・ヘッドの扉が開かれた。

全身、体の上から下まで分厚いベールに包まれている人物だ。服装からなんとか魔女だろうと言う事は分かる。確か、この魔女はオスカーが最初に入ってきた時もいたはずだった。随分と長身なその魔女は、そのまま綺麗になつた壁や柱をべたべた触っているエストの方へと歩いていった。

「失礼。本当はアラスター・ムーディなど来ないのでしょう？ それに、さつき貴方が机を動かしたせいで、私の万年筆が折れたのだけど。火蟹の宝石のついた」

何かトラブルかと思つて、オスカーはあわててエストの方へと行つたが、エストはそのやたら分厚いベールをしたからのぞき込んで、どうも魔女の顔を見ている様だった。

「ウソなの。それにあなたは魔女じゃないの」
「何を……」

エストが杖を振るとそこにいたのは、ボロボロのマントを着た、酒臭さとタバコ臭さのする男だった。無精ひげに、ちゃんとした場所で髪を切っていないのか髪は不揃いでバラバラの赤茶色、そして何か犬の様な、悲し気な腫れぼったい眼が特徴的だった。

「フレッチャー、お前は出入り禁止のはずだ」

「フレッチャー？ マンダンガス・フレッチャーなの？」

「ダング？」

「え？ ボクも知ってます」

最初にアバーフォースとエストが、それに合わせてクラーナとレアが反応した。オスカーと同じ様に、チャーリーとトンクスは誰だか分からない様だった。

「おん……？ 誰……？ イライザ？ いやそんなわけねえから……」

「妹の方か……？」

「フレッチャー!! 聞いているのか？ お前は十何年前からここは出

入り禁止だ」

「マンダングラス・フレツチャーと呼ばれた男はクラリーナの顔を見ていたが、アバーフォースがマンダングラスの耳をおもっつきり引つ張つて耳元で叫んだ。

「痛てえ!! やーめろ、やめろ!! そっちの金髪は…… マーリン?
そっちのは…… 眼がギデオン?」

「ありもしない万年筆でエストを揺すろうとしてたんですか? ダング? 私なら絶対にそういう相手にエストを選ばないですね。命が何個あつても足りないでしょう」

「どうもこのマンダングラスという男は見ため通りに一筋縄ではいかない相手の様だったが、クラリーナの言う通り、相手を間違えたらしい。「ちよつと誰なのよ。説明しないとアバーフォースさんと、エストにちよつかいかけられて怒つてるオスカーがこの人をキメラのエサにしちゃうわよ」

「しないけどな」

「三人の知り合いなんだ?」

「確かに説明してもらわないとオスカーともう二人には何が起こつているのかもわからなかった。

「多分、もう三人には言つていいと思うんだけど。不死鳥の騎士団つて言う、死喰い人と戦つた団体があつて、エストのお父さんと叔父さん、クラリーナのお姉さんと叔父さん、レアのお父さんとお母さん、それにアバーフォースさんとのマンダングラス…… さんもメンバーなの。クラリーナの叔父さんが前に写真を見せてたよね?」

「メンバーなのにここは出入り禁止なのね、この人」
「ボクのママはこの人が来た時は絶対会わせてくれなかったんです。何か教育に悪いって言つて」

なるほど、不死鳥の騎士団と聞いて、オスカーは闇祓いやホグワーツ教員と言つた、規律や理念に燃えた人間たちが集まっているモノかと思つていたが、どうも全員がそうでは無かつたようだった。

「おい、アブ、いいかげん俺を離してくれよう」

「黙れ!! 馴れ馴れしくするんじゃない!!」

「でも、なんかバーも綺麗になってるでしょう。それにイライザの妹が……」

「アバーフォースさん。ちょっとこの人と喋ってもいいですか？」

レアがそう言うのとやつとアバーフォースはマンダンガスを離した。離すと同時にさつきピカピカになった石畳に思いつきり鼻をぶつけていた。

「くそ、痛てえ。なんだってこんな……」

「ダング、そこに座ったらどうですか？」

オスカー達は何故か突然の来訪者のマンダンガス・フレツチャーと机を囲むことになった。アバーフォースはオスカー達には無言でバタービールを出し、マンダンガスからは無言で小銭をひったくった後、ほとんどのグラスは磨き上げられたはずなのに、どうやったのか汚いグラスを持ってきてマンダンガスに出した。

「お前たち、こいつはならず者だ。気をつけろ。兄がこいつの事を何と言ってもな」

「何もしねえよう。いくら俺でもイライザの妹には何もしねえ」

一体、ダンブルドア先生やクラーナの姉とこの男の間に何があったのかはオスカーも興味がそそられたが、それはかなり聞きにくそうな話だった。

「あ、マンダンガスさん？ ボク、レア・マツキノンです。多分会ったことは無いんですけど……」

「うんにや…… その髪色と顔で分かる」

「エストは、エストレヤ・プルウエットなの」

「眼で分かる。ちげえねえ」

何と言うか、今までオスカーがほとんど会ったことのないタイプの人間だった。この目の前のマンダンガス・フレツチャーと言う男は。

「私はニンファドーラ・トックス」

「僕はチャールズ・ウィーズリー」

「ウィーズリーの方はあー、見たらわかる」

オスカーは自分も自己紹介をしようとしたが、クラーナの質問に遮られた。

「ダングはまだ不死鳥の騎士団なんですか？　　というか不死鳥の騎士団ってまだ活動してるんですか？」

「騎士団？　　ああ、まだ……　　最近、ダンブルドアが時々なんか連絡をよくこしてたよう……　　なんかマグルの新聞がどうかで……　　でもそれくらいで、今は最低限しか繋がりはねえ……」

ダンブルドアが何か連絡をよくこした？　　不死鳥の騎士団に？　　オスカーは少しそれが気になった。マンダンガスはポケットからパイプを出して吸おうとしたが、アバーフォースに取り上げられた。

「連絡って、あの守護霊のやつですか？」

「そうだ……　　あー、ダンブルドアが発明した」

守護霊を使った連絡？　　そんな方法があるのだろうか？　　オスカーはそれも気になった。どうも、オスカーが聞いたことのない情報をこのマンダンガスと言う男が持っているらしかった。

「あ、オスカーの自己紹介を止めてましたか？」

「俺が自己紹介してもしかたないけどな。ああ、俺はオスカー・ドロホフだけど……」

マンダンガスはオスカーの顔を見て、何か思いだすように長い赤茶色の髪をかいた。

「あんた……　　うん、ドロホフ？　　ああ、あんたの親父の方は……」

おつかさんは気の毒だったな」

「どういう意味だ？」

オスカーは思わず口が頭よりも先に出た。

「うんにゃ……　　どういう意味つちゅうと……　　あんたのおつかさんは、死喰い人と騎士団と……　　闇祓いの三つ巴に巻き込まれたけど……　　あの時、俺もあんたの親父も、イライザもいたから覚えてんだ」
オスカーの頭の中に、まるで真っ白い紙に黒いインクを垂らしたように、何か広がって行った気がした。

自分は母親がどうやって死んだのかを聞かされていないし、それを例えば、キングズリーに聞こうとはしなかった。もちろん、その前に衝撃的な事件があつて、加えてのショックだったのでオスカー自身がそれに耐えれなかったのかもしれない。

だが、オスカーの中にあつたのはもつと違う疑念だつた。簡単な話、母親の話を誰かに聞かなかつたのではなく。誰かによつてそれも消されているのではないのか？ ただ、オスカーが母について知っているのは、戦争のぐたぐたに巻き込まれて死んだという事だけだ。それでオスカーは疑問に思わなかつた。

「えーと、オスカー？ あんた聞いているンか？」

「オスカー、聞いてますか？」

「オスカー、ねえちよつと聞いているの？」

そうではなくて、自分が取り戻そうとしている記憶そのモノに關わっているのではないのか？ だから思いだせないのではないのか？

一度、落とされた何かが、じわじわと広がっていった。自分はいつたい何を忘れている？

アモルテンシア

踏ん切りがオスカーはつかなかった。簡単な話、話してくれるかは分からなかったが、スクリムジョール先生に聞けば闇祓いに関する話をしてくれるのではないかと思っていたのだ、しかし、その踏ん切りがつかなかったのだ。

キングズリーに手紙を送るでも、クラーナを通してマッドアイに連絡を取るでも良かったかもしれないが、オスカーはそのどれも行動に移せてはいなかった。

「見てましたか？ オスカー先輩？ 今、結構動かせました!!」
「バタービールどころか机ごと吹っ飛んでいったな」

オスカーの内心の停滞とは対照的に、レアの練習の結果は目覚ましいモノだった。小さく複雑な動作はまだレアにも出来ていなかったが、彼女はすでに杖を無しでも、相当な質量のモノを動かすことができていた。

「もう一回やります。見てて下さい」
「分かった」

吹っ飛んでいった机、バタービールのビン、椅子がレアが手をかざすだけでゆっくりと元の形に戻った。このままいけばレアが記憶の中の様に、器用に色んなモノを動かせるようになるのは時間の問題にオスカーには思えた。

「よし!! やった!!」
「凄いな、いつだったかの朝と比べると別人みたいだな」
「いつだったか？ ですか？」

オスカーが今のレアを見て、思いだしたのは必要の部屋での一件があつて、医務室で寝た次の日の事だった。あの時のレアはウインガー・ディラム・レヴィオーサーで羽ペンすら上手に浮かせれなかったのだ。

「ほら、羽ペンを浮かそうとしてただろ」

「あ…… あの時は……」

「あの時みたい…… 今は杖なし魔法だから、レアに俺の杖……」

じゃないな、手を持ってもらうくらいしかないな」

「えっ!! て、て…… 手ですか?」

レアはわたわたしていたが、オスカーはそれを見ながらも、自分がすぐに自分の記憶の事を考えようとしてる事に気付いていた。さっきのレアとの練習から連想して、いつの間にかクラーナとやった開心術について考えていたし、最近、何を考えてもそれに思考が向かっていく気がしたのだ。

その点、決闘トーナメントという当面のやることがあると言うのは、何とか、違うモノに意識を向けられると言うところで良かったのだが、レアとの開心術の練習が終わって、緊張感が少し無くなると、やっぱり、記憶について考えてしまうのだ。

「ぼ、ボクは構わないですけど……」

「それか、俺はまだ練習に時間かかる気がするから、何かレアに決勝でもっと戦術とかそういうのを考えて貰った方がいいかもな」

「戦術? ですか?」

「ああ、流石にキメラとか、生ける屍の水薬の霧とかはやりすぎだけど、箒とか目くらまし呪文みたいなのなら大丈夫だろ」

もし、決勝がエストとクラーナが相手なら、いくらオスカーに多少決闘の覚えがあったり、レアがワンドレス・マジックをモノにしたとしても、正面から戦うのは相当厳しい戦いになるに違い無かった。

「分かりました。考えてみます」

「うん。俺も考えてみるし、決勝で当たるかもしれない人以外なら誰かに聞いてみてもいいかもな」

チャーリーやトunksに聞くのだから反則ではないだろうし、スリザリンやレイブンクロウの先輩や同級生に聞くのも選択肢としてはあるはずだった。

「そろそろ、昼飯を食べて準決勝見に行くか。俺たちは何もしないだろうけど」

「そうですね。まだ医務室で六人くらいがずっと寝てて起きて来ないそうなので……」

生ける屍の水薬の被害にあった生徒達は段々とホグワーツの生活

に復帰し始めていたが、最初の方に水薬を吸ってしまった数人、特に試合を行っていた四人は未だに医務室のベッドの上だった。

それにその水薬の事故やキメラが使われたことを見て、先生方の人員を増やすため、決闘トーナメントの日は全日、授業を取りやめにしていく様だったのだ。

「まあビルが相手だし、エストとクラーナもそんなに一筋縄ではないかないだろ」

「あ、あんまり先輩方の苦戦を願うのは良くないんですけど。ちよつと消耗して貰わないと困ります」

二年生の時にエストが決闘していたのを見ていた時のオスカーの心境からすれば、随分と色々考えている事は変わっているに違い無かったし、それがオスカーにとってどういう意味なのか、オスカーには分かっていなかった。

「じゃあ、オスカー行ってくるね？ あ、これ賭けの割符？ なの。もしエスト達が勝ったらグリフィンドールの人に貰いにいってくれる？」

「分かった。じゃあ二人共、キメラに遭ったらちゃんと逃げてくれ」

「その時はケトルバーン先生をキメラと一緒にトランクに入れて鍵をかけますよ」

「頑張ってくれ」

二人を見送って、オスカーは席についた。今回はレイブンクロウの生徒が出席しないせいとか、オスカーの座っている側のスタンドにはスリザリンとレイブンクロウ学生が陣取っていた。簡単な話、レアしかもうレイブンクロウ生がいないからなのだろう。

オスカーが席に着くと、ジエマが何故かホグワーツ特急と一緒にいた二人と一緒にオスカーの方へと近づいてきた。

「オスカー先輩。試合の後にエスト先輩に飲み物を渡して欲しいんですけど。いいですか？」

「俺がか？」

「そうです。オスカー先輩じゃないとダメですね。できれば玄関ホルあたりで渡したいんですけど」

何故か後ろのパーシーとウツドは心配そうな顔をしていた。オスカーからすれば、グリフィンドールの二人とジェマが未だに一緒にいるのは意外だった。

「バタービールか何かか？ 別にいいけど…… パーシーとウツドだったか？ ジェマと仲がいいのか？」

「ウィーズリーはがり勉強だけど頭はいいですし、ウツドは箒の事しか頭に無いですけど、体力はあるので協力して貰ってるんです」

ジェマがそう言うのとグリフィンドールの二人はあからさまに嫌そうな顔をした。何かジェマに弱みでも握られているのだろうか？ オスカーはちよつと心配になった。

「パーシー、ウツド。なんかジェマで困ってたら俺かエストに言えばなんとかなるぞ」

「困るってなんですか？ このウィーズリーは、これまではエスト先輩に尻尾を振ってたのに、今はムーディ先輩に尻尾を振ってる奴だからどうにもならないですよ」

「尻尾を振ってるって……」

「俺は箒を教えて貰いたいだけなので大丈夫です」

箒を教える？ チャーリーにでも教えて貰うのだろうか？ オスカーはいまいちウツドが言っていることは理解できなかった。

「じゃあ、私たちはちよつと試合の間抜けるので、先輩の応援をお願いします」

「分かったけど……？ 試合見ないのか？」

「ちよつと用事があるので」

一年生三人はあつという間にオスカーの目の前から姿を消した。オスカーは少し、パーシーが心配そうな顔をしていたのが気になったが、思えば、夏休みの間もずっと心配そうな顔をしていたのを思い出したので、思い過ぎしだと思っただけだし、それに一年生では危険な魔法や魔法薬を使えるわけが無いので、大変な事にはならないだろうと思っただけだ。

「あれ？ エスト達もういつちやったの？ てか、いまパースがいたわよね？」

「ウツドもいたね、コンパートメントにいた三人だよね？」

「一年生ですか？ スリザリンとグリフィンドールなのに仲がいいんですね、あの三人」

「エストとクラーナはもう行ったし、ジェマたちはエストに飲み物を渡してくれとか言ってたな、まあ多分、先生方が今はここにしかないから、ちよつと抜け出して、飲み物でも買いに行ったんじゃないか？」

そう、この決闘トーナメントの時間は管理人のフィルチやハグリッドも含めて、先生方全員がここに集まっているのだ。だから何か先生の目を盗んでやるには格好の時間だった。

「流石オスカー、ほんと悪い事には察しが良いわよね。私も何かこの隙に、フィルチの管理人室に悪魔の罫とかマンドラゴラとか置いとけば良かったわ」

「退学になつても俺は知らないからな」

「多分、フィルチだと対応できないから最悪死んじゃうよ」

「うーん…… ボクもフォローはしないです……」

オスカーは思った。やっぱり、トンクスは反省していないのではないだろうか？ 魔法使いにキメラをぶつけるのと、魔法を使えないフィルチに悪魔の罫をぶつけるのでは大して変わらない気がした。

「まあ流石に昨日の今日でやったりしないわよ。この前のホグズミードでゾンコに行ったから、その商品辺りで手を打っておくわ」

「というか、どうも誰かが何かやって犯人が分からないと、フィルチが俺のせいにしてる気がするんだよね」

「あれも段々と酷くなってるよね」

「ピーブズがオスカー先輩とエスト先輩の言う事を聞くからじゃないですか？」

レアの視点は確かに鋭い考察かもしれないなかった。フィルチが恐らくホグワーツで一番嫌いなピーブズがオスカーには何もしてこないのだ。それも元々フィルチにオスカーはトンクスの助力もあって嫌

わかれていた、つまり、色々とオスカーのせいではないはずなのに嫌われる要素が増えていつているのだ。

「なるほど？ それもだいたい俺のせいじゃ無くないか？」

「いいじゃない。私より校内でフィルチに嫌われてるのはオスカーとピーブズくらいよ。ホグワーツの出入りチエックもオスカーがいると私には見向きもしないもの」

「相当だよな。オスカーがいると確かに他の人のチエックは緩いんだけどな」

「あ、そろそろ始まりそうです」

ステージを挟んで両側にエストとクラリーナのペア、ビルとハツフルパフの監督生のペアが立っている。スクリムジヨール先生がまた開始の合図をする。

「今回のステージはここだ」

ステージがまた変化する。今度のステージは何やら煌びやかだった。真ん中には黄金の色をした噴水がある。魔法使いに魔女、ケンタウルス、小鬼、しもべ妖精、吸血鬼やトロールと言った魔法界に関連する生き物たちが像になってその噴水の中に鎮座している。

噴水の他には周りを囲うように大量の暖炉が設置されていたが、その他には目立ったモノは何も無かった。両組みのペアは噴水のあるフロアに繋がる階段に立っていて、お互いの姿も噴水の向こう側ではあるが見える様だった。

オスカーはこの光景には強烈に見覚えがあった。

「何か綺麗なステージじゃないの」

「あれ？ これって魔法界の同胞の泉なんじゃ？」

「そうだよな、これって魔法省に煙突飛行で行くと最初に見える噴水だよ」

そう。レアとチャーリーの言う通り、このステージは恐らく魔法省の一部のはずだった。オスカーもその場所を覚えていた。このフロアは煙突飛行の暖炉があるのに加えて、他のフロアとも繋がっているはずなのだ。

「それでは、準決勝を始める。これまでのルールを順守して行うよう

に、では、始め!!」

両方のペアが噴水に向けて動きだした。変身術を使うのなら、それをかける対象が重要なので、その選択は間違っていないはずだった。

オスカーは試合の展開よりも、自分の記憶に頭を動かしていた。オスカーは間違いなくこの噴水を何度か見たことがあった。そう、地下牢の様な尋問や裁判をするための場所にここから連れて行かれたことがあったはずなのだ。

「ほんと、冗談みたいな魔女よね、エストって」

「嘘…… 凄い」

「うーん。エストに魔法生物分類だとXを五つつけないといけないよね」

トunks言う通り、オスカーが二度見しないといけない光景が広がっていた。泉の水がエストの魔法に捕らえられて、球体となってステージの上に浮いていた。観客席からはこれまでにないくらいのだよめきが湧いていた。

「流石にエストでも余裕の顔でできるわけじゃないのね、あれ」

「俺の万眼鏡…… いつの間に……」

「ほら返すわよ」

万眼鏡で見れば、どうも、エストの方も相当集中しないと上空に浮かんでいる水を保つことはできない様で、かなり顔をしかめて杖と手を空中にやって維持している様だった。

「今のエストなら攻撃し放題だよね？」

「あんなのが空中にあつたら、ボクなら近づくのも嫌だ……」

ビルのペアはレアと同じ様に感じたのか、水球が浮かんでいる噴水に近づくのを止め、噴水越しにエストに呪文を唱えようとしていたが、全てクラリーナが弾き飛ばしているようだった。

「大技をエストがやって、クラリーナが守りかどどめをやってるんだよね。いっつも」

「そーいやそーうね、本を鳥に変えてぶつけてた時も、川を凍らせた時もそんな感じね」

レアの嫌な予感にあたったようで、水球はまた形を変えて、幾本も

の水流になって空中を通り、ビルのペアに向かって行った。

「何をどうやったたらあれができるのかな？」

「先生でもできるんでしょうか？ マクゴナガル先生とかフリットウィック先生なら？」

水流は最短距離で相手のペアに向かっていているようで、ビルたちが動けばそれに合わせて向きを変えた。

ビルが噴水の銅像の一つに魔法をかければ、それが動きだした。ハツフルパフの監督生に水流が迫っていたが、その銅像、恐らく魔女の銅像が水流を受け止めた。

水流は銅像に当たったと思えばその銅像を凍り付かせて動けなくし、そのままハツフルパフの監督生に向かった。監督生はそれを見てあわてて走り出した。

「ちよ、ちよっと何なのよアレ。どうやったたら止まるのよ」

「操ってるエストを止めないとダメなんじゃないか？ それにあれを防いでもそもそも一本じゃないしな」

そう、近づいていた水流は一本だけだったが、今や十本近い水流がビルのペアに迫っていた。ビルは今度はケンタウルの像に魔法をかけ、ケンタウルの像は動き出したかと思えば、隣の魔法使いの像の顔をもぎ取った。

そしてその顔をフルスイングで放り投げ、上空で水流を生み出している水球の中へ入った。ビルがその水球に向けて魔法をかけると、水球は文字通り爆発した。

水が四方に飛ばされて、ほとんど水蒸気になった様だったが、オスカー達の席の方でもひんやりとした感覚があり、ローブも少し湿ったようだった。また観客席からは歓声があがり、グリフィンドール生が集まっている向こう側ではビルの名前をコールにして呼んでいるようだった。

「ボンバーダかコンフリントゴを唱えてから投げたんでしようか？」

「あの水の線みたいなのも、上の球が無くなったら消えちゃったね」

動けるようになった魔女の像とケンタウルの像を従えて、ビルと監督生が噴水を回り込み、クラーナとエストの方へと向かった。

しかし、それは悪手だったとしか言いようが無かった。オスカーがビルなら絶対にまず泉には近づかないか、使えない様に破壊したはずだったからだ。変身術でエストに挑む様な事をオスカーなら絶対にしなかった。

「やつぱり反則よね、エストは出場禁止にするべきじゃない？ あんなの、普通の蜘蛛にまぎってアクロマンチュラが出てくるようなものよ。普通の生徒とエストだとそれくらい違うじゃないの」

「ぜ、全部動かせるんですか…… あんな魔法を使った後に……」

「オスカー、決勝ではキメラを使ってもいいんじゃないかな？ ドラゴンでもいいかもね」

ビルの魔法がかかっていない像が全て動き出した。トロールや巨人と言った大きな凶体を持つ物から、小鬼やレプラコーン、屋敷しもべと言った小さい物まで全て動き出したのだ。

さらに問題なのは恐らく水から作り出したであろう、氷でできた槍や斧の様なもの、それに加えて弓矢や礫の様な飛び道具まで像たちは持っている事だった。

「ちよつと今からエスト達に賭けてこようかしら、悪いわねオスカー」

「ここにエスト達に賭けた分の割符ならあるけどな」

「エストが買ってたやつだよ？ これ、エスト達とオスカー達の分両方なんだね」

「うわ。トーナメントの開始時からこんなに賭けてたんですか？ 今日の日分も買ってあるんだ」

オスカー達が賭け事の話をしている間にもステージ上では戦闘が続いていた。ビルたちのペアも像を呪文で吹き飛ばしたりして応戦していたが、何より数に押されていた。すでに魔女とケンタウルスの像は粉々に破壊されていたし、大量の像の後ろからクラーナが呪文を投げかけていた。

「まあ、とにかく呪文をかけられるモノが無い場所で戦わないとダメだな。ビルでもあれは厳しいだろうし」

「あんなの無理です。あの状態でクラーナ先輩と決闘なんてできない……」

「正面からでもやりたくないのにおね」

「まあそうなるように二人は動いてるんだよね、エストが状況を操って、クラリーナが確実に潰しにいつてるみたいだし、さつきオスカーが言ってた通りだと思うよ。多分、考えてやってるんだと思う」

粉々になった像はまた姿を変えて、黄金の槍や剣になった。残っている像たちが氷の武器に代わってそれを使い始めた。新しい武器はなにやら呪文を弾く効果までついているらしく、何回か呪文を唱えなると壊れそうに無かった。オスカーから見ても、もはや趨勢は決している様に見えた。

「ああ、やられちゃったわね。最強のウィーズリーでも勝てなかったわ」

「最強のウィーズリーは多分ママだけだね」

像に詰められて、クラリーナの呪文をなんとか凌いでいたビルだったが、監督生が失神呪文を受けた直後に、しもべ妖精の像がビルの杖を吹き飛ばした。ほとんど危なげもなく、エストとクラリーナはトーナメントを勝ち上がってしまった。

「掛け金と飲み物を貰ってくる」

「飲み物？ さつきジェマと話してたやつ？」

「そうだな、なんか玄関ホールで渡すとか言ってたから行ってくる。

二人が先に来たらお疲れ様だって言つといてくれ」

「分かったよ」

「分かりました」

スクリムジョール先生のそこまでという声が聞こえている中、オスカーはグリフィンドール生が集まっている側の観客席へと向かった。今日は緑色のセーターを着ていたので、グリフィンドール生たちの視線は結構な数がオスカーの方へと集まっていた。しかし、どちらにしろグリフィンドール生が決勝戦に行くことは試合前から決まっていたので、彼らはオスカーの存在を無視できるほどには上機嫌な様にオスカーには見えた。

逆にハッフルパフの方の観客席は決勝戦に行けなかったため、静まりかえっているようだった。

賭けを行っている生徒達の所には色んな色のローブを着ている生徒が集まっていたため、すぐに場所は分かった。オスカーはちよつとグリフィンドール生の胴元に嫌な顔をされた。その理由はすぐに分かった。どうもエストは相当な掛け金をトーナメントの最初から賭けていたらしく、それはオスカー達が出場する試合全部に賭かっており、初期の倍率なので相当高い額が戻ってきたのだ。

オスカーの財布には多分、チャーリーが見たらおかしくなりそうな額が入っていた。少なくとも今年、ウィーズリー家の金庫で見た額の十倍はありそうだった。

今日は一試合なので、すでに出入口は大広間から出ようとする生徒達でごった返しており、オスカーは何人かに吹っ飛ばされそうになりながらなんとか玄関ホールまで出た。余りの人の出入りにオスカーは戻るのが少し億劫だった。

「あ、オスカー先輩、これです」

「ああ、なんだこれ？ 蜂蜜酒か？」

すでに待っていたジエマに、オスカーはいつかクラリーナが飲んでいた様なタルをイメージしたグラスを渡された。

「ちやんとエスト先輩に渡してくださいね？ じゃあちよつと先輩呼んできます」

「俺が行けばいいんじゃないのか？ あと試合結果は聞かないのか？」

「そんなのやる前から分かってます。それにダメです。ここにいてください。それでちやんと渡してください」

「わ、分かった」

ジエマの剣幕に押されて、グラスを渡されたオスカーは言う通りに玄関ホールに突っ立っていた。パーシーとウツドは何かオスカーの方に謝る様な動作をすると、ジエマについて大広間へと消えていった。

どうもオスカーは釈然としなかった。三本の箒に三人は行ったのかと思っていたが、それだとしても時間が少なすぎる気がしたのだ。

蜂蜜の黄金色をしたグラスの中身を見て、オスカーは匂ってみた。

蜂蜜の甘い匂いでほとんどアルコールの匂いはほとんどせず、いつかオスカーが飲み損ねた蜂蜜酒に違い無かった。しかし、どうも、どこかで匂った様な香りが代わる代わるにした。

リンゴの様な香り、オレンジの様な香り、ミントの様な香り、甘いお菓子の様な香り、それにカモミールの様な香りがした気がした。

全部、どこかで香った気がするのにオスカーは思いだせなかった。それに少なくとも毒の様な香りでは無かった。もちろん、無臭やいい匂いのする毒もあるはずなのでそれで判断することはできなかつたが。

「ちよつとそれ蜂蜜酒じゃないの？ クラーナが持ってたやつよね？」

「ああ、多分そうだけど」

まばらに人が玄関ホールの方へと出てきていたが、ほとんどの生徒は玄関ホールでは無く、城の各寮の方へと戻っている様だった。そのまばらな生徒の中にトンクスがいた。オスカーは前の時の三本の箒で、トンクスがクラーナの蜂蜜酒を飲めなかつたことを知っていた。

「ちよつと味見させてくれない？ 補充呪文を使うからばれないわよ」

「ジエマにまた俺が怒られるだろ」

これはめんどくさい事になったとオスカーは思った。こういう状態のトンクスはだいたいめんどくさいとオスカーはもう四年間で十分に学んでいた。それに相当準備をしてこの蜂蜜酒を用意したジエマの事を考えると、エスト以外の人にこれを渡せばそっちもめんどくさい事になると分かっていたからだ。

「クラーナ、オスカーがエストにだけ蜂蜜酒を準備したらしいわよ。クラーナにはお子様用のかぼちゃジュースらしいわ」

「クラーナ？」

オスカーがトンクスの言葉につられて振り返ると、その瞬間にトンクスがグラスをひったくった。案の定、そこにはクラーナはおらず、オスカーがトンクスの方を見た時にはすでに蜂蜜酒を飲まれていた。

「美味しいわね。ほら、補充呪文で補充した…… わ……」

「ジエマに何言われるか分からないからやめろって言ったのに……トunksス?」

確かに蜂蜜酒は補充されていて、そのグラスの中身は満タンだった。しかし、トunksスの表情が明らかにおかしかった。いつも意味の分からないことを言っていて、表情もクララーナの次くらいにコロコロと変わるトunksスだったが、こんなに気の抜けた顔をオスカーは見たことが無かった。

「オスカー、オスカー、あのね……」

「トunksス? おい、どうした?」

何かを言いだせなくて詰まっているような表情だった。ますます、オスカーは分からなくなってきた。さっきまでのテンションやいつものトunksスの事を考えれば、こんな表情をすることは無いはずだった。「オスカー先輩、ボクちよつと抜けてきたんですけど…… レイブンクローの先輩が……」

「オスカー、私、我慢できないわ。好きよ。オスカー、愛してるわ」

「はあ!? ど、どうした?」

「ええ!! と、トunksス先輩?」

今度のトunksスの顔は真っ青で髪の毛まで真っ青だった。それなのにオスカーにはトunksスの言葉が良く分からなかった。多分、冗談でもトunksスは言いそうに無い事を言ってきたからだ。

「だから、好きなのよ。どうしてもオスカーの事を考えてしまうの」

「トunksス?? お、おい、ほんとにどうしたんだ?」

「や、やっぱり、エスト先輩やクララーナ先輩よりトunksス先輩の方が……」

今度は顔も頭も真っ赤になっていた、まるでマグルの使っている信号の様にトunksスの髪色と顔色は変化していた。オスカーの方も頭がおかしくなりそうだった。

「私、オスカーのこと愛していると思うわ。身長だって、普通の人よりあるし、性格とちよつと違って明るい赤っぽい髪も、明るい眼もギヤップが合って素敵よ、もちろん性格だって、一番素敵よ」

「ほんとに…… 何か飲ん…… おい、惚れ薬か? まさか…… そ

ういうことか!! レア!!」

「は、はい!? な、なんですか? じゃ、邪魔なら……」

「これをもって、スネイプ先生のところに行ってくれ、トンクスが惚れ薬を飲んだって言って、解毒薬を貰ってきてくれ」

「ほ、惚れ薬?? わ、わかりました」

簡単な話だった。今渡したグラスの蜂蜜酒に惚れ薬が、それもオスカー自身を好きになる様な惚れ薬が入っていたに違い無かった。

レアはオスカーが渡したグラスを受け取るなり、走って行った。それを見てトンクスは顔が真っ青になった。

「オスカー、レアがいいの?」

「なんだって? とにかく、人がいない場所にいくぞ」

「嫌よ。ねえ、レアの姿がいいの?」

「レアの姿?」

「そうよ。金髪がいいの? それとも金色の眼? 女の子なのに結構身長が高いの?」

「おい、どうし……」

トンクスはオスカーの目の前でレアの姿に変わった。ショートカットに目の覚める様な金髪、金色の眼、確かにトンクスやエストより高い身長、それにローブも杖を振ってレイブンクロウの青色に変えたようだった。

「トンクス?」

「この姿がいいのよね? 口調も…… ボク、オスカー先輩のこと好きです」

そう言うなり、トンクスはレアの姿でオスカーに抱き着いてきた。さっき匂ったお菓子の様な甘い香りがオスカーはした気がした。

「おい、トンクス、やめろ、戻れ」

「どうして? レアがいいんじゃないの? 私…… ボク、オスカー先輩が望むんなら、どんな姿にだってなります」

「え、え、オスカーとレア? な、何をしてるんですか?」

オスカーはもう本当に頭が痛くなってきた。後ろにいるのが誰なのかは振り向かないでも分かった。玄関ホールは余り人通りが無い

ようだったが、クラリーナもレアと同じ様にオスカーに会いに来たようだった。

「オスカー先輩。好きです。いつも誰かの事を考えているところが好きなんです」

「あ、あ……私、その……」

レアの姿で抱き着いて延々と好き好きと言ってくるトンクスの相手をしながら、後ろのクラリーナの相手をするのはオスカーにはできそうに無かった。チラツとクラリーナの方を見れば何故か顔をさっきのトンクスと同じくらい真っ青にしていた。

「クラリーナ!! これはレアじゃなくて、トンクスなんだ」

「ど、トンクス?? で、でも、トンクスでも言ってることは……」

「オスカー先輩、クラリーナ先輩じゃなくてボクを見てください」

もう大惨事だった。オスカーは杖でトンクスを失神させようかと考えたが、勝手に飲んだとは言え、トンクスは被害者には違い無かった。トンクスはクラリーナの方を向いていたオスカーの首を無理やり自分の方へと向けた。

「惚れ薬だ!! トンクスは惚れ薬を飲んだんだよ。早くスネイプ先生に解毒薬を持ってきて貰ってくれ!! 早く、クラリーナ!! 頼む!!」

「惚れ薬?? わ、わかりました」

「オスカー先輩、こつちを見て下さい。他の誰かじゃなくて、ボクの方を見て喋って下さい」

トンクスの方を向けば、またトンクスの顔色は真っ青になっていた。クラリーナと同じくらい真っ青だ。オスカーは自分の顔色まで真っ青になっていく気がした。

「クラリーナがいいの? オスカー? やっぱり、クラリーナがいいのよね?」

「おい、トンクス? 俺の言葉が聞こえてるのか?」

「聞こえてるわよ!! クラリーナがいいんでしょう? 二年生の時だって、オスカーから抱き着いてたのも覚えてるもの!!」

「二年生の時??」

レアの口調は書き消えて、トンクスの口調が戻ってきたが、顔色は

真っ青で瞳からは涙まで流れていた。

「小さい所がいいの？ 強気な所？ 誰にも頼ろうとしないところ？

黒い眼？ ダークグレーの髪？」

「トングス？ まさか、また……」

オスカーの嫌な予感の通りにトングスはクラリーナに変身した。ダークグレーの髪に真っ黒い瞳、小さい身長、グリフィンドールのローブ、間違いなくクラリーナの姿だ。

「だから変身するのはやめろって」

「なんで？ オスカーが好きな姿になるわ。オスカー、私、オスカーの好きな姿になりますよ？」

「声もやめろって」

「何ですか？ ダメなんですか？ 私、オスカーのこと好きです。

私じゃダメですか？」

またクラリーナの姿でトングスは抱き着いてきた。相変わらず、匂いこそ同じだったが、トングス、レア、クラリーナと抱き着かれると感触が違うことは嫌でも伝わってきて、オスカーはその感触やら、体温などでちよつと参ってしまいそうだった。

「オスカー、ジェマが言ってた蜂蜜酒……」

「愛しています。好きです。だって、オスカーは誰かの事、自分が傷ついても、どんな障害があっても守ろうするじゃないですか。私、オスカーのそう言うところが本当に好きなんです」

「俺はそんなじゃないし、とにかくやめろって…… エスト??」

本当にオスカーは頭がおかしくなりそうだった。これはオスカーの感じたことのないストレスだった。一年生の頃にグリフィンドール生に追われたりしていた時だって、これほどに精神的には追い詰められていなかった。

「オスカー、クラリーナと何してるの？ ねえ？」

「オスカー、愛しています。私の方を見てください。私はオスカーの事をずっと見てます」

エストが来ると同時に、クラリーナの顔をしたトングスがまた真っ青になった。それに加えて、感情の色がのっていないエストの声もオス

カーは聞くのが嫌だった。エストの方を見れば、ほとんど無表情でこつちを見ていた。

「エスト、惚れ薬だ」

「オスカー、エストじゃなくてこつちを見てください。私はエストよりあなたの事を見てるし、考えてるし、好きなんです」

「なんなの!! 二人で決勝が終わるまでは……」

「エスト!! 惚れ薬だ!! トンクスが惚れ薬を飲んだんだよ!! 早くスネイプ先生を連れてきてくれ!! いいから早く!!」

「惚れ薬?! トンクス?! それトンクス?! わ、分かったの」

次に何が起こるのかは流石にオスカーでも分かった。案の定、クラーナの顔をしたトンクスの顔は真っ青になっていた。

「おい、トンクス、エストに変身するのはやめ……」

「オスカーはやっぱりエストがいいんじゃないの!! ずっと一緒にいるし、なんなのよ!! 最初にホグワーツであったのもエストだし!!

何を考えるのもエストが第一だし!! そんなのずるいわ!!」

「と、トンクス?! お、落ち着け……」

「エストのどこがいいのよ!! 黒くて長い髪? 紅い眼? 一番私たちの中でスタイルがいい所? 頭や成績が良くて魔法が得意な所?」

エストの特徴を列挙しながらトンクスはエストの姿に変わっていった。それもずっと泣きながら変身するのだ。オスカーはそれを見て、どんどん自分の頭がおかしくなってきた気がした。

「ほら、エストの姿になったわよ。オスカー、エストの方を見て欲しいの。ねえ、オスカー? こつちを向いて?」

「もうやめろって、姿を変えても仕方ないだろ」

「エストじゃダメなの? オスカー? エスト、オスカーのこと、好きなの。愛してる。ホグワーツ特急で初めて会った時から好きなの。みんなに優しいし、みんなの事考えてるし、自分が傷ついても誰かの事考えれる、オスカーが好きなの」

「ほんとにやめろって……」

エストの姿でまたトンクスは抱き着いてきて、オスカーはトンクスが言っている事や、伝わってくる感触、色んなモノでどんどん自分が

おかしくなっているのが分かった。

「オスカー先輩…… あ、上手く行き……」

「ジエマ!! お前…… いいから早くスネイプ先生を連れてこい!!
これはエストじゃなくてトンクスだ。惚れ薬が入ってたのは分かっ
てる!!」

「え?」

「とつとと連れてこい!! 早くしろ!!」

「わか、わかりました」

オスカーはいつ出したかもわからないくらい大声でジエマに言っ
た。抱き着いていたエストの姿のトンクスも声でビクツと震えた様
だった。ジエマは言われるままに大広間の方へと走り去っていた。

「オスカー? 今度はジエマがいいの? エスト、オスカーが望むな
ら、誰の姿にもなるよ?」

「ならないでいい」

「なんで? 私の姿じゃ、オスカーは満足できないんじゃないの?」

「トンクス、元の姿に戻れ」

「何だよ…… あんたが望む姿になるって言ってるじゃない!!」

後ろで人の声が段々聞こえてきた気がしたが、オスカーはもう色々
どうでも良かったし、何よりこれ以上色んな姿で色んな事を言われる
のも限界に近かった。ジエマに変身というより、これ以上誰かの姿に
なられるのが嫌だった。

「トンクス、誰の姿にもなる必要は無い」

「何ですよ? だって、私そのままじゃダメなんじゃないの? エスト並
みに頭やスタイルがいいわけでも、クラーナみたいに小さくて可愛い
わけでも、レアみたいな綺麗な色やパーツをしてるわけじゃないわ」

「オスカー先輩…… スネイプ先生はもう来ます」

「オスカー、惚れ薬の解毒薬も出来ましたよ」

「スネイプ先生はすぐに来るって言ってたの」

後ろで声があったが、正直、オスカーには何も聞こえていなかった。
オスカーはエストの顔でしゃっくりを上げて泣いているトンクスの
肩を持って言った。

「トunksには一番、トunksの顔が似合ってるよ。一番、トunksの顔が良い。バカやったり、クラーナに悪戯したり、くだらない事を言ってる時の顔が好きだ。だから変身する必要は無い。他の人の顔になる必要は無い。一番、元の顔が好きだから」

オスカーは奇妙な沈黙が流れた気がした。その沈黙を最初に破つたのはトunksだった。元のトunksの姿に戻って、髪色はいつかオスカーがハツフルパフの寮で見た時の様に真っ赤だった。トunksはそのままオスカーにキスをした後、抱き着いて押し倒した。

「うれしい!! すごく嬉しいわ!! オスカー!!」

変身することを止めることにはオスカーは成功したが、オスカーは色んな人の顔でキスされたり、抱き着かれたりして正直なところ結構限界寸前だった。

トunksはオスカーが見たことがないほど晴れやかな顔で、オスカーの上に馬乗りになっていた。

「ねえ? オスカー? オスカーは子供は何人欲しいの?」

「は? は? こ、子供?」

オスカーはさつきにも増して、トunksがもつと大変なことをしそうな気がし始めていた。

「そう、私もオスカーも兄弟はいないでしょ? でもチャーリーの家族を見てみると兄弟は一杯いた方が楽しそうだと思わない?」

身の危険をオスカーは感じ始めた。今のトunksは人前だろうが何だろうが全く気にしないと容易に予想できたからだ。

「オスカーの家は一杯部屋があるし、子供はいくらいても大丈夫よね?」

「では、ミス・トunks、お祝いの気付け薬だ。一杯やりたまえ」

「へ? スネイプ先生? いただきます?」

いつの間にかスネイプ先生が隣に来て、心底嫌そうな顔でトunksに何かが入ったゴブレットを差し出していた。

トunksはそれを受け取ってためらうことなく飲み干した。すると、だんだんポヤつとしていた眼に光が戻ってきて、それと一緒に顔がどんどん赤くなり、もともと赤かった髪の毛がさらに赤くなった。

最後には倒れたままだったオスカーのお腹あたりに頭が落ちる様にうつぶせに倒れた。オスカーはトunksが何かをぶつぶつ言っているのが聞えた。

「一番…… 一番……」

「ミスター・ドロホフ、後始末はしっかりするように」

スネイプ先生はオスカーとトunksの方を顔をぴくぴくさせながら、一瞥するとそのままどこかに行ってしまった。状況が馬鹿馬鹿しすぎて耐えられないようだった。

トunksはスネイプ先生が出ていった後もしばらくオスカーの上から動かなかった。他の人間も二人に喋りかけてこなかった。

「トunks、どいてくれないか。もう限界なんだ」

「限界…… 私の方が…… 限界に決まってるじゃない!!」

顔はおろか、髪から多分足まで真っ赤にしてトunksがオスカーの上で叫んだ。

「トunks? まさか、さっきの全部覚えてるのか?」

「覚えてるのかじゃないわよ!! 覚えてるわよ!! 私が言ったことも!! あんたが言ったことも!! 全部覚えてるわよ!!」

耳が壊れそうなくらいな大声でトunksは叫んでいた。ハツフルパフの寮で見た時よりも深刻な事が起こっているとオスカーは思わざるを得なかった。

「ほんとに…… ほんとに…… もう、どうなっても知らないから!!

この!! この!! ああ、もう!! どうしろって言うのよ!! 知らないから!!」

「トunks? まだ惚れ薬……」

「切れてるわよ!! もう効果がないから!! もうわかんないわよ!! あああああ!! もう知らないから!!」

トunksはそう叫んでどこかへ走り去ってしまった。オスカーももう何をしたらいいのか分からなかった。とにかく、どこか静かな所で、自分を取り戻したかった。

それに、人が何人もいたはずなのに静かな自分の後ろが怖かった。

闇祓い

「先輩。スクリムジョール先生に謝りに行きます」

「俺もトングスも、変身された三人も誰がやったかなんか分かってるし、もうやらないだろ？」

「やりません。やらないです。でも謝りには……」

「それより、トングスに謝りに行った方がいいぞ。ただ、俺は今絶賛避けられ中だからこれは一人で行ってくれ、パーシーとウツドも連れて行った方がいいかもな」

「分かり…… ました」

惚れ薬と七変化が化学反応して大爆発した事件から数日経ち、オスカーはスクリムジョール先生に呼び出されていた。簡単な話、ジェマが使った惚れ薬とは、スクリムジョール先生が授業で使っていたものが盗みだされたからだ。

しかし、オスカーはジェマやパーシーが罰則を受けた所で何か変わるわけでは無かったし、それにできれば一人でスクリムジョール先生に会いに行きたかった。

「じゃあ、ちゃんと謝って来いよ。俺は近づいたら殺すって言われているからほんとに手伝えないからな」

「はっ」

とぼとぼ歩いて談話室から出て行ったジェマを見送りながら、オスカーは横目で変身現代を暖炉の傍で読んでいるエストを見た。ここ一週間と一緒に、今日もエストに避けられている様だった。

こんなに喋る気が無く、へそを曲げていると言うのか、拗ねていると言うのか、オスカーにはどう表現したらいいのかも分からなかったが、エストとオスカーは三年目の喧嘩の時と同じくらい喋っていたかった。

さらにクラーナも同じくらい喋りかけてこない上、レアはブツブツ言っているし、チャーリーは最近オスカーの顔を見るたびに笑いだすわで、オスカーは散々だった。

もっとオスカーがダメージを受けたのはトングスの対応だった。

ハツフルパフの寮での一件の後も普通に接してくれていたもので、今回もそうなのではないかとオスカーは淡い期待を抱いていたが、他の三人どころか、しばらく近づいたら殺すとまで言われ、明確にオスカーに会わない様にトunksは行動しているようだったからだ。ここ一週間の間、オスカーはハツフルパフの友達と一緒にトunksしか見たことが無かった。

すぐに爆笑するチャーリーとずっと謝ってくるジェマ以外、オスカーはこの一週間ほどの間、ほとんど喋ってはいなかったがそれは誰かに記憶の事を話すという想いが湧きがってくることが少なくなっただけでもあったので、それはそれでいい事だったのかもしれない。

しかし、スクリムジョール先生に会いに行くというイベントができず、オスカーはそれについて聞かないわけにはいかない気がしていた。

「オスカー、うちのシーカーの機嫌が悪いから今度の試合は完勝だぞ」「良くやった。今度の決勝ではお前の方に賭けとくよ」

談話室を横切る途中でクイディッチのチームのメンバーに絡まれて、相変わらず、エストの機嫌を損ねたことをオスカーは褒められた。一瞬だけ、エストの視線がこつちを向いていた気がしたが、オスカーが談話室から出る時に見た際には、やっぱり変身現代に視線は戻っていた。

東の塔の方向にあるスクリムジョール先生の研究室に向かいながら、オスカーは何を聞けば良いのかを考えていた。

単純に聞けばいいのか？ 母親はどうやって死んだ？ 自分に誰かがかけた忘却術にそれは関わっている？ 彼女の名前も魔法省なら調べられるのではないのか？ そもそも、どうして誰かは自分に忘却術をかけたのか？

色んな質問を考えると同時に、オスカーの頭の中では色んな疑問が浮かんで消えていった。

気づけばもう研究室は目の前にあり、オスカーは少し気後れした。

結局、何を聞けば良いのかについて、何も考えがまとまっていなかったからだ。

それでも目の前の扉をオスカーはノックした。

「入りたまえ」

「失礼します」

オスカーは闇の魔術に対する防衛術の先生の部屋には毎年入っているはずだったが、スクリムジョール先生の部屋はなんと言うのか、はつきりと二分されていた。

ごちゃごちゃになってる本や書類、メモが散乱している場所と、綺麗に整理整頓された場所で部屋が大きく二分されているように見えたのだ。

「そのソファアに座っていたまえ。すぐに私も行く」

「はい。先生」

オスカーが促されたのは整頓された方にあるソファアだった。座ったソファアやテーブル等は、ペンスでも褒めそうなくらいに清潔感があり、ごみやほこり一つついてはいなかった。

オスカーは不思議だった。部屋というのは何となく、その人の個性が出てくる気がしたからだ。校長室はダンブルドア先生の様に、色んなモノや本が置いてあって飽きない部屋だったし、ハグリッドの小屋は物のごちゃごちゃしているが何か暖かかった。

だから、このスクリムジョール先生の部屋は、余りにも整頓された領域と乱雑な領域が明確に分かれていて、オスカーは違和感を覚えたのだ。

「ミスター・ドロホフ。呼び出した内容はスネイプ先生から聞いているだろうか？」

「はい。闇の魔術に対する防衛術の部屋にあった惚れ薬が使われたことだとお聞きしました」

「その通りだ。君も……どちらかと言うと被害者だとは聞いているが、まあこういった出来事の事は……余り、女の子に聞くことでは無いだろう」

「聞くこと……先生は何を僕に聞きたいのでしょうか？」

スクリムジョール先生の眼がオスカーの両目を捉えた。傷があり、確かに厳しい戦いを勝ち抜いてきただけのことにはある鋭い眼光だったが、スクリムジョール先生はオスカーの顔や眼からは何も読み取ることができなかつたように見えた。

「正直に話せば、惚れ薬について、君は恐らく私に話す気はないのだろうか？ スネイプ先生にもその犯人を言っていない時点でそれは分かっている」

「それは、どういう……？」

「もちろん、惚れ薬の管理ができていなかった私に今回は問題があるのだ。一年生がどうやって、開錠呪文が効かない扉を開けたのかは少し興味があるが…… 犯人が分かっているであろう君やその周りが言わないという事は、単純に君たちは君たちのグループとして、私に言うことは得では無いと考えているという事だ。まさにスリザリンらしいやり方だ」

どうもスクリムジョール先生はジェマやパーシーが犯人だという事はすでに知っていたという事らしい。オスカーにはますますスクリムジョール先生がオスカーを呼んだ意味が分からなかった。

「惚れ薬は…… 非常にセンシティブな問題だ。私は戦闘や捜査の訓練は受けていても、残念ながら、君たちティーンエイジャーのそういった面をサポートできる様なスキルは持ち合わせていない。だから、今日君を呼んだのは別の事を聞きたかつたからだ」

「別の事ですか？」

「そうだ。私が興味があるのは、校長についてだ。アルバス・ダンブルドアは非常に偉大で強力な魔法使いだ。しかし、私が在籍していたころから…… 彼は普通、一人の生徒にそんなに注目して自分で行動したりはしない。眼をかけていたとしても、自分では無く、別の教師に担当させるはずだ。その方が、教師の成長にも繋がる上、校長として誰かに肩入れせずに済み、中立性を保てるからだ」

ダンブルドア？ スクリムジョール先生はオスカーにダンブルドアについて聞いている様だった。オスカーには本当に何を聞きたいのかが分からなかった。

「君は確かに色々目立つ存在ではある。指折りの死喰い人と魔法界でも結構な名前を持った家との間の子供な上、四年生としては……少々、異常なレベルの技能を持っていると言えるだろう。しかし、ダンブルドアはそんなに君に目をかけているのかね？ 目をかけているにしても、少々、いつもの校長のやり方とは違うように見えたのだ」
「違う？ ですか？」

「さっきも言ったが、彼はホグワーツの校長であり、これまでも校長としての責務を果たしている。それがゆえに、彼は余り直接に生徒を導く様な事はしないだろう。彼はどちらかと言えば、先生方を取りまとめ、指揮し、先生方を通して君たち生徒を導かないといけない。しかし、君に対しては少し違うようだ。現に…… 君は何回か校長室に行っているのだろう。そして、ダンブルドアは君と校長室で話してから、随分とホグワーツを空けることが多くなったようだ」

「ダンブルドア先生がいない……？」

オズカーは記憶をたどってみた。確かに、最後にダンブルドア先生と会ってから、結構な時間が経っていた。それに、憂いの篩についても校長室に行くのでは無く、スネイプ先生の研究室で使う事が最近ではほとんどだった。

大広間でのご飯の席においても、決闘トーナメントの席でも、ダンブルドア先生の顔を見ることが少なくなっている気がした。

「もちろん、私は今は闇祓いでは無く、ホグワーツの一教師だ。しかし、ダンブルドアがそれほど動くとなれば、私も警戒するに越したことはないと考えている。彼は偉大な魔法使いだが、魔法省とは距離を置いていることでも知られている。そのため君に聞けないかと考えたのだ。魔法省を頼らないという事は、ダンブルドアは私が聞いても何も答えないだろう」

「僕…… 俺とダンブルドア先生がやっていたことを聞きたいのですか？」

オズカーには余り言っても問題がある風には感じなかった。すでにダンブルドア先生、スネイプ先生、キングズリーは何をやっているのかを手紙などで知っているはずだったし、同じ闇祓いのスクラム

ジョール先生に言っても問題はなさそうだと思ったのだ。

それにオスカーは、暗に聞くのでは無く、理由を説明して真正面から聞いてくるスクリムジョール先生のやり方は嫌いでは無かった。「そうだ」

「俺に……俺に忘却術がかけられていることはご存じですか？」

スクリムジョール先生は意外な顔をした。まるでオスカーには驚いている様に見えたのだ。

「ああ、知っている。君の忘却術について、何がそこに隠されているのか、私の元上司は知リたがったのでね。しかし、結局、我々魔法省は君の記憶を暴くのは諦めたのだ」

「隠されている……？　ですか？」

「そうだ。君の家に踏み込んだ段階で、我々はまだ君の父親、アントニン・ドロホフを逮捕することはできていなかった。当時は裁判も無いアズカバン送りがまかり通る程、敵対意識が強かった。それに……我々、魔法省魔法法執行部では、例のあの人が倒れた後もシヨツキングな事件が多発していた。ゆえに私の上司は君の頭の中の情報を欲しがったのだ。闇祓い局にも感情の向かう先が必要だった」

多分、シヨツキングな事件とは……オスカーにはだいたい何をさしているのか分かったし、何がやりたくて、忘却術を破ろうとしたのかも分かった。

「なるほど……俺は自分の記憶を取り戻したかったです。それでダンブルドア先生に相談していました」

「それで……戻ったのかね？」

「いえ……戻っていません。断片的に思いだすことはあっても、全部は戻っていません」

「ふむ……戻っていないのか……」

スクリムジョール先生は何かを考え込んでいる様だった。ただ、オスカーにはオスカー自身の記憶の中に、そんなにダンブルドア先生が重要視する記憶があるとは思えなかった。何せ、オスカーの記憶の中の登場人物はほとんど死んでいるか、アズカバンの牢獄の中だったからだ。

「先生、俺からも聞いていいですか？」

「ああ、構わない」

「俺は…… 最近になって、母親の記憶というか…… 母親が死んだときの記憶もおぼろげだったことが分かりました。というか、どうやって死んだかを聞かされたのかを覚えていないんです」

「なるほど…… しかし…… ああ……」

スクリムジョール先生は何か分かった様な顔をした。

「私からそれも話すことはできる。しかし、これはあくまで私の視点からの話だ。それでもかまわないなら聞くといい」

「はい」

ソフアーに座り直し、スクリムジョール先生はオスカーと目の高さを同じくらいにした。

「簡単な話、ある日、闇祓い局と、恐らく不死鳥の騎士団にも保護して欲しいという内容が届いた。それも二人分。一人は闇祓い局の現役の闇祓いのいところで、元々、聖二十八族と言う、魔法界では指折りの名家の出身だ。そして、もう一人は君というわけだ」

オスカーは黙って聞いていた。どこかに何かフツクの様子に記憶に引っかかる言葉があるのかもしれないと思ったからだ。

「もちろん、罨の可能性もあった。当時は例のあの人と我々の戦争の真っ只中であり、恐らく一番激しい時期だっただろう。あちこちで力のある魔法使いや魔女たちが殺されていた。そこで、我々は慎重に数人の闇祓いで確認に行ったわけだ。待ち合わせの場所に」

ここまでは、マンダンガス・フレツチャーが言ったことと何か変わるようにはオスカーには思えなかった。

「そこに彼女と君は現れた。そして、我々と恐らく何人かの騎士団が保護する予定だったのだが…… どうして分かったのか、死喰い人達が現れて戦闘になったわけだ。何人かの死喰い人が倒れ、我々にも死傷者がでた。我々には何が正解かは分からなかった。君と、君のお母上が味方なのかも敵なのかもだ。はつきり言って我々には、まるで君たちが釣り餌の様に見えたと言わざるを得ないだろう。そして、どうにも死喰い人の方も混乱しているように見えた」

混乱している？ 死喰い人が？ それに餌の様にしか見えなかったという言い方に、オスカーは目の前のスクリムジョール先生が、悪意を持って言うような人では無いと思っっているにも関わらず、怒りが湧いてくる様な、生理的に嫌悪を感じる気がした。

「結果としては…… 君のお母上は戦闘の中で、動けない君…… 君をかばって双方からの呪文を受けて亡くなった。君は恐らくその後、死喰い人側に回収された。お母上の御遺体はシャツクルボルトの家が回収したはずだ」

死んだ？ 自分をかばって死んだ？ オスカーはそんな戦闘の記憶も覚えてはいなかった。そしてどうしてそれを忘却させられたのかも覚えてはいなかった。オスカーは心のどこか見えない場所から、見えない恐怖という空気が、段々と吹き込まれている気がした。

「これを君に話して良かったのかが判断できない。しかし、君の保護者には伝えたと報告しておく方がいいかな？」

「はい……」

もう、オスカーには目の前のスクリムジョール先生も見えていない気がした。頭の中で考えても考えても、痛みがするだけで何も思いだせないのだ。

「ミスター・ドロホフ。人間は色んな人間がいるのは知っているか？」

「色んな人間…… ですか？」

「そうだ。君の様な純血の魔法使いも、混血やマグル生まれの魔法使いも、色々な考え方をする魔法使いもいる。しかし、魔法界や魔法省は一つとして動かないといけない」

「一つ？」

「我々は色んな考え方をして、ごちゃごちゃとした人間たちが集まっているが、それでも外から見れば、例えばマグルや他の国からみれば一つなのだ」

突然、スクリムジョール先生が何の話を始めたのかオスカーにはついていけなかった。

「そうでなければ、我々はマグルからの迫害の時代から生き残れなかったかもしれない。それに魔法使いや魔女、魔法族という我々の姿

すら分からないのだ。だが、これは我々全体では無く、我々一人一人にも言えることだ」

「本当に目の前先生が何を言いたかったのか、オスカーには分からなかった。魔法族？ 一人一人？ 何を指し示しているのか分からなかったのだ。」

「私は、魔法省の人間でもあり、今はホグワーツの人間でもある。どちらも私だが、属している場所によって、君にかける言葉は違うだろう。魔法省の闇祓いとしてはダンプルドアの事を君に聞くべきだった。しかし、ホグワーツの教師としては、君にその様な魔法省とホグワーツの関係に立ち入る様な事を聞くべきでは無かった」

確かにそれはその通りかもしれないなかった。どちらの立場でもものを言うのかは、人間誰しもが難しいと考えるだろうからだ。オスカー一人でも、例えばクイディッチの応援をする時に、スリザリンとしてチャリーに負けて欲しいのか、友達としてチャリーに勝ってほしいのかは難しいと思ったことがあるからだ。

「魔法省が大臣が変われば政策を変えるのは、大臣が持っている立場に合わせて魔法省全体が行動するからだ。人間が集まってできているのだから当然だが、人間も立場、頭の中が変われば行動も変わる。それは闇祓いでも、死喰い人でも同じことだ」

結局、スクリムジョール先生は何を言いたいのか？ オスカーには分からなかった。恐らくスクリムジョール先生が言っていることにとどり着くための情報が、オスカーには足りていなかった。

「最後に、一つ教えておこう。忘却術は色々な使い方をする。自分にとって害のある記憶を消す。例えば魔法を見たマグルに対して使うのが一番代表的だ。しかし、別の使い方もする。簡単な話…… 恐らく、私はこちらがこの呪文を開発した魔法使いの動機では無いかと考えているが…… 記憶に悩まされている自分や相手を守る為に使うモノだという事だ」

最後と言ったので、恐らくスクリムジョール先生の話はこれで終わりのはずだった。しかし、オスカーには最後のスクリムジョール先生の言葉が、母親の最後の話よりも、耳に残っていた。一体、誰が何の

意図で自分に忘却術をかけたのかをスクリムジョール先生は推測しているのだ。オスカーはそれを考えるのが恐ろしかった。

「ではすまなかった。ダンブルドアとの話を聞いたこと、惚れ薬の管理ができていなかったことを謝しておく」

「いえ…… そんな……」

スクリムジョール先生が言っていることも、またオスカーには段々と聞こえなくなっていた。オスカーはどうしてそんなに怖いのが分からなかった。

「では、失礼します」

「決闘トーナメントの決勝では期待している」

スクリムジョール先生の部屋を出て、オスカーは考えながらまた歩いた、どうして、忘却術を使ったのか？ オスカーはそれを考えるのが怖かった。それを考えるとどうしようも無く、怖いのだ。

憂いの篩を使えるのは数日後のはずで、また場所はスネイプ先生の研究室のはずだった。オスカーはそれまでに記憶の手がかりを見つけたかった。だけれども、何か言いようの無い怖さが記憶の事を考えるについてまわった。

「先輩。スクリムジョール先生との話は大丈夫でしたか？ やっぱ、私が行った方がいいですよね？」

「ジエマか…… 大丈夫だ。先生は犯人さがしをする気はなさそうだった。トンクスの方はどうだったんだ？」

多分、ジエマはスクリムジョール先生の部屋の外でオスカーを待ち受けていたに違い無かった。どうなるのか不安だったのだろうとオスカーは思った。

「トンクス先輩は許してくれるって言ったんですけど」

「じゃあ良かったな、一件落着だろ」

「その…… 何か、嫌なんです。怒られないのが。自分が悪いのに、オスカー先輩も、トンクス先輩も、スクリムジョール先生も、他の人も私を責めないし、私が悪いのに守られている気がして……」

ジエマがいつもとは違って目を合わせようとせず、少し低い視線のままそう喋るのを聞いて、オスカーは心臓が止まりそうになった気が

した。

今、ジエマは何と言ったのか？ それは、今、自分が怖い、考えた
く無いと思っっている事では無かったのか？

「大丈夫だろ。みんな許すって言ってるなら……」

「許すって言っても、本当は凄く怒ってて、許さないって思っ
うだからもう、口先だけ許すって言ってるかもしれないし……
何か、怒られないとの方が嫌だったんです」

「そうか…… じゃあ俺が怒っとくか？ 二度と惚れ薬なんか使
よ。トunksだったから許してくれたけど、エストに使ってたら、
多分、一生許してくれなかったかもな」

「はい。ごめんなさい」

オスカーはその場では何とかジエマに合うような言葉を言っ
しかし、頭の中は恐怖で塗りつぶされている気がしたのだ。

ジエマが言っていたことは、全部、自分に当てはまっている気が
したのだ。どれがどれに当てはまっているのかはまだ分からなかつ
分かりたくなかった。

頭の中でグルグル、グルグルと記憶に関する思考と、とりとめのな
い恐れが回りながら、あつという間に憂いの篩を使う日まで来てし
まった。

魔法薬の授業を受けながら、オスカーは相変わらず、それについて
の思考をしていた。どうしても、オスカーは何が怖いのかを考える勇
気が湧いてこなかった。

「オスカー、それ間違ってますよ。銀のナイフで切り刻むんです」

「ああ。ごめん」

隣のクラーナの声に空返事をしながら、そもそも、どうして怖いの
かをオスカーは考えようとはしていた。そして、隣のエスト、クラ
ーナ、チャーリーの顔を見て、他の考えが出てきた。

どうして、自分はこれについてずっと悩んでいるのに誰にも話せな
いのだろうか？ それはいつか思ったように、心配させるのが嫌だから
なのだろうか？

「それ、一角獣のたてがみで包まないとダメなの。オスカー」
「分かった。ありがとう」

これにもオスカーは恐れを何処かで感じているから、できていない気がした。それでも、自分の記憶について考えるよりマシな気がした。考えてみた。

トunksやエストにそういった血生臭い話を考えて欲しくないから、そういう話ができないのか？ オスカーはそれもあるとは思った。それでも、もっと違う場所に言えない大きな理由がある気がした。

「オスカー、それひとつ工程が抜けてるんじゃないかな？ 何か、湯気が面白い色になってるのと、材料が余ってるよ」

「そうかもな、チャーリー」

例えば、この隣のチャーリーに自分が悩んでいることについて、聞いたとして、何と答えてくれるのだろうか。赤毛でがっしりとした体形で、次男でシーカーで魔法生物が好きなの男は何と答えるのか？

『俺は自分が殺した女の子の名前とかの記憶と、自分を守って死んだはずの母親の記憶を思い出せないんだ？ どうしたらいいと思う？』

チャーリー？』

オスカーはチャーリーが何と言うのか考えてみた。

『記憶？ うーん。分からないな。僕に聞いたってことはエストやクラナにはもう言ったんだろう？ 先生方に聞くくらいしかないんじゃないかなあ？』

チャーリーはそんな感じで答えるかもしれない。しかし、オスカーにはたとえチャーリーがそう答えたとしても、自分はチャーリーがどんなことを考えて、そう言ったのかを考えるに決まっていると思った。

それに、チャーリーはきつとウィーズリー家のみんなにもオスカーをどうしたらいいのか聞くかもしれないと思った。

あの優しい夫妻はそれを聞いてどう思うのだろうか？ あの一年生の時にセーターをくれたウィーズリーおばさんは、オスカーの父親に兄弟を殺された女の人はどう思うのだろうか？

「オスカー、ちよつと話聞いてますか？　なんですか、あんまり私たちが長い事、その……　拗ねてたから、オスカーも拗ねてるんですか？」

「ああ、そうかもしれないな」

「そ、そうなんですか？」

オスカーがエストの叔母だったとして、チャーリーからオスカーが言った事を聞いたとして、果たして、エストの傍に置いていい人間だと考えるだろうか？

それも、四年の間、ずっと一緒に過ごしてきて、一言もそんなことは話さない様な人間に、何度も言うチャンスはあったにもかかわらず、エストはもちろん、断片的な記憶を見たクラーナにも、誰にも自分から言おうとしなかった人間を信用できるだろうか？

「拗ねてるの？　オスカーが？　オスカーが拗ねてるってこんなか見たことないんだけど」

「うーん。オスカー、話聞いてるのかい？　おーい」

「ああ、聞いてるよ」

そう、そうなのだ。言いたくなかった理由はそれなのだ。オスカーは嫌われなくなかった。ホグワーツ特急で最初に会って傷つけるのが怖かった時から、いつの間にか、嫌われたくないにそれは変わっていたのだ。

それからどんなに仲良くなっても、オスカーは仲良くなるほど、嫌われたくないと思ってるのだ。

そして同時に、誰かに話したいとどうして思っているかも分かった気がした。簡単な話、誰かに証明して欲しいのだ。自分は悪くないと言って貰いたいのだ。それがどうしようも無く、自分の事しか考えていない気がして、オスカーは嫌だった。

「授業はここまでだ。各自、試験管にいれて提出するように」

授業が終わればすぐにスネイプ先生の研究室で憂いの篩を使う予定だった。オスカーの頭の中ではもう一方の恐怖について考えようという、思考の流れがあった。周りのみんなに自分は悪くないと証明して欲しい、嫌われたくないという自分のどうしようもなく汚い面を見た後ではそれが考えられる気がした。すでに汚れた後では、汚いモ

ノを触るハードルが下がるように、それを考えられる気がしたのだ。
「ねえ、オスカー。大丈夫？ 流石にずっと無視してたのはエスト達が悪かったの」

「オスカー、聞いてますか？ 謝りますから、機嫌直して下さいよ」
「スネイプ先生の研究室に行かないと行けないから…… レアとの練習もあるし…… また夜な」

「オスカー、ほんとに上の空だけど大丈夫かい？」

オスカーは周りのみんなと喋る資格が無い気がした。エストやクラーナは特にだ。彼女たちがどれほど真剣に自分の汚い面に向き合っているかをオスカーは去年、身をもって知っていた。それなのに自分は延々とこんなことを続けているのだ。

三人の言葉をほとんど聞かずにオスカーは研究室へと向かった。まだスネイプ先生は来ておらず、オスカーはまたそこで延々と考え続けいた。

結局、忘却術を使った理由を考えると何が怖いのか、それは至極簡単な話だった。

「ミスター・ドロホフ。早いのは結構だが、魔法薬学もきちんとなしたまえ。君があのような出来の魔法薬を提出したのは初めてだ。授業中は集中したまえ」

「はい。先生」

スネイプ先生につれられて、オスカーは研究室に入った。相変わらず、薬の匂いと肌寒さがする場所だった。

「ミスター・ドロホフ。我輩はしばらく、魔法薬の材料をスプラウト先生からもらい受けるために外出する。生ける屍の水薬の解毒薬を最優先で作らねばならないとのことだ。我輩が出た後はしっかりと鍵を閉めてから行うように」

「はい。先生」

スネイプ先生が出て行った後の、薄暗く、冷たいこの場所は、今のオスカー自身にふさわしい場所に思えた。

憂いの篩の目の前に立って、オスカーは思った。あと少しの場所まで来ているのだ。恐怖は記憶を呼び起こそうとしているとオスカー

は思った。頭痛がさつきから鳴りやまなかった。

どうして忘却術をかけられたのかを考えるのが怖いのか、簡単だった。自分を守る為にかけられたと思うのが嫌なのだ。

自分の為にかけられたと思うのがどうしていやなのか？ そうしたら、誰かを恨むことや、自分以外の誰かに責任をおしつけることが、そいつのせいだと思えなくなるからだった。

簡単な話だった。オスカーは思ったかったのだ。あの出来事は全部、父親と死喰い人、それにヴォルデモートのせいだと思いたかったのだ。そしてその後、母親が死んだのも自分のせいだと思いたくなかったのだ。それも自分以外のせいだと思いたいのだ。

自分には何の落ち度もないと思いたいのだ。

そして、オスカーが一番嫌なのは、記憶を思い出せない理由だった。こんこんと蘇ってくる。湧き上がってくる記憶を憂いの篩に入れて確認する。

憂いの篩に入らなくとも、白いモヤが憂いの篩の上で、オスカー自身が聞いた声や形となって現れる。

記憶を思い出せない、シンプルで父親がかけた忘却術よりも強力なその理由。

思いだしたくないからだ。自分を守ろうとして、誰かのせいにしてうとする。その自分の姿を見たくないからなのだ。

父親や純血主義の連中が言っていたことを守っていれば、きっとオスカーは彼女を守れたはずだった。最初から関わらなければ良かったのだ。それは間違っているが、少なくとも守ることはできたのだ。

オスカーはそれを認めることも嫌だった。自分を守ろうとして、言い訳や、あまつさえ記憶や彼女の名前さえ失われたままにしようとした自分が受け入れられないほどおぞましく見えた。

既知と英知と

「スネイプ先生？ オスカー先輩？ あれ？ 開いてる?？」

地下牢にあるスネイプの研究室。レア・マツキノンはオスカーを探しにやってきていた。オスカーはレアにスネイプの部屋で用事を済ましてから練習に行くと言っていたからだ。

しかし、研究室のドアは開けっ放しであり、中には人が全く無く、冷たい地下の空気と薬の匂いが立ち込めていた。

鯉昆布やユニコーンのたてがみと言った、魔法薬に必要な高価な材料が貯蔵されているため、この場所には普段は鍵がかけられている事をレアは知っていた。

「あの？ 誰かいますか？」

レアが中に入って見たのはちらちらと踊る銀色の灯りだった。部屋の中央に置かれた机、その上にのっている石の水盆から、銀色の光が漏れ出していて、暗い研究室の中を何度も瞬くように照らしている。

引きつけられるようにレアはその憂いの篩に近づいた。

「オスカー先輩？ スネイプ先生？」

憂いの篩の上では銀白色のモヤが何度も渦巻いて、吸い込まれ、色んな人の姿を時々形作っては消えた。

「これは……？ オスカー先輩?？」

そして、一番多く現れるのは、レアが見たことのある半分くらいの年齢だと思える、オスカーの姿だった。

レアは憂いの篩の前に立って、上からのぞき込んだ。レアの記憶が確かなのであれば、レアはその部屋を見たことがあるし、入ったことがあるはずだった。

暖炉に大きなテーブル、椅子、タペストリー、床から何から何までピカピカに磨き上げられているその部屋はどう見てもドロホフ邸の広間だった。

少し、躊躇したものの、レアはその銀色が形作るモノを手で触れた。その瞬間、レアの体は憂いの篩の中に吸い込まれて、これまで見て

いたはずの研究室の風景が消え、冷たい暗闇の中を独楽の様に回りながら落ちていった。

「母さんは今日は家にいるの?」

「いるけれど…… どうしたのオスカー?」

気づけばレアはさつき上から見ていたドロホフ邸の広間に立っていた。そして、自分の後ろから二人の声が聞こえるのだ。

「オスカー先輩?」

「よく考えたら、写真って二人で撮ったら、相手しか撮れないから……」

「まあ…… 二人で写りたいっていうんでしよう。ふふ……」

レアの知っているオスカーの声よりも高い声だったし、身長もレアよりも低かったが、母親らしき女性と同じ、ちよつと赤みがかった黒髪の少年はどう見てもオスカーだった。

今よりも難しい顔が少なく、眼も柔らかい印象だった。

「じゃあ、撮りたい時にペンスを呼べばいいわ。そうしたら、ペンスが私が写真を撮ってあげれるから」

「ほんとに?」

「本当よ。でも、絶対に森の中じゃないとダメよ」

「分かった。ペンス!! カメラはどこ?」

バチツという音と共にペンスがカメラを持って現れる。オスカーがいつかレアに渡したのと同じカメラを持っている。ペンスはオスカーから見て、レアを挟んで向こう側に現れた。

「オスカーお坊ちやま、ここに用意してあります。それに外に行かれるならばちゃんと外套をお召しになつてください」

オスカーはレアに真つすぐ向かってきて、そのままレアの体を通り抜けた。

「うわっ!! え? これって…… 幻? もしかして、記憶? あの写真を撮った時の?」

「分かった!! じゃあ、行ってくる」

ペンスから外套とカメラを受け取るなり、オスカーは走り出して大広間から出て行ってしまった。

レアは辺りを見回して、なんとなく直観的にオスカーについて行かなければならない気がした。普通に考えればこれはオスカーの記憶であると考えるのが当然だったし、それにレアにはこの記憶の世界から出る方法が分からなかったからだ。

小さい子供の歩幅なので、レアでも走ればオスカーの姿を捉えることができた。ドロホフ邸の廊下を通り過ぎて、玄関まで行き、オスカーは森へと続く小道へと走って行った。

「なんで…… オスカー先輩の記憶が……」

森の中に入ってもオスカーの足取りは速度を全く緩めなかった。トンボが何匹か飛んでいる森の中をオスカーは全く迷いの無い足取りで進んでいくのだ。

そして、森の切れ目、森と森の間の小道の様な場所までオスカーは出た様だった。そこには白いひらべつたい石の上で女の子が座っていた。

「写真の子だ……」

「●●!!」

「うわっ!! びつくりさせないでよ。あーあ、どこまで読んだのか分からなくなっちゃったじゃないか」

女の子はオスカーの声にびつくりして本を取り落とした様だった。地面に落ちた本からカバーが外れて、中の本が出てきている。カバーには中世イギリスの歴史と書かれていて、中の本はレアも良く知っている魔法史の教科書だった。

「魔法史なんてあんまり面白く無いだろ」

「オスカーは何も歴史の面白さが分かってないね。ああ、私もホグワーツに行ったらこのホッグズ・ヘッドってところに行ってみたいな。小鬼の反乱の拠点になったらしいじゃないか」

「ホッグズ・ヘッドは汚いバーだから行かない方がいいって母さんが言ってたけどな」

まだレアにはオスカーと女の子の関係が分かっていなかったし、何故かオスカーが女の子を呼ぶ声が聞き取れなかった。しかし、それでも二人が互いに会う事を楽しみにしていたことぐらいは感じるこ

とができた。

「ふーん。そうなのか、この小鬼ってホグワーツにいるのかい？」

「小鬼はホグワーツにはいないんじゃないか。グリンゴッツには一杯いたけど」

「グリンゴッツって魔法界の銀行だったよね？ 私もいけるのかな？」

「いけるんじゃないのか？ そうじゃないとマグルのお金をガリオンとかシツクルに替えれないだろうし」

何となく、レアにも分かつてきた。この銀髪の女の子は恐らくマグル生まれだということがだ。

「とりあえず、こっちの森の中に入れよ。そうしないと僕が母さんやペンスに怒られるだろ」

「オスカーのお母さんや、そのペンスって人にも会ってみたいけどね」

二人はドロホフ邸の敷地の中にある方の森へと歩いていった。何度か入ったことがあるようで、ほとんど同じ景色の森だというのに二人は迷いなく歩いていった。

少し歩くと、どうやって作ったのか木でできたベンチの様なものがあり、二人はそこに座った様だった。

「ねえ。他の教科書も貸してもらえないのかい？ 私からは何も貸せないけど…… もう、こっちの学校の教科書はだいたい読んでしまつたし、それに魔法界の教科書の方が読んでて面白いんだ」

「別にいいけど。そんなに面白いのか？ 読んでも杖が無いと使えない魔法ばかりだし、魔法薬も大鍋が無いと何も作れないだろ」

そう言いながらも、レアの目からはオスカーが嬉しそうに見えた。女の子にお願いされているのが嬉しいのだろうか？

「やった。私は魔法界の事を全然知らないし、それに私の家には本なんて教科書くらいしかないからね。学校の図書館にもそんなに一杯本があるわけじゃないから」

「マグルの家なんて入ったこと無いけど。マグルは本を読まないのか？」

「マグルが読まないわけじゃなくて、お母さんとお父さんが読まない

ただけだね。二人は私に本を読むんじゃない、もつと他の子と遊びなさいって言うから…… そうだ。オスカー、私の家に来ないかい？」

「え？ ●●の家？」

女の子にそう言われた時のオスカーの表情は何とも微妙な顔だった。レアにはさつき母親に言われた事と、女の子に誘われていることの二つがオスカーの中で戦っているであろうと予測できた。それにレア自身も、家の外に出てみたいという気持ちや、誰かと話したい、遊びたいという気持ちは良く理解できたからだ。

「ダメなのかい？ 私はオスカーに本を貸してもらったり、お菓子を貰ったり、カバンを直してくれたりで色々やって貰ってるけど、こっちからは何もできていないから……」

「うーん……」

オスカーは本当に困っている様だったが、どうも女の子が不安げな顔を見るとそれに弱い様だった。これは何となく今のオスカーと同じだとレアは思った。

「一日だけなら…… 母さんやペンスにはれないでできるかも」

「本当にいいのかい？ じゃあ、今度会う時に一緒に行こう。母さんに言っておくよ」

パアッと明るくなった女の子の顔を見て、オスカーの顔も明るくなった。そして今が言いだすチャンスだとばかりに、オスカーは手元のカメラを出した。

「これ、前に言ってた魔法界のカメラなんだけど……」

「写真が動くやつかい？」

「そうなんだ。それで、写真を撮ろうと思うんだけど…… さつき言ってた外に行く話は秘密にしてくれよ。ペンス!!」

バチっという音と共にペンスとオスカーの母親が現れる。女の子はびっくりした顔で二人を見ている。それと同時にさつきまではつきり見えていた景色が銀色のモヤに埋もれだした。

レアは辺りを見回したが、どんどん銀色に覆われていく。

しばらくすると、また景色が開け始める。今度現れた景色はドロホ

フ邸では無く、さつきオスカーと女の子が喋っていた白い石の所らしかった。

白い石の上で、今度はオスカーの方がそわそわしながら待っているようだ。

「違う記憶？ これ、いったいいつまで続くん……」

「ミス・マツキノン。余り、人の記憶を覗くのはいい趣味とは言えない」

「す、スネイプ先生!？」

レアが気づくと後ろにスネイプが立っていた。どうも記憶では無く、本人の様にレアには見えた。オスカーの年齢を考えれば、もしここにスネイプが立っていたとしてももつと若いはずだったからだ。

「ごめん、オスカー、遅れちゃったけど、家に連れてきてもいいって」「ああ、でも、この格好で大丈夫なのか？ マグルってちよつとおかしな格好をしてるだろ？」

「私たちからみれば君たちの方が変な格好をしてると思うけどね。でも、オスカーはまだ子供だし、変な格好をしても大丈夫だよ。ほら、行こうよ」

「分かったよ」

レアはスネイプが続けて言葉を発さないことに気が付いた。スネイプはオスカーと女の子を目で追っているようで、それに続いて辺りを見回している様だった。

二人が完全に見えなくなったあと、声が聞こえた。

「おい、見たか？ カルカロフ、スネイプ。なんとまあ、ドロホフの息子がなあ……」

「私は…… 帰らせて貰う。少し、急用を思い出した」

「なんだ？ ダンブルドア相手のスパイか？ ご苦労な事だ」

「ロジエール!!」

レアは思わず大声をあげた。そこに立っているのはどう見ても、レアの知っている死喰い人の一人、ロジエールだったからだ。酷薄そうな笑みを浮かべて、二人が消えていった小道の方を見ている。三人の死喰い人はそれぞれ死喰い人が持つマスクを持っていたが、つけては

おらず顔が見えていた。

そして、もう一人のスネイプは今となりに立っているスネイプよりもさらに若いようだったが、そのまま姿くらまして消えてしまった。

「ご主人様に報告した方がいいのだろうか？」

「そうだな、カルカロフ。お前の勝手にいいんじゃないか？ 俺はあんまり興味が無いな」

カルカロフと呼ばれた男はまさにいいモノを見つけたという顔でロジエールと同じ様に二人が消えていった小道の方を見ている。レアは本能的に嫌悪感をこの男たちから感じた。

そして、さつきレアに喋りかけてきた方の本物のスネイプは何も言わずに二人の死喰い人を見ている様だった。

「じゃあ報告しておく」

「ああ、俺はドロホフと喋りに行く。プルウエットを潰す算段が必要だからなあ」

死喰い人が姿くらまして消えると同時に、レアはオスカーと女の子を追いかけて走り出した。嫌な予感がレアの頭の中でどんどん大きくなっていった。

「ミス・マツキノン!! 戻りたまえ!!」

レアはスネイプの言葉に従う気はこれっぽちも無かった。さつきの会話からみればスネイプが元死喰い人なのは明らかであったし、それよりも二人の行方が不安だったからだ。

小道を走れば小さな村に出た。石造りの家が何軒か建っているもののホグズミードよりも小さい村だった。その中でも、外れの方にあるひと際小さい家に二人が入ってくのが見えた。

「お母さんはまだ帰ってないみたいだし、私の部屋に行こう」

「なんか変なモノが一杯あるな。マグルの家って。それになんか家も小さいし」

「オスカーの家は大きいのかい？ 確かにペンスさん？ にお坊ちやまって言われてたね」

「ペンスさんってなんなんだ？ それに屋敷しもべなんてお坊ちやまってみんな言うんじゃないのか？」

「私はお嬢様なんて、ペンスさんから生まれて初めて言われたけどね」
二人は微笑ましい会話をしていると云うのに、レアの心臓は早鐘を打っていた。明らかに魔法力がある前提で会話をしているマグルの女の子、レアはその女の子をホグワーツのどこでも見たことが無かった。見たことがあるのは、相当な事があったても自分を失わないであろうオスカーが今にも消えそうに見えた時、そのオスカーが見ていた写真の中だけだった。

「ちよつと下からお菓子を取ってくるから待っててよ」
「分かったよ」

オスカーは女の子の部屋の中を見回していた。レアからしても余りに女の子の部屋としては殺風景な部屋に見えた。余り物を買いやえる余裕が無いのか、女の子の部屋には手作りであろう本棚の中にマグルの教科書らしきモノが数冊あった。

それにベッドの方にはオスカーから借りたであろう魔法界の教科書が枕元の一番取りやすい位置に置かれていた。

ただ、オスカーの視線はそのどこにも向いておらず、窓際に置いてあるガラス瓶に入ったツツジの花に向けられていた。

「はい、オスカーが持つてくるようなお菓子じゃなくて、その辺のスーパーで売ってるお菓子だけだね」

「ペンスが作るだけだしそんな凄いモノじゃないけどな」

「自分の家であんなの作るの凄いいけどね。うちなんてお母さんはあんまり料理しないし、ご飯もスーパーで買ってることが多いから」

慌てて視点を戻して見ないふりをしたオスカーとお菓子を持ってきた女の子、レアはそのお菓子に見覚えがあった。ドロホフ邸で夏休みにも何度かペンスが出してくれたお菓子だったからだ。

「●●!! 帰ってるの? あれ?もしかしてお友達が来てる?」

「うん!! オスカーが来てるよ!! オスカー、ちよつとお母さんに会ってみないかい?」

「僕が?」

「そうだよ」

女の子に連れられて、オスカーが一階に降りる。そこにはかなり疲

れた顔をしているモノの、女の子の母親だと分かる女の人がいた。

「いらつしやい。●●はあんまり友達がいらないのよ。ゆつくりしてね。名前はオスカー君？」

「はい…… オスカーと言います」

「なんでオスカーは結構強気なのになんかおろおろしているんだい？」

そして、レアを追って家に入ってきたであろうスネイプは、マグルの家族とオスカーがぎこちない会話を交わしてるのを、いつもの感情を感じさせることのない鉄面皮では無く、明らかに少し恐怖の色を感じさせる目で見ていた。

「オスカー君はどこに住んでいるの？」

「えっと、森の向こう？」

「そんなのどうでもいいから、お母さん、ジュースだしていい？」

三人の声が遠くなり、また霧のように銀色のモヤがあたりを覆い始める。レアにはもう、これが次の記憶に行く前触れであることが分かっていた。

「ミス・マツキノン。何度も言うが、人の記憶に入るのは許されることでは無い」

「スネイプ先生……」

銀色のモヤの中でいつの間にかスネイプがレアの傍にいた。しかし、レアはもう、スネイプに何と言われようと最後まで見ないといかない気がした。

また記憶が明確に形を取り始める。今度はドロホフ邸ではない、どこかの広い部屋であり、冷たい石畳の上に巨大なテーブルが置かれている。

レアはその円卓のごとく座っている人間たちを見て、おぞけを感じたが、それ以上にその中央に座っている人物はそんなレベルの存在ではないことが見て取れた。

「そんな……」

「闇の帝王……」

テーブルの真ん中王様のごとく座っている人物、それはどう見ても

ヴオルデモートだった。鼻が裂け、怪しく光る赤い瞳は縦に切れており、まるでその顔は蛇のようだった。テーブルの周りの人間がその人物を恐れているのは誰が見てもよく分かった。

「皆、よく集まってくれた。今日は他でもない、我らが親愛なるアントニンのその息子に来てもらった」

その声を聞いて、聴衆がまるで嘲るように笑った。

真ん中に座っている男の傍に、髪の色は違うがオスカーと顔のパーツがよく似た色白の男が茫然とした顔で座っていた。

「純血の素晴らしい息子だな？ アントニン？」

そして、蛇のような男の傍に恐怖で色塗られた幼いオスカーが立っていた。瞳からは涙が流れ、ただテーブルの上を見つめている。

「そしてこのオスカーには非常に仲の良い友人がいるのだ。マグル生まれの、可愛らしい女の子だ」

「そんな…… そんな……」

男が杖を振ると、先ほどの銀髪の女の子が金切声を上げて机の上で暴れているのが見えるようになった。

女の子からも周りが見えるようになったのか、オスカーの方を見て叫んだ。

「オスカー、助けて…… オスカー 怖い、怖い……」

もう一度男が杖を振ると女の子はまるで言葉が失われたように喋れなくなった。レアの隣のスネイプは何も言うことも無く、ただテーブルの上で起こっている事を見つめていた。その眼にはレアよりもよほど恐怖の色が浮かんでいた。

「なあアントニン？ お前は息子に雑種を作らせたいのか？ このヴオルデモート卿の腹心であるお前の息子とその穢れた血とでだ……」

「我が君…… そのようなことは決して…… 我が君…… お許しを……」

アントニンと呼ばれた男は必死にヴオルデモートに許しを請い、その隣に座っているオスカーによく似た髪色の女性はシヨックで何も言えないようだった。

ヴォルデモートが高笑いをした。

「ならば簡単だ。血が腐る前に切り捨てねばならない、当然、オスカー自身にやってもらおうではないか？」

「やめろ!! やめろ!! やめろ!!」

レアにはこれから何が起るのか理解できた。クラーナとオスカーが叫びの屋敷で閉心術の練習をしていた時に何を見たであろうかも理解できた。そして、こんな事が許されることが理解できなかった。

ヴォルデモートはそう言うのとオスカーに向けて杖を振った。

「インペリオ 服従せよ」

オスカーの表情が先ほどまでの恐怖に彩られた表情ではなく、何も考えていないような気の抜けた顔になった。

「アントニン、お前の杖を貸せ」

ヴォルデモートはアントニンと呼ばれた男から杖を受け取ると、オスカーの手にその杖を添えた。

「オスカー、こうするのだ…… 私がアントニンに教えたのと同じ術だ…… 全てを焼く炎をコントロールするのだ……」

ヴォルデモートがオスカーに渡した杖から、赤とも紫とも言える炎が鞭のように噴き出た。

「アントニン…… お前の息子は素晴らしいな？ お前があれだけ苦労した術をいとも簡単にやってのけたぞ？」

オスカーの何の感情も見られない表情が炎に揺られて映し出されていた。テーブルの上では女の子が声にならない声で叫び続けている。

「さあオスカー、穢れた血を自分の手で焼きつくすのだ」

オスカーが炎の吹き出す杖を持ってテーブルへと進んだ。

ヴォルデモートがもう一度杖を振るとまた女の子の声が聞こえるようになった。

レアにもスネイプにもその声が聞こえた。

「オスカー、やめて、やめて、やめて、お願い、オスカー、オスカー!!」

!!」

女の子が恐怖の表情でオスカーに向けて泣き叫ぶ。オスカーはまったく動じずにテーブルへの距離を詰めた。女の子の声がどんどん大きくなる……

女の子に炎があたる直前でオスカーの足が止まった。オスカーの顔はもう一度、さっきよりも大きな恐怖で色塗られた。オスカーは女の子の前で立ち尽くした。

「オスカー、お願い、お願い、助けて、怖いよ……」

「ほう、服従の呪文を撃ち破るとは…… アントニン、お前の息子は優秀なオーラーになれそうだな？」

しかし、オスカーはまるで石になったように体を動かすことができない様だった。女の子の前で炎の鞭を持ち、彫像のように固まっていた。

「アントニン？ 私は息子ができないときは父がその手を動かしてやるべきだと思うが？」

そう言われると、アントニンと呼ばれた男がオスカーの後ろに立ち、オスカーによく似た手でオスカーの手を動かそうとした。

オスカーは無茶苦茶な言葉を吐いて、手を動かして抵抗しようとしていた。

しかし、自分の何回りもある大人に手を動かされ、ヴォルデモートの魔法で固められた体を動かすことはできず、炎の鞭は確実に女の子に近づいていた。

「やめろ!! やめろ!! こんな事許されるわけがない!!」

「オスカー、やめて、やめて、熱い、熱いよ……」

炎の鞭が女の子の体を焼いてゆく。オスカーと女の子の声にならない叫びと悲鳴がレアとスネイプを打ちつくした。そしてきつと肉や髪や服や焼ける匂い。何とか生きようとして、体がもがいている感覚が大きなテーブルを通して、二人にも伝わってくる。

ヴォルデモートの高笑いだけが響く中、また、銀色のモヤが全てを遠くへと追いやり、許されるはずの無い記憶さえどこか遠くへと消えていった。

しかし、また記憶が明確に世界を映し出す。今度見えてきたのはドロホフ邸のはずだった。さつきアントニンと呼ばれた男とオスカーと同じ髪色の女が口論している。

その間で失神しているのか、寝ているのかオスカーがペンスに支えられて椅子に座っていた。

「家から出さない様にしろと言ったはずだ!! なんて出した!!」

「あの年頃の男の子を家に閉じ込めておけるわけがないでしょう!! それに!! なんてことを!! なんてことを!!」

「穢れた血が一人死んだだけだろう!!」

「ああ…… 許されない!! この子は二度と私たちも、あの男も、自分自身も絶対に許さなくなってしまう!!」

泣きながらオスカーの母親はオスカーの頭を撫でた。父親の方も混乱している様だった。一体何を言えいいのか分からない様に見えるのだ。

「あのお方はオスカー自身がやらねば絶対にお許しにならなかった!!」

「あんな男が許されるわけがないわ!! 絶対に許されない!! いつか報いを受けることになる!!」

「あのお方を誰が許さないと言うのだ!!」

「誰かではなくて、誰もが許さないとやっているの!! 特にこの子は絶対に許さなくなるでしょう!! きつと、何があっても許さないわ。あの男は自分が何をしたのか分かっていない!! それに…… あなたも分かっていないのでしよう!!」

レアもスネイプも何も言わなかった。二人の怒号だけが広間に響いていた。そして、何度も続く口論の中で、やっとオスカーは起きようとしているように見えた。

「もう、こんな所にはいられないわ。今すぐにオスカーを連れて出て行く!!」

「ダメだ。今出て行けば、お前たちも我々に追われることになる。我々は勝利目前なのだ。今から違う陣営に行っても生き残れはしな

い」

「あんな男の下で生き残ってどうするって言うの!! オスカーがあんな男の下で働くと思うの!! そんなモノ!! それこそあいつは自分で自分の身を焼こうとしている様なモノよ!!」

「オスカーお坊ちやま。大丈夫でございます。ペンスは傍におります」

ペンスの声が響くと同時に二人の視点もオスカーに注がれた。オスカーは起きた時から自分の震える手を見ていた。一瞬で顔色は真っ青になり、眼も焦点が定まっていなかった。真ん中だった。

「簡単な事だ。忘れればいい」

「何を…… あなた、まさか、そんな」

「オブリビエイト!! 忘れよ!!」

母親が制止するのも聞かずに父親はオスカーに忘却呪文をかけた。オスカーの震えが止まり、顔はぼやとした。

母親の方はまるで恐ろしいモノを見る様な目でオスカーと父親を見た。

「これで終わりだ。何もかも忘れればいい。戦争が終わるまではここでじっとしている」

「臭いモノにふたをして終わりだって言うの? アントニン、オスカーも人間なのよ。いつまでもそんなことをしていられないわ」

「思えばまたかければいいだろう」

「オスカーが成人になっても同じ事をするって言うの? 魔法なんかでごまかすことはできないわ。この子はそんなに弱い魔法使いにはならないわ」

「いいから、戦争が終わるまではじっとしている!!」

そう大声でどなり、父親は広間から出て行った。母親の方はそれをじっと睨みつけた後、まだぼやっとしている顔のオスカーを見て、瞳に涙を浮かべた。

レアにはどうしてこの記憶がここにあるのか、大体の予想がつき始めた。どうして、オスカーが何度もスネイプの研究室に行っていたのかも、その理由が分かり始めた。

また銀色のモヤが現れて、違う記憶へと移ろうとしている。まだ、オスカーの記憶は終わりでは無かった。

「母さん、一体どこに行くの？ 父さんは家でじっとしてろって……」
「いいからついてきなさい。もうあの家にはいられないの。貴方がいい場所じゃなくなっちゃった」

「でも、父さんとペンスは…… それにここはどこ……」

今度は母親がオスカーを連れて歩いていている様だった。恐らく山中の様だったが、周りには二人の他に誰もおらず、オスカーの方は母親の行動に戸惑っている様だった。

「動くな。アンリエットとオスカーか？ 何か証明できるものはあるか？」

「あなたは誰？ ここにキングズリーからきた手紙があるわ」

闇の中から声がした。レアにはその声に聞き覚えを感じた。その声はレアの近くにいる誰かの声にそっくりだったからだ。

「イライザ、近くに行かないと分からないにちげえねえ」

「じゃあダング、あんたが見てこい。それにこういう時に名前を呼ぶんじゃない」

二人組で現れたのは、身長こそ多少クラーナより上だったものの、ダークグレーの髪と黒い眼でクラーナそっくりの女性だった。隣のマンダンガスは以前レアが見た時と何も変わってはいなかった。

「うんにゃ…… 俺が行ってもちゃんと読めるか……」

「伏せる!! エティ!!」

オスカーと母親の後ろから声がした。明らかにオスカーの父親、アントニンの声だった。二人が伏せると同時に緑色の光線がイライザとマンダンガス、それにオスカーと母親がいた場所に向かって飛んできた。

「おいおい、ドロホフ。これじゃ釣りとして失敗だろう？」

「流石のアントニンでも、息子と妻は大事ってわけかい？ まあでも、あの闇祓いの女を殺ればおつりがくるねえ」

死喰い人がそれこそ一ダースはいるかという数で後ろから呪文を打ち込んでいた。その中には明らかにレアからしても見たことのある

る死喰い人が何人もおり、明らかに形勢は不利だった。

「おい、ロジエールのアホに、レストレンジのアバズレじゃないか、ダング、ラツキーだ。あいつらを捕まえれば私も魔法大臣一直線かもしれない」

「イライザ、俺は逃げたほうがいいとおもうんだが……」

「レストレンジ、お前の御主人とはやれたのか？ お前は自分の夫に興味が無くて、闇の帝王とか名乗ってるチンピラにゾツコンだつて聞いたぞ？ ほんとか？ 苗字変えた方がいいんじゃないか？」

何本も緑色の光線がイライザに向かって飛び、何本かがオスカー達に当たりそうになったので、オスカーの父親が杖で光線を曲げた。

「黙れ!! お前の汚らわしい唇であるお方になんと不敬な事を!!」

「ベラトリックス!! やめろ!!」

「おいおい、ほんとにゾツコンなのか？ どうした？ 惚れ薬でも使ってみたらどうだ？」

「こいつは…… よくも……」

すると今度は死喰い人達に向かって、違う場所から赤い光線が撃ち込まれた。イライザ達からではなく、他の場所からだ。

「闇祓い局だ。直ちに投降しろ、次は失神光線では無い」

レアもその声が誰なのか分かった。恐らくルーファス・スクリムジョールだ。闇祓い局もこの場所に来ているらしかった。

「どうなってるんだドロホフ？ これじゃあどっちが畏にかかったのかわからねえぞ」

「分からん。とにかく、オスカーとエティを……」

そう言っている間に完全にここは戦場になった。お互いに相手を殺す気で緑の光線が飛び交う。そんな中でオスカーと母親は光線の飛び交う中心にいたのだ。

「母さん。父さんはあつちだ。どうしたらいい？」

「オスカー、あなただけでもあの人たちか闇祓い達の方へ行きなさい」

「何で？ 父さんは？ ペンスは？ 母さんは？」

「いいから行きなさい。貴方はここにはダメ、あなたが自分を許すには向こう側に……」

その瞬間だった。二人が話すのを見て、お互いの陣営が敵が喋っていると思ったのか、双方から死の呪文が飛んだ。母親がオスカーの上にかぶさるように抱き着いた。

「やめろ!! やめろ!! やめろ!!」

オスカーの父親の声が響いたが、その時には全て遅かった様だった。明らかに緑色の光線を何度も撃ち込まれた体は、オスカーの体に辛うじて引つかかっているだけの様だった。

きつと、オスカーには緑色の光線が彼女の体に当たった時に、グオオオオという見えない何かが舞い上がる様な音がしたに違い無かった。

「母さん? 母さん?」

「そんな…… そんな……」

もはや、お互いの陣営は勝利する目的を見失っているように思えたが、お互いの死の光線の応酬は止まらなかった。緑色の光線があらゆる場所に撃ち込まれていた。

そんな中で、オスカーの父親はなんとかオスカーの元へとたどり着いた様だった。オスカーと母親が動かなかったために、もう呪文を打ち込む先として認識していないのだろう。

「母さん? かあさ……」

「ペンス!! オスカーをつれて戻れ!!」

父親がそう言うと、ペンスが現れて、オスカーだけを連れて姿くらましました。その瞬間にレアとスネイプも一瞬でドロホフ邸の広間へと移動した。あくまでオスカーの記憶なので、オスカーがいた場所しか再現されないのだ。

「ペンス!! 母さんが!! 母さんが!!」

「オスカーお坊ちやま。落ち着いて下さい……」

「父さんもまだあの場所にいるんだ!!」

「オスカーお坊ちやま。落ち着いて下さい……」

「母さんは僕を闇祓い局か、あの女の人と男の人に渡そうとして……」

「頭が痛い……」

「オスカーお坊ちやま? オスカーお坊ちやま?」

オスカーは途中まで言おうとして、そのまま床に崩れ落ちた、頭を抱えて、うずくまっている。その横でペンスがどうしたらいいのか分からずにうろたえているのだ。

「僕が、僕が外に出たから……… なんで……… 母さんも……… 嫌だ」

「オスカーお坊ちやま。落ち着いて下さい。ペンスは傍におります」

「僕のせいだ。僕のせいだ。僕が外で遊んだから。僕が僕が父さんは母さんを助けようとしたのに」

「オスカーお坊ちやま。オスカーお坊ちやまは悪くございません」

「僕が遊ばなきや、会わなければ、母さんは僕を連れて行こうとしなかつたんだ」

どう見ても、オスカーは父親がかけた忘却術を破っている様だった。レアもスネイプもさつきから一言も喋つてはいなかった。どういふ言葉も言いようが無かつたからだ。

バチツという音と共に父親が姿現しした様だった。その顔はまるでさつきのオスカーそっくりだった。

「オスカー、こつちを見ろ」

「父さん、母さんが、僕のせいなんだ」

「こつちを見ろ!! オブリビエイト!! 忘れろ!! 忘れろ!!」

父親の杖から何度も何度も忘却呪文が発せられて、オスカーに当たった。それをペンスが何も言わずに見ている。

「ペンス!! この家に誰もいれるんじゃない。俺も含めて誰もいれるんじゃない。ホグワーツに行くまで、オスカーの面倒を見ろ」

「ご主人様は……… どうなされるのですか?」

「いいか、俺がさつき言った事と今から言うことは誰に対しても言うことを禁じる。そして、今から俺が出て行った時からこの家とお前の主人はオスカーだ。それだけだ」

「ご主人様!! オスカーお坊ちやまにはご主人様が………」

「もう、お前の主人は俺ではない」

そう言つて、父親は姿くらましで消えた。銀色のモヤがどんどん濃くなつていく。これまでとは違い、どんどん濃くなる銀色はいつしか暗闇となつていて、レアとスネイプの二人はいつの間にか研究室に

戻っていた。

再び戻ってきた研究室にあるのは静寂だった。相変わらず、憂いの篩から漏れ出る銀白色の光が研究室を照らしていた。しばらく、レアもスネイプも何も言わなかった。

「ミス・マツキノン…… 戻りたまえ」

一度、スネイプがレアにそう言ってもレアは何も反応しなかった。

「ミス・マツキノン、聞こえているかね？ 自分の寮に……」

「ボクの名前をその口で言うんじゃない!!」

レアがそう叫んだ瞬間に研究室にあった何本かの標本が入った瓶がはじけ飛んだ。スネイプはどうやったのか、すでにいつもの感情を感じさせない鉄面皮が戻っていた。

「誰にそんな口を利いているのか分かっていないのかね？ ミス・マツキノン？」

「分かっている。お前なんか言われなくても、ボクには分かっている。セブルス・スネイプ。お前が汚いデス・イーターで、お前は、お前は、お前は……」

レアが喋るたびに起こっている爆発は収まりつつあった。それなのにも関わらず、彼女が喋るたびに、その言葉には明確な、洗練された、怒りがこもっている様だった。

「ふざけるな!! ふざけるな!! ふざけるな!! ふざけるなよ!! なんなんだ。お前は、お前は、ここでじつとオスカー先輩があれを思い出すまでじつと見てたつて言うのか？ 自分が見ないふりして、あんな事が起こつたのにじつと見てたつて言うのか!?!」

「ミス・マツキノン、君は感情をコントロールできていない。一度落ち着きたまえ」

鉄面皮のままのスネイプを見て、レアが手を振った。振った瞬間に研究室の燭台に火が灯された。怒りに紅潮したレアの顔と土気色のスネイプの顔が照らされる。

「セブルス・スネイプ。ボクがお前に聞いてるんだ。お前はあんなことを引き起こした原因の一人なのに、ここでアスカバンにも入らず

に、悠々と暮らして、よりにもよって、オスカー先輩が記憶を取り戻すのを見てたって言うのかって聞いてるんだ」

「先生とつけたまえ」

「お前!! お前!! お前!! いったいどんな気分で見れるって言うんだ!! 自分が売り渡したも同然で、あんな事になったオスカー先輩を見ていた? ふぎけんなよ!! 人間なんだ!! ふくろうや甲虫なんかじゃないんだ!! なんなんだ。思いだすのを見て笑ってたのか? 出荷される豚を見るのと同じ気分か? ふぎけてんじゃない!!」

レアはじつとしていられないのか、研究室を歩きながらスネイプに言葉をぶつけていた。スネイプの方はただただじつとして、時々レアに言葉を返していた。

「ミス・マッキノン、何度も言うが君は正常ではないようだ」

「あんなの見て、正常な奴の方がおかしいんだ!! 許さない。魔法省が許そうが、ダンブルドアが許そうが、お前は許されるべきじゃない!! 誰が許したって、今、ここで見たボクは許さないぞ!! クソっ、クソっ、クソっ、なんなんだよ!! オスカー先輩が何をしたって言うんだ!! あんなことがあった先輩になんで閉心術の練習なんか頼んじゃったんだ……」

怒りで紅潮しながら、スネイプを罵倒し続けているレアだったが、その顔には涙が流れていた。スネイプの方はやはりまだ土気色の顔色のままだった。

「クソっ!! お前、お前と裏切り者のシリウス・ブラックと何が違うって言うんだ!!」

「っ!!」

ただ。レアは気づいてはいなかったが、シリウス・ブラックの名前が出た瞬間だけは、スネイプの顔が醜くゆがんだ。

「何度も言うが、レア・マッキノン。君は感情をコントロールできていない。もはや一度、叫びの屋敷に戻った方がいいのではないかね?」
「ボクの名前を呼ぶなって言っただけだ。それにお前が言う感情のコントロールが、自分の気持ちを押しつぶす事なら、そんな事はクソだ。閉心術の練習とワンドレス・マジックの練習をして分かった」

レアが手を上に風を扇ぐように振ると、最初にレアが爆発させ、粉々になった瓶や標本類が舞い上がり、中身の水分こそ戻らなかつたが、レパロを唱えたように元の姿に戻っていった。杖は彼女のポケットに入ったままだった。

「自分が怒りたい時に怒って、泣きたい時に泣いて、怒つちやダメな時は怒らないで、自分のその時の感情を認めないとダメだったんだ。認めもしないで押しえつけたって何も上手くいくわけない。自分のせいじゃないって何かのせいにしたって上手くいくわけがない。お前みたいな裏切り者に分かるわけがないだろうけど」

「ミス・マツキノン、何度も言うが……」

「ボクの名前をその汚い口で言うなって言っただけだ!! お前の汚い口で言われるたびに呪われているみたいだ。お前なんか時間に時間を使ったのが無駄だった。ボクはオスカー先輩の所に行く」

「ダメだ。今の君は正常ではない。フリットウィック先生と一緒に対応を考えなければならぬ。コロポータス 扉よ閉まれ!!」

スネイプが呪文をかけて扉をしめた。グチャツツという音と共にしまった扉は呪文の効果として、同時に鍵も閉まっているはずだった。「お前みたいな人の事も考えずに自分の事ばかり考えて、生き残ってきたやつがろくな死に方をするわけがない。扉を閉めて、この薄汚い地下牢で腐っていくのがお似合いだ」

レアはそう言うと同時に手を捻るように動かして、その後、押し出すように手を動かした。それだけで鍵が開く音と同時にゆっくりと扉が開き始めた。

ニワトコの杖

天文台の塔、ホグワーツで一番高い場所。オスカーはその途中まで登って、一番上の天文学で生徒達が使うはずの星が見える場所まで行くことができなかった。

天文学で使い、シニストラ先生が管理しているはずの望遠鏡や天球儀が沢山ある場所で一人座っていた。カバンは放り投げたのか何冊か教科書や、レアから借りたワンドレス・マジックの本が飛び出していた。

オスカーの頭の中はぼうっとしたり、突然思考が鮮明になったりを繰り返していた。

「一番高い所……」

考えて、否定して、また距離を置いて、飲み込めないモノを何度も何度もかみ砕き、咀嚼しようとしても、考えれば考えるほど、噛めば噛むほど、自分の汚らしさや、弱さや、どうしようも無さが溢れ出ていた。

ここに来たのもそれと同じ事だと分かっていた。あれほど思いだそうとして、他の記憶は思いだしているという事実が、どうしようもなく自分自身のどうしようもなさを肯定しているのだ。

最初からオスカーには分かっていたはずだった。

自分は思いだしたくないのだと。みぞの鏡で彼女を見た時に自分は何を思ったのか？

クラーナが可哀想だから同情して鏡を壊そうとした？

それは違うはずだった。確かにそれもあるはずだったが、きっと見たく無かったのだ。自分が違う事をしていたら、もう少し慎重だったならばと考えるたく無かったのだ。

どうしようもない。どうしようもないのだ。記憶と一緒に見て、励まして貰ってどうして嬉しかったのか？ 安心したのか？ それでいいと肯定されたからに違いなかった。

その肯定は自分のどこを肯定されたから安心したのか？ きっとクラーナは自分の違う部分を見て声をかけてくれたのに、自分は何に

安心していたのか？ それは自分が忘れようと、見ないで、直視しようとして自分を肯定されたように感じたのでは無いのか？

エストが髪飾りを持つていなくなつて、自分は何を一体恐れていたのか？ 本当にエストが二度といなくなつて、自分を恐れていたのか？ 恐れていたのは本当にそれなのか？ 本当に怖かつたのはまた間違えるかもしれないと、同じことをするかもしれないと思つたことでは無いのか？ 嫌でも同じモノを見せられる、自分がやつたことを考えないといけないことが怖かつたのでは無いのか？

頭の中で、自分のこれまでの行動が、自分の見ようとしてこなかつた場所と繋がつて、それが自分の見ようとしなかつた場所を、隅の隅まで照らしていくようだった。

どうして、自分はエストに心配だと、最初から言えなかつた？ 言えないことにいら立つていた？ どうしてそれを言うことが怖かつた？ そんな事はわかり切つてのことだった。誰かに踏み込むのが恐ろしいのだ。どうして恐ろしいのか？ ただ、少し、踏み込んで、家から出て、誰かの家に行つて、誰かの事を知ろうとしただけでどうなつたのかを知つていたからだ。

何故、レアを励ましていたエストやアバーフォースが強く見えた？ そんな事は当然だった。自分はどうして怖いのかすら忘れようとしていて、怖いことそのものがいら立つ理由や、エストやアバーフォースが強く見える理由だと思つていたのだ。

自分の感情と思考がどうしようも無いほど研ぎ澄まされている気がオスカーはした。これまでしてきた経験をほんの少し、一歩引いた状態で眺めながら、思いだした事実が、忘れようとしていたことが、これまでの経験を一つ一つ、丹念に切り分けて、余すところなく、観察している様だった。

それがどこのどれを切り開いても、自分で理由をつけようとしても、自分自身のどうしようも無さを、どうあつても、自分の都合のいいようにしようとするところを浮かび上がらせるのだった。

何をどうすれば何かが見えるのか？ そもそもオスカーは自分が何を見たかつたのか分からなく……

「オスカーお坊ちやま!!」

「オスカー先輩!!」

聞きなれたバチつと言う音で塔の静寂は壊されてしまった。ペンストレアの声を聞いて、オスカーが思ったのは、そう言えばレアとの練習があることを忘れていた事だった。

「レア、練習はごめ……」

「どうしてすぐに謝るんですか?」

レアにそう言われても、オスカーの中からは理由など特に出ては来なかった。単純に自分が練習をすっぱかしたから謝ったのだ。

「なんでって……俺が練習に行かなかったから……」

「どうしてオスカー先輩は練習に来なかったんですか?」

「それは……単に俺が行きたく無かっただけだ」

「それは?ですよ? 行きたくないならオスカー先輩は直接言いに来るはずだ」

オスカーにはレアが何を言いたいのかわからなかった。二人の隣でペンスがびくびくしながら二人の様子をうかがっていたし、それにオスカーはまだ頭の中ではさつきから考えていたことを考え続けている、何か目の前にいる二人の存在に現実感が無かったのだ。

「俺には……レアが何を言いたいのかわからない。単に練習に……」

「いつもの先輩なら!! ボクがこうやっていきなりペンスと一緒に姿現しでやってきた時点で!! どういう状況なのかくらいわかっているはずなんだ!!」

いくら他に意識がいつていたオスカーでも、目の前で大声を上げられてはレアを認識しないわけにはいかなかった。明るい黄色の目には不安と誰かに対する怒りの色がオスカーには見て取れた。

「どういう状況なのかって言われてもな。俺がレアとの練習をさぼってここにいただけだろ」

「だから!! ボクを見ろって言ってるんだ!!」

そうレアが叫んだのと同時にオスカーの首が無理やりレアの方を向けさせられた。レアが無理やり自分の方を向かしたのに違い無

かった。

「ぎつき…… スネイプの研究室で見ってきました…… 石でできた水盆みたいなモノの中で…… 全部見てきました……」

レアがそう言った瞬間に、魔法で捉えられてレアの方を向いているオスカーの首に嫌な汗が流れた。嫌な想像が堰を切った様にオスカーの頭の中を流れていった。

「いったいどこまで？ どう思われる？ 部屋を出る時に鍵は閉めたのか？ 目の前のレアは何を言おうとしている？ 自分はどれくらいいい？」

「いつもの先輩なら、ボクがこんなこと言わなくなつて、どうしてボクが目の前に立っているかわかるはずなんだ……」

「オスカーお坊ちやま…… レアお嬢様は煙突飛行でお越しになられ、ペンスめにお坊ちやまの所へ連れて行って欲しいとおっしゃりました……」

今度は恐怖に阻まれて二人の声はオスカーに届いていなかった。何を知られている？ 何を喋ればいい？ 自分の事を喋らないといけないのか？ 今、自分は、目の前で涙を浮かべているレアにどう思われている？ どう評価されている？ そして自分はどうなる？ 何を聞かされる？ 一瞬で漠然としない恐怖が具体的なモノとなつて、頭の中に湧き上がってきたのだった。

「先輩は何をしていたんですか？ この一年間、時々、先輩はスネイプの研究室に行くって言っていました。スネイプの手伝いをするって言っていましたけど、本当はあの記憶を見る道具で何をしていたんですか？」

「それは……」

「何をしていたんですか？ 教えてください」

目を開いて、オスカーはレアの顔を見た。段々、オスカーもどういう状況なのか頭が回り始めていた。もし、レアの言う通りに憂いの篩に入れた全ての記憶を見たのなら、どうしてオスカーが憂いの篩を使っていたのかは想像できるはずだった。

なぜならあの記憶は、忘却呪文を使われた記憶で終わっているはずだったからだ。

「あそこに入っていた記憶と…… 名前を思い出そうとしてたんだよ」

「思い出したのなら、オスカー先輩はここで何をしてるんですか？
教えてください」

ここで何をしているのかと聞かれても、オスカーには答えようが無かった。誰にも会いようが無かったとしかオスカーには言えなかつただろう。

「分からない」

「なら、どうして練習に来なかったのか教えてください」

オスカーは一つずつ、逃げ場が塞がれていく気がした。段々と自分が喋りたくないところへと、自分が見たくない場所に近づいている気がしたのだ。

「会いたく…… 会いたくなかったからだ。レアだけじゃなくて……」

他のみんなもだけど」

「何で会いたくないんですか？」

逃げ道が段々と無くなるに従って、状況が見えてくると同時に、自分の中で何かがはち切れそうになっているのがオスカーには分かった。もちろん、レアに自分の中で、今年ずっとモヤモヤしていて、何度も火がつきそうになっているモノを吐き出してもいいのかが分からなかった。

「それは……」

「それは何ですか？ ボクに会うと何がダメなんですか？ ボクが頼り無いからですか？ 年下だから？ それとも感情をコントロールできていないから？」

「そうじゃない…… 少なくともレアのせいじゃない」
「どうしてボクのせいじゃないってわかるんですか？」

レアは全く以てオスカーを逃がしてくれそうに無かった。そしてオスカーの中では、潮が満ち引きするように、冷静になると、感情が溢れそうになるのが繰り返されて、どこかにあるはずのボーダーラ

インを越えてしまいそうだった。

「俺のせいだからだ。俺がそう思っているからだ」

「何をどう思っているんですか？」

「それは…… だから……!!」

どうして会いたくなかったのかは分かっていた。ただ、何か言ってしまうえば、土砂崩れや雪崩が起きる様に、もう歯止めが利かなくなってしまう気がしていた。

「ボクのせいじゃないって言うなら、ボクを納得させて下さい。オスカー・ドロホフ」

「何を言って……」

「そうじゃないなら、ボクは勝手に想像して、オスカー先輩を決めつけます。これまで会って、見たオスカー先輩と、さっき見た記憶の中のオスカー先輩から、オスカー先輩はこういう人だって思います。オスカー先輩が自分の口で喋ってくれないなら、ボクはボクの中の先輩だって思います」

「いったい何の話……」

オスカーにはレアが何を言おうとしているのか分からなかった。レアが思っているオスカーとは何なのか。

「オスカー先輩は優しい人です。あんな記憶があるのにボクの閉心術の練習に付き合ってくれました。ボクがオスカー先輩なら怖くてそんなことはできない」

「違う……」

「思い出そうとするのは凄く辛いはずなのに、誰にも心配させたくないって思ってたから、誰にも言わなかったんでしよう？」

「そうじゃない!!」

「今もそうだ。自分の余裕がなくなって、人に何を言ってしまうか分からないから、誰かを傷つけたくないから、一人になろうとしたんだ」

「絶対違う!! 俺はそんな人間じゃない!!」

違う、違う、違う。オスカーには分かっていた。そんなご立派な理由ではないのだ。レアが思っている様な自分ではないのだ。だから、いつまでたっても思い出すことができないのだ。

「じゃあどういう人間なんですか？　ボクにどうして会いたくなくなつたんだ？」

「俺は…… あんなことをして…… それを忘れようとして…… そんなやつが、言つていいわけないだろ!!　俺はレアに、君になんて言つた!?　自分を許せるようにだつて？　自分で忘れようとしてた奴が？　そんなこと許されるわけないだろ!!」

そう、だからオスカーはレアに会いたくなくなつたのだ。何と云えばいいのか、会つてどういう顔をすればいいのか分からなかつたのだ。「オスカーせんぱ……」

「俺と違つて!!　忘れずに!!　これまでずっと向き合つてきたレアに言つていいはず無かつただろ!!　そんなの言つて良いわけがない!!　そんなことあり得ない……　論外だ。やつてることがお笑いなんだ」

ホグワーツに入つてからずっと、それよりも前、ペンスと二人になつた時から、オスカーはずっと冷静であろうと努めてきたつもりだつた。感情に振り回されて、どうしようもないことにならない様にしてきたつもりだつた。ただ、そうしようとすればするほど、内側から何かがこみ上がつて、あふれ出しそうになることが何度もあつたのだつた。

「でも先輩は……」

「俺はレアが思っている様な人間じゃない。そんな人間じゃないんだ。俺が記憶を思い出して、何が一番嫌だつたと思つてるんだ!!」

「何を……」

「俺が一番何が嫌だつたかつて？　名前を思い出せない事でも、母親の事を忘れてたことでもない!!　一番嫌だつたのは父親が自分の思つてた様な奴じゃなかつたことなんだ……」

何より、オスカーが自分の事が嫌だと思つたのはいつたいなんだつたのか？　自分の性根が一番見えた事がなんだつたのか？

「忘れてたけど、俺はずっとそう思つてたんだよ。そう思いたかつたんだよ。俺のせいじゃない、父親のせいだつて。だつてそう思うだろ？　思わないか？　彼女がああなつたのも、母親が死んだのも、俺が

嫌な思いしてるのだって、あいつのせいだって思ってたんだ。だってその方が楽だからな」

「それは……」

「だっておかしいだろ？　なんで家族と喋った後にレアの家族を殺した話ができるんだ？　なんでエストの家族を殺したやつが、自分の家族は守ろうとできるんだよ!!　おかしいだろ!!　おかしいだろ!!　おかしいだろ……」

▪

一番理解できないことがそれだった。オスカーにとつて一番理解できないことがそれだった。どうして相いれないようなことが一緒にできるのか？　そしてそれが事実だという事こそが、逆にオスカー自身にもそう言った面があると思わせるきっかけになったのだ。

「だからってオスカー先輩の……」

「だから俺は忘れたかったんだよ。俺のせいじゃないって思ったかった。思ったかったんだ。きつと今もそう思ってる。だから、俺はレアやエストやみんなが凄く強く見える。なんでそう分かるかって？　簡単だろ。これだけ思い出してどうして名前を思い出せない？　俺

が思い出したくないからなんだ。名前を思い出したらもつと辛くなるだろ？　だから思い出したくないんだ。一番やつちやいけないことなのに!!　俺が一番覚えてなきやいけないのに……」

「オスカーお坊ちやま……」

自分の一面が照らしだされるにつれて、オスカーはこれまでの色々な行動に理由がある気がしたのだ。自分の中にグツグツと煮え立っている何かが、時々外側にでてくるのだ。それは自分を見るよりも、周りの誰かを見た時に一番出てくる気がしていた。

「どうしてオスカー先輩は自分にはそういう見方をするんですか？」

「そういう見方ってなんだ？　俺はどこから見てもこういう人間だろ」

「先輩は他の人を見る時にそういう見方をしない。人が何かをする時に悪い面もいい面も見れる人だ。なのにどうして、自分の悪いところだけ見るんだ」

あれだけ言ったのに理解されてないとオスカーは思った。レアが言っているオスカーのいい面というのも、オスカーからすれば、自分の一番嫌な面から現れた、そこから伸びていった何かとしか思えなかったのだ。

「だから俺のいい面なんて言うのは、俺の一番クソみたいな面から出てきたことに過ぎな……」

「絶対違う!! なんで? どうしてそんなに自分の事を否定して見ようとするんだ!! 自分の嫌な面をそんなに真面目に見るんなら、自分の良い面だって同じくらい見ないとおかしい!!」

いつの間にかレアの魔法は解けていて、オスカーはもう自由に首を動かすことが出来たし、レアの顔以外だって見ることができた。けれども、正面から向き合うことをしないのは許されそうにないと分かっていた。

「その良い面って言うのが、俺の腐ったところから出てるものに過ぎないって言ってるだろ!!」

「そんなわけない!! いまさつきオスカーは自分の父親に言ってただろ!! 人殺しをする奴が家族を守るなんておかしいって!! それと同じなんだ。嫌な面も良い面も両方あるに決まってるだろ!! どっちが先かなんてどうでもいいことなんだ!!」

レアが言ったこと、それこそがオスカーが一番受け入れがたいことだった。どうしてそんなものが一人の人間の中で共存していられるのか、自分の嫌な面と良い面が両方あって、そのどちらを取るのか、どちらを取ればいいのか、自分はどうなっているのか分からないのだ。自分の事であるはずなのに。

「どうでもいいわけないだろ!! 本気で考えて、俺が一番嫌だと思ってることが、きっと全部の原因になってる……」

「違う!! だって、今、ボクはオスカーの話を聞いたけどそうは思わない。オスカーの言う通りなら、ボクは嫌な面と良い面両方知っているはずで、それでもボクはオスカーの事を悪い人だとか、情けない人だ

とか、許せない人なんて思えない。もし、オスカーの悪い面が良い面の下にあるとしたって、良い面が無くなるわけじゃない。だって、どっちもあるから人間で、ボクからはどっちも見えてるはずなんだ」全部まとめて、レアはオスカーの事を肯定しようとしている様にオスカーには聞こえた。しかし、それでもオスカーには納得できなかった。なぜなら、オスカーは根本的なところで間違っていたのなら、全てが無駄になってしまう気がしていたからだ。

「だから外から良い人の様に見えたって、最初が根本が間違っていたら、それは何の価値もない……」

「どうして初めから間違っていると決めつけて見るんだ!! そんなこととしても間違っているモノが見えるだけに決まってるだろ!! 間違っていると見て見ようとしているんだから!! なんで最初から最後まで見ないんだ!! 最初から最後まで間違っていない人間なんているわけないだろ!! そんなこと言ったらボクだってずっと間違えたままに決まってるだろ!!」

オスカーが言っていることに対して、レアは全て返すつもりだった。確かにオスカーが自分の事を否定するのは、同時にレアの事を否定していることになるのかもしれない。

「なんで、どうして、オスカーは見ようとしなんだ。自分でだって言っただろ。自分がそうだから、エスト先輩が強く見えるって言っただろ。それはオスカーがそういう経験があるから強く見えるんだろ。ボクに会いたくないのだから、ボクに自分を許せなんて言うのが許されないって言ったのだから、オスカーがそういう事を経験したからそう思えたんじゃないか。なんで、どうしてそんな事を言うんだ」

オスカーには分からなかった。目の前の女の子はボロボロ泣いて言ってくれているのに。言葉と心を尽くして言ってくれているのに、言うたびにどれほど心が擦り切れそうになるのか、オスカーには分かっていないはずなのに、ただ、分かったと、自分で自分の事を許すと言えばいいはずなのに、それができないのか分からなかった。

「俺は……」

「自分の事が許せないって、名前を思い出せないのが許されないうって、自分がそれをやらないといけないうってオスカーは言った。それが何より、オスカーの事を表してるってボクは思うんだ。それにこれはボクの勝手だけだ。オスカーが自分の事を許せないって思ってるって、そう思ってることがボクは嫌なんだ。だって、それじゃあ、ボクも絶対許せない。自分の事を許せない。許せなくて、次の事が何もできない。魔法も使えない。何をやったって、昔の事が変わるわけないけど、でも、何もやらないのは嫌だ。自分の事を許せないから、良いことをできないなんて、凄い事を、誰かに褒められることを、誰かに笑ってもらうことができないなんて、そんなのボクは嫌だ……」

やっぱり、オスカーは目の前で泣いて震えている女の子が自分よりもずっとずっと強く見えた。レアが今言った事こそが、これまで、オスカーが誰かの目の前に理不尽が降りかかった時に、どうしようもないくらい、何とかしたいと思った理由ではないのかと思ったのだ。

それはきつと、どちらかと言えば、自分に向かっていて、後ろ暗く、そういうモノを知らない人から見れば分からないモノかもしれないなかつた。

それでも、それが自分の中で溢れていて、時々、一気に燃え出す様に感じるのだ。溢れて燃え出した後に、自分が少しだけ変わった様に感じるのだ。

そして、それはきつと今もそうだった。今度のは、自分では無く、目の前の唇をかんで、目を何度も拭っているせいで真っ赤になっている女の子から、彼女から移った火が、少しだけ自分を変えた様な気がした。小さい火が少しだけ辺りを照らして、世界が広がった様な気がしたのだ。

「レア。分かったから、情けないことは言わないから、とりあえず、泣くのはやめてくれ」

「本当？ 本当？」

「ああ、今すぐにどうとは言えないけど、今、うじうじ考えるのはやめるって約束する」

「本当ですか？ 本当？ て、天文台から飛び降りたりしない？」

「いや…… 最初からそこまでは考えてなかったけど…… 多分……」

今、状況を考えてみれば、オスカーもそう思われてもおかしくないと思った。それにレアばかりに気を取られていたが、レアの隣のペンスも何故か目をウルウルさせていた。

「ペンスめには入る余地もありませんでした。レアお嬢様がいらつしやれば、オスカーお坊ちやまは安心でございます」

「ペンスは何を言ってるんだ。というか、ホグワーツに暖炉飛行なんてできる場所があるのか？」

「マクゴナガル先生の部屋の暖炉を借りました」

「先生が貸してくれたのか？」

「いえ、誰もいなかったので強引に入りました」

「そうか……」

オスカーは深く突っ込むのをやめた。突っ込んでも、良いことが起こると思えなかったからだ。

「オスカー先輩。本当に大丈夫なんですか？ 本当に？ 約束してくれませんか？」

「約束？」

「えっと…… うーんと、ボク、勝ちたいです。エスト先輩やクラーナ先輩やトンクス先輩に……」

「勝つ？」

「だ、だから、今度の試合にちゃんと、勝つつもりでやりたいです。二人は凄いですけど…… その、ボクでもやれるって証明したい。そうしたら、そのオスカーせん…… オスカーも自分の事を信じれるようになれませんか？ さつきから凄いい、失礼なことばかり言ったかもしれないけど……」

ちよつとだけ、オスカーは胸が暖かくなった気がした。目の前の女の子は本当に自分の事を考えてくれているに違いないと思うことができたからだ。

自分の事を許せないとしても、誰かが許してくれると、許せと言うのなら、許さないといけない気がするのだ。

「いや。凄く嬉しかった。ずっと何か、モヤモヤして、腐って、広がって行くモノが、何か違うモノになった気がする。ありがとうな。前に言ってみたみたいに、俺の事を見てくれて」

「あつ…… お、オスカーせん……」

ちよつと、オスカーは色々、まだ何かを飲み込めてはいなかった。それでも、何か血液では無い、熱いモノが体の中を動いている気がした。

「ちよつと、俺は時間を置いてから帰るよ。また、明日から練習しような」

「え？ は、はい……」

▪ まだ少し、時間が必要な気がオスカーはした。レアの言葉は劇薬の様に染みわたっている最中だったが、体と頭がまだそれに追いついていない気がしたのだ。

「ペンス、レアをレイブンクローの寮まで連れていってくれ。ああ、終わったならそのまま家に戻っていい」

「分かりました。オスカーお坊ちやま」

「あ、お、オスカー先輩…… その、ボク……」

ペンスがレアの手をとって姿くらまししようとした。その時に、オスカーはきつとレアがペンスに連れてきてもらったのは意図があつてやったことなのだろうと思った。他にも手段はあつたはずなのに、あえてそれを選んだのだろうと思ったのだ。

「ありがとうな。二人とも。俺のこと見てくれて」

二人が目を見開いたのと同時にバチつと言う音がして、ここには誰もいなくなつた。天文台の塔の吹き抜けから風の音だけが聞こえた。

二人がいなくなると同時に、自分の周りの色んなモノが、やつと、見えて、聞こえる様になつた気がした。

冷たい石の床に寝転がると、そこから冷気が伝わってきて、嫌でも自分の体がどこにあるか分かるのだ。外の何かがあると、やつと自分

を自分として認識できる。

だから、誰かの名前を忘れてはいけなのだと。自分が感じている事や、貴方は貴方だと誰かに言うことで、初めて、誰かは誰かの感じている誰かを、自分だとわかるのだと。オズカーは知っていた。

やっと、少しだけオズカーは色んなモノが見えてきた気がした。もう、外は完全に暗くなっていて、とつくに外出禁止の時間になっているに違いなかった。

オズカーは自分がここに来た時に放り投げたカバンの中身を拾って回った。変身術の教科書、レアから借りたワンドレス・マジックの本、検知不可能拡大呪文のせいで何冊も本を入れていたので、結構な冊数を入れなければならなかった。

その本の中で一冊だけ、目新しく見える本があった。帯で白い歯を輝かせたイケメンの男がこちらに微笑んでいる。そういえば、トンクスに貰った、レタス喰い虫のエサにもならない本をクリスマスから入ればなしだったと気付いた。

胡散臭い笑みを浮かべるギルドロイ・ロックハートを無視して、オズカーはパラパラと本をめくった。魔法の真実の姿を見る？　というタイトルのその本は、内容は全く無いように思えた。延々とこう言うことを言ったら魔法はこう考えていると言うことが書かれていて、オズカーには自分の周りの魔法に当てはめることが出来るとは思えなかった。結局、彼女は冗談でこの本を贈って来たのだろうか？

そう考えながらめくっていると、落丁なのか、一ページだけ、何も書かれていない。オズカーはピンときた。それに、まだ、談話室に戻って、このままの状態で寝ることができるとは余り思えなかった。さっきのレアとの会話で、自分の頭や体が鋭敏になってしまっている気がしたのだ。羽根ペンを取り出して、オズカーはそこに文字を書いた。

『トンクス？』

ページの上の方に書いたその文字は、しばらく何の変化もしなかった。オズカーは数分の間待っていたが、何も起こらないので流石に

フィルチやミセス・ノリスが現れるかもしれないと思い始めて、腰を上げようとしていた。本来、天文台の塔は立ち入り禁止なのだ。

『あてていい？ オスカー君でしよう？』

すると自分の文字が消えるのと同時に、女の子のモノらしき筆跡の文字が現れた。文章を見るに、相手はともトunksではないらしかった。

『そうだけど…… 君は？』

『トunksのルームメイトだけど…… やつと、この羊皮紙の意味が分かったわね。クリスマススの休暇の後からずっと、枕元の近くに置いてあったからおかしいと思ってたのよ。悪戯グッズかと思ってたけど、こういう事なのね。ふふーん』

やつぱり、どうも、オスカーも行った事のあるハツフルパフ寮の一室とこの紙は繋がっているらしかった。エストが忍び地図にかけた魔法と同じなのだろう。

『けど、どうしてオスカー君は今頃これを使ったの？ 私なら、キメラと戦った時か、惚れ薬の後に使ったのに……』

『今、初めて気づいたんだ。トunksは説明してくれなかったか……』
オスカーが途中まで書くと、何やら相手側からインクの染みの様なモノがほつぽつ現れてきて、文字が乱れてしまった。

壊れてしまったのだろうかと思ひ、しばらくオスカーがそれを眺めているとまた文字がでてきた。

『ちよつと!! ペニーと何の話をしてたのよ』

『トunks？』

『そうよ。いったい何の話をしてたって聞いているのよ』

『いや、今、これに気づいたから、トunksって書いたらその子から返信があつただけど』

やつとトunksがでてきたらしかった。だとするとさっきの乱れは羊皮紙の取り合いでもしていたのだろうか？ とオスカーは思った。

『だからペニーは何をここに書いたのよ』

『えつと、クリスマスから羊皮紙が枕元に置いてあつたから怪しかつ

たとかなんとか……』

『置いてないから、ずっとカバンの中だから』

『え？ でも、そのペニーって子が……』

『違う羊皮紙よ。あんた羊皮紙の見分けなんてつくの？』

『いやつかないけど……』

やっぱり、まだ惚れ薬の件で怒っているのだろうかとおスカーは思った。文字がどこか荒々しかったからだ。

『ふん。それでやつとこれに気づいたってわけね。随分時間がかかったじゃないの』

『ああ、天文台の塔で今、カバンからばらまいた本を拾ってて、それでこの本を思い出したんだけど……』

『はあ？ 天文学なんて今日はないでしょ？ なんであんたそんなとこにいるのよ？ エストとデートでもしてるの？』

『いや、今は一人だけ』

『今は？』

『さつきまで、レアとペンスがいたんだけど。ペンスにレイブンクロー寮に連れ帰ってもらった』

そう書くと、しばらく返信が無かった。オスカーはいつたいこの羊皮紙の向こう側ではどうやって書いているのだろうと思った。布団やシートでもかぶりながら書いているのだろうか？

『言つとくけど、私はもう知らないからね。来年はエライことになりそうだわ』

『何が？』

『あんたが自分の事も周りの事も見れてないってことよ』

トンクスがどういう文脈でこういうことを書いたのかは、オスカーには分からなかったが、さつきのレアとの会話の後のトンクスのこの言葉は、どうにもオスカーの胸にひっかかった。

『結局、トンクスの言っている、俺が自分の事を考えろってどういう意味なんだ？』

『はあ？ こんな文章でそんな小難しいこと書けって言うの？ だいたいよく分からないけど、レアともそういうこと話してたんじゃない』

の?』

『この羊皮紙、音も伝わるとかじゃないよな?』

『あんたバカよね? 後輩とそんな話してどうするのよ……』

確かにトングスの言う通り、後輩にそんな話や負担をかけるようなことをするのは間違っていたのかもしれないかった。

『あんたとかクラリーナみたいな人には伝わらないかもしれないけど。普通の人間に自分の事を考えろって言ったら、自分の事を大事にしてろって意味になるんじゃないの? ほんとにあんたスリザリンの人間なの? こういうのはスリザリンが一番お得意じゃないのよ』

これもトングスの言う通りかもしれないなかった。スリザリン生が一番得意なことだと言われてもしかたないかもしれないのだ。

『どうせ、あんたは本当に自分の事を考えたんでしよう? それでどうせ、エストの時みたいに自分のここが悪いんだ……俺はもうだめだ……クリスマスプレゼントが分からない……こんな死喰い人の息子で女たらしのクソ野郎なんて死んだ方がいいんだみたいな感じでしょ。まあ私もそう思うけど』

『いやなんか違う気もするけど……』

まだ怒っているのか、ところどころ毒が入っている気がしたが、なんと無く、オスカーはちよつと気分が明るくなっている気がした。

『あんたみたいなマイナス思考野郎がそんなことしても、嫌なモノしか見えないに決まってるじゃないの。だいたい、最初に自分の事考えろって、去年言ったじゃないの。別のくだらない事は覚えてるのに…… なんて肝心なことではできないわけ?』

トングスの言うくだらない事が何なのかは分からなかったが、さっきのレアと同じようなことを言っている様にオスカーには見えた。

『肝心なことって……』

『だから、自分の事を考えろっていつてるじゃない。こうじゃないかって思ったら、その時はそんなつもりがないことでも、後になるとこういう理由でやったんだって思っちゃうじゃない。そんなつもりはないはずなのにね』

そう思っているからそういう風にやったと思ってしまうという事

なのだろうか？ オスカーはレアとの会話以外でも、この夏休みに同じ様な事を聞いた気がした。

『俺が思い込んでるってことか？ 昔の事……』

『別に昔の事だけじゃないし、あんただけじゃないけどね。一回なんかこうじゃないかって思ったら、相手の事も、自分の事もそうじゃないかって思っちゃうでしょ。こうやって書いてる時でも、何か思ってたらそうじゃないかって決めつけて書いてるわけだし。簡単に言うと、オスカーはバカじゃないかって思いながら書いてるわけよ。だからバカに見えるわけ』

全部そう見えると聞いたいらしかった。色んなモノがそうだと思うってるからそう見えるのだと。

『じゃあどうすればいいって言うんだ？ 俺はそう思ってるんだからそうにしか見えないだろう？』

『だから自分の事を考えるんじゃないの？ そもそも普通の人間って、自分に都合のいいように考えるモノじゃないの？ そういうやつはまねすればいいでしょ？ あんたの一番近くにいるやつは無茶苦茶できてると思うわよ。あいつの考え方とか見方は私にはまねできないもの。まさにスリザリンだわ。あんたのもマネできないけどね』

『それって……』
トックスが言っているあいつが誰を指しているのかはオスカーには簡単にわかった。確かに彼女には、オスカーと同じものを見ているはずなのに、時々、違う視点から、同じものを違う形で見ていると思わされることが何度もあったはずだった。オスカーはしばらく、何も書くことができなかった。

『あんだ、これからスリザリンの寮に戻るわけ？』

『そうだけど…… どうかしたのか？』

『いや、なんかやつぱりずるいわよね。うん。ずるいと思うわ』

『はあ？』

『ちよつと今からクラリーナに会ってきなさいよ。ハツフルパフはフェアなのよ』

『いきなりなんなんだ？ この時間について会えるわけないだろう？』

オスカーはいつも通りではあったが、突然言い始めたトunksについていけなかった。そもそもこの時間に行っても談話室か寮にいらるろうクラーナには会えないだろうと思ったのだ。

『忍びの地図はあんたが持つてるんじゃないの?』

『そうだけど……』

『いいから開いて、エストの位置を確認しなさいよ。ああ、あとチャリーのア호가高速で動いてないか確認しなさいよ』

『わかったけど……』

オスカーが忍び地図を開いて、みんなの名前を探そうとすると、先に本の方にトunksが書き始めた。

『ほら、エストがスリザリン寮にいないってことは、まだクラーナと必要の部屋で遊んでるんでしょ? それにチャリーのあほはまだハグリッドの小屋の方を飛んでるわ。どうせまたヤバイ生き物が飛んでないか見に行ってるんでしょ』

『キメラもこうやって見つけたのか……』

トunksの方も写しで忍び地図を見ている様だった。彼女の言う通り、どうも三人はまだ寮には戻っていない様だった。チャリーは置いといても、二人はまだ練習しているのだろうか? オスカーは試合に勝つのは相当難しいと思った。

『じゃあ、あんたのミッシオンはグリフィンドールの談話室に侵入してクラーナに会ってくることね』

『なんでそんな……』

『行かないと、あんたに無理やり惚れ薬を盛られたって言いふらすから』

『そんなあほなこと……』

なぜかトunksはオスカーをグリフィンドール寮にやりたいようだった。後で自分がやられたように、クラーナをおちよくりたいのだろうかとおスカーは思った。

『それとね。これだけは言っとくわ。自分の事考えろって方はあんたはやる気無かったみたいだけど。もう片方は実行したでしょ』

『は? 今度は何なんだ?』

『だから、少なくとも、一年間、ニンファアドーラって呼ばなかったことだけは評価してあげるって言ってるのよ』

『それは……』

結局、オスカーにはトンクスが何を言いたいのか良く分かっていなかった。分かったのはクラリーナの所へ行けと言ったことくらいだった。

『じゃあちゃんと行きなさいよ』

『分かったよ。おやすみ』

『そうね。おやすみ』

ただ。お休みという言葉の後に、トンクスの名前が、手紙の最後に書かれてるサインと同じように浮かび上がった事だけは、素直にオスカーは嬉しかった。結局、オスカーがさっきの文字を使った会話で分かったのはそれくらいだった。

もしかしたら他の生徒達よりも色々な場所に行っているかもしれないオスカーだったが、この場所にくるのは初めてだった。多分、スリザリン生にとつて、一番縁遠い場所だった。

太った婦人と呼ばれる肖像画が合言葉を知っている生徒だけを通すのをオスカーは知ってはいたが、流石にその中には入ったことが無かった。

めくらまし呪文を使って、肖像画から見えないところから、オスカーはチャリーリーかクラリーナが来るのを待っていた。

待ちながら、今日は本当に良く分からない日だと思っていたのと、そう言えば、スネイプ先生の研究室を放り投げてきたままだと言うのを思い出した。明日、スネイプ先生に謝りに行かなければならないのは確かだった。そもそも、レアとスネイプ先生はあったのだろうか？

オスカーはどういう順番でレアが自分の所に来たのかも良く分かっていたいなかった。

「チャリーリー」

「え？ オスカー？」

なぜか木の葉が大量についたローブ姿で戻って来たチャリーリーに

オスカーは話かけた。めくらし呪文はきちんと効いているようで、チャーリーはオスカーの姿を捉えられない様だった。

「チャーリー、クラリーナに会いたいんだけど……」

「クラリーナに…… え、ちよつと待って…… 状況が読めないんだけど。もしかしてそんなに色々起こってるの？」

「いや、なんかトunksにクラリーナにあつてこいとかなんとか言われて」

「うーん。まあでも、なんか面白そうだから、談話室で待ってたらどうかな？ それにこれでオスカーは全部の談話室に入ったことになるんじゃないかい？」

「そういえばそうかもな」

オスカーはチャーリーに連れられて、めくらし呪文をかけたまま、太った婦人の前まで行った。太った婦人はピンクの絹のドレスを着た、とても太った肖像画だ。

「今日は透明なお友達と一緒になのね。合言葉は？」

「ケルピー」

チャーリーがそう唱えると、肖像画が前に開いて、中から壁が現れて、そこに穴があるようだった。オスカーはチャーリーと一緒にその穴に這い登った。

這い登った先にあるのは、これこそ本当にスリザリンの談話室とは対照的な、金色と赤色で埋め尽くされた部屋であり、暖炉が煌々と暖かに燃えていた。スリザリンの石造りの椅子とは違って、ふかふかとしたひじかけ椅子がいくつもいくつも並んでいた。

「もう今日はパースは寝てるみたいだし、あの辺で待つてればクラリーナは来ると思うけどね」

「あの辺？」

「ほら、何か本とか羊皮紙とかが散らかつてるところだよ。だいたいあの辺をいっつもクラリーナが確保してるんだよね。そこにパースが毎回、何か教えて欲しいって言いに行ってるんだ」

オスカーはチャーリーが指し示した場所に座った。確かにクラリーナのモノと思える筆跡の魔法薬学、闇の魔術に対する防衛術、変身術

なんかのレポートが書かれた羊皮紙が転がっていた。

他にも変身現代や日刊預言者新聞といった雑誌や新聞も転がっている様だった。いつもオスカーとエストが使っている椅子や机と状況は似ている気がした。

「まあでもオスカーはなんて言うか、生物学的に正しい生き物だね」
「何言ってるんだ？ トンクス並みに意味わからないぞ」

「うん。やっぱりこう、本能的なあれなんじゃないかなあ？ まあでも、そろそろ限界だよな。僕はまあ笑ってるだけでいいけどね」

「ほんとに何言ってるんだ？ というか、俺は何喋ればいいんだ？」
「うーん。多分、なんでもいいんじゃないかな？」

「それが一番難しいだろ」

チャーリーと喋りながら、オスカーは談話室を見回していた。もう、余りグリフィンドール生の姿は無いようだった。誰もいない場所に喋っているチャーリーが許されているレベルなので、このままいても問題なさそうだった。

それにオスカーは別の事を考えていた。自分がもし、グリフィンドール生になったら、ここで、エストとジェマと一緒に談話室で過ごしていた様に、クラリーナやチャーリーやパーシーと一緒に過ごしていたのだろうかと思っただのだ。

「珍しいですね。チャーリーがいて、パーシーがいないなんて」

「そうだね。じゃあ僕はお暇するよ。後でどうなったかちゃんと聞かせてね」

「は？ ちょっと、混乱薬でも飲んだんですか？」

「クラリーナ、多分、編み物の道具とかはしまっという方がいいんじゃないかな？ じゃあお休み」

「一体なんの話を……」

「クラリーナ」

「へ？ はあ？ オスカー？」

いきなりつかつかやってきて、チャーリーの隣に座ったクラリーナだったが、オスカーの

声を聞くと、聞いた瞬間にちよつと飛び上がった。

「な、なんですか？ めくらまし呪文？」

「ああそうだけど……」

「び、びつくりさせないでくださいよ…… とうか、一体何でここに？ も、もしかして、魔法薬学の時に言ってた、夜にまたなつて私に言ってたんですか？」

「いや、流石にあれはエストに言ったんだけど…… うーん、まあ良く分かんないけど、とりあえずクラリーナに会いに来た？」

「はあ？ ちよ、ちよつと一体どうしたんです？ なんか、魔法薬学の時は上の空だったのに……」

本当に今日はどういう日なのか分からないとオスカーは思っていた。色んな事を喋っていて、今度は目の前のクラリーナと何を喋ればいいのかのだろうと思っただのだ。

「まあ今は大丈夫だ。顔も見えないだろうけど」

「いや、まあ、流石にグリフィンドールの談話室にスリザリン生がいたら問題ですけど。結局何しに来たんです？」

「喋りに？」

「何をですか？」

「うーん。まあクラリーナが喋りたいことでもいいけど」

「え？ えつと、じゃあ…… オスカーが…… スリザリンの談話室で喋ってる様なことでもいいですか？」

「談話室で？ エストとかジェマとかと喋ってることってことか？」

「ええ。そうです」

これにはオスカーも少し頭をひねらないといけなかった。いつも自分は何を喋っていると言われても難しかったからだ。

「チャドリー・キャノンズの成績とか？」

「あんなの、ホグワーツではエストしか気にしてない事でしょう」

「トレローニー先生の悪口？」

「あいつはダメですよ。あの先生に習うくらいなら、禁じられた森でケンタウルスに習った方がましです」

「トンクスのひいひいひい爺さんだったかがホグワーツの校長だったこととか？」

「トンクス先生はブラック家の出身なんですから、いくらでも有名人がいるんじゃないですか？」

クラーナは中々の強敵だと思わざるを得なかった。オスカーは良く考えなくても、エストとクラーナだとだいぶタイプが違うので、同じ話題を振ったとしても、それほど長く続けるのは難しい気がした。「じゃあそうだな…… クラーナから聞いてくれないか？」

「私ですか？ そうですね…… その、いっつもどれくらい…… 談話室に戻ってから…… エストと喋ってるんですか？」

「エストと？ そうだな…… どっちが先に帰ってきてても、だいたい今と同じ時間くらいまではずっと喋ったり、本読んだり、ゴブストーンしたり、宿題したり、ジエマの相手をしたりしてるかな」

「それはいっつもエストと二人つきりなんですか？」

「いっつもってわけじゃないけど…… ルームメイトと喋る時とか、ジエマが混ざっている時とか、クイディッチのメンバーが喋りに来るときもあるけど…… まあでもそう言うことしてる時はだいたい二人だな」

オスカーはクラーナが余り楽しそうな顔をしていない気がした。話題が不味かったのか、回答が不味かったのかはオスカーには判断できなかった。

「その…… オスカーは…… スリザリンで良かったと思いますか？」

「それはどういう意味なんだ？」

「入って過ごして楽しいですか？ 雰囲気とか、人間関係とかですか……」

「楽しいんじゃないか？ 俺は他の寮に入ったことは無いけど…… 少なくとも、家に居た時より楽しいと思うけどな……」

クラーナの顔はなんだか不思議な顔だった。楽しそうでも悲しそうでも無かった。

「えっと、じゃあ、その…… 他の事を聞いてもいいですか？」

「いいけど……」

「オスカーは…… 何をしてたんです？ ダンブルドア先生やスネイ

プと一緒に…… その、流石に私もエストも多分トックスも分かっているとありますが、何か時々オスカーはしんどそうだったでしょう？ 去年と違う事ってそれだけじゃないですか、だから…… 答えられないならいいですけど……」

オスカーは思っているよりも、自分は他の人に見られているのだと思っただ。多分、今年に入ってから、さつきレアに言われるまで、色んな人が色んな形で自分の事を見てくれていて、色んな事を言ってくれたに違いなかった。

「俺は…… その、忘却呪文を食らってたんだけど…… それを思い出そうとして、ダンブルドア先生やスネイプ先生にそれを手伝って貰ってたんだ」

「忘却呪文を？ どうやってですか？」

「憂いの篩って言う、記憶を再現できる魔法の道具があつて…… それで関連する記憶を見たりしてたんだけど……」

そう、オスカーはクラリーナならこういう顔をするだろうと思っただので、言いたくなかつたのだ。きつと、傲慢かもしれないが、いつか記憶と一緒に見た時の様な顔をするのと分かっていたのだ。

「それは一体何の記憶なのか…… 聞いても良いですか？」

「叫びの屋敷で見たのに関わる記憶だな。俺はアレがどうしてあんなつたのか、思い出したかつたんだ」

「それは…… その……」

「まあでも、もうそんな辛くなることは無いだろうし大丈夫だろ。もし、心配かけたならごめん」

オスカーは自分が笑えたのかどうか自信が無かつた。クラリーナを安心させるためにはちゃんと笑わないといけなはずだつた。

「その…… 私、私は…… 私に…… だから、えつと……」

「クラリーナ？」

「オスカーは…… その、そういう時、やっぱりエストに言ったりするんですか？」

「言ったり？」

「だから、その。自分が辛い時はエストに言いますか？ それとも

……」

「そういう意味なら、結局俺は誰にも言わなかったんだけどな。ついさっきまで。だから、俺はみんなの事、信頼してるとか思ってたけど、ほんとはしてなかったのかもしれない」

「オスカー？」

そう、結局言えなかったというのがオスカーの正直なところだった。他の人にはつらい時に言って欲しいと思っっているのに、自分の事は晒すのが怖いのだ。それをオスカーは十分にわかっていた。

「だから、もし、心配してくれたんならありがとうな。俺は誰にも言えなかったから、結局、みんながしてくれたこととか、全部無駄にしちゃったんだけど……」

「そんな……　そういう事じゃなくて……　私が思ってたのは……　もつと……　オスカーが思ってる様なことじゃなくて……　もつと身勝手な……」

オスカーは何か間違えたのだろうかと思った。オスカーは本当に礼を言ったつもりなのに、クラリーナの顔がもつと難しいモノになってしまったからだ。

「オスカー、どうせ、ここに来たのは……　トunksあたりが何か言っただんですよね？」

「え？　ああ、そうだけど……」

「それで……　オスカーは今日、ここから帰ったら、やっぱりエストと何か喋りますよね？」

「喋ると思うけど……」

クラリーナが泣いてしまうのではないかとオスカーは思ってしまった。オスカーがそう思わざるを得ないほど、クラリーナは難しい顔をしていた。オスカーにはどうしてそんな顔をしているのか分からなかった。

「オスカーは一番分かっているといますけど……　エストは凄い魔女です。先生方もそういってますし、一緒に練習すれば分かります。ダブルドア先生や、闇の魔法使いですけど、例のあの人やグリーンデルバルドにだってもしかしたら、何年もたてば匹敵するのかもしれない

です」

「クラーナ？ どういう話……」

「魔法の才能は誰が見ても分かるくらいずば抜けてますけど、近くで一緒にやって思うのは考え方が全然違うと思います。同じ事をしようとしても、全然違う場所からそれを見えます。普通、先生方が言う優秀って言うのは、既存の魔法とか魔法薬なんかを素早く組み立てたり、理解することなんです。私は大概それはできますけど…… あんな風な見方はできないです」

「確かにそういう所は一杯あるかもしれないけど」

「一杯どころじゃないと思います。時々、意味の分からないことを言いますけど、ゆっくりエストに話を聞けば、順序立てて、基本的な考えから外れていないことを言ってます」

「クラーナ、いったいエストのそれが何なんだ？」

確かにそれはオスカーも良く感じる事だった。オスカーは色々な場所でそれを感じていたし、同時に、エストが何かを始めようしたり、自分の意見を言おうとしている時には何か、言葉に表せないエネルギーを感じているのは確かだった。オスカーが簡単に言えば、エストは飽きやすいけれども、他の誰より目の前のモノを真剣に見ている様に感じるのだ。

「結局、さっきの言い訳にしかならないんです。エストは凄い魔法で、私から見ても…… その…… 魅力的だと思います。一緒に魔法を学んだり、使ったりする相手としてエストを選ばない意味が分からないくらい、一緒にやってると刺激的です」

「だから本当に何の話を……」

クラーナはまだ難しい顔をしていた。さっきのトンクスといい、クラーナといい、どうしていきなりエストの話がでてくるのか、オスカーには分からなかった。

「それにオスカーが一番一緒にいるのはエストでしょう？ でも……」

その…… だから…… 私はエストみたいな見方とかできないですし、朝から夜までずっと隣にいるわけじゃないですし、だから…… でも…… 見えますよ、わ、私も見えます」

「クラーナ？」

「だから、今日言いたいのは、エストより私はオスカーの事を見る時間は短いかもしれないですし、喋ってる時間とか、そう言うのも短いかもしれないですけど。わ、私もオスカーの事見てますから!!」

クラーナからはめくらし呪文をかけているオスカーの姿を見れないはずだった。それなのにオスカーは自分の目がクラーナに捉えられてる気がした。

「だから…… もう私が喋りたいのはそれだけです。その、ちよつと嬉しかったですけど、オスカーが多分、自分から来たんじゃないってわかってましたけど、その、ちよつと夜に喋れて楽しかったです」「分かった。ありがとう。俺も楽しかったと思う。やつぱりグリフィンドールの談話室だとゆつくり喋れないからな。今日は帰るよ」

「あ……」

がさつと、オスカーが立ち上がる音がすると、クラーナはちよつと口を開けて、また難しそうな顔をした。オスカーは帰っていいのかわ信が無かった。ただ、言われたからには帰らないといけない気がした。

「じゃあおやすみ」

「おやすみなさい……」

あんまり、そこからどうやって、肖像画の壁を降りて、何本もの階段を下つて、地下牢まで降りてきたのかは覚えていなかった。ただ、どうも、結局、オスカーはクラーナが言いたかったであろうことを理解できていないだろうと思っていた。

しかし、いつの間にかスリザリンの談話室まで戻ってきていた。さつき、クラーナと喋った時は気にしなかったが、ここのところ、オスカーはエストやクラーナと余り喋ってはいなかったのだ。

オスカーはエストに対しても、何を喋ればいいのか分かっていなかった。しかし、どっちにしろ、オスカーが帰る場所は、黒い湖の下にあるスリザリンの寮だった。

「オスカーは拗ねてるの？」

「拗ねてるって何がだ？」・

「だって、全然帰ってこないんだもん」

「なんか色々あったんだよ。ほんとに色々」

スリザリンの談話室に入った時点で、開口一番にエストにオズカーは話しかけられた。こういう言い方をするという事は、多分、エストは何か話したいのだろうとオズカーには分かった。簡単な話、喋りたいから話しかけてきているのだ。

談話室の中はさっきのグリフィンドールの談話室よりも人が少なかった。ふくろうの勉強をしている五年生の数人くらいしかいなかったからだ。

「じゃあ、怒ってるの？ エスト達がちよつと喋らなかつたから」

「怒ってない」

「ふーん。ほんと？ ほんとに？」・

「ほんとだ」

「じゃあ良かった」・

何故かニコニコしているエストがなぜ笑っているのかはオズカーには分からなかつた。こういう時、だいたい何か悩んでいたことが何か解けた時にする表情だとは分かつていた。

「あのね、前にオズカーがワンドレス・マジックの事を聞いてたでしょ？」

「ああ、一回聞いたな、結構前だと思うけど」・

「うん。で、あんまりワンドレス・マジック自体とはあんまり関係ないんだけど…… それを考えてたら……」

「何の話なんだ？」

「杖の話なの」・

確かに、ワンドレス・マジックの練習を始めようとしたときに、オズカーは一度、エストにワンドレス・マジックがどういうモノなのかを聞いたことがあった。ただ、その時はエストは何かそれに対して答えてくれたわけでは無かつた。

「俺たちの杖のことか？」

「ううん。普通の杖って言うか……前に三人兄弟の話をしたよね？」

「ああ、ニワトコの杖の話か？」

「そう、あの杖って何を表わしてるのかな？」

何を表わしているのかと聞かれて、オスカーが最初に思いついたのは、やはり長男の愚かさだろうと思った。あの長男は最も強い杖を手に入れたと自分で言ったせいで、寝首をかかれて殺されたのだ。最強の杖を持っていたと言うのに。それは死には魔法使いの強さなど関係無いと言っているようにオスカーは感じていた。

「どんな強い杖があっても、いつかは死ぬし、あの話に出てくるような死には力じゃ戦いようが無いってことなんじゃないのか？」

「そうだよな？　普通に読んで、三人兄弟のお話の意味を汲み取ろうとするとそういう意味になると思うの」

では、エストは違う見方をしていると言うのだろうか？　オスカーにはいまいち他の見方と言うのが想像できなかった。

「他に何か見方があるのか？」

「うーんとね、ワンドレス・マジックとか動物もどきみたいに、魔法使いや魔女は杖が無くても本当は魔法の力があるし、凄い練習すれば使えるよね？」

「そうだな、アフリカだと杖を使わなかったりするらしいし」

「でも、杖を使うと凄く複雑な魔法を使えるし、簡単に魔法を使う事もできるの」

「そりやまあ、その為の道具なんだろう？」

杖、そう言えばオスカーは余り考えたことが無かったが、杖とは魔法使いだけが使う道具なのだ。

「そうだよ？　だから、ゴブリンとか他の生き物も杖は使っちゃいけませんって決まってるの。人間は他の生き物に杖の技術は教えませんって言ってるし、実際にそのおかげで他の生き物より優位に立っているはずなの」

「魔法史でちよつとでてきたかもな、ピンス先生が言う子守歌に

なってたけど」

「だからね？ 他の生き物からしても魔法族からしても、杖は魔法使いと魔法の力の象徴なの。マグルも持つてないよね？ 杖を持つているだけで、人間以外の生き物とも、マグルとも私たちは違う生き物ですよって言うことになるの」

「前にクイレル先生がそんなこと言ってたな。マグルでも俺たちが杖を使う事くらい知ってるらしいからな。ただ、トンクスが最近はずじゃなくて、光る棒の方がマグルに人気とか言ってたけど」

魔法界の中でも魔法族と呼ばれる人間を特別にしているのが、杖だとエストは言いたいらしかった。オスカーもワンドレス・マジックを練習した今であっても、杖なしで例えば下級生と決闘して勝てるかと言われれば、かなり厳しい気がしたし、実際、ゴブリンやトロール、屋敷しもべと言った生き物は杖を使つてはいけなはずだった。

「トンクスはどうでもいいけど、杖つて最初に言つたみたいに、力をコントロールするものだよな？ 単体ではただの棒なの。エスト達の魔法の力も杖が無いと暴れるの。だから、杖は力の象徴だけど、なんて言うか、人間の脳みそとか、知恵とか理性みたいなものの象徴でもあるはずなの」

「力と杖が合わさつて、本当の魔法の力になるってことだろ？ だから、まあ杖が脳みそみたいなモノなのかもな」

「だからね？ 最強の杖つておかしな話なの。だって、自分の力は変わらないんだよ？ 自分の力をコントロールしやすくできるだけの。それもずっと一緒にあつたモノじゃなくて、ある日出会つたモノなの。外から借りてきた、知恵とか脳みそが最強つておかしくない？

そんなの、自分は自分でコントロールできないのって言うてる様なモノだよな？」

「杖が考えてるわけじゃないから、単に道具として強いつて言うなら分かるけど…… 要は自分で考えれなくなつてると言いたいのか？」

オスカーがそう言うと、エストの顔がパツと明るくなった。どうやら当たつていた様だった。ただ、オスカーにはまだエストが結局何を

言いたいのかは分かっていなかった。

「そう。最初の話は、ちゃんと自分の事は自分で考えないといけないし、外の何かをいきなり使っても強くはなれないって言ってるんじゃないのかと思うの。それにね？ 何回か言ってるけど、杖と魔法使いや魔女は合わせて一つなの。怒ったり泣いたりみたいなのを、エスト達は頭で、理性とか論理とかでちよつとは抑えたりコントロールできるけど。感情も理性もどつちかが無くなったら人間じゃ無くなっちゃうし、どつちかが強すぎてもおかしくなっちゃうよね？ 杖と魔法使いも同じじゃないかなって、どつちかが強すぎてもおかしくなっちゃうの。だって二つで一つだもん」

「それは…… ちよつと考えさせてくれ……」

閉心術の練習では無いが、感情を理性で押さえつけようとしても、どこかでそれがあだとなって帰ってくることをオスカーは知っていたし、逆に理性を感情でねじ伏せようとしたとしても、それもそれはおかしいのだと胸にしこりが残ることをオスカーは知っていた。

それは魔法使いと杖の関係にもしかすれば似ているのかもしれないかったが、問題なのは恐らくこれもまだ、目の前の女の子が言いたいことでは無いらしいことだった。

「結局、長男の話が言いたいのは、自分の外に自分をコントロールさせるのはダメだったってことか？」

「そう。でね？ それは長男の話だけを見た時だよ？ でも、これは三人兄弟のお話だから、全体の中で意味を探ろうとすると。長男の話が表わしているのは力で死に立ち向かう事はおバカな事ですよって事になるの。面白いよね？ 全部で見たら、お話の意味が変わっちゃうの。でも、やっぱり三人兄弟のお話は三つで一つだから、こっちの方が何か合ってる気がするよね？」

「それは…… そうかもな、作者が言いたいのが何か知らないけど、全体の意味を考えるんならそっちの方があってそうだし」

杖と魔法使いの話と同じ様に、三人兄弟のお話それぞれでも、同じ様な事が起こっているとエストは言いたいのだろうか？ オスカーからしても、今回のエストの話は良く分かっていなかった。オスカー

は最近あんまり喋って無かったので、エストが頭の中で考えすぎてしまったのかとちよつと心配になってきた。

「でね、でね。これと同じで杖と魔法使いでも、同じ風にできるよね？」

エストとオスカーの杖だと普通の杖にできないことができないでしょ？ エストの杖つて、エストとニワトコの杖の事でしょ？ オスカーの杖はオスカーとナナカマドの杖の事でしょ？ これつてね？ ずっと分割していくこともできるし、ずっと増やしていくこともできるよね？」

「いや、俺やエストは分割できないだろ」

「そう？ でも、エストの中にも悪いエストと良いエストがいるよね？ 友達と比べてもしょうがないのに、自分の方がすごいって思っちゃうエストとか、困ってる顔を見るとやっぱり助けちゃったりする自分とかどつちもそうでしょ？ 二つじゃなくてもつと一杯いて、もつと小さく分けたら、嬉しかったり、嫉妬してたり、泣きそうだったり、恨んでたり、色々いるよね？ 違う？ オスカーもそうじゃない？」

オスカーは不思議な気分になった。今、感じている気分さえ、エストの言うように色んなモノに分割できるはずだった。既視感だとか、ちよつと心が暖かいだとか、一緒のモノを感じているだとか、もしかしたら理解されている気がして嬉しいだとか、それら全部ひつくるめて、今、感じているのだ。それで一つの感覚なのだ。なのに、一つ、一つには意味があつて、もつと小さくできるはずだった。そして、今、感じた事は、今度は、オスカーが感じたモノを頭で考えて、口と表情と身振り手ぶりを加えて、次はエストの方へいくはずなのだ。

「確かに…… そうかもしれないけど……」

「他には…… そう、エストはスリザリンとレイブンクローで組み分け帽子が悩んだでしょ？ オスカーはスリザリンとグリフィンドールで悩んだんでしょ？ これもそんな感じだよ？ えつと……」

狡猾とか英知とか勇敢とか、そう言うのに分けれるってことだよ？ でも、どつちかじゃないよね？ どつちもそうだけど、どつちかじゃないんだよね？ こう…… なんかがぐちやぐちやしてて、どつち

か分かんなくて、でも、時々、こうかもって思うよね?」

「どういう時に…… エストはそう言う風に思うんだ?」

それはオスカーの思う一番の疑問だった。確かに、自分の中で色んなモノがぐちゃぐちゃとしていて、それが時々外に出てくるのだ。恐ろしいのに出る勇気が湧いた時だとか、そうしなければならいと分かっているのに、恐ろしくて何もできない時だとか、色んなモノが代わる代わる出てくるのだ。オスカーは目の前のエストが、一体どんな時に、自分自身はこういう人間だと思うのかを知りたかった。

エストはさつきまでは矢継ぎ早に喋っていたのに、今度は眼をぶつて考えている様だった。

「うんとね。こうやって誰かと喋ってる時とか、今までの考え方だとどうにもならなくなった時かな?」

「どうにもならなくなった時?」

そう聞くと、エストはオスカーの見覚えのある笑顔を浮かべた。それは彼女が何か難しい問題を解いた時のモノと一緒にだった。オスカーは一体、何の疑問や問題が解けたのか気になった。

「ホグワーツに入る前はね、どうしてお母さんがいないんだろうとか、何で一人になっちゃったんだろうみたいなのを考えてた時かな?」

入った後はね、何かオスカーが会ってくれなくなった時とか、クリスマスに喧嘩してた時とかそういう時かな?」

「どんな風に見えるんだ?」

オスカーは知りたかった。どんな風に目の前の女の子は自分自身を見ているのだろうと。それはきつと、自分自身を知るために大きなヒントになりそうだと思ったし、オスカーは彼女と同じものを見てみたかった。

「見えるのかどうか分かんないけど。みんながエストのことを色んな風に言うでしょ? オスカーもチャーリーもクラリーナもトンクスも、ジエマやミュリエルおばさん、モリーおばさんも色んな事を言うよね? それに自分ってこんな人じゃないかなって、こうじゃないかなって思ってるよね? あとはこうだったら目の前の事が解決できるのか、こういう風だったらいいになって思うよね? そう言うのを、

なんか、色んな方向？ 角度？ から見て、ここは良いところかなとか、悪いところかな、でも変えられないかもって、ちよつと離れた所から見てるのかな？」

「それで…… 見た後にどうするんだ？」

そう。頑張つて自分を見て、それでも変えられない自分や、嫌な自分を見つけて、それからどうすると言うのだろうか？

「うーん…… 分解する？ バラバラにしてみるのかな？ それでその後にもう一回組み上げてみるの。そうすると、さつきよりもつと分かる気がするの。何でオスカーは怒つてたのかなって思つて、どうしたらいいのかなって思うよね？ どんな形だったら上手く行くのかなって。どこがダメだったかなって、でも、悪いところはバラバラにしてみたなら、良いところ繋がつてたりして変えれなかったりするの。でもね、ちよつと外から見てみたり、オスカーが何か言ってくれたりすると、バラバラのがなんか、ひと塊に見えたりして、上手くはまったりするの。そうしたら、何かいつの間にか形が変わってる感じがしない？」

「いっつも…… そんなこと、思ってるのか？ いっつもそんな風に見えるのか？」

オスカーは知っていた。事も無げにエストは言ったが、それは恐ろしく自分のエネルギーを使う事なのだ。嫌になるほど自分の事を考へて、嫌な自分を見て、どうしようもない記憶を思い出して、やっとオスカーは少しだけ自分の形が見えてきたのだ。

自分の嫌な所を見たり、どうしてか、自分の中に矛盾するところが見つかったり、こうあろうとしても、そうなれない自分が見つかった時に、どうにかしようとして、何度も何度も考へて、試行錯誤して、バラバラにして、組み上げるのだ。オスカーはそれだけで、他の人に心配されるほど追い詰められたのだ。

それなのに、オスカーにはエストがそれをいっつもやっているのではないかと思つたのだ。

「いっつもじゃないかな？ さつき言つたみたいなのはしてる気がしてて、でも、その小さいのなら時々はやってるかも」

「なんで、そんな事できるんだ？ 疲れないか？ しんどくならないのか？」

そう。オスカーが一番分らないことがこれなのだ。もし、エストがオスカーが思っている様な事を、オスカーよりも多い時間感じているのなら、それは考えられないほど辛いことのはずなのだ。

「考えてるときは辛いけど……でも、考えない方が辛いよね？ それにね？ 何か、そういう風に考えると、上手くいった時に凄く、何か、上手くいったって、何か、見えるものが広がるって言うか、感じるものが大きくなるって言ったらいいか分らないけど。凄く、いい気分なの。だから、クラリーナに悪口言っちゃったの」

「そんな……」

「オスカー？」

オスカーは思った。どうして、自分が色んな人に手伝ってもらったり、色んな事を言われたり、取返しがない事をやって、やっと気付いた様な事を目の前のエストが出来るのかと。それは簡単な理由に思えた。

多分、文字通りに見ている世界が違うのではないかという事だ。オスカーはずっと隣にいて違和感を感じていたのだ。

きつと、オスカーが感じているよりも、ずっとエストの世界は明るくて暗いのだ。残酷で優しいのだ。美しくて醜いのだ。だから、他の人よりも早く色んな事に気付くことができるのだ。色んな場所から物事を見ることができるとだ。

だから、世界は劇的で退屈なモノに見えるはずなのだ。オスカーが自分を考えなければならなかったのと同じ様な状況に、彼女は何度もなったことがあるのだろうか。

「そんな風に見えて、俺と一緒にいて、楽しいか？」

「何で？ 楽しいよ？」 オスカーが言ってる見えるってどういうことか良く分からないけど、オスカーと一緒にいて楽しいし、オスカーが色んな見かたをさせてくれてるんだよ？」

楽しいのだろうか？ 一緒にいても、同じ世界にいないのかもしれないと言うのに。

「何で楽しいんだ？」

「だって、オスカーが楽しいとエストも楽しいもん。そしたら絶対楽しいでしょ？ 一人より、目の前の人楽しい方が、楽しいって分かるもん」

オスカーは思いだした。どうして楽しいのか、自分が楽しいとどうしてわかるのか。見ている世界は違うかもしれないが、楽しいかどうかは自分が決めるのだ。そして、どうして楽しいのかは、自分より誰かがいた方が分かり易いのだ。一人よりも、誰かがいた方が、自分がここにいと分かるのだ。

決意と決断と

決闘トーナメントの最終日が近づくにつれて、ホグワーツでは寮同士の緊張が強くなっていった。

去年のスリザリンとグリフィンドールのクイディッチ決勝戦の時の様に、グリフィンドールとスリザリンだから、敵意があんなに高まったのだとオズカーは思っていたのだが、どうもそれは違うらしかった。

今回はハツフルパフの生徒がおらず、スリザリンが両方のペアに残っていたので、グリフィンドールとレイブンクローが緊張を高め合っているのだった。

廊下のところどころでお互いの寮生が言い合っており、オズカーとレアのペアはシードな上に、他チームが生ける屍の水薬で出場できなくなつて、たつた一試合で決勝まで行つたラッキーペアだとか、エストとクラリーナのペアはエストがいつも大技をするせいとか、グリフィンドール生はお荷物だとか、色んな事を言い合っていた。

その結果として、グリフィンドール生の鼻からもやしが生えてきて医務室にいく騒ぎになったり、レイブンクロー生の鼻がきのこになつてしまつたりして、マダム・ポンフリーが大爆発するのは時間の問題だと言うのがオズカーの見立てだった。

試合の前夜になって、スリザリンの談話室にも微妙にそわそわしたような、いつもと違う騒がしさが満ちていた。

そんな中でも、相変わらずエストは湖の見える窓際の席に座つて変身現代を読んでいた。

「それ何か古くないか？」

「そうだよ？ バックナンバーだもん」

雑誌からオズカーの方へ視線を変え、こと無くエストが答えた。いつもエストが定期購読している変身現代と違って、随分古いモノに見えたのでオズカーは尋ねたのだが、正解だった。

「図書館か？」

「ううん。クラリーナに貸してもらつたの。ほら、他にも何冊あるの」

確かにエストは机の上に変身現代を何冊も積み上げていた。二十冊くらいあるだろうか？ 変身現代とクラリーナと言う単語でオスカーは少し思いだした。机の上の変身現代を何冊か手に取り、パラパラと目次を見ればやはりオスカーの思った通りの様だった。

「古い論文を読んで何か意味があるんですか？」

「今の論文も古い論文の下地があつてあるんだよ？ ジエマが使つての変身術とか、魔法の道具も古いモノがあるから使えるの」

「これ、全部クラリーナのお姉さんが投稿してるやつなんだな」

そう、もう十冊ほど確認してみたが全てその様だった。しかも、著者の所を見る限り、ほとんど全てホグワーツの在学中に書かれている様だった。共著の所にマクゴナガル先生とダンブルドア先生の名前があつたり、他の先生の名前が出てくるのだ。

「ムーディ先輩つてお姉さんがいるんですか？」

「そうだよ？ こんなに学生時代に投稿するなんてどうやったんだろうね？ 闇祓いになるんだつたら、他の勉強もしないといけなかっただろうし」

「先生に手伝つて貰つたとかか？ ダンブルドア先生もマクゴナガル先生もグリフィンドールの先生だしな。けど、よくクラリーナが貸してくれたな、これ」

オスカーはあのふざけた口調のクラリーナの姉が勉強している様子を想像できなかったが、それ以上に、恐らく姉の持ち物だったであろう、このバックナンバーをクラリーナが貸したことが意外だったのだ。「それはちよつとエストも思つただけだ。何か、論文は読まれると価値が深まるんですとか言つてたの。だから、私の家で埃を被つているよりいいんですつて。でもおかしいよね？ これどう見ても、埃なんか被つて無いし、図書館のバックナンバーより何度も読み返した後があるの」

「まあ、そう言うことなんだろ」

「え？ 全然わからないんですけど……」

エストが言った通り、どの本も何回も読み返した後があり、クラリーナの姉が書いた論文が載っている所は特にボロボロになりかけてい

るように見えた。

オスカーは去年のクリスマスの事があって、二人がどんな関係なのか不安だったが、ペアになったことで仲良くなっていそうで安心したのだった。

「じゃあ、俺は先に寝る。明日はちよつと試合前にレアと喋りたい事があるから、先に寮を出るよ」

「そうなの？ わかったの」

「オスカー先輩は寮生の応援はいらんんですか？」

「どっちを応援してもスリザリンの勝ちだろ？ じゃあ、おやすみ」

「おやすみ」

「おやすみなさい」

試合の当日、オスカーとレアはギリギリになって、大広間にやってきた。

すでに観客席は生徒達で埋め尽くされていて、今回はスリザリンとハッフルパフが両方のスタンドに入り、レイブンクローとグリフィンドールが片方ずつスタンドを埋めていた。

どっち側に行かなければならないのかはすぐに分かったので、オスカーからすれば便利だった。

「二人共えらい遅いじゃないの、何かの作戦なわけ？」

「あ…… トンクスか…… 別に作戦ってわけじゃない」

レイブンクロー生の青が踊っている方のスタンドにトンクスが座っていた。チャーリーがエストとクラーナの方へ応援に行っているために、バランスを取ったのかもしれないなかった。

レアの方はいつものレイブンクロー生に取り囲まれてしまった様だった。

「オスカー、あんたあの本のことを他の人に言ったりしてないでしようね？」

「あの本？」

「あんたふざけてるの？ あんたが変な時間に書き込んだせいで、ルームメイトが延々と言ってくるんだから…… とにかく、これ以上

は黙ってなさいよ」

「わ、わかった」

トンクスが凄い剣幕で言ってきたために、オスカーは領かざるを得なかった。

まだ、レアはレイブンクロー生に捕まっているようで、試合のステージ前には行けそうになかった。

「まあ、でも今回は倍率の高い方に賭けたからちやんと勝ってきたなさいよ」

「え？」

「だから今度こそちゃんとした蜂蜜酒が飲みたいって言ってるのよ。けちのクラーナのとか、惚れ薬入りじゃなくてね」

そう言って、さつきまで険しい顔だったトンクスがオスカーに笑いかけた。

「や、やっぱり…… トン……」

「オスカー先輩!! もう行きましよう!!」

「え? オスカー何か言った?」

やっとレイブンクロー生の群れから脱出したレアに連れられて、オスカーは試合会場に連れて行かれた。オスカー達の向こう側にはすでにエストとクラーナが立っている。

それに、今回は教師陣の席はフルメンバーで埋まっていた。最近は全然顔を出さなかったダンブルドア先生も座っている。

観客席の生徒達のざわざわも段々と大きくなり始めた。クイドイツの決勝戦と同じ様に、グリフィンドールとレイブンクローの横断幕がところどころで踊っていた。今回は他の寮の横断幕は無い様で、決勝戦はグリフィンドールとレイブンクローの対決だと思われるように見える。

「双方のペアが開始位置についたようなので、これより決勝戦を始める」

スクリムジョール先生がそう言うと、天井にぶら下がっていたトナメント表が描かれているタペストリーが書き換わった。片方は蛇と獅子に、もう片方は蛇と鷲だった。

観客席からひと際大きな歓声があがった。

「決勝戦のステージはここだ」

スクリムジョール先生がそう言うと同時に、石畳の大広間が一瞬で木に覆われてしまった。今回のフィールドは森の中の様だった。

オスカーとレアからは向こう側に見えていたはずのエストとクラナの姿は見えなくなってしまった。

「試合のルールはこれまで通知してきた通りだ。決勝らしい皆のためになる試合を期待する。それでは始め!!!」

両サイドから聞こえる大歓声の中、二人は森の中に入った。森の中には本来聞こえるはずの虫の声などは聞こえず、まだ外の観客席の声が聞こえてくる。

「オスカー…… 先輩、距離を詰めましょう。エスト…… 先輩達に時間を与えるのはダメです」

「わか…… わかった」

二人は呪文で蔦や生い茂る草をかき分けながら、真つすぐに進むことにした。すでに二人は前もって、相手の二人に時間を与えてはいけないと話合っていたからだ。ただ、この森と言うフィールドは相手の事を考えれば、オスカーとレアにとって有利に働く場所ではないのは確かだった。

二人が相手の二人を見つけるのはあつという間だった。なぜなら、相手の方が見つけやすい行動をしていたからだった。

「も、燃えてる……」

「悪霊の火じゃないけど…… エストの仕業か」

二人から見えるのはどんどん火が二人を囲むように燃え広がっている様子だった。火は円形を描きながら、森の木々を焼いて、二人を取り囲もうとしていた。

二人の真正面に杖と手を振って火を操っているだろうエストの姿と、その前に杖を構えているクラナの姿が見える。

相変わらず、エストが大技を行って、クラナが最後に詰めてくる戦法をとるようだった。

「えつと…… 行くぞ」

「オスカー先輩、クラリーナ先輩とエスト先輩を分断させましょう。可能なら二人で一人を、それかエスト先輩をボクが引き受けます」
「分かった」

炎は普通の魔法使いならば水や炎凍結呪文で対抗できるはずである。しかし、目の前に燃え広がっているのは魔女が操る炎であったし、そういった対策が効くのかどうかも怪しかった。

「二人共、エストのここにはいかせませんよ。ここで試合終了です」
クラリーナからの呪文が届く範囲になってもまだ、エストの炎は届きそうに無かった。二人がクラリーナに攻撃を仕掛ける。

レアの呪文がクラリーナの足元を爆発させ、それと同時にオスカーが失神光線を打ち込んだはずだったが、そこにいたはずのクラリーナがいなくなっているのだ。

「だから、試合終了だって言ったじゃないですか」

「後ろ……」

「伏せろ!!」

声が聞こえたのは二人の後ろだった。クラリーナの声と同時にオスカーが手を振った。

「な……!! 今、オスカー、杖を……」

「ステューピファイ!!」

オスカーの魔法でクラリーナは少し飛ばされかけ、そこにレアの失神呪文が飛んだはずだったが、またクラリーナの姿は消えた。

二人が背中合わせにして辺りを見回すと、少し離れた所にクラリーナの赤いローブが見える。

「ほんとにワンドレス・マジックを使ってくるなんて驚きですね」

「城の中では姿くらましは使えないはずだ」

「そう……です。いったいどうやって……」

またクラリーナの姿が消える。今度は呪文の届く範囲であり、出現と同時に向こうから失神光線や武装解除呪文が飛んでくる。

二人が背中合わせに三百六十度の視界を確保しても、クラリーナは姿を現わしたり、消したりしながら、あらゆる呪文を投げかけてくるのだ。

そして、二人はクラリーナに時間をかけてはいけなはずだった。段々とオスカーとレアを取り巻いている炎が大きくなっており、エストの方を見れば、まるで蛇のようになった炎の奔流がこちらに向かって来ようとしているのが見える。

「このまま円を縮めて俺たちを焼き殺すわけじゃないのか」

「あれの方が見栄えがいいでしょう？」

「クラリーナ先輩はその姿くらしみたいなので逃げるってことですか……」

オスカーとレアにはまだクラリーナの瞬間移動のタネが見えなかった。そして、エストが二人に向かって杖を振るのが見える。いよいよ巨大な炎の蛇が二人に向かってくるのだ。

「あれはアグアメンティじゃ消せないんで、頑張ってください」

そう言っつてクラリーナが置き土産にボンバーダで二人の足元を吹き飛ばしながら姿を消した。エストの隣に現れたのが見える。

「アレを!!」

「はい!!」

「エンゴージオ!!」

二人が見えない何かに肥大呪文をかける。すると、目の前まで迫っていたはずの炎の蛇がその見えない何かに吸い込まれて消えた。

「よし。レデュシオ 縮め。けど、クラリーナの瞬間移動は……」

「オスカー先輩、あれっつて、クラリーナ先輩が出てきた位置が一緒じゃなかったですか？」

まだ、相手の二人の動きは無かった。何か、二人で次の策を話しているように見える。

「確かに、何回か姿が現れたり、消えたりした位置が一緒だったかもしれない」

「じゃあ…… レベリオ!! 現れよ!!」

レアが杖を振ると、先ほどクラリーナが現れた位置に小さなカードの様なモノが木に張られているのが見えた。

「これっつて…… もしかすると、ポートキー？」

「ポートキーを馬鹿みたいに配置したんですか……」

やっと二人にも瞬間移動のタネが見えてきた。ポートキーを使えば、鍵になるモノがある場所に瞬間移動できる。クラーナはそれをオスカー達が来る前にいくつもばら撒いたらしかった。

「ちよつと気付くのが遅いですね」

「そうなの。さっきの魔法が消えちやつたのは魔法のトランクなの？」

二人はまた聞こえた瞬間にそちらに向かって魔法を使ったが、今度は相手の二人の姿が先に消えた。

「ちよつとどこがどのポートキーなのか分からないから使いにくいね、これ」

「そりやそうでしょう。私がさつきどれだけ頑張つて、どこがどれなのか覚えたと思つてるんですか。だいたい、エストの魔法で何枚か燃えちやつたじゃないですか」

「二枚あればなんとかなるの」

エストとクラーナの声が森の色々な方向から響く、それに二人が防御に使つたトランクもタネが割れている様だった。今度、大技を防ぐ時は同じ対策が使えないだろう事が分かる。

「とりあえず、なんとかして一人を潰さないと……」

「誰を潰すんですか？ オスカー？」

「そうなの」

「いったいどつちから……」

一人に呪文をかけようとしても、すぐに消えてしまい、もう背後から呪文が飛んでくるのだ。オスカーとレアはそれぞれ反対方向を向いて、現れた場所に呪文をかけたが、全く当たりそうに無かった。

「これ……二人が片方のポートキーを持つてる……移動先が多分どつちかがいる場所になつてる？」

「それで片方が片方の位置に現れてるのか」

そう、エストとクラーナは配置したポートキーでは無く、お互いの場所に移動し合っている様だった。どちらかが呪文の届く範囲から攻撃した後に、どちらかの場所まで移動しているのだ。

その上、防御だけでは無く、相手は一度に二人現れたり、現れた瞬

間に攻撃をノータイムで行っているらしかった。

やっかいなのは、瞬間移動で消えるのが前提なので、爆発呪文とிட்டた、自分がまきこまれそうな呪文でも、置き土産として使ってくるのだ。

「このポトキーだらけの場所から離れないとどうしようもないな」
「焼いちやえばいいんじゃないですか？」

レアがさつきレデュシオで縮めたトランクを指した。確かにさつきクラーナはポトキーが燃えてしまったと言っていた。

「二人が一緒の場所に現れた瞬間に開こう」

「分かりました」

「何をごちやごちや言ってるんですか？」

「降参なの？」

近い方、呪文の届く範囲にいたエストに呪文を投げかけると、やはりエストはクラーナの近くに転移する。その次はクラーナがエストと一緒に恐らく配置してあるポトキーの場所へと移動する。

オスカーには段々、どのあたりにポトキーがあるのかの算段はついていった。相手の二人はオスカー達が真つすぐに向かってくるだろう事を見越して、自分達の正面付近にポトキーをばらまいているのだ。

「今だ!!」

オスカーの声に従って、レアがトランクを開くと、さつきトランクに吸い込まれた炎の蛇が姿を現わす。何度も相手の二人が転移している場所が炎で焼かれる。森の木々が焼ける匂いと白い煙が当たりに充満する。

「今の間にポトキーが無い範囲に行きませんか？」

「分かったけど…… 二手に分かれないか？ このままだとラチが開かない……」

「でも二手に分かれたら、相手がどつちかに転移して、二人の相手をしてないといけなくなっちゃうんじゃない？」

「相手からすれば、もう片方の状況が読めない時にポトキーを使いたくはないだろ。自分達が優勢の時ならいいけど、片方が杖を取り上

げられてる時に移動したらただ的になるからな」

「じゃあ、お互いが見えない場所まで移動するって事ですか？」

「可能ならポートキーを奪うのが一番いいけどな」

「わかりました」

あたりに立ち込める白い煙が消えない間に二人は走り出した。今度は自分達が最初に入ってきた方向に左右に分かれて向かった。二人の予想では、オスカー達がそれぞれ相手をする方を決めていたように、向こうも相手をする方を決めていると考えていた。

しばらく走って、オスカーはやはりエストかクラリーナのどちらかが追ってきているのが分かった。どちらかがどちらかを見つければ二対一に持ち込めるはずなのだから、これは相手とすれば当然の行動のはずだった。

「バラバラに逃げるなんて悪手じゃないですか？ オスカー」

「そうか？ さっきのポートキー地帯で戦うよりよっぽどマシな気がするけどな」

やはりオスカーを追ってきたのはクラリーナの方だった。これも事前に二人で話していた予想の通りだった。それぞれ相手をする場合、クラリーナがオスカーを、エストがレアの相手をする様に相手の二人は動くだろうと言うことは分かっていたのだった。

「いいんですか？ あなたがエストの相手をしなくて。いくらレアを信頼しているからって言っても、あなたとエストの杖の特性無しに、エストを倒せる学生がこのホグワーツにいると思ってるんですか？」

「エストだってマーリンじゃないんだから、倒せる時もあるだろ」

エストやレアの声は聞こえず、外の観客席からのどよめきだけが森の中に響いていた。クラリーナはああ言ったが、純粹に決闘と言う意味ではクラリーナに勝つ方が難しいかもしれない。エストの様な原則レベルの変身術や魔法こそ使わないモノの、失神呪文や盾の呪文、そう言った基本的な戦闘用の呪文や、決闘時にどうやって最小限の動きで相手を倒せるのかと言う点ではクラリーナに軍配が上がりそうだからだ。

二人はお互いに杖を向け合って円を描くように動いた。

「私があなただを倒すのが早いのか、エストがレアを倒すのが早いのか分かりませんが。その時点で終わりですね」

「じゃあ、倒される前にクラーナに言いたい事があるんだが」

お互いに失神呪文、衝撃呪文を放ったり、盾の呪文で弾いたりしながら二人は話していた。しかし、どちらが優勢かを観客席から見れば、クラーナの方が優勢に見えた。

「何ですか？ 愛の告白でもしてくれますか？」

「ああ、好きだ。クラーナ」

少しの間、時間が止まった様だった。しかし、オスカーはその間にクラーナに杖腕で無い方を向けて、握る様な動作をした。

「なっ!! あ、あなたはオスカーじゃない…… オスカーは絶対決闘の時にこんな事言わない……」

「そうです。クラーナ先輩。流石にちよつとこれはズルいかなって思いましたけど。ボクは先輩達に勝ちたいんです」

クラーナはオスカーが手をかざしている間、動けない様だった。オスカーが杖腕で杖を振ると紅色の光線が飛び、クラーナの杖が飛んでくる。

「その顔で、先輩とかボクとか言わないで下さい。気持ち悪いですよ」「じゃあなんて言って欲しいんだ？ クラーナ？」

「ぶっ殺しますよ。大体、何で劇といい、私ばかりこんな……」

ぶつぶつ言っているクラーナの動きを呪文で止めて、オスカーはクラーナのローブをまさぐった。中からカードが何枚か出てきて、その中の一枚には緑と赤色でやたらと目立つカードがあった。

「凄い目立つこのカードですよね？ エスト先輩の方へ飛んでいくポートキーって。けど何か、オスカー先輩の体でクラーナ先輩のローブを漁るのって、ダメな気がします」

「だからうるさいですよ!! とつとと行ってください!! ああ……こんな負け方したなんて……」

まだ体が動かせないクラーナだったが、顔は情けなさで泣きそうなほどだった。多分、体を動かす事ができるのなら、ゴロゴロと転がっていったであろう程だった。

「何で入れ替わったか聞かないんですか？」

「オスカーがエストの相手をするためでしょう。それ以外に何かあるんですか？　警戒してたのを逆手に取ったんでしょう」

「それともう一つ。エスト先輩は分からないですけど、クラリーナ先輩は絶対オスカー先輩の相手を一人ですると思っただけです」

オスカーがそう言うのとクラリーナはぼかんと口を開けて分からないという顔をした。オスカーの方は少しやってやったとばかりの笑顔だった。

「だって楽しそうだったでしょう？　愛の告白でもしますかなんて、そっちから言うなんてボクも思っただけです」

「もういっそ、殺して下さい。それとレアも私の中でトククスと同じ位置に置いておきます」

「それはちょっと止めて欲しいなあ」

目をつぶって唇を噛んでいるクラリーナを見ながら、オスカーは杖を上に向けた。

「ヴェルミリアス!!」

赤い光線が上へと上がっていく。それを見て、またクラリーナが悔しそうな顔をする。

「私を倒したって報告ですか、そうですね。準備万端って事ですね」
「クラリーナ先輩を倒すのが早いのか、エスト先輩を倒すのが早いのかは分からなかったですけど」

そう言った後、オスカーはクラリーナのポケットにあったポトキーらしいカードに触れた。

「絶対におかしいの。それ、オスカーの杖なの」

「何がおかしいんですか？　エスト先輩？」

エストが行う変身術や魔法を簡単な呪文や盾の呪文だけで弾くアを見ながらエストが言った。

普通の杖が相手ならば、そんな簡単には魔法を打ち消せたり、弾くことはできないはずだった。そうでなければ、これまで、ホグワーツの主席や杖の腕に自信のある魔法使いや魔女達が彼女の前で膝を付

いたはずはないのだ。

「ボクは何もおかしくないと思いますよ。エスト先輩」

「ニワトコの杖はちゃんとした決闘とかじゃないと所有権は移動しないはずなの……もしかしてオスカー？」

「ボクがオスカー先輩に見えますか？ 百味ビーンズの食べすぎで頭おかしくなったんじゃないですか？」

怒ったのか、エストが杖を振ると周りの木々が変身して、蛇のようになうねってレアに迫ってきたが、レアの爆発呪文で吹き飛ばされると動かなくなつた。

「オスカーが後輩の女の子に変身する変態だなんて初めて知つたの」

「オスカー先輩は変態じゃないですよ。エスト先輩」

しかし、杖の関係でレアの方が優位にたっているはずなのに、レアはエストを崩す事が出来ていなかった。経験として、戦つたことのあるビルやマルフォイと比べても、力が半分も出ていないはずのエストの方が強く見えるというのは恐るべきことだった。

「じゃあ、クラーナと戦つてるオスカーの方がレアつてことだよな？」

「すぐにオスカー先輩はクラーナ先輩をやっつけてこつちに来てくれるはずですよ。何か秘策があるつて言つてましたから」

「そんな慣れない体で戦つて勝てるほどクラーナは甘くないの。オスカーとレアがずっと体を交換して練習してる変態なら別だけど」

エストの言う通り、自分の体で無い体で戦うというのはかなりのハルデではあつた。一步一步の大きさはもちろん、自分の体とは違う感覚があちこちにあるのだ。杖を一つ振るにしても、手や足の長さや行動した後どんな場所が動くのか、色んな感覚が違つていた。

「リベリオ!! やっぱり…… 変わらないつてことは、変身術じゃないくてポリジュース薬なの。オスカー、一体レアの体のどこを入れて飲んだの？ それに自分のどこを入れてレアに飲ませたの？」

「そんな事気にしてる場合なんですか？ エスト先輩。それにボクはレア・マッキノンですよ？ レイブンクロー生でマッキノンのお姫様なんです」

「絶対オスカーなの。うええ。気持ち悪いの」

レアの方もいい加減、ずっとこうやって責められるのもきつくなってきた。どうも、エストの目的は試合に勝つというよりも、ポリジューズ薬で変身したことに對する悪口を言うことに変わってしまった。様だった。

「だいたいその服はどうやったの？ レアのを借りたの？ オスカーも自分のを貸したの？ 下着も？ 頭おかしくなりそうなの」
「だから変な邪推は止めて下さい。エスト先輩。試合に集中したらどうですか」

その瞬間に赤い火花が上がったのが見えた。レアはエストの周りに視線を巡らせた。エストのすぐ後ろに、本来の自分の体の姿が見えた瞬間、呪文をエストに放った。

しかし、ほとんどノーモーションに近い、腕を広げる様な動作だけで、移動してきたオスカーと呪文を唱えたはずのレアが呪文ごと吹き飛ばされた。

「なんでクラーナはレアに負けてるの!! もう!! 意味わからないの!!」

「今の…… ワンドレス・マジックなんじゃ……」

「オスカーの体でその口調だと気持ち悪いの。大体、こんな魔法くらいだったら別に練習しなくても使えるもん」

「反則だろ。相変わらず」

「何でさっきまでボクはマツキノンのお姫様ですとか言ってたのに、オスカーの口調に戻るの？ どうせなら最後まで気持ち悪いロールプレイをすればよかったのに」

オスカーがレアの方をじろつと見る。レアの方はそれを見ないふりをした。エストがいくら反則まがいと強いて言っても、オスカーとレアが有利なのは変わらないはずだった。エストの杖を封じる方法が二人にはあった上、人数も単純に二倍だからだ。

「こんな変態ペアに負けるのは嫌なの。ポリジューズ薬はやっぱり禁止するべきなの」

「変態じゃないです。悪い使い方はしてないはずですよ」

「一回やったら癖になるかもしれないの。女の子とか男の子になるのが辞められなくなっちゃうかも」

「なんでそうなるんだ」

「惚れ薬と一緒に、こっそり体の一部を奪われたらやられ放題なの。トングスより性質が悪いもん」

「わかったから今回は倒れてくれ」

もう半分、エストは痙攣を爆発させているように見えた。それなのに二人を相手に互角に戦っているのだ。周りの木々を鞭や蛇に変身させたり、木の葉を鳥や矢に変えて放ってきたり、オスカーとレアの呪文を防ぎながら、周りのあらゆるモノを操って反撃してくる。

「レア、次のタイミングで一緒にやるぞ」

「分かりました。オスカー先輩」

「なんなの。一緒にやるって。体を交換したからタイミング抜群なの？ もう!! こんな同じ寮で組めなくしたスクリムジョール先生が諸悪の根源だもん!!」

二人は呪文ともう片方を手で魔法をかけて、エストに向かって、波状攻撃の様に何度も攻撃を合わせて放った。杖の呪文には盾の呪文で、ワンドレス・マジックにはワンドレス・マジックでエストは対抗していたが、段々と攻撃回数が多い、二人の攻撃に耐えられなくなってきた様だった。

「こんなの認められないもん…… 絶対おかしいから。どう考えてもおかしいの」

「だからいい加減倒れてくれ……」

エストが全方位に衝撃呪文を放ったと思うと、レアの姿をしたオスカーの前から消え、後ろから声が聞こえた。

「絶対嫌だもん!! せっかくクラーナと二人で考えて作ったのに!! こんな変態戦法に負けるなんて……」

「変態じゃない。体を預けるなんて、本当に信じてないといけない」

レアの姿をしたオスカーが後ろを見ると、恐らくポートキーで移動したエストと、そのエストの首元に杖を当てているオスカーの姿を見たレアが見えた。

勝負は終わった様だった。

「そこまで!! 試合は終了だ!!」

拡声呪文で大きくなったスクリムジョール先生の声と同時に、恐らくスリザリンとレイブンクローのモノであろう歓声が聞こえる。

レアの姿のオスカーからは、信じられないという顔のオスカーの姿をしたレアが見え、エストはブツブツまだ何か言っていた。

「勝ったら…… 負けちゃったの…… クラーナと一緒にだったのに……」

「エスト……」

「その姿で話しかけないで欲しいの。それに、負けは負けなの」

「俺は何もしてないけどな、今回」

「ボクじゃないの? とにかく、エストとクラーナは負けなの」

どうも、エストはオスカーに喋りかけて欲しくない様だった。呪文が解けたのか、こっちにやってくるクラーナの姿も見えた。

「オスカー先輩。これ、あとちょっとで解けちゃいます。一回、あそこに戻らないと……」

「ヤバイな。正直、あんまり勝てると思って無かったから、時間を考えて無かった……」

「あの。先輩方。先生方にすぐ戻ってくるって言ったださい!!」

「え? なんなの? 逃避行?」

「ポリジューズ薬の時間ですか。ここで解けた方が面白いんじゃないですか。女物のローブを着たオスカーが優勝の写真に載ればいいでしょう」

二人はお互いに目くらまし呪文をかけて走りだした。途中でぽかんとした顔のトンクスや、最近、いつもよりさらに不機嫌で顔色の悪くなったスネイプ先生、なぜか見えないはずの二人に向かってウインクをしてくるダンブルドア先生の横を通りすぎて、大広間を出た。

階段を二回駆け上がって、二人は三階にある故障中と書かれたトイレに入った。

そのトイレはオスカーが入ったことのあるホグワーツのトイレの

中で最もボロボロだった。あちこち縁がかけた手洗い台や、割れた鏡がほとんどだったし、トイレの個室の扉にしても引つかき傷やら、落ちて壊れているやらで本当にボロボロだったのだ。

それに、今の姿なら問題ないかもしれないが、本当のオスカーの姿ではここは入れないはずの場所だった。なぜならここは女子トイレだからだ。

「あ、あの…… オスカー先輩…… 変身した時もそうだったんですけど…… その、あんまり着替える時に見ない様に……」

「流石に分かつてるよ。それに…… まあこのまま目くらまし呪文がかかってれば見えないだろ」

「あ…… そ、そうでした……」

個室に入って、ポリジューズ薬の効果が消える前にオスカーは自分の服に着替えた。自分の服はレアの体よりも大きかったので、着る分には問題が無かったのだ。

それにしても、この場所をポリジューズ薬の保管場所にしたのは、オスカーからすれば最初は余り良い考えだと思えなかったが、大広間からの距離と人の来なさから考えると妙案だった。

ポリジューズ薬の効果が切れてくると、やはりオスカーは少し気持ち悪くなった。変身する時は自分の体が強制的に骨も肉も小さくなって、肩や足がバキバキ言っていたが、今回はその逆で、バキバキと言う音と一緒に自分の体が大きくなっていき、何と言うか、体も筋肉質で固いモノに戻っていったのだ。

オスカーは靴を交換するのを忘れていたのを思い出した。レアの靴は何サイズも小さいモノだったので、もう足は悲鳴を上げていた。

目くらまし呪文を解き、自分の体と服が見えるようになったのを確認し、さつきまで着ていた服をオスカーは畳んだ。しかし、何か、今になって女子トイレで女物の服を畳んでいると言う事実が、フィルチがオスカーの事を目の敵にするのが無理が無いほど、ホグワーツの校則を粉々に打ち砕いている事実へとつながっている気がしたのだ。

オスカーは畳んだレイブンクロー生のローブや他の服、靴を持って個室の外にでた。ひび割れた鏡で、自分の姿が元に戻っているのが確

認できた。

「オスカー先輩…… これ、服です……」

「取りあえず靴を交換しないか、これだけは予備を持つてくるの忘れてたしな」

「そうですね。ここはトイレだし……」

「マートルがないから今日は静かだけどな」

お互いに靴と服を交換したが、何か、レアは勝ったと言うのに、オスカーと目線を合わせようとしなかった。

「やつぱり、会場にすぐ戻らないとダメですよね？」

「出る時にダンブルドア先生がウインクしてたから、そんなに待たせなければ大丈夫じゃないか？ けど何かやる……」

「先輩は…… その…… 嫌でしたか？ エスト先輩が言う様に気持ち悪かったですか？」

「気持ち悪かったって、レアに変身することがか？ まあ…… あんまり人に変身するのは気持ちいい事ではないよな。レアもそうだろう？」

「それはそうだけど……」

オスカーは今度は何にレアが悩んでいるのか分からなかった。エストがあんまりぶつぶつ気持ち悪い、気持ち悪いと言うのでショックでも受けたくらいしか思いつかなかった。

「まあでも、最後にレアが言ったのと同じ感じだけどな」

「え？」

「体を預けるなんてほんとに信じてないといけないって言ってただろ。俺だって、その辺の学生と一緒に勝つためだからって、いきなりポリジュース薬でお互いに変身なんかできないだろ。俺でも嫌なんだし、女の子からすればもつと嫌だろ。嫌だから際立つって…… 確かこんな事を夏休みに…… ああ、あの時はレアはいなかったか……」

「あ……」

つまり、オスカーが何を言いたかったのかと言えば、単純にそれくらいオスカーは目の前の女の子の事を信頼していたし、それは伝える

べきだと思っていた。事実、そのおかげで今日は正直に勝てないと思っていたのに、勝てたのだ。

「だから、レアが言ってみたみたいに、気持ち悪い事がお互いにできるくらいには信頼してるってことだろ」

「あ…… やっぱり…… えつと…… もう!! えい!!」

オスカーがそう言うのと、レアは下を向いたまま、手を握ったかと思うと、そのままオスカーに抱き着いてきた。

「あの…… 聞いてください。オスカー先輩。オスカー……」

「レア?」

「なんて言ったらいいのか分からなくて…… 閉心術の練習の時に、何度もできるまで待つって言うってくれたり、他にも…… 他人とはボクは全然違う経験をして、他の人とは遠い場所にいるはずなのに、それを見たはずなのに、見た後のはずなのに、なのにすごい近くにいる気がして……」

さつき、自分の体を取り戻して、これまでに無いほどオスカーは自分の体を感じたはずだった。それなのに、こつちを見ないで胸に顔を押し付けて喋るレアの体温と言葉で、オスカーは自分がどこにいるのか分かる気がした。

「ホントは誰も同じ場所とか世界にいない気がしてたのに、すごい近くにいる気がして…… それなのに、記憶を見たら、本当はこの人はもっとボクより遠い場所から見たはずなのに、それなのに、言ってくれたって分かって…… それでどうやっても会おうと思ったんだ」

服の匂いなのか、髪の毛の匂いなのか分からなかったが、どこからかカモミールの様な匂いがした。オスカーにはレアが言っていることが分かった。それはオスカーも色んな所で感じていることだったはずだからだ。

「だから、色んな、滅茶苦茶な事を言っつて、なんとかしようとして、でも最後にありがとうなんて言っつてくれて、また近くなったのかって安心して。そうしたら、すごい近くにいる気がして。体を交換したつて、こうやって、その、息遣いが分かるくらいに、あつたかさとか、自分が喋った声とか心臓の音が相手に直接伝わるくらい、近づいても、

同じ場所には入れないのに」

オスカーは何も返せる気がしなかった。代わりに、レアが何か言う度に、段々、自分が抱き着かれている女の子に認識されていると言う事が分かった。彼女が言うような事で、オスカーが嫌でも彼女がここにいると分かるように、オスカーはここにいることが分かった。

「でも、記憶から戻って来た時に言っただけの時とか、ボクが色んな事を言っただけ、答えてくれた時とか、今、信頼してるって言っただけの時とか、すごく、すごく、近くにいる気がするんだ。体は同じ場所にいれないし、これ以上近づけないけど、頭とか、魂とか心とか良く分からないけど。重なっている気がして、まるで分けられないみたいだ」
「どうしたらいいのかオスカーには分からなかった。少なくとも、強弱はあるにしろ、オスカーは同じモノを感じていたはずだった。抱き返せばいいのだろうか？ それとも彼女と同じ様に言葉で伝えればいいのか？ ただ、オスカーには自分が感じているモノを感情でも、理性でもどうしたらいいのか分からなかった。

「だから、もう少しだけ一緒にいたい。大広間に戻ったら、色んな人と勝ったこととか優勝したことを分け合えるけど。今は一緒にいたい」
「ずっとオスカーも感じていたはずだった。似ていて、近くにあるモノだから、己が見えているようだ。自分より年下の女の子に、自分の中の一部をまるで鏡のように見ている、だからどうかしたかったのだ。閉心術の練習をやめると言い出した時に、きっと自分は目の前の彼女が自分に立ち向かわないことが、まるで自分の様で嫌だったのだ。」

「分かった……」

「いったい自分の言葉にどれほどの意味があつて、どれくらい相手に伝わっているかは分からなかった。それは相手が返してくれないと分からなかった。自分で考えて、自分で外に出しているはずなのに、自分で分からないのだ。ただ、今は、彼女が言うように、言葉で、体温で、鼓動でそれがどう伝わって、自分がどうなっているのか分かる気がした。」

透明マント

オスカーの所にふくろうがやってきたのは、まるで見計らったかのように、周りに誰もいない時だった。エストがクイディッチの練習に行つたために、湖の傍にあるブナの木陰で、間近に迫つた期末試験のために変身術の教科書を読んでいたのだ。

決闘トーナメントが終わつてから、オスカーが一人になると言うのはかなり珍しい事だった。ふくろうから封筒を取り外して見てみても、差出人の名前は見当たらず無かつた。

オスカーは二年生の時の出来事から、余りこつと言つた手紙は得意では無かつた。

しかし、封筒を開いて中の奇妙に細長い文字を見るとオスカーは安心した。それは今学期何度か見た、アルバス・ダンブルドアの字に違い無かつた。

そこには、夕方、可能なら外に出れる服装をして、校長室に来て欲しいと書かれていた。

オスカーは頭をひねつて考えて見たが、いまいち、ダンブルドアが何故こんな事を書いたのか分からなかつた。正直、もう、憂いの節を使つても何か思ひだせる気がしなかつたし、その旨をスネイプ先生にも伝えてあつたからだ。

「オスカー何読んでるんですか……」

「オスカー先輩何を……」

手紙を読んでいると二人が顔を出したが、二人共、同じ事を同時に言おうとして、少し詰まつた様だった。

「ダンブルドア先生からの手紙だけど」

「ダンブルドア先生ですか？ それって……」

「あの、読んでもいいですか？」

「大した事書いてあるわけじゃないから別にいいけど」

何と言えればいいのか、オスカーは決闘トーナメントの後辺りから、どうもみんなの醸し出す空気が変わつていふと言ふのか、関係が変わつていふと言ふのか、そう言つたモノを感じ取つていた。

特に目の前の二人は明らかに何か変わった気がした。もちろん、何が違うかと言われればオスカーは答えられなかったが、例えば、夏休みにグリーンゴッツに行った時とは明らかに二人の関係が変わっている気がするのだ。

「外に出る服装？ 外って校庭？ 禁じられた森とか？ それともホグワーツの外？」

「ちよつと、私も読みたいです」

「勝手に読んでくれていいけど、まあ手紙の内容じゃどこか分からないな」

そう、手紙の内容ではいまいち何をするのか分からないのだ。オスカーはダンブルドアが一体何を考えてこれを書いたのかすら、想像がつかなかった。

「何か心当たりは無いんですか？ その、時々ダンブルドア先生の部屋に行ってたじゃないですか。その時に何か言って無かったんですか？」

「分からないな。決闘トーナメントのお祝いに三本の箒でファイア・ウィスキーをおごってくるとかか？ それだと俺だけの意味が分からないか」

「でも、ダンブルドア先生と一緒になら心配する必要は無いとボクは思っています。どこでも大丈夫なんじゃないかと」

それはオスカーも思っていたことだった。恐らく、アルバス・ダンブルドアの隣ほど、この世で安心な場所は無いはずなのだ。ヴォルデモートが全盛だった時代ですら、ホグワーツには手出しできなかったのだ。

「まあ、エストならダンブルドア先生とどこか行くなんて泣いて喜ぶかもな」

「それはそうでしょうけど…… あ、あのスリザリン出身の校長が呼び出したとかじゃないですか？ ほら、いつだったか校長室に行った時にいたじゃないですか」

「フィニアス・ナイジェラス…… 教授のことか？ まあ確かに、呼び出されそうだけど…… けど、肖像画は外に行けないだろ」

確かに、あのやたらオスカーに好意的な校長先生の肖像画なら、決闘トーナメントの後に呼び出してきても全く不思議では無かった。

「肖像画って、他の場所にも同じ肖像画があればそこに行けるはず…… フィニアス・ナイジェラス…… 校長先生？ の肖像画がどこにあるのかはボクは分からないですけど」

「フィニアス・ナイジェラス先生はトンクスのひいひいひいおじいさんか何かで、ブラック家の人らしいけどな。まあ流石に家にはあるんじゃないか？」

「ブラック家の屋敷なら、エストの家と同じくらいでかいでしょうし、あのグリーンゴッツの金庫じゃないですけど、凄なお宝があってもおかしくないですね。ダンブルドア先生が……」

「何？ クラーナはお金に困ってるわけ？ というか私の話してなかった？」

オスカーはエスト以外、誰にも言わずにここに来たはずだったのに、いつの間にかどんどん人が多くなってきた気がした。

「あ、トンクス先輩…… あの時言ってた本って……」

「レアってなんか人間が変わったわよね。また、オスカーが中に入ってるんじゃないの？ だいたいポリジューズ薬で聞きだした内容を喋るのって絶対フェアじゃないわ」

「何ですか？ 本って？ トンクスのアホの言う事はほつといていいですよ」

何人が集まれば姦しいと誰かが言っていたが、オスカーはもうダンブルドアの手紙のことなど、三人は頭に無さそうだと思った。

「何よ。あんたがどうやって負けたのか知ってるわよ。万眼鏡で何度もレアが入ったオスカーと喋ってたところを再生して解読してやったわ」

「は？ はああああ？ なんでそんな無駄な努力してるんですか？ おかしいでしょう!!」

「何で劇といい、私ばかりこんな…… 残念だったわね。毎回偽物のオスカーを掴まされて。ここにいる天然モノのオスカーを一時間十ガリオンで売っても良いわよ」

「何ですか!! せっかく惚れ薬の時に何も言わなかったのに!! 何が一番なんですか? ほら言ってみたらどうですか? 薬が足りないなら私がスクリムジョール先生のところから盗ってきてあげますよ」

オスカーはレアと目線を合わせて、これはどうしようも無くなったと合図を交わした。レアとクラリーナとの関係とは違って、この二人の関係は一年生の頃から変わっていない気がしたのだ。

「は? そんな事いつ頼んだのよ? 何だっけ? 愛の告白でもしてくれませんか??」

「こいつ…… ああ、そうでしたね。トンクスはオスカーの家の部屋が埋まるくらい家族が欲しいんでしょう。良かったじゃないですか、確か、二年のクリスマスの時もそんな事言っていましたからね。スリザリン寮とハッフルパフ寮はパンパンになりますよ」

久しぶりにオスカーはクラリーナに変身して、クラリーナを煽るトンクスを見た気がした。しかし、これまでと違って、クラリーナの方も大分反撃できているように見え、もしかして、少し悪い方向に進化しているのではないかとオスカーは思った。

「クラリーナのセーターはなんで赤だったのかしら? やっぱり自分の色なんじゃないの?」

「レア、きっきの本って結局何なんですか?」

「え? えつと…… 変な時間に書いたから…… ルームメイトに言われるとか…… これ以上誰かに言わないで欲しいみたいな感じでした」

「ちよつと…… レアあんた……」

「本? うーん…… トンクス、あなたがオスカーに贈ったのってあの馬鹿馬鹿しい本じゃ無かったですか? オスカー? そうですよね?」

オスカーも大体状況は飲み込めた気がした。多分、レアが自分に変身している間に、トンクスは文字が書き込める本の事を喋ってしまったのだらうと言う事と、どうも、トンクスはそれを黙っていて欲しいと言う事だった。

「まあ良く分からないけど。ノーコメントで」

「沈黙は正解ってことでしょう。本に書く…… 本…… 紙…… もしかして…… 忍び……」

「うっさいわよ!! だから、ポリジュース薬で仕入れた情報は反則だって言ってるじゃないの!! レアもクラーナも覚えてなさいよ。いくら私だって、誰かの顔に変身して、聞かれない事を聞きだしたりしないわよ」

珍しくトンクスがじゃれ合っているのではなく、結構、本当に怒っているようにオスカーには見えた。

「はあ? じゃあ劇の時にやったのは何なんですか? そんなの矛盾しているでしょう?」

「あの時の…… 面白そうなのも八割くらいあったけど、残りの二割は割とよかれと思ってやったのよ」

「ほんとにぶっ殺しますよ? 何が違うって言うんですか?」

「あの時は…… 今ならできないって事ですか? トンクス先輩?」

オスカーにはいまいち、レアの質問の意図は理解できなかった。

「何言ってるのよ。なんで今ならできなくなるって言うのよ」

「ふーん。そうですか。今はフェアじゃなくなるって事ですか」

「なんなのよ。とにかく、大体そこで寝転んで変身術の本を読んで、女の子に変身するのが大好きな変態野郎が悪いわ」

突然話題を飛ばされたので、オスカーは対応できなかった。それにどうせいつもと同じ様に騒いでいるだけだと思っていたからだ。

「いつも変身してるみたいない方はやめろよ。大体、それを知っている人はほとんどいないはずだからな」

「いい事聞いたわ。これのネタをホグワーツのみんなに言いふらすって言えば、変態のオスカーも、何か最近黒くなって容赦が無くなった、レアどころかミディアムになってるレアも黙らせれるってことね」

「全然上手く無いですよ。トンクス先輩」

「そうですよ。それで本だか紙はなんなんですか?」

結局、オスカーは変身術の勉強をすることはできなかったし、延々とトンクスと他二人の攻防を見ているだけで、試験が近いために与えられたせつかくの午後の自由時間が終わってしまった。

ただ、この一年間の中でもずいぶん緊張感の無い、リラックスした午後の様な気がオスカーはした。

ダンブルドアが指定した時間になっても、エストはまだ帰ってきていない様だった。オスカーは一応、魔法生物飼育学や闇の魔術に対する防衛術でする様な、怪我をしない動きやすい格好に変えた。

ただ、談話室を出る時に、もし、クラーナやレアの言うように外に行くのなら余り色んなモノを外に出すのは危ない気がしたのだ。

それは色んな人から貰ったモノだったり、誰かと一緒に見つけたモノだったりした。

それに、流石に今日の間には帰って来れると思っていたのだ。

「ジエマはエストが帰ってくるまで談話室にいるのか？」

「いると思います…… スネイプ先生の授業が最近レポートだらけなので…… 終わらないんです。手伝って貰えませんか？」

「俺はこの後、ダンブルドア先生のとこに行くから無理だな。これ、俺のカバンだけどここに置いとくから、見といてくれるか？ 多分、何本かバタービールが入ってるから、適当に飲んでいいぞ」

試験前のせいなのか、目にクマができているジエマが悲しそうな眼でオスカーを見たが、残念ながら午後の時間を湖で潰したオスカーに手伝う時間は残されていなかった。

「分かりました。先輩が手伝ってくれずにグリフィンドールっぽい人の所に遊びに行つたと報告しておきます」

「まあ確かにダンブルドア先生はグリフィンドールだな。じゃあよろしく」

スリザリン寮を出て、オスカーはダンブルドアの部屋がある西の塔の方へと向かっていた。ガーゴイル像を合言葉でどかし、螺旋階段を登る。校長室の扉をノックした所で、中からダンブルドア以外の声が聞こえてくることに気付いた。

「コーネリウス、そろそろ時間の様じゃ。わしはこの後にも用事があつてのう」

「アルバス。この半年ほど、私は一週間に二枚は手紙を書いたのに…… スクリムジョールにやっと戻ってきたと聞いて……」

オスカーはもう一人の声の主が誰かは分からなかった。しかし、どうももう一人はダンブルドアとやっと予定が合った様な事を言っていたので、少しはいるのが躊躇われた。

「オスカー、入って来ても大丈夫じゃ。コーネリウスも一度は君に会っておきたいじやろう」

「ダンブルドア。オスカーとは誰……」

「失礼します」

校長室に入ると、歴代の校長達の肖像画、それにダンブルドアと隣の人物、魔法省大臣、コーネリウス・ファッジの視線がオスカーに集まった。

ファッジは背が低く、恰幅の良い人物でその顔には余り自信と言うモノが見られない様にオスカーには見えた。

「コーネリウス、彼はオスカー・ドロホフじゃ、君も知っておろう」

ダンブルドアにそう言われ、一瞬、ファッジは眼をぱちくりさせた。その後、さつきまでの心配顔とは打って変わって、親戚の孫でも見る様な笑顔に変わった。

「ああ、君が…… 私はコーネリウス・ファッジ。魔法大臣だ。どうだね？ 君の家からは吸魂鬼はいなくなっただろう？ 後見人は闇祓いだと言うのに、監視をつけていたこれまでがおかしかったと思わないかね？」

「は、はあ……」

笑顔で握手をファッジにされながら、オスカーは少し戸惑っていた。オスカーの会ったことのないタイプの人間だった上、何か、スクリムジョール先生やキングズリーのボス、イギリス魔法界のトップがこう言う人間だと言う事に、ちよつと違和感があつたのだ。

「ともかくアルバス、私としてはクイディッチのワールドカップの前の予行演習として…… ホグワーツでやって貰いたい。そのため来年以降もと言う事だ。次は執行部は厳しいが、それ以外なら」

「確かに重要な事案であるが、コーネリウス。学期末にもう一度、席を

もうけようぞ。その頃ならわしの時間もあるじやろう」

「アルバス、確かに学期末と聞いたぞ。ドーリツシユから連絡するか、ふくろうを送る」

ファツジはそれで満足したのか、さつきオスカーに見せたよりもよっぽど笑顔になった。

「ではアルバス、私はお暇するでしょう。オスカー君も元気でやりたまえ」

「ああ。コーネリウス、申し訳ないの」

「お疲れ様です」

脇に挟んだライム色の山高帽を意気揚々と被り、ファツジはあつという間に扉の向こうへと消えてしまった。

「前任者とは違う事をしなければならぬというのは難しい事じやの。オスカー」

「それは、ミリセント前大臣ですか？ それとも、前の魔法法執行部部长？」

オスカーがそう聞くと、ダンブルドアは少しびびくりした顔をした。そして、その後何か思いついたような顔をして、半月眼鏡の向こう側に笑顔を浮かべた。

「なるほど、確かに君の周りには魔法省に関わる人たちがおることを忘れておった。特にグリフィンボールの友人二人ならば良く聞いておるじやろう。そうじやの、君に関わると言う意味では執行部の部長になるじやろう」

「いえ…… すいません。前に三本の箒で、マクゴナガル先生やフリットウィック先生が魔法省について喋っているのを聞いたので……」

「ロスメルタの蜂蜜酒はベリタセラムよりよほど効果があるようじや」

盗み聞いた事を言っても、ダンブルドアは笑ったままだった。その後、つかつかと歩いてペットの赤い鳥の方へ行ったので、オスカーもそれについて行った。オスカーは何度か見たその鳥が、不死鳥であり、フオークスという名前だと言う事を人から聞いて知っていた。

「さて、わしがいない間、スネイプ先生と憂いの篩を使っておったようじゃ。結果はどうだったかね？」

「はい。正直に言えば、全部思いだす事は出来ていません。ただ、これ以上、憂いの篩を使って思いだせるのか自信が無いです。感覚として、その……ほとんど全部思いだせたのに、最後のそれだけが思いだせない気がしてしまって……」

オズカーが途切れ途切れ言っても、ダンブルドアは相槌を打ちながら聞いてくれた。だが、喋っている間、オズカーはどこかもう思いださないでもいいのではないかと考えている自分や、記憶を見たく無いと考えている自分がいる気がしたのだった。

「なるほどのう。憂いの篩の効果はあったと言う事じゃの？ 現にトーナメントではその効果がありありと現れておった」

「あれは俺では無く、レアの方が頑張ったので……」

フォークスの頭を撫でながら、ダンブルドアはどこか夢心地の様にオズカーには見えた。いつも生徒達の前では余裕や笑顔を崩さない人であったし、怒っている所も二年生の最後までいしかオズカーは見ただことが無かったが、今日のダンブルドアは二年生の最後まで同じくらい機嫌が良さそうだったからだ。

「正直に言えば、わしは感動しておる。あっぱれと言わざるを得ないじやろう。もう半世紀以上、わしはホグワーツの校長をしておるが、君や君の周りには驚かされ続けておる」

「そんな事は……」

「君も君の周りの友人たちも、才能溢れる魔法使いや魔女達じゃが、悲しい事に我々教師の力不足もあり、その才能を真つすぐに伸ばす事は難しいのじゃ」

「先生が力不足なんてそんな……」

一体、目の前の魔法使いが力不足なら、誰ならホグワーツの教師として力不足で無いと言えるのだろうか？ マーリン？ レイブンクロー？ オズカーには想像することもできなかった。

「実際に力不足なのは確かなのじゃ、オズカー。君が知っている沢山の闇の魔法使いと魔女をわしが育てて送り出したのじゃ」

「でも、そうじゃない魔法使いや魔女も先生は送り出しているはずですよ」

「それはそうかもしれない。わしもどうして人が進む道が違うのか考える時がある。例えば、暖かい両親や家族がいる新入生が平均だとした時、君や君と組んでトーナメントに出た女の子は大きなハンデを持っていたと言わざるを得ないじやろう。逆にある生徒は、しがらみが無いと言う意味では、君たちより遥かにホグワーツの生徒達が立つスタートに近かったはずじゃ」

何と無く、オスカーにはその生徒が誰なのか分かる気がした。そう、その生徒もオスカーと同じ様に学校に通って卒業したはずなのだ。オスカーの両親や周りの皆の両親がそうだったように、目の前の魔法使いがそうだったように。

「何が違うのか、わしには君を見ていると分かる気がする。君はわしやその生徒が君の年に持っていなかったモノを沢山持つておる。わしが信じられぬほど大きな間違いをして、やっと手に入れたモノを持つておるのじや」

「そんな事は……」

「いや、君の行動が何よりそれを証明しておる。そして、わしには今、それが必要なのじや。わしは恐らく、他の人より賢い魔法使いじや、そしてわしはわしを信用してはおらぬ」

「先生が信用できないなんてことは……」

「わしは君や他の人たちがわしに向ける信用の十分の一も自分を信用してはおらぬ。だからこそ、わしは君に来て欲しい」

ダンブルドアはオスカーの顔を真正面から眉一つ動かさずに見た。真剣な顔だと言うのにオスカーにはどこか悲しそうに見えた。それはオスカーが一番嫌いな顔がその下に隠されているに違い無いと思っているからだだった。

「一体どこに行けばいいのですか？　そもそも何のために？」

「深くは話す事は出来ぬ。もう巻き込まれているとは言え、君はまだ学生で未成年の魔法使いじや、本来ならこの様な事をするのが論外なのじや。そして、全てを話してしまえば、否応ない戦いの中に君を放

り込んでしまう。もちろん、君がそれに向き合えるほどに勇敢で狡猾であることも知っておる。じゃが、それゆえに話す事ができることは少なくなるのじゃ」

今度はかつかつと歩きながらダンブルドアは喋りだした。後ろの肖像画達が喋りたそうにしているのがオズカーから見えた。

「わしはこの半年、君の話を聞いてからずっと探し物をしておった」
「それは……」

オズカーは考えた。ダンブルドアの探し物？ 確か、オズカーは一度だけ父の言葉をダンブルドアに伝えたはずだった。

「ヴォルデモートの指輪？ 夏休みにつけて戻ってきたとか言っていた…… それが見つかった？」

「まさにその通りじゃ、わしはそれがあつ場所が見つかったと考えておる。そして…… もしかすると、偶然が何度も重なるとわしは考えておる」

「ですが、俺と一緒に行って良いのですか？ スクリムジョール先生やスネイプ先生、マクゴナガル先生にフリットウィック先生の様な、実力のある先生方が沢山ホグワーツにはいます」

これこそ、一番オズカーが分からないことだった。なぜか肖像画達もその通り!! とか口々に言っていたが、自分である意味が良く分かっていなかったのだ。

「君の言葉が無ければ、そして君の行動が無ければこんなにも早くそれを見つけることはできなかったであろう。そして、さつきも言ったように、わしはわしを信頼しておらぬ。わしは考えておるのじゃ、恐らく自分一人では誘惑に耐えれなくなるのではないのかと」

「先生が誘惑される？」

オズカーには分からなかった。目の前の魔法使いを誘惑する？ いくらヴォルデモートとは言えそんな事が可能なのだろうか？ そもそも、そんな事ができるのなら、すでにヴォルデモートがやっていたのではないだろうか？

「そうじゃ、もし偶然が重なったのなら、わしは信用できない魔法使いとなるじやろう。しかし、君はわしよりも何倍、何十倍もそれに対抗

することが出来るはずじゃ。そして、傍にそう言った人間がいると言
う事がわしに自分を思い知らせるはずなのじゃ」

「先生よりその何かに対抗できるなんて、俺にそんな事が……」

「できる。わしは知っておる。君はわしの十分の一ほどしか生きてお
らぬかもしれぬ。しかし、君はわしの何十倍もの時間、それに向き
合って生きておる。今もそうじゃ、さっきわしに憂いの篩の事を話し
た時、君は別の考えをしていたのではないかね？ それが戦っている
証拠じゃ。君や君と一緒に優勝した女の子は、わしが戦い様が無いと
思っている事に対して、常に自分から戦いを挑んでおる。わしにはい
つもそれを行う事は出来ぬ」

何となく、オスカーにも分かった気がした。目の前の魔法使いに
は、恐らく未来と自分の行動がどうであるのか分かっていているのだらう
と言う事だ。それがどれほど抗わなければならぬ事なのかきつと
理解しているのだ。

ダンブルドアの一番弱い場所、それがどこなのかオスカーには分か
る気がした。一番強い場所が一番弱いのだ。生徒みんなに優しい先
生のどこが一番強くて一番弱いのか、弟のアバーフォースがどうであ
るのか。

「だから来て欲しいのじゃ。もし可能ならばじゃが」
「行きます」

オスカーは絶対に自分がそう言うだろう事は分かっていた。そも
そも、自分が自分であるためには逃げることはできないはずだった。
「オスカー、君にありがとうとわしは言わなくてはならない。そして、
条件がある。二つじゃ、わしが頼む側であるのに条件とはおかしな話
じゃが、真剣に聞いておくれ」

「はい」

「一つはわしが与える命令には、自分の命が関わる場合を除いて従う
ことじゃ、質問すること無しにじゃ」

「わかりました」

「オスカー、どんな命令にもじゃ、約束できるかの？」

「はい」

「逃げよと言えば従うかの？」

「はい」

「わしを身代わりにして助かれと言えば、従うか？」

「っ…… はい……」

ダンブルドアは恐らく自分の事を大分理解しているはずだとオスカーは思った。一番近いみんなと同じくらいとはいかないかもしれないが、同じスリザリンの同級生より、よっぽど理解しているかもしれないなかった。

「もう一つは…… わしを助けてはならぬと言う事じゃ。もし、わしが愚かな行動をとった場合、君が助けるのではなく、ここ、ホグワーツに戻って誰かの助けを呼ぶのじゃ。君にその力があることは、トーマメントやマルフォイ氏との一件や髪飾りの事から良く知っておる。しかし、してはならぬ。約束できるか？」

「はい……」

オスカーは本当にそれができるのか怪しかった、誰かを絶対に助けられる場合にそんな事ができるのだろうか？ それをしてしまえば、オスカーは自分が自分で無くなる気がするのだ。

「よろしい。もうすぐ日が沈む。すぐにでも出ようと思うが時間は良いかの？」

「はい」

「ではオスカー、これは借り物なのじゃが…… 恐らくこれから行く場所には一番ふさわしいモノじゃろう。君は校長室から出て、戻ってくるまでこれを被っているのじゃ」

ダンブルドアがオスカーに渡したそれは銀色の液体の様なモノだった。まるで水を織物にしたような肌触りのモノは重さをほとんど感じさせなかった。

「透明マント……」

「そうじゃ、借り物なので扱いには少し気を付けて欲しい。それは本物の透明マントなのじゃから」

オスカーがそれを被ってダンブルドアと校長室を出ようとした時、後ろから声が響いた。そう言えばオスカーがここに来れば毎回話し

かけてきたはずの声を今日は聞いていなかったのだ。

「ダンブルドア、やはり君はグリフィンドール出身と言うわけだ。その無謀な決断が私の寮の学生に危害を及ぼさないと信じておこう」

「その通りじゃ。だからこそ、君の様なスリザリン出身の者が必要なのじゃ」

フンと言う感じの声が聞こえて、それ以降は何も聞こえなくなった。オスカーにはそれが何ともその人物らしく聞こえた。

オスカーはダンブルドアについて、正面玄関を通り、ホグズミードへと向かう道を歩いていた。まだ、クイディッチの競技場で誰かが飛んでいるのが夕日に照らされて見えた。

男女の姿までは分からなかったので、どれがエストなのかはオスカーには分からなかった。

「このまま二本の箒かホッグズ・ヘッドまで行こうぞ。そうすれば一杯飲みに来たように見えるじゃろう?」

「はい」

ダンブルドアが通るとホグズミードで外に出ていた人が時々ダンブルドアに話しかけた。それに対して答えるダンブルドアを見ながら、オスカーは本当にこれからダンブルドアが警告するような危険な場所に行くのだろうかと思った。

「あら、アルバス、今日は飲んでいくのかしら?」

「こんばんは、ロスマルタ、すまぬがホッグズ・ヘッドへ行くところじゃ、今夜は静かな場所に行きたい気分なのと、なんとも何世紀ぶりに綺麗になったのを見てみたいのう……」

ホッグズ・ヘッドのイノシシの首が描かれている看板がキーキーと風に揺られて鳴いている。何とも意外な事にホッグズ・ヘッドは随分と盛況な様で、エストと屋敷しもべが綺麗にしたガラスの向こうには、色んな人達がバタービールや他のお酒を飲む様子が見て取れた。「君といつも一緒にいる女の子についてピンス先生が話すときには、最初にホッグズ・ヘッドを綺麗にした魔女だと説明されそうじゃな。ではオスカー、わしの腕に掴まってくれるかの?」

「はい」

オスカーが気が付けばいつの間にか闇の中だった。体があらゆる方向から押さえつけられ、どんどん体が感じる全てが、目が鼓膜が肺が、骨へと体の中心へと押し付けられていった。

気づけばオスカーはダンブルドアと一緒に田舎の小道に立っていた。

「大丈夫かのオスカー？」

「はい、姿現しは何度か連れられてやったことがあるので」

「それは僥倖じゃ。こっちじやの」

ダンブルドアの歩みに従ってオスカーはまた歩き始めた。途中の看板には『リトル・ハングルトン 八キロ』と書かれており、両側には初夏のせいなのかうっそうとした雑草が生い茂っていた。

曲がりくねった小道を行くと、突然オスカーの前に視界が開けた。二つの丘に挟まれた谷、谷に流れる川に沿ってつくられたこの村がリトル・ハングルトンの村だと言う事は見れば分かった。

教会や墓地、それに谷の向こう側には少しだけ手入れがされているかなり大きな屋敷が見えた。それほど念入りに手入れされているわけでは無さそうだったが、見た目だけならオスカーやエストの家と同じくらい広かっただろう。

「ここじゃの」

ダンブルドアが草が生い茂って何も見えない場所で杖を振った。草が見る見る間に刈られて、辛うじて昔生垣だったであろうとわかる高く暗い木々がでてきた。

その古いおとぎ話に出てきそうな暗い木々に囲まれた道は、ゆつくりとした傾斜をもちながら、下の方に見える、さらに鬱蒼として暗い木々が生い茂る場所が続いている様だった。

「少し苦勞するじゃろうが行くしかない様じゃ」

「はい」

その鬱蒼した木々の中に、どうやって建っているのか分からないほどボロボロの小屋が立っているのが見えた。オスカーが屋敷の庭にまねごとで作っていた小屋と比べてもボロボロだと言えるくらいその小屋はボロボロだった。

「あれじゃ。あそこが今日の目的地じゃ」

「あそこに……指輪が？」

オスカーは疑問だった。ヴォルデモートがあんなボロボロの場所に指輪を隠すのだろうかと思ったのだ。少なくとも、オスカーからすればもつと、何と言えればいいのか、格の高い場所にそう言ったモノを隠すのではないのかと思ったからだ。

「そうじゃ。あれは信じられぬかもしれぬが、ブラックやシャツクルボルト、プルウエツトやウィーズリーに並んで数えられた血族の家なのじゃ。今から魔法を使う。近づくで無いぞオスカー」

オスカーが一步引くと、ダンブルドアが杖を振り、決闘の時に見るような青い泡がこの木立一帯を囲んだ。次に銀色の光線の様なモノが杖から出て、小屋の周りにある見えない何かにぶつかつた。しばらく拮抗している様だったが、耳障りな、ガラスを爪でひつかく音と甲高い悲鳴が織り交ざつた音がして、見えない何かは壊れた様だった。

オスカーはダンブルドアが杖を構えているのをじっと見ているせいか、その杖がエストのモノと信じられないほどそっくりなのを見て取つた。

「さて、行こうかの。必ずわしの後ろを通るように」

「了解です」

小屋は確かに家としてはもっている様だったが、その中は最早人が住める状態では無かつた。色んな家具や小物は虫や腐つた木の葉で荒れ放題だつたし、何十年もの間、人が入つたようには見えなかつた。「なるほど。未恐ろしい魔法使いじゃと言えるじやろう。ホグワーツの在籍時にこれほどとは……」

「ダンブルドア先生？」

「一度、小屋から出てくれるかの？ オスカー？」

「はい」

オスカーが外に出ると同時に、緑と銀色の光と轟音が鳴り響いた。外から中を見れば、部屋の床が剥がされていて、その下から豪勢なつくりの箱が出てきたのだ。

その箱には、どこかオスカーが良く見たことのある寮のデザインを

模してある様に見えた。

ダンブルドアがその箱を開けると、中から何か紋章の様なモノが入った黒い石がついている指輪が出てきた。オスカーは明らかにその紋章を見たことがあった。

「これが指輪ですか？　先生」

「そうじゃ、そして……なるほど」

指輪に銀色の光が浴びせられ、見えない黒いモヤの様なモノが消えていった。その後、指輪だけが箱から浮き上がって、その石に何が描かれているかがオスカーにも分かった。棒に丸に三角形、オスカーはそれをホグワーツ特急の中で見たのだ。そしてそれが何の象徴なのか知っていたし、誰がその象徴を使っている、その誰かを誰が倒したのかも知っていた。

「少し、君の魔法を借りることしよう」

オスカーは強烈に嫌な予感がした。ダンブルドアの声には、オスカーがほとんど聞いたことのない色が含まれている気がした。髪飾りの事件の後にオスカー達に話をしてくれた時とも違う、明らかな期待と一抹の恐れが乗っている声なのだ。

オスカーは自分に向けられた言葉のはずだったが、ダンブルドアがどこも見えていない様な、うわの空の様な印象を受けた。そして、オスカーにはダンブルドアの視線が浮き上がっている指輪から少しずれている様に見えた。

「ダンブルドア先生？」

オスカーの声も、ダンブルドアには届いていなかった。ダンブルドアの杖から、紫色の炎が伸びて、指輪をかすめた。どう見てもきちんとして当たっていないにも関わらず、ダンブルドアはその炎を止めてしまった。

「信じられん。本当に存在するとは……　これで……　本当に……」

明らかにダンブルドアの声は上ずっていて、別の世界にいる様だった。指輪がゆっくりと落ちて行った。オスカーにはそれを手に取ってはいけない事が分かった。特に目の前の先生に持たしてはいけないのだ。明らかにダンブルドアはオスカーとは違う何かを見ていた。

透明マントを被ったまま、オスカーはダンブルドアを突き飛ばした。

指輪が、石がゆっくりと三回回りながら見えないオスカーの手の平へと落ちて行った。

蘇りの石

オスカーはどこにいいのか分からなかった。しばらくは自分が存在するのかわからなかった。静寂を聞いていた気がしたが、そもそも自分がいないのに静寂を聞けるはずが無かったのかもしれない。

しかし、オスカーはどこかに横たわっていたし、何かが自分の下にあって、体がそれを感じているという事実はオスカーが存在すると言う事を示していた。

自分の存在が明確になるに従って、段々、自分の周りに何があつて、自分がどうなっているのかが分かってきた。

周りには何も無い白いモヤが漂っているだけだったし、少なくとも最初、オスカーは何も着ていなかった。

起き上がって周りを見るのと同時に、いつの間にかいつも寮や自宅で着ていたペンスが用意した服を身にまとっていた。

オスカーは最初、どこにいいのかと考えていた。服が一人でも出てくるのを見て、必要の部屋やそれに類する場所にいるのかと思っただ。

ただ、周りを何度も見渡すにつれて、自分の着ている服と、杖を持つていないと言う事実を思い出すと、段々、世界が明確になっていった。後ろにあるのは人生の十年間のほとんどを過ごした家で、目の前にあるのは森へと続く小さな小道だった。

小さな小道を歩けば、段々と世界がさらに明確になっていく。決闘トーナメントの時の虫のさえずりや生き物の鳴き声が聞こえない森では無かった。

歩けば、目の前をトンボが通り過ぎて行ったり、ウサギが目の前を横切ったり、オスカーが木に近づけば小鳥がどこかへ飛んで行ったりした。

歩く度に地面にある落ち葉や枝を踏む感触と折れる音がする。間違いない、ここは家の庭にある森だと言う認識が、さらに明確に世界を創り出していた。

しばらく歩けば、オスカーは自分が子供の頃に遊びで作っていた、小屋の真似事のような木や枝を寄せ集めて作ったモノが見えて来たのが分かった。

いつか、何度も足を踏み入れていたせいなのか、足が勝手にそこへ動いたのかもしれない。

大きな切り株を中心にギリギリ雨を防げるくらいのレベルの小屋の中には、ドロホフ邸から持ち出した、古いホグワーツの教科書が何冊かと、糖蜜パイや蛙チョコレートと言った魔法界のお菓子と、オスカーがつい最近思いだした様な、魔法界よりも手の込んだお菓子が何個か散らばっていた。

小屋を出て、オスカーはどこに行けばいいのかは分かった。

ここから出るにはどうしたらいいのかはそれだけで分かった気がした。

外へ出れる様になってからも、一度も行こうとしなかった場所に行かなければならなかった。この夏休み、何度も森に出ても、一度も行こうとしなかった場所に行かないといけなかった。

どう言う理屈なのか、オスカーには分からなかった。

本当はダンブルドアと一緒に指輪を探しに来たはずだった。

オスカーがいたのは、こんな日の差し込む森では無く、トンボが飛び交う森では無く、オスカーの良く知っている森では無く、もつと陰鬱として、良からぬモノが潜んでいるような森だったはずなのだ。

それでも、どこに行けばいいのかは分かった。森の外れで、庭の外れ、自分が行ける一番外側、そこに行かないといけないことは分かっていた。

だから、その森の外れにある、小道の中の平べったい石の上で誰が座っているのかくらいは分かっていた。

「てつきり、真つすぐ（こ）までくると思ってたんだけど……」

「君は死んだはずだ」

目を何度閉じて開いても見えるものは一緒だった。

「あれかな？ 君はあんまり女の子ばかりと仲良くなるものだから、私に会うのが気まじくなつたのかな？」

「君は死んだはずだ」

何故か、オスカーと同じ年頃の風貌だったし、青色のホグワーツのローブを着ていたが、オスカーが見間違うはずは無かった。

「これもちよつと意外かな？ 君は私がレイブンクローに組み分けされると思っていたわけだ」

「君は死んだはずだ」

ローブを引つ張ったり、訝しい眼で見たりして動いていた。銀色の髪が揺れていた。喋っていた。

「なんだいオスカー？ 壊れちやつたのかい？ うちのテレビみたいに斜めから……」

「君は死んだ!!」

この森に入った時から分かっていたのに、オスカーには受け入れられなかった。どう見ても、目の前の彼女は動いて、笑って、喋って、息をしているのだ。

「せっかく久しぶりに会ったのに、そんなに大声……」

「君は死んだ!! 死んだ!! 僕が殺した!!」

「オスカー、君は今俺ってみんなに言っていたんじゃないのかい？」

「僕が殺した!! 君は死んだ!! 絶対に死んだ!!」

オスカーが大声を出しても、彼女は困ったように笑うだけだった。

「それは重要な問題なのかい？ オスカー？」

「君は死んだ……」

「取りあえず、今は喋ってるじゃないか」

「君は死んだんだ……」

それがあり得なかった。絶対にオスカーは彼女を殺したのだ。全部覚えていた。彼女があげる声も、ヴォルデモートと父親の力も、杖から伝わってくる体の感触も、服が肉が焼ける臭いも。

「ちよつと喋ろうじゃないか、今なら、君はお母さんから聞いた話じゃない、ホグワーツの話ができるんだろう？」

「君は死んだ……」

目の前で誰がどう見ても動いて、話していると言うのに、オスカーには受け入れ難かった。何より、受け入れてしまえば、自分の中にあ

る何かを外れてしまいそうだった。

「ダンブルドア。一体何が起こったというのです?」

「わしが愚かだったのじゃ……」

スネイプがダンブルドアに尋ねる中、ダンブルドアは青い顔で銀の道具を寝かされているオスカーの傍へと持っていった。

「フォークス、見張りをしてくれるかの? セブルス、あの指輪の呪いはオスカーには広がっておらんのかな?」

「それは…… そうでしょう。恐らく指にはめることが呪いのトリガーになっていたはずですよ。しかし彼は触れたのでしょう? どの程度の影響があるのかは……」

ダンブルドアがフォークスに言うと、不死鳥は炎に包まれ、その姿を消した。スネイプの自信無さげな声が響いた。

「直接は触れてはおらぬ。触れた時には透明マントを被っておったはずじゃ」

「指輪にかけられていたのは異常に強力な呪いです。その透明マントがどうやってつくられたのかは存じませんが、ただの布やデミガイズの革で造られたものなど……」

「セブルス、このマントは普通の透明マントではない……」

半分、懇願するような声でダンブルドアが呟いた。オスカーの傍に運ばれた銀の道具はひとりで動き出して、何かのリズムに乗ってチリンチリンと鳴っていた。そして、天辺にある小さな管から薄緑色の煙がタバコや煙管の様に上がっていた。

ダンブルドアは未だに青い顔でその煙の様子を見た。煙は段々と渦を巻いて、恐らく蛇の様な何かと、小さい複数の飛んでいる何かの煙の中で戦っているように見えた。

「なんともはや……」

「ダンブルドア、一体、何をしていたと言うのです? そもそも、貴方がついていながらこの様な……」

「わしは愚かだったのじゃ。セブルス。一世紀近く生きてても、何も変わらなかつたという事じゃ」

ダンブルドアの要領の得ない回答にスネイプは嘆息した。校長室にスネイプが呼ばれてから、何度同じ質問をしても、ダンブルドアから得られる回答が毎回要領を得ないモノだったからだ。

「なぜ、彼を連れて行つたのです？　そもそも彼は未成年で学生でしよう」

「月並みな言葉で言えば、違う道が開けたと思つた。いずれやらねばならぬ事を先にできると思つたのじゃ」

「一体何の話を……」

スネイプがさらに質問しようとしていたところで、フォークスが炎を上げてダンブルドアの傍に現れた。

「この Hogwartz では隠し事はできないようじゃ。セブルス」

「今はガーゴイル像が入り口をふさいでいるのではないのですか？」

「わしよりもあの像が従いたくなる人間がおると言う事じやろう」

螺旋階段を上がつて、数人が校長室に入つてきた。大人の男が一人、少年が一人、少女が四人。肖像画達も入つてきた六人も、元からいた二人も何も喋らなかつた。

「オスカー、教えてくれないのかい？」

「何を教えるつて言うんだ？　君は死んだはずだ」

オスカーには分かつていた。自分には話す資格すらないはずだつた。喋っている事があり得ないのだ。喋れたとしても、喋ることなど許されないはずなのだ。

「何つて、色々あるじゃないか？　君はあれから色んな人に会つたり、色んな人と喋つたり、色んな事を考えたり、色んな事をしたんだろう？」

「君は死んだ。それを聞いてどうするつて言うんだ？」

また困った顔をして彼女はオスカーに笑いかけた。

「どうって、聞きたいからだよ。君は昔も話してくれたじゃないか。その時は、お母さんやお父さんやペンスさんから聞いた事を私に話してくれたんだろう？ でも、今度は君の話をできるんだろう？」

「君は死んだんだ。僕の話が君が聞いていいはずが無い」

「私が聞きたいって言うてるんだよ。オスカー」

オスカーは喋ってはいけない気がした。こうしてこの場所に、彼女の前に立っているだけで、何かが壊れてしまいそうだったからだ。

「何を喋ればいいって言うんだ」

「君の喋りたい事って言いたいけど……ここは指定した方がいいのかな？ そうだな……じゃあ、今、君がいる寮の事を話してくれないかい？ ほら、昔も寮が四つあるって紹介してくれただろう？ 実際入ってどうだった？」

話してはいけない。オスカーは思っていた。いつもずっとどこかでセーブしているはずの何かが漏れ出してしまいそうだったからだ。

「スリザリンの話って事なのか？」

「そうだよ。他の寮とは仲が悪いんだろう？」

「仲は悪いよ。でも、その分寮の中では仲は良いんだ。他の寮なら見捨てそうな人でもスリザリン生は助けようとする」

「それって、そう言う人たちは自分がどうなってるか分からないってことじゃないのかい？ 見捨てられたり、怒られないとわからないんじゃないかって思うんだけど？」

「そう言う人もいるけど、そう言う人たちだから見捨てないんだろ」

言っではいけない。言えば、自分の中でずっと貯め置いていたものが流れ出てしまいそうなのだ。

「じゃあ、授業の話をしてくれないか？ 君は色々な授業を受けてるだろう？ 成績も結構いいみたいじゃないか」

「授業って何の授業なんだ」

「ほら、変身術とか、呪文学とか、魔法薬学とか色々あるだろう？ ああ、君は闇の魔術に対する防衛術ではトップを取ったことがあるんじゃないか？」

「闇の魔術に対する防衛術は……先生によって教え方が全然違う。でも、言ってることはみんな同じかもしれない」

「同じって何がだい？」

「みんな協力しろって言う。それと……あんまりこっちは言わないけど……多分、相手がやってくることを理解しろって言ってると思う」

「相手って、闇の魔術？ でも、それは危ない事なんじゃないのかい？」

「理解できないモノには対処できないだろ。生物でも魔法使いでも魔法でも、怖いからって知ろうとしなければ何もできない」

伝えてはいけない。もしかしたら、何度か表面に出してしまった事があるかもしれない。それでも、自分の中で燻っている何かは外に出すわけにいかなかった。

「そうだな……色んな先生がいるんだろう？ 校長先生に……他にも授業ごとに色んな先生がいるって言ってたじゃないか」

「そりゃいっぱいいるよ」

「ほら、君の寮にも先生がいるんだろ？ どんな人？」

「スネイプ先生？ 魔法薬学の先生で、全然笑わないし、グリフィン・ドールが大嫌いでスリザリンをえこひいきする先生だな」

「それじゃあいい所は全く無いみたいじゃないか」

「一番若い先生だし……実際、魔法薬学に関しては凄い。それにダンプルドア先生に信頼されていると思う。マクゴナガル先生と同じくらい信頼されていると思う」

「マクゴナガル先生はどうなんだい？」

「厳しいけど、クイディッチ以外は寮に分け隔てなく教えてくれる。本当に勉強したいって言えば、本当に応援してくれるし」

彼女はオスカーの話をずっと笑顔で聞いていた。オスカーは話す度にあることを思っては考えが止まりそうになっていた。そして、言葉が話す度に、ホグワーツの事を話す度に、その事が頭に浮かんで、言葉に出そうになっては止めていた。

「一番大事なことを聞こうかな？ 君の周りの人の話をしてくれない

か？　どんな人かっただよ」

「誰の事だよ」

「うーん……　なら出会ったのが遅い順から喋ってくれるかい？」

「会ったのが……」

「ほら、最近トイレで抱き着かれてたんじゃ？」

「レアのことか」

「そう、金髪のショートカットの女の子のことだよ」

「どうって言われても……　言い方は難しいけど……」

「難しいけど？」

「凄く強いと思う」

「女の子に強いつて何かおかしくないかい？」

「でも、それしか僕には言いようが無い。これまでであった人の中で一番強いと思う」

「強いつて心がっただよね？　どうしてだい？」

「正面から見ようとしてるから。本当は考えない方が楽だけど、多分、性格とか頭の良さとかがそうさせないんだと思う。見れば見る程、ばらばらになって傷つくのに見ようとしてたから」

「本当はそれが彼女の良い所のはずなのに、それが逆に自分を傷つけてたっただよかい？」

「そうかもな」

そもそも、オスカーは Hogwarts に入ってから、何度そう言った考えが出てきては消えていったのか分からなかった。今学期の始まりまでは、段々とそれが浮かんでくるのが少なくなっていると思っていた。そう思ったとしても、そう考えたとしても、出会ったり喋った人の事を考えて、無意識の海の中にそれを放り込んでいたのかもしれない。なかった。

「じゃあ、ほら、あの変身するのが得意な子はどうなんだい？　惚れ薬はちよつと可哀想だったけどね」

「トunksか……」

「そうだよ。名前を呼ばれるのが嫌いな子」

「優しくして、誠実だと思う」

「いつも悪戯したりしてるのに?」

「ああ、でも、三年生の時に良く分かったけど、自分の感情にも、誰かの感情にもすごく素直だ」

「誰かの感情に素直?」

「誰かが苦しんでいるとか、誰かが嫌な目に遭っている時にそれが嫌だっと思ってるのは凄いいことだろ」

「でもそれは多かれ少なかれ、君や私も誰だってそうなんじゃないのかい?」

「でも、自分が入っちゃうだろ。助けようって気持ちに入っちゃうだろ。誰かを助けてその人が笑っているから嬉しいとか、助けて貰って、そう思われて嬉しいなんて、それだけで嬉しいなんて、きっと僕には思えない」

「ダンブルドア、どういう状況なのかね? そもそも、ガーゴイル像は合言葉を言っても扉を開けない気だったようだが……」

スクリムジョールの言葉が銀の道具が出す蒸気の音しかしない校長室に響き渡った。鋭い眼でベッドに寝かされたオスカーと、一気に何十歳も老け込んだ様なダンブルドアを見ていた。

「ルーファス…… わしが間違えたのじゃ……」

「オスカーはダンブルドア先生とどこかに行くかもしれないって言うてたはずです……」

「どこに行ってたかなんて、今はどうでもいいと思うの」

「そうです。先輩はどういう状態なんですか?」

矢継ぎ早にダンブルドアとスネイプに対して質問が飛んだ。ここにいるほとんどの人間がどのような状況なのか理解できていなかったからだ。

ダンブルドアが銀の道具と同じテーブルに置いてある、黒い石に線と丸と三角が刻まれた金の指輪を指し示した。

「原因はあれじゃ。しかし、今、オスカーがどういう状態なのかについて、わしは正確に伝える術と知識を持ってはおらぬ」

エストとレアが指輪の傍に、クラーナがオスカーの傍へ行って、残りの三人はまだ動かなかった。

「良く分からないけど、危険な状態ってことよね？」

「そうじゃなきや、僕たちが気付くはずが無いし、このカードが赤くはならないよね」

二人はカエルチョコレートのカードとほとんど同じデザインのカードを取り出した。いつかとった写真の中にはオスカーがおらず、名前の文字も赤くなっていた。

「これは何なの？ ダンブルドア先生？ 死の秘宝のマーク？」

「それは…… 回答は二つあるじやろう。一つはエストレヤ、君やレアが二年前に触れたモノと同じモノと言う答えじゃ」

「なら、これをぶっ壊せばボクやエスト先輩の時みたいに解決するんじゃないよ……」

「もう一つはなんなの？」

「恐らく…… この指輪…… いや、はめ込まれている石はおとぎ話の中にある、蘇りの石そのものだと言う事じゃ」

また沈黙が校長室を支配した。誰もがダンブルドアの言っている事を理解しようとしているはずだったが、歴代の校長達も含めて、しばらく誰も発言しなかった。

「そんなモノは存在しないの。おとぎ話の魔法は不可能なの。死者は戻ってこない」

「この石を使っても、死者を戻すことは恐らくできないのであろう。仮初の形での……」

「そもそも、これが本物の石だって言う証拠もないの。死の秘宝はニワトコの杖以外、どれも歴史に現れたことは無いはずなの」

「エストレヤ、わしは本物の透明マントを見たことも触ったこともあるのじゃ。その透明マントはイグノタスの子孫に受け継がれてきた。そして、他の透明マントと違い、手入れの必要も無く、呪文に対する耐性もあるモノじゃった」

ダンブルドアが近くの椅子に置かれている銀色の透明マントを指した。エストは彼女の人生の中でめつたにしない様な、信じられないと言う顔をした。

「そして、その指輪…… 石は…… カドマスの子孫として知られる一族の家にあつたモノじゃ」

「もし、これが本当に…… 本物の石だったとして、何が起こっているの？ 先生の言う通りならあれは、蘇りの石で、例の…… ヴォルデモートの分霊箱って言う事？ でも、分霊箱は二年前の時に破壊されたはずなの」

分霊箱と言う名前が出ると、ダンブルドア、スクリムジョール、スネイプの視線がエストへと向かった。

「ダンブルドア、その手の魔法の知識を貴方は嚴重に扱っていたはずだが」

「図書館には無かったけど、お家にはあつたの。深い闇の秘術にはバジリスクと一緒に、ギリシャの腐ったハーポが作ったって書いてあつたの。問題なのは、一個オスカーが壊したはずなのになんでまだあるのかって言う事なの」

「ダンブルドア、一体何の話をしているのかね。説明が必要だ」

もう一度、全員の視線がダンブルドアに集まつた。ダンブルドアは相変わらず、自信を失い、何十歳も年を取つた様な顔付きであつたが、それでも、説明せねばならない状況になると、その頭を上げた。

「ドラゴン好きな男の子の事も聞いておこうかな？」

「チャーリー？ チャーリーは魔法生物の話題とクイディッチの話題以外なら、一番周りが見えているだろ」

「そうなのかい？ と言うか、君は男の友人が少なすぎないかと思うんだけど？」

「チャーリーは、上にビルがいるし、下には一杯兄弟がいるから、なん

だかんだ色んな事を見てるよ。スリザリンの寮では普通に話すやつはいるから別にいいだろ」

「色んな事を見ているって、それはそれで難しいことじゃないのかい？」

「チャーリーはちゃんと自分のやりたい事や、なりたい事と、自分の周りを見れてるだろ。その難しい事をちゃんとやってる」

「そのせいで君は面白がられているんだらうけどね」

段々とオスカーは自分の口が軽くなっているのを感じていた。そして、周りの人の事を喋る度に、自分の中の波が、時々、溢れて、言葉になってしまっそうだった。

「なら続けてグリフィンドールの女の子の事を教えてくれるかい？」

「いつまでやればいいんだ」

「彼女を含めてあと二人だろう？ 君がいつも喋っているメンバーじゃないか」

「何を話せて言うんだ」

「だから君が思っていることをだよ」

「だから…… クラーナについて喋って何の意味があるんだ」

「さつきも言ったけど、私が聞きたいからだよ。それでどうなんだい？」

「どうって…… グリフィンドールだからかもしれないけど、やっぱり勇気があるよ」

「そうなのかい？ 何と言うか、彼女は強気でストレートな性格に見えるけれど、余り自分の思っている事を直接言うタイプでは無いって、君も思っているんじゃないのかい？」

「どういう意味なんだ？」

「勇気があれば、言いにくい事でも直接言えるんじゃないのかい？」

「それは…… 自分がそれを言えばどうなるか分かってるんだろ。分かかってない奴は言えるだろ。自分の行動がどういう結果になるのか、分かかってない奴は行動できるよ。でも、自分がそれをできるって思っで、それがどういう結果になるか分かってる奴が行動するのは、信じられないくらい勇気があることだろ」

ホグワーツに入って、オスカーは何を考えていたのか。授業でみんなと一緒に勉強するたびに、クイディッチの試合を見るたびに、ハグリッドの小屋でロックケーキを頑張って食べるたびに、図書館で宿題をするたびに、ホグズミードで遊ぶたびに、行きと帰りのホグワーツ特急に乗るたびに。

「そうか…… うん。分かったよ。じゃあ、最初に出会った女の子の話をしてくれないか？」

「最初に……」

「オスカー、ホグワーツ特急で君のコンパートメントに最初に入ってきた女の子の事だよ」

「分かってるよ」

「君は彼女が列車に乗るのも見てたじゃないか」

「そうだよ…… エストは…… 見てるものが違う」

「また難しい事を言うよね。それはどういう意味なんだい？ オスカーの言葉で教えて欲しい」

「エストは何にでも意味があると思ってる。エストはスリザリンで純血でシーカーで人より魔法が使える。それも全部意味があると思ってる」

「その意味があるってどういう意味？」

「どれか一つの言葉とか意味でも、色んなモノが重なって、関わってできていってエストは思ってる」

「ふーん。それが…… 彼女がそう思っていると何かいい事があるのかな？」

「何かエストが行動する時のその行動の重さとかやる気とかそう言うのが他の人とは違ってる」

「そんなに違うのかい？ 君や他の人たちも彼女ほどでは無いかもしれないけど、十分に優秀なんだろう？」

「違う。エストはそう思ってやってるから、僕たちが一緒の事をして、全然違うモノを見て、経験してる。僕やクラーナが呪文を覚えたとか、魔法薬学で魔法薬を作ったと言うのと、エストがそれをやったでは全然違う。違うモノを同じ時間で手に入れてる」

「じゃあそれが彼女の良い所なのかい？」

「そうかもしれない。一緒にいるだけで、いつもと違う目線でモノを見れる。同じモノから違うモノを見れる。意味がないと思っていた事に意味ができる……」

オスカーがそこまで言うのと、彼女はうんうんと満足そうに頷いていた。もう一度、オスカーが見ても、ゴーストの様に透き通っておらず、目も鼻も口も動いていて、この場所がいつかの森の中でなく、ホグワーツの広場や図書館や湖の傍だったのなら、まるで違和感の無く喋ることができたのかもしれない。

「わしに言えるのは、十中八九、あの石はヴォルデモートのわしの知るかぎり二つ目の分霊箱であるという事、そして、オスカーが分霊箱と蘇りの石に囚われていると言う事じゃ」

「ハーポだって二つの分霊箱を作ろうなんてしなかったはずなの」

「ヴォルデモートはそれをやったのじゃろう」

「だから、その分霊箱なら、レアが言っていたみたいに壊せば終わりなんじゃないんですか？」

ベッドに寝かされているオスカーの横にいたクラリーナが言うと、ダンブルドアが難しい顔で顔を横に振った。

「どういう状況なのかわしにも分からぬし、これほど強力で類を見ない魔法具の効果が重なったことは歴史上一度もないであろう」

「どういうことですか？ ダンブルドア先生」

ダンブルドアが顔を横に振った時点で、その場にいた生徒達の顔は明らかに険しくなった。ダンブルドアの顔を真剣に見ているレアと、何度も指輪とオスカーの顔で視線を行き来しているエスト、じつと苦しそうな顔をしているオスカーを見ているクラリーナ、そんなみんなを見ている二人がいた。

「もし、分霊箱がオスカーに憑りついておるのなら分霊箱を壊せば良い。しかし……」

「しかし、なんなんですか？」

「オスカーが指輪の中にいるって言うことなの？」

「わしの見立てでは…… そう言うことじゃ。じゃから、今のわしには指輪を破壊することができぬ」

みんなの視点が金の指輪に集まったが、指輪が動くわけでは無かつたし、ダンブルドアとエストの会話が果たしてみんなに理解されているのかは怪しかった。

「魔法使いが侵してはならぬ、第一の法則、それを体現した道具が重なつてもうておるのじゃ」

「でも、人が作ったモノなの。それで、ダンブルドア先生は今世紀で一番偉大な魔法使いなの」

反論を許さないと言う強い口調で喋りながら、エストがダンブルドアを真つすぐに見つめたが、ダンブルドアからはいつも生徒に見せる様な、柔和な笑顔も、醸し出す余裕も、溢れる様なエネルギーも感じられなかった。

「君は何がしたくて僕の前にいるんだ？」

「何って？ そりゃ君と喋りたかったからだろう？ 君が私と喋りたくないのなら謝らないといけないけれど」

「喋りたかった」

「ならオツケーじゃないか」

「オツケーじゃない」

オスカーはやつと彼女を見て喋っていた。喋りたい事がもつと沢山あったはずだった。それをずっとどこかで感じていたはずだった。

「ほら、何を喋りたかったんだい？ さっきまでは結局私がリードしていたじゃないか」

「色々……」

「色々じゃわからな……」

「九と四分の三番線に行った時から……」

「え？ 九と四分の三番線ってホグワーツ特急が出るところだろ？」

「九と四分の三番線にキングズリーに連れて行ってもらおう前も」

「前？ オスカー…… ちよつと……」

「ペンスに手伝ってもらってトランクに荷物を詰めてる時も」

「オスカー……」

「ホグワーツの入学許可証が届いた時から……」

何重にも幾重にも漏れ出さない様に、考えない様にしてきたつもりだったのに、一瞬でそれらが流されていった気がオスカーはした。頭の中が熱くて重くてどうしようも無くなっていた。歯を食いしばっても、唇を噛んでも、もう駄目だった。

「君と一緒に…… 教科書やいるモノのリストを読んでもるはずだった。ダイアゴン横丁だって、オリバンダーの店も、フローリッシュ・アンド・ブロッツ書店も、グリーンゴッツ銀行も全部一緒に行くと思ってた。ホグワーツ特急も一緒に乗るはずだった。ホグワーツ特急で最初に喋るのは君のはずだった。ハグリッドの船と一緒に乗るのも、組み分け帽子を待っている間に喋る相手だって、絶対君のはずだった！！」

「そんな……」

「そんなこと考えちゃいけないって!! 絶対ダメだって分かってもそう思ってた…… 比べれるはずなのに、そんな事をして許されるわけがないのに、エストやクラーナや他の誰かと喋ったり、勉強したり、何か食べたりするときに、他の誰かじゃ無くて、君が隣に座って、今喋ってるみたいなの喋り方で、僕に何を言うんだらうって、考えてたんだ!! 分かっているんだ。そんな事しちゃいけないって、分かっているんだよ!! 分かっているんだ……」

「オスカー……」

もう、オスカーには前がほとんど見えていなかった。耳が聞こえているのかどうかも怪しかった。誰かに話すことなど絶対にできない

かった。そんな事は許されなかった。

「きつきも喋ったけど、ホグワーツ寮は四つあるんだ。多分、君はレイブンクローだったと思う。なんと無くだけど、ちよつと頭でつかちだけど、色んな知識を持ってて、喋ってみると面白いやつが多いんだ」
「そうだろうね」

「授業も面白いんだ。魔法薬学はスネイプ先生は意地悪だけど、本当に色んな魔法薬を学べる、体を変えることも、声を変えることも、眠らせることも、真実を喋らせることもいろんな事ができる魔法薬ができるんだ。変身術は厳しくて難しいけど、魔法の中で一番色んな事ができる、だからエストが一番好きな授業なんだ。闇の魔術に対する防衛術は先生が変わるけど、一番実践的な事を習える、だからクラーナが一番好きな授業なんだ。他にも薬草学とか呪文学とか…… 多分、君の性格なら数占が一番好きになると思う……」

「そうかもしれない」

「ホグワーツには色んな場所があつて、君が好きになりそうなのは…… 色んな偉大な魔法使いの肖像画があつて、喋ることのできる大階段とか、魔法界で一番色んな本が置いてある図書館とか、静かで涼しい黒い湖のほとりとか……」

「きつとそうだろう」

「面白い人ばかりなんだ…… ハグリッドは体は大きいけど凄く優しく、小屋の中は暖かいし…… すぐに話が飛ぶエストも、強気なものにからかわれるクラーナも、魔法生物の話しかしないチャーリーも、冗談しか言わないトンクスも、最近鋭い事ばかり言うレアも、僕と仲良くなれるんだから、君も仲良くなれると思う……」

「そうだね…… 楽しくて面白そうだった」

泣いたのはいつ以来なのか、オズカーは覚えてはいなかった。彼女の顔がいつの間にか目の前にあつた。いつか、カバンを直して興奮していた時の彼女の様に、オズカーの肩に両手を置いて、正面からオズカーを見ていた。

「オズカー、分かっているだろう？ そんなに君と長く喋れるわけじゃないことも」

「嫌だ」

「オスカー」

「絶対嫌だ。だって、君はここにいて、喋ってるじゃないか、感触も、匂いも、全部あるんだ」

「オスカー、分かっているだろう？ 君は自分が思っているよりも頭は良いんだ」

「なんで、なんで、なんでダメなんだ!! 一緒に列車に乗って、組み分け帽子を被るだけだった。大広間で何か食べたり、授業を受けたり、三本の筭でバタービールを飲むだけなのに…… それだけでいいのに、それだけで十分なのに!!」

そんな事は言うことも、考えることも許されない事くらい、オスカーには分かっていた。誰かと比べようが無い事くらい分かっていた。どうしてそれが許されないのかくらい分かっていた。自分が原因なのだ。

「僕は君に会うべきじゃ無かった」

「そんなことは無いだろう」

「会うべきじゃ無かった、今も、昔も会うべきじゃ無かった」

「オスカー、なんでそんな事を言うんだい？」

「君と一緒にホグワーツに行きたいなんて言って、今、君がどう思うかくらい、僕だって分かるはずだった」

「それは本当かい？」

「分かっているんだ。こんな風な事言うのは僕のせいなんだ。君がそうしたいとか、聞きたいと思っっているわけじゃないんだ。僕が聞いて欲しかったんだ」

「何を聞いて欲しいんだい？」

「君と一緒にホグワーツに行きたかった。ホグワーツの事を喋りたかった。家族のことを喋ってみたみたいに、みんなの事を聞いて欲しかった。そんなの、君が楽しいわけじゃないのに、僕が聞いて欲しかっただけなんだ」

オスカーが泣いているように、彼女も泣いていた。オスカーには分かっていた。ここにいていいはずがない事も、喋れば喋る程、どうし

ようもない事だつて分かつていた。

「ここにいちやいけないんだ。分かつてるんだ」

「オスカー、それが喋りたかつたことなのかい？」

言いたいことも喋りたいことも、それはお互いのためになって初めて意味があることくらい、オスカーは知っていた。一方通行では意味がない事くらい知っていた。

「分かつてるよ。僕は……俺は……君に会いたかつた!! ずっと会いたかつた!! 謝りたかつた……許してもらいたかつた……でも、それは君のためじゃ無いんだ。分かつてるんだ。俺は俺が許してもらいたかつたから、君に会いたかつたんだ。だから……会うべきじゃ無かつた。会つても君にとって良いことなんて無かつたはずなんだ……」

「オスカー……」

体の距離が近づいて、銀色の髪がオスカーの顔に何度か当たった。アモルテンシアの入った鍋やいつかの蜂蜜酒で香つたのと同じ、リンゴの様な香りが体を包んだ。

「分かつてるんだ。これが現実じゃ無くて、頭とか心の中のことだつてことくらい」

「オスカー、それと現実と何が違うつて言うんだい？ むしろ大事なものはそつちじゃないのかい？ ねえ、オスカー。できるなら、君を私が許す様に、君も君を許してあげて欲しい」

「そんなのダメだ。絶対ダメだ、そんなことあつちやいけないんだ」
「そうしたら、君が色んな人の話を聞いて、私に喋つてくれたのと同じ様に、君が誰かを許すことができるんじゃないかな？ そうしたら、その誰かはまたその人や、違う人を許してあげれるだろう？ それが一番意味があることなんじゃないかな？」

「なんで…… どうして…… 君だけがそうなるんだ…… 嫌なんだ…… 君が死んだつて認めるのも、自分を許すのも嫌なんだ……」

明確だった森や平べったい石や、虫や生き物の声が消えていった。誰かの心臓の音や息遣いが、体の熱が段々遠くに、小さくなっていく気がした。

「オスカー、会えて私は良かったと思ってるよ。今も最初にあった時もそう思ってる。だから、許すから、許してあげてね。それに、君よりもっとバラバラになってしまった人を、ここから出してあげて欲しい」

「ごめん、ごめん、ごめん……」

「だから、オスカー。最後に名前だけ呼んで欲しい。それだけでいいから」

「シラ、会えて嬉しかった」

完全に自分では無い体の熱が消えてしまった。オスカーのイメージではない、誰かの世界が周りに広がりつつあった。

虫や鳥の声が消えて、冷たい雪が街中に降り積もっていた。

オスカーの体を冬の外気が襲っていた。

しかし、不思議と体は全く冷たく無かった。いつの間にか、いつもホグワーツでする格好になっていた。

一度、バラバラになって、色んな人の手を借りて、何とか形だけは張り合わせて、元の形の様に見える様になった何か。それでもひび割れて欠けた場所だらけのそれが、信じられないほど熱く熱く熱されて、欠けている場所やひび割れが全く無い様に、新しい鑄型からでたばかりの様に、元の形になっていった気がした。

取り戻したそれから、体へと、熱されたその一部が漏れ出している様で、寒くて冷たくて救いようが無い世界の中でも、オスカーは全く寒く無かった。

いつの間にか手にあつた杖は、これまで感じた事が無いほど体になじんでいた。まるで体にもう一本の腕が生えた様だった。

オスカーの目の前にある鉄門の中には、高い鉄柵に囲まれた石造りの建物があった。

それが何の建物なのかオスカーは知っていたし、そこに誰がいるのかも分かっていた。どうやってここから出ればいいのかも、オスカーは何となく分かっていた。

バラバラになった、この石に相応しくない誰かをここから出さなければいけないかった。

分霊箱

孤児院にいるのが誰なのかオスカーには分かっていった。

こんなに寒くて、誰もいない世界に誰がいるのかは良く分かっていった。

いつかの記憶と同じ様に孤児院の一室に向かう。

その部屋にはぼろ筆筒に椅子とベッドが一つずつある。オスカーは絶対にそうだと言う確信があった。

自分が見た世界と同じ様に、この世界はそう言う世界のはずだった。

扉を開ける。想像したのと全く同じ部屋には、ベッドに一人少年が座っている。年はオスカーよりも一、二歳ほど上に見える。

男のオスカーから見ても整っていると分かるその少年は、オスカーが記憶の中で見た時よりも目が怪しい光を灯している様に見えた。

「アントニン?」

「残念ながら俺はそんな名前じゃない」

「まあそうだろうな。ダンブルドアが年を取っていたし、だいたいアントニンをダンブルドアが連れてくる意味が分からない」

トム・リドルはオスカーの方を見た。二年前のエストと同じ様に明らかにオスカーの中身を見定めようとしている目だった。

「トム・リドル。俺はオスカー・ドロホフだ」

「ああ、ご丁寧にどうも、オスカー。ダンブルドアがわざわざこの指輪を探しに来ていると言う事は、僕はダンブルドアがそれほど警戒する程度には偉大な魔法使いになったらしいな」

リドルの手には、オスカーが現実世界で最後に見たのと同じ、黒い石の付いた金の指輪がはめられていた。

オスカーの視線が指輪に行ったのを見たのか、リドルはオスカーを見てニヤリと笑った。

「そしてオスカー、君は何故か君の方からこの指輪の中に入って来たと言うわけだ」

「俺がここにいるのは偶然じゃない」

そう言うとりドルの顔が真顔に戻った。オスカーの言葉の意味を考えているように見える。しかし、しばらくその顔をした後にまたニヤリと言う顔に戻る。笑みだと言うのにオスカーには全くいいモノとしてそれが感じられなかった。

「外の世界でダンブルドアがどれくらい狼狽していたのか見せた方がいいか？ オスカー？ 一、二度しか外を見ていないが、僕が見たことが無いほどダンブルドアは意気消沈しているようだ。何せ、自分だけではどうにもならないと思って、何人か人間を校長室に集めてくるらいだからな」

「ダンブルドア先生が間違えたのは事実だ。だからと言って俺がここにいるのは偶然じゃないって言っているんだ。分かるか？ トム・リドル？」

またリドルの顔が真顔に戻った。オスカーは自分があつたことのあるトム・リドル。つまり、本物のヴォルデモートとエストに憑りついていたトム・リドルよりも、目の前のトム・リドルは若く、分かり易いと思つた。

「それで？ 君に何ができるって言うんだ？ オスカー？ 僕は確かに君のことは知らないが、この場所で僕をどうにかできるって言うのか？」

「ここから出るのは簡単だ。君を消滅させるか、君の指輪を破壊するか、君がここにいるのをやめるのかのどれかだろ？」

それを聞くと、リドルは甲高い高笑いをあげた。オスカーが言っている事がおかしくてたまらない様だった。

「オスカー、冗談はよした方がいい。君が僕を消滅させる？ この指輪を破壊する？ ましてや僕が僕を創り出したことを後悔するだけ？」

「そう言うことだ。リドル」

また高笑いをリドルはあげた。いつの間にかリドルの服はマグルのそれでは無く、オスカーと同じスリザリンのローブになっていた。

ローブについている監督生のバッジから、リドルの年齢が五年生以上で七年生ではないことが分かる。そして手には杖が握られていた。

「オスカー？ 君は四年生か三年生なのか？ ダンブルドアが連れてくるくらいだから優秀ではあるんだろう。でも、僕を消滅させるだつて？ 僕が誰なのか知っているのか？」

「知ってるよ、トム・リドル。君は俺のいる時代では最悪の闇の魔法使いとして知られている」

そうオスカーが言うと、今度は明らかにリドルは機嫌が良くなった様だった。それどころか頬は上気して赤くなってさえた。

「当然だ。僕は……」

「スリザリンの末裔だつて言いたいのか？ リドル？」

オスカーが途中で遮ると少し気分がそがれた様だったが、また話始めた。オスカーは自分の周りの友人よりも、目の前の男の子を怒らせるのは簡単に見えた。

「そうだ。僕はサラザール・スリザリンの末裔だ。学生中に秘密のへ……」

「そうだよな、俺たちのスリザリン寮を作った魔法使いの末裔は、森の中のボロ小屋とマグルの孤児院に住んでたわけだろ？」

今度は完全にリドルの話が止まった。少し切れ込んだ様になっっている瞳孔がオスカーを真っ直ぐにとらえていた。

「オスカー、君は僕の話聞く気が無いみたいだな。せっかくの後輩だし、アントニンとも関係がありそうな君だから話してやつてるのに」

「それは俺を殺したり乗っ取る前提で話してるからだろ？ リドル？」

俺はこれでも結構君のことを知っているんだ」

「オスカーが泣いてるの初めて見たの」

「私もです……」

ベッドの両端に座っているエストとクラーナが呟いた。確かに眠っているはずのオスカーのまぶたの間から涙がこぼれ落ちていた。「それでダンブルドア。さつきミス・プルウエツトが言った様に、ここ

にある指輪がいくら強力な品物だったとしても、人が創ったモノには違いない。何か……」

「ルーファス、わしには予想しかできぬ」

「ボクが予想するよりもダンブルドア先生が予想する方がよっぽど信じられると思います。これから…… どうなるんですか？」

やはり、ダンブルドアは校長室の誰がどう見ても、いつもの状態ではない様に見えた。いつもより老け込んで見えたし、自分自身に失望している様だった。

「単純に考えるなら…… どちらかがオスカーの体を借りて出てくるのであろう」

「どっちかって…… もし、オスカーじゃなくて…… 違う方が出てきたらどうするのよ」

「指輪を壊せばいいんじゃない……」

「もし、エストがヴォルデモートなら、オスカーの体を人質に取ると思うの」

今度はエストの方へみんなの視線が集まった。彼女は一ミリも笑っていなかったし、クイディッチの試合前や本当に怒っている時と同じ様な、人の肌を刺すようなピリピリとしたエネルギーが出ている様だった。

「人質ってそんな……」

「いくらヴォルデモートが出てきたとしても、オスカーの体で、ダンブルドア先生やスクリムジョール先生をまとめて相手にするなんて不可能なの。ここはホグワーツで外に出る手段は限られているし、指輪の中のヴォルデモートからすれば、勝算が少しでもあるのはそれくらいだと思うの」

「だから…… 人質って何をするって言うんだ!？」

「普通に考えれば、自分を殺したり、手を出せばオスカーが死ぬって言うと思うの」

大声をあげたレアは信じられないモノを見る目でエストの顔を見て、その後、順番にスネイプ、スクリムジョール、ダンブルドアの顔を見て、誰も否定しないのを見ると歯を食いしばる様な顔をした。

目の前の少年をオスカーは怒らせなければいけないと思っていた。学生時代にずっと被つてきたであろうマスクを外さねばならなかった。

「オスカー、何度も言うが君は敬意を……」

「ああ、尊敬してるよりリドル。君にはカッコいい名前があるんだしな？ フラグレート!!」

オスカーは焼き印の呪文で空中に文字を作った。リドルはそれを黙って見ている。

「ヴォルデモート？ カッコいい名前だよな？ リドル？」

「オスカー、君が知っているくらいには僕の考えた名前……」

「今気づいたんだが、君の名前のアナグラムなんだよな。死の飛翔なんていかした名前だよな？」

空中に浮いた焼き印が動いて、ヴォルデモートを示す文字列から、リドルの本名、トム・マールヴォロ・リドルに変わった。

「それで、リドル。君は自分がどうやって死んだのか知ってるのか？」

いや、残りカスみたいな君がここにいるわけだから、色んな場所に中々取れない大鍋の汚れみたいに残っているんだろうけど」

「オスカー、何度も……」

「君は赤ん坊に負けたんだ。魔法界ではみんな知ってる。死の飛翔なんて名乗ってたこわーい魔法使いは一歳の赤ん坊に負けて姿を消したんだよ。リドル」

オスカーが喋りながら手を振るだけで焼き印のリドルの本名を消すと、リドルのオスカーを見る目が段々と本気になっているようだった。眼が充血しているように赤かった。それに杖を握る手もさつきよりも明らかに力が込められていた。

「オスカー、冗談もいい加減にした方がいい……」

「冗談なんかじゃない。それに君みたいな残りカスに会うのも俺は初めてじゃない」

今度は明らかにリドルの顔付きが変わった。さつきまで単なる怒りだった認識が、明確にオスカーを警戒する相手としてとらえている様だった。

「君が分霊箱を見たことがあるだつて？」

「リドル、君は俺が会ったことのあるどのリドルより若い。でも、きみより年寄りだったリドルは、俺が入れものごとぶっ壊した」

「嘘を言うな!! お前が僕の分霊箱を壊しただつて？ 僕より年下のお前が？ そんなことは不可能だ」

凄まじい強制力のある叫びだったが、オスカーはまるで感じ無かった。自分の考えている通り、リドルは自分の能力に対する自信が凄まじかったし、それを怒らせるのは簡単だった。

「リドル、君はどうせその指輪みたいな魔法の道具が好きなんだろう？ スリザリンの末裔の残りカスを入れるにふさわしいモノつてわけだろ？」

「オスカー……」

「君は自分が創設者の末裔だから、あの四人の持ち物だったらなんでも欲しいわけだ。だからレイブンクロウの髪飾りも欲しかったんだろ？」

「まさか、僕は髪飾りを手に入れたのか？」

「そうだ。君はヘレナをだましてアルバニアの森で髪飾りを手に入れた。それで Hogwatts に隠した」

さつきまで怒り続けていたと言うのに、今度はまた恍惚とした表情にリドルはなりかけていた。いつかのクリスマスにエストが見せたような、二年目の最後にダンブルドアが感激していたのにも似た顔だった。オスカーは目の前の少年がそんな顔を邪悪な本性を持っていながらするのが許せなかった。

「だから俺は君の残りカスごとぶっ壊したつてわけだ。リドル。二年前の話だ」

「ふざけるな!! 僕の分霊箱を十二か十三かそこらの子供が壊せるわけがないだろう!!」

やはり怒らせるのは簡単だった。いかに今世紀最悪の闇の魔法使

いでも、目の前にいるのは学生時代のそれだったし、何十年も指輪に閉じ込められ、その精神は完全とは言えなかった。

それに、オスカーは自分の精神も体も杖も心も魂も、今はすべてをコントロールできていた自信があった。

「リドル、君は髪飾りの意味もヘレナの話も何も理解できていなかった」

「あの弱い女が何だって言うんだ!! あいつは信じられないくらい恵まれた環境にいなながら、自分以上のモノを、自分に相応しくないモノを手に入れようとした愚か者だった!!」

「リドル、お前にその指輪は相応しくない。何より、お前に一番必要で、唯一先祖から受け継げるかもしれないそれをお前は理解できていない」

「戯言を言うんじゃない!!」

「リドル、お前がよりにもよってそれに自分の一部を入れたのが間違っていた。今からそれを証明してやる」

「スネイプ先生、研究室でボクが言った事は全部謝ります。だから何か解決する方法を教えてください。スネイプ先生は闇の魔術に対する防衛術の先生に毎年志願しているって噂ですし、二年前もダンブルドア先生がホグワーツで一番闇の魔術に詳しいのはスネイプ先生だって言っていました。ボクが言った事を許してくれなくてもいいんです。先輩を助けてください」

「ミス・マツキノン…… 残念ながら我輩には……」

「ちよ…… ちよつとレア……」

もし、ヴォルデモートが出てきたのなら、オスカーを人質に取るだろうと言う話が終わった瞬間にレアがスネイプにそう言った。トンクスがレアを止めようとしたが、全く止まる気配がしなかった。スネイプの方は努めて感情を出さない顔を保っている様に見えた。

「スクリムジョール先生、先生は熟練の闇祓いで闇の魔術に対する防

衛術の先生です。先生ならホグワーツの人は知らない様な、知識とか経験があるはずです。魔法省は魔法界の色んな人の代わりに闇の魔法使いと戦うことができる組織だって授業で言っていました。先生、助けてください」

「ミス・マツキノン、残念ながら私にも先例がない以上、明確な対策はだしかねる」

「レア、ちょっと聞いてるの？ ほら、ちょっと落ち着きなさいって」

さつきまでの会話から、大人の三人が解決策を提示することができない事くらい、まだ子供である四人にも分かっているはずだった。中でもエストと同じくらい会話に参加していたレアに分からないはずが無かった。それでも、レアの手を取って落ち着かせようとしているトンクスの方を見向きもせずに今度はダンブルドアの傍まで行った。

「ダンブルドア先生、先生はエスト先輩が言ってたみたいに、今世紀で一番偉大な魔法使いです。ホグワーツの校長です。先生は二年前にボクやクラーナ先輩やオスカー先輩に言っていました。ホグワーツでは助けを求める者には、必ずそれが与えられるって。だから、助けてください。ボクじゃなくて、オスカー先輩を助けて下さい」

「レア…… すまぬ。今はわしにも見守ることしかできぬのじゃ」

「だから、レア、やめなさいってば。私たちが何か言っても、何か変わるわけじゃないじゃないの」

しぼり出すような声のダンブルドアからの返答をレアが聞いたのと同時に、トンクスが無理やりレアを引っ張って、校長室にあったソファアーに座らそうとした。

「何もできないから、言ってるんじゃないか……」

「レア？」

トンクスと一緒にチャーリーがレアを座らそうとしたが、かたくなに彼女は座ろうとしなかった。オスカーやエストがホググズ・ヘッドで見た時と同じくらい震えていたのに、涙は流れていなかった。オスカーが起きていて、彼女の顔を見ていたのなら、一番嫌いな顔だと言っただけに違い無かった。

「だから…… ボクには何もできないから…… 言ってるって、言っ

てるんだ。助けることなんてできないし、他の強い人とか賢い人にすがることしかできないから……」

「レア、取りあえず座った方がいいよ」

「そうよ。そのうちけろつとした顔で起きるに決まってるじゃない。取りあえず座って待ちましよう」

「いつつも…… 闇の魔術に対する防衛術を習ったって、魔法省が威勢のいいことを言ったって、仲間に凄い魔法使いがいたって、誰も助けられないんだったら何も意味も無いんだ」

誰にそれが刺さっているのかは分からなかった。ただ、無理やり座らされて、震えながら自分の言葉に突き刺されている女の子よりも、それを聞いている何人かの方がそれが深く刺さっているはずだった。

赤色の閃光がリドルの杖から発されたが、バチツと言う音と一緒にオスカーの姿が消えた。リドルも同じく姿くらましを使って、オスカーを追いかける。

ダンブルドアが孤児院の院長と喋っていた広間に二人は移動していた。

「凄いいじゃないか、ホグワーツでは君の歳で姿くらましを覚える機会なんてほとんど無いはずだろう？」

「リドル、俺は君と違って、何度も大人の魔法使いと姿くらましや姿現しを使う機会があったんだ」

また赤色の光線が幾本かオスカーに向かって飛んでいったが、全て弾き飛ばした。孤児院の擦り切れたカーペットが弾かれた光線を受けて燃えた。

オスカーも姿くらましを使うのは初めてだったが、今のオスカーにとって、失敗すると言う考えの方がナンセンスだった。杖も意識も魔法も完全にコントロールできていると言う自負が今のオスカーにはあった。

「君はどうしてこんな孤児院にいるのか聞いてもいいか？ リドル？」

「君は僕について詳しいんじゃないかったのか？ オスカー？ 簡単な話だろ、僕が生まれたのはここだからだ」

「リドル、そうじゃないだろ？ 君はこの指輪の中では場所を選べたはずだ。それこそ、俺や君が長い時間を過ごしているスリザリンの談話室や、君が髪飾りを隠すのに使った必要の部屋でも良かっただろう？ それこそあのボロ小屋でもだ」

リドルはオスカーの必要の部屋と言う単語に反応したが、それよりもボロ小屋と言う単語に強く反応した。また真っ直ぐにリドルはオスカーの眼を見ようとす。しかし、オスカーは知っていた、この目の前の少年が人の眼は見ても、自分の眼は絶対に見させない人間であることを。

「何が言いたいんだ？ オスカー？」

「簡単な話だろ？ 君は自分で思っているんだ。自分に相応しい場所は、自分がいる場所は、自分の魂に相応しい場所はここだって」

無言の緑の閃光が数本炸裂した。孤児院の机や窓が緑色に照らされて、カーテンやカーペットが燃えたが、オスカーはそれを石造りの壁を変身させて全て避け切っていた。

「さつきヘレナに対して君は言っただろ。相応しくないモノを手に入れようとしたって。良く分かってるんじゃないか、君は自分に相応しいのがホグワーツじゃ無く、君の生まれた孤児院だってわかっていたんだろ？」

「お前、そんなに僕を怒らせたいのか？」

「ヘレナに相応しいのはホグワーツで、君に相応しいのはここだ。何より君が証明している」

「黙れ!!」

また呪文が炸裂して、今度は孤児院の床ごとリドルはオスカーを叩き潰そうとした。また姿くらましの音が聞こえて、暗い空の下の雪が積もった孤児院の屋上に二人は移動した。

「君がどうして純血にこだわるのか、俺はやつとわかってきた気がする

る」

「まだ戯言を繰り返すのか？ オスカー？」

「君の名前はトム・リドルだ。俺は聖二十八族の苗字くらい知っている。シャツクルボルト、プルウエツト、ウィーズリー、ブラック……」

リドルなんて面白い苗字は聞いた事が無い」

「それがどうしたんだ？」

「簡単だろ。今は聞かなくなったシャフィクとかゴントみたいなのが君のどつちかの一族で、指輪があつたボロ小屋に住んでたんだろ？」

「お前……」

「それでその一族とマグルが結婚して生まれたのがお前じゃないのか？ リドル？」

「そんな証拠がどこにあるんだ？」

「簡単だ。一、リドルなんて名前は聞いた事が無い。二、君は俺のいる時代では頭がおかしいくらいの純血主義で知られている。三、君はその名前が嫌いだ」

今度は怒りで紅潮せず、何も感情を感じさせない様な顔でリドルがオスカーを見ていた。外の寒さのせいかもしれないが、病的なほど、その顔は白く見えた。

「オスカー？ 何が言いたいんだ？」

「ちよつと考えればわかる。君は君を捨てたマグルが嫌いなんだ」

「だから何が言いたい？」

「君は純血も嫌いなんだろう？ 自分より血が濃いのに、自分より無能な純血が嫌いなんだ」

「お前に何がわかる？」

「君は混血が生まれるのが怖いんだろう？ 無能な純血と、嫌いなマグルが結婚して、自分みたいな境遇の人間が生まれるのも、同じくらい強い魔法使いが生まれるのが怖いんだろう？ 違うか？」

「だから!! お前に何がわかる!!」

リドルが杖を振ると、足元の屋上の石畳が変形して、三本ほどの蛇の様になった。それぞれの蛇とリドルの緑色の光線がオスカーを

狙ったが、ワンドレス・マジックで石造りの蛇を吹き飛ばし、杖で壁の様に変身させることで死の呪文を防いだ。

「僕についてお前が分かった様な口を聞くな」

「そうか？ 俺が俺のことを分からない様に、君も君のことを分からないんじゃないのか？」

「ふざけるな、いい加減その減らず口を閉じろ」

「リドル、君はホグワーツで初めて受け入れて貰えたと思ったんだろ？ でも、ホグワーツでも君は結局受け入れて貰えなかったんだろ？」

「だから、この僕に対して分かった様な口を聞くんじゃない!!」

「結局、オスカーが指輪の中で…… その…… ヴォルデモートに勝つことができれば戻ってくるんでしようか？」

クラーナがオスカーが杖を持っている方の手に、自分の手をあてながら言った。ベッドを挟んで向こう側にいるエストが答える。

「多分、ダンブルドア先生の言うとおりにならそうなんじゃないかな。勝つって言うのがどういうことを示しているのか、エストには分からないけど……」

「ダンブルドア先生？ どうなのよ？ あ…… どうなんですか？」

また指輪についた黒い石にずっと視線をやっていたダンブルドアが、トンクスの声を受けてやっと気付いた様だった。

「これもわしの想像にしかならぬが…… 一つはヴォルデモートを文字通り倒す事じゃ、もう一つはその指輪の中で指輪を破壊することじゃろう。わしが考え付く中で現実的なのはその二つじゃ」

「この指輪の中のヴォルデモートは何歳なの？」

「何歳ってどういう意味ですか？」

「魂を分けた時の年齢で出てくるはずなの。普通に考えたら、成人して何年もたったヴォルデモートだとダンブルドア先生しか太刀打ち

できないの。でも……」

「若いときなら何とかなるかもしれないってことですよね？」

二人の会話を受けて、ダンブルドアが答えた。レアの顔にも少しだけ色が戻ってきたように見えた。

「恐らくじゃが、学生時代のはずじゃ。五年生から六年生くらいじゃろう」

「ならなんとかなるかもしれない……ボクたちが入ることはできないんですか？ ダンブルドア先生が入ればなんとかなるかもしれないのに」

確かに、それは大きな疑問だった。指輪の中にオスカーが入れるのならば、他の人物でも中に入れるのではないのかという事だった。

「それは余りにも危険すぎる。それに分霊箱の方が抵抗するじやろう」

「なら…… 戦うって一体どうやって決まるんですか？ 勝ち負けとか…… 実際に決闘するわけじゃないのに」

「それもわしには答えることができぬ」

「リドル、スリザリンは心地いい場所だよな？」

「喋るんじゃない。お前を叩き潰して、お前の体のままお前が知っている人間を潰して回ってやる」

「リドル、連れないことを言うなよ。君は俺が感じたのと同じ様にスリザリンに愛着を感じてたんだろ」

リドルの攻撃が怒りを誘えば誘うほど、単調で死の呪文の様な直接的な魔法になることがオスカーには分かっていた。本来のリドルの実力で変身術等を多用されればオスカーにほとんど勝率は無いはずだったが、自分より強い相手との戦闘経験と言う意味では、オスカーは唯一リドルに勝っていた。

「スリザリンは純血ってだけで仲間に入れてくれる。どんな人間でもな」

「お前に何がわかる」

「他の寮みたいに勇気とか誠実とか賢さとかが無くても、純血ってだけで少しは認めて貰えるんだ」

「だからどうした？」

「でもそれは俺たち自身を認めて貰ってるわけじゃない。最初からあるモノだからな。ああ、君にはそれも無かったか。いや？ 途中で違うって気付いたのか？」

緑の光線は最早リドルの声にならない叫びの様だった。明らかにリドルはオスカーが言っていることに対して反応していた。こう言う人間が普段は冷静に見えても、信じられないくらいの熱やプライドを持っている事をオスカーは知っていた。

「君はスリザリンからも何も受け継げなかったんだ。トム・マールヴォロ・リドル。それにペベレルの家からも何一つ受け継げなかった」

「ふざけるな!! 僕以外に誰が蛇語を喋れる？ スリザリンの残した秘密の部屋に僕以外誰が気付けた？ 学生時代の魔法でダンブルドアを出し抜ける奴が他にいるのか？ 必要の部屋の使い方を僕以外誰が知っていた!?!」

「そう言う事だけがスリザリンの残したことだと本気で思ってるのか？」

オスカーが言っている事に対して、リドルは必死で考えている様だった。オスカーには何となくリドルの考え方は良く分かっていった。リドルは自分の事を特別だとずっと思っていたし、現に特別だったのだ。その血統も才能も頭脳も全てが特別だった。しかし、それが彼を一番追い詰めていて、魂を分けなければいけない状況にさせたに違い無かった。

「あれだろう？ またお前らはこう言うんじゃないのか？ 『愛』だって。ダンブルドアが僕の時代から言っている様にそう言う気なんじゃないのか？」

「それはある意味で合ってるだろうな。蛇語や純血主義やお前の魔法の才能は君を愛してたかもしれないけど。何も言ってはくれないだろ。ただ肯定するだけだ」

「何がだ。優れている。それだけで十分だろ。僕のことを一番良くホグワーツの環境は受け入れて理解していた。それに僕もお前やダンブルドアや他の学生や学生だったやつらよりも遥かにホグワーツの事を理解している」

「リドル、優れているってことは良いことだけじゃない。頭がよければ違うモノが見える。頭がよければ間違いも大きくなる。魔法が得意なら凄い魔法が使える。凄い魔法は間違えれば大惨事を引き起す。そうじゃ無いのかりドル？」

「だから何が言いたい？ お前がどう言おうと僕がスリザリンの後継者で、恐らくこの百年間で一番優秀なホグワーツの生徒であることは何も変わらない」

オスカーは酷くこのリドルと言う少年が悲しく見えた。あらゆる意味で自分や自分の仲間たちの敵であると言うのに、信じられないくらい目の前の少年が悲しく見えた。

オスカーがいつもホグワーツで過ごしていても、人と自分の考えや感じ方が違う事は少なからず感じる事だった。しかし、エストやダンブルドアや目の前にいる少年にとって、それは耐えがたいほどの苦痛であるはずだった。

それも自分と言う感覚がまるで分からない中で、自分を理解してくれたり、導いてくれる人間がいない中で、それを感じると言うのは信じられないくらい孤独に感じるはずなのだ。

「リドル、いや、トム。スリザリンは心地いいだろ。君がスリザリンに選ばれて監督生をやっているのは当然だよな」

「当たり前だ。スリザリンの子孫で、世の中を動かすくらいの野心を持っていて、蛇語を喋れる僕がスリザリンじゃない理由がどこにある？」

「違うだろ、トム。君は自分自身が空っぽだからスリザリンに選ばれたんだろ。俺と一緒にだ」

「ともかく、準備をすることは大切だろう。彼が起きた時にどうするのかが大切だと言う事だ」

「それは具体的にどういう意味ですか？ スクリムジョール先生？」

「ミス・マツキノン、普通に考えれば、どちらが勝ったのか我々は知らねばならないし、もし……我々にとって好ましく無い方が勝ったのならば、早急に……言葉は悪いが鎮圧し、その指輪を破壊せねばならないだろう」

「オスカー先輩が戻ってきたのなら？」

「その場合は魔法薬による夢の無い睡眠が必要だ。こう言った事象が他にないために難しい所だが、体力を消耗するだろうことには違いないからだ」

こうして、時々、誰かが喋ることがあっても、校長室には重苦しい沈黙が基本的に満ちていた。時々、唸るような声を上げたりしているオスカー以外、他の音を出すのはフォークスが歩いたり、ダンブルドアを慰めようとしているのか、ダンブルドアの周りをウロチョロして、羽の音がするくらいだった。

「ダンブルドア先生、さっきの銀色の魔法の道具を使えばどっちが戻ってきたのかわかるんじゃないの？」

「そうじゃの…… エストレヤ、少し時間があれば分かるじやろう」

「なら、それで行くしかないかも。その道具で判定している間に、オスカーじゃ無い方だったらその指輪をぶっ壊すの」

「指輪を破壊してもオスカー先輩が戻ってくるかどうかは……」

「心配しないでも戻ってきますよ。前だって、一回勝ったんですから……」

クラーナの消え入るような呟きに誰も反論はしなかったが誰も同意もしなかった。結局の所、現実世界にいるはずの八人には手出しを

することができない様だった。

「何が空っぽだった？ オスカー？」

「君と俺が空っぽだったことだ」

「この僕が空っぽ？ 学生時代に……」

「そうだ。特別功労賞を貰ったり、監督生だったり、スリザリンの末裔だったりする君は空っぽだって言ってるんだ。俺が純血なのと同じ様に、君は空っぽだ。だからスリザリンに選ばれた」

「意味が分からないな」

オスカーは指輪を破壊して現実に戻らないといけなかった。しかし、だからと言って、全力でこの目の前の少年を後悔させるのを諦めるわけにはいかなかった。さつきオスカーがして貰った様に、たとえ通じなかったとしても、オスカーはそうせねばならなかった。そうしないとオスカーはシラにも指輪を作って伝えてきた誰かにも顔向けができなかった。

「純血だったことは俺を肯定してくれる」

「お前にはそうなのかもな」

「君がスリザリンの末裔で蛇語が喋れるのは君を肯定してくれる」

「当然だろう」

「でもそれだけだ」

「それで何が足りない？」

それだけでは足りないことをオスカーは十分に知っていた。ホグワーツに入ってから四年間で十分に思い知らされていた。

自分が比べ様が無いほど、真面目に生きて、勇敢で誠実で頭が良く狡猾でも、それと同じくらい、みんな自分自身のどこかに嫌だと思う部分があることを認識していたのだ。

「肯定だけだ。長所と短所、全部知らないと空っぽのままだ」

「そんなモノを知る必要は無かった」

「そうだよな、君は他の人に欠点を見せたく無かっただろうし、欠点を認めて貰った事もなかったんだろう?」

「だから、お前に僕の何がわかる」

「だから君は他の人の欠点を認めることができない。だから君は自分の欠点を認めることができないんだ。トム」

「お前が言うようなそれは存在しない。弱さをさらけ出すのは愚か者のやることだ。同情を誘ってそれだけしかできない。自分で生きることでできない、価値の無い人間のやることだ」

「本当にそうかトム? 君はそれができなかったから、何も無かったんだろう? 本当の自分は孤児院にいてホグワーツにはいなかった。君は純血では無く、混血で君の嫌いなマグルに捨てられた。トム、君は認めるべきだった」

「だから!! 黙れ!!」

もはやリドルの魔法は本当に直線的でオスカーは大して魔法を使わないでも避けることができた。ただ、それでもオスカーはこの目の前の少年に響くようなことを言える気がしなかった。本当に近くにいると言うのに、全く声がとどいていないのだ。

「トム。何度も言うが君にその指輪は相応しくない」

「この指輪がなんだと言うんだ」

「その指輪の意味を君が知らないことが、ここが孤児院だと言う事くらい、君の事を示している」

「ふざけるな」

「その指輪は死者と喋る指輪だ。君はそれを知っていたら絶対に魂をいれなかっただろう」

「何を言ってる。死者は蘇らない。どんな魔法を使ってもだ」

「君は死ぬのが嫌なんだろう?」

「当たり前だ。弱いから死ぬんだ。弱く無ければ死ななかった」

「君の母親がか?」

「黙れ」

オスカーはやつと少しだけリドルの心を引き出せた気がした。リ

ドルにとって、自分を残して死んだ母と、自分を捨てて死んだ父は生きて行くうえで常にのしかかっているモノのはずだったからだ。そして彼はそれを誰にも見せようとはしないはずだった。

「だからトム、君は弱いモノと向き合ったり喋るのが嫌なんだろう」

「僕は弱くない。現にダンブルドアもお前も僕に脅かされている。お前が言うような消しカスみたいな魂に、ただの学生に過ぎない魂に」
「死者と向き合うのも、自分の弱い所に向き合うのも嫌なんだろう君は」
「戯言を言うな、お前の言葉は僕を酷くいらだたせる」

「事実だからだ。スリザリンが与えてくれた肯定がある間に、君は自分の弱い所や他人と向き合うべきだった」

「そんなことをスリザリンは望んでいなかった」

「本当にそうか？ 他人と向き合えない君に何がわかる？」

トム・マールヴ・オロ・リドルが真つすぐにオスカーの方を見た。相変わらず、強固で誰も入れさせないと言う壁が彼の眼にはあった。人生の中で一度も他の人に入るのを許したことはない世界があった。

「トム、僕の眼を見ろ。君が見たく無いつて言うなら見せてやる」

オスカーは知っていた。閉心術が心を閉じる為のモノだけではないことを。相手に見せたいものを見せる為のモノであることを。誰かを理解する時に、先ず自分が理解されないといけないことを知っていた。

死の飛翔

「お前、本当に僕を馬鹿にするのもいい加減にしろよ。この僕を憐れんでいるだど？」

「そうだ、俺は君を憐れだと思ってるよ。トム」

「世間の人間が見て、お前より僕が憐れだと思うのか？」

「トム、世間がどう思うかじゃないだろ？ 君がどう思うかだろ？」

リドルが杖を振って、足元の雪を氷の鎖に変身させてオスカーの動きを止めようとしたが、オスカーは手を振るだけで吹き飛ばした。

「お前は僕によって何もかも失った。憐れなのはどっちだ？ オスカー？」

「君だ」

「僕の服従の呪文に従って焼いたのは何だ？ オスカー？」

「君が教えた炎は君自身を焼いた」

「お前はその記憶すら恐ろしかったのじゃないのか？」

「俺が許せなかったのは俺自身だ。怖かったのも君じゃない」

緑色の閃光が雪の夜に何度も煌いた。降り積もった雪と孤児院の石材が蛇や鎖の形を取った。そのどれも届きはしなかった。

「スリザリンの後継者はどこで生まれた？」

「お前の母親はお前を助けようとして死んだ」

「純血主義を推し進めた君の血の半分は何だった？」

「お前と会わなければマグルの女の子は死ななかつただらう？」

「俺は君を知っている」

「僕はお前を知っている」

衝撃呪文が空中でぶつかって、二人共後ろへと吹き飛ばされた。オスカーには分かっていた。トム・リドルは明らかに焦っていた。

「トム、俺を相手にずいぶんてこずっているじゃないか」

「オスカー。正直、君がこんなにやるなんて思っていなかった。君の…… 友人か恋人か…… それとも侍らしている？ いやコレク

ションしてる女の子達のおかげなのか？」

「トム、君は今世紀で一番邪悪な魔法使いだ。その君が二年も年下の

俺をねじ伏せれないのか？」

「いや、認めよう。君は僕の同年代にはいなかった才能を持っている。正直に驚いている」

リドルが時間を稼いでいることをオスカーは分かっていた。リドルは開心術を使っているにも関わらず、いや、使っているがゆえに相手の行動が読めないことに焦っているのだった。

「トム、お世辞はいい。それで？俺は次に何を唱える？ どうやって防御する？ 君が言って欲しくない何を言うんだ？」

「オスカー。確かに君は開心術をマスターしていると言っているいいだろう」

「トム、焦っているんだろ？俺を倒しても、君が助かることは万に一つもないだろうからだ」

リドルの顔に怒りの表情がやっと浮かんだ。自分が倒されたとしても、分霊箱であるリドルがダンブルドアの手から逃げるなど不可能な事をオスカーも分かっていた。

逃げるためには現実世界で態勢が整う前にオスカーの体に乗っ取るべきはずだったのだ。オスカーが時間を稼げば稼ぐほど、リドルの取れる手段は少なくなっているはずだった。

「オスカー、お前は僕の本体が死んでも僕の影響下にある」

「トム、そうだ。君が俺たちを強くした」

「俺たち？ 君の周りにいる可哀想で憐れな女の子たちのことか？」

「そうだ。君がそうしたんだ。君は自分のやった事を理解できなかった。君が自分を理解できないのと一緒だ」

リドルが高笑いを上げて、寒い雪空の下にその声が響き渡った。吸魂鬼が近づけば聞こえたはずのその声さえ、オスカーにはノイズに過ぎなかった。

「僕の配下にしか過ぎない魔法使いがやった事で追い詰められている子供達を強くした？ オスカー、論理的に考えた方がいいぞ。お前の大好きなマグルみたいにな」

「そうだトム。君はみんなを強くした。そのせいで君は君の一部を失うことになった。今もそうだ」

「強くした？　大好きな姉が蜘蛛の化け物になった憐れな女の子を慰められて良かったじゃないかオスカー。まさか、まね妖怪すら倒せない闇祓いなんてお笑いだろう？」

紅い光線がリドルの頬の傍を通り抜けた。リドルが避けたのと同じ方向にオスカーの呪文が飛んだのだ。

「トム、それが君の悪い所だ。モノの一部しか君は見ようとしなないだろ」

「一部？　一部しか見れない人間が、闇の魔法の可能性や先達が残した魔法の秘儀を見落としているんだ」

「普通に考えろよトム。閉心術は君みたいな開心術を悪戯に使う人間に対抗するために誰かが創ったんだろ？　トム、君もそれを使ってるじゃないか。君は君が弱いと思ってる人間が弱いと思ってる人間のために創ったモノを使っているんだ」

心を閉じて、相手に心を読ませないことと、心を開いて相手に違うモノを見させることは全く別の話だった。オスカーはそれを二年越しでやっと理解したのだ。

「それがどうした？　お前はお前の父親が僕の配下だと言う事だけでホグワーツで不利になっただろう？　同じ様に叔父や叔母がそうだった女の子もだ。しよせんお前たちは本体が消えた後も僕の残光に怯えている」

「君に怯えているんじゃない。トム。それが君の悪い所だ。君は自分の事が大嫌いな癖に、自分には自信があるんだよな」

リドルの緑色の光線を避けながら、オスカーは姿くらましと同時に足元の屋上をデプリモで叩き崩した。孤児院の子供達や寝ている部屋や、ご飯を食べる広間が屋上から見える。リドルが赤く切れ込んだ目でオスカーを見上げていた。

「トム、君は絶対に自分の内を外に出したりしないだろ。出すとしたら、それは君が相手の事を人間だとすら思っていない時だけだ。君はほとんどの人間をそう思っているんだろうけど」

「僕を救おうだって？　いい加減にしるよ？　いい加減にしるよオスカー、僕を救おうだって？　いい加減にしるよ!!　何故お前が僕を見下げている？　ダン

ブルドアですらそうだ。つまらない感情に囚われて、つまらない倫理に囚われて、いつも大事な結果を失うお前たちがなんで僕を見下している？」

半分、リドルとの会話が成立していなかった。リドルは明らかにオスカーが出している声では無く、オスカーが目で見せているモノに対して反応していた。

リドルの姿がかき消えて、オスカーの隣にその姿が現れる瞬間にオスカーは杖で自分とリドルとの間に石壁を作り、もう片方の手で相手を捉えた。

「君が相手をコントロールしたいとか、魔法が使いたいわって感情と同じだろ？　なんで他の感情も全部自分だと思えないんだ？」

「自分と対比して良く見えたんだろ？　オスカー？　あの可哀想な出来損ないになりかかってた女の子と自分が重なって見えたんだらう？　魔法力はおろか感情すら整理できない、あの子だけじゃない、お前の父も母もそしてお前も失敗する。ダンブルドアがそうした様に、お前も理性と感情を分離できていない」

「それはそうだとム、君が君の名前をどこにもやれないのと一緒にだ。どこにもやれないんだろ？　押さえつけてもいつかそれに飲み込まれることくらい君にだって分かっていたはずだ」

リドルの杖腕をオスカーは完全にとらえていた。オスカーはどうすれば、リドルが自分を見ようとするのか、それに対する答えはほとんど残されていない気がした。リドルは誰かと同じ様に自分が好きではないのだ。自分の名前と同じ様に。

「トム、これも君からならったわけだ。インペリオ 服従せよ」

「分霊箱はどうやったたら壊れるんですか？」

せわしなく、校長室のなかを歩き回りながらレアが言った。ダンブ

ルドアや他の先生方、他の人と喋っても彼女は動いていないと自分はダメだと分かっている様だった。

「強力な破壊力を持ったモノじゃないとダメなの。バジリスクの毒とか、悪霊の火とか…… ハーポは分霊箱を作ったけど、バジリスクを作ったのもハーポだし…… とにかく、分霊箱と同じくらい強力な魔法じゃないと壊すことはできないはず」

「私たちの側から何か向こう側に渡すことはできないんですか？」

オスカーの杖腕がある方に部屋に入った時からずっと座っていたクラーナが、視線を動かさないで言ったが、ダンブルドアがかぶりを振った。

「常識的に考えても…… 現実世界でオスカーに何かを触れさせても、意識の中でそれを認識するのは難しいだろう。君たちやわしがオスカーに触れても、あの指輪の中に入り込むことができないのと同じじゃ」

ダンブルドアが回答すると校長室に沈黙が満ちる。さつきから何度もレアが喋って、誰かが話し、ダンブルドアが喋ることで静かになる。これを繰り返していた。

「それって、オスカーがああ指輪の中で必要だと思わないといけないうってことよね？」

「トunks、オスカーが必要になるって…… ああ指輪の中で例えば、ドラゴンに追いかけていて、それで箒とかを必要だと思った時に、オスカーに箒を持たせておけばいいってことなのかい？」

「指輪の中にドラゴンがいるかは知らないけど、そういうことよね？」

オスカーが良く使ってるモノとかを持たしておけば必要な時に認識できるんじゃないの？」

「でも、もうオスカー先輩は杖を持っていますから…… 他に？ 魔法のトランクとかを手を持たせればいでしょうか……」

確かに、もし何かを持たすことで有利になる様なモノがあれば別だったが、この校長室にいる八人共、今すぐには何かを思い浮かべることができなかった。

奇妙な感覚がオスカーの体に流れていた。暖かいモノがジンジンと脈打ちながら、オスカーの頭や心から、体や血や骨を通り、もう体の一部としか感じられない様な杖を通って外へ出て行く様だった。

その呪いがリドルの体にたどり着いて、彼の体の中にある信じられないほど強烈な何かを無理やりに押さえつけている。オスカーは文字通り自分の考えを呪いにのせて押し付けた。

『石を二回回せ』

リドルの中にある何かが暴れ回っているのがオスカーに感じられた。杖と魔法の力で無理やりに押さえつけているにも関わらず、それは明確に呪いを押しつけようとしていた。

リドルの手が指輪についている石を捉えた。

『石を二回回せ』

体が燃えて、前後が分からなくなりそうなほどの怒りが伝わってきた。呪いを通して、オスカーに直接伝わってくるのだ。生まれへの怒り、理解されない怒り、人と何故違うのか分からない怒り、恵まれている者が義務を果たさない怒り、先人を理解しない周りへの怒り、そのどれも変えることのできない自分への怒り。それはオスカーが見たり聞いたりしたことのある人の感情の中で、一番誠実なモノに感じられた。

石がゆっくりと一回回った。

『石を二回回せ』

燃えてのたぐっているそれが段々と変質していくのがオスカーに感じられた。変わっていくというよりも、より強い形へ、より上流の方へ、元の形へと戻っていく様だった。

はつきりと感じられるそれは恐怖だった。何も与えられない、何も入れるモノが無い、どこまで行ってもいいのか、どこまで許されるのか分からない、帰る場所が無いと言う恐怖に満ちていた。

石がゆっくりと一回回った。

『石を二回回せ』

リドルとオスカーが立っている世界と同じ様な、寒くて暗い世界を無理やり燃やすような、灼熱のエネルギーが呪いを弾き飛ばした。何も与えられない、空っぽで底抜けな容器を一杯にしようと、リドルとオスカーとの間に距離があるにも関わらず感じられるほどのエネルギーが満ちていた。

「オスカー、君は僕のことを何も理解できていない」

「トム、あと一回でいいからそれを回すべきだ」

トム・マールヴオロ・リドルは真つすぐにオスカーの眼を見ていた。オスカーはこの世界に入って初めて、リドルが自分の事を本当に認識していると感じていた。

「君が心の底で、ダンブルドアやエストレヤと言う少女の事を、自分とは明確に違う人間だと思っている様に、君は僕のことを理解できない人間だと思っている」

「トム、君の家系にその指輪が伝わってきたのは偶然じゃない。君はそれを回すべきだ」

リドルの眼の奥で、行き場のはつきりと分かるエネルギーが満ちているのがオスカーにも分かった。底が抜けて永遠に注ぎ継がなければならぬとしても、そのエネルギーが彼の内面や感情をズタズタに引き裂いたとしても、目や言葉や雰囲気から溢れ出すほどのモノだった。

それと同時に、これまで奥底に貯められて全くでてこなかったリドルの一部がオスカーにも感じられた。

「はつきりと言ってやる。オスカー・ドロホフ。僕が人とは違うとしたら、もし、僕がスリザリンの末裔でも無く、魔法の力が無かったとしても、それでも人と違う点があったとしたらそれは一点だけだ」

「トム、君は分かっているんだろ。母親が惚れ薬を使って父親と一緒にあって君を生んだことも。母親がどうしてそんなことをしてしまいう人間になったのかって理由も」

もう、リドルの根幹に関わることを言ったとしても、リドルは気に

もしないだろう事がオスカーには分かっていた。空っぽの穴に注ぎ込まれ続けたそれが、リドルにとつてもオスカーにとつても感じたことのないくらい力になっていた。それが本当は生きて自分を守る為の力のはずなのに、色んな人を狂わせて、色んな人を傷つけることになるのがひどく悲しかった。

「いいか、僕は誰にも僕を決めさせない。目の前の君にも、母と僕を捨てた僕と同じ名前の愚かな父親にも、ボロ小屋で自分の血と先祖の残した家宝しか誇れるものが無かった祖父にも、僕をおかしな子供だと思っていたミセス・コールや孤児院の連中にも、魔法界で自分達を持っているモノにさえ気づかないお前たちにもだ」

「トム……」

「分かっただろオスカー。もし、この指輪を回して何が起こったとしても、僕はそれを必要としていない。お前たちが僕を必要としていない様に。僕はそれを必要としていない」

リドルの言っているそれこそが、彼の野心でも卓越した魔法の腕でも無く、彼の魂をバラバラにしたそれのはずだった。それこそが魔法界を引き裂く原因になったはずだった。そしてそれが起こった原因こそがリドルが生み出したのではなく、リドルの周りが生み出したはずだった。

オスカーの杖腕をリドルの杖腕で無い方がワンドレス・マジックで封じていた。オスカーがリドルの杖腕を封じているのと同じ様に。

「オスカー、二つに一つだ。君と僕、ワンドレス・マジックが先に解けて相手の杖腕を解放した方が負けだ。もう服従の呪文は僕に通用しない。そして君には分かっているだろ。僕は勝つ。君にも、僕以外の全てにも、僕は勝つ」

もう、オスカーには彼をどうしようもできないことが分かっていた。た。

「僕は他の誰でもない。僕は誰にも決めさせない。決めさせると言うのなら、その全てをねじ伏せてみせる」

「オスカーの持ち物じゃないとダメってことだよね」

「それもオスカーが必要だって思わないとダメって事でしよう。でもそんなモノありますか？」

エストとクラリーナはオスカーを挟んで両面に座っていた。二人は校長室に入って来て、最初に問答をした時から、そこを動かこうとしなかった。

「ひとつだけあるかも」

「ひとつだけですか？」

エストはゆっくりとオスカーの杖腕で無い方の手を開いて、自分の杖を握らせた。

「あの時は意識が無かったから覚えてないけど。前の分霊箱の時も、杖が助けてくれたんでしょ？」

「そう…… ですね…… 正確には杖の所有権らしいですけど」

杖を握らせた手の上から両手でそれを包んだ。

「一年生の必要の部屋で負けた時から、ヘレナの言っている事が本当なら、この杖はここにあるはずなの」

「確かにそうかもしれませんが」

リドルに最早何を言ったとしても、何も届かない事をオスカーは分かっていた。

ワンドレス・マジックで互いに杖腕を動かさない様にしていても、どちらのそれが早く解けるのか？ 使っている時間からしても、年齢差や単純な魔法力の違いからしても、リドルが先に動くことになることはオスカーにもリドルにも分かっていた。

「トム、あと一回回すだけだ」

「くどいぞオスカー。そして僕を馬鹿にするな。僕はこれでも君に敬意をもってここに立っている。そのために同じ状況にしたんだ。僕はここで君を倒し、外の世界の連中も突破してみせる」

確かに、目の前の少年がオスカーに本気でものを言っていることはオスカーに伝わってきた。そして、本気で殺そうとしていることだ。

彼はオスカーを見て、指輪を回せば何が起こるのかを理解していたし、そして、その後、彼自身がどうなるのかも理解して言っていた。オスカーはそれがどうしようも無く、悲しい気がした。

「さあ、やって見せろ。君が僕を倒せると言うのなら倒して見せろ。救おうなんて真似はするな。僕と同じ場所に立って、倒して見せろ。君が本気で向き合っていると言うのなら、やってみせろ」

リドルが余りに不器用な形でしか向き合えない事をオスカーはやっと分かった。救うというのはどちらかが違う場所に立っていると彼は言っているのだった。

彼が指輪を回したとしても、こうしてオスカーの目の前に立つのであるということも分かっていた。何よりも彼の眼がそう言っていた。

「トム、俺の勝ちだ」

「何度も言わせるな。やってみせろ」

ワンドレス・マジックをトムの杖腕に向けている手に、いつの間にかもう一本杖があった。自分の杖と同じくらい、自分の体に馴染んでいる、まるで体の一部の様だった。

「君が教えた」

「そうだ。僕の選択だ。誰にもそれは邪魔できない」

赤とも紫ともつかない炎が二本の杖からでた。雪の白と夜の黒だけだった世界が照らされていた。目の前の少年と終ぞ使われることの無かった石が炎の中に溶けていった。

指輪に入れ込まれた石がひび割れる音と一緒に、何かはどこかへ消えていった。それと同時に、オスカーはいつも寝ているスリザリン寮の天井では無い、どこかの天井が見えた。

手にはさつきまでと同じ、杖が二本握られていた。
「ダンブルドア、どっちなのかね」

銀色の道具がオスカーの傍で煙を吐いた。ただの銀色の煙で何の形も取らなかった。オスカーが見ていない間に何十歳も老けてしまったようなダンブルドアの瞳がオスカーを捉えた。

「オスカーじゃな？」

「はい」

「念のために誰か、それぞれオスカーしかわからぬことを聞いてくれぬか。記憶を読めるとしても、そんなに早くは間に合わんじやろう」
校長室にはオスカーが知らない間にスネイプとスクリムジヨール、それにいつも喋るメンバーがいた。

「オスカー、一年生の時のクリスマスプレゼントは？」

「百味ビーンズ」

「私のボガートは何に変身しますか」

「アクロマンチュラ」

「忍びの地図の時に私は誰に変身してた？」

「マクゴナガル先生」

「ヴィンガーディアム・レヴィオーサで飛ばしたのは……」

「羽ペン」

「僕が好きなのは？」

「ドラゴン。ホグワーツ生なら誰でも知ってるだろ」

オスカーには状況がさつきぱりつかめなかったが、取りあえずエストの杖をエストに戻して、ベッドに座り辺りを見回した。やはり、さつきまでの森も孤児院もどこにも影も形も無かった。

周りの皆もオスカーにどう声をかけていいのか分からない様だった。

「ミスター・ドロホフ。君には休養が必要だ。ダンブルドア」

「そうじゃな。医務室で魔法薬による睡眠が必要じゃろう。セブルス」

「ミスター・ドロホフ。ついてきたまえ」

「それにルーファス、他の皆を送つてくれるかの。その後、セブルスとルーファスはわしの部屋に来て欲しい。他の皆も聞きたいことはあるじゃろうが、今は話すことができぬ」

珍しく、誰も反論をしなかった。オスカーはスネイプに医務室に連れていかれた。その間、スネイプともスクリムジヨールに連れて行かれた他のみんなとも喋ることをしなかった。

医務室にはすでにマダム・ポンフリーが準備をしていて、睡眠用の魔法薬とベッドが置いてあった。

「マダム・ポンフリー、この薬はどれくらいの時間眠りますか？」

「体重や体質、貴方の疲れにもよりますが、少なくとも明け方までは眠ることになるでしょう」

「分かりました……」

マダム・ポンフリーとスネイプはオスカーがベッドについて眠るまで見張る気だったらしく、一向に去ろうとはしなかった。

オスカーは何か、色んな事があったという間に終わった気がして、自分の中身が空っぽになってしまっている気がした。とにかく、マダム・ポンフリーの言われるがまま、目の前の薬を飲んだ。

明け方だった。二年生の時に目を覚ましたのと同じくらいの時間だった。マダム・ポンフリーや他の誰かが動く音はしなかった。他に医務室で寝ている生徒の布ずれの音や、フクロウの声や羽音が時々聞こえたが、それ以外には何も聞こえなかった。

心の中は空っぽだとオスカーは思っていたが、オスカーにはやるこ

とがあつた。思いだしたそれをオスカーはやらないといけな
思つていた。それにはまず、そこに入る許可が必要だつた。

自分に目くらまし呪文をかけて、医務室を抜け出した。朝のホグ
ワーツには余り動くものが無かつた。肖像画達もすやすやと眠つて
いたし、医務室の外には誰もいなかった。

キッチンでは屋敷しもべ妖精たちがせわしなく働いているのかも
しれなかつたが、医務室から校長室までの間、オスカーは誰に会う事
も無かつた。

ガーゴイル像はオスカーが何も言わなくとも飛び退いて、校長室へ
の道を開けた。

螺旋階段を登つて、校長室をノックして開けば、まだ歴代の校長た
ちは寝ていて、静かだつた。しかし、オスカーが昨夜会つたよりも、一
晩で何歳も老けてしまったようなダンブルドアは起きていて、オス
カーの方をはつきりと見ていた。

金色の指輪がダンブルドアの前にある机の上で光っていた。

「ダンブルドア先生」

「ああ、オスカー、起きたのかね。昨夜はすまなかつた」

ダンブルドアが歩いてこちらに来ようとする前に、オスカーは自分
で近づいた。

金色の指輪にはめられた石が朝日を受けて黒く光っていた。

「ダンブルドア先生はそれを使わないのですか」

「オスカー、まさにそれじゃ。それをわしは君や他の沢山の人に謝ら
なければならぬ」

オスカーは昨日あつた誰かと同じ様に、ダンブルドアがそれを使わ
ないだろう事は分かつていた。

「どうして使わないのですか」

「わしにそれが相応しくないからじゃ」

「先生が許して欲しいと思うのは凄く自然な事だと思ひます」

「オスカー、わしが間違えたのじゃ。にも関わらず、わしが悪戯に静か
な眠りについている者を呼び出すことがどうして許されよう」

ならば、この石はいつ使われると言うのか、オスカーには分からな

かった。この石は一番必要としている人間には使う事ができない石なのかもしれない。

「リドルはそれを使わないと言いました」

「それはそうじゃろう。あやつが振り返ることはありえない」

「でも、先生はもう受け入れているはずです」

「オスカー、わしは受け入れてはおらぬ。そうでなければ、君が隣にいるにも関わらず、指輪に手を伸ばすことをしなかったじゃろう」

オスカーには分からなかった。どうしようもなく、尊い事であるはずなのに、どうしようも無いほど能力が高いせいで、彼らはそれを選べないのだった。

「先生が指輪に惹かれない人間なら、俺や他のホグワーツ生や卒業生は、ダンブルドア先生を尊敬してはいないはずですよ」

「オスカー、老人は間違えてはならぬ。すでに何度も間違いをしておく、それを下の者に伝えねばならぬ。その老人が間違えてはならぬのじゃ」

「先生は賢いから重大な間違いをするんでしょう。だから色んな事を学ぶことができるし、俺たちに教えることができます」

「オスカー、ゆえに間違えてはならぬ」

指輪を使うに相応しくない人間であると認識していること自体が、オスカーには素晴らしい事であると思えなかった。一体どれくらい人間がそう思う事ができるのか、自分が言う人間だと思いう事ができるのか、それはきっとほんのわずかな人間だけのはずだった。

「先生は一回は間違えたかもしれませんが」

「そうではないのじゃオスカー。わしがこの…… 死の秘宝に惹かれたのは二回目じゃ。一回目は何より大切なモノを失った。ゆえに二

回目は丸く収まったとしても許されぬ」

「先生は一回目の結果を受け入れている」

「オスカー、わしは受け入れてはいなかったのじゃ。そうでなければ、指輪に石に惹かれはしなかったじゃろう」

指輪に石に惹かれない人間が、大切な誰かがいなくなったことを受

け入れることなどできないとオスカーは思った。

「それは違う。そうでなければ、先生のその杖は先生を選ばなかった」
「何を……」

「先生の杖は本物のニワトコの杖だ。その芯にはセストラルの尻尾の毛が使われている。セストラルの尻尾の毛は条件を満たさないと力を引き出すことはできない」

石も杖も偶然であるはずが無かった。トム・マールヴォロ・リドルが蘇りの石を分霊箱にしたことも、彼の先祖がそれを伝えたことが偶然ではない様に、アルバス・ダンブルドアがニワトコの杖を持っているのも偶然ではないはずなのだ。

「先生がどうやってその杖を持つことになったのかを俺は知らないけど。その杖が先生を選んだ理由があるはずだ。他の誰かよりも先生が持つのが相応しいとその杖が感じた理由があるはずだ。それは多分、先生が石に惹かれて、自分が石に相応しくないと思っているのと同じ理由のはずだと俺は思います」

「なんと……」

ニワトコの杖がアルバス・ダンブルドアの手元にずっとある理由は、彼が最強の魔法使いであると同時に、もう一つの条件を満たしているからであるはずだった。

ヴォルデモートやグリンデルバルドよりも杖が彼を選んでいる理由があるはずなのだ。

「だから先生はもう受け入れているはずですよ。それが杖を手に入れた時なのか、それより前なのかは分かりません。でも、受け入れているはずですよ。俺の様に蘇りの石に助けて貰わないといけなかったのではなく、先生は一人でそれを乗り越えたはずだ。そうでなければ、先生はどうして自分が石に惹かれているのかすら分からなかったはずだ」

「わしは…… この石はやはり君に相応しいものなのじゃろう……」

ダンブルドアが杖を振ると、指輪が銀色の鎖につながれてネックレスの様に連れ下がり、そのままオスカーの首元へとやってきて、そのまま首にかけられた。

「先生は使わないのですか」

「そうじゃ。君がその石を自分のために二度と使うことが無い様に、わしも使うことは無いじゃろう。さすれば本当の意味で石を使う事ができるじゃろう。その石が必要となる他の誰かが出てくるまで、君に持つていて欲しい」

やっとダンブルドアの青い眼にオズカーがいつか見たのと同じ、信じられないほど強烈なエネルギーが満ちている気がした。

「ニワトコの杖の持ち主がナナカマドの杖の持ち主に惹かれるのはそういう事なのじゃろう。オズカー、天文台の塔にいつて構わぬ。君が誰かに捕まることはそうそうないじゃろうが……誰かに言われたのなら、わしが許可を出したと言ってくればよい」

「ありがとうございます」

外の空気と風がオズカーの頬を撫でていた。憂いの篩を使った後に、天文台の塔に来た時とは違い、オズカーにはどうしてここに来たかったのかの理由がわかっていった。

外が見える場所まで登ると、ホグワーツの全てが見えた。灰色のレディと会った時も、ホグワーツのほとんどが見えると思っていたが、この塔からなら、黒い湖、ハグリッドの小屋、禁じられた森、レイブンクローヤグリフィンドールの塔、ホグズミード、クイディッチの競技場とホグワーツの全てが見えた。

多分、校長室にみんなが集まっていた理由の一つをオズカーは取り出した。カエルチョコレートのカードと同じ形のカードには、みんなの写真が入っていた。

写真の所を杖で叩くと、他の二枚の写真が出てきた。三枚は順番に、ホグワーツで撮った写真、クリスマスマスに自分の家で撮った写真、それに森の中で撮った写真だった。

ここからなら全部が見えるはずだった。ホグワーツの全部が。

「エクスペクト パトローナム 守護霊よ来たれ」

幸せな光景を思い浮かべていなかったのに、これまでで一番はつきりと銀色のトンボが姿を現わした。いつか見たのと同じサイズのトンボだった。

トンボはオスカーの手に一度とまった後、天文台の塔よりもっと高く飛んで行って、見えなくなった。オスカーはその様子をただただ見ている。

「オスカー、いきなりいなくなるのは止めて欲しいの」

「そうです。それになんてまた天文台の塔に来ているんですか、オスカー先輩」

「ちよ、ちよっとトunks、早く塔に下ろしてくださいよ」

「それよりなんで守護霊の呪文なんて使ってたわけ？ 絶対オスカーの守護霊だったわよね？」

「オスカーも箒に乗るかい？ もっと高いところまでいけるけど」

急にみんなが箒に乗って現れたのでオスカーは面食らった。どうも、医務室から何も言わずに出てきたせいで、少し心配させた様だった。忍びの地図で居場所がばれたのだろう。

「いや、いいよ。ここからでも全部見えるからな」

一人では見えないことがあることくらい。オスカーは随分前から知っていた。

再び森へ

学期末試験とクイディッチの最終試合が矢の様に過ぎて行った。

クイディッチでは二年ぶりにスリザリンはグリフィンドールに総得点数で負けてしまい、敗北した。去年とは対照的にスリザリンのチエイサーとキーパーがボロボロで、スニッチが現れるころには態勢は決していて、エストがスニッチをとって試合を終了させることになった。

試験の方では、一応オズカーは十科目の教科に合格したはずで、これは逆転時計を使わずに受けれる最大数のはずだった。

「オズカー先輩、スクリムジヨール先生が今年でいなくなるって聞きました？」

「闇の魔術に対する防衛術の先生が一年でいなくなるのはいつものことだろ…… そうか、ジェマは一年生だから知らないのか」

「毎年先生がいなくなる？」

校長室とリトル・ハングルトンでの一件はあそこにいた人以外には全く漏れてはいない様だった。髪飾りの時も正確な噂は流れていなかったが、今回は外に絶対出さない様にしたのか、誰も話をしておらず、オズカーが医務室で寝ていた事をスリザリン生の何人かが知っているくらいだった。

「何年も前から闇の魔術に対する防衛術の先生を二年以上続けた人はいないらしいな」

「そんな事が…… それでスクリムジヨール先生がもういなくなるって聞いた……」

「今から行くか」

「え？」

今日は試験終わり後の休暇で、三年生以上はホグズミードに行っているはずだったのだが、オズカー達は事件やクイディッチや試験が重くなって、あまり外に出る気がしなかったのだった。それにその次の日はホグワーツから帰る日だった。

「エストが起きてくる前に行って帰ってこればいいだろ。試合がアレ

だったから当分起きて来ないだろうし」

「行くって……」

「だから謝りに行くんだろ」

スリザリンの談話室にはほとんど人が残ってはいなかった。三年生以上はホグズミードに行っていたし、二年生以下はまだ寝ている様だった。

それにオスカーは事件の後は試験でしかスクリムジョール先生と喋ってはいなかったたので、魔法省に先生が帰る前に一度くらい喋ってもいいかと思っていたのだ。

まごまごしていたジエマをよそに談話室から出ると、ジエマは後ろをついてきた。

「あんまり、謝り方って分からな……」

「普通にごめんなさいでいいだろ。どうせいなくなるんだから罰則も出しようがないし」

オスカーは忍びの地図を出して、スクリムジョール先生の位置を確認した。四階の闇の魔術に対する防衛術の教室の近くにある居室にいるらしかった。

他のいつものメンバーの名前を探すと、どうもみんなホグズミードには行ってはおらず、それぞれの寮に名前があった。

「スクリムジョール先生は部屋に……」

「いるみたいだからさっさとすませばいいだろ。俺とトンクスとスクリムジョール先生に謝ればそれで終わりだろ。二年生になる前に終わらせればいい」

謝れる間に謝った方がいい事くらい、誰でも分かっているはずだった。ジエマと喋っている間に四階について、スクリムジョール先生の部屋はすぐそこだった。

オスカーがノックすれば「どうぞ」と声が聞こえてきた。

「失礼します」

「ああ、ミスター・ドロホフ、ミス・ファレーイ。すまないが引越しの途中だ。ソファアは無いので我慢してくれたまえ」

確かに、前にオスカーが入った時よりも殺風景な部屋だった。トラ

ンクが何個かと大きな机が一つあるだけで、前にあった書類の山や応接用のソファアームみたいなモノもどこかへ行つて無かつたからだ。

スクリムジョール先生が杖を振るとオスカーとジェマの前に椅子が二つ現れた。机の後ろにあった椅子を引いて、先生は二人の目の前に座った。

「座りたまえ。それで？ どうしたのかね？ 残念ながらあまり私は学生の相談事には向いていないのが今年度の一年間で自覚できたわけだが」

「惚れ薬の事です」

「ごめんなさい。私が闇の魔術に対する防衛術の教室から盗みました」

そう言ったジェマの眼をスクリムジョール先生はしばらく見ているた。

「ミス・ファレーイ、謝ったと言う事は君は自分が何をやったかを分かっているわけだ」

「はい、ごめんなさい」

何というか、オスカーはちよつとスクリムジョール先生が面白がっているのではないかと思つた。もちろん、スクリムジョール先生はちゃんとジェマの目線に合わせて真剣な顔で聞いていたが、何か目がそういう雰囲気をしていたので。

「私は闇の魔術に対する防衛術の最初の授業で、どの学年でも同じ話をした。もちろん、学年によって言い方は色々変えてみたつもりだが、ミス・ファレーイ、何の話をしたか覚えているかね？」

「魔法基本法則の話です」

オスカーはジェマが泣き出しそうだと思つた。それにどうしてそんなにジェマが何度も謝りに行った方がいいのではないかとオスカーに言つてきた理由も分かつた。多分、他の授業の先生から盗んだのなら、こんなに彼女が気にすることも無かつたのだろう。

「その通りだ。そして、君がここに來て謝っているという事はどうやらそれは守られているらしい」

「でも、私はその話をした先生の……」

「その代わりに君は他の人よりもそれを理解したはずだ。どうしてそんなモノの話をわざわざする必要があったのかも、他の人とは少し離れた場所から分かったのではないか？」

もう明らかにジェマの眼には涙がたまっているように見えた。オスカーはどうして何度も謝りに行った方がいいかと聞いて来たジェマが、どうしてそんな考え方をしたのかを自分は考えていなかったと思っただ。もちろん、その時に自分が自分の考えで一杯で考える余裕が無かった事も分かっていた。

「まあ、だから私の拙い授業でも一人くらいには伝わったらしいと言う事だ」

「先生の授業はそんなことは……」

「いや、十分に拙かっただろう。君たちが謝った様に、私や他の大人も謝らなければいけない。それに大人も良く間違いをすると言う事を知っておいて欲しい。君たちより頭が良い人間でも、経験を積んだ人間でも間違える。問題は間違えても君たちの様に謝ることができないと言う事だ」

今度は明らかに先生の眼と言葉に力が入っている様にオスカーは感じた。やらないといけないことが見えたと言う感じだった。

「組織の中にいると随分と自分の事や大事なことが見えなくなる。先日といい今日といい、私も外に出たことでミス・ファレーイの様に、少しだけ目の前のモノが見えた気分だ」

やっぱり、闇の魔術に対する防衛術は腰を据えて教える先生が必要だとオスカーは思った。毎年、色んな先生から色んな事を教わってはその度になくなってしまふのだ。

「さて、罰則を与える代わりにどうやって教室の扉を開けたのか教えて貰えるか？ ミス・ファレーイ？ あの教室の扉にはアロホモラでは開かない様に呪文がかけられていたはずなのだが」

「このナイフで開けました。そういう扉でも開くナイフで、昔出回っていたと」

ジェマが取り出したペンナイフをスクリムジョール先生は手に取ってしばらく眺め、それからジェマに返した。

「なるほど。伸縮する魔法の道具で物理的に開けたと言う事か。魔法省の一部の部屋の様に錠の場所に呪文をかけなければ開けられずまうだろう……」
どちらかと言えばマグル的な発想の道具なわけだ」
感心した様に立ち上がり、スクリムジョール先生は椅子を机の方へ直した。もう話は終わりと云わんばかりだった。

「ではそろそろ私も魔法省へ帰らねばならない。君たちは随分いい夕イミングできてくれたわけだ。そうだ、そう言えばミスター・ドロホフ。君の友人二人は嬉しい事に闇祓いを志望すると言ってくれた。ミス・ファアレーイもそうだが、もし成績の要件が満たせれそうならば一考してくれたまえ」

「はい、ちよつと考えてみます」

「ありがとうございます」

二人はスクリムジョール先生に頭を下げて居室から出た。スリザリン寮へ戻る途中でオスカーは示しっぱなしだった忍びの地図で寮を見たが、どうもエストはまだ寝ている様だった。

「オスカー先輩」

「どうした？」

「一緒に行ってくれてありがとうございます」

「ああいう場所はエストと行くのはあんまりよく無さそうだからな」

ジェマはさつき取り出したペンナイフをもう一度ポケットから取り出した。

「あの、先輩が持っていてくれませんか？ 私が持っているとまた変な時に使うかもしれない……」

「これはジェマが誰かから貰ったんじゃないのか？」

「お父さんから貰いました」

「ならジェマが持ってた方がいいだろ。俺は一年生の時に人に貰った物を別の人にあげて、それから毎年酷い目にあつてるからな」

余り、ジェマは納得していなさそうな顔で、現にまだペンナイフは出したままだった。

「それを持ってれば毎回思い出すだろ。スクリムジョール先生が言った事とか色々、だから自分で持ってた方がいいぞ」

「分かりました」

今度はペンナイフをポケットに引つ込ませた。オスカーはそれを見て少し安心した。オスカーがジェマの父親ならば、娘が自分が与えたモノを人にあげるといふのはあんまりいい気がしなかったし、正直、もうセーターはこりこりだった。

「ちよつとどこかで時間をつぶしてくる。エストが起きたら……うーん。湖の傍にでもいるって言つていてくれ」

「分かりました。でも、オスカー先輩はやっぱりもうちよつとやさしくする人間を考えた方がいいです」

後ろ手に手を振ってオスカーはそのまま毎度来ている湖の傍にあるブナの影の所まで行った。

オスカーはさっきのジェマでは無いが、胸の上で歩くたびに跳ねている石の中での一件から、これから何をすればいいのだろうかというのが分からなくなっている気がしていたのだ。

ホグズミードに学生はみんな行っているかと思っていたが、大イカと遊んでいる生徒や、湖で涼んでいる生徒がいて、オスカーが思っていたほどいつもの場所は静かでは無かった。

何かを覆い包んでいた何かが取れて、ホグワーツにいる間ずっとあり、特にこの年度の間感じていた切迫感が無くなったが、その代わり、何もやらない、何も考えていないという状態がオスカーは少し不安だった。

他のみんなはそう言う事を考えていないのかとオスカーは思った。先ほどスクリムジョール先生が言った二人の様に、漠然とでも何かをやりたいだとか、何かになりたいという感覚が今のオスカーには無かったのだ。

そして、何故かそれが少し不安だった。何かに縛られていないことが、やるべきことが分かかっていないことが、無駄に時間を使っている気がして、その無駄に使っていた時間があとでどうしようも無くなった時に使うべきだったと後悔する気がして、不安だったのだ。

夏の暑い風がちよつとだけ湖で涼められてオスカーの体を通り抜けて行った。穏やかで平和だったが、オスカーにはそれがどうしても

何か不安だった。

「オスカー先輩、先輩達はホグズミードにはいかないんですか？」

オスカーは一瞬、ジエマが戻ってきたのかと思ったが、オスカーの事を先輩と呼ぶ、違う方の人物だった。

風に揺れているレアの髪が前よりもほんの少し長くなっている気がオスカーはしていた。

「決闘トーナメントでクイデイツチの試合が昨日までずれ込んで、エストが爆睡してるからな。グリフィンドールの方はお祭り騒ぎだったろうしな」

「そうですね。決闘トーナメントのせいでスリザリンの得点をクイデイツチでも逆転できないですから、グリフィンドールはそこしかお祝いできないはずだ」

どうしてピンポイントでいる場所がばれたのかとオスカーは思ったが、忍びの地図を使いっぱなしでポケットに入れていたことをオスカーは思いだした。これでは全員の場所が筒抜けなのだ。

「さつきトunksとクラリーナは闇祓いになりたいって言ってるって話を聞いたんだが、レアは何かなりたいたいものとかあるのか？」

「ボクですか？ うーん…… あんまり考えたことは無いですけど…… レイブンクローの先輩達が前に三本の箒に来て……」

オスカーの周りの人間の中でも、一番どんどん変わっている気がするレアの話なら、ちよつとは参考になる気がした。

「その中だと…… 魔法法執行部で魔法法を作ろうとしている人と、聖マンゴで新しい癒術を作っている人の話は面白かったです。オスカー…… 先輩はそう言うのは無いんですか？ チャーリー先輩はドラゴン研究者？ エスト先輩は先生って前に言ってました？」

「いや、あんまり考えて無いんだよな。三年の時の教科もあんまり考えないで選んだし、ただ、来年はふくろう試験だから色々決まっちゃうからな」

こういうことを誰に聞けばいいのかもオスカーには余り分からなかった。寮監のスネイプ先生やキングズリーに聞けばいいのだろうか？ ただ、二人共答えを与えてくれるわけではない気がしていた

し、誰かにそれになれと言われてもオズカーは頑張れる気がしなかった。

「チャーリー先輩のお兄さんみたいに呪い破りとかですか？ オズカー先輩の成績ならどれでも行けそうですけど……」

「そういやそれもあるのか…… ホグワーツと家しか基本知らないからあんまりイメージできないよな」

近くにいる大人や、みんなのなりたいモノを考えてもオズカーはパツとしなかった。闇祓い、魔法省、癒者、呪い破り、先生、もつと色んな職業があるはずだったが、オズカーは憧れるかと言われても余りピンとこないのだ。

「あの、話が変わるんですけど」

「暇だから何でも言ってくれていいけどな。俺は試合では疲れて無いし」

「今年もみんな先輩の家に行くんですか？」

「そうじゃないか？ あんまり話はしてないけど、チャーリーの家はみんなでかくなつて狭いだろうし、エストの家にはあのおばさんがいるからな……」

オズカーはエストとチャーリーの家は知っていても、他の三人の家は知らなかった。ただ、あの人数を押し込める家がそんなにあるかと言われればないと予測できるので、どうせまた自分の家に集まるだろうと考えたのだ。

「夏休みの間ずっとそうするんですか？」

「どうだろうな、去年はなんかかなり早くからレア以外の四人が来てたけど、おとしはチャーリーの家だったし、クラーナは最後まで来なかったからな」

「オズカー先輩はどうなんですか？」

「俺？ 俺はずつと暇だろ。そんなすることも無いしな。宿題も夏休み入る前に大体終わってるからいつでもみんなが来るまで暇だな。魔法も使えないし」

本当はそれは少し嘘だった。オズカーはみんなが来るまで去年は屋敷の森をうろうろしていたのだ。特にあてがあるわけでも無く。

「あの…… その、もし時間があつたらでいいんですけど」

「夏休みは時間しかないけどな」

「あんまり楽しい事では無くて……」

「ペンスはお坊ちやま感謝しますしか言わないから、あんまり楽しくはないな」

オズカーはちよつと不思議だった。最近のレアはだいたいのことをはつきり言うようになっていたからだ。はつきり言い過ぎて、だいたいトunksがダメージを受けていた。それでミディアムレアだの、ウエルダんだのトunksはうるさいのだ。

「ボクと一緒に来てくれませんか？ 夏休みの空いている時間に」

「俺と？ いいけど、どこに？」

「その…… オズカー先輩は見たかもしれないですけど、ボクはあの記憶の時から一度も元の家に行ったことが無くて……」

「どうやって行くつもりなんだ？」

さつきから感じていた、やる事が無いという不安がどこかへ飛んでいった気がオズカーはした。

「煙突飛行で近くまでいけるはずなので……」

「じゃあ適当に俺の家に迎えに来てくれればいいけどな。それでそのまま煙突飛行で連れて行ってくれれば問題ないけど」

「ほ、本当ですか？ でも、でも、その、家に行つてどうするかとか何も考えてなくて…… ま、またその迷惑をかけるかもしれない……」

無駄足になつてしまうかも……」

「その時はペンスを呼んですぐに帰ればいいだろ」

ジェマもそうだったが、自分が少しいるだけで、ほんの少しでも誰かがいつもと違う事ができるのなら、オズカーは協力した方がいいと思つていた。

「その…… ありがとうございます。や、やつぱり、ボク、その……」
「何かあるのか？」

オズカーはレアに真つすぐに見られて、少しドキリとした。両手を握つてこつちを一生懸命に見ているのを見て、決勝の後の一幕を思い出したのかもしれなかった。それに、何か校長室での一件の後から、

自分が周りを見たり感じたりするそれが変わっている気がした。

「今ならだ……」

「オスカーとレアですか？」

「うわ、わわっ!! クラリーナ先輩ですか？」

レアは言いかけた所でクラリーナの声を受けて飛び上がった。二人を訝し気な目でクラリーナが見ていた。

「何をそんなに驚いているんですか？」

「あ…… じゃあ、オスカー先輩、よろしくお願いします。後で何かふくろうか何かを送ります」

「分かったけど……」

そう言うなり、レアはどこかへ駆け出してしまった。せめてオスカーは日程くらいここで決めておいて欲しかったと思った。

「オスカー、レアと何の話をしてたんですか？」

「何って？ 何だろ？ ああ、スクリムジョール先生が闍祓い絶賛募集中って言ってたぞ」

「はあ？ オスカー、エストのアレがうつってるんじゃないですか？ まあ、いいですけど、今年はいつから集まるんですか？」

オスカーはデジャヴを感じた。どうも最近、一度誰かと何かをすると同じ様な事が連続で起こっている気がするがしていたのだ。

「まだ決めてない。多分俺の家に集まることになるんだろうけど」

「そうですか。でも夏休み始まってすぐは集まりませんよね？」

「あ、ああ…… いつも通りならそうだと思うけど」

「なら最初の方に私と一緒に…… 出かけませんか？ その、聖マンガにも行くので…… ちよつとオスカーを待たすかもしれないですけど。今年は叔父さんが忙しそうで、一人で行かないといけなくて…… 忙しかったらいいですけど」

思わず。オスカーは喋っているクラリーナを見つめてしまった。もし、オスカーの予感が当たっているなら、これから他の人にも同じ様な話をされそうだと思うってしまったからだ。そして、オスカーはだいたいこう言う予感が当たることを知っていた。

「ちよ、ちよつとオスカー聞いてますか？ その、ガン見するのはやめ

てください」

「ごめん。日程とかは決まってるのか？」

「そうですね。そんなには決まって無いです。面会の時間があるので、聖マンゴに行く時間は決まっていますけど、特に曜日とかは無いです」

「じゃあ、適当に日程を決めていってくれ。それに聖マンゴの待合室とかに俺を置いていてもそんなに問題ないから大丈夫だぞ」

オスカーは言った後で日程を相手に決めて貰うのは不味い気がした。だいたい悪い事は重なるので、さっきのレアが言っていたのと日程が被る気がしたのだ。

「じゃあ、私から……」

「そうだな、日程を伝えてくれたらいけるかどうか返すよ」

「そ、そうですか？ 私の方も別に違う日にはできるので…… その、オスカーは行きたいとことかありますか？」

「行きたいとこ？」

さっきまでの堂に入った言動や仕草とは違い、少し自信無さげにクラーナはオスカーを見上げた。

さっきの最後のレアとクラーナがかぶって見えてオスカーはまたちよつとドキリとした。それに最近、オスカーは周りのみんなのちよつとした仕草に目を奪われることが多い気がした。というか、オスカーははつきりと石の一件の後から、どうも感覚が変わっていると自覚していたのだ。それはやる事が無い不安と同じくらい、オスカーを戸惑わせていた。

「あんまり私はマグルの街とかは分からないので、ダイアゴン横丁とかになると思うんですけど……」

「フォーテスキューのアイスとか、そう言うのか？ 俺もあんまり分からないからなあ。まあ時間があつたら行けばいいだろう」

「じゃ、じゃあそれをお願いします。あの…… あ、あんまりトクスタとかに言わないで下さいよ？ 絶対うるさいですから」

「分かった」

クラーナはほつとしている様だった。だが、オスカーの方はどうも

しつくりと来ていなかった。何と言うか、オスカーは頭と体がバラバラになっていく気がしたのだ。あんなに石の中では一つとして感じられたのに、最近、みんなと喋っていたり、一緒にいると体や感覚の方に自分の意識が引っぱられていく感じがしていたのだ。

「夏休みに入ったらふくろうを送りますから……あと、忍びの地図は使わない時は閉じておいた方がいいですよ。じゃあ、ちよつと寮に戻ります。談話室に色々広げてたのを帰る前に回収しとかないといけないので」

「分かった。なら、次はホグワーツ特急だな」

クラーナが手を振って遠くなるのを見ながら、オスカーは忍びの地図を見て安心した。てっきり他の誰かが連続でやってくるのかと思ったが、エストの名前は談話室にあつたし、トンクスの名前も前にオスカーが入ったハッフルパフ寮の一室にあつた。チャーリーの名前はハグリッドの小屋の傍を高速で飛び回っていた。

ちよつと頭を冷やそうとして、オスカーは湖の水で顔を洗ってから談話室に戻った。途中で色んな寮の色んな学年の生徒とすれ違つたが、オスカーはどうしてホグワーツに入ってから、自分が普通の生徒では無い気がするのだろうかと思ひながら歩いた。

他の生徒も、自分が感じている色んな事や、色んな考えをしているのかと思つたのだ。

スリザリン寮がある地下牢は、外気と違って夏でもひんやりとして涼しかった。ただの壁にしか見えない場所から談話室に入れば、ジェマと一緒に待ち受けているエストの姿が見えた。

さつき湖で顔を洗って、涼しい地下に来たというのに最近のオスカーは自分でもわかるくらいやっぱりおかしかった。ホグワーツに来てからもう四年たつて、エストとはずっと隣にいたというのに、今、こつちを見ながら伸びをしている仕草や、隣に座つた後、すぐ傍で髪を触る仕草にいちいち目を奪われるのだ。

「オスカー、おはようなの」

「もう半分昼だけだな」

「ねえ、夏休みにゴドリツクの谷に行かない？」

「ゴドリツクの谷って…… ハリー・ポッターの家があるところだったか？」

ジエマは何故かそそくさと寮の方へ戻ってしまった。そしてオスカーは案の定、夏休みの予定について話し始めるエストを見て、最近、新しく予見の能力まで自分に備わったのではないのかと疑い始めた。「そう。それにスニッチが発明されたところだし、死の秘宝のイグノタスが住んでたところだし、それにそれに魔法史を書いているバチルダがいる場所なの」

「バチルダって、バチルダ・バグショット？ 生きてるのか？」

「うん。まだ生きてるってミュリエルおばさんが言ってたの。ボケてるかもしれないけど。ダンブルドア先生とかミュリエルおばさんが子供のころにもう有名だったらしいし」

何ともエストラしい気がオスカーはした。それにオスカーには特に断る理由も無かった。前の二人の予定と被らなければ特に夏休みに予定が入っているわけでは無かったからだ。

「決闘トーナメントの賭けでお金はあるから、そんなに問題ないと思うの。煙突飛行でいけると思うし」

「夏休みの最初の方に行くってことだよな？」

「うん。みんなが集まる前に行こうかなって、大人数だと時間がかかりそうだから」

どこかに行くとしても人が多いと行く場所を決められないというのは確かにあった。それにオスカーはさつきから思っていたことだが、自分にしたい事が無いのではないのかと思い始めていた。自分で何かをしたいと誰かを誘った事が、自分にはあるのだろうかと思いつめていたのだ。

「まあとりあえずそれでいいだろ。適当に日程を連絡してくれ。それから煙突飛行で行けばいいだろ」

「うん。じゃあ家に戻ったらすぐふくろうを送るね。やった、一回行ってみたかったの。ミュリエルおばさんはあんまり動けないし、アーサー叔父さんとモリー叔母さんたちはまだロンとかジニーが小さいからあんまり一緒に行けないし……」

こつちを見て笑うエストを見るだけで、オスカーはやっぱり目を奪われるのだった。オスカーは夏休みに入つても自分が本当に大丈夫なのか怪しくなってきた。

それに何度も何度もさつきから同じセリフを三人に返していた。煙突飛行や日程と言う言葉をオスカーは何度も連呼している気分だったのだ。

「分かった…… ちよつと寮に戻つていいか？ 起きるのが早すぎたかもしれない。昼直前くらいに出てくるから、大広間にいく準備をしようといってくれ、パジャマじや昼飯食べれないだろ」

「確かに、談話室だとこれでもいいけど、大広間だとダメかも」
「ダメだろ」

ダメなのは自分の方な気がオスカーはしていたが、足早に寮に戻つた。ルームメイトはホグズミードにでも出ているらしく、誰もいなかった。ベッドに飛び込んで布団と枕を自分の顔の上に置いて、無理やり暗闇を作つたが、どうにもこうにもさつき会つた三人の顔が離れない気がした。

やつと布団をどけて目を開けると、枕の傍でギルデロイ・ロツクハートの白い歯が光つた。グリフィンドール塔に行った日から、トンクスに習つてその本を枕元に置いてはいたが、オスカーは一度もそれを開いてはいなかった。

オスカーは流石にトンクスまで同じ様な事を言わないだろうと思つて、期待を込めて本を開いた。オスカーが期待した通り、白紙のページは白紙のままだった。

それを見て、息を吐いたオスカーだったが、本当に大丈夫か怪しい気分になっていた。そして、どうも自分から何もせずに行かれてばかりなので、逆にこちらから行けばどうにかなるのではないのかとオスカーの中で良く分からない論理が動き始めていた。

『トンクス、夏休みの最初の方暇か？』

書いてからオスカーは少し後悔した。自分で泥沼の中に足を突っ込み始めている気がしていたからだ。

『何？ 暇よ。パパとマグルの映画を見に行くくらいには暇ね』

オスカーが思っていたよりも早く返答があった。さつきまでと違って、目の前に相手がないのでオスカーはこれまで通りのいつもの自分でいられる気がした。

『流石にトunksはどっかいかないかとか言いださないよな？』

もう、何かどうでもよくなってきた、オスカーは思っていることをそのまま書いた。

『あんた、私を馬鹿にしてるわけ？ そういや…… ああ、なるほど？』

私も馬鹿にされているけど、あんたはバカよな？』

『なんのことが全然分からない』

『何か滅茶苦茶馬鹿にされてる気がするわ。めっちゃムカつくんだけど』

『そんなこと言われても困るんだが』

オスカーは困惑した。トunksが何に怒っているのかも分からなかったし、そもそも、顔が見えないのでどれくらい怒っているのかも分からなかった。

『確かに確かめてみるのも一興かもしれないわよね』

『さつきから意味わからないんだが』

『いきなり言いださないよな？』とか言ってくる奴よりマシでしょ。あれね、ならマグルの街に行きましようよ。田舎者の純血貴族オスカーお坊ちやまにマグルの大都市ロンドンを教えてあげるわ』

オスカーはやっぱり、どうも自分で底なしの沼に踏み込んで行った気がした。ただ、どっちにしるこうなる気もしていた。

『日程は？』

オスカーはこれを誰かに聞くのは何度目なのだろうと思った。

『あんたが決めなさいよ。他の日程と被らない様に適当に決めてくれればいいわ。ただ、ちゃんとマグルの格好してきなさいよ。ローブ着て来たらそのまま煙突飛行でアズカバンに送り返すわ』

『アズカバンには煙突飛行でそうそう行けないだろ。分かった』

そう書くとしばらく返答は無かった。ただ、オスカーはちよつと安心した。何となく、この方式ならこれまでと同じ様にコミュニケー

シヨンできている気がしたからだ。

しばらく待っても何も現れなかったのも、本を閉じようとするといつか見たのと同じ、インクの乱れのようなモノが表示されて、誰かが誰かの似顔絵を描いていた。ご丁寧に羽ペンのインクを替えているのかちゃんと色までついていた。

『オスカー君見えてる？ 見て、これこう言う事よ。布団被って何してるのかって思ったら案の定よね』

『??』

『髪の毛の色ってことよ』

『ああ、トンクスかこれ？ それで君はまたトンクスじゃないのか』

『そういうこと』

それからインクの向こう側でどんなやり取りがあつたのかオスカーには分からなかったが、トンクスがめっちゃめちゃに似顔絵を黒で塗りつぶすまではずっとそれが表示されていた。髪色が一番見るところが多い色だった。

ホグワーツ特急に乗って、オスカー達はホグワーツから帰宅しつつあつた。毎年と同じ様に爆発スナップや百味ビーンズの一気食いなんかをしながら帰りつつあつた。

『そう言えば、来年は監督生が選ばれるよね？』

『ビルの時と同じなら夏休みの途中にくるはずだね』

百味ビーンズを二十個くらい突っ込みながらエストが言った。そのあとせき込んでいたので、胡椒や唐辛子なんかの辛いモノが入っていたのだろうとオスカーは思った。

『まあ私は選ばれないだろうからどうでもいいわ。それにここにはハッフルパフ生はいないから私からは減点できないってわけよ』

『残念ですね。常にハッフルパフの点数がゼロになるように減点してやりたかったのに、自分がグリフィンドール生だと言う事がこれほど

悲しかったことはありません」

「そうね、スリザリン生だったならわざわざ談話室に来てもらうことも無かったわね」

オスカーはこの二人の関係性が変わることがあるのだろうかと思つた。もしどちらかが主席になろうと監督生になろうと同じ様な事を言っている気がしたからだ。

「うちのママは僕に監督生になって欲しいんだらうなあ」

「確かにモリー叔母さんはビルの人に凄い喜んだの。それにパースはなれそうだけど、フレッドとジョージはダメそうかも」

「あの二人がなれるんならトunksでもなれるだらうな」

トunksが監督生になれるのなら、クラーナは死喰い人になる、オスカーはそれくらいあり得ないと思つた。何せ図書館にマンドレイクを投げ込んだり、フィルチの管理室にクソ爆弾を一ダース入れて遠隔で爆破したりと、最近はずつと落ち着いたものの、低学年の時はやりたい放題だったからだ。

「オスカー、あんたが一番微妙なところでしょ。他のメンツはあれだけど、一番の校則破りじゃないの」

「罰則はくらつた事が無いし、どれも俺が主犯じゃないだろ」

「うーん。確かに一番微妙かもしれないね」

「確かに、ポリジューズ薬はダメなの」

「ルーンスプールも飼つてたしね」

「だから俺のせいじゃないだろ」

大騒ぎしている間に、ホグワーツ特急はあつという間にキングズ・クロス駅についていた。汽車から降りて、みんなにお別れを言つて、ウィーズリー家の家族にチャーリーが飲み込まれる前にオスカーは声をかけた。

「チャーリー、夏休みに隠れ穴に行つてもいいか？」

「え？ でも、多分みんな入るのはきついんじゃないかな？」

「いや、俺一人で行きたいんだけど。俺の家にみんなを呼ぶ前に何だけど……」

それを聞くと、チャーリーが辺りを見回した。周りにはいつものメ

ンバーは誰もいなかった。

「いいね、それ。いつもはエスト達がいるからあんまり昔の隠れ穴みたいな、男兄弟だけの遊び方はできないし……それに、ノクターン横丁にいかないかい？」

「ノクターン横丁？」

「クラリーナとオスカーは二年の時に行つてたじゃないか、色々危ないモノも売つてゐるらしくて……決闘トーナメントの掛け金がちよつとあるから……そう言う所も女の子がいつしよだといけないから」

オスカーはチャーリーが何を買いたいのかは大体分かつていた。多分、ハグリッドと同じ行動をしそうだった。

「じゃあそこも行けばいいだろ。俺もエストと一緒に賭けてたのが返つて来てるしな。またローガンを送るよ。エロールだと何日かかるか分からないから」

「よろしく。他の四人にばれないようにね」

「ああ、じゃあな」

チャーリーと別れて、オスカーはキングズリーとペンスが待つている方へ向かった。こんなに事前に予定が決まっている夏休みはオスカーにとつては初めてだった。

ただ、もう帰つて一番最初に行く場所は決まっていた。やることも決まっていた。もう一度、トンボが飛び交う森の中を歩かないといけなかった。家の庭の外へ出ないといけなかった。白い平べったい石がある場所まで歩いて行かなければならなかった。

やつとちゃんとした意味でそこにいけるはずだった。四年かかつてやつとそこに戻るはずだった。

五年目 ダンブルドア軍団 聖マンゴ魔法疾患傷害病院

この夏で一番暑い日のちようど正午近くだった。

広い通りには所狭しと店が並んでいて、ダイアゴン横丁とは違う賑わいがこの真夏の最中にはあつたのだった。

「マグルの連中は良くこんな暑い中、買い物のために出てくる気になりますよね」

「それはそうだよな、煙突飛行で飛べるわけじゃないのに……」

外の暑さに二人の声にも元気が無かった。ただでさえうだるような暑さなのに、人込みの中ではそれが何倍にも感じられたからだ。

「あ、やっと見えてきました」

クラリーナが指さす方をオスカーが見ると、マグルの建物の事を良く知らないオスカーでも、その建物だけが時代遅れなのが分かる、赤レンガ造りのビルが建っていた。

そもそもペンキや塗料が何年も塗られていない様に見える。一応一階部分に名前が書いてあり、『パージ・アンド・ダウズ商会』と書かれていた。

「ここですね…… 普通に人通りが多いですね……」

隣のウィーズリーおじさんが好きそうなマグルの電化製品を売る店には、夏休みだからなのか、オスカーやクラリーナより小さい子供を連れた家族連れが沢山出入りしている。

ファミリーコンピュータかウォークマンなるモノのどちらかを買って欲しいと癩癩を起している子供を横目に、二人はショーウィンドウに喋りかけた。

「イライザ・ムーディに面会に来ました」

後ろの通りを走る二階建てのバスの音を聞きながら、二人は少なくとも数年は時代遅れであろう服を着たマネキンを見つめた。

マネキンは小さくうなずいて、継ぎ目だらけの手と腕で手招きした。

買い物で頭が一杯になっている家族連れを一瞥して、ショーウィンドウに足を踏み入れると、冷たい水のような膜を突き抜ける感覚があり、少し人で込み合った受付の様な場所にでた。

「オスカー、場所は分かっていますから受付には行かないです」
「分かった」

何本かネジが抜けていそうなグラグラする椅子に座って、魔法使いや魔女達は受付の順番を待っている。

順番を待つ人たちは十人十色な状態だった。文字通り顔の色がトシクスの髪の毛よりカラフルな人がいたり、なぜか首が百八十度回転している人がいたり、湯気のようなモノを体中の穴という穴から出している人がいたり、ホッグズ・ヘッドよりも多彩な人種が集まっている様だった。

壁に肖像画が掛けられていて、オスカーとクラリーナに手を振っていた。オスカーは見覚えがあると思い、肖像画の説明文を読むと、『デイルス・ダーウエント、聖マンゴの癒者、ホグワーツ魔法魔術学校校長』と書かれていた。クラリーナは肖像画の隣にある扉を開けて、階段を登り始めた。

「姉さんの病棟は…… とりあえず、オスカーは六階の喫茶室で待っていてくれますか？ 病棟は身内しか入れなくなっていますから」

「分かった。あと、ペンスが何か病院でいる物があるんなら、呼べば持ってくるって言ってたんだが……」

「大丈夫です。と言うか、お見舞いの品とかそういうのは全部無駄になりますから……」

階段を登るクラリーナの体がただでさえ小さいのに、いつもよりもっと小さく見えるのは、彼女が常日頃から出しているキビキビした元気が、外の暑さだけではなく他の何かでなくなっているせいだとオスカーは思った。

両サイドに癒者達の肖像画がある階段を登りながらオスカーは階数を数えていた。さつき見た病院の案内だと、五階が解除不能性呪いと書かれていたのでオスカーはそこがクラリーナの姉がいる場所だと考えていたのだ。

しかし、五階まで来てもクラリーナはさらに階段を登ろうとした。

「クラリーナ、五階じゃないのか？」

「え？ ああ…… そうですね、先にオスカーを喫茶室に連れていきますよ。それに…… 私が行く場所は五階じゃなくて地下なんです。確かに五階は長期療養の病室ですから、あんまり間違つてはいないですけど」

オスカーはさつきからなんだかやり辛かった。そういう意図をして言っているわけではないはずなのに、何を言っても今のクラリーナにプラスなことを言えている気がしなかったからだ。

六階の喫茶室はこの病院のほかの場所と同じように、見た目よりも実を取っている場所に見えた。いつかオスカーがトunksと行った、ホグズミードの店のようによたら装飾やフリフリしたモノがあるわけでは無かったし、病院にお見舞いに来た家族と入院している人が喋っていたり、癒者が何人か休憩していたりと言う感じだった。

「クラリーナは何か飲むか？ ファイアウイスキー以外ならおごるけど」

「夏休みは呪文が使えないから杖で殴りますよ。私は帰ってきた後でいいです。申し訳ないですけど、私が見舞いに行っている間、ここでちよつと待つててくれますか？」

「大人しく待つてるよ」

「じゃあ、ちよつと行つてきます……」

オスカーはやつとちよつと冗談を言えたと思ったが、やっぱりなんだかぎこちなかったし、明らかにクラリーナはいつもと比べても元気がなかった。一人で出ていくクラリーナを見ながら、病院でお見舞いをした後に合流しても良かったはずなのに、なぜクラリーナは自分をここに連れて来たのだろうかと考え始めようとした。

「兄ちゃん。今の女の子はガールフレンドか？ え？」

オスカーが考え始めようとすると、隣のテーブルにいた少し禿げ上がった頭で小太りのおじいさんが話しかけてきた。ダンブルドア先生やドージ先生ほどの年齢では無いようで、六十か七十くらいだろうか？

「そういうのじゃ……」

「ただ女の子も自分も血が大事だ。まあ見た感じ、兄ちゃんも女の子もマグル生まれじゃないだろ？」

「それは…… そうですけど……」

出し抜けに生まれについて喋り始めるおじいさんを見て、オスカーは少し警戒感を持った。戦争の前ならまだしも、今のご時世にそういうことをどこに聞いている人がいるかわからない場所で喋り始めたからだ。

「兄ちゃん。別にわしは一昔前に暴れてた奴らみたいにマグルをどうこうしようなんて思っているわけじゃないぞ。現にわしの嫁はマグルだった」

「そうなんですか……」

どれくらい目の前のおじいさんが本当のことを喋っているのかわからなかったが、少なくとも、目を見た感じではうそを喋っている様には見えなかった。

「兄ちゃんはまだホグワーツだろ？ 寮はどこだ？」

「スリザリンですけど……」

「ならええ、わしの娘もスリザリンだった。主席にはなれんかったが、イモリ試験でも何科目も〇優を取って、わしと同じように魔法省に入ったわ」

少なくとも娘については本当の事を言っているとオスカーは思った。と言うか、単純にオスカーに自慢をするために喋りかけて来たのではないかと思っただけだ。

「わしは人の上に立って、部下や同僚のしよーもない事で煩わされるのが嫌だったから出世はできんかったが娘は違った。魔法省でもちゃんとキャリアア街道を歩いとる」

「凄いですね」

エストやチャーリーも自分の話をし始めると人の話を聞かないが、この人も相当自分の言いたいことだけを喋るタイプの様だった。そして、娘が自慢だと思っているのは明らかに腹の底からそう思っているようにオスカーには見えた。

「兄ちゃんは魔法省に行ったことがあるか？ 魔法省じゃあ窓に魔法がかかっている、魔法で天気を決めるわけよ。わしはその天気を決めるのと、魔法省の床を磨くのが仕事だった。大臣室の床も磨いたことがあるぞ？」

「天気を……」

「わしのいた魔法ビル管理部が無ければ、魔法省なんてふくろうの糞まみれになった上で年中天気はハリケーンよ。わしの入ったころなんぞ、賃上げ要求のために毎日ハリケーンだったわ」

何がそんなに楽しいのか、目の前のおじいさんは笑いながらオスカーに喋っていた。それになぜか勝手にオスカーの分も蜂蜜酒を注文して勧めてきた。

「この蜂蜜酒も娘のおかげで飲めるわけよ。わしはもう少し大臣やエリート気取りのアホどものアホな争いや、しょーもない決めごとを見ときたかったが、娘にもう十分働いたと言われればしょうがないだろう？ 今はこうやって、娘が送ってくれる金で余生を送っているわけよ」

「なるほど……」

さつきからオスカーはただうなずいたり、同意しているだけなおじいさんは楽しそうだった。話し相手が見つかったのが久しぶりだったのかどうなのか、とにかくおじいさんの語りは止まらなかった。

「ただな、だから生まれや血は大事なんだ。魔法省ではそいつがどんな家の出身かで色んな事が決まる。わしはモツプがけをしながら色んな連中を見てきたから分かる。半分マグルだったらどうなると思う？ わしは出世する気が無かったから関係ないが、娘は違うだろう。娘は魔法省に入って出世できる成績も能力もあったのに、スリザリンでは監督生や主席にはなれなかった。それと同じことが魔法省でもある」

オスカーは黙って聞いていた。目の前のおじいさんは悔しそうに見えた。それは何に対する悔しさなのか、オスカーには分からなかった。

「兄ちゃんもあの女の子もどうせいいところの子だろう？　ならそれはいいことだ。子供には自分の生まれなんてどうにもできん、なら一番いいモノを与えるべきだ。わしは娘に魔法力や頭は与えれたかもしれないが、そういうものは与えれなかった」

明らかにオスカーは目の前のおじいさんが言っていることに矛盾を感じるのに、それを言葉に出すことができなかった。

「兄ちゃんもあほらしいと思わんか？　頭も杖も上手く使える奴が、家や血に縛られて能力を発揮できない場所にいかされるなんてな。まあ、こんなことを考えるのは兄ちゃんからしたらずいぶん後になるかもしれない」

おじいさんは残っている蜂蜜酒を一気に飲み干した。酒を飲んだ後だったが、むしろおじいさんの目はさつきより鋭くなっている気がオスカーはした。

「こうやって誰かのお見舞いに来てる女の子について来とる。そういういいことができるように兄ちゃんも女の子も育てられたんなら、いとこの生まれだってことよ。兄ちゃんはそれを大事にすることだな、一生ついて回るんだからな」

そう言うのと、目の前のおじいさんは静かになった。オスカーはしばらくおじいさんが言ったことを考えていた。おじいさんが言っていることはどこか間違っている気がするのに上手く説明できなかったからだ。

「じゃあな、兄ちゃん。ちゃんと女の子は大事にしろよ。わしはそろそろお暇しないとダメみたいだ」

おじいさんは立ち上がり、オスカーの背中をバンバン叩いてから歩いて行ったが、喫茶室の入り口の方でちよつと厳しいお母さんの様な顔付きをした、癒者らしき人に捕まった様だった。

「アンブリッジさん!!　せめて診察の時はお酒はやめましようって言ったでしょう!!」

「そんなに怒るな。ほれ、女の子連れのお兄ちゃんにいい話をだな……」

「ダメです、通院の度に飲まれたのでは何のための病院なのか分かり

ません」

そのまま大声で喋りながらおじいさんは連行されていった。オスカーはそれを見ながら、さつきおじいさんが言っていたことを考えていた。どうなのだろうか？ オスカーは自分自身に関わることで、自分の家や生まれのことと、自分自身がやったことや自分の能力を分けて考えたことはほとんど無かった。

それは、去年思い出したことも含めて、自分の中でごちゃごちゃに絡み合っていて、離して考えることなど出来なかったからだ。しかし、今のおじいさんの娘や、自分以外の人間はどうなのだろうか？

「お兄さん、あんな爺さんなんか適当にあしらっとけばええのよ」

「そうそう、万年平職員ですつと魔法省のモップがけしてた人らしいのよ。あの人は誰かと喋るたびに娘の自慢しかないんだから、それにあんまり娘さんの方もいい噂は聞かないわ」

「そうなんですか……」

おじいさんと同じくらいのお婦人二人組が、喫茶室から出ていく時にオスカーに声をかけていった。しかし、やっぱりさつき言われたことをオスカーは考えていた。自分も含めて、どれくらいの事が自分自身の能力で、自分自身で選んだことなのか？ それは外から与えられたことがどれくらい入っているのだろうか？ こうやってこれまで喋ったことのない人と少し喋るだけで、考えが少し変わりそうなのに、自分の考えだと言えることなどあるのだろうか？

ニコニコしながらおじいさんが勧めてきた蜂蜜酒は、クラリーナが帰ってくるまで全く減っていなかった。

「ジョン、大丈夫ですから、オスカーを喫茶室に待たせてるだけですし、それにお金くらい持ってますから……」

「君は子供で、私は大人だ。君は知っているとは思いますが、闇祓いの給料は安くはない」

「いやだから、そういうのじゃないんです」

喫茶室の入り口からクラリーナの声が聞こえた。短い髪の毛の真面目そうな顔をした男とクラリーナが入ってくるのが見える。男はスネイプ

先生より少し年下くらいにオスカーには見えた。

「ああ、もう…… あ、オスカー、この人は……」

「闇祓いのジョン・ドーリツシュだ。オスカー・ドロホフ君、初めまして」

「ど、どうも……」

なぜか握手を求められたので、オスカーはドーリツシュと言う男と握手した。クラリーナの方を見ると、額に手をあてて、呆れているのかなんなのか、とにかく困ってはいる様だった。

「これで、何か食べると良い。それに煙突飛行粉も置いておこう。じゃあ、二人ともちゃんと家まで帰る様に」

「分かりました。ジョン、ありがとうございます」

「礼を言う必要は無い。君の面倒を見るのは至極当然なことだ」

何枚かのガリオン金貨と煙突飛行粉が入った瓶を置いて、ジョンはそう言うと、ピシツとした背筋のまま喫茶室から出て行った。ペンスよりも姿勢がいいのではないかとオスカーは思った。クラリーナは椅子にも座らずにまだ額に手をやっていた。

「なんか…… すごい真面目な人だな」

「そりゃそうですよ。イモリ試験は全部満点で、ホグワーツの主席だったらしいです」

「凄いなそれ」

オスカーには、どうもクラリーナはあのドーリツシュと言う男が苦手な様に思えた。ただ、喫茶室に入る前の様な雰囲気クラリーナから無くなっていたので、その分は安心した。

「毎回、あんな感じなんです。真面目なのは良いんですけど、私の事は、その…… なんかホグワーツに入る前の子供かなんかだと思っっているんですよ」

確かに身長だけ考えれば、ホグワーツに入る前のレアと今のクラリーナはいい勝負かもしれないとオスカーは思ったが、流星に口には出さなかった。

「けど、なんで聖マングにいたんだ？ 闇祓いなんだろ？」

「それは…… その、姉さんの部屋に入るのに一応闇祓いかパトロー

ル隊の誰かを連れていく決まりなんです。叔父さんはもう局に席は無いですから、姉さんの同期のジョンが毎回来てくれるんです」

つまり、さっきのドーリツシュが言っていた、面倒を見るのは至極当然な事とは、彼が闇祓いだからと言うだけではないのだろうとオスカーは思った。闇祓いで同期だと言うことは多分ホグワーツでも同期だったはずだからだ。

「じゃああの人も…… 騎士団なのか？」

「違いますよ。騎士団と魔法省の両方に仕えられる様な器用な人じゃないです。姉さんは良く、真面目バカだとか、ダーク・クレスウィルがジョンよりバカだったせいで、真面目バカと一緒に主席になったとか言っていました」

一応、オスカーは騎士団の事を口に出す前に周りを見てから言った。しかし、ドーリツシュは生真面目で融通が利かないタイプだと言うことなのだろうか？ オスカーは何となくチャーリーの弟、パーシーの顔が浮かんだ。去年思い出した記憶の中のクラリーナの姉の性格を考えれば、水と油の様な関係になりそうな気もした。

「ほんとにバカってことじゃないですよ？ 家や周りの期待に correspond するわけですから、すごい賢くて真面目なのは本当です。ただ、真面目過ぎるんです。ああ、もう早くダイアゴン横丁に行きましようよオスカー。なんかジョンがお金置いていきましましたし」

「なんか食べなくていいの？ あと蜂蜜酒全然飲んでないから別に飲んでもいいぞ」

「ダイアゴン横丁で適当に食べましよう。蜂蜜酒は貰えるんなら貰っておきます」

オスカーは言ったあとで少し不味いと思ったが、そのころにはもうクラリーナが蜂蜜酒をごくごく飲んでいた。オスカーは思った。なぜ弱いのがわかつているのに一気に飲むのだろうか。ドンとテーブルに空のグラスが置かれた。

「ほら、行きましようオスカー」

「分かった、分かったから」

さっきの子供扱いで怒っているのか、何なのか、クラリーナがオス

カーの腕を取って立ち上がらせようとしたのでオスカーはびっくりした。とにもかくにも、クラリーナがダイアゴン横丁に行きたいことは分かったが、結局どうして病院に自分が連れてこられたのかをオスカーは理解することは出来なかった。

ダイアゴン横丁に並ぶ店々のひさしの合間から夏のきつい日差しが差し込んでいた。ホグワーツにいる時期には感じるこの無い暑さがオスカーを襲っていたが、オスカーはあまりそれは気にならなかった。

聖マンゴに行く前も二人で歩いていたというのに、その時はそんなに気にはならなかったのだが、今は何か違った。単純にクラリーナの意識やオスカー自身の意識が別の場所に向いていたからかもしれないかった。

何より距離が近い気がした。ただでさえ暑くて、ホグワーツでは着ることが無いような薄着をして暑さを凌いでいるはずなのに、歩いているクラリーナとの距離が近い気がしたのだ。いくら人が多い通りで、道を開けないといけないと言っても、明らかに近いとオスカーは感じていたが口には出さなかった。

「あそこ入りましょうよ。いつも通るだけであんまり入ったことないんです」

「腹も減ったしな」

気のない言葉を返したせいなのか、クラリーナに少し睨まれた気がオスカーはした。オスカーもダイアゴン横丁には幾つかカフェや軽食を出す店があることは知っていたが入ったことは無かった。家で食べるか、漏れ鍋で食べるかどちらかだったからだ。

外のテラスに座るとやっとクラリーナと距離が離れて、オスカーは一息ついた。と思ったが、メニュー表が二つ、店の中から飛んできて、オスカーとクラリーナの顔の前にメニューを示した。

「何なんですかこのメニュー、ほかのページを見せようとしないうで

すけど」

「こつちもそうなんだが」

「軽食です？ それとも普通に食べますか？」

二人がメニューに戸惑っている、後ろから不愛想な声が出た。店員らしき人のちよつと不機嫌な顔が一瞬見えたが、またメニュー表がオスカーの視線を遮った。

「とりあえず、メニューを選びたいんでこのメニューを静かにさせてくれませんか？」

「軽食です？ それともがつつりですか？ 当店おすすめのカップルランチメニューか、カップルコーヒーマニューのどちらになさいますか？」

「いや…… だから、とりあえずメニューを見たいって……」

「軽食です？ それともおなか一杯食べられますか？ 当店おすすめのカップル様向けメニューをただいまご覧になられています。単品の注文よりもお得になっております」

「単品の価格を見ないとお得かどうか分からないんじゃないや……」

「お得となっております。どちらになさいますか？」

「分かりました。ランチメニューでいいよなクラーナ？」

「いいですけ……」

「カップルランチメニューでよろしいですね？」

なぜかその時だけ、メニューが机に降りて動かなくなった。店員さんはかなり不機嫌な様だった。オスカーは何となく、このやり取りはこの店員さんがやりたくてやっているわけでは無いのだろうと目を見て思った。早く言えと言う意思が目から伝わってきた。

「それで」

「カップルランチメニューでよろしいですね？」

「いやだからそれで」

「カップルランチメニューでよろしいですね？ お客様に言ってもらわないと料理を始める魔法のトリガーが動きません。カップルランチメニューでよろしいですね？」

「分かりました…… カップルランチメニューで」

「ありがとうございます。カップルランチメニュー一丁!! 追加のご注文はメニュー表をご覧ください」

オスカーは病院のおじいさんの相手をしたことや、やたらクラーナとの距離が近い事よりも疲れた気がした。

「何なんですかこの店、確かに普通に頼むより安いみたいですけど」

「もうなんか疲れたな。これからダイアゴン横丁で食べるときは、漏れ鍋かフォーテスキューのアイスにしよう」

「そうしましょう。一体何なんですか……」

メニュー表は勝手に机に置いてあった本立てに収まっていた。本立てにはメニューの他に何冊か本が置いてあって、そこにはオスカーが見るのも嫌になった週刊魔女も収まっていた。

「どうぞ。当店おススメのメニュー、カップルランチメニューのアイステイヤーになります。当店はカップル様向けのお店として、週刊魔女でも紹介されております」

「そうなんですか」

「はい。先ほどのメニュー表による対応は、週刊魔女にて先に当店の紹介を拜見いただいたカップル様のみの特別対応となっております。特別にランチメニューの最後にパフェをご準備いたしております」

「特別対応」

「特別対応でございます」

「なるほど」

「では少々お待ちください」

店員さんの顔は先ほどよりも不機嫌では無くなっていった。言いたいことを言って気が済んだと言う感じにオスカーには見えた。クラーナの方を見ると疲れたのかテーブルに突っ伏していた。

オスカーは考えてみた。つまり、オスカーとクラーナのどちらかが週刊魔女を読んだせいでさっきのメニュー表による攻撃が発生したらしい。オスカーは三年生の最後に問題の週刊魔女を読んでから、一度もあの雑誌を読んだことが無かった。

ではクラーナが読んだのだろうか？ 普通に考えれば、あの雑誌で

一番被害を受けたのはクラリーナなので、読むことはないと思えた。しかし、オスカーは知っていた。あの事件があった後、クラリーナのもとには無料で週刊魔女が送られていていることを。それをグリフィンドールの暖炉の火を大きくするために使っていると何度か聞いたことがあったのだ。

クラリーナはまだ突っ伏していた。ダークグレーの髪の間から見える肌が赤かった。この気温と、蜂蜜酒を飲んだ後に煙突飛行でグルグル回ったせいもあるかもしれない。流石のオスカーにもその二つの理由だけでここまで赤くなっているのではないことは分かった。

「クラリーナ、アイスティーが来てるぞ」
「知ってます」

クラリーナは顔を上げなかった。料理もまだ来そうに無かった。正直に言えば、夏休みに入る前と同じで、オスカーはあまりクラリーナの顔をみて正面から色んな事を三年生や二年生の時の様に喋れる気がしなかった。去年までなら、クラリーナとの距離を考えることなど無かったはずだった。だから、クラリーナが顔を上げていない今なら聞きたいことも聞ける気がした。

「じゃあ顔を上げないでいいから、聞いてもいいか」
「なんですか」

「なんで俺を聖マンゴに連れて行ったんだ？」

クラリーナは静かになった。オスカーは思った。こんなことを聞いたとトンクスに話したら、そういうのは聞くんじゃなくてあなたが考えることでしょと言われそうな気がしたし、エストに話せば、エストも同じ風に聞いたかとも言われる気がした。多分、レアはもつと直接的に聞いたのではないだろうか？

「ダイアゴン横丁で合流することもでき……」

「二年前のクリスマスの時覚えてますか？」

「クリスマス？ トンクスじゃなくて、エストと取っ組み合いしてた時か？」

「そうです。あの時、聖マンゴに行ってからオスカーの家に行きました」

さつきまでと違って、クラリーナの顔の赤さは引いている様に見える。ただ顔は上げないまま喋っていた。ダイアゴン横丁で買い物をする魔女や魔法使いがテラスで喋っているオスカー達の横を何人も通り過ぎて行った。

「誰も闇祓いが空いてなくて、やっとイブの夜にジョンが来てくれて姉さんのところに行ったんです。面会できるようになったのはあの年からでしたから、クリスマスくらい行きたかったんです」

オスカーは心の中で勝手にシミュレーションしたトングスの言う通りかもしれないと思った。ただ、多分顔を上げた状態ではお互いに聞けなかった気もした。

「それで、家に帰った後に色んな事考えるじゃないですか、その……トングスに酷い事言った時みたいなことです。叔父さんはいなかったですし、寝れなくて、もうほとんど朝でしたけど、起きたら一人なのが嫌だったんです。あんな時間に行くべきじゃないってわかったと思うんですけど」

あの時は、オスカーはエストと喧嘩をしていた事で頭が一杯だったのを覚えていた。だから、クラリーナがどんな状態だったのかを気にする余裕が無かったと分かっていた。クラリーナの目が三年生の夏休みの後と同じように疲れていた事しかオスカーには分からなかったのだ。

「あなたやエストやレアに言っちゃダメですけど、暖炉飛行で行ったら、オスカーとエストは一人じゃなかったでしょう？ だからムカついたんです」

クラリーナは顔を上げなかったが、どんな顔をしているかくらいオスカーには分かった。やっぱりオスカーが一番見るのが嫌いな顔をしているに違い無かった。自分の事が嫌いだという顔をしているに違いなかった。

「だから、私は一人で行きたく無かったんです。こうやって喋っちゃってますけど。オスカーと普通にダイアゴン横丁に来たかったですけど。その、病院で考えるようなことじゃなくて、エストがオスカーと談話室で喋ってたり、ときどきトングスとバカ話をしているで

しょう？　そういうことを喋りたかったんです。最初から一人じゃなければ考えずに済むかなって思っていました」

つまり、オスカーはそれをクラリーナに与えることができなかったと言ふことなのだろうとオスカーは思った。なぜなら、まさに見舞いに行く前のクラリーナの様子は正にそういうことを考えていたからだろうからだ。

「クラリーナ、そろそろランチも来そうだし起きたらどうだ？」

「どうせまだ来てないんでしょう？」

そういいながら少し、クラリーナが顔を上げた。オスカーは間髪入れずに言った。

「さっきの話はクラリーナが家族は大事だって思ってるってことだろ？

だから色々ムカついたり、いろいろ考えるってことだろ？　もしかしたら……」

喋りながらオスカーは病院で喋ったおじいさんの事を思い出した。おじいさんはマグルの血が娘のキャリアや人生を縛っていると言っていた。それはクラリーナにとつても同じではないだろうか？　オスカーは同時にトunksとクラリーナが言い合いをしていた内容も思い出していた。

「いやもしかしたらじゃなくて、家族の事をちよつとでも嫌だっと思いたくないのかって思うけど……」

クラリーナが黒目だけを上げてオスカーの方を見ていた。ハツとしたような顔だった。オスカーは思った。去年の自分とは逆ではないのかと。自分は父親のいい場所を見つけるのが嫌だったのだ。

「そう思っているんなら大丈夫だろ。大事だと思いたいからそう考えるんだろ。それに誰でも良かったのに、俺を連れてってくれてありがとうな」

「違いますよ!!　誰でも良かったわけじゃ……」

オスカーは自分で喋りながら、クラリーナの顔を見てちよつと不味いと思った。距離も近かったし、見上げる様にオスカーを見てくるクラリーナとの構図もあった。夏休み前と同じで、やっぱりオスカーもおかしかった。簡単に言えば、まね妖怪と戦う前と一緒だった。

オスカーはさつきまきまで、クラリーナの話聞いて、頭がフル回転していたし、クラリーナの声色やリズムから色んなモノを読み取って冷静に伝わる様に言葉を作ったはずだった。

それは今はどうなのだろう？ 頭は明らかに動いていない気がした。色んなモノを読み取るうとしていた、目や鼻や耳は違うモノを読み取って、頭では無い何かを動かそうとしているに違いなかった。

いつか匂ったことのあるミントの様な匂いがクラリーナの髪からすることが分かった。目は多分、彼女の目や唇をとらえていた。耳はクラリーナが自分のシャツを触って、それが肌と触れる音をとらえていた。テラス席でダイアゴン横丁の色んな音が聞こえ、夏の日差しが石畳に反射されているはずなのに、フィルターがかかった様に五感も考えや自分の感性も一つにフォーカスされていた。

オスカーは思わず顔を見れなくなつた。

「一人で行くのがちよつと嫌だったのもありますけど。私は……」

「お待ちせいたしました!! カップルランチメニューになります!!」

二人の前に美味しそうなスペアリブが何本かと、スイートコーンが置かれた。多分、グレート・フィーストだろう。スペアリブは焼き立てだったし、スイートコーンも蒸したばかりに見えた。それにグラスに汗をかけたバタービールは見るだけでのどが渇きそうだった。

「ご注文の品は以上になります。お食事後にサービスのパフエを提供いたしますので、お申しつけ下さい。ほかに何かご注文等がございましたか？」

店員さんはニコニコだった。オスカーはクラリーナの顔を見れそうになかったので、店員に十分だと伝えようとした。二人の声が同時に出了。

「大丈夫です」

「かしこまりました。ごゆっくりどうぞ」

店員が去っても二人はしばらく料理に手を付けようとしなかったし、お互いの顔も見ようとしなかった。しばらくそうして、オスカーがバタービールに手を伸ばすと、テーブルの向こう側でクラリーナがバタービールを一気飲みするのが見えた。

「なんか、オスカーおかしくないですか」

「なんかって何なんだ」

「いつもと違いますよ」

「そんなこと言われてもな」

お互いに目を合わせず、ランチを食べながら言い合ったがオスカーは少し怖くなった。どうも、自分の変調は外から見てもわかるくらいのモノらしいと言うことだった。そもそもオスカーは誰とごはんやお茶に行っても、誰かの顔を見れなくなるなどほとんど無かったはずだった。

自慢になるのかを置いておいても、ダンブルドア先生やスネイプ先生相手でも、顔を背けない自信がオスカーにはあった。それが夏休み前から四人が相手だとしてもこの体たらくなのだ。

「私も上手く言えないですけど…… その…… オスカーを馬鹿にしてるわけじゃないですけど、オスカーは普通言えないことを最初から最後まで堂々言うじゃないですか、時々」

「なんだそれ」

「だから、こっぴड़ाかしいことをなんか恥ずかしげも無く言うってことです!!」

クラーナが結構な大声で言ったのでオスカーは目を見張った。オスカーは自分で考えてみたがどれがそれにあたるのかあんまり認識できなかった。

「そんなに言ってるか?」

「言ってますよ絶対。チャリーリーのなけなしのガリオン金貨を賭けてもいいです」

「それはやめてやれよ」

チャリーリーのガリオン金貨は、スネイプ先生がシャンプーをするのと同じくらい価値があるものだとオスカーには分かっていた。トンクスが整理整頓するのと同じくらいの価値なのだ。

「とにかくオスカーはおかしいですよ。またレアが中に入ってないですよね?」

「それはちよつと…… もうあんまりできそうにはないな」

「何ですかそれ、レアの髪の毛がいくら短いからって無くなったわけじゃないでしょう？　むしろ最近伸びてる気がします」

「とにかく今はできないってことだ」

オスカーはもうポリジューズ薬で女の子に変身するのはできそうになかった。エストの言う通りに変な癖がついてしまうかもしれない。冗談交じりに喋っている間にクラリーナの方はオスカーと違って復調した様だった。クラリーナの目ははつきりオスカーの目をとらえていた。

「じゃあ聞いてもいいですか？　さっき私は答えましたから。そのオスカーのペンダントの中で……　何かありましたか？　オスカーが私に言える範囲でいいですから」

オスカーは押し黙った。さっき確かにクラリーナは自分自身の事を喋ってくれたのだ。その結果オスカーは目を合わせられなくなったが、確かにクラリーナにだけ喋らせるのはフェアではないかもしれない。だが、オスカーは自分がその時体験したことを上手く伝えられる気がしなかった。周りの誰にも、オスカーはそこであつたことを話してはいなかった。

「正直、言っても信じてもらえないと思えない」

「オスカーの言うことなら信じますよ」

「そう言うのじゃなくて、自分でも信じられないから……」

「例のあの人に会ったんじゃないんですか？」

またオスカーは押し黙った。彼に会ったのは確かだった。

「リドルにも会った。どうしてあんなに色々な人を集めることができたのか分かった気がした」

「例のあの人も……　ですか？」

クラリーナの目がオスカーをとらえていた。オスカーはさっきとは別の理由でクラリーナの目を見ることができなかった。オスカーはやっとわかった。自分は喋りたくないのだ。

「ああ」

「言いたくないんですか？　その、こういうこと聞くと卑怯ですけど、私以外なら喋れますか？」

オスカーはだんだんクラリーナと喋って分かってきた。誰かに伝えるべきだったが、オスカーはあそこであった経験を誰にも喋りたくなかった。誰かに伝えるべきなのに。

「俺が一番会いたい人に会った。それで俺はクラリーナにも……多分、ほかの誰にも喋りたくないんだと思う」

「どうしてですか？」

「喋りたくないから」

「なんでですか？」

オスカーはクラリーナが強情だと思った。少し、怒りさえ沸いてきそうだった。どうしてそんなに強情になるのか分からなかった。

「なんでそんなに聞きたいんだ？」

「オスカーの事だからです、それでどうしてですか？」

オスカーの頭や心にはやはり怒りがあつた。本当のところ、オスカーは怒っている自分に戸惑っていた。どうして怒っているのか分からなかったからだ。

「とにかく言いたくない」

「何ですか？ こんな言い方するとやっぱり卑怯ですけど。私が信用できないですか？」

やっぱりオスカーは混乱していた。自分にとって嫌だった記憶を喋りたくないのは、自分の中で理解できたからだ。言うのは自分が見限られそうで怖いからだ。

なのに、自分にとっていい事だとわかっている記憶を喋りたくないのはどうしてなのか。オスカーはそれを誰かに喋りたくなかった。

「クラリーナだけじゃなくて、他の人にも喋りたくない」

「その…… 怒らないで下さいよ、オスカー。大事なんですか？」

「大事？」

「だから大事だから喋りたくないんですか？」

ランチメニューをいつの間にかオスカーもクラリーナも食べつくしていた。オスカーはやっぱりクラリーナの目をみて喋れなかった。

「どういう……」

「私は、一年生の時の鏡の話とか、まね妖怪の話をおスカー以外と喋り

たくないです。それと同じですか?」

「ますます、オスカーは目をみて喋れなくなりました。両方の意味や感情で目を見れなくなった気がした。」

「それは……」

「カップルランチメニュー!! サービスのパフェになります!! ごゆっくりどうぞ!!」

「また見計らったかのように店員さんがやってきて、食器を片付けると同時に大きなパフェが置かれた。パフェのスプーンはなぜか一つだった。」

「ちよつと、スプーンをもう一つ下さい」

「カップルランチメニューです」

「いや関係ないでしょう」

「カップルランチメニューですので、スプーンは一つです」

「クラリーナが店員さんを問い詰めたが、スプーンは一つだった。多分、絶対出さないだろうことがオスカーには分かった。店員さんは足早に去っていた。」

「クラリーナ、食べていいぞ。さっきの話は考えとくから……」

「別に忘れてもいいですよ。やっぱり、オスカーと一緒に病院に行つてよかったです。前よりちよつとオスカーの事がわかった気がします」

「多分、オスカーはさつきクラリーナがやったのと同じような、ハツとした顔をしていた。クラリーナの方はパフェを食べようとしていたが、なぜかスプーンですくつて口に運ぼうとしても、口から一定以上の距離を保つてそれ以上近づけられない様だった。腕とスプーンをプルプルさせながらクラリーナが店員さん呼びつけた。」

「これスプーンに何か魔法がかかっているでしょう!!」

「はい、カップルランチメニューですので」

「食べれないじゃないですか!!」

「カップルランチメニューですので、お客様がされているような食べ方は想定されていません」

「はあ? どういう意味なんですか?」

困惑しているクラリーナをよそに、オスカーはだいたい店員さんの言いたいことは分かった。それに最近の自分を考えると先手を取った方が有利な気がした。オスカーはクラリーナの手からスプーンを取り上げた。

「え？」

「ほらこういうことだろ多分」

オスカーの手でクラリーナの口元にスプーンを持っていけば、何の抵抗も感じられなかった。

「カップルランチメニューですので」

「もう二度とこの店には来ません……」

店員さんはニコニコして店の中へ消えていった。赤くなっているクラリーナの顔をできるだけ見ないようにオスカーはスプーンを突き出していた。

だがどうもそれがよくなかった様だった。テーブルを挟むと距離があつたので、オスカーはクラリーナの隣から顔が見えないように、彼女の頭を見る形でスプーンを突き出していたが、髪からいつか匂ったミントの様な香りがしたし、何より視界が制限されているせいで、スプーンから伝わってくる感覚がより大きなモノになっている気がした。

やっぱりオスカーはどうも自分がおかしくなっていると思えなかった。本当に自分は閉心術を使えるようになったのか疑問だった。スプーンから伝わってくる、クラリーナの口の動きすら、オスカーにはキマイラと同じくらいの数が必要な気がした。

何か喋らないと不味い気がオスカーはしてきた。

「なあ」

「何ですか……」

「やっぱり…… 週刊魔女で見たからここに入ったのか？」

元々赤かったクラリーナの顔がもっと赤くなった気がした。クラリーナはオスカーからスプーンを奪いとった。

「何なんですか!! やっぱりオスカーの事なんか分からないですよ!!」

「おいちよつと、歯…… 歯に当たってるから!!」

クラリーナが凄いい勢いですくってスプーンをオスカーの口に運ぶせいで、何度もオスカーの歯にスプーンが当たっていた。浮かれた気分で暑い夏にアイスを食べたのと歯に何度もスプーンが当たるせいで、オスカーの頭はキーンとした痛みで襲われていた。

アイスとスプーンの痛みを耐えるオスカーの夏休みは始まったばかりだった。

ゴドリツクの谷

ドロホフ邸と同じで、大きな古い洋館は夏だというのに少し涼しくらいだった。

オスカーはミュリエルおばさんに捕まることなく、エストの手引きでプルウエツト邸に来ていたのだ。単に今日行くはずのバチルダ・バグショットあてに、手紙を送る予定だったのをエストが忘れていただけなのだが。

「出る前に気づいて良かったかも」

「今日送って間に合うのか？」

「いつでも来ていいって手紙には書いてあったんだけど、何かボケてて、だれがだれかわかんなくなるから手紙を当日に送って欲しいって書いてあったの」

バチルダ・バグショットはダンブルドア先生やミュリエルおばさんよりも年上なのだから、多少ボケていてもおかしくはないかもしれないなかつた。

ただ、オスカーからすれば、そのままゴドリツクの谷に行くと思っていたのに、エストの部屋に向かっていることの方が問題だった。

昨日のダイアゴン横丁で再確認したが、やっぱりオスカーはおかしかった。少し顔を見なかつただけなのに、もう四年も一緒にいたはずのエストの体を目が追いかけているし、どう考えてもおかしかった。

「オスカーはベッドに座ってて、あれ？ 便箋どこにやったのかな……」

「分かつた」

エストの部屋はオスカーの思った通りの部屋だった。本棚に入りきらない本や羊皮紙が色んな場所に置かれていた。机、ベッド、窓の棧、床、ベッドと壁の間まで、オスカーからすればどれがどれなのか分からないが、多分彼女に聞けばどれがどんな内容なのか答えてくれるはずなのだ。

学校のトランクは開きつぱなしで、大鍋や箒がそこから飛び出していた。その近くの壁にはエストのお気に入りクイディッチチーム、

チャドリー・キャノンズのリーグ成績が表示されるカレンダーがある。相変わらず、リーグ最下位を彷徨っているのがわかる。

手紙を書いているエストの机には、いくつか写真立てがあり、ウィーズリー家や、オスカーやクラナの様なホグワーツの知り合い、それにオスカーが見たことのある彼女の父親や叔父の写真があった。

オスカーはさつきまでの入り辛さとは別の理由でこの部屋にいたくなくなってきた。

「今日はミュリエルおばさんはいないのか？」

「何か、別のウィーズリー家の結婚式があるとか言ってたの。赤毛だからどれも同じだけどねとか笑ってたかも」

「エストは行かないのか？」

「そういう場所に大叔母さんと行くと変な服を着せようとするから行かないの。でも、チャーリーはただでこちそうが食べれるから行くとか夏休み前に言ってたかも」

エストの写真立てには、オスカーの見覚えの無い女性の写真があった。恐らく、若いころのウィーズリーおばさんやプルウエットの兄弟に見える三人と一緒に写っているその女性は、あんまりエストには似ていなかった。

「窓開けても…… 羊皮紙が飛ぶからダメか」

「別にいいよ。魔法がかかっているから飛ばないはずだもん。それにフレーキを呼ばないとダメかも」

「フレーキ？」

「ミュリエルおばさんがダイアゴン横丁のペットショップでいちやもん付けて安く買ってきたの」

フレーキ、ふくろうの名前だろうか？ オスカーはとにかく窓を開けることに決めた。何より…… この部屋に入ってからずっと感じてはいたことだが、この部屋はエストの匂いで一杯なのだ。エストが暮らしている部屋なのだから当たり前なのだが。

窓を開くと勢いよく風が入り込んで来た。扉が開けっ放しなので、風が良く通った。エストが指笛を吹くと大きな鳥が窓の棧に止まっ

た。

驚だろうか？ オスカーは鷲と鷹の区別はつかなかったが、レイブ
ンクローの紋章でよく見る姿によく似ていた。フレーキはオスカー
を相当警戒している様に見えた。これは珍しいことだった。オス
カーは大抵の動物に警戒感を抱かれないからだ。

しかし、一年生の時のルーンスポールを思い出して納得した。自分
の主人の傍に知らない人間がいるから警戒しているのだろう。

「バチルダに届けてね？ 帰ってきたらネズミか何かあげるの」

手紙を足に括り付けてもらったフレーキは、オスカーの方を睨ん
で、手紙の付いた方の足をオスカーの方に突き出した。まるでお前と
は違ってエストから仕事を貰った俺は偉いとでも言いたげだった。
オスカーはこの動物が好きになれそうだと思った。フレーキからす
れば別かもしれないが。

フレーキはそのまま窓から飛び立って、あっという間に点になっ
た。オスカー達が行くまでに手紙が届いているか心配する必要は無
さそうだった。

オスカーがベッドから立ち上がる前に、ポフっと言う音を立てて、
エストが隣に座ってきた。二人分の重みでベッドが沈み込んだ。オ
スカーはこれはダメだと思った。トンクスのせいでベッドにいい記
憶は無かったし、ただでさえ、エストの部屋はオレンジの様な柑橘系
の匂いで一杯だったのに、エストが隣に来ればなおさらだった。

「ねえ、ちよつと蘇りの石を見てもいい？」

「いいけど……」

オスカーが答える前から、エストの手が伸びていた。オスカーが胸
にかけていたペンダントをエストが取り出そうとして、エストの手が
オスカーの鎖骨辺りに触れた、距離が近かったし、自分の指より柔ら
かいであろう感触や、鎖や指輪と言った自分の体より冷たいモノが体
の上を動く感覚がオスカーにはダメだった。

「やっぱり書いてあるよね、ぼう、まる、さんかく、ちゃんと書いてあ
るの」

「死の秘宝？」

「そう。凄いよね、人間がやったこととか作ったものは人間がどうにかできるのは当たり前だけど、自然はそうじゃないもん」

確かに、この石は本当に凄い魔法の道具なのだ。それこそ、オスカーが持っていることがおかしいくらいのモノだった。魔法省とかで管理された方がよっぽど相応しいだろう。

「こう言うのがほんとにあると、何でもつと正しく伝わらないんだろうって思うよね？ 多分、作った人がちゃんと伝えてたら色んな事に使えるはずなのに」

「伝わらない？」

「そうでしょ？ 魔法も道具も作った人一人で終わったら、それで終わりだもん」

両手で蘇りの石を色んな方向へ傾けながらエストは満足そうにしていた。オスカーはエストのこう言う顔もダメだった。もう一つの問題が解けた時の様な顔もダメだったが、どうも最近のオスカーからすれば前よりもつとダメになっている気がした。

「じゃあ、ゴドリツクの谷に行こう？ 蘇りの石をほんとに持って、イグノタスの墓を見に行った人なんてエスト達が初めてかも…… あ、エストって言っちゃった」

「何かダメなのか？」

「今年はふくろうがあるでしょ？ それにもつと先になると、面接？」

とかもあるから、授業中はあんまり、エストはエストって言わないけど、時々出るから、普段も私？ にしようかなって」

「そうなのか……」

オスカーはなんだか寂しい気がしないでも無かった。エストが自分の事をエストだと言うのには、エストが自分を自分自身だと主張している証の様な気がしたからだ。

トunksがトunksと呼んで欲しいのと似たものをそこに感じていた。思えば、エストとトunksはだいぶ性格こそ違うが、あまりモノを片付ける事をやろうとしなかったり、話が時々すつ飛んで行ってしまったり、なんだかんだ自分を主張している所は、方向こそ違うが似ているのかもしれない。

「オスカーはどう思う？ 私の方がいい？ エストの方がいい？」

「え？ どうだろ……」

「どうなのだろうか？ オスカーからすれば、寂しい気もしたが、エストが自分からやろうとしているならそれでいいのではないかと思っただ。」

「やりたい様にすればいいと思うけどな。その方が俺もやりやすいし」

「じゃあ時々混ぜていくね。私、私…… うーん…… エスト、エスト、エスト……」

「何やらうんうんエストが言っていたが、オスカーはベッドの上で距離が近いことの方が問題だった。うんうん言っている暇は無かった。」

「ゴドリツクの谷に行くんじゃないのか？」

「そう、そうなの。ポッター家の跡地？ にも行きたいし、お墓も行かないといけないから、さっさと出た方がいいかも」

「準備は大丈夫なのか？」

「さつき万年インクとかはポシエットに全部突っ込んだから大丈夫？」

「俺に聞かれても分からないぞ」

「なぜ書いたら自分、それこそ数年から数十年は落ちない万年インクがゴドリツクの谷に必要なのかはオスカーの知るところでは無かった。」

「じゃ、行こう？ 夏休みにこういうお出かけは初めてかも？」

「煙突飛行で行くんだろ？」

「それはちよつと違うかも」

「は？」

「オスカーはてつきり暖炉飛行で行くのだと思っていた。しかし、エストは屋敷の外にオスカーを連れて行って、そのまま門の外、屋敷の外側までオスカーを連れ出した。」

「ね？ 魔法省は未成年が魔法を使ったら分かるけど、それは誰が使ったのか分からないって知ってた？」

「どうということだ？」

「未成年には臭いって呼ばれてる魔法がかかっているんだけど、それは未成年の傍で魔法が使われたことしか分からないの。だから、大人の魔法使いが未成年の傍で魔法を使っても、屋敷しもべさんが魔法を使っても同じように判断されるの。だからね、魔法使いのお家がいっぱいあったり、魔女が一杯いる村で使っても魔法省はわかんないの」「じゃあ俺たちが使ってもわからないってことか?」
「うん。だからね?」

エストがいきなりオスカーの腕を取ったので、オスカーはビクツとした。エストは珍しいモノを見るような目でオスカーの方を見てきて、もう一度、オスカーの腕を取った。

「姿現ししよう?」

「は?」

次の瞬間、バチツと言う音がして、オスカーの視界がゆがみ、まるで筋肉や骨や体のすべてが体の内側にある、存在しないパイプの中に押し込まれる様な感覚があった。

気づけばプルウエット邸は姿を消して、背後には田園風景が、目の前にはドロホフ邸の傍と似たような田舎の村があった。

「ほらね?」ゴドリツクの谷は魔法使いが沢山住んでるし、エストの家の傍で魔法を使っても、大人の魔法使いがいるって分かってるから、バレようがないの。杖を調べられたらバレちゃうけど」
「そうなのか」

では、自分の周りに魔法使いがいない人、つまり、マグル生まれの人でもない限り、その魔法は余り効果が無いのではないかとオスカーは思ったが、エストが姿現しの時に取った腕をそのままにオスカーを引っ張るのでそれどころでは無かった。

「これに書きたかったの」

「これって……」

二人の目の前に現れたのは、蔦に覆われて、敷地の中は雑草が生え放題の家だった。二階の一室の部分だけが中から爆発でもあったかの様に吹き飛んでいた。オスカーにも分かった、ここは歴史が変わった場所なのだ。

エストが万年インクを浸した羽ペンを持って立っている前には、木でできた立ち看板があり、こう書かれている。

『1981年10月31日、この場所でリリーとジェームズ・ポッターが命を落とした。』

『息子のハリーは「死の呪い」を受けて生き残った唯一の魔法使いである。』

『マグルの目には見えないこの家は、ポッター家の記念碑として、さらに家族を引き裂いた暴力を忘れないために、廃墟のまま保存されている。』

金色で書かれた文字の上に、幾重にも渡って魔法使いたちの落書きがされている。ハリーへの感謝やヴォルデモートの時代の終わりを喜ぶ書き込み、自分たちの名前やイニシャルを書いたもの、この場所や出来事を忘れないと書かれた書き込みもあった。

普通、落書きとはフィルチが嫌っていたり、ホグワーツでバレれば処罰されるように悪いモノのはずだったが、ここにある書き込みは暖かいモノに感じられた。

オスカーは思った。ハリー・ポッターはこれを読んだことがあるのだろうか。

「ほらオスカーも書いて」

「分かった」

「ほらここね」

右下の部分にエストがすでに書き込んでいた。『何かあったら何でも連絡してきてね 1988年8月3日 エストレヤ・プルウェット』と書かれている。エストが示している場所には、明らかに自分の名前くらいしか書けるスペースが無かった。なのでオスカーはエストの名前の下に自分の名前を書いた。

「これも書いたら、もうちよつと死の秘宝の話が広まるかな？」

エストはオスカーとエストの名前の左側に蘇りの石に刻まれている例のマークを書いていた。ちよつとした冗談なのだろう。

マークを書き終わった途端にエストはさつきと同じようにオスカーの腕を取って、歩き始めた。

「ほら、あの教会にイグノタスのお墓があるはずなの」

「わかった、別に俺は逃げやしないから」

「ほんとに？ でも、なんかオスカー夏休みの前からみんなの事避けてない？」

エストはオスカーの方を振り返りもせずと言ったが、オスカーの方はビクツとしそうなのを我慢するだけで精一杯だった。

「避けてないと思うけどな……」

「ほんとにほんと？ 別に開心術を使ってるわけじゃないのに、オスカー目を合わせてくれなくなってる？」

エストが振り返ってオスカーの目を見た。腕を組んでいるせいで、エストがいきなり止まって振り返れば一気に距離が詰まった。しかしオスカーは自分でも認める通り、おかしかったがそもそも何がおかしいか分からないので、エストにも相談しようが無かった。

じっと見てくるエストの目をオスカーはなんとかそらさずに見ることができた。むしろ、目だけに視線を集中した方が楽かもしれないなかつたが、今度は視点を集中したら集中したで、視覚以外の感覚が明確になってきてどうにもオスカーはむずがゆかつた。

「やっぱり、何かおかしいと思うんだけど……」

「そんなこと言われてもな……」

「レアとポリジューズ薬をやったから、中身も女の子になっちゃったとか？」

「おかしいだろ。それだとレアは中身が男になってるだろ」

「うーん、でもなんかレアはモノをはつきり言うようになってるし、結構あつてるかも」

「それは何か、昔の性格が戻るとかそう言うのだろ」

エストはぶつぶつ言っていたが、それよりやっぱり距離が問題だった。すぐそばにいるというだけでオスカーには大ダメージだった。腕を組んで相手の体に触れているというだけでもさらに痛恨のダメージだった。オスカーはもう自分が分からなかつた。

昨日、クラリーナが話していた、三年生の時のクリスマスの様になれはどうなってしまうのか、二年前の時の様に自分から誰かに抱き着く

などできるのか？　と言うか、みんなこんな感じなのだろうか？　疑問に思ったがオスカーには誰とそんな話をすればいいのか分からなかった。

「惚れ薬でオスカーの方がおかしくなっちゃったとか？」

「おかしくってなんなんだ」

やっと教会に向けて歩き出したが、エストは腕を離してはくれなかった。オスカーはクラリーナやエストに気づかれたのなら、他の二人やチャーリーにすら気づかれそうだと思ったし、エストやクラリーナの言う通り、どこかにこうなつた原因があるはずだった。二人はペンスを除けばオスカーと一番付き合いが長かったから、推測はもしかすれば自分より正しいかもしれないのだ。

「うーん。でも、レアと何かあっても、オスカーがなんかよそよそしくなる理由にはならないかも」

「よそよそしくって何なんだ」

「何か借りてきたふくろうみたい。フレーキも最初そんな感じだったかも」

「動物に例えられてもな」

「うーん……　すごく大きさに言うと、仲良くなるのを怖がってるみたい??　でも、オスカーはそう言うのをあんまり気にしないよね。一年生の時のオスカーが近いかもしれないけど、何か違う気がするし……」

仲良くなるのを怖がっている？　確かにルーンスプールの一件があつた時はそんな感じだったかもしれないなかつた。自分がいることで、エストや周りがけがをするのが怖かつたのだ。しかし、今は違うのは確かだったし、エストが言っている、そういうのを気にしないとは、クラリーナが言っていた、恥ずかしいことを普通に言うみたいなことなのだろうか？　オスカーはオスカーなりに考えてみたが良く分からなかった。

「お墓いっぱいあるんだね？　手分けして探す？」

「そうしよう」

教会裏についてエストがそう言った。オスカーからすると願って

もない提案だった。やっとオスカーはエストの腕から逃れることができたのだ。夏の昼間だったのに加えて、エストに腕を奪われていたせいで、オスカーは変な汗をかいていた。

墓地にはホグワーツで見たことがある名前がいくつもあった。アポットの様な有名な純血の一族の名前がいくつも見つかった。その中で、ひとときわオスカーの目を引く名前があった。

「エスト」

「イグノタスのお墓見つかった？」

「いや…… ちよつと来てくれ」

オスカーが見つけた墓の名前には見覚えのある名字が書いてあった。それに多分墓に刻まれた年代から考えても合っているだろう。

「確かに…… ミュリエルおばさんが先生は家族でここに住んでたっ
て言ってたかも」

「オーキデウス!! 花よ!!」

オスカーは杖から出した花を墓に供えた。墓にはケンドラ・ダンブルドア、そして娘のアリアナと書かれている。それに杖で掘ったのか自分の手で掘ったのかは分からなかったが、何かの書物からの引用文らしきものが刻まれていた。

『なんじの財宝のある所には、なんじの心もあるべし』

「お花だすのいいかも…… ダンブルドア先生のお母さんと妹さんだよね? お父さんはいないのかな? それに…… これ魔法使いの格言とかじゃないかも」

「違うのか?」

「聞いたことないし…… ダンブルドア先生って、半純血でしょ? マグルの偉い言葉とか知っててもおかしくないと思うし……」

半純血、昨日のおじいさんの話がオスカーの脳裏に蘇った。そして、アバーフォースの話もだ。アバーフォースの話が本当なら、ここに眠っているアリアナはマグルによって傷つけられたはずだった。そしてアリアナが亡くなった時にはダンブルドア先生とアバーフォースしかいなかったはずなのだ。つまり、二人のどちらかがマグルの言葉を墓石に刻んだのだろう。アリアナとケンドラの眠る場所

に。

「なんじのたからのあるところには、なんじのこころもあるべし……
どういう意味かな？　大切なものがある場所にあなたの心もあり
ますよ？　うーん……　だから大切なものは大切なところに置きま
しょう？　それとも宝がある場所に心があるから、すごいモノを宝に
しましょう？？」　わかんないかも」

「宝？　死の秘宝の話か？」

「流石に関係ないと思うけど……」

オスカーも考えていた。ダンブルドア先生は蘇りの石で失敗した
と言っていた。先生もこの石を求めていたことがあるはずだった。
宝とは何を指しているのだろうか？　死の秘宝？　それとも……
墓に書かれていたと言うことは多分、ダンブルドア先生は何が宝だっ
たのかを分かったのだろう。だからこの石が欲しかったのだろうと
オスカーは思ったのだ。

「さあ？　でもアバーフォースさんやダンブルドア先生がここに
眠ってる人を大事にしてるのは確かだろ」

「それはそうだと思うけど……　うーん……」

こういう会話をしている時や、目の前のエストが何かについて考え
ている時は、これまでと同じように喋ることができた。オスカーは流
石にどうして自分がこうなったのかを真剣に考えた方がいいと思い
始めていた。なぜなら、このままだとホグワーツでの生活はおろか、
夏休みすら乗り越えられるか怪しかったからだ。

この思考状態のエストに何を話しかけても大した答えが返ってこ
ないことをオスカーは知っていたので、他の墓を見て回ることにし
た。すると、さつきみた名前がこの墓地にもあった。二人の名前の下
にはさつきの墓と同じように、言葉が刻まれている。

『最後の敵なる死もまた亡ぼされん』

「いやはてのてきなるしもまたほろぼされん？　オスカーちよつと

歩くのが早いかも……　あ、そうだ……」

さつきまでうんうん言っていたはずのエストの声が後ろから聞こ
えて、振り返ればエストが杖を振るのが見え、ジェームズとリリーの

墓は花で一杯になった。オスカーはさっきの墓にあつた言葉よりも、こつちの言葉の方が気になった。

「これって死喰い人のよく言う……」

「これって死喰い人が言ってるのに……」

二人は同じタイミングで同じことを言ったので、思わず互いの目を合わせて笑った。こういうことなら一年生の時と同じような関係でいられる気がオスカーはした。

「多分、死喰い人が言ってるのとはちよつと違うよね？」

「違うって？」

「さっきエストの部屋でお話してたけど、魔法とか技術とかは伝わらないと意味無いよねって話してたでしょ？」

「してたな」

オスカーは今さっき一年生の時と同じようにいれそうだと思つたというのに、こういう得意げな顔を見ると、そういう気持ちは何処かに飛んでいく気がした。

「それが人間と動物さんが違ふところだよね？ お魚や鳥さんは、人間とおんなじ様に子供を残せるけど、でも子供のお魚は教えられなくても泳げるよね？ 鳥さんも教えられなくても飛べるの。人間も教えられなくても、歩いたり、食べたりはできるの。でも、人間はもつと色んな事を教えられるでしょ？」

「魔法とかそういうことか？」

「うん。もつと色々、だつて人間は私が…… エストが今こんなこと考えてるなつてわかるし、認識できるよね？ だから言葉にして

誰かに伝えられるし、こうやって石に刻んだり、羊皮紙に書いたりできるの。だからその人がいなくなつても、動物と違つて、その人のことがちよつとだけわかるでしょ？ 頭の中の事を全部出すことはできないけど、動物よりずつと色んな事を残せるもん」

それは、オスカーの胸元にある石と、たつた今、目の前に眠ってる二人が眠る原因を作った人物との関係で、一番オスカーが思っていた事かもしれない。彼には人間と動物を違えるその何かが一番必要だったかもしれない。

「でも、やっぱりハリーがかわいそうかも」

「ハリー・ポッターが？」

「だって、ハリーは大きくなったらなんでお母さんやお父さんがいないのって絶対思うと思うもん」

それはどうなのだろうか？ オスカーやレアは今は父親や母親

がいないも同然だが、物心が着くまでは少なくとも一緒にいたのだ。クラーナは姉と叔父しかいなかったはずだし、目の前のエストは父と叔父だけのはずだった。ハリー・ポッターがどこで何をしているのかは分からないが、彼は両方いないのだ。そういう時、何を考えるのだろうか。

「なんで…… 例の…… ヴォルデモートがいなくなったのか分かんないけど。ハリーのお父さんやお母さんがそのために死ん

じやってたら、すっごいことで、ハリーのためだけど、でも、それですっごいハリーの事を縛っちゃうでしょ？ ハリーがいい子

だったら…… いい子だと思うけど、そうならずとそれが強くなるかも、だって、この二人はハリーに色々残して伝えられるけど、ハリーはそれは出来ないもん。ちよつとズルいよね？」

「死んだ人には何も伝えられないってことか」

「だから、人間がすっごいんだし、こういう言葉に意味があるんだと思うけど。でも、ちよつとすっごいから、その…… 逆にハリーは大変かも」

それは事実だったし、エストが言った様な事実があるからこそ。夏休み前に起こったことにはこれ以上ないくらいの価値があるに違い無かった。もしかしたらあれはオスカーの頭の中だけの出来事だったのかもしれないが。

さっきの話をこともなげにエストは言っていたが、ハリーが将来どう考えるかなどオスカーは考えもしなかった。これも育ったときに母親がいないエストだから考えられるのか？ クラーナも同じように考えるのだろうか？

オスカーが考えていると、エストは何かを見つけたのか、オスカーの手を握ってそのまま引つ張って行った。オスカーはこういう話の後だと、この夏休み悩んでいる様な状態に自分がない事が分

かった。

エストに連れられるままに墓地を歩けば、この墓地にある墓の中でも一番古いのではないかと言う墓が見つかった。何百年もの風雨に晒されて、形も色も大きく変わっていったが、確かに石と同じマークがあった。名前もほとんど擦り切れて読めなかったが、イグノタスという名前が分かっていたらおぼろげながらその文字の輪郭がわかる。

繋いでいる手が湿っぽかった。それは暑いわけでも、オスカーが緊張しているわけでも無かった。繋いでいる相手が緊張しているのか、気分が高ぶっているから湿っぽいのだろうとオスカーは思った。

「イグノタスがここに住んでたのも、ダンブルドア先生たちやポッターの人達がここに住んでたのも偶然じゃないかも、おとぎ話の石を持ってここに來てるのも偶然じゃないかも」

「そう思ってるならそうなんじゃないか？」

そう言った後で、エストの顔を見てオスカーは不味いと思った。さつきはエストは言いたいことを言っているだけなのに、オスカーはまずいとは思わなかった。今と一体何が違うと言うのか？　こうなると手を繋いでいるのも、イグノタスの墓の方を見ずに真っ直ぐオスカーの方を見てくる、こういう話をする時に光って見える紅い眼やまつげがダメだった。

「三人兄弟のお話は好きなの」

「チャーリーの次くらいには知ってる」

「死じゃなくてもいいけど、自然とか人間がどうにもならないものに立ち向かっていくのがすごいと思わない？」

「どうにもならないもの？」

「そうでしょ？　昔は病気を治す方法も、傷を治す方法もわかんなかったもん。まず立ち向かおうって思うのがすごいよね」

「そりゃそうだけど……」

オスカーはあんまりエストに集中すると不味い気がしていたので、話の内容に集中しようとした。多分、三人兄弟の話に合わせて喋ろうとしているのではないだろうか？

「でも、一人じゃどうにもならないでしょ？　だから、他の人とか自分の後の人に出来たこととか出来なかったことを伝えたりすればいいし、やろうと思えば、本の中とかから、昔の人がどんなこと考えてたか読むことができるでしょ？　そうしたら一人でやるよりずっと色々できるはずなの」

「蘇りの石のこと言ってるのか？」

さっきの立ち向かう話が杖の話であるのなら、今度の話は二人目、蘇りの石の話のことなのだろう。まだ、談話室で話を聞いた時よりわかりやすいとオスカーは思った。

「そう。でも、どうにもならないものに立ち向かおうと思って、いろんな人とか、過去とか未来の人と頑張っても、すぐにはどうにも出来ないから、頑張り続けましょうって言うてると思ってるの。どれも、やりすぎたり、手段が目的になってたらダメかもしれないけど、ちゃんとやればすごいいいことかなって」

「それはそうだな、やり続けるのは難しいけど」

オスカーが一番気になるのはそこだった。誰かが何かをする時に、一体どこから溢れるエネルギーが湧いてくるのだろうか？　オスカー自身も何かをやらないといけないと思ったり、したいと思う時、それはどこから湧いてくるのか？　オスカーが思うのは、それは自分達を縛っているモノから生まれている気もした。

「だから、とりあえずバチルダに会いに行かない？　もしかしたら、ダンプルドア先生よりいろんな事を知ってるかもしれないもん」

「魔法史を書いている人だから知ってるだろうな」

オスカーは気の利いた返しなど返せなかった。エストと談話室や色んな場所でこういう話をするのはオスカーは好きだったが、いつも理解しようと努めるのが精一杯で、彼女が伝えようとしている事をどれくらい理解できているのか分からなかったし、何より、何を返せているのか分からなかった。彼女がさっき言った死人には何も返せないのと同じく、オスカーも何も返せていない気がした。

何より、どうしてエストはオスカーにこういう話をしてくるのだろうか？　自分以外にもこんな話をするのだろうか？　クラーナが

言った様にそれは彼女にとって大事なのか？ 誰かにこうして自分と話している事は言いにくいことなのか？ オスカーは段々と自分が感じていることも、考えていることも複雑になっていて、自分でもよく分からなくなってきた。

「ああ、エストレヤ？ セントレアだね？ よく来たね。お前さんの驚は賢かったよ」

「エストレヤなの。バチルダさん。オスカーも連れてだけど大丈夫だよね？」

「若いもんはいくらいてもいいよ。昔は色んな魔法使いが来てくれたんだけどね、戦争が始まった後はみんな来なくなっちゃったよ」

バチルダ・バグショツトの家は本と本と本で一杯だった。バチルダについて、二人は本だらけの家の中を進む。古くなった羊皮紙やインクの匂い。それに老人特有の匂いがしていた。

ただ、家自体はどこか埃っぽくオスカーは感じたが、不潔なわけでも無かったし、暖炉や家の中にたくさん置かれている蝋燭が魔法の炎をともしている、カーテンが閉め切られて日の光が入らないはずなのに部屋は明るかった。真夏の閉め切った家で火を焚いているのに暑くないのがオスカーは不思議だったし、いつも暑くてうだりそうな占いの学の教室にもこの部屋にかかっている魔法が必要だと思った。

ひじ掛け椅子に座ったバチルダは、オスカーとエストにソファアに座る様に言った。

「それで…… ええ…… エストレア？ セントレア？ は何を聞きにきたんだったかね？」

「エストレヤなの。それだと、エストとレアの名前が混ざってめんどくさいの」

やっぱり、彼女はボケているのか何なのか、あまり頭ははつきりしていない様にオスカーにも感じられた。

「ああ、それでセントレアは何を聞きにきたんだったかね？」

「もうセントレアでいいの。エストが聞きたいのは、マーリンでも誰

でも良いけど、そういうえらい魔法使いとか魔女って何か一緒のところがあるのかなって、聞いたかったんだけど」

エストの言葉を聴くと、それまで半分濁っていたバチルダの目が少し澄んだ気がオスカーはした。次にでたバチルダの口調にはさつきよりも力が感じられた。

「セントレヤ、それであんたは歴史に出てくる事実を聞きたいのかい？ それとも私の考えを聞きたいのかい？」

「え？ どっちもかも、どっちも聞きたいけど……」

エストは困った顔でオスカーの方を向いた。バチルダの目はまたさっきの濁りが酷くなっている気がした。オスカーは魔法薬でも使わない限り、そう長いあいだ、バチルダからちゃんとした情報を貰うのは難しいのではないかと思った。エストがオスカーの耳元でささやいた。

「どうしたらいいと思う？」

「どっちかに絞った方がいいと思うけどな、多分、長い時間聞くのはバチルダさんの体力的に良くないと思うし……」

「じゃあ、バチルダさん、バチルダさんの見解？」 を聞きたいかも

「そう…… メントレヤ、聞きたいなら私は教えるが、勘違いはしてはいけないよ」

オスカーは思った。このバチルダ・バグショットの濁った目の向こう側に、ダンブルドア先生がするような、もしかすれば、先生よりも鋭敏な知性の光がある気がしていた。

「私たちは、歴史の事実を拾いあげる。事実から歴史の意味を知ろうとするね…… それはほとんど間違っている。レントレヤ…… あんたも思うだろう？ その時代の魔法使いたちはこう考えていたから、こうする必要があつてこれをやった。こうしないといけなかったから行動して、その結果として歴史が生まれたってね。それは間違ってるんだよ。歴史の糸はもつと複雑で単純に紡がれているんだ」

オスカーとエストはお互いに顔を見合わせた。さっきまでボケているような、違う場所を見ているような視線と喋り方だったと言うのに、彼女の言葉は論理と確信に満ちていたからだ。

「それで…… エストレア？ どこまで話した……？」

「歴史をみんなは勝手に色んな意味があるって思ってるけど、もつと複雑か単純なんだよってどこまで？」

「ああ…… エントレア…… もし、歴史やそれを作っている人を読み解きたいなら、本当の事実だけをその目で見ないといけない。わたらの目は歪んでいるんだよ。本当の事実を事実として見れる人間はほとんどいないんだ。人の顔を画家が描くだろう？ その時、人の顔は線と色と明るさとして見ないといけない。そうしないと、線と色と明るさじゃなく、例えばセントレアの横に座ってる男の子の顔に見えるのさ、そうなるって絵は描けない。そうしないように、歴史も人も本当の事実だけを見ないといけない」

「どう言う事なのだろうか？ オスカーはエストがほとんど暴走している時の会話や、伝える気がほとんどない時のトックスの話と同じくらい、バチルダの話が理解できなかった。そもそも彼女が一体どれくらい正気で話しているのか、判断がつかなかった。」

「確かに、そう思ってるからこうだってみんな思ってるかも、それでバチルダさんは凄い魔法使いや魔女はどんな風な考え方とかしてると思ってるの？」

「セントレア…… 歴史と人を読み解くなら……」

「バチルダさん、そこはさっき話したの。それで凄い魔法や魔法使いはどんな風な考え方とかをして凄いことをやったと思ってるの？」

オスカーは果たして、エストが聞きたいと思ってることをバチルダが答える事は難しいのではないかと思つた。虫食いだらけの巨大な辞書から情報を抜き出すのは、いかにエストでも難しいとオスカーは思うのだ。

「エストレア、人間は動物の種類や葉草の種類のように分けることはできないんだ…… ホグワーツには人間を分けるための道具があるだろう？」

「組み分け帽子のこと？」

「そう…… はるか昔からある優れた魔法だが…… エントレア、あの魔法は優れているが完璧ではないだろう？」

「それはそうかもしれないけど……」

エストはバチルダに何を聞きたいのだろうか？ オスカーにもそれは疑問だった。彼女は新しいことをバチルダに聞きたいのだろうか？ それとも彼女自身が考えている事を裏付ける様な事を聞きたいのだろうか？

「優れた魔法使いや魔女がどうしてそうなったのか、魔法力があつたのか、おつむが良かったのか、それとも時代がそうさせたのか、色んな魔法使いがそれを考えても、共通することは見つからないんだよ。わしもそう思う。優れた魔法使い特有の考え方や性格も無いだろう」「じゃあ何にも分からないってこと？」

エストが困った様にそう言うと、バチルダはさっきまで開いていた少し白く濁った眼を閉じて、しばらく喋らなかつた。オスカーはバチルダが寝てしまったのかと一瞬思ったが、何かを思い出している顔にも見えた。

「バチルダさ……」

「昔を思い出すけどね。昔、この谷にセントレアが聞きたいような、光る若者が二人いたよ」

エストが言いかけたがバチルダはまた喋り始めた。目は開いてはいなかつた。

「その若者二人は谷を出て行った後に色んな事をした。だからわしも考えていた。あの若者二人は他の若者と何が違ったのかとね」

若者が二人、バチルダは明らかに自分で会ったことのある人物について話していた。バチルダ・バグシヨットはダンブルドア先生より年上だったが、それでも歴史に名前が残る様な人物、それも魔法史を魔法使いの歴史を書き続けている人物がそう思う人物。そんなに選択肢は多くは無かつた。

「わしが優れた魔法使いや魔女に共通するものがあるんなら。それは色んな激しさだと思ってるけどね」

「激しさ？」

激しさ？ オスカーにもそれは分からなかつた。何を指しているのだろうか？

「自分は誰かにはなれないからね。自分の事を比べるのは難しい。自分がどれくらい感覚や考えを持つてるのかは分からない。ましてやそれがどれくらい違っていて激しいのかなんて分からないね」
「自分？」

「わしは色んな事を知りたかったからね。魔法界について色んな事を書いた。それは知りたいって言うのが他の人より激しかったのさ。多分セントレア、あんたにもわしはこれに関しては負けてないと思うよ」

「知りたいと思うことが激しいと言うことなのだろうか？ 他の人よりも、知りたいと思う感覚や考えが強いと言うことなのか？ オスカーには何となく、いつものエストや、記憶の中の「なんで？」ばかりを言っていたレアの顔が浮かんできた。

「セントレアたちの傍にもいないかい？ 嬉しいことや悲しいことを自分より激しく感じてそんな人間を？ 他の人のそう言った変化を早く読み取る人間を」

「どうだろうか、オスカーは三年生の時のトンクスが何となく頭に浮かんできた。彼女は劇をやるときに誰より楽しそうだったし、他の誰かに何か起こった時に他の人より早く反応していた気がした。

「色んな激しさがあるだろうけど、一番強烈なのは単純に感情だろうね。もちろん、歴史の中の人物も誇張はあるだろうけど、激しい感情を持ってたのは本当だろう」

感情？ どういうことだろうか？ 何に対する感情なのか。

「セントレア達の年くらいに一回目の悩みが来るんじゃないかい？」

自分が矛盾してるのがおかしいと思ったり、世の中が矛盾してるのがおかしいと思ったり、大事な物が重なって考えられなくなったりね、そう言った事を激しく感じる人もいるだろう？ 感じたり考えたりする強さは人によって違うのさ、絶対に皆同じじゃない」

それは誰だろうか？ オスカーは自分自身も含めて、色んな人の顔が浮かんできた。自分とは全く違う人が、自分と違う考え方で悩んでいたりにしていたのを知っていた。周りの同年代の人間も、父親や母親の様なオスカーよりずっと年上の人間も、ダブルドア先生のような人

でさえだ。

「色んな人が歴史の中に現れて消えていくけど、その人たちが残した変えようのない事実が、その時生きてた人の強烈な感情をしめしてると思うね。そういう事実を残せる人間は、他の人より、自分や世界を知っているものさね」

それを聞いて、オスカーの脳裏に最初に出てきたのは、ずっと石の中にいた人物だった。彼は色んなモノを知らなかったかもしれないが、もしかすれば他の人よりずっと魔法界の色んなモノが見えていたのではないのだろうか？

オスカーは覚えていた。彼がホグワーツにいる間感じていたであろう感情を。どうして世の中はこうじゃないのだろうか？ どうしてこれが許されるのだろうか？ こうすれば上手くいくのにどうしてしないのか？ どうしてこの人たちは頑張らないのだろうか？ それは明らかに邪悪では無くて、公正で真摯に感じられたのだ。いま思い返せば、それはどこか空恐ろしさがあった。

「もし自分の中にそれがあるんなら、大事にすることだね、エストレヤ。それに負けなければ、もつと世界と自分を歪まずに見れるはずだよ……」

バチルダがほとんど眠った様にそれを言うのを聞いて、思わずオスカーはエストの方を見た。エストは口を真一文字にして、バチルダの開いていない目を見ていた。オスカーは思った。負けるとはどういうことなのか。もし、負けたのなら、自分やエストはどうなるのだろうか？

「バチルダさん寝ちやったの？」

エストがそう言っても、バチルダは寝息を立てるだけだった。オスカーはまだバチルダが言ったことを考えていた。自分は最近何に戸惑っているのだろうか？ バチルダが言っていた事は何かのヒントの様な気もした。

「起こさない様にした方がいいかもな」

「そうかも。ちよつとこれ置いていこうかな」

「なんだそれ」

「百味ビーンズ」

オスカーは思った。唐辛子やタバスコなんかの味が出てしまったら。もう魔法史の改訂版は出版されないうちになっちゃうのではないだろうか？ エストはお礼らしき手紙をササッと書いて百味ビーンズと一緒に、棚の上にある沢山の写真立ての近くに置いた。写真立てには色んな人物が映っていたが、やけに顔立ちが良く、左右の目の色が違う様に見える少年にオスカーは少し目をとめた。

二人はお互いに黙ったまま、バチルダの家を出て、ゴドリツクの谷を歩き始めた。外の太陽は夏のせいもあって、まだ沈むには時間があつたし、星が見えるには時間がかかりそうだった。

エストは来た時の様にオスカーに喋りかけてはこなかったし、腕を組もうと言ってくることも無かった、オスカーは隣を歩くエストを見ながら、今日姿現しをした場所に向かっていった。多分、オスカーがちゃんとその方向へ歩かないとエストは適当な場所にでもついてきそうだった。真剣に考えている時、彼女に言葉が届かないことをオスカーは知っていた。

「ねえ、オスカー」

「なんだ？ そろそろ姿現しした場所だけ……」

「オスカーは自分は人とちよつと違うと思う？ 自分の事」

それはどうなのだろう？ さつき言っていたバチルダの話にもあつたが、それはそんな簡単には分からないのではないだろうか？ ただ、自分が他の人とは違う経験をしていることくらい、オスカーは分かっていた。

「まあ、ちよつと違う経験とかはしてるかもな、もしかしたら考え方も人と違うかもな。エストとかトックスみたいなのも近くにいますし」

「じゃあトックスは他の人と違う？」

「どういう意味なのだろう？ トックスが他の人と違うことを言えればいいのか？ そもそもエストは何を意図してそう言ったのだろう。『そんなに色んな人と喋ったわけじゃないからアレだけど、人とは違うことを言うのはそうさ。七変化だし』」

「七変化だから人と違うと思うの？」

「そうじゃないだろ。七変化だから考えるって言うか…… 言っていないのか分からないけど、例えば俺の父親が死喰い人だから人と違うことを考えるし、トunksだったら、叔父さんと叔母さんがそうだからそういうこと考えるだろうし、人と違ってるから違うんじゃないかな…… なんか上手く説明できないな」

エストが不思議そうな顔をしているとオスカーは思った。それに何故か夏休みにエストと喋ってから、やたらエストとの比較にトunksが出てきている気がした。エストがエスト呼びをやめようかななどと言ったせいかもしれない。

「じゃあ…… オスカーから見ても、エ…… 私は他の人と違ってると思う？」

「違ってるだろ。モノの見方とか、何かするときの雰囲気とか、三年生の時のクリスマスに言ったような……」

そこまで言っても、オスカーはちょっと不味いと思った。エストは首を少し傾けてこつちを見ていたが、オスカーはどうもやっぱり自分がおかしい気がした。これまでならもつと何も考えずに色々言えたはずだった。オスカーは自分が誰より、エストが他の人と違うことを知っていると思ってるのだ。それが今どうして言えないのだろうか？

「だから…… 分かるだろ？」

「分からないかも」

なぜかエストは距離を詰めてきて、姿くらしするときと同じく、腕を組んで来た。オスカーはますます追い詰められている気がした。

「ねえ、オスカーはわ…… エストのこと、他の人と違うと思う？」

「違うと思う」

「何がどう違うと思う？」

オスカーはこの問いが、さっきまで聞いてきた内容と違う意味を孕んでいる気がした。

「全部」

「全部って何？」

「だから色々……」

「もつと特定して聞いた方がいい？ エストとモリーおばさんだと何

が違うの?」

「年齢」

「やっぱりオスカーなんかおかしいかも」

腕を組める距離でエストがオスカーの目を覗き込んだ。閉心術を使えるはずのオスカーは、多分、開心術とは違う理由で心は乱されていた。

「ねえ、じゃあクラリーナとエストで何が違うと思う?」

「杖の大きさ」

「レアとエストで何が違うと思う?」

「髪の長さ」

「トングスとエストで何が違うと思う?」

「ドジかそうじゃないか」

オスカーはどうすればこの場から逃げられるのかを考えていた。しかし、どう考えて逃げられなかった。ただ、どうすればエストからの質問攻めを止められるのかくらいは分かっていた。分かっているのを実行できるのかは全く別の問題だった。

「ねえ、ほんとにオスカーおかしくなっちゃったの? 前のオスカーと今のオスカーで何が違うの?」

「何も変わってないだろ」

それは明らかに嘘だった。明らかにオスカーは去年や一昨年と同じような言動や行動ができなくなっていたし、そもそもこういう状態でちゃんとした考えはできない気がした。

「オスカーはいつからおかしくなったの?」

「だからおかしくなっていないって」

これは明らかに不味いとオスカーにも分かっていた。自分でも変わった理由を見つけられていないのに、その理由をエストやクラリーナや他の人に先に見つけられるのは不味いと分かっていた。なぜ先に見つけられると不味いのかはオスカーにも分からなかった。

「でも決闘トーナメントの時とかまでは普通のオスカーだったよね……?」

「いやだから、普通のオスカーなんだけどな」

「レダクトとボンバーダくらいは違うと思うけど……」

本当にこの会話を止めないといけない。オスカーはそう思った。それにこんな夏の日に密着されるのも不味かった。エストの思考を止めるにはかなりのインパクトが必要なことをオスカーは知っていた。

「エスト、俺がおかしいのはどうでもいいけど、エストが他の人と違ってることくらい知ってるから」

「え？」

オスカーは選択した。このままエストに長々と捕まって、自分の事を考え続けられるのと、一瞬我慢するのとどっちに分があるのかを比べて選択したのだ。

オスカーは目を閉じて、息もしない様にして、プルウエット邸の門を頭に思い浮かべた。視覚も嗅覚も無くなれば、触覚に神経が集中するのは仕方なかったが、少しだけだと体に言い聞かせた。

「聞かれれば答えるけど、聞かなくても、人とは違うことを感じて考えてるって、他の人より知ってるから」

「オスカー？」

できるだけ自分の体に引き付けないように、オスカーは両手でエストの肩に手を回した。さっきのイグノタスの墓でのエストの手の様に、オスカーは手に汗をかいていることがわかった。エストはオスカーと違って、オスカーの体が触れてもビクツと体を震わせる様な事も無かった。

「他の人とは違うし、俺もエストの事を他の人と違うって思ってるから。だから、その…… とくべ……」

クリスマスと同じような事を言おうとして、途中でオスカーは怖くなってきた。別にエストが拒絶しているわけでもないのに、そして言い切る前に向こうから思いつきり抱き着かれてしまつてオスカーは何も考えれなくなった。息を止めようとしたはずだが、喋っていたせいで空気を吸い込んでしまい、オレンジの様な香りがした。

感触をできるだけ遮断しようとしながら、オスカーは姿くらましました。オスカーは姿くらましました。どうして

てクラリーナとエストが喧嘩することになったのか、どうして朝までオスカーが動けなかったのかを忘れていた。

オスカーの夏休みはまだ始まったばかりだった。夏休みがこれまでのどれより長くなりそうな事をオスカーは完全に理解しつつあった。

マツキノン邸跡

違う二人との二日間が終わって、お昼前からオスカーは頭を抱えていた。

オスカーは夏休みが始まる前から薄々気づいていたが、こんなにいつもの調子で喋ったりすることができなくなると思っていたいなかったのだ。

しかし、誰かに相談しようにも、ペンスに聞いても心配するだけだとオスカーには分かっていた。では誰に相談すればいいのか？ オスカーは女性を除いて顔を思い浮かべた。

キングズリー？ どうなのか、オスカーはキングズリーがこんなことで悩む少年時代を送っていると思えなかった。チャーリー？ ドラゴンの事しか考えていないのはオスカーが一番分かっていた。多分、喋れば動物に例えて笑われるに違い無かった。

そもそもオスカーは同年代で同性の友人がほとんどいないと自覚していたが、こんな時にそれがあだになるとは思っていなかった。一番近い友人が人間に興味が無さそうなのもダブルパンチだった。

もう少し年上に絞って考えてみても、あんまり良い案はオスカーには思いつかなかった。ウィーズリーおじさん？ 話せば、いつの間にかウィーズリー叔母さんやエストに伝わっている気がした。テッド・トックス？ こっちはもっと簡単にトックスやトックス先生に話しそうだった。トックスと同じように簡単にドジを踏んで口を滑らせるのが想像できた。スネイプ先生？ もう論外だった。考える意味すら無さそうだった。あの先生がそんなことで悩んでいると思えなかったし、悩んだことがあったとしても、それを解決できた様には見えなかった。

広間に座って、両手で顔を覆いながらオスカーは考えていた。考えるに考えて、やっといいいアイデアが浮かんだ気がした。

「そうか、ビルに聞けばいいのか」

「ビルですか？ チャーリー先輩のお兄さんの？ 何を聞くんですか？」

「何って…… いつの間に着いたんだ？」

いつの間にかテーブルを挟んで向こう側にレアが座っていた。煙突飛行の音も暖炉からオスカーがいるところまで歩く音も、オスカーは聞き逃していたらしい。

「いつって…… 今来ました。でも暖炉から出たらオスカー先輩が頭を抱えて机に突っ伏してたので…… それでオスカー先輩は何を聞くんですか？」

去年の一年でレアの雰囲気が変わったとオスカーは思っていたが、また変わった気がした。髪が前のレアとクラリーナを足して二で割ったくらいの長さになっていたのもあったし、以前の自信の無さそうな顔や時々出てくる気の強そうな顔でもなく、リラックスして笑顔だった。

「男でしか喋れない話？ 髪が伸びたのか？」

「男の人同士じゃないと喋れない話ですか？ あんまり、オスカー先輩がそういう事を話しているのは想像できないです…… はい、髪は伸ばしてみました。行く前にちよつと伸ばしてみてもいいかなって思っ。どうでしょうかオスカー先輩？」

どうですかと聞かれて、オスカーはぼうつとレアの顔を見ていた。多分、髪が呪文で切られてから、一度も行っていない家に行く前に伸ばしたと言うことなのだろう。そういう風に考えたにも関わらず、こつちを見て、屈託なく笑っているのを見ると全然別の方に頭が行ってしまいそうだった。

「雰囲気変わったと思うけどな。ホグワーツに行ったら、みんな誰か分からなくなるんじゃないか」

「雰囲気…… ですか？ 具体的にどの辺が変わりました？」

オスカーはもう何となく今日も一筋縄では行かない気がしていた。どうして自分は連続でみんなと会う予定を入れてしまったのか。せめてインターバルとして間に一日入れるなんて事を考えなかったのか、オスカーは予定を組んだ自分を少し呪い始めた。

「言っても怒らないよな？」

「ボクがオスカー先輩に怒るなんてほとんどないと思いますけど」

……」

「いや、何となくレアの印象が凄い短い髪で、ちよつと自信なさそうにしてるか、物凄い強気であるかどつちかの印象だったから、そのくらの髪で笑つてると、明るくて柔らかい感じに見える……？」

言つた後で、レア自体の印象が変わつたのもあるかもしれないが、自分自身のレアの見方が変わつていのではないかとオスカーは思った。クラリーナやエストを見たときに、これまでとは違う見方をしている気がオスカーはしていたし、レアに対しても同じ様な気もした。テーブルが距離を保つてくれているのがオスカーはありがたかつた。

「オスカー先輩、ボクを褒めても何も出ないですよ」

「別に何もくれなくて大丈夫だぞ」

「じゃあボクからちよつとお願ひしてもいいですか？」

「ここならペンスがいるから何でも出せるぞ。流石にファイア・ウィスキーを一樽分とか言われると困るけど」

オスカーは何となく、いつも通りに喋ることができている気がした。こうやって物理的な距離を置いたレアが相手なら、エストやクラリーナの様に見破されないで乗り切ることができているのではないかと、ほとんど見えない光明をオスカーは見つけたそうとしていた。

喋り始めたレアはさつきまでの雰囲気では無く、オスカーが一番喋つたことのある、ちよつと自信が無さそうな雰囲気をしていた。

「あの…… その…… 二人でいるときだけでいいので……」

「何だ？」

オスカーは少しだけ自分の特性がわかつた気がした。多分、頼られたり、お願いされるのに自分は弱いと思つたのだ。次に何をレアが言つてもオスカーは大体OKと言つてしまう気がしていた。

「先輩の事を呼び捨てでも良いですか？ 前に一回それでもいいって言つてもらいましたけど、その時はボクが断つてしまつて……」

「それは大丈夫だけどな、エストとかクラリーナもそう思つてるだろうし……」

「それは先輩だけで大丈夫です…… あと、その、時々、その、強い口

調になつても大丈夫ですか？ それは、何とかだ!! とか、そういう感じです。あの……それが出るたびに、からかうのはやめて欲しいですけど……」

必死で言うときに出てくる口調の事だろうとオスカーは思った。できればそつちをもつと出した方がいいのではないかとオスカーは思っていたし、エストやトックスの様に自分をもつと出せばいいとオスカーは思っていた。

「いいんじゃないか。俺がお姫様完全復活って言わない様に努力すればいいんだろ？」

「だからそれをやめ…… やめてって言ってるん…… です」

オスカーはテーブルのおかげで距離があるせいか、この夏休みで一番普通に喋ることができて安心していた。普段の調子で喋れば大丈夫だとオスカーは自分に言い聞かせた。

「やたら来るのが早かったけど、昼はもう食べたのか？」

「あ……忘れてました…… 早く行った方が…… その……」

レアのテンションや表情の移り変わりがオスカーは早いと思った。最初は雰囲気が変わったと思っていたのに、今度は一年生や二年生のころの雰囲気に戻っている様に感じられたのだ。

「ペンス、ちよつと早いけど出してくれ」

「かしこまりました」

ポンと言う音と一緒に、オスカーとレアの目の前にサンドイッチとバタービールが出てきた。オスカーは安心した。まさに実家の安心感だった。相手の口にはしか持っていない魔法がかかったスプーンも、攻撃してくるメニュー表もここには無いのだ。そして、この広間のテーブルは十分に大きかった。ダイアゴン横丁とは大違いだった。オスカーはもしかすると生まれて初めて、自分の家の大きさや先祖の財産に感謝したかもしれない。なかった。

「ほら俺もまだだし、食べてから行けばいいだろ。向こうでなんか食べる予定とかあるんだったらあれだけど」

「考えて無かった…… じゃあ、その、そつちに行ってもいい……」

「いきます。オスカー先ば…… オスカー」

「は？」

サンドイツチを口に入れかけてオスカーは固まった。一瞬でオスカーが感謝した先祖の遺産は何の役にも立たなくなっていた。オスカーが何か言う前にレアはサンドイツチが乗った皿とバタービールを持って、オスカーの隣に座っていた。ダイアゴン横丁の一件よりよっぽど距離は近かった。オスカーは自分に言い聞かせた。ここには冷たいスプーンとパフェは無いのだと。

「その…… オスカーせん…… オスカー、ボク好きです」

「何？ 何が好きだった？」

オスカーは一瞬、頭が空っぽになっていた気がした。レアはサンドイツチを食べながら何を言っているのだろうかと考えていた。レアが近くに來たせいでカモミールの香りがした。

「あの…… オスカーせ…… オスカーの家が好きです」
「家？」

さつきからオスカーは自分がただの間抜けか何かになっている気分だった。自分が返している言葉全てがオウム返し疑問形になっている気がしたのだ。

「その、この家はホグワーツと違って静かだし、いつ来ても知っている人しかないから…… それにどの部屋も広くて暖かくて…… どこに行っても明かりが灯いてて……」

「まあペンスがいるし、いつもはみんなで一氣に來るからだろうな……」

オスカーはレアの言っていることが新鮮だった。オスカーがペンスと二人になってからホグワーツに入るまで感じていた事とまるで逆だったからだ。

この家はオスカーにとって、暗くて、無駄に広く、嫌な沈黙だけが満ちている場所だったからだ。それが見たり感じたりする人が変わると、そう捉えられると言うのがオスカーは不思議だった。

「ボク、夏休みとかクリスマスにここに來ると、ホグワーツよりよく寝られるって言うか…… ホグワーツの寢室は…… レイブンクローの寮は塔だから風通しは良いんだけど…… 他の人がいるからずつ

と開けとくわけにいかないし…… それに明かりを付けたままにはできないから……」

「ここなら無駄に部屋の数があるから、部屋で寝るときに何をやっても大丈夫だな。寝たいならいつでも泊まれるぞ」

「と、泊まるですか？」

「いや、今日は流石にちよつとアレだな」

「で…… ですよね……」

明日の予定を考えてオスカーは冷静になった。流石に一人でレアを家に置いてロンドンに遊びに行くわけにはいかなかったからだ。

「それで…… その…… 家の話、なんですけ…… なん…… なん…… だけど…… ここでの家って言うのは、確かに物理的な家もそうだけど、家族とか親戚とかそういうのを含めた家の事で……」

「家がどうしたんだ？」

オスカーはこの距離で話す事があまりにも愚かだと思った。と言うか、最初の距離よりどんどんレアが近づいている気がした。話す度にレアは遠慮と言うか、気の弱そうな部分が話す事に夢中になってどこかに飛んで行っている様だった。それに合わせて距離が近づいていた。そもそもレアのサンドイッチの皿は、オスカーのモノと対照的にもう空っぽだった。

「小さい頃に…… その、ある人…… 大人がボクに家の話をしていて…… 自分と自分の家が合わなかったから家から出たんだって。ボク…… ボクはそのころ家が退屈だったから、ホグワーツで六年生とかそれくらいになればそういう風なことができるのかなって思ってたんだけど……」

レアが話す大人とはいったい誰なのか？ オスカーは思いつかなかったが、随分と反骨精神にあふれた人間だと思えた。トンクスの親戚では無いのだろうかと思ってしまったくらいだった。トンクスならちよつとくらい家から飛び出すくらいやりそうだった。ただそのあとでドジをして家に戻って、トンクス先生に一生分くらいお説教されているのがすでにオスカーの頭の中で再生されていた。しかし、脳内の映像よりレアとの距離が問題だった。

「その今は…… 家とか家族はボクに何をして欲しかったのかなって思うんだけど…… でも、それって、自分で選んだことじゃないかもしれないから。勝手にボクが探そうとしているだけかもしれないし、その…… 嫌だったら、答えてくれなくて大丈夫だか…… 大丈夫なので…… オスカーせん…… オスカーはそういう事を考えるのかなって……」

レアとの距離ばかり考えていた自分に対してオスカーは恥ずかしくなった。どうなのだろうか？ 昨日のハリーの話もそうだったが、オスカーは自分の周りの色んな人が何を自分に望んでいたのか考えたことがあったのか。オスカーは自分が他人のために動いているよ、で、他人が自分に何を望んでいるかを考えたことが余りない気がしていた。

オスカーは目の前のレアが自分に何を望んでいるのだろうかと思った。クラーナの時は、どうして自分を病院に連れて行ったのか分からなかったのだ。エストも、どうして彼女がゴドリツクの谷に自分を連れて行ったのか分からなかった。そして、二人が自分にどうして欲しいと考えているかを考えていなかったのではないだろうか？

「正直、あんまり考えたことは無いな。相手が何をしたいのかとか、何を相手にできるかって考えはするけど、自分に何をしたいのかって考えたことは俺はあんまりないな。でも凄いな、俺、本当にそういう事は意識して考えたことがないから。ちよつと考えてみるよ」

意外そうな顔をした後で、なぜかレアはオスカーから顔を背けた。オスカーはレアの反応が良く分からなかったが、なぜかレアは気弱な雰囲気少し出たと思えば、両手を握って頑張って自信を出そうとしている様に見えた。

「じゃ、じゃあ…… その、ボク、ボクはオスカー先ば…… オスカーに何をしたいかと思ってると思います…… 思う？」

距離が近いのもあってオスカーは頭が空っぽになった。これまでのオスカーなら、どうしてレアは自分のかつて住んでいた場所に自分を連れていきたいのだろうかと考えたはずだった。だが、どう見ても今レアが望んでいるのは別の事に見えた。

「パフエ食べたいのか？」

「え…… パフエ？」

直近の二日間の記憶しか、ショートしたオスカーの脳内回路では読みだすことが出来なかった。つまり選択肢は二つだった。パフエを食べさせるか、いかにレアが他の人と違うのか言うのかどっちかだった。

パフエといった瞬間にパフエが二つテーブルに出た。スプーンはちゃんと二つあった。オスカーはペンスが大好きになりそうだった。「ほらパフエ、なんか週刊魔女で紹介されてる店のらしいぞ」

「なんでオスカーせ…… オスカーがそんなこと知ってるんだ？」

「三年生の時の騒動でペンスが週刊魔女を読むようになったから……」

「ねえペンス それは本当？」

さつきまでの雰囲気霧散したとオスカーは思った。強気な時の雰囲気レアの全面に出ていた。オスカーは思った。エストやクラナよりレアの方が色んな意味で強敵かもしれなかった。

バチツと言う音と一緒にペンスが現れた。

「本当だよな？ ペンス」

「はい、本当でございます。週刊魔女に乗っていた写真からこのペンズめが作らせていただきました…… カップル様向けのサービスのメニューだそうです」

いつも通り完璧な受け答えと姿勢だった。ドーリツシュと言うあの男性にもしかしたら礼儀正しきで負けるかもしれないとオスカーは思っていたが、それも払拭されそうだった。

「オスカーは自宅で一人でパフエを食べるんです…… 一人でパフエを食べるんだ……」

「え？ いや流石に食べないけど」

「なら？ ペンスがオスカーに出したわけじゃない？」

「はい、オスカーお坊ちやまからパフエのお話をお聞きしたので、レアお嬢様が来られると言うことで作らせていただきました」

「それは……??」

なぜかレアは混乱していた。オスカーには何に混乱しているのか推測が難しかった。オスカーがパフェの話をペンスにしたことに混乱しているのか、それともレアが来るからパフェを作ったとペンスが言っていることに混乱しているのか。果たしてどっちなのかオスカーには分からなかったのだ。

「外は暑いだろうしな、とりあえず食べて頭冷やしてからレアの元の家に行こう」

「何か隠してないですか？ オスカー先輩？」

「なんで先輩が戻ってるんだ」

「怪しいから、こう…… 心理的な距離を表現しようと思って」

「先輩が無い時は距離が無いのか……」

「そ、そういうわけじゃないけど……」

オスカーは何とか強引に話を終わらせることが出来たと思った。ペンスは音を立てて消えていたが、オスカーはもうクラーナ以外の人の前でパフェと言う単語を口走るのはやめようと思った。クラーナの前で言うのも現実的では無かったが。

ただ、それでも明らかにレアとの距離が近かった。二人で別々のパフェを食べているのに、クラーナとダイアゴン横丁のテラスに座っていた時より距離が近かった。オスカーは今日のこれから考えたが、どう考えても去年までの様に上手く喋ったりできる気がしなかった。

オスカーはレアの事を甘く見ていたと思わざるを得なかった。クラーナはこれまでよりやたら距離が近い気がして気になったし、エス

トには腕を奪われたせいでそれどころでは無かった。

魔法使いや魔女が集まっている場末のパブの暖炉から出て、レアの昔の家まで向かう途中で、エストの様に腕を取られるのではなく、オスカーは普通に手を取られた。

距離もクラーナとの距離を考えていたのが馬鹿らしくなるくらい近かった。それに、これまでの二人と違って、身長的に顔や肩の位置が他の二人よりずっとオスカーに近かった。

無言のまま、オスカーの方を見ることも無くレアは進んでいた。足取りには迷いが無かったが、レアの手のひらは湿っている様だった。エストの手が湿っていたのは彼女がイグノタスの墓に来たことで興奮していたのだろうとオスカーは思ったが、今回は明らかに別の緊張から来ているのがわかった。

オスカーは自分が情けない気がした。レアはこれから家に行くことに緊張しているはずなのだ。誰かと一緒じゃないと行けないような場所に、誰かと手を繋いでも、その誰かに、家に行くことによる嫌な緊張や、嫌な汗をかいてしまうことが伝わってしまうくらい動揺しているのだ。

それなのに、オスカーが感じたり、気にしているのは、手を繋いでいる事実だったり、髪の毛が何度か触れてしまうくらい近い距離だったり、彼女の髪から香る、カモミールの香りだったりそういう事なのだ。

家や畑をいくつも越えて、マグルの住人達と何人もすれ違いながらもレアは全然喋らなかつた。それにやっぱり視線は前だけを見ていたし、手は夏の暑さでは無い汗で湿っていた。心なしかレアの握っている力が段々と強くなっているとオスカーは感じた。

オスカーは本当に自分はいったいどうしてしまったのだろうかと考えていた。これまでの自分だったら、誰かがこういう嫌な緊張とかそういう事を考えているだろうときに、こんな事を考えなかつたはずなのだ。

それにオスカーはいつたい自分がどこからおかしくなったのか流石に分かり始めていた。明らかに、石の中の一件があつてから自分の

感じ方や考え方やそういうモノが変わっていると分かっていたのだ。分かったことでさらにオスカーは混乱していた。石の中であったことは、自分を精神的に進ませたのではないかと思っていたのだ。なのに、今、オスカーが悩んだり、感じていることは、成長とか進歩とかそういう事と逆に感じられるのだ。明らかにオスカーは自分の心も体も持て余していた。閉心術の様に心や頭をコントロールするのが成長だと言うのなら、全く逆の方向に向かっていると感じられた。

「こつちだと…… 思います……」

「木と草で一杯だけど大丈夫か？」

「でも…… こつちに行かないと……」

二人の目の前にあつたのは、禁じられた森ほどではないにしても、十分に鬱蒼とした木々と夏の太陽の力で伸びに伸びている草だった。普通に入れば草木や虫にやられてしまうだろうことは目に見えた。

「ぎつきのパブって魔法使い用のパブだよな？ この村って結構魔法使いがいるのか？」

「そうみたいです…… ボクは出たことが無かったので知らなかったんですけど、魔法使いや魔女が昔から住んでいるらしくて……」

オスカーは、レアの気が張り詰めているのは、家が近づいている事に加えて、家の周りにあつたはずのモノを知らなかったと思っただろうと考えた。オスカーが家の外を知らなかったのと一緒で、レアは魔法使いや魔女が沢山いたはずの村の事を知らなかったし、今までほとんど見たことが無かったのだろう。それは、午前と言っていた、家の事や家族の事を知らないと言っていたことにつながっているのではないだろうか。

「知ってるか。俺も最近聞いたんだけど、未成年の魔法使いの魔法を感知する魔法って、未成年が使ったのか、大人とか魔法生物が使ったのかは分からないらしいぞ」

「臭いの魔法……？」

「もし魔法省の人が来たらペンスがいたことにすればいいだろ」

杖を振って、オスカーは草木を除けて道を作った。大きな獣道くらいの大きさだったが、少なくとも二人が草や虫に悩まされずに進むことが出来そうだった。

「あ……」

今度は心の準備ができてなかったのか、レアは棒立ちになっていった。棒立ちのまま、さつきよりも、ずっと強くオスカーの手を握っていた。オスカーは、なんとかできるだけ優しく握り返したつもりだった。

オスカーは獣道の方をもう一回見て、どうしてレアがそんな反応をしたのか分かった。もう、家が見えていた。ポッターの家よりずっと大きく壊されているが、確かにレアの記憶の中にあっただのと同じ家が見えた。

「どうする？」

「行きます」

レアは足を動かし始めたが、さつきの村の中を歩いていた時よりも歩幅が短く、ピッチは遅かった。オスカーはとにかくレアのスピードに合わせた。

家の全貌が見えてきた。まだ魔法がかかっているのか、石垣で囲われた家の境界より中は草木が茂ってはいなかった。だが、その分、魔法や魔力の暴走による爪痕がポッター邸よりはつきり残っていた。

石垣は色んな場所で崩れていた。レアと家族が最後に喋っていたはずの庭のテーブルは足を一本だけ残して放置されていて、椅子もほとんどが壊れてそのあたりに転がっている。オスカーには雀のチュンチュンと言う鳴き声がひどく場違いに聞こえた。

「レア、どこを見るんだ？ 崩れるかもしれないから家の中は入らない方がいいかもしれない」

「その…… とりあえず玄関の扉のところまで…… 行きたい……」

レアの足取りに合わせてオスカーも進んだ。オスカーはレアの記憶で見た風景を思い浮かべた。父親、レストレンジ、ロジエール、トラーバス、恐らく他にも沢山の死喰い人がいたはずだった。あの中にいた一人の子供がレアと一緒にここに来ているというのは、雀の鳴き

声以上にここに相応しくない気がした。

玄関の木製の扉は、めちやくめちやくに破壊されて、二枚がバラバラの方向へ吹っ飛んでいた。オスカーは記憶の中のレアがこの扉をワンドレス・マジックで開けていた事を覚えていた。

「ちよつと…… オスカー…… 手を……」

レアが言いきる前にオスカーはレアの手を離した。ただ、オスカーはレアの手を離しても大丈夫だったのか自信が無かった、それくらい動揺している様にオスカーには見えた。

「レパロ」

杖をはつきりと家の方へ向け、もう片方の手をかざす様に家に向けて、レアがそう言った。めちやくめちやくに破壊された家のパーツがいくつも穴だらけではあるが、段々と戻りつつあった。石造りの壁や、外のランプも玄関の扉も、庭のテーブルや椅子も。

それは強力な魔法力と集中力、それに元あったはずの家の記憶が必要なはずだった。元々、レアの魔法力はオブスキュラスになりかけても死んでしまわないほどに強力なはずだった。その片鱗は、記憶の中で小さい頃から魔法を使えるといった形で見え隠れしていたし、オスカーの同年代ならエストに次ぐくらい強力かもしれないなかった。

それでも、すでに壊されてから何年もたっている家を丸ごと直すというのは難しい芸当だった。レアの顔は集中しようとして歪んでいたし、向けている杖や手が震えていた。

「レパロ」

オスカーは家の全体像は知らなかったが、少なくともレアの記憶で見た範囲では知っていた。二人分の修復の呪文で段々と家が元の形を取り戻し始めた。バラバラになっていた石の壁や石垣はすべて元の位置に戻り、窓ガラスは元の窓枠に戻った。玄関扉はきちんと二枚とも枠にはまって蝶番で固定された。玄関から庭に続く石畳も、庭にあったテーブルと机も元の場所に見かけ上は戻った。

レアの方を見ると、さつきよりずっと泣きそうな顔に見えた。壊れたままの家より、元の形を取り戻した方が色んな記憶を思い出させるのかもしれない。

手を押し出すような動作だけで、レアは玄関の大扉を開けて、フラフラとそのまま入っていった。

「レア、レパロで見た目は戻ったけど、傷んでいるとことかは直せてないから……」

「ここでほんとは待ってたはずだった」

「レア…… 気を付けないと……」

「誰が来るか分からなかったけど、二人騎士団の人がくるはずだった……」

レパロでは食べ物や生き物は直せない。それに腐食や虫食い等もだ。玄関から入ってすぐの居間には、木製のテーブルの上にテーブルクロスがあつて、そこに皿やゴブレット、フォークやスプーン、ナイフが並んでいた。ちょうど五人分。オスカーは記憶の中でそこに料理がのっていたのを覚えていた。銀のナイフやスプーンは錆びびびて、テーブルクロスはほとんどが黒く腐っていて、虫食いの穴で一杯だった。

レアは足取りがふわふわしていて、階段の方へ向かっていた。

「レア、本当に気を付けて動かないとダメだ」

そう言っても、レアには言葉が届いていないように見えた。そのままレアは階段を登ろうとして、木でできた階段が腐っていたのか足を踏み抜いてしまい、後ろに落ちそうになった。

「レア!! 聞いてるのか? 木の部分は何年も野ざらしだったんだから、レパロでも直せてな……」

「ボクが一度も来なかったから……」

オスカーが階段の下で受け止めたレアはそのまま床に崩れて泣いていた。オスカーはどうすればいいのか分からなかった。彼女の手を握ればいいのか、それとも抱きしめればいいのか、優しい言葉をかければいいのか、そしてそれは果たして本当にレアのためにしたいのか分からなかった。もしかすればそういうことをして、レアから頼られたり、そういった事を思われないからするのかもしれないのだ。

「レア、後で戻すからちよつと魔法を使わしてくれ」

杖を振って階段を石づくりのモノにオスカーは変えた。そして、オ

スカーはさつき考えた行動をどれもできそうに無かったので、自分の手をレアの前に差し出した。レアが手を掴んだ瞬間にオスカーはレアを引き上げた。

「これから木でできた場所に行く時はちゃんと注意してくれ」

「わか、分かりました……」

ほとんどオスカーに目を合わせることをせず、そのままレアは階段を登り始めた。片手をレアに繋がれたままだったので、オスカーもついていくしかなかった。二階には三部屋ほどあるようで、レアは恐らくもともと自分の部屋だった場所に入った。

壁やガラスは直っていたが、ベッドや木でできた本棚は汚れや腐食で手を出せる状態では無かった。本棚の本も、カバールの皮の部分を除いて虫食いで読める状態では無かった。

そして、原型をほとんどどめないほど壊されているのは、恐らく姿をくramsキャビネット棚だった。キャビネット棚は魔法がかかっている物品であるせい、レパロで直せていない様だったし、下の方には血痕なのか腐っているのか、黒ずんだ痕があった。

「ちよつと、ちよつと、ちよつとでいいから、ここに一緒にいて欲しい」「レア、別に俺はどこにも行かないか……」

オスカーが言い切る前に思いつき抱き着かれて、オスカーは何も喋れなくなった。やっぱりこういう時にオスカーはどうすればいいのか分からなくなっていった。純粋な心配や、安心を相手に与えるために、それだけのために相手を抱きしめることが出来るのかが分からなかった。だから、ゆつくりとできるだけ優しく、レアの背中をポンポンと叩いた。

オスカーのローブは涙でびちゃびちゃになっているのが分かった。不思議とレアとの距離はほとんどないというのに、この夏休み悩んでいるような感覚は出てこなかった。だが、これまでの様に、誰かのためだけだと、そこに自分の要素が入っていないと、確信をもって話す事や行動することがオスカーには難しかった。

「ごめんなさい。棚のおかげで助かったのに、まだ狭くて暗い場所が怖いから、助けてもらったのに、ごめんなさい」

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、段々と言うたびに小さくなる声がオスカーには聞こえた。オスカー以外には誰にも聞こえない声だった。」

誰に謝っているのか。昨日、ゴドリツクの谷で聞いた話と同じだった。死人は生きている人に伝えることはできるが、逆はできないのだ。死人に耳を傾けることはできても、声を届けることはできない、同じ時か未来の人間にしか声は届かないはずだった。

「レア、落ち着いたら言ってくれ」

「ごめんなさい。オスカー先輩、いつつも迷惑をかけてごめんなさい」
ここはレアが生まれて育った家のはずだった。世界中のどこよりホグワーツより、暖かく彼女を護っている場所のはずだった。オスカーが自分の家をそう感じる事が出来ないように、多分、昨日見たあの家ではハリー・ポッターもそう感じる事が出来ないように。それはおかしな話だった。自分の家よりホグワーツの方が良いと思えるのは、おかしな話だった。家は最早護るのでは無く、逆に縛っている様だった。

「隣の…… 隣の部屋についてきてもらえないですか」
「わかった」

しゃくりあげているレアが、ちゃんと動けるとはオスカーには思えなかった。先にオスカーが動くことにした。ルーモスで出した光球で行先を照らしながら、オスカーは元のレアの部屋を出て、隣の部屋に入った。爪が刺さりそうなほどにオスカーの手を握っているレアもそのままついてきた。

隣の部屋は見た感じは夫婦の寝室に見えた。大きな天蓋付きのベッドは、これまでの例にもれず虫食いやシミで見れたモノでは無かった。箆筒の上に写真や貴金属の様なモノが並んでいて、そのいくつかはまだ形を保っていた。

「これ、聖マンゴ病院か？」

「あ……」

前にマッドアイにオスカー達が見せてもらったような写真と同じ様に、沢山の人たちが並んでいたであろう写真があった。その背景が

黄ばみや穴で良くは見えなかったが、ついこの間オスカーが行った聖マンゴ病院の一階に見えたのだ。写真の状態が余りにも悪いせいか、写真の中の人たちはほとんどどこかへ行ってしまうている様だったが。

「戦争がひどくなる前は、パパは聖マンゴ病院で働いてたはずで……」

人がほとんどいなくなった写真の中で、色もほとんど色あせるか黄ばんでしまっている中で、多分、レアと同じ金髪の男の人がこっちに手を振っている様だった。癒者の着る服を着て、こっちに笑顔で手を振っている。

レアは写真立てを手に取って、自分のローブのポケットにしまった。すると、写真立ての向こう側に銀色の何かが見えた。レアはそれに気づいていない様だったので、オスカーは手に取った。

「レア、じゃあこれはお父さんのなんじゃないのか？ 杖と骨が交差してるのって、聖マンゴの印だったはずだし」

「ほんとだ……」

銀色の徽章は少し黒ずんでいたが、オスカーが杖を振ると元の銀色の輝きを取り戻した。杖と骨が交差したデザインをしていたこの徽章をレアは両手でまるで水でも受け止める様に受け取った。果たして、レアの父親はどんな気分で自分の仕事をやめて、その象徴を写真立ての裏に置いたのか、オスカーには分からなかった。

他にも写真立てはいくつかあったが、人物がわかる様な状態の写真は残されていなかった。風と雨がいつか切り取ったはずの時間を風化させていた。

「レア、ここはこれだけでいいのか？ 多分、もう何度も来られる様な場所じゃないし、いるものがあつたら今日の間を持ち出した方がいいと思うけどな」

「大丈夫だと思います。本当は何か残ってると思っただけだから……」

レアに自分の声が届いているか、オスカーは自信が無かった。レアは、まださっきの徽章を片手に乗せて見ていた。オスカーはこの家にレアを長く留め置くのは良くない気がした。レパロで外見や大枠は

直せていても、実際は色んなモノが腐っていたり、良くない埃や空気が残っていたし、何より、ここはレアの記憶を浮かび上がらせるモノで埋め尽くされていたからだ。

オスカーはこの三日間で初めて自分から誰かと手を繋ぐために手をさし出した。ここに長くいるのは、手を繋ぐことで自分に起こるだろう変調を鑑みても良くないことだと分かっていたからだ。

「ほら、じゃあもう出よう。あんまりここの空気を吸うのは良くないだろうから」

「分かりました……」

徽章を持つていない方の手でレアはオスカーの手を取った。オスカーはそのまま部屋を出て、一階まで降りて、家の外まで出た。

「レア、ほんとにもういいのか？ そんなにすぐ来られる場所じゃないだろうけど」

「はい、大丈夫です」

オスカーは杖を振って、玄関の大扉を閉めた。

「プロテゴ・トタラム プロテゴ・ホリビリス レペロ・イニミカム 敵を避け、恐ろしきものから守れ」

そのあとに保護呪文を屋敷全体にかけて。オスカーが入れたと言うことは、他の魔法使いも入れる可能性が高かったし、あまり可能性は高くないにしても、手癖の悪い魔法使いがやってくることは完全に無いということでは無かったからだ。

「実は割とこういう呪文の方が得意なんだ。なんかトunksが適当な事を言いまくるせいで、ヤバイ攻撃呪文の方が得意だと思われるけどな」

「そんなことはないはずです。少なくともボクとか、エスト先輩やクラーナ先輩、適当な事を言ってもトunks先輩も知ってるはずだ」

「まあ似合わないのはほんとかもな」

「そんなことは……」

これもおかしな話だった。オスカーはオリバンダー老人の店で杖を買った時の事を覚えていた。死喰い人の息子が防御呪文に優れる杖を買うとは的なニュアンスの事を言われたのだ。そして、どうもそ

それは事実だった。実際、盾の呪文や防御の呪文をオスカーは他の呪文より早く覚えることが出来たからだ。それは確かに自分の家の事を考えれば少しおかしな話だった。

木立を抜けて、二人はまたマグルの村を歩き始めた。オスカーはまたレアとの距離が気になり始めて、何か喋っていないとダメな気がした。

「れ……」

「今日はごめんなさい。オスカー先…… オスカー」

「何をあやま……」

「ボクじゃなくて、例えばトンクス先輩とかどこかに行くんなら、こんな場所に行かなかったと思うし、その、自分で精一杯で、オスカーに頼りきりとかそういう風にならなかつたと思うから」

これもどうなのか、確かにレアと喋る時の様な雰囲気にはトンクスとはならないことはオスカーにも分かったし、トンクスが頼ってくるかどうかと言われれば、そういうタイプでは無いことも確かだった。ただ、それをどう感じるかはオスカー次第だった。

「みんなトンクスで、みんなレアってわけにいかないだろ。クラーナでもエストでもいいけどそんなことになったらホグワーツはおしまいだろ」

「それはどういう……?」

ちよつとそれはオスカーにも想像したくない話だった。単純に体力が持たない気がした。全員エストでもクラーナでも、トンクスでもレアでも、全員誰かと同じ性格だったらいつも喧嘩になりそうな気がしたからだ。

「そもそも、だいたいこんな感じになるかもってレアは夏休み前に言ってただろ。それに…… 色々思い出すのは当然だろうからな」

オスカーは思い出した。夏休みの始まりに、ホグワーツから戻ったその日に、オスカーはそのまま屋敷の外れまで行ったのだ。レアが屋敷に戻ったのと同じように、オスカーは屋敷の外にもう一度出たのだ。

「オスカー先輩もそういう事があるんだ…… ありますか?」

「俺にもあるんじゃないか、レアとは種類は違うかもしれないけどな」
言葉を聞いて、レアはしばらく下を見てぶつぶつ言っている様だった。オスカーからするとありがたかった。レアとの距離が近かったし、まだ暖炉飛行をしたパブまでは距離があったからだ。

「その…… すごいくだらないことばかり思い出すんだ…… 思い出したんです……」

「言えることだけ言ってくれればいいけど」

「さっきのボクの部屋で、隣のパパとママの部屋の音を耳を当てて聞いてみたりとか、それで音が聞こえなくなつて、二人が寝たのが分かった後に外に出ようとしてみたりとか……」

確かに活発そうだった小さい頃のレアならやりそうな事だった。オスカーには寝たのが分かった後に音を立てないようにさっきの階段を下りて、慎重に玄関の扉を開けて外に出ようとするレアが容易に想像できた。

「パパが遅くまで帰ってこなくて、ママに寝ろって言われて、自分の部屋に戻ったけど一階の音を聞こうとして扉をちよつと開けて、寝たふりをしてたこととか」

言うたびに、喋るたびにレアの指の力が大きくなっている気がした。距離も近かったし、それに何よりこうしてとつとつと彼女が喋るのを聞いていると、他の人では無くて、自分だけにそれを喋っている気がして、オスカーはいつもとは違う感覚や感情が出てきそうだった。

「あのコップやスプーンはママがホグワーツの先輩から結婚祝いで貰ったモノって言ってたとか、本棚はパパが作ってくれたとか、もつと小さい頃はあの本を読んでくれたとか、お祖母ちゃんにこのクロス編み方を習ったから、今度ボクに教えるとか、そういうことを思い出すんです。思い出してもボクは何もできないのに」

「思い出さないより百倍良いことだろ」

喋ろうと思っていなかったのに、思わず、オスカーの口から言葉が出た。忘れるよりずっといい事だとオスカーは知っていた。

「あ…… っ、ごめんさい、ボク、その、オスカーの……」

「謝らなくていい。思い出せないと、区切りも付けられないだろ。多分、俺はやったことないから分からないけど、お葬式とかそう言うのって、ちゃんと思いついて区切りを付けるためにあるんじゃないのか。区切りを付けられないとずっとそこにあるから、どうしようも無くなるだろ。だからレアは自分で家に戻ったし、そこで色々整理できるだろ、今はできないかもしれないけど、持って帰ることはできただろうから、そこからだろ」

ずっとそこにあるままだと良くないとオズカーは知っていた。だがそういったオズカー自身は思い出すことが出来て、他の人、世界のほとんどの人とは違って喋ることが出来たのに、はつきりと区切りをつけることが出来たかは怪しかった。

それにレアが自分よりはるかに強いとオズカーは知っていた。エストがオズカーが首からかけている石を触っても使いたいと言わなかった様に、レアも例えオズカーが申し出ても使わないだろう。オズカーはそれを確信していた。

二人が喋って歩いている間にパブは目の前まで来ていた。

「レア、このままレアはレアの家まで帰るつもりなのか？」

「そう思ってます」

「なんかちよつと飲んでからいくか」

「分かりました」

今日は真夏の様な暑さだった。しかし、オズカーもレアも体の芯が外の様な暑さでは無いことは確かだった。オズカーの認識が確かなら、あの嫌な記憶の残るお酒はこういう時に役に立つはずだった。

パブに入ると一瞬、パブの魔法使いや魔法の目がオズカーとレアの方を向いた。手は繋ぎっぱなしだったが、もうオズカーは半分やけくそでもあったので、レアに座ってもらって、一人で注文をしいった。

「見ない顔のお兄さん、注文は？」

「ファイア・ウイスキーを二つ」

「お兄さん。ここでは出してやるが、まだホグズミードでは頼まないようにな」

オズカーは多少同年代より身長が高かったが、まだ五年生くらいで

あることはバレていたようだった。そんな事を言いながらもマスタールはグラスを二つ出してくれた。

「十八シツクルだ」

「ちようどで」

ただ、オスカーがレアのところに戻ると、何故かレアは少し濁った様なブロンドの女の人と喋っていた。何か困った顔をしているレアがこっちの方を見てきた。

「ボーイフレンド君？ あれ？ もしかして、ファイア・ウイスキー？

　　凄いなあ。お昼から強いお酒で、ガールフレンドをおもち帰りしちゃうんだ？」

「いや、俺が十人いてもレアはピンピンしてると思いますけど……」

「あの…… オスカー、この人……」

「あ、ボーイフレンド君、あたし、パンドラ・ラブグッドです。女の子が、泣きそうな顔をしてるから、来ちゃいました。ダメだと思うんだけどな。こんなかわいい女の子を、泣きそうな顔をしてるのに、置いていくなんて」

オスカーは直感的にこの人物は絶対にレイブンクロー出身だと思った。それにパンドラ・ラブグッドという名前は聞いたことがあった。

「パンドラ・ラブグッドって…… ワンドレス・マジックの時の……」
「そう。まさか、知られていると、思わなかったけど。私はパンドラ・ラブグッドです。この雑誌、ザ・クイブラーに寄稿してます。この雑誌の編集長は夫のゼノがやってるんだよ」

オスカーは思った。エスト以上にこの人の話についていくのが大変な気がした。かなり厳しい戦いになりそうだった。

「それで…… その、えーっと、パンドラさんは？ いったい何を？」
「ラックス・パートがこのヘンを飛んでたんだけど……」

なぜかザ・クイブラーを持って、パンドラは見えない何かを叩き落とす様な動作をした。レアがオスカーの耳元でささやいた。

「ラックス・パートって言う、ほとんどいないって言われてる動物がいるらしいです。ボクはそんなのいないと思うんですけど」

「そう、ラックス・パートを叩き落してたら、レアが酷い顔を、してたんだよね。あたし、レイブンクローの出身だったから、お話を聞いてあげようと思ったけど。ボーイフレンド君がいるんなら、いらんのか」

オスカーの直感には正しかった。案の定、パンドラはレイブンクローの出身だった。多分、エストと組み合わせると大変なことになる気がオスカーはした。

「本当はゼノとルーナとピクニックにきてたんだけど、ゼノが娘と二人だけの時間を過ごすって言って、帰ってこないんだよね。でも、二人の時間を邪魔するのも、無粋だから、あたしは退散しよう」

「は、はあ……」

「あ、でもこのザ・クイブラーはあげるね。まだ出てない、最新号だから、ひっくり返して読んでは？ それに、何かあったらこの編集部つてとこに、連絡くれたら、すぐ返すよ。あたしの研究に、興味があるつて、言ってくれた後輩は、初めてだから。またね」

嵐の様にパンドラは去っていった。残されたのはさつき買ってきたファイア・ウイスキーとザ・クイブラーだった。ザ・クイブラー九月号のタイトルはこうだ。『魔法省、遂に狼人間完全排除法成立か？』

マグルの狼毛皮ブランドとアライアンス？』さらにその下にはかなりバカバカしい内容も書かれている。『偉大な魔法使いの恋愛？ 偉大な魔法使いは偉大な魔法使いに惹かれ合う？』『ルーンスプールでバジリスクは作れるか？ 目玉が六つで最強の魔法動物？』『ドラゴンの卵で料理はできるか？ ドラゴンオムライス』本気で読まない方が良さそうだった。

「チャーリーが読んだら怒りそうだな。ドラゴンオムライス」

「多分、すごい怒りそう。でもちよつと食べてみたいかも」

「それにほら、流石にエンゴージオをかけるわけにいかないけど、ファイア・ウイスキーだ」

「いや、ボクもいつつそんな飲み方をしてるわけじゃないから……」

ファイア・ウイスキーにはオスカーは嫌な思い出しかなかったが、飲むのがレアな以上、クラーナみたいな事は起こりえなかった。

「とにかく一回飲んだらいいんじゃないか。体じゃない方が疲れただろ。俺もちよつとそんな感じだしな。あ、謝るのはやめろよ。謝ったら、夏休みの間ずっとマツキノンのお姫様扱いするから」

「え…… 夏休み中…… もしかして、ボク、謝った方が得をする感じですか？」

「そんなに、お姫様呼ばわりされたいのか？」

「そうじゃなくて…… その…… 二人だけじゃなくて、みんなの前でオスカーが言うとその……」

そのあとはぼそぼそ言っていて、オスカーは聞き取ることが出来なかった。そんなにお姫様呼ばわりされたいのだろうか？ オスカーはちよつと気になった。

「女の子はお姫様呼ばわりされたいのか？」

「え？ それは…… でも、エスト先輩は血みどろ男爵とかクイディッチのチームからはそんな感じだったから……」

「確かにそんな感じだな」

「お姫様って感じじゃあんまりないかもしれないけど、純血で有名って意味なら、トンクス先輩の家の方がそうなのかもしれない」

「え…… 何か違和感しかないな、トンクス姫様？ いつつもトンクスって呼んでるからなんかおかしいな。トンクスのお姫様でもおかしいし、それならドーラ姫様って言った方が怒るだろうな」

「プツ…… ドーラ姫…… 凄い怒りそうだけど…… あとは…… プルウエットのお姫様…… ムーデイのお姫様……」

オスカーは何となく、全員をそんな言い方にするの不味い気がした。特にトンクスはドーラと呼んだだけで怒りだすのに、お姫様なんてつけた日には、オスカー自身が大変なことになりそうだった。

ただ、ファイア・ウイスキーを飲みながらバカみたいな事を喋っている、さつきまでの体の芯の方が寒くなっていたのがうその様に暖かくなってきている気がした。

「オスカー先輩…… オスカーはこうやって他の人とお酒を飲むんですか？」

「三本の筈に行く時くらいだろ。いつつもクラーナをどうにかしない

といけなくなるけどな」

「クラリーナ先輩はどうなるんですか？ ボク、トンクス先輩とオスカーがからかっているのしか見たことがないから……」

「一番最初にやらかした時は…… その、トンクスに最初にキスして、なぜか俺に抱き着いてその後大変な事をしてくれたな」

「た、大変な事ですか？」

「もう大変だった。次の日も大騒ぎだったしな」

「凄い気になるんだけど…… 何をしたんですか？ お、オスカーに抱き着いて何かやったってことですよね？」

「二応、クラリーナの名誉のために喋らない。トンクスに聞けば喜んで教えてくれるけどな」

「なるほど……」

なぜかレアはオスカーのグラスの残りと自分のグラスの残りを眺めていた。そして、何かを思いついた様な顔をした。

「オスカーは、そのクラリーナ先輩みたいになるくらい飲んだことはあるんですか？」

「俺？ あんまりないけどな、そもそもそんなに強いのは学生に売ってくれないし…… ああ、でもクイディッチで優勝した時に、延々とエストとクイディッチチームに付き合わされた時は辛かったけどな」

「何杯くらいですか？」

「さあ？ 分からないけど、結構な数の蜂蜜酒と屋敷しもべのワインが空いてたけどな」

レアは自分の指で何か数えているような動作をしていた。オスカーは少し嫌な予感がした。

「その、ボク、そういう事になったことは無いんですけど、それがダメかなと思ってる」

「ダメって？」

「だからその、限界を知っておかないとダメかなと思うんだ。クラリーナ先輩みたいに外でそうなりたくないから」

「確かに、危ないし恥ずかしいからな」

「その…… 今日、この後、そのオスカーの家で付き合っつて貰えません

か？」

オスカーは思った。自分はOKを出してしまうと。しかし、自分のどこかがそれは危険だとささやいていた。簡単な話だった。オスカー自身がレアに付き合って飲めば確実につぶされるからだ。しかし、今日、レアから何か頼まれるとオスカーは断れる気がしなかった。

「別にいいけどな。家なら潰れてもペンスがいるからな」

「なら、その、もう一回オスカーの家に帰りませんか？」

「分かったけど……」

「ありがとうございます。じゃ、じゃあ一回戻りましょう」

レアはまるで水でも飲むかの様に、ほとんどまるまる残っていたファイア・ウイスキーを一気に飲んだ。顔色はピクリともしなかった。オスカーは思った。レアに付き合うのは不味いと。オスカーはいくらなんでもこれを一気に飲むのは危険だと分かっていたし、自分ではやろうと思わなかった。

「ちよつと暖炉を使わせてもらう様に言ってきます」

「ああ、よろしく」

さつきまでと打って変わって、きびきびと動き出したレアを、まだ琥珀色の色をたたえているファイア・ウイスキーの向こう側からオスカーは見ていた。

オスカーは感じていた。この三日間で一番危険な時間が近づいている気がするのだ。

「すぐ使っても大丈夫らしいです。オスカーは飲み終わりました？」

「いや、ちよつと待ってくれ。今、飲み終わるから」

オスカーの夏休みはまだ始まったばかりだった。そして、オスカーはもう二度とレアと二人だけで飲み続けることはしないと、心に誓うことになった。

ロンドン

「オスカーお坊ちやま、おはようございます。ペンスでございませす。そろそろお時間でございませす」

「ペンス、もうちよつと寝かしてくれ」

オスカーの頭はガンガンしていた。こんなに寝起きが悪いのはいつ以来なのか分からなかった。何とか上半身を起こすと、ズキズキと頭の中や首の後ろ側から鈍い痛みがやってきていたし、自分の脈がやけに大きく感じられた。額に手を当てて顔を支えようとしても、そのまま顔がずり落ちた。

「レアはちゃんと帰ったのか？」

「はい。オスカーお坊ちやまが事前に言われた通りに、ペンスめがお送りいたしました」

「普通だったか？」

「はい。元氣一杯でございました」

翌日になつてもオスカーは死にかけているのに、レアの方はピンピンしていた様だった。

「あとどれくらい時間がある？」

「オスカーお坊ちやまからお聞きした時間まではあと四十分程度しかありません。ペンスめは何度か声をかけさせていたただいたのですが……」

「分かった。ペンス、前買ってきたって言ってたマグル風の服を取ってきてくれ。それとマグルの何だつけ？ ああ、ポンドとペンスだ。ペンスってペンスの事じゃないぞ。お金だ」

「かしこまりました」

ペンスがいなくなった瞬間に、オスカーは杖を取り出して自分に元氣の出る呪文をかけた。多少頭の痛みが消えた気がした。鏡を見ると元氣の出る呪文の効果のせいか、いつもの顔では無く、何か取って付けたような笑顔が浮かんでいた。

「オスカーお坊ちやま、こちらでよろしいですか？」

「ああ、何か分からないけど、トunksはそういう恰好をしないと送り

返すって言ったからな、それとペンス、元氣爆發薬ってうちにあったか？」

「かしこまりました。こちらでございます」

「ああ、ありがとうペンス」

「いえ、もつたいないお言葉でございます」

ペンスの出した元氣爆發薬を飲むと、文字通りオスカーの耳から湯気のようなモノが噴き出した。それに何か根拠のないやる気が全身にみなぎってきて、オスカーの頭痛とそれが戦っている様だった。

「しかし、オスカーお坊ちやま」

「なんだ？」

「ペンスめが口に出すようなことではないのですが……」

「言つていいぞ。言つた後に自分を罰することを禁じる」

ペンスにしては珍しく、オスカーに言うのをためらっている様だった。オスカーはやっと頭が回り始めて、何とかなれない服を着ているところだった。

「夏休み中、こうしてお嬢様がたとお遊びなさるのでしようか？ 差し出がましいですが、オスカーお坊ちやまの体がペンスめは心配です」

どうしてみんなと遊ぶとオスカーの体が心配になるのか、普通男女は逆な気がオスカーはした。しかしよく考えれば、家にいる間、オスカーはずっと頭を抱えていたし、今日にいたっては薬の力を借りてやっと遊びに行く始末だった。これまでの夏休みを考えれば、ペンスの心配も当然の事の様にした。

「大丈夫だペンス。今日のトンクスで終わりだし、明日はチャーリーとちよつと遊びに行つて、そのまま隠れ穴にちよつといる予定だからな。そのあとは去年みたいにみんなここにいる予定だから」

「なるほど、流石オスカーお坊ちやま、ペンスめが口に出すようなことではありませんでした。申し訳ありません」

「じゃあちよつと顔洗つてから行つてくる」

「はい。オスカーお坊ちやま、ロンドン人が多いですからお気をつけ下さい」

オスカーはペンスをよそに、部屋を飛び出して、洗面所で顔を洗ってそのまま暖炉に飛び込んだ。朝ごはんを食べる時間すら無かった、暖炉は漏れ鍋につながっていて、オスカーは店主のトムに会釈をして、勢いそのままロンドンの街に飛び出した。

一応トンクスに言われた場所にたどり着くために、オスカーは事前がちよっと調べていた。キングズリーにロンドンの地理やバスの使い方について聞いたのだ。

トンクスが指定したピカデリーサーカスと呼ばれる場所はマグルの間では定番の待ち合わせ場所しかかった。オスカーは生まれて初めて、ロンドンのマグルで一杯の通りを一人で歩き、赤い二階建てのバスなる乗り物に乗った。

マグルで一杯のバスの車内で何度かバスの路線図と行先を確認して、確かにピカデリーサーカス駅に行くことを確かめた。マグルはオスカーの方には見向きもしなかったので、多分、マグルとしてはおかしな恰好をしているわけでは無いとオスカーは思った。

一人でマグルの真ただ中にいるというのは、オスカーからしてみればかなりの冒険だった。周りのマグル達は、写真の動かない新聞を読んでいたり、駅にあった電気で動く掲示板の様なモノを、手に収まるくらい小さくしたモノで何か数字を打ち込んでいたり、耳に栓の様なモノをしてそこから糸で何か小さい機械につながっていたりと、オスカーの常識とはずいぶんかけ離れていた世界だった。

それにバスでは目的地の近くに來たら、ストップと書かれたボタンを押さねばならないと聞いていたので、オスカーはバスに乗ってからずっと手をそばにあったボタンに構えていた。

車を出す音や人が動いたり喋ったりする音で、オスカーが体験したことがないほどうるさい場所だったし、バスには沢山の広告があつて、トンクスの髪の毛と同じくらい沢山の色が使われていた。赤、青、緑、それに人の肌の色、これもホグワーツではあまり見ないモノだった。広告の中で、オスカーより少し年上であろう女の子が、ホグワーツの女の子たちははしないだろうお化粧や、これまたオスカーはみんなが着ているのを見たことが無いような過激な服を着て、動かない微笑

みをこちらに向けていた。

外のマグルの往来や、レイブンクローの塔くらい高い建物を見ている間に、バスはピカデリーサーカス駅についていた。ずっと構えていたボタンだったが、他にも沢山の人が下りるらしく、オスカーがボタンを押す必要は無かった。

ピカデリーサーカス駅は人で一杯だった。駅の時計を見れば、トンクスとの待ち合わせ時間まであと二分しかなかった。トンクスが指定したピカデリーサーカス駅のエロスの像の傍は、待ち合わせの人で一杯で、オスカーはトンクスのシヨッキングピンクの髪の毛を探したが見た感じそれはどこにも無かった。

オスカーはしばらくキョロキョロと見回した後で、あるモノを思い出した。回りの人たちがさっきバスで見た、黒色の数字を打ち込む何かをいじっている横で、オスカーはカバンから本を取り出した。バカバかしいイケメンの写真がこちらに笑いかけている。

案の定、ページを開くと文字が浮かび上がっていた。

『もう着いたわよ』

『そろそろ時間なんだけど』

『あ、私今日はいつもの髪色じゃないわよ』

どのくらいの時間にそれが書かれたモノなのかオスカーには分からなかった。とりあえず、オスカーは返信を書いた。

『ごめん。いまついた』

『遅い』

間髪入れずに返信が帰ってきたが、やっぱりトンクスの姿は見つからなかった。オスカーはもう一回書いた。

『どこにいる？一応、像の目の前に立ってるんだが』

『私も像の目の前に立ってるわよ。多分、あんたより長い時間』

オスカーは辺りを見回してもいなかった。像の反対側に向かうとした、像は結構な大きさがあって、さらにそれを人が取り囲んでいた。向こう側は見えなかったのだ。

『像の反対側まで来たけど、いないんだが』

『なんで動くのよ。私も反対側に来たわ。なんかでっかい看板とかが

ある方よ』

やっぱりトunksスといると、ドジが移ってしまう気がオスカーはした。どうも二人そろって場所を移動したらしかった。

『そっち行く』

『そっち行くわ』

オスカーが書いたのと同時にトunksスも書いたので、オスカーは動けなかった。しばらく動かないでいるとまた文字が出てきた。

『あんたが一瞬先に書いたんだから動きなさいよ』

『分かった』

像の反対側に動くをやっとトunksスの姿が見えた。髪型こそ変わっていないなかったが、色はいつものシヨッキングピンクでは無くて、アンドロメダと同じような栗色の髪の毛だった。それに服装も、ホグワーツのローブや、いつも着ているハツフルパフの色をあしらったカーデイガンの様な恰好では無くて、他のマグルの女の子がしているような、ジーンズに白シャツその上にデニムのジャケットと言った服装だった。オスカーはぱつと見ではトunksスだと分からなかった。

「ごめん、遅くなった」

「普通こういうのって、男が先に……って言うか、あんたってこういう遅刻とかしないタイプだと思ってたわ。むしろ私の方がしそっじゃない」

「確かにそうだな」

「なんで同意するわけ？ どうせなんかあったんじゃないの？」

一見ではトunksスがどれくらい怒っているのか分からなかったし、オスカーは遅れた理由をそのままトunksスに言っただけなのか分からなかった。しかし、うそをつく方がもつといけない気もした。

「あんまり言えるような理由じゃないんだが……」

「あんたが恥ずかしいと思う事あるの？ 大抵の事をすげすげ言っただけのけると思っただけだ」

「レアに付き合っただけ酔いっつぶされて、起きれなかった」

「それはバカとしか言いようが無いんじゃない？ どこで飲んでたのよ」

「俺の家だけだ」

「何？　じゃあレアはオスカーの家に泊ってたわけ？」

「いや、俺は死んでたけど、レアはピンピンしてたからペンスに送って貰った」

やっぱりオスカーはトンクスが怒っているのかどうなのか分からなかった。いつもの髪色ではないのもあっただろう。それに、マグルに溶け込む服装をトンクスがしていたのをオスカーが見たのは、劇を見に地下鉄で行ったとき以来だった。

「普通は女の子とどこか行く時に遅れた理由で、他の女の子と飲んで酔いつぶれたなんて言うやつはいないわよ。今日会うのが私で良かったわね」

「いや、ごめん。ただ、トンクスに嘘についても仕方ないから……」

オスカーはちよつと怒っているトンクスを見ながら少し安心していった。トンクスには申し訳なかったが、怒っているせいで心理的にも物理的にも距離があったし、何よりこれまでと同じように喋れている気がしていたからだ。

「それより、あんたどうやってここまで来たのよ。姿現しでもしてきたわけ？」

「漏れ鍋からバスで来たけど」

「オスカー、あんたバスなんか乗れたの？」

「キングズリーにも聞いたし、それに家の傍の村まで行って、本屋でバスの路線図を見せてもらって、その店のお婆さんに乗り方を聞いた」

トンクスは何か微妙な顔でオスカーの方を見ている様だった。どちらかと言えば期待が外れたような顔だった。

「オスカーの年でバスの乗り方を聞くマグルの男がいると思うの？　普通にさつきみたいに書き込んで聞けばよかったじゃないの」

「いや、何か最初はちゃんとしたマグルの格好をしないとアズカバンに追い返すとか言ってただろ。だからこの駅までも俺一人でマグルの方法で来て欲しいのかと思って」

「別に三大魔法学校対抗試合みたいに、あんたに試練を課してるわけじゃないわよ……」

オスカーにはトunksがどうして欲しかったのかは分からなかった。てつきりオスカーにマグルの生活ややり方をやって欲しかったのだと、勝手にオスカーは考えていたのだ。しかし、それはどうも違ったらしかった。

「とにかく遅れてごめん。この後はどうするんだ？」

「どうするって、そうね、じゃあオスカーはエストやクラリーナやレアと何してたのよ」

「え？ 何してたって……」

口に出そうとして、オスカーはいったいどこまで喋って良いのかわ信が無くなった。クラリーナと病院に行ったことやダイアゴン横丁のパフェの一件は喋り辛かったし、エストと行ったゴドリツクの谷での出来事も説明するのが難しかった。レアの元の家にいたっては喋るのが明らかにはばかられた。

「言いくいなら質問を変えるけどいい？」

「いいけど」

「三人ともうどっかに行ったのよね？ それって三人が行きたい場所に行ったの？」

「三人がって…… そりやそうだけど、三人に誘われたわけだし」

「なら、あんたは行きたい場所はあるわけ？ ロンドンで？」

そう言われて、オスカーは初めは頭に何もでて来なかった。確かに、この四日間でそんな質問を受けたのは初めてだった。最初にクラリーナに誘われた時にダイアゴン横丁でどこに行きたいか聞かれた気もしたが、結局は三人とも三人の行きたい場所にオスカーを連れて行ったのだ。だから、オスカーにはトunksの質問が新鮮に感じられた。

「トunksが時々なんか言ってるだろ。クラリーナをからかう時とかに」

「そんなの一杯ありすぎてわからないじゃないの」

「ほら…… なんか、マグルは凄い劇みたいなのがあるんだろ？ 前にもなんかマグルの間では杖じゃなくて光る棒が流行ってるとか、それを流行らした劇があるとか、何かエストが黒いマスクを着けてク

ラーナと戦うことになるのか……」

「映画の事を言ってるわけね。その映画は多分今はやってないわよ」

なぜかトunksは得意気な顔になっていて、どうも遅れてきたせいで損なわれた機嫌は治っていきそうだった。それにオスカーからすれば、距離も腕も手もこれまでと一緒にトunksは落ち着く相手だった。

「その光る棒のやつじゃなくてもいいけど、ロンドンなら映画は見れるのか？ 今から行って？」

「そりゃ見れるわよ。あんたここをどこだと思ってるのよ」

「そうなのか。じゃあ映画を見に行きたいかな？」

「なんであんたが疑問形なの？」

そう言われても、オスカーからすれば自分の行きたい場所を言うというのが、何か変な感じだったのだ。

「いや、トunksがロンドンに行こうって言ってたから、どこか行きたい場所があるんだと思ってたんだが」

「別にないわよ。田舎育ちのオスカーお坊ちやまが、初めて人間世界にやってきたトロールみたいに右往左往するのが見たかったのよ」

「なら、映画を見に行きたい」

「決まりね。じゃあ回れ右して行くわよ」

トunksがオスカーの両肩を後ろから押して無理やり方向転換させた。オスカーはちよっと距離が近づくだけでビクツとなりそうだったが、なんとかトunksには気づかれずにすんでいそうだった。

ロンドンの街を二人は微妙な距離を保ちながら歩き始めた。オスカーからすれば、以前の様に喋れて一緒に歩けているので、夏休みで一番安心しているかもしれなかった。

映画館までは駅から少しあるようで、二人は服やアクセサリーを売る店が沢山立ち並ぶ通りまで来たらしかった。ホグワーツや魔法界では見ないような恰好をした女の人が沢山歩いていたし、店のポスターもそんな恰好をした人で一杯だった。

「マグルってほんとに色んな恰好をするんだな」

「そりゃそうでしょ。むしろ魔法使いとか魔女がローブばかり着て

るのがおかしいのよ」

「トunksはあんまりローブを着ないよな」

「なんで人と同じ格好をしないといけないのよ」

「その方が楽だからじゃないのか？ 毎日どの服かで悩むこともないしな」

「そんなの損してるわよ」

格好と言えば、なぜトunksの髪の毛がアンドロメダ、つまりトunks先生と今日はなぜ同じ色なのがオスカーには気になった。しかし、何か理由も考えずに直接聞くとトunksはオスカーはダメねと言っつきそうなのが、オスカーにも想像できた。

「損も何も、トunksは別に服で目立たなくても大抵授業でなんかやらかしてるだろ。魔法薬の材料を全滅さしたりとか、マンドレイクの授業で耳あての代わりにナメクジゼリーを耳に入れて気絶しかかったりとか」

「うるさいわね。あのね、ママがたしか言っただけど、見た目ってのはその人が一番外側に出してる中身らしいわよ」

「トunksの髪の毛はそうだな」

オスカーがそう言うのとトunksは躓きかけて、隣を歩いていた女の人のヒールを引っかけかけた。オスカーはトunksの腕を持って支えざるを得なかった。なんとか女の人とその彼氏であろう二人に謝って、できるだけ、腕を持っているトunksの方を見ないようにした。

「大丈夫か？」

「当たり前でしょ。あんたがいきなり変な事を言うからよ」

可能な限り早くオスカーはトunksの腕を離して、距離を取ったが、トunksは怒っているのか何なのか、いつもなら挙動不審に見えるだろうオスカーに何も言わなかった。

「じゃあ何で、今日はその髪色なんだ？ さっき言った…… 見た目がその人の中身の一番外側なら、トunksの髪の毛は一番そうだと思うけどな。服よりずっと」

「オスカー、あんたほんといつもそんなことばかり…… そうね、

じゃあなんでこの髪色だと思うのよ」

「え？」

「私は何で今日この髪色にしてきたと、あんたは思うのよ？」

なぜか速足になって、こっちを見ずにそう言ってくるトンクスについていきながら、オスカーは考えていた。どうしてトンクスの今日の髪色はそうなのか？ オスカーは思いつかなかったのでヒントが欲しかった。

「トンクス、ヒントはないのか？」

「無いわよ」

「じゃあ、ロンドンに関係してるのか？」

「ロンドン…… そうね、ちよつと関係あるかもしれないわ」

ロンドン？ オスカーは考えた。トンクスはあの本で文通の様な事をして、最初に今日の話をした時に、マグルの大都市ロンドンと言っていたのだ。それにオスカーにはマグルの格好をしてくるようにと言っていたのだ。どうだろうか？ オスカーは何となく、トンクスはロンドンに合わせた格好をしてきたのかと思っただが、トンクスはそんな性格ではない気がした。さつきも自分で言っていたが、人に合わせて同じ格好をする人間ではないのだ。

「マグルで一杯だから目立たないようにしてるんじゃないんだよな。トンクスだし」

「流石に四年もたてば私がそんな人間じゃないって分かってるわけね」

では、どうしてなのか？ さつき、トンクスは中身の一番外側に見える場所が見た目だと言っていたのだ。それは一番トンクスの髪の毛の事を指しているとおスカーは思ったし、トンクスもそう思っているのではないだろうか？ 今の髪の毛の色はトンクス先生の色だった。ならそれはどういうことなのか？ 多分、トンクス先生かテッドのどちらかか、二つ合わさった色が彼女の元の髪の毛の色なのだ。オスカーはそう思った。

「トンクス先生の色だよなそれ」

「よく分かるわね。流石に女のパーツにはうるさいわけね」

いつものピンク色の髪の毛が元の色でないとするのなら、今は元の色にしているのだろうか？　しかし、それならテッドの髪色でもいいはずだった。それにここはロンドンなのだ。むしろ、際立った純血であるろうアンドロメダの髪色より、マグル生まれのテッドの黒い髪色の方がここにはあっている気がした。

「テッドさんじゃなくて、トンクス先生の髪色なのは理由があるのか？　ここはロンドンだし、テッドさんの髪色の方にしそっただけど」
「パパの髪色なんかにして出かけたらパパがうるさいじゃないの」

テッドが少し可哀想だとオスカーは思った。夏休みくらいしか一緒にいる時間は無いはずなのに、うるさいと言う理由で同じ髪色にはしてもらえないらしかった。それとアンドロメダ、トンクス先生の顔を思い出したことで、何となくレアとの会話をオスカーは思い出した。トンクス先生と言えば、確かに魔法界でも指折りの純血の家の出身だった。

「分かった。とにかくトンクス先生の方を全面に出していききたいとか？」

「はあ？　どういう意味なのよそれ」

映画館はもう目のまえに見えていたが正解をオスカーは思いつきそうに無かった。

「うーん、ほら女性的な面を全面に出していきたいとか」

「あんた何言ってるの？」

「いつもの魔法の力で変わってる髪色より、トンクス先生の髪色の方がもっと女の人っぽく見えるとかか？」

「あんたほんとにそんなことばかり言ってるんじゃないでしょうね。ますますひどくなってるんじゃないの。ていうかも映画館だし時間切れね、はい終了」

映画館に入りながら、オスカーは続きを考えていた。トンクスは割と思っていることを突かれると怒りだしたり、会話をけむに巻こうとすることを、クラーナとトンクスとの会話を横で見ながらオスカーは観察していたのだ。

「ほら、どれにするのよ。あつちに今やってる映画のポスターが貼っ

てあるわ。ここは結構古いのもやってるみたい」

さつきまでの話はここまでにした方が良さそうだった。オスカーは映画館に来たのは初めてだったし、動きはしないものの魔法界には無いような色使いをしているポスターや、マグルが想像している魔法界を表す様なポスターがあつてオスカーにも面白かった。

「これ全部今日やってるのか？ 出演する人は大変じゃないのか？」

「あー、そうなるのね…… 別にここに描いてある人が出てくるわけじゃないのよ。私たちの写真みたいに動く写真みたいなのを撮って、それを流してるわけ。だから、ロンドンの他の映画館とか、パリやエジンバラでも同じ映画が見えるのよ」

「そうなのか……」

憂いの篩をオスカーは思い出した。あんな感じで色んなモノを見れるのだろうか？ ただ、何にせよ見る映画を決めないといけなかった。トンクスに何を見たいのか聞こうと思ったが、さつきと同じようにあんたは何が見たいのよと聞かれると分かっていて。トンクスは車に乗った少年と白髪の老人が描かれているポスターを見ている様だった。その映画の続編を来年度に上映する旨が書かれている。タイトルは未来に戻ると書かれていて、オスカーには余り意味が分からなかった。

「それも今日やってるのか？」

「やってるみたいね。これ私が一年生の時にホグワーツに入る前にやってたのよ」

「面白いのか？」

「めちやくちや面白いわ。ただ…… そうね、オスカーがどれくらい面白いと思うのか分からないわね。だって、どの映画もそうだけど、魔法使いの常識とマグルの常識は全然違うのよ」

「トンクスがそんなに言うくらいだし、面白いんだろ。それにどうせどれを見ても常識が違うのは一緒だしな。トンクスは二回目になるけどこれでも大丈夫なのか？」

「え？ 別にいいけど…… そもそも上映の時間は…… ちょうど十分後にやるのね」

「チケットって…… あそこか」

オスカーがチケットを買おうと思つて売り場の方に行くとトンクスもついてきた。オスカーはあんまり買い物をするときのトンクスを信用してはいなかったので、先に自分がお金を払ってしまおうと思つていたので。この四年間でトンクスがシツクルやクヌートを支払い時にぶちまけていたのをオスカーは何度も見ていた。

「ポップコーンとコーラかジンジャーエールも一緒に買いましょうよ。一緒に買った方が安くなるわ」

「劇を見ながら食べたり飲んだりするのか……」

周りの人たちが持つている紙バケツに入ったポップコーンを見て、オスカーは自分がこつちを持つた方が良いだろうと思つた。オスカーは財布からなじみの無いお金を取り出した。

「オスカー、あんたそれ百ポンドと五十ポンドの紙幣ばかりじゃないの、しかもスコットランドのやつじゃない」

「え？　じゃあこつちの方がいいのか？」

「なんでそんなやたら細かい小銭とやたらでかいお札しか持つてないのよ」

「ペンスにグリーンゴツツでガリオンから変えてもらったんだけどな」

「オスカーお坊ちやまはマグル世界に出てきてもお金持ちつてわけね、チャリーが草場の陰で泣いてるわよ。これだけあつたら流れ星じゃなくてニンバスの新型でも簡単に買えるもの」

なぜか引き合いに出されたチャリーが可哀想だったが、結局ちよつと白い目でチケットを売る人に見られながらも、オスカーはお札を崩すことに成功した。

ポップコーンとジュースもオスカーが持つことに成功したので、映画を見る前に食べ物や飲み物が床に消えることも防げそうだった。

劇場の中に入るとほとんど真っ暗で、その上、幕らしきものも無く、目の前には白く大きな布の様なモノがあるだけなのでオスカーは少し面食らった。

すでに結構な数の人が座っていて、二人は薄暗い中、チケットに描かれた席番を探して座った。

「幕が無いんだな」

オスカーがボソツと呟くと、隣のトunksが耳元で言った。

「もう始まるし、周りはマグルだらけなんだからそういう事言うのやめなさいよ。静かだからすぐ隣にきこえちゃうわ」

「わ、わかった」

耳元で言われたのも、多分、ジンジャーエールやコーラのモノではない甘い香りがしたのもオスカーはダメだった。映画が始まる前に一層暗くなつたのがオスカーにはありがたかった。

ただ、映画の方は、見る前の事を忘れるくらいには面白かった。これまで見たり読んだりした劇と違って、観客を喜ばすためのいろんな工夫がされているとオスカーは思った。

どこまでがマグルにとつてはありえなくて、どこまでがありえるのかはオスカーには分からなかったが、それでも、オスカーは白髪の研究者のおじいさんが助かる様に祈っていたし、主人公の父親の自信の無さや悪役の傍若無人ぶりにはムカついた。

映画が終わるまでにオスカーのポップコーンもジュースも全然減っていないかったし、隣のトunksも同じようだった。二人はそのままその二つを持って、映画館の外に出た。

「どうだったのよ。オスカーお坊ちやま初めてのマグルの娯楽は」

「凄かったけどな。デロリアンとプルトニウムつてのがあればマグルも逆転時計と同じことが出来るんだな」

「できるわけないでしょ。できたらエライことになってるわよ」

「ああ、じゃあやっぱりあれはできないんだな。じゃあ……あの銃？ を防ぐ服みたいのものもないのか？」

「あれはほんとにあるわよ。というかあのおじいちゃんの発明品は大体ないわよ」

「じゃあデロリアンつて車もないのか？」

「あれはあるわ」

オスカーには何がなにやらチンプンカンプンだった。ただ、少なくともまだマグルは逆転時計と同じことは車を使ってはできない様だった。

「それより…… やっぱり、あの自分のお父さんとお母さんをくつつけるつてのが面白い所なんじゃない？ それとお母さんが息子に一目惚れしちゃうところとか」

「確かにあれは面白かったな。息子なら顔とか雰囲気似てるだろうから無理もないかもな」

「オスカーお坊ちやまがあのお父親だったらとんでも無いことになるよこだったわね」

「え？ どういう意味だ？」

トックスの言っていることが相変わらずオスカーには良くわからなかった。

「いきなりあなたの息子です。娘ですって言うてくる同い年の人がでてきたらあんたいつたいたいどうするのよ」

「そんなことにはまずならないだろ」

「というかあなたの場合、困るのはあんたじゃなくて、子供の方だと思うけど。さっきの映画が簡単に見えるくらい難しいことになるわよ」

「俺は深海のおさかなパーティに行くわけでも、なんか悪役にいじめられているわけでもないからな、大丈夫だろ」

「やっぱり大変なことになると思うわ」

何をそんなにトックスが心配しているのかオスカーにはやっぱり分からなかった。ただ、それより今日はこれまでの三日と違って、ほとんど戸惑うことが無く、これまでと同じようにお互いに冗談を飛ばせるくらいの距離感なのがオスカーには心地よかった。

「午後はどうするのよ？ 今日はオスカーお坊ちやまのマグル街観光に付き合っただけよ」

「どうって言われてもな……」

オスカーにはロンドンと言われても何があるのかが良く分かっていなかったのだ。オスカーにとってロンドンと言われても、魔法省やダイアゴン横丁、マグルの大きな建造物が並んでいる場所程度の認識だったし、今日いった映画館の様に、マグルが普段どんな風にロンドンという場所を認識して、楽しんでいるのか分からなかった。

「あんたはどんな場所が好きなのよ？」

「場所？ 場所って言われてもな……」

「そういや去年はやたら天文台の塔に上ってたじゃないの。なんなの？ トロールとオスカーは高い所が好きだったの？」

「天文台…… 高い所……」

オスカーは思い出した。彼女はロンドンにも行ったことが無いと言っていたのだ。確かに一度くらいロンドンの高い所に行ってもいいかもしれないかった。

「じゃあ高い所で」

「あんたほんとに自分の意思はあるわけ？ 私が聞いたからそう言ってるわけじゃないでしょうね？」

「そんなことないと思うけどな」

「なら、ロンドンなんて高い所は一杯あるんだから、選びなさいよ」

トックスはポケットからはみ出していた薄い本の様なモノをオスカーに渡した。ロンドンのメジャーな観光地について書かれているガイドの様だった。

「朝、パパの部屋にころがってたからパクってきたわ」

「テッドさん……」

「大丈夫よ。私と一緒に多分あったことも忘れてるわ。埃かぶってたし、ママに捨てられる前に救出したと思えばいいのよ」

ガイドをペラペラめくりながら、オスカーはどうせなら外の景色が見れる場所がいいと思った。それにできればオスカーだけでは無く、トックスも楽しめる場所の方が良かった。

「ここは？」

「はあ？ あのね…… いや、まあオスカーが行きたいならいいけど。確かにマグルじゃないと行かない場所だし…… 魔法使いや魔女はこんな作らないとは思うけど……」

「女の人がいたらおススメって書いてあるし、どう見ても高い場所だろ」

「あんたのその、なぜか自分が抜けてる考え方がどこまで本気なのか私には分からないわ」

何か気の乗らなそうな顔のトックスだったので、オスカーは少し不安になったが、そこまで行った後で、オスカーはかなり後悔した。少なくとも、昨日までのオスカーなら自分からこんな場所を選ばなかっただろうし、昨日の酒と元氣爆発薬の効果や、今日はこれまでのホグワーツと同じように過ごせている感覚が大きすぎたのかもしれない。

そこは人が多いわけでは無かった。流行ったのは少し前の様で、人もまばらにしか乗ってなかったのだ。目の前まで来て、オスカーはここに来ようと言ったのを後悔したが、今頃になって乗りたくないとも言えなかった。

少なくともこれまでの三日が嘘だと思えるくらい平穩無事に来ていた。唯一危なかったのは映画が始まる直前の事くらいだったのだ。だから肩の力を抜けて楽しめていたし、食事もマグルがするようにハンバーガーなるものを歩きながら二人で食べていて、パフェの様なことも起こりようが無かったのだ。

しかし、どう見ても目の前の観覧車は危険な香りがしていた。

「では、行ってらっしゃい」

お姉さんが二人をニコニコ見ながら観覧車の扉を閉めた。ゆっくりと観覧車は登り始めた。オスカーとトックスは向かい合う様に座った。どちらかの座席に二人で座ることもできたが、オスカーにはできそうに無かった。多分、エストやレアなら普通に座ってくるに違い無かった。

「ほらオスカーが大好きな高い場所へ今から行くわよ」

「大好きなわけじゃないけどな」

「たか〜い、たか〜いですよ。オスカーお坊ちやま。いや、というか何であんたは高い所に行きたかったのよ」

そう言われても、オスカーはあまり喋ることが出来なかった。

「喋りたくないんならいいけど…… そうね、どうせ今日が終わった

ら二人でしゃべる機会なんて、ホグワーツとかあんたの家では無いだろうから言つとくわ」

「何を？」

「だから…… あんたはもつと主張したらどうなのよ？」

「主張？」

オスカーはトンクスがエストや他の二人とは違う方法で嘘を見破ることを知っていた。ゴドリックの谷でバチルダとした会話の中で、オスカーがトンクスを思い浮かべたように、感情の機微だとかそういう事に變にトンクスは鋭かった。

「今日もそうだけど、もつと自分が行きたいとかそういう事を言ってもいいんじゃないの？」

「ああ、それはできて無いなって自覚してるよ。正直な事言おうと、実は夏休みの予定無いかつて書き込んだ時に、何も自分からしてないなって思っと思わず書き込んだんだけどな」

そう言おうと、今度はトンクスの方が黙ってしまつて少し顔を背けてしまった。

「まあそれはそれとしても、あんたはもつと自分でしたいことをした方が良くないんじゃないのってことよ」

「それが一番難しいと思うんだけどな」

トンクスは言いくいのか、頭をぼさぼさになりそうにくらいに自分でわしゃわしゃとやっていた。その後で真つすぐオスカーの方を見てきたので、オスカーはそれだけで落ち着かない気分になった。

「あのね、今からちよつとキツイ事言うけど、別に私は誰かの事嫌つてるとかそういうわけじゃないから」

「トンクスが大抵の事言つても、俺はたいしてそう思わないと思うけどな」

「あんたはそうなのかもしれないけど、私はどうあんたに受け止められてるかなんて分からないのよ」

じれったいのか何なのか、トンクスはさつきの髪をわしゃわしゃするような行動と一緒に、貧乏ゆすりをしながら少し唇を自分で噛んでいる様に見えた。

「そんなに言いにく……」

「オスカーはね、ちよつとエストとかレアとかクラーナとかに頼られすぎだと思っわ」

「え？」

「だからあの三人は…… オスカーには何でも受け止めてもらえると
思ってるのよ。ほんとにその…… わたしがそれにどうこう思っ
るとかそういうわけじゃなくて、そう見えるって言ってるのよ」

いつものふざけている口調では無かった。トunksは本気でそう
思っているらしかった。それにトunksは何か言ってしまったと言
うような顔をしていた。今にも自分の手で自分の口をふさぎそう
だった。

「それは…… どうい……」

「オスカーは自分が校長室で倒れてた時の事を誰かに聞いた？」

「いや、聞いてないけど」

それを聞くと今度は額に手を当てて、何か悩んでいる感じにトunks
はなつてしまった。それでも意を決したようにもう一度オスカー
に向き直った。

「あのね、クラーナはオスカーのベッドの傍から一步も動かなかつた
し、レアはダンブルドア先生やスクリムジョール先生に杖を向けても
おかしくなかつたわよ。エストは…… ちよつと分らないけど、多
分、何でもやったと思うもの。みんなを集めて校長室に行ったのもス
クリムジョール先生を叩き起こしたのもエストだったわ。ねえ、何が
言いたいかわかる？」

「いや……」

オスカーは今の今まで、あの日の事で自分がそんな状態になつたか
ら、みんながどう思うかなど考えていなかつたかもしれない。も
ちろん、迷惑をかけたことは分かつていたが、それがどれくらいみん
なに影響したのかを考えてはいなかつた。夏休みのみんなの行動も、
もしかすればそれが影響しているかもしれない。

「オスカーは確かに色々できるわよ。ふざけて言ってるわけじゃなく
て、髪飾りを壊したのもオスカーだし、吸魂鬼や叔父さんをぶつ飛ば

したのもオスカーで、トーナメントで勝ったのも、カメラをなんとかしてくれたのも、首につけている石をなんとかしたのもオスカーなのよ。それを私たちは知ってるけど、でもなんでもできるわけじゃないでしょ？」

「まあ人間だし、どれも一人でやったわけじゃないけど」

「そりやそうよね、マーリンやナポレオンだって全部できるわけないもの。オスカーはそういう事できる代わりに、箒に乗れないし、どの女の子にも変な事言うし、お坊ちやまだし、変なところは鋭いのに自分がどう見られてるかなんてほとんど考えてないもの。特に自分が良く見られてるなんて一度も考えたこと無きそうじゃない、と言うか絶対してないわ」

それは昨日考えていた話と似ていそうだった。オスカーは自分に誰がどんな事を望んでいるのかを考えるのが苦手だったし、色んな要素が重なって、自分が良い風にとらえられていると考えるのも苦手だった。

「危なくなる前に、できないこととか、やりたくないことは言わなきゃダメなんじゃないの？ やりたいことも言わないとダメだけど。どっちも言わなきゃダメじゃない？ 私の両親だって、多分私に闇祓いになんか正直なつて欲しくないと思ってるのよ。だって、危ないもの。ママは一回私に言ったわよ。狙われるからやめなさいって。半分冗談だったけど、半分本気だったわ。ママがマグルと結婚したから他の親戚は恥に思ってるんだって。だから狙うかもしれないとかね。でもおかしい話じゃない。ママはパパと結婚するとき家族と離れるくらい喧嘩したのに、私はダメなんておかしい話でしょ？ だから言わないとダメなのよ。嫌なことは嫌だし、好きなモノとかやりたいこともそうなのよ」

「そうだろうな」

あほな事ばかり言っている様に見えて、やっぱりトックスは色々考えているとオスカーは思った。よっぽど自分の方が色々考えていないように感じるのだ。去年はあれだけいろいろ自分で考えたと思っていたのに、トックスの方がよっぽど前に進んでいる様に見えた。そ

れに今の事は勇気を持たないと誰かに喋ることはできなさそうだった。

「だからオスカーもエストとかあの辺に色々言うべきなのよ。特にエストはオスカーだったらなんでも味方してくれると思ってるじゃない」

「そんなことないと思うけどな」

「いやエストは絶対思ってるわよ。どんなにヤバイことでも、最後に絶対オスカーは私の味方をしてくれるってあいつは思ってるわ。レアやクラーナも似た感じだけどね。オスカーはそういう風に思われやすいって思ってた方がいいのよ」

「そういう風って言われてもな……」

そんなことを言われてもやっぱりオスカーはどうすればいいのか分からなかった。味方だと思われるのは大概良いことだと思えるからだ。

「とにかくオスカーはそういう自己主張が強いタイプに好かれやすいのよ。なんでもそうなのか…… わかった…… みたいな感じで受け入れちゃうもの。エストなんか一番そうじゃないの。自分の事はエスト呼びだし、他の人の意見はあまり考えないで自分の意見をバンバン言うわ。それもそれが通ると思ってるのよあいつは。まあそれで嫌に思われなくらい優秀だから許されてるけど。話だって、相手が理解できるかどうかなんて考えてないから飛び飛びになるし、行動だって思い立ったからやろう!! で勝手に始めちゃうでしょ? とにかく、ああいう私がタイプはオスカーみたいなタイプが心地いいし、一緒にいるのが好きなのよ」

「いや……… なんかそれは……」

「何か違う?」

オスカーはこれを言っているのかどうか分からなかった。確かにエストの特徴をトunksが言っていることは突いていたが、同時にもう一人くらいオスカーの脳裏には浮かび上がっていた。エストは自分の事を自分の名前で呼ぶが、もう一人は人に呼ばれる名前にこだわっていた。エストは自分の意見が通ると思ってるが、もう一人は

別に理解されないと思ってた喋っていた。話は二人とも良く飛び飛びになるところがあつた。エストは授業中とかの日常はそうでもなく、感極まるとそんな感じで、もう一人は日常が飛び飛びで、感情がでてくるとそれが無くなっていた。思い立ったらすぐやろうは両方だった。

「いまトンクスが言ってたことだけど」

「なんなのよ。さつきもいったじゃないの。言いたいことは言うべきだって」

「自己紹介かと思つた」

「はあ?」

「いやだから…… トンクスは自分の事を自分で呼んで欲しい名前で呼んで欲しいって言ってるし、トンクスは理解されないと思つて言ってるから、他の意見を結構構いなしに言うだろ。それにこういう時は全然話は飛ばないけど、いつもはなんかいきなり変な方向に飛ばすだろ。劇の時もそうだけど、いきなりこれやろうってところもあるし。だからさつきのはエストもそうだけどトンクスの話かと思つた」

「え…… いや…… いやそんなつもりで、い、言つたわけじゃないわよ!!」

「そんなつもり?」

外を見れば、観覧車はもうすぐ元の場所につきそうだった。しかし、トンクスの方が問題だった。距離を詰めてきて、オスカーがペンスに行つて買ってきてもらった、襟付きのシャツの襟をいつかのようにつけてオスカーは怒鳴りつけられた。

「なんなのよ!! なんてあんたはいつもそういう感じなのよ!! わかるじゃないの!!」

「わかるっていわれても困るっていうか、近い、トンクス」

トンクスが一体に何にそんな怒っているのか分からなかったが、オスカーからすればトンクスとの距離が近いことが問題だった。

「あんたの言い分が正しいなら、エストと私はオスカーみたいなタイプが心地いいことになつちやうじゃない!!」

「確かにそうなるな、とりあえずトンクス、離してくれ、ほんとに頼む

から」

「何が離してくれなのよ!! あんたはこういう事は言えるくせに、なんでこれはやだとか、これがやりたいとかは言えないのよ!!」

「トunks、ほんとに近いから離してくれ」

お菓子の様な甘い香りが髪の毛からした。ゴンドラの窓の外では地上についたはずなのに、なぜか二人を乗せた女の人が二人の方へ手を振って、ドアを開けることが無かった。オスカーはトunksに捕まったまま、もう一周回り始めた。

「トunks、外、外、また回り始めてるから」

「はあ? そんなわけないでしょ。観覧車は一周乗ったら降りるものなのよ。って、なんでよほんとにもう一周し始めてるじゃないの」

やっとトunksはオスカーを離してくれた。オスカーは窓を開けて深呼吸した。距離が近いのも顔が目の前なもの、髪の毛の匂いもオスカーはダメだった。

トunksの方に向き直ると、オスカーの方を睨んでいた。髪の毛の色は相変わらず栗色のままだった。

「なんであんたはそんな感じなのよ。三年生の時のベッドルームみたいなことは言えたり、全部一人でやろうとしたりするくせに、みんなには俺はこれがやりたいとか、これで困つてるとか言わないわけ? おかしいじゃない」

「おかしいって言われてもほんとに困るんだけどな。それにそういう事が言えないから困ったりするしな」

「ほんとに困ってるの?」

「いや、うん、現在進行形で困ってるけどな」

「なら言えればいいじゃない」

「言えないから困ってるんだろ」

「だから言えればいいじゃないの」

「だから言えないんだって」

今、一番困っていることはトunksには相談できなかった。エストもクラーナもレアにも相談できなかった。どう言えればいいというのか、四人の近くにいると動揺します、ドキドキしますとでもカミング

アウトすればいいのか？ 明らかにそれは現実的に不可能だった。

死喰い人が怖いと例のあの人に相談しているようなモノなのだ。

「私に言えないなら、エストには言えるわけ？」

「だから言えないって」

「クラーナは？」

「無理だな」

「レアは」

「言えないって」

「チャーリーのアホは？」

「聞いて意味あるかは分からないけど言えるかもな」

「何よそれ。チャーリーのアホより信頼できないって言うの？ あいつドラゴンの事しか考えてないわよ。パジャマからスリッパまでドラゴン柄なのよあいつ。自分が何歳だと思ってるのかしら」

「いや、ドラゴン柄は関係ないし、ドラゴンの事しか考えて無いの本当だし、別に今回は信頼できるとかそういう問題じゃないんだが」

「はあ？ もう意味わかんないわ。あんたはほんとにもう意味わかんないのよ。数占いとか変身術の理論の数倍意味わかんないんだから」

トンクスは考えるのをやめたとばかりに向こう側の椅子に寝転がった。オスカーは安心した。距離が近いよりも向こう側で寝転がってもらう方がよっぽど楽だった。

「はあ…… そうね、結局映画館に行く前に言ってたのは解けたわけ？」

「髪の話か？」

「そうよ」

「うーん…… レアと昨日話してたんだが、女の人はお姫様呼ばわりされたいのか？」

「はあ？ もうオスカーあんた本当に色ボケしてるんじゃないの？」

いくら暑いし、女の子と連続でデートしてるからって頭やられすぎなんじゃないの？ 昨日実はレアになんか酒に混ぜられたとかじゃないでしょうね」

椅子に肘をついてトンクスは寝っ転がりながらこつちを見ていた。

オスカーにはやっぱりトンクスが一体何に反応して怒りだしたりするのかが謎だった。レアならお姫様呼ばわりすると怒りだすのに、トンクスはブーメランだと言うと怒りだすのだ。クラーナならお酒が身長のことを言うと怒りだす。エストは怒らせると怖いのでオスカーには怒らせる方法が思いつかなかった。

「いや、なんかみんなをお姫様呼びするとどうなるかって話で、トンクスは語呂がなんか悪いなって話をした」

「ぜんぜん髪の話と関係ないじゃないの。エストの特性がオスカーにもうつつてきたんじゃないの？」

「トンクスの髪色はトンクス先生のだろ。トンクス先生はブラック家だろ？ だから血筋だけならエストと同じくらいお姫様なんじゃないかってレアが言ってたからな、なんかそれを思い出したんだけど」
「何言ってるのかももうわかんないわ。ほんとに魅惑呪文とかくらくらくるんじゃないの。いやいつもこれだからもう手の付けようがないわ」
なんと無く、トンクスの髪色の話とお姫様の話がオスカーの頭の中でつながりそうで中々つながらなかったが、今になってやつとつながった気がした。

「ああ、そうだ。トンクスがトンクス先生の髪色にするってことは、いつもと同じじゃなくて、女性らしくみせたいのかって思ったんだよ。それがなんかお姫様呼ばわりされたのとなんかつながったって言うか」

「だからあんた何言ってるか分かって言ってるの？ もうほんと、なんなのよ？　なんで自分の事は言えないくせに、何で困ってるかは言わないくせにそんなことはボロボロボロ言いまくるのよ!!」

「え？　いやトンクスが何でも言った方がいいって言ったんだろ？」

まあ、トンクス姫様だと言いくらいから、ドーラ姫様の方が面白いし言いやすいって、レアと話してたって話なんだが

「なーにがドーラ姫なのよ。ぶっ飛ばすわよ!!　パパでもそんな言い方してたのは小さい頃だけだわ!!　だからなんでそんなことは恥ずかしいかもしげもなく言えるわけ？　もうほんとにあんたは意味わかんない!!」

と言つてトunksは椅子に寝転んだまま、寝返りしてうつぶせに倒れこんだ。オスカーは何か変な感じだった。いつもと同じように喋れているようで、何か感覚が違った。ただ、これまでと違って他の三人より距離があるせいで、普通に近い感じで喋れている実感がオスカーにはあつた。

そうこうしている間にトunksはスイッチを入れなおしたのか、いきなり立ち上がって、オスカーの方を見てきた。

「そうよ。今回は色々試してみるのも一興だと思つたのよ」

「何を？ 俺がマグルの世界でも生活できるかどうかか？」

「そんなのどうでもいいわよ。前座みたいなものだわ」

「そうなのか、俺は結構面白かつたけどな」

「それは良かったわね、私は今ちよつと後悔してるけど、ホグワーツに行く前に色々はつきりさせたいわ」

「そうなのか」

そこまで喋つた段階でトunksはオスカーと同じ側の椅子に座つてきた。腕を組んでオスカーの方を睨みつけていた。オスカーの方は距離があんまり縮まつたので、さっきの様に喋れる気がしなかつた。

「あんた、私になんかするときにも肩を持つじゃない」

「肩？」

「だから、ベッドルームの時も、惚れ薬の時も私の肩をこうやって持つて喋つてたでしょ？ なんか意味があるわけ？」

「え……」

トunksがオスカーの両肩に手を置いて、そういつた。そうすると真正面からトunksの顔を見ざるを得なくなる。オスカーは確かにトunksの言つた二回とも今と同じ体勢で喋つたのを覚えていた。しかし問題なのは、オスカーがそうしたのは無くて、オスカーがオスカーではない誰かにそうされた記憶があることだった。

オスカーは去年たびたび感じていたのと同じような怖さを感じた。

「ほら、なんか癖なのかもしれないけど、一番こつぱずかしい事をいう時に…… オスカー？」

石の一件があつた後は、トンクスだけでなくエストにも同じような体勢でオスカーは喋っていた。しかし、問題なのはそれでは無かつた。オスカーがそういう風にトンクスに喋る時の体勢としてそれを選んだのには理由があるはずだつた。それも他のエストやクラーナやレアと喋るときにはそういう風な体勢で喋っていないのだ。去年度の最後までには。

「ちよ、ちよつと、オスカー？ どうしたのよ。ねえ、わ、私にやるのは良いけど、やられるのは嫌だつたとか？」

その時、大きな音と一緒に大きくゴンドラが風で揺られて、傾いた。トンクスがそのままオスカーの方へ体勢を崩した。オスカーはトンクスを受け止めたが、頭の中はそれどころでは無かつた。

「お、オスカー、流石に近いって言うか……」

オスカーは頭の中で否定していたが、自分の行動は明らかにそうとしか思えなかつた。彼女にされたことをどうしてトンクスにだけやったのかだ。病院にいたおじいさんの話や、今日、トンクスと一緒に楽しく歩いて、映画館やロンドンの街で思い知つた様に、マグルには魔法使いに無い考え方があつたのを知っていたし、トンクスが時々そういうエッセンスや匂いや考えを行動で示しているのも分かつていた。だから無意識の間に重ねていたのだろうか？

「ねえ、オスカー聞いているの？」

そんなことはしていないとオスカーは思いたかつた。彼女もトンクスも別の人間だつたし、重ねているからそうしたいなんて思ったこととは無いはずだつた。ハツフルパフ寮でも惚れ薬の一件だつて、オスカーは重ねていたからトンクスにそう言つたわけではないはずなのだ。

「オスカー？ そんなに聞いちやダメだつたの？」

そんな事をしたらどつちにもオスカーは面目が立たなかつた。やつていいことと思えないのだ。トンクスじゃなくても、他の人でもダメだつたし、他の人では無くて、トンクスだからそういう事を言つたはずなのだ。

しかし、顔にいきなり感触があつて、オスカーは現実に戻され

た。今度は肩では無く、オスカーの顔をトunksが両手の掌で挿むように固定していた。距離が四日間の誰より近かった。

「オスカー？ 聞こえてるわよね？」

「聞こえてる」

「あのね。そんなに聞かれたくないことなら聞かないわよ。さつきは何でも言った方がいいって言ったけど、言わないのだから自由だもの」

「いや……」

「だって言いたくないんでしょ？ 少なくとも、こんな近くに誰かいるのに上の空になることなんて、言わない方がいいわよ」

確かにこんなに近くにいるのに、自分の考えで一杯になるなど普通では無かった。オスカーはいつたいトunksからはどんな風に自分が見えていたのかが気になった。

「俺、そんなにおかしかったのか？」

「すごいおかしかったけど、まあ良しとしとくわ」

「それじゃダメなんじゃないのか」

「だからそんな状態になることなんてそんな簡単に言えないでしょ」

オスカーは強烈な後悔に襲われていた。やっぱりトunksは感情の機微に鋭かった。多分、ほかの三人ならオスカーが肩を持って喋ったことに注目すらしないかもしれない。オスカーはトunksに謝りたかった。

「ごめんトunks」

「何を謝ってるのよ」

「多分、昔自分がやってもらった事をトunksにしてた」

「それはなんか不味いわけ？ いいことを他の人にするのはいい事なんじゃないの？」

「多分、トunksとその人を重ねて見てたかもしれない」

「重ねて……？」

どこまで喋っていいのか分からなかった。ただ、オスカーからすればこうして、自分の主張をしたり、誰かにも自分の主張をして欲しいと言ってくるトunksに誰かを重ねるのは良くないと思ったのだ。

「全然似てないけど、無意識にやってたかもしれない。トンクスはそう言うの嫌だろ。他の人と違うことをあえてしたりしてるし、今日だって俺にずっとそんな感じの事を言ってただろ」

「別にそんなのわかんないし、謝らないでもいいわよ」

「いや、ごめん。でも、とっさにあんな感じで肩を持って喋ったのはそうだったかもしれないけど、言ったことは誰かに重ねてじゃなくて、俺がほんとに思っ、トンクスだから言ってたから……」

そう言うと、トンクスが静かになった。いつの間にか、トンクスの手はオスカーの頬から離れていたが、相変わらず距離が信じられないくらい近かった。

視線を動かしてトンクスの方を見ると、今日ずっと栗色だった髪が赤くなっていた。

「だからオスカー、あんたはなんでそんな事を言えるのよ」

「え？」

「だからなんでそんな恥ずかしいことを平然と言えるのって言ってるのよ!!」

「恥ずかしいって……」

オスカーは自分に言ったことを考えてみた。肩を持って言ったことはトンクスだから、本心からトンクスだから言ったと。オスカーは惚れ薬の時に何をトンクスに言ったのか思い出した。オスカーはトンクスの顔が一番好きだとかそういう事を言っていたのだ。

それに、トンクスとの距離があり得ないくらい近い事を思い出した。文字通り、考えの方に行っていた神経や脳みそや体の色んな場所が目覚めた様だった。やっぱり、お菓子のような甘い香りが髪からしたし、ほとんど触れていてギリギリ抱き合わなくらい距離が近かった。

オスカーは自分の顔や耳が赤くなっているだろうことが分かった。

「お、オスカーあんたが赤くなってどうするのよ!!」

「いや、ちよ、ちよつと離れてくれ……」

「なんで、ベッドルームや惚れ薬の時は平然としてたのに、今は赤くなるのよ!! おかしいじゃないのよ!!」

トンクスが惚れ薬の時といったせいで、オスカーは惚れ薬の時の感覚や色んな事を思い出した。思わず、トンクスの唇の方を見てしまつて、オスカーはますます自分が赤くなっていることが分かった。

「だからなんでもっと赤くなるわけ!? ちよつと、ほんとにどうしたらいいか分からなくなるからやめなさいよ!!」

「いやだから、ちよ、ちよつと離れてくれよ。ほんとに頼むから」

オスカーは何とかトンクスから逃げようとしていたが、トンクスの方は顔に両手をあててなぜかますます髪も顔も赤くなって全然動かなかった。それにまたゴンドラは一番下まで来たが、係員のお姉さんはオスカーとトンクスの方を見るとまた笑顔で手を振って、扉を開けようとしなかった。

「ちよ、ちよつと、何周させる気なのよ!!」

「いや、トンクスとにかく離れてくれ。ほんとに限界だつて」

「何が限界なのよ!! とうかほんとになんであんたが赤くなるのよ!! エストやクラーナと一緒に全然そんなことなかったじゃないの!!」

「ほんとになんでもいいから離れてくれ。頼むから」

観覧車に乗るまでは一番気楽で心が落ち着く一日だったはずなのに、観覧車に乗ってからオスカーは四日間で一番体力を消耗した。

これだけ疲れても、オスカーの夏休みはまだまだ終わってはいなかった。

ノクターン横丁

「何ガリオンあったら足りるんだろ…… ドラゴンの卵の相場って…… オスカーも分からないよね？」

「チャーリー、あんまりでかい声で言うなよ。漏れ鍋にだって、魔法生物規制管理部の人がいてもおかしくないんだからな」

漏れ鍋のテーブルに座って、オスカーとチャーリーは人を待ちながら、今日の予算について話し合っていた。チャーリーは周りで誰が聞いているか分からないというのに、ドラゴンの卵の話をしたくてたまらない様だった。

「たしかにそうだね。でもこれだけあったらニンバスの新型も……」

ガリオン金貨を七十枚ほどチャーリーはテーブルに広げていた。少なくとも、前にウィーズリー家の金庫でオスカーが見た金貨の数よりよっぽど多かった。

チャーリーはさつきからドラゴンの卵にこれを使うのか、ニンバスという最近評判になっていくブランドの箒に使うのかを悩んでいる様だったのだ。

「まあ三十ガリオンくらいなら俺も出すよ。どうせエストに言われるまま賭けてて貰えた金貨だしな」

「ありがとうオスカー…… エストはもうニンバスに乗ってるんだよね、去年から」

「そうだな、去年エストに何回か操縦性がどうだとか、箒の流線形が凄いとかわわれた気がするな」

それを聞くとますますチャーリーは難しい顔になった。オスカーからするとこんな真剣に悩んでいるチャーリーを見たことは無かった。いつもオスカーが悩んでいる時や追い詰められている時に限って、チャーリーは大爆笑している気がしたが、オスカーは今のチャーリーを見てもそんなに笑えなかった。

「エストは僕とかうちの家族にはそういう話はあんまりしないんだよね」

「そうなのか？ 隠れ穴にいるときは延々とクイディッチの話をして

るのかと思つてた」

オスカーは単純に意外だった。チャドリ・キャノンズという、オレンジ色で万年最下位争いをしていくクイディッチチームのファンをエストはしていたし、それはチャーリーの一番下の弟であるロンに著しい影響を与えていた。

それにあの兄弟は上から一番下のジニーまでなんだかんたんに乗るのが上手いのだ。ちよつとパーシーは例外かもしれないが。

「クイディッチの話はするけどこういってお金が絡む事に繋がる話は…… エストは僕らの家族の前では絶対しないんだよ。学校にいるときのエストだけを見てる人には意外かもしれないけど、オスカーならわかるだろ？ なんだかんた、うちのパパとママとか兄弟が困る様な話題は絶対出さないんだ」

「そーいや…… フレッドとジョージもエストに怒られたことはほとんどないとか言つてたな」

「あの二人もミュリエルおばさんにはクソ爆弾をぶつけていいと思つてるのに、エストにやつたらえらいことになるのが分かつてるからしないんだよね」

オスカーは不意にウィーズリー家の家族みんなの位置がわかる時計を思い出した。あの時計にはやっぱりエストの名前が無いのだ。オスカーは初めて隠れ穴に行った時に自分がここにいていいのか自信が無かった。ミュリエルおばさんやエストが住んでいる家に行った時も同じだった。ならエストは隠れ穴にいる時はどう思っているのだろうか、オスカーは自分がそんな事を考えたのは初めてだと思つた。

「だから…… 多分、うちの家族からするとオスカーと一緒にいるときのエストは意外な感じに見えてると思うよ。僕らには…… あんまりわがままを言つたりはしないからね、特にママの前だと、何かしたいとかそういう風な事は言わないんだ」

「それってなんでなんだ？ 聞いていいのか分からないけど……」

オスカーはむしろ普通なら反対だと思つた。普通は血の近い人を頼つたり、甘えたり、わがままを言うものではないのだろうか。前に

ジニーやロンが小さいから、旅行に行こうとは言えないとエストは言っていたが、それ以外に理由があるのかとオスカーは考えた。

「ジニーが生まれるまで、うちの家族は男ばかりだったし、パパの兄弟とか家族も男ばかりで…… エストにはおか…… 男の家族とミュリエルおばさんしかいなかったから、うちのママはめちやくちやエストを可愛がってたんだよ。あのころはエストもうちの兄弟も小さかったけど…… 人間って女の子の方が成長が早いし、エストはそのころから色々ずば抜けてたんだ」

「まあなんか想像はつくな」

隠れ穴にはジニーが生まれるまでは女性はモリー・ウィーズリー一人だっただろうし、子供ならだれにでもやさしいウィーズリーおばさんが、自分の身内で母親のいなかったエストにどれくらい愛情を向けていたのかはオスカーにだって想像できた。

それに普通に考えれば、ホグワーツに入った後でもずば抜けていたのなら、入る前だつてずば抜けていなければおかしかった。

「僕がドラゴンとか魔法動物の話ばかりしてたから、エストも結構それに合わせてくれてたんだと思うんだけど。日刊予言者新聞にある日、ヒツポグリフかなんかの話に乗ってて、ちょうど規制管理部のデイゴリーさんがうちの暖炉に来てたから、僕とエストで捕まえて三時間くらい喋ってたんだよね」

「デイゴリーさんって隠れ穴の近くに住んでるとか言う人か、エストがセドリツクって言う息子の自慢しかしないのって言うってたな」

オスカーもエストに聞いたことがあった。セドリツクという息子の自慢しかない魔法生物規制管理部の職員が隠れ穴の近くに住んでいると。それに一年生のころにルーンスプールの輸送について動いてくれた一人であることも言っていたのだ。

「そうだよ。セドリツクの専門家であつてるよ。そのとき僕はヒツポグリフはどれくらい大きいとか、どれくらい飛べるとか、何を食べるみたいな事を聞いてたけど、エストの方はなんでヒツポグリフを法律で規制したり護ってるのとか、デイゴリーさんはどれくらいその法律に関わったのとか、デイゴリーさんのボスは誰？ その人はどこまで

の事が出来るのとか、今考えると、全然違うレベルの事を聞いてたんだよね。これ事件の…… ホグワーツに入る五年位前だから僕らが五歳とか六歳のころの話だからね」

「俺は多分ペンスに靴下を脱がせてもらってたな」

もう喋る様になつて五年目になると言うのに、チャーリーから小さい頃のエストの話聞いたのは初めてかもしれない。よくよく考えれば、エストから直接そういう話を聞いたこともオスカーはほとんど無かった。

ただ、二人の関係性を考えれば当然かもしれない。どうしてもエストが小さい頃の話ですれば、二人の家族の話が出てきかねなかったし、ウィーズリー家の前でお金の話をしないように、エストはオスカーの前でもそういう話を避けているのかもしれない。それにそういう話をしないのはオスカーの方も同じだった。

「そんな感じで、エストは頭とか話とかもあのくらいの子供のレベルじゃなかったんだけど、魔法の方はもつと凄くて、ママが杖で料理作ってるのを見て、ママがいない間に自分の両手の魔法だけで鍋とかナイフを操って料理を作ってみたりとか、かくれんぼをしたら、箒は禁止にしたはずなのにうちの屋根の天辺に座つてて、どうやって上がったのか聞いたら、その辺の大人の魔法使いみたいにバチツて姿くらましを杖なしでやって登つてたりしたんだよ。そのころになつたら、流石にママも普通の魔法族の子供のレベルじゃないなって分かってたんだと思うけどね」

「流石にってなんなんだ？」

「オスカーだから言うし、ママやエストには言わないでくれるよね？」
「ああ、分かったけど……」

オスカーは本当に珍しいと思った。チャーリーが動物やクイデイツチでは無くて、人間の事を饒舌に喋ることや、ドラゴンの卵の話をしていたのにこういう話を半分夢中になつてすることがだ。チャーリーはドラゴンの卵の話も、それを買うにあたってグリフィンドールの生徒に協力してもらおう事になっていることも忘れていそいだった。

「ミュリエルおばさんは今でも結構エストの事を特別扱いしてるけど、小さいころもそうだったんだよね、それに叔父さん二人もそうだったから、ママはそう言うのが嫌で僕らと同じようにエストに接してたんだよ。これも今考えるところ思うんだけどね」

「まあ実際そうなんだろうけどな」

「これの面白い所は、僕が思うのは実は逆だったんじゃないかってところなんだよね」

「逆？」

チャーリーは笑っていた。どちらかと言えばドラゴンの話をするときや、珍しい動物の話をするときと同じ笑いにオスカーには見えなかった。少なくとも、オスカーが困っている時のバカ笑いとは種類が違っていた。

「ドラゴンなんかの生き物の世話をするとき、僕らは特別に注意して扱ってるわけなんだけど。実は僕らの方より、ドラゴンの方が僕らに神経を使ってるってことなんだよ。潰したり焼いたりしないようにね」

「はあ？ ああ、そうか、要はエストの方が俺たちに気を使ってるってことか」

「そうだよ。僕や兄弟と遊ぶときに子供らしい喋り方とか遊び方にエストは合わせてたんだと思うんだよね。これも今考えるとだけどね、あの頃から大人と同じような議論とか質問をできてたと思うし、それに今も同じじゃないかなと思うよ。エストの方が僕らに気を使って喋ったり、行動してるってことさ」

恐らくチャーリーが人をドラゴンに例えると言うのは、チャーリーからすれば最大限のリスpektだとオスカーは思った。それに昨日のトンクスが言っていた事と比べると、視点が変わると人はこんなに見える方が違うのかとオスカーは考えた。トンクスからすれば、エストは人の事を考えないで言いたい事をバンバン言う、つまり人に合わせない人間だと言っていた。ところがチャーリーに言わせるとむしろ逆だというのだ。

「エストがああいう喋り方してるのは結構不思議じゃないか？」

だって授業中とかは先生がびつくりするくらいの喋り方をしてるのはオスカーが一番知ってるよね？」

「そりゃまあ四年間隣で聞いてたからな」

「あれも要は、子供らしい喋り方を自分でしてるんじゃないかと思うんだよね。そうしないとママが心配するから。だって普通、六歳の女の子は高等変身術の理論を読んだりできないし、大人の魔法使いと議論できたりはしないんだよ。それがそのまま残ってるんじゃないかと最近はあるんだけど。ホグワーツに入る前はやる気のない振りをしてたと思うし。まあ隠せて無かったけどね。オリバンダーの店なんかエストだけ半日帰ってこなかったから」

「そうか…… まあでもいつもの会話は俺たちに分かる様に喋ってるかもな。ちよつと気分がのると途端に飛び飛びになるし」

あくまでこれはチャーリーの視点の話だとわかっていたが、エストの話し方が他の人に合わせたものであるというのはオスカーには結構な衝撃だった。エストはついこの間、自分をなんと呼ぶかをオスカーに聞いてきたのだ。オスカーはどう思う？ と聞いたのだ。

「それは多分オスカーの前だから余計だと思っただけだね。まあでも、みんながみんなオスカーやクラナミみたいにエストの感性みたいなのに合わせてられるわけじゃないし…… 僕がオスカーになんか言うなら…… ずっと不思議だったんだけど」

「不思議って何がだ？」

「エストとトンクスが喧嘩しないことかな？ 二人がドラゴンだったなら多分もう殺し合ってると思うんだけど」

「何言ってるんだチャーリー」

チャーリーが半笑いで物騒な事を言い始めたので、オスカーは意味が分からなかった。

「なんて言うか、あの二人、よく喧嘩しないよね。行動とか考え方とか途中まで似てるのに、最後になんか決めるところが正反対だとおもうけど？ それにあの二人、二人とも意見がぶつからないようにしてると思うんだよね。二人が動物で互いに群れの中にいたなら、絶対容赦しないと思うんだけど」

「まあわからなくもないし……二人が言い争ってるのはほとんど見たことないな。怒っててもクリスマスMASの時くらいだし、たいがい俺がクラーナもいるからな。流石にそんなに意識してると思えないけど」
オスカーはそうは言ったものの、昨日感じたのと、チャーリーの言っている様に、途中までは似ているのに正反対の結論を出しそうなのはオスカーにも同意できた。

それにエストの方はそうでもないかもしれないが、結構トックスはエストを意識しているのかもしれない。昨日も一番エストについて言及していたし、参考になるのかは置いておいても惚れ薬の時も一番反応していたように見えたからだ。

「まあそんな感じかな。とりあえずオスカーはママやミュリエルおばさんより、エストに効果的だから頼むよ」

「なんなんだ効果的って」

「ズーウーやニーズルにマタタビを与えるみたいなものだよ」

「全然意味が分からない」

結局チャーリーが何を言いたいのかはよく分からなかったし、やっぱり最近の悩みについてチャーリーに話してみても、大爆笑されそうなのがオスカーはしなかった。

「いくら漏れ鍋だって言っても、こんなにガリオンを広げるのは不用心じゃないか」

「ジエイ、結構遅かったじゃないか」

「仕方ないだろ、夏休み中の僕の家はホグワーツみたいに簡単に抜け出せない」

テーブルに黒髪の東洋人風の少年が座った。やっとオスカーとチャーリーが待っていた人物が来た様だった。

「オスカー、多分顔は知ってると思うけど、一応紹介するよ。グリフィン・ドール生のジエイ・キムだ。さつきも言ったけどノクターン横丁にいつも出入りしてるらしいから、今日はついて来てもらおうと思ってる」

「よろしく、オスカー。僕の方は君の名前も顔も知ってる」

「ああ、よろしく、ジエイ。俺の名前と顔を覚えてるなんて記憶力が良

いんだな」

ジェイ・キム。オスカーやチャーリーと同級生で、賭けの元締めをしていたり、違法なモノや禁止の物品をホグワーツに持ち込んで売っていたり、トンクスと同じくらいの規則破りで、良くフィルチや先生に捕まっている学生のはずだった。

「今のは冗談だろ？ 君の名前と顔を知らないホグワーツ生なんていない。いつもノクターン横丁に一人で行く時はびくびくしながら行かないといけないけど、君が来るならそんなことは無さそうだしね」
「ジェイ、いくらオスカーがいても夏休み中は魔法は使えないんじゃないかな？」

「チャーリー、ダイアゴン横丁やノクターン横丁で僕らが魔法を使っても、魔法省のマヌケどもはそれを誰が使ったのかは分からないのさ。それにあそこでは杖は常に構えといた方がいい。ケチなスリから、狼人間どもに死喰い人崩れまで、色んな奴らがうようよしてるから」

ジェイは学生の間から何度もノクターン横丁に出入りしている様だった。オスカーもチャーリーもそういう場所のルールを知らなかったし、彼に案内を頼んだのは正解かもしれないなかった。

テーブルの上にジェイは三つ小瓶を置いた。

「それに、ノクターン横丁で買い物をするなら雰囲気が必要なんだ。とにかく相手に舐められないことだ。ハグリッドは体がでかいからそういう意味では舐められないけど…… 要は、あんまり頭が回る方じゃないから、ああいう場所に行くときすぐ騙される。僕たちはハグリッドとは頭の方は違うけど、年齢と体の大きさが足りない。それでこれなんだ」

「老け薬か？」

「話が早くて助かるよ、オスカー。こいつは一滴で数か月くらい一時的に年をとれる。だから僕らが二十四、五歳くらいになるようにビンの中に詰めておいた」

確かにお酒を頼むときは自分の年齢が大切だったし、若いと舐められるというのは確かかもしれない。ただ、オスカーはちよつと

ジエイに助けられすぎていると思った。

「ジエイ、結構老け薬って作るのが難しいんじゃないか？」

「そうだよね、案内してもらおうのに……」

オスカーとチャリーりの言葉に、ジエイは分かってないとはばかりに指をチツチと振った。

「僕はまあ頭は回る方だけど、あんまり杖の腕や荒事には向いてないんだ。それに僕の方もホグワーツに行くまでに色々買いたいモノがあるし、決闘チャンピオンさんがいれば安心して買える物ができるだろう？ WinWinってわけさ」

「じゃあなんかあったらオスカーに任せて逃げればいいってことだね」

「なんかおかしいだろ。そんな杖を使うようなことに普通ならなと思うけどな」

「まあとにかくさっさと行こう。とりあえず、ダイアゴン横丁の入り口でこれを飲んで、その後、フードの付いたローブを渡すからそれを着てくれ」

三人は漏れ鍋を後にして、後ろのダイアゴン横丁に繋がるレンガの前まで来た。老け薬のビンを開けて一気に飲み干すと、ポリジューズ薬の時とは違って、体が書き換えられる様な感覚では無かった。かなり大きめなローブを着ていたはずなのに、オスカーはかなりきつく感じたし、下着や靴はなおさらだった。

「みんな飲み終わった……」

「オスカーは早めにフードを着た方がいいな、ほら」

「え？ 分かった」

途中でオスカーの方を見て声を止めたチャリーりが少し気になったが、オスカーはジエイに渡されたフード付きのローブを着た。

三人ともそれを着ると魔法がかかっているのか顔が見えなかったし、老け薬のせいかみんなの体格がさっきよりもごつく見えた。

「人が来ない間に行こう」

ジエイがゴミ箱の上の方にあるレンガを杖で叩くと、叩いた場所が震えだして、一個、二個とレンガが抜けて行った。最終的にレンガ全

体が大きく動き出して、ダイアゴン横丁へのアーチが現れた。

今回オスカー達は日の光が差し込むダイアゴン横丁では無くて、その隣の薄暗いノクターン横丁に用があるのだった。

今度は煙突飛行で間違っただけでは無く、ダイアゴン横丁から正規のルートでノクターン横丁へと向かうのだ。オスカーは純粹にちよつとした冒険をしているようで楽しかった。

男三人だったし、出かけて遊ぶ内容が、誰かが悲しむとかそういう事に関わる様な事では無かったからだ。

「ところでオスカー。夏休み中にダイアゴン横丁にいただろ？」

「え？ ああいたけど……」

顔は見えなかったがジェイがニヤニヤ笑いながら言っているとオスカーは思った。多分その横のチャペリーも同じ感じだろう。

「グリフィンドル生はあの小っちゃい闇祓いさんを応援してるってわけさ。昔は僕がなんかするたび小うるさかったけど、君らという間にどんどん丸くなっちゃっただろ？ あんなでかい声でギャーギャーうるさかったのに、今じゃうちの女子じゃ一番純情なんじゃないかな？」

「確かにクラーナは静かになったよね。昔は闇祓いガーとか一呼吸する間に三回くらい言ってたし」

「そんなには言っていなかったと思うけどな。流石に」

オスカーはそう言いながらも、たった三日くらいでジェイにはクラーナとダイアゴン横丁で一緒にいたことがばれているのが不味いと思った。この分だと、ホグワーツに戻るころにはグリフィンドル生全員が知っていそうだった。

ノクターン横丁に入ったが、まだ真昼間なのと入り口の方なので特に目立った商店があるわけでもなかった。

「談話室でもうるさかったんだけどね。闇の魔術に対する防衛術の前はグリフィンドルの一年生みんなで予習しましょうよとか言ってたし、オスカーのセーターの事言われたら杖を振り回してたし」

「たしかに着てたな。君の事を話題に出す度にアズカバンとかヌルメンガードとか言ってたくせに、あんなセーター着てたから、男子も女

子も言いまくってたな」

「あれは俺も普通に着てくるとは思ってたなかった。というか、もしかしたら返してくれるかなって思ってたんだが、結局二年のクリスマスまでずっと着てたからな。絶対ぶかぶかだったと思うんだが」

そう、セーターに関しては何も不思議だった。オスカーとクラリーナの体格差は今ももう一年生のころとは比べ物にならないくらいになっているが、一年生の時でも結構差があったのだ。なのにクラリーナは次のクリスマスになるまで、冬の間あのセーターをずっと着ていたのだった。

オスカーは誰も女の子がいないので、好き勝手喋れるのは楽しかった。エストがいたらセーターの話は気にするだろうし、トンクスは男子と同じように喋ってはくれるだろうが、多分クラリーナに関して話すと別の意味でうるさかった。

「クラリーナは談話室だとそんな感じなんだな。前行った時の感じだとずっと談話室で勉強してるのかと思ってたけど」

「特に一年生のころはみんなに勉強しませんかって言いまくってたね。オスカーとトンクスと一緒に練習するようになってだいぶ静かになったけどね」

「エネルギーが有り余ってた感じだったみたいだけど、君らと行動するようになってそれが消費できるようになったんじゃないかな？」

とにかくうるさかったからなあ。ジェイ、そんなことばかりしているとアズカバン送りになりますよ。チャリー、禁じられた森に入り浸ってたなら、アクロマンチュラに食べられても知りませんよ。いいですか？ 闇の魔術に対する防衛術はホグワーツの授業の中でも……

みたいな事を口が開く度に言いまくってたし、先輩にもつつかかりまくってたからな」

オスカーは頭の中でジェイが演じるクラリーナを簡単に想像できた。確かにあの頃に比べれば丸くなったかもしれない。ただ、オスカーからすればずっと一緒に行動していたエストも負けず劣らずいろんな事をしていたので、二人に比べればクラリーナのそういう印象が薄いかもしれない。

「トックスと一緒にしとけばずっとトックスと言いつけるから、それでちょうどいいのかもな。いい感じに疲れるって言うか」

「それは結構有力な説かもね。普段のクラーナの生態を考えると、トックスとオスカーがいるかいけないかでだいぶ変わると思うよ」

「クイディッチのお姫様が筆頭だろうけど、君らと一緒になら同じくらいのレベルの話ができるから静かになっ…… ああ、ちよつとあそこの店に入ろう。C級からB級くらいの取引禁止品が時々店に出てくるんだ。ドラゴンの卵はあるか分からないけどね」

ジェイが指さしたのは、路地の奥の方にあるシャッターの閉まった店だった。看板は一応あるにはあるが、何度も店の名前を上から書き直しているせいで、どれが今の名前なのか分からなかった。ただ、ノクターン横丁の場合、ほとんどの店が怪しかったのでこの店が殊更怪しいというわけでは無かった。

店の前まで来て、ジェイはシャッターを杖で三回叩いた。すると、シャッターの方では無くて、横のレンガ造りの壁がドアに変わった。「この辺の店はこのぼつかりさ。ちゃんとした店を構えてたボージン・アンド・バークスが燃えちゃったし、あの店は魔法界の重鎮たちとつながりがあったはずなのにああなったから、みんな結構疑心暗鬼になってるみたいなんだ。魔法省がそういう店を計画的につぶしてるんじゃないかって噂まであるくらいだよ」

ボージン・アンド・バークス。オスカーはその名前をどこかで見たことがある気がした。確か新聞の中で火事になったという記事を見た気がするのだ。しかしオスカーには、違法な品を扱っている店を潰すと言うのはそんなには悪いことのように思えなかった。

扉の向こう側は階段になっていて、三人がそれを下りると、魔法薬学の教室と同じような匂いのする部屋に出た。得体のしれない植物や動物の一部、それに由縁の分からない魔法の道具が沢山置いてあった。ジェイは立ち止まることなく、奥の鉄格子の向こう側に座っている人物に話しかけた。

「なんか、いい出物はあるかな？　夏の間色々買いこんで置きたいんだけど」

「アクロマンチュラの毒液が珍しく出回ってるな。ノクターン横丁中に売り歩いてるやつがいるせいで、相場がずいぶん下がってる。他は有毒食虫蔓、瘡蓋粉、暴れ柳の苗、ユニコーンの尻尾の毛、マンティコアの鬣、ニワヤナギ、本物かどうかは分からないがヌンドウの息を閉じ込めたとか言う小瓶もある」

オスカーにはどれがどれくらいヤバイ物なのか分からなかったが、アクロマンチュラやヌンドウが×が五つくらい必要なキメラと同じかそれ以上に危険な動物だと知っていた。

横でチャーリーがオスカーにささやいた。

「ヌンドウの息は流石に偽物だと思うけどね。本物ならA級どころかもっと上の禁止品だろうし、バジリスクの毒とかそういうレベルだよ。だって一息で村が全滅するらしいからね」

「どうやって使うんだよそんなの閉じ込めて」

「凄くない生物をやっつけるとか、気に入らない魔法使いの家に投げ込むとかかな？ あとはマグルの炭鉱とか地下鉄とかに投入すると一番効果があると思うよ。毒は下に行くからとどまり続けると思うし」

「なんでチャーリーはそういう事考えるときだけやたら物騒なんだ」

こういう手段を考えるときにチャーリーのアイデアに従うのはやめておいた方が良さそうだった。大概物騒かえげつないことしか考えないとオスカーは思っていた。

「というかどうやって本物が確認できるんだ」

「本物なら開けたら死ぬから一発だよ」

確かにそれはそうだがとオスカーは思った。どっちにしろ開けた本人には不死鳥の涙でもない限り、それが本物かは分からないのだ。

チャーリーと騒いでいる間にジエイは今度はモノを売ろうとしているらしく、そこそこと自分のカバンから植物や動物の一部を取り出していた。

「ユニコーンの尻尾の毛、ハグリッドと火蟹にあげる餌と交換したから本物のはずだ。それにチョウセンアサガオの根、ブボチューバーの膿み、後はキメラの鬣がある。いくらくらいになる？」

「ちよつと待つてろ」

鉄格子の向こうの男はなにやら怪しい天秤の様なモノと、長い羊皮紙を取り出してジェイが渡した色んな物品の品定めを始めた様だつた。

「ドラゴンの卵は無さそうだね」

「あの人に出回ってるかどうか聞くんじゃないか？ それにそうそう出回ってるものじゃないんだろ？」

「そうだね。生体のドラゴンは国間を移動するときには、魔法大臣がマグルの大臣に報告しないといけないし、幼体や卵でも勝手に輸入するとアズカバン送りになるかもしれない物品だから」

「国の中なら大丈夫なのか？」

「あんまり大丈夫じゃないね。三頭犬やセストラルの生体の密売と同じくらいの罰だったと思う」

オスカーはちよつとチャーリーとの冒険に来たことに後悔しそうだった。ガリオン金貨が足りなくて、ニンバスにしてくれないかとオスカーは思い始めた。

「全部で十三ガリオンと八シツクルだな」

「流石にそれは安すぎるだろ、十五ガリオンはくだらないはずだ」

「ビタークヌート負けられねえな。ブボチューバーの膿みは最近供給が多いし、それにお前顔と名前が割れてるのが分かってるのか？ 老け薬か何か使ってるのか知らねえが、声で分かるんだよ。いいか？ お前を捕まえてホグワーツにふくろうを送ったらどうなると思う？」

「それは……」

ちよつと雲行きが怪しかったので、オスカーとチャーリーはジェイの元へ行つた。今の二人は割と外から見ると圧力があつた。チャーリーはクイディッチや魔法動物と取っ組み合っているせいでもともと筋肉質だったので、老け薬で大きくなるとかなりがっちりした男に見えたし、オスカーも結構大柄に見えたはずだった。

「どうした？」

「おいおい、なんだジェイお前用心棒でも雇つたのか？ ホグワーツのおチビちゃんはノクターン横丁を一人で歩くのも怖いわけか」

鉄格子の向こうの男はサングラスやフードをしていなかった。顔に多少傷があつて、確かにこういう商売をしている雰囲気があり、ジェイが弱気になるのも無理は無さそうだった。

ただ、目を見たオスカーには男がかなり弱気になっていることが分かった。どうも二人がホグワーツの生徒だとは分かっていない様なのだ。

「どれがいくらなのか説明してもらえるか？」

「はあ？ いいぜ、ユニコーンの尻尾の毛が……」

男が喋っているのを聞きながら、オスカーは男の目を見ていた。どうもこの男はこういう商売をしているにも関わらず、閉心術の心得が無いのか、それが稚拙なレベルなのだと思われ、オスカーは判断した。

オスカーにさえ、それぞれの本当の値段と彼が感じている不安が手に取る様に伝わってきたからだ。

「二割増しだ。本当なら十八ガリオンと十シツクル六クヌートだろう？ 十六ガリオンと八シツクルで手をうってやる。どうだ？」

「お前何言ってるんだ？ 俺はこのジェイと商売してるんだぞ？」

「ジェイ、それでいいよな？」

「ああ…… ほんとなら十五ガリオンで売れば御の字だと思ってるし……」

「それで？ どうなんだ？ シャンパイクさん？ あんたの甥っ子はホグワーツにいるんだな、まだ。ジェイと友達にでもなってもらったらどうだ？ 十六ガリオンと十シツクルで今なら手を打ってやる」

男の名前をオスカーが言うのと、途端に男は青い顔になって自分の杖に手を伸ばそうとした。オスカーは反射的に杖を男に突き付けた。

「てめえ読みやがったな。クソ、ジェイ、いつの間に開心術を使える魔法使いなんて連れを作りやがった。クソ、十六ガリオンと八シツクルだ」

「十シツクルだ。ビタークヌート負けられない」

「分かったよ。ほら持つてけ」

シャンパイクと言う男はかき集めるように金を袋に入れて、ジェイ

に放り投げた。ジエイはそれを受け取って、確かにオスカーが要求した分の金が入っていることを確認した。

「とつと出ていけ、ノクターン横丁とは言え、顔の知らねえ開心士と商売はしたくねえ」

「いや、まだ聞きたいことがあるんだ」

「ジエイ、分かっているのか？ おめえのバックにいる男が何者か知らねえが……」

「ドラゴンの卵が最近出回っていないか聞きたいんだが」

オスカーのそれを聞くとやっぱりシャンパイクは良い顔をしなかった。ちよつと考えた後、オスカーの方を見ないようにしながらジエイの方を向いて言った。

「きなくせえ話だから乗らないで正解だった。フレツチャーの奴がちよつとその話をノクターン横丁中に触れ回っているとろだ。ドラゴンの卵が入荷だよ。売主への紹介料を含めて一個百ガリオンだってな。おめえの後ろにいる男が、闇祓いか規制管理部のハンターか知らねえが、関わらないで正解だった。声で分かる。フードの開心士さんは一ミリもビビッてねえからな。相当杖技に自信があるんだろ。ほらとつとでていけ」

「マンダンガス・フレツチャーか？」

「それ以外にどのフレツチャーがいるって言うんだ？ ダンブルドアがケツ持ちのせいで未だに殺されてねえごろつきだよ。ほらとつと俺の店から出ていけ」

本当に出て行って欲しそうだったので、三人はお互いに頷いて怪しい店から出た。そのまま三人は誰も見ていないことを確認して路地の奥の方でフードを脱いだ。ジエイはまだ青い顔をしていた。

「あの店、今度から使えるか分からないな……」

「ちよつと言い過ぎたか？」

「いや、オスカーがいなかったらずつと舐められてたままだったろうから、お礼を言わないとダメだな。それにしても、オスカー、君、開心術が使えるのか」

「開心術ってなんだい？ ジエイ、オスカー？」

チャーリーはどうも本当に開心術が何かは知らないらしかった。ジェイの方はオスカーから見るとどうもオスカーから視線をそらそうとしているように見えた。

「名前の通り心が読めるのさ。オスカーが決闘チャンピオンになった理由が分かったよ。先に教えてくれてたら、僕もオスカーに賭けたのに」

「クラリーナやエストには通じないぞ。開心術を二人とも使えるはずだからな」

「え？ ちょっと待って、じゃあオスカーはレアヤトンクスの心も読めるってこと？ え？ 流石に嘘だと思っただけだ。読めてたらあんなに僕は笑ってないと思うんだけど」

なぜ開心術や閉心術の話がチャーリーが爆笑する理由に繋がるのかオスカーには分からなかったが、ちゃんと説明した方が良さそうだとオスカーは思った。

「俺もそんな色々読めるわけじゃないし、ちゃんと使ったのは去年の学期の最後が初めてだ。それにさつきも言ったけど、トンクス以外は閉心術を使えるだろうし、それに友達の心なんか読まないだろ。俺だって言いたくないことくらいあるし、みんなもそうだろう」

「読まれてるかどうかわからないから怖いんじゃないか？」

「閉心術を覚えてれば入ってくるかどうかくらいは分かるけどな」

「これ、トンクスに話したら混乱しそうだね。でも話したいほうがいいと思うよオスカー」

チャーリーはジェイと違って全く心を読まれる心配をしていない様子だった。ジェイの方は相変わらずオスカーに視線を合わそうとはしていないかった。オスカーは意図的に心を読もうとしたのは石の中以来だったが、確かにできてしまったので、周りのみんなにも話した方が良さそうだった。

しかし、昨日のトンクスの感じだと、昨日の今日でこんな事を言った日にはますますトンクスがおかしくなりそうだった。

「夏休みの間に話しとく。そういや昨日遅刻していったから、トンクスに何か買ってた方がいい気がしてきた。あとでダイアゴン横丁に

寄っても大丈夫か?」

「え? オスカー、昨日はトックスと一緒にだったのかい? え? もしかしてその前の日はエスト?」

「レアと一緒にだったな」

「じゃあその前の日がエストで、その前がクラーナ?」

「まあそうだな。夏休み入ってから連続で出かけて結構疲れた」

「信じられないな。ホグワーツで最も危険な男の称号をジェイ・キムがあげるよ。ノクターン横丁よりオスカーの方がよっぽど危険だ」

「これ以上変な噂を広げないでくれよ。頼むから」

昼間とは言え、こんな暗い路地の奥で話し込むのはあまり得策では無いとオスカーは思った。とつとどドラゴンの卵を手に入れて、トックスの機嫌が直りそうなモノを買って帰った方が良さそうだったのだ。

「まあ本題のドラゴンの卵に入ろう。ああ、それとこれから、オスカーのことを…… スラグホーンで、チャーリーの方をマクゴナガルって呼ぶよ。本名で呼ぶと結構危ないから。チャーリー、笑うなよ結構本気なんだからな。僕の事はそのままジェイでいいよ」

「分かったよ。今から僕はマクゴナガルだ。ジェイ、居残り罰を言い渡します。ノクターン横丁でドラゴンの卵を手に入れるまで帰ってはいけません」

「スラグホーンって前のスリザリンの寮監の名前か」

偽名は確かに有効だった。さつきもチャーリーの名前を大声で言う訳にはいかなかったし、本名をこの横丁で話すのは大きなりスクだった。

「取りあえずマンダンガスだけど、どうせいつもの店の前でたむろってるだろうから行こうか? スラグホーンはマンダンガスを知ってるのか?」

「チャーリー…… マクゴナガルも俺も知ってる。一回会ってるからな」

「前に会った時はエスト…… 僕のいここに変装とうそを暴かれてたね」

「クイティッチのお姫様は開心術が使えても全然不思議じゃないな。これじゃスリザリンには下手な商売はできそうにない」

「なんだか偽名で喋るのはきこちなかったし、オズカーはパツと本名を言っつてしまいたいそうだと思うたが、見た目も名前も隠せばリスクは確実に低下するはずだった。ドラゴンの卵を勝手に買ってホグワーツに持ち込んだとなれば下手をすれば退学かもしれないのだ。」

「ただ、ハグリッドとケトルバーン先生の手してきたことを見る限り、とても退学になるとはオズカーは思っつてはいなかった。それで退学になるのならあの二人は百回は退学になっつていないと説明がつかないからだ。」

「じゃあマンダンガスのところへ行こう」

「ジェイ、場所がわかるのかい？」

「マンダンガスはいつも変なタバコを吸っつてるだろ？ あれっつて、元気爆発薬の材料の二角獣の角とかマンドレイクの根っつこを違うやり方でタバコにしてる。あれを吸うとちよっつと気持ちよくなるらしい。それを吸えるところがノクターン横丁にはあるのか」

「オズカーはマンダンガスと会っつた時にアバーフォースがタバコを取り上げていたのを思い出した。確かに普通のタバコとは違う変な匂いがしていたし、そういう魔法薬の別の使い方があっつてもおかしく無いとは思っつた。」

「ちよっつと昨日飲んだところだな元気爆発薬。あれ飲むと二日酔いもどっつかに行くし、タバコにしてもそういう効果があるのか」

「あんまりない。それにあんまり吸わない方がいいはずだ。魔法薬と一緒に、下手な魔法使いが作っつたり、作り方を捻じ曲げたりすると大体悲惨な事になるし、あのタバコもそんなにいい代物じゃない」

「まあマンダンガスの雰囲気からするとそんな感じだよな」

「ノクターン横丁と一緒に表の使い方では無いと言っつることなのか。オズカーは決闘トーナメントの時の生ける屍の水薬で作られた霧が頭に浮かんだ。魔法薬も魔法と同じく、頭が柔らかければ色んな使い方ができるはずなのだ。それを悪く使うのも、良いことに使うのも魔法使い次第のはずだっつた。」

相変わらず薄暗い路地を三人は進み続けた。以前、二年生の時にクラーナと歩いた際にはジロジロとすれ違う人に見られたのに、大人に見える男三人で歩くと、今度は三人に視線を合わせないように道行く人はしているとオスカーは感じた。

「あそここの角だ」

ジェイが示す通りの角には建物の隙間と言う隙間、窓という窓にすべてテープの様なモノが貼ってあって、中の空気を意地でも出さないという気概が感じられそうな建物があった。石造りの建物のはずなのに、テープがあんまり張つてあるせいでテープで建物が出来ているのではないかとオスカーは思ってしまうほどだった。

三人がその店の中に入ると、確かにマンダンガス・フレツチャーと会った時と同じ匂いをオスカーは感じた。店の中は通りより薄暗く、いくつか寝転べるくらいのソファアールやベッドが並んでいて、そこで魔法使いや魔女たちがおのおの煙管や葉巻を吸っていた。オスカーはテープの意味が分かった。煙を外に出さないようにしているのだろう。

「いらっしやい」

店にはベッドやソファアールの他にバーの様なカウンターがあって、そこから珍しい女の小鬼がオスカー達に挨拶をしたのだ。オスカーが女の小鬼を見たのは初めてだった。

「スラグホーン、女の小鬼なんて初めて見たよ僕」

「ミネルバ、俺もだ」

チャーリーとオスカーがふざけている間にジェイはどんどん店の奥に歩き始めた。胡乱な目をした魔法使いや魔女たちをよそに三人は店の一番奥のソファアールまで来た。

そこに目的の人物がいた。マンダンガス・フレツチャーはどうも金回りが良さそうだとオスカーは思った。葉巻が彼の前にあるテーブルに山積みになされていたし、ファイア・ウイスキーと思わしきボトルが三つほど転がっていた。

「マンダンガス、久しぶりだ」

「ああ？ うん？ おめえさんは……」

「ジエイだよ。マンドングラス、ドラゴンの卵を手に入れたんだって?」
「ジエイ? ジエイ・キムか? うんにや。そうだ。前金で十ガリオンも渡して、百ガリオンでドラゴンの卵が売ればさらにもう十ガリオン。信じられるけえ? こんなうめえ話にのらねえ奴はいねえだろう?」

すでもう十ガリオン使ってしまったのではないかとオスカーは思った。こうやって喋りながらもマンドングラスはファイア・ウイスキーをボトルでぐびぐび飲んでいたので。

「ならマンドングラスには朗報だ。後ろの二人…… ちよつと名前は言えないけど、ドラゴンの卵をちょうど探してるところらしいよ」

「うん? ドラゴンの卵? ほんとか? ジエイの知り合いにしてはじいぶんと年を取ってねえか? ホグワーツの学生じゃねえのか」

「名字を言うとき色々二人とも不味いから、取りあえずドラゴンの卵の売主はどこかい?」

「ダメだ。まずは百ガリオンだ。売主の奴は百ガリオン持ってこれる人間にしか売らねえって言うてんだ。わかるよなジエイ?」

マンドングラスの目が一瞬オスカーとチャーリーの方を向いた後、もう一度ジエイの方へ向いた。オスカーは自分の三十ガリオンをテーブルに広げた。それを見てチャーリーも七十ガリオンをテーブルに広げた。

「レプラコーンの金貨じゃねえよな? 正真正銘の小鬼が打った金貨か?」

「本物だ。少なくとも三か月は消えてない」

今度は葉巻を吸いながら金貨の数を杖を振ってマンドングラスは数えていた。オスカーはマンドングラスの目を見たが、濁ってはいたものさっきの店主の様に読むことは難しいだろうと思った。

「ならすぐ行くか? おれにもツキが回って来たってことだなジエイ。昨日のまんまるのお月様はおれのガリオンだったってことだあ」

見た目とは裏腹に俊敏にマンドングラスは立ち上がった。ガリオン金貨の魔力が彼の動きを良くしたのかとオスカーは考えながら、金貨を袋に戻した。

金払いがいいせいなのか何なのか、マndanガスは陽気に店の中にいる人たちに話しかけながら店を出た。

「ただ、おれはあれがドラゴンの卵だとは言い切れねえぞ？　それは売主にいつてくれや」

「まあそれは仕方無いよ。どっちにしろモノを見ないと話しにならないだろうし」

「よし、じゃあついてこい」

店を出た後マndanガスはそう言ったが、ジェイの言う通り、モノを見ないと話しにならないかった。それにさつきからチャーリーは静かになっていた。ドラゴンの卵が近づいているから勝手に興奮しているのだろうとオスカーは当たりをつけた。

マndanガスを加えた四人は、ノクターン横丁の中でもさらに暗く、じめじめしていて、下水が近いのか何なのか嫌な臭いのする地区まで来た。

その辺をネズミのような小さい影が走り回っていた。それなのに家や店の様なモノが何軒もあり、オスカーは魔法使いがなぜこんな環境の悪い場所で暮らそうとするのか理解できなかった。

「あの掘っ建て小屋だ……　ちっと待つてろ。うん、おれが話をつけてくる」

もはや家や店と言うよりは、木の棒になんとか縫いつなげたボロボロのマントを被せた、出来の悪いテントの様なモノの中にマndanガスは入っていった。

「これほんとに大丈夫なのか？　偽物じゃないのか？」

「まあ一回見てみないと分からないよ。チャーリーなら多少はわかるだろ？　ドラゴンの卵がどんな感じかって」

「いや……　火の玉種とかなら分かるけど、魔法生物の卵の判断は難しいんだ」

テントの中からマndanガスに加えてもう一人連れ立って出てきた。背格好からは男の様に見えるが、今のオスカーやチャーリーと同じように顔は見えなかった。

「百ガリオンを見せろ」

しやがれた命令口調でそう言った男に二人は合わせて百ガリオンを渡した。男は杖では無く、自分の手で百ガリオンを数えていた。オスカーはなぜわざわざそんな事をするのが良く分からなかった。男は手も手袋で隠す徹底ぶり、さらに声も特定されないように魔法をかけているのか、まるで人間の言葉をむりやり違う生き物ののどから出している様な声だった。

「よし、ならドラゴンの卵を見ろ」

百ガリオンの袋をオスカーに返して男はテントに戻り始めた。チャーリーは待ちきれないのか誰より早く男の後ろについて歩き始めた。ジェイやマンダングラスもドラゴンの卵を見に行く様だったが、オスカーは何となく違和感があった。いくら違法な物品とは言え、こんな場所で売る必要があるのだろうかと思っただけだ。

少なくとも、前金としてマンダングラスに十ガリオン渡せる様な人間がこんな場所で売る必要など無さそうだった。最初の店の様な場所の間借りして売った方が簡単はずなのだ。オスカーは長いローブの袖の中で杖を構えてからついていくことにした。

「いいか、触るのは無しだ。それに金額は百ガリオン。交渉はしない」

テントの中はいくつも幕で分けられているらしく、オスカー達は何枚も幕をくぐりながらテントの中心まで歩かされた。テント全体ではホグワーツの教室くらいの広さがありそうだったのと、オスカーはどこに何がいるか分からないうえ、どこから攻撃が飛んできてても分からないこの場所はもしもの時に不利だと感じた。それにこのテントはどこか獣臭かった。ハグリッドの小屋で時々するような、獣の匂いがするのだ。

ドラゴンの卵は台座の上に置いてあった。大きさは小さい女の子でも腕を回せるくらいのもので、クラーナでも持つことが出来そうだった。色は黒色の縞模様で毛布にくるまれて置かれていた。

「本物か？」

「分からない…… ウェールズ・グリーンでも黒の個体があるし、ノルウェー・リッジバックはもともと黒が多い。少なくとも、火の玉種や火蟹、キメラの卵じゃないことは分かるけど」

チャーリーは面倒になったのか、フードをとってからドラゴンの卵に近づいて、色んな角度から卵を見回していた。それを他の三人は見ていたが、オスカーの方はチャーリーの行動より、周りが気になって仕方なかった。何となく、嫌な感じがするのだ。それも人間の悪意だとかそういうモノに対する嫌悪では無かった。キメラと対面した時に感じた様な、本能的な危険をオスカーは感じていた。

「これはどうだろう…… あたりならハンガリー・ホーンテールかノルウエー・リッジバッグだろうけど…… これはイギリスで手に入れた卵ですか？」

「そうだ」

また無理やりひねり出すような声だった。男の方を見たときに、一瞬だけランプに照らされて男の瞳が見えた気がした。オスカーが今度感じたのは違和感だった。男から感じられたのは先の店主の様な不安や怒りでは無く、もつと単純な感情や感覚だった。

「なら…… スラグホーン、ドラゴンの卵だって可能性は六十パーセントくらいだと思う。ドラゴンじゃないにしても、珍しい魔法生物の卵なのはおかしくないから、百ガリオンでもお釣りがくるとは思いうけど」

「俺に聞いてどうするんだ？」

「いや、三十ガリオンはお…… スラグホーンのだし、半分ちよつとくらいいしかドラゴンの卵だって可能性が無いんだったらやめといった方がいいかもしれない」

「そいつはあ困るぜ、赤毛の。おれの取り分が……」

オスカーはチャーリーと話しながらも、男を視界に入れて喋った。さつき感じた感覚が本当ならここからすぐに出た方がいいかもしれない。まして買わないとなると、さらに危険な状態になるかもしれない。なかったのだ。

「ミネルバ、君が決める」

「決めるって言われてもやっぱり七十ガリオンでは買えない……」

今、杖を握っていたのはオスカーだけだった。そして、チャーリーが買えないと言った瞬間に強烈に獣の匂いがした。オスカーは反射

的に自分の周りの二人と自分を護るために盾の呪文を唱えた。

チャーリー以外の三人の傍で刃物の様な固いモノと盾の呪文がぶつかる鈍い音がした。ぶつかっただのは刃物では無く、牙と爪だった。「買わねえんならガリオンをいただくだけだ。それに卵を使いまわせるのは大きい。何より魔法使いどもを噛めるのは快感だ」

人間大の狼が二頭、盾の呪文にぶつかっていた。それに喋っていた男がフードを脱ぐと、その顔も狼だった。さらに幕の奥には何頭もの狼が潜んでいた様で、それぞれ二足歩行や四足歩行で四人の元へ近づいてきており、そのどれもに共通するのは狼にしては毛が少ないように見えると言うことだ。

「犬っころ…… 狼人間がなんで満月の日に人様の言葉を喋りやがんだあ？ クソ…… ドジっちまった」

「脱狼薬…… 脱狼薬を使って正気を保ちながら人間を罠にかけたのか。おす…… 決闘チャンピオン、流石だ。けどどうやってここから出る？」

ジェイがそう言った瞬間にマンダンガスがバチっという音と一緒に消えた。姿くらましをしたのだ。オスカーとジェイの距離は近かったが、ドラゴンの卵を見ていたチャーリーとは距離があった。姿くらましを使えるのはオスカーだけのはずだった。

もう一度オスカーに飛び掛かって来た二頭の狼人間をオスカーは一頭をワンドレスマジックで叩き落とし、もう一頭を垂れさがっていた幕を変身術で操って絡めとり風呂敷の様に包み込んだ。

まるで犬のようなキャイン、キャインと言う声が響いたが、オスカーが良く聞くフアングのモノより数オクターブ低かった。

まだあと十頭は狼人間が潜んでいるとオスカーはにらんだ。何とかしてチャーリーとジェイをつれてここから出なければならなかった。それにこの相手では噛まれることが致命的だった。噛まれれば魔法使いとしての人生はほとんど終わりなのだ。

「あの男を狙う。あいつがリーダーだ」

失神呪文をオスカーは案内をしていた男にノータイムで浴びせかけたが、一頭の狼人間がかばって呪文を受けた。さらにオスカーは追

撃したが、明らかに人間以上のスピードで男は呪文を避けた。失神呪文を当てた狼人間がもう動き出そうとしているのを見て、オスカーはもう一度赤い光線で撃ち抜いた。

「おいおいおい、こんな戦い慣れた魔法使いが何でドラゴンの卵なんぞに興味があるんだ？」

「ジェイ、チャリーと合流しろ。俺は大丈夫だから逃げろ」

四頭の狼人間がオスカーを目掛けて走ってくる。三頭がチャリーの方に、残り一頭はリーダー格の男の周りをグルグルと回っている。自分より奥にいるチャリーのほうが狼人間に襲われるのが遅いとオスカーは考えた。

「ジェイ、チャリーの方へ走れ!! 早く!!」

「わかった!!」

オスカーと同時にジェイが襲われないのをオスカーは確認し、四頭の狼人間が同時に飛び掛かってくるのを見ながらオスカーは叫んだ。

「コンフリンゴ!! 爆発せよ!!」

地面を爆破すると同時にオスカーはチャリーとジェイの傍に姿現しし、テントの支柱をレダクトで粉碎、落ちてきたテントの幕で三体の狼人間を絡み取った。

幕で絡め取られて動けない狼人間とコンフリンゴで吹き飛ばされた狼人間にオスカーは失神呪文を一頭ずつかけた。テントが倒れ、周りが見える様になったが狼人間はもうリーダー格の男とそれを護る様に回っている一頭だけの様だった。

「マジで冗談だろ。闇祓いか何か知らねえが、この平和ボケした時代になんでこんなのが残っていやがる。それともこのために買いに来やがったか」

ここまでの戦闘でオスカーは確実に去年の決闘トーナメントと石の中の一件で、自分の魔法力や戦闘のセンスが一段と向上していることが分かった。何より杖を使った魔法のコントロールは段違いになっている気がした。

そして、本来なら危機的状況だったはずであるのに、狼人間の群れ

を叩きのめしたことで、自分の気分が少し昂っている気がした。自分は狼人間の群れより強いと事実が物語っていた。そして、同級生の男子より、目の前の狼人間より、自分はこの分野で優っているという事実が、そんな事を考える状況では無いのに湧き上がってくるのだ。

オスカーは頭を振って、目の前の二頭の狼人間に向き合った。まだ二頭残っているのだ。しかし、もう脱出しようと思えばオスカーは脱出できた。ジェイとチャーリーを連れて姿くらましすればそれで終わりなのだ。

「フードの兄さんはそんな強かったんか。ンなら、こいつあおれのもんだ」

バチツと言う音と共にマンダンガスの声が響き渡った。ドラゴンの卵が置かれていた場所にマンダンガスが立っていた。台座から丁寧に卵を取り出そうとしたが、一頭の狼人間が落ちたテントの幕の下から現れてマンダンガスに飛び掛かった。オスカーはさつきワンドレスマジックで最初に叩き落とした狼人間だと推測した。

「マンダンガス!! 横に飛べ!!」

いつもの動きからは想像できない様な速さでオスカーが言った方向へマンダンガスは飛びのいた。オスカーはドラゴンの卵の台座ごと狼人間を吹き飛ばした。狼人間と一緒にドラゴンの卵が宙に飛んだ。

「チャーリー!! どこ行くんだ!!」

ジェイの声を受けてオスカーがチャーリーの方を見ると上に吹き飛ばされたドラゴンの卵を追いかけてチャーリーは走り始めていた。

それに合わせて残っていた狼人間とリーダー格の男が走り始めた。人間よりも四足の狼人間の方が速い。確実にチャーリーは追いつかれるとオスカーは思った。

変身術では速さで狼人間に届かない、失神呪文では素早い狼人間に当てるのは難しい。オスカーは杖を鞭の様に振った。

リーダーではない方の狼人間の前方を紫色では無く、普通の色の炎の壁が埋め尽くし、動きを止めさせた。オスカーはその狼人間を失神呪文で気絶させた。あとはリーダー格のみだった。

「チャーリー!! そのまま卵を受け止めろ!!」

卵の落下地点にいたチャーリーはオスカーの言葉を受けて、リーダー格の狼人間が迫っているにも関わらず、キャッチする体制で微動だにしなくなった。オスカーは狼人間が飛び掛かるタイミングで二人の間に姿現しし、狼人間の顔面にフリペンド、衝撃呪文を叩きこんだ。しかし、同時に狼人間の手がオスカーの顔を殴り飛ばした。

「オスカー!!」

リーダー格の狼人間は十メートルほど吹き飛ばされたが、オスカーの方も一メートルほど吹き飛ばされた。頭が殴られた衝撃で揺れていて、中々オスカーは立ち上がれなかった。

ジェイとチャーリーがやってきて、オスカーに肩を貸してくれやつとオスカーは立ち上がることができた。

リーダー格の狼人間は動けない様だったが、それでもオスカーの方を睨みつけていた。

「ドロホフ!! アントニン・ドロホフ!! なぜお前が俺たちを攻撃する!!」

「うん? なんだ。やけに犬っころにしちやあうるさい。おめえグレイバックか?」

狼人間の顔の区別などオスカーにはつかなかったが、フエンリール・グレイバックの名前はオスカーでも聞いたことがあった。ヴォルデモートの側で暴れていた狼人間。それも人間の子供ばかり噛んだり殺したりする筋金入りの狼人間だ。

グレイバックは他の誰も見ずに、オスカーの方をひたすら睨みつけていた。

「お前と俺たちと何が違う? 一緒にやっただろう? ボーンズのガキ!! メドウズの親子!! どいつもいい声でないたじゃねえか!!」

グレイバックがなぜそんな事を言うのかオスカーにはやつと分かった。ふけ薬で年を取ったオスカーは父親に見えるのだろう。オスカーは最初にふけ薬を飲んでチャーリーが反応した時点で気づくべきだったと思った。

「純血の魔法使い様は戦争で大暴れしてもいいとこに住んで、変わら

ねえ暮らしをしてるってこと……」

「畜生がキャンキャンと人間様にうるせえ」

マندانガスが靴で思いつきグレイバックの頭を踏みつけて、蹴り飛ばした。二回鈍いボクっという音がして、グレイバックは静かになった。

「死んだ？」

「ジェイ、あんなんでイヌ公が死ぬわけねえ。それより、俺の十ガリオンはどうなる？」

「マندانガスはグレイバックから貰ってくれ」

「ちげえねえ」

オスカーがそう言うのと本当にマندانガスはグレイバックが狼人間になるまで着ていた服を探すのか、杖で倒壊したテントの幕を浮かべてうろろし始めた。オスカーには狼人間がいつ気が付くかわからない場所でガリオン金貨を探す意味が分からなかった。

「これもしかして、僕がもらっていいのかな？」

「ああ、その代わり、今度から卵より自分の命を拾いに行ってくれ。いつも一緒にドラゴンの卵を買いに行けるわけじゃないからな」

「そうだった。ごめん、オスカーは大丈夫？」

「これをとりあえず塗つとけば治るはずだ。ハナハツカのエキス」

ジェイから渡された独特な匂いする液体をオスカーは頬に塗った。すると殴られて腫れていたはずの場所があつと言う間に元通りになり、痛みも消えた。

「オスカー、これ以外はけがをしてないよね？ 狼人間の傷はハナハツカや癒術でもなかなか治らないんだ」

「多分大丈夫だ。それにチャーリー、ニコニコしながら卵を持ってるのは良いけど、それどうやって持って帰る気なんだ」

「え？ このまま普通に？」

「チャーリー、そんな禁制品丸出しの卵をそんな抱っこして帰る奴はいないよ」

オスカーを心配する言葉を掛けながらも、チャーリーはニコニコしたままだった。よっぽどドラゴンの卵を持っていることが嬉しいら

しかった。

「それにそーいや買った後どこに置くつもりだったんだ？」

「家には鶏小屋があるから……」

「チャーリーの家のニワトリはそんな卵を産まないだろ。オスカーそーうだよな？」

「そりやそーうだろ。それならチャーリーの家のニワトリの卵をハグリッドとケトルバーン先生に十ガリオンで売れば儲かってしかたないだろうな」

ジェイとオスカーがあきれる横で、チャーリーはやっぱりニコニコだった。オスカーには分かった。多分この卵が自分の家に来るだろうことが。そして、今日はちよつとした冒険くらいで、これまでの四日のリフレッシュになると思っていたのに、これまでで一番疲れたと思っただ。

残念ながら、病院に行っても、観覧車に乗っても、狼人間を退治しても、オスカーの夏休みはまだまだ終わっていないかった。

オツタリー・セント・キャッチポール

屋根裏のグルルお化けがパイプを打ち鳴らす甲高い、カン、カンという音と、外の鶏小屋から聞こえる鳴き声でオスカーは目を覚ました。

エストの部屋よりたくさん貼られている、オレンジ色のチャドリーキャノンズのポスターが最初にオスカーの目に入る。隣の二つのベッドでは、二人分の寝息が聞こえていて、チャーリーもロンもまだ夢の中だった。

窓から見える煙突からはもう白い煙が上がっていて、下の階でウィーズリーおばさんが朝ご飯の支度をしているのか、足音や皿が触れ合うガチャガチャと言う音、水の流れる音、それにベーコンや卵の焼ける匂いをオスカーは感じた。

オスカーはこの家のたとえどんな時間でも、人の生活をしている音や匂いを感じる事ができるところが好きだった。チャーリーやウィーズリーおじさんは、家が変な形をしている事や、オスカーやエストの家に比べて狭い事を気にしている様だったが、自分の家の人気の無い冷たい石造りの壁や、無駄に人がいない事を感じさせる大きい部屋や机より、木でできたヘンテコな壁や床、隣の人と肩がぶつかるくらいの狭い部屋の方がオスカーは好きだった。

できるだけ足音を立てずにオスカーは階段を降りる。チャーリーとロンの部屋は隠れ穴の一番上の階にあつたため、寝ているはずのみんなを足音で起こすのはばかられたのだ。

みんながご飯を食べる居間の前まで来ると話声をオスカーは聞いた。ウィーズリーおじさんと魔法省の誰かが喋っている様だった。

「アーサー、魔法不適正使用取締局の連中の鼻息が最近は荒い」

「闇祓い局の業務を一部移管する話で、これまでの稼働では足りなくなるから当然なんじゃないか、エイモス」

「それだけならいいが、彼らの一部は大臣のお墨付きを貰ったと思っ
ている人間もいる。特に彼らの厄介の種になっている、非人間の魔法
生物に対する雲行きが怪しい」

「エイモス、トーストをかじっていかれるかしら？」

「ああモリー、もし貰えるなら欲しい。そうすればセドリツクの顔を省に行く前にもう一度見る時間が生まれるからね」

オスカーは魔法省の話をしているところに自分が入っていったのか分からなかったが、ここで盗み聞きの様になっているのも良くないと思った。

「とにかくアーサー、君のところにも彼らの要求が来るかもしれない。うちにも魔法生物の危険度リストを更新しろだの、非人間と人間に順ずる動物のミシン目をはつきりさせろ、他の国のそうだった状況がどうなっているか資料を出せだの、うるさいことこの上ない」

「小鬼の連中が嗅ぎ付けるとまたひと騒ぎされそうな話だ。魔法族による弾圧がまた強まっているとか言い出されるかもしれない」

「オスカーおはよう……」

「ああ、ジニーおはよう」

扉の前でオスカーがまごついていっていると、目をこすりながらジニーが階段を降りてきた。オスカーはそのままジニーに合わせて居間に入った。

「あら二人とも早いよね。感心だわ。他の兄弟も見習ってくれればいいんだけど」

「オスカー、ジニー、おはよう」

「おはようございます」

「おはよう……」

オスカーと眠そうなジニーの挨拶を聞きながら、暖炉から首だけ出ているエイモス・デイゴリーはオスカーの顔を見てかなりびつくりした顔をしていた。

「エイモス。チャーリー、うちの二番目の息子の友達が遊びに来てるのよ」

「ああ、びつくりした。てつきりウィーズリー家に赤毛以外が生まれることがあるのかと思ってしまった。顔だけで失礼する。オスカー・ドロホフ君だろうか？」

「はい。初めまして、エイモス・デイゴリーさんですよ？ 魔法生物

規制管理部の？ エストやチャーリーからお名前を伺ったことがあります」

「そうだ。エイモス・デイゴリーと言う。来年うちの息子がホグワーツに入るようになっていいるからよろしく頼むよ」

少なくともエイモス・デイゴリーがびっくりしていたのは、オスカーが赤毛では無かったことだけでは無いことくらいオスカーにも分かった。

「ママ、イチゴじゃなくて、マーマレードがいい」・

「ジニー、まだエストが来ないから今年の分が無いのよ、わがまま言わないでバターかイチゴのジャムで食べなさい」

オスカーの隣のジニーはウィーズリーおばさんにそう言われると頬を膨らませて、何も付けずにトーストをバリバリ食べ始めた。無言のおばさんに対する抗議なのだろう。

「ところで、アーサー、昨日のノクターン横丁の一件を聞いたかね？」
「狼人間の件かな？」

「そうだ。よりにもよってドラゴンの卵を売っていた狼人間なんて通報のせいで、私もあそこに出張ることになったんだ。そのせいで日付が変わるまで残業することになった」

ウィーズリーおばさんに入れてもらったミルクをオスカーは思わず吹き出しそうになったがギリギリのところどころでこらえた。隣のジニーはさっきの抗議の結果、ジニーの分のジャムを没収されてしまい、オスカーの皿についているジャムを物欲しげに見ていた。

オスカーはウィーズリーおばさんが皿を洗うために背を向けている間に、ジャムを半分ジニーのトーストに魔法で浮かして置いてあげた。その間もオスカーは二人の会話に聞き耳を立てていた。

「なにせ場所が場所だから証言も信用できない。あるごろつきはグレイバックの一味を闇祓いが強襲したとか、その隣はかなり頭が薬でやられていそうな女は、うちが雇っているハンターが卵目当てに強盗をしたとか、あるいはグレイバックと死喰い人くずれの仲間割れだとかね。まあどれも事実ではないだろう。結局卵も見つからなかったから」

「誰か捕まえたのかね？」

「ああ、動けなくなつた狼人間を二、三匹捕まえた。しかし、脱狼薬を使っている状態だったし、前科も無い。それに狼人間は我々を絶対に信用したりしない。我々がほとんどの狼人間を信用していないのと同じだがね、だから何も情報は引き出せないだろう。上も真実薬を使うほどの案件では無いと思つているから、許可も下りないだろう」

「脱狼薬を使っている状態で外に出るとは良く分らないな……」

オスカーは死喰い人の話題がでた瞬間にエイモス・デイゴリーがこちらをちらりを見たことに気が付いた。それに、ウィーズリーおぼさんが二人が会話をしている間中、やたら食器を音を立てて洗つたり、オスカーの方にやたらお替りを進めてきたりして、どうも二人に話をして欲しく無いのか、それともオスカーやジニーに話を聞かせたくないのだろうとオスカーは思った。

「エイモス、そろそろ行かないとセドリツクの顔を見られなくなるんじゃないかしら？」

「モリーじゃあそろそろ行くよ。トーストをありがとう。アーサー、また後で会おう」

「ああ、どちらにしろ実験的呪文委員会の件で会うことになるだろう…… 最近是不適正使用取締局が我々を呼び出しがちだから……」

エイモス・デイゴリーは緑色の炎の中に消えていき、オスカーは一息ついた。口が裂けても狼人間をぶつ飛ばしてしまったのが自分だとは言えなかったし、話にでてきた卵がオスカーの家の地下室に置かれていたとも言えなかった。

「そう言えばなんでオスカーはエストと一緒にじゃないの？」

「チャーリーとちよつとだけ男だけで遊ぼうって話になつたんだ」

ジニーが口の周りをジャムとパンの小さいクズで一杯にしながらもオスカーに聞いた。オスカーは思った。ジニーならこれだけ近づいても自分がおかしくならないと。これが今日いない四人だったらどうなってしまうのか。オスカーは考えない事にした。

「ジニー、男の子は男の子だけで遊びたい事や時間があるんだよ。パもそうだった」

「パパは男の兄弟と友達しかいなかったってママが言ってた」

オスカーはウィーズリーおじさんの耳が赤くなつたのを見たが、見なかったことにした。

この家に来て二日目だったが、特にホグワーツに行っていない下の四人、ジニー、ロン、フレッド、ジョージにオスカーは良くからまれていた。普段喋らない人間と話したいのだろうとオスカーは思っていた。

「じゃあ今日もエストは来ない？」

「エストとクラーナとトンクスとレアにはここに来てる事を言っていないんだ。あと二、三日したら俺の家にみんな集まろうって話になってる。テッドさんとかマッドアイの予定もそれなら合うらしいから」

「ふうん。オスカーはみんなに早く会いたくない？」

ジニーは何か面白いモノを見る目でオスカーを見ていた。それにどうもウィーズリー夫妻はオスカーとジニーの話に聞き耳を立てている様で、オスカーはちよつと話しくかった。

「そういうわけじゃないけど、ただ、ホグワーツだと男だけになることは無いからな。授業中と談話室はエストが隣にいるし、エストがクイディッチに行つてる時は他の三人がいる気がするから、寮の寝室くらいしか男といることが無いんだよ。だから夏休みはちよつとだけそうしようって話になったんだよ」

「でも確かに私もエストとママと女だけのお話はする…… それに、夏休みにエストが他の三人とどこか行こうと思うから、ジニーもこない？ って誘われた」

そういつてジニーはオスカーの方では無くて、ウィーズリー夫妻の方に顔を向けた。オスカーはジニーが最初からこの話題を出したかったのだろうと思った。

「ねえ、ママ、行つてもいいよね？」

「どこに行くか分からないんじゃないわジニー。それに女の子だけじゃいろいろ危ないでしょう？ ねえアーサー？」

「え？ そうだなモ……」

「四人は大人の魔法使いより強いんだってビルとチャーリーとパー

シーが言っていた。四人中三人が決闘の大会で最後まで残ったって。オスカー、違う?」

オスカーはジニーにそう言われて、思わずアーサーの方と視線が合った。お互いにどう言えばいいのか、どちらに味方するべきなのか困っている顔だった。

「それはまあ……」

「ね、ママ、いいでしょ? 四人のビルと一緒に買い物行くのと同じ」

思わずその光景を想像して、オスカーはそうされたい人も結構ホグワーツにもいるのではないかと思った。

「ならちゃんとママとパパはどこに行くのか言ってからにしてください」

「やった。じゃあエストにお手紙書いて来る!!」

「ちゃんと食器を片付けてからいきなさい」

そう言うなり、ジニーはウィーズリーおばさんの言葉も聞かず、ミルクを一気に飲んでドタドタと階段を駆け上がった。その光景をウィーズリー夫妻は諦め半分、微笑ましさ半分の様な顔を見ている。

「まあ、モリー、フレッドとジョージの同じような年ごろに比べればだいぶおとなしいお願いじゃないか」

「アーサー、うちはただでさえ男所帯なんだから、ジニーがお手本にしてるのはビルやチャーリーじゃなくてエストなのよ。あの子のあの年頃みたいな頭の回りをするんだったら、さっきのお願いも目的は別だったりするはずなのよ」

ウィーズリーおばさんは言い過ぎたと思ったのか、ちらつとだけオスカーの方に視線を向けた後、また喋り続けた。

「ジニーとエストは随分違う。それに今と数年前では随分環境も変わった。それは分かるだろうモリー?」

「そうね…… ごめんなさいね、オスカー、こんな話を聞かせてしまった。でも、そうね、チャーリーやビルの世代の子供たちは他の世代の子供たちより大人びているわ」

「いえ……」

自分達の世代が大人びていると言われても、オスカーは他の世代の同じころなど分かりようが無かった。それにオスカーが気になるのはどちらかと言えばエストの事をウィーズリー夫妻はどう考えているのだろうかという事だった。

ウィーズリーおばさんは少し気まづくなつたのか、洗濯物の大かごをもつてそれを干しにいつてしまった。

「オスカー、ホグワーツは楽しいかね？」

「はい。楽しいですけど……」

ウィーズリーおじさんがオスカーに喋りかけたが、何か喋ることが無くて無理やり捻り出したかのような始め方だった。ウィーズリーおじさんはもう一度、ウィーズリーおばさんが行った方をチラツと見た。

「モリーも…… エストもないから、私が魔法省に行くまでにちよつとだけ話をしないか？」

「はい……？」

「どうかな？ その、オスカーはエストと上手くやれているかな？」

「上手く…… ですか？」

落ち着かないのか、自分のあごを何度も触りながらそう言ったウィーズリーおじさんを見ながら、オスカーはどういう意味なのか考えた。

「チャーリーとエスト…… 君達がホグワーツに行く年が一番モリーが心配していた。なにせ、私達が女の子を送り出すのは初めてだったし、まあ、ほんのちよつとだが、エストには少し変わったところがあったから」

「変わったところ……」

正直に言ってしまうと、オスカーはエストがちよつと変わっていたからと言つてもそれは分からなかったはずだった。オスカーが同世代の人間とちゃんと喋つたのはエストが二人目だったからだ。

「正直なところ、ああ、もし私が言いすぎていたら言つて欲しいが、エストから届く手紙の内容に君の名前が出てきたことは私もモリーもびつくりしていた。まあ、それからずっと名前が出てくるから慣れて

しまったがね」

「それは……」

二人が驚いていた理由は、オスカーが思っているのと同じ事であるうし、ホグワーツ特急でオスカーやクラウナが思っていたのと同じことであつたはずだつた。

「君達が同じ世代になればホグワーツで何かあるだろうとは思っていたが、こんなに仲良くなるのは私もモリーも思っていなかっただろう。ただ、まあ、ダイアゴン横丁にチャーリーとエストが教科書や杖を買いに言つた後から、今思い返せば色々な話題から君のことを聞き出そうとしていたかもしれない」

「俺の事をですか？」

オスカーは杖の話があつたからエストは自分の存在を汽車に乗る前から知っていたと分かつていたが、それ以上に情報を引き出そうとしていたとは知らなかつた。

少なくともオスカーはエストの事を家にいる時点で知らなかつたし、父親が何かした相手の子供のことなど調べようとも思わなかつたはずだつた。

「私ももちろんだが、今日の様にときどきこの家には私の同僚がやってくる。まあそんなに本筋の俗に言うエリートの様な人間は来ないが、昔から魔法省に勤めていて顔の広い人間が顔を出す。エストはそういう人間から色々な事を聞きだすのが上手かつた」

「そう…… ですか」

何となく、オスカーは不安になつた。エストは自分の事をどれだけ知っているのだろうかという事だ。それにオスカーはほとんど考えたことも無かつたが、ウィーズリー夫妻はもしかしなくても、オスカーの家に降りかかつた色々な事を知つていてもおかしくないのではないだろうかという事だ。

「それに私の家はグリフィンボールばかりだし、モリーもグリフィンボールだったから、中々スリザリンの勝手も分からない。そこが少しモリーも私も心配だつた」

魔法省の職員で、不死鳥の騎士団に近いだろうウィーズリーの夫妻

が、それも直接的に因縁があるプルウエットの出身だったモリーが、その相手に関する事件の顛末を知らないという事がありえるのだろうか？ オスカーは思った。自分はできるだけ考えたくなかったから、知っていないと勝手に思いこもうとしていたのではないのかという事だ。

「だがこんなに仲良くしているのを見ると私たちも安心する。大人たちが勝手に争っていたにも関わらず、子供は子供で仲良くやっているのだから」

そして、一番重要なのは、エストはそもそもそのことを聞き出して、オスカーの事を知っているのではないかという事だ。だとすればオスカーは夏休みに悩んでいることに加えて、もっとエストとどう付き合えばいいのかが分からなくなった。

「私もモリーも君たちが無事でいさかや争いに巻き込まれないことが一番だと思っている。まあ私達より、君や君の周りの友人の方がずっとそう思っているだろうが…… じゃあ、私はそろそろ省に行かないといけない。モリーに私が出たことを言っておいて欲しい」

「はい。行ってらっしゃい」

緑色の炎に消えていくウィーズリーおじさんを見送りながら、オスカーはノクタートン横丁に行った事を今度は思い出していた。チャーリーやジェイとやったことは、明らかにウィーズリー夫妻が願っていることと逆な事だっただろうし、クラーナ辺りが聞けば怒りだすことは明白だった。

オスカーは壁にかかっている時計を見た。時計のそれぞれ家族を示す針は、ウィーズリーおじさんは移動中、ウィーズリーおじさんは庭、他のウィーズリーの兄弟は家を指し示している。時計には牢獄やいのちが危ないと言う場所がある。ノクタートン横丁の一件の時、チャーリーの針がここにあってもおかしくは無いはずだった。

「オスカー、おはよう」

「パース、おはよう」

今度起きてきたのはパーシーだった。なぜか変身術の教科書とノートを持って難しい顔をしていて、オスカーの目の前に座ったがオ

スカーの方には目を向けなかった。

「オスカー、オスカーはエストのメモ用の羊皮紙を読める？」

「基本的に読めない」

オスカーは即答した。それは事実だったし、レポートや論文の様な決まった内容を書かないといけない場合のエストの文章を読むことはできた。しかし、ときどき取っているメモの様なエストの羊皮紙を読むことはほとんどできなかった。

「エストはまとめ用に書いて無いから、勉強用に借りるなら、クラーナのメモの方がいいと思うけどな」

「もう借りてるんだけど…… そう言えば、他の四人はいつ来るんだ？」

この家にいる間に何度これを聞かれるのかオスカーは数えた方がいい気がした。少なくともすでに五回は言われていた。

「男だけで遊ぼうって予定だったから…… 多分みんなで俺の家に移動して、その時に他のみんなも一緒になると思うけどな」

「じゃあ、エストもクラーナもここには来ないのか……」

「多分そうなるな」

「オスカーはもう夏休みにクラーナとどこかに行った？」

なぜパーシーがそれを知っているのかとオスカーは思ったが、グリフィンドールの談話室ではクラーナに引っついて勉強しているのなら、知られていてもおかしくは無かった。

「ああダイアゴン横丁に行ったけど」

「店でパフェは食べた？」

「週刊魔女に載ってた店か？ なんで知ってるんだ？」

「グリフィンドールの女子がクラーナの置いていった週刊魔女を読んで、その店のページだけ折り目があったから大騒ぎしてた。クラーナと一緒にいくならオスカーしかいないだろうから」

オスカーは思った。クラーナは詰めが実はあまいのではないだろうか。と言うかジェイと言い、ホグワーツに戻るころにはグリフィンドール生全員に知れ渡っている気がオスカーはしたのだ。

「これから置いてあったら隠しといてあげてくれ」

「分かったけど……」

パーシーは言いよんだ後、辺りを見回し始めた、特にドアの方を。オスカーは何となくその仕種がさつきウィーズリーおじさんがしていた、ウィーズリーおばさんがいないことを確認する仕種と同じだと思っただ。

「オスカーはクラリーナやトンクスみたいに闇祓いになるのか教えて欲しい」

「闇祓い？」

「だって、クラリーナはオスカーが闇祓いになるための教科を全部取ってるし、私と同じか上の成績だって言ってた。それにキングズリーは闇祓いだし」

どうしてパーシーがオスカーの進路を気にするのかオスカーには良く分からなかったが、さつきのジニーと一緒にこつちが自分と本当に喋りたい話題なのだろうと考えた。それに多分他の兄弟や母親にこの話を聞かれたくないのだろうとオスカーは思った。

「それはそうだけど、俺はそんなに考えて教科を選んだわけじゃないからな。それにまだ何になりたいかちやんと決めてないし」

「クラリーナはオスカーになって欲しい……？ 多分、オスカーと一緒に仕事をしたいと思ってると思う。こういう話をすると、クラリーナのお姉さんともう一人同級生の男の人が一緒に闇祓いになったって話をすぐするから」

「そうなのか……？ ただ本当に何になりたいかとかちやんと決めたことがないからな」

パーシーが言っている男の人とは病院で会ったドーリツシュと言う闇祓いの事で合っているはずだった。ドーリツシュに会った時にオスカーはパーシーを何となく思い出したので、パーシーがその話題を出すとやっぱり二人が似ている気がした。

「なら普通に魔法省に入る？」

「普通に魔法省って、ウィーズリーおじさんやデイゴリーさんみたいな感じでってことか？」

「そう。契約とか臨時みたいな感じじゃなくて、ちゃんとしたキャリア

アの採用で魔法省に入る。僕はそれが一番いいと思う」

「なんでパーシーはそれがいいと思うんだ？」

まだ二年生なのにやりたいことやなりたいものが決まっているというのは、オスカーからしてみても凄いとしか思えなかった。パーシーはウィーズリーの兄弟の中では一番真面目で強くモノを言うタイプでは無いかもしれないが、グリフィンボールらしく、一度自分の中で正しいと思う事が決まったらそう簡単に譲るタイプでは無さそうだった。

「魔法大臣は一番魔法界で偉い職業だし、本に書いてあったけど、魔法大臣になった人はキャリアで入って魔法法執行部出身の人が一番多い。聞祓いからなる人もいるけどそれよりも多い」

「パーシーは偉くなりたいのか？」

「それは……」

パーシーはまたさっきのウィーズリーおじさんとそっくりな周りを見渡す動作をした。兄弟や母親に聞かれていないのかやっぱ心配なのだろうとオスカーは思った。

「ママは僕たち兄弟に危ない仕事をして欲しくないと思ってる。それにパパは学生の時から頭も良くて、魔法だってビルと同じくらい使えたのに野心が無いから…… あんまり…… その面白くない仕事をしてる。パパにとつては面白いだろうけど、他の魔法の法律を決めたりするような場所に比べたら影響力とかそういうのが無い」

他の兄弟よりパーシーは両親の事がもしかすればずっと好きなのかもしれない。それにパーシーは親や家族が期待したり、求めていることに敏感だとオスカーは思った。

またパーシーは辺りを見回して他の家族がいないか見ている様だった。ウィーズリーおばさんは相変わらず洗濯から戻ってこず、他の兄弟も起きてこなかった。

「パパは純血の魔法使いなのにマグルが好きでそういう法律とかを作ったから、魔法省でもいい立場にいないんだってホグワーツで初めて聞いた。ママはその……」

下を向いて喋っていたパーシーが少しだけオスカーの方を見た。

「戦争で色々あったから、僕たちが危ない事をするのが嫌なんだ。クラーナも闇祓いに自分はなるって言ってるのに、周りのみんなにはそんな感じだから……でも、そういう事も偉くなれば解決できるし、パパがやりたいこともできるし、ママやエストみたいに……だからそういう事ができるから僕は偉くなった方がいいと思う」

「パースは凄いな」

オスカーはそう思った。なりたい理由がそのまま自分と他人の希望や期待に沿っている。それは凄く良いことのように思えるのだ。

「でも、ビルやチャーリーはそう思って無くて、全然違うことがやりたなんだって。ビルはもうグリーンゴッツで呪い破りになるって言ってるし、チャーリーはクイティツチの選手かルーマニアでドラゴンの学者になるんだって。エストは前からホグワーツの先生だって言うてるから……」

「それはダメなのか？」

「だって、ビルは監督生で主席になるだろうし、兄弟の中で人付き合いも上手いから、一番魔法省でも上手くやれるだろうし、僕よりずっと上手くやれるのに……」

やっぱり、まだ二年生でオスカーより三つも下なはずなのに、オスカーはパーシーの方がよっぽど色々考えているように思えた。オスカーはそんなに周りの人の進路など考えたことが無かったし、もちろん、家族がどう考えていたかなど考えてもいなかった。

「パースにしたいことがあるみたいには、他の人にもやりたいことがあるんだろ。誰かになんて欲しいと思われていることと、自分がなりたいモノが一緒なんてそんなに無いしな。一緒なら最高だろうけど」

「それはそうだと思うけど……」

ではオスカーの周りはどうなのか。エストは家族に望まれたから先生になりたいのか。クラーナやトンクスは望まれたから闇祓いになりたいのだろうか。キングズリーも望まれたから闇祓いになったのか。それにオスカーは自分に誰かがそんな事を望んでいるのだら

うかと思った。そして望まれば明確に道が見えて楽なのか、それとも決められるのは嫌だと思おうのか。

「けどなんで俺にそんな話したんだ？ 兄弟に喋りにくいなら……」

「エストに話すと心配するかもしれないし、クラリーナは闇祓いになりたいって言うてるのにこんな話したらどう思うか分からないし……」

オズカーは思った。パーシーは自分に何を言っただけかと思ってるのかと。ウィーズリー夫妻かビルやチャーリーに相談してみればどうかと言えはいいだろうか。それとも、クラリーナやエストと一緒に話を聞いてあげればいいだろうか。だけれども、パーシーはそのみんなには自分がちよつとでも迷っていることを言いたくないのではないかと思った。

「そうか、でもパースがそういうこと思ってるのは凄いし、馬鹿にされるようなことじゃないと思うけどな。それに馬鹿にされてもやりたいうことをやればいいだろうしな、クラリーナもマントの職種とか馬鹿にされてもずつとなりたいって言ってたし」

「クラリーナの一年生の頃のこと？ いまでもオズカーの事と同じくらいクラリーナの同級生がからかってるけど…… オズカー、スリザリンには僕と同じ様な事考えてる人はいる？」

「魔法省で出世したいって言うてるやつがいるかってことか？」

「そう。グリフィンドールよりスリザリンとかレイブンクローの方がそういう人がいるかと思っただ」

確かに、野心とかそういう意味ではスリザリンの方がそういう人物がいてもおかしくは無かった。監督生や主席になった人物を考えれば何人かそういう考え方をしていそうな人物がいることをオズカーは知っていた。

「何人かいるな、先輩だけだな。ただ戦争の事があってあんまり魔法省、魔法省っていう世の中じゃないのかもしれない」

「いるんだ…… オズカー、朝なのに話してくれてありがとう。できれば、ママとかエストやクラリーナに喋らないで欲しい」

「とりあえずトーストを食べた方がいいんじゃないか。俺の家じゃな

いからペンスに言って出してもらおうわけにはいかないけどな」

「魔法大臣になったら屋敷しもべが欲しいな……」

お礼を言いながら、トーストを焼こうとしているパーシーの耳は少し赤かった。それに階段の方からドタドタと誰かが降りてくる音が聞こえる。

オスカーはやっぱり自分の家よりこの家の方が好きだった。誰かと常に喋っていないといけないくらい距離が近いからだ。しかし、この夏休みで問題だったのは問題の四人と距離が近い事だった。オスカーはビルとちよつとそのことについて喋ろうと考えていた。

みんなが朝食をしている中、オスカーはウィーズリーおばさんがいつもフレッドやジョージ、ロンやジニーにさせている作業をしていた。

オスカーは二ワトリに餌をやったことはほとんど無かったし、庭小人をぶん投げたりすることもここでしか経験できない作業だった。

朝食が終わると箒に乗れる数人はクイディッチごつこともいうべき遊びを始めた。エストがいなければチャーリーの独壇場だとオスカーは思っていたのだが、フレッドとジョージはコンビネーションでチャーリーと互角とは言えないまでも戦っていたし、ロンとジニーの方は二人で箒を奪い合って喧嘩をしていて、二人ともウィーズリーおばさんに怒られていた。

庭小人を筋力に加えて魔法の力で隠れ穴の天辺より高く飛ばしながら、クイディッチごつこを眺めているオスカーの横にビルがやってきた。

「オスカーはそんなに筋力があつたのか？ スリザリンのビーターをしたらエストが喜ぶんじゃないか？」

「俺は箒に乗れないから無理だし、魔法で飛ばしてるだけだ」

オスカーは思った。チャンスだと。少なくともオスカーが知っている男性の中で一番女性と付き合ひがありそうなのはビルだった。女性とずつと喋っているという意味では自分かも知れなかったが、そ

んな事を気にしていても仕方が無かった。

しかし、どう話を切り出せばいいのかオスカーには分からなかった。最近、女の子と喋るときにドキドキするとも言えいいのか？

オスカーにはちよつとそれは言えなかった。

「そう言えば、ホグワーツの七年生ってイモリ試験以外は何をするんだ？」

「そうだな、イモリ試験だけでも十分疲れるけど、就職先を決める為に試験を受けたり、インターンに応募してみたりとかかな。それに僕はブラジルのペンフレンドと交換留学に行こうと思ってる」

「交換留学？」

ブラジルに魔法学校があること自体オスカーは初めて知ったが、交換留学というのもオスカーが初めて聞く単語だった。インターンの方は去年のクラリーナの話で知っていた。

「そうさ。ほんとは家にあんまりお金が無いからいかないつもりだったけど。去年の決闘トーナメントの賭けで結構儲かったからそれで行けそうなんだ。ブラジルの魔法学校の地下には遺跡があるらしいから、呪い破りの経験にもなるだろうし」

「呪い破りになるのは決まってるのか？」

「まあね、有名な呪い破りにグリーンゴッツの人を紹介して貰ったし、エイモスさんとクラリーナからゴブリン連絡室のクレスウィルさんにも連絡できたから、多分なれると思ってる」

ビルは六年生が終わってますます自信をつけているとオスカーは思った。クラリーナやパーシーの話では全校に二人しかいない主席になれそうだと言う話だし、就職先も自分の行きたいところにいけそうなのだ。

イケメンなのに加えて、勉強も魔法も就職先もあり、自信もついているビルが女の子に困っているとは思えなかったし、やっぱりビルに相談するのが一番だとオスカーは思った。

「ビルは…… その…… 呪い破りってどんな仕事なんだ？」

「オスカーも興味あるのか？ オスカーを誘うとエストやクラリーナには怒られそうだけど、オスカーには向いてると思う仕事なんだけど、

話聞きたいか？」

やっぱりオスカーからすれば中々女の子の話などビルに振れなかった。少なくともオスカーは男の友達にそんな話を振った経験も無かったからだ。ビルの方は自分がやりたい仕事の話だからか楽しそうだった。

「ああ」

「ほら、昔から神話とかそういう話には宝とか、それを守る怪物や迷宮の話があるだろ。ミノタウロスとかスフィンクスとかはマグルでも知ってる」

「確かにマグル学でクイレル先生がいくつかの魔法生物はマグルでも知ってるって言ってたな」

「実際古代の魔法使い達はマグルと一緒に暮らしてたし、魔法の力で半分王様みたいに暮らしてた人も多い。そうやってため込んだお宝を自分の魔法や呪い、魔法生物なんかで守ってたんだ。それを色んなところに隠したわけさ」

「使われてないホグワーツみたいな場所がいくつもあるってことか？」

▪ 現代の魔法使いはマグルから隠れて暮らしているが、マグルだけでは生き抜くのが辛い時代、魔法使いがマグルの手助けや指導をして王様の様に暮らしていてもおかしくは無かった。

▪ 「ホグワーツこそエジプトやインド以上のお宝が残っていてもおかしくない場所だ。秘密の部屋だつていまだに見つかっていないだろ？ とにかくそういう場所がいくつもあって、その呪いを魔法使いが破ってお宝を見つける仕事なんだ」

▪ 「確かに危ないけど面白そうだな」

▪ 「そうだろ？ うちのママはちよつとピンときてないみたいだけど、お宝を持って帰ればお金は沢山入るし、職業的にも女の子にモテる仕事なんだ」

オスカーはここだと思った。ここで自分の話に持っていけないと延々と呪い破りの話が續くに違い無かった。呪い破りの仕事にも興味はあったが眼前の問題の方がオスカーには重要だった。

「ビルはいまでも十分モテるだろ」

「僕が？ オスカーは僕が五年生の時にエミリー・タイラーに振られた話を知らないのか？」

「振られた？ ビルが？」

「ああ…… そうか、そのころオスカーはそれどころじゃなかったかもしれないな。ちょうどエストとオスカーが喧嘩してるみたいな時期だったから。ほら、あの雪の中やってたクイディッチの後ろへんだよ」

オスカーからすれば驚きだった。ビルを振る人間がいるのだろうか？ 背も高く、イケメンで性格が良く、成績や魔法の腕は全校の男子生徒の中でもピカ一なのだ。家だってお金が無いとは言え、ウィーズリーと言う名前は魔法界でも指折りの名前のはずだった。

「あの頃は確かに他の人の話を聞く余裕は無かったけど…… エミリー・タイラーってビルと同じ年のグリフィンドールの人か」

「そうだよ。ずいぶんこっぴどく振られた。私がウィーズリー家の男なんてボーイフレンドにするわけないってね」

▪ ならどんな家ならボーイフレンドにできるというのだろうか。クラーナやエスト辺りが男だったなら要件を満たすのだろうかとおスカーは考えたが、二人が男になったらスペック的に勝てる気がしなくて、今度はそれで付き合いくくなりそうだとオスカーは思った。

「なんかグリフィンドールの女子のボスみたいな人だってクラーナが言ってた気がする」

「そうだよ。見た目は綺麗だし、何より闇の魔術に対する防衛術で吸血コウモリに撃った失神呪文が見事だった。低学年の時は何回かクラーナと喧嘩してマクゴナガル先生に二人とも怒られてたな」

どうも最近グリフィンドールの人間と喋ることが多いせいで、オス

カーはちよつとだけグリフィンドール寮でのクラーナの姿が見えてきたと思つた。

しかし、問題なのは女の子に近づいて普通にいられるのかどうかだつた。女の子が失神呪文を使わなくても、近づくだけでダメなのならオスカーは永遠にプロテゴを使ってホグワーツでの生活を送らなはいといけなかつた。

「ビルはその人と普通に喋れてたのか？」

「普通つて？」

「要はほら、ジニーとかエストと喋るときみたいに」

「全然だめだよ。五年も同じ寮で過ごしてきて、時々は喋つたこともあつたのにあの頃は全然喋れなかつた。友達に頼んで僕をどう思つてるか聞いてきて欲しいつて頼んだくらいだ」

ビルはエミリー・タイラーを好きになつたから喋れなくなつたのだろうか？ ではオスカー自身はどうなのか、オスカーはもしそうだとしてもいきなりそうなるのは訳が分からなかつた。なぜならオスカーは四年も一緒に喋つてきたのに、いきなりそうなるのは訳が分からなかつたのだ。しかもビルのように一人にそうなるならまだ分かつた。

「今はどうなんだ？」

「今？ あんな風に家族の事で断られて、僕に問題があつたんじやないかとちよつと悩んでたけど、今はそうでもないな。あの後ふくろう試験の勉強に集中したのが良かったかもしれない。呪い破りになるつて目標にも打ち込めたし」

「他の事に集中したから解決したのか？」

「結構それはあるな。五年生の宿題の量はこれまでと桁違いだから」

オスカーはなるほどと思つた。何か打ち込めることとか、明確な目標だとか、集中しないとできない事をやっていればそうでもないかもしれないのだ。

「ただ、僕と違ってオスカーはそうそう逃げられないと思う」

「逃げるつて？」

「男だけで喋りたいからここに來たんだろ？ けど、そんな長くいつ

もオスカーがつるんでる四人から離れられないと思うけどな」

「いや、別に逃げてるわけじゃないんだけどな」・

どうもやつぱりウィーズリー家のみんなからそう思われているのではないかとオスカーは思った。

「魔法族も動物だから、そろそろ本能に逆らえなくなるはずかもな。いつそ動物もどきにでもなった方が動物の気持ちがあつて吹っ切れるのかもしれないけど」

「何を吹っ切るんだ」

「チャーリー風に言えば、僕らは動物より頭がいいけど逆に頭に縛られてるってことさ。チャーリーなんて箒じゃなくて自分にドラゴンの翼を生やして飛びたいって子供の頃から思ってるけど、残念ながらチャーリーは僕の弟で人間だ」

まあチャーリーはそうだろうとオスカーは思った。逆にチャーリーはドラゴンとクイディッチに打ち込み過ぎているからオスカーの様な状態にならないのではないかと思ひ始めた。

「チャーリーはドラゴンに変身できるならだいたいのモノでも捨てられそうだけど」

「チャーリーを例えに使うのは不味かったかもな…… 僕が呪い破りになりたいって言っても色々問題がある。そういうのと同じで、人間は頭が良い代わりにいろんなつまらない問題があるってことさ。動物なんて飛びたいと思つたら飛ぶし、つがいになりたいって思つたらそうする。自分がやったことなんて先にも後にも考えないからな」

「その方が楽かもな」

「そうなったら人間である意味も無いのってエストなら言うだろう」

流石にウィーズリー兄弟の最年長だけあつて、ビルはチャーリーやエストの特徴を捉えているとオスカーは思った。

それにオスカーは本能に惑わされているのだろうか？ ならどうして成長するにつれて惑わされるのかが良く分からないとオスカーは考えたのだ。もし、心や精神が成長するのならどうして成長したあとに惑わされるといふのだろうか。

「僕もホグワーツの最後の年だから、オスカーとその周りに楽しませ

てもらおうよ」

「何を楽しむんだ」

「グリフィンドールでやってる賭けとか色々かな。インサイダーじゃないけど僕の立ち位置は結構有利なんだ」

「何に賭けてるんだ」

「とりあえず、オズカーはもう逃げられないってことかな」

「どういうこと……」

バチツという音がして、ビルと二人で座っていた芝生の坂の上に人影が四つ見えた。オズカーは二日も持たなかったと思った。

「オズカー、ジニーはほとんど毎日エストに手紙を送ってる。あのバカでかい驚みたいなのが今年は毎日きてるよ」

「朝もうちよつとジニーにジャムをあげれば良かったかもしれない」
「多分マーマレードじゃないとダメだろうな。今日はイチゴしかなかったから。じゃあオズカー、君の家でもよろしく頼む。うちのママのごはんも美味しいけど、君の家の屋敷しもべのごはんも美味しいから」

そう言つてビルは坂を上がり隠れ穴に戻つていった。代わりに四人がこつちに来るのが見えた。オズカーは思った。自分は何かダメなことをしただろうかと、ちよつとチャーリーとジェイと男三人で遊んで、チャーリーの家に一日泊まつただけなのだ。なのに何となく四人は怒っているだろうとオズカーは思った。

オズカーは観念して芝生に寝転がつて目を閉じた。目を閉じる前に庭小人がずいぶん遠くからオズカーの方を恐々見ているのが分かった。

「寝たふりですか」

「こいつ自分に都合が悪くなると割と寝たふりするわよね。湖の傍とかでもいっつもこんな感じじゃない」

いつも喧嘩を始めるくせにこんな時だけは息が合っているとオズカーは思った。そもそも知ったのはエストだけのはずなのにどうして四人集まっているのだろうとオズカーは考えた。

「オスカー先輩はボク達に秘密でどこに行ってたんですか？ チャーリー先輩の機嫌が良くて気持ち悪いくらいだつてジニーが言つてましたけど」

「なんで隠れ穴に来てるのに誰にも連絡してないの。オスカー」

「そもそも未成年なのに姿現しで来ている時点で、オスカーより四人の方が問題があった。」

「チャーリーと男だけでちよつと危ないことしようつてことになった」

「はあ？ なによそれ、あんまり男の友達がいなからせめてもの抵抗つてこと？」

「危ないことつて、新聞に載つてたような事件に関わつてないですよ？ 狼人間がノクターン横丁に現れたとか、魔法不適正使用取締局がトロールの集団とドンパチしたとか」

「そもそもそんなことをしたとしても、隠れ穴に一人で黙つて来てる理由にはならないの。だつて隠れ穴で危険な事なんてできないもん」

「ボク達と一緒にいるのが嫌だつたとかですか……？」

オスカーは喋れば一瞬でボロが出そうだと思つたので、できるだけ口数を少なくしようと思つた。もうノクターン横丁で狼人間と色々やったのがばれそうだつたし、卵の件もチャーリーの機嫌からばれてもおかしく無かつた。オスカーとチャーリーは、できればギリギリまで卵の件を黙っておきたかつた。その方が秘密の事をやっている様で楽しそうだつたからだ。

「ほんとにちよつと男だけで遊びに行きたかつただけだつて。隠れ穴にはあんまり女子が泊まる部屋が無いから自重して……」

喋りながら目を開けると四人の目が思ったより近くにあつて、オスカーは思わずもう一度目を閉じてから起き上がった。

「それにジニーが女子だけで遊びに行く計画があるつて……」

「それとこれとは話が別なの。だいたい部屋が無いにしても誰かに連絡してもよかつたでしょ。オスカーの家に行くのは二日後だけど、オスカーはそれまで隠れ穴にいますつて」

「そうですよ。みんなに黙ってなくても良かったでしょう。何か隠しごとをされてるみたいで怪しく思いますよ」

「やっぱりオスカー先輩はボク達全員か誰かに会いたく無かったんですか？」

「ぜったいそうよ。どうせなんか隠れ穴に泊まってる私たちにばれたら都合が悪かったに違いないわ」

なんでこんなにコンビネーションがいいのかオスカーには分からなかった。この四年間で一番四人の呼吸が合っているのではないかとオスカーは思った。

「でもチャーリーの家に泊まるって言ったらみんな泊まるって言いだすだろ」

「そんなこと……」

エストが言いかけて他の三人を見た。三人とも答えなかったが多分答えは一緒だった。トンクス以外の三人はほとんど住んでいる家に家族がいないことをオスカーは知っていたし、それもあつてオスカーからすれば言い出し辛かった。

「とにかく謝るって、みんなに黙って泊まってたことは。今日は自分の家に帰る」

「オスカー先輩のそのすぐ謝るのはずるいと思います」

「そうですよ。それにウィーズリー家の人達にもなんて言うんですか？ 私たちに見つかったから帰りますって言うんですか？」

「そうなの。オスカーがオスカーの家に帰っても何の解決にもならないの」

「まあいいんじゃない。三人はオスカーの家に泊まれば静かになるわよ」

オスカーは思った。トンクスがわざとではないにしても風向きを変えてくれたと。

「泊まりたいのはトンクス先輩なんじゃないですか。さっきもトンクス先輩は隠れ穴に泊まるって言いだすって感じだった」

「そうですよ。黙ってたじゃないですか」

「何よ。隠れ穴に泊まれば一足早く、フレッドやジョージと悪戯で

きると思っただけよ」

「どうせウソなの。さっきのも自分だけ除いてたけど、ほんとに泊ま
りたいのはトックスに決まってるの。だってオスカーの家なら一人
一つ寝室があるもん」

もうらちが明かなかった。夏休みが始まって初めて四人がそろつ
たはずだったが、さっき

までのコンビネーションはどこかに行っちゃってしまい。今にも喧嘩し
そうだった。

オスカーは隠れ穴に向かって歩きながら言った。

「分かったから。じゃあもう今日から来れる人だけ俺の家泊まって
大丈夫だ。今からウィーズリー家の人達にも言ってくる」

「ちよ、ちよつとオスカー待ってくださいよ」

「それができるなら最初からそうすれば良かったじゃないの」

「オスカー先輩怒ってるんですか？」

「いきなり言われてもモリーおばさんが困っちゃうかも……」

オスカーは理解した。一人でも相手をするのが不可能に近いと
思っていたが、どうにも四人揃うと本当にこれまでの様にいられるか
怪しいという事だった。

四人が口々に色々な事をオスカーの周りで喋っているのを聞きな
がらこれからの事を考えたが、オスカーは本当に夏休みを過ごし切る
ビジョンが浮かばなかった。

監督生

オスカーは自宅のベッドで本を広げていた。いつもの夏休みならとつづくに起きて広間で家に来ている誰かと喋っている時間だったが、今年の夏休みは少し違った。

一人の時間が必要だとオスカーは思っていた。去年の様に差し迫って何かをしなければならぬと思っっているわけではないのにそう思っていたのだ。

ベッドの上に広がっている本はオスカーがペンスに言って買ってきてもらった本で、魔法界にあるいろんな職業について書かれている。闇祓いや癒者と言った魔法界の子供が憧れるような職業から、ドラゴンの糞を掃除する仕事やレタス喰い虫の繁殖家まで、オスカーの知らない仕事はまだまだたくさん魔法界にはあるらしかった。他にも『君はトロールをガードマンとして訓練する能力を持っているか？』、『魔法事故・惨事部でバーンと行こう』等、何冊か魔法界の職業に関する本がオスカーのベッドには転がっていた。

この部屋はドロホフ邸で唯一残されたオスカーの城だったが、誰かが来た場合簡単に陥落する城だった。最近はせめてもの抵抗としてこうやって部屋で本を読む時間をオスカーは作っていたが、それは大抵むなしい抵抗に終わることが多かった。

本を三分の一も読まない間にドアがノックされた。ドラゴンの糞職人の歴史についてギリシヤにそのルーツがあるところまで読んでオスカーはノックに声で答えた。

「起きてるけど」

「入っていい？」

「まだ寝巻のローブなんだけどな……」

オスカーはてっきりパーシーかレアだと思っていたので驚いた。パーシーは暇があればオスカーの授業中のメモや勉強に役立ちそうな何かを最近借りにくるようになっていたし、レアは朝食や昼食の前にオスカーの所へ頻繁に顔を出していて、オスカーはだいたいそこで捕まえられ広間に出頭していた。

「あれ？ オスカーはまだふくろう来てないの？」

「ふくろう？ なんかすごい羽だらけだし、なんでふくろう持ったままなんだ？」

「あ……忘れてたわ。ふくろうさんごめんさい」

髪の毛や服にふくろうの毛を沢山つけたトunksが手にもつていたふくろうを離すと、ふくろうは怒った様にホーホーと鳴いて部屋の窓から外に出ていった。それと入れ替わりに一羽のふくろうがオスカーの方へやって来た。足には封筒が括り付けられていて、外せばオスカーの良く知る紋章が蠟に記されている。ホグワーツの紋章だ。

「来学期の教科書とかか……」

「今年はそれだけじゃないでしょ」

「それだけじゃない？」

封筒にはいつもの羊皮紙ではなく何か小さなモノが入っている様だった。羊皮紙は全部で三枚入っていた。一枚目は九月一日に学校が始まるという内容、二枚目は新しい教科書についてで、基本呪文集五学年用、防衛術の理論、実践的防衛術と闇の魔術に対するその使用法、新数霊術理論と四冊必要だった。

「この新しい闇の魔術に対する防衛術の教科書、三年の時にクラリーナにあげたやつだな……」

「そんなのどうでもいいからさっさと次の羊皮紙読みなさいよ」

トunksに急かされてオスカーは次の羊皮紙を読んだ。単刀直入に一行目にこう書かれている。『オスカー・ドロホフを監督生に任命する』その次には他の生徒の模範として行動しろだとか、ホグワーツの校則をきちんと理解しろ、同じ寮の人間からは減点できることや、専用のバスルームが使えることが書かれている。最後にはその世代を監督する立場として、学校の期待を理解して成長して欲しいな事が難しい言葉で書かれていた。署名はマクゴナガル先生とダンブルドア先生それにスネイプ先生のモノで、恐らく文章はマクゴナガル先生が書いたのだろうとオスカーは思った。

「封筒をひっくり返しなさいよ」

「分かった」

封筒をひっくり返せば小さい何かの正体が分かった。緑と銀色のバッジがベッドに転がった。オスカーはビルの胸にこれと対照的な色のバッジがつけられていたのをもう二年も見ていた。目立つのは真ん中のPの文字だ。

「やっぱり、ダンブルドア先生はあんたを監督生にしたわけね」

「そうみたいだな。それでトンクスはなんで俺のここに来たんだ？」

「いや、分からないの？ 私も同じなのよ」

トンクスはポケットからくしゃくしゃになった羊皮紙と黄色と黒のバッジを出した。羊皮紙にはオスカーのものと同じ文章が書かれていた。

「大穴って言うのかアップセットって言うのか……」

「私だってそう思うわ。それで、なんでダンブルドア先生はこんなこととしたのかしら？」

オスカーはトンクスの反応がおかしく笑いそうになってしまった。どうもかなりトンクスは混乱している様だったからだ。普通の人なら監督生になれば喜ぶはずなのに、トンクスは自分でもなれた理由が分からないらしかった。

「なんでってトンクスなら監督生にふさわしいと思ったんじゃないか？ ダンブルドア先生が」

「いや、だって、あんただっておかしいと思ってるじゃないの。私去年だけで二十三回も罰則をくらってるのよ？」

どうもトンクスの体が髪から靴下まで羽だらけなもの、ふくろうを思わず握りしめてここまでやって来たのも監督生に任命されて混乱しているためらしかった。

「それでもトンクスが監督生の方が良いってダンブルドア先生は思ったんだろ？」

「だからなんでそうしたのかってことなのよ。だって私よりペニーなんかの方が友達も多いし、スプラウト先生に好かれてるし……成績は私の方がちょっといいかもしれないけど……罰則だってまあハッフルパフの同級生全員合わせて私とどっこいどっこいだわ」

「他のみんなに聞いたのか？」

「聞いてないからここに來てるんでしょ。クラーナが大騒ぎするに決まってるし、パパやママがなんて言うか分からないじゃない。絶対おかしいわよ。どうするのよこれ、監督生が二十回も罰則受けたらどうなるのよ。やっぱり剥奪？ それとも自分で自分に罰則を与えるのかしら？」

監督生が罰則を受けることに疑問をトンクスが持った時点で監督生に任命した意味は

十分あるのではないかとオスカーは思った。それにやっぱりトンクスは広間の喧騒から逃げてきたらしかった。今頃広間はどうなっているのか、ビルが主席にエストやチャーリーが監督生になっているのならウィーズリーおばさんは大喜びだろうとオスカーは考えた。

「ちよつと前に…… 観覧車で言ってただろ」

「何を言ってたのよ。オスカーが馬鹿だつてこと？」

オスカーは観覧車の事を言うのがはばかられたが、トンクスが類を見ないくらい混乱しているせいで変な気分にならずに喋れていると思つた。目の前で誰かが混乱していると見ている方は冷静になつてくるようだった。

「俺が校長室で寝てる時にみんながどうだつたかつて話だよ」

「したけどそれが何なのよ」

「その時にダンブルドア先生が周りの事を見れてるなつて思つたんじゃないのか？」

「周りの事を？」

「他のみんながどうだつたかつて俺に言つてただろ？ なんて言うかみんなの余裕が無い時に他の人のことを見れてたつてことだろ」

「それが何なのよ」

「監督生っぽいだろ？」

そう言うのとトンクスは目を見開いた。それに黄色と黒のバッジを強く握つた様にオスカーからは見えた。

「それはなんか違うわ」

「違うつて何が？」

「あの時は私はどんな状況か分かつてなくて…… 三人や特にレアな

んかはヤバイって分かってたから必死だったのよ」

今度は別の事でトunksが悩んでいる様にオスカーには見えた。そう言えばオスカーはチャンスだと思った。結局自分の家に戻ってからは渡すタイミングが無く、トunksに待ち合わせに遅れた埋め合わせを渡せていなかったのだ。

「とりあえずダンブルドア先生からは俺が言ってみたみたいに見えるかもしれないってことだろ？ それとこれ前ちよつと遅れたのと、俺に合わせてロンドンを歩いてくれたから」

「何これ？ ヘアピン？ 別にそんなのいいのに」
「じゃあ監督生祝いにしといてくれ」

トunksがヘアピンを髪に着けようとした瞬間ドアがいきなり開けられた。オスカーがこれまで見たトunksの動きのどれより早く、監督生のバッジとヘアピンをポケットにトunksは入れた。

「オスカー、オスカーもバッジは届いた？ あれ？ トunks？」
「ちよつとノックくらいしたらどうなのよ。私でもノックして入ったわよ」

「バッジは届いたけどな」

最初は笑顔で入ってきたエストはトunksを見て少し眉を吊り上げた。エストの手にはオスカーのバッジと全く同じデザインのバッジが握られていた。オスカーもベッドに置かれていた自分のバッジを手に取った。

「これでお揃いでしょ？ クラナーナとチャーリーもお揃いだし、ビルは主席のバッジを貰ってたの。HBって書いてあるやつ。フレッドとジョージは石頭の略だつて言ってたけど」

エストがオスカーとトunksの間に座って来たので、オスカーは思わず自分の枕の方へ少し動いた。ベッドは三人分の重さでさつきよりに沈みこんだ。

「エストのバッジのPはパーフェクトのPってわけね」

「何がパーフェクトなの？」

「じゃあトunksのは何のPなんだ？」

「トunks？」

トunksはオスカーの方を見て言うなという顔をしていたが、どうせ一日も持たないのだからオスカーはとつとつと喋ってしまえばいいと思っていた。

「え？ どういうこと？ トunksもバッジ貰ったの？ なんて言わないの？」

「貰ったわよ。一番私が何で貰ったのか分からないわ」

バッジを取り出す時にトunksはさっきのヘアピンを落とした。エストがそれを拾うとヘアピンは黄色から緑色に変わった。

「ふーん。このヘアピン魔法がかかってるんだね。髪の毛の色に合う色になるのかな？ トunksこんなもってたの？」

「持ってたのよ!! ほら、バッジを見なさいよ、どうみても本物でしょ？」

トunksはエストの手から乱暴にヘアピンを奪いとって、バッジを代わりにエストに渡した。

「ほんとだ……じゃあハツフルパフの監督生の一人はトunksなんだね。でもなんでトunks先生やテッドさんに言わなかったの？」

「オスカーの部屋でこそそしてたの？」

「なんで貰えたのか分からなかったからよ」

「確かに……何でトunksが貰えたのかだよね……」

エストはしばらく考えている様だった。その後、解けたとばかりにオスカーとトunksの方を交互に見た。

「ダンブルドア先生があの時校長室にいた人達をコントロールできない場所に置きたくないんじゃないかな？」

エストを除いた二人はいきなり物騒な感じの発想になったので少し驚いて目を見合わせた。それまで座って喋っていたエストはオスカーのベッドに寝転がって自分の考えを喋り始めた。

「ダンブルドア先生は凄い賢い人でしょ？ それに髪飾りも石もそうだけど、同じようなのがもつと一杯あってもおかしくないでしょ？」

だからダンブルドア先生はエスト達に校長室で何があったのか喋っちゃダメって言ったんだと思うし」

完全にリラックスしてエストは喋っている様にオスカーには見え

た。かなり重大な事をエストが喋っているはずなのに、オスカーが考えていたのは今日果たしてこのベッドで自分が寝ることが出来るかどうかという事だった。ペンスに言っただけじゃなく、シーツや掛布団を替えて貰わないと色々気になって寝れないのではないかとオスカーは思っていた。

「じゃあ何なのよ。私を監督生にしたのはダンブルドア先生が私を監視するためだって言うの?」

「それだけとは言わないけど、でもトンクスもおかしいと思ってるんでしょ? それにトンクスだけじゃなくて、エストでしょ? オスカーでしょ? チャーリーでしょ? クラーナでしょ? それにトンクスもってなればそう思わない? 多分レアも来年そうなると思うけど」

「それは確かにそうだけど……」

ゴロゴロとベッドを転がっているエストにオスカーは気が気で無かったが、何か言っただけでばかりにこっちを見てくるトンクスの方も放っていくわけにもいかなかった。

「ダンブルドア先生もただそれだけの理由で監督生にしないだろ。できるって思って無ければバツジをあげないと思うけどな」

「でもちよつとずるいよね。トンクスは多分ホグワーツに来てから百回くらい校則を破って罰則を受けてると思うけど、ハッフルパフには真面目に校則を守ってる人もいるわけだし、トンクスの成績は他の人よりいいかもしれないけどやっぱちよつとずるいって思うかも」

「そんなの分かってるわよ」

ちよつと不味い雰囲気な気がオスカーはしたが、勝手にオスカーの枕を抱き枕にしてポフポフやっているエストの方がオスカーには問題だった。オスカーは今日は空いている別の部屋で寝て、その間にペンスにベッドを新品同様にして貰わないと寝れない気がした。

「それに期待してるとかそう言うことを言われると裏切れなくなっちゃうよね?」

「どういう意味よ」

「ほら、闇の魔法使いとか死喰い人とかは裏切ったら大変なことにな

るから裏切れなくしてるけど、逆に貴方は期待してますよとか、こういう風な立場につけてあげますよって言うのと裏切れなくなるでしょ？ 監督生にするって期待してるってだけじゃなくて、そういう意味もあるんじゃないかなって思うけど？」

「いい人ほどそうなりそうだな」

今度は枕を抱いてゴロゴロとベッドを転がっているエストにオスカーはもう諦めたが、今の話は重大な事のような気もした。隠れ穴でのパシーの話もそうだったが、期待や信頼は重りや枷にもなりかねないという事だった。それもいい人間で誠実で実直な人間ほどそれが重くなりそうだという事なのだ。多分、ヴォルデモートなら気にすらないだろう。

「でもトンクスも監督生おめでどうなの。これでみんな一緒にでしょ？ 専用のお風呂も入れるもん」

「そうね。監督生がフィルチの部屋をブボチューバーの膿みだらけにしたり、図書館のマダム・ピンズの引き出しにマンドレイクを入れたらどういふ罰則になるかは興味あるわ。バッジを没収されるのかしら？」

「監督生にしたダンブルドア先生とスプラウト先生のせいになりそうだからやめとけよ」

チャーリーは二人について喧嘩しそうみたいな事を言っていたが、オスカーはそうでもないのではと思った。こうしてみればエストもトンクスも仲が悪いようには見えなかった。

「オスカーはご飯食べに行かないの？ もうお昼だつてペンスさんが言ってたけど」

「行くよ。着替えてからな、二人とも先に行つててくれ」

「分かったの。それと夜はごちそうにしましょうつてモリーおばさんが言ってたけど、ペンスさんが厨房を明け渡してはくれ無さそうだからオスカーとちよつと相談したいかもつて言つてたよ」

「屋敷しもべにとつてはオスカーお坊ちやまから厨房を任せられるつて言うのは、自分の命より重い使命なんだから当たり前」

やっと二人が出ていった後で、オスカーはやっぱりベッドで寝れない気がした。窓とドアを全開にして空気を換えたが、焼け石に水しか思えなかったし、オスカーの聖域は柑橘類の香り一杯だった。根本的にベッドに座らさないように椅子をもう二脚くらい増やさないと対策にならないとオスカーは考えながら広間に行く準備をした。

「オスカー、監督生ですよ。監督生」

「分かってるよ」

「分かってますか？ 監督生って一学年に八人しかいないんですよ？」

「それも知ってるよ」

「ほんとに知ってますか？ ここに八人中五人いるんですよ？」

「分かってるよ。クラーナ、何か飲んだのか？」

「全然私は大丈夫ですよ。とにかくオスカー分かってますか？」

どうやって作ったのか広間には主席・監督生おめでとうと書かれた横断幕がはってあって、オスカー達はその下で豪華な夕飯を食べていた。その夕飯の後にオスカーはそのまま誰かが大人用のお酒を飲ましたらしいクラーナにつかまっていた。

「ほらアップルパイ食べたらどうですか大きくなれないですよオスカー」

「いやなんか逆だろ」

「逆って何ですか？ ここに五人も監督生がいるんですよ凄くないですか？」

「凄いと思うよ」

「チャーリーのお父さんやお母さんも、トンクスのお父さんやお母さんも凄く喜んでたじゃないですか、結構凄いことなんですよ」

「そうだな」

■ 確かに一番喜んでいたのは学生本人より家族かもしれない。

オスカー達自身よりも周りの方が喜んでいたし、それを見て学生やチャーリーの下の兄弟も嬉しくなってくるという感じだとオスカーは思っていた。

「だから凄くて良いことなんですよ、分かっていますかオスカー？」

「マッドアイはなんて言ってたんだ？」

「アラスターおじさんですか？ めでたい。それはめでたいって言うてました」

「喜んでたんなら良かったんじゃないか？」

「そうですね。アラスターおじさんからしたら最大限の喜び方ですよ。姉さんが試験に受かった時もそんな感じでした」

クラーナはエストやチャーリーやトンクスの様に褒められてみんなに喜んで欲しいのだろうかとおスカーは思ったが、オスカーがクラーナを褒めてもなんだかそれは違う気がした。

「姉さんが監督生になった時はあんまり覚えてないですけど、主席になった時は姉さん、なって当然みたいな感じでしたんですよ。考えられますか？ ビルみたいに喜んだら良かったのに」

「その方が楽しいかもな」

「そうですね。絶対そうですね」

多分二年生までのクラーナならお酒を飲んだとしてもこんな話をしなかったのではないかとオスカーは思った。ある意味で安心して喋っているのかもしれない。オスカーの部屋のエストと一緒に、随分リラックスしている様におスカーには見えた。

「オスカー、オスカーは…… 前にも聞いた気がしますが危ないお仕事はどう思いますか？」

「え？ 誰かはやらないといけないんじゃないか？」

「そうじゃなくてですね。自分でやるのはどうですか？ 家族がしてるのはどう思いますか？」

「自分で？ 自分でやる分には…… やりたいならやるだろうけど。それがやりたいことなら」

まだ広間には何人が残っているはずだったがオスカーとクラーナの方には近づいてこなかった。クラーナがこういう状態なのを分

かかっていて誰かはオスカーをここに配置したに違い無かった。

「そうじゃなくて…… その…… あの、あんまり私たちは実感が湧きにくいですけど。チャーリーのお父さんとか、トンクスのお父さんはそうだと思うんですけど。危ない仕事をしたら不味いかもって思ったり……」

「家族がいるってことか？」

「あ…… そういうことです」

オスカーにはもうだいたいクラリーナの酔いは醒めているように見えた。しかしなぜクラリーナがこんなことを考えているのだろうと思っただのだ。さつきクラリーナ自身が言った様に、オスカーもクラリーナもチャーリーやトンクスの様に危険な仕事をしたからと言ってやめろというような家族はほとんどいない様なモノなのだ。

「だから、その、レアとかエストはまだあつちですよね？」

広間を見渡してクラリーナはレアの位置を確認した。レアはジニーとフレッド・ジョージの前でビルとバタービールの飲み比べをしていた。もちろんバタービールはビルの肥大化呪文で数倍のグラスになっていた。エストの方はキングズリーやウィーズリーおじさんと何か話込んでいるように見えた。

「置いていかれるのはみんな嫌だと思えますけど。置いていたらどうなるんだらうって考えませんか。もつとずっと後のことかもしれないですけど」

「クラリーナが誰か置いていくのか？」

「私もそうかもしれないですけど。誰でもそうですね」

クラリーナは誰を置いていってしまうと考えているのか。そもそもどうしてクラリーナがそんな考えを今しているのか、オスカーはこの夏休みで聞いた事を合わせると思え付きそうで考え付かなかった。クラリーナ、エスト、レア、トンクス、チャーリー、それにウィーズリーおじさんやパーシーやビルの話、みんなどころどころ同じ様な話をしている気がしていた。

「よし、こんな辛気臭い話やめましようよ。オスカー、なんか甘いモノ食べましようよ。大きくなれないですよ」

「甘いモノ？ 前のパフエ食べたいのか？」

「は？」

オスカーがパフエと言った瞬間に二人分パフエが出てきた。スプーンはちやんと二つあった。

「なんでオスカーの家でこれが出てくるんですか？」

「前の週刊魔女の時からペンスが読んでるからだろ」

「それでもオスカーが頼まないでペンスは作らないでしょう!!」

確かにそれは凶星だったが、割とペンスは流行に敏感なところがあつた。お菓子を頼んでも見様見真似で雑誌に出ているお菓子を作ってしまうのだ。

「まあ同じくらい美味しいぞ」

「美味しいですけど…… なんかこれは……」

「またオスカー先輩はパフエですか？」

さつきまでビルと飲み比べをしていたはずのレアがオスカーの隣にいた。それも巨大なグラスを持ってだ。ビルは向こうの方で机に突っ伏していた。

「レア、またってどういうことですか？」

「え？ だってこれ週刊魔女に載ってたパフエですよ？ 前もオスカー先輩が食べてましたし、なんか脈絡もなくボクにも食べるかって言ってきました」

オスカーは何となく不味い流れな気がした。クラリーナは明らかにオスカーの方を睨んでいてさつきまでのリラックスして喋っている感じでは無かったからだ。

「いつ食べたんですか？ レアは？」

「ここで食べました」

「だからいつ食べたんですかって」

「クラリーナ先輩もしかしてお酒飲みましたか？」

「レアみたいに飲んでないですよ」

「クラリーナ先輩はちよつとずるい。お酒飲んだってことにすればなんでも言えるしできるから」

ちよつとではなく明らかに不味いとオスカーは思った。レアの切れ味が段々上がっているとオスカーは思っていた。距離感が近くなったとか、物怖じや遠慮が無くなった結果、最近は段々と拔身の刀の様になっているとオスカーは思いつつあった。

「なんですかそれ、どういう意味ですか。だいたいレアはトunks並みに最近おかしいですよ。前は、ボクは……でも……みたいな感じだったじゃないですか。どこに行っちゃったんですか殊勝な後輩のレア・マツキノンは」

「パフェ美味しいですねオスカー先輩」

「ちよつと聞いてますか？　そういうところですよ。何がオスカー先輩なんですか？　最近オスカーって呼び捨てにしているのに、人前だと先輩付けなんですか？」

「なんでクラリーナ先輩はパフェの事を気にしたんですか？　クラリーナ先輩は週刊魔女が大嫌いだから絶対パフェの記事が載ってても分からないと思うけど……」

オスカーは理解した。こういう状態のクラリーナとレアの組み合わせは何時ものクラリーナとトunksの組み合わせと同じくらい良いということ事。

「関係ないですよ。私が読まなくてもグリフィンドールの他の女子生徒が喋ってれば分かりますよ」

「クラリーナ先輩はそんなにグリフィンドールの女子の同級生と仲が良いんですか？　あまりホグズミードとか大広間で一緒にいるのを見ないですけど」

「ルームメイトとかは喋るし、一緒に授業に行ったりしますよ!!　だいたいレアみたいにぞろぞろ引き連れて動くのがおかしいんですよ。なんで教室の入り口のところにたむろするんですか？　邪魔で仕方ないですよ」

「よし。クラリーナ、家にいる間にさっきみたいな闇祓いの話を聞きに行こう。今なら聞けないことも聞けるだろ」

「はあ？　オスカー何を……　ちよ、ちよつとあんまり手を引っ張らないでくださいよ」

これだけいつもより口が回るのなら、いつもクラリーナが聞きたくても聞けない事を聞けるのではないかとオスカーは思った。キングズリーの所はちょうどエストがジニーと突っ伏しているビルのところへ介抱に行つたところで、テッド、キングズリー、マッドアイ、アーサーと男ばかり集まっていた。

「オスカー先輩は酔つたクラリーナ先輩に甘すぎます」

「醒ましたら戻ってくる。ホッグズ・ヘッドみたいなことになったら俺がダメージを受けるからな」

「オスカー、いま聞き捨てならないことを言いましたよね？ 聞いてるんですよ。オスカー」

さつきよりよっぽど酔いは醒めて居そうなのに、こんなにクラリーナとレアは言い合いをする仲だったのかとオスカーは首をかしげた。これまでならもつと何かお互いの距離感というのかそういうモノが二人の間にあつたと思つていたのだ。

「ちよつとクラリーナが大人の仕事について聞きたいことがあるらしいんだけど」

「ちよつとオスカー、いきなり振られても何がなんだか分からないですよ」

「アラスター、いいんですか？ 姪御さんがお酒を注がれて男に連れまわされてますが」

「シャックルボルト、お前が後見人だろう」

「クラリーナちゃんはしっかりしてるなあ。うちのドローラは僕には何も言つてくれないのに」

「いやあ、ビルはちよつと仕事を選ぶ話でちよつとモリーと揉めているからね」

オスカーはクラリーナよりこつちの男達の方が出来上がっているかもしれないと思つた。マッドアイはてつきりスキットルからしか飲まないと思つていたのだが、オスカーの目の前で違う人が飲んで安全だと確認した酒をスキットルに注いで飲んでいた。なぜグラスから飲まないのかはオスカーには分からなかった。解毒作用でもスキットルにあるのだろうかとおスカーは予測せざるを得なかったのだ。

他にも何本か酒瓶が空いていて、明らかに奥さんや強い女たちから逃れて男だけで飲んでいる様だった。

「みんなどうやって今の仕事を選んだんですか？」

「わしの時代のわしの家は闇祓いになるものと決まっつった」

「じゃあ、アラスター叔父さんはいいです」

「みんな聞いたかい？ 伝説のオーラーが一撃だ」

テッドが茶々を入れるとクラリーナがそつちを睨んだ。オスカーはこういうところはやっぱりテッドからトンクスに受け継がれているのだろうと思わざるを得なかった。

「オスカー君、やっぱり男はモテて家族を養えるような職業じゃないとダメだよ。その二人みたいな闇祓いとか、魔法省の官僚とか。やっぱり大黒柱にならないと」

「そうですね。エドワードさん。オスカーには大黒柱になって貰えばいいと思います。どうですか？ キングズリーやウィーズリーおじさんは？」

クラリーナにエドワードさんと呼ばれてテッドは結構ショックを受けている様だった。オスカーは勝手に大黒柱にされているのは置いておいて、テッドがどうしようもなくなったらこう呼べばいいと学習した。

「私かい？ 若い頃は何を考えていたかな…… 三年生の時にマグル学を取って…… それから私の目は魔法界とその外側を見る様になって、結局魔法省に入ったね。モリーと駆け落ちしてしまったのもあるだろうが」

「アーサーの名前は魔法省の色んな場所で聞く。驚くような魔法界の重鎮でもアーサーの名前とアーサーが作った法律を知っている」

「キングズリーよしてくれ。それに、若い間はモリーと私だけだったから多少の無茶はできたんだ。それがちよつと年をとつて息子が生まれるとそうはいかなくなる」

多分こういう話がクラリーナが聞いたかった話ではないだろうかとオスカーは思った。今度はテッドのようによそよそしい名前と呼ばれることなくアーサーとキングズリーは喋っていた。

「だから若い間に世の中の色々な事にぶつかってみるべきだと私は思うよ。まあ家族や大人は色々言うだろうが」

「そういうことだよ二人とも。駆け落ちとかね」

「ウィーズリーおじさんとエドワード・トンクスさんが言うと言得力がありますね。オスカー」

「同意を求められても困るんだが」

そもそもオスカーは別に駆け落ちなどしなくても進路だろうが結婚だろうが反対する家族は特にいないはずだった。

「まあ今は闇祓いも必要とされている時代ではない。今では臆病な魔法大臣やマグルの大臣の警備員が関の山だ」

「我々が必要とされないという事が平和な時代だということでしょう。アラスター。二人とも闇祓いが昔何と言われていたかしつているかな?」

「昔ですか?」

昔とはどれくらい昔の話なのかオスカーには考え付かなかった。そもそも闇祓いという職業がいつできたかすらオスカーは知らないのだ。

「昔は死の呪文や磔の呪文すら禁止されてはおらんかった。魔法族は勝手気ままに決闘して、勝手に死んでいた」

「闇祓いが必要とされたのは各国に魔法省ができて、国際魔法使い機密保持法ができた後の話だ。昔の魔法族からすれば考えられない職業だったわけだ。だからそう、大陸で戦争があったころは同族狩りなんて言われてたころもある」

「ふん。狩らねば何をやらかすか分からん馬鹿どもだ」

「同族狩りですか……」

同族狩り、どこまでが同族でどこまでが同族では無いのだろうか? オスカーが気になったのはそこだったが、多分、ここにいる人達が考えている事とは違うのだろうとオスカーは思った。

「見栄えが良い職業でも色んな言い方や見方がある。それに職業に就くことが人間の目的では無いだろう。闇祓いになって何をするのか、魔法大臣やホグワーツの校長ですらその職業に就くことではなく、そ

の職業で何をするのが大事だろう」

「じゃあキングズリーは何がしたくて闇祓いになつたんですか？」

「私かい？ 若い頃は私がやればもつといういろ上手くやれると思つていた。色々な事が。今は正攻法で行うことを諦めてはいけないという事を考えているかな。色々な事を上手くやるには色んな手段がある。魔法省でなくてもだ。でも、誰かは正攻法でやらないといけな
いだろう？ それがもしかしたら一番難しいとしても」

オスカーは具体的ではないと思つた。色々キングズリーは言つたが、それは具体的に何なのだろうと思つたのだ。

「キングズリー、色々つて何なんだ？」

「さっきの昔の闇祓いの話もそうだが、どうして同族同士で争つて
いるんだろうかとかね。もちろん、考えていることは若いころとは随分
変わつてしまつただろうが」

「戦いの最中に小難しい事を考えれば死ぬ。小難しいことを考えるこ
とが出来るのは時代が平和ボケしているか、そう言つた時代で無いの
なら小難しい事を考えても死なないような腕か運を持つているやつ
だけだ」

「伝説のオーラーは何でも物騒でいけない」

「ちよつと私たちは君達より年を取りすぎかもしれない。ビルは……
あつちで酔いつぶれているのか……」

ビルは完全に潰れていて大広間のテーブルに真つ赤になつてうつ
ぶせになつていた。隣でエストとジニーがペンスと話して、多分
寝室に運ぶ算段をしているのだろう。

「なんかあんまりあれですね……」

「男の話は役に立たないかな？ ほら、あつちに女性陣がいるみたい
だから話を聞いてみたらどうかかな？」

「それがいい。あの二人はなんだかんと言つて、生まれや育ちが良い
タイプだからクラリーナちゃんがききたい話もきけるんじゃないか」

「オスカー、行きますよ」

「いや、俺は……」

「いいからほら行きますよ」

アーサーとテッドが指した方にモリーとアンドロメダがレアを捕まえて何か喋っているのが見えた。クラーナは男性陣の話が役に立たなかったとばかりにオスカーを引っ張っていった。男性陣は二人がいなくなるとまた何かくだらない話や、家庭での男性の扱いについて盛り上がっている様だった。オスカーは果たしてマッドアイがあいいう場所で何を喋るのが謎だった。

「ほら、だからやっぱり男は家を捨てても自分を選んでくれる人じゃないとダメなのよ。ねえモリー」

「まあそうね。家族と喧嘩するのは良いことではないけれど、それくらい覚悟がある相手の方がいいと思います」

「そういう事らしいです。オスカー先輩」

「オスカーは別に駆け落ちも何もないじゃないですか。だって、誰と一緒になくてもオスカーの家でペンスにお世話されて暮らせばそれで終わりですよ。あとは忠誠の呪文を誰かにかければ娘の親だろうが魔法省だろうが誰も手だしできなくなります」

やっぱりこつちの方がオスカーの方へ話題が飛び火してくる分やっかいだった。そもそもクラーナよりレアはある意味では身軽なので、駆け落ちも何もないはずだった。

「忠誠の呪文ですか？ クラーナ先輩」

「あら、そんな難しい呪文知ってるのね」

「今はほとんど必要の無い呪文ですよ」

忠誠の呪文、オスカーはそれをどこかで聞いたことがあった。さっきまでや他の二人と違って真面目な顔でクラーナの方を見るレアの顔を見てオスカーは思い出した。記憶の中で聞いたのだ。

「知っています。その呪文であらゆる秘密を人間の中に閉じ込めれば、場所も人の存在も外側には全く分からなくなります。それもどんな呪文でも破れない。駆け落ちで使う意味は分らないですけど」

「どんな呪文でも破れない？」

「そうです。たとえばどんな強力な魔法使いでも、ダンブルドア先生だって、もしこの家が忠誠の呪文で守られているのなら、門の前に鼻をくつつけたって分からないんです」

そんな呪文があるにも関わらず、戦争中は沢山の死傷者が出たのだ。オスカーはその呪文も完全ではないのだろうと思った。それにレアに続いてモリーも余りいい顔はしていなかったので続けられない方がいいだろうとオスカーは思った。

「俺も駆け落ちの用途では使わないだろうな」

「ホントですか？ オスカー？」

「本当ですか？ オスカー先輩？」

「何から逃げるんだよ」

レアとクラリーナはオスカーの方を見てから、目をお互いに合わせて、それから広間の入り口の方で騒いでいる何人かの方を見た。

「オスカー、私はオスカーが駆け落ちしても秘密の守り人にはなりませんよ」

「ボクも嫌です」

「いやだから使わないし、何から逃げてるんだ」

ありそうもない想定でなぜか嫌がられてもオスカーにはどうしようも無かった。モリーとアンドロメダは笑っているし、オスカーはさっきの男の集団の方に戻りたかった。

「今年は二人はふくろうだけど、何か目標にしているのかしら？」

「チャャリーやエストには言いましたけど、ふくろうの成績でどんな職業になれるのか決まってしまうんですよ」

「変身術、呪文学、薬草学、魔法薬学、闇の魔術に対する防衛術でイモリの授業を受けられる成績を取ります」

「ドーラと同じね。闇祓いかしら？ それとも癒者？」

言われた瞬間にすらすら答えたクラリーナに対してアンドロメダがそう言った。オスカーはつきり闇祓いの話をまたするかと思っていたのだが、どうも意外な方向に広がっていきそうだった。

「あの…… 癒者になるにも闇祓いと同じ教科が必要になるんですか？」

「レア、ええ、そうですよ。その五つの科目は一年生からずっとあるでしょう？ イギリスの魔法界で伝統的な職業に就くのなら、この五科目でE、期待以上か、O、大いによろしいの成績が必要よ。魔法省に

入りたいならうちのビルみたいにもうちよつと合格する必要があるけれど」

「ドーラの話聞くかぎりでは、オスカー君とクラナちゃんは大丈夫だと思わ。うちの家は成績だけはいいのよ。いとこや私もそうだったし、まあスプラウト先生から届く手紙の数とは関係なしにドーラも良くて、二人も同じくらいいいんじゃない？」

「まあそれはそうですね。オスカーも私もエストも取っている科目は一緒ですし、そうですねオスカー？」

「そうだけど…… そういえばレアは何の教科とってるんだ？」

母親二人の自慢が微妙に入った気がしたが、オスカーはレアが何の教科を取っているかあまり知らなかった。カバンに沢山の教科書が入っていたものの、レイブクロー生はだいたい本をたくさん持っていたし、オスカーと一緒に行動する女の子はトックス以外みんな本をカバンにこれでもかと言うくらい詰めていた。

「全部とってます。呪文学、変身術、闇の魔術に対する防衛術、薬草学、魔法薬学、魔法史、天文学、魔法生物飼育学、マグル学、古代ルーン文字、数占い、占い学で十二です」

「え…… じゃあ、レアは逆転時計を持ってるのか？」

「今は持っていません。フリットウィック先生に預けています」

「去年はビルみたいに全部の教科に出てたんですね」

「本当に十二ふくろう…… じゃないわね、十二イモリならどの職業でも受ける資格ができるわ」

「そう。ビルもそうだけど、仮に全部受かっててもあくまで受ける資格なのよ」

ふくろう試験やイモリ試験に受かっててもその職業に就けるわけではないという事だった。たしか闇祓いも卒業したあとに長い試験があると聞いたので、オスカーは癒者も同じように試験があるのだろうと考えた。

「癒者も闇祓いと同じくらい難しいお仕事だわ」

「えつと…… 何が難しいんですか？」

「命に関わるお仕事は全部難しいわ。みんな自分の命に関わることに

妥協はできないし、家族の命が関わるのなら、余裕なんて生まれないのよ。適当な仕事はできないし、要は患者の人やその家族も誰も癒者に容赦なんてしてくれないの」

「他の仕事は違うんですか？」

「そうね。まあハニーデュークスのお菓子の味が少し違っても許せるけど、足の代わりに手を生やされたらちよつと許せないでしょう？」
「それはまあ……」

レアは癒者になりたいのだろうか？ クラーナが家族が闇祓いだったから、闇祓いを目指しているようにレアも？ そう考えた途中で、その理論だとオスカーは自分が死喰い人にならなくてはいけないかならと思つて考えるのをやめた。

「レアは癒者になりたいんですか？ 初めて聞きましたけど……」

「少し…… 少しでも興味があります。まだ全然分らないけど…… 他にも色々興味あるし…… それに面白かったりカッコイイ仕事は難しかったり厳しい仕事だと思うから……」

「いいんじゃないしら。何となくでも目標があつた方がいろいろやる気も出てくるじゃない。ちよつと危なっかしい目標だと親は困ってしまうけど」

「ええ。それに監督生と一緒に、責任のある仕事に就けば自分もそれに合わせて成長するものよ」

「それでドーラも落ち着いてくれればいいんだけど……」

どちらかと言うと憧れなのか、オスカーはレアが癒者について言い出したのはそう見えた。それにやっぱりさっきの男達よりも、こつちの二人の方が言葉の節々に家族や子供についての思いや考えが出てくると思っていた。向こうはどちらかと言えば、自分自身で思っている事や社会から与えられている責務だとか誇りだとかそう言うのが出てきている気がしたのだ。オスカーはこれは単純に男と女の差なのだろうかと思つた。

「ところでオスカー君はどうなの？」

「別に言わなくてもいいのよ。ちよつと気になるっただけなんだから」

「そうですよオスカー、ちよつと気になりますよ」

「ボクも気になります」

「何になりたいかってことですか？」

そんな期待の目で見られてもオスカーは特になりたいと思つてい
るものは無かつた。そもそも何を期待して四人が聞いているのか分
からなかつた。

「そうよ。まあ男の人はやっぱり稼がないとダメね。それがダメなら
ずつと家族と一緒にいられる仕事じゃないと」

「家族が安心できるお仕事の方がいいわ」

「危ないお仕事か安心できる仕事かどつちかつてことですね……」

「ボクはやりたいことならなんでもいいと思います……」

「そんなこと言われても何も思いついて無いんだけど……」

今ちようど考えようかと思つているところだつたオスカーは何に
なりたいか聞かれても答えることが出来なかつた。だいたい目の前
の四人はオスカーが答えなくても何になるのが良いのか一人一人勝
手に考えている気がオスカーはしたのだ。

「これからは昔みたいにも物騒じゃないから、夫婦で働いても大丈夫よ。

危ない仕事と安心できる仕事でも大丈夫よ」

「でもやっぱり女の子に子供ができた後働かせるのはね……」

「そうですよ。今ならちよつと危険な仕事でも大丈夫ですよ。そうい
う仕事に家族とか夫婦で就いていると結構有名になりますし」

「平和ならどんな仕事でも大丈夫です。多分……」

「いや…… そんな後の事を言われても……」

もう何を聞きたいのかオスカーには分からなかつた。ただ、このあ
とずつと平和とはオスカーは思つてはいなかつた。平和だから危険
な仕事について、平和じゃないから安心できる仕事につくと言うの
も、オスカーはそれで自分が納得できるかは難しいと思つたのだ。

「オスカーは何を聞かれてるの？」

「向こうに男ばかり集まつてるのになんでオスカーはこっちにいる
わけ？ フレッドとジョージは向こうに行けば余りのアイスクリー
ムが貰えるって言つて、ロンとチャーリーを連れて行つちやつたわ

よ」

「ビルはもう寝てる!!」

男女比率が七対一になってしまい、オスカーはオセロなら自分とはとくに女になっていいると思っただし、ビルは寝ているのではなくて正確にはつぶれているが正しかったが、ジニーの発言を訂正する元気はオスカーには無かった。明らかに男性陣はこの机の傍を避けていた。この部屋にいないパーシーは早々に自分の部屋に戻ってエストの羊皮紙をオスカーとクラリーナのメモを使って解読しているに違い無かった。

「オスカー君が何になりたいのって話よ」

「オスカーが？ 別に働かなくてもこの屋敷に引きこもってペンスと暮らしても生きていけるんじゃないの？」

「オスカーは引きこもるの？ 時々遊びにいったらいつでもあえる？」

「ジニー、残念ながら引きこもらないと思うけどな」

このままでは体と口がどれだけあっても相手ができないとオスカーは思った。七人の相手などできるわけがないのだ。

「五年生だからそういう話をしてるの？ でも別に今から動かなくてもとりあえず今受ける教科をイモリでも受けられるようにすれば大丈夫だよな？ ちよつと勉強してEかOの成績をとればいいの」

「そういうこと普通に言えるのはエストくらいじゃないの？」

「トunksもいつも大して勉強して無いのにテストはできるだろ」

「あんなのできない奴がちよつとおかしいのよ」

「結構トunksは図書館にいるじゃないですか。魔法史の時間は爆発スナップしてますけど」

「授業中に遊べるの？」

「ほんとは遊んじゃダメだけど、魔法史は先生が寝ちやうから……」

この状態では何もできないというか、オスカーは論点を何とかずらさないとうにもならなかった。

「オスカー君は好きなモノとかあるのかしら？」

「仕事は好きなモノから見つけるのが長続きするコツなのよ」

「好きなモノですか？」

エストとトンクスのおかげで論点や話題がずれたと思ったのに、大人二人に戻されてオスカーはもう疲労困憊だった。やはり酔っているクラリーナに付き合うのは間違いだったと思わざるを得なかった。

「オスカー先輩の好きなモノってなんですか？」

「自分で分からなくても簡単にわかる方法があるよ？ アモルテンシアを嗅げばその人が好きなモノの匂いになるはずなの。えーと、チャーリーだったら、多分ドラゴンのふんの匂いとか、新しい筭の匂いとかそういうの」

「確かにそうですね、でもアモルテンシアなんてそうそう嗅がないでしょう。それだけでも危ないですし」

「自分の好きな匂いがある薬があるんだ……」

アモルテンシアと聞いてオスカーの視線はなぜか静かになっているトンクスの方を向いた。オスカーが見るとトンクスはわざとらしく視線をずらした。オスカーは観覧車でどんな香りを感じたのか思いついた。

「匂い……」

そうつぶやいた後で、オスカーは順番に視線をずらした。ジニーとアンドロメダ、モリーを除いて。そもそもオスカーはアモルテンシアを二回嗅いだことがあると覚えていた。授業とジエマの起こした騒動で合わせて二回、匂いは五種類だった。オスカーは特別リングが好きなわけでも、オレンジやネーブルが好きなわけでも、ミントのアイスが好きなわけでも、お菓子は好きでも特定の甘い匂いが好きなわけでも、カモミールティーが好きなわけでもないのだ。

「今日は寝る」

「は？ 何言ってるわけ？」

「だから今日は寝る。クラリーナは何か飲んでるみたいだからトンクス頼む」

「オスカーいきなりどうしたの？」

オスカーはエストを見て思った。今日ベッドに帰っても多分寝れないだろうという事が。今日自分の部屋で香った匂いをオスカーは

間違いないくアモルテンシアから感じていた。

「ちよつと寝るよ。昨日あんまり寝てなかったから」

「オスカーは今日起きてくるのがそもそも遅かったじゃないですか、監督生の手紙がきたのに」

「なんでいきなりそんなこと言い出すんですか？ オスカー先輩おかしくないですか？」

近づかれると困るとオスカーは思った。オスカーの脳みそはいきなりギアが変わったと同時に急速回転していたが、同時に滅茶苦茶に混乱していた。とにかく近づかれるわけにはいなかった。

「ははーん、あれね。エストがごろごろしたベッドで一人で早く寝たいわけね。アモルテンシアの匂いで思い出したんでしよう？」

「違う」

なぜこういう時だけ妙にトunksのボケやトンチンカンな発言が的を突くのかオスカーには分からなかった。

「なんでエストがオスカーのベッドでごろごろしてるんですか？」

「朝行つた時に手持ち無沙汰だったの。やること無かったし」

「やることが無かったら人のベッドでゴロゴロ？」

「ジニーもオスカーのベッドでゴロゴロしていい？ やぬしだからオ

スカーのベッドは大きい？」

「大きくない。他の部屋のベッドと同じだから、他のベッドで満足してくれ。みんなおやすみなさい」

「あらおやすみなさい」

「おやすみなさい。オスカー」

大人二人からの挨拶が聞こえ、オスカーは足早に広間から脱出しようとした。どうみても四人がついてきていた。何もわかっていないジニーはベッドでゴロゴロしようとしてきていた。何が何の匂いや香りがぐらいオスカーには分かっていた。

オスカーは本気で逃げ出した。

「オスカー、ほんとに部屋に戻るの？ もうちよつと喋っても……」

「ちよ、ちよつとほんとに何で走り出すんですか？」

「ほんとにどこ行くのよ？ え、本気で走ってるじゃないのあいつ」

「ええ?? オスカー先輩?? 早っ!？」

「追いかけてっこ？」

頭が冷えて、草と木と土の匂いしかない場所まで、オスカーは逃げ出した。

やっぱり今日は一人の時間がオスカーには必要だった。

車内販売

「卵はこれで大丈夫かな？」

「トランクの中は燃えでもしないかぎり大丈夫だろうし、見た目は俺のトランクだからバレないだろ」

「そうだよな。ただ、どこか場所が必要だよな？　卵の面倒を見る場所が」

「考えとかないな、寮の俺の部屋に置いとく訳にはいかないし」

オスカーはチャーリーと自室で話して安心していた。チャーリーが部屋に来て、全く以って自分がどうもしないからだ。みんなにも秘密のままの卵の話をするのは、一年生の時のルーンスプールの話をしている時と同じようで、純粹にオスカーは楽しかった。

「ハグリッドの小屋に置いとく訳にもいかないよね。そうしたらすぐにみんなやダンブルドア先生にバレるだろうから」

「まあなんか考えよう。思い付いたらエストがクイディッチの練習に行っている間に寮の俺の部屋からトランクごと動かそう」

「じゃあそれまでに図書館で卵について調べたり、ハグリッドにそれとなく聞いたりしておくよ。多分、ちよつと話をするだけで全部教えてくれるだろうから。あ、あと、もしほんとにドラゴンが生まれたら、流石にハグリッドとケトルバーン先生に言おう。ハグリッドは喜ぶだろうし」

「ホグワーツでも動くドラゴンを隠すのは難しいだろうからな」

どこまでみんなに見つからずに二人でドラゴンの卵を育てることができなのか、オスカーはそれが問題だと思った。ちよつとくらい男だけで女には言わずに遊んでもいいだろうと思っていたのだ。だいたいこの家にいる間にも女子勢はみんなでまとまってロンドンへ遊びに行っていたのだ。それが許されるなら男だけで遊んでも許されるだろう。もちろん、オスカーからすれば家から女性陣がいなくなるのはありがたくてこの上無かったが。

「ところでチャーリー、チャーリーってスクリムジョール先生の授業でアモルテンシアを嗅いだことあったか？」

「アモルテンシア？ トンクスが盛られたやつだよね？」

「いや、エストがなんかチャーリーだったらアモルテンシアの匂いが箒の香りとか、ドラゴンの糞の匂いだろうとか言ってたから」

「ああ、なんかオスカーが逃げたとかみんな言ってた日の話だよね？」
チャーリーがニヤニヤ笑った。オスカーは少し直接的に聞きすぎたかと思った。しかしオスカーは他の人が一体どんな香りをアモルテンシアから感じるのかを知りたかった。流星に女の子にどんな匂いを嗅いだのか教えてくれとは聞けなかったので、あとはチャーリーくらいしか聞ける相手がいなかった。

「まあそうだな。寝るって言ったのにみんなそろそろついて来るから……」

「そうなんだ。多分アモルテンシアはスクリムジョール先生の授業で嗅いだけど、新品のマホガニーの香り…… 要は新品の箒の香りだよね。高級クイティツチ用具店で嗅げるような匂いがしたと思うけどね。ほら、監督生のお祝いで買ってもらったニンバスの匂いだよ」

「他になんかしなかったのか？」

「ママの糖蜜パイとか？ あとは…… 魔法生物飼育学で土を弄つてる時にするような、草とか土の香りが混ざったみたいない匂いだったと思うよ。ちよつと去年の話だからあんまり自信ないけどね」

オスカーはかなり落胆した。チャーリーがもしかしたら恥ずかしかって情報を省いたり、嘘を付いたりしているのでなければ、チャーリーが言った内容は誰か特定の人と結びつく訳ではなかったからだ。ただ、ニンバスを買って貰ったことを喜んでいたチャーリーの事を考えれば至極真つ当な結果ではあった。オスカーはもうチャーリーに二十回以上ニンバスの自慢をされていたからだ。

「オスカーはアモルテンシアを嗅いだんだっけ？」

「まあ…… そうだけど……」

だが、それはそれで良い情報なのかもしれないとオスカーは思った。単純にチャーリーは好きなモノの匂いをアモルテンシアに見出しているのだ。自分自身もそうなのではないのかという事だ。チャーリーがクイティツチや動物、ウィーズリーおばさんお手製の糖

蜜パイが好きな様に、オスカーは自分自身もそういう風にみんなの事を思っているのではないかと考えた。

「ペンスが作ったオムライスとかお菓子とか？」

「えっと……」

オスカーは何を言えばいいのか詰まった。どれを言っても簡単にチャーリーに見透かされる気がしたのだ。

「リンゴみたいな感じだな。多分、家の裏の森にリンゴの木が結構生えてるから」

「カモミールつてりんごみたいな匂いがするよね？」

「え？ たしかにまあ…… 似てるような……」

どうしてチャーリーがそんな事を言い出したのか、オスカーはその時点で分からなかった。

「オスカー、チャーリー、そろそろ行くってキングズリーが言ってますよ」

「先輩方は準備できてます？」

クラリーナとレアが呼びに来てオスカーはチャーリーが何を言いたいのかやっと分かった。

「いや、あれは似てるじゃなくてほんとにリンゴの香りだった。ほんとに」

「はあ？ 何言ってるんですか？ アップルパイでも食べすぎましたか？」

「リンゴの香り？ 確かにこのお家の周りに結構リンゴの木が生えてますよね？」

「オスカーがそんなに言うならそうなんだろうけど……」

少しムキになってしまったかとオスカーは思った。しかし違うものは違おうとオスカーからすれば言わざるを得なかった。

「とにかくもう行きますよ。とりあえず暖炉飛行してから魔法省の車に乗る予定なんですから」

「分かった。今から広間に行けばいいんだろ」

「ちよつとトランク取ってくるよ」

チャーリーは慌てて泊まっていた部屋に戻った。クラリーナがオス

カーのトランクまで持ちそうな勢いだったので、オスカーは自分でトランクを持った。何かの拍子にトランクが開けば、クラーナやレアはこのトランクが使ったことのあるトランクだと気付いたに違いなかったからだ。

「話が変わりますが、オスカー先輩とチャーリー先輩はなんか時々家からいなくなってますませんか？ 今日部屋にいましたけど……」

「そうですよ。外に行ってたんですか？」

「外？ 確かに時々出てたけど、敷地の中だぞ。あとは…… ああ、地下室にいたかもな。結構涼しいから」

オスカーは閉心術の技能をフル活用してなんでも無さそうに喋った。もう地下室は使わないのだから喋っても構わなかったし、疑われたままホグワーツに行くのは良くなかった。

「地下室？ 地下室があるんですか？」

「え？ オスカーとチャーリー先輩しか知らない？」

「ペンスも知ってるけど…… もしかしたらキングズリーも知らないかもな。うちに魔法省が踏み込んだ時もバレてなかったから。玄関から吸魂鬼がいなくなった後にペンスから教えて貰ったから」

卵があるから黙っていたとは言えなかったので、オスカーは自分ではさも言うのを忘れていたと見える様に喋っているつもりだった。二人の反応を見るに多分まだ成功しているとオスカーは思っていた。「なんで教えてくれないんですか。それにチャーリーと夏休みにどこに行ってたのかも教えてくれないじゃないですか」

「何かボクも仲間外れにされたみたいで……」

「秘密基地みたいだったから言う部屋と特別な感じが無くなる……みたいな？」

割と本当に二人はオスカーが黙っていたことにショックを受けているようで、オスカーは普通に良心が痛んだ。しかし、どうもエスト、クラーナ、トンクス、レアは四人ともオスカーとどこかに行ったことを他の人に喋っていない様だったので、オスカーはそれと部屋を黙っていたことと何が違うのか良く分からなかった。

「今から行きましょうよ。魔法族の旧家の隠し部屋って気になります。絶対凄いいお宝とか、禁制品のマジックアイテムとか置いてあるでしょう」

「ボクも見てみたいです。絶版の本とかそういうのがあるんじゃないかって」

「いや、もう行くって言ってただろ」

「いいから行きましょうよ。トンクスやエストも絶対話したら来ますよ」

「フレッドやジョージもそう言うの好きそうだから話したら絶対来る。話さなくてもこの家を隅から隅まで探検してたから……」

両サイドで行くと言い続ける二人を連れて広間に戻った結果。オスカーは結局すでに暖炉飛行で隠れ穴まで行った人たちを除いて、地下室に案内することになった。

さらに暖炉飛行した先では先に行った組に文句を言われ、特にその中でもフレッド・ジョージには延々とキングズ・クロス駅で列車に乗るまでオスカーは文句を言われ続けた。

「オスカー、僕たちはチャーリーとオスカーが何をやってるか知ってるんだぜ」

「そして四人衆にバレずに僕たちにもありかを探られずにイースターの飾りつけをしようとしていることを尊敬している」

「でも、俺たちも地下室が見たかった」

「それに四人衆それぞれに黙って別々にデートしてたことも尊敬してるんだぜ」

もう少しでオスカーはシレンシオとオブリエイトを使うところだったが、流石にマグルでよかった返すキングズ・クロス駅でそんなことをする訳にはいかなかった。

「あと一年経てば Hogwatts に行けるし、二人が大好きな秘密の通路や隠し部屋もいくらでもあるからなんとか我慢してくれ」

「ところがオスカーの兄貴やチャーリーの兄貴にとっての一年は十六分の一みたいなものだけだ」

「僕たちにとっては十分の一だ」

「時はガリオンなり。今すぐにホグワーツに行きたい」

オズカーはこれは面倒なことになりそうだと思った。恐らく二人はホグワーツに行きたいとぐねまぐるに違いなかった。

「あと一年は我慢しないと行けないぞ。だいたい……」

「分かってるよ。オズカー、僕たちもそんなにバカじゃない」

「だいたいいくらオズカーを味方につけてもお袋とエストに通用する訳ないだろ？」

▪

オズカーは拍子抜けした。てつきりオズカーからウィーズリーおばさんか誰かに何か言って欲しいと二人が言うと思っていたのだ。しかし今度は二人は悪戯が成功したとばかりにニヤツと笑った。

「その代わり、例の地図を僕たちがホグワーツに入ったら貸して欲しい」

「エストが褒めてた地図。ホグワーツの全部が載っている地図!!」

「なんで知ってるんだ」

「俺たちが部屋で実験していると時々エストがくるんだけど」

「その時に教えて貰った。でも、エストがあんなに道具を褒めることって、めったにないから記憶に残ってたんだ。内容はぼかしてたけど」

確かにチャーリーとロンの部屋でオズカーが寝っているとフレッドとジョージの部屋から爆発音が聞こえることはオズカーも知っていたし、時々、置きっぱなしにしてある誰かの杖を使っていたり、古い魔法薬の教科書なんかを二人が顔をそろえて読んでいたりするのをオズカーは見たことがあった。それにオズカーの家に来てからも二人が寝ている部屋から音がしていたのをオズカーはおろか家にいた人間はみんな知っていた。

「俺はいいけどな。見つけたのは俺とトンクスだし、トンクスにもいいか聞いといてくれ」

「やった!! 流石オズカーの兄貴だ。貧乏人とは懐の深さが違う!!」

「ほら、これちよつとエストに手伝って貰ったやつ。自分の耳が

ちよつと伸びるんだけど、エストに材料を貰って、伸びてる耳は見えなくして貰った」

「お荷物をお持ちいたします。オスカーお坊ちやま。ビルやチャリーと同じ、監督生専用のコンパートメントでございますね？ この様な些事は我らウィーズリー・ウィザード・ウィーズにお任せを」

そう言うなりリアルな耳を八つほどオスカーの手に二人は押し付けて、オスカーのローブやトランクを持って特急へ駆け出してしまった。二人は忍びの地図を貸して貰えるとオスカーから言質を取り、交渉に成功したと思ったのかかなりの笑顔だった。

「オスカー、監督生は先に特急に乗って出発前に生徒と先生以外が乗っているか確認しないといけないんじゃないかな？」

「キングズリー、確かにそうでした」

二人がホグワーツ特急に消えていく姿をぼーっと見ていたオスカーに、人を安心させるような声がオスカーの後ろから届いた。確かにオスカーは監督生だったし、ホグワーツ特急でもさっそく仕事があるはずだった。

「保護者らしいことは何もできていないが、五年生で何か迷うことがあつたら遠慮なく手紙を送ってくればいい。私は魔法省の事しか知らないが何かしらの助けにはなるだろう」

「はい。もし何かあつたら連絡します」

オスカーがそう言うのとキングズリーはオスカーのローブに留めてある監督生のバッジをじまじまを見た。

「正直に言えば、最初に会った時やホグワーツに入る時に君が監督生になるとはダンブルドアも含めてみんな思っていなかっただろう。そのバッジは君がみんなの見方をひっくり返したという事だ。これからもそうし続けるなら私は何もしなくても大丈夫だ」

「それは……」

キングズリーの言う通り、オスカーが最初にキングズリーに連れられてキングズ・クロス駅に来て、このホームから汽車に乗り、人がい

ないコンパートメントでエストとモリーの会話を盗み聞きしている間、オスカーは自分が監督生になるなんてことを考えもしなかった。

「ではまたクリスマスに」

「はい。行ってきます」

オスカーは考えた。九と四分の三番線から初めて Hogwartz に行つた日、キングズリーと何を喋つたのかだ。少なくともオスカーは行ってきますなどと言つた記憶は無かつた。自分は全く別のことで頭が一杯だつたに違ひなかつたのだ。

オスカーはそのあと他の監督生たちと汽車の見回りをして、ウィーズリー家やトンクスの家族やマッドアイとも少し挨拶をしてから汽車に乗つた。

少なくともフレッドとジョージはオスカーのトランクをきちんと監督生のコンパートメントに入れておいてくれたし、二人の姿は汽車のどこにも無かつたので、オスカーに最初に頼もうとしていた Hogwartz に行きたいという願いは諦めてくれたらしかつた。

「ちよつと豪華ですね監督生のコンパートメント」

「俺たちだけでここ占有していいのか？」

「むしろ僕らが固まりすぎてるから監督生と主席に割り当てられたコンパートメント余つてるみたいだよ」

「これちよつとずるいかも、だつてなんかふかふかだし」

「なんかむずむずするわね。お金持ちのオスカーはしないんだろうけど」

レアがおらずにこの五人で集まって喋るといふのは随分久しぶりな気がオスカーはした。それにコンパートメントの席順をオスカーはちやんと考え、一番通路側に自分をそして隣にチャーリーを配置したので。

「トンクスは監督生のバッジにむずむずしてるんだろ」

「そうに決まつてるでしょ。主席がビルだから良かったけど、女子の方のなんか真面目腐つた私達主席と監督生はくつていふのはサブイボがでそうだったわ」

「トンクス、バッジよりそのピンいつ手に入れたんですか？ 外にみ

んなで遊びに行った時も、ダイアゴン横丁でも買ってなかったでしょう？」

「買ってたのよ」

「でも、クラーナかエ……私のどっちかが外に行った時もダイアゴン横丁でもトンクスと一緒に居たでしょ？ 買ってるの見なかったけど？」

「いや、だから買ってたのよ」

オスカーは思った。墓穴を掘りたくないのなら絶対に身に着けるモノをプレゼントするべきではないという事なのだ。

「それ色が変わるんですよね？ ピンクの時はなんか黄色でしたし、黄色の時は黒だったでしょう？ それに夏休みの間つけ始めてから毎日着けても動いてるってことは、ちゃんとした魔法使いが魔法をかけてますよね」

「私は監督生の手紙の時に初めてトンクスが持つてるの見たと思うけど……」

「それよりエストが自分のことエストって呼ばなくなってることの方が重要じゃない？」

「夏休みの間そうだったでしょう」

「うそよ、エストエスト言ってたわ」

「確かに言わなくなったよね」

何かオスカーは二年や三年の頃に戻った気がして嬉しかった。二年の時は失われた髪飾りの話をして、三年の時はたしか劇や守護霊の呪文の話をしていたのだ。

「授業の時はもともとそうだったの」

「だから何の心境の変化があったのよ。オスカー」

「なんで俺に聞くんだよ」

「エスト自動翻訳機じゃないの。オスカー・ドロホフは二つの種類の言葉を喋ることができる。英語とエストレヤ語。これで国際魔法協力部に就職間違いなしよ。魔法生物規制管理部かもしれないわ」

一年生に知り合った頃にこんな話ではできなかったはずだった。少なくとも学内でハグリッドと法律違反の生物を飼っていたメンバー

が全員監督生になるのだから、オスカーは監督生の基準をもう一度ダンブルドア先生は考え直した方がいいのではないかと思った。

「全然上手いこと言えてないの。ていうか絶対トングスのピンは誰かからのプレゼントに決まってるの。それもトングスの髪色が変わるって知ってて、トングスが貰って自分で着けようと思う相手でしょ？」

「だから買ったって言ってるじゃない」

「どこで買ったか絶対言えないでしょ？」

「ダイアゴン横丁の一杯ならんでどこかよ」

「ほらね？ それに渡したのは絶対テッドさんかオスカーでしょ」

エストがこれで決まりとばかりにトングスとオスカーの方を見た。オスカーは案の定何をやっても隠せていないと思った。このままだと卵の件もどれくらい持つか怪しかった。

「プレゼントの犯人探しをしても仕方ないですよ」

「クラリーナが最初に言ったんじゃないかな」

「そうだな」

「ちよつとなんですか、くだらない事で犯人探しをしてる二人をですね……」

「何よ。ならクラリーナはなんで教科書二冊も持ってるのよ」

「はあ？ なんですかそれ？」

「実践的防衛術の本、二冊持ってるじゃない。アクシオ クラリーナの実践的防衛術の本」

トングスが呼び寄せ呪文を使うとクラリーナのバッグから二冊本が出てきた。一冊は読み古された本でもう一冊は真新しい本だ。

「ほら二冊あるじゃない。オスカー不運だったわね、クラリーナのローブの下に着てるようなのが本にひっついて出てきてもおかしくなかったのに」

「トングスみたいにくちやぐちやに入れてる訳ないでしょう!! だいたいバッグに服は入れてないです!! トングスのトランクの中身をアクシオした日にはトランクごと飛んできますよ。トングスのトランクの中身はスリザリンのリーが作った大鍋にこびりついて全然離

れない魔法薬の出来損ないみたいなもんです」

「なんで二冊あるの？」

「この本二年くらいからクラリーナはずっと読んでるよね」

二年の時のプレゼントまで言われるようでは、オスカーは二度と誰にもプレゼントできないのではないのかと思いはじめた。百味ビーンズだとか消えものでないとダメな気がしてくるのだ。

「別にいいじゃないですか!! 古くなったから新しいの買ったただけですよ!!」

「クラリーナは人からもらったものは絶対離さないの。セーターとか」

「ちよつとおかしいでしょう!! なんてくだらない口喧嘩をとめようとした私がそんなに言われなさいといけないんですか!!」

「いつも突つかかってくるのはクラリーナじゃない」

「確かにそれはそうだよね」

「まあそれはそうかもな、トンクスの相手してるのはだいたいクラリーナだし」

「なんですか!! 突つかかるって!!」

ホグワーツに行く前でみんな元気が有り余っているらしかった。流石に全員の相手をするとかラリーナも疲れるようだったが、みんな夏休み会えなかった同級生や学校の仲間に会えるはずだったし、ホグワーツでの五年生の生活にちよつとは期待しているらしかった。

ただ、オスカーはこれまでの四年間のように過ごせるか自信がなかった。そもそも、ホグワーツでの四年間はだいたいこの五人かプラスしてレアと過ごしている時間だったので、もしみんなと過ごす時間の質が変わってくるのなら、それはこれまでとはホグワーツの生活が変わってしまうことを意味していたからだ。

「ね、ね、今年はやつぱり忙しいかな？」

「話変わりすぎじゃないの？ クラリーナがプレゼント貧乏性って話だったじゃない」

「貧乏ではないですよ。貧乏だったら二冊目の本なんて買わないじゃないですか。まあふくろう試験があるから、宿題や勉強で忙しいって聞きますね」

「ちよつとクイディッチをやりながらできるか不安ではあるよね」
「まあなんとかなるんじゃないか。実技はだいたいどうにかなるか
ら、筆記とか宿題の分量くらいだろうし」

みんなエストが忙しいかを聞いた理由に期待しているのではない
かとオスカーは考えた。去年は決闘トーナメントでみんなバラバラ
に行動していたし、一年目から三年目までのようにみんなで何かをす
ることが少なかったとオスカーは思っていた。

クリスマスではトンクスがそんな感じで怒っていたし、漏れ鍋で
チャーリーが言った事が頭に残ってトンクスとエストが意見をぶつ
け合いそうでオスカーは少し心配だったが、今、少し顔を見回せば、エ
ストの言葉に一番期待しているのはトンクスに見えた。

エストは杖を振って自分のポーチを呼び寄せ、なぜか監督生のコン
パートメントにはある小さな机の上にごちゃごちゃと何か小物を広
げた。

「フレッドとジョージがね、最近部屋で色々爆発させてるんだけど」
「うるさいよねあれ。パースが夏休みの間毎日イライラしてたよ」

「そんな隠れ穴の人々の生息は知らないわよ。なんかもうパースは女
の子みたいよね、ちよつと神経質で。てかオスカーの家でも聞こえた
爆破音はあの二人だったわけ？」

「なんですかこれ？ ゾンコの商品ですか？ トンクスが良く持って
るヘンテコなマジックアイテムっぽいですね」

「これフレッドとジョージに貰ったやつと一緒にか」

オスカーもローブのポケットからかなりリアルに見える人間の耳
を取り出した。テーブルの上には他にも妙に小さい鍵や足の生えた
糞爆弾のようなものがごちゃごちゃと並べられている。

「そう。オスカーが持っているのは『伸び耳』なんだって、これ耳につけ
るとびよーんって伸びていって遠くの音でも聞けるようになるの」

「面白いじゃない。クラリーナが私の悪口言ってもすぐに飛んでいけ
るわ」

「私は四六時中トンクスの悪口をこれでもかかっていうくらい言っ
てますから、こんなのいらないうですよ。こっちの足の生えた糞爆弾はなん

「なんですか？」

「そつちは『おとり爆弾』なんだって、ちよつと離れた場所まで歩いていってそこで爆発するの」

「へえ。これ動物の気を逸らすのに使えそうだよね」

「この鍵は？」

「これはエス…… 私がちよつとフレッドとジョージにマグルのピツキングって言う、鍵を開けちゃう方法を教えて貰って作ったの。ねえ誰かの鍵付きのトランクある？」

「アクション クラーナのトランク」

エストが言った瞬間にトランクスがクラーナのトランクを呼び寄せた。

「いやなんで自分のトランクを呼び寄せないんですか」

「クラーナの秘密をあけるわけよ。オスカーとチャーリーは興味あるんじゃない？」

「談話室で時々全開になってるから僕はいいかな」

「クラーナ、これアロホモラ避けはかかっているの？」

「一応かかってますよ。あれですからねオスカー、談話室では本入れとして使ってるだけで、他の中身は寮の部屋にしまってますから」

「いや、そんな説明しなくても大丈夫だけどな」

「開けてもいい？」

「いいですけど……」

鍵をエストが鍵穴に入れると鍵は液体の様に溶けて、その穴を埋め、さらにそこから鍵を回すための取っ手が生えてきた。エストが鍵を回せばクラーナのトランクが開いた。

クラーナのトランクには教科書や大鍋、服などが綺麗に整頓されて入っていた。オスカーは本の中に週刊魔女があることを見付けたが黙っておくことにした。

「ね？　なんか鍵っているんな種類があるらしいんだけど、アロホモラじゃなくて鍵の形を変えて開けてやればアロホモラ避けがかかっても簡単に開くの」

「いいわねこれ、先生の部屋でも入り放題じゃない。スネイプの頭が

「どうしてあんなに脂ぎっているのか真相が判明するわ」

「そんな真相いらないですよ。明らかに洗ってないだけでしよう。それよりこんな色々作ってどうするんですか？ トンクスが悪戯できかないようにゾンコの売り上げを下げるとかそういうことですか？」

クラーナの言う通り、エストはこんなアイテムを色々作ってどうしようと言うのだろうか？ それこそゾンコの売り上げを圧迫するか、トンクスがフィルチャやマダム・ピンスをおちよくる材料が増えるだけなのだ。

「やっぱりお金を儲けるとか？」

「そんなに儲かるのか？」

「うーんと、お金もそうだけど。こっちから動かないとダメかなって、去年の学期末にいろいろあつたでしょ？」

エストが皆を顔を見回してから最後にオスカーの方を向いた。そのせいでみんなの視線が集まってしまつてオスカーは思わず視線を上にもずらした。

「動くってどういう意味だ？ こういうのを作つて動く？」

「そうですよ。こんなの作つてゾンコ二号店を立てても、トンクスとレイブンクローのチューリップくらいにしか影響ないでしょう」

「いざつて時に学生が動けるかどうかが重要だと思っただけ。だつて、このメンバーとレアはいつでも動けると思っただけ他の人はそうじゃないでしょ？」

「だから動くってどういう意味なのよ。だいたい何に対して動くわけ？」

「フレッドとジョージが入学した時に喜ぶくらいだよ。こういうの売つても」

オスカーはエストが頬を膨らますか少し黙るかと思つた。理解されない時や怒つている時はそういう態度をとるからだ。しかしちよつと笑つて話し始めたのでオスカーは驚いた。

「先生とか？ いろいろ？ なんかあつた時に色んな人に色んな事を伝えられたり、動かせることが重要かなつて」

「先生って誰ですか？」

「一番はダンブルドア先生」

「ダンブルドア先生なんて誰も動かせないじゃない。魔法大臣が言ったってダンブルドア先生はやりたくないならやらないわ」

「ほんとに？ 多分ダンブルドア先生は生徒の大半がやりたいとかやりたくないって言ったら聞いてくれるでしょ。数人が言ってもどうにもならないけど」

こういう時はフレッドとジョージやトンクスの悪戯が成功したときと同じような笑い方をエストはするとオスカーは思った。

「そもそもうちの学校はまとまって何かするって寮単位だし、クイディッチか寮対抗杯の時しかそういう動きはしないとと思うよ。寮のボスって言うかりーダーは先生だし」

「そうだよね？ でも寮のみんながやりたくないって言ったら寮の先生でも聞かないといけないし、ダンブルドア先生は生徒のお話を聞いてくれる先生なの。それは生徒の話聞かないといけないってことなの。それがすごい一杯の生徒の総意ならもつと聞かないといけないの。もし、みんながやりたくないって言ったら止められないの校長先生でも」

「けどそんなの無理だろ？ 生徒一人一人ならなんとかなくても、寮同士で一緒に行動なんてみんなしないし、それにダンブルドア先生はみんなが嫌がることなんかさせないだろ」

「ほんとに？ 去年の決闘トーナメントでは他の寮の応援もしてたでしょ？ 利害が一致するならスリザリンとグリフィンボールでも同じように動けるでしょ？ ダンブルドア先生は確かにほとんどそんな事しないと思うけど、でも、そういう風になることが重要じゃない？ 嫌な先生が嫌なことをしても生徒はそれをできなくてきまずって、先生が思っていれば、先生は簡単にそういうことできないでしょ」

どうしていきなりエストがこんなことを言い出すのかがオスカーには分からなかった。エストは基本的につながりの薄い集団に興味が無いとオスカーは思っていたからだ。

エスト自身が強力で頭がいい魔女であり、誰かに力で縛られないのに加えて、典型的なスリザリン生と同じく、自分の身内から距離が離

れるほど興味が失せるタイプなのだ。かなり明確にエストは身内と外との線を決めているはずだった。家族、ホグワーツで一番近いメンバー、クイディッチのメンバー、寮の仲間、近い誰かに何かあればどこから出てくるか分からないくらいのエネルギーで動くが、そうでないのなら目にすら入って無いかもしれないなかった。

だからホグワーツ全体などと言い出すのはオスカーからすれば違和感だった。

「エスト、あなた分かってますか？ 結構大変なこと言ってますよ。先生に反抗する組織を全部の寮で作ろうって言ってるんですよ？」

「別にそんなの作らないの」

「いいわねそれ。監督生が先生への悪戯を指揮する訳よ」

「それやるのはトंकクスだけだろ」

「フィルチが多分死んじやうよね、働きすぎで」

オスカーにはエストがどれくらい本気なのか分からなかった。ただ、本気でやり始めるなら手が付けられなくなる可能性があったし、もしかしたら暴走する可能性もあった。ホグワーツの先生全員に、リータ・スキータにやったようなことをやられたらもうどうしようも無かった。

「じゃあ何をするって言うんです？ 私達でゾンコとかダービツシユ・アンド・バングスの代わりになる店を立てるんですか？ ふくろう試験の年なの？ とうかそもそも生徒の意見をまとめるのと、マジックアイテムを作るのは関係無いですよね？」

「やつぱりあれだよね、学生に危険なマジックアイテムを提供して、先生と対立関係にすることでマジックアイテムの売り上げが上がるとかそういう……」

「そんな死の商人みたいな考え方するのはチャーリーだけじゃない？」

「色んな生徒に情報を渡せるのが重要だと思うの。ほら、忍びの地図にオスカーがちよつと書いたらみんな集まってきて、写真を撮れたでしょ？ あんな感じなのを生徒みんなが持ってたなら先生もうかつにいろんなことをできないでしょ？」

「まあ変な噂を流そうと思えばすぐできるだろうな」

オスカーは日刊預言者新聞や週刊魔女を思い出した。エストが考えているのはまさに三年生の時のリータ・スキータのような影響力をホグワーツ内で持ちたいと言っているのと同じではないだろうか。

「でしょ？ でもそれにはその情報が有益だっと思ってもらわないとダメでしょ？ ホグワーツの掲示板で時々色々な部活の募集とかしてたり、新聞のマネみたいなことしてる人もいるけど、ほとんどみんな見ないよね？」

「まあほとんど私たちに関係無いですからね。決闘クラブとかトーナメントの時はみんな見てましたけど」

「そうでしょ？ だからね、みんなが欲しいようなものを売ってくれる紙とかなら読むんじゃないかなって。ここにあるモノとか、あとは……」

エストは机の上に広げてあった、おとり爆弾や魔法の鍵を手にとったあと、トンクスとオスカーの方をチラッと見た。

「禁止されてるような魔法薬で六年生以上じゃないと作れないやつとかなの。ポリジューズ薬、惚れ薬、生ける屍の水薬とか」

「目的は商品売るんじゃないやなくて、その紙？ に価値を持たせることなのか？」

「そう!! そういうことなの。商品は面白いの作って売れば楽しいけど、目的はその紙をみんなが見てくれることで、その紙をみんなが見てくれればいいの。そうしたらみんなに色々な事を教えられるでしょ？」

オスカーはこれは劇をやる以上に大変な事の気がした。そして明らかにエストはやる気だった。やると決めたらやる人間だとオスカーはエストの事を理解していた。そして言い出すという事は多分もう行動に出ているはずなのだ。

「エスト分かってますか？ 何ですかね、あれですよ、反体制新聞みたいなを作ろうって言うてるんですよ？ しかも最初はそれと分らずに商品のチラシだと思わせて配るって言うてるんでしょう？ だいぶ性質が悪いやつですよ」

「いいじゃない。反体制新聞。惚れ薬は販売禁止にした方がいいと思うけど。けどどうやって売るのよ？ ゾンコの商品みたいに郵便局から実家からの手紙に偽装してホグワーツに送るとか？」

「ゾンコはそんな風に売ってるんだね。まあ別に生徒にちよつと情報を送れる紙つてだけなら先生も禁止しないし、大丈夫だと思うけどなあ」

クラーナは結構難しい顔をしていた。あまり乗り気では無いのが誰が見ても分かっただろう。それにオスカーもさつきキングズリーに言われたことを思い出していた。そしてこのコンパートメントは監督生専用のコンパートメントなのだ。エストが言っていることは監督生に求められる資質とかそういうモノと全く正反対の言動に聞こえるのだ。

「郵便局とかに私書箱って言うのが作れるの。人の代わりに郵便を受けとれる場所。これをゴドリツクの谷、ロンドン、ホグズミードに作つといたの。ここに郵便で注文を受けるようにすればいいと思つて、で注文を受けたらふくろうで商品を届けるの。私書箱からね？ それに注文の書き方も普通じゃ分からない様にすればいいの。記号みたいなので商品の数とその人の名前で注文させる。ほらちよつと作ってみたの」

「やっぱりもう作ってたのか」

エストが羊皮紙を取り出すとオスカーはやっぱりリータ・スキータを思い出した。羊皮紙にはエストが描いたらしき全体的に丸いタッチで柔らかい色彩の商品イラストがあり、その下に商品の説明が書いてあった。『魔法の鍵、一本で一ガリオン四シツクル、これでああなたの気になる人の秘密がのぞけます』『伸び耳、十本で五シツクル、これでああなたはホグワーツの噂を聞き逃すことはありません』『他にも色んな

商品の名前が書いてあった。

「めちやくちや本気じゃないですか。なんか色までついてますし絵も動いてますし、というか夏休みの間に作ってたんですか?」

「合間を見て作ってたの。でね、この商品の欄に数を書いて、名前のところに名前を書いてくれる?」

「アクシオ クラーナの羽ペン」

「いや、なんで自分の羽ペンを使わないんですか」

「トランクが開いてるんだもの」

「トランクのせいで開いてるんでしよう」

羊皮紙にトランクはけっこう滅茶苦茶な品数とクラーナの名前を書いた。すると羊皮紙のお代金と書かれた場所に合計の注文額が二百五十ガリオン、四シツクル、五クヌートと出てきて、一番下の『お名前と品数がお決まりになりましたら、ここに浮き出た文字を手紙に書いて代金と一緒にホグズミード、ロンドン、ゴドリツクの谷、いずれかのWWW私書箱までお送りください』と書かれた場所に古代ルーン文字かつ意味をなさない文字列がでてきた。

「なんだこれ? 暗号か? WWWってなんだ?」

「何の商品を頼んだのか分からない様にしてるってことかな?」

「そうなの。運んでる途中でバレない様に暗号にしてあるの。商品と注文した人の名前をね? WWWはフレッドとジョージが二人のアイデアが入ってたなら名前として入れて欲しいって言ってたの」

「なんかますます徹底してるじゃないですか。そんなにゾンコをつぶしたいんですか?」

「いいわねこれ。ていうかエストは絵も描けるのね。なんでオスカー言わなかったのよ」

ちよつと本気が過ぎるのではないだろうかとオスカーは思った。いくらエストが作ったにしても、今回の羊皮紙は相当考えて時間をかけて作っている様に見えるからだ。

不思議なのはどうしていきなりエストがこんなことを始めたかだ。オスカーはエストがマジックアイテムの類を好きだと知っていたし、そういうモノを作るのが好きだとは知っていた。しかし、どう見ても

力の入れ方が大きすぎるとオスカーは思うのだ。

「エストのノートは読めなくても絵は読めるからな。三年の時も泉の絵を書いてただろ」

「絵を読むってなんかおかしくない？ オスカー？」

「一応エストに言つとききますけど。私達、一応監督生ですよ？ こんなの作って…… まあバレないとは思いますが。それにこの伸び耳ですか？ こういう数で勝負するような商品とかがもし売れたらつくる時間がいくらあっても足りませんよ」

「そうなたら段々一点もので高いのに絞っていけばいいの。魔法薬とか検知不能拡大呪文をかけた何かとか。安いのは最初にどんなの売ってるか宣伝になればいいかなって」

確かに大量のモノを作るなんてことになればオスカー達の数がいなくても時間が足りなくなるに違いなかった。しかし、売るのが目的ではなく、紙が信用されるのが目的なら徐々に高いモノに移行しても問題がないのかもしれない。

「私は別にこれやつてもいいと思うわ。まあ真面目なクラナ監督生はやりたがらないかもしれないけどね」

「別に私もそんなに反対だとは言ってませんよ。ただ力の入れ方は間違えないようにしないとイケないってことです。ふくろう試験もありますし、監督生の仕事もあるじゃないですか」

「僕もクイディッチと試験の合間くらいにやるならいいと思うよ」

「みんなそんなに反対しないんだね。エ…… 私結構みんな反対かと思ってたの。オスカーは？」

「ほんとに不味いことにならないくらいならやつてもいいと思う」

そうは言ったが、オスカーはエストがどうして先生も動かせるような影響力が必要だと思っただけが気になっていた。

「良かった。でね、もしやるんだったら生徒に紙をちよつと広める人と、あと商品の材料を買ってきたり、ホグワーツに持ち込む人、それに商品を置いといたり、作ったりする場所があると思うの。エスト達だけじゃできないし、談話室でやってたらず誰がやってるのかバレちゃうでしょ？」

「材料はジエイでいいんじゃないかな？」

「ジエイですか…… まあ、ほっといてもホグワーツから抜け出しますからいいんじゃないですか。秘密を守れるかは怪しいところですけど」

「紙を広めるのはテキトーに女子に頼めばいいんじゃないかしら。ほら、ちよつと女子に受けそうなアイテムとかと入れとけばいいのよ。ニキビが消える魔法薬とか。髪の毛を簡単にいじれるアイテムとか、それに割と男子より女子の方が寮が違ってても固まって話してたりするもの。ペニーとかにこんなん拾ったわって言っただけしときまじょうか？」

結構みんな乗り気と言うか、エストはこれを求めていたのではないかとオスカーは思った。エストは作ったり、考えたり、計画を実行に移すのは一人で完璧に近くできるかもしれないが、協力を取り付けると言う意味で顔が広いと言われると話は別だった。

「あとは場所だろ？ 必要の部屋とかそういうのさ。ただあそこは偶然入られるかもしれないから、どっか秘密の通路とかがいいかもしれないな、叫びの館とかどうだ？」

「やっぱりエス…… 私、一人で考えるより、みんなに聞いた方が早かったの。うん。場所とかそういうのもちよつとずつやっていけばいいかなって。クイディッチの試合の決勝戦くらいにちゃんと色々できるようになればって思うんだけど」

監督生の話をオスカーの部屋でしていた時もオスカーは思っていたが、エストは前よりもリラックスして喋っているようにみえるのだ。周りのメンバーがいつものメンバーだからそうなのか、もしそうなら今の自分と感じている事とは逆なのではないかとオスカーは感じていた。

「その…… エストの話も面白そうですけど……」

「何もったいぶってるわけ？ クラーナもなんかやりたいことあるの？ もう一回豊かな幸運の泉をやっとく？」

「やりません。五年生になったらやりたかったことがあるんです」

「クラーナがそういうこと言い出すのは珍しいな」

「確かにだいたいエストかトunksだよね」

余計な茶々を周りが入れるせいで、クラリーナは少し喋り辛そうだった。オスカーはみんなやりたいことがあると言うのは羨ましかつたし、自分もみんなの様に何かをやりたいと言い出した方がいいのではないかと考えていた。

「それでなんなの？」

「だから、動物もどきですよ。五年生になったら挑戦しようと思ってたんです。だからみんなでちよつとやりませんか？　こう、動物に変身できたらめくらしめし呪文をかけなくても夜に校庭に行けますし、ハグリッドの所にも遊びに行けるでしょう？」

「やり方は分かっているの？　前にマクゴナガル先生に聞いたらもつと後ですつて言われちゃったし、禁書の棚を前に漁った時も無かつたし、フローリツシユ・アンド・ブロッツツ書店にも無かつたの。何となくこんな感じかなつてのは分かるけど」

さつきエストに意見を述べまくっていたクラリーナとは逆に、今度はエストがクラリーナに色々ぶつける番だった。

「姉さんのノートに色々書いてありましたけど、正確には分からないです。マクゴナガル先生はあんまり教えたがらないでしょうから、選択肢は二つあると思います」

「選択肢が二つ？　やり方を知ってる人が二人いるってことか？」

「そうです。一人はみんな知ってますよね、あのリータ……」

「ダメ。絶対ダメよ。あいつから何か教わるなんてありえないわ」

リータ・スキータの名前を言い切る前にトunksが結構大声で遮った。オスカーはトunksの意思を曲げるのは相当難しいのではないかかと思つた。こういう時はハツフルパフらしい意思の強さが見える。オスカーは知っていた。

「でも、ちよつとその、教えてつて手紙を贈つたら教えてくれると思うの」

「ダメよ。それが間違つた内容だつたらどうするのよ。あんな奴の情報なんて絶対あてにならないわよ」

「ほんとに？　リータ・スキータはそんなうかつな真似はしないと思

うけど」

「じゃあどうするのよ。マクゴナガル先生に言つて、ちゃんと魔法省に報告して動物もどきになるならいいけど、ホグワーツにいる間は秘密にしているなら、絶対リータ・スキータに聞くべきじゃないわ。クラナはそう言うことがしたいんでしょ？　なら、絶対こつちの不利になるようなことをするべきじゃないのよ」

オスカーはチャーリーが言っていたのはこういう事ではないかと思つた。トンクスはこういう時に相当の事が無いと自分を曲げないのだ。そしてトンクスはトンクスが何かやる行動全部にそれを入れ込もうとする。エストの方もやっぱりちゃんとした理由が無いと自分を曲げないが、どちらかと言えば最後の目的を達成する方に力を傾けるはずだった。その為にはあまり手段を選ばないとオスカーは思っていた。

「とりあえず、教えてくれるかもしれないもう一人の方を聞けばいいんじゃないかな？」

「そんなにいるのか？　動物もどきのなり方を知ってる人が？　今世紀に何人もいないんだろ？」

「オスカーの言う通り、数は限られますよ。私たちの同級生でタルボット・ウインガーって知ってますか？」

タルボット・ウインガー。オスカーは少し聞いたことがある気がした。多分レイブンクロー生だったがオスカーはそれ以上の印象は浮かばなかった。

「知ってるわ。一年生の時からオスカー以上の一匹オオカミじゃない」

「あのおんまり喋らない人だよね？　レイブンクローの」

「凄い頭いい人だよね？　前に喋ったことあるよ？　変身術の話だったけど、理解の仕方が面白いの」

「そうです。ウインガーの両親は動物もどきらしくて、多分知ってるんじゃないかって思うんですけど」

「じゃあ、そのウインガーに聞けばいいんじゃないのか？」

オスカーがそう言うのとトンクスが意味ありげにオスカーとクラ

ナの方を見た。

「うーん……なんて言うかちよつと難しい感じもあるけど、リータ・スキータよりは現実的ね。ただ、聞きに行くならクラリーナ一人の方がいいと思うわ。ハツフルパフのペニーは知ってるわよね？ ペニーかレアに頼んで聞いた方がいいわね、私もついていってもいいけど、多分、クラリーナ一人が聞きに行った方がいいわよ」

「何ですかそれ？ なんで私一人なんです？」

今度はクラリーナが目を白黒させてトunksの方を見ていた。オスカーもトunksがそう言うのは少し気になった。

「とにかくクラリーナが行った方が良いつて言ってるのよ。喋らない根暗系なんてオスカーでなれてるから、いくらでもクラリーナは喋れるでしょ？」

「なんか酷い言われ様だな」

「事実を包み隠さず述べてるだけよ」

「まあトunksの忠告は良く分からないですけど、レアにでも会わせて貰いますよ」

何か他の人と一緒に行ってはダメな理由でもあるのかとオスカーは思ったが、あまり思いつかなかった。少なくともオスカーはウィンガーと面識がほとんど無かったので、好かれようも嫌われようもないはずだった。クラリーナも同じはずなのだ。

「そろそろまた見回りの時間なんじゃないか？」

オスカーは周りのコンパートメントから監督生たちがぞろぞろと出始めたのを見ながら言った。ビルがこつちに出てこいとばかりに手招きをしている。

「そうですね。まあとりあえずタルボットと一回話をしてからみんなに報告しますよ」

「私の方もいろいろ決まったら連絡するね？ チャーリーとクラリーナはジェイって人に話しといてくれる？」

「分かったよ。ジェイの方は僕らよりずっと乗り気かもしれないけどね」

「ほら、決まったんなら行きましようよ。見回りしながら一年生にゾ

ンコの商品を配るのもいいかもしれないわね……」

みんなと喋りながらコンパートメントを出て、オスカーはホグワーツ特急の通路を歩いた。いつもならずとコンパートメントに座ってホグワーツに着くのを待っていたので、このホグワーツ特急はオスカーには新鮮だった。

結構色んな人が他のコンパートメントに遊びに行っていたりしていたし、コンパートメントの中ではみんな談笑していたり、緊張した面持ちの新入生同士がお互いに探り探り喋っていたりとみんなホグワーツに行く前の時間を楽しんでいるようだった。

「ね、オスカー。さっきトンクスが言ってたことだけど」

「トンクスが？」

「ほら、タルボット君？　さん？　のところはクラーナ一人の方がいいかもって言ってたでしょ？」

「言ってたな」

どうやったのか杖の暴発でトランクを壊してしまった新入生のコンパートメントのところに行つて、そのトランクを直して出てきたエストがオスカーを捕まえて言った。

「多分ね、最初の頃のレアみたいなことだと思うの。なんかダイアゴン横丁でレアをクラーナが怒らせてたでしょ？」

「最初会った時はそうだったな」

「珍しいけど、クラーナに悪戯する訳じゃなくて、トンクスは真面目に言ってたと思うの」

「ああいう時は真面目に言ってるだろうな」

初めて会った時のレアを思い出し、オスカーは一人で納得した。つまり、タルボット・ウィンガーは目の前のエストや話に出てきたレアのような境遇の生徒だという事なのだ。

「リータ・スキータを使うってアイデアをトンクスは反対してたから、代わりにアイデアの方を考えないとダメだって思ったんじゃないかな？　あんまりトンクスが何考えてるか分からないけど」

「そうかもな。時々変なくらい義理堅いからな」

「だよな？　魔法薬を作り終わった後の大鍋にファイリバスターの花火

を投げ込んでみたり、女子のお手洗いの石鹸を全部カエル石鹸に変えたり、ピンス先生が寝てる時にゾンコでの正しい買い方とか言う講義を先生の格好に変身してやってみたり、くだらないことばかりやってるのに」

エストが言うようなトンクスの気まぐれな悪戯心と時々みせる変な誠実さは一体どこで釣り合いが取れているのか、オスカーにも不思議だった。

「じゃあちよつとパス探してくるね？ どうせまた教科書を暗記しようとしてるに決まってるの」

「分かった」

さらに後ろの列車の方へエストは消えて行った。オスカーはそういえばジェマとパーシーはまた同じコンパートメントにいるのだろうかと思つた。去年二人はウッドという男の子を連れてコンパートメントにやって来たのだ。

オスカーはまだ見回りをしていない前の方の列車に向かった。オスカーは先頭で列車を曳く汽車を中から見たことが無かったので、この機会に見てみようと考えた。

一番先頭の方の列車に行けば、クラリーナとチャリーがさつき話題に出していたジェイと喋っていた。汽車の立てる音で三人の会話は近付かないと聞こえず、恐らくわざとここで喋っているのだろうとオスカーは思つた。

「決闘チャンピオンもこの話に噛んでるんだろ？ クイドイツのお姫様の発案なら噛んでない訳ないだろうし」

「意外ですね？ オスカーはジェイと知り合いなんですか？」

「喋つたことはあるけどな」

「ジェイは割と危ないところをオスカーに助けて貰つたんだよ」

クラリーナはちよつと意外だという顔で男子三人を見ていた。オスカーはあんまりこの話をしない方がいいと思つた。三人の会話というヒントだけで夏休みに何をしていたのかを当てられかねなかったからだ。

「そういう訳だから、基本的に注文してくれば優先的に融通するよ。」

腕が立つのに加えて、君らはトンクス以外先生の覚えがいいし、口も堅いから。脱狼薬とかシェリー酒みたいなほとんど専売みたいな商品は別だけどね」

「なんですか脱狼薬って、ホグワーツに狼人間でもいるんですか？」
「ホグワーツではあらゆる商品に需要があるのさ。魔法界で一番大きな街みたいなモノだし」

魔法薬の研究でもしている生徒がいるのだろうか？ 普通に考えれば狼人間がホグワーツにいるとは考え辛かった。ノクターン横丁ならまだしも、ダンブルドア先生の目が光っている場所で狼人間が好き勝手出来るとは思えないのだ。

「とりあえずエストがやりたいことの材料はジェイに頼めばなんとかなりそうだよな？ でも、エストがこれを始めたらジェイの売り上げが減るんじゃないかな？」

「チャーリー、僕は結構ホグワーツで屋敷しもべやゴーストの連中と喋るけど、それで分かったことは、ホグワーツでピーブズに言うことを聞かせることができる生身の人間は、校長先生とクイディッチのお姫様だけだったことさ。僕はフィルチや魔法省の間抜けな役人くらいならどうも思わないけど、ピーブズより命知らずじゃない」
「ピーブズに命があるかはかなり怪しいところでしよう」

ダンブルドア先生とエストが同列なのかはオスカーにはかなり疑問だったが、ホグワーツに住んでいる生徒と先生以外の生き物やゴースト、城そのものにエストが好かれていることは疑い様がないとオスカーは思っていた。なにせ階段がいつもと逆回りをするくらいなのだ。

「そういう事だから材料の調達は僕に任せてくれよ。じゃあまたホグワーツで」

「分かった。またエストから連絡すると思う」
「僕も少しグリフィンドールのみんなと喋ってからコンパートメントに戻るよ」

「ジェイはもうちよつとまともに授業を受けた方がいいと思いますけどね。授業を受けている時間より、罰則を受けている時間の方が長い

くらいですから」

「クラリーナはもうちよつと目立たない場所でオスカーとごはんを食べた方がよかったんじゃないか？」

「は……」

チャーリーとジェイはちよつと笑いながらクラリーナの前でコンパートメントの扉を閉めた。クラリーナは目を見開いて扉の向こうで笑っている二人を見た後にオスカーの方を見た。

「オスカーが話したんじゃないですよね？」

「話してないな。ジェイは自分で見たか、俺以外の誰かから聞いたんじゃないか」

「グリフィンドールの女子はうるさいのに……これだと、察に戻つたらずつと言われるじゃないですか」

ブツブツ言いながら歩くクラリーナと一緒にオスカーは歩いた。ダイアゴン横丁のテラスで食べたのだから見られる可能性は十分にあったと思うのだが、オスカーはこういう事に関してクラリーナは詰めが甘いのではないかと思った。戦闘に関する事ならこんなミスはしないはずなのにオスカーは考えていた。

「ところでオスカー。さっき言つてたことをエストとみんなでやるんなら、ちゃんとエストの事を見て下さいよ。なんであんなにやる気なのか分からないですけど、結構……その、暴走じゃないですけど、やる気がありすぎるかもしれないですよ」

「そんなにか？」

「そんなにですよ。それに今回は私達だけじゃなくて、他の人達に何かしようって感じじゃないですか。普通の学生ならいいですけど、エストが本当に本気でそういう事をやるって言うなら結構大事になりますよ？ 探し物や劇でもその、あんなことになりましたよね？ 手段を選んでもこれなんですよ？」

「手段を選んでもって……」

オスカーはそこまで危機感を持つてはいなかったが、クラリーナの方はかなりエストがやろうとしていることを危ういと思っっている様だった。オスカーからすれば、髪飾りを探した時も劇の時もそれほど

エストが危ういことをしているとは思わなかった。むしろ危ういことをしているのはエストよりも自分かもしれないとオスカーは考えた。

「とにかくエストはオスカーの言う事なら、他の人より多少は聞いてくれるじゃないですか。なにかあったらオスカーが言ってくさいよ。トンクスはやりたくないことはやらないですけど、危ないことは結構平気ですし、チャーリーもクイディッチやってるせいかそういう危機感がぶっ壊れてるところありますから。それにエストは本当に必要な手段を選ばないでしょう？ オスカーと一緒にですよ。スリザリンっぽいですけど、誰かが危ない状況でもないのにそんな事やらないでもいいじゃないですか」

「分かった、見とけばいいんだろ？」

「ほんとにちゃんとして下さいますか？ オスカーが逆に引き金になったら目も当てられないことになりますから。じゃあ、ビルにこれ以上監督生の仕事が無いか聞いてきます」

ガタゴトと揺れる列車の通路でオスカーは今言われた内容を考えていた。クラーナはオスカー自身とエストが一緒だと言ったのだ。クラーナが二人を手段を選ばない人間だと思っっているという事ではないのだろうか。オスカーは思い当たる節が無い訳では無かった。

必要に駆られてとは言え、オスカーが二年目や三年目の最後にやったことは、世間一般から見れば手段を選んでいない様に見える。オスカーは分かっていた。

「なんでそんなところで突っ立ってるわけ？」

「コンパートメントに戻るとこだ」

「ならもう戻りましょうよ。ハツフルパフの友達に監督生のことバレてて、おちよくってくるやつとか私が監督生とかおかしいとか怒るやつとか笑うやつとかもう疲れたわ」

「妥当な感じの反応だろ」

手段を選ばない。クラーナ以外もオスカーやエストの事をそう思っているのかオスカーは気になった。だいたいこれまでの経験、例えばキメラの事を考えればトンクスやチャーリーの方が手段を選ば

ないと思えるからだ。

「なあ、トunksは…… えーつと」

「何？ あ、車内販売のおばちゃんが向こうに見えるわね。おばちゃん私達のコンパートメントに来るまでに戻りましょうよ」

「それはいいんだけど。スリザリン生って手段を選ばないと思うか？」

「あんたも選ばないじゃない。普通の奴は男女で入れ替わったりしないでしょ」

オスカーはぐうの音も出ないと思った。今考えてみれば、割と正気でやれる作戦ではなかったのではないかと思ったのだ。

「確かにそうかもな」

「それにあんたはもつと性質が悪いでしょ？ スリザリンとグリフィンドールで組み分け帽子が悩んでた理由が良く分かるじゃない。自分の事を考え無い上に手段を選ばないもの」

自分の事を考えないと言うのがグリフィンドールの事で、手段を選ばないと言うのがスリザリンの事を指しているのだろう。オスカーはこういう時にやつぱりトunksは妙に鋭い気がした。

それと同時にオスカーはやつぱり何か分からない時に、問題を色んなモノに分けて色んな人に聞けばいいのではないかと思った。さつきクラナはエストがどうしてやる気があるのか分からないと言っていたのだ、トunksに聞けばそれも分かる気がオスカーはした。

「ならどういう時にスリザリンの人がそういう事するんだ？」

「そりゃあんたたちのつまらない野心ってやつじゃないの？ ほら、蛇のようにジメジメして陰気で狡猾になって組み分け帽子も言ってるじゃない」

トunksはわざわざ手を合わせて腕と体をくねくねさせて迫真の蛇の物まねをした。髪の毛まで緑色にする力の入れようだった。オスカーは本気で喋らないトunksから重要な情報を取り出すのは、エストが興奮している時の会話の意味をくみ取るのと同じくらい難しいと知っていた。

「それ以外に無いのか」

「あるわよ。あんたたちはいつも同じ寮でつるんでるじゃない。それ以外に何かあるの？　うえー、本当の蛇はあんなに固まらないのにスリザリンはいつも固まっているわ」

車内販売のおばあさんの横を歩きながら、トンクスは気持ち悪いとばかりに舌を出していた。オスカーは今のトンクスの方が髪は緑だし、蛇の様に舌を出しているしでよっぽどスリザリンっぽいと思った。

「それも確かにあるな。逆に他の寮が固まってないだけかもしれないけど」

「それだけじゃないでしょ？　エストがあんなこと言い出したのもそれに決まってるわ。まあ面白そうだからいいけど。分かった？　スリザリンは陰気で手段を選ばなくて、とにかく身内に甘いのよ」

「身内に甘い？」

「そうでしょ？　あんたもエストも身内大好きでしょ？　うちのママもそうだし、スネイプもそうじゃない」

オスカーは身内に甘いかかそう言う意味では、トンクスもそうではないかと思った。そうでなければさっきのリータ・スキータの話題のような反応はしないはずなのだ。

「トンクスもそんな感じするけどな」

「はあ？　私はあんたたちみたいに手段を選ばない訳じゃないわよ。それに陰気でもないわ。ほらこんな緑色がダメなのよ。ヘアピンまで銀色になってるじゃない」

「寮の色はセットになってるからな」

「何がセットになってるんですか？」

トンクスはいきなりコンパートメントから出てきたレアに、あからさまにゲエつと言う顔をした。オスカーはやっぱりレアとトンクスの関係性が変わり始めているのではないかと思っていた。

「監督生様のお通りなんだから、レア・マツキノんさんはレイブンクローのお友達を引き連れて遊んでて大丈夫よ」

「だから何がセットなんですか？　寮の色？」

「緑と銀色はセットって言うてるのよ。クラーナの髪色はグリフィン

ドールに合っていないって話よ」

「ちよつとそれはひどくないですか？」

「それだとレアはレイブンクローって言うより、ハツフルパフじゃないか？」

そのままレアは二人について来たのでトンクスがさらにゲエつという顔をした。やっぱりトンクスは今のレアの事が苦手なのかもしれないなかった。

「こんな凶暴なハツフルパフ生居る訳ないじゃない」

「どういう意味ですか？ トンクス先輩？ 誠実なハツフルパフ生は天文台の塔の色を全部ピンクに変えないと思えますけど。それにあの色はホグワーツには合ってなかったと思います」

「それはちよつと反省してるわ。でっかいアナグマとかにしとけば良かったと思ってるもの」

「いや、シニストラ先生滅茶苦茶怒ってたぞ。望遠鏡のレンズが全部ピンク色になって、どれがどの星か分からなくなったって」

監督生のコンパートメントまで来て扉を開け、オスカーは違和感に気付いた。オスカーのトランクが動いているように見えたのだ。

「トンクス、一回もコンパートメントに戻ってないよな？」

「そりやそうでしょ。レア程では無いけど、ハツフルパフ生もやつかいだったもの」

「トンクス先輩がそんな感じの時はだいたい何か言われたくないことがある。冗談でごまかすか、相手をしないようにするかどっちかだから」

オスカーのトランクは劇で使ったものだったので、違う鍵を使えば違う中身が入っているはずだった。そしてどう見ても最後に使った鍵穴は閉まっついていて、違う中身の鍵が開いていた。それはたしかオスカー達が劇の合間の休憩につかっていた部屋に入れる鍵穴だった。

トンクスとレアに見えない様にオスカーは卵がまだトランクに入っていることを確認し、考えた。何が起こっているのか、最後にトランクに触れたのはフレッドとジョージなのだ。

「リベリオ 現れよ」

「何して……」

「足跡?? 二人分?」

足跡が二人分コンパートメントの座席と床に現れた。トランクのある網棚から座席に降りて、そのままコンパートメントから出ていった様に見える。

「フレッドとジョージだ」

「はあ? どこに入ってたのよ?」

「これもしかして劇のトランクですか?」

「検知不可能拡大呪文を唱えるのがめんどくさかったからそのまま使ってたんだけど…… アロホモラ避けもかかって、鍵は俺が持ってたのに……」

オスカーはエストが出しっぱなしにしていたマジックアイテムを見た。さつそくエストがやろうとしていることの弊害が生まれたようだった。

「エストの鍵か」

「ちよつとこれ、あの二人が列車に乗ってるってことよね?」

「ウィーズリーのおじさん、おばさんの二人は心配してるんじゃない?」

リベリオで現れた足跡をオスカーが辿っていくと、その足跡は列車の連結部分で消えていた。オスカー達は五人で全てのコンパートメントを見回りはせず、そのどこにもいなかったとなると答えはほぼ決まっていた。

「上よね?」

「あの二人はこういう事だともものすごく頭がいいから……」

連結部分の外側には列車の上に登る手すりがあった。フレッドとジョージの手と足の痕跡が金色の光でそこに示されていた。

「ちよつと二人ともどこかに掴まっててくれ」

「掴むってどこよ」

「どこでもいい」

レアがいきなり杖腕じゃない方の手を握ってきたので、オスカーはちよつと震えそうになった。トunksは普通にオスカーの腕を握った。震えをごまかすようにオスカーは姿くらしして列車の上に三

人で現れた。

「姿くらましって試験に受からないと使えないのよ。知ってた？ 監督生のオスカー？」

「知ってるよ」

「ほんとに居た……」

フレッドとジョージはなぜかホグワーツ特急の屋根の上で爆笑しながら寝ていたが、三人の姿を見ると笑いが消えた。オスカーはレアに手を離して欲しかった。

「見つけたぞ。フレッド、ジョージ」

「ホグワーツを一目見たいんだけど」

「そう、一目だけでいいから」

「あのねえ。いくら私でもそれはしなかったわよ。魔法界の子供はみんなホグワーツに行きたいんだから、フライングするのはずるよ」

「ウィーズリーおばさんが凄い心配するのが分からない？ あの人は誰かなくなるのが凄い嫌な人なのに……」

レアがずんずん進んで二人の方へ行こうとするので、オスカーは連れて進まざるを得なかった。

「今すぐ二人に連絡しないと」

「オーケー、レア、今僕たちが降りたらホグワーツ特急を止めることになる」

「そうそう。一回ホグズミードまで行ければそれで……」

「ダメだ。二人はホグワーツに行けない歳だ。それは分かってるだろう？ フレッド・ウィーズリー？ ジョージ・ウィーズリー？」

最近怒っているレアをオスカーは見えていなかったが、どうみても今は怒っていた。どうもウィーズリーおばさんの事を考えずに出てきた二人に怒っているらしかった。

「じゃあホグワーツにはいけない？」

「一回見るだけだから」

「だからダメ。フレッドやジョージが知ってるどの人も、ホグワーツに行きたくても、その年になるまでは行けなかったんだ。だからダメ。二人はここで降りないと……」

オスカーはとにかくレアに手を離して欲しかった。プラスしてトunksに掴んだ腕を離して欲しかった。そのトunksがオスカーの横で言った。

「車内販売？」

「なんだってトunks？ 風の音で良く聞こえな……」

「オスカー、あれ車内販売のおばあさん……」

「はあ？」

「何かありませんか？ 蛙チョコレートは？ 大鍋ケーキは？ 百味

ビーンズは？」

フレッド、ジョージがレアにビビって竦んでいる向こう側から車内販売のカートがやってくる。いつものおばあさんだ。ミユリエルおばあさんやマッドアイが子供の頃からおばあさんだったおばあさんがやってくる。

「誰も私の事を知らない。私から毎年二回、大鍋ケーキや蛙チョコレートを買うけれど、私の事は気にも止めない。私の名前を聞いてくれる人もいない」

「ジョージ、ホグワーツってやっぱりすごいな、車内販売のおばあさんでも屋上にやってくるんだぜ」

「フレッド、何かとにかくヤバイ気がする。レアも我らが母さんと同じくらい怖いけど、あのおばあさんは絶対ヤバイ。えっと、マドモアゼル？ あなたの名前は？」

「忘れてしまった。ホグワーツ特急ができたときに、時の校長、オッタライン・ギャンボル校長が私にこの仕事をくれた。その仕事をしている間に、私は名前を忘れてしまった」

オッタライン・ギャンボル校長がどれくらい前の校長なのかオスカーには分からなかった。オスカーはもう訳が分からなかった。フレッドとジョージは勝手にホグワーツ特急に乗るし、屋上にただならぬ雰囲気で車内販売のおばあさんはやってくるし、二人は手と腕を離してくれなかった。むしろおばあさんのせいでもっと強く握られて、オスカーはちよつと痛かった。

「いや、ギャンボルって多分百五十年くらい前の校長じゃないの。あ

りえないでしょ」

「百五十年の間に五百万個のかぼちやパイと蛙チョコレートを作った。でも、誰もそれが何に変わるのか予想できなかった」

おばあさんがカートからかぼちやパイを一ダースくらいフレッドとジョージの方へ投げつけた。オスカーは反射的に盾の呪文を張った。ボンバーダを何度も唱えたような爆発が起こって、ホグワーツ特急の屋根はボコボコになった。

「フレッド、ジョージ!! こっちに来い!!」

「この列車は誰かが途中で降りるのを嫌う。旅の終わりまで席に座っていないければならない。たとえホグワーツに入学しない子供だとしても、途中で降りることは許されない」

「ちよつとレア!! あなたがホグワーツに行けないとか大声で言うから変なの来ちやつたじゃない!!」

「ええええ!! ボ、ボクのせいですか!? あれほんとに何なんですか?」

「いいから二人とも手を放してくれ。あれを止めるしかないだろ」

やっと二人の手を振りほどいて、オスカーはおばあさんに対面した。理解が追いつかずに混乱していたが、必要なのはフレッドとジョージを安全なところにやって、おばあさんをどうにかすることだった。

「椅子に戻るから列車に戻って貰えないか? 百味ビーンズを……」

「降りようとした奴はいる。そいつらも私が席に縛り付けた。シリウス・ブラックとその悪戯仲間……」

「シリウス・ブラック!?!」

「ママの従妹じゃない? そんなヤバイ死喰い人になるひとでもおばちゃんから逃げられなかったわけ?」

おばあさんはこっちを見てニヤリと笑った。指が鋭い針の様に伸びて、カートの中身が宙に浮き始めた。

「二人として途中で降ろしたことはない。試みた人間は全員失敗した」

おばあさんの姿がかき消えた。オスカーは背後に盾の呪文を張っ

た。金属同士がぶつかるような音がした。おばあさんの十本の指がオスカーの呪文でとめられていた。出現させた紐でおばあさんを縛って、屋根を変身させてカートの手輪を固定したが、おばあさんは一瞬でひもを切り裂き、ホグワーツ特急の屋根を丸ごと爆破してカートを取り戻した。

「ちよつとこれほんとにヤバイじゃないの。何なのよこれ」

「失神呪文も効かないんじゃないですか？ 人間ですかあれ？」

穴が開いた天井から、ホグワーツ特急の内部が見える。コンパートメントでは新入生らしい四人が怯えた顔でオスカー達の方を見ていた。

「蛙チヨコレートが何に変わるか、誰も知らない」

カートから鋭い指で器用に蛙チヨコレートを五つ掴んでおばあさんは投げた。蛙チヨコレートは全てオスカーより一回り大きいくらいの蛙に変身した。

「いやヤバイでしょあれ。監督生の仕事ってこんなヤバイのと戦う仕事なわけ？」

「カートを封じないとダメだ。オスカー」

「フレッド、ジョージ、後ろに逃げる。トンクス、レア、俺がカエルを潰すから、おばあさんのカートをどうにかしてくれ」

オスカーは飛び出した。カエルの目はオスカーだけを追っていた。魔法生物飼育学でカエルの目は動くモノだけを追いかける、そうオスカーはチャリーに個人講義されたので知っていた。ローブに手を突っ込んで中にあつた百味ビーンズの袋を空中にばらまく、杖を振れば小さい鳥になってカエルの目の前を百味ビーンズは飛び始めた。

「今の間だ!!」

「分かったわよ!!」

「トンクス先輩!! 左からいきます!!」

カエルが鳥に目を奪われている間にオスカーはおばあさんにターゲットを絞って攻撃した。失神呪文はおばあさんが長い指を振るだけで弾かれた。トンクスとレアがカエルを避けて両サイドからおばあさんのカートに目掛けて攻撃を仕掛けるのと、カエルが百味ビーン

ズの変身した鳥を全て食べるのは同時だった。

オスカーが杖を振ると、百味ビーンズが爆発して、カエルは中身から爆発した。カエルのなんだか分からない場所の肉があたりに散らばって、そのあと全部チョコレイトに変わった。

「グロすぎるんだけど。髪の毛についたらどうするのよ!!」

「チョコレイトだから大丈夫です。トンクス先輩!! 行きます!!」

「分かっているわよ!!」

「エクスパルス!!」

トンクスとレアが呪文を唱えるタイミングでオスカーはおばあさんの目の前に姿現しして、アグアメンティと凍結呪文でおばあさんの指を凍らせた。

二人の呪文はおばあさんのお菓子が満載のカートを吹き飛ばした。お菓子が焦げた甘い匂いがあたりに漂う。

「監督生の仕事はこれで務めた訳ね」

「なんでボクらは車内販売のおばあさんと……」

「まだだ」

おばあさんの手から凍った指が全部落ちて、新しい指が生えてきた。さらに一番先頭の汽車までおばあさんは何十メートルも後ろにジャンプして、その汽車の天井から六台のカートが文字通り生えてきた。

「いやもうほんとにおかしいでしょ。何なのよあれ。というかクラナとエストはどこ行ったのよ。こんな時しかあの二人は役に立たないのに」

「もうあれ人間じゃない……」

「いいか!! ホグワーツ特急は絶対に途中下車は許されない!!」

おばあさんがそう言った瞬間にホグワーツ特急は急速にスピードを上げた。見たことがないような速度で周りの景色が過ぎていく。さらにおばあさんの姿が三人に増え、それぞれ二台のカートを両サイドに構えていた。

「何でオスカーは車内販売のおばあさんと戦ってるの?」

「おばあさんは三つ子だったんですか? というかどんな大暴れして

るんです？ ビルもちよつとしたら他の監督生を連れてくるって
言っていました」

「これあれだよね？ ホグワーツ特急って、もしかして特急とおばあ
さんで一つの魔法生物なのかな……」

バチツという音と一緒に三人が現れた。というかもうオスカーの
方もなぜこんな戦いをしているのか分からなかった。

「なんかレアがフレッドとジョージを降ろすって言ったら襲い掛かっ
て来た」

「やつぱりボクのせいですか？」

「そうよ。レアのせいに決まってるわ」

「なんか滅茶苦茶怒ってますね。おばあさん。話聞ける状態ですかね
？ なんてそもそもフレッドとジョージがいるんですか？」

「フレッドとジョージが降りなければ大丈夫なら、レアと二人を座席
に戻した方がいいんじゃないかな。多分、生徒をホグワーツに運ぶた
めの生き物なんだよ。あのおばあさんとこの特急は」

さつきおばあさんが爆破した場所の天井が勝手に修復されていた。
オスカーはチャリーの意味の分からない自説すら信憑性がありそ
うだと思った。

「レアと二人を座席に戻すの。他になんかおばあさんは言ってた？
逃げようとした人をどうしたとか？」

「シリウス・ブラックを紐で座席に縛り付けたとか言ってたわよ。魔
法省よりよっぽど優秀なんじゃないかしら」

「じゃあ三人を椅子に縛り付けるの」

「ボク、椅子に縛られるんですか……」

ホグワーツ特急はどんどんスピードを増していた。段々とカーブ
のたびに変な音が車輪から聞こえていて、オスカーは不安になってき
た。

「いいか!! ホグワーツ特急は絶対に送り届ける!! 一人の例外も無
いんだよ!!」

「おばあさん話聞いているの？」

「あれは絶対聞こえてないですよ」

「もうトンネル無いよね？ ホグズミードが見えてるし、うーんと」
エストは椅子を三つ出現させた。ついでに紐まで現れた。

「あのね。とりあえずそこに三人を縛り付けねばいいかなって」
「ここで縛り付けられるんですか？ ボクちよっとこれは嫌って言うか……」

オスカーは無言でレアを椅子の一つにインカーセラスで縛り付けた。

「オスカー、あんた女の子を椅子に縛り付ける趣味があつたのね」

「無い。トンクス、フレッドとジョージを縛り付けてく……」

「オスカー!! 盾の呪文なの!!」

「プロテゴ!!」

ミサイルの様に飛んできた大鍋ケーキが二人の張った盾の呪文で防がれた。大鍋ケーキは二、三十個は飛んできて一気に爆発した。さらにケーキの中に入っていたらしきパイが各々爆発して、凄まじい規模の爆発になった。さつきと同じようにホグワーツ特急は爆破で穴だらけになったが壊れた瞬間から直り始めた。オスカーはエストと一緒に唱えなければ呪文を抜かれていたかもしれないと思った。

「絶対にこの特急は……」

「ほら、フレッドとジョージも縛り付けましたよ」

「これ、ホグズミードについたら外してくれますよね？ オスカー先輩?」

「フレッド、あれホグワーツだ」

「ほんとだ。あれがグリフィンドールの塔かな?」

恐らくオスカーやエストと同じように姿くらましでフレッドとジョージをクラーナが連れてきたらしかつた。しかし、おばあさんはまだ怒りが静まらないようにみえた。

「怒らせすぎたんじゃないかな」

「ホグズミード駅に着くまでは誰も降ろさない。百五十年間、一度もそんなことは起こらなかった」

「うーん。これはお手上げかも。ホグワーツ特急ごと爆破してもいいなら解決できると思うけど」

ホグワーツの城とホグズミードの街がもう見えていた。しかし、おばあさんの怒りはパンケーキクラスター爆弾を防がれたことで頂点に達したらしく、おばあさんは十人に増えて、オスカー達を列車の先頭と最後尾から挟み撃ちにしていた。

そして百味ビーンズの袋を全員がカートから取り出して中身を空中に撒いた。百味ビーンズは色とりどりの炎となって、その炎はまるで悪霊の火のように蛇や悪魔やドラゴン、キメラと言ったおどろおどろしい姿となった。

「あれは本当に不味いやつですね。これあれですかね。歴代の校長がホグワーツ特急に対する攻撃の対策に魔法をかけたんじゃないですか」

「何か止める方法はないのか？」

「ちよつと!! ボクこんな列車の屋上で椅子に縛られて焼き殺されるのは嫌だ!!」

「うーん。あれだよ。元の仕事に戻さないとダメなの」

「そうだよ。なんか元の仕事の戻るきつかけがあれば……」

元の仕事、つまり車内販売におばあさんが戻るきつかけが必要だった。しかし、炎が迫ってくる前にオスカーはそれを考え付くとは思えなかった。仮にここにいる全員を椅子に縛り付けなければならぬのなら、それは現実的と言えなかったし、仮に自分でそうして炎に焼かれたのでは間抜けもいいところだった。

「百味ビーンズってああやって使うんだな」

「フレッド、あの百味ビーンズ注文できないのかな」

「二人とも何言ってるのよ。まあ確かに注文してあの鬼ババアが止まるならいいわよ。百味ビーンズ三袋下さいって言って止まるならね」

トンクスがそう言うのと百味ビーンズの炎が消えた。そしておばあさんの姿は一人だけになり、さらに一台だけになったカートを押してこちらにやってくる。それに駅が近づいたのか、ホグワーツ特急が速度を急速に落とすのがオスカーには感じられた。

「百味ビーンズ三袋ね? ほかに何か必要ですか? 杖型肝臓アメや蛙チョコレートもありますよ? 百味ビーンズ三袋だけなら二シツ

クルです」

「百味ビーンズもう十袋なの」

「はい。全部で五シツクル四クヌートね。」

「六シツクルなの」

「はいこれお釣りね。ホグワーツでも元気にしててね」

「なんでエストは普通に注文してるんですか」

お釣りをエストに渡すなり、車内販売のおばあさんはカートを押して消えてしまった。オスカーはそのまま地面……ではなくホグワーツ特急の屋上に座り込んだ。トンクスも一緒だった。

エストはポリポリ百味ビーンズを食べていて、クラーナとチャーリーは何か喋りこんでいた。

「ホグズミードにつきました。荷物はそのまま置いていただければ学校の寮までお届けします。学校指定のローブに着替えて、ご降車ください。お疲れ様です」

運転手のアナウンスが流れて生徒達がホグズミードの駅へと流れ始めた。何人かは上での爆発音が気になったのか上の方を見ている。レアは椅子の上で体をねじっていた。杖も手が縛られて上手く触れないらしく、ワンドレスマジックで天井ごと爆破しかねない様子だった。

「この格好でみんなに見られるのは嫌だ」

「ほら、あんまり動くなって」

「オスカーの勲章に後輩の女の子を縛り付けたが追加ね。マーリン勲章勲一等みたいなものよ」

レアの紐を杖でほどきながら、オスカーは駅の方を見た。ウィーズリー夫妻がマクゴナガル先生と一緒にこつちに来るのが見える。おそらく車掌らしき人と合流し、屋根の上ののっているオスカー達の方を指さしている。

「ホグワーツは見られたから満足だよな、ジョージ」

「来年ホグワーツ特急に乗るときはおばあさんに名前を聞くよ」

「多分ママはフレッドとジョージを半年は家からださないよ」

何故か満足気なフレッドとジョージを見ながら、オスカーはもう二

度とホグワーツ特急から降りるなどと言わないと心に誓ったし、五年目はホグワーツに入る前から疲労困憊になっていると思わざるを得なかつた。

二人の先生

オスカーはホグワーツに入学して初めて、学期の初めに大広間以外の場所に行くことになった。ふかふかのソファに腰かけて、オスカーいつもの五人は先生方の話を聞いていた。

恐らくマクゴナガル先生は入学者を読み上げるのに忙しくて来られなかったようだが、他の寮監は全員いて、ダンブルドア先生までいたのだった。もちろんここは校長室なのでダンブルドア先生がいるのは至極当然の事だった。

「わしはもうホグワーツの事を存命中のほとんどの人物より知っておると思っておったが、君たちは相変わらずわしの知らないことを見つけてしまうようじゃ」

「あの…… ダンブルドア先生、フリットウィック先生、まだ学期は始まっていないから…… 寮の点数を減点…… はない…… ですよね？」

さつきまでのフレッドとジョージ、それにウィーズリー夫妻を交えた事情聴取の中で、自分の一言が原因でどうやら車内販売の魔女を怒らせてしまったと認識したレアが恐る恐る言った。

「なんだかオスカーはこの部屋であつた二年生の時間が巻き戻っているようだと思つた。」

「そうじゃの。残念ながらまだ学期は始まっておらんから、レイブンクローのサファイアの数は増えも減りもしないじゃろう。ルビー、ダイヤモンド、エメラルドも同様じゃ。のう？ フィリウス、ポモーナ、セブルス？」

「ダンブルドア、それはそうに違いありません。しかし、こんな話を聞いたのはもう何十年ぶりなのか」

フリットウィック先生のキーキー声が響く。オスカーからはレアとチャーリーの影になっていて、フリットウィック先生の姿は小さすぎて見えなかった。

「確かに似たような話は聞いたことがあつたの。じゃがここまで大事では無かつた上、その時は車内販売のマダムが六人に増えることは無

かったと記憶しておる。せいぜい縛り付けられた数名がキングズ・クロス駅に戻されかけたくらいじゃ。セブルス、君が学生の頃ではなかったかの?」

「記憶がありませんな」

セブルス・スネイプは相変わらずの鉄面皮だった。やっぱり髪の毛は洗ってない気がしたし、レアがいるからなのか、それとも喋りたくない話題なのか、いつもよりさらに口数が少ないとオズカーは思った。

「しかし…… まあそうじゃの。わしは結構な数の生徒を寮監の先生と一緒に監督生にしてきたわけじゃが……」

「トンクス、ダンブルドア先生があなたを監督生にとおっしゃってくれたんですよ」

「多分それはいくらダンブルドア先生でも間違えることがあるっていう、すごい珍しい例だと思うのよ。スプラウト先生?」

スプラウト先生は眉を上げて額に手を当てた。オズカーは思った。ダンブルドア先生とスプラウト先生の間で色んなやり取りがあつたのではないかという事を。エストの邪推すらもしかしたら本当かもしれないかった。

「ニンファドローラ、わしはかなりの数の監督生や主席を任命したわけじゃが、正直なところわずかな期待に頼って失敗した例はいくつもある。特に……」

ダンブルドア先生はスネイプの方へ視線を移し、次にエストの方を見た。

「非常に勉強はできるがお騒がせな集団の内、比較的落ち着いている一人を監督生にした時じゃ。わしも学習する。もしかすれば逆の方が良かったのかもしれないな」

「それ私にわずかな期待をかけてるってことよね? ダンブルドア先生? ここにいるメンバーを静かになんて私にはできないわよ?」

「そうよねクラーナ?」

「トンクスが静かになればみんなが騒いでも相対的には静かになりますよ」

オスカーは先生陣と同じ部屋にいるのに意外と明るい話ができていると感じた。後ろの肖像画達も先生方とオスカー達の話に聞き入っている様だった。オスカーはそのうちの一人と目が合った。その肖像画は相変わらず気難しい顔をしていたが、同時に喋りたくて仕方が無いと言う顔をしていて、オスカーにはどうやって両方の顔を一つの顔で表現できるのかが分からなかった。

「ダンブルドア。そろそろ君は広間へ行かなければならないのではないのか？」

「フィニアス、忠告をすまぬ。ではそろそろ皆広間に行かねばならぬ時間じゃ。わしが行かぬと皆は夕飯が食べられぬ。そうなれば、わしは学期の初めのご馳走を用意できなかった初めての校長としてホグワーツの歴史に刻まれるじやろう」

みんなが立ち上がってぞろぞろと校長室を出ようとした中、トンクスがオスカーの方へ来て言った。

「あのダンブルドア先生にも偉そうなやつ誰なのよ」

「トンクスの先祖だろ」

「何言ってるのよ？ あんな愛想のない先祖いるわけないじゃない」

「娘。どういう意味だ？」

オスカーは去年この校長室でフィニアス・ナイジエラス・ブラックと喋っていたので、不機嫌な声を出しているものの、フィニアスは多分トンクスと喋りたいのだろうと考えた。

もしかすると、スリザリン生が身内好きなのではなく、このフィニアスの家系が身内好きなのかもしれないとオスカーは思った。

トンクスは肖像画の近くに書いてある校長の名前を見ながら喋った。

「オスカーがあなたを私の先祖だと言っててるのよ。えっと、フィニアス・ナイジエラス…… ブラック?? ブラック??」

「ブラックってシリウス・ブラックのブラックですか？ トンクス先輩?」

「それ以外にブラックって何がいるのよ」

「シリウス・ブラックは私の曾々孫だ。私の弟の名前を付けられたの

に、魔法界の裏切り者としてアズカバンに投獄されている。いまや私のころのブラック家は見る影も無い」

「ブラック家は日に日にブラックになってるってわけね」

トンクスのジョークはブラック過ぎて誰にも受けなかったようだった。特にフィニアスには全く受けていなかった。すでに先生方とクラリーナ、チャーリーは螺旋階段を降りていた。

「娘。そう言うお前は何者だ？ 見たところ我がスリザリン寮ではないようだが」

「ちよつとトンクス、ダンブルドア先生が下で待ってるの」

「そりやそうよ。私はハツフルパフだもの。陰気なスリザリンなわけではないじゃない。それに私は色んな意味でブラックなブラック家じゃないわ。ママがシリウス・ブラックの従妹なのはほんとだけどね」

「シグナスの孫か。誰の娘だ？」

「それおじいちゃんの名前よね？ 初めて聞いたんだけど。ママの名前はアンドロメダだけど」

エストの忠告を無視して二人は感動の家族の再会をしていた。オスカーは性格こそ違うのに二人とも似たところがあるかもしれないと思った。妙な自分と周りに対する誠実さと、微妙にひねくれた性格が似ている気がしたのだ。

「ねえオスカー、ほんとにダンブルドア先生が待ってるの」

「分かった。おいトンクス、それにブラック教授……」

「マグルと駆け落ちした娘の子か」

「あ、そう言えば、ママがホグワーツで一番人望の無い校長が先祖にいるのよって言ったの思い出したわ。ぜったいこのおじいちゃんじゃない。ねえレアもそう思うわよね？」

「え…… とりあえずお二人ともエスト先輩の話を聞いて下さい。そうじゃないと、話を聞かないところが二人ともそっくりだから……」

やっとトンクスは螺旋階段を降りて校長室から出た。しかし大広間へと向かう間もフィニアス・ナイジェラスはトンクスに引っ付いて肖像画を渡り歩きながらついて来た。

「娘。マグルの血が半分入っているとは言え、そのバッジを貰えるよ

うな働きをしているのだろうか？ ブラックの血は半分だけでも他の
ホグワーツ生より優秀という事だ」

「何言ってるわけ？ こんなバツジ正直あんまり…… あ、嘘ですス
ブラウト先生、嬉しいです。だいたい何がブラックなのよ。今、ブ
ラックなんて魔法界ではお尋ねものの名前じゃないの」

スプラウト先生の顔を伺いながらフィニアスの相手をすると言
うのはオスカーには出来ない芸当だった。

「オスカー、トンクスはおじいさんと再会したの？」

「どうもそうらしい。気も合ってるみたいだ」

「合ってるわいよ。ちよつとレア、どうにかしてくれない？ ほら、ガ
ドガン卿みたいな感じで」

「ガドガン卿をどうにかしたことないです」

以前はスリザリン生にからんでくるだけだとオスカーは思ってい
たのだが、やっぱりフィニアスからすれば自分の子孫の方が重要ら
しかった。外野が何を言おうとフィニアスはずっとトンクスだけに喋
りかけていた。

「いいか。これ以上血を薄くしてはならないぞ。マグルの血が混じれ
ば確実に魔法力は下がり、スクイブが生まれる可能性が上がる。可能
なら出来るだけ優秀な純血と結ばれる必要がある」

「シリウス・ブラックに頼みなさいよ。なんで私がそんな心配しない
といけないのよ」

「いい感じですね。トンクスが誰かに困らされているのを見るって。
みんな私のことをこんな感じで見ているんでしょう？」

「まあそんな感じだな」

廊下を渡ろうと仕掛け階段を上ろうとフィニアス・ナイジェラスは
ずつとついて来る。オスカーもちよつとおかしくて笑ってしまいそ
うだった。フィニアスは生きていた頃でも、こんなに真剣に生徒に話
しかけたことがあるのか疑問な性格なのだ。

「シグナスの孫。よく聞け、私の直系の一人はアズカバンで、もう一人
の弟は前の戦争で死んだ。お前の叔母の一人はアズカバンで、母親は

マグルと結婚して一族から絶縁、もう一人の叔母はきちんとした一族と結婚して出ていった。子供は男子が一人だけだ」

「そうみたいね。それで私のひいひいじいさまはみんなの前でそれを公表してくれたってわけね」

「ねえオスカー聞いた？ じいさまだつて」

「トンクスがあんな風に喋ってるのを見ると面白いね」

エストとチャーリーにはトンクスのじいさま呼びが受けている様だった。たしかにオスカーも自分の一族の事をこんな風に友達の前で公表されるのはごめんだつた。

「いいか。お前は私の一族の中で他の著名な一族の名を継ぐ必要性も無く、もうすぐ婚姻が可能な年齢になるわけだ」

「いやそんなこと言われても継がないわよ。だからアズカバンの二人にふくろうで後継ぎが必要って言えはいじやないの」

「昔から時々純血の一族でもマグルの血を入れる際もあった。マルフォイなどはそれを上手く隠してやっていた。お前も次はできるだけ純血で、狼人間や血に関連する呪いを持たない、優秀な魔法使いと婚姻しなければならぬ」

「だから知らないって言ってるじゃない!! 自分の子孫の面倒は子孫に見させなさいよ!!」

そう言うトンクスはうんざりとはばかりにダッシュで大広間に戻り始めた。フィニアスはそれについていこうとして、あわてて他の肖像に入り、新学期をワインで祝っていた修道士たちのテーブルを跳ね飛ばしながら追いかけていった。修道士たちからは抗議の声が上がつっていたが、珍しく必死な元校長には聞こえていなさそうだった。「こんな面白いのを見逃す手はありませんよ。ちよつと価値観が古すぎて理解出来ないですけど、あの校長は悪気があつて言ってるわけじゃなさそうですし」

「そうだよ。多分、嫌がらせで喋ってるわけじゃなくて、ミュリエルおばさんみたいな感じなんだよね。これからはトンクスを静かにするときは、あのおじいさんを呼ばないと」

「ちよつとボクも続きを見たい……」

三人はいつもとは違って、本人は善意で言っているだろうフィニアスに困らされているトックスが面白かったのか追いかけてしまった。一方でエストはオスカーの横で不思議で複雑な顔をしていた。

「ねえ、オスカーも血が繋がってるのって重要だと思う?」

「さっきのブラック教授みたいにか?」

「そう。血が繋がっているとやっぱり特別なのかな?」

ホグワーツに入ってから一番見ているはずのエストの顔なのに、オスカーの知っているエストの顔では無かった。悲しんでも、喜んでもいない様にオスカーには見えた。

「特別なんじゃないか? 血が繋がってるかどうかって」

「じゃあ、オスカーは全然知らないけど血が繋がってる人と、いつも一緒にいるけど血が繋がってない人がいたら、どっちの方が大事だと思う?」

「流石に後者かもな。でも、前者が自分は知らなかったけど、本当は自分のお母さんとか子供だったなら言い切れないだろうけど」

「そうだよね……」

やっぱり不思議な顔をしているとオスカーは思った。それにどうしてエストがそんな話を気にするのかオスカーには分からなかった。エストは疑い様がないほど純血なのだ。それこそ、さっき話に上がったブラックと同じくらい純血のはずだったし、何よりエスト自身の魔法力がそれを如実に示していた。魔法界で強力な魔法力を示すというのは、それだけで純血の証明に近かった。もちろん、ダンブルドア先生やトム・リドルのような例外もいるかもしれないが。

「オスカー、エストレヤ。もう君たちの友人は大広間に入っておるよ。うじゃ。君たちは監督生一年目じゃから一年生の誘導をしてもらわねばならぬ」

「はい。ダンブルドア先生」

「それとここで少し二人の時間を貰ってもいいかの?」

「私たちは大丈夫ですけど…… ダンブルドア先生の時間は大丈夫ですか?」

すでにみんなと先生方は大広間に入っている様だったが、ダンブルドア先生だけは広間で二人を待つてくれているようだった。オスカーはダンブルドア先生が話があると言うのが気になった。ダンブルドア先生が直接話すということは、オスカーや生徒にとってかなりの意味がある。オスカーはこの四年間でそれを身に染みて知っていた。

「じゃから手短かにじゃな。ホグワーツでわしは幾人も生徒を見てきた。そして時々、驚くほど目立つ生徒の集団がおる。目立つ理由は様々じゃが、大抵の場合、その集団は卒業してからも視線を集め続ける」

オスカーは思わずエストがホグワーツ特急で喋っていたことを、もうダンブルドア先生が知っているのではないかと思った。しかし、いくらダンブルドア先生とはいえみんなを開心術で見ようとすることは思えなかったし、仮にしたとしてもエストやクラーナや自分の前で堂々とチャーリーやトンクスに対して、そんなことをするとも思えなかった。

「今も名前を聞くような集団の原型が、すでにホグワーツで出来上がっていたことが何度もある。良い名前、悪い名前どちらもじゃ。君たちが知っているような歴史やピンズ先生が語る魔法史の数ページを埋めた集団も多くおる」

「ダンブルドア先生、それはえ…… 私達が例のあの人と死喰い人みたいになるって言うてるの？」

「エストレヤ、例のあの人ではなくヴォルデモートじゃ」

さっきの顔に比べればエストの顔は分かり易かった。エストは明確に怒っていた。対照的にダンブルドア先生の方はにこやかで涼しい顔だった。だというのに二人の青と紅い眼からは同じくらいのエネルギーが出ているとオスカーには感じられた。

「じゃあ。ヴォルデモートでもいいけど、ダンブルドア先生は私やオスカー、チャーリー、クラーナ、トンクス、レアの事をそういう風に思ってるの？」

「そうは言うておらぬ。じゃが、事実トム・リドルはホグワーツ始まって以来の秀才じゃったし……」

「ダンブルドア先生だってホグワーツ始まって以来の天才だったはずでしょ？」

「嬉しいことを言うてくれる。エストレヤが言うてくれればなおさらじゃ。しかし、もう少し話の続きをさせておくれ。わしが見てきた中でトム・リドルは間違いなく随一の学生じゃった。他の先生方もそう思っておった。トム・リドルがその取り巻きに与える影響力も含めてじゃ」

やっぱりまだエストは怒っている様に見えた。死喰い人やヴォルデモートと同列に扱われたことに怒っているのか、それとも前からダンブルドア先生に感じるころがあつて怒っているのかはオスカーには分からなかった。

「わしはトム・リドルとその取り巻きと同じくらい、君たちの事を評価しておる。そしてトム・リドルと違うところは、君たちが君たちの誰かが危なければ、自分の身を賭すようなことでもするじゃろうと言うところじゃ。トム・リドルとその取り巻きにその様な関係は無かつた」

「だから死喰い人とヴォルデモートより私たちがの方が危ないってダンブルドア先生は言ってるの？」

「エスト、ダンブルドア先生に言いすぎだろ」

「オスカー、おかしいと思わない？ ダンブルドア先生はオスカーが他の人の事を放っておけない性格なのを分かつて、その石のところに連れて行つたんだよ？ 今度はそういう事を私たち同士がするから危ないって言ってるの」

オスカーは思わずエストの眼から目が離せなくなった。目の前のエストが怒っているのは自分やみんなの為なのだ。その相手がダンブルドア先生でもエストには変わりないらしかった。オスカーはこういう時のエストの顔や雰囲気がいっつも可愛らしい印象では無く、どちらかと言えば、綺麗とか美しいとかそういう雰囲気だと思つた。

「エストレヤの言う通りじゃ。トム・リドルは人の不和や恐怖、怯え、憎しみを利用することに長けておった。それも恐ろしいことじゃが、それよりも信頼や忠節、献身に思いやり、月並みじゃが愛と言った誰かを思う心を利用する方が比較にならないほど恐ろしいのじゃ。わしはそれだけは他の人間よりよく知っておる。よく知っておるからと言つて、実践出来ているとは真実薬を飲んでも言わないじゃろう」

もう広間では一年生の組み分けは終わってしまった。ダンブルドア先生の挨拶を待っているだろうというのに、ダンブルドア先生は二人の方を見て言つた。

「わしが君たちホグワーツの学生に教えることが出来るのは、ほんの少しの魔法の知識とさつき言つた事だけじゃ。わしはエストレヤが言つた様に何度も失敗しておる。じゃから次に君たちが失敗しない様にそれを伝えることしか出来ぬ」

やっとエストの方は静かになつたが、果たしてエストが何を考えているのかオスカーには読み取ることが出来なかつた。ダンブルドア先生が言っている事に納得しているのか、それとも感情の色の見えなくなつた紅い眼の奥でさつきと同じ怒りが燻っているのかオスカーには分からなかつた。

「ホグワーツにお帰りと言つるのはこのあと皆と一緒に君たちに言うことになるじゃろう。わしが言えるのはそう…… 期待しているという事じゃ」

「はい。ダンブルドア先生、そろそろ行つた方が……」

「そうじゃの。ではまた一年間の始まりをご馳走で始めようかの」

大広間のドアを開けると広間の視線が三人に集中した。ダンブルドア先生は先生方のテーブルに、オスカーはすっかり静かになつたエストを連れてスリザリン生のテーブルに向かつた。相変わらず、血みどろ男爵の傍は誰も座つていなかった。二人はそこに座つた。

近くに座つていた新入生らしいスリザリン生はオスカーの顔を見ると怯えた顔をした。オスカーは多分屋根が吹っ飛んだコンパトメントにいた新入生だろうと思つた。

「組み分けはもう終わったみたいだな」

オズカーが話しかけてもエストは返さなかった。怒っているか何か考えているかどちらかに違いなかった。ただ、怒っているのなら視線はダンブルドア先生の方を向く気がしたので、オズカーは多分怒っているわけでは無いのだろうと判断した。

「少年、今年はやけに遅かったが何かあったのか？」

「ちよつとホグワーツ特急で色々あつて、ダンブルドア先生の部屋に呼ばれてたけど、そんな心配するようなことは無かつた」

「そうか……」

血みどろ男爵も静かになつてゐるエストに話し辛いらしく、オズカーに話しかけながら横目でエストの方をチラチラ見ていた。

「ねえ。ダンブルドア先生もやっぱり悩むのかな」

「え？ まあ…… そうじゃないか、ダンブルドア先生だつて人間だし」

「さつき言つてたようなことで悩むのかな？ ダンブルドア先生は頭がいいのに」

「頭がいい方が悩むんじゃないか？ 血みどろ男爵？」

「少年、いきなり振られても分からないぞ」

「あ、男爵、今年もよろしくなの」

今気づいたとばかりに男爵にエストは挨拶した。オズカーはあまりエストが何を考えていたのかは分からなかつた。ただ、頭がいいから悩むと答えたのは正しいと思つてゐた。ダンブルドア先生が普通の人なら、オズカーは去年あんなに苦悩にまみれたダンブルドア先生を校長室で見ることが無かつたと思つてゐたのだ。

「それで何の話なのだ」

「頭いい人は悩むのかつて話だよな？ エスト？」

「そうだけど……」

「悩むのではないか？ 私の時代で一番賢明だつた偉大な魔女は誰よりも悩んでゐた。むしろバカの方が悩むことは少ないだろう」

「賢ければ解決策も思いつくんじゃないのか？」

「少年、思いつくのと、行えるかは別の話だ」

血みどろ男爵はそう言つてゐた。確かに血みどろ男爵の姿を見れ

ば思い付くのと実行するのでは大きな差があった。オスカーは血みどろ男爵みたいな行動は出来そうになかった。

男爵が言い終わったあたりで大広間が静かになった。ダンブルドア先生が椅子から立ち上がったからだ。

「今年はわしが遅れて申し訳ない。皆の腹の虫が拡声呪文を使ったかの様に聞こえてくるわけじゃが、少しだけ時間をもらいたい。新入生よ!! ようこそ hogwarts へ!!」そして古株の諸君は久しぶりじゃー大きな拍手が広間中を埋めた。ダンブルドア先生に対してはスリザリン生でも拍手をする。それだけダンブルドア先生が信頼されている証拠だった。

「わしが時間を押しているにも関わらず申し訳ないが、このまま学期の始まりの挨拶をさせておくれ。まず、一年生に連絡じゃが、校庭にある禁じられた森は立ち入り禁止じゃ。箒、めくらまし呪文、透明マント、どれを使っても立ち入り禁止じゃ。次に管理人のフィルチさんから三百九十九回目の連絡じゃが、授業の合間に廊下で魔法を使ってはならぬ。その他こまごまとした規則内容はフィルチさんの事務所に長いリストになって張られておる」

「オスカー、知らない人が二人いるね」
「そうだな」

先生のテーブルには二人知らない人が増えていた。ダンブルドア先生の話を聞きながら退屈そうに義足を杖で叩いて調子確かめているケトルバーン先生の横に二人座っている。

「そして、今年は闇の魔術に対する防衛術にお二人の先生を迎えることになった」

生徒達の間にごわめきが広がった。一つの教科に二人の先生と言うのは hogwarts ではほとんど見られないことだったからだ。魔法生物飼育学ではハグリッドがケトルバーン先生の仕事を手伝っていたので、似ているかもしれないが、他の授業ではほとんど見られなかった。

「あれかな? 一人だと呪いとかで辞めちゃうから、二人に増やせば分散されて辞めないとか?」

「そんなに単純なのか？　というかほんとに呪いなんてかかっているのか？」

「ダーク・クレスウィル先生じゃ。魔法省ではゴブリン連絡室に勤務しておられる。ホグワーツでは隔週で闇の魔術に対する防衛術の理論を担当していただく」

グレーの髪に白い肌の賢そうな男が座りながら大広間のみんなに会釈した。多分、スネイプ先生より若いとオスカーは思った後で、クラーナから名前を聞いたことがあると思いついた。たしか、クラーナの姉や病院で会ったドーリッツシュと同級生だと彼女が言っていたはずなのだ。

「隔週？　理論と実技で先生を分けるってことなのかな？　それに若い先生だね」

「そうなんだろうな……」

「そしてもう一人、こちらも魔法省、魔法不適性使用取締局からドロレス・アンブリッジ先生じゃ。ホグワーツでは闇の魔術に対する防衛術の実技を隔週で担当していただくことになる」

かなりずんぐりした中年の女が椅子から立ち上がった。スプラウト先生やモリー・ウィーズリーはまだ健康的な太り方だったと彼女を見てオスカーは思った。次にトクスのショッキングピンクは目には痛い、まだ自分は好感を持っていたのだとアンブリッジを見てオスカーは思った。それくらい、何か不健康な太り方をして、センスの無いピンク色の服を着ている先生だとオスカーは感じたのだ。

「アンブリッジ先生から少しスピーチの時間を頂きたいと事前に連絡をもらっておる。ではアンブリッジ先生」

「校長先生、わたくしのような新任に歓迎のお言葉ありがとうございます。クレスウィルともども感謝しております」

「もっとなんか低い声かと思ったの。ほら、ガマガエルみたいなの」

オスカーは思わず吹き出しそうになった。周りの何人かの新入生も同じ様だった。確かにアンブリッジの外見から想像出来る声とい

うより、どちらかと言えば着ているピンクのひらひらした服から声が出ているような、まるで小さな女の子のような声なのだ。クラリーナの外見でこの声色ならみんな納得しただろう。

「それにホグワーツに戻って来られたことに感激していますわ!! 皆さんの新学期にかける期待が浮かんでいる嬉しそうな顔!! すぐにお友達になれますわ!! もちろん、わたくしはクレスウィルと交代で来ますから、クレスウィルの週は少し寂しくなるかもしれませんが」

大広間の人間が嬉しそうかどうかは微妙なところだった。もし期待が浮かんでいるとしたら、それは早くディナーを食べたいと言う期待だったろう。

「あの人もホグワーツなんだね? どの寮だったのかな?」

「なんと無くスリザリンっぽいな」

「男爵は知ってる?」

「我が寮の出身だ。学生の頃はたしかほとんど一人でいてあまり印象には残っていない」

印象に残っていない? オスカーは少なくとも今の外見と性格なら、クラリーナやトンクスと同じくらい目立つのではないかと思った。それに魔法省でちゃんと働いているという事は、魔法や成績の方もかなりのモノだったはずなのだ。

少しざわめいていた広間に向かって、エヘン、エヘンと拡声呪文で大きくなってきているだろう咳払いをアンブリッジは響かせた。

「それでは、去年のスクリムジョールに引き続き、魔法省から来ているという事で、少し皆様のお時間をお借りして、話させていただきます」
今度は落ち着いた声だった。ほとんど感情が見られないような声だ。オスカーは何となく、エストのいつもの声と授業中や目上の人に対する声の違いを思い出した。オスカーは自分が感じた通りなら、アンブリッジはスリザリンらしく自分の内側は見せたがらない人間なのではないかと思った。

「若い魔法族の教育は非常に重要である。我々は魔法省にしろ、ホグワーツにしろ、魔法界全体でそう考えてきました。みなさんが持っている才能を、慎重に教え導き、磨かねばならない。そして、古くから

伝わる技を皆さんに教え伝えねばなりません。しかし、魔法界は大きな戦乱の中でいくつにも別れてしまいました。我々はもう一度結束し、皆さんに我々が、我々の祖先が積み重ね大成した魔法の技と知識の全てを伝えねばなりません。そして、それは教師と言う限られた天職を持つ者によってなされるのです」

アンブリッジは一息ついて、教師陣に挨拶した。ダンブルドア先生とクレスウェルはそれに返したが、他の先生方はそっぽを向いたまま、マクゴナガルに至っては眉をさらに固く結んだ。またアンブリッジはエヘン、エヘンと咳払いをした。

「ホグワーツの歴代校長、魔法省の指導要領担当部署、ふくろう試験、イモリ試験委員会、ホグワーツの教職員は常に変化する魔法界に合一するよう、新規の取り組みを模索し、導入してきました。失敗もあれば成功もありました。しかし、戦乱の後の魔法界には、さらに我々の団結がより重要性を持って求められます。魔法界の再統合に合わせて、教育システムはその現身の様に統合が求められるのです…… 伝統と革新……」

オスカーはさっきまでのエストとダンブルドア先生とのやり取りで疲れていたのもあって、アンブリッジの演説から注意が逸れていくのを自分で感じていた。

他のテーブルを見れば、トンクスはさっそく何かの悪戯を仕掛けているようで、変身で新生生のふりをして新生生に話しかけていた。新生生の姿なのに監督生のバッジを着けているのは気にならないのかとオスカーは思った。

レイブンクローのテーブルではクスクス笑い合っている女の子たちの真ん中でレアだけが真面目にアンブリッジの話聞いていた。グリフィンドールではチャリーがさっそく爆睡していて、クラーナは比較的真面目に話を聞いていそうだったが、近くで早速エストと双子の作った伸び耳とおとり爆弾の実演販売をジェイがしていて、そっちに気を取られている様だった。

隣のエストはレアと同じ様に真面目に話を聞いているように見えた。オスカーにはそれが意外だった。エストは中身の無い話は嫌い

なのだ。虚飾にまみれた言葉や、無駄な表現を教科書や文章では嫌っていたし、そういう教科書からシンプルで強力な原理だけを抽出することこそ彼女の強みなのだ。オスカーは変身術や魔法薬の授業、そして最も顕著にその特性が表れた占いの学の授業でその強みを十分に知っていた。だから意外だった。

「我々はもう一度、魔法界における魔法族の団結を確固たるものとして築き上げねばなりません。獣と人との境界を明確にし、二度と魔法族同士の戦乱が起こらぬように、我々の過ちを認め後世に伝えねばなりません。そのために魔法族内ではあらゆる垣根を乗り越えねばなりません。我々は魔法界という一つの船に乗っているのですから。いざ、前進しようではありませんか。団結し、垣根のない新しい時代へ」

「アンブリッジ先生、見事じゃ、まさに啓発的と言うほかない」

ダンブルドア先生とクレスウェル先生の拍手に合わせて、生徒たちと先生陣はまばらに拍手をした。オスカーは今の演説の中身はこれっぽちも理解出来ないと思った。難解な事で有名な変身術の難しい本よりよっぽど理解出来なかった。どう考えても、綺麗事を言っているだけに聞こえたからだ。

「それではみなを待たせてしまったのう。そうじゃ、遠慮はいらぬ。掻っ込むのじゃ」

アンブリッジの長い演説ではなく、こちらの合図こそ生徒達が待ち侘びていたものに違いなかった。ダンブルドア先生の号令と同時に、皿に七面鳥やオードブルが出揃い、ゴブレットはカボチャジュースで満たされた。生徒達のにぎやかな声が聞こえる。オスカーも食べようとして、隣のエストがまだフォークやスプーンに手を付けていない事に気付いた。

「食べないのか？ ス克蘭ブルエッグもあるぞ？」

「食べるけど……　なんかモヤモヤするよね？　さっきのアンブリッジ先生の話？」

そう言いながらエストは自分の皿に山盛りのスクランブルエッグを載せた。元から載っていたチップスはスクランブルエッグで見え

なくなった。オスカーはどうしてエストがスクランブルエッグだけをこんなに食べるのか謎だった。ドラゴンの卵サイズで作っても、エストはスクランブルエッグなら食べきるのではないだろうかとおスカーは考えていた。

「そんなに謎なのか？ 教科書とかの最初に書いている文章とかと一緒にだろ。なんかカッコイイだけの言葉っていうか」

「ほんと？ なんていうか、ダンブルドア先生の領域を魔法省が取り込むとか、そういう感じの宣言じゃないのかな…… ダンブルドア先生は賢いからそんなこと出来ないと思うけど。それにちよつと魔法族、魔法族って何度も言ってたのが気になるよね。獣と人とか言ってたし」

人と獣、オスカーはノクターン横丁の狼人間を思い出した。それにさっきの演説は何度も魔法族と出てきた気もした。ただ、オスカーはそんなに重要だと思えなかった。あのアンブリッジという先生が何を言ってもダンブルドア先生の上に行くとは思えないのだ。ファツジ大臣でも出来ないのだ。それより、オスカーはエストがスリザリンス寮で蛇だからスクランブルエッグを沢山食べるのではないかというどうでもいい連想が頭に浮かんでいた。

「そんなに偉い人なのか？ アンブリッジ先生って…… こういう魔法省の話はクラーナが必要だな」

「魔法省の話…… もしかして、魔法不適性使用取締局から来たって、あの先生、局長さんかも」

ならば結構な大物がホグワーツにやって来たという事なのか。そしてオスカーの頭の中はクラーナ、魔法省、アンブリッジという言葉でやっと繋がった。

「あの人のお父さんに俺会ったことあるな」

「アンブリッジ先生のお父さんに？ オスカーが？ どこで？」

「どこって…… 聖マンゴの喫茶室でなんか蜂蜜酒をおごって貰ったと思うんだけど」

「オスカー、聖マンゴに行ったの？ 龍痘？」

「いや、死ぬだろ。ドージ先生じゃないんだから」

オスカーはお腹が一杯になって少し眠くなり、エストとぼんやりしながら喋り、周りを見回した。いつの間にか血みどろ男爵はいなくなっていて、スリザリンのテーブルから少し離れた場所でレイブンクローのテーブルを見ている様だった。

「いつ行ったの？」

「いつって……」

オスカーはその時になってやっとエストがオスカーの方を真つすぐ見ている事に気付いた。多分、今日で一番エストの視線を集めた自信がオスカーにはあった。

「いつ行ったの？」

「いや……」

「絶対クラーナとでしよ？」

「いや、まあそうだけど」

「夏休みでしょ？」

「そうだよ」

「あれでしょ。自分でクラーナって言って、アンブリッジ先生の名前と連想して思い出したんでしよ？」

どうもやっぱり閉心術の有用性は身近な人にはないのではないかとオスカーは思った。このままだとドラゴンの卵からトンクスのピンまで全部なし崩しにバレかねないのだ。

「エストの言う通りだよ」

「ふーん。オスカーは秘密が一杯あるんだね」

「無い。全然無い」

「ほんとに？」

グイツとエストが隣に詰めてきて、オスカーは思わずびくつとなりそうになった。ずっと一緒にいたはずなのに、エストの顔や体は随分変わったのかもしれない。七面鳥を食べた後のせいかな、唇がろうそくの光をよく反射していつもより赤く見えた。

「やっぱりなんかオスカーおかしいよね？」

「何が」

「なんか違うかも、ほら、キーパーは自分がキャッチできる範囲が分か

るけど、オスカーは何か決まって無さそう。前はどれだけ近付いても誰でもキヤッチできそうだったのに」

「なんだそれ」

キヤッチされそうなのはオスカーの方だった。さつきスクランブルエッグをエストが変身したバジリスク大の蛇が食べている図を思い浮かべていたが、明らかに今スクランブルエッグになりそうなのはオスカーの方だった。

「キヤッチってなんだ」

「ほら去年の惚れ薬の時に抱き着かれても全然どうもしてなかったでしょ?」

「まあトックスだし、正気でも無かっただろ」

正気で無いのはオスカーの方だった。二年生や三年生のころにこれくらいの距離感ならどうもしないはずだったのに、もう今は色んな事がオスカーは気になるのだった。これまでのオスカーなら、さつきのアンブリッジ先生の話を実剣に聞いていたかもしれないのに、オスカーが気になるのはエストとの距離や、唇の色や、エストの紅い眼が自分のどこを見ているかなのだ。そしてどう見られているかの意味も、三年生の時に喧嘩した時とは随分意味が違っているとオスカーは思った。

「うーん。でもね、モリー叔母さんとアーサー叔父さんもお互いに一杯秘密があるんだよ?」

「なんだ秘密って」

「叔父さんは納屋と鳥小屋に一杯色んなモノ隠してるの。叔母さんにバレない様に」

「なんかちよつと見せて貰ったことあるな。グルグル回して声を届ける機械なんだとか言っつて、ずっと数字の着いたウィジャ盤みたいなのを回してた」

オスカーはなんとかウィズリーおじさんの記憶を捻りだした。ダイアゴン横丁でのクラーナとの距離が長く感じるくらいやたらとエストはオスカーに近付いてきていた。

「そうでしょ? 他にも一杯隠してるの。魔法省で押収した変なのが

一杯なんだよ？ それにフレッドとジョージはもしかすると一番アーサー叔父さんに似てるかもしれないの。あの二人も一杯隠れ穴に色んなモノを隠してるから」

「ウィーズリーおじさんやフレッドとジョージならわかるけど、チャーリーのお母さんにそんな隠し事とかあるのか？」

ウィーズリー夫妻に隠し事があると言うのがオスカーには結構意外だった。夫の方は趣味みたいなモノなので仕方無いかもいれなかったが、いつも家族の事ばかり考えていそうなモリーに隠し事などあるのかと考えた。オスカーはもしほとんど距離の無いエストや色んなテーブルにいる誰かの一人と一緒に住むことになったら、隠し事など出来そうに無いと思うのだ。

「ほら、オスカーがトunksから冗談で貰った本があるでしょ？」

「冗談？」

オスカーは少しの間エストが何を言っているのか分からなかった。ちよつとの間が開いた後で、例の書き込んだらトunksの持っている羊皮紙に文字が届く本だと分かった。最初は冗談で貰ったと思っていたが、本当はかなり真面目なプレゼントだったので、オスカーは冗談と言われてもピンとこなかったのだ。

「ああ、あのロックハートって人の本か？」

「もしかして、あの本ってただの本じゃなかったの？　なんか読んだら読んだ人がロックハートさんと同じ歯を出した笑みしかできなくなる呪いがかかってたとか？」

「いや、ただの本だった」

「オスカー、ほんと？　オスカーがただのつて言う時はなんか怪しいけど……」

もう、本当にどれくらいエストや周りのみんなが鋭いのかオスカーには分からなかった。オスカーはドラゴンの卵もいったいどれくらい持つのか本当に自信が無くなってきた。

「さっきのスピーチみたいに中身の無い本だと思うけどな。女性はこういうときどう考えてるみたいなのが書いてあって、周りのみんなには当てはまりそうに無かったし」

「そうなんだ…… でね、モリー叔母さんはそのロックハートさんのファンなの。前に何回かフローリツシュ・アンド・ブロッツ書店でサインまで貰いに行ってるの。アーサー叔父さんには秘密なんだって」
「あの人、顔はいいよな。爽やかで。本はお勧め出来ないと思うけど」
オスカーからすればエストにも今すぐフローリツシュ・アンド・ブロッツ書店にサインを貰いに行つて欲しい気もした。しかし、オスカーは分かっていた。自分はエストとこんな風に喋っていたいのだ。なのに、近付きすぎると耐え難くなると言うのはオスカーには意味が分からなかった。自分の事なのに。

「あの、先輩。久しぶりです」

「ジェマ、元気にしてたの？」

「私は元気なんです。それより、もう晩御飯終わったみたいなので、新生が手持ち無沙汰になってると思つて」

「ジェマの言う通りだな」

いつの間にかダンブルドア先生が号令をしたらしく、生徒たちは列を成して大広間から出つつあった。あのトンクスでさえ、ハツフルパフの新生をもう一人の監督生と一緒に引率しているのだ。オスカーはスプラウト先生が号泣しているのではないかと思つて、思わず何回か教職員のテーブルを見てしまったが、何かマクゴナガル先生、フリットウィック先生とアンブリッジ先生の方を見て喋っているように、オスカーの期待した光景は無かった。

「行かないと不味いかも。ジェマありがとうね？」

「今年も何か分らないところがあつたら聞かせて下さい」

「談話室にいる時に捕まえてくれればいい。エスト、行こう」

オスカーは新生を見て、ホグワーツに来た時の自分はこんなに小さかったのだろうかと思つた。また四年しか経っていないはずなのに、自分や自分の周りのみんなより、新生は随分小さくて幼く見えた。考える時にクラーナは頭から除外した。エストが新生に喋る前にオスカーの耳元で囁いた。オスカーはやっぱ耳元でエストの息を感じるのも、髪からオレンジのような香りがするのもダメだった。

「ね？ 新生はホグワーツが楽しみで楽しみで仕方なかったはずなの。オスカーもそうだったでしょ？」

「俺は周りのみんなとはそこは少し違ったかもな」

「そうなの？ でも、ほら期待は裏切っちゃダメかも。寮の紹介とかしながら行けばいいかなって」

「分かった。そこはエストが……」

「オスカーがやって。私が先に行った方がいいでしょ？ ピーブズとか鎧さんとかはオスカーが先頭より、私が先の方が通してくれるから」

てつきりエストがそういう事はやってくれると思っていたので、オスカーは困ってしまった。エストはロンやパーシーの相手をウィーズリー家でしてきただけあって、年下とのコミュニケーションは上手かったのだ。オスカーと言えば、レアとジエマの相手くらいしかしたことが無かった。

エストはスリザリンのテーブルのちよつと先まで行って、オスカーに新生に喋ってと口パクしていた。オスカーは諦めて新生の方を向いた。

「ホグワーツとスリザリンへようこそ。俺は監督生のオスカー・ドロホフ。あつちでこつちを見る俺がさつき喋ってた女の子も、同じ監督生のエストレヤ・プルウェット。ああ、監督生って何か分からないか。五年生以上の各寮に男女二人ずついて、教師の手伝いをしたりしてる。一応、自分の寮の学生からは点数を引いたりも出来るけど、まあそんなことはほとんど無いから教師に相談し辛いことなんかを言ってくれればいい」

新生みんなの視線がオスカーに集まっていた。色んな目をしてるとオスカーは思った。食べた後で眠そうな目、期待で一杯の目、少し怯えている目、何か憧れのような目、オスカーは自分が最初に来た時はここにあるどの目とも違った目をしていた自信があった。

「じゃあ、もう寮に行こう。みんな立ってくれるか？」

素直にみんな立ってくれてオスカーは安心した。これで立たなかったら浮遊呪文で浮かすくらいしかオスカーにはやりようが無

かったからだ。

「エストが先導するから、それに俺たちはついていく。ホグワーツは廊下や階段が動いたり、隠し道が沢山あったりする。だから迷子にならない様に俺は最後尾を歩くから、みんなエストについて行ってくれ」

ぞろぞろとエストに先導された小柄なローブの集団は動き始めた。地下に向かうのはハツフルパフとスリザリンだけなので、広間から出た時点で結構城の中は空いていた。

しばらく進んで他の寮生が見えなくなると、エストは魔法の光をいくつも出して集団の足元を照らし、オスカーと一年生たちの方を向いて言った。

「足元気を付けてね？ 階段だと、いきなり足場が抜けたりするときもあるの。あと、オスカーお兄さんがみんな寮に着くまで退屈だろうからスリザリン寮のお話をしてくれるって」

エストがそう言えば新入生たちはオスカーの方を振り向いた。

「分かった。なんか喋るから前を向いて歩いてくれ。えーつと、じゃあ談話室からだな。今から行く場所だけど、地下牢の奥の隠された扉の中にあつて、合言葉を言えば入れる。合言葉は二週間に一回変わって、変わるときは談話室の掲示板に書いてあるからチェックしてくれ」

またエストが振り向いて、『まだまだなの』とでも言いたげな顔をしていた。オスカーは監督生を務める自信が段々無くなってきた。

「スリザリンの色はもうみんなテーブルで分かつてるよな？ エメラルドグリーンに銀色、談話室も寮の中もネクタイもそうだから、みんな一か月もすれば自分の色だつて思うようになる。それとスリザリンの象徴は蛇だ。色んな意味があるけど、基本的には動物界で一番賢い生き物だつて言われている。ああ、それとこの階段だけど、いつもは逆回りなんだ。エストがいない時は反対周りに回るからみんな気を付けてくれ」

仕掛け階段を踏み外しそうになる新入生をワンドレス・マジックで拾い上げながら、オスカーは喋り続けるというのは結構しんどいと

思った。みんなが見ていない隙について、オズカーは無言で拡声呪文を喉にかけた。

「あつちで騒いでるのはピーブズだ。あの上の方でレイブンクロー生に糞爆弾を投げつけてる奴だけど、あいつが言うことを聞くのはダンブルドア先生と血みどろ男爵とエストだけだから気を付けてくれ」

そう言うのと新生生の何人かが笑った。さっきの階段に引き続いて冗談だと思ったのだろう。オズカーは残念ながら冗談では無いと言うのはやめた。なぜならエストの視線を強く感じた気がしたからだ。

「血みどろ男爵って言うのはさっきの夕食の最初の方に、俺とエストの傍に座ってたゴーストだ。ゴーストが座れるかどうかは微妙だけどな。スリザリンの寮憑きのゴーストで、あんな見た目してるけど結構いい人だ。たまに余計なことをポロつというけど。何で血みどろになったのかとか、レイブンクローの灰色のレイとの関係とかは聞かない方がいい。まあ、みんな離れて座ってたし、そんな話を聞く度胸はあんまりないよな。俺も初めは聞けなかったからな」

地下牢の階に降りる階段を下りながら、オズカーは懐かしい涼しさを感じていた。地下牢は夏でも涼しかったし、オズカーはそれを懐かしいと思えるくらいには、スリザリン寮を家だと思っていた。

「そうだな、スリザリンに入る人は家が代々魔法使いの家系の人が多いだろうから、色々スリザリンについて聞いてると思うけど、中身は結構違ったりする。純血じゃ無かったり、おじいさんがマリーン勲章を持っていないなら口を利かないとか、闇の魔術をみんな極めてるとかな。確かに俺もエストも純血だけど、半純血の人も結構いる。だいたいダンブルドア先生は半純血だからな。あとおじいさんがマリーン勲章を持ってなくても大丈夫だ。闇の魔術は……俺もそんなには使った事が無いし、ほとんどのスリザリン生も使った事が無い」

地下牢のある階を進みながら、オズカーは流石に喋ることが無くなってきたと思い始めた。そんなに自分の寮について喋ることをオズカーは持ち合わせていなかった。去年、エストと一緒にジエマに喋っていたことをなんとか思い出そうとしていた。

「あとはスリザリン生の特徴とかだよな。創設者のスリザリンが寮生

に求めたのは、ダンブルドア先生いわく四つある。機智に富む才智、色んな事にこれまでの経験を活かして対応できること。断固たる決意、決めたことは絶対にやりきること。やや規則を無視する傾向、何かをやるためにはちよつとくらいルールを無視すること。それに周りを守る心らしい。最後のはまあ、スリザリンにいたら分かんと思う。俺たち監督生も寮生の手伝いをするけど、他の寮とは違って、うちの寮はみんな寮のメンバーを助けるからな」

「誰がかわいいちびつこちゃんたちを連れて歩いているのかと思った。オスカー、あなただったのね」

「マートル？　なんでこんなところに？」

あと少しで談話室というところで、上からマートルが現れた。なにやらオスカーの胸にある監督生のバッジを見てマートルはニヤニヤ笑った。

「あら？　私の本名を言ってくれないのね」

「マートル、監督生になったから談話室にみんなを連れて行かないと」

「私、前学期会った後、あなたが名前を聞いてくれたから、いつ私がいるところに来てくれるかと思って期待してたわ。名前を聞いてくれたなんていつ以来か思い出せなかったもの」

新入生たちは困惑してオスカーの方を見ていた。エストが前の方からマートルと喋っているオスカーを見てやってるのが分かった。

「でも、監督生になったならいつでも私から会いに行けるわ。監督生のバスルーム……」

「マートル、ゴーストでも監督生のバスルームは立ち入り禁止でしょ。それにマートルは女の子なの」

「あら？　スリザリンのお姫様のお出まし？　他のゴーストたちはあなたの事が好きだって言うけど、私は違う」

「私もマートルのことあんまり好きじゃないかも」

マートルはどうも明確にエストの事が嫌いだった。さっきまでニコニコ顔だったというのに、トンクスの悪戯を片付けるファイルチのような顔に変わっていたのだ。オスカーは城のゴーストならだいたいエストの言う事を聞いてくれるので、珍しいケースだと思った。

「あんたの雰囲気は私の時の監督生に似てるわ。一杯自分より下の奴を引き連れてる。先生はあんたみたいなやつが大好きだし、男もあんたみたいなやつが大好きだけど、私はあんたみたいなやつは大嫌い。自分に自信があつて、自分が大好きなもの」

「エストはマートルみたいなトイレでジメジメしてる女の子は嫌いかも」

「そういう誰にでも好かれて当然って態度が嫌い。今年戻って来た、あのスリザリンの可哀そうな女の子の方がよっぽど好きだったわ。いつもトイレで泣いていたもの。自分は好かれない、認めて貰えないってね。監督生にもしてもらえなかったって」

これはちよつと不味いとオスカーは思った。エストがグツグツと煮込まれた大鍋になりかねなかったからだ。いくらゴーストのマートルとは言え、エストが怒ればいつものトイレに二度と入れなくするくらいの事は出来そうなのだ。

「トイレにいると色んな女の子の声を聞けるのよ。あの男の子には絶対振り返つて貰えないって。あんたのオスカー……」

「マートル、今は監督生のお仕事中のの」

エストが杖を一振りすると、マートルはまるで音のしない凄まじい暴風が吹いたかのように吹き飛んでいつて地下牢の壁に吸い込まれていく、吸い込まれる前にマートルはかなり間抜けな声をあげていて、新入生からは歓声が上がった。オスカーはどうも雲行きが怪しい気がした。今回は明らかにマートルの方が喧嘩を売ってきた上、生身では無かったのでエストの対応には分があつたと思つていた。ゴーストが嫌がらせをしようと思えば、談話室でもベッドルームでもどこまでもついて行くことが出来るのだ。しかし、もしオスカーの目の前で生身の女の子とエストが喧嘩をしたらどうすればいいのか、オスカーには分からなかった。

「じゃあ、みんなも私とオスカーと談話室に入ろう？ あ、さつきオスカーから紹介があつたと思うけど…… あつたよね？ オスカー？」

「やったよ」

「じゃあ、改めまして、エストレヤ・プルウエットです。五年生で監督

生だから、なんかあったら他の監督生か私やオスカーに言ってくれればいいよ。さっきのゴーストをどうやって吹っ飛ばせるかも、教えて欲しかったら教えちゃうから」

さっきの実演は結構効果があったらしく、新生生たちはエストの方をオスカーを見る目より憧れの目で見ている気がした。ここで新生の手がなぜ上がった。

「どうしたの?」

「あの…… ホグワーツ特急の屋根が壊れた時みたいなことはよくありますか?」

新生生の声は上擦っていて、かなり緊張している様だった。よく見るとその新生生はさっきの大広間でオスカーから目線を外した新生生で、どうもホグワーツ特急で屋根が吹っ飛んだコンパートメントにいた新生生の一人のようだった。

「あんな命が危なくなるようなことはホグワーツでもほとんど無いの。ね? オスカー」

「うーん…… 微妙なところだな」

オスカーはここで嘘つきになる意味も無かったので、正直に言った。これまでの四年間を考えればあのレベルでの危険なら何度もあった気がしたからだ。

「オスカー!! そんなのオスカーだけでしょ。みんな、オスカーはすぐ危ないところに行くから、参考にしちゃだめな…… ダメだよ。そういう事しようとしてたら、すぐ私に言っただろ?」

「エスト、とりあえず談話室に入ろう」

「そうだね。じゃあ合言葉を言うからみんな覚えといてね?」

また、スリザリンの談話室に入る。四年間同じメンバーのベッドルームに戻る。新生生の時と同じ様にエストと一緒にオスカーは戻ってきた。最初とは違って、連れられてでは無く、今度は誰かを連れてきたのだ。

「マーリン」

エストに続いて新生生が談話室に入り、オスカーも最後の一人が入ったのを確認してから入った。緑のランプに照らされた黒い湖が

ガラス越しに見える。ガラスの傍に二つの肘掛椅子が見える。オスカーはこの肘掛椅子を見ると本当にホグワーツに戻って来たと思うのだ。あそこはホグワーツで一番オスカーが安心する場所だった。

「ね？　合言葉になってるみたいなのに、マーリンもスリザリン出身なんだよ？　ちよつとワクワクしてくるでしょ？　ここは伝説の魔法使いが私やみんなみたいに勉強して、遊んで、友達や寮の仲間と一緒に暮らしてた場所なの。それじゃあ明日からもう授業が始まるけど、みんな寮のみんなに分からないところは聞いてみてね？　それで、困ってた寮の人がいたら助けてあげてね？　同じ寮の人なら誰でも一緒だよ。じゃあ、おやすみなさい。寝る場所は……　あっちが女子寮であっちが男子寮、男の子は女子寮には行けないよ。あと、トランクがちゃんと届いているかも確認してね。私はオスカーとそこにしばらくいるから、もし何かあったら聞きに来てね」

新生生たちは口々におやすみなさいと言いながら寮へと歩いて行った。もう友達になったのか、数人で喋りながら談話室の備品を指さしたり、オスカーとエストの方を何度か振り返ったりしながら全員寮へと消えて行った。

「最初の夜はオスカーすぐ寝ちゃったよね？」

「寝てたな。あの日は色々あって疲れてた。あんな一杯の人見たこと無かったし、エストとかクラーナみたいな同じ年の子供とほとんど喋ったこと無かったからな」

本当は周りにどう思われているか不安だったし、誰かと仲良くなることが、特に女の子と仲良くなるのが不安だったとはオスカーには言えなかった。

「エス……　私、ここに一人でしばらくいたの。お父さんや叔父さんや叔母さんがずっと喋ってたところに。マーリンとかすごい魔法使いが勉強した場所に来たんだなって。そういうこと考えてたら寝られなくて」

「俺が滅茶苦茶早く起きたのに、ここにいたのはここで寝てたからなのか？」

「それはそうなの。起きたらいつの間にか毛布かけられてたから、屋

敷しもべ妖精さんかな？」

「多分そうだろうな」

エストと喋りながら肘掛椅子に座ると、椅子が随分小さくなったとオスカーは感じた。体は一年生の時とはずっと違うモノになっていた。それはエストもオスカーも一緒だった。体もそうだが、それよりずっと心も変わっているはずだった。それはみんな一緒のはずだった。

だから、オスカーはみんなとの関係も随分変わっていると思った。多分、これからもそれは変わっていくはずだった。

「ねえ。やっぱりあんなに話したら頭が冴えちゃった。もうちよつと喋っててもいいよね？」

「エストに毛布が必要になる前までならな。男子は女子寮には入れないからな」

「じゃあ、オスカーのベッドでいいかも」

「アクシオでエストのベッドごと呼び出してここで寝て貰う」

「何それ。多分、女の子のベッドを呼び出したらホグワーツの伝説になるの」

どれくらいまで前と一緒にいられるのか、そもそも一年前の自分とさえ違う事があるのに、一緒になどいられるのかオスカーには分からなかった。

それでも、オスカーは談話室での時間くらい、変らなくてもいいかもしれないと思っていた。

秘密基地

ホグワーツに戻って一週目の授業が始まった。去年からオスカーも五年生の授業はスケジュールがきつくなると聞いていたが、それは本当だった。

どの教科も授業数が単純に多くなり、宿題を沢山出す上に先生方の力の入れようが違うのだ。それにプラスして一週目の授業にはこれまでに無い異物が存在していた。

「本日の授業を始める前に……」

セブルス・スネイプは授業の開始前にマントを翻して言った。オスカーは思わず低学年の頃のクラーナを思い出して隣を見た。オスカーの努力にも関わらず、チャーリーを隣にできずにエストとクラーナに挟まれてしまったので、すぐにクラーナは視線に気づいた。「オスカーどうしました?」

「何でもない」

オスカーは本当に耳元で喋るのをみんなにやめて貰いたかった。スネイプがじろりとこっちを見たのが分かったが、憂いの篩での一件から、スネイプはレアとオスカーにできるだけ関わるのを避けているようで、今回も無視を決め込んでいた。これが他のスリザリン生にグリフィンドル生が絡んでいるのなら早速減点したに違い無かった。「来る六月、諸君は非常に重要な試験に臨む。ここにいる全員が魔法薬学についてどれほど学んだかが試される。このクラスには何人か愚鈍な者とそうでない者がいる。しかし、我輩の教えを受けている以上、愚鈍な者でもせめてもの我輩への慰めとしてO・W・L試験合格すれすれである、『可』を期待する。さもなければ我輩は諸君らの脳みそが本当に存在するのか、数種の魔法薬を使って調べねばならぬだろう」

チャーリーはもうテーブルに突っ伏して寝かかっていた。もうグリフィンドルはクイディッチの練習を始めたらしかった。五年生になったことで、前の代のキャプテンが卒業して、エストとチャーリーはスリザリンとグリフィンドルのキャプテンになっていた。

「そして、我輩は六年生以降、NEW T課程の魔法薬学の授業を受ける学生に条件を設けている。O・W・L試験で最も優秀な成績を残した者以外には受講を許さぬ。確実にこのクラスの何人かとはお別れになるであろう。喜ばしい限りだが」

クラリーナはちよつと背筋を伸ばした。オスカーも魔法薬学でもちやんとした成績を残せなければ闇祓いや癒者にはなれないことを思い出した。一方でエストは授業が始まってから相変わらず、スネイプの脅しに意味を感じていないのか、自分の教科書に自分しか読めない字やイラストで書き込みをしていた。

「気付いたと思うが、本日は客人が来ている」

「皆さんもスネイプ先生もわたくしの事は空気だと思っていただいてかまいませんわ」

アンブリッジの甘ったるい声が響いた、まるで作っているかのような声だ。オスカーはやっぱり隣のクラリーナがああいう格好でこういう喋り方なら、あの奇妙で違和感しかない恰好や声のアンバランスさが無くなるはずだと確信した。

「では、本日の授業内容を説明する。O・W・L試験に頻出している魔法薬、『安らぎの水薬』。効能は僅かな服用で不安を鎮め、動揺を和らげることだ。この魔法薬の留意点を知っている者は？」

相変わらず、オスカーの両サイドで手がすつと上がった。オスカーも答えは分かっていたが、手はあげるつもりが無かった。四年間もスネイプに無視されているのに、良くクラリーナは上げ続けているとオスカーは思っていた。

「では、ミス・プルウエット」

「安らぎの水薬の効用が強すぎる場合、服用した人間は深い睡眠状態になり、その状態を治療することが出来なかった症例があるため、効用の強度と服用量に注意が必要です」

「よろしい。スリザリンに五点。以上の注意事項から調査には細心の注意が必要だ」

答えた後はまたエストは魔法薬学の教科書に何か書き込みをしていた。オスカーがよく見ると教科書は五年生用のモノでは無く、六年

生以降で使用する本だった。

「成分と調合法は黒板に、材料は薬棚にある。制限時間は一時間半だ。始めたまえ」

スネイプの号令と一緒に学生はみんな自分の席を立って、薬棚に向かったり、大鍋の準備をし始めた。オスカーとクラーナがクラスで一番最初に薬棚を開けたところで、何個かの材料が二人の前を飛びだしていった。エストのテーブルに材料が着地する。相変わらず魔法薬学の教科書に書き込みをしていて、材料の方は余り見ていなかった。二人は爆睡しているチャーリーの分の材料を余計に取りながら、顔を見合わせて少し笑った。

「例の商品づくりですかね？ エストはクイディッチもあるのにご苦労なことです」

「結構本気でやってるみたいだからな」

「まあスネイプも結果を出すなら文句言わないタイプですし、エストとは結構相性いいですよね」

確かにそういう意味ではエストはスネイプと相性がいいかもしれないなかった。授業中の最低限のレベルではエストは周りに合わずし、魔法薬を作成するセンスも飛びぬけていたからだ。スネイプが教科書に無い微妙な改善や、応用的な内容を話すときに最初に理解しているのがエストなのは間違い無いのだ。

「けどアンブリッジ先生は何でいるんですかね？ 何か他のほとんどの授業にも顔を出しているらしいですけど」

「何見てるんだらうな？ 授業の質とかか？」

「それならトレローニーとケトルバーン先生は怪しいところですね」

席に戻るとエストはすでに材料の加工をほとんど終えていて、すでに大鍋に火がかけられてグツグツと煮立ち始めていた。チャーリーは二人が戻る直前にスネイプからビンタを食らって目を覚ました。

「チャーリーおはよう」

「おはよう。オスカー、ああ材料ありがとう。それで何入れればいいんだっけ？ クラーナ？」

「とつとつその月長石を粉々にしてください。ああ、ついでに私とオスカーの分もお願いします」

「わかったよ」

チャーリーが寝ぼけまなこで思いつきりすりこぎ棒を月長石に叩きつけたせいで、破片がエストの方へ飛んでいった。しかし、エストの大鍋を自動でかき混ぜていた棒がそれを跳ね返して、後ろの方でレシピを読みながらうんうん悩んでいたスリザリンのバーナビーと言う同級生の眉間に命中した。バーナビーは音を立てて倒れてしまった。

「何やってるんですか」

「え？ どこ飛んでいったかな？」

「バーナビーに命中した。スネイプ先生が見に行っているな」

スネイプはため息をつきながらバーナビーの方を見に行つて、二度、三度、エネルギーをかけたが倒れたままだった。バーナビーは学年でも屈指のタフな学生のはずなのに、彼が一撃でノックアウトされたとなるとよほど強烈な一撃だったらしい。

「少しの間席をあける。我輩が戻ってくる前に半分以上の工程を終了するように」

バーナビーを杖で浮遊させてスネイプはそのまま出ていった。医務室に連れて行つたのだ。こんなに周りが騒がしいのに、エストは一人でどんだん薬を作っていた。すでにかなり後の方の工程までやっていることがほとんど透明になっている薬でわかる。

「チャーリー、バーナビーに後で謝れよ」

「分かったよ。でも、流石にエストのかき混ぜ棒がビーターのこん棒になるなんてわからなかったんだ」

「エスト、教科書だと三回回すとしばらく回すのをやめるって書いてあるのに、三回混ぜるたびに一回逆回しにしてみましたよね？ なんですか？」

クラーナが自分の工程をやりながらエストに聞いた。エストは大鍋から目を離さないまま答えた。

「なんでって、前にスネイプ先生が作ってた時は逆回しにしてたで

しよ？ あれは多分、一回戻すと薬の中の流れが変わるからなの。止めるよりも戻す方が大鍋の中の流れが滅茶苦茶になって、粉にバイアソンのエキスが当たる確率が上がるでしょ」

「じゃあなんで教科書は三回回して毎回止めるって書いてあるんですか？ 一気に反応させるならおかしいじゃないですか」

エストは少しめんどくさそうに杖で自分の大鍋にかかっている火を指した。

「何ですか？ 大鍋ですか？」

「火か？」

「そうなの」

オスカーはちよつと考えた。エストが大鍋をどうして指すのかだ。何か大鍋に教科書で使っているレシピと違うところがあるのだろうかとおスカーは最初に考えた。今使っている大鍋に関する一番古い記憶、ダイアゴン横丁で大鍋を買った時をおスカーは思い出した。

『坊ちゃんはおグワーツかい？ なら大鍋は錫だね、昔は本当にいい鍋以外は悪い鉄を使ってたけど、今の時代に魔法薬を学ぶなら錫だよ』

当時のオスカーは随分と家から出ることが出来なかったもので、ダイアゴン横丁に行ったのは久しぶりだったし、キングズリー以外の人と喋ったのも久しぶりだったので、その時ダイアゴン横丁で喋った色んな人をオスカーは良く覚えていた。

「教科書で使ってる鍋と俺たちの鍋って違うのか？」

「おグワーツ指定の鍋は錫製ですよね」

「この教科書のほとんどレシピは鉄のお鍋で作ってるんだってスネイプ先生が言ってたの」

「なんかハツフルパフのお金持ちの一年生が凄い高い大鍋持ってるって聞いたよ。僕のはパパのお古なんだけどね」

オスカーはよくそんなことをスネイプに聞いたと思った。聞く時に一体何を考えてエストが聞いたのかもわからなかった。それにスネイプは本当にできると思った上で、スリザリンのお気に入り生徒にしか魔法薬の技を教えようとはしなかった。エストは十分それに

入っているようで、エストが聞くとスネイプは教えるのだ。オスカーにも答えてくれるがエストと比べると反応はちよつと微妙だったし、クラーナやトックスのようなスリザリン生以外は論外のようなだった。「熱さが違うのか？」

「熱さって、大鍋の中の温度が変わるってことですか？」
「熱さが違うと色々変わるでしょ？」

チャーリーは自分の魔法薬と格闘し始めて、三人の会話に関わる余裕が無くなった様だった。クラーナはエストが言った事を書き留めていた。教科書には逆回りのところが二重線で消されていて、しばらく回すのをやめると書かれている。エストの方はほとんど先まで迷いなく魔法薬を作っていた。

「色々ってなんですか？」

「バイアン草と月長石は大鍋の上と底の方に最初はあるはずなの。逆回りにすると混ざり合って一気に反応するはずでしょ」

「錫だと温度が低すぎるのか？」

「鉄と錫だといいい鉄の方が速く温かくなるの。それに魔法の火の強さは教科書と同じでしょ？」

つまり、エストはこういいたいらしかった。魔法薬の教科書は鉄の鍋でレシピを作っている。鉄の鍋はオスカー達が使っている鍋より早く温度が上がる。レシピと火の強さは同じ。つまり、レシピよりゆっくりオスカー達の鍋の温度は上がるはずなのだ。

「じゃあ、あれなんですか。温度が関係するようなレシピは全部反応が早くなるような動作をした方がいい魔法薬ができるんですか？」

「それはどんな魔法薬なのかと、どんな材料を使っているかによるでしょ？ 魔法薬の材料が温度に関係しない反応をする材料なら意味

ないし、低い温度で反応させたい材料なら逆でしょ？ 今回の月長石とバイアン草がお互いに反応するような温度と速度、反応面積にしてあげないといけないからそうしたの。月長石は温度が高くないとお話を聞いてくれないの。人間はそんなことないけど、魔法薬の材料はその材料が分かる喋り方をしないと理解してもらえないの」

エストがそんな話をするのはなんとも皮肉な気がオスカーはした。

最初の方のそんなこと分かってるでしょ？ とでも言いたげな会話は、オスカーとクラリーナはもう慣れていても、他の人には中々通用しないだろうからだ。

「クラリーナ、バイアン草が無くなっちゃったんだけど……」

「そんなに少なかつたですかチャーリー？ 一応教科書の材料分持ってきたはずなんですけど。オスカー余ってます？」

「少し余分に持ってきたから余ってるけど、一杯入れたら月長石も一杯いれないといけなくなるぞ。ほんとに必要な量に足りてないのか？」
「色を見れば分かるの。ブルーの濃さで分かるからチャーリーのはもう十分のはずだよ」

ほとんどチャーリーの大鍋を見ずにエストが言った。確かに大鍋はきれいなブルーになっていて、さっきのオスカーとクラリーナの大鍋の状態と同じ色だった。エストの大鍋はもうすでに最後の周期的なかき混ぜの工程が残っているだけのようで、杖で操っているかき混ぜ棒が自動でかき混ぜていて、エストはまた教科書の書き込みに戻っていた。

「ありがとうエスト。それとクラリーナ、僕の教科書なんかこのページが染みで見えないから見せてくれないかな」

「ちよつと待ってください。次の工程が終わったら見せますから」

オスカーは自分の魔法薬が少しの時間待つという工程に入ったので、教室を見回してみた。するとアンブリッジが生徒たちに質問をして回っているようで、ときどき質問をされた生徒たちがオスカー達のテーブルの方を指すのがオスカーは気になった。

「オスカーはあのジェイって人と知り合いなんだよね？」

「そうだけどそんなにあいつのこと知ってるわけじゃないぞ」

やっぱり顔を上げずにエストがオスカーに聞いた。今度は自分の羊皮紙にイメージの様なモノを何回か書いては杖で消してを繰り返していた。

「そうなの？ うーん、スネイプ先生の研究室にしかないような材料ってあの人は調達できるのかな？」

「できると思うけどな。A級の禁止品とかだと難しいだろうけど。エ

スト、アンブリッジ先生が近づいてるから、ちよつと作業に戻る」
「そうなんだ。分かったの」

マフリアートを唱えているわけでは無かったので、喋る内容には気を配る必要があった。オズカーは魔法薬の作製工程に戻って再度魔法薬を作り始めた。エストの魔法薬はほぼ完成していて、オズカーとクラリーナの魔法薬も一番最後の工程に差し掛かったところだった。チャーリーもクラリーナのアドバイスを聞きつつ、他の生徒のテーブルより進んでいるようだった。

アンブリッジが作り物の様な笑顔を張り付けてオズカー達のテーブルにやってきた。何となく、オズカーはミユリエルおばさんやリータ・スキータと同じくらい、この先生には気を付けた方がいいかもしれないと思っていた。

「あら、素晴らしいわ。このテーブルは他のテーブルよりずっと進んでいるようね。お名前を聞かしてもらえるかしら？」

にっこりしながらアンブリッジが聞いた。エストは明らかにアンブリッジを視界にも耳にも入れていないことがオズカーには分かった。なぜなら完全に無視して、薬棚から呼び寄せ呪文でくすねたであろう二角獣の角のスケッチを始めたからだ。

「チャールズ・ウィーズリーです」

「あら、お父さまをわたくしは良く知ってますよ。あなたのお父さまは顔が広い」

それはまあそうだろうとオズカーは思ったが、アンブリッジがチャーリーの父親に対してどんな感情を抱いているのかは、オズカーには読み取れなかった。

「クラリーナ・ムーディです」

「オズカー・ドロホフ」

「偉大な叔父さまもお姉さまもわたくしは知っていますわ。ミスター・ドロホフもわたくしは一度魔法省で会った事がありますからね。当時のあなたは小さかったですから覚えていないかもしれませんが」

あつたことがある？ それを聞いて、オズカーは裁判や取り調べ

や、保護観察の時の面談のメンバーにでもいたのだろうかと思った。沢山の魔法使いが並んでいたし、オスカーはその時に喋りかけてきた一部の魔法使い、バーティ・クラウチ、ルーファス・スクリムジョール、アメリカ・ポーンズくらいしか覚えていなかったのだ。

「一番右のあなたは何というお名前かしら？」

しかし、一度聞かれてもエストは答えなかったもので、オスカーはエストの肘を少しつついた。

「エストレヤ・プルウエツト」

今度は羊皮紙から目線を一切上げずにエストは答えた。二角獣の角に加えて、色んな材料のスケッチとよく分からない数字が羊皮紙には書かれていて、エストは羊皮紙や頭の中のイメージから集中を外したくないと考えているに違いなかった。

「あなたの魔法薬は素晴らしい出来ね。一番早く終わっていますし、内容も完璧に見えます。いつもこうなのかしら？」

「エストはいつも一番ですよ」

エストが答えないのでクラリーナが代わりに応えていた。クラリーナの魔法薬ももうすぐ出来上がりそうだし、少なくとも教科書に書いてある出来た場合の特徴、軽い銀色の湯気がたちこめていた。エストの魔法薬の方がより澄んだ色の液体で、湯気の銀色もより金属的な光沢を含んではいたが、クラリーナの魔法薬でもスリザリン鼻屑さえなければ、スネイプは多分〇優をつけるのではないかとオスカーは思った。「ミス・ムーデイ、あなたの魔法薬も十分に素晴らしいわ。ふくろう試験の試験時間はいまよりずっと長いのをご存知かしら？ 少なくともこの時間でこの出来の魔法薬を作れるのなら、最高の評価を貰えるはずですよ。わたくしの時と試験の基準が変わっていないければですけどね」

「そうなんですか……」

いまいちアンブリッジが一体何の目的で喋りにきているのか、オスカーには分からなかった。それにさっきは他の生徒たちにも何か質問をしていて、彼らはオスカー達のテーブルを指していたはずなのだ。

「さつきもスネイプ先生の質問に答えようとしていたでしょう？ あなたもミス・プルウエットと同じ回答をできる自信はありましたか？」

「ありますけど。スネイプ先生はグリフィンドール生をあてないですから」

エヘン、エヘンと一度咳払いをしてからアンブリッジはまたニコリというより、ニヤリと言った方が近そうな笑みを張り付けて喋り始めた。

「おやまあ、ミス・ムーディ、わたくしだから良かったですけど他の先生の前でそんな事を言っただけじゃいけませんよ。でも答える自信はあったと言うことね。それは素晴らしいことですよ」

「はあ…… ありがとうございます」

他の生徒たちに質問していたよりも、明らかに長い時間このテーブルにアンブリッジはいるとオズカーは考えた。もしかすれば最初からアンブリッジの目的はこのテーブルだったのかもしれない。

「あなたたちはスリザリンとグリフィンドールの監督生。そして一番前のテーブルで授業を受けていて意欲もある。なにより違う寮同士で垣根無く勉学に励めていることは素晴らしいですよ」

「アンブリッジ先生はなんのために色んな授業を回っていますか？」

ちよつと褒められすぎてオズカーは気持ち悪くなってきたが、エストの声がオズカーの意識を呼び覚ました。さつきまで羊皮紙にかかりつきりだったエストが真つすぐにアンブリッジの目を見つめていた。

「おや、ミス・プルウエット、内職は終わったようですね？ わたくし以外の先生の前でそういう事をするのはあまり賢明とは言えない……」

「ドローレス・ジェーン・アンブリッジ教諭は何を目的にホグワーツの全ての学年の全ての授業を視察していますか？」

今度はアンブリッジが言い切る前にエストが自分で手を挙げて、裁判中の質問のように形式ばった言い方で質問した。アンブリッジの眉が一瞬ぴくつと動いたが、張り付けたような笑みは消えなかった。

「ミス・プルウエット、最初の挨拶で先生方と皆さんに申し上げたように、魔法省は皆さんが垣根無く学ぶことを望んでいる……」

「アンブリッジ先生は今はホグワーツの所属ではありませんか？ 魔法省にいる週は違うと思いますが。それに去年のスクリムジョール先生は、ホグワーツにいるときはホグワーツの先生として教えていたと記憶していますが、アンブリッジ先生は違うのですか？」

これはちよつと不味いかもしれないとオズカーは思つて隣のクラーナと目を見合わせた。チャーリーは魔法薬が上手く作成できて楽しくなつているのか、こつちの会話をほとんど聞いていなかった。そもそもオズカーはエストがどうも去年より攻撃的かもしれないと感じていた。

「もちろんそんなことはありませんよ。ですが、ホグワーツの教諭は魔法省が出した教育令や指導要領に従わないといけません。わたくしは一年しかいませんし、外から来たばかりだからずっと務められていた先生方と違う目線で、改善点や授業のこれまで見えなかつた長所を発見できると思つています。その方がより理想の教育に近づくことができ、皆さんの学校生活も良くなるでしょう？」

「その教育令や指導要領を決める……」

「アンブリッジ先生、エスト、スネイプ先生が戻つて来たみたいですよ」
「あら、ミス・プルウエットごめんなさいね。また他の授業か闇の魔術に対する防衛術でお会いしましょう」

スネイプ先生が帰つてくると、アンブリッジはそそくさと自分もと座つていた後ろの椅子にもどつてあの張り付けたような笑みを浮かべた。

「我輩が出ていく前は工程の半分は終わらせておけと言つた。しかし、医務室で少し雑務が発生したため戻るのが遅くなった。すでに授業時間は終わりに近い。全員あと五分で作成した魔法薬を提出するように。すでにふくろう試験ならば試験時間は終了している。今回諸君らが提出した安らぎの水薬はふくろう試験と同じレベルで採点する。次回の授業でA・可に満たない結果を告げられた者は並々ならぬ努力が必要になるであろう」

生徒たちは大急ぎでおのおの試験管に魔法薬を入れて提出する準備をしていた。エストの表情はいたって普通に見えたが、やっぱり今年に入ってから攻撃的になってきているのかもしれないとオスカーは思った。ダンブルドア先生、嘆きのマートル、アンブリッジは明確に喧嘩を吹っかけてきたので違うかもしれないが、それでも去年までならあそこまで直接的な手段に出ただろうかとおスカーは考えた。「エスト、あんまり喧嘩を売らない方がいいタイプの先生ですよ。あのアンブリッジって先生」

「どうして？」

「やっぱり喧嘩売ってたのか」

オスカーがそう言うとおエストが少し頬を膨らませてオスカーの方を向いた。

「別にそんなには売ってないの」

「マクゴナガル先生ならちゃんと成績を出せば認めてくれるかもしれないですけど、あの先生はそういうタイプじゃないでしょう。なんて言うか、お役所仕事が得意なタイプですよ。決められた事をこなすのが得意なタイプです。喋りかたもそんな感じですよ……」

「ここはホグワーツ。魔法省ではないの」

「あんまりいい噂を聞く人じゃないよね。去年も今年もデイゴリーさんとパパが暖炉で悪口を言ってたしね。人使いが荒いし、特に狼人間とか半巨人みたいなのが凄く嫌いなんだって。去年はなんか狼人間の収入源を断とうって言って、狼人間が就きやすい仕事を規制して仕事そのものを無くしたり、規制品の枠を広げて、狼人間が取引してる物品を片っ端から没収したらしいよ」

狼人間、半巨人ときて、半人間がアンブリッジは嫌いなのだろうかとおスカーは思った。あの聖マンゴで会ったおじいさんの話で出てきたように、半分マグルなのが嫌だったのだろうか？ トム・リドルのように。オスカーは考えては見たが、狼人間のほとんどがノクターン横丁で襲い掛かって来たような輩ばかりだと言うのも知っていた。少なくとも、アンブリッジは何か明確に悪いことをしているわけではないのだ。

「闇の魔術に対する防衛術以外の時間でいちいち喧嘩したら、闇の魔術に対する防衛術の時間に喧嘩したらどうするんですか？ ヒキガエルに変身させるんですか？」

「リボンのついたヒキガエルは嫌なの」

「餌としては良さそうだね。ドラゴンもあれだけ太ったヒキガエルなら喜んで食べるよ」

チャーリーがオスカーの方に目くばせした。今日の午後の二限目からは、五年生は全員闇の魔術に対する防衛術の授業をするらしかったので、二人はこの後の空いている時間を使ってドラゴンの卵を移動させるつもりだった。エストはクイディッチの選手を選定するため、前のチームメイトと話す時間を作っていたし、クラーナは何かトンクスと一緒にレアと話にくらしく、ちようどよかったのだ。

「じゃあまあ、昼めしか闇の魔術に対する防衛術で全員会うだろ」

「そうだね。一学年全員集まって何をするつもりなんだろうね？」

「どうやって授業するんですかね、多ければ多いほど全員の面倒を見るのは難しくなりますから」

みんなが口々に午後の闇の魔術に対する防衛術の授業について喋っているのに、エストは口を出さなかった。

グリフィンドールの二人と別れた後、オスカーとエストの二人は一旦寮に戻ってから外出するつもりだった。談話室で別れるときにエストがボソツとオスカーに喋った。

「多分、授業を全員でやるのは一回だけなんじゃないかな。あの先生は寮ごとに授業するのを取っ払いたいのかもしれないの」

「え？」

「あくまで予想なの。垣根、垣根ってうるさかったからそうかなって。もし当たってたなら、二人でどこかホグズミードに行かない？」

「まあいいけど…… 別にそんな賭けにしなくてもいつもそんな感じだろ」

「理由をつけないと色々言われるもん。じゃあまた後でね、オスカー」
「分かった」

寮ごとの授業を無くす？ オスカーにはそんな授業は想像できない

かった。オスカーはエストが言った内容を思い出しながら、自分の部屋からトランクに目くらまし呪文を唱えた上で持ち出した。

オスカーは迷わずに五階に近づいた時点で、自分にも目くらまし呪文をかけた。それに忍びの地図はオスカーのポケットの中で、ただの羊皮紙のまま眠っていた。チャーリーにも同じように途中から目くらまし呪文をかけろと言っていたので、これで他の生徒や先生にフィルチ、そしてエストやクラーナの目も誤魔化せるはずだった。

五階の大鏡の裏につくとチャーリーが椅子に座って待っていた。レアとの練習に使っていた椅子はまだそのまま残っていて、バタービールのビンも置きっぱなしで、中には空いていないビンもあった。人の手は去年から入ってはいなさそうなのが、埃のたまり具合やバタービールのビンの様子から分かる。

「オスカー、確かにここ広いね。他に誰が知ってるんだい？」

「エストとレアだな、他の生徒が知ってるかは分からないけど。ただ、鏡の裏だと分かりにくいけど偶然入るかもしれないからな。ちよつと対策がいると思ってる」

「対策？」

「まずはチャーリー、通路が狭くなるところまで、変身術で補強しようと思うから、手伝ってくれ」

「分かったよ。なんかこういうことしてると、昔、ビルやパースと一緒に作ってた秘密基地を思い出すよ」

オスカーもまさにその通りだと思った。オスカーも家の敷地の森に作った、小さい小屋を思い出していたからだ。二人は最初に土をくりぬいただけの通路を補強して回った。土壁を規則だった並びのレンガに変身させていった。オスカーとチャーリーが半分ずつ変身させたせいで、秘密の通路は赤と緑のレンガが半分半分のカラーリングになった。

「一応天井が落ちてくると不味いから、柱も建てようと思うんだけど、どうだ？」

「オスカーに任せるよ。僕は見本が無いと、うちの家みたいに曲がりくねった柱を作っちゃうからね」

「分かった」

オスカーは地面を掘りぬいて、土の山をいくつか作ってそれを柱に変身させた。オスカーの一番見慣れているデザイン、ドロホフ邸の無駄に豪華な柱が四本立った。それに床も柱もやっぱり一番見慣れている大理石でコーティングされていた。

「ほらね？ オスカーがやった方が秘密基地感がでるよ。それもだいぶ資金に余裕がありそうな秘密結社じゃないかな」

「見た目だけはな」

「入り口はどうするんだい？」

「崩れた様に見せようと思う。元々崩れかかってたし、エスト達が見ても入らない様にするならそれが一番効果的だろ。忍びの地図は元から書いてある変化にしか対応できないからな。崩れても地図の上だと分からない」

「オスカーのそういうところはスリザリンっぽいよね」

「そうか？」

聖マンゴ病院のような幻を作っても、エストやクラーナ、マクゴナガル先生辺りには一発で見破られるとオスカーは思っていた。しかし、オスカーにはヒントがあった。エストの鍵と去年ジエマが使っていたナイフだ。あの二つは物理的に動く様に作られているのだ。

つまり、魔法使いや魔女は魔法を見破ることはできても、物理的な何かを見破るのは割と下手なのだ。だから物理的な壁を作って、それで崩れた様に見せればいいとオスカーは考えていた。

「チャーリー、さつき掘った土をホグワーツの外に繋がってる方に運んでくれないか？ 表は俺がやっつくから」

「分かったよ」

また掘り出した土を移動させて、オスカーは入り口で変身させた。蝶番の付いた開き戸だ。そして出口の側に大量に土をぶちまけて、その後土の一部をレンガに変身させた。これでまるでホグワーツ城のレンガと土が崩れた様に見える。しかし、レンガは前の方はただのレンガだが、奥の方のレンガと土は扉と引っ付いていて、レンガごと押せば向こう側に行けるようにした。

チャーリーに土を運んでもらったホグワーツの外に繋がる方の通路にもオスカーは同じ仕掛けをつくった。

「あとはなんかあるか？ 見つからないようにする仕掛けはしかけるだけ仕掛けといた方がいいと思うんだが」

「あとは…… 明かりも欲しいけど。要はここに出入りするときにネックだと思っただよ。入るときは目くらまし呪文を唱えて、周りに誰もいないのを見てから入れればいいけど。出るときはそうはいかないじゃないか？」

「たしかにそうだな……」

「ああ、あの鏡を両面鏡にすればいいんじゃないかな？」

「両面鏡って、劇の時に使ってたあれか？」

劇のトランクの中には大きな鏡が入っていて、その鏡はアドバイスをもらうためにヘルベルト・ビーリー先生のところに繋がっていたのだ。しかし、オスカーは流石にそんなマジック・アイテムをいきなり作れたりはしなかった。オスカーはエストでは無いのだ。

「そうだよ。向こうの鏡からは見えなくて、こっちの鏡からだけ見える様にできないかな？ そうしたら安全な時間に出れる」

「いいアイデアだなそれ。あの鏡を上手い事使えるし、忍びの地図が無くても安全を確認できる」

オスカーは自分たちの城を造っているようで楽しかった。自分達で考えたアイデアを実装してくのが楽しかったし、何よりチャーリーと二人だと、二年生の時に無邪気に髪飾りを探していた時の様な空気でいられるのがいいと思っていた。

「あと暖炉がいますと思うんだよね。ああ、でもそれはトランクの中にあるからいいのかな？」

「ドラゴンの卵とか生まれたら火がいるかもしれないってことだよな。たしかにトランクの中の方がいいだろうな」

「そうだよね…… と言うか、トランクを守るような仕掛けが必要だよ。あと明かりも毎回ルーモスを唱えるのはめんどくさいし」

二人の秘密基地には色んなモノが必要だった。しかし、オスカーもチャーリーもなんだかんだ言っただけで、行動力に加えて、技量や知識も同

学年の生徒の平均以上はあった。それにトunksがいるのなら、グリフィンドールとスリザリンの組み合わせは最悪だと言うに違い無かった。無駄に決断力がある上に、狡猾で手段を選ばなくなるからだ。

「灯りは前は廊下の燭台の複製を物まね呪文で作ってたんだが、よく考えたら長持ちしないし、大広間から消えないろうそくを燭台ごと何本か失敬した方が早そうだな」

「灯りはそれでいいとして、あとはトランクの隠し方だよね……オスカーがさつきやつてたみたいに、物理的な仕掛けと魔法の仕掛けを両方組み合わせた方がいいだろうね。あと、さつきの鏡の話と一緒にけど、僕らがトランクに入っている間も見つかからない様にしないと」「やること書き出すか」

オスカーは机の上に羊皮紙を広げて、これからやった方が良いことを書き出していった。チャーリーと二人であだこうだと言っている間に、どんどん分けの分からないリストになっていった。

「やっぱりマグルが持つてる冷蔵庫みたいなものもあると思うんだよね。ほら、ドラゴンが食べる肉とかを保存しとかないといけないし。それにバタービールとかも冷やしておけるじゃないか」

「あとラジオが欲しいな。ホグワーツの寮だと置いておけないし、ここなら聞いててもばれないだろ?」

「いいねそれ。僕ん家だとママがずっとセレスティナワーベックばかり流してるから他のも聞きたかったんだよね。そろそろクイデイツチのリーグも始まるし」

クラーナがオスカーとチャーリーのやることリストを見たのなら、新居でもつくる予定なんですか? とでも聞いたに違いなかった。リストはどんどん増えていって、ソファア、冷蔵庫、ラジオ、箒の発着場、外が見える鏡、ベッド、暖炉、キッチン、ロッカーとどんどんドラゴンの卵を置くための場所とはかけ離れた必要物品ばかりになっていった。

「箒でここに入れるようにするには外側がどうなっているか見てから穴をあけないとだめだよね」

「チャーリー、それより授業までにトランクを隠す場所が必要だな。いま気付いたけど」

オスカーとチャーリーが気付くと、もう昼ごはんを食べている時間はなさそうで、早く隠し場所を作らないと闇の魔術に対する防衛術の授業にすら間に合わないかもしれないなかつた。

「とりあえず床に隠すか」

「そうだね。下の階に突き抜けにくいなら大丈夫だと思うけど」

「ディフォディオ 掘れ」

大理石の床をオスカーは人六人分くらいぶち抜いて、変身術で成形したあとにまた大理石を張った。これで大理石張りの床下収納のよくなモノができあがった。それに掘った土をまた変身させて蝶番のついた、大理石の蓋をつくりだした。これで一見床にしか見えない場所を跳ね扉の様に開くことができるようになった。

「一回卵の様子をみないか？ まだまだ孵らないと思うけど」

「そうだな、それにここに入ったまま扉を閉められるかやってみた方がいいだろう」

チャーリーとオスカーは二人で床下収納に入ってからトランクの中の世界に入った。トランクの三つ目の鍵の世界で、卵はわらが敷き詰められた鳥の巣のような場所に置かれている。

トランクの中の世界は石造りの家の様になっていて、暖炉もあったし、たとえばドラゴンが生まれて火が出たとしてもそうそう燃えないはずだった。

そして黒い卵は相変わらず特に動きもせず、そのままだった。

「一応ハグリッドに聞いて、何冊か本を借りてきたんだよね」

「ならここに置いといた方がいいだろうな。談話室で読むと、エストかクラーナが一発で気付くだろうし」

「それかタイトルだけ差し替えて読むようにするよ」

「あとではれると滅茶苦茶怒られそうだな」

「多分、今の時点でも怒ると思うよ。仲間外れにしたって。昔、エストに黙って秘密基地を作ってたら死ぬほど怒ってたからね。パースなんかそれからひと月くらいエストにびびってて面白かったよ」

オスカーはなんだかんだ言つて、みんなで何かをやるときにエストに黙って何かをやったことはほとんど無かった。一人でならあるかもしれないなかったが、みんななどとなるとそんなことをしたことは無かったのだ。

「どのくらい一緒に遊んでたんだ？」

「エストと？ 叔父さ…… 昔は週に二、三日は来てたよ。まあホグワーツに入ってからもあんまり変わらないけどね」

「チャーリーからするとそうなのか」

「まあね。ホグワーツに入ったらあんまり会わなくなるのかなつて思つてたけど、むしろ昔より多くなつてるかもね」

オスカーにはチャーリーがエストの話をする時に、時々叔父さんが…… と言いよどむことこそが、エストとオスカー自身が昔の小さいころの話や、家族の話をつ突っ込んでできない理由だと分かつていた。「オスカーはほとんどエストとセットになつてるけど、エスト抜きのおスカーと一緒に楽しむいいけどね。いつもだとエストがいないのはスリザリンのいない授業かクイディッチの時だけだからね、それにクラーナもトンクスもないから静かだし」

「それはあるな。いたらもう喧嘩してるだろ」

簡単にオスカーには二人がどうでもいいことと言ひ合ひをしているのが想像できた。それなのにあの二人はもう四年も一緒にいて、割とどころか相当仲が良いはずだった。

「クイディッチ以外だと、だいたいのは事はエストが杖を振るだけで解決しちゃうし、こうやってちよつと自分で考えるのもいいよね。それ以外でも、いつもの四人がいるとだいたい解決しちゃうから」

「まあバランスはとれてるよな。突飛な考え方も、積み上げた考え方も四人いるとできてるように見えるからな」

チャーリーがいつたいエストや他の三人の事をどう考えているのか？ オスカーは気になった。こんなことは去年までなら考えなかつたかもしれないなかつた。

「とにかく今年は割とワクワクしてるんだよね。卵もあるし、正直、ママは僕が監督生になれないんじゃないかと思つてたと思うんだよ。

だけど蓋を開けたら卵はあるし、箒もオスカーのおかげでお金が浮いたから買えたし、バツジは届いたし、ついでにクイディッチのバツジも貰ったしね。後は卵が孵って、グリフィンドールが優勝して、チャドリー・キャノンズが優勝して、ふくろう試験がどうかかなれば言うことなしさ」

「何回卵って言ったんだ。それとチャドリー・キャノンズは流石に無理だろ」

チャーリーは卵を何度か撫でながらそう言っていた。そうとう卵はチャーリーの中で大きいものらしかった。それに監督生になれたという事実もチャーリーの中では大きいことのようにだった。オスカーにはいまいちその実感は無かったが、トンクスやクラーナ、それにチャーリーの反応を見ると、家族だけでなく、本人にとっても選ばれたという理由は大きいようだった。

「まあ確かにね。ただクイディッチは優勝できないとあんまり言い訳できないんだよね。これまではシーカーのせいで負けたとは言われなかったけど、僕がチームメイトを選んだってなって負けたら、やっぱりキャプテンが悪いわけだし」

「エストもそうなんだろうな」

「いつもは大人のふりしてるけど、クイディッチだと負けず嫌いだからね。昔は箒に乗った時だけ僕ら兄弟を叩きのめしてもいいと思ってたに違いないよ。ビルなんかマグルの家の屋根に叩き落とされたからね。ママにはエストが箒に乗ってるの内緒だったけど」

やっぱり直接エストの事をエストに聞いた方がいいのではないかとオスカーは思った。チャーリーが小さい頃の話やチャーリー自身の話をしてくれるように、エストとも話した方がいい気がオスカーはしたのだ。思えば、オスカーはクラーナやレアの事の方が詳しいかもしれないなかった。いつも一緒にいるわけではないのだ。

「ドラゴンの卵とエストで思い出したけど、実はあんまりエストは生き物は得意じゃないんだよ。なんか大事にしすぎるんだ。ルーンズプールの時もずっと世話してたけど、昔、はぐれたワタリガラスを鶏小屋で育ててた時は、飛べるようになっていきなりいなくなっちゃか

ら、滅茶苦茶泣いてたんだよね。誰にも何で泣いてるのか言わなかったけど。あ、オスカー、僕が言ったって言うのはやめといてね」

「チャーリー、そろそろほんとに授業に間に合わない」

「え？ 流石に最初の授業に遅れるのは不味いかな……」

急いでいろんな片づけをしながら、オスカーは卵の傍だとチャーリーが良く喋ると思った。卵でテンションが上がると喋りたくなるのか、なんなのか、とにかくダイアゴン横丁やノクターン横丁といい、チャーリーの口が軽くなっている気がした。それとも五年になって良く喋るようになり、距離が詰まっているのかもしれない。

二人は五階の大鏡の裏から大慌てで出て、途中のミセス・ノリスを蹴り飛ばしそうになりながら一階まで降りていった。

「大広間だったよね？ お昼まだ残ってないかな？」

「流石に残ってないだろ。授業用に椅子と机を並べ直してると思うし」

ダッシュでチャーリーとオスカーが大広間に入ると、広間には五人席の机が並べられて、すでに二人以外の生徒は全員座っているらしかった。生徒たちは五年生の全寮生がいるはずだったが、案の定それぞれ寮に別れて座っていて、ネクタイの色で赤・黄・青・緑に別れていた。

みんなペチャクチャお喋りをしていたが、遅れてきた二人に時々視線が行っていた。そしていつものメンバーが一番前の真ん中の席を占領していた。席の一番真ん中にクラリーナが座っていて、その両サイドに二人が座っているせいで、オスカーはどっちかの隣に座らないといけないかった。どうみても三人はどちらかに詰める気が無さそうだった。

ただわざわざ今いる向こう側に回って座るのも変だったので、オスカーは諦めてトングスの隣に座った。

「何してたのよ」

「秘密だ」

「へえ、流石二年生の時以外、万年学年二位のオスカーお坊ちやまは闇の魔術に対する防衛術なんて余裕なのね」

「さっきのは嘘だ。チャーリーのニンバス自慢に捕まってた」

「あいつどうやってニンバスなんて買うお金集めたのかしら？ 禁じられた森で珍しい薬草とか取って来て売ってるの？」

「俺に聞かれても知らないぞ」

「オスカー唯一の男友達じゃない。チャーリーからしたら親友と恋人はドラゴンと箒だけでしようけど、オスカーからしたら大事な大事な男友達でしょ？」

「トunksうるさいですよ」

さっきのチャーリーと同じくらいの勢いで喋るトunksにクラーナの注意が飛んだ。オスカーはもう授業が始まると思っていたのだが、まだ先生は来ていないようだった。

「クラーナ先輩は闇の魔術に対する防衛術はガチなのね。初めてクラーナとこの授業受けるわけだけど、肩の力入りまくっているじゃない」

「トunksみたいな後輩はいらないですよ」

「トunksはクラーナと一緒に授業が受けて嬉しいって言ってる。いま翻訳した」

多分それは本当だった。トunksは全員で何かできるのが好きなのは確かだったからだ。

「何言ってるわけオスカーお坊ちやま。というかクラーナの向こう側にはスリザリンとグリフィンドールのキャプテンがいるじゃない。クイディッチの賭けで談合があってもおかしくないわね」

「トunksうるさいの。だいたい賭けがどうのって言うなら、トunksも今年もクイディッチの選抜受けるんだらうから一緒にしょ？」

「受けないわよ今年は。箒も家に置いて来たもの」

「え？」

思わず、四人の視線がトunksに集まった。こんどはトunksの方が困惑してみんなを見回す番だった。

「何？ ふくろう試験だから普通にクイディッチには出ないってだけじゃない。何かおかしいわけ？」

「トunksはそういう性格じゃないでしょう。だいたいそれならフィ

ルチやピンズに悪戯する労力を減らすべきでしょう」

「そうでしょ。おかしいの。こんなの流星群が降ってきてもおかしく無いかも」

「双子のドラゴンが生まれるんじゃないかな」

「マーリンの猿ま…… まあ、おかしくないってことにしとく」

みんなを見回したあと、トンクスは困ったのか最後に喋ったオスカーの方を睨んで来た。単純に組み伏し易そうな相手を選んだに違い無かった。

「だいたい……」

「トンクス、クレスウエル先生が来ましたよ」

ダンブルドア先生がいつも使っている演台にダーク・クレスウエルが立っていた。瘦身の短髪でまだ二十代か三十台前半に見える賢そうな男で、色んな意味でもう片方の闇の魔術に対する防衛術の先生とは対照的だとオスカーは思った。

「ああ、みんなこんばんは。そろそろ授業を始めるから少し静かにして欲しい」

クレスウエルがそう言うのと段々広間のざわめきは静かになり始めた。全員が静かになったのを確認してからクレスウエルは喋り始めた。

「多分、みんな今年のカリキュラムにはちよつと困惑しているだろう。だから先に今年どんな風に闇の魔術に対する防衛術の授業を進めていくのか説明する。ダンブルドア先生がおっしゃったように、理論を私が、実技をアンブリッジ先生が担当される。それぞれ一週間ずつ隔週で行われる」

淡々と事実を述べている。そんな印象をオスカーはクレスウエルの喋り方から受けた。感情が乗らないようにできるだけ事務的に喋っているように聞こえるのだ。

▪ 「ただ、他の学年もそうだが、特に五年生の理論はふくろう試験の筆記内容も勉強するが、去年のスクリムジョール先生からの引継ぎと、ダンブルドア先生からのご意見もあって、少し違う事を予定している」

ダンブルドア先生からの意見という事は、魔法省が考えただけでは無いという事なのかとオズカーは思った。

「それに今年の実技の時間は、これまでの Hogwarts で行われたどの闇の魔術に対する防衛術の授業より実践的で質の高い授業になる。そのために時間が空くとダンブルドア先生との話し合いで結論づけた。本当のところは実技ばかりさせても仕方ないという事で、ダンブルドア先生とスラグホーン先生から私が呼び出されたわけなんだけれども」

「スラグホーンって前のスリザリンの寮監よね？」

「そうですね、スネイプの前任だったはずです」

オズカーはスラグホーン先生と言う名前より、むしろ実践的で質の高い実技と言う方が気になった。あのアンブリッジという先生がそんな授業をできるとは余り思えなかったからだ。去年のスクリムジヨール先生は足を引きずっている様だったが、それでもアンブリッジの数倍の速さで動くだろうことは簡単にオズカーには想像できた。「二応、学年ごとに追加で行う理論の内容は変えるわけだが、ふくろう試験を控えて、来年にはほとんどの学生が成人になる五年生向けの内容はしつかり決まっている。学習内容は…… そう、考え方だ」

「純血以外はアズカバンとか、魔法省には絶対服従とかかしら」
「ダンブルドア先生がわざわざ呼ぶ人がそんなこと言うわけないでしょう。それに主席候補だったらしい人なのに」

トンクスとクラーナがよく分からないボケとツツコミをしているのを見ると、オズカーは気が張らなくてこれはこれでいいのかもしれないと感じていた。

「じゃあ、ここにいるみんなはもう四年間闇の魔術に対する防衛術の授業を受けてきたわけだ。スタージス・ポドモア先生、アンドロメダ・トンクス先生、エルファイアス・ドージ先生、ルーファス・スクリムジヨール先生、四人の先生に色んなことを教わったと思うが、闇の魔術に対する防衛術の、闇が何を指しているのか考えたことがある人はいるかな？ じゃあ、分かる人は手をあげてくれ」

クレスウエル先生がそう言うと、結構な数の手が挙がった。オスカーの座っている席からも手が挙がっていたが、やっぱりこういう時に上がっている数が多いのはレイブンクローだった。スリザリンは薬草学くらいでしかレイブンクローと一緒にならないので、オスカーからすれば結構新鮮な光景だった。

「じゃあ、ミスター・ウインガー」

「闇の魔法使い、魔女。例のあの人、死喰い人、グリンデルバルド、腐ったハーポ」

「やっぱり一番に出てくるのはそうだろう。他には誰か考えはあるかな？」

色黒のレイブンクロー生が落ち着いた声で発言していた。あれがクラリーナの言っていた、タルボット・ウインガーだとオスカーは確認した。まだ結構な数の手が挙がっていた。

「ミス・ハイウッド」

「狼人間」

「なるほど、確かに狼人間への恐怖は魔法族なら誰でも持っている」

トンクスの羊皮紙を取り上げてオスカーに返信してくる女の子だ。まだ手は一杯上がっていて、相変わらずクラリーナやエストも手を挙げている。

「ミス・ムーデー」

「闇の魔法生物です。吸魂鬼、レシフオールド、巨人、狼人間、バジリスク、その他色々」

「まさに君たちが二年生と三年生で勉強した内容だ。魔法無しでは立ち向かう事のできない生き物たち。他にはあるかな？」

クラリーナが一気に言ったせいかわ、手は一気に上がらなくなった。オスカーもレッドキャップや河童、グリーンデローと言った危険な魔法生物を思い浮かべていたからみんなもそうだったのだろう。

「ヒントは…… そう、ピンズ先生の退屈な授業と私自身…… ミス・プルウエット」

「ゴブリン」

「その通り、私は小鬼連絡室に努めているが、一、二世紀前までなら、

魔法族にとっての大きな敵と言えばゴブリンだ。ピンズ先生だから無味無臭のテキストとしてゴブリンの反乱の歴史を学ぶことが出来るが、実際は血生臭く、陰惨な戦いを何世紀もゴブリンと魔法族は繰り広げてきた。他には？」

また手は上がらなくなった。こういう時は見方を変えないといけないのだろうとオスカーは思った。多分、一つの立場からの見方や、一つの時代からの見方ではダメなのだろうとオスカーは思ったのだ。こういう時はクラーナやオスカーより、エストやトンクスの方がいいアイデアを出すとオスカーは経験的に知っていた。チャーリーの意見は大体物騒になるのでここでは聞かない方がいいとも知っていた。オスカーはチラツと二人の方を見た。

「何？ 女の敵ならすぐ分かるわよ」

「いや、こういう時トンクスの出番だろ」

「はあ？ オスカー……」

「ミス・トンクス、何か考え付いたかな？」

「クレスウエル先生はさつきヒントで私自身って言ってたわ。だからヒントとして自己紹介してもらえればみんな思いつくと思います」
「なるほど……」

トンクスは上手く返したとオスカーは思った。その代わりトンクスにオスカーは睨まれてはいたが、みんなのアイデアを出すための行動と言う意味では成功に違い無かった。

「たしかにちゃんと自己紹介をしていなかった。ダーク・クレスウエル。魔法省魔法生物規制管理部存在課小鬼連絡室副室長。年齢は三十くらいで、結婚していて、子供もいる。ホグワーツの出身でマグル生まれだ。ミス・トンクス、ヒントになったかな？」

オスカーが自分と同じテーブルを見ると、トンクスとエストが同時に分かったという顔をした。

「マグル。非魔法族ってクレスウエル先生は言ってるわけ？」

「そうだ。魔法族の最大の敵。非魔法族。ウイゼンガモット、各国の魔法省、国際魔法使い連盟はマグルに対抗するために設立された。国際魔法使い機密保持法はマグルから魔法族を守るために制定された」

ざわめきが広間に広がっていった。色んな種類の視線がクレスウエルに注がれる。困惑、様々な意味での敵意、軽蔑。エストの手が拳がっていた。

「ミス・プルウエット」

「国際魔法使い機密保持法はマグルを守るための法ではないですか？」

「本当にそう思っているのかな？ ミス・プルウエット。そして、そのとき制定した魔法使いや魔女たちはそう思っていたかな？」

「当時の考え方を知る術は文献か、不完全な記憶の再現である肖像画、もし完全な記憶が残っているのなら憂いの篩くらいしか方法はありません。賢者の石を持っているニコラス・フラメルに聞いたのなら別かもしれませんが。クレスウエル先生はそのどれかを試されたのですか？」

エストが反論していくと、さっきまで何か退屈そうだったクレスウエルの顔が少し変わった気がした。言って欲しいことを言ってくれたと思っているようにオスカーには思えた。

「その通りだ。ミス・プルウエット。我々は当時の人間が何を感じて、何を考えて、行動したのかほとんど知る術は無い。知ることが出来るのは彼らの行動だけだ。しかし、今の我々もほとんど変わらないだろう。今現在の完全な情報を得ることはできない。何が敵なのか、何に對抗すべきなのか、我々は知らなければならない。情報を集め、知り、考えなければならない。行動するのはその後だ。杖を振る前に考えなければならない。その術を知らないといけない」

戦う前に情報を集めて、どうしないといけないか考えなければならぬとクレスウエルは言っていた。しかし、どう考えるところののだろうか？ 考え方の練習などオスカーはしたことが無かった。今度はクラリーナの手が拳がっていた。

「ミス・ムーディ」

「今年の授業はそれをやるという事ですか？ つまり、その…… 考え方を？ どうやって？」

「たしかにそこが問題だ。しかし、魔法省には色んな記録が残ってい

る。色んな事に対応した記憶が。だから君たちには色んな情報を与える。その時の魔法使いや魔女たちが知りえた情報だ。そしてその魔法族たちがどう行動したかはすでにピンズ先生の授業で習っているはずだ。君たちはその時代にいると考えて、君たちなりの判断を下す」

シミュレーションするという事なのかとオスカーは思った。その時代にいると考えて自分ならどう行動したかを考える。確かにそれなら考えることはできそうだった。

「だが、これはあくまでの防ぐ側の考えを学ぶことだ。もしかしたらすでにこれまでの闇の魔術に対する防衛術で習っているかもしれない。本当に敵に勝つためには相手を理解しなければならぬ。敵の考えは何か、弱点は何か、何を望んでいるか、何に優れているか、何が弱点か、これをどうやって理解すればいい?」

オスカーは珍しく自分で手を挙げた。これまでの四年間でどうすればいいかをオスカーは知っていた。

「ミスター・ドロホフ」

「相手になったと思って考えることです。つまり攻撃側の人間がどうしたいのか、なりきって考える」

エストの中にいたヴォルデモート、ルシウス・マルフォイ、トム・リドル。それに自分やレアの記憶の中にいた死喰い人たち。決闘トーナメントではエストやクラーナの考え方。もしかすれば誰かを説得するときも相手になりきって考えているかもしれない。なかった。

「その通り。つまり、君たちが攻撃側、我々が脅威だと思っっている相手の考えを理解しないといけない。どうしてゴブリンは金銀財宝に執着する? 死喰い人はなぜ純血主義に執着する? マグルはなぜ魔法族を恐れる? 考えたことはあるかな?」

しかし、それはそれで恐ろしい事だった。死喰い人の考えを理解できると言う事は、死喰い人になったのと同じではないだろうか? 考えを実行に移すか移さないかだけの違いなのだろうか? 理解できるが自分は違おうと言うのなら、それは本当に理解していると言えるのだろうか?

「だから君たちは班になって別れて、攻撃側と防御側に別れて考えて貰う。色んなシチュエーションで、君たちは攻撃側と防御側に立たされる。そしてどう行動すればいいのかを考える。どちらの側も何か不安や期待を世間から感じ取っている。そしてその漠然とした感覚を君たちは考えにしないといけない。考えをした後に行動をして貰う。もちろん今回は考えまでだ。ああ、ミス・トックス何かな？」

「それは私たちが要は、例のあの人になったと思っただけで考えるって言うてるのよね？ クレスウエル先生は？ つまり、マグル生まれはおもちゃにして、吸魂鬼や巨人を世の中に放って、どうやったら魔法大臣やダンブルドア先生をやっつけられるか考えるってことよ…… ことですよね？」

「そうだ。もちろん、もつと状況は限定的にする。だが大枠はそうだ。ただ、勘違いしないで貰いたいのは、これはどちらかの考えに染まれと言っているのでは無いということだ。君たちは中立に立って双方の考えを理解しないといけない。どうして死喰い人は亡者や服従の呪文を使ったのか、どうして魔法省はアズカバンの吸魂鬼と許されざる呪文を使ったのか、両方理由がある。そして両方間違いもある。それを理解して欲しい」

オスカーは自分にそんな事ができるのだろうかと思った。つまり、オスカーが父親やヴォルデモートの立場になって、如何にマグルを効率的に殺すか、如何に闇祓いと不死鳥の騎士団を壊滅に追い込むか考えるのだ。シリウス・ブラツクのようなスパイを送り込む。服従の呪文で相手の家族を支配する。そういう事を考えないとダメなのだ。

「いいかな？ ではもつと詳細な説明に入る。ただしその前に、みんな感情的に深入りしてはいけない。あくまでこういう考えや感情を持ってしていると予想できるとだけ考えることだ。人間は衝動的に動く。それが家族や自分の信念の事になればなおさらそうだ。私だって家族が危険にさらされれば衝動的に動くだろう。しかし、今回はダメだ。我々は人間であって、動物では無い。あくまで冷静に相手と自分を理解して、一番強い手を打つ練習をするんだ。そうすれば自分の情動や感情に従う以上の結果が得られ、より高度な闇の魔術に対する防

衛術を行うことができるはずだ」

オスカーはもう半分クレスウエル先生の話を聞けていなかった。感情的に深入りしないことは自分には恐らくできないだろうと直感的にオスカーは理解していた。

周りのテーブルを見れば、不安そうな顔、何をクレスウエル先生が話しているか分からない顔、何か期待している顔、色んな顔があった。

ただ、少なくとも同じテーブルの他の四人はオスカーと同じくらい暗い顔に違い無かった。大広間は浮かんだろうそくとまだ沈んでいない日の光に照らされていたというのだ。

市民薄明

「みんな最初は上手くできないだろう。だから最初はモデルとして何人かで前でやって貰おうと考えている。もちろん行き過ぎたり、議論が熱くなりすぎたりすれば私が指摘する。誰かやってみたい人はいるかな？」

お昼が終わって授業が始まり、やっと太陽が傾き始めようとしていた大広間は静まり返っていた。これまでの闇の魔術に対する防衛術ならみんな手を挙げたのではないだろうかとおスカーは考えた。

つまり、グリーンデローやレッドキャップの相手をしたり、同級生がかけてくる呪文の反対呪文を唱えるよりも、まね妖怪の相手をするよりも今回の内容をみんながやりたくないと考えているのだ。

「OKだ。多分そうだろうと思っていた。じゃあ五人ずつ指名しようと思う。こういう時は申し訳ないが監督生には優先的に参加してもらおう。あと数名は私が指名しよう。五人のチーム二つに分けてやって貰おう。向こう側にテーブルと机を用意するから、そこに指名した人たちは座ってくれ。それ以外のメンバーは少し退屈かもしれないが、少し外から座って見ておいてくれ」

案の定、監督生が指名された。オスカーはいつものメンバーが仲間なら問題ないが、敵に回ればどうなるのかは決闘トーナメントで良く知っていた。よく知られると言うことは、弱点をよく知られていると言うことだったし、考え方が予想しやすいと言うことでもあった。

「トunksをボコボコにします」

「最近別に何もクラーナに仕掛けて無いじゃないの」

「私のトunksをつまびらかにしました」

「難しい言葉使われても分からないわ。オスカーも喜んでたからハツピーじゃない」

「別に喜んでないぞ」

そもそもよく考えれば議論はするが別に物理的にボコボコにする授業では無いはずだった。ちよつとその立場に立って議論しろと言っているだけなのだ。

「相手を倒すのが議論の目的じゃないでしょ。議論をやって、どつちの立場も理解しろってお話でしょ？」

「でも意味あるのかな？ 僕たちが死喰い人やゴブリンの考え方を理解なんてできないじゃないか。そもそも生物として違えば考え方が変わるの当たり前だよ。アクロマンチュラは人間が暗闇を怖がる意味は分からないし、バジリスクは人間のネズミが嫌いな理由は分からない」

「ゴブリンは違うかもしれないけど、人間相手なら通用するんじゃないの？ それに私たちも宝石が好きならゴブリンと一緒にだと思おうわ」

「ゴブリンの宝石や装飾品に対する考え方は魔法族と随分違うと思いますけどね、あいつらは作った存在に所有権があると思ってますから」

オスカー達がペチャクチャと喋っている間に、クレスウエルは椅子と机を準備して指名する生徒を選んだらしかった。

「左側の机に、ミスター・キャプラン、ミスター・ドロホフ、ミス・ヘイウッド、ミス・ムーデイ、ミスター・ウインガー、移動してくれ」
「良かったわねクラリーナ、オスカーと一緒に……」

「トングスはクラリーナと同じチームに成りたかったって言ってる。いま翻訳した」

「なんですか？ オスカーは翻訳言語にニンフアドーラ語も増やしたんですか？」

クレスウエルがもう片方のチームを読み上げている中、オスカーはクラリーナと左側の机の方へ移動した。向こう側のチームはオスカーとクラリーナを除いた三人に、レイブンクローの監督生が二人と全員監督生のチームだった。オスカーはクレスウエルが果たしてチームバランスを考えて配分したのだろうかと思った。

「じゃあ、席についたらとりあえずお互いに挨拶しておいてくれ。その間に私は今回のテーマを示す準備をする」

机は五角形の配置だった。オスカーは座ったチームメイトをそれぞれ見た。オスカーの左にはいつも見ている顔のクラリーナがいて、も

う片方の隣にはトンクスのルームメイトのペニー・ハイウッドが座っていた。

「自己紹介しましょうよ。私はクラリーナ・ムーディです。見ての通りグリフィンホールですけど」

「私はペニー・ハイウッド。ハツフルパフだけど、このメンバーでちゃんと喋ったことが無いのはオスカー君くらいだと思おうわ」

誰にでも喋りかける女の子だとトンクスからオスカーは聞いていた。恐らく男子からも結構人気があるのではないだろうかとおスカーは思った。初対面から名前と呼んでくるし、誰とでも楽しく喋りそうだからだ。

「僕はデイエゴ・キャプラン。ペニーと同じでハツフルパフ。オスカーとクラリーナには自己紹介したいとずっと思ってたんだ。決闘トーナメントには出られたんだけど、途中でウィリアム・ウィーズリーのペアに負けてしまったし…… そうだ。クラリーナ、今付き合っている人とかいるのか？」

「はあ？ いきなりなんですか？ 今はそういうのは募集してないです」

「そうなのか、君みたいな人と一緒になれる人が羨ましいよ。オスカー、僕と一緒に決闘の練習をしないか？ 君はセンスがずば抜けているし、お互いに男子なら手加減しないでいいからいい練習になると思うんだけど。僕が教えられるばっかりになるかもしれないけど」

「いや、今年はふくろう試験だし、ちよつと他に時間取りたいこともあるからな」

「そうか…… でも気が向いたら話かけてくれ」

何と言うか、手当たり次第に男も女も口説いていそうなのにそんなに嫌われてはいないのではないかとオスカーは思った。ペニーもデイエゴもハツフルパフらしい感じがあるとオスカーは思うのだ。

「タルボットも自己紹介」

「タルボット・ウインガー。レイブンクロー生」

茶色の髪に色黒の肌、それに無駄に寡黙で必要以上に喋ろうとしないところはレイブンクロー生っぽいとタルボットにもオスカーはそ

う思った。ペニーは今促したところを見るとこのタルボットとも面識がちゃんとあるらしく、オスカーはやっぱりこのメンバーの中で一番交友関係が小さいのは自分なのだろうと思わずにいらなかった。

「オスカーもとつとと自己紹介してくださいよ」

「オスカー・ドロホフ、スリザリン生。まあ友達はあるまいないけど仲良くしてくれ」

オスカーが自己紹介すると一瞬タルボットがオスカーの方を向いた。オスカーの予想通りならタルボットはエストやレアの様な身の上の人間のはずだった。オスカーはちよつとそういうところは気を付けないといけないと思ったが、二年生のころのクラーナならまだしも、最近のクラーナならタルボットを煽る様な言動はしないだろうと思った。

多分、二年生のころならレアと初めて会った時の様に臆病者とかそういう煽りをしてもおかしく無かったし、今そういう言動をすればどちらかと言えばレアだった。

「じゃあそろそろテーマを決めようと思う。テーマ、つまり議題は人間をどう扱うかだ。議論者が置かれている立場を説明する。左のチームは体制側、つまり魔法省やそれに与する人達で、右側は反体制側、例のあの人や死喰い人達やそれに組する人たちだ。時代は私が学生の時代、つまり1972年から1979年くらいだから、だいたい今から十年、十五年前だと思ってくれていい」

狼人間とクレスウェルが言った瞬間にペニーの顔がこわばったとオスカーは思った。さつきまでニコニコしていたのにだ。それに大広間はやっぱりざわざわしていた。議論を見ているだけの生徒たちはお互いにペチャクチャと喋っているようでそれが止まらなかった。「みんな少し静かにしてくれ。ルールを説明する。最初に体制側がどういう行動をするかを言う。次にその意見に反体制側が質問してから反体制側の行動を言う。これを互いに二回繰り返す。最終的にどちらの側に狼人間たちが付くのかをこの議論を聞いているみんなが判断する。そして、狼人間達がどちらについたかでどういうメリットとデメリットがあるのかをみんなに判断してもらう。じゃあ始めて

くれ」

いきなり初めてくれと言われても、オスカー達はそんなにすぐに喋ることはできなかつた。それに意見をまとめるには喋るだけでなくて、それを紙か何かにまとめるべきだとオスカーは思った。向こう側からはエストとトックスが何か言っている声が聞こえていた。

「始めましょうよ。とりあえず最終的には私たちが勝てばいいじゃないですか。その勝ちつて言うのを考えた方がいいと思うんですよ」

「どうなれば勝ちかってことだよな？ それなら、狼人間をこつちにつければ勝ちなんじゃないのか？」

「それは違う。僕たち魔法省側と魔法省についている側の人間にとつてのメリットが多いのが勝ちだ」

てつきり喋らないのかと思っていたが、タルボットが早口でオスカーに反論した。オスカーは大分素が出ている時のレアを思わず思い出した。

「タルボット、それは狼人間を切り捨てるのも正解だつて言ってるんだろ？」

「キャプラン、君の言う通りだ。狼人間の取捨は関係が無い。勝利条件は闇の陣営より、僕たち魔法省側のメリットが大きいことだ」

なるほどとオスカーは思った。確かにあくまで魔法省としてのメリット、デメリットを考えるのならあくまで狼人間を助けようが助けまいが関係が無いのだ。オスカーはそれよりずっと喋らないペニーが気になった。オスカーの記憶ではどこにいてもペチャクチャと喋っている性格だつたはずなのだ。

「じゃあ先に狼人間がどつちにつくかのメリットデメリットを考えておいて、こつちにつかせた方がいいのか、相手につかせた方がいいのかを考えた方がいいってことか？」

「ドロホフ、君の言う通りだ。つかせることでメリットがあるならその行動すればいいし、そうでないなら反対の行動をすればいい」

「私は味方につけた方がいいと思いますよ。信用はできなくても味方は増やした方がいいってことです」

「味方につけるなら、味方につける労力を味方になった時の価値が上

回らないとダメってことだろう？ そう考えると少し微妙かもしれないな。狼人間を闇祓いやダンブルドア先生のいわゆる騎士団に入れるなんて考えられないじゃないか」

狼人間が闇祓いや騎士団のメンバーとして、キングズリーやマッドアイと一緒に働いている図をオスカーは想像してみたが、マッドアイがグレイバックをミンチにしている図しか思い浮かばなかった。

「申し訳ないが時間制限を言い忘れていた。三十分で最初の意見を組み立ててくれ」

クレスウエルの声が響いた。オスカーは全体のかじ取りをしないと前に進まないと考えた。議論ばかりしていて、立案ができなければどうしようも無いのだ。

「とりあえず最初に味方にするか、排除するか、それとも何もしないのか決めよう」

「ならこれまでどうだったかを知らないといけないんじゃないですか？ クレスウエル先生!!」

クラリーナが大声でクレスウエルを呼び出した。クレスウエルは何枚かの羊皮紙を持ってオスカー達の方へとやってきた。

「魔法省がこの時に狼人間に対してどう対応していたかを教えてください」

「この羊皮紙を読めばいい。少し前の狼人間の扱いに関してまとめられている」

テーブルに置かれた羊皮紙には狼人間の現状と書かれている。人間の定義や確認できている人口、就労状況、主な事件や、これまでの法律改正に関する経緯が書かれている。

「グレートブリテン全体で三百から五百って相当な数ですよ。ホグワーツの一学年より多いんじゃないですか？」

「排除すればこれが全部敵ってことだよな。これはデメリットだろ。ただ、このままにしといたら狼人間がどっちつかずのかって分からないな」

「闇の陣営につくに決まってるわ。だって狼人間は人を襲いたいし、魔法省はそれを禁じているから」

ペニーがやつと喋ったが、オスカーはそれはどうなのだろうと思っ
た。恐らく闇の陣営の方が狼人間にとって魔法省より危険なのは
ないかと思うのだ。

「狼人間は純血主義と相性が悪いんじゃないか？ 多分、普通の魔法
使いより血が汚されるのは嫌うと思う」

「僕もそう思う。狼人間たちを完全な仲間には死喰い人たちは絶対し
ないんじゃないか」

オスカーとデイエゴがそう言うのとペニーは目を見開いて少し
ショックを受けたような顔をした。オスカーはペニーが狼人間と確
執でもあるのかと思っただ。どちらかと言えば、スリザリンやグリフィ
ンドール生よりもハッフルパフ生の方が、魔法界の考え方に染まって
いないと思っただ。トunksなら狼人間も人間じゃない？
と言っでもおかしくないとおスカーは思っただ。

「それで結局どうしますか？ 割と時間無いですよ。味方にします？
敵にします？ それとも放っておきますか？」

「僕は排除すればいいと思う。戦争中だと味方にする労力も大きい、
それに放っておいても敵に回るのなら最初から敵とみなした方がい
い」

「私も基本的に狼人間は信用できないと魔法省は言っただほうがいいと
思うわ」

どうせ最初から敵視されているので、初めから敵だと考えた方がい
いとタルボットとペニーは言っただ。オスカーはクラナとデイ
エゴの方を見た。

「私もそのまま放っておくのはどうかと思いますよ。さっきは味方に
した方がいいって言っただけど、今回はやっぱり敵って言っただ方が
戦争に注力できそうです。ただ、魔法省が狼人間を見捨てるって宣言
したら狼人間より人間じゃない生き物も見捨てるってことですけど」
「僕は線引きをはっきりさせた方がいいと思うから、今回は敵とした
方がいいんじゃないかと思う。魔法族が狩りつくした巨人と同じで、
狼人間ともいままさら和解なんてできないだろうし、ぐだぐだと言っ
訳するより真っすぐに敵対した方がましだと思っただ」

五分の四でみんなが狼人間を敵視するとオスカーは思っていない。かつた。てつきりクラーナかディエゴのどちらかは味方にした方がいいと言うかと思っていたのだ。しかし、オスカーの世代は狼人間が恐怖を持って受け止められた世代だったし、魔法省が満足にヴォルデモートに対して対策を講じれなかったと知っている世代だった。彼らにとっては家族が大事で、ヴォルデモートに勝つことが一番大事なはずだった。

「それでオスカーはどうなんですか？」

「俺は狼人間を味方にした方がいいと思う。今だから言えることだけど、戦争はヴォルデモートが死んだら終わる」

オスカーがそう言うのと全員の顔が強張った。ただ、二年生の時と去年度にあつたことを考えるとオスカーは彼の名前を言うのをためらう事はできなかった。

「狼人間を味方にしても敵にしても大して変らないなら、終わった後に味方の方がいいだろ？　ヴォルデモートが消えた後もグレイバックに子供が噛まれるか怖いなんて嫌だろうから、最初から味方にしとけばいい」

「ドロホフ、君の言うことは当時の人間には判断できない」

「ウインガー……　いや、タルボットって呼ぶけど、別に当時の人たちにも終わった後の事を考えることくらいできるだろ。単に魔法省側が勝つって賭けてればいいんだ」

するとみんなが静かになった。オスカーはちよつと気まづくなつたので自分から喋ることにした。

「ただ、今回の情報とか、魔法省とか魔法省側の人の感情とか考えるなら、みんなの言う敵だと判断するか、事実みたいにあんまり明言しないってことになると思う」

「じゃあ班としての結論は敵対するってことですか？　なんか釈然としないですけど」

「まあそうだけど、それとただ敵対するだけだとダメだろ。敵になるなら敵同士がバラバラになるように仕向けるべきだろ。狼人間には純血主義のヴォルデモートが勝つたらお前らは根絶やしにされると

か噂を流すべきだし、死喰い人には狼人間と組んでる見下げた奴らだっって言えればいい」

「オスカー君のそういうところ凄くスリザリンっぽい」

ペニーにそうボソツと言われて、オスカーは割と傷ついた。何かチャーリーみたいな容赦が無くて物騒な事を言っていると言われてるようだったからだ。

「じゃあ、私たちの意見は狼人間は信用できないとか警戒するべきだっって言言して、その上で狼人間には例の…… ヴォ、ヴォルデモートが狼人間を根絶やしに絶対するって噂を流して、死喰い人達には純血主義とか言ってるくせに狼人間と同じごはんを食べてるバカな奴らって見方をするってことですか？」

「もつと踏み込んでもいいんじゃないか。例えば杖を取り上げるとか」

「満月の夜は地下牢に閉じ込めるとかそう言うのが必要だと思っわ」

オスカーはそれは結構難しい選択だと思っていた。デイエゴもそう考えたのかオスカーの方をチラツツと見てきた。

「僕はそこまで踏み込むべきじゃないと思う。敵対はしても戦う必要は無い。戦争中なんだから戦う敵は一つにするべきで、最小限の力で狼人間には黙って貰えればいいと思う」

「俺もそう思う。杖を取り上げたり、牢に繋がばこつちにも同じような事を相手がしてくる。俺たちがしたいのは狼人間と戦うことじゃなくて、魔法省側は敵だと思ってるって狼人間に思わせるってことだ。それに味方にするための工作とかの労力を減らすのがあくまでも目的だし」

ひどい事をすれば相手もやってくる。オスカーはそれを知っていたし、現に死喰い人達相手なら闇被いたちは死の呪文すら使っていたのだ。敵でも味方でもどんな陣営でもやられた相手には同じようにやり返すのだ。

「なら直接的行動は控えて狼人間達をビビらせるってことですか？」

つまり逆らったら杖を取り上げたり、アズカバン送りにするけど直接的には何もしないと。それって今と何か違いますか？」

「ムーデイが言うように、それだと放っておくのと変らない」

「放っておくのと、相手が何かしたらこうすると宣言しておくのは全然違うだろ。言い方は悪いけど、例えば魔法使いは逆らったらアズカバン送りだけど、狼人間は死の呪文か吸魂鬼のキスを行うって言えばどうだ？ 実際に杖を取り上げなくても、お前らは敵だと思っついて、こっちはすぐにでも動けるって宣言するだけで随分違うだろ」

「物理的じゃなくて精神的に縛るってことか」

「今はそうなってないの？」

ペニーがそういつたのでオスカーは資料を読んだ。しかしそういう内容は読んだ感じ見つからなかった。

「今はそうなってないみたいですね。狼人間は魔法省の魔法生物規制管理部が処刑とかそう言うのは無さそうです。アズカバン送りなんでしょうね。これがキメラとかドラゴンならハンターや警察部隊が呪文でやつつけるんでしようけど」

「確かに法律で相対的に狼人間に対する刑罰をひどくすると言うのは良い考えだと思う。直接的な締め付けだと反抗される可能性がある。だから段階的に規制を強めていけばいいと言うことか」

「まあじゃあそれでいいんじゃないか。オスカー、だいたい君の意見が入っているから君が発表してくれないか？」

デイエゴがそういつたせいでオスカーの方へ視線が集まった。オスカーは特にタルボットとペニーが納得しているのかどうか怪しいと思っつていた。

「僕もそれで構わない。相手が狼人間を味方に引き入れるという行動をするならそれ以上の手を打てばいい」

「私もそれでいいと思う」

「オスカーがとつとと説明してください。どうせ相手はエストが出てくるでしょうから、エストの相手はオスカーがするに限ります」

「分かった」

オスカーは引き受けた後、自分が何を喋れば良いのか考えた。喋る内容は、自分たち魔法省側が狼人間を敵視すると言う事。それにどう敵視するか、狼人間が何かした際の刑罰を重くすると言う事だった。

オスカーが考えている間にクラリーナが手を挙げてクレスウエルを呼び出していた。

「終わったのかな？ 誰が発表する？」

「自分が言います」

「じゃあみんな机だけ向こう側のグループと向かい合うように変えてくれ。ミスター・ドロホフは拡声呪文は使えるかな？」

「はい」

「じゃあ私は向こうのチームとみんなに言ってくるよ」

議論に参加するチームはみんなで机を動かして、お互いに向き合うようにした。向こう側には良く知った顔が三つあったが、エストとトックスはまだお互いに何か喋っているようで、チャーリーは眠くなったのか半分ふねをこいでいた。

「オスカー、これって二チームとも狼人間を味方にしないってなったらどうなるんでしょうか？」

「その時はそれで終了なんじゃないか？ それかどっちかが狼人間を味方にしますって言うまで続けるとかかな」

「まあそうですね。取りあえず喋っていただきますい」

「喋ればいいんだろ」

お互いのチームが向き合うと少し大広間は静かになった。クレスウエルが演台から話す。

「じゃあ、左側、体制側のチームから話してくれ。君たちがどう狼人間に対応するかをだ。そして、それが終わったら右側、反体制側のチームから誰かが質問をする。その質問にもう片方のチームは答える。この答えるのも誰がやってもいい。じゃあ初めてくれ」

立ち上がって喋ろうとすると、やっぱり大広間のみんなの視線が集まっているのがオスカーには分かった。決闘トーナメントの時も視線が集まっていたはずだったが、もつと遠かったし、それに一人で出ているわけでもなく、決闘と言う集中する要素もあったので、オスカーはこんな状態は組み分け帽子以来ではないかと思った。

「じゃあ、俺たち…… 私たちのチームの対応を発表します」

「二応発表者は名前と寮を言ってくれ」

「スリザリンのオスカー・ドロホフです。まず、私たちのチームは狼人間と戦争中は敵対した方が良いと判断しました。この理由は、私たちは狼人間を信用していないこと。狼人間も私たちを同様に信用していないこと。次に狼人間を取り込む為の労力を割きたくない事です」

ここでオスカーは一息いれて周りを見た。エストとトックスは真つすぐこつちを見ていた。広間の他の人達も自分の方を見ている様だったし、クレスウエルは眉一つ動かさずに話を聞いている様だった。

「私たちは狼人間を取り込む為の労力は無駄だと考えました。その労力は戦争に集中させるべきだと考えました。なぜなら狼人間は我々を信用しておらず、相手側、反体制側は暴力というエサを簡単に与えることが出来ませんが、我々にはできません。我々が狼人間を味方につける労力と反体制側の同様の労力には大きな差ができます。これは狼人間が敵に回ったとしても、それを上回るものであると判断しました」

考えている間にさつき議論で話さなかった内容や、話してはいても、論理的な内容にまとめることが出来なかった内容もオスカーの脳みそに浮かんで来た。オスカーはもう少し面倒になったので全部喋れば良いと考えた。

「そのため、我々は狼人間と敵対する道を選びます。その具体的な行動を説明します。我々は直接的に杖を取り上げたり、アズカバンに狼人間を問答無用で収監と言った手は取りません。ただし、最初に狼人間に対する刑罰等を厳罰化します。具体的には死喰い人同様に、狼人間の鎮圧時に許されざる呪文を許可すること。次に捕獲時にはアズカバンへの収監では無く、吸魂鬼のキスを実行することです」

大広間のざわめきがさらに大きくなった。オスカーは自分で言っていて、ちよつと気持ち悪くなりそうだった。オスカーは向こう側の三人をあまり見たくなかったので、視線をみんなの顔より少し上に合わせた。

「これによって、狼人間側が我々体制側に反抗するメリットを少なくします。さらに狼人間には反体制側が純血主義である以上、狼人間を

受け入れる余地は一切ないと情報を流します。加えて反体制側には純血主義が狼人間を味方につけるのは明らかに矛盾していると指摘します。我々が考案した狼人間への対応策は以上です」

「いい発表だった。みんな拍手を」

まばらに拍手が起こった。オスカーが座ると隣に座っている面々が声をかけてくれた。それにクレスウエルの声も響く。

「オスカー、お疲れ様です」

「いい感じだったな」

「発表ありがとう」

「では反体制側のチームは質問内容を考えてくれ。五分後に質問の間を設ける」

相手チームでは立ち上がって、エストとトンクスが何か喋っていてそこに時々レイブクロウの監督生二人が割って入っているように見えた。チャーリーは何か別の事を考えているのか、さっきと違って眠くは無さそうだったが議論に入る気は無さそうだった。

「何ですか、向こうの三人が心配ですか？」

「まああんまりストッパーはいないよな」

「トンクスもエストもそんなに子供じゃないですよ。最近ちよつとピリピリしてますけど、ダイアゴン横丁で会った時のレアに比べればだいぶましじゃないですか？」

「そのころはクラーナの方がピリピリしてただろ」

「何ですかそれ。オスカーだってただの置物みたいに喋らなかつたでしょう」

「二人とも仲がいいのは羨ましいけど、僕らの方も質問の内容を考ええの方がいいと思うね」

デイエゴに言われてオスカーはクラーナとの話をやめた。と言っても、質問の対応を考えようにも時間は少なかつたし、何を喋れば良いのかもオスカーには考え付かなかつた。

「質問って言っても、あれですよ、私たちがさっきオスカーに言ってもらった内容の詳細を聞くくらいでしょう」

「死喰い人達がどう動いたらどういった行動にでるのか、それが決

まっているかを聞いてくると僕は思う」

「タルボット、それは死喰い人が狼人間を味方に付けたら私たちがどうするのかを聞いてくるってこと?」

「そうだ。それを先に決めておいてもいいかもしれない」

相手が次に動いたらどう動くのかを教えると言うことだろうか?

オスカーにはそれを相手に喋るメリットが考え付かなかった。

「嘘をついてもいいなら喋ってもいいと思うけど、ダメなら言う意味がないんじゃないか? だって、自分たちが次にどうするかを教えることになるだろ?」

「あー、確かにクレスウエル先生は嘘はダメとは言ってなかったな。僕たちのさっきの発言を相手の行動を引き出すための嘘だってことにしてもいいのか」

「それは流石にわけ分からなくなるでしょう。授業中に終わらないですよ」

オスカー達がブラフで相手に情報を与えていいのかどうなのか、それで揉めている間に相手の持ち時間は過ぎていた。

「時間だ。さつきから少し耳に入っては来たが、基本的に嘘はダメだ。確かに現実世界では相手をひっかけられるための行動も起こすが、今回はそう言った事はしない。では質問の時間だ。質問したい人が立ち上がって質問してくれ」

クレスウエル先生がそう言うと、向こうのチームではまだ何か話しているようで、中々誰も立って質問しようとはしていなかった。やっとしばらくしてからエストが立ち上がった。

「スリザリンのエストレヤ・プルウェットです。二つ質問があります。先ほどの立案では、狼人間を味方につける労力のお話がありました。それは具体的に何を示していますか? また、狼人間や死喰い人に情報を流すと言っていました。それは狼人間を味方につける際の行動と何か違いがありますか?」

オスカーのチームは顔を見合わせた。確かに味方につける労力が具体的に何を指しているのかについての話は一度もしていなかったからだ。

「要は狼人間のコミュニティとかに入って、魔法省とかダンブルドア先生の側につくって話をして回るってことだよな？」

「そうなるだろう。もう片方は日刊預言者新聞や魔法省の広報で発表すればいいと考えていた」

「じゃあそれでいきますよ。私喋ってもいいですか？」

「お願いするよ」

「私もそれでいいと思う」

今度はクラリーナが立ち上がった喋った。

「先ほどの質問に返答します。グリフィンドールのクラリーナ・ムードイです。一つ目の質問ですが、私たちは狼人間のコミュニティ等に潜入して、味方になる様に言って回る。何らかのこれまで与えて来なかったメリットを提示する等の認識でした。二つ目では、日刊預言者新聞や魔法省の広報等を手段として考えていました」

「ありがとうございます」

エストがありがとうと言った後は、やっぱり向こうのチームもこちらのチームも静まり返っていた。質問の時間はそんなには長くクレスウェル先生は取っていないと思ったので、オスカーはこのまま終わるのではないかと思っていた。

「ハッフルパフのニンファアドーラ・トンクスです。一つ質問があるわ。魔法省が狼人間に対してそう言った態度をとるってことは、他の生き物に対しても同じような事をするってことよ…… ですよね？ つまり、ゴブリンや巨人や屋敷しもべに対しても？」

今度の質問にはざわめきが大広間から上がった。クラリーナがさつき少し言っていたのと同じような内容だったし、トンクスらしい質問だとオスカーは思った。

「魔法省が当時どうしてたかは分からないけど、その認識で合ってるよな？」

「それ以上に、魔法省は他人所有物である屋敷しもべに危害を加えることでもない限り、屋敷しもべの生死や行動なんて考えないだろう」「しもべ妖精は人間の思い通りっていう事か？ 生かすのも殺すのも？」

「実際、屋敷しもべが人間に逆らうとどうなのかって考えたことはないな」

オスカーは何か釈然としない気分になった。オスカーの中では屋敷しもべの方が狼人間の何十倍も人間に近い存在だったからだ。見ず知らずの狼人間がいたとして、ペンスとどちらを助けるか、オスカーには選択の余地は無いように思えた。

「私はトンクスの言っている通りだと思いますけど。狼人間に適用するなら、他の生き物もそうなんでしょう。だいたい死喰い人もそんな扱いですし、同じ人間でさえそういう扱いなんですから」

「そうだと返答しても特にこちらに不利益は無いと思う」

「私は狼人間の方がゴブリンより危険だと思う。フリットウィック先生はゴブリンの血が入っているらしいけど凄く優しい……」

同じ人間、死喰い人と狼人間、それにフリットウィック先生ならオスカーが一番フリットウィック先生が人間だと言うだろう。ならペンスとフリットウィック先生ならどうなのか、もしかしたらペンスの方が人間だとオスカーは思っているかもしれない。しかしなかった。「とりあえず、トンクスに返すのはそうだでいいか？」

オスカーが聞くとみんなとりあえず首で肯定したのでオスカーは質問に返すことにした。

「スリザリンのオスカー・ドロホフです。先ほどの質問に回答します。質問の通り、我々は必要に応じて同様の対応を他の生き物に行います」

「わかった…… わかりました。ありがとうございます」

「じゃあ質問はここまでにしよう。一応私の授業の後にはアンブリッジ先生の授業も入っているから、このままだとみんながディナーを食べている横で君たちは闇の魔術に対する防衛術を受けることになってしまう」

クレスウエルがそう言って質問が打ち切られた。オスカーはやっぱりさっきのトンクスの質問が頭の中で引っかかっていると思っていた。

「じゃあ二十分後に反体制側のチームは自分たちの対応をまとめて発

表してくれ。ほかのみんなも自分がもし反体制側の人間なら狼人間をどうするか考えて欲しい」

今度はオスカー達が待つ番だった。やっぱりオスカーは向こうのチームが気になってそつちを見ていた。エストとトンクスが相変わらず二人だけ立ち上がって喋っていた。かなり真面目な表情をしているのがオスカーにも見える。

「だからそんなに心配なんですか？ さっきから毎回あつち見てるじゃないですか」

「え？ まあ…… なんか夏休みにチャリーがエストとトンクスが喧嘩してもおかしく無いとか言ってたしな」

「チャリーの言うことなんて、クイディッチと魔法生物以外では信用できないですよ。ほら、私たちも向こう側がどうするか考えた方がいいじゃないですか」

「そうだな。まあやっぱり俺が向こう側なら魔法省の戦力を削りたいだろうから、やっぱり狼人間を使うかな」

オスカーがボソツとそう言うのと全員の視線がオスカーに集まった。オスカーは軽く言ったつもりだったが、果たして他の人がオスカーの考えていた重さで受け取ったのかは怪しかった。

「ドロホフ、使うというのは具体的にどういう意味なんだ？」

「戦争中のグレイバックみたいな感じだろうな。魔法族の親が一番嫌なのは自分の子供が噛まれることだろ？ それは脅しにも使えるし、何より死喰い人は自分で手を汚さなくてもいい。最悪、俺がさっき言った狼人間との共闘なんて純血主義はしないって言うのも、服従の呪文で狼人間を従えてたって言えばいいことだ。そうすれば自分の手は汚れず、噛まれた魔法族やその親や仲間が一番恨むのは狼人間だ」

服従の呪文、それは恐らく魔法族が発明した呪文の中で最悪の呪文だった。オスカーはそれがどれだけ悪意と身勝手に満ちた呪文なのか自分の体で知っていたし、使ったこともあった。相変わらずみんなの視線はオスカーに集まっていた。オスカーはみんなはそういう発想ができないのだろうかと思った。

「オスカー君は……」

「君は随分詳しいんだなドロホフ。僕は狼人間に服従の呪文を使うなんて発想はできなかった」

「ウインガー、言い方を考えてください。あなたが聞いたんですよ」

「そんなに熱くならない方がいい。何より僕たちは今は全員魔法省だろ？ 仲間ってわけだ」

ちよつと話し過ぎたのかもしれないとオスカーは思った。ペニーの顔は少し青くなっていたし、タルボットは明らかにオスカーの方を睨んでいた。オスカーはそういう顔や視線を感じたのはもしかすると二年生のレア以来かもしれないと考えた。

「ドロホフの言っていることは正しい。相手は手段を選ぶ必要はない。あいつらは狼人間を使って僕たちに脅しを仕掛けたり、物理的な脅威を与えてくるはずだ」

「まあ、狼人間全員が敵に回るわけじゃないだろうと思う。僕らが例のあの人が怖いと同じくらい、狼人間も例のあの人が怖いだろう？」
「私もそう思う。例のあの人が怖くない人なんてダブルルドア先生くらいだと思うから」

狼人間にとつてもヴォルデモートは脅威だった。そこにもしかすればつけ込むチャンスがあるのかもしれないなかった。

「もつと私たちは狼人間にヴお…… ヴォルデモートが脅威だつて思わせるような事をした方がいいって事ですか？」

「手段を選ばないならいくらでもやりようはあるんだろうな」

「ドロ……」

「オスカーが言わなくてもいいですよ。簡単な話でしょう。私たちが死喰い人に服従の呪文を使って狼人間を襲わせればいいんです。それが死喰い人のふりをして狼人間を襲えばいいってことでしょうか？」

「違いますか？」

「まあそんな感じだな」

人間の考えることは他の誰かも考えている。ヴォルデモートならそんな事を考えるのは朝飯前だろうとオスカーは思った。ヴォルデモートはバカでは無く、むしろ魔法大臣よりも賢く、ダブルルドア先

生と同じくらい賢いのだ。自分の魔法力の高さ故の傲慢さやプライドに足をすくわれることはあるかもしれないが、狼人間を利用することに彼は良心の呵責など一ミリも感じないだろうとオスカーは知っていた。

「そこまでいくとどっちが死喰い人か分からないな」

「私も流石にそこまではしたくないわ。どっちが狼人間で死喰い人なのか分からなくなるから」

「けど一番効率的だ。狼人間にも死喰い人にも一番損害を与えることができる」

どこまで非情に人間がなれるのかはオスカーには分からなかった。ただ、人間は外で人を殺したり拷問したりしていても、家では普通でいることが出来るのだ。オスカーはそれを知っていた。そして、もしかすれば死喰い人も闇祓いも同じような存在なのかもしれない。彼らは両方とも同じことができるかもしれない。

「それを魔法大臣は命令できるのか？ 魔法大臣が命令しても、魔法執行部の部長や闇祓い局の局長が命令できるのか分からないし、闇祓いがやりたいとも俺には思えないな」

「多分やりますよ。闇祓いはそういう仕事のはずです。ジョンやガヴェインさん…… 私が知ってる闇祓いですけど、その人たちは命令ならやると思います。叔父さんやキングズリーは怪しいですけど。でも、多分必要ならやりますよ。元々同族狩りなんて言われてた職業ですから、同族より狼人間を狩る方がよっぽど楽でしょう。やりたいとかやりたくないとかそういう職業じゃないですよ」

オスカーはクラリーナにそんな事を喋らせたいわけでは無かった。周りを見るとタルボットはクラリーナの話を真剣に聞いているように見えたし、他の二人もさつきよりちゃんと言話を聞いているように見えた。

「まあ相手の出方次第だろうな。それにまだ相手が狼人間を味方にするって決めたわけじゃないだろう？」

「普通に考えれば狼人間を使うはずだ」

「エストはそんなに普通じゃないですよ。私たちの学年ならみんな

知ってるでしょう」

「ちよつとスリザリンのキャプテンには手は出せないかな。僕もそこまで命知らずじゃない」

「トックスが自分より個性的だって思ってるのはエストちゃんだけだわ」

トックスもあんまり普通では無いとオスカーは思っていた。エストもトックスも自分の中の自分と外から見た自分に大きな差があるのではないかとオスカーは考えていたからだ。

「じゃあそろそろ時間だ。反体制側のチームは発表してくれ。あと、もしどちらのチームも狼人間を味方にしないという選択なら、その時点で今回の議論は終わりにする。少し時間も押している」

終了の合図と同時にオスカー達はまた向こう側を全員で見れるように机と椅子を並び直した。向こうは今度はトックスが真ん中に座っていた。さつきはエストが真ん中に座っていたはずだったのだ。

「じゃあ、ハツフルパフのニンファドーラ・トックスが発表します。最初に私たち、例のあの人と死喰い人が狼人間をどうするかだけど、私たちは狼人間を敵とします。これには大きく二つの理由があります。一つ目は狼人間を味方にしなくてもコントロールできること、二つ目は私たちの目的を考えたからです」

トックスが死喰い人になる。オスカーにはそんな想像は全くできなかった。みんなそれぞれに色んな過去があるはずだったが、トックスは性格からして全く死喰い人に向いているとオスカーには思えなかった。だから、淡々とトックスが死喰い人側の事を述べていくのはオスカーにはとんでもない違和感があった。

「二つ目の理由を私が述べます。二つ目の方はエストレヤ・プルウェットの方から述べます。一つ目の理由では、二つの事象からそうだと考えることが出来ます。一つは体制側が狼人間を敵視していることです。これより、狼人間には我々反体制側を攻撃する理由がありません。もう一つは服従の呪文の存在です。我々は体制側と違ってこの呪文の使用に制限がありません。我々は体制側の人間に服従の

呪文をかけて狼人間を攻撃することも、狼人間に服従の呪文をかけて攻撃することもできます。狼人間を仲間としなくても狼人間と体制側が争う状況を作り出すことが出来ます。つまり簡単に狼人間をコントロール可能です。エスト、あとお願い」

トンクスの髪の毛が少し青みを帯びているのは偶然ではないとオスカーには分かった。そしてどうしてトンクスが自分で発表しようと考えたのか謎だった。多分、このアイデアはエストかチャーリーのモノだとオスカーは思ったからだ。

「スリザリンのエストレヤ・プルウエットが発表します。もう一つの理由、我々の目的を考えた場合です。これはヴォルデモート卿と死喰い人達の理念や考えに基づいて考えました」

エストが恐れもせずになんか言うところまでで一番大きいざわめきが大広間に広がった。そしてこれまでが一番みんな集中して話を聞いているとオスカーは思った。もしかするとエストはわざとヴォルデモートの名前を出したかもしれない。なかった。

「彼ら…… 私たちの理念は簡単です。純血種の魔法族による魔法界の支配です。純血種の魔法族以外は人間ではありません。マグル、狼人間、ゴブリン、ヴィーラ、巨人、屋敷しもべ妖精と言った、特に魔法族と交わることのできる種族は恐るべき不安定要素だと考えることが出来ます。彼らと純血種の接点をできるだけ少なくすることが求められます。そして狼人間は純血種の魔法族を交わること無しに別の種族へと変えることが出来ます。これは恐るべき能力です。むしろマグル以上に狂暴で、魔法を使うことができ、恐るべき汚染能力を持つ種族だと言えます。我々の理念に従うならば、狼人間は絶滅させなければなりません。マグルは数からして絶滅は不可能に近いですが、狼人間の数はせいぜいグレートブリテン全体の推定最大数で二百頭です。巨人の先例を考えても絶滅は可能だと考えられます」

ざわめきはもっと大きくなった。お人形のような白いエストの顔で絶滅とか汚染という単語が聞こえてくるとオスカーは少し怖くなってくる気さえした。

「そして絶滅を実行するまたとない状況だと我々は考えました。魔法

省は狼人間を保護しないと宣言しました。むしろ魔法省と戦争をす
るよりも狼人間を絶滅させるべき時勢だと言うことです。魔法省と
しばらくの和平を望む事すら計画に入れるべきだと我々は考えてい
ます。元々我々の戦力は魔法省よりも優勢です。一人の闇祓いに五
人の死喰い人を割り当てる事が出来ます。和平によるしばらくの
時間はさらに我々の戦力を強大にするでしょう。そして、我々の理念
を成就させるためには、滅ぼすべきは魔法省では無く狼人間だと言う
ことです」

もちろん、トックスやエストが本気でそう言っているわけでは無い
のは大広間の誰もが分かっていたはずだった。しかし、本当に淡々と
事実を述べる様に言われると本当にそれが正しいのではないかと
思ってしまうそうだった。

「以上の二つの理由より、我々は狼人間と敵対します。そしてこの決
定は魔法省以上に魔法族の事を我々が考えている理由となるでしょ
う。我々は魔法族を魔法族以外から守ります。それにはどんな手段
も厭いません。これは魔法省やそれに付随する勢力にはできない決
定です。我々の狼人間への対応は以上です」

「みんな拍手を」

パチパチパチパチとまばらな拍手が起こった。さっきのオスカー
の発表よりも拍手は少なかった。クレスウエル先生は授業がこんな
内容になると考えていたのか、オスカーには疑問だった。

「では両方が狼人間を敵視するという選択をしたわけだが、これにつ
いて何か質問や思うところはあるかな？ 誰でもいい、何か意見があ
れば手を挙げて欲しい」

先生がそう言っても大広間は静かなままだった。さっきまでのざ
わめきすらどこかに消えてしまっていた。すると何故かさつき発表
したはずの反体制側のチームから手が挙がった。

「ミスター・ウィーズリー」

「えーっと、あんまり僕らの中でもまとめきれなかったんですけど、エ
スト…… エストレヤが発表した内容は、僕らの中では多分もし戦争
にその死喰い人達が勝っていたら、狼人間を絶滅させるだろうと考え

たからなんです。僕はこれは本当にそうなのかと思ったのと……つまり僕たちは今も危険な生き物をむしろ保護したり使ったりしているわけです。ドラゴンとか吸魂鬼とか、だから彼らが本当にそういう行動にでるのかなと思つたのと、それと戦争中にそれをする意味があるのかと僕は思つてました。つまり、戦争に勝つた後でもいいんじゃないかってことです」

「たしかに面白い質問だと私は思う。じゃあ二つ目の質問から考えてみよう。戦争中に狼人間を……魔法省の職員としては不適切な言葉だが、絶滅させる必要性はあるのか？ 戦争終了後に行つた方が効率的ではないのか？ そういうことだ。誰か意見はあるかな？」

むしろチャーリーはレイブクロウ向きではないのだろうかとおスカーは少し思つた。魔法生物や怪物が好きなのに、チャーリーは怪物が人間とは違う生き物だと明確に理解している節があつた。その上でチャーリーは魔法生物が好きなのだ。

「ミスター・ドロホフ」

「狼人間に味方する魔法使いが戦争中の方が少ないからではないでしょうか。つまり、戦争中はみんな余裕がなくて自分の事しか考えられない。でも、どっちが勝つたとしても戦争が終われば少し余裕ができる。そうなれば狼人間を助ける魔法族が出てくるんじゃないでしょうか」

「なるほど、そうなるかと戦争中の方がやりやすいという事になるのかな？ 他に理由は考えられるかな？ ミス・プルウエツト」

「チャーリー……チャールズのもう一つの質問にも重なりますが、魔法族にとって最も重要な要素が血だからです。吸魂鬼を魔法省ですら未だに使う理由は、単純にアズカバンの吸魂鬼が恐ろしいという理由以外では、魔法族を無力化しながら血を残すことが出来るからです。たとえ幸福が吸い取られたとしても、キスによつて抜け殻になつたとしても、血を残すことが出来ます。これは死の呪文では実現できない事です。魔法族にとって最重要なのが血だと言うことは明確です。そう考えれば、狼人間を最優先で滅ぼす理由になります。効率よりも時間の方が優先されると言うことです」

さつきからどうしてこんな残酷な話ばかりしないといけないのかオスカーには分からなかった。多分、大広間のほとんどの人間はこんな話はしたくないし、聞きたくないのではないだろうか。吸魂鬼のキスをされた魔法族を血の保存に使う。本当に魔法省がそんなことを考えて吸魂鬼を管理しているのだとすれば、もう倫理とかそういうネジが吹っ飛んでいるとしか思えなかった。

「なるほど、ミスター・ウィーズリーの質問二つに答えたわけだ。一つは狼人間を他の生物と違って絶滅させる理由。これは魔法族にとって血が一番重要だから。二つ目の戦争中でもやらなければならぬ理由。これも魔法族にとって血が一番重要だから、効率より早く滅ぼさないといけない。なるほど、吸魂鬼の使い方は面白い考察だと思う。スリザリンに二十点。さて、他に質問はないかな？ ミス・トunks」

「先生は本当はどんな議論をして欲しかったわけ…… ですか？ 私ほもつと、狼人間をどうやって味方にするかって話をするって思ってたから…… ほら、狼人間を味方にするには狼人間がどう考えるかとかを考えると思ってたのよ。だって、先生が最初に話をしてたのは、自分がその人たちになりきって考えるとか言ってたじゃない」

トunksの言う通り、オスカー達のチームもエスト達のチームも、魔法省や死喰い人達の気持ちには多少より添えても、狼人間達の気持ちにはより添えていなかった。ここでやっとクレスウエルは少し笑顔になった。

「面白い質問だし、まさに私が考えていた通りの事をミス・トunksは言ってくれた。ハツフルパフに二十点。その通りで、私はてつきりみんなが狼人間をどうやって味方につけるかを議論するのだと思っていた。これはまさに私の考える力が足りなかったわけだ。ただ、君たちは誰を敵とするのか、そして自分たちの目的は何でそれを達成するにはどうすればよいのかは議論してくれただと思ってる。しかし、確かに誰かを動かすときに、動かす側の気持ちや感性や考え方を理解して欲しかったのも確かだ。それは恐怖よりも人間を動かす時があるからだ」

クレスウエルがそういういい終わると、大広間のドアが開く重いギギつという音と、沢山の人間の足音が聞こえた。靴に鉄板でも入っているかのような甲高い音が何人分も響いていた。ドローレス・アンブリッジが沢山の人間を引き連れて入ってくる。アンブリッジの直後に仮面をつけて顔立ちや髪型が分からない人間が二人、オスカーの見覚えのある恰好をしている。その後ろに十人くらい魔法省の役人の格好をした人間がいた。

「クレスウエル先生。わたくしそろそろお時間だと思つて皆さんをつれてやつて来たのですけど」

「アンブリッジ先生、申し訳ありません。すぐに授業は終わります。先に実技用の準備をなさつてはどうかと」

「あらそうですね。じゃあ皆さんよろしくお願いしますわ」

クレスウエルとアンブリッジが話終わると、魔法省の役人らしき十人くらいが広間の奥の方にオスカー達の見覚えのある決闘用の膜をつくり始めた。十数人でやっているためなのか、青い膜では無く、少し金色がかつた膜が作られていて、さらに決闘トーナメントで見たように床が少し浮かびあがつてステージの様になった。

「オスカー、闇祓いです。あの二人」

「そうだよな、あの恰好」

クラーナの言う通りでオスカーが見覚えがあると云つた服を着た二人は闇祓いに違い無かつた。オスカーはキングズリーが同じような恰好をしているのを何度か見たことがあつたのだ。

「じゃあ闇の魔術に対する防衛術の理論はこれで終わりだ。みんな最初の席に戻つてアンブリッジ先生の指示を待つてくれ、お疲れ様だ」

クレスウエル先生の号令に合わせてみんな元座つていた場所に戻り始めた。デイエゴとペニーはお疲れ様と挨拶があつたがタルボットからは無く、それにペニーの顔はまだ少し青いかつた。

「やっぱり向こうのチームの方が良かったですか？」

「え？」

「だって、オスカーは今日ずっと向こうのチーム方見てたでしょう？」

それに点数を貰ったのもエストとトunksスじゃないですか」

「別にそんなことないけどな。いつもと違うチームだと意見とか視点とか違うからな」

「オスカーもみんな以外の人に興味あるんですか？」

「なんだそれ、別に他の人に興味が無いからみんなというわけじゃないぞ」

いまいちオスカーにはクラリーナが何を考えているのか理解できなかった。いつものトunksスと同じくらいオスカーには理解できなかった。

「ほら、さつき一緒だったペニーはトunksスとは別の意味で喋りやすいじゃないですか」

「喋りやすいから喋るわけじゃないだろ。最近は……」

最近ではクラリーナだろうが、エストだろうがちよっと喋り辛いとはオスカーには言えなかった。

「何ですか、最近は何？」

「デイエゴも喋りやすいだろ？ クラリーナはどうなんだ？」

「はあ？ あいつは誰でも彼でも女の子にあんな感じらしいですよ。」

トunksスは相手にされなかったらしいですから、私の方が上ですね」

「そんなランキングがあるのか」

「そんなランキングは無いですけど、驚くことに男子だったらチャリーは結構女子の会話に出てきますよ。シーカーでキャプテンで監督生ですから。まあ、同級生は魔法生物飼育学で本性を知ってますけど」

「クイディッチだとほんとに凄いからな。ホグワーツで一番上手いだろうし」

オスカーはさつきの話で一回頭がシリアスな感じになったせいとか、クラリーナとも気軽に話ができている気がした。オスカーは他の女子とはどうなるのだろうかと少し気になった。ジニーやトunksス先生は大丈夫だけれど、さつき喋っていたペニーや他の女の子だと自分は普通に喋れるのだろうかと考えたのだ。

「オスカーがそんなこと言っていないんですか？ ほら、なんでもエス

トが一番でしよう?」

「クイディツチに関しては何石に違はんじやないか? 多分、エストもそう思ってるだろうからな」

「へえ…… オスカーでもそう思うことがあるんですね」

「なんか最近クラーナもトングスに似てきたな」

「やめてくださいよ」

元の席に戻るともうエスト達は座っていた。またオスカーはチャリーで防壁を作るのに失敗していた。一番右にチャリーが座っていて、エスト、トングスの順で座っていたからだ。オスカーは最近そんなことばかり授業の前に考えている自分が嫌になってきた。

「オスカーお坊ちやまは仲良くできたわけ?」

「まあウインガーとオスカーは微妙な感じでしたね」

「そうなの? ペニーとデイエゴがいたからどうにかなると思ってたわ」

「なんかペニーは静かでしたね。いつもは食事の時とか授業の時も誰かと良く喋ってるはずだったと思いましたが」

確かにペニーは静かだった。いつもならトングスの羊皮紙を取り上げたりするくらいにぎやかな性格をしているとオスカーも思っていたので意外だったのだ。

「なんか狼人間で嫌なことがあったのかもしれないな。今日の話もあんまり気持ちいい話じゃなかったからな。トングス様子見といてくれないか?」

「何なの? あんたはまた女の子の事ばかりなわけね。頭の中ピンク色なんじやないの?」

「それはトングスの色だろ。今日はなんか青みかがってたけどな」

「オスカーは良くトングスのこと見てるんですね」

もうオスカーにはお手上げだった。誰かの事を言えば違う話題が出てくるので、もしかすると黙っているのが一番いいのかもしれないのだ。

「なんかクラーナ機嫌悪いじやないの。オスカーなんかやらかしたんじゃない?」

「別に機嫌は悪くないですよ」

「さあ!!.. こんにちは!!」

クラス全員が座ると、アンブリッジの媚びたような声が響いた。何人かからこんにちはの声が返ったが、流石に大広間の全員が返したわけでは無かった。

「チツチツ」

アンブリッジは舌を鳴らした。またあの甘ったるい声が響く。

「それではいけませんよ。みなさん、ほら、こんなふうには。『こんにちは、アンブリッジ先生』。ではもう一度いきますよ。はいこんにちは!!.. みなさん!!」

「こんにちは、アンブリッジ先生」

全員では無かったものの、さつきよりはよほど大きな声が大広間に広がった。

「そう、そう、別に難しくなくてでしょう？ それに闇の魔術に対する防衛術の実技では少しの油断が命取りになります。ですから、こうして挨拶でまずは気持ちを引き締めましょう」

アンブリッジが話している間、後ろにいる闇祓いと職員たちは全く微動だにしなかった。後ろでガードマンの様に立っているのだ。

「では、闇の魔術に対する防衛術の実技の説明をします。まずは皆さん杖を出して下さい。基本的にこの授業では実技の細かなメモをする時以外、杖を手から離してはいけません。みなさんのこれまでの授業では、理論と実技の境目が曖昧で非効率な授業となっていました。しかし、実際の闇の魔術に対する防衛術を使う場所で、杖を手放すことなどありません。ですから、わたくしの授業の間は杖を手放すこととはしないように」

そんな事を言っているくせに、アンブリッジは自分の杖を手を持っていないかった。オスカーはちよつとそれはどうなのだろうと思った。オスカーがそう思っているとアンブリッジはハンドバックから杖を取り出した。物凄く短い杖だった。オスカーはこんなに短い杖は見たことが無く、隣のクラーナの馬鹿長い杖とは対照的だと思った。

杖を振るといつの間にか出てきていた黒板に文字が現れた。『本当

に必要な防衛術』と書かれている。

「これまでは魔法省の出してきた指導要領に基づいて、ホグワーツで任命された教師が闇の魔術に対する防衛術を教えてきました。しかし、それは不十分であったと言わざるを得ません。これまでの闇の魔術に対する防衛術は戦争より前に決められた指導要領で行われていたのです。しかし、今、あなた方の親御様が求めているのはもっと高度な防衛術です。それこそ再度戦争が起こったとしても自分と家族を護れるような防衛術です。そして、もはや時代は戦後ではありません。魔法省は戦争の傷を癒し、抜本的な改革に取り組みます」

それが本当に求められているかは微妙だとオズカーは思った。なぜなら、闇の魔法使いとはホグワーツの卒業生だからだ。闇の魔術に対する防衛術の授業が高度なほど、闇の魔法使いもより強くなるのだ。

「そこで本年度の授業は魔法省が完全にバックアップします。二人の闇祓い、十二人の魔法警察部隊が徹底的な実技の教育を、そしてわたくし魔法不適性使用取締局局長のドロレス・アンブリッジがこれまでの指導要領との整合、マネジメント、皆さんの心理的支援を担当します」

ここまでやるのかと言う感じだとオズカーは思った。いくら闇の魔術に対する防衛術に一年しか続かない呪いがあるとしても、ここまです先生を増やすとはいったいどうなっているのかとオズカーは思ったのだ。なぜなら、去年までなら闇祓いを一人先生として連れてくるだけでも難しかったはずなのだ。

「さらにこの闇の魔術に対する防衛術では、到達度別のクラスを導入します。皆さんの到達度に合わせて、寮の区別なく到達度別のクラスを導入します。もちろん、ふくろう試験の実技もきっちりと学べますから安心なさい」

ここでざわめきがやっと広がった。エストの言っていたことは大體正しかったのだ。オズカーの横でクラリーナが手を挙げた。

「ミス・ムーディ？」

「質問をいいですか？」

「はい。大丈夫ですよ。皆さんも発言する場合はミス・ムーディのように挙手して発言してください」

「到達度別のクラスは闇の魔術に対する防衛術だけですか？ 他の教科にも適用されますか？ それと、学年の枠が外れることはありますか？」

「よろしい。今年度、到達度別のクラスを実施するのは闇の魔術に対する防衛術の実技だけです。また、学年ごとのクラスで行います。五年生の段階でNEWTレベルの実技の練習を最高評価の到達度別クラスで行う可能性はありますが、決して六年生、七年生と同じ授業を受けるわけではありません」

「わかりました。ありがとうございます」

「他に何か質問は？ 無いようですね？」

太つていてまるでガマガエルのようなのに、アンブリッジは意外と早く歩いていった。決闘用のスペースまで歩いてから生徒たちに向かって喋る。

「恐らく、皆さんはこれまでと違う授業形態に戸惑っていると思います。そこで、わたくしは皆さんに安心してもらおうと考えます。何より安心なのはきちんとした先生に教えてもらうことでしょうか？ ここに本職の闇祓いが二人います。両名ともNEWT試験で必要なすべての科目で最高の成績で合格し、実戦経験のある闇祓いです。ですが、自分の目で見るのが一番だとわたくしは考えています。二人ペアで本職の闇祓いと決闘を試してみたい人はいいますか？」

「オス……」

「はい!!」

エストがオスカーに話かける前に、オスカーの片手を勝手に持ってクラリーナが手を挙げていた。

「おや、ミス・ムーディとミスター・ドロホフですか？ 他に誰かやりたい人はいいますか？」

特に誰も手は挙がらなかった。クラリーナが耳元で囁いた。

「いいですよね？ オスカー？」

「ああ、まあいいけど……」

「なんか今日のクラーナ元気よね」

オスカーがちよつとエストの方を向くと、少しむくれていた。やっぱりエストと一緒に荒事をする縁は無いのかもしれないなかった。

「では、ミス・ムーディ、ミスター・ドロホフ、檀上が上がって下さい。それにこの決闘用の保護膜は魔法省の警察部隊がきちんと作っているの、皆さんの魔法程度では壊すことはできませんから安心なさい。大人の魔法使いが十人は集まって反対呪文を唱えなければ壊すことはできません。ですから、実技や決闘をしている間は膜の外は完全に安全です」

二人で連れ立って決闘用のステージに上がったが、オスカーはクラーナとこういう事をするのも随分久しぶりだと思った。向こう側には仮面をつけた闇祓いが二人立っていた。

「あの仮面をつけていると誰か分からなくなるんです。家族でもその人だって分からないですよ外見だけだと」

「喋ったらわかるのか？」

「ええ、まあ声は隠せないですし、その人だってわかったら魔法は解けちゃいますから」

クラーナはかなりやる気の様だったが、オスカーはあまり決闘には乗り気では無かった。闇祓いはキングズリーが近くにいるせいもあってか、オスカーからすると味方だと思ってしまうのだ。

「オスカー、本気でやって下さいよ。相手をぶっ飛ばす気でやらないとヤバイですよ」

「分かった」

外でアンブリッジがニタニタした笑いをオスカー達に向けていた。オスカーはリータ・スキータの笑いを思い出して、少し嫌な気分になった。もう向こう側では闇祓い二人が杖を構えていた。

「では準備はいいですか？ ミス・ムーディ、ミスター・ドロホフ、これは実戦ではありませんから、杖を落としたり、失神すれば即終了です。いいですね？」

「はい」

「はい」

「では始めましょう」

アンブリッジの声と同時に闇祓いから失神光線が無言で飛んでくる。オスカーは時間差で飛んできた二つの光線を盾の呪文で弾いた。弾くのに合わせてクラリーナが失神光線を飛ばしたが、やはり向こうの闇祓いに弾かれた。

闇祓い二人は息の合った攻撃と防御を繰り返していた。一人が失神光線をもう一人が盾の呪文を使い、交互に隙間なく攻撃と防御をしてくるのだ。

「オスカー、オスカーも攻撃してください。スイッチが切り替わるみたいな感じの戦い方です。どこかでリズムを崩さないと私たち勝てないです」

「分かった」

今のままでオスカーは防戦に集中して、クラリーナは攻撃に集中していた。オスカーからすると防御呪文を使わないのは少し不安だった。二年生の時ならそうは思わなかったはずなのに、向こうから呪文が飛んでくる場所でクラリーナに呪文が飛ばない様に防御呪文を使わないのが不安なのだ。

「次の攻撃を弾いたら動くから同時に攻撃してくれ」

「わかりました」

オスカーは自分のローブを空中に投げて、変身術で無数の蜂に変身させた。蜂は闇祓いの二人に向かっていき、失神呪文が当たるとびに大きな煙幕を伴って爆発した。

クラリーナがそのまま煙幕で見えなくなった場所に突っ込んで行く。赤い失神光線が煙幕の中を飛び交う。オスカーは気合の入っていない失神光線を煙幕の向こう側に発射したが、どこにクラリーナがいるかわからない状況では中々攻撃は難しかった。

決闘に集中できていない。オスカーはそう思った。去年までのオスカーなら、決闘の間、レアを信頼してそっち側の事を考えなかったはずだった。しかし、今のオスカーは顔の分からない闇祓い二人相手にクラリーナが突っ込んで行くのが不安だったし、それに明確な敵では無い闇祓いに攻撃するのに気合が入らなかった。

「取りつかれるな!! 下がれ!!」

どこかで聞いた声が響いた。煙幕の向こう側でクラーナが相手の懐に入り込んでいた。背の低さは決闘に置いて明らかに有利だった。小柄な方の闇祓いの光線をしゃがむだけで避けて、魔女らしからぬ蹴りを相手の胸に叩きこんだ。

本来なら質量的にクラーナの蹴りなどいくらくらっても倒れなきそうな大人の男だと思える魔法使いが二メートルくらい吹っ飛んで石畳を転がっていった。

「プロテゴ マキシマ!!」

蹴り飛ばした後のクラーナに打ち込まれた失神光線をオスカーは盾の呪文で弾き飛ばして彼女の近くまで走った。

「闇祓いって何か服の中に入れてるんですね。一発でノックアウトできると思ってたんですけど」

「何したんだ?」

「蹴りと一緒にフリペンドが発動するようにしました」

「それであんなに吹っ飛んだのか。魔女が肉弾戦するなんてな」

そうオスカーが言うときクラーナはフフツと得意げに笑った。

「多分、オスカーは姉さんの決闘の仕方を見ることがあったらびつくりしますよ。物理的に人間やめてましたから」

「何だそれ」

軽口を叩きながらも、オスカーはノクターン横丁の時のようなスイッチが入らないと思った。あの時は明確に狼人間が敵だと認識できて、反射のスピードも魔法の切れも今とはくらべものにならなかつた。オスカーには相手の闇祓いがどうしても敵だと認識し辛かった。

相手の闇祓いはもう立ち上がって、二人で何か顔を見合わせた。小柄な方の闇祓いがオスカー達の方へ走ってくる。

「来ますよ。オスカー、ちよつと気合いれてください。何かやる気なさそうじゃないですか」

「やろうとしてるんだけど……」

走り込んでくる闇祓いは盾の呪文で弾きながらとにかく突っ込んできている。オスカーはクラーナと二人で失神光線を放ったが、全く

相手の勢いは落ちなかった。その後ろからもう一人が強烈な閃光を魔法で繰り出した。あのマスクは閃光も防ぐに違い無かった。オスカーとクラーナは一瞬視界が断絶する。オスカーは反射的に盾の呪文を唱えていた。

「オスカー!! 下がってください……」

クラーナの声が響く中、オスカーの盾の呪文を観察して、相手の闇祓いは一テンポずらして二人の懐に入り込んだ。相手のマスクが二人の近くに落ちる。そして相手は盾の呪文で自分を護りながら、なんともう一人が唱えた呼び寄せ呪文でさつき突っ込んできたのと同じようなスピードで後ろへ飛んでいた。

盾の呪文は間に合わない。先ほどの呪文とのタイムラグの間にマスクが落ちた。オスカーの前にはクラーナが立っていた。オレンジ色の爆風と音が二人を襲う。

「クラーナ!!」

鼓膜がおかしくなっているのか何なのか、オスカーの耳はキーンと言う音が響いていて、しばらく何も聞こえなかった。何かが焼ける匂いがしていた。爆風を浴びたのと関係無しにオスカーの背中に嫌な汗が流れていて、心臓のギアが変わった様に鼓動が早鐘を打っていた。

「ちよつと足がいきました。道具を闇祓いが使うのは卑怯じゃないですかね」

ローブが焼けていて、足を抑えてしゃがみこんでいるクラーナの姿が見えた。やっとオスカーは向こうに見える二人が敵だと認識できた。一人はオスカーが夏休みに見た顔をしていた。

「盾の呪文で凌いでおいてくれ」

「え？」

文字通り、オスカーは走りだした。相手は二人とも同じ場所にいる。二人から飛んでくる失神光線を最小限の盾の呪文でオスカーは弾いた。盾の呪文で全身を護る必要は無かった。光線が当たる時、当たる場所だけを弾けばタイムラグは最低限で済んだ。

相手は明らかにオスカーの視線をとらえようとしていた。オス

カーは自分からマスクをつけている方の闇祓いに視線を合わせた。さつき闇祓いが突っ込んできたのと同様にあっという間に相手との距離は詰まった。オスカーはわざとらしく杖を振った。オスカーのほんの少し前をマスクの闇祓いの失神光線がかすめた。

「やっぱり閉心術の練習をしといてよかった」

杖の魔法でマスクの無い闇祓いの足を固定して、ワンドレスマジックでオスカーはマスクの闇祓いを少し吹き飛ばした。マスクのとれた闇祓いの真正面までオスカーは接近し、相手の失神光線を弾く。

「魔法使いが殴るのが流行りらしい」

オスカーは思いつきり杖腕でない方でジョン・ドリーツシユのみぞおちを殴りつけた。殴りつけると同時に全力でフリペンドを思い描いてワンドレスマジックを放った。ドリーツシユの体が面白いように吹っ飛んでいって、保護呪文の泡の外側まで吹き飛んだ。

完全に頭のスイッチが切り替わっているとオスカーは思った。体と頭がそれぞれ半々ずつオスカーを支配していた。完全に集中できている。それがオスカーには分かった。そして、今まさに自分はここにいると言うことが実感できていた。

「ジョン？ オスカー、もしかしてもう一人の闇祓いも……」

クラーナの声はオスカーにはあまり聞こえていなかった。オスカーにはもう一人の闇祓いにも勝てる自信があつた。魔法力は相手が上だったが、反射や呪文のコントロールで若いオスカーの方が上だと、頭と体両方で分かっていた。そしてオスカーは文字通り目の前のマスクの男をぶちのめしたかったのだ。完全な集中に使っているその集中力の裏に明らかかな怒りをオスカーは感じていた。

「オスカー、聞こえていますか？ あの体格は……」

クラーナの隣までオスカーは来て、闇祓いに魔法を打ち込み続けていた。相手の失神呪文を最低限の盾の呪文と動きでオスカーは弾いた。そして相手は何かオスカーから開心術で動きを読み取ろうとして失敗していた。赤い閃光が何度も煌めいた。そしてその回数は明らかに闇祓いの方が多かった。オスカーが一度弾く間に相手は三度は失神光線を弾かなければならなかった。変身術をほとんど使え

ないこのフィールドでは、オスカーの反射神経は明らかに闇祓いに対して有利に働いてた。

「勝ちだ」

勝てる、オスカーはそう確信した。相手は開心術を使うのをやめていたがもうオスカーは完全に相手の動きを上回った自信があった。オスカーは相手に完全に勝ちたかった。冷静では無いと分かっていたが、クラリーナの横で完全に相手を上回って勝ちたかった。失神呪文では無く、衝撃呪文で相手のマスクを弾き飛ばしてオスカーは武装解除呪文を唱えようとした。よく知った顔が杖を向けた先にあった。ワントテンポ、呪文が放たれるのが遅くなった。

クラリーナがオスカーの腰を掴んで地面に引きずり落とすとした。赤い光線が同じ赤いローブに当たるのが見えて、ダークグレーの髪がオスカーの前で揺れた。

キングズリーがオスカーの方に杖を構えているのが見えた。オスカーは杖を上げていいのか分からなかった。

「ガシャン!!」

ガラスを割れる様な音が響いて、金色の保護膜が割れた。オスカーとキングズリーの間を銀色の光線が通り抜けた。髪の毛が逆立って、体中に鳥肌が立った。銀色の光線が当たった大広間の壁に一メートルくらいのクレーターができていた。

光線が飛んで来た方を見ると、エストが杖を構えてもう一方の手を挙げていた。

「アンブリッジ先生、質問があります」

「ミス……」

「プルウエットです。生徒一人の呪文で破壊できる保護膜は安全じゃないと思います」

「そ、そうね……」

「今すぐやめさせて下さい。先生が安全だと言っていた保護膜は安全じゃないの」

「わかりました。四人ともすぐにやめるように、警察部隊は倒れている者の容態を見なさい」

オスカーは見たことが無いくらい怒っているエストの方も、厳しい顔でこちらを見ているキングズリーの方も見る元気が無かった。さっきのクレスウエル先生の授業でも感じていたような、色んな感情がごちゃ混ぜになっていた。分かるのは意識が無いクラーナの体重と、太陽が沈みかかっている空を映す天井の青さくらいだった。

カモミール・フレツシュ

「これ今日中に帰れますかね？ マダム・ポンフリーはめちやくちや怒ってましたよね？」

「俺の見た中では一番怒ってたな」

ホグワーツの中では珍しくエストでは無くてクラーナと顔を合わせてご飯を食べていたが、オスカーは上の空だった。医務室の机で大広間と同じものであるう夕食を口に運んでいると、扉の外側からマダム・ポンフリーが怒鳴っている声が聞こえる。相手は恐らくアンブリッジ、クレススウェル、キングズリー、ドーリツシュだった。オスカーにはそれもあまり耳に入っていなかった。

「ジョンを吹っ飛ばしたのって手でフリペンドしたんですか？」

「フリペンドって言うか、フリペンドに近いと思うけど、レアが練習してた時にやたらモノを吹っ飛ばしてたからそれをまねした感じだ」

「手は大丈夫だったんですか？」

「なんか小指が折れてたらしい。あの時は気づかなかったしマダム・ポンフリーが一振りで治した」

杖腕でない方でドーリツシュを吹き飛ばした際にどうもオスカーの指は折れていたらしかった。オスカーはそれに全く気付いていなかったのだ。オスカーはあの時は集中していて、杖もいつかのように体の一部のみみたいだったのに、どうして気づけなかったのかが分からなかった。

「ドーリツシュさんは大丈夫だったんだろうか」

「闖越いなんですから大丈夫でしょう。学生のパンチやキックで重傷な闖越いなんてクビですよクビ」

クラーナと喋っているようで、オスカーは全然会話できていないことが分かっていった。去年は頭に引っ張られて仕方なかったのに、今年に体に引っ張られているとしか思えなかった。みんなと前みたいに喋ることが出来なかったし、今度はキングズリーに徹底的に勝ちに行こうとしていたのだ。

「オスカーが使ったみたい魔法の使い方は、小さい頃に一回姉さ

んに見せて貰ったんですよ。魔法省の練習場みたいなところで、ジョンとガヴェインさんをボコボコにしてみました」

「闇祓い二人を一人で相手なんてできるのか？」

「オスカーは今日自分が何してたのか分かってないんですか？」

「あの二人は本気じゃなかっただろ」

「まあそれはそうかもしれないですけど……」

二人は本気でオスカーを押しえつけようとか、殺してやろうとかは思っていなかったはずだとオスカーは考えていた。そもそも、本気で勝とうと考えるのなら、オスカーでは無くて負傷していたクラーナの方を攻撃すればよかったはずなのだ。

それよりも、オスカーからすればキングズリーに自分が何をしようと考えていたのかの方が重要だった。キングズリーを失神させるだけならもっと早くできたはずだったのだ。

「でもオスカーらしいですよ。マスクが取れた途端に攻撃できなくなるなんて」

「それで負けてたら世話がないけどな」

クラーナはそんな風に受け取ってくれていたが、オスカーからすればもっと問題なのは相手がキングズリーでないのなら自分は何をしようとしていたかだった。

明らかにオスカーはただ決闘に勝つことを目的にしていなかった。それなら武装解除をする必要は無かった。ルシウス・マルフォイの時の様に何かを伝えることが目的では無く、ただ自分のためにそれをやりたかったのではないのかと考えていた。

「オスカー、怒ってたんですか？ あの時？」

「分からないけどそうかもな。あの後のエストほどじゃないけど」

初めはクラーナの言う通りにただ怒っていたのかもしれないが、途中から目的がすり替わっている気がオスカーはしていた。オスカーは自分があらゆる意味で目のまえの闇祓いに膝を突かせたかったのだらうと思った。相手を失神させるのでは無くて、相手に自分の勝ちを認めさせたかったに違い無かったのだ。その結果、クラーナはオスカーの身代わりに失神していたのだ。

「最後に武装解除しようとしてたでしょう？　なんかグリフィンドールみたいなことしますよね」

「グリフィンドールみたいって何なんだ」

「トンクスのひいひいひいひいおじいさんなら無意味な虚栄心とか言うでしょうけど、そういうのですよ。スリザリンならもつと合理的にやるんじゃないですか？」

ひいがちよつと多いとオズカーは思った。そしてどうして負けてしまつて、ケガまでした決闘の後なのにクラーナが少しでは無くてもかなり嬉しそうなのかオズカーには理解できなかった。オズカーは夕食を食べ終わつてそのまま逃げるように後ろのベッドに寝転んだ。クラーナがついてくるようにオズカーが寝ているベッドに座つた。オズカーが考え付くのはベッドが固いのかクラーナが軽いのか、エストとトンクスよりベッドが沈み込まないと言う事くらいだった。

「グリフィンドールは目立ちたがり屋なんです。トンクスとはちよつと種類が違いますけど」

「トンクスのはカツコつけるとかそういうのじゃないからな」

「でしょう？　スリザリン生とかレイブンクロー生は目立ったりカツコついたりするのはくだらないって言いますが、結構そういうのも重要なんですよ」

決闘が始まる前よりずっと笑顔で上機嫌なクラーナの話をおズカーは聞いていた。オズカーには何がクラーナの機嫌を損ねて、何が機嫌を良くしているのかやっぱり分からなかった。クラーナの話を聞いて思い出すのは一年生のころのクラーナだった。確かにあの頃のクラーナなら目立ちたがり屋だと言っても差し支えなかった。どんどんクラーナは座つてる位置をおズカーの頭がある方に詰めてきた。

「こう。スネイプ先生みたいにマントを翻した後に自分の名前を名乗るんだろ？」

「そういう事ばかり言うのはやめてください。でも、私がホグワーツの入学時にああいう感じじゃなかったらオズカーとも喋らなかつたかもしれないでしょう？」

「お前が死喰い人の息子だろって、一人で正面から言ってきたのはクラリーナだけかもな」

「だから…… 私がそれを言いに行かなかったらオズカーはホグワーツ特急でエストとしか喋らなかつ……」

「俺がどこかのコンパートメントにいるって知ってて探しに来たのはクラリーナだけだな」

「そう…… そうでしよう？」

エストはオズカーが入学することを杖の話があったから知っていて、偶然空いているコンパートメントにオズカーがいたらしかつたが、ホグワーツ特急が動き出した後に理由はどうあれオズカー……では無く、アントニン・ドロホフの息子を探しに来たのはクラリーナだけに違い無かつた。オズカーにはどうしてそれでクラリーナが得意げになるのかはさっぱり分からなかつた。

「今なら姉さんの頭が…… トンクス並みの脳みそだったかもしれないって分かりますけど、一年生の時はこう…… 学年で一番目立って、私より強いやつに会いに行く…… みたいな方がいいと思つてたんですよ。それしか知らなかつたですから」

「それでエストに会つたわけか」

「そうですね。オズカーやエストやトンクスやドラゴン好き好きマンにはそれで会いましたね」

オズカーはクラリーナの姉が同学年で無くて良かったと思つた。フレッドとジョージみたいにクラリーナとクラリーナの姉が双子で同学年だつたら、オズカーは体がいくつあつても足りない気がしたのだ。

それにオズカーは一年生に違うコンパートメントで、エスト以外の誰かと座つていても、多分クラリーナとは出会つたのだろうと思つた。もちろんエストがいないホグワーツなどオズカーには考えられなかつたし、その時にクラリーナとどういふ距離感なのかもオズカーには考え付かなかつた。

「調子に乗つてる同級生とか上級生と決闘して強くなつたとか言つてたんですよ。ジョンとかクレスウエル先生とか、ジェームズ・ポッター…… リリー・エバンズ、ハリー・ポッターの父親と母親で姉さ

んの一個上の主席ですね。シリウス・ブラック、トンクスのいとこで死喰い人ですね。パトリシア・レークピック、何かトンクスのお母さんくらいの年で有名な呪い破りらしいです。とにかくそういう目立ってる学生に決闘を挑めば強くなれるとか言っていました」

「あれなのか。なんかムーディの血には戦わないと死ぬ魔法生物の血とか入ってるのか？」

「入ってたかもしれないですね。ちなみにダンブルドア先生以外で一番強いのはフリットウィック先生らしいです。マクゴナガル先生より強いらしいですよ」

決闘クラブの時にフリットウィック先生が決闘チャンピオンだと言っていたのは、姉から話を聞いていたのだろうと、オスカーは三年越しでやっと分かった。

しかし、先生にも決闘を仕掛ける学生など存在するのかとオスカーは思った。オスカーにはマクゴナガル先生やフリットウィック先生に決闘を挑むことなど考えもつかなかったからだ。

「最後はダンブルドア先生に決闘を挑みそうな勢いだな」

「したらしいですよ。その結果ガーゴイル像の横で三日間校長室の門番を代わりにやらされたらしいです。五人に分身して不意打ちしても多分勝てないって言っていました」

「分身できるのか」

「そんな呪文無いでしょう。逆転時計で五人に増えるとかしないと無理な話です」

ダンブルドア先生に挑む命知らずな学生など存在することがオスカーには驚愕だった。オスカーが七年生になったところでダンブルドア先生に勝てるビジョンなど浮かばなかったし、闇祓い局全員を連れてきて初めて勝負になるのではないかと考えていた。そして、さっきまで考えていたはずのキングズリーに自分が何をしようとしていたかと言うことより、今度は座るところかクラーナが靴を脱いでベツドに上がってヘッドボードに寄りかかっているのが問題だった。とにかくオスカーが今気になるのはクラーナとの物理的な距離だった。「まあ姉さんみたいな目立ちかたとか、トンクスみたいな規則破りで

の目立ち方は問題ですけど、目立つことは結構いい事なんですよ。だって、色んな人に目をかけて貰ったりとかは目立たないとできないじゃないですか」

「目立ちすぎもちよつと嫌だけどな」

「そうですか？ でも、オスカーも一年生の最初のころみたいなの目立ち方じゃないでしょう？ 今は別の意味で目立つんじゃないですか？」

「目立つって誰に目立つんだ？」

正直なところ、オスカーは早く外で怒鳴り合っている大人たちに入ってきて貰いたかった。結構オスカーは参っていたからだ。コントロールできてきているようで、全くコントロール不能だった決闘にも、これまでの様に喋れないクラリーナの会話にも参ってしまった。

もう横目で見ればクラリーナのローブの小さい繊維まで見えるくらい近かったのだ。新学期なのでほつれやシミも無くピカピカのローブだった。

「色んな人でしょう？ だって、一年生の時はそれこそさつきオスカーが言っていた、死喰い人の息子だとかみんな知らなかったですけど。今は私やエストじゃなくても、授業とか劇とか決闘トーナメントでのオスカーを知っているでしょう？」

「外から見ただけだろ。そう言うのは」

「でもそういうのも結構重要なんですよ。チャリーだって外から見たらグリフィンドールのクイディッチキャプテンでホグワーツで一番クイディッチが上手くて、監督生じゃないですか」

この話は前にもした気がオスカーはした。しかし、オスカーはあまり外からどう見られるかを考えたことが無かった。それこそチャリーもそのタイプだろうと思っていた。チャリーがそういう肩書を持つているのは、そう言われるのを望んで得たわけではなくて、ただクイディッチが好きだった結果としてそうなったのではないかと思うのだ。クラリーナには他の人から見たら距離が近いことくらいオスカーは分かって欲しかった。

「こうやってオスカーは私と良く喋ってますから、他の人より私の事

を知ってますけど。でも、外から見えるのは、私が赤のネクタイを着つけてて、ちよつと長い杖を持つてて、少し身長が低いってことじゃないですか。あとは監督生とか喋り方とかそういうのしか分からないわけですよ」

「身長はちよつとじゃなくなってきたと思う」

「それはオスカーの身長が伸びてるだけでしよう」

相変わらず怒鳴り合いが聞こえていて、そこにマクゴナガル先生とスネイプ先生の声が入って来たようだったが、マダム・ポンフリーは本気で怒っているらしく、まだ魔法省から来ている四人を怒鳴りつけていた。信じられないとか、ホグワーツの教諭と闇祓いの名折れとか滅茶苦茶に言っていた。

オスカーの方はクラーナとの会話のせいでクラーナの方を見ざるを得なかった。身長は最初会った時より伸びているはずだったが、オスカーの方がはるかに伸びていたのでむしろ小さく見えた。オスカーの傍の四人の中では一番クセの無いダークグレーの髪だとか、表情がわかり易い黒い瞳やキリツとした眉だとか、実は笑うとえくぼが見えるので余計子供っぽく見えるだとか、多分、声に出さないだけで色んな事をオスカーは知っていたが、やっぱり口には出せる気がしなかった。

「あの。なんでチラチラ見るんですか？」

「身長が伸びたのか考えてた」

「嘘でしょう」

「ほんとだ。見た感じ一年生から羊皮紙五巻分くらいは伸びてる」

「どうせ厚み換算なんでしょう？　なんかオスカーやっぱり変ですよね？　だいたいそうやってからかったり、面白くない冗談を言う時は内心と違う事を言ってるでしょう？」

オスカーはとつとキングズリーやドーリツシユに医務室に入ってきて貰いたかった。早く医務室から出たくて仕方なかったのだ。だいたいトンクスといい、ベッドの上やそばで喋っているところくな目に合わない事をオスカーは経験的に知っていた。

「どうしてわざわざキングズリーの仮面を吹っ飛ばして、武装解除し

ようとしたんですか？ オスカーらしくなくなかったですよ。武装解除はオスカーらしいですけど、仮面を吹っ飛ばすのはオスカーらしく無かったです」

「俺にも分からないからな。クラリーナにも分からないだろ」

「勝ちにこだわったんじゃないんですか？」

「勝ちに？ そうかもな。クラリーナの前だから完璧に闇祓いに勝ちたかったかも……」

「本当ですか？」

半分冗談に言っている途中でオスカーは恥ずかしくなってきたが、ベッドの上でクラリーナに詰め寄られてオスカーはいつかのエストのようにゴロゴロ転がってベッドの端まで逃げた。

「なんで逃げるんです？」

「最近みんなやたら近づいてくるからだろ」

「そうですか？ そんなにみんな変わらないと思いますけど……でも、私の前だから勝ちたかったなんてどうせ嘘でしょう？ だって、クレスウエル先生の時は自分の班の事はほつといてずっと向こうばかり見てたじゃないですか」

膝を抱えてそんな事を言われても、クラリーナの方ばかり見ていればいいとでも言うのだろうか？ しかオスカーは思えなかった。そしてそれは今のオスカーにはほぼ不可能だった。

「だからエストとトンクスが喧嘩するんじゃないかって考えてたんだよ。俺もクラリーナも向こうにはいなかったから、止める人もいないだろ」

「私より二人が危なっかしいから向こうばかり見ていたんですか？」

「だからそうだって、一年生とか二年生のころなら多分、最初にレアと会ったときみたいな感じで、タルボットとクラリーナは喧嘩してただろう？ でも今はそうじゃないから、向こうを見てたんだよ。なんか最近エストはピリピリしてて、ダンブルドア先生にさえ何か怒ってたからな。トンクスもなんか最近怒り方とか反応が違う気がするし」

相変わらずクラリーナの表情はわかり易かった。オスカーが寝転がって半目で彼女の眉と目を見ているだけでも、さつきまで不満そう

だったのが、なぜか嬉しそうに変わるのが分かるのだ。オスカーにはなぜ嬉しそうなのかは分からなかったが。

「割とオスカーは周りの事を見てるんですね。感心しました」

「何言ってるんだ」

「けど、オスカーはあぶなっかしい方がいいんですか?」

「だから何言ってるんだ。フリットウィック先生に決闘を挑んでも俺は止めないからな」

あぶなっかしい方がいいかと聞かれれば、オスカーは心配な人がいればその人の事を考えるかもしれないだったので、もしかすればその通りかもしれない。というか、最近誰かと話す事が人間関係の事ばかりで、オスカーはちよつとうんざりしそうでもあった。ドラゴンの卵だとか、マクゴナガル先生の宿題が多いだとかそういう話をしていた方がよほど気が休まるとオスカーは思っていた。

「じゃあ、そうですね、ほら医務室にいくと二年生の時の事を思い出しませんか? あの際に比べれば闇祓い二人なんて大したこと無かったですでしょう?」

「あの時に比べればな。ドーリツシユさんとかキングズリーと決闘もしたくないけどな」

「あんまり身内とそういう事するのは良いことじゃないですね。でも、ほとんど勝ちそうだったでしょう? 闇祓い二人に勝てそうって結構凄いことじゃないですか? キングズリーは結構凄腕の闇祓いらしいですし」

オスカーはやっぱりクラリーナは褒めて欲しいのだろうかと思った。監督生のバッジが届いた時もそうだったが、誰かに褒めて欲しいのではないのだろうかと思うのだ。多分、最近クラリーナを褒めたのは魔法薬学でのアンブリッジくらいなのだ。

「分かった。クラリーナは凄い」

「何ですかそれ。 Hogワーツに入る前の子供でもそんな適当な褒め方をされたら怒りますよ」

やっぱりオスカーにはクラリーナがどうして欲しいのか分からなかったし、距離が近いのが辛かったし、何をオスカーと喋りたいのか

分からなかった。

「だいたいオスカーはちゃんと気を付けた方がいいですよ。あそこでキングズリーに負けてたらエストがキングズリーをぶっ飛ばしてましたよ。エストの杖の事は知ってるでしょう？」

「ああ…… そうか」

エストがあんなに怒っていたのはそのせいもあるかもしれないなかった。オスカーが誰かに決闘で負ければ、エストの杖の所有権は負けた相手に移るのだ。

「だから私に感謝した方がいいですよ。クリスマスにキングズリーとエストの仲がギスギスしたかもしれないからね。二年生の時みたいに私に感謝してください」

それにオスカーはどうしてキングズリーにあの時呪文を撃てなかったのかやつと分かった。多分、抱き着かれてかばわれたせいに違い無かった。そして、もしキングズリーで無い相手に呪文を撃たれて、自分が同じようにかばわれたのなら、自分はどういう行動をとったのか？ 確実にもつと自分をコントロールできない状態になったとオスカーは思った。

なぜか口角を上げて、得意げな顔で腕を組んでいるクラリーナを見て、オスカーは二年生の時みたいに感謝して欲しいと言っているクラリーナが本当にその意味が分かっているのか怪しいと考えた。

「ほんとに二年生の時みたいに感謝すればいいのか？」

「グリフィンドール様、マリーリン様、ダンブルドア先生、クラリーナ様みたいな感じで感謝した方がいいですよ。私の予想ならほんとにエストはキングズリーに呪文を撃っていたと思いますから」

目をつぶって腕を組んでいるクラリーナを見ながら、オスカーは本当に自分をコントロールできるのか試すことのできるチャンスかもしれないと思った。二年生の時と同じことができるのなら、自分をコントロールできるのではないかと思ったのだ。そもそもオスカーはどうして最近自分ばかり辛いのか意味が分からなかった。

ベッドに座っているクラリーナの真正面まで来て、オスカーはそもそも二年生の時と別の意味で自分をコントロールできなくなっている

気がしていた。

オスカーの魔法力も体の力も二年生の時とは比べものにならないくらい強くなっていた。意思や心や考え方もずっと強くなっているはずだった。

「クラーナ、俺は多分怒ってたよ。目の前で火が出てきて誰かが倒れてるのはダメだ。クラーナは知ってると思うけど」

「オスカー？ え……」

色んな事を感じることが出来るようになるほど、色んな刺激がオスカーを圧倒していた。魔法省や死喰い人になりきって考えるのも、炎や爆風の後でクラーナが倒れているのも、服が焼ける匂いがしたのも、天文台の塔で下を見ることよりもオスカーの恐怖を煽って、スリルを感じさせたに違い無かった。それに単純にオスカーは夏休み前から上目遣いがダメだった。お互いにベッドに座っていてもクラーナとオスカーではずいぶん高さに差があった。

「ちか…… 近く無いですか？」

「二年生の時みたいにしろってクラーナが言ったんだろ」

その後自分より実戦経験のある大人に自分が優っているという感覚は間違い無くオスカーに満足感や優越感を与えたに違い無かった。近い人をつける恐怖も自分のせいで誰かが倒れる恐怖も明確に倍増されていた。

「に、二年生の時って……」

「抱き着いて身代わりになるのは絶対にやめてくれ。頼むから」

そして今は二年生の時とはクラーナを見る目も香る匂いも期待する感触も全てが違っていた。スリルや優越感や安心感で揺さぶられて、少しの刺激でオスカーは圧倒されそうだった。あの時は感謝で突き動かされていたオスカーの体は、二年前よりずっと小さく見えるクラーナの何かに刺激されて突き動かされていた。

「オスカー…… せ、先生方が入ってきましたって……」

「あの時はありがとうって……」

オスカーが近づけば、オスカーの期待通りにクラーナの髪からはミントの香りがした。多分、二年生の時とは違って、オスカーが手を回

せば肩を丸ごと抱いても手に余りが出ると予想できた。きっと簡単に抱き上げることができるのだ。ほとんどクラーナが何を言っているかオスカーには聞こえていなかった。体重が二人分一つの場所にかかってベッドが沈みこんだ。

「神聖な医務室で何をやってるんですか!!」

「何やってるの」

後ろからマダム・ポンフリーとエストの声が聞こえて、オスカーは文字通りにベッドの横で飛び上がった。後ろを見るとマダム・ポンフリーとエストに加えて、先生方と闇祓いがカーテンを開けてこつちを見ていた。

「なに…… 何もや、や、や、やってないですよ」

「いいですか。オスカー・ドロホフ、クラーナ・ムーデイ、医務室はそのような事をする場所ではありません!! 間違っても!! 私の目が光っている間は!! 医務室はそのような場所にはなりません!!」

これは本当に怒らせたオスカーはエストの方を見て思った。多分、雪の日にクイディッチでエストが落ちた次の日と同じくらいエストが怒っていた。マダム・ポンフリーが雷を落としているのにそれが気にならないくらい怒っているように見えたのだ。

「あなた達は監督生で高い倫理観を必要とされているのに!! いったい、全体、医務室で何をしようとしていたんですか!!」

「何も、何もやってないです。ただオスカーと喋ってただけで」

「ミス・ムーデイ、あなたとミスター・ドロホフの顔の間に羊皮紙一枚でも挟まる隙間がありましたか!？」

「あ、ありましたよ。そんなに近づいてないです」

「いいえ、この目で見ました。永久粘着呪文でも唱えたような距離でした。いいですか。これからどんなケガや病気をしようかとあなた達二人は絶対に医務室でお見舞いでしょうが何でしょうが近づいてはいけません!!」

「なんですかそれ。本当に何もやってないですよ!! オスカー何とか言ってください!! ま、マクゴナガル先生……」

オスカーはもう何が何なのか分からなかったし、誰かとかいう感

じになるといつもこうして大騒ぎになると思っていた。それにこんな空気の時にキングズリーがいるのはオスカーからすると初めてだった。

「寮に戻ります」

「ミスター・ドロホフ。聞いていますか？ 医務室で破廉恥なマネは許しません。スネイプ先生、マクゴナガル先生、監督生に選んだのならきちんと指導してください」

こんなにホグワーツで大人の信用を失ったと思ったのはオスカーには初めての経験だった。もちろんファイルチを除けばだったが。スネイプはトunksの惚れ薬の事件で見せた様な表情でオスカーの方を見ていた。片やマクゴナガルの方は口に手をあててオスカーの見たことの無い表情をしていた。オスカーはまるで小さい頃、ペンスや母親にやってはいけなと言われたことをやってしまい、その現場を見つかった気分だった。

「は、破廉恥なマネって、そんなことしてないですよ!! マクゴナガル先生、本当なんです。私もオスカーも医務室でマダム・ポンフリーが言うような事をしていません」

「医務室以外ならするのですか」

「しないって言ってるじゃないですか!!」

「ミス・ムーディ、日ごろのあなたの行動に免じて減点はしませんが仲が良すぎるのも問題ですね」

「げ、減点!? 何もしてないのに減点されるかもしれないんですけどか?」

「ミス・ムーディ、静かにしたまえ。魔法省の役人も来られているのだ」

かなり苛立った声でスネイプが言うと、クラーナはキングズリーやドーリツシユの方を見て少し赤くなつた。オスカーは色々情けない気分だったし、昼過ぎからずっと色んな刺激で参ってしまいそうだったのに、さつきクラーナに近づきすぎたり、それをエストやキングズリーに見られたのが決定打になって、完全に疲れてしまっていた。行き場のないぐちゃぐちゃな衝動や感情でオスカーの中は一杯だった。

「オスカー、クラリーナ、ミス・アンブリッジと…… こちらはジョン・ドーリツシュだ」

「以前にお会いしているので分かります」

「そうか…… では魔法省の三人を代表して二人に謝ろう。少しごたごたしているようだが、君たちが少しばかり強すぎたせいで力が入りすぎてしまった。今後はこんな状況にならないようにすると約束する」

「むしろ良かったですよ？ オスカー？」

「貴重な経験になったと思います」

相変わらず、大人たちの中でもキングズリーの声には特徴があった。さつきまでのマダム・ポンフリーとのごたごたを完全に声質だけでキングズリーは沈めてしまった様だった。オスカーはそんな事よりも早くここからいなくなりたかった。

「いえ、このような事は二度と起こらない様に徹底しますわ。ミスター・ドロホフとミス・ムーデイの仲が縮まったのなら少し微笑ましいことではありますけど」

「この学校で魔法省の役人はもちろん、どんな組織の人間でも生徒を傷つけることをダンブルドア校長先生は許されません。もちろん私もです。アンブリッジ先生、マクゴナガル先生、スネイプ先生、あなた方も Hogwarts の教諭なら同じでしょう？」

「ミセス・ポピー、もちろん分かっておりますわ。ダンブルドア先生やこの Hogwarts の先生がどれだけ Hogwarts の生徒を愛されているか」

「今後の授業で証明していただきたいですね」

キングズリーがマダム・ポンフリーに謝っているのも、クラリーナと一緒にいるところを見られたのも、オスカーには何か居心地が悪かった。早くオスカーはこの空間からいなくなりたかった。エストはずっと静かだったがどう見ても怒っていた。オスカーはみんなの相手をする活力がもう自分に残っていない事を知っていた。

やっとマダム・ポンフリーがアンブリッジとスネイプとどこかに行つて、オスカーは医務室から出られると思つたが、マクゴナガル先

生がクラリーナのところに、エストとキングズリーがオスカーの方にやってきた。

「オスカー、こんなタイミングで申し訳ないが、クリスマスにシャックルボルトの家に来て貰いたい」

「キングズリーの家に？」

「そうだ。今はあまり一族はいないが、大きな古い家で君のお母さんがいた家でもある」

「それはクリスマスの間ずっと？」

「いや、一日だけにした方がいいと私は考えている。君は休暇は忙しい男だとペンスから聞いている」

「わかりました」

「では今日は本当にすまなかった。私はお邪魔だろうからまたそのうち授業で会おう」

「はい」

キングズリーの家に行く？ 母親が多分生まれ育った家に？ オスカーはほとんど母親から母親の家の話を聞いたことが無かった。それに母親の墓はシャックルボルトの家にあるはずだった。オスカーは一度もそこに行ったことが無かった。さっきから体に渦巻いている感情や衝動でオスカーはただでさえ落ち着かなかつたのに、母親の墓の事を考えるとさらに頭が滅茶苦茶にかき混ぜられたようだった。

キングズリーがそのままマクゴナガル先生とクラリーナの方に行くと、オスカーはエストと向かい合わざるを得なかった。

「オスカー、明日箒と一緒に乗って」

「箒？」

「そう。明日、スリザリンのクイディッチ練習が終わった後、競技場に来てくれる？」

「いいけど。俺は箒に上手く乗れないぞ。トンクスの整理整頓より下手だ」

「いいの。ねえ、もう晩御飯は食べた？」

「もう食べたけど……」

オスカーは絶対にエストが怒っているという確信があった。なのにエストが淡々と喋るので、むしろオスカーは少し怖くなってきた。今のオスカーにはエストの内心を推し量る余裕が全く無かった。怒っているエストもさっきのキングズリーの話もどう処理したらいいのか全く思いつかなかった。

「エスト…… 私…… まだ晩御飯食べてないんだけど、大広間に一緒に行ってくれない？ まだご飯が残ってるかも」

「エスト、ごめん、ちよつと一人にさせてくれ。ペンス。スリザリン寮のエストの部屋に何かご飯を持って行ってくれ」

「かしこまりました」

どこからともかくペンスの声が聞こえた。オスカーの返答を聞くともつとエストが怒っている様にオスカーには見えた。一瞬、エストのまぶたが動いた様に見えたとし、手にも力が入って少し震えた様に見えたからだ。それに紅い瞳の奥で怒りとか不安が燃えているのがオスカーには分かった。ただ、オスカーにはもうエストの相手をする余裕が全く無かった。今日、二人きりでエストと談話室や大広間で喋った日には自分が何をするか、何を言うかコントロールできる気がまるでしなかったのだ。

「エスト、明日は箒に乗るし、例のモノを作る場所探しとかをしよう。ただ、頼むから今日はちよつと一人にさせてくれ。談話室で待ってくれなくてもいいから先に寝といてくれ。お願いだから」

「クラリーナとどこか行くの？」

「誰とも会わないって!! ほんとに一人にさせてくれ。ほら何だったら例の地図も渡すから」

オスカーがポケットから忍び地図を取り出してエストに押し付けようとする時、エストはオスカーがこれまで見たことが無いくらい怒っている様に見えた。思いつきで見開いたエストの紅い目で見られるとオスカーは何も言えなくなってしまうそうだった。開心術で読まなくても信頼やプライドを傷つけられたという感情を目から叩きつけられている気がオスカーはしたのだ。オスカーはエストのプライドがエスト以外のスリザリン生全員を纏めたものより大きいこ

とを忘れていた。

「何それ。もう一回言える？ そんなにエストがオスカーを信用してないってオスカーは思ってるの？ これで今晚ずっと談話室とか寮でオスカーの名前を追いかけてろって言うの？」

「そういう事じゃない。ほんとに頼むからちよつと一人にしてくれ。今はほんとにエストの事さえ考える余裕が無いんだよ。本当にそんなつもりで言ったんじゃない」

「だってそれ以外にどうとればいいの？」

もつと怒らせたオスカーは思った。オスカーが隣にいるときはエストはそんなに人に怒ることが少なかったし、怒っている時でもそれをオスカーに向けることはまれだった。オスカー自身もエストに対しては同じ感じだったはずではあったが。

「本当に今日は色々限界なんだ。いつもみたいにエストとご飯を絶対食べれないし、談話室で座りながら喋ったら、俺も自分が何を言うか分からないんだって。さっきのだっていつもなら絶対言わない。とにかく謝るから、今日は一人にさせてくれ。ほんとに誰にも会わないから。エストにもクラリーナにも今日はとにかく何を言うか分からないし、もう何するか分からないんだって」

オスカーがいつも出さないような大声でそう言っ、唇を噛みながら下を向くとエストのトーンが変わった。

「オスカー……ほんとに大丈夫？」

「大丈夫じゃないって言ってるだろ。ごめん、マダム・ポンフリーが来たら俺は寮に帰ったって言っといてくれ」

「え、オスカー？」

そう言うなりオスカーは自分に目くらまし呪文をかけて医務室から抜け出した。マクゴナガル先生はクラリーナにくどくど何か言っているようで、『私なら一気に決める』とか『女は度胸』みたいな威勢のいい言葉が聞こえていた。オスカーはエストにかなり悪い事をしてる気がしたが、もう、誰かを気遣う余裕がオスカーには無かった。できるだけ静かな場所でリラックスするべきだとオスカーは思っていた。もしかすれば、憂いの篩をほっぽり出したときと同じくらい才

スカーは混乱していた。

医務室を飛び出して廊下を曲がったところでさつき聞いたばかりの声をオスカーは聞いた。

「あそこまで似ていると考えていなかった。戦闘指導のパフォーマン스에影響が出たのは私の落ち度です。申し訳無い」

「あれで変身までしたら完璧にイライザだったと？ ジョン、どんなに似ていても彼女は妹だ。それに私の方も動揺していなかったとは言いづらい」

「ホグワーツで決闘していたところにそっくりだった。キングズリー、次からは完璧にこなす」

「君が生徒の戦闘指導をこなせないとは誰も思っていない。ジョン、これは我々闇祓いの本来業務ではない、それに聖マンゴの護衛もそうだ。いくつか代わって貰えばいい。君の本来業務は魔法大臣の護衛官だ」

「どれも私に与えられた仕事だ。全て完璧にこなします」

オスカーはまるで頭を抱えて悩みそうな表情をしているキングズリーを初めて見た。ドリーツシユの方は最初見た時と同じような真面目くさった顔をしていた。

あまり聞きすぎてはいけないと思い。オスカーは足早にそこから立ち去った。しかし、もう夜だと言うのに、いろんなところに生徒やゴーストや肖像画の姿があつて、オスカーは一人になれる場所を見つけることがなかなかできなかった。

しばらく城の中を歩いた後で、オスカーはさつき言われていた監督生云々の話を思い出した。それに監督生には特別に入れる場所があるはずだった。

城の中をオスカーは半ば走っていた。頭の中はぐちゃぐちゃで、疲れているのか、欲求不満で何かをしたのか分かっていなかった。なので休める場所に走るといふのはオスカーの頭の中の状況と似ていた。

途中でミセス・ノリスらしき猫を蹴り飛ばしそうになったが、オスカーはなんとかジャンプで飛び越えてボケのボリス像の傍まできた。

左右違う手袋をしている間抜けな魔法使いの像だ。

体を動かしていると何も考えなくて済む気がして、オスカーは少し楽な気分になった。像の傍にある扉に監督生のみが教えて貰った合言葉を喋る。

「カモミール・フレッシュ」

自分で言った『カモミール』の言葉だけで特定の誰かの顔が出てきて、オスカーはもう自分の頭がおかしくなっているとしたか思えなかった。

浴室の中に滑り込んでオスカーは扉を閉めた。石鹸の香りでオスカーの鼻は一杯になり、さっきのカモミールの連想がやっと止んだ。

浴槽はドロホフ邸にあるものよりも素晴らしいものだった。天井には金のシャンデリアがあつて大量の蝋燭でゆらゆらと光つていたし、部屋全てが真っ白な大理石でできていた。部屋の隅に衣類置きらしきくぼみがあり、その半分くらいにふかふかのピンクのタオルが置かれている。

「お湯は入っていないのか」

独り言を言いながら、オスカーは浴槽の傍に並んでいる金色の蛇口を見た。全部で百口くらい並んでいて、それぞれ違う色の宝石がはまっている。オスカーは蛇口を二つ思いつき捻った。明るい緑の泡と赤い泡がお湯と一緒に出てきて、あつという間に浴槽を埋め尽くした。泡の質にも違いがあるらしく、緑の泡は一つ一つが大きく、赤の泡は一つ一つが小さくてきめ細かった。両方の泡が浴槽をちやうど半々に埋めていた。

ローブや下着をパツと脱いで、オスカーはそのまま浴槽に飛び込んだ。飛び込んだ波紋で緑と赤が混ざって透明になり、石鹸から香る匂いも混ざってオスカーにもよく嗅ぎ取れなかった。それよりも自分の体温よりも少し温かいお湯に包まれるとやっとオスカーは落ち着いて考えることができる気がしてきた。

「あつたかい」

しばらく鼻だけ出すくらいお湯に浸かって、オスカーはゆっくり今日の事を考えることにした。ぐつちやぐつちやになった頭の中を

ゆっくりお湯の温かさで固めていくような作業だった。ブツブツ水中で独り言を言いながら、閉心術を使う時のように自分の感情や考えに名前の付いたラベルをつけようとしていた。

「チャーリーといたところまでは問題無かった」

オスカーはそう自分で言いながら、本当にそうかは怪しい気がしていた。チャーリーと気楽に少しおバカなことをやるのは楽しいが、チャーリー以外のみんなや先生方、チャーリーの両親やキングズリーの信頼を少し裏切っている気もしていたはずなのだ。しかし、オスカーは四人がいない場所での時間も必要だと間違いなく感じていた。

「授業……」

先生をしていた授業をオスカーは真剣に思い出した。何を考えていたのか、オスカーはここでやつとクラリーナがタルボットに少し怒っていたのは自分のためなのだろうと考えた。さつきそれを言えなかったのがどうしてなのかはオスカーには分からなかった。多分、さつきのベッドでもオスカーは分かっていたはずだった。

「向こう側ばかり見てた？」

クラリーナはそう言っていたが、それでどうしてクラリーナの機嫌がそこまで悪くなるのかは分からなかった。自分のために怒ってくれたにせよそこまで怒る理由は無さそうだったし、そもそもクラリーナもクラリーナで心配性な人間なので、近い六人の誰かをオスカーが心配したからといって、オスカーに対して機嫌が悪くなる理由が分からなかったのだ。

「チャーリーのせいで気にしすぎた」

オスカーは間違いなくチャーリーと夏休みに喋った内容を気にしていた。エストとトンクスの様子がちよつと違うのもそうだったが、それ以上にチャーリーの話が大きいとオスカーは思っていた。それにオスカーはトンクスにはああいう授業のような考え方をするのはあまり向いていないと思っていた。真剣に考えすぎるのだ。

そしてエストからすればあの授業は明らかに辛いものに違い無かった。魔法界全体でもあの授業がエストと同じくらい辛い境遇など、レアやハリー・ポッターくらいしかないなさそうなのだ。にもかか

わらずオスカーはエストを怒らせた上にそのまま一人で寝ると言って飛び出して来てしまった。

オスカーは思いつきり自分の唇を噛んだ。血が口の中に広がった。またぐちやぐちやで熱くなりそうな頭の中が少し落ち着いた気がした。

「熱い」

急にさつきまで心地よかったはずのお湯がオスカーには熱く感じられた。口の中はまだ血の味がしていたが、落ち着いてさつきのエストの事を考えると今度は頭がそれしか考えることができなくなつて、落ち着いて考えたはずなのに頭がどんどん凝り固まつてしまう気がオスカーはしたのだ。

浴槽から勢いよく上がつて、水のままシャワーを浴びたが、オスカーは今すぐスリザリンの談話室まで走つて行ってエストに謝りたくなつた。頭に冷水をかけても今度は行き詰まつた頭が中々柔らかくはならなかつた。

「多分ずつと外で待つてた」

ご飯を食べていないとエストは言っていたので、マダム・ポンフリーが二人を治療して、そのあとクラリーナとオスカーが晩御飯を食べて喋っている間、ずっとエストは医務室の外で待つていたに違ひなかつた。

やっぱり今すぐ服を着て、スリザリンの談話室で喋るべきかとオスカーは思ったが、談話室にいるとも限らなかつたし、寮に戻つて居なかつたならどうやってエストを呼び出せばいいのか分からなかつた。

そもそもオスカーは自分が何を言つて、何をエストにするのか自分でも全く分からなかつた。クラリーナ相手でもそうだったのに、今の状態で気が張っているであろうエストと喋った日には自分がどうなるのかオスカーには分からなかつた。

「オスカーがここにいるなんて珍しいな」

冷水をずつと頭から浴びて体がすっかり冷めたオスカーが後ろを見ると、赤毛でそばかすがあつて、魔法使いとしてはかなり筋肉質ないつもの魔法使いがいた。

「この風呂って監督生、首席、キャプテン専用らしいけど、全部の寮から結構距離があるから冬はあんまり使えないらしいんだよね。ビルはグリフィンドール塔に帰るまでに湯冷めして風邪ひいたって言うてたよ」

「確かに今、俺は寒いな」

「え？ ああ、それ水を浴びてるんだ？ でもちよつと湯船に入るのは待ってほしい」

チャーリーはそう言うのと蛇口を十口くらい開いて、何やら杖で泡を操っていた。オスカーは何をしているのかと思つて、湯船の近くまで行ってみるとチャーリーは色とりどりの泡で湯船に絵を描いているらしかった。

「ほら、ここのところずっとハンガリー・ホーンテイルに挑戦してるんだけど、中々しつぽのとげとげがうまくいかないんだよね。この灰色の泡は泡の一つ一つが大きくて、小さいのを描くのが難しいんだ」

オスカーは風呂の中で数十分も落ち着くために考えて、そのあと数十分は冷水を浴びても頭を冷やそうとしていた自分が馬鹿に思えてきた。口の中の鉄の味がひどく気持ち悪かった。

「下を灰色の泡にして、上に違う色の細かい泡を載せて、輪郭を描けばいいんじゃないか」

「え？ たしかに、オスカー天才だね。エストといつも一緒にいるだけのことはあるよ。ああ、冷水を浴びたから頭が冴えてるんだね」

チャーリーはオスカーのアドバイスを聞くと俄然やる気を出して、灰色の泡の上に紫の小さな泡を載せて、ハンガリー・ホーンテイルという尻尾にとげとげのあるドラゴンをもつと詳細に作り始めた。多分、監督生のバスルームで泡を使ったドラゴンを描いているのは Hogwarts の長い歴史の中でチャーリー・ウィーズリーが史上初めてに違い無かった。

バスルームで素っ裸に杖を持って熱心に泡のドラゴンを作っているチャーリーを見て、オスカーはいったい自分は何なんだろうと考えた。ほかの同級生の男子はみんなチャーリーみたいなのだろうかと考えたのだ。

「できた。ほら結構似てるだろ？」

「俺はハンガリー・ホーンテイルの姿なんて分からないんだが」

「え？ まあそうか、ほらとげがオスより大きいからこれはメスなんだよ。オスの何倍も凶暴で体も大きいんだ」

泡で鱗を再現しているのは見事だったが、オスカーはそれより、このチャーリーとかいう男が果たしてさっきの自分と同じような気分になったことがあるのか怪しいと思い始めていた。ドラゴンさえ与えておけばチャーリーは上機嫌になるのではないかと思ったのだ。

「オスカーはもう出る？」

「いや流石に寒いからもう一回入ろうと思うけど」

「じゃあちよつと湯船で話そう。スリザリンの新しいクイディッチのチームが誰になったのかよかったら教えてほしいし」

「こんな綺麗に作ったのに入っつていいのか？」

「お風呂は入らないと意味ないよ」

チャーリーは全く迷いなく風呂に入った。オスカーはやつぱりチャーリーも理解できなかった。もうエストやクラーナやトックスといい、オスカーは周りの人間がどんどん分からなくなってしまう気がした。

「今日はちよつと残念だったよね。ほとんどオスカーが勝ったと思っただのに。ジェイがオスカーとクラーナに胴元のくせに掛けてたから結構損してたよ」

「まあエストが中断させたし」

「それだよな。あそこまでエストが怒るのは結構珍しいよ。でも、オスカーはキングズリーのマスクが取れなければ勝てたと思うけどな」

湯船に入ると泡でほとんどお互いの顔が見えない中、オスカーはチャーリーの話を聞いて、キングズリーの顔が見えて決闘を中断したのはよかったのかもしれないと思い始めた。あのまま勝ってしまったら、それこそオスカーは自分をコントロールできなくなったのではないかと考えたのだ。

「キングズリーの顔が見えて反応が遅れたのは確かだけど……」

「決闘もスポーツなんだし、やっぱり勝った方が気持ちいいよ。僕があとちよつとでスニッチが取れたのに、違う理由で没収試合になつたら多分一日荒れてるよ。横やりで勝利を逃すのは一番辛いよね。逃がしたグリーンデローは大きいって言うし」

「決闘がスポーツ？ それに横やりで荒れるって？」

オスカーには決闘がスポーツという感覚が余りわからなかった。オスカーにとって決闘とはだいたい命か自分の命より大事なものをかけて戦うことを指していたからだ。それに勝利の直前で寸止めされて、どうしてムカついたり、気分が荒れてしまうのかもオスカーには分からないのだ。

「決闘もスポーツだと僕は思うよ。だって、スポーツって要は戦いとかの真似事だよな？ ドラゴンや動物がメスとか自分の縄張りとかをかけて戦う代わりに、人間はクイディッチとかチェスとかで自分が傷つかないように戦うんだよ。決闘も少しくらいけがはするけど、許されざる呪文を使わなければそんなに危険ではないだろう？」

「まあそうなのか」

「決闘クラブだって、公式にはないけど、ホグワーツにはいくつもあるしね。それにオスカーはあとちよつとで勝負ごとに負けたらムカつかないのか？」

「あんまり俺はそういうことしないからな」

人と争うようなことをオスカーはあまり好んでやるタイプでは無かった。成績でも誰かに勝とうとして勉強しているわけではなく、単純にホグワーツで勉強して新しいことを理解したり、新しいことができるようになるのが楽しかったし、周りの人間の知識欲が旺盛なものもあった。ほかのスポーツ等もオスカーはそれほどのめり込んでやることも無かったのだ。

「へえ、僕は結構クイディッチで負けると頭にくるんだ。今はそんなモノとか人に当たらないけど、僕がスニッチを取っても負ける様な状態だやっぱリムカつくし、相手がスニッチを取ってこっちのチームが勝つたらもう最悪だよな」

「チャーリーがそうなってるの見たことないけどな」

「いつも試合の後はグリフィンドールのみんなと一緒にいるから。それにオスカーはあんまり競技場の更衣室に入ったことないと思うけど、負けた後はみんな荒れてるよ。怒って天井とか床を呪文で壊すやつもいるからね」

エストもそうなのだろうかとおスカーは思った。確かに試合の後はいつもよりずっと遅くまでオスカーと談話室で喋っていたり、食べる量がやたら増えたりすることをオスカーは知っていたが、基本的にエストはクイディッチの勝ち負けでオスカーに毒を吐いたりはしなかった。それよりいつもセーブしているであろう飛び飛びで色々な場所に興味が飛んでいく話を延々とオスカーにするのだ。

「昔、ビリウスおじさんが生きてた頃に呪文でスニッチもどきを作ってくれて、エストと一緒に遊んでたけど、二人で相手の箒にしがみついても勝とうとしたから、結構やったやらないで喧嘩になったよ。大人がくるとエストは黙っちゃうからあんまりママや叔父さんは知らなかっただろうけど」

「今喧嘩したらシャレにならないな」

「まあね。でも僕は試合とか勝負で負けてムカつくのは当然だと思うんだよね。それにそれを外に出して冷静になれるならいいと思うんだ。プロのクイディッチプレイヤーもモノに当たったり、声に出したりして、気分を切り替えたり、冷静になったりするから。まあチームメイトに悪影響がなければだけど」

外に出すことで自分をコントロールしているのかとおスカーは思った。それはオスカーがこれまで考えたり学んだりしていた閉心術とは少し違う技術のように思えた。人や物に当たることは良くないが、それをしないで内にため込んで爆発して取り返しのつかないことになるよりよっぽど良いのかもしれない。なかった。

チャーリーと話すとき泡で顔が見えないのもあったが、さつきよりよっぽど頭が静かになっていくとおスカーは思った。一人で考えているときさつきのクラーナやエストの顔の姿が頭に出てくるが、こうして喋ってその内容に集中していればそれも抑えられた。

「自分をコントロールする技術だってことか？」

「そうだろうね。人間は動物だから、同じ人間に…… 決闘とかはより直接的だからクイディッチより近いと思うけど、同じ種族に勝つていうのは快感になるようにできてるはずなんだよ。だって、そうなら群れの中でより多くのエサを手に入れることができるし、より多くの異性とつがう事が出来て自分の血を残せる可能性が上がる。だから勝負に勝つのは快感だし、負けてイラつくのは当然で、それを辛うじてコントロールできるのが人間で、その効果を少し上げる術って感じかな」

相変わらず、動物の話になるとチャーリーの話は理路整然としていて、説明する気がある時のエストを彷彿とさせた。こういう時のチャーリーを見るとオスカーはチャーリーとエストの血が近いことを実感するのだ。

それにこれはオスカーにとってヒントになりそうな話だった。

「それがさっき言ってたモノに当たるとかそういう話なのか？」

「そうだよ。それにモノを壊したり、同種に暴言を言って解消されるのは動物の中では凄いいことなんだよ。普通の動物なら同種を殺しちゃうなんてよくある話だよ。ドラゴンじゃなくても、雄鶏や狼でも同種を虐めて理由もなく殺しちゃうからね。それに理由があればなおさらだよ。自分の縄張りを荒らされた。捕食行動を横取りされた。求愛行動の途中で邪魔されたとかね。人間も一緒だよ」

泡でチャーリーの姿は赤毛くらいしか見えなかったが、やっぱりこういう時はまるで別人のようだとオスカーは思った。さっきの全裸で楽しそうにドラゴンの泡のアートを作っていた筋肉質な人物と同一人物だと思えないのだ。そしてまさにチャーリーの言っていることはオスカーに該当しているとオスカーは考えたのだ。文字通り、オスカーは動物のように体に引っ張られていると実感していた。

「じゃあどうやって人間はコントロールするんだ？」

「人間だからいろいろじゃないかな？ 例えば一杯食るとか、赤ん坊みたいに安心する人に抱き着くとか、好きな音楽を聴く、思いつきり体を動かす、機嫌が悪いことを忘れるくらい没頭することをする。好きだったり尊敬したりしてる人に直接褒めてもらう、自分を理解し

てくれる人と話すとか、後ろの方が動物よりじゃなくて、前の方が動物よりかな？ でも僕は考えるだけじゃなくて、聞く見る嗅ぐ触るみたいな五感と一緒にじゃないとそういうストレスは無くならないと思うよ。だって僕らは結局動物だから」

オスカーは今言ったそれを自分は少しでも実行できているだろうかと思った。そもそも自分が何をストレスと思っているのかも分からなかったし、自分がストレス解消に何をしているのかも分からなかった。こうして風呂にはいるのだって、今日やっと見つけた方法の一つのはずなのだ。

「チャーリーはなんかあるのか？ そうなの」

「やっぱり箒に乗ることとか、最近だと例の…… あれの話を考えることかな」

「そうか、周りのみんなはどうしてるんだろうな」

チャーリーのストレス解消法はオスカーには全く向いてい無さそうだった。するとチャーリーは湯船の傍に置いていた杖を振って、何やら棒人形のような人型を作り出した。緑色の泡でできた棒人形はオスカーがどこかで見たことがあるような動きをした。ときどき何かに首を傾げたり、まるで本を読みながら前を見ていないように視線を下げて歩いているように見える。

「ほら、こうやると動きだけでも誰か分かるよね。動物もそれぞれ動きに癖があるけど、人間はもっとあるよ。考え方の癖もそうだけど、動きや行動の癖もね。追い詰められた時もそうだよ。エストだと一杯食べたり、一人でずっと本を読んでブツブツ言ったりとか、箒で見えなくなるまで飛んで行ったりとかかな？ 少なくとも小さい頃はそんな感じだったよ」

「俺にもそんなのがあるのか？」

「オスカーにもあるんじゃないのかな？ オスカーがそういう状況になつてゐるのを僕はあんまり見たことが無いから、エストとかクラーナとか…… ああ、ペンスに聞いてみたらいいんじゃないかな？ ペンスならオスカーのこと大体知ってるだろうし」

ペンス。オスカーは確かにペンスの事をなぜか忘れていた。オス

カーが落ち着ける相手としてはペンスが一番に違いなかった。ホグワーツにいるせいでそれを忘れていたのだ。オスカーはもうペンスにドロホフ邸まで連れ帰って貰った方がいい気までしてきた。

「確かにそうだな」

「そうだよ。僕はオスカーの事を知るんならペンスに聞けばだいたい教えてもらえると思うけど、あんまりみんなやらないよね」

「俺の事をわざわざ聞く奴なんていないだろ」

「そうかな？ ジェイなんかは賭けのためにオスカーのかぼちやジュースに真実薬をちよつと垂らしてみたら大儲けできるつて言つてたけど」

「俺を賭けに使つてどうするんだ。もう決闘トーナメントもないのに」

オスカーは自分の内心など知りたい人がいるのかと考えた。そして、自分の内心など自分にすらわかりようがないのに、相手に知らせることなどもつと難しかった。

「あ、あとチャリーはクイディッチの試合の時とかに、ちよつとくらいケガをしても気づかない時つてあるか？」

「あるよ。それにトップのクイディッチ選手とかは、昔のルールが決められていなかった頃は、スニッチを取つてから斧で相手選手に自分の足が切り取られてたことに気づいたなんて話もあるくらいだよ」

「なんでクイディッチに斧が出てくるんだよ」

「その頃はルールにビーターのこん棒の代わりに斧を使っちゃいけないつて書いてなかったんだ」

オスカーは相変わらず、とにかくチャリーはクイディッチかドラゴンに例えないと話ができないことを思い出した。こう考えるとエストは比喻や例えのレパートリーが異常に多い気さえしてくるのだ。

「あれつてなんでだろうな。今日も俺の指が折れてたらしいんだが、マダム・ポンフリーに言われるまで気づかなかつたし」

「集中してたからだと思うけどね」

「集中してたら体に何かあつたらわかるだろ？」

「人間が本当に集中するときには集中に関連すること以外は分からない

いと思うよ。ドラゴンが火を吐くときに、自分の爪や鱗に虫がついても気づかないだろうし、そういうことだよ」

今度のチャーリーの例えはオスカーには実感しにくかった。決闘するときには自分の体の動きをオスカーは感じ取っているはずだし、自分が考えたとおりに体をコントロールしているはずなのだ。なのに体に自分が感じることでできない部分があることがオスカーにはわからなかった。

「オスカーがどんな状態を集中してるって言ってるのか分からないけど。僕が一番集中しているって感じるのは、自分の技術とか自身よりちょっと上の事をやろうとしているときなんだけど。オスカーは違えるのかな？」

「自分の技術よりちょっと上？」

「そうだよ。僕なら箒の高速移動とかウロンスキー・フェイントくらいならもう目をつぶってでもできるだろうけど、そういうことをやってもプレッシャーはないよね？　できて当然だから。オスカーが失神呪文にプレッシャーを感じないのと一緒だよ」

「そういうのよりもっと上の事に挑戦してるってことか？」

オスカーはさっきのキングズリーと決闘しているときはまさにそういう状況かもしれないと思った。失神呪文や盾の呪文単体にオスカーがプレッシャーを感じることは無かったが、熟練の闇祓いの打ち出す呪文を、相手より早く、相手より正確に受け流して撃ち込むというのは自分の技術より少し上の挑戦かもしれないのだ。

「そうだよ。ウロンスキー・フェイントなんてエストにやったらバレバレだから、どうやってそれを本物らしく演出して、エストをスニッチから離すってなると、僕もリラックスしながらなんてできないよ。でもできないレベルじゃない。それに失敗したらどうしようっていう心配で押しつぶされそうでも無い。優勝がかかってたらちよっと難しいけどね」

「そういう時に一番集中できてるのか？」

「うん。一番集中できている時は箒が体の一部みたいに感じるし、自分が何をやって、どういう結果が生まれて、スニッチやエストがどう

「いう動きをするのか、自分がそれに何をすればいいのかわかる感じがあるけどね。そういう時はそのこと以外何も考えられないよ。多分いつの間にかユニホームが破れてすっぽんぽんになっても気づかないと思う。だってそれがどうなっただって短期的に集中していることに影響ないからね」

「やっと泡が消えてきて、チャーリーの顔が見えるようになったが相変わらず、少し笑っているような顔だった。オスカーにとって重要なのは本当にきつきの決闘と似たような状態にクイディッチをしている時にチャーリーはなっているということだった。」

「集中していることに関係ないから気づかないのか」

「ワニとかもがぶってかみついたら絶対離さないし、そういう時に口が傷つこうが体が叩きつけられようが気にしないよね。人間もそういうことだと思うよ。単純に人間は動物より色んな機能がついているから、そういう状態に中々なりにくいみたいなの？ でも自分の出来ることより少し上だとそれになりやすいとか」

「分かった。チャーリーありがとう。今日のチャーリーの話は俺に分かりやすかった。風呂にきてよかった」

「そうなんだ。あ、あとそういう状態になるとストレス解消になるよね」

「ストレス解消に？」

「箒に乗るとそういう感じになりやすいから、僕は箒に乗るよ。そうすればそれ以外に何も考えなくなるからね」

「もしかすればチャーリーがドラゴンが好きなのは、ずっと自由に何も考えずに自分で飛びたいからなのかもしれない。オスカーは湯船から上がって、体を置かれていたバスタオルで拭いた。バスルームに入ってきた時と比べれば、ずいぶん頭も体も落ち着いているとオスカーは思った。」

「じゃあオスカー、僕はこの後ちよつと卵の様子を見てくるよ」

「もしかして毎日見に行くつもりなのか？」

「まあね。ドラゴンも人間も親が近くにいるって感覚が大事だって本に書いてあったし、なんか呼びかけるのがいいらしいよ。ジエイに

言って声を再生する魔法道具を用立ててもらおうと思ってるし」

「チャーリーの声を吹き込むのか？」

「正直言うと、僕やオスカーのほとんど大人の男の声より、女性の声の方がドラゴンでも安心するんじゃないかって思ってるけど……」

「まあ頼むなら出来ないようにやってくれ」

ドラゴンに人間の声の種別などできるのかオスカーには疑問だった。オスカーにはドラゴンの唸り声などメスでもオスでも区別できないからだ。

オスカーはそういえば着替えも持つてくることを忘れたことに気づいた。このままだと着てきた下着をそのまま着なければいけなかった。

「ペンス。下着を持ってきてくれないか」

バチツという音と一緒にペンスがバスルームに現れた。相変わらず、ドロホフ邸でいつもペンスが着ているスーツを屋敷しもべ用にあつらえた様な服はバスルームには似合わなかった。

「オスカー、多分、そうやってホグワーツでもペンスを呼び出すからみんなにオスカーお坊ちやまって言われるんだと思うよ」

「オスカーお坊ちやま。ご入浴後なのですか？ 早くお洋服をおめしにならないと風邪をひいてしまいます。チャーリー様の方のお洋服も必要ですか？」

「ペンス、僕は着替えは持つてきてるよ。うちには屋敷しもべがいないからね」

チャーリーが浴槽のふちに首だけのせてオスカーとペンスに言った。オスカーはそういわれても、ペンスはホグワーツだろうとどこだろうと来てくれるので、そんなに遠慮する意味も分からなかった。

「俺の分だけで大丈夫だ。ローブはあるし」

「このローブはいつ洗われたのですか？ オスカーお坊ちやま、一度お家でお着換えください」

「え？ 分かった」

「じゃあねオスカー。またスリザリンのクイディッチチームの情報だけ教えて」

バチツという音と一緒にオスカーは素っ裸でドロホフ邸の広間に移動していた。夏だが少し涼しく、居心地のいい空間だった。オスカーは誰もいないドロホフ邸の広間を久しぶりに見て、ホグワーツに入学する前を思い出した。

「オスカーお坊ちやま。こちらにご用意しました。それに着替え終わったらココアがごございます。冷たい方がよろしいですか？ それとも……」

「冷たいのがいい」

「かしこまりました。ローブは洗濯してホグワーツのオスカーお坊ちやまのお部屋に運んでおきます」

オスカーはペンスに用意された服を着て、広間だったので靴も履いた。相変わらず、ドロホフ邸に何着もある寝間着だった。オスカーは子供のころから同じデザインの寝間着を着ていて、オスカーが大きくなるたびにサイズの違うものを渡されていた。果たしてこの寝間着が何着あるのか、オスカーには分からなかった。

「ありがとう。ペンス」

「もつたいないお言葉です。オスカーお坊ちやま」

広間でペンスと二人きりなのはオスカーからすればずいぶん久しぶりかもしれない。まじまじとペンスを見ると、オスカーは何かペンスが小さくなっている気がした。暖炉の前でペンスに魔法界の話をして貰ったり、そういう時にペンスはもっと大きかったとオスカーは思ったのだ。

「ペンス。エストに晩飯は届けてくれたか？」

「はい。オスカーお坊ちやま……」

ペンスの顔がそう聞いた途端少し口をつぐんだようになったので、オスカーは反射的に喋った。

「ペンス。自分を傷つけることを禁じる」

「オスカーお坊ちやま。ありがとうございます。ペンスめはオスカーお坊ちやまをお叱りしなければなりません」

ペンスがこんなことを言うのは久しぶりだった。こういうことをペンスが言うのは、母親や父親が言ったことをオスカーが守らなかった

た時くらいだったのだ。

「オスカーお坊ちやま。お恥ずかしながら、ペンスめはまだ若輩のしもベ妖精になります。前のご主人様のお若い頃を存じ上げません。ペンスめは自分の子供を育てたことがございません。ペンスめはお若い魔法族の女性をお世話したことがございません。ペンスめはクラウチ家にお仕えしているウインキーというしもベ妖精のように自分のご主人様をお叱りすることが出来ません」

「俺を叱る自信が無いって言うてるのか？」

ペンスが言い訳を並べるのはオスカーにとって結構な驚きだった。それにペンスが若いしもベ妖精というのもオスカーには初めて知った概念だった。もちろん、しもベ妖精の若いがどれくらいの年を指すのかも分からなかった。

「お恥ずかしながらそうでございます。オスカーお坊ちやまは大きくなられました。ペンスめはお坊ちやまがここでご誕生された時から知っております。もうすぐ成人されてお坊ちやまではなくなります。ペンスめはオスカーお坊ちやまに何を言えば良いのか分からないのでございます」

ペンスの腕や足がピクピクし始めたので、ペンスにとって自分を罰しないといけないくらいの話だとオスカーは理解した。

「ペンス。落ち着いて喋ってくれ、重ねて自分を罰することを禁じる。いちいち罰していたら話ができない」

「申し訳ございません。オスカーお坊ちやま。ありがとうございます。オスカーお坊ちやま、ペンスめはオスカーお坊ちやまが女性にお優しいと知っております。魔法族の皆様も屋敷しもべですら、男女の仲はこじれやすいと知っております」

どうもエストの事についてペンスは喋りたいらしかった。何か、オスカーにとつてペンスはだいたい何でもできる存在だったのに、オスカーに言うことに困っているということが奇妙な感覚だった。

「エストに今日は悪いことをした。分かっているよ」

「はい。エストお嬢様はオスカーお坊ちやまはお分かりになられるとおっしゃっていました。オスカーお坊ちやま。ペンスめは魔法

族のお若い女性をお世話したことはございません。お若い……」

「ペンス、俺に何か言うことを禁じられている事を守る事をやめろ」
同じような事をペンスが繰り返そうとしていたので、オスカーははつとなつてこう言った。おそらくペンスはオスカーの父親と母親や家族について喋る事を禁じられていると思っっているはずなのだ。

「オスカーお坊ちやま。オスカーお坊ちやまのお母様は、女性が辛いときは男性は傍にいただけで良いとおっしゃられました。ペンスめは魔法族の人間関係にご助言ができません。ペンスめができるのは、オスカーお坊ちやまのご両親がオスカーお坊ちやまにおっしゃられたことをそのまま述べることしかできません。ペンスめにはその意味が分からないのです。魔法族の親は魔法族にしかできないのです。ペンスめは……」

そこまで言つてペンスが燭台に向かつて走りだしたのでオスカーはペンスの手をつかんで止めた。クラーナも小さく感じたが、ペンスはもつと小さくオスカーは感じた。森の中で迷つて半泣きでペンスを呼んだときはもつとペンスは大きかったはずだった。

「ペンス。やめろ」

「身分をわきまえない事をペンスめは喋りました。オスカーお坊ちやま。ペンスめはエストお嬢様が何に悩まれているのか分かりません。エストお嬢様はオスカーお坊ちやまのお母様と同じくらい品や育ちが良い方です。ですから、ペンスめはお母様がおっしゃっていたことをオスカーお坊ちやまに申し上げました。ペンスめに分かるのはオスカーお坊ちやまがなされたことで、エストお嬢様は、一時期のお母様と同じくらい傷つかれておられるようにペンスめには見えたと言うことです」

ペンスがそう言うということはよつほどだったとオスカーは思った。なぜならエストはそういう面をほとんどの人に見せようとは思はずだからだ。せいぜいウィーズリー家のみんなか、オスカーかクラーナくらいのはずだった。

「ペンスめは、オスカーお坊ちやまが他のお宅のお坊ちやまやお嬢様と喧嘩されれば、オスカーお坊ちやまがもし悪いことをしたならばオ

スカーお坊ちやまをお叱りしないといけません。エストお嬢様はご自分が悪いとおっしゃられていましたが、ペンスめにはそうは見えませんでした。ペンスめはドロホフ家にお仕えしているしもべですが、オスカーお坊ちやまが成人するまではご助言を申し上げて、もし本当に悪いことをなされたならお叱りしないといけないのです。ですが、屋敷しもべには魔法族の大人の考えや行動を深くは理解できません。オスカーお坊ちやまは立派に成長されてほとんど大人になられています……」

オスカーは Hogwatts に入ってからもう長い間、自分の事を思った年上の誰かに叱られるなどという経験はしていなかった。エストやクラーナ、トンクスやレアには同世代なのに叱られたことはあるかもしれないなかった。オスカーは他人のために強く言うことがどれくらい難しいことなのか知っていた。

そして自分の知らない事を言うというのはもっと難しいことだった。

「ペンス。分かった。ペンスの言いたいことは分かった。やりたいことも分かった。明日エストに謝る。それにその方法は自分で探すよ。どうせエストは人と違うし、俺も人と違う。だからそういう方法は自分で探す。前もクリスマスもそうだったからな」

「オスカーお坊ちやま……」

「他の Hogwatts 生にお坊ちやま呼ばわりなのは、俺が他の Hogwatts 生と違って屋敷しもべに育てられたからだ。だから人と違うし、謝り方もあんまり知らない」

「申し訳ございません。オスカーお坊ちやま」

オスカーは Hogwatts に入ってから生活が激動過ぎて忘れていたが、オスカーを育てたのはペンスだったし、オスカーが自分の良心や考え方を何を道しるべに作ったのかを考えれば、両親よりずっと長くないペンスの方が影響は大きいはずだった。

「ペンスのせいじゃないし謝らなくてもいいだろ。それに他の Hogwatts 生に負けてるわけじゃないからな。ずっと両親だけと一緒にいたやつより、俺の方が魔法ができる。決闘でも負けない。エストや

クラリーナは例外だけだ」

こうしてゆっくり広間の暖炉の横で喋っていると、オスカーは頭も体も落ち着いていく気がした。どこが落ち着く場所なのかくらいオスカーはここにいる間は知っていたはずだった。

「今日はこっちで寝る。それで起きたら明日は朝一の談話室でエストを捕まえて謝る。ペンスに叱られたし、謝らないとまた叱られるからな」

「オスカーお坊ちやま。ペンスめは……」

「俺の部屋はシートツしいてあるよな？」

「オスカーお坊ちやまの部屋は毎日シートツを替えております」

「じゃあ、もう一杯ココア」

「かしこまりました」

どうしようもないときに何を頼って、どこに行けばいいのか、オスカーは思い出した。それに他人がそういう状態の時に自分がそうなるてはいけないこともやっと分かった。

ペンスや、他の人達、エストにクラリーナにトンクスにレアにチャーリーに、他の近い大人ですら、ちよつと参ってしまうような状態になるはずだった。それもほんの少しの事で。

だからそういう時にオスカーはできるだけ自分が何かできるようになるべきだと、ホグワーツに入ってからずっと、そして今、そう思っていた。

マニユーバ

オスカーは朝の五時からひたすら談話室で待っていた。エストにそもそも何を謝ればいいのか分からないオスカーは現実逃避に延々と変身術のレポートを書いていた。

変身した際にどうして人は自分の意識を保っていられないのかというレポートだったが、オスカー自身の考察と、クラリーナに貸してもらったノートに書いてある考察を下地にして、エストが授業中にブツブツ言っていた内容に繋がるように、考えに考えて一つずつ論理と証拠で文章をつなげていた。

オスカーはこの方法を三年生くらいから取っていたが、マクゴナガル先生のレポート評価で最高の評価を貰わなかったことは無かった。もちろん、エストのレポートを除いて最高ということだったが。

六時くらいになればスリザリンの学生がちらほら談話室に表れて、寮の入り口である秘密の扉から外へと出て行った。オスカーは忍びの地図を自分だけに見える位置に動かした。朝五時どころか、四時台に自分の家で起きた時から忍びの地図を開いていたが、エストの名前は寮の部屋から動いてはいなかった。

もし動きだしたら動きだしたでオスカーはどうしたらいいのか分からなかった。レポートの方はオスカーが驚くくらいの出来になっていた。マクゴナガル先生に提出する前にクラリーナにオスカーは少し見せたくなった。

変身術のレポートが終わってしまい、落ち着かなくなったオスカーは今度は薬草学の宿題、月見草と月齢の関係についての宿題を始めた。薬草学に関してはトンクスに聞いた方がクラリーナより頭の柔らかい答えがもらえるとオスカーは知っていた。

あっちこっちに考えが飛んでいきそうなトンクスのノートと自分で取ったノートを見比べて、エストが先に使った月見草に関する図書館の本を開き、付箋のついた部分を読みながらオスカーは宿題を仕上げた。

スプラウト先生が要求していたのは羊皮紙四枚分だったが、オス

カーは四枚分できりあえずスプラウト先生が求めていそうなどころまで仕上げ、残り二枚分、月見草に関する本の下敷きにされていた、七年生の一部が受けるらしい錬金術の教科書に書いてある理論を使って宿題を完成させた。

七時前になってオスカーはまた忍びの地図を見たがやつぱりエストの名前は動いていなかった。途中で寝がえりでもしているのか、微妙に動くことはあったが、名前が部屋の中を動きまわったり、外に出ることは無かった。

オスカー自身で見返してみても、かなりの出来だと思えるレポート、宿題、忍びの地図を並べながら、まさに昨日エストに言われたことを自分がやっているとしか思えなかった。

談話室でじつとエストの名前を眺めているのはオスカー自身だったし、これではストーカーとあまりやっていることが変わらなかった。

「オスカー先輩のレポートって読みやすいですね。先輩が監督生になったのはそういう理由？」

「エストの相手ができるのが俺だけだからってトunksは言ってたな」

忍びの地図をさらに見えない場所に動かしながら、オスカーはジエマと喋ったのが久しぶりだと感じた。ホグワーツに戻ってから疲れることばかりでもう二ヶ月くらいいる感覚だったのだ。

「どうやったら監督生になれますか？」

「なりたいと思つてなつたわけじゃないから分からないな。とりあえずいい成績をとつた方がいいんじゃないか？」

「オスカー先輩は一年生の相談とかに乗ったりしてますか？ 昔からそういう事をしてたり？」

「たいしてやってないな。レアかジェマくらいしか下級生とちゃんと喋ったことは無い。一年生も俺に相談するよりエストの方に話かけるみたいだからな」

スリザリンの一年生の何人がエストに喋りかけて、ちよつとしたことを聞いているとオスカーは知っていた。オスカーからすれば割

と頑張つて入学時の説明をしたのに、今のところ相談件数はゼロだった。

「一年生から見ると、オスカー先輩は身長が結構あるのと、いつもエスト先輩か他の先輩と一緒にいるか、そうやって一人でレポートをするから話しかけにくいと思いますけど」

「話しかけやすいとかあるのか?」

「ほら、リー先輩とかは体が大きいですけど、なんかあんまり人を寄せ付けないオーラとかは出してない。でも、オスカー先輩はもうなんか寄ってくるなみたいな雰囲気を出してますね。スネイプ先生みたいな感じの」

「嘘だろ…… スネイプ先生って……」

オスカーは目の前が真っ暗になりそうだった。スネイプ先生と同じ雰囲気を出している? そんなことになれば誰からも話かけられないのは明白だった。そしてオスカーが不思議なのはジエマとこうしてかなり近づいて喋つても、昨日のクラーナみたいにはなりそうにないという事だった。

「話しかけにくいのは……」

「オスカー、おはよう」

「おはようございます。エスト先輩。じゃあ私は授業に行きます」

ジエマは風のように去っていった。残されたオスカーはエストにおはようを返せなかった。オスカーはあんまりいつものエストではないと思つた。少なくともエストは談話室に起きてくる段階で髪の毛や服なんかをちゃんとしていないからだ。いつもは。

「エスト…… 昨日……」

「それはもういいかも、だから朝ごはんに行こう? それと流石に朝の四時からいるのは風邪をひくからダメかも」

少なくとも、昨日エストを突っぱねたことくらいは謝らないといけないのに、オスカーは昨日と打って変わって機嫌の良いエストに腕をとられて引っぱられるとどうしようも無くなった。

「変身術のレポートくらいはカバンにいれさせてくれ」

「だめ、おなかすいたから」

オスカーは呼び寄せ呪文でレポートを引き寄せてなんとかカバンに入れた。昨日の夜の風呂場から今日のレポートを書いている間中、ずっとエストに何を言えればいいか考えていたはずなのに、今日、エストの機嫌が良く、廊下を二人で歩いて彼女の髪の毛の香りがするだけでオスカーは色々どうでも良くなってきた。

変身術の授業、この授業はホグワーツの授業の中でも魔法薬学と同じくらい疲れる授業だったが、オスカーはかなりこの授業が好きだった。

「ではネズミの入っていたかごを回収します。きちんと消失できているならばネズミのかごには何も入っていないはずです。ミス・マーク、その尻尾をポケットに隠してはいけません」

みんなの机からマクゴナガル先生がかごを呼び寄せ呪文で回収する。オスカーとエストの机からはネズミのかごともう一つ、大きなかごの中に何も入っていない状態でマクゴナガル先生の所へ回収された。

「いいですか。よくお聞きなさい。この消失呪文はふくろう試験では一番難しい課題の一つですが、間違いなく誰もができる呪文です。ミスター・リー、ええそんな顔をしてはいけません。あなたのおじ様ですらできるようになったのです」

マクゴナガル先生が喋っている横でエストはずっと内職をしていた。何やらエストの考えているWWWの注文票はどんどん商品の種類が増えていた。なのにエストは何の苦労もなくネズミを消失させ、ついでにアナグマも消失させて見せた。

オスカーが困るのはオスカーの方は結構集中しないとアナグマを消すのが難しかったのに、機嫌がいいのか耳元でぼそぼそエストが喋ることだった。

「ね、クラーナって先生になったらマクゴナガル先生みたいな喋り方しそうだよね？ ほら、ふくろう試験では細心の集中力が求められま

す、油断大敵!! とかいいそうじゃない?」

「まあ簡単に想像できるな。マクゴナガル先生も結構世話焼きらしいからな、違うのはクイディッチが好きかそうじゃないかくらいだろ」
マクゴナガル先生がオスカーとエストの方を向いた。オスカーは流石にエストが堂々と内職をしすぎたのと、ずっとエストがオスカーに喋りかけてきたせいで堪忍袋の緒が切れたのかと思った。

「注目なさい。いいですか、ふくろう試験ではアナグマの消失カリクガメを大皿に変身させる課題を出題する可能性が高いでしょう。ドロホフ、ここにあるアナグマをもう一度消失させてください」

先生が杖を振ってさつきオスカーが消失させたアナグマを出現させた。オスカーはあまり人前で魔法を使って目立つのが好きではなかったが、最近、マクゴナガル先生やフリットウィック先生はエストではあんまりみんなの参考にならないので、オスカーにやって見るように言うことが多くなっていった。

「このアナグマだけでいいですか?」

「ええ、ふくろう試験ではおおよそ15分の制限時間内にやらねばなりません」

エストが近くにいないのでオスカーはだいぶ集中できていた。おりのの中のアナグマがオスカーの方をつぶらな瞳でみていた。オスカーは全く意に返さずにアナグマの解剖図を思い浮かべた。どこから消失させればいいのか…… まずは毛を皮を肉を骨をそれに…… 重要なのは全部含めてアナグマだという事だ。オスカーが杖を振るとアナグマは姿を消した。

「ドロホフ、見事です。スリザリンに十点」

マクゴナガル先生はオスカーにそういったあと、アナグマの横にあった空の檻に杖を振った。それぞれ蛇、小鳥、猫が檻の中に現れた。「いいですか、ここにある動物がそれぞれどう違うか分かりますか?」

「ミスター・リー?」

「かわいいか、そうじゃないか?」

「いいえ違います。ミス・プルウエット、忙しいようですが答えることができますか?」

「爬虫類、鳥類、哺乳類です。それぞれ体の構造の複雑さが大きく違います。変身術ではより原始的な生物の方が、魔法使いが構造の理解やイメージをしやすく、魔法の効果表れやすくなります。生物自体の大きさが大きく違う場合や、魔法力や高度な知能を持っている場合を除けばですが」

「スリザリンに十点、ミスター・ドロホフ、それぞれミス・プルウエツトが言った順番に消失呪文をかけてもらえますか？ それに加えて、今度は無言呪文ではなくきちんと

呪文を唱えて、教科書通りの杖の振り方でみんなに見えるように魔法をかけなさい」

オズカーは何かマクゴナガル先生とエストの劇を後ろで支える大道具係の気分になってきた。とは言うものの、エストの言った通り、順番が後ろになるほど、体の構造が複雑になるほど消失呪文が難しかったのは本当だった。ただ、オズカーはさつき無言呪文で哺乳類を消したばかりだった。

「エバネスコ 消えよ」

「エバネスコ 消えよ」

「エバネスコ 消えよ」

面倒になったので、オズカーは連続で呪文をかけて蛇、小鳥、猫を消した。ちよつとだけクラスメイトから拍手が挙がって、オズカーは少し恥ずかしくなった。

「ドロホフ、よくできました。スリザリンにもう十点、では本日の授業は終了です。ネズミを消失できなかったものは宿題として来週までに消失呪文の練習をすること、および全員、脊椎動物の体の構造について理解するため、アナグマのスケッチを行い提出しなさい」

マクゴナガル先生の宣言と同時に変身術の教室はため息に包まれた。オズカーの目の前にあるおりの中には結構な数のネズミの足や尻尾が踊っていたし、中にはそのままのネズミや半分になったネズミがいた。

「ミス・プルウエツト、少々ドロホフを借ります。十分もすれば返しますからそんな顔はおよしなさい。それにあまり堂々と内職するのも

およしなさい」

「はい、マクゴナガル先生。オスカー外で待つてるね」
「分かった」

自分にアナグマを消させたのは明らかに自分を残すためだったの
だろうとオスカーは思った。マクゴナガル先生が柔らかい顔をして
いるのをオスカーはほとんど見たことが無かったので、今日もやっぱ
り固い顔をしているマクゴナガル先生を見ると、オスカーでも少しは
緊張した。

呪文で消失した猫を出現させて、その毛並みを撫でながらマクゴナ
ガル先生はオスカーに喋った。

「ドロホフ、昨日のことです」

「昨日…… 闇の魔術に対する防衛術の事ですか？」

「いいえ、違います。医務室の一件です」

オスカーは途端に頭が痛くなってきた気がした。マクゴナガル先
生の相変わらず厳しそうな顔を見るとオスカーは一年生のころのク
ラーナの顔を思い出しそうだった。

「ドロホフ、いいですか、私が教えてきた学生の世代でも、今の世代が
一番生徒数が少なく、それに魔法界の大人の数も少ないでしょう」

「そう…… ですね」

「それに…… そうですね、お世辞を言っても仕方がないでしょう。
あなたの寮監であるスネイプ先生はまだお若いですし、私の知る限
り、あまり人の相談に乗るのが得意ではありません。加えて、あなた
とはずいぶん違った学生生活を送っていたと記憶しています」

オスカーにはちよつとマクゴナガル先生が何を言いたいのかわか
らなくなってきた。この先生がどういう人間なのか、オスカーにはそ
れほど理解できていなかった。

マクゴナガル先生は相変わらず眉がキリツとしていたし、顔はくそ
真面目なままだった。スネイプ先生について言っていることについ
て、オスカーは笑えばいいのかわからなかった。

「ドロホフ、私は二年生に校長先生のお部屋であなたや、ミス・ムー
デー、ミス・マツキノンのお話を聞いた時から、あの時の校長先生と

同じように、あなたの勇気を評価しています。もちろん、変身術の授業でも評価していますよ。私はこれまで見てきたほとんどのグリフィンドール生よりもあなたを評価しています」

「ありがとうございます」

「いまいち、やっぱりオスカーには疑問点しか浮かばなかった。確かにマクゴナガル先生は魔法がうまくできたり、レポートがいいものならばちゃんと褒めたり評価してくれる先生だが、あんまり表立って生徒をこうして褒めることなどオスカーの記憶にはなかったのだ。」

それに医務室で、ちよつと考えるだけで恥ずかしくなる…… ことについて喋る前に褒めるのは意味が分からなかったのだ。

「ですから、あなたはきちんと向き合おうべきでしょう。忍耐強く、きちんと考えて、勇気をもって向き合わないといけませんよ。いいですか、ドロホフ。少なくとも授業中のあなたを見る限り、慎重で身の丈に合わない事をしないのは分かりますが、決める時は決める勇気があるのですから、いざという時は一気に勝負をしかけるものです」

「は、はい……」

この先生はやっぱりオスカーには良く分からなかった。昔は年をとったクラーナみたいな先生なのかと思っていた時もあったが、今回の話でオスカーはさらによく分からなくなった。

「人生では、頭で考えるよりも、心や感情で決めねばならない時がありますよ。よいですか、ミス・ムーディにも言いましたが、私はいつでも生徒の相談に乗ります。あなたは前に変幻自在呪文の事を相談しに来たでしょう。あの後私が見た、あなたたちが持っているカードは素晴らしいものでした。変身術について聞きに来るように、他の事も私や他の先生に相談すればよいでしょう。もちろん、何を聞きたいのかで相談相手は選ぶべきですが」

「ありがとうございます。でも、どうしてカードの事をマクゴナガル先生がご存知なのですか？」

オスカーがそういって首を傾けると、マクゴナガル先生がめったに見せない笑顔を見せた。こんな笑顔はクイディッチでグリフィンドールが勝った時くらいしかオスカーは見たことが無かった。

「ミス・トunksが教員用のバスルームの石鹸をすべてカエル石鹸にしようとしていた時に、ポケットの中身をすべて出させました。ゾンのガラクタの中にカードも一緒に入っていました。ええ、ミス・トunksは私に嬉しそうに説明してくれましたし、彼女の言うように、私も素晴らしい魔法の使い方だったと思っと思っていますよ。私の時間をあなたに使ったかいがあつたと思いましたが。あんまり出来が良いので、取り上げてしまおうかと思っただくらいです」

「そうなんですか……」

確かに、あのカードについて一番喜んでいたのはトunksだったし、他のメンバーはマクゴナガル先生にそんな事を喋る状況にはなら無さそうだった。

「ではもうお行きなさい。ただし、最後に言っておきますが、私の寮の生徒に半端な事をすれば許しません。それと、あなたとミス・プルウエットは宿題は無しでよろしい」

「分かり………ました」

オスカーはいまいちマクゴナガル先生が何を言いたいのかわからなかった。だいたい、マクゴナガル先生が個人を呼び出してこんな事を言うのはめつたにないはずだった。オスカーはそんなに自分が困っている様に見えるのだろうかと考えた。

「オスカー、マクゴナガル先生とは何の話だったの？」

「うーん………多分、困ってたら相談に乗りますよみたいな感じだったと思うけど」

「オスカーは困ってるの？」

「いや………困ってるかどうかだと、正直去年の方が困ってたかな」

本当に助けが欲しいという意味では、オスカーは去年の方が困っていた。心理的にも肉体的にも去年の方がきつかったはずだった。

「なんでオスカーなんだろう？ だって、オスカーは別に勉強で困つてるとかじゃないでしょ？」

「ダンブルドア先生も俺とかエストにわざわざ言いに来たし、去年のカメラとか、三年生の最後とか、いろいろドンパチやりすぎたから、試験のある五年生だし落ち着けとかそういうのなのかもな」

「それでもオスカーにだけ言うのはおかしいよね？ 他のメンバーにも言わないとおかしくない？」

「そんなに考えなくてもいいと思うけどな」

眉間にしわを寄せて考えるエストを見ながら、オスカーは今年のエストが先生や年上の大人の行動に神経質になっているのではないかと思った。

オスカーにはやっぱり、エストが何を心配して、何が見えているのかが分からなかった。

エストには未来に違うものが見えているかもしれないが、オスカーがぼんやり未来について考えて見えるのは、ふくろう試験があつて、その先にぼんやり自分が何の仕事をするのかが決まるのだろうかとかそういう事なのだ。

あとは、せいぜい近い人との関係がどうなるかとかそのくらいのことだった。

「あ、やっと来ましたね」

「何？ スリザリンはマクゴナガル先生に居残りさせられてたとかそんなの？」

「オスカーがマクゴナガル先生に捕まってたから…… あれ？ チャーリーは？」

「チャーリーはなんかちよつと用があるとか言つて、ジエイとどっかに消えて行きましたよ」

空き教室に入るといつものメンバーが大体そろつていた。オスカーはチャーリーはまた卵でも見に行つたのだろうかと思った。

「あの、先輩方は監督生のコンパートメントで喋つたんだと思いますけど。ボクは何も聞いてなくて……」

「そうよね。まあどうせまたドラゴンの鱗でも探しに行つてるチャーリーは置いといて、エストもう一回説明しなさいよ」

「別にいいけど……」

エストは巾着袋の中からずいぶん大きなナップサックを取り出して、空き教室の机の上にひっくり返した。色とりどりのお菓子や、帽子、ナイフ、マグルの雑貨店に並んでいそうなものが散らばつた。

「これが気絶キャンディでこつちが鼻血ズルズルヌガーでしょ？ カナリア・クリームに首無し帽子なの。これでフレッドとジョージが作りたいって言ってたやつは大体使えるようになったと思うの。まだあんまりサンプルがないからちよつと危険かもしれないけど」

「これはお菓子ですか？」

「そうだけど…… うーんと、じゃあ最初から説明するね」

「ちが明かないと思ったのか、エストは杖でさっきばらまいたお菓子を机の端に寄せて、もう一回杖を振り、例の注文票を取り出した。相当な数が巾着袋から飛び出てきた。多分、みんなの変身術のレポートの厚さを合わせた分より厚かった。

「まず、これをばらまきます。これはお店に置いてあるチラシみたいになってて、原本を書き換えるとそれに合わせて、全部変わります。次にこれの欲しいのに名前を書いて、ふくろうでお金を送ると、注文できます。他にもこのチラシには原本に合わせて、書きたい事を書けます。売り物はいまばらまいたものです」

「毎日届けなくてもいい日刊預言者新聞みたいなの？」

「そんな感じなの。で、これをやるにはいろいろいるかなって、まず一緒にやってくれる人でしょ？ 次に売るモノとか作る場所でしょ？」

「それで最後にお金かなって」

「レアは自分のあごに手を当てて、机の上に置かれている、原本とそれの写しになるものを触ったり、交互に見たりした。そのあと、なにやらクラリーナと喋っているエストとオスカーの方を交互に見た。

「それで…… 結局これをばらまくんですか？ 通販で？」

「そう。それでね、効きすぎて危なかったりしたら言っただけからそういうのを書き込めるようにしようと思うの。あと段々効き目を強めていけば危なくなかなって」

「これを食べると気絶できるんだ…… 材料とかはどうするんですか？」

「エストがレアに聞かれて羊皮紙の束を取り出した。一見、古代ルーン文字にもラテン語にも似た文字だったが、意味は全く読み取れなかった。しかし、エストが杖を振ると意味のある文字と数字に変わっ

た。

「ここに必要な材料は全部書いといたから、えつとグリフィンドールのジエイ？ に頼めばいいんだよね？」

「結構危ない材料もないですかこれ？ 取引禁止品も混ぜってますよね？」

「魔法薬の授業の時にちよつとだけ多めに借りたり、薬草学の時にちよつと多めに摘んだりしたの。でもそうだよ、ホグワーツだと取引禁止品も手に入るけど……」

「まあジエイなら大体手に入れてくると思いますけどね。前はハグリッドに頼まれて、マンティコアの幼体をホグワーツに持ち込もうとしてましたし」

オスカーはよくよく考えると、自分たちのメンバーで規則破りを本格的に行うというのは先生方から見るとんでも無いことになるのではないかと思ひ始めていた。しかし、オスカーはエストの機嫌を損ねたく無かったし、なによりこのメンバーで一つの事をやって見たかった。

「それより仕入れるのなら元手があるんじゃないでしょうか？ そういう取引禁止品って結構な値段がしますよね？ 前に魔法薬の勉強をしようとして、魔法薬の材料の価格を見たらびっくりするような額だったんですけど」

「それは大丈夫なんじゃないの？ まあ私とかチャーリーはあんまりお金を持ってないけど、オスカーはお坊ちゃまだし、エストはお嬢様なんじゃないの？」

エストが自分のポシエツトをガサガサやった後、かなりうんうん言いながら重そうな巾着を取り出した。テーブルに置くと金属同士がぶつかる音がした。

「ここにだいたい三千ガリオンあるから、それでなんとかならないかな？」

「いま何ガリオンっていいましたか？」

「三千ガリオン」

みんなしばらく無言になった。エスト以外の四人はじつとエスト

が置いた瞬間にジャリン!! という音が鳴った巾着袋を見ていた。オスカーはチャャリーがここにいないくてよかったと思った。多分、もしかするとチャャリーは卒倒してしまうかもしれないからだ。

「これだけあつたら何ができるのかしら? 私ちよつとよく分からなくなつてきたわ」

「何をやったらこのお金がでてくるんですか?」

「え? 去年のトーナメントで最初に百ガリオンくらいみんなに賭けてたんだよ? それが三十倍くらいになったからこうなったの」

チャャリーのニンバスが何本買ってしまうのか、オスカーは計算しないことにしたが巾着の中で金貨が唸っているというのはみんなにこれまででない衝撃を与えたようだった。

「分かりました。エストが本気でやろうとしてるってことを私は今分かりました。お金つてすごいですね」

「だから最初から本気でやるって言ってるの。こういう商売って色んな機械とか魔法道具と一緒に大きな仕組みだから、その仕組みが回るところまで一気にやらないとダメだと思うの。私はあんまりモノを売るとかしたことはないからあつてるか分からないけど」

「OK…… 分かった。分かったわよ。エストが本気だつてことは」「小さい家なら買えるんじゃない?」

トックスが少し引いているのもいつもの事を考えると面白い状況だった。むしろこういう事をやりたいのはどちらかと言うとトックスの側のはずだったからだ。

「こ、こんなに使わないと思いますけど…… あ、場所、場所が必要だと思えます。ほら作る場所が必要かなって」

「そうなの。さっきも言ったけど、その話を今日やろうと思つたの。エスト一人かオスカーと一緒になら談話室で何かしても別に何も言われ無いけど、さすがにみんなでいろいろ作つたりしてると何か言われるかなって。それにその部屋からバンバンふくろうが飛んで行つたらばれちゃうでしょ?」

「必要の部屋はダメなわけ?」

トックスがそう返すとエストはかぶりを振った。

「それだと誰かが使っている時は使えなくなっちゃうの。それに私はあの部屋をそういう使い方をしたくないって思ってるんだけど。あの部屋って誰かが本当に困っている時に使われる部屋だと思ってるの。それにエス…… 私たちはあの部屋の力を使わなくても他の方法で実現するくらいできるかなって」

「なんかいいですねそういうの。昔はレイブクローのお世話になっていましたけど、今は私たちだけでできるってことでしょうか？」

「へえ、エストいいこと言うじゃないの。オスカーあんた今日はずっとだんまりだけどどうなのよ？」

「いいんじゃないか」

「ボクもいいと思います。ただ見つからなくて、大きな場所を探さないとダメですけど」

三年間の時のエストは必要の部屋を使いたがっていたのに、今となってはエストにとって、頼ってはいけないものになっているのがオスカーからすれば新鮮だった。ただ、あんまり自分たちだけでやることにこだわるのは良くない気もオスカーはしていた。

「なんかないかな？ 最悪、叫びの館でもいいかなって思ってるんだけど。ただあそこだとダンブルドア先生はすぐに気づいちゃいそうでしょ？ あとホッグズ・ヘッドもアバーフォースさんはダンブルドア先生のことあんまり好きじゃないけど、多分伝えるんじゃないかなって」

「うーん。そんな場所ホグワーツにあるのかしら？ ダンブルドア先生とか先生方の目から逃れることができて、結構大きな場所よね？」

「忍びの地図を見て考えればいいじゃないですか」

オスカーは待っていましたとばかりに忍びの地図を広げた。フレッドとジョージ考案のいたずらグッズの中で広げると忍びの地図はまさにあるべき場所に戻ったとでも言いたげだとオスカーには感じられた。ただ、みんなが忍びの地図を覗き込んだせいで顔の距離が近くなったのがオスカーにはいただけ無かった。

「知られてない場所よね？ 隠し通路じゃないの？ ほら、隻眼の魔法の像の下はハニーデュークスにつながっててファイルチも知らない

わ

「あとは叫びの館につながっているあれと、五階の大鏡の後ろですよ
ね」

「五階の大鏡の後ろは結構大きいですよ。オスカー先輩」

「オスカーとレアが去年ずつといた場所でしょ？」

「え…… ああ、まあそうだけど……」

よくよく考えれば、チャーリーとオスカーが卵の隠し場所としてのあ
の場所を選んだのは知っている人が少なく、大きなスペースをとれ
るからだった。そしてそれはそのままエストの計画にも一致する場
所なのだ。オスカーは完全にそれを忘れていた。

「なんか歯切れ悪いわね。なんかあるわけ？」

「いや、チャーリーとジェイとこの話をしてて、どこからエストの言う
ような材料をホグワーツに持ち込めばいいか考えてて、この場所の話
が出たんだよ。それでちよつと前に見に行ったら……」

「行ったらどうしたんですか？」

「崩れてたんだ。まあ崩れてないんならあそこが一番楽だろうけど」

オスカーはこの四人に嘘をつくのがかなり苦しかった。ましてや
ジェイの名前まで出してしまったので、クラーナがジェイに聞いた日
にはすぐにばれそうな嘘だった。

「え？ 崩れちゃったんですか？ オスカー先輩」

「見た感じそうだったな。それに元から崩れそうだったろ？」

「そうですね…… 今から見に行ってもいいですか？」

「いや、崩れてるって……」

「あの、先輩方は忍びの地図で他の場所を見つけてもらえますか？」

「いいですけど…… オスカーが崩れてるって言うてるんですから別
に行かなくて……」

「じゃあちよつと行ってきます」

レアがオスカーの腕をとってかなり強引に部屋から連れ出した。
オスカーはできるだけ優しくレアの手を腕から外した。

「どうしたんだ」

「その…… ちよつとショックだっただけなんだけど…… あそこは

居心地の良い場所だったから」

「見ても崩れてるから……」

オスカーはかなり罪悪感に苛まれていた。こんな形でレアや他のみんなに嘘をつくことになると思っていなかったのだ。レアは去年の間にあの場所がずいぶんお気に入りになっていったようだった。

「オスカーと去年補強みたいなことをしたと思っただけ……」

「あれだけじゃ足りなかったんだろうな。俺たちが練習している間に落ちてこなくてラッキーだったかもしれない」

「それは……」

五階に向かって階段を登りながら、オスカーはやっぱりチャーリーとの秘密をばらしてしまって、エストの計画に使った方がいいのではないかと思い始めていた。

しかし、オスカーにはやっぱり男友達と気軽に喋れる時間と空間が必要だった。

「ほんとに崩れてる……」

「だろ？ それに呪文とかかけたらもつと崩れるかもしれないだろ」

「そうかもしれない…… エスト先輩ならどうにかなるかもしれないけど」

「それをするより、他の場所を探した方が速いとは思うんだが。マートルが住んでる女子トイレを改造するのかな」

「それだと一生ボクたちの誰かがマートルに付きまとわれそう」

オスカーはなんでこんなみんなと何かやるだけで罪悪感に苛まれないといけないのか分からなかった。三年生までなら多分、ドラゴンの卵もエストの計画も、クラーナの動物もどきの話も、全部一緒にやれたはずなのだ。

「オスカー、自分の目で見て分かった。わざわざ連れてきてごめんなさい」

「いや、いいけど。けどやっぱりなんか違和感あるな。俺といるときだけ、そんな口調になると」

「え…… いや、ボク…… 最近はレイブンクローの友達といるときもこんな感じだけど……」

「じゃあ、エストやクラリーナがいるときだけ違うのか？」

「まあ…… そう…… かな？」

とはいえ、去年までのレアならあんな空気で強引にオスカーを連れ出すなどしなかったはずなので、口調の変化くらいかわいいものかもしれないなかった。

レアの身長はどんどん伸びて、今では同級生の男子の平均くらいはありそうだったし、髪の毛もだんだん伸びて、明らかに入学時のレアとは別人だった。

「オスカー、オスカーはエスト先輩の計画に反対？」

「いや、別にやればいいと思ってる。まあクラリーナにはなんかくぎを刺されたけどな」

「クラリーナ先輩がくぎ？」

「エストが暴走しないように見張れだって、その後はトックスにとっちかと言うと俺の方が暴走しがちみたいなき感じって言われたけどな」

「プツ…… あ、ごめんさい。そのちよつと面白かったから」

目の前でオスカーのいわれように対して笑うなど、多分、これもこれまでのレアでは考えられなかった。

「レアはどうなんだ？」

「ボクは結構賛成です。まず面白いし、新しいもの作るのも好きだし、何より、エスト先輩のあの変幻自在呪文を使った通販？ みたいな発想が面白いから。もちろん、変幻自在呪文をあんな自由自在に使えるのはエスト先輩くらいだけど、あんな風な使い方を思いつくのがすごいと思う」

やっぱり、レイブクロー生とエストは波長が合うのかもしれないとオスカーは思った。純粹に知的な好奇心でレアはモノを言っているらしかったし、これまでオスカーはあんまりレアのそういう部分に触れてはこなかった。

「そうか…… まあ確かに面白いのかもな」

「あと…… エスト先輩は頭がいい。それに行動力も凄い。先学期の今日でこんなの作って、計画を移しちゃうくらいだから。ボクが言っていること分かりますか？」

「いや、あんまり分かってない」

「エスト先輩がこんな事してるのは、多分、オスカーのせいだから。オスカーが去年、いきなりカードを赤くさせて、ボクらを校長室に集めたから、エスト先輩は夏休みの間に準備して、計画を立てて、こんなことしようとしてる」

「どういう意味だ？」

オスカーは思わずレアの黄色の眼を見つめた。レアは全く動じることなくオスカーを見返した。少なくともレアはオスカーに嘘をつきそうに無かった。

「チャーリー先輩は分からないけど。クラーナ先輩とトンクス先輩は分かっていると思う。だから二人はオスカーにそんなこと言ったんだ。二人はボクよりエスト先輩といた時間が長いし、エスト先輩の事を分かっている。それにオスカーとエスト先輩の関係の事もボクより分かっている。だから…… オスカーは分からない？」

レアはクラーナやトンクスよりずっと、落ち着いている時は論理を固めてはつきりモノを言うタイプだった。今もそうなのだろう。そして去年の変わりようで、レアはオスカーに対して、本当にはつきりモノを言うようになっていた。

それにクラーナや夏休みにトンクスが言っていたことを含めて、オスカーにはレアの言っていることが納得できそうでもあった。

「ボクはさっきの話しか聞いてないから断言はできないけど、十中八九は先生方が何かやっても、生徒に発言権が残るようにエスト先輩は動いている。それもエスト先輩がコントロール可能な形で動けるように。それも直接的じゃなくて、間接的に誰が首謀者なのか分からない形で。正直、あの通販の紙みたいのを含めて、相当考えられている。ちよつとした思い付きじゃなくて、本気で考えられている。オスカー先輩、エスト先輩が本気で考えるなんてそうそう無いってオスカーは一番知ってるんじゃない？」

「分かっているよ。そうだな、相当考えられている」

「ほんとは相当なんてモノじゃないと思うけど…… あ、オスカー、ボクが言っていることは…… その…… 断定みたいな口調で喋ってる

けど…… あくまで……」

「あくまで予想ってことだろ？　なんかお姫様モードと通常モードを行ったり来たりすると調子が狂うな……」

「いや…… だからそんなモード無いから……」

階段を下りて、みんながいる部屋に戻りながら、オスカーはこういうトーンで話していれば昨日みたいなことにならないと理解した。何かちよつとシリアスな雰囲気でも論理だった会話が重要なのかとオスカーは思い始めた。

「それで…… だから、エスト先輩がそんな事するのは、百パーセント、オスカーが原因だから」

「さっきは十中八九なのに、それは百パーセントなのか」

「だってボクがもしそんな事できる発想とか魔法の知識とかお金があるんだったら、間違いなくそうだし……」

まったく恥ずかしげも無くそんなことをレアが言うので、オスカーはあまりレアの方を見られなくなった。

「分かった。エストが何かやるのは俺とにかく原因があるんだな」

「そうです。それで…… オスカー、オスカーはホグズミードにみんなで行く…… んですか？」

「なんで敬語が入るんだよ」

「いや…… もう、その、先輩方と何か予定を入れてるのかと思って…… ボクは先輩方と違って、授業ではオスカーと話せないから……」

「いや何も…… いや、なんかエストと賭けをして、エストとどっか行くことになってる気がする」

「一日全部？」

「それはエストに聞いてくれ。多分、みんなで三本の筭にはさすがに行くだろうから、全部つてわけじゃないと思うけど」

もうオスカーは結構限界に近かった。クラーナは近づいてくるし、エストは機嫌が最悪になったと思えば良くなっているし、レアはレアで一回の会話の中で強気なのか弱気なのか分からない。オスカーには女の子が分からなかった。

「なら、なら、秘密の通路でホグズミードとかは……」

「分かった。日時を決めてくれ、ふくろうでも俺が一人の時でもいいから、伝えてくれ」

「ほんとに?」

「ほんとにだ。というか、まさかこの話するために連れ出したんじゃないよな……」

オスカーがそう言うとなレアは静かになった。そのまま、オスカーはなんとかみんながいる教室まで戻った。このままではオスカーはホグワーツにいても、ホグズミードで休暇を取っても、心が休まりそうに無かった。

「ほら早くおねんねして下さい。ママが揺らしているので、安心して寝てください。あなたのママが傍にいますよ。クラーナはここにいますから、ゆっくりおねんねして下さい……」

「今度は何してるんだ。クラーナの声で良く寝付ける魔法の道具とかそんなのか?」

「お、オスカー? 違いますよ。誤解も甚だしい……」

「そうよ。クラーナの催眠枕、一つ百ガリオンよ。三つくらい買うでしょう?」

「いや、買わない」

もう本当にオスカーは毎日毎日、疲労困憊になりそうだった。オスカーには帰ってきたらクラーナがママになりきっている状況など理解する領域が頭に残っていなかった。

「動物の子供に聞かせようと思って、ここにいた三人に喋って貰ってたんだ。クラーナだけなんか自分の名前を入れてたけど」

「なんで?」

「いや、だって、お母さんってそういう事をするんじゃないんですか?」

人間の子供だったら、一番最初に名前を言ってもらいたいでしょ?」

「まあ、確かに」

「ほら、オスカーも納得してますよ」

「じゃあオスカーにも言っておけばいいじゃない。オスカーちゃ

ん、クラーナママですよって」

「どう考えてもそんな話にはならないでしょう」

チャーリーが言っていた、ドラゴンの子供もそういう声を聴くと安心するので、マジックアイテムでなんとかしようとかそういう系統の話らしかった。もちろん、ドラゴンは話すことはできないので、せいぜい、何か覚えても、クラーナという名前に反応するくらいのことだろう。

「トクスマママはうるさいの、あ、ドールママだったの」

「そうですね。オスカーにもドールママの音痴な子守歌を聞かせてあげたらどうですか？」

「はあ？ あんたたち妖女シスターズの子守歌知らないのね。勉強ばかりしてるから世間に置いて行かれるのよ」

「チャーリー、もうそれは終わったのか？」

「うん。クラーナのも録れたし、大丈夫だと思うよ」

オスカーはとつとチャーリーのドラゴンの卵は孵って欲しかった。このままではオスカーはずつと嘘をつくことになるし、レアやエスト辺りにばれる日には相当なことになるし、そうだったからだ。

「あ、レアが帰ってきたし、クラーナ、あの話しなさいよ」

「そうですね。レア、ウインガーを私に紹介してくれませんか？」

「クラーナ先輩がタルボット先輩……?？」

レアがオスカーとクラーナの方を交互に見た後にトクスの方を見た。レアは何か混乱しているようにオスカーには見えた。

「え？ え？」

「ちよつとちゃんとクラーナは説明した方がいいわよ」

「いや、普通にあんまり喋ったことが無いから紹介って言うか、会う約束を取り付けて欲しいって言うてるだけじゃないんですか？ 何をそんな混乱するようなことがあるんですか？」

今度はクラーナの方が混乱していた。オスカーはレアとクラーナが二人そろってこういう状態になるのは珍しいと感じていた。この二人はどっちかと言えば事実を積み上げて判断するタイプの人間だと思っていたからだ。

「普通に動物もどきの話をしたいってだけだろ？」

「動物もどきの話ですか？ タルボット先輩に？」

「そうですねよ。ウィンガーの両親は二人そろって動物もどきだったはずです。魔法省の登録簿にも書いてありますし」

まだレアの目はオスカーとクラーナの方を交互に見ていた。オスカーからすれば何をそんなに混乱しているのか分からなかった。話をする相手のタルボットもオスカーからすればそんなにおかしな人間とは思えなかったからだ。

「というかレアってタルボットと喋ったことあるわけ？ あいつオスカーと同じくらい他の学生と喋らないじゃない？ それにエストと同じくらいクセがある感じだし」

「何それ。トンクスにクセがあるとか言われたくないかも」

「同じレイブンクローですし、タルボット先輩のお母さんとボクのお父さんは同僚だったからその事を喋ったことがありますよ。初めて喋ったのは二年生になってからでしたけど」

レアの父親と同僚と言うことは、タルボットの母親は癒者だったと言ふことなのだろう。オスカーは魔法界はやっぱ狭い社会だと思った。誰かの知り合いは誰かの知り合いなのだ。

「まあとにかくお願いしますよ。そんなに難しいですか？」

「難しいって言うか…… 多分、タルボット先輩はクラーナ先輩なら会ってくれると思いますけど、なんて言うか…… あの、ボクも一緒に話を聞いてもいいですか？」

「レアがですか？ ついてきてくれるならありがたいですけど」

オスカーはいまいちレアが何を懸念しているのか分からなかった。こういうことはエストに聞いてもあんまり分かりそうになかったのだ、オスカーはトンクスに話かけることにした。トンクスしか聞こえない小さな声で話かけると、オスカーはエストから視線を感じた気がした。

「トンクス、レアはなんでちよつと困ってる感じなんだ？ クラーナとタルボットを会わせればいいだけだろ？」

「えー…… 私にそういう事を聞くわけ？ あー、そうね、私はむしろ

クラーナがタルボットに会いたいのじゃなくて、タルボットの方がクラーナに会ってみたいんだと思ってたわね」

「タルボットが？」

ちよつと前の授業で同じ班になったときはタルボットはそんな素振りを見せてはいなかったとオスカーは思った。いまいちどうして喋りたいのかもオスカーにはよく分からなかった。

「分からないんだったら、じゃあちよつとあいつらが会う時間だけ覚えておきましょうよ」

「あいつらつてクラーナ達とタルボットがか？」

「そうよ」

「ねえ、オスカーとトンクスは何こそ喋ってるの？」

「何？ 私がオスカーと喋っちゃダメなわけ？ エストレヤママはオスカーお坊ちやまに対して過保護すぎるわ」

「確かにそうだね」

「チャーリーは黙ってて」

オスカーはもう、気にすることが多すぎるし、エスト、クラーナ、トンクス、レアの行動が全く分からなくなっていて、学期の初めなのに、もう、頭がどんどん爆発しそうになっていた。

むしろこういう事を考えないように、早くふくろう試験の勉強をオスカーはしたくなっていった。

「オスカー、私もう行くけど、終わったら来てね」

「分かった。分かったから」

「あら、オスカーを予約済みってわけね」

「そう。トンクス対策なの」

「私は対策いらないわよ」

「必要なの」

もうオスカーは最近、誰と誰が喋ってもこんな感じでどうしようも無かった。その後、女子三人になってもあんまりに騒がしかったし、チャーリーは隙あらばドラゴンの卵の話に持っついこうとするし、オスカーはみんなを全くコントロールできなかった。

なので、なんとかふくろう試験の勉強をしようとしたりしたが無駄

だったので。

エストの計画の日程を立てて、ここまでで場所を決めて、ここまでに材料を手に入れて、学校に運び込むルートを作って、ここまでに売り始めるとかいう計画をまずはクラーナとレアに振って考えて貰い、これが障害になりそうだという箇所だったり、エストが作るのに悩んでいるとか言ってた商品だとかの話をつんクスとチャリーに考えて貰ったりした。

オスカーは監督生だったが、このメンバーの監督ができるほどの力量は無かつたし、だいたいそれを任せられるのだったら、せめてもう少しいい待遇を与えて欲しかった。

クイディッチの競技場は夜になっても魔法で灯りがついている。スリザリンのクイディッチチームは魔法で照らされるグラウンドの上をエストの指示通りに練習をしているらしかった。

次の試合の相手がハッフルパフなので、相手のシーカーやチェイサーに見立てた動きを自分のチームにさせて、それをビーター二人でどう潰すかの動きの練習をしている。

オスカーはあんまりにエストを待っている間暇だったので、万眼鏡でエストやチームの動きを見てると何かちよつとおかしいと思いはじめた。

普通、クイディッチ選手は高速で動いているし、風と反対の向きではお互いにとても声が聞こえない距離がひらいてしまう。なのに、チェイサー三人にビーター二人はエストが何か言うとその通りに動いていた。

オスカーはちよつとおかしいと思つて、エストの方に万眼鏡をしばらく向けていると向こうに気づかれたらしく、オスカーはエストにウィンクされた。

エストが何か喋つてグラウンドの方に降りていくと、他のチームメイトもそれに従つて降りてきた。お互いに肩をたたき合つたり、何か

喋りながらロッカールームがある方へと降りてくるのだ。

観客席に座っていたオスカーも降りようとしたが、エストがジェスチャーで座っているとやってきたので、オスカーは座ったままでいた。

チームメイトと一緒にロッカールームに消えてしまったエストを見て、オスカーは箒に乗るのだから、エストが降りてきたらそのまま乗せさせられるとちよつと身構えていたのだが、そうでないと分かり体から力が抜けた。

オスカーはしばらくベンチに寝転がり、手持ち無沙汰になって忍びの地図を開いた。よくいるメンバーの名前を探すと、チャーリーは案の定、鏡の裏にいるらしかった。クラリーナとトングスの名前は二人そろって図書館にあった。オスカーは結局、なんだかんだ言つてあの二人は仲がいいのだろうと思わざるを得なかった。

少し笑いそうになりながら忍びの地図を見てみると、不意に風が吹いて、オスカーがよく知っている香りがした。

「なんかオスカーはご機嫌だね？」

「着替えて来たのか？」

「そうだよ。だつてちよつと寒いかもしれないし」

クイディッチのユニフォームではなくて、オスカーと同じようなスリザリンのローブ姿のエストが隣にいた。ロッカールームでシャワーを浴びてきたのか、まだ少し髪が濡れている様に見えた。もちろん、ウェーブがかつていて、ワタリガラスの毛並みのように黒いエストの髪の毛はもともと濡れているように見えるのだ。ただ今はそれ以上に水で濡れているらしかった。

「箒に乗るって言つても、俺は箒を持ってないし、それに乗れないぞ。一年の飛行訓練の時も俺とクラリーナはほとんどビリみたいな感じだつたからな」

「それは私も知ってるの。隠れ穴で遊ぶとオスカーとクラリーナがハンデみたいになつてもんね」

エストの横で浮かんでいる箒を見ながら、一年生のころに本当にゆつくり上がったたり、下がったり、前に進んだりしか出来なかった授

業を思い出した。

授業の内容ができなくて恥ずかしくなった経験など、オスカーからすれば飛行訓練くらいだった。ただ、その時はクラリーナが盛大にマクゴナガル先生の部屋に突っ込んだせいで、オスカーの箒に対する不器用さはあんまり注目されなかった。

「でも今日は大丈夫かも。オスカーは後ろに乗るだけでいいし」

「後ろって、エストの後ろに？　大丈夫なのかそれ？」

「私の操縦が不安ってこと？」

「いや、そういうわけじゃないけど……」

ゆっくり飛ぶこと自体はオスカー自身、クラリーナほど恐怖感が有るわけでは無かったが、高速で飛ぶとなるとオスカーも少しは緊張したし、なにより、昨日の今日でエストの後ろにくっついて飛ぶというのは、オスカーにとっては頭のいい行動とは思えなかったのだ。

「箒をもう一本もってきてゆっくり飛ぶとかじゃダメなのか？」

「そんなにノロノロ飛びたくないな」

「分かった」

少なくとも今日のエストにオスカーは逆らうわけにいかなかった。もちろん、いつも逆らえていないかもしれないが。

スタンドの一番下、よく寮ごとに分かれてみんなが立って応援しているスペースにエストが箒を乗れるように浮かべた。オスカーはチャャリーとエストに箒の解説を千回くらいしてもらっている気分だったので、大体のスペックくらい空で言えることができた。

「実はね。箒って二人用のアクセサリーとかも売ってるんだよ？」

「なんか聞いたことあるな。後ろで足をおけるようにしたりするやつだろ？」

「あれ？　そんな話したっけ？」

「チャャリーとトックスがそんな話してたよ。多分、二人がカメラを探して飛び回ってた時に、ハツフルパフのスタンプが女の子と一緒にそれをつけて飛んでたから、トックスがディメンターの恰好をして、箒を透明にした上で追いかけたとかなんとか……」

「ハツフルパフのシーカーが湖の大イカに助けられたのってそういう

ことだったの？」

オスカーはなんとか会話を伸ばして、エストと一緒に飛ぶ時間を失くしたかったが、無駄な努力に終わるだろうことを自分で理解していた。

「そうなんじゃないか？ チャーリーも箒ごと透明になって、気温を下げる呪文を二人の後ろ側からかけてたらしいからな」

「あの二人、あんまり一緒にするとダメかもしれないの」

いま聞くとかなり面白そうに聞こえるのだが、当時のオスカーは他の事で頭がいっぱいで二人のいたずらにもあまり笑うことができなかったし、そのあと、二人は思いつきリクラーナにピンタをくらったので仲間内でもほとんどこの話はしていないはずだった。

ふいにエストが杖を振って、オスカーの体に少し冷気のような感覚が流れた。エストの姿も箒も自分の姿もオスカーには見えなくなつた。

「でもね、オスカーも目くらまし術をかけて空を飛んだことないでしょ？ 普通に箒で飛ぶのとは全然違う感じなんだよ？」

「先生に見つからないようにじゃなくてか？」

「それも結構あるかも」

相変わらず、エストのかける呪文や呪いは完璧だった。普通、うまい魔法使いや魔女がかけても目くらまし術には多少違和感が生じるのだが、エストがかけると光の屈折だとかそういうところまで違和感が無くなるのだ。つまり、今の二人は完璧に透明に見えた。

「じゃあほらオスカー、早く後ろに乗って？」

「いや、見えないだろ」

「ほらこっち」

見えないエストに手を掴まれて、オスカーは何か棒きれのようなモノの上に座った。箒はオスカーとエストが乗ると少し沈み込んだが、しばらくすると元の高さに戻った。

シャワーを浴びたばかりのせいなのか、風の通りのいい競技場なのに、柑橘系の香りでオスカーは包まれていた。そしてどこを掴めばいいのか分からなかったオスカーは見えないエストの両肩を掴んだ。

「オスカー、そんな風にくつついてたらオスカーはどっかいつちやうよ?」

「いや、じゃあどこ…… ちよ、お、おい」

オスカーが質問しているのに、エストはいきなり箒を動かした。見えないエストの肩と足で挟んでいる箒しかオスカーには支えになるものが無いのに、一瞬でクイディッチ競技場のスタンドや照明より高く上がって、百八十度向きを変え、ホグワーツ城の方へ突っ込んでいった。

「エスト!!」

「何?」

「いや、ヤバイ、これ死ぬ、死ぬって!!」

「いつつもオスカーはみんなの前からいなくなっただけでこれよりもっと危ないことしてるでしょ?」

「してない!! 絶対してないから!!」

オスカーが経験したことのない速度で二人は天文台の塔へ突っ込んで行った。エストが前にいるので風はそれほど感じなかったが、風切り音とオスカーとエストのローブのはためく音がオスカーを襲っていたし、なにより、天文台の塔がオスカーの目の前に迫っていた。エストが透明になっているので、オスカーにもそれがそのまま見えた。

「おい、ぶつかる!! ぶつかるって!!」

「なんで? 箒は上に飛べるんだよ?」

「え?」

もうオスカーは形振りかまわず、肩を持つのをやめて、エストに後ろから思いつきり抱き着いた。なぜなら、エストが天文台の塔が建っているのと同じ方向に箒の向きを変えたからだ。つまり、箒はロケットのように上を向いていた。向きを変えた瞬間にオスカーは慣性に引っ張られてエストに覆い被さるようになり、その後、重力がオスカーを地面へと引きずり降ろそうとしたので抱き着くのは仕方がなかった。

「ヤバイ!! ヤバイ!! ほんとに落ちるって!!」

「だから落ちてないでしょ？　ちやんとつかまっていれば落ちないの」

二人分の重力が二人を地面に引きずり降ろそうとしているはずだったが、エストの魔法力で箒はそんなもの感じないように上昇した。オスカーが考える間もなく、天文台の塔の一番上より高い場所で二人は浮かんでいた。

「ね？　落ちなかったでしょ？」

「いや……　エスト……　だから……　飛んだり……　スピード……　出す前に……」

オスカーはホグワーツ城が一望できる素晴らしい眺めなのにそんなものを見向きする体力も無く、エストに抱き着いてハアハア言いながら喋っていた。そして残念ながら大抵の場合、エストはオスカーの言うことを興奮している時は聞いてくれなかった。

「じゃあ落ちてみる？」

「いや……　やめ……　死ぬ、死ぬ、死ぬって!!」

今度は本物の重力に加えて、さつき昇っていたのと同じ速度で地面が近づいた。エストは絶対に地面にぶつかる前に箒の向きを変える、それが分かっている間違いなくこの勢いで石畳に叩きつけられれば死ぬという実感がオスカーを襲っていた。

「ぶつかる!!　ぶつかるから!!」

「オスカー、ちやんと箒で曲がる時は重心を合わせてね」

「は？　おい、おい、おい!!　なんでこんな低いところ飛ぶんだよ!!」
「あんまり大きい声だしていると、さすがに目くらまし術をかけてもばれちゃうかも」

気づけばいつもオスカー達が歩いているホグワーツ城の石畳のほんの少し上を二人は飛んでいた。オスカーの足がエストより少し長いせいで、オスカーの靴は石畳に時々当たっていた。いつもくぐるアーチや花壇や植え込みの間を箒は落ちる時そのままの速度で走り抜けていく。時々アーチや枝がオスカーの体や頭をかすめていた。

「オスカー、箒で左とか右に重心をずらす時は体をそっちによせるのと、目でそっちを見ればいいんだよ」

「じゃあ!!　エストはまっすぐ前だけ見てくれよ!!　一生のお願いだ

から!!」

そういいながらも箒の舵を握っているエストにオスカーが逆らえるはずもなく、それに途中で降りれば間違いなく、オスカーは自分がただの肉塊みたいになってしまうのは想像できたので、エストが曲がりたい方向に体と視線を無理やり向けるしか無かった。

「エストもホグワーツ城の中は飛んだことが無かったから飛んでみたかったの」

「俺は飛んでみたくないって!!」

一切速度を落とさないまま、オスカーとエストの箒は薬草園やみんながゴブストーンをしたりする噴水のある広場を過ぎ去り、大広間へとつながる扉のほうへ飛んで行った。右や左にエストが箒を向けるたびに、体にかかる慣性を感じながらオスカーは必死にエストに抱きついて同じ向きに体と重心を移動させた。

エストがレアがしていたように手でドアを開けるような仕草をすると、フィルチが每晚頑張って閉めている大扉の鍵がガチャリと開いて、扉自体も大きな音を立てながら開き始めた。本当ならアロホモラが効かないようになっているカギだとオスカーには気づけたはずだったが、オスカーにそんな余裕は無かった。

なぜならエストはほんの少しの隙間しか空いていない扉に飛び込もうとしていたからだ。

「絶対無理だろ!! あんなに俺もエストも細くないって!!」

「オスカー、それちよつと失礼かも」

「いや、無理、無理だから!! クラーナでも通れないって!!」

「オスカー、そんなにエストとクラーナで細さが違うと思ってるの?」

「だから無理だって!! ヤバイ!! ヤバイ!! 絶対無理だ!!」

本当に人ひとりくらいしか入れない場所に二人の箒は入り込んだ。扉はなぜかその後ガチャリと閉まった。そして箒は相変わらずのスピードでホグワーツ城の中を進んでいた。城の中は城の外より気温が低く、多分、エストとチャーリーが言っていた最高速度の百マイルくらいで飛べばそれがさらによく分かった。

「ほら通れたでしょ?」

「通れたじゃないって!! 前、前を見てくれよ!! エスト絶対今俺の方を見てただろ!!」

「ちよつと仕掛け階段に当たりそうになっただけでしょ?」

「だけでしょじゃない!! エストじゃないや、仕掛け階段が避けずに死んでた!!」

「おかしなオスカー。仕掛け階段が特定の人間を避けるわけないの」「絶対避けた!! 勘弁してくれ!! また上がるのかよ!!」

肖像画が一杯掛けられている大階段を二人はまた垂直に箒で上がっていた。途中でミセス・ノリスの姿を見たり、肖像画が二人の起こした突風をいぶかしんでいたりが、あまりの速度に目撃者も何が何か分かっていないようだった。

「エスト!! エスト!! お願いだからせめてホグワーツ城の外にでよう!!」

「えー、ほら鎧さんとか石像さんもこっちに手を振ってるよ?」

「そんなのどうでもいいから!! 早く外に出てくれ!!」

「あ、ニツクと太った修道士だね」

大階段を駆け上がり、到達した六階の廊下をさらに速度を上げて二人は爆走し、何やら話し込んでいたグリフィンとハッフルパフの寮霊の体を突き抜けた。箒に乗ってから一番ひんやりとした感覚にオスカーは包まれたが、ゴーストの二人は二人に跳ね飛ばされたようにどこかに吹っ飛んでいった。

「ゴーストが吹っ飛んで行ったぞ!! 人間だったらどうなるんだよ!!」

「あれ? フィルチじゃない?」

「え?」

フィルチが何か本を読みながら廊下を歩いている、どうせ誰か生徒への罰則用の紙か何かだとしかオスカーには思えなかったが、そんなことはオスカーにはどうでもよかった。今はエストが速度をどうするのかが、どっちを向いているのかが重要だった。

「こうやってね。スニツチをとる時は手を放さないといけないの」

「手は放しちやダメだって!!」

エストは箒から手を放して上体を起こしているに違い無かった。オスカーはエストに抱き着いて全体重を預けているので、見えなくてもエストが何をして、どんな体勢なのか分かったのだ。

フィルチの傍を通り過ぎた瞬間、エストが手でフィルチの読んできたものをひったくった。

しかし、その間、エストは箒の操縦などしていなかったため、ホグワーツ城の壁が目の前に迫っていた。

「だから、城の中はダメだって!!」

「じゃあちゃんと掴まっててね?」

「人生で一番誰かに掴まってるに決まってるだろ!!」

今度は箒を回転させながら、廊下の上の方にある飾り窓に箒は突っ込んだ。正面からぶつかれば間違いない窓だったが、体を回転させて、最後にまるで空中でドリフトでもして、搭乗者の反対側、箒の下部分や二人の足だけが先に窓に当たるように窓に突っ込んだのだ。そうすれば二人の高さは関係なく、箒とオスカー、エストの横幅の面積だけで通ることができたのだ。

強烈な慣性で吹っ飛ばされそうになりながら、なんとかオスカーはエストにしがみついて落ちなかった。

やっと箒が止まったのでオスカーが周りを見れば、外の風を感じる事ができ、それにさつき割ったガラスはエストの魔法で元通りになっていた。

「ね? ほら大丈夫でしょ? これ持ってて、外だからもつとスピード出さない」と

「おいエスト、待ってって、本当に……」

フィルチからまるでスニッチをとるかのようひったくった本をオスカーに渡して、今度はまるで速度を出す前振りのようにエストは前傾姿勢になった。オスカーは慌てて本をローブに突っ込んで、エストと同じ体勢でしがみついた。

もうオスカーは何も言うのをやめた。喋ってもオスカーには箒は止めようが無かったし、できるだけエストの体勢に合わせて、同じものを見ることが一番命を守る行動だったからだ。

黒と緑の矢になって二人はホグワーツ城を上を下に右に左に斜めに走り抜けた。レイブンクローの塔をまるで螺旋階段に合わせるように外側をぐるぐる回って昇ったり、黒い湖に箒の風圧で絵を描くように飛んだりした。

障害物だらけの空中をまるでエストは先が分かっているかのように飛んでいく、風見鶏や煙突のそば、渡り廊下の中まで、オスカーは何とかエストの動きに合わせてしようとしたが、どうやって抱き着いている彼女があつという間に通り過ぎる世界を見ているのか分からなかった。

それに吹っ飛ばされそうなオスカーは、箒に吹き飛ばされるのではなくて、エストの方がどこかに行つてしまいそうだと感じていた。あくまで飛んでいるのは箒なのにだ。

「ほらあそこ、絶対レアの部屋なの」

「え?」

「だからあのレイブンクロー寮の窓が開いているところ。あの部屋の窓はいつも開いているからレアの部屋なの」

「なんで分かるんだ?」

「え? だってレアは絶対部屋に入ると窓をあけるでしょ? ホグワーツでもオスカーのお家でもそうだもん」

やっとゆっくり飛び始めたエストがそんな事を言ったので、オスカーは文字通りのエスト越しにレイブンクロー寮を見た。たしかに一つ部屋の窓が開いている場所があつて、まだ灯りがついていいる。

「ね? ほら、あの金髪は絶対レアでしょ?」

「確かにそうだな」

オスカーは速度が落ち着いてもエストから用心深く離れなかった。もう近づくと自分がどうなるかだとか、やっぱり速度が落ち着くとエストの髪の毛の香りが気になるとか言っている場合では無かったからだ。

「で、あつちはマクゴナガル先生の部屋なの」

「ああ、クラーナが突っ込んだから覚えてるよ」

「ブルウエット、ドロホフ、飛ぶならもつと遠くで飛びなさい。それに

ドロホフ、昼間喋ったことは聞いていたのですか?」

エストとオスカーがマクゴナガル先生の部屋の傍で喋ると、マクゴナガル先生の声が返ってきたので、エストは慌てて箒の高度を上げた。

「おい、どこまで上がるんだ?」

「オスカーはすっごい高くまで上がったことある?」

「いや、無いけど……」

「じゃあ、一緒に行こう?」

箒の向きは変えないまま、どんどん高度が上がっていて、ホグズミードの町やハグリッドの小屋がまるでミニチュアのような高さになっていった。なのにエストはまた箒の向きを完全に上に向けて箒を走らせた。

どんどん高度が上がっていつて、オスカーも寒くなってきた。できるだけ下を見ないようにしていたが、オスカーは誘惑に負けて下を見た。あんなに大きいはずのホグワーツ城と黒い湖が今度はミニチュアのようになっていて、他の建造物は点にしか見えなかった。

「エスト、どこまで行くんだ」

「寒いのを耐えられるところまで?」

「エストの方が寒いだろ」

「うん。だからそろそろ限界かなって」

雲はほとんど無かった。オスカーはエストが箒をもとの姿勢に戻したところで、他の魔法使いでもこんな風景をわざわざ見に来ることがあるのだろうかと思った。

「ね? ここまでくるとちよつと地球が丸いってわかるかも」

「確かになんか丸く見えるな」

「ほんとに錯覚らしいけど…… ほら、夜だとあんまり空と海の境目が分からないの」

箒の上で体の向きをオスカーの方へ向けてから、エストが喋った。オスカーはエストに抱き着けなくなったので、箒をこれ以上無く真剣に握った。そして顔を上げるとエストの言う通り、三百六十度、どこを見回しても視界を遮るものが何もなく、はるか先のはずの海さえこ

ここまで上がるとオスカーにも見る事ができた。そして見渡すことができることで、世界が丸く見えたのだ。

「ね？　世界が丸いっていうけど、あんまり丸いを見たことがある人っていないでしょ？」

「そうだな、こんな寒いところに来て見に来るやつはあんまりいないから」

「そうだよ。寒いし高いもんね。でも、やっぱり聞くだけじゃ分からないし、読むだけじゃ分からないよね」

高くて寒い場所まで上がらないと見えない場所があっても、やっぱり多くの人は、それが自分にとって価値があると分からないと見には来ないので無いだろうか。現にオスカーもエストと一緒になければこんなところに来るはずが無かった。

「それに箒ならこうやって一気に来れるけど、山とかをマグルが登ったりするときは、一段ずつ自分の足で昇らないといけないもんね」

「まあそうだな。ひとつ前の高さまで行かないと、次の高さに普通いけないからな」

「オスカー、結構平気なの？　ここ」

「高すぎてもうどうでも良くなってきた。天文台の塔でも、ここでも、落ちたら死ぬのは一緒だからな」

「ふーん……　オスカー、どっちが上で、どっちが下かって目が見えないと分らないよね？」

「え？　いや、まあ落ちるから下がどっちかくらいわかるんじゃないか」

そういうとエストは杖を取り出した。そしてオスカーのロープに入っている杖も呼び寄せ呪文で取り出して、箒から手を放そうとした。オスカーにむりやり渡した。オスカーが杖を持つと、エストが杖を振って二人の目くらまし術が解けた。

オスカーはこんなに高い場所にいると言うのに、さっきまで思いつきり抱き着いていたのに、あんまり近くにいるエストの顔がダメだった。

「オスカー、一緒に呪文を唱えて」

「分かったけど、何の呪文……」

「目を見れば分かるでしょ？」

確かにエストの紅い眼を見れば次に何の呪文を唱えようとしているのか、オスカーには分かっていた。果たして、開心術で見たのか、それとも自然に分かったのか、オスカーには分からなかった。

「ネビユラス 雲よ」

同時に唱えると、杖から出たはずの雲が広がって、少なくともホグワーツ城を何個分も見えなくするくらい、広がっていった。オスカーとエストの下にできたので、その横の大きさしか分からず、厚さはさっぱり分からなかった。

エストが箒を動かして、雲の中へ突っ込んだ。さっきエストが言っていた通り、上も下も分からなかった。箒で下に動いたという事が分からなければ、見た目だけではどこが上でどこが下なのか分からない。

「オスカー、ねえ、どっちが上か下かわかる？」

「まだわかる」

「ほんと？」

そう言うなり、エストが箒を一瞬で消した。多分、オスカーとエストの体が真つ逆さまに落ちていった。いや、落ちているはずだった。どこまで落ちても雲の中なのだ。いったいどれくらいの高さにいてどこまで落ちているのか、オスカーには分からなかった。そして、いつの間にか二人とも頭が下に来ていて、本当に天地がどちらか分からなかった。

「ねえ、まだわかる？」

「落ちてるだろ。だって箒が無い」

「ほんとに？ だって箒はここにあるよ？」

今度は箒がエストとオスカーの股の間に現れた。オスカーにはその箒がいきなり現れたのか、それとも見えなくなっていただけなのか分からなかった。

「じゃあ分からない？」

「確かに？ でも、周りが見えないところまで来たら、落ちても昇って

も一緒だよね?」

「そんなところまで来ないから分からないな」

「ほんと? 新しいことをやる時はみんなそんな感じだと思うけど?」

あ、そろそろ抜けるね」

雲を抜けて、下にホグワーツ城が見えた。雲の上で見た時よりもずいぶん大きく見える。オスカーとエストはやっぱり落ちていたらしかった。

「雲を作るのは良かったけど、くぐるのはダメだったかも」

「寒いな。濡れたし」

自分の力では無く、恐らくエストの魔法で二人は元の姿勢で箒に乗っていた。またエストが前を向いていたので、オスカーにはエストの背中しか見えなかった。

もうオスカーは何のためらいもなく、後ろから抱き着いていた。そうしないと寮に戻る気がしなかったし、もしかしたら、エストがどこかに飛んで行ってしまいそうな気もしたかもしれないなかった。

ゆっくり、箒はホグワーツ城に降りていって、さつきまで点にしか見えなかった校庭の端にある小屋の近くへ降り立った。

「ハグリッドの小屋?」

「だって寒いでしょ? ハグリッドの小屋は暖かいもん」

「まだ起きてるのか?」

「多分? ハグリッドはあんまり寝なくて大丈夫そうじゃない? タフだし」

ハグリッドの小屋の灯りはついていて、煙突からポフポフと白い煙が上がっていた。それに二人が扉の前まで来ると、足音とハアハアという犬の息遣いが聞こえた。

「もうオスカーが来てるってばれてるんだね」

「なんで俺にばかりかまうんだろうな」

「ハグリッド? いる?」

エストが扉をトントンと叩くと、大きな物音がして、それから二頭の犬をなんとか扉の前からどかさうと頑張っているハグリッドの声が聞こえた。

「お前さんたちか…… うん、いつものメンバーは一緒じゃねえのか？」

「私とオスカーだけなの」

「ん、とにかく入れ。フアングとミディルがうるさくてかなわん」

オスカーから見るとハグリッドの顔が少し赤く見えた。酒でも飲んでいのかと思っただが、オスカーは二頭の犬にもみくちやにされて、それどころではなくなってしまった。

「ハグリッド、お酒飲んだの？」

「まあそうだ。ちよこつとロスメルタのところのオーク蜂蜜酒をな。ケトルバーン先生のヒツポグリフの授業もちーと落ち着いたところだ。だからちよこつと思っただけ」

もうエストは勝手に椅子に座ってハグリッドと喋っていた。オスカーの方はなんとか犬二頭を引き連れて、エストの隣に座ろうと努力するのがやっとだった。

「しかし、お前さんたち二人が夜にそうやって出歩いているのを見ると、そうだ、うん、アーサーとモリーが良く二人で歩いとったの思い出すな。一回、当時の意地の悪い用務員に捕まって、アーサーはひどい目にあつとった」

「その話、モリーおばさんから何回も聞いたの。アーサーおじさんの肩にはまだお仕置きの痕が残ってるんだって」

「フアング、ミディル、ほらちよつと静かにしてくれ……」

オスカーは二頭の腹をくすぐって、なんとか静かに…… ではない、すでに濡れているローブをさらによだれまみれにするのを防いで、やっとハグリッドとエストの方を向いた。

「ねえ、ハグリッド、あの写真の人は誰？」

「ああ…… うん、お前さんたち二人には見せて無かったんか。どれ、俺の父ちゃんの写真だ。確かレアには見せたんだけど……」

「ハグリッドのお父さん？」

「うん。俺がホグワーツに入って、二年生の時に死んだ。まあ、俺は三年生の時にホグワーツを退学になっちゃったから、それを見ないで済んだのは良かったのかもしれない」

エストがハグリッドの小屋ではみなれない写真を指差して聞いた。いつもはしまつてあるのか、埃をかぶつておらず、時間の経過のわりに綺麗な写真だった。ハグリッドにそっくりなくしゃつとした黒い眼の魔法使いが、多分、ホグワーツに入る前後くらいだろうハグリッドの肩に乗っていて、二人はこちらに笑いかけている。

「ハグリッドにそっくりだね？　でも、死んじやって良かったとかはないと思うな。お父さんが生きてたらハグリッドも違う事をしたと思うし」

「そうかもしれないねえ。うん、ありがとうな。ほんとは今日が親父の命日なんだけど……」

「そうなの？　ごめんさい、いつもみたいにいきなりきちやったから……」

「いや、一人で酒を飲んだるより、お前さんたち二人と話してた方が、親父も喜ぶ」

ハグリッドの黒い眼はエストの紅い眼に囚われて、離れないようにオスカーには見えた。それにいつもよりずっと、オスカーにはハグリッドが饒舌に見えた。エストが杖を振って、ハグリッドの酒を一瞬で補充しているのがオスカーには見えた。

「そう？　ハグリッドってお父さんに育てられたの？」

「そうだ。俺がもの心ついた時にはもう母ちゃんはいなかった。それで、親父も俺が二年生の時に死んじゃった。その後はずっとダンブルドア先生が面倒を見てくださった。あの人は人をお信じなされる。俺もその一人だ。森番の仕事をくたさつて、俺がずっとやりたかった先生の仕事の手伝いもさせてくださる」

「そうなんだ。じゃあ結構エス……私と似てるね？」

「お前さんとう？　とんでもねえ、お前さんはモリーと一緒にとんでもねえ家の生まれだし、魔法だつてうまくできねえ俺と違って、その年でお前さんと同じくらいできる人間なんて一人くらいしか見たことがねえ」

「だって、エストはお父さんに育てられたし、ハグリッドもそうでしょ？　だから一緒」

「まあ、うん、それはそうかもしれないねえ」

「でしょ？ あとエストもホグワーツの先生をやってみたいし、それも一緒だよな？」

「それは…… うん、ちーと俺にはやりたくてもできるんか分からんが……」

エストはハグリッドの言葉を丁寧に引き出しているようだった。それでもできるだけほつれないように。オスカーにはなぜか本当の年齢ならハグリッドの方がはるかに年上なのに、この会話だけ隣で見ていると、エストの方がずっと年上な気がしてくるのだった。

「やりたいならやりたいってダンブルドア先生に言えばいいと思うな。言わなくてもダンブルドア先生は分かっていると思うけど」

「俺はもうダンブルドアにホグワーツより大きいくらいに世話になつとる」

「ダンブルドア先生はそう思っているのかな？」

「それは聞いてみねえとわかんねえ」

やっぱりオスカーにはエストが分からなかった。今学期のエストの様子を見ると、まるで大人や先生が信用できないような口ぶりや行動なのに、今のエストはハグリッドの事も、ダンブルドア先生の事も信用しているようにオスカーには見えたからだ。

「ねえ、オスカー、オスカーはハグリッドの事どう思っているの？」

「え？ まあそうだな、少なくとも、他の先生方よりは信用してるし、話しやすいと思ってるよ。レアとかクラーナとかチャーリー、トンクスもそうだろうし」

「そうでしょ？ ダンブルドア先生もそうだけど、先生とかハグリッドの事を知ってる人はハグリッドの事を分かっているよね？ あ、でもケトルバーン先生は腕がもう一本無くならないと先生をやめないかも」

「それはそうにちげえねえ」

オスカーにはハグリッドはやりたいことがはっきりしていて少し羨ましかった。ただ、オスカーにはどうしてハグリッドがそんなに動物の事が好きなのかはあんまり理解できていなかった。チャーリー

がドラゴンに入れ込むのと同じくらい理解不能だった。

「ハグリッドは良い人だよな？　だって、ハグリッドは自分が嫌なこととは周りの人にしないし、動物が生きたいように生きるのを、どうして魔法使いが止めるのか不思議に思ってるもん。周りの人間にもそんな感じだし、だからエストの周りの人がなんでハグリッドの事好きなのか分かるかも。ダンブルドア先生も同じ感じでハグリッドの事好きなんだと思うよ」

「お前さんの言ってることは、俺には難しすぎてわかんねえ。なあ、オスカー、お前さんには分かるのか？」

「まあ、俺の周りの人がだいたいハグリッドの事が好きなんだって言いたいんだと思う」

「ちよつとあつちで服乾かしてくるね」

少し恥ずかしくなったのか何なのか、エストは自分のローブを暖炉で暖めにいってしまった。ハグリッドは少し酔っぱらった目でエストを追いかけて、その後、残って二頭の腹を撫で続けているオスカーの方を向いた。

「あの娘はちーと不思議な娘だ。お前さんは一番わかつとるだろうが」

「まあそうかな」

「あの娘の目にじつと見つめられて、ゆーっくり喋られると、ダンブルドアの目を見てると一緒でなんでも喋っちゃまう。ダンブルドアの目は青い炎が燃えてるみてえだが、あの娘の目はそれと反対だ。でも色は違うけれど、俺の事をそのまんま見とる。だから俺が嘘をついたって意味がねえ」

果たしてハグリッドが言っているのが、開心術の事なのか、それともエストとダンブルドアで何か別に共通したものの方みたいなのが存在するのか、オスカーには判断がつかなかった。

「ほんと俺もお前さんの事を最初はこういうやつなのか分からなかった。まあファンクに好かれとつたし、クラーナともすぐに仲良くなつとつたから悪い人間ではないっちゆうことは分かつとつた。けど、お前さんたち二人はスリザリンだったし、その、なんだ、俺も

グリフィンドルだったから、最初はちよつと分からなかった。もちろん、後でお前さんの家の事を聞いて、お前さんがどれくらい努力してるか分かつてる。お前さんの周りはみんな分かつてる」

「ハグリッド、酔ってるのか？ さすがにちよつと恥ずかしい」

オスカーもあんまり直接的に褒められるのは得意では無かった。これではトンクスの事をオスカーは笑えなかった。

「そうか…… だけど、お前さんたちはみんな努力してる。俺はそれを知つてる。先生方もみんな知つてる。うん、みんなお前たちに期待してる。それにあの娘は最初からずっと努力してる。信じられんくらいだ。俺もお前さんとあの娘が一緒にいるのを知って、びっくりしとつた。他の大人たちもみんなそうだ。けんど、そうだ。うん。あの娘が正しかった。お前さんは良いやつで、他の奴より魔法ができて、みんなと仲良くできてる。あの娘は最初からそれが分かつつた。だからお前さんが一番あの娘のことを分かんねえといけねえ」

「ハグリッド……」

「なんの話してるの？」

コガネムシのような黒いハグリッドの目は、オスカーが知っている誰よりもフラットにモノや人を見ているのだと、オスカーには分かつた気がした。もちろん、ハグリッドがもともとグリフィンドルなので、スリザリンは嫌いとかそう言うのがあるかもしれないが、それ以上に魔法界の常識というフィルターを通さずにハグリッドはモノを見ているのだ。

オスカーがエストやトンクスはちよつと自分とはモノの見方が違うと感じるのと同じように、ハグリッドもそうに違い無かった。

「お前さんたちはえれえちゆう話だ。レアもクラーナもお前さんたち二人も…… 親がいなくても立派に育ちよる。クラーナもレアも俺がダイアゴン横丁につれてつた時は誰も友達も知り合いもないねえ、頼れる大人もほとんどいねえ、ほんととは動物と一緒に子供は親を見て育つんだ。だからこんなに小せえお前さんたちがホグワーツでやっていけるか心配だった。俺もそうだったし、お前さんたちが卒業したら、今度はハリーも同じだ……」

「やっぱりハグリッドは良い人だよな?」

「まあそうじゃなかったらみんなこの小屋に来ないだろ。フィルチの部屋には誰も来ないのと一緒だ」

酒を飲みながら感極まって泣いてるハグリッドを見ながら、オスカーはさつきハグリッドが言ったことを考えていた。オスカーがエストを一番理解しないといけないという事だ。

「去年のトーナメントを俺も見とった。お前さんたちが一番努力しとったから、最後に残ったんだ。うん、お前さんたちは俺とは違って、純血でちゃんと混ざりものの無い魔法使いと魔女にきまつちよる。だけど、それがどうでもいいくらい努力しとる。俺にはそれが分かつとる」

「ハグリッド、もう分かつてるよ。エスト、ハグリッドを泣かせすぎだろ」

「ハグリッド、大丈夫?」

「俺にはわかちよる……俺には……俺はみちよる……」

オスカーにはやっぱりどうしてこの小屋が暖かいのか分かつていた。クラーナやレアが動物だとかそういう理由がなくてもここに來る理由が分かつていた。多分、その二人や、今日ここが暖かいから來たと言っていたエストにも分かつていた。

そして、多分、チャーリーやトンクスにも分かつているはずだった。

「ほら、あつたかいでしょ?」

「知つてるよ」

ぐうぐうお父さんの写真立てを持ちながら寝始めたハグリッドの姿を見ながら、オスカーにはやっぱりここが魔法の火が無くても暖かい理由が分かつていた。

伸び耳

今学期入って二回目の暴走特急、エストレヤ特急がオスカーを曳き回してからしばらくがたった。

その間にオスカーは何とかエストの計画に合致するような場所を探していたが、せいぜいハニーデュークスに繋がる秘密通路か、使用回数の少ない空き教室に魔法をかけて見えなくするのが最適解としか考えられなかった。

「なんか、すごい一杯ふくろうが飛んでない？」

「またクラリーナが週刊魔女で巻頭を飾ったのかもな」

「もしそれが本当なら、クラリーナは闇祓いを諦めて別の道を探した方が人生上手くいくかもしれない。少なくともムーデイさんの家は今より大きくなるかも」

パクパクとスクランブルエッグを食べているエストの横で、オスカーは一生懸命、エストからぶん投げられた、商品の在庫と材料、その置き場所にどれくらいの場合が必要なのかの計算をしていた。オスカーは今すぐダイアゴン横丁で店を開いてもやっていけそうな気がしていた。

「なんかみんなに来てみたいだよ？」

「みんなについてふくろうが？」

「そう」

オスカーはやつと羊皮紙から目を離して机の上を見た。さつきまでじつとこつちを見ていた血みどろ男爵がいたせいで、オスカーとエストの机には誰もいなかったもので、ふくろうが二羽だけとまっていた。

「ホグワーツ、スリザリン寮、オスカー・ドロホフ様…… 魔法省？」

「魔法省から全員に送ってるみたい？」

エストとオスカーは教員のテーブルを見た。ダンブルドア先生は今日はおらず、魔法省から来ているはずの二人の教員はクレスウエルの方だった。

クレスウエルは特に面白そうでもなく、日刊預言者新聞を読みなが

ら朝食のプレーンをほおぼっていた。

「何これ？ 成績？」

「え？」

オスカーも封筒の中を開いた。何か格式張った字で長々と説明が書かれていたが、オスカーは読み飛ばして表のらしきモノに目を通した。

一年生、二年生、三年生、四年生と書かれていて、その下にアルファベットと数字が書かれている。

ホグワーツ魔法魔術学校 五年生 オスカー・ドロホフ殿

貴殿のこれまでの成績につきまして、普通レベル魔法試験を基準として評価した場合の数値を以下に示します。

普通魔法レベル成績（推定）

合格

優・O（大いによろしい）

良・E（期待以上）

可・A（まあまあ）

不合格

不可・P（よくない）

落第・D（どん底）

トロール並・T

推定成績（順位）

一学年 二学年 三学年

四学年

天文学

O (五) O (四) O (三) O

(四)

呪文学

O (三) O (二) O (二) O

(二)

闇の魔術に対する防衛術

O (二) O (一) O (二) O

(二)

薬草学

O (四) O (四) O (三) O

(三)	魔法史	0 (三)	0 (三)	0 (三)	0
(三)	魔法薬学	0 (三)	0 (三)	0 (三)	0
(三)	変身術	0 (三)	0 (三)	0 (三)	0
(二)	基礎科目合計	0 (三)	0 (三)	0 (三)	0
(二)	魔法生物飼育学			0 (三)	
	0 (三)				
	占い学			E (十一)	
	0 (五)				
	マグル学			0 (四)	
	0 (三)				
	数占い			0 (五)	
	0 (三)				
	追加科目合計			0 (四)	
	0 (三)				
(二)	合計	0 (三)	0 (三)	0 (三)	0

★・短評

非常に素晴らしい成績です。ふくろう試験、イモリ試験ともにこの成績を維持可能ならば、あらゆる職業試験の受験資格が与えられます。

魔法省（総合）、闇祓い、癒者、その他職業について、現状の成績で受験可能と考えられる職業を二枚目に列挙します。進路選択の参考、励みとして下さい。

ホグワーツ主席クラスの学生について、イギリス魔法省が選抜する特別優秀学生、特別留学制度、その他成績優秀者に向けた多種の制度を利用できる可能性があります。詳細については三枚目に記述しま

す。参考として下さい。

日刊預言者新聞、変身現代を初めとした、魔法界の各種書籍が主催する若年者リーディングプログラムに該当する可能性があります。魔法省のまとめた各種募集要項を四枚目に記述します。参考として下さい。

「なんだこれ？ これまでの成績ってことか？」

「そうみたい……魔法省が成績を出すのって、ふくろう試験の委員会がまとめたものだけだと思ってただけど……」

オスカーはエストの成績をチラツと見た。ほとんど一しか無く、まれに二があるだけで、総合の成績はずっと一のままだった。

大広間のざわめきはいつもの数倍だった。そこかしこでお互いに成績を見せ合っていた。明文化されていない成績もあつたはずなので、ホグワーツ学生にとっての衝撃は大きかった。

「あんまり、オスカーと私だと変わらないの」

「そうか？ 少なくとも、エストのところは三とか四はあんまりないだろ」

「そう？ でも占い学は途中でやめたからTって書いてあるの。まあでも、短評のところは全部一緒だね」

確かに、エストの占い学にはTと書かれていた。逆転時計をやめたあと、正々堂々トレローニー先生に喧嘩を売りに行ったせいに違いなかった。そのあと、壁に開いた穴をダンブルドア先生自ら直すまで、しばらく占い学の教室では涼しい中で授業ができてオスカーは嬉しかったが、よくよく考えると、オスカーの一年目の占い学のEは সেইかもしれないかった。

「オスカー、見せてください」

「とつととよこしなさいよ」

オスカーが職業について書かれた紙を見ようとすると、いきなりクラーナに紙を封筒ごとひったくられた。ついでにトンクスがエストの分の封筒もかっぱらっていった。

「やっぱり、基礎科目と全部合計での一と二はここ二人じゃないですか」

「実技なんてずっとあんたら三人で一、二、三じゃないの」

「トunksは薬草学ずっと二じゃないですか」

「うわ、チャーリーって魔法生物飼育学だけはエストに勝ってるじゃない」

なんとチャーリーの成績表も途中で奪いとってきたらしかった。クラーナとトunksは五人の成績表を見比べては、あーとかうーとか言っていた。

「オスカー、あんたほんと実技以外でも三位に入ってるのどうなってるわけ？」

「わりとトunksに負けてる教科があってシヨックなんだが」

「そうですよ。なんでトunksのくせに古代ルーン文字ができるんですか？ というか、マグル学で一回エストに勝ってるじゃないですか」

オスカーは結構久しぶりにみんな仲良くワイワイしていると思った。チャーリーがどこに行ったのかと思い、辺りを見回すと、チャーリーは大広間から箒を持った一団と出て行った。恐らくクイディッチの練習だった。

「うるさいわね。私に負けてる奴がおかしいのよ。魔法薬学も三つて…… ラブラブ魔法薬学恐るべしね」

「先輩方はどんな感じなんですか？」

女子ばかり集まり始めて、オスカーはクイディッチを自分もした方がいいのではないかと思いはじめた。少なくともここからいなくなる理由にはなるからだ。

「えい」

「エストナイスじゃない…… 何よこれ。エストの成績表並みにおかしいんだけど」

「なんか二年目から不正でもしたのかつて感じになってますね」
「凄いな。でもそもそも実技以外は元からこうだったのか」

レアの成績表は一年目は実技以外に全部一がついていて、二年目からはほとんど全部が一か二がついていた。

「けど、なんで今更こんなことしたんだろうね？ ふくろう試験では

順位なんてでないし、ホグワーツの学期末試験でも、順位を出している教科なんてあんまりないの」

「励みになるとかですか?」

「そりゃああんたたちは励みになるわよ。私つよーいって感じになつてうれしーってことでしょ?」

「トングス先輩のもそんなに変わらなないですか?」

オスカーはあたりを見回した。オスカーの周りにはそんなに暗い雰囲気では無かったが、大広間全体では幸せと不幸せが半々といったところだった。エストのなぜ魔法省がこんなことを行つたのかというのは当然の疑問ではあった。

「アンブリッジ先生が言つてた到達度別クラス? とか言うのと同じなのかもな」

「ふーん。意欲をあげるため…… それだけなのかな……」

「別にそれ以外にホグワーツの学生なんてエサで釣って操つても大してできることはないですよ」

「そう? オスカーとかエストあたりを一ダースくらい用意できれば、グリーンゴツツのチャーリーの金庫からガリオン金貨を奪うくらい簡単じゃない?」

「なんでチャーリー先輩の金庫? どうせならエスト先輩の金庫みたいな、旧家のドラゴンが守つてる金庫くらいでも大丈夫なんじゃない?」

そんな状況にはならない事をオスカーは祈りたかった。巨大な怪物と戦うなど、キメラが最後であつて欲しいと思つていたし、そもそも、あからさまにルールや法律を破る状況に追い込まれなくなかったのだ。

「あ、そうでした。レア、今日お願いしますね。ウインガーの件です」
「動物もどきのお話をするんだよね? 私も聞きたいけど……」

「あー、でも午後だとクイディッチの練習なの」
「いちおうボクとクラナ先輩で行くと言っています。それでいいんですよね?」

「いいんじゃないかしら? まあ取りあえず話してくればいいじゃない

い？」

「そうですね。なので午後はお願ひします」

その後、トンクスとオスカー以外の三人が動物もどきについての話をし始めている横で、トンクスがオスカーに耳打ちした。

「じゃあ、私たちも午後までに準備するわよ。今日は忍びの地図は開かないようにして、万眼鏡をよろしく頼むわ」

「あんまりやりたくないんだが。普通に一緒にいればいいだろ」

「こういうのはコソコソやってるスリルが大事なのよ。それにエストの道具を試せるチャンスじゃない」

「二人は内緒の話ですか？」

「そうよ。医務室で三人に何があったのか事情聴取してたわ」

クラリーナの顔があらさまに固まった。エストの方は相変わらずスクランブルエッグをお腹にいれていた。オスカーはエストが毎朝食べているスクランブルエッグが体のどこに消えて行くのかが不思議だった。

「何か三人って、オスカー先輩、エスト先輩、クラリーナ先輩で何かあったとか？」

「オスカーとクラリーナは医務室では離れて過ごさないといけなくなっただって聞いたわ」

「あそこには先生方しかいなかったはずですけど」

「他にも何人かベッドで寝てたに決まってるじゃない」

「オスカー、そろそろ数占いの時間だよね？」

「そうだけど」

口をナプキンで拭いたエストは立ち上がったって伸びをした。オスカーを箒に括り付けて Hogwartz 中を曳き回した後からずいぶん機嫌が良くなっていることをオスカーは実感していた。ただもう寒くなっているの、毎晩どう？　と言ってくるのは、穏やかな飛行であつてもオスカーには辛いイベントとなっていた。

「何？　なんかエストは余裕じゃないの」

「そう？　あれ？　そういえば色々使つてってトンクスに頼んどいたのってどんな感じ？」

「それなら結構いい感じよ。最近のお気に入りはパーマになる薬と床を池にするロープ、あとあの持ち運べる暖炉とかいうのいいわね。魔法生物飼育学の時に寒くなくて良かったわ」

「セストラル用の飼い葉が燃えたってハグリッドがちよつと前に言っただけど……」

「ちよつとまって下さい。最近いろいろ先生方が処理してるのってまさか二人が原因なんですか？」

クラーナがエストとトンクスの顔を交互に見た。オスカーはできるだけそれを見ないふりした。なぜなら、トンクスに連れられてアイテムを試したり、トンクスにそもそもアイテムを渡しているのがオスカー自身だったからだ。

「クラーナにも頼んでいいの？」

「嫌ですよ。私はそんな問題児じゃないですから」

「フィルチの部屋の前を沼にしたのは面白かったわよ。部屋から出た瞬間に沈んでいったわ。ミセス・ノリスはフィルチの頭を飛び石にしてジャンプで飛び越えてたけど」

「わざわざマクゴナガル先生が出てきて三十分くらいかからないと消せなかったからな。というか、こんなことできるのは…… って言ってたからもうばれてる気もする」

「証拠は無いの。やったのはトンクスだし」

「やっぱり監督生のバッジは返した方がいいんじゃないですかね」
「ホグワーツが実験場になってる……」

トンクスがやったのならまあそうかですんでしまうので、後ろにオスカー達がいるかどうかは分からなくなっている。とは言うものの、あんまり高度な魔法が悪戯に使われれば後ろで誰かがいることくらい賢い先生方なら気づくのは時間の問題だとオスカーは考えていた。「あと見えない壁はかなりの傑作だったわ。スネイプの研究室の前に仕掛けて、スネイプがどうにもできなくて、マクゴナガル先生とフリットウィック先生を連れて帰って来る前に元に戻しといたら、何も無いようですが…… セブルス？ 大丈夫ですか？ 疲れていませんか？ 髪型も少しいつもと違うようですが？ とか言われてたも

の」

「スネイプでもどうにもできないやつがあるんですか？」

「スネイプ先生は闇の魔術と魔法薬学以外はそんなに詳しくないから不思議じゃないかも」

「髪型って例のパーマ事件……」

ホグワーツが実験場ではあったが、その実験対象は何人かが良く選
択されるのは事実だった。こういう時に日ごろの行いが……つま
り、あんまりえこひいきや恨みを買うことをはしてはいけないのだろ
うとオスカーは実感するのだ。

「どうせ本格的に一杯つくるようになったらトンクスも目立たなくな
るの。だから大丈夫」

「あんまり大丈夫じゃない気が……」

「大丈夫ではないでしょうね。ええ」

「いいじゃない。絶対その方が面白いじゃない。魔法の使い方も色の
使い方と一緒に同じばかりじゃつまらないわ」

「忍びの地図とめくらまし呪文と七変化で、トンクスがよつぽどハマ
をしないとバレないとは思うけどな」

オスカーが説明するとレアとクラリーナに少し渋い目でオスカーは
見られた。オスカーはあんまりトンクスとエストのバックアップを
し続けるのも限界があるのかもしれないと考えた。先生方に捕まる
より、身内に怒られる方が早そうなのだ。

「じゃあ、あとで動物もどきの話がどうなったか聞かせてね？」

「分かりました」

「がり勉ペアは勉強熱心ね」

「トンクス先輩も良くクラリーナ先輩と図書館にいるけど……」

「あとでトンクスには次の試作品をローガンにつけて送つとく」

次の授業まで少し時間がある三人の視線を背中に受けてエストと
一緒に歩きながら、オスカーは今はトンクスとエストはうまくいつて
いるのに、レアとクラリーナからの感触が余り良くないと考えた。オス
カーには四人の相性が状況によって変わってしまい、どう調整すれば
いいのが魔法薬学のレシピより分からないのだった。

「それで？ ムーディ、僕を呼び出した理由はなんなんだ？」

「ああ、そうですね、とりあえず来てくれてありがとうございます。ウインガー」

「割とクリアに聞こえるわね。テーブルに置いても聞こえるようにしたのは私の手柄じゃない？」

「いや、それよりこの盗み聞きしながら、万眼鏡で向こうから見えないようにのぞき見するの、すごい悪いことをしてるみたいで嫌なんだが」

「え、面白いじゃない。マグルのスパイが出てくるゼロゼロなんとかって映画みたいで面白いわ」

中庭の茂みに囲まれたテーブルでクラーナ、レアとタルボットが話をしてる。オスカーはトンクスに連れられて、エストの道具を試すいいチャンスじゃないとか言われ、茂みの中から万眼鏡で覗けるようにして、さらに伸び耳にラジオについている音のするモノを取り付けたトンクスの作品を机の上に置いて、もはや完全に三人を遠隔から監視していた。

オスカーは最近、友人に連れられて悪いことばかりしている気がしていた。チャーリーと一緒に卵を隠しているし、エストと一緒に箒でホグワーツ中を暴走してフィルチの本を強奪したうえ、今度はトンクスのこれだった。レアはレアでホグズミードに抜け出せないかと誘ってくる、クラーナは安心かと思っていたが、ちよっと前に忍びの地図とカメラを貸してほしいと言われて貸したのがオスカーは気になっっていた。

「ウインガー、あなたのご両親は動物もどきですよね？」

「そうだ。君の姉が動物もどきだったり、君の家族すべてが闇祓いなものと同じだ。いや、動物もどきだったのが本当は正しい」

タルボットの顔にオスカーはちよっと警戒の色が浮かんでいると

思ったが、トンクスが万眼鏡をオスカーから取り上げる際に、いちいちツンツンしたピンク色の髪がオスカーの顔にぶつかるのが気になってそれどころでは無かった。

「クラーナってほんとあれよね、ちよつと可愛くお願いすれば一発なのよ。タルボット君、私に動物もどきのなり方を手取り足取り教えてくれませんか？　って上目遣いでやれば時間が短縮できるじゃない」「絶対やらないの分かって言ってるだろ」

「はあ？　オスカー……　もうちよつとだけ手を握っててもいいですか？　って、頭が軽そうなりとりしていたのは誰なのよ？　うえー、自分でやってておかしくなりそうだわ」「なるならわざわざ変身してやるなよ」

わざわざご丁寧に変身して三年生のクラーナを再現するのを、オスカーは本当にやめて欲しかった。確かに、今のオスカーならそんな風に頼まれれば大体のお願いは聞いてしまうだろう。そもそも、普通のお願いでもほとんど聞いてしまうに違い無かった。

クラーナの姿のトンクスはなぜか用意周到に持ってきたポットでお茶をいれていた。完全に三人の話を肴にお茶を飲む気らしかった。オスカーは魔法がかかった熱さを保つポットをいつトンクスがひっくり返したり、落とすのか気が気では無かった。

「だつたつて言うのがちよつと気になりますけど、単刀直入に言えば、私はあなたが動物もどきの習得方法を知っていると思っていて、私はそれを習得したいと思っています。なので教えて欲しいという事です。特に魔法薬の詳細なレシピなんか分からないと思っっています」「どうして僕がそれを知っていると思っっている？　確かに両親は動物もどきだったけど、僕は動物もどきでは無い。マクゴナガル先生に教わった方がいいだろう」

「なんか冷たいわね。もつとタルボットはクラーナには優しいのかと思ってたわ」

「そもそもなんでそう思うんだ？」
「あいつは闇祓いになりたいらしいわよ。ペニーがそう言ってたし、それにあいつはあれよ……　レアとかエストみたいな感じの生い立

ちらしいわ。ペニーにも話してないらしいから詳しいことは分からないけど」

家族が動物もどきかつ今はいない、それになりたいものも一緒。確かにオスカーとクラーナよりよっぽど共有できそうな話題は多いかもしれないなかった。

「あなたは動物もどきの習得方法を知らないってことでいいんですか？」

「そういうことだ。ムーディ、話したいのはこれで終わりなのか？なら僕は勉強に戻らせてもらう。まだ僕の魔法薬学の成績はEらしい、だからふくろう試験用に準備の時間が必要だ。君たちみたいに違う事をやっている余裕が僕には無い」

「そうですか、ならこの話だけ聞いてください。私たちがホグワーツに入った年から、ふくろう小屋とかでやけに賢い鷲がいるって噂になってました」

「なんかレア静かよね。最近ブレーキが壊れた筈みたいに喋ったりするのにな」

「レアは特に動物もどきになりたいとかそういうのじゃないからだよ。それにブレーキが壊れたって言うより、元の速度に戻っただけじゃないか？」

トunksがどうでもいいことを言ったせいで、クラーナの話のトーンが変わったのをオスカーは十分に認識できていなかった。

「何が言いたい？」

「タルボット・ウインガーは動物もどきだってことを私は知っていますし、だから私はあなたに頼んでるんです」

「へ？ ちょっと何なのよ。すごい展開じゃない。夏休みにやってたドラマならここで来週に続きまーす。ってなって、オスカーの家だと見れなくて気になってしょうがなくなるやつじゃない」

「タルボットはスキータみたいなもぐりの動物もどきってことなのか」

オスカーとトunksは同時に万眼鏡を持って、お互いに片目ずつ目にあてた。タルボットの顔はさらに警戒している様子で、レアの方は

あごに手を当てて何か考えている顔、クラリーナの方は一気に畳みかけるような強気の顔だった。もちろん、クラリーナの眉がいつもキリツとしてるせいでそう見えるだけかもしれない。なかった。

「僕が動物もどき？ 君は魔法省の登録名簿を……」

「ええ見てますよ。登録名簿の最新の名前は姉さんのまま動いてません。だからあなたはもぐりの動物もどきってことです。ホグワーツに入ってたった五年で二人ももぐりの動物もどきを見つけたなんて思ってたかったですけど」

「僕がもぐりの動物もどきだったとして、証拠でもあるのか？」

クラリーナはごそごそと自分のカバンから何か取り出しているようだった。ただの羊皮紙とオズカーが貸した二眼のカメラ、それに何枚かの写真だった。

「オズカーのカメラじゃないの？」

「そうだな。そうか、忍びの地図でタルボットの名前を見つけて、変身しているところを撮ったってことなのか…… なんか、最近、俺がモノを貸したりなんか一緒にすると悪いことしか起きない気がするな」
「やっぱあの地図凄いわね。というかタルボットの名前が高速移動してるのってなんか想像するとシニールね」

「これでどうですか？ あなたは動物もどきですよね？」

「レイブンクロー寮の周りをときどき飛んでる鳥って……」

写真を見ながらタルボットはできるだけ表情を動かさないように努めているとオズカーは考えた。そしてオズカーはあんまりいい感じの交渉には見えなかった。てつきりもつと友好的に話が進むのかと思っていたのだ。

「それで？ これが捏造したものでは無く、本当に僕を撮った写真だったとして、どうしたいんだ？」

「捏造って…… そんなことできる学生なんていないでしょう？」

「プルウエットなら大概のことができてもおかしくないだろう。君がレアと一緒に動いているという事は後ろにプルウエットやドロホフがいると想像するくらい、君たちと一緒にの学年なら誰でもできる」

「あちやく、なんかもう敵意バリバリとげとげしてらって感じじやな

いの。やっぱりクラーナってあんまり交渉とかそういうのは得意じゃないわよね」

「人を頼るのはあんまり得意じゃないかもな」

クラーナがお前は動物もどきだとタルボットに言ったことは悪手だったかもしれない。オスカーもそう思った。ただ、オスカー達の周りで誰かに甘えるとかそういう事が上手い人間がいるかと言われるのも、オスカーには思いつかなかった。まだウィーズリーの下の兄弟たちの方が上手いだろうからだ。

「捏造なんてしてないですけど、取り合えずそれはどうでもいいです。私がお願したいのは変わらなくて、動物もどきの習得を手伝って欲しいって事です」

「それで、それは僕に何のメリットがあるんだ？ 僕にはデメリットしかない。仮に僕が本当に動物もどきだったとして、僕が君に動物もどきの習得方法を教えるのと、この場で君たちに忘却術をかけるのと、僕には後者の方がメリットを感じる」

「そんな、メリットとか言われても……」

「ほら、脅すみたいになってるからうまくいかないのよ。初めから私と付きっ切りでべったり動物もどきを教えてくださいって、いつものローブじゃなくて気合の入った服で可愛くお願いすれば良かったのよ」

「ほんとにうまくいくのかそれ？ そっちの方がクラーナからすれば難易度高いだろ」

「タルボット先輩、タルボット先輩は何が嫌ですか？」

これまでずっと二人の会話だったのに、やっとレアが入ってきた。しかし、こういう状況でレアがでてくるのは大丈夫だろうかとオスカーは思った。頭に血が上っていない状態かつ遠慮が無い場合、レアは頭の回転は速いし、その上、容赦なく正論をぶつけてくるタイプだった。

「嫌？ 僕は僕にメリットが無いと言っているんだ」

「メリットって何ですか？ ガリオン金貨？ それともモノ？ 人？ 逆にタルボット先輩が何か教えて欲しい術があるとか？ パツと

「答えられる?」

「だから、今、僕が何か欲しい……」

「メリットが答えられないなら、デメリットならすぐに出てくるといふこと? つまり、クラーナ先輩に教えられない理由が? 教えたらタルボット先輩のデメリットになるという理由が?」

「技量や知識のない人間がやろうとすれば事故が起きる可能性が……」

「クラーナ先輩で技量や知識が無いとなるなら、ボクより一つ上の学年だと一人か二人しか該当しなくなる。それにそれが誰かくらいさつきご自分で言ったみたいだ。タルボット先輩は分かっているはずだ。そしてその誰かに変身術の技量で勝てるなんて、ホグワーツにいる五年生以上の人間が言うわけない。その誰かとクラーナ先輩との関係も。だからタルボット先輩のデメリットは別の場所にある」

トンクスとオスカーは二人で顔を見合わせて微妙な顔をしているのをお互いに確認した。トンクスの髪色はちよつとシヨツキングピंकとは言えなくなっていた。その間にも伸び耳からは攻守交替とばかりにレアの声が聞こえていた。

「それで? タルボット先輩は何が嫌で教えたくない? 何がデメリットで教えたくないのかボク達に言ってもらえないなら、ボクらは何もしようがない」

「レイブンクローVSレイブンクローだけ…… 黄色い方が優勢ね」

「レアは怒らせたくないけど、普通の状態の方が怖いかもな」

「喋るコンフリンゴ…… うーん違うわね、金色のステューピファイ…… 背の高いボンバーダ…… なんか違うわ。歩くヌンドウ……」

「ヌンドウは歩くだろ。動物なんだし」

レアがどうしたいのかも、タルボットがどうしたいのかもオスカーには分からなかった。普通、こういう交渉や駆け引きには落とすところのようなものがあるのだろうとオスカーは思っていたが、あの三人がそんなことを考えているかは疑問だった。

「デメリットもメリットも答えられないなら、ボクの推論を言うけど。」

タルボット先輩はクラーナ先輩に教えるのが嫌なのでは無く、クラーナ先輩に教えると言うのは、クラーナ先輩の周りのみんなに教えるという事になるのが嫌なんだとボクは思ってる」

「どういう意味ですか？」

「クラーナ先輩に教えるってことは、トンクス先輩、エスト先輩、チャーリー先輩、ボク、それにオスカー先輩に教えるって言うのと同じことだから、それにタルボット先輩が動物もどきになる方法を知ってるってことは、タルボット先輩が動物もどきだと言っているのとほとんど同義のはずだ。タルボット先輩からすればこれがデメリットかつリスクなんだ。違いますか？」

「あ、もう、レアがめちやくちや怒ってるじゃないの。エストか私が一緒にいての方が良かったわね。いや、エストだともっと怒ってるかもしれないから駄目ね。オスカー、あんたのせいだわ」

「俺？俺のせいなのか？」

怒っている？ 怒っているのだろうか？ オスカーはレアが怒っているところをよくよく考えると、二年生の最初、三年生のリータの時と劇の最後くらいしか見たことが無かった。だいたい怒っていたとしても、トンクスとオスカーはこれまで後ろから見てたので止めに来ましたなどと言って出ていけるはずも無かった。

「レア、落ち着いてくださいよ。だいたい……」

「ボクは落ち着いてますよ。クラーナ先輩。タルボット先輩、どうですか？ デメリットはそれであってますか？」

「そうだ。君の言う通り、僕が懸念に思っているのはそれだ」

「分かりました。なら質問を変えます。誰に動物もどきだとばれるのがリスクだと思っているんだ？」

「ちよつとレア、本当に……」

「君の思っている通り、僕は死喰い人の子供や身内に自分が動物もどきだとばれる。もしくはその疑いがあるなんて知られるのは嫌だ。そんなことはリスクでしかない」

「ああ…… もう……」

クラーナは頭を抱えていて、タルボットとレアはかなり怒っている

ようにオスカーからも見えた。そしてどうにもこの話が最初からうまくいきそうになかった理由もオスカーはやつと理解できた。

「俺が行った方が……」

「オスカーが出て行って何するわけ？ 今から自分で消失呪文をかけてホグワーツから消えますとか、一週間に一回、タルボットに忘却呪文をかけてもらいますとか言うわけ？」

「いやそんなことは……」

「じゃあもう黙って見ておくしかないわよ」

トンクスもトンクスで何に怒っているのか何なのか、髪の毛が赤みを帯びていた。ただ、オスカーにはこの状況をどうしようも無かったし、解決策も思い浮かばなかった。

「正直に言えば、ボクはもつとタルボット先輩が勇気や根性がある人間だと思ってた。昔に何かあっても、危険な職業になりたいって言うてる人だから」

「だからレア、ウインガー、落ち着いてくださいよ。みんなが何になりたくても、昔何かあっても関係なくて、だってそんな大層な話じゃなくて、学生同士で魔法の勉強をしようって言うてるだけじゃないですか」

「ムーディ、僕にとっては大層な話だ。動物もどきは父さんや母さんが僕の身を守るために教えてくれた魔法だ。だから僕は安売りはしない。それに敵の子供にそれを教える？ 論外に決まってる」

オスカーは何とか自分に置き換えて理解しようとしてみた。自分だけが使っている魔法……オスカーには一つしか思い浮かばなかった。それを他の誰かに言われても、教えることはできるだろうか？ オスカーにはそれはかなり難しいことのように思えた。あまり付き合いない人はもちろん、エストやクラーナにだって教えるのはハードルが高いと感じたのだ。だから、タルボットの反応も全く無理は無いと考えた。

「じゃあ、タルボット先輩は一年生のころのボクと大して変わらない。怖いからやらない。それでタルボット先輩は、死喰い人の息子ですら怖いのに、闇祓いになろうとしてる。教えたからって誰かを自分が傷

つけるわけでもないのに、自分が襲われるのが怖いから教えるのが嫌だなんて、ただの腰抜けじゃないか。それでオーラーになる？ ボクには何を言ってるのかさっぱり分からない。トロールがホグワーツで変身術を教えるって言ってるのと何が違うんだ？」

「ちよつとレア、言い過ぎですよ。嫌なものは嫌なんて普通なんですから……」

「腰抜けに腰抜けと言って何かダメですか？ それともクラーナ先輩はそう思わない？ だいたい、そんな簡単にクラーナ先輩は誰かに教えを乞おうなんて言い出さない人なのに、それでも覚えたいと思ってるのに、タルボット先輩は理解できてない。タルボット先輩はクラーナ先輩と一緒にの学年だし、なりたいたいものも一緒なのにそのくらいも分からない？」

「やっぱいいわね。スイッチ入っちゃうとほんとに止まらないじゃないかい」

「なんか閉心術やるまえより悪化してる気がする……」

「閉心術？ 何よそれ？」

スイッチが入ると止まらない。文字通りレアはそんな感じだった。今年度にオスカー達が乗った暴走特急並みに止まらない。感情のコントロールを覚えたせいでむしろ一段と増幅して外に出せるのかもしれないなかった。オスカーが少し怖いと思うのは、今は外に向いている感情をレアはいつも自分自身に向けているに違い無いところだった。

「クラーナ先輩、タルボット先輩に教わる必要は無いとボクは思う。あの人間性が下劣で下品なメガネをつけてるコガネムシだって、度胸はあった。でもこの先輩はそんな度胸も無い。動物もどきを使って校内を飛び回ってばれるリスクも考えることができずに、それより同級生に教える方が怖いなんて言ってる。もう一度言うけど、ボクは教わる理由なんて無いと思う。話をめちやくちやにして申し訳ないけど。ボクはもうここでしゃべりたく無い。何を言っても変わらないだろうから」

「ちよつとレア、いくらなんでも言いすぎじゃないですか。だから腰

抜けとか度胸とか生きるとか死ぬとかそんな大層な話じゃないんですよ!!」

「そうだ。大層な話じゃない。マツキノンの言う通り、僕は腰抜けだ。そして生き残るのも腰抜けだ。度胸があつて魔法省にわざわざ自分の変身形態を登録している魔法使いと魔女がどうなったかなんてみんな知っている。僕はそうはならない。話は終わりだ」

「ちよ、ちよつとウインガーもレアもなんでそんな……」

オスカーにはクラナが可哀想になつてきた。多分、二年生とか三年生のころなら困らされるのは自分で、困らしてくるのはクラナの方だった。立場が変わつて隣から見てもやつぱりオスカーは困つていた。そしてこういう人間関係で困つたときになんだかんだオスカーはトunksに相談していたはずだった。

「ああ、もう駄目ね。これからは金色の吠えメールつてレアの事を呼ぶわ。ところで閉心術つてなんなのよ? スクリムジョール先生が去年ちよつと言つてた気がするけど」

「どうする? タルロボットから教えて貰えないつてなると結構厳しいな。閉心術は閉心術の対抗の術で、閉心術は人の心を読む術だ」

レアとタルロボットは席を立つてどこかへ消えてしまった。クラナはひとりでテーブルの傍に立ちつくしていて、胸に光る監督生のバッジだけが悲しく光つているようにオスカーには見えた。

「どうするつて……あの糞メガネアバズレババアを利用するか、タルロボットに対する攻略術を履修するかよ。というか人の心を読むつて、それレアと練習してたつてことよね?」

「タルロボットを説き伏せた方がリスクは少ないだろうな。練習してたのはまあそうだ」

「練習つて、オスカーが開心術を使えるつてこと?」

「去年の学期末からはそうかもな」

オスカーがそう言うのとガチャンと言う音が鳴つて、トunksが自分で持ってきたポットを取り落とすのが見えた。

「熱つっ!! は、はあ? お、オスカーが心を読めるつてこと!?!」

「おい、大丈夫か!?! エビスキー 癒えよ。レパロ 治れ」

「トungskス? オスカー?」

思いつきり太ももにお茶をぶちまけて大声をあげたトungskスをオスカーが呪文で癒している間に、ガサガサという音がして茂みが揺れた。

「読めるって言っても、そんなに使ったことないし、周りの人で試したこともないからな」

「いや…… いやだって、じゃあさつきまでの会話でも私の心がわ、分かったとか?」

「髪色以上のことは読んでない。ピンクならご機嫌で、赤なら怒ってるか恥ずかしいかどっちかくらいってことしか分からない」

「そんなこと言っても何の証明にもならないわ…… いや、でもこれまでみんなのを読んでこれならオスカーは心臓が毛だらけになってるし、スネイプとかスキータもびつくりの人間だわ」

「何してるんですか? 二人で茂みで隠れてデートですか?」

明らかに機嫌が悪いと分かる声が二人の後ろから響いてきた。クラーナがまるで現行犯で犯人を見つけたとばかりに仁王立ちになっていた。

「デートはしてないわ」

「じゃあなんなんですか? ふたりはこんな二人つきりになれる場所で、ご丁寧にお茶まで用意して、椅子は二つあるのにそんなに近づいているんですか? 顔も近いし…… それにトungskスの頭はなんでそんな真っ赤なんですか? 顔まで赤いじゃないですか」

「あーもう!! なんていっつもこうなるのよ。誤解よ、ご、か、い」「ごかい? 何が誤解なんですか? トungskスはその気がない振りをして、みんなをからかうのはいったい何がしたいんですか?」

「だからその気なんてないわよ。今日だって私はクラーナが思うようなことはしてないわ。クラーナとオスカーが医務室でマダム・ポンフリーに大目玉くらうようなことはしてないって言ってるのよ」

オスカーはまた頭が痛くなってきた。最近、誰と二人でいてもこの状態なのだ。マダム・ポンフリーに、マクゴナガル先生、エスト、それに加えてクラーナまで怒り始める始末だった。

「じゃあ何をやってたんですか？ 二人つきりで見えない場所でお茶をしてる。それにトunksはブランケットまで持つてきてるじゃないですか。二人でお喋りとかもつとその…… だからそういう事をしたくて一緒にいてたんじゃありませんか？」

「だから違うって言うてるじゃない。それにオスカーとお茶を飲んだり、お菓子食べたりするのもダメなわけ？ エストとクラーナ以外はオスカーと二人になったらダメってことなら、オスカーと自分に永久粘着呪文でもかけときなさいよ。それがオスカーの顔にクラーナつて入れ墨をいれとけばいいのよ」

「だったら何をやって…… なんですかこれ？ 万眼鏡と……」

トunksはクラーナと喧嘩するのに忙しく、オスカーはそれを隣で頭痛に襲われながら見ていたせいで、伸び耳の改造版を隠すのを忘れていたのだ。

「ロバート、ここあいてるね」

「そうだね、キャリオン、ここなら二人でいて誰にも邪魔されない」「パディフィットの店みたいに可愛くないけど、ここなら他の人はいない……」

ハツフルパフのシーカー、スタンプとその彼女であろう声が伸び耳から聞こえてきた。クラーナは無言で万眼鏡をつけて、さつき自分が座っていた茂みの中に隠されたテラスのような場所を見ているようだった。

「で？ つまり、トunksとオスカーは二人でここで温かいお茶を飲みながら、二人で愛を確かめ合つて、私が話をまとめられないのを見て、それを肴に笑つてたんですか？」

「い、いろいろ違うわよ」

「何が違うんですか!! オスカー!! さつきから黙ってますけど、なんとか言つたらどうなんですか!! なんて私とウインガーとレアの会話を盗み聞きして盗み見てたんですか!!」

「いや、俺はトunksに誘われたつていうか連れられて……」

「誘われて!! 誘われたらオスカーはなんでもするんですか？ 規則破りでも？ 法律を破ることでも？ それにどんな人が誘つてもホ

イホイついていくんですか？ そんなのこんなことする理由になるんですか!？」

オスカーはクラリーナが言うこと言うことに関して心当たりがありすぎて、返答出来なかった。エストやチャーリー、レアあたりとオスカーは法律やら学校の規則を粉々に粉砕するくらい破っていたし、周りのみんなに誘われれば大抵ついていってしまうのも確かだったのだ。

「ちよ、ちよつとほんとにクラリーナを笑うためじゃないのよ」

「じゃあなんなんですか？ どうせトングスの事だから、エストから色々モノが出てきたし、私^が他の寮生や男子と喋るのが珍しいから、使ってみるついでに盗み見ておいて、後から話のネタにしようとか思ってたんでしよう。それに二人つきりになれる理由にもなりませんね。オスカーはなし崩しにイホイイついて来ただけでしょう」

「だから色々違うわよ。ほんとにちよつと心配だったのよ」

「私を？」

「クラリーナとレアつてあんまり容赦しないじゃない。タルボットも結局とげとげしてて喧嘩になってたし」

「トングスとオスカーは私の保護者だとも言うんですか？ 怒りますよ」

「もう怒ってるじゃない」

さすがに本気で殴り合いや呪文が飛び交うほどの喧嘩にはなりそうになく、オスカーは少しほっとしていたが、クラリーナがかなりショックを受けていそうなのはオスカーにも分かっていった。

「勝手に私の事を盗み見てたんですから、二人も何か私に隠してる事を言ってくださいよ」

「なんでそんなことしないといけないのよ」

「フェアじゃないからですよ。私はそういうのが嫌いなんです」

「どの口が言うのよ……」

「そうですね、トングス、結局その髪につけてるのは誰から貰ったんですか？」

トングスはちよつと考える顔をしたあと、観念したとばかりに首を

下げた。

「それを答えれば私の分は終わりでもいいのよね？」

「そうですね。私は優しいので許してあげます。まあ、今日のは前にトunksがスネイプに仕掛けていた、提出物に見せかけた魔法薬を開けると髪の毛がパーマになる悪戯といい勝負ですからね」

「それ結局、トunksが魔法薬の濃さを間違えてハツフルパフとレイブンクローが全員パーマになったやつだろ」

「今はオスカーは黙っててください」

「分かったわよ。言ってもクラリーナがうるさくしないなら話すわよ」

「私はいつも静かです」

それは嘘だとばかりにオスカーとトunksは顔を見合わせた。クラリーナはみんなでいると騒がしかったからだ。

「はいはい、オスカーから貰ったのよ」

「ほら、やっぱりそうじゃないですか!! 二人で私たちに黙ってたんじゃないですか!! やっぱり今日も二人でいたいから私の監視を口実にしたんでしょう!!」

「うるさくしないって言ったじゃないの…… こうなるから、オスカーから何か貰ったとか言えないのよ」

「そういうのを最初に言い始めたのがトunksじゃないですか!!」

「それを私にもすることないじゃない」

クラリーナやエストの方がトunksよりうるさくなっている。これはオスカーにとって恐るべき事実だった。なぜならトunksが静かになっているわけではないからだ。

「オスカー!! オスカーも答えてください!!」

「何を?」

「まずオスカーは私にどれくらい隠し事がありますか?」

「それ答えたら終わりでもいいのか?」

「いいわけないでしょう。私に言う和不味そうな隠し事は何個ありますか?」

オスカーは考えた。クラリーナに言う和不味そうな隠し事……

チャーリーの卵、多分言うときつきまでと同じ反応をされる気がする

夏休みの出来事がいくつか。内容までは言うとは心配するので全部は言えていない昔のこと、それに最近の自分の変調。両手では収まらないかもしれない。

「どれくらいあるか分からない」

「え？　そ、そんなにあるんですか!？」

「オスカー、あんたやっぱりクソ野郎かそれか毛だらけ心臓の持ち主なんじゃないの?」

どうしてトンクスまで一緒になってオスカーを責めているのかオスカーには分からなかった。

「じゃあ……　夏休みにトンクスとどこに行っただんですか？　どうせヘアピンもそのとき買ったんでしよう?」

「ロンドンで映画館と観覧車に行った。ヘアピンはダイアゴン横丁で買ったからその時は買ってない」

「えいがかん？　かんらんしゃ？　何するところなんですか?」

「映画館は……」

「どっちもマグルが行く場所よ。純血のお坊ちやまを連れて行ってみたかっただけよ」

「トンクスが誘ったんですか?」

「いや……　トン……」

「そうよ。私が誘ったのよ。オスカーはもう静かにしときなさいよ」

また喧嘩になりそうな気がして、オスカーはどれをどう答えればいいのか分からなかった。どれが二人の琴線に触れるのか理解できていなかったからだ。

「オスカーは別の要件でダイアゴン横丁に行って、ヘアピンを買ったんですか?」

「俺が……」

「オスカーが遅れて来たから、そのお詫びらしいわ。クラーナも次からはオスカーが遅れるように待ち合わせ場所までくる手段を限定すればいいのよ」

「トンクス、ごまかしてますよね？　私、やっぱり今日はムカついてます」

トunksとオスカーはまた二人で顔を見合わせて、そんなことは言わなくても分かる二人で思った。

「なんなんですか!! レアは勝手にぶちぎれてどっかに行くし!! ウィンガーは私がフォローしようとしてもメリットだ!! リスクだ!! その上、トunksとオスカーは二人で私があたふたしてるのを見て笑いながら乳繰り合ってるじゃないですか!!」

「だからしてないわよ」

なぜか反論していたトunksでは無く、オスカーの方を見てクラナは言った。

「オスカー、これ以上、なんか変な隠し事とかヤバイことをしてたら私だって怒りますからね」

「だからもうクラナは怒ってるし、それにオスカーには甘いつて自分で分かっているじゃない」

「うるさいですよ。とにかくそうですから。あー、もうムカついてきました。忍びの地図はありますから、ホッグズ・ヘッドか三本の箒に行きましょう」

「いけないわよ。お茶も飲んだし、大体タルボットとレアはどうするのよ?」

トunksが返すと少しクラナは困った顔をした。オスカーは結局のところ、周りの人間にこういう顔をされると弱かった。

「なんとかしますよ。三つくらい考えが足りませんでした」
「三つ?」

「そうですよ。まず、ウィンガーからしたら大事な魔法なのに大層な話じゃないとか言っちゃいましたからね」

「それは別にいいじゃない。実際やることは魔法を学生の間で教え合うだけじゃない? クラナの言ってることはおかしくなかったわよ」

「ほんとに全部聞いてたんですね…… まあでも、配慮が足りなかったってことです」

クラナは非難していきまわると言わんばかりに口を真一文字した上で目を細めて二人の方を見た。オスカーとトunksはそれだけで何

も言えなくなつた。悪いのは二人だからだ。

「二つ目はレアですね。あそこまで怒ると思つてませんでした。まあレアが怒つてたことには私だつてちよつとムツとしましたよ？　ほんとですよオスカー？」

「俺に言われてもな」

「レアはもうタルボットが言い出す前から決めつけて怒つてたじゃない」

「どうかレアはあれだろ？　自分が傷つけるのが怖くて魔法が使えなくて悩んでたのに、自分が傷つくのが怖いなんて許せないつてところろに怒つて……」

「違うわよ」

「違いますよ」

二人にまるで分つていないという顔で否定されてオスカーはちよつと傷ついた。何故ならオスカーはレアのことを他の四人よりは去年のこともあつて理解できていると思つていたからだ。

「いや違うつて……」

「あいつはタルボットがメリットとかデメリットとか言い出したところでもう怒つてたのよ」

「そうですね。その後はそれを確かめるために質問しました。こいつはオスカーに教えたくないんだつて確信して喋つてましたよ。最初にレアがムカついて喋り出したのはそれが原因ですよ」

二人は完全にそうだと確信しているようだった。オスカーは確かにそれもあるだろうと思つていたが、さつき自分で喋つた理由もレアの中の感情を大きく占めているのではないかと思つていた。ただ、どうも女子二人から見るとそうは見えなかつたらしかった。

「まあ最後は結局、ちよつと私たちはオスカーといすぎて感覚がマヒしてましたね。オスカーが悪いわけじゃないですよ？　でもそう思うのも無理は無いつてことです」

「あら？　一番会つたところにそういう事を言つてたのはクラナじゃない？」

「だから言つてるんじゃないですか」

「私の叔父さん二人と叔母さんもそうだけど、クラリーナは言つてこなかったわよね？ やっぱりオスカーにだけ言つてたのはそういうことなんでしょ？」

「なんですか、そういうことって」

クラリーナの言うように外からみれば死喰い人の血族や家族とはつまりそう言うことだった。オスカーだって、ヴォルデモートの子供がいたとして仲良くできるかなど分からなかった。

「小さい男子と一緒にじゃない。興味をひきたいから悪戯したりすると一緒にすることよ」

「じゃあ、トンクスは全校生徒に興味があるんじゃないですか？
いっつも悪戯ばっかりしてるんですから」

「特定の誰かになんかしてないわよ。ふふーん、やっぱりそういうことなのよね。私が一番最初にオスカーを見つけに行きましたって言つてたものね。結局エストの方が先だったけど」

「なんですか…… とにかく普通なら出会ったころのレアとかウインガーの反応が普通で、エストがおかしいだけなんですよ」

「そうだろうな。俺もそう思う。あつたころのレアを余計怒らしたのはクラリーナだけだな」

「だから…… いまはそうじゃないでしょう？ むしろレアの方があの時の私より怒つてますよ」

どうすればいいのか、オスカーは考えないといけなかった。クラリーナはまだ動物もどきになることをあきらめていないようだったし、レアとタルボットの関係を壊したままではいられないとオスカーは思っていたからだ。なぜならことが起こった理由は自分のせいなのだ。

「ほら、じゃあ三本の箒にいきましょう」

「だから行かないわよ」

「行きますよ。盗み聞きしてただだからそれくらいしてください」

「だって、絶対クラリーナは一人でダウンするじゃない。いくらちっちゃいって言つてもひみつの通路で運ぶのは大変なのよ。それにスネイプがレポートをほんとにアホみたいに出したのよ」

「何ですか小さいって、だいたいスネイプのレポートはトンクスのせいで機嫌が悪くなつて学年中が巻き込まれてるんだから、自業自得じゃないですか。それにそんなに飲まないから大丈夫ですよ。オスカーもそう思いますよね？」

「絶対バタービール以外のを飲むだろ。つまりそういうことだ」

「なんですか？ 私にはそんなに信用がありませんか？」

「ないわ」

「ない。それに運ぶのは毎回俺になるだろ」

二人のクラリーナに対するお酒に対する評価は、他の事項と比べようがないくらい低かった。ただ、二人の見解を聞いて、少し気弱になっている顔に結局二人は弱かった。

「わ、わかりましたよ…… 今日はまだ一回寮に戻ってそれからお風呂にでも入って……」

「バタービール以外禁止な。あと俺もシニストラ先生の木星の衛星の軌道予想の宿題をまだやってないから、七時くらいまでには戻りたい。それにトンクスに流されて盗み見たり、盗み聞きしてごめん」

「え？ じゃあ……」

「クラリーナ、こいつあれよエストの練習が終わるまでに戻りたいから言ってるだけよ。だから七時以降も引き留めてやった方がいいわ。あと二人ともスネイプの宿題が終わってるなら見せてちょうだい。それに私も悪かったわよ。いつものノリでやっちゃったわ。あんなに深刻な話になると思ってたし、終わった後に笑いながらクラリーナやオスカーと喋れると思ってたのよ」

三人は段々とクリスマスが近づいて寒くなり始めているホグワーツから、寒くなると余計に飲みたくなるバタービールを求めて、やつと腰をあげた。

携帯暖炉

「オスカー見ましたか？ 大広間の前の掲示」

「掲示？ 何か書いてあったのか？」

まだ人がまばらな大広間でオスカーが久しぶりに一人での心休まる朝食を食べていると、スリザリンのテーブルなのに普通にクラーナが隣にやって来た。

「その感じだと見てないんですね。何か今日は各学年の各寮で成績が上から五人までは休んでいいって書いてありましたよ。しかもホグズミードに行ってもいいって書いてありました」

「え？ ほんとか？ ならもう宿題だった今月の俺の運勢とか言うのをでつち上げ無くてもいいのか」

トレローニー先生に渡されたバカでかい日めくり占星術カレンダーをオスカーはできるだけ自然に机の上に置いた、ちようどクラーナと自分の間に収まるように。

朝だと言うのに、どうもシャワーを浴びたのか監督生のバスルームに入って来たのか、ちよつと髪が濡れているクラーナに対してオスカーは安全距離を置いておきたかった。

「というか何で一人で食べてるんです？」

「エストはクイディッチの朝の練習らしい、練習終わったら後から来るんじゃないか？」

「そういうことなんです。何ですかこのカレンダー、とりあえず自分を不幸にしてみたとかですか？ 龍痘にかかるはまあもしかしたらあるかもしれませんが、寝てたらベッドにアクロマンチュラがいたとか、クイディッチの競技場で巨大な鷹に連れ去られる？ 意味わからなくないですか？」

普通、スリザリンのテーブルでグリフィンドールのローブを着た人間は朝食を食べない。いくら自分に社交性のないと自覚しているオスカーでも知っていた。こうやってクラーナの食べる姿を隣で見るのはドロホフ邸以来だったし、やっぱりエストはスクランブルエッグを食べすぎだとオスカーは再認識できた。

「それはあれだ、トレローニー先生は俺が不幸になると喜ぶから、最近の出来事とかそう言うのに想像力をめちやくちや使つてなんとか不幸にしてるんだ」

「三回死んでますからそこは直しといた方がいいですよ。最初の話に戻りますけど今日ホグズミードに……」

「エストの縄張りで二人はイチヤイチャしても大丈夫なわけ？」

エストの声を聴いてオスカーがクラーナと一緒に左側を見ると、オスカーの左側に座ろうとして椅子を跨いだ瞬間にバランスを崩して机やオスカーの方に倒れ掛かりそうなエストが見えた。無言でオスカーはアレスト・モメンタムを唱えて倒れ掛かってくる速度を下げた。

「トunks、エストは朝練だからこんな早く来ないぞ」

「何ですか？ ちょっと前のをやり返しに来たんですか？」

倒れる速度がゆっくりになったのでトunksは何事も無かったかのように元の姿に戻ってオスカーの隣に座った。オスカーには机の向こう側に友達と座ったジェエマがオスカーに向けて親指を下げるハンドサインをしているのが見えた。

「スリザリンのテーブルにグリフィンドールのローブがいるのは普通じゃないわ。というかあの掲示はほんとなわけ？ 周りのみんなはその話しかしてないわ」

「それは本当だと思えますよ。だって、あの掲示にはダンブルドア先生のサインがありましたからね」

「なら今日は休みなのか、もっと寝てればよかったな」

グリフィンドールとハッフルパフのテーブルに戻れとはオスカーには言えなかった。いつも一緒に食べているエストでさえオスカーからすれば色んな所が気になるのに、それが倍になれば気になるところも倍になった。

「で？ クラーナは黄色くて背の高い問題をどうにかできたわけ？」

「その言い方はちよつと悪意が無いですか？ 私だと灰色で背の低い問題とか言ってくる気でしょう？ まあ、あの後は進捗無しです」

「ならどうするのよ？ 　　とかそもそも何でいきなり今年に入って

動物もどきなわけ？ 去年の方が時間はあつたんじやないの？」

オスカーからすれば自分を挟んで会話されると二人の顔がどうしてもこつちを向くのが頂けなかった。それとトックスはクラリーナに突っ込んだことを聞くとときには自分を緩衝材みたいに行っているのだろうかと考えを巡らせた。

「私がやりたいからですよ。三年生の時の劇とか守護霊の呪文だってそんな感じでしよう？」

「あのね、クラリーナ、あの青い寮の二人はめっちゃ強情なの分かってるでしょ？ オスカーとかならクラリーナのお願いなら何でも聞いてくれるかもしれないけど、ちゃんと理由言わないとあいつら頭でっかちだから絶対納得しないわよ」

ちよつと唇を噛む表情、言い出せるか言い出せないか微妙な時にクラリーナがする表情だった。やっぱりオスカーは周りの人がこういう表情をするのに弱いと自分で感じていた。

「姉さんが魔法省に登録したのが十六の時だからですよ。多分使えるようになったのはそれより前でしょうけど……」

「なら去年言ったら良かったんじゃないの？ 今年は忙しいってホグワーツ特急で自分で言ってたじゃないの」

「そんなこと言われても、言い出すのには色々あるじゃないですか。私はトックスとかエストみたいになんでもかんでも思いついたことをそのまま喋れないですよ」

「私もエストも考えてないわけじゃないわよ」

二人して困った状況になってから視線だけを自分の方にやるのをオスカーはできればやめて欲しかった。しかもこの状況では二人のどちらかに味方するわけにもいかなかった。

「レアとタルボットを説得すればいいんだろ？ 中庭で喋った時はトックスに連れられたせいだって言ったけど、実際クラリーナと二人の会話を見えないところから見てたのは俺だし、なんとかするよ」

「だからオスカーはなんでいつもそんな感じなわけ？ 自分でやりたいことはないくせに、他の人は助けようとするし、一人でしょうとするじゃない？ それに俺のせいだからじゃなくて、普通になんとかし

たいからなんとかするって言えばいいじゃない」

「分かった。じゃあ俺はクラリーナに動物もどきになつて欲しいし、それにみんなでそれをやりたいから二人を説得したい。だから助けてくれ、じゃあ今日レアと喋ることにするからなんか助けてくれ」

オスカーがそう言うのとトンクスはあからさまに気に入らないと言う顔で腕を組んでこっちを見てくるし、なぜかクラリーナの方は珍しく弱気な顔だった。

「レアと喋るって何なのよ？」

「今日はホグズミードに行けるんだろ？　なんか俺たちも休みだろうし、レアも多分休みだろ？　それに前にホグズミードに行きましようとかレアに言われた気がするし……」

「じゃあオスカーは今日一日レアとホグズミードに行くんですか？」
「ずつとかどうかは分からないけどその方が話が早いだろ？」

今度は今度でクラリーナとトンクスは二人で顔を見合わせていた。オスカーにはやっぱり二人のテンションや何をどう感じていて、オスカーの言動のどこが引つかかっているのかが分からない。なぜならオスカー自身には二年生や三年生の時から言動が変わったかと言われても、変わっていないとしかいいようがないからだ。

「分かったわ。でもちよつとレアと外に行く前に三人で作戦会議しましょうよ」

「私も必要なんですか？　それ？　だいたい私たちもついていけば……」

「あのね、あの歩く吠えメールみたいな金髪をクラリーナは静かにさせられるわけ？　多分、オスカー一人で言った方が話を聞くわよ、だから作戦会議よ」

打って変わって何か思いついたのか上機嫌になっているトンクスの顔を見て、今度はオスカーとクラリーナが絶対面倒事になったと目を見合わせた。確かにクラリーナの言う通り、トンクスは思いついたことをすぐにやろうとしてしまう性質かもしれない。

「オスカー、ボク、前から行きかけたお店があるんだけど……」

「ホグズミードで？」

「この路地の奥まったところの……」

「レア…… マダム・パディフィットの店じゃないよな？」

「え？」

レアがなんで？ というちよつと口を開けた顔でオスカーの方を振り返った。オスカーは以前この路地をちよつと行った場所にある店に入ったことがあった。そして、三年生の時ならまだしも、今、オスカーにはその店に入る勇気は無かった。

「オスカー先輩は行ったことがある？ エスト先輩？ クラーナ先輩？」

「なんで先輩付けが戻るんだ」

「もしかして…… トンクス先輩なんですか？」

「なんで口調も前までのモードに戻るんだ……」

「トンクス先輩なんですわね」

「トンクス、本当ですか？」

それに耳元でクラーナの声がおスカーに聞こえた。だいたいなぜオスカーは何も言っていないのにトンクスと行ったとバレているのか意味が分からなかった。

「トンクス先輩ですよね？ オスカー先輩？ いつ行ったんですか？」

「トンクス、いつ行ったんですか？」

「なんでトンクスって分かるんだ？」

「閉心術の練習でおスカー先輩が例を見せてた時と同じ顔をしているから。トンクス先輩ですよね？」

「トンクス、黙秘権とかそう言うのはないですよ」

耳元ではクラーナがトンクスを問い詰めていて、オスカーはレアに問い詰められていた。あの時トンクスとマダム・パディフィットの店

に行ったのは悪いことでは無いはずなのに、レアとクラリーナの語気や口調の強さで言いにくかった。

「エストと三年の時に喧嘩してた時があっただろ？ あの時にトンクスが俺を事情聴取するのにあの店を使ってたんだよ」

「三年の時よ」

「やっぱり!! 私には一年生の時にエストとオスカーが喧嘩してる間に私とオスカーがどうかこうとかかこうとかかと言ってたくせに、同じじゃないですか!!」

「え？ 三年生のときからなんですか？」

「違うわよ。絶対クラリーナやレアが想像してるような事してないわよ」

他の三人と違ってレアが相手だと視線の高さが近いので、表情がわかり易いはずだったがオスカーからすれば怒っているのか困惑しているのか分からなかった。それに耳元の会話もうるさかった。

「三年生の時からってなんなんだ」

「トンクス先輩とはパディフィットの店に行けるけど、ボクと一緒にだて行けない？」

「想像するような事ってなんですか？ あの店ってトンクスの言う想像するような事以外の用途に使われるんですか？」

「何なのよ。去年もそうだけど、今年も何でそんなに色々言われないといけないのよ。そう言うのじゃないって言ってるじゃない」

「違う。一回行ったから行きたくないんだ。だいたいトンクスと行った時も居づらかった。トンクスもああいう雰囲気なら俺が喧嘩してた事以外を考えられると思ってたんだと思う」

誰と一緒に行けないとかそう言うことは無いはずだったが、オスカーからすれば身近な四人の中で誰と行くのがハードルが低いかを考えれば、前と同じく単純に雰囲気を変えるためとか半分冗談で連れていきそうなトンクスが一番低そうだと考えていた。

「ならトンクス先輩ともう一回一緒に行ける？」

「行けない、いや、行かない。ほら、三本の筥でもホッグズ・ヘッドでもいいだろ？ 流石にファイア・ウイスキーを十杯とかはおごれない

けど……」

「オスカーも言ってるじゃない。単純にあいつの頭がエストの事で大鍋の底の魔法薬みたいに凝り固まってたからああいう場所に連れてったのよ」

「じゃあ私もレアと同じ質問をしますよ。オスカーともう一回パディフィットの店に行けますか？」

五年生に入ってから会話の八割くらいがこの調子だとオスカーは考えていた。クラーナとトンクスはお互いにこんな会話をされたく無さそうにしているのに、自分は相手にやろうとするし、レアとエストまでこの調子ではオスカーの体は持ちそうに無かった。

「ならオスカーが悩んでそうな時なら、パディフィットの店にボクが連れて行ってもいいってことだ。今度からそうします」

「分かった。それでいいから、ここならホッグズ・ヘッドの方が近いからそっちに行こう」

「何よそれ。別にいけるわよ。いや、行けないわね。だって行ったら黒いのと灰色のと黄色いのが大騒ぎするじゃない」

「絶対ウソですよ。私には分かります。これでもトンクス検定二級くらいはありますからね。それに私には結構な確証がありますから」

「何よ確証って、そんなの掴まれたことはないわ」

耳元でずつとクラーナとトンクスの声が聞こえているので、オスカーはおかしくなりそうだった。レアはまだ動こうとしないので、オスカーは意を決してレアの手を掴んで引っ張った。そうすると割とすんなりレアはオスカーについて来てくれたが、オスカーからすればやっぱり女の子の手は自分のモノよりはやわらかい事しか頭に無かった。

「トンクスは墓穴を掘りました。オスカーと夏休みに行った場所が墓穴ですよ」

「ロンドンが墓穴なら、魔法省とマグルは墓穴の中で暮らしていることになるわよ。まあクラーナにはトレローニー先生がグリムが憑いているって言ってたし、お墓とクラーナは近いのかもね」

「意味の分からない事を言わないでください。髪の毛が赤くなってき

てませんか？」

イノシシの首が描いてある看板の下を通って、オスカーとレアはホッグズ・ヘッドに入った。またホッグズ・ヘッドはやぎの臭いが復活しつつあるようだったが、まだエストの大掃除前に比べると許容範囲だったし、それに店内はまだ綺麗だった。オスカーからすれば手を繋いだ途端に静かになったレアの方が気になって仕方無かった。

「二人か？ 上に行け。これを持って行け」

「前の分も含めて、一ガリオン置いていきます」

「いらん。早くいけ。あの娘の掃除代は一ガリオンではすまん」

結局オスカーはまたアバーフォースにお金を受け取ってもらうのに失敗し、一ダース分のバタービールを魔法で運んでいつものアリアナの肖像画のある部屋に入った。アリアナは目をつぶっていてどうも寝ているようだった。

「ほらバタービールを飲もう」

「オスカーはボクとバタービールとかお酒に関連付けてる？」

「付けてない、付けてない」

やっとレアと手を放すことが出来て、オスカーはバタービールを一本一気飲みした。外はもう寒かったせいかわれアと手を繋いでいた方の手だけ、少し暖かい気がした。

「私聞きましたよ。マグル生まれのグリフィンドール生五人くらいに聞きました」

「何を聞いたのよ」

「えいがかんとかんらんしゃですよ。オスカーとトンクスが行った場所です!!」

耳の傍から聞こえる二人の声は、本来レアの説得を援助するため二人が喋れるようにしたはずなのに、ずっと口喧嘩する声しかオスカーには聞こえなかった。

「どうして今日、オスカーはエスト先輩じゃなくてボクと一緒にホッグズミードに？」

「エストは朝練をした後、そのままスネイプ先生に言っただけで一日クイディッチ場を抑えてたから、今日は一日練習してる」

「じゃあ単にエスト先輩が空いてたからボクを連れて行った？」

「レアから行かないかって言ってただろ？ それだけで他意があるわけじゃない」

「映画館と観覧車よ。なんか発音がおかしいわ」

「なんでもいいですよ。五人中五人は言っていましたよ。どう考えても男女でそんな場所に行くなんて、デート以外ありえないって言ってました。それがデート以外になるなら例のあの人にマグルの血が混ざってたり、スネイプの髪の毛がストレートヘアになるようなもんだって言っていましたよ」

デート、デート、デート…… オスカーは考えた。トンクスとロンドンに行ったのがデートなら何がデートで何がデートではないのか？ クラーナと一緒に行ったのは病院まではデートでは無い？ でもダイアゴン横丁は？

「なら…… ちょっと…… 手を出してもらえませんか？」

「手？ 分かった」

「だから違うって言ってるじゃない。映画館は前に映画の話をしたからマグルのそう言うのをオスカーが見たいって言ったから行ったのよ」

「じゃあかんらんしやはなんですか？ だいたいトンクスから誘ったって言ったじゃないですか」

デート、デート、デート…… 段々デートという概念がオスカーの中で崩壊していきそうだった。エストと一緒に行ったのはバグショットと話していたところ以外はデート？ いつも一緒にだからデートじゃない？ レアとはドロホフ邸以外の場所ではデートという雰囲気では無かった？ チャーリーと漏れ鍋で喋っていたのは？

今の状態は？

「観覧車も適当に観光の本を見てここならオスカーが高い所だからとか言い出したのよ。あいつが何も考えて無いことくらい分かってるでしょ？」

「絶対うそですよ。かんらんしやは二人きりで乗る乗り物だって聞きましたよ。そんなところに行く理由なんて一つしかないじゃないで

すか」

「だから違うって言ってるじゃない。あいつがなんか変なせいで三周も観覧車回ったのよ？ 受付のお姉さんが滅茶苦茶笑ってたんだから」

オスカーが女子と二人でいたらデートなら自分は常にデートしていることになると思いはじめたところに、レアが机の上に出したオスカーの手に自分の手を繋いできた。レアの手は多分他の三人より指が細くて長く、オスカーの手よりレアの手の方が冷たかった。

「ボク、こういう事でいいんだけど…… その、こうしてると落ち着くから」

「俺はあんまり落ち着かない」

「三周？ よく分からなくてですけど、一緒にいたかったから三周も回ったんでしょう？ どうせそのお姉さんも二人がイチャイチャしてたから笑ったんでしょう？」

「だから違うって言ってるじゃない!! 何なのよ。だいたい私を責めたってクラリーナにいい事なんか何も無いわよ!!」

耳元では二人の声が響いていたし、レアはちよつと赤くなって手をつなぎながらこつちを見てくるのでオスカーはもう混乱の極みだった。だいたい今日話したかったのはタルボットとレアの話だった。

「レア、クラリーナとタルボットに話に……」

「クラリーナ先輩に言われてオスカー先輩は今日ボクに話しかけた？」

「そういうわけじゃない、クラリーナとトンクスと朝喋ってたのはそうだけど、今日レアと喋るって言ったのは俺だから」

「いい事って何ですか？ 私ははつきりさせたいだけですよ。だって夏休みもトンクスがオスカーを……」

「いいわよそれで。私がオスカーをロンドンに連れ出したのよ。ロンドンで映画館と観覧車に行ったわ。私が連れて行ったのよ。何？」

それで？ それを聞いたらクラリーナにいいことがあるわけ？ 私にそんな事言う前にオスカーをホグズミードに連れてけば良かったじゃない。今日はエストもクイティッチでいないんだから。なんでそういう事ができないくせに私とオスカーにだけ言ってくるわけ？」

オスカーは目の前のレアにも耳元の二人にも全く集中できなかった。レアはレアでオスカーが本当に自分からレアと喋りたくて今日ここにいるのかに敏感だったし、クラリーナとトunksは珍しくじゃれ合いで無く言い合っているとおスカーは感じていたからだ。

「でも、オスカーが今日ボクと喋りたいのはクラリーナ先輩とウィンガー先輩の話をボクがオシヤカにしたことだ」

「ダメなのか？」

「他の人の話じゃなくて、ボクとおスカーの話をしたい。今日もおスカーは朝から三人で楽しそうに話をしてたし、いつもはエスト先輩とそういう話をしてるし」

「トunksが来るまではそういう話をしようとして……」

「じゃあ続ければよかったじゃないの。なんで続けないのよ。大体何なのよ。勉強とかは本気でやるくせになんでそういう事は本気でできないわけ？」

レアはさつきまで普通に繋いでいた手を指を一本一本絡ますようにつなぎ直した、さつきまではちよつと冷たかったはずだったのに、いつの間にか向こうの体温の方がオスカーには暖かく感じられた。バタービールを飲んだ量は変わらなかつたはずなのにだ。

「やっぱりオスカーはボクがウィンガー先輩にめちやくちや言った事を謝って欲しい？」

「単純に仲直りして欲しい。前はタルボット先輩って言ってただろ」

「あんなに臆病だとボクは思ってたなかつた。だって聞祓いになりたいてって言うってたのに」

「本気でやっていないってどういう意味ですか？」

「本気でやってるわけ？ レアもエストもクラリーナと違ってちゃんとアプローチしてるじゃない。クラリーナは本当にグリフィンドールなのって聞いているのよ。タルボットの事をレアが臆病って言ってたけど、クラリーナだって聞祓いになりたいって一年生から言ってたでしょ？ なのになんでそっちはそんなに臆病なのよ。クラリーナだってタルボットの事を言えないわよ」

「もう一回言って貰えますか？」

二重の眉の中にある黄色い目と手と指でオスカーは捕まえられていたが、耳元のボリウムはどんどん大きくなっていった。とにかくオスカーはレアの機嫌を直してみんなでタルボットともう一度喋りにいかないといけないと思っていたが、残念ながら目的を達成できる心境には程遠かった。

「言つて欲しいわけ？ 私に色々言う前に自分で行動しなさいよ。そんな事でチキンになっていている場合なわけ？ チキンつて言つたら鳥だしレイブンクロードだけ、今のクラリーナなんてレアと比べたらロツク鳥と家猫みたいなものよ。そんな事にチキンになつてて闇祓いになんかなれるわけ？」

「そんなことを何でトンクスに言われなさいといけないんですか？ トンクスに関係ありますか？ トンクスとオスカーは何でもないんでしょう？ なのになんでトンクスが気にするんですか？ 私とオスカーの事と私の進路と何の関係があるんですか？ 何ですか？ 闇祓いになるにはキスとかデートが必要とでも？ そうですよ、トンクスなんて闇祓いの仕事なんて何も知らなくせになりたいとか言ってますから。一年生の頃から思っていましたけど、おめでたい頭をしますね本当に」

「臆病になるのは普通じゃないか？ クラリーナとかウィーズリーおばさんも言つてたと思うけど、誰かがいなくなるのも怖いけど、誰かを一人にするのも嫌だつてことじゃないのか？」

「だって、オスカーもトンクス先輩もそんな人じゃない。喋れば分かることだし、二人をそんな風にみんなを見てるって事はボクやクラリーナ先輩の事だつてそうタルボット先輩からは見えてるって事だと思う。一人じゃ何もできないのはボクもタルボット先輩も同じだけど、怖がつて味方とか分かつてくれる人を作らないと、また同じことになるに決まつてる」

「なら怒らないでそう言えばいいだろ？ レアがちゃんとそう言えばタルボットも話を聞くだろ？ 先に謝っておくけど、レアとタルボットとクラリーナの会話を俺とトンクスは全部知ってるんだ」

オスカーがそう言えば、レアは握る力を強くして顔がさつきより陰

しくなつて、それに顔に前より赤みが見えていた。エストとレアが赤くなつているのをオスカーはあまり見たことが無かつたが、二人は肌の色からすれば血管が浮きやすくて赤くなりやすいはずだった。

「何が何も知らないのよ」

「じゃあ聞きましようか？　なんでトンクスは闇祓いになりたいんですか？」

「そんなの決まつてるでしょ、みんなを守れるし、それにカッコいいでしょ？」

オスカーの耳に聞こえるくらいの音でクラーナが馬鹿にするようにハツと笑つた。トンクスの方がそれを聞いて息を呑む音も聞こえた。

「ならあの時にボクが何で怒つてたか分かりますか？」

「俺はタルボットを見て、レアが前の自分を見てるみたいだと思つたから、怒っているんだと思つてるよ。クラーナとトンクスは違う意見みたいだけど」

今度はちよつと握力が優しめになつてレアの視線も柔らかくなつた気がオスカーはした。相変わらず顔の赤みは引いていなかった。

「何がおかしいのよ」

「ちゃんちゃらおかしいですよ。ええ。トンクスが何を守るんですか？　カッコいい？　カッコいいなんて理由でなりたいんですか？

ふざけないでくださいよ」

「ふざけてないわ。私はパパやママから闇祓いの話を聞いてからずっと本気なもの」

「どこが本気なんですか？　私にもオスカーにも決闘でも実技でも勝てないのにな？　トンクスの両親はなんて言つてましたか？」

レアからはもう逃げられないし、どうにも本気で喧嘩しているらしい二人を止めることもできないでオスカーは完全に詰んでいる気分だった。

「オスカーはタルボット先輩が臆病だとは思わない？」

「臆病じゃない方がおかしいと思うよ。臆病な事は悪い事じゃないし、臆病でリスクを知つてでもやるって人の方が俺はやっぱり勇気が

あると思う」

「ならボクと一緒にタルボット先輩と話にいつて貰える？」

「むしろ色々あつて俺がそうしたい」

レアはそれを聞くなり手を離し、立ち上がってオスカーの方に体を乗り出してきた。オスカーはできるだけ色々顔に出さないようにしてレアの方を見ていた。

「パパとママが何か関係あるわけ？」

「何て言ってみましたか？ 私はそう聞いているんです」

「そうね。反対だつて言つてたわよ。ママは信じられないくらい純血なのに、それを裏切つたから闇の魔法使いとかに恨まれるから危険だつて言つてたわ」

「トングスはやっぱり愛されてますよね両親に」

「どういう意味よ」

「ボク、今、結構いい雰囲気だと思つてます」

「いい雰囲気？」

いい雰囲気とは何なのか？ レアの顔があんまり近くにあるので、オスカーはどうか現実逃避しようとしていい雰囲気という単語で頭を巡らせた。走馬灯のようによくつかのシーンが流れて行つた気がした。三年生のクリスマスだとか、観覧車だとか、ちよつと前の医務室が浮かんで消えて行つた気がした。残念ながら現実の方が記憶よりも刺激や情報量がけた違いに多かつた。

「オスカー、目をつぶつて」

「分かつた……」

「簡単な話ですよ。トングスの両親もそうですけど、私たちの世代の保護者が闇祓いに子供がなるなんて言い出したら反対するに決まっています。トングス先生がトングスに言ったのは方便に決まっていますよ。誰が子供を死ぬかもしれない職業に就けたいんですか？」

「何？ じゃあ私のママが私に嘘を言ってるっていいわけ？」

「嘘とは言いませんよ。トングスが傷つかないように言ってるだけです」

「でも嘘は嘘よ。クラーナは私の親が私に嘘を言ってるって言ってる

のよ」

「違いますよ。トンクスは守られてるって言ってるんです。その上でトンクスはそれが分かってないって言ってるんです」

オスカーが目をつぶっているとレアの手の平がオスカーの両頬にあてられているのが分かった。そして、レアはオスカーの頭を自分の方へ引き付けようとしていた。

「オスカー、いくらなんでもそんな音の大きさならボクも気づくから……これは？」

レアはオスカーの耳についていた見えない伸び耳を引きはがして自分の耳に当てようとした。

「分かってないってどういう意味？ クラーナは私より私の両親の事がわかるって言いたいわけ？」

「トンクスが簡単に人の事を臆病だとか、カッコいいから闇祓いになりたいなんて言えるのはトンクスが守られていたからですよ。トンクスのためにトンクス先生もテッドさんも自分の他の家族と離れて暮らしていたでしょう？ トンクスはそれが分かってないんですよ」

「それは駆け落ちしたから……」

「はつきり言いますか？ 簡単な話ですよ。トンクスは誰も何も無くなったことも失ったことが無いから私やオスカーに言いたいことが言えるんです。だから守られていたことも分からない」

「え？ これは……？ すごい喧嘩してる？」

「そうなんだ。多分、珍しく本気で喧嘩してる」

オスカーとレアはお互いに困惑した顔を見合わせた。レアも流石にこんな会話が聞こえてくるとは思っていなかったに違いなかった。「何も無くなったことがないって……」

「いいですか？ 誰が闇祓いを守ってくれますか？ 誰が家で闇祓いが帰ってくるのを待ってますか？ 考えたことありますか？ 私が何も考えないでずっと闇祓いになりたいって言ってると思ってますか？ 最近私がトンクスにもオスカーにも闇祓いになりたいって明確に言いましたか？ 誰が臆病なんですか？ トンクスは家に一人で暖炉の前で寝るまでずっと待ってたことも無いんでしょう？ 自

分が何になりたいか本気で考えたことありますか？」

クラーナの声は今度は大きいわけでもないのに、明らかに無理解に対する怒りが込められているのが感じられた。オスカーにはトンクスがそういう事を考えていないわけでは無いと知っていたが、クラーナが考えているレベルでそうかと言われればそうだという事は難しかった。

「いいですか？　こんな言い方は卑怯ですけど、ウインガーだとか私にエストやレアが進路の話で臆病呼ばわりしてくるなら理解できませんけど。トンクスにそんな風に言われたくないです。トンクスだけじゃなくて他のほとんどの人に言われたくありません」

「そんなこと言われたって……」

「クラーナ先輩をこんなに怒らせちゃった？　トンクス先輩？」

「多分、進路の話をしたのが良くなかったかもな」

「これボクたちの声も向こうに聞こえてる？」

「聞こえてるはずだけど、最初から二人はこっちの声を聞いてないと思う」

オスカーはポケットから携帯暖炉、マグカップの姿をしていて中では火が燃え盛っている小さな暖炉とそこから出てきている二本の伸び耳を取り出し、杖を振ってレアにも見えるようにした。

「グリフィンドールには似合わない臆病さだっけ言いましたね？」

ウインガーも似たような事を言っていましたけど、必要な臆病さもあります。三年生の時に分かりましたけど、臆病じゃないとちゃんとした判断が出来ません。無謀な勇氣は勇氣じゃありません。それに私は男性の闇祓いを尊敬していますよ。叔父さんもキングズリーもジョンの事も。でも、チャーリーやトンクスのお母さんがその三人より勇氣が無いなんて言えません」

「分かったわよ。私が臆病呼ばわりしたことが……」

「私怒ってますから。今すぐにそんな話聞きたくありません。だいたい私がちよつと言ったくらいで今の話を整理できるんですか？　私ならそんな事できません。私が言えるのはトンクスはちやんと考えた方がいいってことです。それに話を聞いてくれる両親がいるじゃ

ないですか」

レアとオスカーは二人でお互いの目を見て、今なら何とか二人を止められそうだとお互いに頷いた。

「私も耳が痛かったからトンクスに言われたことをどうにかしますけど……」

「あの……二人とも聞こえてる？二人は喧嘩してて聞こえなかったかもしれないけど、今、オスカー先輩とキスしました」

「は？」

「へ？」

「嘘です。喧嘩するのやめてもらえますか？あと盗み聞き代としてファイア・ウイスキーを三本の筈でござって下さい。今から三本の筈にオスカーと行くので。OKですか？」

「俺はそれでいい」

しばらく無言だったが、やっと二人から声が返って来た。

「分かりました。今から行きますよ。ホグワーツにいますからちよつと時間かかります」

「え？そんなに遠くに？この伸び耳っていったいどうやって……」

「暖炉飛行でつながってるのよ。エストは前からこうやって使うつもりだったみたいだけど……」

「凄いな……これならどこの音も拾えるんだ。あと一人一杯なので、三杯お願いします。トンクス先輩が大人の振りをして注文してください。待ってます」

「分かったわよ」

「分かりました」

「分かった」

オスカーはこの伸び耳を使うたびに三本の筈でお酒をござっている気がしたので、いい加減にこの伸び耳を使うのをやめたかった。